

鋼鉄の歯車の使い魔～転生したのはいいけど・・・これ！？～

零城

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

メタルギアオタクの「鋼宮 徹」

ある日、新作のメタルギアを遊んでクリアをし寝たら異世界に転生しちゃった!?

よし！頑張って生きろうとしたが・・・え、これ？

注意!!

これは作者がメタルギア5をクリアし衝動的に書きたくなった作品です

メタルギアたちがめっちゃ暴れます

敵がほぼ雑魚みたいに死にます

目次

設定（先に読まないで!!結構ネタバレあり!!）

開発一覧 | 1

キャラ設定 | 9

現在保有戦力と魔法演唱と魔物詳細 一覧 | 19

第一章 学園編

一発目 さようなら人生、こんにちは・・・機械生? | 27

二発目 えくと・・・チャオ? | 37

三発目 現状確認 | 46

四発目 初めての授業 | 53

五発目 やめてください、本当に!!（マジで） | 63

六発目 カロリーメイト||神? | 74

七発目 初めての訓練 | 82

八発目 林間訓練 前編 | 90

九発目 林間訓練 中編 | 102

十発目 林間訓練 後編 | 113

十一発目 そのあと・・・ | 125

十二発目 ピューパ生活 | 135

十三発目 なんでえ!?! | 146

十四発目 ピューパ戦||敵終了のお知らせ | 158

十五発目 決別 | 173

十六発目 どこに? | 184

十七発目 お気に入り | 199

十八発目 見つけた | 212

十九発目 別れ | 223

二十発目	決意	234
二十一発目	もう一度	242
二十二発目	戻った日常	257
二十三発目	収穫祭準備!!	267
二十四発目	収穫祭前日	278
二十五発目	収穫祭本番直前!!	291
二十六発目	収穫祭本番!!	302
二十七発目	闇夜に走る段ボール箱(しかし肝心の段ボールは出ない)	318
二十八発目	再び	330
二十九発目	Now, enjoy a taste of hell	342
三十発目	仕事終わり	358
第二章 国家争乱編		
三十一発目	生まれた火種	370
三十二発目	勇者ご訪問	383
三十三発目	勇者の正体	395
三十四発目	経緯	405
三十五発目	任務	422
三十六発目	Welcome to バサビイ共和国!!	431
三十七発目	どうしようか?	442
三十八発目	潜入!	450
三十九発目	少し休憩	460
四十発目	だんだん!! 入口!!	471
四十一発目	だんだん!! 上層!!	480

747	e l l (地獄の業火に焼かれる)	736	六十三発目 お掃除	627	五十三発目 めつちや煽るアーク	488	四十二発目 だんだん!! 中層!!
	h		六十四発目 S h o u l d b e b u r n i n g i n	639	五十四発目 下準備	498	四十三発目 だんだん!! 下層!!
		728	六十二発目 鋼鉄の蛹(クリサリス)	653	五十五発目 狙撃	509	四十四発目 だんだん!! 最奥!!
		715	六十一発目 バサビイ共和国国民救出作戦	663	五十六発目 リーザーと!!	523	四十五発目 だんだん!! ボス部屋!!
		705	六十発目 作戦開始	672	五十七発目 鋼鉄の繭(コクーン)	536	四十六発目 だんだん!! ボス戦じゃあごらあ!!
		695	五十九発目 狂王ペガサス	683	五十八発目 戦争後	548	四十七発目 だんだん!! 出口!!
						565	四十八発目 出国!!
						574	四十九発目 帰国
						587	五十発目 「また」である
						602	五十一発目 ぶち切れ案件・・・発動
							五十二発目 本気で怒った(マジでキレた)「歌う死神(アーク)」

六十五発目 遊びに来た「旋風の騎士」 | 764

六十六発目 勇者、最後の夜（残虐行為が連発します） | 773

六十七発目 戦争後 | 786

六十八発目 報告 | 794

六十九発目（ようやく）主人の所へ | 804

第三章 家族？編

七十発目 久々の料理 | 817

七十一発目 報酬受け取り | 830

七十二発目 お試し使用 | 841

七十三発目 パーティーと事故…そして？ | 854

七十四発目 どゆこと？ | 867

七十五発目 皆の反応 | 878

七十六発目 実験 | 889

七十七発目 そのころ | 902

七十八発目 レイチエル・フォン・アーハム、襲来 | 914

七十九発目 決闘と言うの名のデジャブ | 924

八十発目 わからせ（スイーツ） | 938

八十一発目 動きだす運命の歯車 | 949

八十二発目 少年少女移動中 | 962

八十三発目 ようこそ、ミール聖教国へ | 972

八十四発目 舞い降りる偽の死神（ニゴウ） | 985

八十五発目 出てきた欲望 | 1000

八十六発目 動き出す野望 | 1011

八十七発目 平和の少女とザ・ボスに心酔した博士 | 1023

八十八発目 仲直り？ | 1034

八十九発目 蘇ったくそつたれ野郎

九十発目 魔法学園襲撃事件

九十一発目 そして、戦場は城へ

九十二発目 銃撃戦

九十三発目 カオスすぎる現場

九十四発目 新年は拷問から

九五発目 会議

九十六発目 段ボール is very good

九十七発目 show timeだ!! (大塚明夫ボイス)

九十八発目 Who is her? (ニゴウって誰なんだ?)

九十九発目 脱走者

第四章 Bullet Queen編

祝☆百発目 Bullet Queen (弾丸の女王) VS

う死神(アーク)

百一発目 マザハ ノクオキ(きおく)のはざま

百二発目 治療

百三発目 俺が何をしたっていうんですか!?

百四発目 意外と?

百五発目 泣く狼

百六発目 帰還と問題発生

百七発目 薄い本に只は気持ちよすぎんだろ!!

百八発目 降り立つ鋼鉄の歯車(メタルギア)

百九発目 死神と世界初の鋼鉄の歯車(メタルギアZ E K E)

編

閑話休題

現狀報告

設定（先に読まないで!!結構ネタバレあり!!）

開発一覧

・アタッチメントのどのパーツも消費する弾の補充も1ポイント使うことにします

・開発と量産する際はその消費するポイントを支払う必要があります

・変身と修理するときには必要な分の半分でできる

・開発した武器はその場で出せるがマザーベースに預けることができる

・使いたいときはその場に出せるが10分ほどかかってしまう

・ヘリの装備変更段ボールなら10秒でできるが空から降ってくるのですごく目立つ

・スカルズは3秒でできるが一個しかできない（スカルズは迷彩服を装備できない）

・核はまだ使いません（いつかは使います）

・主人公はもし核を使ってしまうと主人にも世界からも恐れられて魔族より先に殺せみたいな展開になるので使いません

・斬撃モードは雷電、ジェットストリーム・サム、フエンリル（攻撃型）のみ使えます（使うと本家同様、敵が止まって見えて自身の動きも速くなります）

・支援物資の要請は無料で装備の変更も開発ポイントの中に入ります

（殺傷系）

アサルトライフル系 50

スナイパーライフル系 60

SMG系 20

ハンドガン系 5

ショットガン系 30

LMG系 70

ロケット系（ミサイル含む） 100
投擲物 3

（非殺傷系：睡眠、スタン）

アサルトライフル系 25

スナイパーライフル系 30

SMG系 10

ハンドガン系 5

ショットガン系 15

投擲物 3

（車両）

戦車（量産可能） 500

ヘリ（量産可能） 700

トラックなど（量産可能） 250

戦闘機（量産可能） 900

空母（三隻まで量産可能） 8000

イージス艦（十隻まで量産可能） 5000

護衛艦（三十隻まで量産可能） 3000

潜水艦（七隻まで量産可能） 2000

段ボールシリーズ 200

（その他）

食料（一週間分） 1

水（出す量は自由） 1

生活必需品 1

迷彩服 1（バトルドレスは3）

追加装備（双眼鏡・ナイトビジョンなど） 2

要請（砲撃） 200

要請（その他） 200

盾 300

要請（全員出動） 1000

現在、開発・量産しているメタルギアたちを全員出す要請

(通常メタルギア)

D | w a k e r 2000

メイン

・ガトリング 70

・火炎放射器 120

・ロケット 100

・F | B A L L I S T A 80

・H | D I S C H A E G E R 120

から一つ

サブ

・殺傷系ハンドガン 5

・サブレッサー付き無力化ハンドガン 5

・セミオートハンドガン 5

・サブマシンガン(多分UZI) 20

ピューパ 2000

クリサリス 3000

コクーン 3000

REY(ライジング使用) 7000

エクセルセス 9000

月光(量産可能、仔月光3体セット) 700

・通常型

・自爆型(自爆型は変身はできないが元の半分の開発ポイントで量産できる)

・アクティブ防護システム搭載型

仔月光(量産可能、6体セット) 90

フェンリル(戦闘型) 600

ブレードウルフ(索敵型、量産可能) 600

マステイフ(量産可能、量産可能) 500

ラプター(量産可能) 500

ヴォドムジェルカ(量産可能) 500

グライト（五体までなら量産可能） 800
スライダー（量産可能） 500
ウォーカーギア（量産可能だが武装はガトリング固定、サブ無し）
100
バトルギア（十機までなら量産可能武装は主砲レールガン、12.
7mm機関銃、認識妨害チャフ） 400
メタルギアmk. II（二体までなら量産可能。ちなみに二体目は自
動的に名前がメタルギアMk. iiiになる） 50
キッドナツパー 50（量産可能）

（核搭載メタルギア） 注：開発したら核が発射できる機体は最初から
原爆が入っています

シャゴホット 5000

ピースウォーカー 7000

ZEKE（レールガン、ブースター、機関銃三門、レドーム、誘導
ロケットランチャー、増加装甲） 7000

REX（核搭載レールガン付き） 12000

RAXA 10000

アーセナルギア（量産型メタルギアRAYを4機、月光の通常型1
00機、自爆型40機、アクティブ保護システム搭載型30機、仔月
光200体、サイボーグ雑魚兵士400人、重装備型300人） 20
000

アウターヘブン（量産型メタルギアRAYを8機、大陸弾道迎撃用
レールガン、月光通常型・自爆型600機、アクティブ保護システム
搭載型200機、子月光 約500体、サイボーグ 500人、重装
備型400人、フェンリル 200体 ect……） 60000

サヘラントロプス 10000

ギアレックス 8000

（どう見てもREXです。攻撃方法は本家でもあったレーザーみたいな
な攻撃と棘を飛ばして爆発するやつ。この作品の中では唯一「全状態
異常無効（放射線の中でも平気）」つというチート能力もセットでつい

てくる。……え？ 核要素皆無じゃないかって？ 細かいことは良
いんだよ)

(戦略兵器)注:使う際は核搭載メタルギアに変身したうえでないと使
えません

原爆 1000

水爆 2000

声帯虫 4000 (スカルフエイズてめえ!!な虫、本来は特定の言
語に反応するが異世界なのでアークが使用しても途中で特定の言語
を変更できる・・・ぶつちやけ本家よりチート化している)

(人型)・・・敵ボスに関してはボス戦の時の装備

雑魚サイボーグ兵 (量産可能) 300

重装備兵 (量産可能) 700

スカルズ (覆いつくすもの・ステルス化付き) 1000

ザ・ペイン 1000

(本家同様蜂を使う攻撃をしてくる。・・・蜂だけだと少し弱いので蜂
で足場にしたり縦にすることができ。武装はトミーガン固定。)

ザ・ファイアー 1000

(本家同様ボウガンで戦ってくる。異世界なので世界中の毒・化学兵
器の使用ができるようになる。絶対に見つからないステルス迷彩も
あるが森などの自然限定)

ジ・エンド 1000

(みんな大好きおじいちゃん。本家同様野生動物を仲間にでき会話が
できる。武装は殺傷もできる本家モシンナガンで命中率は100%
中120%)

ザ・フューリー 1000

(6円の人。本家同様ロケットブースターで空を飛び火炎放射をす
る。ザ・フューリーの炎はどんなものでも燃やす。逆にザ・フュー
リー自体は炎属性の攻撃は効かない。一応バルファルクみたいに空
を飛べるが速いというわけではない・・・だけどVTOLみたいにそ
の場で滞空ができる)

ザ・ソロー 1000

(死んでいません↑これ大切。死体の記憶を見ることができたり死者を一時的に蘇らせることもできる、その死んだ死体の能力を再現することができる。・・・実は冥界に行けるだとかなんだとか)

サイコマンティス 1000

(生物など生きているものなら自身の支配下における)

ラファイング・オクトパス 2000

(タコ!!・・・原作同様P90や自動追尾浮遊爆弾を使ってくる。ファイアー同様ステルス迷彩を装備しているが町やダンジョンなどの人工物限定。怪力)

レイジング・レイヴン 2000

(作者がこの子好きです。フウーリーより早く「ジェット機並み」に飛ぶことができるが滞空はできない。武装はスライダーに搭載されたロケットモーター内蔵クラスター爆弾やハイドラ70セミアクティブレーザー誘導ミサイル、手に持つMGL-140による攻撃を行なう)

クライング・ウルフ 2000

(レールガンを装備したフェンリル。原作と同じく狼型パワードスーツを脱ぐことはできる。性能はブレードウルフの索敵力とフェンリルの機動性を合体した感じ)

スクリーミング・マンティス 2000

(メカ版マンティス氏、無生物(スケルトンやゴーレム)なら自身の支配下における)

サンダウナー 2500

(ハゲ。爆発性反応装甲と二本の大型高周波マチエーテを装備している。なぜか戦闘ヘリも随伴している)

ミストラル 2500

(最大八体まで仔月光を四体まで雑魚サイボーグを二体まで重装備サイボーグを無料で召喚ができる。)

モンスター 2500

(磁場おじさん。金属系ならどんなものでも磁力で動かせる。ピュー

パほどではないが電撃もできる)

カムシン 2500

(武装は刃の部分チェーンソーになった大型の斧。召喚して第三者が乗り込んで操縦もできる。ボス枠では唯一量産が可能)

オセロツト 5000

(山猫様。潜入、諜報が得意で他の人型が戦闘に向いているならこの人はステルスミッションに向いている。調教や拷問は世界一でされたら・・・うん(諦め)。武装はSAA固定。)

ヴォルギン大佐 5000

(うほ♂な大佐。大佐は燃える男にもなっているので通常状態ではピューパ並みの電撃を飛ばせる、燃える男状態だとある程度は不死身になるが30分間しか耐えない。・・・弱点はどちらの状態になっても水が苦手)

サムエル・ホドリケス 10000

(イケメン侍。武装は愛刀の高周波ムラサマブレード固定だが見切りは途轍もなくレールガン並みに飛んでくるものでも切る)

ステイヴン・アームストロング 12000

(最強な議員。「あらゆる衝撃に対して一瞬で硬化するナノマシン」で構成された肉体を持ちメタルギアを持ち上げるほどの怪力を持っている・・・つてかゲーム内での攻撃方法そのまま)

雷電 12000

(永遠の二番手。メタルギアライジングのボスのユニーク武器全てがその場で使えるが能力までは使えない。斬撃モードが一番長い)

グレイフォックス 12000

(塩沢ボイス最高イエア!!、高周波ブレードをデフォルトで持つておりラファイング・オクトパスとザ・ファイアのより強力なステルス迷彩付き強化外骨格を装備しておりどこでも透明化できる。右腕にアームガンを装備しているが連発はできないでも強力・・・簡単に言ったらステルスミッション特化の雷電)

スネーク (BIGBOSS) 15000

(我らが主人公。武装は特に決まっていなが近接戦闘(CQC)など銃

火器は達人級に扱える。幸運はSSSランク。油断しない限り絶対
に勝つ)

本来の自分の体(特殊仕様) 解放条件:
????

キャラ設定

主人公

アーク（本名：鋼宮 徹 「コウミヤ トオル」 現18歳

この話の主人公

前世でメタルギアの新作を遊んでいたら食事もとらずにゲームをしていたのでゲームクリアと同時に眠気がし寝たら衰弱死した

ロリ神からこっぴどく怒られたが転生することになり特典は特別に「メタルギア」の能力を選び転生した

前世では一人暮らしで家事はそこそこできる

ステータス

姿：黒髪に黒目、高身長と一般的な姿・・・声は森川智之が声優したメイドイン〇ビスの黎明卿にそっくりだと友人に言われている。
身長は180cmくらい

だと本人は思っていたがなぜか銀髪美少年になっていた

好きな物：自分の食事を食べておいしいと言ってくれる人、パスたん

嫌いな物：愛のない結婚（政略結婚など）

最近の悩み：通知さん・・・お前誰？

関係：アリス（主人）

神様特典

「メタルギア」：メタルギアシリーズで出た武器や兵器を召喚できる

「Google先生」：いろいろと検索ができる

「I have predicted the conclusion」:

ざっくり言ったら本家アークの能力

だが、長時間使用するとオーバーヒートする。

変身シーケンス

人型ver

1, iDROIDの上部にあるスイッチを押して「peace!!」と鳴ったら「報復」といいます

2, 黒い液体が全身にまわりつき弾けたら変身完了

メタルギア ver

1, iDROIDを縦に開きボタンを押し『ALL METAL
GERA ability!!』!!と鳴ったらナイフ（形はどう見ても
スラッシュライサー）に射し込む

2, iDROIDを半分に折り畳みトリガーを引く

3, 蛇型のライダー……ロボットが刃部分から出て変身者に纏わりつ
き変身完了

アリス・フォン・アーハム 現17歳

ヒロイン？である少々生意気に感じるエルフ

アーハム帝国の第二皇女であり魔力が皇族なので途轍もなく多い
攻撃魔法の才能はないがアークからしたら付与魔法だけは才能が
あるエルフ

入学当初に召喚魔法でアークを出した主人エルフ

人間嫌いだがバサビイ共和国の人間のみであり他の国の人間に対
してはそれなりに対応する

料理や家庭的なことは壊滅的にできない

ステータス

姿：小麦みたいな金髪に緑色の瞳。エルフ特有の長く尖った耳を
持っているが耳を触られるのはくすぐたいので好きではない。身長
は170cmくらい

あと巨乳で足元が見えない

好きな物：甘いもの、アークとの会話とか他愛ないもの

嫌いな物：ピーマンなどの苦い野菜、人間（バサビイ共和国限定）、
お化け

最近の悩み：アークが他の女性と会話をしているとなぜかムカつく

関係：アーク（使い魔：ゴレム？）

クロエ・フォン・アーハム 満18歳

アリスの姉でアーハム帝国の第一皇女

攻撃魔法が得意で「豪華の魔法使い」とも言われている
アリスのことは格下に見ているが実は……？

アリスとは姉妹関係だがクロエが4月生まれでアリスが3月生まれなのでほぼ一歳差だが同じクラス

性格はプライドが高く父親の期待に応えるため勉学も帝王学もすでに学んでいて努力家

ステータス

姿：赤寄りの金髪で黄金色の瞳。アリスより耳は長いが垂れ耳。身長は175cm

あとアリスより胸がデカイ、つまり爆乳

好きな物：甘いもの、甘えさせてくれる人、従順な犬（ワンちゃん）
嫌いな物：虫、最初から諦めているもの

最近の悩み：・・・最近、妹が召喚した使い魔（アーク）と会話したいけどチャンスがない

関係：アリス（妹）、レオ（使い魔：ワイバーン）、アーク（将来の専属シエフ）↑アーク「ふあ!?!」

レイチエル・フォン・アーハム 16歳

クロエとアリスの妹である第三皇女の末っ子。

剣術と武器用の付与魔法が得意。

プライドが高いが優しい性格なので弱い者いじめができないタイプ。

人間に関しては騎士学校で一緒に学んだので別に何とも思わない

あと脳筋（これ大事）

ステータス

姿：白寄りの金髪に蒼眼。髪はツインテールで腰と肩の間くらい伸びている。身長は165cmくらい。

あと、貧乳だがレイチエル・フォン・アーハムはコンプレックスに思っているので彼女の前で胸のことを言うと言われrへ刺

好きなもの：甘い物（しかも姉以上）、姉二人
嫌いなもの：特にない

最近の悩み：アークに勝ちたい

関係：クロエ（姉）、アリス（姉）、アーク（ライバル好敵手）

リン・ウイテカー 現18歳

アリスの（こう見えて）一つ年上

ドワーフの父とエルフの母の間に生まれたエルフ

母が死んでからいじめなどを受けて育ち閉塞的になっていた

アークと合っただけからは面白そうな会話を知り接するたびに解体……ではなく彼を知りたい

ちなみになぜこんなにアークを解体したがるのかというと彼女は魔工学を専攻しているのでアークの体が気になって仕方ないだけである

ステータス

姿：黒い髪を目元まで隠している。耳は一般的なエルフより丸い。

身長は180cm

アリスほどではないが巨乳

好きな物：（アリスたちほど食べないが）甘いもの、解体

嫌いな物：黒歴史をえぐり出してくる輩

最近の悩み……アークが解体を許してくれないの……どうしたら許可が出るかな？

関係：アーク（助手）↑アーク「え？」、スケイル（使い魔：霞蟲）

エヴェリン・ヘル・カースド 数百歳

ロリババ

魔王城の執務が嫌で逃げだし、暇つぶしに魔人の屋敷に子供奴隷として潜入……という名の遊びをしていた

執務はキライだが戦闘は大好き（実力は魔族一強い）

いつかアークと戦ってみたい

性格は……簡単に言ったらメスガキ

ステータス

姿：子供みtainな身長で童顔。銀と紫を混ぜた不思議な髪色。紫の角に翼と尻尾が生えている。身長は150cm

貧乳だが本人は気にしていない……つてか戦闘では邪魔になる

好きな物：戦闘

嫌いな物：執務などの黙々と作業すること

最近の悩み：どうしたら執務をサボれるか考えている

関係：・・・まあ、たくさん

クリス・リリス 現20歳

オーク事件の際アリスと一緒に捕まった人間

本人曰くマーレから逃げてきたらしいが・・・？

姿：水色の髪にキリつとした瞳。身長は大体183cm

好きな物：不明

嫌いな物：働かずに遊んでばかりいて威張っている人

最近の悩み：不明

関係：不明

ノエル・スカルツオ 16歳

バサビイ共和国でチンピラに絡まれたときに偶々通りかかった

アークに助けてもらった修道女

出身はミール聖教国でバサビイ共和国に派遣で送られた

性格は真面目だが危機感がなく嘘を簡単に信じるし外の世界には

あまりいった事がないのでいろいろと外での常識がない

攻撃魔法は使えないこともないがどちらかというと回復魔法の方

が性に合っているらしい

姿：普段は黒い修道服を着ており水色の瞳にブロンド色の髪をして

いる。身長は170cm

着やせタイプの隠れ巨乳

好きな物：寝ること

嫌いな物：戦い（嫌いというか苦手）

最近の悩み：アークさんの周りだけ死の雰囲気を感じるのどうに

か取り除きたい

関係：アーク（友人）

モブ

シーベルト・アイスバーン 30歳

アリスたちのクラスの担任

これっといった特徴はないがアークの数少ない友人関係でよく雑

談や愚痴に付き合ってもらっている

アレクサンダー・フォン・アーハム 60歳くらい

「雷神」とも呼ばれている現皇帝

すごく威厳がすごそうだが？

エリザベス・フォン・アーハム 55歳くらい

現皇帝アレクサンダー・フォン・アーハムの正妻

夫とは政略結婚で出会ったが一目惚れで夫の方も一目惚れでしかも気が合うので結婚して40年くらいたつが今でも関係は熱々を超えてマグマ

オーク事件の方々

中二病エルフ：魔人の実験で死亡

リーダー気取り：オークの強襲で死亡

コミ症：アリスを犯そうとしたがオークに頭をカチ割られて死亡

唯一の女エルフ：アリスを売ろうとするが逆にオークに犯されて死

亡

アリスのクラスメイト

・・・アリス派とクロエ派に分かれている

トム

奴隷商人

奴隷商人がだ扱っているのは囚人ばかりなので割といい人

世界中を旅しているので情報はたくさん持っている

魔人

アリスを奴隷として買い取った魔族

アークと戦いの末負けて死んだが初めて友達ができてご満足

カサンドラ

魔王エヴェリンの側近的存在

よくエヴェリンが逃げだして困っている

勇者ペガサス（本名：金剛翔馬 コンゴウショウマ） 40歳

地獄から脱走し勝手に神様の特典を盗んだ極悪人

前世では痴漢したり盗撮したりと問題を起こしている

最終的には階段から踏み外して転んで死んだ

異世界の知識はネットで「異世界転生系漫画」が流行っていると

知ってにわか程度なのに異世界転生について博識って自慢しようと少し齧ったくらい

性格は・・・簡単に言ったら人間至上主義でエルフは肉便器か性奴隷と思っっている

最初はアリスを狙っていたがアークが悉く邪魔をするのでいら立っている

(神様特典)注意:これに書かれているのはアークが看破したスキルですが大体が勇者が気が付いてないだけです

・絶対回避(攻撃されているのを察知したらどんな状況でも回避できる。しかし、回避するほどの身体能力がないと意味がない)

・百発百中(武器を投擲したら絶対に充てるスキル。だが魔法関連だと効果は無効になる、あくまでも発動条件は手から放たれたものに限る)

・魔力無限大(文字通り)

・質量生産(ぶっちゃけ一番チート。自分が知っている物を無限に出せるが無限の剣製が主力になってしまったので豚に真珠)

・危険察知(自身に殺意を出す生物から攻撃があつた場合のみ発動し、攻撃されるのを教えてくれる。だが、あくまでも察知で自動的に避けるということはない)

・無限〇剣製(勇者の主力スキル。しかし勇者本人は見た武器を無限に出せる能力だと勘違いしている)

・超回復(自身が生きたいと思う限りどんな怪我でも部位欠落でも再生する)

・超成長(能力は倒すたびに自分を強化できるが、勇者自体が戦闘の才能がないので宝の持ち腐れになった)

世界観

アーハム帝国

アリスたちの住んでいる国でアークが召喚されたエルフの国

軍事力もあり生産業も加工業も発展しており世界の覇権を握っている国

海のも面しており海外とも交流がある
広さは地球で言う中国くらいの大きさ

魔法学園

アリスたちが通うアーハム帝国保護下の魔法学園

三年制の寮生活で貴族がほとんどいるがたまに魔法の才能を持った平民もいる

バサビイ共和国

アーハム帝国の隣にある国

バサビイ共和国の国民はエルフを自身たちより劣等民族としてみており本当はアーハム帝国よりバサビイ共和国のほうがえらいと思っっている

広さは日本と韓国を足して二で割った広さ

マーレ工業国家

アーハム帝国から西の彼方にある異世界では珍しい工業を中心とした国

ドワーフと人間が半々くらいいる

種族的差別はないが身分差別はある

ミール聖教国

唯一宗教でできた国

国自体は中立を保っており勇者が生まれる時などを予言したりする

魔族領

エヴェリンが魔王をしている領土

・・・つて言っても無理やり従わせているに等しく魔族同士は仲良くない（エヴェリンに忠誠を誓っているものは除く）

広さはロシアと北アメリカ大陸とアフリカ大陸を合わせたくらい

A I 戦闘モード

アークの中にいる誰か

ただ銀髪の誰かが勝手に動かしているというところまでならわかる

発動条件は不明

このモードになるとAI兵器・サイボーグの最大限の力が出せる。操縦者は人間で躊躇いや油断があるがAIモードは完全に“AIが操縦権を握るのでその場で最適な行動を瞬時に計算して実行する”

しかしAIが動くので容赦なく虐殺を開始する

止める方法は目標の完全殲滅・主人（アリス）の強制終了・アークの破壊のみ

勇者

アリスの世界ではとても重要な存在

ほとんどが異世界から（条件にもよるが勝手に）召喚される

召喚がされると勇者法が発動され命令されたことは絶対に従わないといけない

勇者の役目は魔族の王・・・魔王を倒すこと

とても危険だがその代わり国からいろいろと支援をうけとれる

勇者が現れる時はミール聖教国が予言で全世界の国に伝える

勇者の種類

「転移勇者」

クラスごと転移させた勇者

大体の犯人は「命を司る神」によるもの

召喚された人間は異世界では並外れた能力を持てる

「自然勇者」

稀なケースで現れる勇者

転移で召喚された勇者ではなく異世界の住民が勇者の力を覚醒した場合その住民は勇者とされる

「○○勇者」

居てはいけない、存在してはいけない勇者

勇者法

勇者だけが持つ権力

内容のほとんどが国からの支援系だが中には「戦闘でどうしても必要な物資があれば国から無条件で資金・資材・人材を提供する」

古代兵器

ダンジョンや古い遺跡などから発見される太古の兵器
そのどれもが強大な力を持っている

現在保有戦力と魔法演唱と魔物詳細 一覧

アークの現在保有戦力

(ボデイ)

- ・雑魚サイボーグ 十一体
- ・月光 四体(通常型二体、アクティブ保護システム搭載型二体)
- ・仔月光 二百十九体
- ・フェンリル 一体
- ・ブレードウルフ 一体
- ・マステイフ 十体
- ・スライダー 一体
- ・スカルズ 一体
- ・ピューパ 一体
- ・コクーン 一体
- ・クリサリス 一体
- ・キッドナツパー 二十体
- ・ボンネビルT100 一台
- ・シャゴホット 一体
- ・ピースウオーカー 一体
- ・メタルギアZ E K E 一体
- ・サイコマンティス
- ・クライング・ウルフ

(武器)：武器の隣にある()は保有弾数です。目安に思ってください

- ・P90 (一丁だけ6マガジン) 十一丁
- ・DSR-1 (予備含め4マガジン) 一丁
- ・TORNADO-6 (24発) 一丁
- ・FN SCAR-H Mk. 17 (8マガジン) 一丁
- ・プロウトン モデル2000シリーズ「M2000-NL」(4マガジン) 一丁
- ・カールグスタフM2 (1発) 一個

- ・ M870 25発
- ・ M60E4 300発
- ・ SAA 二丁 72発

(アタッチメント)

- ・ フォアハンドグリップ (SCAR-H用) 一個
- ・ ACOG (SCAR-H用) 一個
- ・ フラッシュハイダー (SCAR-H用) 1
- ・ マズルブレーキ (DSR-1用) 1
- ・ サプレッサー (M2000-NL用) 1
- ・ サプレッサー (DAR-1用) 1
- ・ スナイプスコープ「3-9倍」と「6-24倍」の二つ (DSR-1とM2000-NL両用) 一個ずつ
- ・ 二脚 (DSR-1とM-2000-NL両用)
- ・ ドッドサイト (P90用) 一個
- ・ サプレッサー (P90用) 一個

魔法一覧

「雷魔法」

・ “天よ！その怒りを我が手に！「サンダーストライク」”

小説の一番最初に出た魔法。下位魔法だが癖もなく使えやすく覚えやすいので使用者が多い

魔法を唱えると手から雷が出て目標に電撃する

「炎魔法」

・ “豪華のよ！そして業火よ！我が敵をすべて焼き尽くせ！「インフェルノ」”

クロエが使った魔法。初登場時はクロエがまだ一年生のころなのでRPG-7ほどの破壊力だが極めればAP弾になる

・ “日の神よ！その裁きの炎で大地の獣を焼き払え！「プロミネンス」”

シン・カーニバルが使った範囲魔法。最上位の魔法で広範囲を業火のごとく燃やし尽くす

だがアークのナパームほどではない

・ 炎の聖霊よ今こそその力を見せたまえ” 「ファイヤーボール”
炎魔法では基本的な魔法

某配管工の炎の球を複数個召喚し敵に向かって連射する

・ ” その業に裁かれ、浄化せよ「ファイアウォール」”

文字通り、炎の壁を出す魔法

出現時間は短いが味方の撤退時に牽制として出現したり、仕切り直しの時にも使える

・ ” 地獄の炎、辺獄の虚無よ、今こそ一つになりて無に還さん「ヘル・ノヴァ」”

最上位魔法、範囲は狭いがその分威力は凄まじく、敵を一瞬にして炭にし灰に返る。

「風魔法」

・ ” 荒れ狂う疾風よ！その怒りで大地を穿て！「サイクロンホール」”

”

上位の風魔法、広範囲をダイソン宜しく途轍もない吸引力で吸い上げ空中で分解させるが無差別なので注意が必要

「氷魔法」

・ ” 氷天の槍よ！今こそこの地へ降り注げ！「アイスニードル」”

アリスが使った（不発）魔法。だが実際は氷の槍を雨のごとく降らせる魔法

・ 雪の白虎よその咆哮で敵を凍らせよ” 「アイスインパクト」”

追尾型の魔法

白いトラを模したのを召喚し敵に追尾させる

・ 零下の世界にいざ、誘おう!! 「アイスワールド」

氷魔法の初級クラスの中では上の方の魔法

アイスニードルのように氷の槍を作って穿つとかではなく単に凍らせる魔法だが消費する魔力が少ないので上級者も愛用する

「土魔法」

・ ” 誇り高き壁よ!!我が同族を守りたまえ!! 「アースウォール」”
シン・カーニバルとその仲間が使った魔法

簡単な魔法で魔力はエゴに使える

使うと自身の指定した場所に土の壁を出せる、地域によっては固い土を壁にできる

・母なる大地に帰りたいまえ「ロックブロック」

汎用性が高い土魔法

地面から軽自動車サイズの土の塊を召喚し敵にぶつけるのも、即席の味方の盾にもなれる

「光魔法」（解呪や浄化も含まれる）

・「全ての敵意と悪意を排除せよ！神の子らに絶対の守りを！」
「フリーシュ」

中の上ぐらいの難易度を誇る光魔法

使用すると範囲内の魔族や幽霊などを寄せ付けない光を発する。ついでに周りにいる人間たちを少々回復するおまけつき

「索敵魔法」

・「我が母なる大地よ、今この地に起きている事象を見せたまえ」
「サーチ」

代表的な索敵魔法

魔力を薄く伸ばし魔力を持つ生物にぶつかると反応する仕組み

「付与魔法」

・「我が主よ我が哀れな使い魔に神速を、怪力を、希望を与えたまえ」
「ファイヤー・アップ」

アリスがアークにかけた使い魔専用の付与魔法

主人の魔法力によって変わるがアリスなので神兵並みに強くなれる

・「神よその剛腕を我に分け与えよ!! 「アームドパワー」」

ピューパと戦ったモブが使った魔法

付与すれば腕力が上がる

・「囚われし獣よ今ここに自由を「リーフ」」

アリスがアークと使い魔契約を切るときに使った魔法

これを使用することによってその瞬間、使い魔は晴れて自由の身になれる

・ “ 数多の神よ、今こそ力を合わせすべての呪いを打ち破らん「エボル」 ”

付与魔法の中では準上位魔法

対処のメンバーにかけるとそこから10分間は呪い・毒・麻痺などの状態異常を無効化する

しかし、状態異常の状態でこの付与魔法をかけても治らない

・ “ 罪を重ねた罪人よ 今こそ神々の地まで昇天し罪を告白したまえ「ヘルバスターストライク」 ”

元護衛が使った最上位の付与魔法の一つ

使用者の魔力×筋肉×威力というなんとも筋肉な魔法である。

だが、使用者自体が少なく大体の理由が筋肉がないのである。

だが、極めれば途轍もない威力を出すのは間違いない

「付与魔法・武器型」

・ “ 煉獄の刃よ、天を裂き地を割れ「フレイムスラッシュ」 ”

使う武器に爆発性の魔法を付与する魔法

・ “ 光の聖霊よ、その光で闇を追いかけたまえ「シャイニングウェーブ」 ”

使う武器に光の斬圧を加える付与魔法

使う物によって能力は変わる（例：剣↓鞭、槍↓巨大な槍）

「使役魔法」

・ “ 我に忠誠をそしてその命、我にささげたまえ。「スレーブ」 ”

魔人がアリスにかけた魔法

これをおかけると対象を奴隷化することができてどんな命令でも実行させることができる

解くには掛けた本人を殺す必要がある

「回復魔法」

・ “ 神よ、戦士に安らぎを「ヒール」 ”

下位の回復魔法

魔力の消費は少ないのに大体の怪我は治せる万能魔法。しかしあくまでも怪我を治すだけなので欠損部位などは治せない

種族・魔物一覧

(人間)

世界の半分くらいが人間という種族

魔力も肉体も全種族と比べて平均より少し高く才能の伸びしろがある

(エルフ)

人間の次ぐらいに多い種族

耳が長く、なぜか美人が多いというおまけ付き

魔力の保有量は全種族で一番多く魔法に長けているが運動は苦手
森が多いところに国や都市を作って生活しており、耳がよく肌が敏感である

肌が敏感なせいか他の種族に比べて肌の露出が多い。その見た目からドスケベエルフと言われており娼婦もエルフが多い

(ドワーフ)

エルフより少しだけ少ない種族

身長も低く魔力の保有量も全種族で一番低くいが筋肉は生まれつきあり筋肉を使った戦闘は得意

(獣人族)

一見人の姿に似ているが獣耳があったり尻尾がある種族

獣人族の文化に尻尾はなるべく清潔にするというのがあるので世界中のモフナーに每晚狙われている

(魔族)

「オーク」

魔王軍のなかでは下っ端の存在で茶色の肌が特徴

オークは女性を好みよく襲う

理由はオークはオスしかおらず種を増やすために人間、エルフ、ドワーフなどの女性を襲って犯して妊娠させて数を増やしている

ちなみに生まれてくる子もオークしかおらず遺伝子がほかの生物より強いので妊娠させられた女性はオークしか産めなくなる

「オーク・リーダー」

オークは普段は単体で行動はせず3体以上で群れを組み生活し

ている

しかし、群れの数が15体以上になるとオーク・リーダーが誕生する

オーク・リーダーは普通のオークより体が二倍ほど大きく体格も良い

「オーク・ロード」

オーク・リーダーが進化した魔物で通常のオークより数倍体格的にも知性的にも高い（人間、エルフなどより高くはない）

ちなみに途轍もなくいろいろな情報だがオークに攫われて産み袋されるのはエルフが多く

理由はオーク・ロードのイチモツは巨悪なほど巨大で巨大イチモツから出る白い液体も超強力な媚薬効果があるのでエルフは肌が敏感なのでエルフにとってはある意味で天敵で肉体的にも精神的にも死んでしまう

見つけしだい殺せ、以上

「ゴブリン」

小さい体に緑の肌の魔族

オークより頭はよく素早いので油断は禁物

オーク同様、種族繁栄のためにエルフなどのほかの種族の女性を狙って攫い産み袋にする

「魔族」

魔族の一番偉く、強い種族

頭脳も人間並みに良く、肉体も魔法も高い

しかし、変なプライドがあるらしく……友達など友好的な契約を結ぶ際は殴り合って友情を深める

「ミミック」

幼体のころは壺などで成長して成体になったら宝箱などに寄生する

一生を通して雑食で口に入るものは何でも食べる

「スライム」

意外とそこら中にいるが実際は謎が多い魔族？

第一魔族なのかも怪しい

しかし、プルプルとしたボディが可愛いらしく魔族領ではぬいぐるみとして販売しているらしい

「ボス・スライム」

巨大なスライム

普通のスライムとは見た目は変わらないが、縄張り意識は強く入ったものに対しては容赦なく攻撃してくる

攻撃には毒や麻痺などに状態異常の攻撃をしてくる

「ホモンクルス」

人工的に作られた生命体で人っぽい形をしているが鼻が変なところにあつたりと形は人間で姿は化け物の魔物

あと、どういうわけかすごく強いらしい

だが、その正体は？

第一章 学園編

一発目 さようなら人生、こんには……機械生？

異世界転生……それは誰だって一度はしたいと思うことのある現象

異世界に転生すれば神様特典でハーレム作ってイチャイチャできたりなんなら国を作ろうともしける

しかし、異世界と言ったら魔法とハッピーセットのおもちや感覚でついてくる魔物とそれは従わせる魔王たち……

とある帝国……

「おおおおおおおん……ごおおおおおおおおん……
「魔物だ!!魔王軍が攻めてきたぞ!!」

それは満月の夜にここエルフが治めるアーハム帝国の辺境の国境警備隊が警鐘を鳴らした……すぐさま、軍を送り交戦をしたて撃退をいたがこちらにも被害が大きかった……

最近では魔王国領では活発に魔物が活動しており

重く見たそれぞれの国王は軍備増強したり神が力を授けた「勇者」を探すことだった……

「アーハム帝国立魔法学園」

ここは魔法学園をしておりこれを約一万ほどの学生が将来魔法関係の職業を得るために日々友人や先輩後輩たちがしのぎを削っていた……

その授業の一環で……

「アリス・フォン・アーハム様!!あなたの番ですよ!!」

……学園の一施設である魔法の演習にも使われるグラウンドにて“召喚魔法”の儀式が行われていた

この世界では魔法使いは召喚獣を召喚し使役することで使い魔にすることができ護衛やお使いができる

グラウンドの中心には巨大な魔法陣があり、皆それぞれ個性豊かな使

い魔を使役している

その魔法陣に一人の少女が近いった

エルフ特有のどがった耳に翡翠色の目、小麦畑のように輝く金髪美少女が向かっていた・・・

彼女こそこの国の第二皇女である「アリス・フォン・アーハム」

冷静な様子で向かう・・・

アリス（成功できるかしら・・・）

この帝国は身分が分かれており下の身分から皇族のような上級に行くほど魔力の保持量が多くなってきている

アリスは皇族だが実は生まれつき魔力は皇族らしく多いが出す魔法の規模が小さかった・・・

召喚魔法は使える魔法が高ければ高いほど上位の召喚獣が召喚でききる

??「うふふ、頑張つてねアリス？」

アリス「・・・はい、クロエ姉さま」

上にある観戦席から声をかけたのは第一皇女の「クロエ・フォン・アーハム」

彼女はアリスより先に召喚を終わらせており、クロエは生まれたころから魔法に才があったので高位の魔法が使えるので隣には使役したての大人の1.5倍ほどの身長があるワイバーンの幼体があった

クロエ（・・・くくく、アリスが天才であるこの私を超えるなんてありえないわ!!）

・・・実はこの世界の魔法は攻撃の威力が高いほど素晴らしいという風潮がありアリスは攻撃魔法はできないが回復やバフなどの支援系魔法が得意だがクロエは攻撃魔法の中でも火属性の魔法が高く周囲からは「豪火の魔法使い」「次期女王」など呼ばれているがアリスは「無能」「泣き虫」などバカにされていた

アリス（・・・いいのよ、アリス。私は生まれてから親から見捨てられたような生活を送っているからこんなの慣れてるでしょ・・・クロエ姉さまよりすごいのを出さなければいいのよ・・・って言っても私は攻撃魔法がへたくそだから精々ペットサイズのフクロウとか

かしら・・・)

そして魔法陣の近くで魔法を発動する呪文を言う

アリス「・・・この数多の世界のどこかにいる我が僕よ！今こそ我が声に応えてこの世界に現れ、我と契約を結び、我を守りたまえ!!」

カッ!!

魔法陣が光り魔法の成功を示すが・・・

アリス「・・・なんで現れないの」

使い魔は現れなかった

クロエ「プツ！アツハツハツハ!!お、面白い冗談をするわねアリス!!まさか、魔法が成功したのに使い魔が現れないなんて・・・まさか、あなたが攻撃魔法が使えないから使い魔からも嫌われたのかしら!!」

アリス「・・・申し訳ございません・・・担当官、もう一度いいですか？」

担当官「は、はいどうぞ」

しかし、何度もやっても使い魔は現れなかった・・・

それに失敗するたびに周りから野次も飛び始めた

「いい加減にしろよ、泣き虫!!」

「そろそろ、芸は終わったか？」

「おいおい、このままじゃ夜になっちまうぞ！」

・・・そしてもう何回目かになった

担当官「・・・アリス様・・・次で最後にしてください・・・」

アリス「・・・グスツ・・・わかりました」

そして最後のチャンスである呪文をいう

アリス「・・・この・・・あまたの・・・グスツ・・・世界にいる我が僕よ・・・今こそ我が声に応えこの世界に現れ・・・我と契約を・・・結び・・・我を・・・お願い・・・私を守って」

・・・その時だった

カッ!!

アリス（ああ、またどうせ成功したけど現れないんだろうな・・・）
しかし現れたのは・・・

アリス「な、なにこれ・・・ゴーレム？」

現れたはした。しかし、・・・

アリス（・・・なにかしらこれ・・・四角い胴体に体の大きさにしては小さい二本の脚と右腕、そして左腕の部分は六本の筒が集まった丸太のようなもの・・・）

召喚にできたことに驚きたいがその前に目の前の異形が怪しかった・・・

・・・その異形が静かに発した

?? 「D | w a k e r . . . 起動・・・」

・・・俺の名前は鋼宮 徹（こうみや とおる）

しがない普通の高校三年生で（元）剣道部の18歳、彼女無しだ

・・・みんなはどんなゲームが好きだい？

マ○オ？ドラ○エ？モン○ン？

・・・俺？・・・俺はなんつったて

「メタルギア」シリーズ

全部かな？

理由はあのリアルにありそうな機体が出てくることかな？

・・・で、今日俺は何をしているのかっというところ

徹「ついに・・・ついに戻ってきたあああ手に入れたぞおおお!!

(エボ○ト並み)

・・・そう、今日!!

メタルギアの最新作を手に入れたのだ!!

徹「・・・さっそく帰ってプレイだ!!」

・・・速攻家に帰ってプレイをした

寝る間もご飯を食べる間を惜しんでプレイを続けた

そして・・・

徹「ふう・・・ようやくクリアができた・・・さ、さすがに眠いな・・・」
クリアに成功し画面を閉じてそのまま体を引きずりベッドに倒れ
こむ

徹(あ、そういえば明日の課題終わってねえな・・・まあ後でいい
か・・・今は寝よう・・・)

そして意識の手を離した・・・

今朝のニュースで18歳の高校生がゲームのし過ぎによる睡眠不足と栄養不足による衰弱死した死体が発見された

徹「・・・う、うん・・・ん?・・・知らない天井だ?」

目が覚めると上も下も白い天井と床で装飾された部屋にいた・・・
そして、目の前でずいぶんご機嫌斜めな少女がいた

徹「え、えつと・・・だ r 「なんでよおおおおお!?」・・・
why?」

??「な!ん!で!死んで来たのよおおお!?」

え?急に何言い出してんだこのロリ?・・・あと、今死んだって・・・
??「ロリじゃない!!私はあなたたちで言う“神”なのよ!!」

・・・今、心を読んだのか!?

徹「・・・ペーパーのでも頭の奴でもなく?」

神「どつちも違うわ!! ああ、もう!! 本題に入るわ!! あなたは死にました!! 原因はゲームのし過ぎによる衰弱死!! 以上!!」

徹「え、ウソン・・・トラックにひかれたーとか雷が当たったーとかではなく?」

神「・・・本当は違うけど・・・でも!! 今回はあなたのせいでもあるんだからね!」

・・・話によるとロリのこと神様は天界という世界で人間の寿命などを管理しているらしい

昨日、神様内で忘年会みたいのがあり皆べろんべろんに酔っぱらったそうだ

しかし、その時神様の部下が酒を俺の詳細表に誤ってこぼしてしまい急いで乾かしたがぶつちやけ破けそうなくらいボロボロになってしまったそうナ・・・ボロボロの状態だったら神様が決めた寿命まで生きれるか可能性が低かったらしい

・・・幸いにも事故とかでの他界ではないので安心はしたが俺のゲームのし過ぎでこつちに来たことにオコらしい

神「ゲームいつまでやったんよ!? 普通一日一時間でしよう!」

徹「・・・だってすごく楽しかったもん・・・」

神「もん・・・じゃないわ!!・・・はあ、疲れた・・・まあ、いいわ一応で我々神の責任? 責任なのこれ?・・・まあ、いいか・・・つで! あなたを記憶や体ををもったまま「転生」させます」

・・・今、いいかって聞こえたけど大丈夫か?

でも、転生!?! いいの!?!

神「あ、ちなみに行く世界はランダムよ」

・・・まじかよ

神「それじゃ、頑張つてねえ」

徹「ちよ、待てい!?! 特典は!?! なんかないの!?!」

神「あ、そうだったわ・・・いつもならその先に合わせて特典をあげるけど部下の責任もあるから三個までなら決めていいよ?」

・・・三個・・・三個かあ・・・

徹「・・・じゃあ

- 1、あつちに行っても元の世界の情報を見れる能力
- 2、衣食住に困らない生活
- 3、「メタルギアシリーズ」にでる兵器やメタルギアが使える能力
・・・で!!」

神「あら？それでいいの？普通ならハーレムやらチート能力を願われると思っただけ？」

徹「いやあ・・・あつちで平和に暮らしたいんでね・・・っていうかメタルギアだけでも十分チートだと思う・・・」

神「そう？・・・では決まりましたね？準備ができたならその穴から出てください」

そう指を刺した方向を見たら・・・

・・・なんかパツクン〇ラワーが出てきそうな土管があった

徹「・・・いや、これスーパーマリ「いいから、行きなさい(ゲシツ)」・・・ちよいいいいいいいい!!」

こうして俺は転生した・・・

神「ふう、行つたわね・・・あれ？よくよく考えたら彼も悪くない？・・・ちよつと彼の特典いじろ・・・」

・・・いつてえくく

あのロリ神め、蹴りおつたな・・・

しかし、ここはどこだ？

周りはまるで長年さび付き放置された研究所みたいな所だった・・・
徹「・・・ここはどこだ？まるで俺のいた世界の実験室みたいだが・・・
とりあえず移動するか」

そうして今いる場所から移動をしようとした瞬間

ウイイイイイイン

徹「ん？ウイイイイイイン？どこか起動している装置でもあるのか？」

しかしあたりを見渡すがどこも沈黙したままだった・・・

徹「・・・気のせいかな」

だがまた一步踏み込もうとした瞬間・・・

ウイイイイイイン

徹「あれ？また？」

だかどあたりを見渡してもどこも起動していない・・・

徹「・・・ていうか自分の内側からなってるね？」

そう思い近くにあった割れたガラスケースに今の自分の姿があった・・・

徹「・・・え？」

それはかつてのゲーム内にあった某大きい頭領たちを乗せて走り回ったり乗りながら戦った二足歩行兵器

徹「・・・おれ、D—w—a—k—e—rになってる？」

ピロン!!

するとどこからかこの場所には似合わない音が聞こえた

徹「え!?!なんのおt」

「メールを受信しました・・・開きますか？」

視界に突如設定画面みたいなのが出た

徹「え、なんこれ？・・・っていうかどうやって開くん？」

・・・念じればいいのか？

ピッ

あ、開いた・・・

開くとそこには宛先人〃神様〃と書かれていて内容は以下のとうりだった・・・

もう一度見直そうとスクロールしたが見落としかなんのかはわからないが武器欄の下にそれはあった・・・そこには・・・

核兵器（核搭載型メタルギア）

二発目 えくと・・・・・・・・チャオ？

徹「・・・・・・・・え、なに？この世界で核戦争をしろと？」

・・・・・・・・そこにはメタルギアでストーリーにたびたびにでたもの「核搭載型メタルギア」である

っていうかこつちが本来のメタルギアだけどね!!

徹「お、お~~~~」

タツプ？いや、クリック？したらいろんなメタルギアが乗っていた
シャゴホットとかピースウオーカーにサハラントロプスがあつ
た・・・

・・・・・・・・で問題の消費ポイントだが

徹「まあ、でしようねえ・・・」

うん、すつごく高い（小並感）

いや、このポイントで戦車を開発、大量に量産配備ができるくらい
ある

一番安いっていいのかわからないけどシャゴホットでも十
台分価値がある

徹「ま、まあ核戦争なんてする気ないしポイントは他のにまわ
そ・・・」

では、選びきれるまで割愛

・・・・・・・・一時間後

徹「・・・・・・・・こんな感じかな？」

開発して手に入ったのは今の所

・P90 弾込みマガジン六個（アタッチメント：レッドドッド）

・麻酔銃 ワンアクションタイプ（アタッチメント：サブレッツ

サー、レーザーサイト）

・カロリーメイト チョコ味

・支援要請 弾補給

・サバイバルナイフ

・ナイトビジョン

・メタルギア5で出たすごく高機能な通信機みたいなやつ（名前がわからない）

P90は俺の愛銃の一つで前の世界でサバゲーをしていたけどP90が一番使いやすかったからだ

麻醉銃はスネークがよく使った打ったら毎回コツキングをしないといけないタイプでサブの中で一番安値で開発ができたやつ

あとは必要と判断して開発した

徹「よし!!出してみよ♪」

「召喚しますか?」

徹「はいっと」

すると右手が光って中から頼もしい重さを感じた

徹「おお!!本物だあ!!うええええええい→!!」

まさか異世界とはいえ憧れの銃を手に入れて早速試し打ちをしようとしたが・・・

カチツ!!

徹「あれ?セーフティをかけっぱなしだっけ?」

しかし、確認するがかかってはいなかった

徹「んん?なんでだ?・・・あー!そう言えば検索機能も入れてたっ

け!・・・検索!!」

そうすると視界は検索画面になったが・・・

徹「いや、すごく（画面が）Googleやん・・・まあ、いいか、

Google先生!!教えてくださいな!!」

検索するがどれもセーフティの外し忘れや弾倉のつまりとかだつた・・・

徹「えくくく?出したばかりで不良品出すとか聞いてませんけど?」

ピロン♪

すると視界のはじめに注意書きみたいなのがでた

「銃は使うと定期的にメンテナンスをしないと使用ができなくなりま
す(そもそも銃は人型でないと使用ができません)」

徹「……おーまいがー」

速報

徹さん、転生して早々にミスをする

……まあごもつともですな!!

普通、銃って人間が使うものですよな!!

徹「……人型を作るポイントあつたけ?」

確認するが全然足りなかった……

徹「……仕方ない、ミスしたもんは今後に生かせばいい……と
りあえず一旦座ろ……あれ?」

……待つて、よくよく考えてみたら

徹「D | w a k e r っ て座れなくね?」

……待機状態とかほとんど動いてない状態だったら前にうなだれ
ているけど腰から座ることってできなくね?

つまりずっと直立のままだから横になって寝ることもできないの
では?

徹「え、めっちゃ不便やん……この体……いや、頑張れば行け
るかも?」

とりあえず普通に座ろうとする

ぎぎぎぎいいいい……

腰部部分が悲鳴を上げた

……正座は?

ぎぎぎぎいいいい……

……ダメでした

おい!? ヒューイ!? こいつ不良品だぞ!? もつと俺みたいになった奴に優しい設計にしろよ! (無理がある)

徹「・・・どしよ」

そう思い体操座りをしようとしたら

ウイン

・・・あれ? 視線が低くなったぞ?

確認しようと即席の鏡になってもらっているガラスケースを確認すると・・・

全体的に低くなり足からタイヤが出ていた

徹「お、おお!? これってD-wakerのダッシュモードじゃん!!・・・じゃあ・・・もしかして」

試しに前に進もうとすると

コロコロコロ・・・

ゆつくりと前に進んでいった・・・

スピードを上げると・・・

ギューイイイイイイイン!!

ゲームの世界並みに速いスピードで進んでいった・・・

徹「・・・すげえ!!・・・俺、本当にD-wakerになっちゃってる!!すごいじゃん!! エメリツヒ博士!! (見事な手のひら返し)・・・でもなあ」

・・・よく考えてほしい体操座りよ?

すごいスピードで体操座りのまま移動するんよ? シュールとかなんというか・・・まあ、うん・・・

・・・そう思いながらも運転技術をあげつつこの研究所の探索をしていた

・・・うーん？本当にここどこだろう？Googleマップを使っても真っ黒だったし

それにこの研究所はなんの研究をしてたんだろ？

周りのガラスケースはすべて破壊されていて機械などの電子機もうんともすんとも言わなかった

他の部屋も探索しようとしたがどれも何もなかったり部屋が潰れていたりしていた

何とか残っている部屋の中にはナニカノ兵器らしきものがあった・・・

そして最後の部屋に入ろうとした・・・

徹「・・・いや、でけえな」

それはまるで空港にある航空機の倉庫ぐらい巨大な扉だった

だいたいRAYくらいかな？にしてもなんでこんなにもデカいんだ？

幸いにも長年放置されていたのかはわからないが錆びついている部分がありD－wakerキックでブチ開けた

ガコオオオン!!

徹「・・・よっこいショット、ワオ・・・扉もデカいなら中もデカいな・・・」

なかは工場みたいにいるんなレーンにロボットアームがあった

徹「工場か？でもいったい何を？」

どこもボロボロになっており結局わからず終いかなっと思ったら・・・

徹「あれ？あの部屋だけ光が漏れてる？」

全てを見回ってどうにかこの場所から出る方法を考えていると壁の一部から緑色の光が出ていた

近くに行き調べようとしたが壁が開かなかったので破壊しようとする・・・

カツ!!

徹「うお!?!なんだ、床が!?!」

突然、床に幾何学的模様が浮かび体が鈍くなった

徹「くそ!?!トラップか!?!」

体が光に包まれる中どうにか緑色の光の正体を調べるために壁に強烈なパンチを与え穴ができたので中をのぞくと

謎の容器の中に人型の何かがあった

・・・そこで意識を失った

「D—w a k e r . . . 起動 . . . 」

・・・い、いてえくく何だったんだ今の光?

それに、奥のほうにあった容器の中に誰かいた気がするんだよな?
ってかここどこ?

そこはさつきまでジメジメして暗くぼろぼろの研究所みたいなのが太陽がでて周りは大きな広場になっていて地面にはなんか模様が描かれている

その真ん中に俺が立っていて周りにたくさん人間がいた

・・・それで俺の目の前に女性がいた

金髪でエメラルドのような瞳をもった美女だった・・・(あと、胸がデカイ)

そして、耳がとんがっていた

うおおおおおお!! ようやくやくザ・異世界っていう要素がきたああああ!!

ようやくだよ!! スタート地点がああ研究所ってふぎけてんのかって言いたかったヨ!!

てか、目の前のエルフ・・・めっちゃ美人やん!!

あれってなんかの制服かな?

?? 「えつと・・・ゴーレム?」

おつといかんいかん・・・まずは現状確認だ・・・神様からこの世界の言葉は理解できるからって言ってたから安心して会話ができるな・・・

徹 「あゝゝゝ、スミマセン・・・そこのお嬢さん?ここつてどこなんでしょうか?」

?? 「ええええ!?しやべった!」

「・・・おい、あのゴーレムしやべったぞ」

「あれつてゴーレムなの?」

「いや、喋れているから騎士か何かじゃないか?」

おう、周りがうるさいな・・・

つていうか俺、ゴーレムじゃねえし・・・

徹 「失礼な、喋つて何が悪い?・・・あと、俺の名前は鋼宮 徹つていうんだよろしく」

?? 「コウミヤ トオル・・・へんな名前ね・・・まあ、いいか・・・聞いて跪きなさい!!私の名はアーハム帝国第二皇女「アリス・フォン・アーハム」よ!!」

・・・え、まじ?帝国で皇女?・・・それより

徹 「・・・アーハム帝国つてなんだ?」

全員 「「「「「ええええ!」「「「「」」

・・・おう、なんかシンクロしたぞ

アリス 「あ、あなた・・・この何百年も詠歌を誇ったアーハム帝国を知らないの?・・・さすがにどんな田舎者でも知っているわよ?」

徹 「いや、知らんもんは知らん・・・あと、この広場つてどこなんだ?」

アリス 「し、知らないつて・・・初めてだわ・・・あ、あとあなたが召喚されたここはアーハム帝国管理下の魔法学園よ」

わお・・・魔法もあるんかよこの世界

「……ん？待て……今、召喚って言わなかったか？」

徹「ちよい待ち……召喚ってどういう……」

アリス「なにして……私はあなたを使い魔として召喚したのよ？」
「……What？」

徹「え、使い魔って君の元でずっと付添人をしろっていうこと？」

アリス「……そうよ……これからよろしくね？えっと……コウミヤ？」

徹「あ、こつちでいうとトオルが名前でコウミヤが性だよ」

アリス「ふうくん……じゃ、お前今から「アーク」ね」
「……ん？」

徹「え、ちよ？……俺にはトオルっていう名前があるんだけど？」

アリス「なによ？主人が使い魔の名前を決めて悪いの？」

徹「え、そういうシステム？」

「アリス様……そろそろ交代を……」

アリス「あ、申し訳ございません担当官……すぐ、どきますね……ほら、行くわよ」

なんか急に自分の主人になった少女は器用に制服のスカートのほじをつまみ担当官らしい人物に一例をした

徹「ちよ!?!待てよ!!」

足の回転を急がせ先に行った少女を追いかけえた

ギユイン

ギユイン

ギユイン

いや、あの子、足長いからかわかんないけど歩くの速いよ!?!

そう思いつつ階段を登っていく

アリス「……ちよつと!?!さつきからギユインギユインってうるさいのよ!?!」

徹「ちよ、それはこの体を作ったやつ（ヒューイ）に言え!!」

アリス「いや、体って……あなた、騎士ではないの？ゴームだったら知性がないからこうやって会話はできないし？」

徹「……騎士でもないんだが」

アリス「…まさかアンデッド（ゾンビ・ネクロマンサーなど）？」
徹「…おれ、現在進行形で生きてるんですけど」

アリス「生きてるなら騎士ってことでしょ？…その防具脱いだら？」

徹「…これ自体が自分の体だから脱げないし、あと俺は元人間だ」

アリス「え、あなた人間なの？」

徹「おう、元だけども」ちよつと!?近寄らないでくれる!?汚わらしい人間が!!」…はい?」

…この主人、もう俺に暴言吐いてきたけど

徹「いや、なんでさ…」

聞くによるとこのアーハム帝国の近くにバサビイ共和国という国家があり一応国交は結んでいるがその国の人間はエルフをいやらしい目で見られるらしくアーハム帝国国民はよく思っていないらしい

噂によるとバサビイ共和国に行ったエルフは奴隷になりやすいらしい

徹「んなことしないわ…（↑しかしさつき召喚されたときアリスのアレがデカいって言った人）」

アリス「嘘よ!!そうやって私を性的に見てるんでしょ!!お父様が言ってたわ!!」

徹「見ねえわ!!」

アリス「…まさか、私が召喚魔法を失敗し続けたのってあなたのせいなのね!!」

徹「ちがうって!?…あと、俺はこの世界の人間じゃない!!」

アリス「…は?なに?とうとう血迷って嘘を言い出したの?」
徹「違いわい!!この体が証拠たい!!」

アリス「ふうくん…いいわあなたみたいな愚かな人間の証言が嘘ってみんなに判明するまで信じてあげるわ?光栄に思いなさい?」

…なんかいろいろと余計なことをいう主人だな

こうして転生して早々、静かに暮らしたいという夢は砕け散り使い魔としての生活が始まった

三 三 三 現 状 確 認

・・・あれから会場にいる生徒全員の召喚が終わりそれぞれの主人の部屋のある寮に移動した

徹「いや、めっちゃ豪華・・・」

俺の主人になったアリスの部屋はまるでどこかの豪邸を切り抜いてそのままこの部屋に持ってきたようだった

アリス「なによ？皇族だったらこれくらい当たり前でしょ？・・・それよりなんでここに勝手に入ってきてるのよ!!」

徹「はい!?だって主人である君に付いてきただけだし!」

アリス「平民でしかも人間が勝手に入らないでよ!!普通、部屋の外で待つておくのが礼儀でしょ!!・・・あんた、礼儀が平民以下ね」

・・・どんだけ人間を嫌ってるんだよこのエルフ

徹「・・・わかったよ、でもその前にこの世界について教えてくれないか？さすがに皇族の君の使い魔が無知識だったら恥ずかしいし」
アリス「・・・あんたが人間じゃなかったらいい心がけて褒めたけれど、どうせ別の世界から来たっていうのを信じ込ませたいんでしょ？それにアーハム帝国皇族である私に敬意がないわよ？」

徹「・・・僕はー何も知らない哀れな元人間ですーわーアリス様ーどうかこの世界について教えて下しー(棒)」

アリス「なんか、イラってききたけどいいわ。特別に教えましょう。まず、この世界についてだけど・・・」

・・・この世界にはそれぞれ人族、エルフ族、ドワーフ族、獣人族などの生物がそれぞれの土地に住み着き国を作ったらしい

それぞれの国はいろんな思想をもっていたけどそれなりには平和に暮らしていた

しかし、太古の昔に一人の仲間はずれができたらしい・・・エルフみたいに耳は尖がっているが悪魔のような翼が生え醜い生物が生まれた。それが初代魔王らしい・・・そいつはみんなからいじめられ迫

害されたらしくこの世界の生物に復讐するべく自身の仲間を作り上げ各国を襲撃して一度世界が滅びかけた

しかし、そこに神から力を授かった「勇者」という人物が現れてその魔王から生まれた生物「魔族」を倒していつてついに魔王を倒したらしい

それはそれは国中が喜んだが勇者も相打ちになったらしくすべての魔族が滅ぼせたわけではなく、まだ魔王領に住み着いていると・・・しかし、それから数十年後に新しい魔王が生まれたがそれに合わせて新しい勇者も発見したらしい

そこから勇者は魔王に対抗できる優一的手段と世界中は認識したらしい

そこでこのアーハム帝国はもし勇者が現れてもサポートができるようにこの魔法学園を作り備えている

最後にこの学園についてだがまず三年間教育を受けてそれぞれの魔法関係の仕事に就くらしいが今年は勇者が現れる時期だとアーハム帝国から少し離れた宗教国家「ミール聖教国」が発信して我こそはと勇者とお供になりたいとこの学園の競争率は過去最高になったらしい

自分の主人であるアリスはそんな中勝ち取り一年生として入学した

アリス「・・・っていう感じよ!!・・・じゃ、改めて自己紹介するね？私はこの栄光なるアーハム帝国の第二皇女アリス・フォン・アーハムよ!!今年で18になるわ!!好きなものは甘いもの。嫌いなものは特にないけど人間は好きじゃないわ!!これからよろしくね？」

徹「えつと・・・これっておれも行ったほうがいいの？」
アリス「当たり前じゃない？使い魔について知らない主人なんて失格だわ!!」

徹「えくくくと、さつき言ったとうり俺の名前は鋼宮 徹。元剣道部で18歳・・・日本生まれだ・・・今はこんな体だけど人間だからな？」

アリス「あら、使い魔のくせに私より少し年上なのね・・・それよ

り二ホン?二ホンってどこよ?」

「・・・アリスは何言ってるんだこいつみたいな顔で見るけどそりやあ異世界だからからな」

徹「・・・異世界からきたからなそりや・・・って第二皇女なら第一も?」

アリス「・・・クロエ姉さまね」

するとさっきの顔から暗い顔になった

徹「?おい、どうしたんだ?」

??「ふふ、話は大体聞いたわよ?」

・・・扉から声がして振り返ると

そこにはアリスを赤い髪色にしてすこし背を高くした美人がいた

??「初めまして、喋れるゴーレムさん?私がアーハム帝国の第一皇女クロエ・フォン・アーハムよ?これからも妹のアリスをよろしくね?」

徹「あ、どうもえつと・・・トオル・コウミヤです」

クロエ「・・・トオルね・・・でも、その名はもうすぐで意味がなくなるわ」

徹「え、それってどういう・・・」

ピン!

アリス「ふう、ようやく終わったわ・・・あ、話終わったかしら?」

そう言いながらアリスは手元に浮かんでいた光る板をなおした

徹「ちよい待ち!?!今の何!?!」

アリス「何ってあなたの設定を終わったのよ」

・・・え、なん?設定ってなに?

アリス「試しにあなた、前の名で呼んでみなさいよ」

・・・試しに自分の名前をいおうとすると

徹「え、鋼宮 とお r (バチイイイイ!!)・・・いったあ!?!」

それはまるで急に体内でスタンガンが爆発したような痛みが走った

アリス「よし!成功ね!・・・実は使い魔を得た魔法使いは使い魔の詳細を知ると使い魔設定ができるのよ!!」

・・・え、人権侵害じゃん

アリス「我を示したまえ」

すると突然アリスの前にさつきとは違う色の板がでた

徹「え、なんそれ？」

アリス「これは自分のステータスを示したものだ。さつき唱えたのはこれを見る呪文でこれを使えばいつでも自分や使い魔の詳細を見られるのよ!!」

え、つまり俺についてがわかってしまうの？

アリスの前にできた画面にはまさに自分の情報が載っており名前も徹からアークになっていた

クロエ「これは主人の特権でその使い魔の名前や罰を設定ができるのよ」

アリス「あんたは自分の本来の名前を言っははいけない、主人である私に危害を加えないこと、嘘をつかない、主人の命令は絶対でこれの一つでも破けば罰が与え有れるようにしたわ!」

・・・だからさつき電流みたいなのが流れたんか。つまり今後から俺の名前はアークって呼ばないといけない奴か

アリス「それにしてもあなたの種族・・・なにこれ?めたるぎあつて?」

アーク「メタルギアっていうのは兵器の一種だよ」

アリス「・・・つまりゴーレムと変わらないじゃない」

・・・だから違うって

クロエ「ぷぷっ・・・っ、つまりアリスはそんな細くて小さくて弱そうなゴーレムを召喚したのね」

アリス「そ、そんなことはありません!!きつとそのうち大きくなったりするんです!!」

クロエ「くつくつく、なら頑張ってね?無能さん?私、あなたとは一緒に居たくないから」

そうしてクロエは部屋から出ていった

アーク「なんか失礼なひとだな、またゴーレムって言われたし：：あと、無能ってなんだよ？」

アリス「・・・わたし、生まれたころから皇族らしく大量の魔力を有してたけど・・・攻撃魔法がまったくできなくて支援魔法しかできないのよ・・・」

アーク「え、別に魔法ができればよくね？」

アリス「無知なあなたに言うわ・・・この世界の常識として攻撃魔法が高いほど素晴らしいのよ」

アーク「・・・なるほど」

言ったらアレだけど・・・脳筋みたいなかんがえだな

アリス「・・・ねえ、あんたはバカにしないの？」

アーク「しねえよ・・・ただでさえ別世界から来たのに魔法なんて今日初めて見たから魔法ができる自体すごいことだよ」

アリス「・・・まだ嘘を貫くのね・・・でも今はありがたく思ってしまうわ」

・・・なんやそら

アリス「・・・もう遅いわね・・・寝ようかしら」

窓から見える景色はとつぷりと暗くなっていた

アーク「・・・なあ俺の部屋ってどうすればいいんだ？」

アリス「外に決まってるんじゃない？」

・・・外だって？

アーク「・・・部屋とかないの？」

アリス「・・・なんで元人間であるあなたのために部屋を用意しないといけないのよ？」

・・・契約解除とかできないかな？

って思いつつ今夜はどう過ごすかアークは考えていた

こんな体になっても睡眠欲などの生理的欲求はあるのでどこかで雨風をしのげる場所がほしい

アリス「・・・なら、この寮から離れているけど使わなくなった倉庫があるからそこにしたら？」

アーク「お前になんかあったらどうすんだよ・・・」

アリス「あら？あなたみたいなゴーレムより自分で守ったほうが安全だわ？」

・・・もうそれ使い魔を召喚した意味よ

アーク「そんなじゃ、俺行くから・・・お休みご主人？」

アリス「さっさと行きなさい・・・ようやく一人になれるから」

・・・困ったな

アリスの部屋から出た俺は寮から出てアリスから事前に教えてもらった道を進んでいたらその目標の倉庫が見えた・・・が・・・

アーク「・・・えらいボロボロだな」

長年放置されていただろう所々穴があったり腐っていたりしていた

アーク「ま、あのわがままエルフがくれた物件だ・・・大切に使用しないと」

倉庫の中を軽く掃除してどうにか自分が休憩できるスペースができた

寝転がれないがな!!

アーク「・・・でもこうひどい環境だったら寝れんな・・・スマホがあつたらなあ」

しばらく思考したがまだ開発ができない武器を見たり開発したものを点検したりした

しかし、いいこともあった

アーク「VR訓練？」

自分のステータスを見るために研究所で見たスキル画面にしているいろと探していたら“訓練”っていう項目があったので押したら

VR訓練を開始しますか？

って出たから押してみると体に浮遊感を感じて気づいたらライジ

ングであった序盤にあったステージだった

すごいなのロリ神・・・

ここまで再現できるって

この空間では現在開発できている武器や兵器の試し打ちや訓練ができた

しかもここでの体はモザイクがかかっているけど人間の形をしているので気が済むまで訓練をすることにした

四発目 初めての授業

カンカンカン・・・

「起きなさい・・・」

・・・うう、うるさいな

昨日、訓練が思いのほか楽しかったから夜遅くまでやっていてようやく寝たのが深夜の三時なんだぞ・・・

「起きなさいー!」

アーク「・・・あと三時間寝かして」むにやむにや・・・

「・・・すう~~~~~~~~」

起きなさああああああい!! (パコン!!)」

アーク「いったああああ!」

目を覚ますとそこにはどこからか持ってきたんであろう箒を片手にご機嫌斜めな自分の主人が立っていた

アーク「あ、おはようアリス・・・」

アリス「いつまで寝てるの寝坊助!!早くしないと授業が始まっちゃうじゃない!」

アーク「え、悪い・・・寝坊したわ・・・でもご飯は?」

アリス「私はどつかの寝坊助さんが寝ている間に済ませました!!あなたの分はありません!!」

ウソン・・・

アリス「いいから、行くよ!!」

〜とある教室〜

先生「・・・遅いですね、アリス様・・・もう間もなく授業が始ま

るんですが……」

クロエ「先生、もう初めてもいいのでは？」

「そうですねよ！皇族なのに遅れるのが悪いので!!」

「そうだ！そうだ！無能だからこういうのもわからないんだろう!!」

ガチャ、バタン!!

アリス「はあはあ……あ、アリス・フォン・アーハム……遅刻しました……申し訳ございません」

教室の扉を勢いよく開けたのはアリスと遅刻の原因になったアークが来た

先生「アリス様……今後から……気を付けるように……」

アリス「……はい……ほら！あんたも！」

アーク「(⊠ω⊠) z z z 眠し……」

アリス「……お！き！な！さ！い！」

アーク「おう!?!ちよい!?!やめて!?!カメラ部分をひねならいで!?!」

先生「何をしているんですか……早く、席に」

怒られしげと席に着くアリスと眠そうにふらふらとついていくその使い魔

先生「……さてと皆さん集まりましたね。まずは皆さん入学おめでとうございます、ようこそ魔法学園へ!……あなたたちは来るべき魔王軍の侵略から国民、世界を守るためにアーハム帝国の国民として頑張ってください!……それでは出席番号一番から自己紹介をお願いします」

「はい!……私の名前は……」

こうしてみんなで自己紹介と召喚した使い魔の名前などを言った

クロエ「では、次に私ね?ふふ♪クロエ・フォン・アーハムよ♪みんなは知っていると思うけどこの帝国の第一皇女よ。それでこつち

のワイバーンは「レオ」よ?・・・ほらレオ皆に挨拶を」

レオ「きゆる〜!」

へえ、あれがワイバーンか・・・

あとで調べてわかったがこの世界のワイバーンとドラゴンの違いはワイバーンが飛ぶのに特化していてドラゴンが種族によつて分かれるが各属性のブレスを吐けるらしい

「おおーさすがクロエ様!なんと素晴らしい使い魔を!」

「やはりクロエ様は天才だからこれほどの使い魔を召喚するのめたやすいでしょう!」

「どこかの無能とは違つてすごい!」

先生「・・・では最後にアリス様、お願いします」

アリス「はい・・・第二皇女アリス・フォン・アーハムです。クロエ姉さまの妹です。今後よろしくお願いします・・・ほら、あんたも!!」

アーク「え、また言うの?・・・はい、えくと・・・アリスの使い魔のアークです。・・・今はこんな体になっていますが元は別世界の人間です・・・よろしくお願いします」

シーン

・・・あれ?意外と無反応だな?

・・・ぶっ

ぶはははははは!!

静かだった教室が笑いに包まれた

「べ、別世界って何を言っているんだこの騎士は!」

「どこか壊れているんじゃないかこのゴーレムは!」

「しかも人間って!アリス様にお似合いですぞ!!」

アーク「・・・ひでえなこれ・・・あと、ゴーレムじゃない」

パンパン!!

先生「はいはい!!お静かに!・・・では皆さん自己紹介終わりましたね?・・・皆さん先日集まっていたいただいたグラランドにお集まりをください」

そう言われみんな席を立ちグラランドに向かった

ギユインギユインギユイン

先生「はい、皆さん集まりましたね?・・・では、皆さんあそこにある的に向かって好きな魔法を打ってください」

そこには俺たちから20mくらい離れたところに的があった

どうやらそこに向かって魔法を与えるらしい

「では私から!」天よ!その怒りを我が手に!「サンダーストライク」!!

最初に名乗りを上げたのは俺をゴーレム呼びしたエルフで魔法を唱えると手に電気が集まり投げると的に向かっていき爆発した

すげえな・・・アレが魔法か・・・どういう原理何だ?

先生「ふむ、上出来ですね!・・・ではクロエ様お願いします!」
クロエ「はい♪」豪華のよ!そして業火よ!我が敵をすべて焼き尽くせ!「インフェルノ」!」

ドゴオオオオオン!!

アリスの姉であるクロエが唱えると車のタイヤ一個サイズの火球ができ投げると的は焼失した

・・・これが皇族か。大体、威力はRPG7くらいで速度は時速20kmくらいか?

周りでは褒めるもの称えるものはいた

先生「こ、これが皇族の力・・・すごい・・・では、最後にアリス様お願いします」

アリス「・・・はい」

アリスが呼ばれた瞬間・・・

「おい、来たぞ無能だ」

「どんな芸を見せてくれるんだろうな」

「おい！泣き虫！失敗するんじゃないぞ！」

陰口をたたくもの、大人数をいいことに暴言を吐くものが現れた
先生「お静かに！・・・失礼しました、ではどうぞ」

アリス「・・・はい。」 氷天の槍よ！今こそこの地へ降り注げ！「ア
イスニードル」！”」

アリスが唱えると手の中が輝きだし呪文のとうりに降り注ぐ・・・

コツン

・・・こともなかった

出たのは一本しかも爪楊枝サイズの氷のかけらで高速に飛んでい
くこともなく刺さらずにあたって転がってしまった

・・・確かにこれでみんながアリスをバカにするのもわかるな
皇族にしてはおかしすぎるな

「「「「ぶはははははははははは!!」「」」」」

「ああ！やつぱりこうなるか！」

「演技は終わりましたか!」

「無理しなくていいんですよ！」

グラウンド中に笑いがでた、それも嘲笑するほうの

先生「静粛に!!・・・申し訳ございませんアリス様・・・私、別の
国から来たので・・・知りませんでした・・・」

アリス「いえ、いいんです・・・私が無能なのが悪いので・・・」
先生「・・・本当に申し訳ございません。・・・では、次に行きま
すよ！」

魔法演習が終わり次に訪れたのはちょっととした牧場のようなもの
だった

コーラス「ようこそ、使い魔用訓練所へ！担当官のコーラス・シリ

アスだ！早速だが皆が召喚した使い魔の力を軽くだが見せてくれ！！」
・・・おう、いきなりだな

どうやら、現状の使い魔の実力をみて主人に使い魔の改善点や注意点の言うためらしい

目標はここからすぐそこに鎧のついたマネキンみたいなのがあつてそれに破壊するまでの時間と破壊具合をみるそうだ

んで、皆それぞれの使い魔にその鎧に向けて破壊するよう命令を出すか・・・

ガコン！！

コーラス「そこまで！！ふうむ、やはり召喚したてだから命令もぎこちないし使い魔自体も幼体がほとんどだしな・・・」

どうやら召喚魔法で出てくる使い魔は大体が幼体でたまに成体が出るくらいの確率なのでみんなの従えている使い魔のほとんどが幼体だ

しかし、それが召喚魔法の当たり前でそこから成体に成長すると一緒に強くなるつということだ

しかし・・・

クロエ「行きなさい！レオ！」

レオ「きゆるー！」

クロエの使い魔であるワイバーンのレオは鎧に向かって突進し爪と尻尾で攻撃し止めと持ち前の翼を広げマネキンを掴み上げ、高く飛び急降下と同時に離して鎧をペしゅんこにした

コーラス「さすがクロエ様の使い魔！主人も素晴らしかったら使い魔も素晴らしい！・・・では最後にアリス様の使い魔・・・アーク！」

お？呼ばれたか？

「先生！やる必要がないとおもいまーす！」

「そうですよ！無能が召喚した使い魔なんて使えるわけありませんって！」

「それにゴーレムですよ！囿にしか使えませんって！」

・・・おう、外野うるさいぞ

あと、俺はゴーレムじゃない

コーラス「いやあ、それだったらみんな不公平だろ？・・・これからみんな仲良くなるから知っておかないとな!!」

ガハハハツ!! って笑っているけどあの顔・・・ただ単にアリスの召喚した使い魔のへっぴり顔を見たいっていう顔してんぞ・・・

アーク「・・・なあ、主人・・・なんでみんなゴーレムをバカにするようなことを言うんだ？」

アリス「・・・ゴーレムってね召喚しなくても普通に土魔法で作れるのよ・・・しかし、燃費が悪くてしかも大量の魔力を流し込まないと人間みたいに動かないのよ・・・精々、属性付きのゴーレムで当たり枠で普通のゴーレムだったらせめて盾か囷にしか使えないわ・・・」
アーク「え、この世界のゴーレム不遇やん・・・俺のイメージだったら割と脅威になるイメージがあるんだが・・・」

アリス「はあ・・・これでわかったでしょ・・・すみません、コーラスさん・・・使い魔の確認は辞退してよろしいでしょうか？」

コーラス「それは、困りますよお・・・ほら、せっかく皆が楽しみに見ているんですよ？」

・・・いや、それはただアリスのだからって意味でだろ

はあ、仕方ない・・・

アリス「し、しかし・・・「やります」・・・え、アーク？」

アーク「やりますよ・・・どうせ、やらないと帰れなさそうだし」

コーラス「おお！ やってくれるか！ 喋れるゴーレム君！ さき！ 見せてくれ！」

アーク「あいよ」

アリス「やめなさいアーク！・・・無理しなくていいのよ」

アーク「・・・おいおい、もうあきらめるのか？」

アリス「諦めるわよ・・・だってあなたゴーレムだし」

アーク「・・・アリス・・・俺がいた世界だけど、とある有名な（ある意味で）偉人が残した名言があるんだ・・・

「諦めたらそこで試合終了ですよ」

つてな!!・・・だからさ、皆に流されるんじゃないやなくてたまには諦めずに頑張ってみたら?」

アリス「・・・アーク」

アーク「あと、そんな主人に忠告だ・・・」

耳ふさいどきな・・・すげえ、音なるから」

アリス「ど、どういうことよ?・・・あ!ちよつと待ちなさい!!」

主人の言葉に耳を貸さずに前に出る

「おい!あのゴーレムが出てきたぞ!」

「なーんだ、もう土に帰ったつと思っただんになー」

うるさいなあ、周り・・・さてと、目標はつと・・・おい、まて・・・
なんかさつきまでの鎧より物騒で輝いてないか?

先生「コーラスさん!どういことですか!?!・・・なんでミスリル
金属でできた鎧なんですか!?!」

コーラス「いやあ・・・たまたま普通の鎧がなくてですなあ・・・
こうするしかなかったんですし・・・それに気になってるんじゃない
ですか?先生も?異世界から来たつていう情報に?」

先生「どこでそれを!?!」

・・・おうおう、この体になったからかわかんけど先生たちの小
さい声が鮮明に聞こえるわ

まあ、いいか・・・んな奴らの度肝を抜く奴を見せてやんよ!!

・・・私の使い魔であるゴーレム?のアークが主人の止めを聞かずに
スタート地点につき準備した

コーラス「それでは試験開始!!」
スタートの合図が鳴った・・・しかし、その瞬間・・・

キュルルルル・・・

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

突如、雷鳴に似た音が鳴り響いた

一応、アークに言われたとうりに耳はふさいで置いたけどそれでも
すごい音が鳴り目標では土が舞っていた

霧が晴れるとそこには・・・

無残にも穴だらけになった鎧が残っていた・・・

アーク「うくん？まあ、最初にしては上出来かな？・・・でも、やっ
ぱりすぐに貫通できるわけではなく何秒間かあて続けないといけな
いかあ・・・」

・・・と、左腕の丸太のような部分を回しながらアークは言った

「な、なんだったんだ今のは？」

「魔法か？」

「でも、魔力は感じなかったぞ！」

っと周りから疑問と驚愕の声がでて中には「手品だろう」というも
のもあらわれた

コーラス「・・・うそだろ・・・ドラゴンの幼体でも壊すのにな
り時間がかかるのにそれをたった5秒で・・・な、なあ！そのゴー
レム!!お前っていったい何者だ？」

アーク「なについて・・・ただの別世界の人間(ゲーム内)に作られた
二足歩行兵器だが？・・・あと、俺はゴーレムではない」

コーラス「二足歩行兵器・・・」

アーク「さてといいかも？・・・早く倉庫に戻って寝たいんだ・・・
先生「あ！で、では皆さん！今日はお疲れさまでした！寮へ戻って

いいですよ！」

あーようやく帰れる我が家（ボロ倉庫）に
そう思い主人と一緒に帰ろうとするが・・・

アーク「・・・なにしてんだよ」

アリス「な、なについて・・・あなたがあんな攻撃をするからこそ、腰を抜かしたのよ！」

アーク「・・・まったく、何してんだよ・・・ほら」

アリス「え？・・・きや!？」

腰を抜かして立てないそうなのでアリスを掴みお姫様抱っここの要領で抱える

アリス「え!?!ちよつと!?!なによ急に!?!」

アーク「ほいほい、舌噛むなよ」

アリス「え、それってどういう（ギューイイイイイイ!!）・・・きや!?!」

アリスを抱えた後（早く寝たいので）ダッシュモードで寮まで帰る
「おい！あのゴーレム速いぞ！」

「いいなあ・・・私の使い魔もアレくらい速かったらなあ」

アリス「すごい！すごい！アーク！あんた見た目の割にはすごいじゃない!!」

アーク「見た目の割には、は余計だ」

こうしてアリスが笑いながら寮に送ったあと倉庫に戻って寝た

アリス（私の使い魔って意外とすごいじゃない・・・私って意外と才能があるかも!!・・・今度、またあの移動頼もうかな・・・風気持ちよかったし）

五発目 やめてください、本当に!! (マジで)

・・・あれからアリスを送ったあと速攻で倉庫で寝た(例によって寝転がれずたったままで)

んで、早く寝すぎたのが仇となったのか起きたのが午前5時・・・
アーク「・・・やるのがねえ」

VR訓練も起きてから一時間やって終わったけどやるのが本当
にない

どうしようかな・・・新しい開発でもやろうかな?でも、ポイント
のため方がわからないし

ピロン♪

ん?なんか通知が来たぞ?

視界のはじめに注意書きみたいに出てきた・・・その内容は

ヒント:開発に使われるポイントは戦闘、訓練、所持金から回収されます。さらに開発のポイントを使って資金の代用にも使えます

・・・うん、もうちよつと早く言ってほしかったな

そこで改めて開発ポイントを確認すると・・・

アーク「えくと?あ、あの時よりポイントがたまっているな!!」

作者

・・・はい、ストーリー中に申し訳ございません

ようやくそれぞれの開発に必要なポイントの割合が決まったので
ここで必要な分のポイントを横に出しときます(アタッチメントのど
のパーツも消費する弾の補充も1ポイント使うことにします、開発と
量産する際はその消費するポイントを支払う必要があります)※変身

と修理するときには必要な分の半分でできる

(殺傷系)

アサルトライフル系	50
スナイパーライフル系	60
SMG系	20
ハンドガン系	5
ショットガン系	30
LMG系	70
ロケット系(ミサイル含む)	100
投擲物	3

(非殺傷系：睡眠、スタン)

アサルトライフル系	25
スナイパーライフル系	30
SMG系	10
ハンドガン系	5
ショットガン系	15
投擲物	3

(車両)

戦車	500
戦闘ヘリ	700
トラックなど	250
戦闘機	900
空母	8000
イージス艦	5000
護衛艦	3000
潜水艦	2000

(その他)

食料(一週間分)	1
水(出す量は自由)	1
生活必需品	1
迷彩服	1(バトルドレスは3)

追加装備（双眼鏡・ナイトビジョンなど） 2

（通常メタルギア）

D—w a k e r 2000
ピューパ 2000
クリサリス 3000
コクーン 3000
REY（ライジング使用） 7000
エクセルセス 9000
月光（仔月光3体セット） 700
仔月光（6体セット） 90
フェンリル（戦闘型） 600
ブレードウルフ（索敵型） 600
マステイフ 500
ラプター 500
ヴオドムジェルカ 500
グラート 800
スライダー 500
ウォーカーギア（武装はガトリング固定、サブ無し） 100
バトルギア（武装は主砲レールガン、12.7mm機関銃、認識妨害チャフ） 400
メタルギアmk. II 50

（核搭載メタルギア）

シャゴホット 5000
ピースウォーカー 7000
Z E K E 7000
REX（核搭載レールガン付き） 10000
R A X A 10000
アーセナルギア（量産型メタルギアRAYを4機） 20000
サヘラントロプス 12000

（人型）・・・敵ボスに関してはボス戦の時の装備

雑魚サイボーグ兵（味方として召喚可能） 300

重装備兵（味方として召喚可能） 700
 スカルズ（覆いつくすもの・ステルス化付き） 1000
 サンダウナー 2500
 ミストラル 2500
 モンストーン 2500
 カムシン 2500
 サムエル・ホドリケス 10000
 スティーヴン・アームストロング 12000
 雷電 12000
 スネーク（BIGBOSS） 15000
 本来の自分の体 解放条件：????
 ……つていう感じですよ
 では、続きをどうぞ

……で、今あるポイントは50
 ここに来る前は10ちよつとしかなかったからこれはうれしいな
 でも……作れるとしても殺傷系アサルトライフルぐらいだし
 なあ……それに今はこの体だから撃てないし……え？アリスに撃つ
 てもらえばって？やめろやめろあのわがままエルフに渡したら何や
 らかすかわカラん
 ……しかしなあ、一番安い人型で雑魚サイボーグでも1000やも
 ん

アーセナルギアとかなに？取らせる気ないんですか？嫌でもヨ？
 量産型RAY（本来のRAYより弱い）が四体か……わからんでも
 ないけどさあ……
 そんなD-wakerが悩んでいるというシチュールすぎることを
 していると……

ドンドンドン!!

アリス「アーク！起きてるでしょうね!!」

アーク「ほいほい、起きてるぜ」

気づけば朝の7時になっており倉庫の外から元気のいい主人の声が聞こえた

アリス「なら食堂に行くわよ!・・・あなた、昨日にも食べてないじゃない?さすがに使い魔の調子が悪かったら主人の責任だからね!」

・・・そういえば昨日ナニモ喰って無いな

最近立ったまま寝ているのでそろそろ人型になって寝転がりた
いっと思いつながら倉庫の扉を開け、主人についていった

アーク「なあ、アリス・・・あの倉庫って改装しちやだめか?」

アリス「え、あのボロ倉庫?別にいいんじゃない?もとはあの倉庫
資材置き場だったし」

アリスから改装の了承を得て食堂について

アリスは貴族らしくフレンチトーストとか頼んだけど・・・

アーク「・・・主人、いいか?」

アリス「なによ?あんたも早く食べて教室行くよ」

アーク「・・・なんで水なんや」

アリス「なについてあなたゴーレムでゴーレムって基本水から補給し
てるし・・・なによりあなた、口がないじゃない」

・・・そうやん、俺D-w a k e rだから口無いやん

あの、クズ博士・・・口くらいつけろよ・・・はあ、はよ人間にな
りたいわ

アーク「あれ?でも、アリスって口の無いのに声が出ているに
関しては何ともないの?」

アリス「そんなのこの世界にはどうやって声が出ているのかわか
らない生物はたくさんいるわよ・・・幻獣だってそうだし」

幻獣とは千年も生きている長寿の生物で頭もよく喋れるらしい

アーク「・・・そうか・・・暇だからさ、この学園の探索行って
きいていいか?」

アリス「いいけど、この主人を残して学園から逃げ出そうって思わ
ないでよ?」

アーク「しねえわ・・・んじや、行つてきまーす」
アリス「朝食が終わったくらいに来なさいよ!!」

こうしてアリスとは一旦別れて学園内を探索してみたけど・・・
アーク「いや、広いな・・・」
はい、ぶつちやけ迷子です・・・／＼。○／＼。○／＼。ココハドコ？　／＼
。／アタシハダアレ？

途中で何人かこの生徒にあつたけど怪訝な目で見た後逃げるよ
うに去っていった

・・・泣いていいですか？
ただ、アリスの所に戻りたいんだが・・・
迷子になりつつ彷徨っていると・・・

アーク「・・・図書館？」
どこかの部屋にいる人に聞こうと思ひ適当に部屋を選んだがその
部屋には「図書館」と書いていた

中に誰かがいるのを願ひながら静かに開けた
アーク「し、失礼しまーす」

シーン
・・・うん、やっぱりこんな時間帯にいるわけないよな
中は誰もいなかった

アーク「ま、いいか。そのほうが都合がいいし」
実はここを選んだのがもう一つあつて・・・

アーク「・・・さすがに毎度あのエルフ主人に怒られて説明される
のもストレスが溜まって胃に穴が開きそうだからちよつとくらいこ
の世界の常識を知つておかないとな・・・」

あと、皆からいまだにゴーレムつて言われているからのとそのゴー
レムが本を読んでいるところを見られたらめんどくさいことになる
アーク「まずはと・・・お、あつた!!」

本の入っている本棚をザーツとみて探していた本を見つけたそれ
は

「世界魔物図鑑」

・・・とりあえずこの世界には魔物っていうヤバイ奴らがいるらしいから予習で知っておいて損はないだろ

ピロン♪

お、説明か？

メタルギアの体になっているので一度知った情報は更新されない限り脳内辞書に永久保存されます

・・・すげえなメタルギア

しかもコレよくよく考えたら、この体はいくら動いても疲れないし記憶保存もいいな

・・・すごいなヒューイ

よく、D—h o r s eで頭の上から”ヤレ”をやったり、わざとスタンさせたりしたけど・・・なんか、罪悪感がわいてきたわ・・・(許すとは言っていない)

図鑑を一通り読んでそろそろどこかにいる生徒か教師にアリスのいる教室に戻らないといけないが

アーク「えくと・・・あ、あった!!」

足元の棚にあったがそこにあったのは

「世界情勢」

どうやら俺の開発ポイントは資金を使って貯めることができるらしいのでこの世界の情勢のついでにお金の価値を知っておきたい

が・・・

アーク「……………届かん」

その本があったのは足元でこの体を曲げて取らないといけない低さなのだが……………

アーク「バリアフリー!!もう少しバリアフリー考えてほしかった!!」

……………いかな、マジでギリギリ届かん

どうしようかな?ここはもうあきらめてアリスの所に戻ったほうが良いのかな?

つとどうしようか考えていたら……………

??「……………この本?」

アーク「え?あ、はい」

黒髪の女性がかがんで取りたかった本を取ってくれた

??「はい、これ……………破かないようにね」

アーク「あ、ありがとうございます」

??「……………どういたしまして……………でも、世の中変わったね……………もう、ゴーレムも本を読む時代になったのかしら……………」

アーク「あ、えっと……………アリスの使い魔をしているアークというものです……………あと、ゴーレムではないです」

??「……………あなたが噂のアリス様の使い魔ね……………リン・ウイテカー……………二年生よ」

へーこの女性リンって呼ぶんだ

リンさんは目元が隠れるくらい黒い長い髪で大きめの魔女帽子を被った女性だ(あと、胸デカイ)

アーク「ウイテカーさんはここで何を?」

リン「リンでいいわ……………私この図書館の担当生であなたが静かに入ってきたところから見てたわ」

あれ?思いのほかバレてた?

リン「……………それにしてもあなたいいかしら?」

アーク「な、なんだよリン?」

リンが俺に近づいてきた

リン「・・・初対面でもう呼び捨てって・・・ねえ・・・あなたの体・・・」

分解していいかしら？」

・・・カメラに当たるくらい近づいてきて何をされるかって思ったけど何言つてんだこの先輩？

アーク「え、あつて早々に死んでくださいってことですか？」

リン「・・・普通、ゴーレムはコアがあるからそれを出して他の体に移せば死なないから大丈夫でしょ？」

アーク「いや、この体は俺だけにしか使えないから分解＝死です」

リン「・・・そう残念ね・・・いい実験体を見つけたと思ったのに・・・触るくらいならいい？」

・・・かわいらしくしょんぼりしているけど内容が物騒だな

アーク「・・・触るくらいなら」

リン「ありがとう♡」

リンがペタペタとこの体を触っている間に見たかった情勢の本を右腕で開く・・・

数分後・・・

・・・うん、大体わかった

この世界の情勢とついでにお金のことも知れた

この世界はどの国も「ゴールド」という単位でコインの形で統一されている

高い順から白金(10000ゴールド)、金(1000ゴールド)、銀(100ゴールド)、銅(10ゴールド)、鉄(1ゴールド)っていう感じだ

・・・で俺の開発ポイントは1ポイント⇨1000ゴールド必要で現在は50ポイント⇨5000ゴールド持っている

アーク「金貨5枚かぁ・・・ん?」

カチャカチャと左から鳴るな?

その方向に向くと

リン(〜♪)

リンが鼻歌をしながら左腕のガトリングを取り外そうとしていた
アーク「うおおおおい!?何やってるんですかあ!」

リン「なにつてあなたの左腕にあるこの丸太みたいなのを外そうと
しているだけよ?」

アーク「いや、だめですからね!?触るって表面だけですよ!」

リン「え、あと少しでとれたのに・・・火魔法で焼き切るべきだったかな?・・・でも、それだと傷つけてしまうかもしれないし・・・」

アーク「・・・もう、俺の心が傷つきましたが」

リン「大丈夫でしょあなたゴーレムだし」

アーク「都合のいい時だけゴーレム扱いされても困るんですが・・・
リン「でも、不思議ね・・・普通、土が一番ゴーレムにいいの
これは金属・・・しかも普通の鉄じゃない・・・これは合金かしら?・・・
ねえ、先つちよだけでいいからさ・・・出して?」

アーク「いや、言い方あああ!!・・・ダメなものはダメです」

リン「・・・ケチ」

アーク「・・・いや、上目遣いしてもダメたい・・・そろそろ、ア
リスの所に戻るよ・・・教室つてどっち?」

リン「えつと、ここを出て左に行つて・・・。。。。。。つていう
感じよ」

アーク「おう、あざっす」

リン「・・・ねえ、また来る?・・・どうせ見た感じ空き時間暇で
しょ」

アーク「・・・え、また?」

リン「あ、分解はしないわ・・・ただ、あなた面白そうな話を持つ
てそうだから」

・・・まあ、暇って言ったたら暇だけど

アーク「・・・話相手なら」

リン「そう、待ってるわ♪」

バタン

図書室から出たけど・・・めんどくさい人に目をつけられたな・・・

ちなみに帰ってくるのが遅くて主人からこっぴどく怒られました

た・・・

六発目 カロリーメイトⅡ神？

アリスに怒られた後、授業が始まった

アリス「まったく・・・どこを歩いたら迷子になるのよ」

アーク「・・・広すぎだろこの学園・・・あ、あと図書室に行つてリン・ウイテカーっていう二年生にここを教えてもらった」

アリス「え、あの「図書館の幽霊」に教えてもらったの？」

図書館の幽霊？

アリス「えつとね・・・ウイテカー家つて伯爵家で当主の母親がすごく貴族の中では俊才つて言われるくらい才能があっただけど・・・その娘のリンつて子を残して病気で死んでしまったそうよ・・・幽霊つて呼ばれる理由は彼女、ほとんど図書館に引きこもつてあまり生徒に会わないようにしてるらしいわ・・・いるのはわかってるけど先生ですら顔を見たことないらしいわ」

あ、そういえば

髪を目に隠れるくらいまで伸ばしていたから顔まで見れなかったな・・・

アーク「なんでみんなに会おうとしないんだ？」

アリス「さあ？・・・でも、噂では父親に関係あるらしいわ」

・・・父親？

しかし、模索していたら

??「アリス様!!授業中に私語は慎んでください!!」

アリス「あ!す、すみません!!」

??「皇族であるあなたがみんなの手本になってませんぞ!!」

そう枝みたいに細い体で怒っているのは外国歴史担当教師「ラムス・バロー」先生・・・

ラムス「それにそのゴーレムも皇族のアリス様に話しかけない!!ゴーレムらしく静かにいなさい!!」

・・・えええ?理不尽くね?

ラムス「それとも何ですか!?あなたが異世界から来たっていう嘘をクラス全員に吹き込むためですか!」

「そうだそうだ!!どうせ昨日の訓練所で見せたのもあれは手品だろ!!」

「ゴーレムだからそんなこともわからないのか!!」

「いや、無能が召喚したゴーレムだから当たり前だろう!!」

・・・毎度のことうるさいな

アリス「ちよつと!!私の使い魔をバカにしないでくれる!？」

「なんですか、アリス様!?このゴーレムを信じるんですか!？」

アリス「・・・し、信じるわ!!私の使い魔だもん!!」

・・・アリス・・・お前つて子は・・・

アリス「だから、あんたも少しは反論を・・・って!なに主人の許可なく頭を撫でてるの!？」

アーク「・・・いやあ・・・うちの主人が召喚したときから少し成長したなあ・・・って」ナデナデ

アリス「・・・ああ!もう!倉庫の改装・・・なにか手伝うから今すぐにこれを辞めなさい!!／／／／／」

・・・あれ?うちの主人・・・人間嫌い以外を除けばいい子だな・・・アリス「いい!勘違いしないでよ!!ただ皇族でああなたの主人だからこうしてるだけだから!!」

「それはアリス様の實力を示したいからでしょう!!・・・それにそのゴーレム!!お前が異世界から来たなら何か証拠を出せ!!」

アリスの頭を撫でるのをやめ生徒の一人から言われた

・・・証拠お?

えく・・・何かあつたけなあ?

銃とか出して

コレがうちの世界の兵器だ!!って言いたいけどポイントが掛かるんだよなあ・・・

どうしようかと考えていたら・・・

あ、これなら一石二鳥じゃね?

一ついいことを思いついたアークは開発画面を出してある物を出す

アーク「・・・いいぜ、証拠出してやんよ・・・アリス、ちよつと

手を出していいか？」

アリス「な、なによ？」

アーク「えくと・・・量産・・・食料・・・カロリーメイトチョコ味・・・つと」

するとアリスの地に黄色みを帯びたオレンジの箱に茶色の文字で商品名が掛かれたものを出した

アリス「・・・なにこれ？」

アーク「ああ、これ？・・・これは俺の世界にある非常食みたいなもんだ・・・食べてみ？」

アリス「え、非常食？・・・普通、非常食は干し肉でしょ？」

「アリス様!?!そんなへんな色をした箱を食べるんですか!?!」

アーク「いや、この箔ではなく・・・そうそうそこを破いて開いて・・・その包みをちぎって・・・」

アリスがマジで外側の箱を食べようとしたので開け方を教えて中にある黒い塊を出す

アリス「こ、これが？・・・おいしくなかったらぶっ飛ばすからね？・・・ふむつ（もぐもぐ）」

アリスが黒い塊に目掛けてかぶりつく

「きやああああ!?!アリス様!?!」

「あいつ、アリス様に炭みたいなのを食べさせたぞ!?!」

他の生徒が驚愕して口から出すようアリスに迫るが・・・

アリス「・・・しい」

「え?アリス様・・・今なんて?」

アリス「・・・これすごくおいしいじゃない!!」

アリスはエルフ特徴の長い耳をパタパタっていう擬音が聞こえそうなくらい動かしている

アリス「え!?!これが非常食なの!?!・・・ちよつと!!あなたの世界に

いる人間がすぐく羨ましいんだけど!!」

くつくつく・・・やっぱりか

実は図書館で見た世界情勢の本で特産品を見てたらどの国も肉や魚と果物が主になっていて・・・もしかして、甘いものってこの世界にはあまりないのでは？

って思ったからカロリーメイトをあげたけど・・・正解っぽいな!!
さて・・・あと、もうひと段落・・・

アーク「へへ♪おいしいだろ?・・・あれえ?皆さんどうしたんですか?なに、自分もぜひ食べたいっていう顔をしていますか?」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

アリスのおいしく食べる様子を見ていた生徒はよだれを垂らして見ていた

アーク「いやあ、実はね?この非常食・・・カロリーメイトって言うんだけど・・・銀貨2枚で交換しようかなあ?って思ってた言うけどいる?」

俺は彼らに挑発するように誘う

・・・ちなみにカロリーメイトは食料枠に入るのでポイントが一個一週間分つまり銀貨一枚あれば買えるけど・・・人間に戻りたいから仕方ないよね!!悪徳商法?知るかあ!!

「な、なにをいう!!そんな悪魔の誘いなんかならn」・・・すみません、それ一つ・・・ラムス先生い!!」

・・・おう、トップバターはまさかの先生でした

ラムス「それにアリス様が無理しているかもしれないからね・・・ぱくっ」

「そ、そうですね!!そんな黒い固形物がおいしいわk」すぐおいしいぞ!!これはチョコか!!」・・・先生え!!」

・・・定番なフリをありがとうラムス先生

先生がおいしく食べるのを見て限界に来たのか生徒が授業にも関わらず席を立ち俺に迫って交渉してきた

・・・ふふ、計画どうり(や っ た ぜ ☆)

全授業終了後・・・

いやあ！売れた！売れた！

右手に大きな袋を抱えているのかには大量の銀貨が入っていた

・・・まさか、全財産出すから全部くれえ！！っていうやつがいるとは思わなかったけど中毒者が出ないことを祈るか

・・・ちなみに後日から学校の交渉ではお金よりカロリーメイトが価値ある物として交渉材に使われるようになった

そのチョコ味のカロリーメイトを出すゴーレムがいると噂されいつの間にか俺のあだ名が「チョコレートゴーレム」になっていた

んで、俺の主人はと・・・

アリス「〜♪〜♪〜♪」

すごく上機嫌に隣を歩いていた

アリス「アーク!! あんたの世界ってあんなおいしいものが沢山あるの!?!」

アーク「・・・え？ああ、一応アレ保存食だからちゃんとしたチョコはアレよりかはおいしいと思うよ?」

アリス「あれより!?!・・・ってことはスイーツもあるの!!」

アーク「お、おうあるぞ・・・って近い、近い」

目を輝かせながら迫ってくるウチの主人・・・それでいいのか第二皇女・・・

アーク「・・・作れるけど・・・アリス・・・料理できるの?・・・俺は一応できるけど」

アリス「・・・」

薬の調合って思えばできると思うわ!!」

うん、できないと・・・

アーク「なら、この体から人間に近い奴に戻らないとな・・・」

アリス「・・・そうね・・・はやく(異世界スイーツを食べたいか

ら)戻ってほしいわ」

アーク「だったら、もつとこいつ(資金)を貯めないとな」

アリス「あ、そうだったわ・・・使い魔が貯金するのは普通に駄目だから回収させてもらうわ!」

・・・え、ブラックやね?使い魔業って

アーク「・・・あ、その前に・・・実は残ったカロリー

メイトが大量にあるからアリスの好きな時に無料で渡すってのは?」

アリス「・・・特別に許すわ」

・・・いや、軽いなこの主人

アリス「ところでなんで貯めるの?」

アーク「あく・・・実はな・・・」

自分の体は開発ポイントを使って強化できそのポイントには金がかかるのを伝えた

アーク「・・・ってかアリス皇族だろ?国の金庫から少しくらいもらえないのか?」

アリス「・・・それは無理ね・・・金庫を開けるのはお父様の許可がないといけないし・・・お父様は私のお願ひなんか滅多に聞かないしお父様は今クロエ姉さまの応援に夢中だわ・・・」

アリスのお父さんってことは・・・この国の皇帝か・・・改めてみるとすごい一族に召喚された俺・・・

そんな感じの話をして歩いているとアリスの寮にたどり着いた

アリス「あ、もう着いたのね・・・じゃ、私は戻るからまた明日ね?」

アーク「・・・あ、その前に・・・」

スキル画面からアリスに渡しておきたいものを渡す

アリス「なに?・・・あ、婚約指輪はまだ受け取れないわ?」

アーク「ちやうわい・・・えつと・・・これ」

自分の手に召喚したのは・・・

アリス「・・・また、変なのがでたね・・・でも、これ明らかに食べ物ではないよね?」

アリスに渡したものはメタルギア5の超高性能通信機だ

アーク「とりあえず俺から出る物は食べ物って言う認識をやめろ・・・これは俺の世界での遠くにいる相手と会話ができるものだ」
アリス「遠くの相手につてこれ通魔機じゃない!!一つ揃えるだけでもとても貴重なものだから使えるのは皇帝などの上の人物だけで軍でも使われてないものよ!?!」

アーク「え、そんなに貴重なものなの?・・・ま、まあこれは俺の世界(ゲーム内)で使われているものだ」

ちなみに通魔機とは魔力を通して使う異世界版通信機らしい

アリス「・・・ますます、あなたの世界つてすごいわね・・・でも、なんでこれを私に?」

アーク「これがあるなら万が一アリスに何かあっても俺が駆け付けれるだろ?」

アリス「ふ、ふくん・・・ま、感謝するわ・・・ありがとう」

アーク(ジーン)

アリス「なによ!!だから、頭を撫でるなあ!!」

また、自分の主人の成長を見て感動した後アリスとは別れて倉庫に帰っていった

アーク「さーってと・・・どれくらい稼いだかな?」

現在のポイントはこんな感じだ

消費ポイント:(アリスの通信機、カロリーメイト大量) 2十いくらか

獲得資金:銀貨290枚 290ポイント

現在所持ポイント:290||290000ゴールド

うおおおおおおお!!あと、あと少して雑魚サイボーグを手に入れたのにい!?

・・・しかし、あんなに銀貨があったのにたったこれだけか・・・ここはアタッチメントに回そうかな?

あ、あと前にガトリング使ったから弾も補給しないとな
開発・量産したもの

ガトリング 弾補給 1

D | w a k e r 用サブ武器 S・PISTOL(非殺傷ハンドガン

サブレッツサー付き) 5+1

残り274ポイント

・・・こんな感じかな？

サブは今気づいたことで急いで作った

完了すると肩らへんに新しい重みを感じた、ピストルを出すイメージをするとう肩からアームが伸びて先つちよに開発したピストルがついていた(肩甲骨を動かす感じ)

・・・ちなみにD-wakerっていったらメインの兵装の交換だ
が調べるとそれぞれのコストは

ガトリング 70

ロケット 100

火炎放射・電気砲(スタン) 120

特殊枠

F・BALLISTA 80

・・・って感じだ(ちなみにメタルギアMk. IIを開発して変身しようとしたが主人、アリスの許可なくはできないと言われショックを受けた)

・・・どうしようかな

ま、いいか(思考放棄)

明日、アリスにあつて相談しよ

そして誰もいない倉庫でお休みとつぶやいて眠った

七発目 初めての訓練

朝、倉庫内にて

アーク「……さてと、そろそろアリスが来るかな？」

この世界に来て大体3日が過ぎて自分の主人が来る時間帯がわかってきたのでその時間に合わせて起きれる

コンコン

アーク「ほーい、起きてるぞ」

アリス「あら？……起きてるわ……まあ、平民だし当たり前かしら？」

アーク「平民ではなくても早め早起きは大切たい……んじゃ、行くか？」

アリス「ええそうね？行くわよ」

ギユイン！ギユイン！ギユイン！

こうして俺はアリスの後ろについて食堂に向かい、アリスが食事をしながら図書館では時間がなかったのでいろんなことを教えてもらい……この世界に来ていろんなことも知れた

まず、俺の生理的欲求だが……なぜか、空腹を感じない

これって体が機械になって胃とか無くなったからかな？

うれしいけど……いらぬ機能だな……これ……のどの渴きもないけど味覚がないのはなあ……ずっとこのままだったら忘れそうだな

次にこの世界の土地についてだが……

アリス「私たちがいるアーハム帝国とその周辺国を表すところな感じかしら？」

アリスが朝食で使った皿などを使って表してくれた

周辺には小さな国が細々とあるけどやっぱりアリスが言っていた栄光（笑）なアーハム帝国のは周りより広く世界的に……前世で言う中国くらいの大きさかな？

んでエルフが嫌っているバサビイ共和国は隣にあつて大きさは日本と韓国を足して2で割ったくらいの大きさだ

ミール聖教国はここから4か国くらい離れているけど・・・欧州全部くらいの大きさかな？

・・・そして問題の魔王領は

アーク「いや、アリスさん・・・さすがに広すぎませんか？」

・・・えつとね・・・すごくわかりやすく説明すると・・・広さはねえ・・・ロシアと北アメリカ大陸とアフリカ大陸を合わせたぐらいの大きさだ

広くね？（小並感）

アリス「・・・そうでもないわよ？いい？魔族って言うのはオークやゴブリン、さらには魔人系を全部含めて魔族だからこれで狭いほうよ？それに魔王領ってけっこう不毛の台地であるらしいからなのか？けっこう魔族同士で争うことが絶えないって」

アーク「・・・一致団結とかしないのか？」

アリス「・・・魔族ってね・・・超がつくほどの自己中が多くてね？魔人系以外の奴なんかプライドのクソもないわ」

・・・エルフもエルフでやばい気がするが

・・・と会話をしているうちに食事が終わり教室に向かった

教室に着いてしばらくすると担任の先生が入ってきた

先生「はい、みなさん・・・おはようございます!!」

「「「おはようございませー」「」」」

先生「はい！皆さん元気ですね!!・・・本日は午前は召喚した使い魔との関係を深める、午後は魔法の授業です」

こうして生徒の全員は召喚が行われたグラランドに向かった

そこでは生徒それぞれの使い魔と主人が使い魔と遊んだりしていたが・・・

アーク「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アリス「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺とアリスは向かい合っていた

先生「ん？アリス様？なぜ他の皆みたいに遊んだりしないんですか？」

アリス「……………先生……………」

知性あるゴーレムって何をしてあげればいいんですか？」

「……現在、俺とアリスが悩んでいることは「俺とアリス（私とこいつ）となにすればいいのか？」ってことなんだけど……なにすんの？いや、本当にすんの？（大切なことだから二回言いました）」

前世では18で相手はこの国の第二皇女で今17だよ？そんな飼い犬と主人がキヤツキヤすんのはちがうんですよ？」

先生「あ……えつと……. な、何かしてください!!」

アーク「ウソン」

そうして先生は他の生徒の様子を見るために見回りを再開した

アリス「……. 本当に何すればいいのよ？あ、あとアーク……. 昨日のヤツ」

アーク「え？あー、はいはい……. 量産……. カロリーメイト……. チョコ」

アリス「うん！ありがと♪（ハムハム）……. そういえばあなたの世界について教えてよ？」

アーク「は？俺の世界？」

アリス「そうよ、朝食の時教えてあげたんだから教えなさいよ」
俺の世界？

「……. 別に教えてもいいけどさあ……. あの召喚したとき嘘だとかなんだとか言ってたアリスが信じるかね？」

アリス「安心しなさい!!このチョコの件で信じ始めたんだから!!」
いや、カロリーメイトオオオ…….

アリスがカロリーメイトを食べながら言ってるけどこの時だけ見た人がこの主人を皇族だっしてしんじるか？

アーク「……. それじゃ、言うぞ？まず俺の世界には魔法

も魔族もない」

アリス「ええええ!? 魔族がないの!?!」

アーク「んで種類がいるけど人間しかない」

アリス「人間しかないって・・・政治とかどうしてるのよ?」

アーク「・・・国によつて違うけど大体が市民が自分で政治を考えてしている」

アリス「・・・ふくん、ま! 私には政治なんて興味ないわ!!・・・ね! ね! スイーツとかないの!?!」

アーク「・・・いいの第二皇女・・・帝王学とか学んどけよ」

アリス「帝王学なんていつかやればいいわ!! (ドヤア)」

・・・ドヤ顔されてもなあ

アーク「えつと・・・スイーツはな・・・タピオカとか抹茶とかかな?」

アリス「なにそれ!! ちよつと! おいしそうな名前じゃない!!・・・まず抹茶ってなに!?!」

アリスが新しいおもちゃをもらえたと言わんぐらいに飛び跳ねて聞いてくる・・・

あああ・・・アリスの大きい双丘がゆれ・・・って違う違う・・・

アーク「えつと・・・抹茶って言うのは・・・とあるお茶を粉状にして砂糖とか入れて・・・飲んでり食べたりする・・・かな?」

アリス「・・・アーク・・・あなた、説明下手ね・・・でも、そつちの世界の人間が食べるくらいだからおいしんだろうなあ・・・次にたびおかつて?」

アーク「えつと・・・ザックリいうと・・・飲み物にカエルのたまご・・・じゃなくて実際に見たほうがいいな・・・ついでにアリス・・・昨日渡した通信機・・・貸して・・・ついでに使い方教えるから」

アリスから通信機を受け取り使い方のレクチャーもする(事前に使い方をスキル画面で見た)

アーク「・・・ここがこうで」

アリス「・・・あなたの世界・・・どんだけすごいんだよ」
アーク「これですごいっていつてたら今後はもつとすごい驚く

ぞ・・・」

アリス「・・・具体的には」

アーク「音より早く飛べる・・・ワイバーン擬き?と海に浮かぶ巨大な鋼鉄の船」

アリス「」

アーク「見せてやりたいけど・・・ここでアリスに一つ説明を・・・俺の開発だけはアリスしか操作できないから間違えて操作すんなよ?・・・フリじゃないからな?」

アリス「安心しなさい!!このアリス・フォン・アーハムはそんなちっぽけなことで失敗しないわ!!・・・でも、これのいじって間違えてやってしまったら謝るわ!!」

・・・だからその胸を張りながらドヤるのやめろ・・・周りの見てるぞ・・・主に男子が

アーク「・・・あと、アリス・・・一つお願いがあるんだが・・・倉庫の改修をお願いできるか?・・・俺の今の体だったら力仕事はできるけど細かいことができないんだ・・・」

アリス「えく・・・そんなのそこら辺の森から取ってこればいいじゃない」

アーク「・・・カロリーメイト・・・イチゴ味で」

アリス「特別に許可するわ(即答)」

ちよろいなこの主人

こうして使い魔とのふれあい時間が終わりアリスは次は魔法の座学で使い魔は自由にしていいとのことなので先日行ったとある場所に向かった・・・んでけど・・・

クロエ「・・・」

いや、クロエさん?にめっちゃガン見されているんだけど・・・

怖くなってきたので速足で立ち去った

く図書室く

カチャ

アーク「失礼しまーす・・・リン!いるか?」

シーン・・・

アーク「とりあえずコレ・・・ほどこいでください」

リン「はいはい」

リンに足に絡まった紐をほどもらった

リン「・・・見た目の割にはバランスって悪いのね」

アーク「うるせえやい・・・とりあえず、話はしていいけど・・・本も読んでいいか？」

リン「・・・ん、わかった」

こうして今回来た目的の一つを実行することにした

アーク「えつと・・・お！あつた！あつた！」

探していたのは・・・

「世界の言語と生活様式」

・・・これを探していた理由はこの世界にはいろんな種族がいるらしくそれぞれマナーが違うらしいので知っておきたかったのだ

神様からもらった特典に自動翻訳があるのですらすら読める・・・しかし、載ってないか

何を探しているのかというと・・・ここに来る前にいた研究所だ

前の世界情勢の本で見た感じどの国もあんな未来じみた研究所を作る技術なんてなかった

そこで俺は「俺以外にも以前転生者がいたのでは？」っていう仮説を立てた

これは俺が異世界ラノベが好きだから・・・大体の転生者ってその世界に何らかの影響を与えらるって現代じみた言葉があるかなって思ったけど・・・

アーク「・・・ないかあ」

リン「なにを探してるの？」

アーク「え？自分のいた世界についてなにかないかなって」

リン「・・・どんなせかいだったの」

アーク「・・・ここよりは平和な世界だったよ？」

リン「・・・ねえ・・・差別とかなかったの？」

前見た静かそうな表情がこの時だけなにか心配そうに見ていた

アーク「へ？・・・いや、身分とかはあつたけど・・・どちらも人

間同士でだったよ」

リン「……そう」

アーク「なあ……お前の親について何だが……」

リン「聞かないで!!」

静寂な図書室で大きな悲鳴が聞こえたようだった

リン「……ごめん……それだけは聞かないで」

アーク「お、おう……それじゃ、俺行くからな」

そう言い扉を開けて出ていった

アーク（……あの感じ……なにか訳ありか）

本当はもつと聞きたかったがこれ以上聞くと危険な気がしたので
さっさとアリスの元に帰ることにした

八発目 林間訓練 前編

・・・ここはとある森林地帯

「ハア！ハア！ハア！に、逃げないと!!」

一人の水色の髪をした女性が森林を駆けていた

その女性の現在の恰好は所々服が破けていて足には靴は無く裸足で地面を走っていた

「・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・こ、ここに隠れば巻けるかな」

その女性は近くに木の洞を見つけそこに隠れることにした

ドシン!!

「ヒッ!?!」

その女性を追いかけてきた異形の何かが追ってきた

「お、お願い見つけてないで・・・私には叶えないといけないことがあるから!」

すると・・・

ドシンドシンドシン

・・・女性の願いが通じたのかその追跡者の足音が遠くなっていった

「よ、よかった」

ヘタリと座り込み移動を再開しよう・・・としたが・・・

ガシツ!!

「!?、きやあ!?!」

突如、肩を掴まれてしまい木に押し付けられた

「な、なんで!?!」

そいつはあの追ってきたもので姿は醜いほど太っており鼻息が荒く肌の色が茶色であった

ミ ツ ケ タ

「いやあ……やめて……いやあああああ!!」
静かな森で女性の甲高い声とブヒブヒという声だけが響いた

アーク「林間訓練？」

アリス「そうよ」

その日の夜

アリスが魔法学の授業が終わり合流した後明日について言われた話によると明日は一泊二日で実戦というものを経験するためらしい……大丈夫なのか？まだ、三日ぐらいしかこの学園に来てないのにもう実戦なのか？

アリス「別に魔族を滅ぼしに行こうってわけではないわ……行くって言うてもこの国からそう遠くない場所の森でそこで覚えた魔法の訓練と使い魔とのコミュニケーションをとるくらいよ」

……なら、いいか……いいのか？

あ、それより

アーク「それよりアリス……俺の家兼倉庫はどうなるん？」

アリス「……安心しなさい。約束を破らないのがアーハム皇族のモットーよ！」

どうやら俺らが林間訓練に行っている間にアリスが雇った大工が改装するらしい

アーク「……よく雇う金が集まったな」

アリス「……実はお父様に打診したら特別に許可されたわ」

……よく、あのクロエにしか興味がない親が出したな

アリス「……とりあえず明日の朝に出発だから寝坊しなさんなよ？」

アーク「あいよ」

……さて愛しい我が家に着いたけど……どうしようかな

「クックック・・・見せてやろう魔物ども!!・・・この神から転生したこの私が右手に宿られし（以下略）・・・で!!殲滅しよう!!」

「おう、うるせえぞ!?カスども!?リーダーは俺だから言うことを聞け!!」

・・・いやな面子だなあ

上から最初からやる気のなく派手に着込んでいる女性、なんか情緒不安定な自分は陰キヤですよー!って感じをかましている男性、明らかに内容が嘘な中二病男性、すぐくめんどくさそうな男性って感じ

なんだろう・・・召喚先間違えた感じがすごくする

アーク「・・・大丈夫かこれ?」

一応主人に聞いてみるが

アリス「大丈夫でしょ?精々出てくるのはオークとかゴブリンとかの低級レベルの魔物だからそんなのヘッチャラよ!」

・・・と胸を張って威張る自分の主人

アーク「・・・いやいやいや・・・アリス・・・オークとかゴブリンをバカにしたらダメだろ」

アリス「なによ!聞いたことしかないけど、ゴブリンは偶に賢い奴がいるけどオークなんてぶひぶひっている立てる豚のようなものでしょ?」

アーク「・・・アリス・・・これは俺の世界の鉄則っていうかお約束なようなものだけど・・・オークとかゴブリンをバカにした奴はひどい目にあうってあるんだぞ・・・特に女性はヤバイ」

アリス「それはあなたの世界ででしょう?安心しなさい、こんなことでヘマをする皇族なんていないわ!」

・・・ダメだわ

この主人が言っていることがどうしても不安にしか聞こえん

するとその護衛の中でもリーダー気取りをしている男性が会話に割ってきた

「そうだよ?安心しなさいよゴーレム君?俺たちこれでもオーガぐらいなんて楽勝だし（笑）」

アリス「ほら?・・・だからアークにはこの皆が帰ってくる場所を

守ってほしいのよ」

アーク「・・・でも」

アリス「・・・命令よアーク・・・それに私だって本当はアークに来てもらいたいけど前見たアークの力を見たら皇族である私があるに頼り切っりになっちゃってしまっうなんてアークハム帝国の皇族として失格だわ・・・私はあなたがもしいなくても頑張れるように実力だっって伸ばしたいのよ」

・・・実力を伸ばすため

確かに今後の戦闘でアリスが俺に頼ってばかりじゃなあ・・・

アーク「・・・わかった・・・でも行っったからには無事に帰って来いよ?」

アリス「・・・心配性ね・・・安心しなさい!帰ったら努力の成果、楽しみにしてなさい!!」

こうしてアリスは不安が残る護衛を連れて森の中に消えていった

・・・まったく・・・アークの世界の人間って臆病ね

森の中、アリスは護衛を後ろに連れて魔物を探しつづ魔法の練習をしていた

アリス「・・・」我が母なる大地よ、今この地に起きている事象を見せたまえ” 「サーチ」

アリスが索敵魔法で付近に魔物がいなか集中して探しているその間の護衛とはというと・・・

「ねえねえ、見た?あのゴーレム・・・変な形だったね」

「そうだな、しかも喋れるって中身に何かいるのか?」

「ふ、ふぐう・・・な、中身はエルフじゃないか?」

「馬鹿か?あんな姿勢をするエルフなんていないだろ・・・多分、ドワーフじゃないか?」

「ぶは!無能らしいね!・・・もしかしてさ・・・実は召喚できてなくて皇帝がかわいそうに思っってそこら辺のドワーフの奴隷を買っって中に入れてんじやない?」

「ちよ・・・ありえそうなんですけど・・・」

索敵に集中しているアリスに聞こえないように小声でさりげなく馬鹿にする護衛達

「しかし・・・本当にあの皇女・・・いやらしい体してんな」

リーダーのエルフがアリスの近くに近寄り・・・

「おっと」

モニユ

アリス「きゃあ!?ちよ、ちよっと!?!どこを触っているの!?!」

ワザと躓いた演技をしてアリスの胸を触った

「いやあ、スミマセンアリス様・・・このあたりに魔物がいないのか聞こうとしたら躓いちやって・・・」

普通の皇族なら怒ったりするが・・・

アリス「・・・次から気を付けるように」

「はいはい」

リーダーは何食わぬ顔で戻っていった

「え、ちよっと・・・大丈夫なの?さすがにやりすぎでしょ」

仲間の女が心配するが

「ああ?大丈夫だろ・・・だってあいつは攻撃魔法も使えない無能で力がないんだぜ?この中で唯一力を持っている俺たちを怒鳴って帰らせたらあいつが一人ボツチになっちまうしな!・・・それに皇族のプライド(笑)のせいで生徒の誰よりも早く帰ってきて待つとくなんてできないだろ?」

「うわー!リーダー頭いいー!じゃあさ?あの無能に対してなら今なら何でもやっていいよね?」

「ああ、いいぜ・・・しかし、柔らかかったわあ・・・さすが皇族(笑)だわあ」

アリス「護衛の皆さん・・・すみません遅れました・・・このあたりには魔物がいないそうです」

「チツ・・・遅えんだよ無能・・・あ!そうですか!では移動しましょうか!!」

アリス「・・・そうですね・・・では、ここから東のほうに行きますか」

アリスは先ほどの会話が聞こえてないようで気にせず進んでいった

アリス「あのお・・・守ってくれるのはうれしいんですが・・・近すぎでは」

アリスとリーダーの近さはもう引っ付いているほど近くなっていてリーダーの手はアリスの下半身を撫でまわしていた

「んん？そんなことありませんよアリス様？これは護衛の一環なので」

そういつも手を止めないリーダーとそれを見て楽しんでいる護衛達であった

・・・アリス・・・大丈夫かな

自分の主人が森に消えていったあと俺はテントの張られた集合場所で見回りや先生たちのテントの設営を手伝ったりして時間を潰していた

・・・あのリーダーを気取っていたエルフ・・・あいつがアリスに何かしそうで心配なんだよなあ

そんな心配をしていると・・・

ガサガサガサ

アーク「ん？なんだ？」

近くの林から音が鳴り・・・そこから・・・

「た、たすけて!？」

中からこの女子生徒一人と・・・

ドシンドシン

??「ヒヒ、エルフガコンナニイル・・・オンナハドコダ？」

肌が少し茶色で体は醜いほど太っていて二足歩行で歩いてきたヤ

ツ・・・

アーク「・・・なんでここにオークが・・・」

それは低級の魔物・・・オークであった

オークA「ブヒブヒ!!ナンダコノゴーレムハ!?…マ、イイカ…ソレヨリ、サツキノオンアハドコダア?」

そう言い涎を垂らしながら先ほどの逃げた女子生徒を探そうとしていた

…これは…やるしかないな…この安全のためにも…それに仲間を呼ばれたら困る

オーク「…おい!そこの豚野郎!!」

オークA「アア?ナンダソコノゴーレム(パシュツ!!)…ナンダ?ネムク…グーグーグー」

…あ、よかったヘッドショットできたわ

これ、対人間専用かと思っただけけど魔物にも効くのか…

ピロン♪

お?なんだ?

モンスター説明

オーク

魔王軍のなかでは下っ端の存在

オークは女性を好みよく襲う

理由はオークはオスしかおらず種を増やすために人間、エルフ、ドワーフなどの女性を襲って犯して妊娠させて数を増やしている

…うわあ…このタイミングでかよ…説明さん

そう思いつつ肩部から出したピストルをしまいつつ周りの安全のためにD—w a k e rのスキル「索敵モード」で調べた(使用したらカメラが急に動いてきよろきよろと向いて酔いそうになった)

…うん、いないな

どうやらこのモードになったら視界にマークがつくけど敵意があるのが赤くついて野生とかは緑で映るのか

そうすると先生たちが慌てた様子でやってきた

先生「オーク君!!ここに魔物が現れた聞いてきたんですけど!?!…オーク君がやったのですか?」

アーク「ああ、やったというか眠らせたただけだけだな・・・それよりさっきの生徒は？」

先生「・・・彼女は無事だ」

アーク「・・・そうか」

安心もするけど同時に不安も急増した

アーク「アリス・・・大丈夫かな？」

その頃のアリスは・・・

バシャアアアアアアア

突然の大雨に会い雨宿りができそうな場所を探すために護衛達と走っていた

「アリス様！あそこに洞窟があります！あそこで雨宿りしましょう！」

アリス「ええ、そうね！」

リーダーのエルフが指を刺したほうには大きめの洞窟があり雨風をしのげそうだった

アリス「ふう・・・びしょ濡れだわ・・・まさか、急に雨が降るなんて・・・」

「・・・ええ、まったくですね」

アリスの状態は雨のせいで黄金色の髪が肌にピッタリ引っ付いており服も濡れて若干透けており体のラインが目立っていた

「・・・よ」

リーダーの男が何かを呟いた

アリス「え？どうしたん」「誘っているんじゃないぞ!?!」・・・きやあ!?!」

アリスはリーダーに押し倒されてしまった

アリス「は、離しなさい!?!」

「うっせえ!!さっきからなんだよ!?!誘ってんのか!?!」

そう言いリーダーはアリスの手首と足を持っていた紐で縛り動けなくさせた

アリスも反抗しようにも女性であるため力量でできなかつた

アリス「ちよつと!?助けて!!」

他の護衛に助けを請うが

「ふうーふうー!・・・ぼ、ぼくも加わっていいかい?・・・が、我慢が
できん!!」

「いいぞー!リーダーやつちやえー!」

他の護衛は加わるモノ扇動するものになっていて助けてくれな
かった

アリス「い、いや!やめて!」

男たちの手がアリスの体に触ろうとした瞬間・・・

ばきいいいいい!!

「ふ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・へ?」

「な、なんだ!?!」

仲間の一人の情緒不安定の男性エルフの頭がカチ割られていた

「いや!放せ!」

仲間の女性エルフも何者かに捕まってしまった

そこに立っていたのは・・・

オークB「ブビブヒ!・・・オレタチノ”ス”ノマエニオンナガニ
ヒキモ!!」

アリス「お、オーク!?この洞窟はオークの巣だったの!?!」

「お、オークだああああ!!た、助けてママアアアア!!」

「あーおい!」

オークだと分かった瞬間中二病男性は一目散に仲間を置いて洞窟
の外に逃げていった

「ち!使えない奴め・・・そうか!おい!クソオーク!お前が欲しい
のはこいつだろ!!」

そしてリーダーがオークの目の前に投げ渡したのは
アリス「きゃ!?!」

・・・アリスだった

オークB「グへへへ・・・オンナア!!」

「・・・じゃあな！皇女様！オークと仲良くイチャついときな!!」

オークに隙ができた瞬間リーダーも逃げ出した

アリス「ちよつと!?!オークぐらい倒せるのじゃないの!?!」

「そんなの騙されるお前が悪いんだよ！」

そしてリーダーの姿は見えなくなつた

アリス「・・・嘘だったなんて!?!・・・お願い！外れて！」

アリスも逃げ出したいが手首と足首に紐が巻かれていて動けず
いた

こんなことなら自分の使い魔の言うことを信じておけばよかつた

そして醜い鼻音を鳴らしながらそれは近づいてきた

オークB「ヒヒヒツ!!エルフノオンナダア・・・」

アリス「いやだ・・・お願い・・・来ないで・・・アーク・・・

いや・・・いやああああああ!!」

洞窟に悲鳴が鳴り響きアリスはオークに担がれ巢の奥に連れ去ら
れた・・・

九発目 林間訓練 中編

現在アリスは護衛に裏切られオークに捕まってしまいオークの巢でもある洞窟の奥に連れてかれていた

アリス「く！放しなさい!!」

オークB「ブヒブヒ!!ココニハイツテオケ!!」

アリス「きや!?!」

アリスはオークに担がれた後、木製の牢屋に入れられた

アリス「・・・いたたた・・・なによ・・・皇族なんだからもう少し丁寧に扱ってよ・・・」

しかし、大人しく捕まっておくわけにはいかない

オークは女性を性奴隷ぐらいにしか考えておらずその結末はどれも悲惨なものだ

アリス「・・・オークのことを信じないなんて・・・主人失格ね・・・さて・・・」

牢屋の中は他に捕まった女性がいるようだ

いるのは人間一人と先ほどの護衛の仲間にいた女エルフ一人

そして牢屋の奥には裸の女性・・・しかし山ずみにさかれていてピクリとも動いていなし悪臭も漂っている・・・

アリス「当たり前だけど最悪ね」

一応、上位の火魔法を使って・・・って言っても私が使ったら火の粉ぐらいの大きさになっちゃうけど・・・牢屋を焼き払って脱出もできる

でも、さつきも言ったけど私は攻撃魔法ができない以上見つかったらそこで終わり

アリス「・・・情報が必要ね」

そこでアリスは水色の髪をした人間の女性に聞くことにした(もう片方のエルフは自分を裏切ったので聞かない)

アリス「ね?その人間の女性?少しいいかしら?」

??「ひ!?え、エルフ!?!こ、来ないで!?!」

アリス「安心して・・・私は敵意はないわ」

?? 「え、でもお父さんがエルフは人間嫌いですぐ攻撃をするって・・・」

アリス 「・・・あのねえ・・・確かにアーハム帝国のエルフは人間嫌いだけど私はバサビイ共和国の人間だけよ」

?? 「よかった・・・あ！私の名前はクリス・リリスです!!」

アリス 「クリス・リリスね？いい名前だわ・・・私はアリス・フォン・アーハムよ」

クリス 「アーハムってあのアーハム帝国のですか!？」

アリス 「そう、そのアーハム帝国だわ・・・あなたはどこから？」

クリス 「えっと・・・マール工業国家からです」

アリス 「マールって!?ここからワイバーンを一週間ずつと飛び続けてようやく着く国じゃない!?どうしてマールの人がここに？」

クリス 「・・・そう、すみません・・・それはいえません」

アリス 「・・・そう、なら聞かないでかわ」

・・・ここでマール工業国家について説明すると

アーハム帝国から西にある国家でその国家自体が超巨大な鉱脈があり異世界にしては珍しく地球ほどではないが工業が発展している。国民も人間とドワーフが半々くらいいる・・・工業国家で身分制はないがその代わり差別がひどい。例えるならブラック会社をそのまま国にした感じ

アリス 「クリスは・・・いつここに連れてこられたの？」

クリス 「えっと・・・昨日の夜です」

アリス 「そう・・・あいつら・・・なにか言ってた？」

クリス 「・・・確か、魔王はなんだとかはって言ってました」

アリス 「そう・・・ありがとう・・・」

魔王・・・それは魔族全体を束ねるほどの強大な力を宿した魔物まさか、新しい魔王が復活した!？」

でも、だったらすでに魔王軍が周辺国を襲っているはず・・・

・・・すると牢屋の外から

オークC 「ブヒブヒ!!オンナドモ!!ソトニデロ!!」

オークD 「ブヒヒヒ!!イイオンナガイルジャネエカア!!」

二体のオークが牢屋の扉を開けアリスとクリス、そして・・・
「触るな!?この豚どもが!？」

アリスを裏切った護衛の女エルフも連れていかれた

アリス「く!?何処に連れていく気よ!？」

オークC「ブヒ!!カシラノトコロニキマツテイルダロ!!」

アリス（オーク・リーダーがいるの!?)

・・・ここでオーク・リーダーの詳細について紹介を

オークは普段は単体で行動はせず3体以上で群れを組み生活している

しかし、群れの数が増え15体以上になるとオーク・リーダーが誕生する

オーク・リーダーは普通のオークより体が二倍ほど大きく体格も良い

アリスは洞窟の奥に連れてこられてその入り口にオーク・リーダーが立っていた

アリス（こいつがこの群れのリーダーね・・・）

アリスを連れられた部下オークはリーダーの前にアリスを投げ渡す・・・

ことはなくさらに奥へ進んでいった・・・

アリス（え!?アイツがリーダーじゃないの!?)

オークでも上下関係は大切にしており普通は女性を持ってきたらその群れのリーダーに譲渡する

譲渡しないならリーダーよりさらに上の存在がいる

アリス（まさか!?)

そして着いたのは石で作られた玉座のような椅子の上に座っている魔物・・・

アリス「オーク・ロード・・・」

オーク・ロードとはオーク・リーダーが進化した魔物で通常のオーク

クより数倍体格的にも知性的にも高い（人間、エルフなどより高くはない）

オークC「ブヒヒヒ!!カシラ!オンナヲツレテキマシタ!!」

するとオーク・ロードは低い声でしゃべる

オーク・ロード「グフフ・・・ヨクヤツタ・・・ソノオンナノカオヲミセロ・・・」

するとオークたちはアリスたちの顔を無理やり上げる

オーク・ロード「グフフ・・・ドノオンナモワルクナイ・・・」

オークD「ブヒヒヒ!カシラ!モウ、ガマンガデキナイカラゼンインオカシマシヨウ!!」

オーク・ロード「バカガ!!ソウヤツテマエニツカマエタオンナハ、ゼンインオカシスギテコロシテシマツテゼンメツシタダロ!!」

・・・どうやら牢屋にあつた女性の死体の山は犯されて殺されてしまったらしい

オークC「シカシ、カシラア?コンナニオンナヲツカマエテコロシテタラ、マハウツカイドモニオワレマセンカ?」

オーク・ロード「ナニツテンダ・・・アイツラハキゾクツテイウレンチュウシカマハウハツカエナイカラコンナコトニハキニシナイサ・・・ソレニキタトシテモカコツテカズデオセバイイ」

魔法使いなんて数の暴力で押せばいいとオーク・ロード

すると、裏切った女エルフの一人が

「ひ、ひいいいい!!わ、私よりそのエルフのほうがいいよ!!そ、そいつ、アーハム帝国の皇女だから!!」

まったく最後までクソな女エルフである

オーク・ロード「ハウ?オイ、カオヲヨクミセロ」

アリス「や!?!」

オーク・ロード「・・・クツク・・・オイ!コイツハオレノオンナニスル!!」

「な、ならー!私を開放してよー!」

オーク・ロード「ン?アア、ソウダナ・・・オイ!オマエラ!!」

コイツヲスキニシテイイゾ!!」

「え?・・・ちよつと?!!どういうことよ?!!」

オークC「ブヒヒヒ!!ホントデスカカシラ!」

オークD「オイ!ミンナ!コイツスキニシテイイッテ!!」

するとぞろぞろと他のオークがやってきて女エルフに集まりだして女エルフの服を破き始めた

「いやー嘘でしょ!?!・・・話が違うわよ!?!いやだああああ!?!初めてがこのクソオークなんてええ!?!」

すると女エルフのいるところから肉と肉がぶつかる音が聞こえだした

オークB「カシラ!コノニンゲンノオンナハドウシマスカ?」

部下オークが残った人間の女性・・・クリスをどうするかを聞いてきた

オーク・ロード「アア?ソイツハヨビデ、ロウヤニノコシトケ」

クリス「いや!?アリスさん!?!」

クリスはオークに担がれ牢屋に戻されてた

アリス「離しなさい!?!あなたたちはオークの誇りとかないの!?!」

オーク・ロード「ナンダ?オレタチノホコリ?ナイナ!オレタチハ

オンナヲオカシテカズヲフヤシテマオウニナル、ソレシカナイ!!」

アリス「・・・やっぱりクズね」

すると女エルフの方から

「いや・・・タスケテ・・・アリスサマ・・・」

オークE「オイ!ウルサイゾ!!」

女エルフは死んだ魚のような目になり助けを請うが五月蠅いと判断したオークの一体が女エルフの顔を殴ったが・・・

ゴキヤアアアア!!

女エルフの首が向いては行かない方向に曲がり絶命してしまった

オークC「ア!カシラ!マタコロシチャイマシタ!!」

オーク・ロード「・・・マタカ・・・ナラ、ソノヨビノニンゲンノ
オンナニシロ」

クリス「え?・・・いやあああああ!!」

オークD「ブヒブヒ♪オイ!オトナシクシロ!!」

担がれていたクリスは地面に落とされそこに新しいオークが群が
ろうとしていた

アリス「クリス!!」

オーク・ロード「オイ!オマエハオレノオンナダカラオレノアイテ
ヲシロ!!」

アリス「いや!」

アリスもオーク・ロードに押し倒されて服を破き始めようとしてい
た

アリス「・・・助けて・・・アーク!!」

・・・ギユウイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイン!!

オーク・ロード「ン?ナンノオトダ?」

洞窟のどこからか車輪が高速で地面を駆ける音が聞こえてきた

オークB「オイ！ナンノオトd「食らえ！一度やってみたかった
ヒーロ着地!!」・・・グギャアアアア!!」

オークの頭に鋼鉄でできた足を振り下ろし頭を潰されてしまった

オーク・ロード「ナ、ナニモノダ!？」

??「あ？何って・・・」

オークの頭から足を引き抜き答える

アーク「通りすがりの使い魔ですか？」

アリス「・・・アーク!!」

アーク「おう、待たせたな」

自分の使い魔アークがやってきた

オーク・ロード「クソ！ナンダコノゴーレムハ!？」

アーク「ゴーレムじゃない!!元人間だ!!」

オーク・ロード「ソクナニンゲンイルカ!?ソレヨリドウヤツテココ
ニ!？」

アーク「なぜって・・・うちの主人に渡しといたアリスのiDRO
IDの発信機能を使ってキャンプから飛ばしてきた!!」

アリス「・・・相変わらずすごいね・・・この通魔機」

アーク「・・・そんじやアリス・・・耳ふさいどきな!!」

アリス「やば!?アレが来る!!クリス!!急いで耳を!!」

オークC「クソ！ゴーレムゴトキガ!!」

オークの一体が斧を持って襲いかかるが・・・

キュイイイ・・・

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

オークC「ギャアアアア!!」

アーク「・・・うるさいつすよ」

アークは左腕のガトリングで蜂の巣にする

オーク・ロード「ナ、ナンダ!!」

アリス「ツ!!えい!!」

オーク・ロード「ア!マテ!!」

オーク・ロードが驚き隙を見せた瞬間にアリスはオーク・ロードの腕から脱出しアークの所まで戻れた

アリス「アーク!!」

アーク「アリス!!他に生存者は!?!」

アリス「あそこに群がっている中心にクリスって人間の子が一人!」

アーク「あいよ!」

アークはクリスがいるオークの集団に突入する

クリス「いや!お母さん!お父さん!」

オークD「ブヒヒヒ!!イイコニシr「ウオーカーギアキック!!」: :

ウギャアアアア!!」

クリス「・・・え?」

アーク「ふう・・・決まったぜ・・・大丈夫か?」

クリス「え?ゴーレムがしゃべってる?」

アーク「だからゴーレムじゃ・・・んなことよりこの場をどうにかしないとな」

周りはオークに囲まれていてアークだけだったら出れるが二人いるんじや・・・

オーク・ロード「クソ!オマエラヤレ!!」

オーク「ニニニブヒビヒ!!」

しかし、襲い掛かろうとするが・・・

キュイイイ・・・

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

「ギャアアアア!!」

「ウ、ウデガアアアア!!」

アークのガトリングがオークたちをごみクズのように薙ぎ払って
いく

アーク「・・・こいつら弱いけどー!」

オークは紙くずみたいに死んでいくが・・・

ブヒブヒブヒブヒブヒブヒブヒブヒブヒブヒブヒブヒブヒブヒブヒブ
ヒブヒブヒブヒブヒブヒブヒブヒブヒブヒブヒブヒブヒブヒブヒブヒブ
ヒブヒブヒブヒブヒブヒブヒ

アーク「ちよつと多すぎませんか!」

・・・恐らくここに来る前に見つけた牢屋の中に裸の女性の死体の
山を見つけたが・・・恐らく彼女たちが妊娠させられて出されただろ
う・・・洞窟の奥からゾロゾロと新しいのが出てくる・・・

ああもう!?こうなるだったら新しいメインのウエポンでミサイル
を開発しとけばよかった!?

そのため・・・

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!・・・カチッ!!

・・・しまった!?

突如、アークのガトリングから弾が出なくなった

オークE「オ、オイアノゴレム・・・コウゲキヲヤメタゾ・・・」

オークF「チャンスジャナイカ?」

オークG「バカヤロウ!!シヌゾ!!」

・・・あ、よかった

あのオークたちバカだから気づいてないのか

アリス「アーク!?どうしたの急に攻撃をやめるって!?

アーク「・・・静かに・・・早く早く・・・」

そして・・・

ピロン♪

・ ・ ・ 補充完了

・ ・ ・ 来た!!

オークH「チャンスダロ!!イケエエエ!!」

キュイイイ・・・

ズドオオオオオオオオオオオオオオ!!

襲い掛かったオークが布切れのように吹き飛ばされていった

あ、あつぶねえ・・・

まさかこのタイミングでガトリングの弾が切れるって・・・

急いでスキル画面を開いてガトリングの弾を補給したけど完了するまで一分かかる

なのでアリスには静かにしてもらった

オークE「ヒ!?!二、ニゲロオオオ!!」

オークの一体が逃げ出すと他のオークもつられるように逃げ出す
が・・・

アーク「逃がすかあああ!!汚物は消毒じゃあああ!!」

・・・んで、結局オークの殲滅ができた

まあ、アイツら殿とか務める奴がいなくて全員背中を見せてたから作業になってたな・・・しかし・・・

アーク「・・・これが命を奪うことか・・・」

機体にかかったオークの血を振り払いながらつぶやく

・・・初めての異世界で戦闘をして命を奪ったけど・・・この体になつたせいかわからないけど・・・なんとも思わなかった

アーク「・・・結構深刻だな・・・なんとも思わないのは・・・」

こう思いつつも俺はアリスの元に戻っていった

アリス「・・・あ、アーク」

アーク「ん？どうしたアリス？」

アリスの元に戻って人間の女性・・・クリスと共に外に出ようと出口に向かおうとしたが・・・

アリス「いや、それが・・・」

このリーダーであるオークロードがどこにもいないの・・・」

十巻目 林間訓練 後編

現在の所持ポイント 290

消費

ガトリングの弾 補給 1

残り 289ポイント＝28900ゴールド

アーク「オーク・ロード？・・・あ、だからあんなにオークがいたのか・・・でないって？」

アリス「・・・そうよ。アークがオークをぶちのめしたときにこっそりとその頭領は逃げたのね・・・」

アーク「え、じゃあ早く見つけて殺さないと・・・」

アリス「あ、それなら心配ないわオークって一体一体が弱いけど一番厄介なのは数だから部下のいないオーク・ロードって割と早く死ぬらしいわ」

部下がいないって・・・

アーク「・・・じゃ、とりあえず外に出るか」

アリス「そうね。さっさとこんなかび臭い場所からおさらばしたいわ・・・」

アーク「あいよ・・・ところで・・・えつと・・・クリスマスだっけ？動けるか？」

クリス「え、あはい！動けます！・・・しかし、そのお・・・アークさん？でしたか？・・・なんで人間である私をエルフのしかも皇族の使い魔であるアークさんは助けたのですか？」

え、普通助けんの？

アーク「え、なんでって：俺、元人間だしこんなボロボロになっている女の子を見捨てるなんてできないだろ？・・・それに助けるなら全員平等に助けるのが俺の鉄則だ」

クリス「全員・・・平等・・・」

さてと・・・まだオーク・ロードのことが気になるがさっさと外に出よう

そうして俺とアリス、クリスは外に向かっていた……その途中……アーク「……」

アリス「……どうしたの？アーク？」

アーク「アリス……少し用事ができたから……いいか？」

そして外に出る前にとある場所に寄る

……アークが付いた場所は

アリス「……ここって」

アーク「ああ……せめて弔らわないとな……仇を取れたのと来

世では幸せに生きれることを願って」

それはアリスたちが捕まっていた牢屋の奥にあった女性の死体の山だった

にしても来た時よりデカくなってないか？……まあ、あの時はアリスを探すのに急いでいたからかな？

アリス「……そうねあのオークどもに性処理と妊娠奴隷に使わされた最後だから……さぞかし無念ね……私も手伝うわ」

クリス「……私も手伝います」

アーク「……いいのか？……ならお願いする」

こうして俺とクリスは女性の死体をできる限り生前のように綺麗にしてアリスは火魔法で火葬の準備をする

すると女性の死体の山の一つが……

もぞ……

クリス「あれ？」

アーク「どうしたクリス？」

クリス「……なんかこの山が少し動いた気が……」

クリスが不思議に思いその山に近づく……その時

ぐしやあああああ!!

アーク「ッ!? クリス危ない!!」
クリス「え? きゃあ!」

・・・突然、死体の山が動き中からこん棒がクリス目掛けて迫ってきたが俺が体当たりして身代わりに盾になった

ズガアアアアアアアアン!!

アーク「ぐあ!」

俺は吹き飛ばされ壁に打ち付けられた

アーク「う・・・く!」

何とか起き上がるがどうやら壁にぶつかったせいかD—wake
rのパーツのいたるところで痛んでいるせいか悲鳴を上げている
こん棒がぶつかった部位・・・胴体部分は大きくへこんでいた
すると死体の山から出てきたのは・・・

アーク・ロード「ブヒヒヒ!! ホントウハニンゲンノオンナヲネラツ
タンガナ・・・」

アリス「・・・アーク・ロード」
なんと死体の山に逃したアーク・ロードが隠れていた

アーク・ロード「シカシ・・・ソコノゴレム!!・・・サツキハヨ
クモヤツテクレタナ!!」

アーク「知るか! 攫った女性たちをひどい扱いをするお前たちも悪
いだろ!!」

アーク・ロード「ダメレ!! オマエヲコロスウウウウウ!!」

部下アークを失い一人になったアーク・ロードがこん棒を振りかぶ

り迫ってくる

左腕のガトリングで対応しようとしたが・・・
アーク「嘘だろ!？」

ドカアアアアアン!!

アリス「アーク!？」

こん棒がアークの左側に直撃し壁にめり込んでしまった

アリス「なんであれをしない・・・・・・・・うそでしょ」

クリス「そんな・・・」

アリスとクリスはなぜアークが攻撃をしないのかと思ひ答えを知るためにアーク・ロードを見ると・・・

アーク・ロード「ブヒビヒ!!ヤハリコウゲキガデキナイダロウ!!」

そのアーク・ロード体には・・・

無数の人間の女性の死体を自身の肌が見えないくらい纏ったアーク・ロードだった

アーク「くそ・・・やろうが・・・」

アーク・ロード「ブヒビヒ!!ニンゲンハオナジンゲンヲコウゲキ
デキナイツテキイタコトガアルカラナア!!オマエガニンゲンデヨ
カッタゾ!!」

アーク「くそ!!」

アークは怒りのままに攻撃をしようとするが

なにも出なかつた

アーク「!?」

オーク・ロード「グヒヒヒ!!ヤメトケ!!ソノヒダリウデジャナニモ
デキナイダロウ!」

・・・アークの左腕・・・ガトリングは無残にぺしやんこになって
いた

どうやら先ほどのこん棒はこのガトリングを狙いアークの攻撃方
法を失くすためであつたらしい

アーク「くツ!!」

攻撃手段がなくされて動揺するがオーク・ロードの追撃をぎりぎりで
避けて冷静にどう対処するかを考える

アーク（くそ!!まさかガトリングを破壊するなんて!!現在の殺傷兵
器が今のガトリングしかない・・・こうなるんだつたら他の殺傷兵器
を開発しとくべきだった!!今から開発を開始してもどんなに早くても
このガトリングの修理でも一時間かかる!!）

そう思いつつもこん棒を避けるが・・・

ばきいいいいいい!!

アーク「う!」

・・・アークの体から黒い煙が出始め、体の動きが鈍くなり膝を着
いてしまった

無理もない普通のオークの何倍もの巨大で力もあるオーク・ロード
のこん棒を二回直撃して壊れても先ほどまで立てるだけ奇跡だろ
う・・・普通の人間だつたら一発でも死んでしまう

体は左腕のガトリングが動けなくなり脚部は火花を上げ何とか
立っている。胴体も内側にある機関部分も露出している

オーク・ロード「ナンダア?モウオワリカ?・・・ナラコノイライ
ラヲシズメルタメニモコノオンナタチハモラツテイコウ・・・ナカマ

ハ・・・マア、コノオンナタチガウンダノデイイカ」

そういい、アークとの戦闘の邪魔にならないように離れて一緒に居たアリスとクリスに手が伸びていく

クリス「そんな!?アークさん!」

アーク「くそ・・・うげ!動いてよ!!」

仲間の危機を察知し何とか動こうとするが体が鈍くなり立ち上がりたいが動かない・・・

アリス「やめなさい!!やるなら私を殺してから行きなさい!!」

アリスがクリスの前に立ちどうにか時間稼ぎをしようとする

オーク・ロード「クツクツク!!ゲンキノイエルフダア!!ナラオマエカラダ!!」

アーク「!?・・・アリス!」

くそ!!うげうげうげうげ!!

しかしアークの体は出力が足りず動かない

アリス「う!?く!」

アリスの体にオーク・ロードの手が触れだした

オーク・ロード「ブヒ!ブヒ!モウガマンガデキン!!ココデオカス!!」

アーク「アリス!!」

クリス「アリスさん!!」

アリス「アーク・・・君にすべてを賭けるよ?」

・・・我が主よ
・・・我が哀れな使い魔に神速を、怪力を、希望を与えたまえ!!
・・・「ファイヤー・アツプ」!!

!?

オーク・ロード「アア？ ナニカツブヤイタカ？」
アリス「ふふ♪ さあね？ バカな豚さんにはわからないことよ？・・・
それより後ろを向いてみたら？」

パス!!

オーク・ロードの首に何かが当たった
オーク・ロード「アア？ ナンダ？」
そこには何とか立ち上がったアークがいた
オーク・ロード「ナンダ、マダタテルノカ？」
アーク「・・・なんか知らんけど体が軽くなったんでな・・・さて、
もう一ラウンドやろうや？」
そうしてアークは構える
そして・・・

ドゴオオオオオン!!

・・・ダツシユモードになり高速でオーク・ロードの背後に回った
オーク・ロード「ナ!？」

ドゴオオオオオン!!

しかし、そのスピードがおかし過ぎた

まるでF1カーが通っているかぐらいのスピードで駆け回った

アーク（いや、ちよつと早すぎません!?)

おかしいよね？

なんか軽くなつたなつて思つてダツシユモードにしたらすつげえ
早いんだが？

オーク・ロード「クソ！オイ！エルフ！ナニヲシタ!!」

オーク・ロードがアリスに向かつてこん棒を振るが

アーク「させるか!!」

アークがアリスの前に入り受け止めるが今度は押し負けずに堪え
た

オーク・ロード「ナニ!？」

アーク「もらった!!」

そしてオーク・ロードからこん棒を奪取して捨てオーク・ロードの
開いた手に向けて・・・

パス!!

パス!!

パス!!

パス!!
パス!!

オーク・ロード「アア？ナンダ？マツタクイタクナイゾ？」

オークが肩部からピストルを出し全弾オーク・ロードの手に撃ち込んだ

オーク・ロード「グハハハ!!オレノカチノヨウダナ!!コレデオマエヲ・・・ナ、ナンダネムク・・・」

そしてオーク・ロードは眠ってしまった

オーク「ふう、さすがに手のひらまで死体は纏ってないだろ？これ頭に当てなくても体に数撃ち込めば効果は出るんだぜ？」

そしてなぜか力が湧き出ている間に

オーク「じゃあな・・・あの世でひどい目をさせた女性に許しを媚びながら地獄に落ちな」

ばきいいいい!!

オークの鋼鉄の足がオーク・ロードの首の骨を踏みつけ絶命したのを確認した

オーク「・・・やったか・・・アリス？大丈夫か？」

アリス「・・・大丈夫だけど・・・あんたのほうが大丈夫？」

オーク「あー・・・激しく動いたら今度こそ無理」

主人のアリスと同じ被害者のクリスの安全を確認する

女性の埋葬は俺抜きで行われて大体が終わったが・・・

クリス「でも・・・どうしましょう・・・これ」

そこにはオーク・ロードと雑魚オークの死体の山ができていた

アリス「ほんといい気味よね・・・でもこのままでももつたいないわよね」

・・・この世界ではどこぞのRPGよろしくモンスターの一部分をギルド(冒険者協会)などに持っていけばゴールドに換金できるのだ

アーク「うくん・・・全部持っていきたいが・・・今のこの体じゃな・・・」

俺なら二体くらいなら担げて運べるがこんなボロボロだしアリスとクリスはあまり力が無いので運ぶのは無理だ

それに被害を受けた女性の死体の埋葬で結構時間がかかってもう外は夕方だ

ピロン♪

お？久しぶりの通知か？

説明：倒した魔物にサバイバルナイフを使うと自分たちが倒した魔物の換金に全部、一番高価または低価の部分を残して（どちらかは設定可能）残りは自身の開発ポイントまたはゴールドなどに換えることができます。売れない部分は一時的な魔力として貯められます

アーク「お！マジ！」

クリス「どうしたんですか？アークさん？」

アーク「えっと・・・サバイバルナイフ・・・召喚」

そして俺の手に小さな重みを感じた

クリス「え、そのナイフどこから出したのですか？」

アーク「細かいことはいいから・・・それより二人は休んどきな？俺はあいつらを刺すだけなら動けるからいいよ」

そしてアークの死体に近づきサバイバルナイフを刺したら・・・

ひゅ~~~~~ん

ピロン♪

：うん、メタルギアの動物をキャプチャーしたときの音やん：
クリス「わ！オークの死体が消えました!!」

アリス「・・・さすがになれたわ」

・・・ちよつと自分の主人が慣れだしているのにショックを受けつ
つ全オークの処理が終わってあとは首が折れて死んだオーク・ロード
だけだった

アリス「あ、アーク・・・そいつはそのまま持っていきましょう・・・
先生たちに遅れた理由で証拠としてもっていかないよ」

あ、確かにアリスを探しに行くのを先生たちに言っていなかった
な・・・

仕方ないのでオーク・ロードは引きずって持っていくことにした
するとクリスが・・・

クリス「えつと・・・すみません・・・皆さんとはここでお別れで
す」

アーク「え？なんで？」

クリス「・・・実は私は祖国から逃げてきたんです」

・・・おうおう、いきなりの告白だな

アリス「あ、そういえば牢屋で言ってたわね」

クリス「・・・はい、詳細は言えませんが私はこれから逃亡生活を
するので・・・国の役人に見つかる困ってしまうので・・・ここで
別れないと・・・」

アリス「・・・そう・・・なら無事に生きてね？あ！安心して！あ
なたのことは絶対に秘密にするわ!!」

クリス「え・・・でも・・・」

アーク「安心しなよ」アークハム帝国の皇族のモットーは絶対に約束
を破らないだ」

クリス「・・・そうですか・・・なら・・・皆さん今回は本当に助
かりました・・・皆さんは命の恩人です・・・」

アーク「ああ！んじゃ、いつかまたな!!」

クリス「はい！皆さんいつかまた!!」

こうしてクリスは暗い森の中に消えていった

クリス（お父さん：私は今日とあるゴーレムに助けられました：：
これで私はある目的ができそれを実現して見せます!!）
クリスは森の中を歩きながら心の中で誓いをした
クリス「みんな・・・平等か・・・」

・・・のちにこの少女が祖国であるマーレ工業国家でとんでもない
ことをするのを本人、そしてアークたちもまだ知らない

十一 兇目 そのあと・・・

そのころのキャンプでは

「おお！さすがです！クロエ様!!ゴブリンを三体とは!!」

「さすが次期皇帝!!」

「使い魔のワイバーンも伝説級に成長しますぞ!!」

クロエ「うふふふ♪そんなに褒めても何もでませんよ」

クロエがゴブリン三体を仕留めたのを自慢し始めてそれを周りが称賛を始めた

・・・ちなみに確かにクロエの使い魔であるレオが倒したがそれはあくまで止めであってそれまでは護衛の騎士たちが動けなくなるまで痛めつけて倒したのだ

先生「・・・・・・・・」

クロエ「あら？どうされたのですか？先生？」

先生「あ、いえ・・・それがアーク君が急に飛び出して帰ってこないのとアリス様が夜になっても帰ってこないんです」

クロエ「・・・アリスなら多分大丈夫でしょう・・・ささ、先生も・・・体が冷えますよ」

先生「はい・・・無事だといいいんですが・・・」
すると近くの林の中から・・・

アリス「はあ・・・はあ・・・さすがに運動しておくべきだったわ・・・」

先生「アリス様!!」

クロエ「チツ」

林の中からアリスが全身汚れてやってきた

「おいおい、あの無能帰ってきたぞ」

「しかも全身汚れてるぞクロエ様とは大違いだ」

「そうだな、皇族としてあるまじきことだ!!」

先生「アリス様!!どうされましたか!?その汚れは!？」

アリス「え、えっと・・・その・・・オークたちに誘拐されて・・・」

先生「誘拐!?護衛はどうしたのですか!？」

アリス「彼らなら一目散に逃げだしました。・・・一人、死んでしま

いましたが……」

先生「なんと!?!? ……それでは早くオークたちを!!」

アリス「あ、大丈夫です……オークの巣とそのボスのオーク・ロードは駆除しておきました」

先生「お、オーク・ロードを倒したああ!?!?」

先生がオーク・ロードを倒したのを聞いて大声で叫んでしまい回りの生徒に聞こえてしまった

「おい、嘘だろ……あの近衛騎士が何人いても割と倒すのに時間がかかるオーク・ロードを無能が?」

「嘘に決まっている!!証拠!!証拠がないじゃないか!!」

「それに使い魔はどうしたんですか!?!? ……まさか逃げられたとか!!」

周りから野次が飛んでくるがアリスはすまし顔で答える

アリス「……わかりました……証拠をお見せしましょう」

するとアリスが出てきた林から……

ギユインギユインギユインギユイン

ズリズリズリ

なにかの足音と何かが引きずられる音が聞こえた

アーク「……アリスさん……手伝ってくださいませんか?さすがに重い」

先生「ん!?!?」

そこには使い魔のアークに引きずられながらやってきたのは……

そのオーク・ロードだった

「おい!?!?オーク・ロードじゃないか!!」

「あのゴーレムなんていうもん連れてきたんだ!?!?」

「早く逃げるぞ!!」

アリス「ご安心を!!私の使い魔アークがこの魔物を倒しました!!」

声高らかに宣言し生徒全員を落ち着かせようとするアリス

すると先生が

先生「し、失礼ですがアリス様・・・確認をしても？」

アリス「アーク!!」

アーク「はいはい、よいしょつと・・・後で返してよ?これは俺が狩ったものだから」

先生たちがアークが運んできたアーク・ロードの死体を確認する

「・・・本当にアーク・ロードだ」

「しかし、どうやって殺したんだ?」

「いや、見る首の骨が壊されている・・・恐らくこれだろう」

そして先生がアーク・ロードの死体を返す

先生「・・・確かにアーク・ロードです」

すると周りの生徒がざわめきだした

「本物かよ!?!」

「おい、これクロエ様よりアリス様のほうがすごいんじゃないのか?」

「バカ!本人に聞こえるだろ!?!」

周りがアリスのすごさにクロエが大したことがないつという風潮ができていた

クロエ「・・・無能のくせに・・・生意気よ」

しかし、クロエだけはアリスに恨みを込めた目でみていた

それからは思いのほか早く終わった(ほかに生存者がいないのと巣は壊滅しているのぞ)

アーク・ロードは俺のサバイバルナイフの能力で消えていった

アリス「・・・それよりアーク・・・あなた大丈夫なの?」

アーク「・・・本音言ったら結構ヤバイ」

アーク・ロードのこん棒の直撃を二回も受けてしまったので体ともう崩壊寸前だった

アリス「……普通のゴーレムだったら一度土に返してまた召喚すればいいけど……」

アーク「だから……ゴーレムでは……あ、そうだ」

ふとよくよく考えたらアークなどを狩ったので自分の開発ポイントはどうなったのかを見る

以前のポイント 289

獲得経験値+ゴールド 2181

現在のポイント 2370

アーク「おお！アリス！修理よりいいのがあるぞ!!」

アリス「え、なによ？」

アーク「……スウィーツ食べたくないか？」

アリス「……そういうことね」

するとさっきの疲れた顔はいずこへ……

顔は平静を装っているけど目がすごく輝いている

アーク「……間違えて違うのを押すなよ？やめろよ？ぜったいにやめろよ？フリじゃないからな？」

・とりあえず今回でポイントはケチったらダメであることが分かった

この世界……いつやばい時がきて死ぬかわからないもんな

開発したもの

D | w a k e r 専用

火炎放射器 120

ロケット 100

電気砲（スタン） 120

F・B L L I S T A 80

残りポイント 2050

おし……これで良し

アーク「・・・頼むぞ・・・アリス」

アリス「ま、任せなさい!!こ、こんなしょうもないミスなんてしな
いわ!!」

・・・言っている割にはアリスさん・・・めっちゃ指、震えています
よ

アリス「えつと・・・人型・・・これね!!」

あ、よかった・・・見つけたらしいな

しかし、その後ろから

クロエ「ねえ?アリス?何見ているの?」

アリス「・・・あ、クロエ姉さま・・・今、アークの進化をしている
ところで緊張しているんです・・・」

クロエ「・・・ふん?」

するとクロエは

クロエ「ね、ね!アリス見せなさいよ!!」

アリス「あ!?クロエ姉さま!」

アリスの視界に割り込んでアリスの指を掴み操作を始めた

アリス「クロエ姉さま!!やめてください!!」

クロエ「うふふふ♪いいじゃない?アリスは休んでおきなさい♪へ
こんなのがあるんだ」

・・・ちよつとヤバイと思つて俺も止めに入ろうとしたが

ピロン♪

クロエ「はい、おーわり♪」

アーク「え!?ちよつと!?人型にしたよな!」

クロエ「ええ?してないわよ?」

アーク「はい!?!じゃあなに選んだんだ!」

クロエ「・・・あなたたちが結構調子に・・・あ!じゃなくて・・・

少し堅苦しいから可愛い名前のにしてあげたわ!!」

アリス「可愛いのか!」

・・・あれ?メタルギアシリーズに可愛い名前ついていたっけ?

唯一の可愛い枠はメタルギアMk. IIぐらいな気がするけど
クロエ「…………ふふ♪確かねえ…………」

ピューパ

って名前だったわ♡」

アーク「!?」

アリス「クロエ姉さま!?なんで勝手に私の指を使って選んだのですか!?」

アリスが怒った顔でクロエに問う

クロエ「えくだってそのゴーレムって異世界からきたって言うじゃない?多分、ステータス操作も違ったのよ!」

…………これについては嘘である

アークは確かに異世界出身で使い魔になったがステータス操作は変わらないのでクロエのワザとである

アーク「はあ!?何して…………」

ピロン♪

するといつもありがたい情報を教えてくれる通知が視界のはじに出てきたが…………今回は全くうれいものではなかった…………

通知：ピューパの開発を開始します……………完了しました。残り10秒後に変身します。残り9…………8…………7…………6…………

ウソン!?

アーク「アリス!! 離れろ!!」

アリス「キャ!?!」

自身の危機を察知し急いで近くにいた主人を離れさせる
そして……

カツ!!

体が光り出した

アーク「アリス!! 離れろ!!」

……突然、自分の使い魔に引き飛ばされたアリス
すると使い魔の体が光り出した

アリス「アーク!?!」

クロエ（クツクツク!! いい気味ね!! 突然後ろから襲って適当に邪魔
したけど選んだのがカワイイ名前だったから弱くなっているはず!!）
……しかし、クロエは勘違いしている
どうやらかっこいい名前＝強いつと思っっているらしい……なの
で……

アーク「う……なにが起きたんだ?」

アリス「アーク!! あなた大丈夫……? ……は?」

光が収まり自分がいた場所にはいつもの形をした使い魔ではな
かった

巨大な岩のように大きな体、巨木のように太い腕……それが地面につ
いている。そして一番上には謎の黒い筒

アリス「ア、アークなの?」

アーク「……正解だよ」

「おい!?! なんだ!?! 突然あのゴーレムがデカくなったぞ!!」

「まさか進化なのか!?!」

「・・・やっぱりクロエ様よりアリス様のほうがすごいんじゃない？」
クロエ「な・・・進化？」

ここで進化について説明

進化とはポケ○ンよろしくなある程度使い魔に経験値が溜まると突然起きる現象である

進化すると体が大きくなり進化前より強くなる

アーク「・・・ほんとになんていうもん選んだんだよ」

・・・にしてもこれはこれつで変な感じだな

前のD—w a k e rはダツシユモードになるとき体幹的に体操座りにならないといけないけど

このピューパ・・・常時エジプトにあるスフィンクスみたいに寝転がってるんだよな・・・え？ようやく横になれたからいいじゃないかって？バカ野郎これはこれで腰が痛めそうなんだよ

前足のキヤタピラを動かしながら文句を言うアーク

そのあととはいうとそのまま夜を過ごすことになり明日の朝に学園に帰ることになった

・・・そんな光景を見ているのは学生のエルフだけではなかった
ガサ!!

草の中に擬態していたのは

「おいおい・・・面倒くさいのを召喚したエルフがいるじゃないか・・・」
「破壊するべきか？」

「いや、あれは主人を捕まえて我が国の兵力にしないか？」

「・・・とりあえずこれは上層部に報告しないとな」

素晴らしいながら茂みの中から四人の男がエルフの偵察に来ていた

・・・そのマントにはバサビイ共和国の紋章が描かれていた

・・・学園に付き生徒はそのあと次の日まで自由時間になった

俺はどうしているのかと・・・

アーク「おお！これが新しい我が家!!」

なんとということでしょう・・・(某劇的なビフォーアフターの曲を流しながら)

あのボロボロで今にも倒壊しそうな倉庫兼家がきれいになっていくのではありませんか

目が覚めるといつも天井に穴がありその日の天気をもすぐわかったのですが・・・天井、壁の穴はすべて塞がれ床も壁の木は新しいのに変えらまるで森の中にいるようなにおいがします

そして極めつけは玄関にある看板・・・そこには「アリス・フォン・アーハムの使い魔アークの家」とありがたく誰の家のなかまで示してくれています・・・さりげなく看板のはじっこには小さく「アリスが書きました」とわからせないように小さく書いてますが割と目立っていました・・・

だけどなあ・・・

アーク「入れないんだよ!!畜生!!」

問題ができた

玄関の扉がD | w a k e rサイズで現在はピューパだから入れないのである

え？人型にはならないのだった？

現在の見る？

以前のポイント 2050

消費

開発ピューパ 2000

残り 50

・・・って感じである

よくもやってくれたな・・・あのエルフ皇女

他の体になりたいが今度こそもったいないので貯めることにした
しかし、せつかくできた家なので

アリス「おお！広いわね!!」

アリスに中を体感してもらっている

アーク「ありがとな。新しくしてくれて」

アリス「ふふん！もつと褒めてくれてよ?」

アーク「はは・・・はいはい、ありがとう」

そのあとはアリスが新しい体になった使い魔の体で、はしやぎま
わって今日は終わった

十二発目 ピューパ生活

ちゅんちゅん・・・

林間合宿が終わってそれからそれから一週間たった
ぎゅいぎゅい・・・

どっかの第一皇女のせいで決められた機体「ピューパ」の体を起動
する

なんかようやく横になれたけど今度は立ちたい・・・
本家では腕のキャタピラで四つん這いみたいに立ったけど足が
なあ・・・

あと、大きくなつたせいで新しくなつた家兼倉庫にも入れなくなつ
たので外で野宿した
すると遠くから・・・

アリス「アーク!!起きてるでしようね!!」

アーク「ん?ああ、アリス・・・おはよう」

アリス「ん、おはよう・・・・・・」

アーク「なんだ?」

アリスが俺をジツと見てくる

アリス「あんたさ・・・開発で姿が変わるって言ったじゃない・・・
一番大きくてどれくらいなの?」

アーク「え、なに急に?」

アリス「・・・なによただ気になっただけじゃない」

アーク「えつと・・・一番大きくてサヘラントロプスとエクセルサ
スかな?どっちも山のようにデカイぞ?」

アリス「そ、そう・・・それはよかつたわね」

・・・実はアリスには一つ問題を抱えていた
アリス(え?アークつてアレより大きくなるの?・・・やばいわね・・・
このままじゃ使い魔審査に引つかかるわ・・・)

使い魔審査・・・それは使い魔の主人が使い魔を大切に育てている
のかというものでコレができる前は使い魔を得た魔法使いの中に奴
隷のようにこき使う者がいたので作られた

アリス（あれ以上に大きくなってしまったら・・・どうやって彼を過ごさせればいいんのよ!!）

アーク「・・・大丈夫か？アリス？顔色が悪いぞ？」

アリス「な、なんでもないわ・・・それより行きましよう？」

「そういう移動を開始した

・・・俺の胴体上に乗って

アーク「あのあ・・・アリスさん？なんで俺の上に乗っているんですか？」

アリス「なにつて私とあなたが一緒の速さで行くより乗っていったほうが速いでしょ？」

アーク「俺は馬車か何かか・・・」

とりあえず食堂に向かうんだが・・・

バキ

ボキ

ベキ

アリス「ちよつと！破壊し過ぎよ!!」

・・・うんまあ・・・なんとなく予想はしてたけど

でさえもんなピューパ・・・

横幅がデカいせいで道端に生えている木や草を破壊しながら前に進んでいく

アーク「H A H A H A!! 森林破壊は楽しいZ O Y!!」

アリス「え!?!今なんか言った!?!破壊している音のせいで聞こえないわ!?!」

アーク「別に聞こえなくてもいいぞ!!多分、俺の世界の人にしかわからないネタだから!!」

・・・あ、そういえば

アーク「なあ・・・アリス・・・前のオーク・ロードのことだけど・・・俺が攻撃ができなくてピンチな時があったじゃん？あの後急に体が軽くなったんだけど・・・なんでか知らん？」

アリス「ああ・・・それは私が”付与魔法”をかけて走力と腕力を

上げたのよ」

え？アレが付与魔法？ワンチャン、一般兵が精鋭並みになれるくらいあったぞ？

アリス「・・・確かに私は皇族だから魔力が多いから出る効果も大きいけど結局のところその付与魔法を受けた兵が遠距離から魔法を受けて戦闘ができなくなったら私が危険になるからそんなにすごいことじゃないわ」

・・・とまあ、主人と他愛無い(?)ことをしていたら食堂に着いた

アーク「・・・なあアリス」

アリス「なによ？あ、婚約の申し立てなら断るわ」

アーク「んなわけよ・・・俺ってどうすれば？」

アリス「あ・・・」

例によってデカイので食堂の入り口にも入れない

・・・っていうことなので食べ終わるまで外で待つことにした

アーク「はあ・・・この体も楽じゃねえな・・・」

まず目立つ

こっちは背が高くなって遠くからでも見れるけど・・・まあ目立つ

わ目立つわ

あと、デカイから移動する際は何かを破壊してしまう

仕方ないので食堂の前で待つことにした

アーク「もしこの状況を他の転生者がいたら狛犬か！ってツツコマれそうだな」

そんなポケ〜つとしているとどこからか小鳥たちが来て俺のポツドや機銃に止まり合唱を始めた

アーク「おう、俺は止まり木じゃないんだが・・・まあ、いいか」

こんな小鳥たちが歌えるのは今が平和だからだと自分に言い聞かせみんなで日向ぼっこをしていると

カチャカチャ・・・

小鳥たちとは違う音が混ざりだした

・・・しかも右腕から

アーク「ん？なんだ？」

右腕を見るが何もいない

気のせいかと日向ぼっこを再開するが・・・

カチャカチャ・・・

・・・また鳴り始めた

アーク「んんん？」

よく目を凝らすと右腕の近くに陽炎のような蜃気楼のようなその空間が揺れているような場所を見つけた

何なのかよくジーっと見ていると

リン「・・・どこ見てるのよ」

その空間からリンが肩にカメレオンのような生き物を乗せて出てきた

・・・なんかやつぱりか

「・・・おい、あれって図書館の幽霊か？」

「え、女性だったの？」

「まず、存在してたあの？私てつきり都市伝説みたいのかなっておもってた・・・」

・・・どんだけ知られてないんだよ

アーク「とりあえず人の右腕で何をしようとしていたかについて一言」

リン「特になにも？・・・それよりあれって右腕なんだ・・・メモ

メモ」

まったく何も思わないって顔をしながらどこからか出したメモ帳でメモするリン

アーク「・・・でもカチャカチャ・・・っていった」

リン「安心して別にあなたが新しい体になったから気になつてぶんk・・・話で聞こうとしてただけよ」

アーク「え、今分解って言いかけなかった？」

リン「つてあなたも私が姿を現したとき・・・見たわよね？」

アーク「イイエナニモ」

・・・ごめん見たわ

リンが姿を現した時思いっきりカメラが大きい胸を写してたから急いで目を閉じた（カメラをオフにした）

リン「・・・えっち」

アーク「はいいえつちですみませんでしたー」

リン「じゃあ、お詫びで分解許可を・・・」

アーク「それはダメだ・・・つてかそれがリンの使い魔？」

リン「・・・うん、幻獣である霞蟲スケイル・・・名前はすーさんよ」

・・・すーさんつと呼ばれた使い魔は器用に舌を伸ばしてお辞儀をした・・・カメレオンだよなどう見ても？

アーク「あ、もしかしてさっきの透明化も？」

リン「・・・うん、この子は透明化もできるけどなんと匂いまで消してくれるの」

・・・やべえな、この使い魔

透明度がうちの光学迷彩並みに高い・・・しかも温度カメラにも反応していなかった

アーク「・・・じゃあ移動とかにも？」

リン「・・・うん・・・みんなに見られないように透明化して移動している」

アーク「・・・やっぱり・・・親のこと？」

リン「・・・聞かないでつて言わなかった？」

キツ!!と長い髪の間から瞳が見えた

アーク「・・・いや、聞かないよ。それに他の人にも言っていない」
リン「・・・そうならいいわ」

安心したのか髪を整えるリンだが

アーク（・・・意外と美人だな）

髪の間から見えた素顔はとても整っており肌は白く月のように優しい顔だった

すると・・・

アリス「アーク！お待たせ！」

主人が元気のいい声で出てきた

アーク「お、アリス・・・早かったな？残さず食べたか？」

アリス「流石に残さないわよ・・・でも、ピーマンは残すわ！あれは食べ物じゃない!!」

アーク「いや、残していないことはいいけど好き嫌いもダメだろ・・・」

アリス「そんなことより・・・誰かと話してた？女性の声が聞こえたけど？」

アーク「え？誰ってアリスが言っていた図書館の・・・っではない!？」

振り迎えたが知らないうちに使い魔の能力を使ったんであるう・・・すでにいなくなっていた

アリス「え、あの図書館の幽霊？」

アーク「おう？なかなかの美女だったぞ？」

アリス「え、女性だったの？男性かと思ってた・・・」

・・・リン・・・ちよつとくらい外に出ろよ

アリス「・・・それよりアーク・・・今、あなたその子を美女って言ったわよね？」

アーク「ああ？だって本当に美人だったもん？」

・・・すると自分の主が血相を変えて

アリス「なに他の魔法使いに惚れてんじや！この浮気者!!罰を与えてやる!!」

アーク「はあ!?ちよ!?惚れてなんかいないし!」

アリス「だまらっしやい!!くらえ!!」

バリバリ!!

アーク「あぎやあああああ!」

・・・なぜか主人に罰を与えられつつそのあと教室に向かって行った(罰の痛みは大きくなっても変わらなかった・・・てか女性エルフって美人が多いから理不尽じゃね?)

く教室く

教室にアリスが着く

普段はここではワザと聞こえるように陰口をたたく生徒がいるが今日はなかった

・・・どうやらオーク・ロードの件で生徒がアリスに陰口をたたくのがなくなったらしい。逆に慕うエルフがまだ少人数で四人くらいだが増えていった

「あーおはようございますアリス様!!」

「おはようございますアリス様。今日も美しいですよ!!」

アリス「え、えつと・・・お、おはよう」

しかし、普段挨拶もされなかったアリスが急に挨拶をされるのは・・・少し気恥しいようだ

アリス(・・・こうやって陰口をたたかれなくなったのもアークのおかげね・・・もし人間に戻れたらなにか上げようかしら?)

少し、自分の使い魔に感謝しつつ授業の準備を始めた
が・・・

ぐしやああああああああああああああああああ!!

建物……校舎が揺れた

「な、なんだ!?!」

「まさか魔物!?!」

アリス「な、なに!?!」

アリスも何とか揺れに耐えて窓の外を見るが……

アーク「あ、おいアリス」

まだからどこかで見えたことのある黒い筒に赤い光を放っているものが見えた

アリス「アーク!?!何してるのよ!?!」

先生「な、何事ですか!?!」

先生たちもどうしたのかとやってくる

アーク「え、うちのアリスがちやんと授業を受けれているか見たいけどこの体だからこうして寄りかかって見てるだけだが?」

アリス「あんたはオカンかなんかか!もう!外でおとなしく待つてなさい!!」

アーク「えく暇なんだが……」

アリス「いいから!!」

アーク「ういーす」

……主人に怒られたアークはおとなしく引き下がっていった

「すごいなアリス様は……今まで無能かと思っただけどあの巨大な……ゴーレム?ゴーレムかあれ?」

「うくん……あ!じゃあさ!!あのアーク?だっけ?つてさ!ゴーレムでもありナイトでもあるからさ」ナイトゴーレム”つて呼ばない?”

「え、でもアークつてさ”めたるぎあ”つていう兵器なんだろう?そう

呼んだほうが良いんじゃないか？」

アリス（す、すごいわね：：陰口をたたかれなくなったただけで万々歳なのに私の使い魔が有名になるなんて・・・）

オーク・ロードをほぼ単騎で討伐した上に巨大化してごつくなくなったアークはみんなから一目を置くようになり割と人気者（主に男子）になった

・・・がそれを面白いとは思わない者もいる

「くそ・・・なにが“めたるぎあ”だ・・・結局はゴーレムと変わりないじゃないか・・・」

「特に男子は何よ・・・あんなごつい奴のどこがいいのよ」

「それにオーク・ロードなんて我らがクロエ様にかかれば楽勝であるう」

アリスの姉であるクロエを慕う者にとっては邪魔であった

クロエ「・・・オーク・ロードを倒したからって調子乗りすぎよ」

??「クツクツク・・・クロエ様・・・あいつは少々わからせる必要がありますねえ・・・」

クロエ「・・・あなたは」

シン「あ、私シン・カーニバルと申します・・・」

シン・カーニバル

カーニバル家は侯爵で代々商業を得意としておりアーハム皇族にも特産品や珍しいものを収めておりそのおかげでアーハム帝国内では発言力が特別に強い家だ

発言力が強いせいか黒い噂もたえていない

クロエ「・・・それでなに？」

シン「・・・私に一つ案があります。こちらをご覧ください・・・」

シンの手には薄い書類があった

それをクロエに見せるシン

クロエ「ふむ・・・わかったわ勝手にやりなさい」

シン「ありがとうございます・・・」

学園のとあるところである計画が進んでいった

その紙には・・・

アリス・フオン・アーハムの使い魔”アーク”処分計画

・・・と書かれていた

全授業が終わり放課後・・・

俺は校舎から割と近くにある小山の上でiDROIDで曲を聴いていた

アーク「ふう・・・やっぱPW編の”SING”は最高だぜ・・・
さて、そろそろかな？」

ピリリリ・・・ピリリリ・・・

するとどこから電話の通知音みたいな音が聞こえてきた

アーク「ほくいアリス？終わった？」

アリス「・・・本当に繋がったわ・・・えっと終わったわ」

実をいうとあの林間合宿の一件からアリスは何かあったら通知を入れるようになった(アークは現在iDROIDを持ってないが機能は使えるので通話ができる)

・・・んじや、迎えに行きますか

あ、その前に一つ試してみるか・・・

アリスがいる方向に向き、背中部分にあるブースターを回していく
・・・やっぱピューパっていったらこのどういう原理かわからない
ブースターでしょ!!

そしてある程度暖めて本家みたいな声で言う

アーク「ブースター点火」

ぎゅううううん・・・

どこおおおおおおおん!!

うお!? やっぱ水陸両用は伊達じゃないな!!

森林の中を猛スピードで駆けていく

そしてあつという間に・・・

アーク「おーい!!アリスー!!」

アリスが勉強している校舎に着いた

アリス「うくん?・・・あ、アーク。ねえ、一つ聞いていいかしら?」

アーク「なんだ?」

アリス「なんか女性の歌声聞こえなかったかしら?・・・なんかこう・・・ラ〜♪ララ〜♪みたいなの」

アーク「あー・・・それ俺だよ」

アリス「え、アーク。あんな高音がでるの?」

アーク「えく・・・正確には俺じゃなくてこの体が歌ってる」

アリス「・・・もう、疲れたからそれ以上聞かないわ・・・わかんなくなってきた」

疲れたそうなのでアリスを背中に乗せて寮まで送り倉庫の近くで寝た(安全スピードで)

十三発目 なんぞえ!?

・・・ピュールパになって数か月が経過した
少しずつだけどピュールパの体にも慣れれ来た
んで、今どこにいるのかという・・・

わああああああああああああああああああああああああああああ!!

「やれー!!」

「殺せー!!」

・・・なぜか闘技場にいます

えっと・・・なんでこうなったんだっけ?

3日前・・・

「おい! チョコレートゴーレム!! アレをよこせ!!」

アーク「はいはい、銀貨二枚ねー」

そこは校舎のグラウンド近く

俺は生徒と裏取引(カロリーメイト販売)を行っていた

「はあ! はあ! こ、これだよ!! これがないと生きていけないんだ・・・」

もう完全に見た目が中毒者である

アーク「お、おう(引)。計画的太らない程度にたべろよ?」

「わ、わかってるよ!! でも、辞めたくてもやめられないんだ・・・」

そう言っつて寮に戻っていく生徒

現在、他の小さい体になりたいので悪徳商法で商売カロリーメイトしている

以前のポイント 50

消費ポイント

食料 カロリーメイト 1

獲得ポイント

銀貨二枚(200ゴールド) 2

合計ポイント 51

え? アリスはって?

うちの主人は最近増えてきた友達と仲良くガールズトーク中だ
本当はついていきたかったけど

アリス「なんでガールズトークするのに男が混ざってくるのよ」
って言われて追い返されたYO・・・確かに男だけどきあ・・・内
容が気になるじゃん・・・ねえ？
すると・・・

シーベルト「あ！アーク君！ここにいた！」

枝をかき分けてやってきたのは担任の先生だった

・・・ちなみに名前は「シーベルト・アイスバーン」だって
アーク「あれ？先生どうしたんですか？」

シーベルト「えっと・・・学園長がアーク君を呼んでる・・・」
アーク「え、学園長？」

え、ごめん学園長誰なんかわからないやけど・・・

シーベルト「あ、じゃ道案内してあげるよ!!」

お、それはありがたい

シーベルト「それじゃ、乗せてくれ!!」

目をキラキラしながら言うウチの担任のシーベルト先生

・・・絶対乗りたいだけだろ

シーベルト「何を言っているんだい!!こんなかつこいいよくてゴツ
イものに乗れるなんて男のロマンがくすぐられるだろう!!」

・・・結局乗りたいんかい

まあ、男のロマンなら仕方ないか（それでいいのか主人公）

こうして俺は背中にシーベルト先生を乗せて安全スピードで向
かって行った

その頃のアリスは最近できた友達と寮でお茶会をしていた

「そういえばアリス様・・・」

アリス「ん？なあに？」

「アリス様ってもう結婚相手っているんですか？」

アリス「ごふう!？」

あまりにも唐突な質問に紅茶を嘔いてしまったアリス・フォン・アーハム

アリス「けけけけ、結婚相手!？」

「はい！いるんですか？」

アリス「いいいい、いるわけないじゃない!？」

「え、でもアリス様って今年で18にもなるんですよね？」

「そうですよ！彼氏の一人ぐらいいないんですか？」

・・・恋人はいるのかと聞かれているが

恋なんてアリスには無縁な存在だと思っていた・・・今まで自分の姉のほうが優秀でそっちのほうを優先されて縁談なんて1、2回くらいしかなかった

アリス「・・・はあ、私には恋なんて一生ないわよ」

「ないんですか!？こう、心がドキツ!!てなったりとかは!!」

アリス「・・・ないわよ・・・っというかドキツてどうやったらなるのよ?」

「ないんですか・・・アリス様も一度は体験したほうが良いですよ!!」

「・・・そうですよ!・・・特に禁断の恋とかって一番燃えますよね!!」

アリス「禁断の恋?何よソレ?」

「・・・えつとですね・・・簡単に言ったら種族の壁や身分の壁を越えて恋をすることです!!」

「あと主従関係とかの恋っていいわよねえ♡」

「ほんと、普通貴族の私たちが平民に恋なんてありえないけど・・・なんか羨ましいですよねえ」

アリス「・・・いまいちわからないわ」

「あら?でも、アリス様の使い魔とかどうですか?」

アリス「わ、私がアークを!？」

「あ!確かにアークって元はただ人間ですね!!」

「それにアリス様とは主従関係!! すごく良いですわね!!」

アリス「ない!! ぜつつつつつつつつつたいたいじゃない!!」

使い魔と結婚なんて御免だと否定する第二皇女

しかし、ふと自分の使い魔を思い出してみる・・・

召喚されたときはすごく胡散臭いやつでしかも元人間だった。最初はただの使い魔として接していたがオーク・ロードの件から少しだけカツコよく見えてきた・・・言われて見ればアークは基本的にちゃんと話してくれるし自分が皇族だから畏れ多いなんてこともないの
でアークとの会話は結構楽しいのである

すると扉から・・・

ドンドンドン!!

扉からノック音が鳴りそこから一人の男子エルフ生徒が来た

「た、大変です!! アリス様!!」

アリス「え? どうしたの!？」

慌てた様子で説明する

「グラランドを!」

そういわれグラランドを見ると目に入ったのは帝国騎士がいた

帝国騎士は主にアーハム帝国の戦場としての兵士、警備兵、近衛兵に分かれているが今回は警備部の所だが・・・

アリス「・・・なんで帝国騎士がここに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・え?」

帝国騎士に囲まれえるように連行されていくのは・・・岩のような巨大な体に丸太のように太い腕、そして頭に黒い筒

・・・自分の使い魔であるアークであった

アリス「はいいいい!？」

・・・それはアークとシーベルト先生が学園長の部屋に着いた頃に

戻る

コンコン

シーベルト「失礼します！シーベルト・アイスバーンです！アーク君をお連れしました」

校長室に入ると部屋の中央に座っていたのは

マーカス「おお、シーベルト君かね・・・それでそのアークとやらはどこに？」

マーカス・トーマス・・・元アーム帝国魔法使い軍 隊長で「旋風のマーカス」ともいわれていたほど魔法の技術も高く恰幅のいい中年の男性であった

シーベルト「あ、えっと・・・彼なら外にいます」

マーカス「え、なぜ・・・あ、そうか林間合宿でか・・・」

・・・シーベルト先生が中に入っていたけど俺は例によってデカイので外で待っている

シーベルト「アーク君！」

先生が中から出てきた

マーカス「・・・ご、ごつい！カッコいい!!・・・おっほん!!私はこの学園の責任者のマーカス・トーマスだ。君がアリス様に召喚された使い魔で元人間のアークかね？」

・・・まさかの学園長でした

アーク「え、えっと・・・その学園長がこんな使い魔になにか用ですか？」

??「・・・それは私が言しましょう」

学園長の後ろから煌びやかな鎧を纏った騎士が出てきた

ロン「私はアーム帝国警備部担当のロンだ・・・君がアリス様に召喚されたアークかね？」

アーク「ア、ハイソウデス」
こ、怖いなこの騎士・・・
顔が能面みたいな感じで感情が読み取れん・・・
ロン「・・・ふむ、確認した・・・では、やれ」
すると、ロンの後ろにいた部下であろう騎士たちが・・・縄で俺を
ぐるぐるにしてきた
アーク「え、なんすか（困惑）」
ロン「・・・使い魔アーク」

君を五件の“殺人強盗罪”により警備部本部に連行させてもらう」

・・・はい？

アーク「え、殺人？俺が？」

ロン「ああ、現場から君だという証拠も見つかった」

what？

え、ちよつと待って状況が呑み込めぬ

しかし、そんなアークを気にせず連行しようと準備していく騎士たち
ちそこに

アリス「アーク!？」

アリスが血相変えてやってきた

アリス「ちよつとロン!!これっていったいどういうことよ!!」

ロン「・・・アリス様ですか。どうってこの使い魔が殺人強盗をしたのですよ」

アリス「え、アーク？」

アーク「言っておくがアリス……俺は何もしていないからな？」

ロン「とりあえず、続きは本部で……アリス様も」

アリス「わ、わかったわ」

こうして俺達は学園を出るとそこには鋼鉄製の檻のついた荷台み
たいのがあった

……どうやらこれに乗っていくらしい

まあ、これくらいの強度でも破壊はできるがそれだと即犯人扱いさ
せるな……

こうして俺は荷台に乗り檻を閉められ運ばれていった(その時市民
の迷惑にならないよう布を全体にかぶせられた)

〈警備部本部〉

そこは本部の敷地内にある特設の牢屋

そこにアークはおとなしく入っていった

「……遅かったな」

その様子を本部長の部屋から見る責任者とロン

ロン「……申し訳ございません……なんせ、運ぶものがあまり
にも重く牽引していた馬も疲弊しきってしまい到着に大変遅れがで
ました……」

「まあ……あの巨体なら……仕方あるまい……では説明しますか」
本部長が振り返るとそこにはアリスが不満そうな顔をして椅子に
座っていた

アリス「……では説明を」

「はい、ではまずこちらをご覧ください」

本部長が取り出したのは八角形の形をしたクリスタルだった

アリス「……記憶結晶？」

記憶結晶とは通魔機が通信機であるなら記憶結晶は魔力を通すこ

とでビデオカメラ的な機能があり通魔機ほど貴重ではないが庶民には結構高いので娯楽ではあまり使われておらず警備部の証拠などで使われている品物だ

しかし、この記憶結晶は10秒ほどしか記録しないので貴族でもめったには使われない

アリスが記憶結晶を起動するとそこには夜が映し出されていた

《記憶結晶に映っているシーン》

「はあーはあー！」

そこには男が息を切らして何かから逃げていた

そして、途中で止まった・・・恐らく行き止まりに当たってしまったんだろう

「や、やめろ!!うわああああああ!!」

・・・そして最後に記憶結晶が映していたのは・・・巨木のような腕を振り下ろし頭が黒い筒状の頭をした何かだった

《映像終了》

アリス「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・覧になりましたが事件現場には頭が潰された死体があり金品はすべてありませんでした・・・・・・・・アリス様・・・・・・・・これは明らかにあなたの使い魔ですよね？」

アリス「・・・・・・・・そんなわけないわ!!」

アリスが立ち上がり猛抗議する

アリス「アークがエルフ殺しをするわけがないじゃない!!何より動機がないじゃない!!」

「動機なら事前に調査して判明しました・・・・・・・・あの使い魔・・・・・・・・金品の量で進化しますよね？」

そして淡々と saying いく

「我々が出した予想は彼は彼は元人間で元の体に戻るには大量の資金が必要で主人のアリス様に頼みたいが許可を得られるわけがない・・・・・・・・ならいつそ殺して奪えばいい・・・・・・・・疑惑がかけられても自分の主人は皇族だからすぐ終わるであろうつというわけです・・・・・・・・事件を見た市民もいます」

アリス「……見間違えじゃ!!」

「……その市民によると突然、右腕を上げそこから鉄球をだし振り下ろして殺した……そうです」

……確かにアークも何かしら変形をする

「……それに他の四件は記憶結晶はありませんでしたがこれがありました」

そうしてアリスの前に置かれたのは

アークの出すカロリーメイトだった

「この食べ物から大量の毒が検出されました……これによりあの使い魔を犯人と断定しました」

アリス「そ、そんな……」

「もう暗いので詳しくは後日ご報告します……」

その頃のアーク

アーク「……」

檻の中でおとなしく待っているのかと監視の騎士も見ているが

アーク（この檻、せまあああああああああああああい!!）

……内心、大変不満を持っていた
いや、狭ない？

あの騎士さん、めっちゃピューパと同じサイズの檻に入れさせたけど……狭ない？（二回目）

……そんなに目を輝かせながら見る暇あるなら変えてくれません

か？

すると

アリス「……………アーク」

アリスが暗い顔をして帰ってきた

アーク「おう、どうだった？」

アリス「…………ダメね。完全にあなたについていう証拠がそろっているわ」

アーク「ほーん」

アリス「…………ってなんで緊張しないのよ!？」

アーク「いやだって…………俺やってないし…………」

とりあえずどのような証拠があったのか聞くことにした

数分後

アーク「はい？」

…………ピューパにそんな機能あったけ？

アリス「…………その反応を見ると本当にやってないらしいわね…………」

…………でも誰だ？明らかに俺、えん罪だぞ？

アリス「……………」

わかったわ!!この事件、私が何とかして見せるわ!!」

アーク「え、まじ？」

アリス「ええ！林間合宿の時助けられたもん!!今度は私が助ける番だわ!!」

…………本人には言えないけど、不安しか残らないんだけど…………

アリス「なんなら皇族という名の権力を使いまくるわ!!」

アーク「それはダメだろ!」

…………しかし、現状はこの方法しかない

アーク「…………はあ、頼むぞアリス？」

アリス「まかせなさい!!」

・・・ちよつと不安は残るが異世界に来てまで牢屋に一生入れられるか死刑にはなりたくないので自分の主人に掛けることにした

・・・その様子を本部長の部屋から見ている二つの影があった

「・・・本当によろしいんでしょうか・・・」

本部長が自分の背後にいる者に問いかける

シン「いいさ・・・アリス様には悪いですがさっさとあの使い魔とは別れさせて再び無能の座に座ってもらわないといけませんからねえ」

楽しい雰囲気を出しながら答えるシン・カーニバル

シン「・・・それにあいつは元人間だから世論もこちら側に着くさ。あと別れさせた後は魔法研究所の奴らにでも引き渡すか・・・そして僕がお父さんに君を騎士長（騎士のトップ）の推薦に進言しておくよ」

「・・・ありがとうございます」

シン「キミのおかげでもあるんだよ?・・・なんたつて死刑囚を使つたからね」

・・・もう速いかもしれないが（次回の関係上早めに）今回のトリックはこうだ

実は頭を潰されたのはアーラム帝国内で重罪を犯した死刑囚で本

部長が偽造の証拠を作るために監獄から出し演じさせたのだ

アークに似た影もアークとは全くの別人で人形劇みたいにアークの輪郭に似せて作った人形を記憶結晶の前に出して丁度アークの大ききになつたら撮影者が記憶結晶を持ちながら走つてあたかも逃げているように見せた

あとは事前に頭を潰しておいた死刑囚を置き記憶結晶も証拠として現場に残しておいた

・・・ちなみにこのことは部下のロンは知らない

シン「さて、計画も次で最終段階だ」

月の光が窓から差し込む中不気味に笑っていた

十四発目 ピューパ戦Ⅱ敵終了のお知らせ

あれから二日が経過した

俺は何をしてたかって？檻の中でジツとしてたよ!! (泣)・・・あ！でも暇だったからVR空間でピューパの訓練をしていた

あの後、アリスは休日を使ってでも会いに来てくれた

アリス「・・・アーク」

アーク「アリス・・・どうだった？」

アリス「駄目ね・・・帝国民全員がこのことを信じ切っているわ」
その手に持っていた紙には・・・

「特報!!アリス・フォン・アーハム皇女の使い魔“アーク”・・・殺しの疑い!?!」

・・・つて書かれていて内容も読ませてもらってけど

嘘だねこれ・・・いやだつてピューパの腕が鉄球になる機能なんて無いからね？

・・・そのせいか他の所属の記者が真相を確かめようと俺が留置されている場所に押し入ろうとしてきた。流石に場所が警備部本部だったので入れなかったが壁を登ってみてくる輩もいた

アーク「明らかに嘘だろ・・・これ書いた所どこなん?」

アリス「えつと・・・カーニバルっていう貴族が運営する会社よ」
カーニバル家について聞く

アーク「・・・もうそいつが黒じゃん・・・皇族権力でどうにかならん?」

アリス「できるならもうしているわ・・・えつとね・・・この帝国の内部政治は“帝国議会”の貴族によって決められている」

貴族が政治・・・中世ヨーロッパか？

アリス「カーニバル侯爵はアーハム帝国内のほぼ半分の商業に牛耳っているわ・・・そのせいかカーニバル侯爵家が恩を売ってある貴族も多くて議会内ではカーニバル家が間違ったことを言っても皇帝以外は言いにくいだよ・・・しかも、アーハム皇族にも特産品や希少な物を収めているからお父様皇帝も注意するだけで終わってしまうわ・・・私も言いたいけどつい最近まで無能って呼ばれていたから効果はないわ」

アーク「・・・俺でもわかる・・・めっちゃ面倒くさい奴やん・・・：：：：：逆に証拠のほうは？」

アリス「・・・そっちもダメ。皇族の私が本部長に見せてほしいから直談判したけど・・・あの使い魔の主だからダメって断られたわ」
・・・万事休すか

アーク「ぬううう・・・こうなったら脱獄の案も・・・」

アリス「ちよつと!?!いくら死にたくないからって脱獄はやめてよ!!もしあなたが逃げたら入れ替わりで私が責任で入れられるから!!」

アリスとどうにか無罪であると証明しようかと話し合っていると

シン「おお!アリス様!!これはこれはようこそ警備本部へ!!」

アリス「シン・カーニバル・・・なんであなたがここにいるのよ」
本部へとつながる階段からまるで劇の主演のように優雅に下りてくるシン・カーニバル

なんだろう・・・無性に殴りたい

シン「なぜって・・・私はこの次期警備部責任者候補なのですから!!」

アリス「ええ!?!そうなの!?!」

シン「それで・・・罪人アーク!!君の処遇が決まった!!」

え?もう!?!

アリス「はやすぎじゃない!?!まだ捕まって二日しか経てないわ!!」

シン「いいえ?これはカーニバル家としては妥当な速さだと思いませんが?」

うわ(引) 家柄の部分を強調したわコイツ

シン「キミには明日とある場所に来てもらう!!」
そう言つてシンはその場を後にした

・・・んで今（闘技場）に至る

なんでここ？

すると闘技場の上の階・・・貴族層の階かな？の所からシンが出てきて高らかに堂々と宣言した

シン「ご来場に皆様！お待たせしました！只今より罪人アークの裁きの討伐を始めます!!」

・・・ほわっつ!?

アーク「え、どゆこと!？」

アリス「どうゆうことよ!!シン・カーニバル!!」

アリスも向かい側の観客席から抗議をする

シン「くつくつく!!普通、五人も殺しておいて牢屋で反省つてことはありえません・・・それに周りをご覧ください!!」

周りを見ると・・・

「そんな罪人殺してしまえ!!」

「そいつは血も涙もない!!」

「裁きの鉄槌を!!」

罵声をあげていた

シン「聞こえてますよね？ただの死刑じゃ世論、帝国民の怒りは収まらない!!だからこうして決闘で君を殺すしかないんでね!!」

するとシンは観覧席から飛び降り魔法で衝撃を抑えながら着地をし決闘場の入り口から三十人くらいの煌びやかなローブや鎧を着た

エルフとその使い魔・・・馬や狼中には大型の鷹などの三十体が現れた

シン「素晴らしいだろ？この者たちは君に鉄槌を落とすと誓った勇士たちだ！名付けて《カーニバル・ナイト》だ!!」

ザっ!!とシンの掛け声とともに杖や剣を掲げる兵士たち

「うおおお!!頑張れ!!カーニバル・ナイト!!」

「そんな悪魔やつつけちゃえ!!」

「勝ってくれ!!」

観客も声援を送る

・・・さて現状確認

決闘場の形は円状で壁は直角ではなく斜めっている・・・これは先ほどシン曰く

シン「昔、この決闘場で壁を登って逃げ出そうという輩がいたので斜めにし滑るよう仕組んでおいた!!まあ、罪人でそんな姿のお前が登れるわk（略）」

つて言つてたな

んで俺の体は・・・会場の中心部にいてなんか不気味な色を放つ鎖につけられて、その鎖は四本のデカイ石の柱に付けられていた。これはすぐに壊せるかな？

つてかこれって・・・

自分は柱に囲まれるように鎮座しており柱から外側には行けなかった

つまり自分は動けずシンたちは自由に動けて仮に接近しても柱があるので里側に出れば安全という構造だった

・・・これ完全にリンチの形やん

アーク「・・・なあとこでコレ決闘？討伐？なんだろ？こつちが君たちを・・・殺してしまつたらどうするんだ？」

「ぶははははははは!!シン様！この悪魔私たちが殺せると勘違いをしますぞ!!」

「余裕かましてんぞあいつ」

「別にアイツは人間だからバカなんだろ」

シン「……お前が殺せるとは思えんが……そうだなこれは清らかなものだ！仮にお前が私たちを殺しても罪にはしないってことじゃない！！」

あ、よかった……もし、殺しちゃったらどうしようと思ってた……ちなみになぜこんなにもシンが余裕でいられるかはアークに繋がられた鎖である

これはバサビイ共和国の魔法研究部から密輸した「対魔法使い用鎖」つというものでアーム帝国では禁じられている物品だ。これを繋がられた魔法使いは普段より力がわかず魔法も使えなくなるという代物だ

しかし、問題ができた

アーク「俺に魔物以外を殺す覚悟ってあるのか？」

今回はアーク・ロードじゃない……普通に人間に似ている生物工ルフだ

本当は殺しなどしたくない……だけど死にたくもない

シン「それでは……はじめ!!」

シンの合図と共に取り巻き達も攻めて魔法演唱をする

アーク「……どうすr（バチツ!!）……うが!？」

突然、脳内で弾けるような痛みを感じ意識が薄れだした

アーク「な、なんだ……」

原因不明の痛みによって闇に沈んでいく中……

一瞬だけ銀髪の女性が自分の中を見ていた

アーク「お前!?!どこかで!？」

そしてその女性は耳元でささやいた

「to be dominated by me is not a
s bad for human pride as to be
dominated by others of yours
pecis」

・・・ああ、始まってしまった

結局自分は何もできなかった

アリス「アーク・・・」

そして・・・

シン「それでは・・・はじめ!!」

シンの合図が鳴り討伐が始まってしまった

騎士たちがアークを囲うように移動をして演唱を始めた

アリス「アーク・・・どうすれば!!」

・・・しかし、アークは何もせずにとただ立ち尽くしていた

「なんだ！もう戦意損失したのかあ!？」

騎士の一人が言うが答えは違った

ゴ・・・ゴ・・・ゴ・・・

自分の使い魔はゆっくりと動きだし・・・どこか女性の声だと思わ
せるような声で言った

ピューパ（アーク）「AI戦闘モード・・・起動します」

「な、なんだ!？」

アークはゆっくりと動き出し黒い筒にある赤い目でシンたちを観察した

ピューパ（アーク）「敵性反応・・・1・・・2・・・3・・・62・・・観測完了・・・ごみ処理戦闘を開始します」

「はーなにがえーあいもーどだ！我が神の使徒の前ではむいmがしやああああああああああ!!」

騎士の一人が何かを言おうとしたが・・・

「嘘だろ・・・」

「柱を片手で!？」

アークは片手に繋げられた柱を鎖ごと引き抜き投げ飛ばし騎士の一人にぶつけた

・・・ぶつかった騎士は壁際まで飛ばされ赤い液が垂れ出していたシン「な、なぜ動けるのだ!？」

答えは簡単!!

ピューパは魔力で動いてないから!!

「くそーやれ!」

「パワー系の魔物か！皆離れろ!!こいつは凶体もデカいから攻撃が当たるはずだ!!」

騎士たちは魔法を放ち使い魔はそれぞれの個性を使つて攻めるが・・・

ピューパ（アーク）「ブースター点火」

キュイイイイイイイ

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

「え、はゞ（バキヤ）」

運悪くアークの進行方向にいた騎士や使い魔は轢かれてひき肉になつてしまった

そしてそのまま本来登れないように設計されているはずの壁を

登っていった

ピューパ（アーク）「ラ〜♪ラ〜♪」

「こいつ?! 殺しながら歌ってやがる!」

ピューパ（アーク）「敵・・・残り54・・・機銃掃射開始」

ズドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!

アークは騎士たちの周りを走り回りながら機銃掃射を始めた

「な、なんのおと・・・ぐわあ!」

「うぎやあ!?!」

ある者は頭に鉛玉をくらいまたある者は足などを撃たれ動けなくなった時に上をアークが通って潰されていった

使い魔も矢をも跳ね返す硬い鱗や巨体も役に立たずまるで主従関係無く平等に殺すようだった

シン「くそ! 皆の物!! 壁を建てるんだ!!」

「!!」
「!!」
「!!」
「!!」
「!!」

シンの掛け声と共に魔法を発動し騎士たちを囲うように土壁が出て来てアークの凶弾を防いでいった

「おおーシン様! さすがです!!」

「助かりました・・・」

シン「よい・・・それより今の回転で何人死んだ?」

「はい・・・魔法使いが15人、騎士が14人、使い魔が9体で合計39です」

シン「・・・たった今の一瞬で?・・・くそ、これだったら奴に冤罪をかけなければ・・・」

「え・・・シン様・・・今なんと?」

シン「い、いや!! 何でもない!!・・・それよりヤツは今どうなっているぞオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!・・・ぐわあ!」

リズリー)が下からすくい上げるようにピューパをほんの少しだけ持ち上げ始めピューパの動きを止めた

「おおお!!いいぞー熊公!!」

「いけええ!!時間を稼げエ!!」

前輪の腕が地面から浮かびピューパが持ち上がりだした

それを見てチャンスと思ったのか他の騎士、使い魔も参戦し熊を後ろから支える者が現れた

・・・が運命の女神は微笑まなかった

ピューパ(アーク)「ブースター点火」

アークはブースターを起動し・・・

ぐしやあああああああああ!!

下から持ち上げひっくり返そうとしていた生き物をトマトを潰すように断末魔を上げさずにひき殺した

だが・・・十分に時間は稼げた

シン「食らうがいい!!バケモノ!!」

声をしたほうを向くとそこにはシンと生き残った魔法使いと巨大な火球だった

そのサイズは皇族のクロエの出す物よりかは少し小さい程度だが一般人からは十分に脅威であった

上位広範囲火魔法”プロミネンス”

シン「いけえええ!!”プロミネンス”!!」

ごおおおおおおおおお!!

巨大な火球はアークに迫っていき・・・

ぼおおおおおおお!!

直撃し燃え上がった

シン「・・・やったか!？」

しかし、思い出してほし・・・

本家ではあの伝説の傭兵でさえ数十発のミサイルや銃弾を与えて破壊ができた

クロエでさえロケットランチャー一発ほどの威力しかないのにそれより小さく威力も弱くあくまで燃やしているだけだ・・・なので

ピューパ（アーク）「・・・敵・・・残り15」

燃え上がる炎の中からゆっくりと出てきた

傷も前方の装甲が少し凹んだくらいであった

シン「そ、そんな・・・」

シン・カーニバルは落胆し絶望した

彼の世界の兵器はどれほど強大なんだ・・・つと

ピューパの右腕がシンに振り降ろされる・・・

「きゅ~~~~~!!」

しかし、アークの黒い筒に何かが覆いかぶさった

シン「セン!？」

それはシンの使い魔の大型鷹の“セン”であった

センは主人を守ろうとアークの目であるポッドのカメラ部分を飛び回り邪魔をした

ピューパ（アーク）「・・・障害発生・・・排除します」

アーク危険と感じ振り上げた腕を降ろし機銃で倒そうとするが相手は空を飛び回り躲けていく

だが、センのほうも飛び方に違和感があった

シン「・・・セン!?!お前もしかして骨を折ったのか!?!」

どうやら先ほどの土壁を破壊されたときに何かに当たって骨を折ってしまったらしい・・・だがそれでもセンは主人の勝利のために

飛び続ける・・・そして!!

カチツ!!

ピューパ（アーク）「・・・機銃の弾数・・・ゼロ・・・補充を開

始します」

シン「ッ!? チャンスだ!! 総員! 奴の黒い筒に向かって攻撃だ!!」
シンの命令と共に色とりどりの魔法がポッドに向かって行く

ズドオオン!!

アークも攻撃の苛烈さに動きを止めた

シン「よし!! いいぞ!! このまま押し切れ!!」

あと少してこのバケモノを倒せると思い攻撃を続けるが・・・

アークの下にあった棒が何かを貯め始めた

アーク「・・・対象の脅威度判定が上昇しました・・・・・・・・・・・・・・・・
放電開始」

ばしやああああああああああああああああああ!!

棒から目で見えるほどの雷が放射され・・・

シン「セン!? セエエエエエエエン!!」

空から黒焦げになった使い魔が落ちてきた

だがアークはそんなのには目もくれず敵に一体ずつ放電していく

「ぐああああああああああ!!」

「いああああああああああ!!」

ピューパ（アーク）「敵・・・残り8・・・」

シン「はあはあ・・・みんな!! 逃げ回れ!! あいつの使う雷魔法は一人にしか攻撃できない!!」

シンはアークの攻撃を見て勇士に命令を出す

すると、先ほどまで一人ずつ死んでいったが走り回ることですぐに済み、逆に攻撃のチャンスだった

「炎の聖霊よ!! 今こそ力を見せたまえ!!」 “ファイヤーボール”!!

「雪の白虎よ!! その咆哮で敵を凍らせよ!!」 “アイスインパクト”!!

「母なる大地に降りたまえ!!」 “ロックブロック”!!

極色の魔法がアークの体に命中していくがどれも爆破系ではなく

「燃やすや凍らせる」なのでアーク自身はさほどダメージを負わない
そして邪魔だと認識したのかアークは行動に移った

アーク「・・・避雷針・・・射出」

「な、なんだあれは!？」

エルフの戦士たちが見たのはアークの体から空に舞い上がる無数の円盤だった

「全員防げ!!」

闘技場全体に地面に落ちてきて警戒するがなにも起きない

「な、なんだったんだ?」

「爆発でもするのかと思っていたが・・・何もしてこないな!!」

「いけ!!止めを刺せ!!」

・・・しかしそれは単なる準備だった

ピューパ（アーク）「・・・チャージ開始」

「うおおおお!!止めはもらったああああ!!」

「おい、よせ!!雷魔法が来るぞ!!」

「くそ!!離れる!!」

シン「・・・・・・・・・・・・・・・・・・いやな予感がする」

しかしシンは冷や汗を掻いた

今まで見たことのない動作、そして落ちてきた謎の円盤

・・・最初はこっちは60もいるから負ける要因はない!!つと思いで
帝国騎士団から全員（騙して）スカウトしたがたった一瞬で半分も減らされてしまった

そして運命の時がきた

ピューパ（アーク）「・・・放電開始」

ズシヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアン!!

闘技場に巨大な雷鳴が鳴り視界は白色に支配された

そして気がついた時には

シン「あ・・・・・・・・ぐ・・・・・・・・」

地面にひれ伏せていた

体は動けずピリピリとしていた・・・唯一動く目で回りを見ると他の全員も同じようになっており先ほどの止めを刺そうとしていた青年は消し炭にされただろう

どうにか動こうと身をよじるが・・・

キュラキュラキュラキュラ・・・

死の音が迫った来た・・・

そして死神は巨木のような腕を振り上げ・・・

「い、いや!? た、たすk (ゴシヤア!!)」

「ひい!? く、くるn (グシヤア!!)」

「ああ、神よ・・・我に救いをs (ズシヤア!!)」

そこからはもう虐殺のようだった

アークは作業をするように一体ずつ確実に処分するために腕を振り下ろしていった

シン「ひ、ひいひいひいひい・・・」

技術や誇り、忠誠心も関係なしに仲間が殺されていくのを見ていたシンは貴族の気品の欠片もなく尿を垂れ流しながら闘技場の壁を登って逃げ出そうとするが・・・

ザリザリザリ・・・

シン自身も言っていたがこの闘技場は逃げ出さないように壁は斜めで滑るように設計されているので登っても途中で滑り落ち自身が出した黄色い水溜まりに顔から落ちていった

そして死神は最後に残っていたシンに使づいていった

シン「ひいひいひいひい!? わ、悪かった!! 僕は実は君に冤罪をかけて軍に売ってアリス・フォン・アーハムを無能の座に戻そうとしたんだあ!! け、警備部責任者もグルだあ!! だ、だから命だけは・・・」
シンは白状するが今のアークにはそんなのは知るかとばかりに腕を振り上げ・・・

シン「ひいひいひいひい!? タスケテクエエエエ!?」

その死の塊はシン・カーニバルに迫って・・・

アリス「やめてアーク!!」

・・・来ることはなくシンの目の前に自身の主人が立ち憚った
ピューパ（アーク）（ピタッ）

アリスだと分かった瞬間攻撃を中断するアーク

しかし、アリスはそれでも足の震えは止まらなかった

自分は攻撃魔法は使えない・・・それに目の前にいる使い魔はバケモノに見える・・・だが心の底から叫ぶ

アリス「あんた・・・そんな殺しを楽しむようなバケモノじゃないでしょ!!私、アリス・フォン・アーハムが知っている使い魔^{アーク}は!優しいよ!!だから!私の大切なアークを返せ!」

ピューパ（アーク）「・・・敵性反応・・・更新・・・残り二体・・・しよぶnwkhんふいういあsヴいうp?」

敵だと認識したアークはアリスを潰そうとしたが突如混乱した・・・
そして・・・

アーク「・・・あ・・・り・・・す?」

アリス「アーク!?あなたなの!」

アーク「う、うん・・・え、これって・・・俺が?」

その鋼鉄の使い魔は闘技場で静かに自分がやった過ちを見た

十五発目 決別

以前のポイント 51

獲得ポイント 2500

現在のポイント 2551

・・・シン・カーニバルによる裁きの討伐事件から二週間が過ぎた
アーハム帝国内ではいろんなことがある中・・・

きゅらきゅら・・・

アーク「・・・」

今日も学園内で主人の授業が終わり一緒に帰っているところだ

アリス「ちよつと、アークいつまで暗くなっているのよ!!」

アリスがいつもどおりに元気よく話しかけるが

アーク「・・・あ、すまんアリス」

アリス「まったく・・・いつまで引きずっているのよ」

アーク「なあ・・・アリス・・・」

アリス「なあに？」

アーク「・・・あれ本当に俺がやったのか？」

あの時シンが率いるカーニバル・ナイトと対峙したところまでは覚えていたが突然、意識が反転して気が付いたときは一面が血の海だった

銃弾で穴だらけになった肉、何かに潰された肉、焦げている肉・・・

それはやった犯人は自分であることをすぐに理解した

何故なら意識が朦朧している中ナニカノ悲鳴と潰す感触を感じたからだ

アリス「・・・やったけど・・・気にすることはないわよ・・・逆
にいいことをしたわよ？」

・・・あれからどうなったのかというと

シン・カーニバルが殺される（未遂）前に言った言葉が原因となり帝国議会を中心とした再捜索が開始された

カーニバル家を家宅捜索すると違反品の「対魔法使い」道具が大量に見つかりさらに賄賂・国外密輸・無断情報流出の証拠が出てきたそう

これをいいことにまるで今まで調子に乗って侯爵のくせに発言してくれたな!!と言わんばかりに他の貴族が非難をした・・・なんなら下級貴族までもが言い出すほど

これを見た皇帝のカーニバル家に対する処遇は貴族身分の剥奪・資産差し押さえ・貿易や商業で独占していた権利を無償で放棄し他の貴族に譲る・永久国外追放の令が出されカーニバル家は侯爵という身分を失くし只のエルフとなり一夜として屋敷も売却されシンを含んだ家族全員は国の外に出ていった

カーニバル家がいなくなったことで貴族は精神的に帝国民は生活的にうれしかったそう

貴族はあの邪魔者がいなくなったので発言ができるようになり帝国民はカーニバル家が独占していた商業権利もなくなったので商人は活動が活発になり物価もすごく安定してきて平和になったそう

これにはアリスの父親であるアレクサンダー・フォン・アーハムは現アーハム帝国皇帝であり「雷神」とも呼ばれるほどの魔法の実力者も安心したそう・・・

アリス「なんなら私だって先週に皇帝陛下お父様に呼ばれて・・・」

先週・・・

アーハム城　皇帝の間

アリス「・・・以上が私の使い魔“アーク”のわかっている詳細です」

「・・・真か」

「・・・あれが別世界の兵器・・・どういう技術なんだ？」

アリスは帝国議会から招集を要請されアーハム城に来て議会貴族に自身の使い魔に掛けられた冤罪と詳細を伝えた

アレクサンダー「・・・ふむ、そうか・・・あれ

が別世界の出身ならあの未知の力にも納得ができる」

皇帝は静かに聞き入れ納得した

アリス「では皇帝陛下・・・それでは失礼します」

アレクサンダー「・・・ああ、アリス・・・最後に一つだけいいか？」

アリス「へ？・・・は、はい!!な、なんででしょう!!」

アレクサンダー「・・・此度はアーハム帝国、帝国民のためにカーニバル家を追いやってくれたのに感謝する・・・お前の使い魔にもよろしく伝えておいてくれ」

アリス「・・・は、はい!!ありがとうございます!!」

アリス「・・・ってことがあったんだからね!!」

ふふん♪と胸を張って自慢するアリスだが・・・

アーク「そう・・・か・・・よかつたな」

なんとも活気がない感じで褒める使い魔

アリス「ねえー!折角滅多に褒めないお父様から褒めてくれてしかもよろしく言われたのよ!もっと誇らしくしなさいな!!」

アーク「・・・そうかな」

正直の所・・・まったくうれしくない

自分は別世界の住民でこの世界の皇帝のすごさがまったくわからないのだ

それに大体の理由が他にある

アーク「・・・エルフ殺し、歌う死神か」

それはあのシンとの決闘が終わったとのことだった

俺は自身がやった過ちに愕然とした後、一旦アリスとは別れて外で待っていた

俺はまだあの人数を殺したことに信じ切れていなかった・・・すると一人の老婆がこちらに走ってきた

・・・最初は身構えたけど・・・その老婆が俺の目の前で止まってこう叫んだ

「……なんで私の罪の無い息子を殺したんだ」

……それは俺が空き缶を潰すように殺したあの若者の親だった
その老婆は目から滝のように涙を流し訴え続けた

そのあとは騎士に連行され静かになったが心の中ではあの言葉が
響き続けていた

……でも俺の心はなんとも思わなかった

それに新聞で見たエルフは俺に感謝しているようだがあの会場に
いたエルフは恐怖で染まっていた

鼻歌を歌いながら殺し、動けなくなつた相手でも慈悲を与えずに若
者関係なく殺していったのでエルフ殺しとか歌う死神と陰口をたた
かれるようになった

アリス「やっぱり……まだあの騎士たちのことが気がかりなの？」
アーク「ああ、アイツらはきつと帰る場所も家族もいたのであろ
う……でも俺はそれを壊してしまった」

この世界がゲームだったら何も思わないだろう
でもこの世界は異世界でも現実だ

アリス「……仕方ないことだとおもうよ」
仕方ない？……なにを言っているんだ

アリス「だって……シンに騙されてあそこにいたのよ？……別
に私だって故人をバカにする気じゃないけど……運が悪かつたしか
いえないわ。それよりもカーニバル家が失脚したアークに感謝して
いる帝国民のほうが多いわよ？……だからあの場にいた彼らは運が
悪かつたていうしかな（ズシャン!!）……きやあ!？」

アリスがしゃべっている途中でアークは地面を破壊した

アーク「ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……」
アリス「ど、どうしたのよ……」

アーク「……アリス……死んだ者たちに運が悪かつたと
か言わないでくれ」

アリス「な、なによ……実際そうじゃない！シンの発言になんの
疑いもせずに信じてあなたに殺されたっていうしk「黙れ!!あいつら
は悪く無かつた!!」……ツ!?なによその言い方!!本当のことじゃな

い!!」

寮に続く道の真ん中でアリスとアークは言い争う

アーク「ああ、確かにあいつらも非のある点もあった!!でも、死んだ原因を作ったのは俺だ!!・・・俺が・・・俺があいつらを・・・」
オーク・ロードの時・・・殺してもなんとも思わなかったがそれはエルフを殺しても同じだった

アリス「そんなたった五人を殺しただけじゃ・・・この世界の全員はあんたみたいな腰抜けになってるわよ!!・・・なに!?まさか私たちを殺したり性奴隷にしてくる魔族にも今みたいになつていの!?そんなんじやこの世界は生き残れないわ!!・・・この世界は先にやらなきや一瞬で死んでしまうわ!!あなたの世界みたいな平和ボケなんて暇もないわ!!」

アーク「・・・まれ」

しかし、ここで一言言つてはいけないことを言つてしまう

アーク「黙れよ!!・・・無能つて呼ばれていたくせに・・・何かを殺したことがなく魔法もまともに使えないでオークすら倒せないくせに殺す覚悟はあるのか!」

アリス「・・・言つたわね!・・・今、私を無能つて・・・一番、君を信じていたのに!!・・・も、もうアークとは使い魔契約を解除するわ!!この屑人間が!!」

アーク「ああ!言つたさ!!こんな同族殺しのゴーレムなんかアリスの使い魔なんて相応しくないし一緒に行動もしたくないだろ!!だつたら好きにしてくるたらいいさ!!」

他の生徒がアリスとアークの修羅場を避けていく中、二人は決別する

アーク「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

アリス「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

そして同時に叫ぶ

アーク・アリス「この・・・バカアリスのわからずや!!」

・・・二人はそのあと何も話さずにそれぞれの家に帰っていった

アーク「・・・生き残れない・・・か」

アリスとは別れた後、もしかしたらこのアーハム帝国を出ていくかもしれないので最後にアリスが直してくれた家兼倉庫の前に行くことにした

アーク「・・・結局・・・あいつには感謝しかなかったな・・・」

アリスとの間にはいろんなことを話した・・・俺の住んでいる世界のこと食べ物のことなど・・・アリスとの会話はとても楽しかったアリスにスイーツの話題を振るとよく耳をパタパタと動かし鼻息を荒らしながら聞いてくれるのがとても愛おしかった

アーク「・・・つてなんでもう間もなく主人じゃなくなる奴のことを考えているんだ俺・・・あれ？」

家兼倉庫に着いたが・・・なぜか明かりがついていた

すると扉を開けて出てきたのは・・・

「おかえりなさい・・・あなた♡ご飯にする？お風呂にする？それ・・・も？わ・た・s」・・・その前になんどこにいたんだよリン・・・あ、やっぱバレるわね」

リンがどこからか持ってきたエプロンを着てまるで夫婦ごっこをしようとしたらしいが・・・生憎だが俺にはパスっていうアイドルいるから即刻浮気になるわ

アーク「んで、なんのようだ？」

リン「・・・見たよ・・・アリス様との口喧嘩」

・・・まあ、こんなにデカい俺と第二皇女のアリスが口喧嘩していたらそりゃ目立つわな

リン「・・・それで君はこれからどうするの？・・・予定がないなら分解しても・・・」

アーク「ダメたい・・・そうだなあ・・・世界中を旅をする予定さ」

リン「ふうくん・・・残念・・・でも大丈夫かしら？」

アーク「・・・どうゆうことだ？」

リン「実際、君って60もの数の敵を一方的に殲滅した・・・その

ことを帝国の新聞社は大々的に報じた・・・報じたことによつて他の国もこの嘘みたいな情報を知るわ、これからは情報は大切な戦略の一つだからね・・・他の国も最初は信じないけども、もしこの情報が本当だったらアーハム帝国はただでさえ強国なのにさらに強くなつては困る・・・しかも使い魔アークがアリスと離反してフリーになるだったら我先にその使い魔を軍に取り入れればアーハム帝国以上の強国になれるつて思つてあなたを捕らえにくるわよ」

アーク「・・・大丈夫さ、俺は殺してもなんとも思わないから何度来ても殺して追いつ返すさ」

リン「・・・でも大変なのはアリス様かもしれないね」

アーク「え？」

リン「だつてさ・・・よく考えてみてよ・・・あのアリス様が君みたいで一騎当千の戦力を召喚ができるほどの実力の持ち主でしかも攻撃魔法が使えないから攫うのも簡単だ・・・だつたらそのエルフを攫えばどの国を侵略しても召喚し続けられるから何も怖くないつてそこら辺のお偉いさんはそう思うよ・・・でも流石に一国の姫様を誘拐しに行くから最初は誘拐のプロとかに頼むね・・・私だつたらそうする」

アーク「・・・そんなの帝国の騎士が何とかしてくれるだろ・・・俺には関係ないことだ」

リン「・・・いいの？多分だけど最悪アリス様を巡つて戦争が起きるわよ」

アーク「・・・」

アリスを巡つて・・・

そうすればアリスは悲しむ・・・

リン「・・・それでも行く気はないのね・・・なら・・・私も行くわ」

アーク「はあ？」

リン「・・・見せてあげる」

するとリンは目元すら隠すほどの大きな前髪を分け耳を見せた
アーク「・・・耳がとんがっていない？」

リン「・・・うん、正確には普通のエルフより尖がっていないわ」
アーク「え、どうゆう・・・」

リン「・・・私ね・・・エルフとドワーフのハーフなの」
アーク「ハーフ!？」

リン「うん・・・母が俊才って呼ばれたエルフで父が国宝級ともいわれているほどの砥ぎ師のドワーフの間に生まれた子よ」

アーク「・・・なんで俺に・・・ドワーフってエルフとは犬猿の仲間だろ？」

リン「なんでつか・・・本当になんでだろうね・・・ただ・・・君と私が少し似ていたからかな？」

リンは初めて他人にいう過去をしゃべる

リン「さつきも言ったけどエルフとドワーフって仲が悪いの知ってるね？私が生まれたころは一応祝ってはくれたらしいけどやはりドワーフの子でもあるからってあまり会いたって思われていなかったらしいは・・・最初は母が生きていたから何も言わなかったけど病気で死んでからは言われたい放題言われた・・・穢れた血だとか中途半端野郎って言われた」

アーク「・・・そうか」

リン「・・・まあ、なんとか耐えていったわ・・・でもある日過激な考えを持つ集団に誘拐されてドワーフの民族浄化をさせるきっかけを作ろうと私を殺そうとするけど・・・私、母が生きている間に魔法をいろいろと抵抗したわ」

でも・・・とリンが続ける

リン「抵抗して逃げたけど運悪く囲まれて襲われたけど咄嗟に・・・プロミネンス・・・あの闘技場でシン・カーニバルがあなたに放ったものを出したら私以外の全員が全身を燃やして逃げ回ったわ」

・・・あの時シンは残りの魔法使いと一緒に放っていた気がするがリンは幼少期のころからそれ以上の魔力を持っていたんだろう

リン「・・・その時・・・初めて殺す恐ろしさを知ったわ・・・殺せず瀕死だったけど悲鳴や怨念の込めた言葉がまだ耳に這いついてくるくらい・・・それに夜だって偶にその時の夢を見るもん」

アーク「でも・・・なんでそんなに平気でいられるんだ？」

リン「・・・それはあなたに出会えたことが一番かな？」

アーク「俺？」

リン「あの事件のあと私は騎士に保護されて事件は解決したけど世の中は甘くなかったわ・・・そのあと私は魔法を学ぶためにもこの学園に来たけど私を知っている人はエルフ殺しとか言われるのが怖かったからずっと正体を隠して図書室に引きこもっていたけどあなたが来てからいろいろと変わったわ・・・だって誰かと何も気にせずに会話ができるって当たり前のことだけどもうれしいことよ？」

アーク「・・・そうか」

リン「別に傷をなめあうってわけじゃないけど・・・それで私は別にこの学園から出てもいいけど・・・あなたはいいの？」

アーク「・・・俺？」

リン「うん・・・多分このまま行ったら・・・アリス様も私たちと似たような道に進むと思う」

・・・同じ道

あのアリスが・・・

アーク「・・・明日、アリスに謝ってくる」

リン「・・・仲直り？」

アーク「いや・・・出ていくのは変わりないさ・・・俺があのまま一緒にいたらアリスまでエルフ殺しの仲間だとか言われるから・・・離れたところから見守るってことで」

リン「・・・そう、まあ私はいいわ・・・だってこんな近くに実験体兼助手がいるんだから」

アーク「え、助手？どゆこと？使い魔って二体以上と契約はできないだろう？」

リン「別に使い魔じゃなくて一人の人間として接するだけよ・・・ついでに乗りものとしても」

アーク「ええええええええ（呆）」

こうして二人で月明かりの中・・・少しほっこりするような会話が続いた

アーク（明日、アリスに会ったら謝るか・・・）

一方アリスは・・・

カチツカチツカチツカチツカチツカチツカチツ

アリス「・・・」

部屋で一人寝巻の恰好のままアークからくれたiDROIDをいじっていた

アリス「・・・殺したことのなくせにか・・・」

カチツカチツカチツカチツカチツカチツカチツカチツカチツカチツカチツカチツ

アリス「使い魔で人間のくせに生意気よ・・・バカアーク」

でも確かに自分は魔物ですら殺したことがない

アリス「い、いいもん!!私だって頑張ればアークとかゴブリンの一体や二体・・・」

しかし、自分でもあれは言い過ぎたであろうか・・・

アリス「・・・明日は謝ろうかな」

・・・そうしよう

アークに会ったらまず最初に謝ろう

アリス「・・・別にあいつのことが好きだとかそういうのじゃないし」

誰も聞いていないことを自分で答える

そしてiDROIDの電源を切ってふて寝をした

・・・そして次の早朝

アリスが部屋から消えていた

十六発目 どこに？

・・・次の朝

俺はリンと今夜出ていこうと約束をして一旦別れた後倉庫の前で待っていたんだが・・・

アーク「・・・こないな」

いつもならすでに元気な声で名前を呼んでくるがいつに経っても来ない

アーク「・・・まあ、当たり前か」

あの夜、無能とか言ってしまったからな・・・

太陽が地平線から出てきたぐらいに起きて準備をしていたが現在はもう日が一番上に来そうだった

・・・なんて言おうかな？

別にデートの待ち合わせって言うわけじゃないけど緊張する

小鳥たちが平和にさえずっているなか・・・

シーベルト「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

平和にさえずっている世界に一つの災禍が舞い降りた

シーベルト「アーク君!!」

アーク「・・・あれ？先生どうしたんですか？」

シーベルト先生が顔を青ざめ息を荒げながらやってきた

シーベルト「アリス様を見ていませんか!？」

アーク「・・・いや、朝からあつてないな・・・俺はアリスとある約束をしてここで待ってたんだが見てもないな」

本当に見ていないので淡々と話すが・・・次の言葉に凍り付いてしまふ

シーベルト「アリス様が今朝からいないんです!!」

・・・は？

アーク「え、どういう・・・」

??「それは私が話そう」

そう言い現れたのは

シーベルト「へ、陛下!？」

アーク「ほえ？」

そこにいたのはアリスみたいに金髪で豪華な鎧を着た男性

アレクサンダー「初めまして・・・そなたが使い魔アークか？」

アーク「あ、はいそうです」

アレクサンダー「私の名前はアレクサンダー・フォン・アーハムで

この国の現皇帝だ」

・・・現皇帝・・・アリスの父親か

アーク「それで・・・アリスがいないって・・・」

アレクサンダー「・・・教師によると一時限目の授業でいつまで待っても我が娘^{アリス}が来ないで心配になって寮の部屋に行くと中は荒らされ制服はひどく破けた状態であって・・・中にこれがあった」

そつと俺の前に出されたのは

アーク「・・・アリスのiDROID!？」

皇帝の手に持っていたのは前にアリスに渡したiDROIDで発信号もそこから出ているので間違いないだろう

アレクサンダー「・・・やはり貴様のか・・・束の前に聞くがこれは一体なんだ？」

アーク「えつと・・・これiDROIDって言って・・・こつちで言う通魔機です」

アレクサンダー「・・・なに？これが通魔機?・・・まあ、いい・・・我々は今からアリスの搜索を開始する・・・貴様はどうする?」

アーク「え・・・どうするって・・・」

アレクサンダー「聞いたところによるとアリスとは使い魔契約を切ったそうだな?」

アーク「ツ!!・・・そうですがなにか?」

アレクサンダー「……見たところこの学園を出て旅に出るそうだが……大変になるぞ？」

……皇帝から旅の心配されるが旅自体ではなく各国からの策略でだろう

アーク「……大丈夫ですよ……俺、ゴーレムなので……それにアリスはこの国の騎士がどうかしてくれるでしょう……」

アレクサンダー「ふん……そうか、ならさっさと消えるんだな」
そういわれ俺は他人事なのでその場から移動した

リン「……本当にいいの？」

出ていこうと学園の門に向かって行くとリンが隣で出てきた

……恐らく使い魔の能力を使ったのであろう

アーク「……もういいだろ……もうあいつとは主従関係じゃないんだ」

リン「そうかもしれないけど……アリス様をこのままにしているの？」

アーク「構わん……この国の人はやたらプライド高いからどうにかなるさ」

そして門の外に出た

アーク「それでほんとに来るのか？」

リン「……うん、だって私の助手だもん」

アーク「……助手になった記憶はないんだがな」

リン「でも……本当にいいの？後悔はない？」

アーク「はあ……くどいよ……俺は生きるために契約を切る……それに彼女のためにも」

……こんな殺しても罪悪感の感じない人間を誰が使い魔にしたいと思う？

リン「……でもその主人が絶賛誘拐されているけど？」

アーク「……」

果たしてこれでいいのか？アリスをこのままにしておいていいのか？

そう自問自答を繰り返していると……

ピロン♪

アーク（ん？なんだ？）

ここ最近聞いてなかった通知の音に少し驚きつつ聞いてみると

通知：本当にこのままでいいのかクソ野郎？

・・・はい？

え、ちよつと待って？通知ってこんな感情的になるっけ？

そして通知は続いていった

ピロン♪

通知：・・・このまま主人^{アリス}を放っておくと彼女をめぐって世界大戦級の戦争が勃発し全種族が攻撃しあいます。そうなるとこの世界にいる生物のおよそ80%が滅びます。そうなると文明の再構築は不可能、事実上世界滅亡です

だから聞いているんですよこの糞あんぽんたん

あなたは確かにエルフという人間に近い生物を殺してしまいました・・・でも、それは高々60人ほど・・・主人を他の国が捕獲してあなたのような兵器を再び召喚するっという可能性はゼロではありません・・・なのでそのままその国は戦争を開始し彼女のせいで何千何万人もの人間やエルフ、他の種族が死んでしまう確率は100%

だから早期搜索と発見、救助をするべきです

・・・通知さん？

どうしたんですか？え？でも、仮に救助しても彼女はこんな化け物に助けられてさらに護衛のためそのまま使い魔して喜ぶか？

ピロン♪

通知：・・・あなたの屑みたいなプライドとまだ幼い部分もある少女の未来・・・あなたならどちらを選びますか？

・・・いや屑って

ピロン♪

通知：え？何ですか？あまりにもメタルギアになりすぎて思考までポンコツAIになったのですか？え？え？いつからそんな人間性のない生物になったのですか？え？え？え？何ですか？「異世界転生したわWWWちよつとイキって無双してくるわWWWついでに王族の女性ももらつていこWWW」みたいなイ○リトみたいになるんですか？

・・・なんか言葉が辛辣じゃない？

あと、イキ○トは原作と全く関係ないから勘違いすんなよ？

ピロン♪

通知：だから!!きつさとあなたにとって大切な人を助けに行けや!!
その神様特典はお飾りか!?あの世界の兵士も何かのために戦っていただろ!?

・・・なんかめっちゃ煽られた気がするけど気にせんどこでも少しくらいかけてみるか

アーク「・・・リン、悪いが少し用事ができた」

リン「ん、もしかして助けに行くの?」

アーク「いや・・・」

殲滅しに行く」

アーク「後リン・・・イキリ〇って知ってる?」

リン「え、知らない」

アーク「おK、リンは通知さんじゃないと・・・」

アリス「う・・・ううん・・・あ、れ?・・・ここは?」

アリスはいつものように目覚めるが最初に映った光景が見たことのない場所だった

寮にある自室のような場所ではなく暗く湿気で冷たい場所だった
アリス「・・・アーク?・・・お父様?・・・どこに?」

いつもみたいな暖かい日差しも感じれず不安になり立ち上がって探そうとするが・・・

ガシャン!!

アリス「きゃ!?!」

前に移動しようとするが首に何かに引っ張られ転倒してしまった

アリス「いててて・・・誰よ引っ張ったの・・・」

引っ張られた首をさすろうと自身の首に触ろうとすると

かちやり・・・

アリス「・・・そんな」

自身の首には冷たい首輪が巻かれ壁につながっていた
すると・・・

カン・・・カン・・・カン・・・

視界が暗いままだがその足音だけは聞こえた

??「お!起きましたね!第二皇女アリス様!・・・いや、元つて言っ
た方がいいかな?」

暗闇の中その人物はランタンをもって現れた

アリス「あ!あなたは!?!」

そこにいたのは・・・

元リーダー「よお!また会ったな!アリス様?」

・・・読者諸君は完全に忘れていただろう

こいつは第七話の「林間合宿 前編」に出たあのリーダー気取りの
エルフであった(ここでは元リーダーとします)

アリス「・・・なんであんたがここにいるのよ」

元リーダー「え?ああ・・・まずこのようになった経緯を離します
かねえ?」

事件2日前 夜

とある酒場

元リーダー（くそーあと少しであのエロい皇女を手に入れたのに・・・あのオークどもが!!）

元リーダーはあれからどうなったのかというと

アリスがアークに救出され先生のもとに戻った後、事の発端をすべて話したので元リーダーはアーハム帝国の咎人となってしまい帝国騎士に追われる日々を送っていた

元リーダー（・・・そろそろこの国では生活しにくくなったな・・・国を出たいが国境では騎士がいて俺を探している・・・あの中二病エルフも前に貴族だって言ってたから頼ろうと思ったがあいつも使えんし・・・やはり金か?）

都市中には彼の顔が書かれたお触書が張られ今朝も食料調達に市場に行ったが何人かに怪しまれた

（ちなみに中二病エルフは確かに貴族だったがあまりの貧乏で家族全員を牢屋に入れようと思ったが母親は事の実情を知りシヨツクのあまり寝込み病気になるって死亡、父親は家族全員を残し一人財産を抱えて夜逃げ・・・つまり現在いるのは中二病エルフ一人なので貴族から奴隷におとした）

・・・そして貴族の誰かが国境の騎士に賄賂として大金を手に入れるようと考えていると

「おい、聞いたか?例の闘技場事件?」

「ああ、俺は実際に見てないけど兄弟が見たそうだな?」

「それがよ・・・ここだけの話だが、歌う死神と主人が使い魔契約を切るらしいぞ」

「まじかよ!?!」

「しっ!!聞かれるだろう!!・・・ほんとここだけの話だぞ?・・・この話は噂で聞いたんだから」

酒場の一角で何やら使えそうな情報を手に入れた

元リーダー（あの皇女と使い魔が契約を切る?・・・確かあの使い

魔は馬鹿なカーニバル家の冤罪を着せられたが公開決闘でその使い魔が一方的に殺していつてあまりの冷酷さと残虐さに「歌う死神」つという二つ名が与えられたつけ・・・しかしこいつは使えるな)

元リーダー「つてなわけです誘拐したんだが・・・まさかこつちのほうが価値があるなんて俺って運がいいなあ!!」

アリス「ふざけないで!!早くここから出し・・・あれ?ない!」
助けを呼ぼうとアークからもらったiDROIDを取り出そうとしたがどこにもなかった

元リーダー「あ、索敵魔法で追跡源とかあったら困るのであの部屋で身ぐるみ全部はがしてもらいましたよWWW」
今着ている服装はというと晴れやかな魔法学園の制服ではなくみすばらしい奴隷服であった

アリス「ちよつと!?!これほぼ裸じゃない!?せめて下着くらい着させてよ!?!」

元リーダー「いやあ・・・相変わらずいやらしい体つきでしたねWWW・・・一回犯そうかなって思ってしまったよ。でもあなたは大切な商品なので何もしませんがね♪」

アリス「え?商品ってどういう・・・きゃ!?!」
一体どういことなのか問いかけようとしたが突如アリスがいる空間ごと動き出した

・・・しばらく移動させられていると徐々に周りは明るくなっていた

そこでは・・・

「1000ゴールド!!」

「いや、1200ゴールド!!」

「俺は2000ゴールド!!」

「さあさあ!!ほかにいないか!!」

いろんな種族の老若男女が自身の番号札を掲げながら払う金額を宣言していった

どうやらオークションのようだ・・・周りには気持ち悪いほど笑いながら買い取ろうとする貴族たち

「いやだあ!!頼む!俺を自由にしてくれえ!!」

・・・しかしこれが普通のだったら別の話だが

今、買い取ろうとしている貴族たちに囲まれるように設置されたステージの上では首に鎖が付けられ足にも鎖が巻かれた男性獣人がいた

アリス「・・・これって奴隷オークション!?!」

元リーダー「そうだ!!いやあ・・・アーハム帝国だったら騎士たちが血眼で探してゆっくりできないので移動に結構時間がかかっちゃいましたね」

よくよく見ると仕切っているのはエルフではなく人間だけだ

アリス「まさか・・・ここってアーハム国内じゃない!?!」

元リーダー「今更気づいたのですか?ま、そんなの今からじゃ関係ありませんけどね」

アリス「え?どういう・・・(ガコン!!)・・・きやあ!?!」

聞き出そうにもまた勝手に動き出し・・・

「ご来場の皆様!!現在、オークションの中盤ですがここで本日の大目玉のご登場です!!」

い
どうやらアリスが入っていたのは小さな移動式の独房だったらしい

アリスは観客に囲まれる形でステージ上に出された

「おい、あれって!?!」

「おお、これはこれは・・・」

「ただいまより元アーハム帝国第二皇女アリス・フォン・アーハムのオークションを開始します!!」

アリス「え!?私の!？」

「しかし司会者!!彼女は仮にも皇族だ?どうやって本国からここに運べたんだ?」

「ああ、いえいえ・・・アーハム帝国は数百年も詠歌（笑）を誇った国なので」

「なるほど・・・内通者か」

「さて・・・さあさあ!!誰が買うかこの世界を手に入れるほどの力を!!皆様もお聞きしたことあるでしょう”カーニバル家闘技場事件”を!そこではこの商品が召喚した使い魔が猛獣のごとく暴れ勝利した!今まで無能と呼ばれていた少女がその時世界を手に入れるほどの力を手に入れた瞬間であった!!しかししかし!これが今夜!奴隷と成って商品に出されてしまったあ!!さあ!!落札額は10000ゴールドからです!!」

その時・・・いろんな種族の貴族の目が変わった・・・まるで目の前の世界を手に入れるほどの商品を手に入れてやろうと躍起になっている目だ

「しかし!それはただの娘だったらこの価格のまま行きますが・・・これを見てください!!」

すると黒ずくめの大柄な男性二人がアリスの入った

アリス「いや!?放して!？」

男たちはアリスをつかみ客の目の前に立たせ体中の細かいところまで見えるようにした

「さあご覧ください!この雪のように白い肌に小麦畑のように輝く金の髪・・・そして何より・・・」

モニユ

アリス「ひゃあ!？」

「この巨大な果実二つを!!・・・ということなのでここからは落札額は10000ゴールドから100000ゴールドからスタートです!!」

「!!」
「!!」
「!!」
「!!」

「司会者?もう少し近くで見えていいか?」

「どうぞ！どうぞ！ご覧ください!!」

「くそおおおお!!最初に買わないでおけばあ!？」

「あ、返品は受け取りません!!買ったものは最後まで可愛がって責任を!!」

アリスの落札額がこれまでで最も高額に設定され会場は大いに盛り上がった

「私は12000ゴールド出そう!!」

「な、なら私は15000だ!!」

「・・・2000000でどうだ?」

それぞれの希望額を言いながら番号札を上げていく中

「5000000でもらおう」

ザワザワ・・・

そつと手を挙げたのは周りより肌が不気味なほど赤く角が生え背中に翼が生えている種族

アリス「あれって魔人!?なんでここに魔人がいるのよ!？」

この会場は恐らくまだエルフや人間の国がある方の領土・・・なのになぜここに魔族領の所属がいるのか

「・・・5000000以上!5000000以上はいませんか!？」

支配人が客にそれ以上はいないのかと問うが
シーン・・・

「・・・いませぬね!!では元第二皇女アリス・フォン・アーハム・・・
ここにて落札!!」カンカン!!

・・・とうとう落札されてしまった

「では・・・ここに買い取りのサインと奴隷契約を」

「・・・それは後でやる・・・どれ顔をみせえ」

買取が成立し乱暴にアリスの顔を上げさせる魔人
アリス「ヒッ!？」

魔人の顔は獣のように鋭く歯は剣のように尖っていった

「くつくつく・・・いい恐怖の顔だ・・・よい、私は満足した帰る」

「え？よろしいのですか？まだあと百人くらい残ってますよ？」

「興味はもうない・・・」

「そうですか・・・ではまたのご来店お待ちしております。」

「・・・ほら行くぞ」

アリス「いや！放しなさい!!」

アリスを買い取った魔人はアリスを担ぎ自身の乗ってきた馬車に乗り込み住んでいる魔族領に向かって行った

元リーダー「ふふふくん♪ふふふくん♪やっぱ関係とは持つておくべきものだな♪」

アリスを買い取った魔人は先に退出しオークションは終わった

元リーダー「にしてもここの支配人はいい奴だな!!この俺も晩餐会に参加していいとはな!!」

元リーダーは国外で生活できるにはあまりにも大金をもらえたのでどう遊んで暮らそうか考えていると今日は晩餐会があつてその次の日に元リーダーを乗せてくれる馬車が出発するようだ

しかも今回は大物を手に入れた自分も特別に参加させてくれるようだ

ウキウキと晩餐会がある会場に向かってしていると

ミンミンミンミーイン・・・

もく・・・もく・・・

鳴き声をしていた・・・そしてそれを丸太のように太い腕と岩のよう
な胴体に頭に黒い筒を付けたバケモノが率いていた」

同様の大量殺人事件が三件同じようにあつたがどれも違法な奴隷
オークションであつた

今後、情報を求む

十七発目 お気に入り

「くっくっく……似合ってるぞ?」

アリス「くっ!……殺しなさい」

あれからアリスがオークションで魔人に買い取られ屋敷に連れられた

移動に数週間くらいかかったので恐らく自分は魔族領にいるのであろう

アリス「な、なによこれえく……確かに奴隷の服じゃないのがいって言ったけどこれもほぼ裸じゃない!」

「……なんだお前は裸で外に行つたことがあるのか?」

アリス「あるわけないじゃない!」

一応、あのボロボロな奴隷服から変えてもらったが今着ているのは胸元を大きく開け足には網スト、スカートもすごく短く背中には何も隠すものがなく、腰に可愛らしいフリルがついている服

アリス「……なんで皇族の私がメイド服を着ないといけないのよぶつくさ文句を言うアリス

「さあ、早速だがメイドの仕事の一環をしてもらおうか?」

アリス「嫌に決まっているじゃない!」

「ふむ……なら仕方ないお仕置きをするしかないか……」

アリス「はあ!?お仕置きってなに(バチツ!!) あぐ!」

言い答えしようとするが首を捕まえ中に浮かされた

アリス「あぐ……息……が……」

「ああ!!なんていい顔なんだ!!宝石のように輝く瞳!!そして月のように白い肌!!ああ!私はなんて素晴らしいものを手に入れたんだ!!」

まるで初恋の相手を手に入れたといわんばかりに頬を赤くさせる魔人

アリスは息ができず顔面蒼白になっているのを気にせず眺める

「おっとせつかく手に入れたコレクションなんだ死なせてはいかな……」
「我に忠誠をそしてその命、我にささげたまえ」……
「スレーブ」

ジジジ・・・

アリス「い!?!・・・首が!?!」

パツと魔人はアリスの首を離すとそこには禍々しく光る紋章が首にあった

「よし、奴隷化完了だ・・・これで晴れて君もこの家の者になったおめでとう!」

アリス「はあはあはあ・・・ど、奴隷?」

「そう奴隷だ・・・あ、確か君は無能と呼ばれてしかも元皇族でこんな汚らわしい魔法なんぞ知らないもの同然か・・・これは使役魔法の一つ奴隷化さ・・・手っ取り早く言うならば・・・君の使役魔と同じ立場になったといえ**ば**いいのかな?」

アリス「私が・・・アークの?」

「そうさ・・・ま、最初は分からないものだ、しかしそのうち少しずつ分かっていくぞ?お前みたいな温室育ちみたいな奴らではなく毎日自由が無く毎日そばにいないといけない苦しみがあ!!」

そして魔人はゆっくり言う

「“ついでこい”」

アリス「な!?!誰が魔族の言うことなんか(ジュ!!)熱!?!」

菌向かおうとするアリスだが突如首に高熱が走り痛みを感じた

「ふふふふ!!これは君の元使役魔君も味わった苦しみじやなか?・・・恐らく召喚された当日に本来の名前を言えなくさせるや完全に従えさせる設定を?私だったらそうするしな!!」

アリス「ツ!?!」

あまりにも的確に当ててき絶句するアリス

アリス(・・・アークって毎日こんな屈辱を味わっていたの?)

初めて知った使役魔の心を感じながら魔人についていくアリス連れてこられたところは魔人が住んでいる屋敷でどうやら貴族のようだ

広い廊下では様々な種族の奴隷がいて食器を運んだりしている

廊下の窓から見える光景は自分のいたアーラム帝国みたいなきれいな青空ではなく血のように赤い空が広がっていた

その空の下では男性奴隷が裸になって荷物を運んでいたりしていた

アリス「……ところでなんで私だけメイド服なのよ？他の奴隷はぼろい服なのに」

「はあ……」次からは敬語を使え」

アリス「いつ?!……なぜ他の奴隷みたいな服ではなくご主人様を選んだ服にしたのですか?」

初めて自分の家族や社交界以外で敬語を使うという屈辱に耐えなからも聞く

「ん?それは君は私のお気に入りでだからだよ」

アリス「お、お気に入りに入り?」

「そう……ま、後でわかるよ……それじゃ、この部屋で待っていてくれ」

アリスが主人の魔人についていると他より大きな扉につき中を開けるとそこには様々な書籍が並んでいた

「ここは私の仕事部屋……ここであの机の上にあるお茶を絶対に飲んでね?」

アリス「は、はい……」

魔人はアリスを部屋に残すと出ていった

アリス「……ああああ!!もう!はじめてよ!こんな屈辱!!」

アリスは魔人が完全にいなくなったのを確認すると思いつきり貯めたものを吐き出した

アリス「なによ!あの態度!!魔族のくせに!!」

バンバンと魔人が仕事で使っている机をたたいて愚痴るすると……

コンコンコン

アリス「しまった聞かれた?……は、はい」

ノック音が聞こえ扉に向かい開けるとそこには

中二病「君が新しいご主人のお気に入りかね？」

そこにはいつしかあった中二病エルフだった

アリス「・・・はい、失礼しましたー」

中二病「ちよつと!?!何をするんだい!?!せつかくオークの件では一緒だった仲じゃないか!?!」

アリス「それはあんたが一番に私を置いて逃げるからでしょう!?!」
開けた扉を全力で閉めようとするが中二病が足を挟んで閉められなかった

中二病「それより手助けしてほしいことがあるんだ!!」

アリス「それはあんた一人でやってなさいな!!それじゃ!!」

中二病「お願いだよお・・・我・・・いや、僕一人じゃ解決できない問題なんだあ・・・」

扉を叩きながら嘆く中二病

まるでストーリーカーのような感じがして気味が悪くなってきた

アリス「・・・もうわかったわ!!手伝えばいいんでしよう!!でも、手伝ったらもう話しかけないでね!!」

中二病「あ、ああ!!さすが元皇族様!!困っている民は見捨てない!!」

アリス「元じゃないわ!!」

こうしてアリスは魔人に許可も得ずに勝手に外に出ていった

アリス「それで・・・何をすればいいの?」

アリスは根っこからお人好しなので断れ切れず中二病エルフについていくとそこはアリスがいた魔人の屋敷のようにきれいではなく倉庫の裏だった

倉庫の裏は黴臭く湿気がひどく暗かった

中二病「えつと・・・この先にいるからそいつに聞けばいいよ!!」

アリス「そう・・・ありがと・・・」

言われたとおりにアリスは倉庫の裏を進んでいった

倉庫裏は奴隷の宿舎にもなっているらしく様々な種族の奴隷がい

た

アリス（・・・なんかやたら視線を感じるなって思ったらこの服のせいでもあるわね）

奴隷の全員がぼろぼろな服を着ている中アリスだけきれいなメイド服を着ているのでとても目立った

アリス（ううう・・・舞踏会とは違う意味で目立つからさつきと用事すませよ・・・）

そそくさと歩を速め奥へ進んでいきちよつとした部屋についた

アリス「はくい・・・来たわよく・・・あれ？誰もいない？」
さつきの中二病エルフの言われた通り進んでいたが頼みごとがあるような奴隷は見かけなかった

アリス「何よ・・・来て損したわ。はあ・・・部屋に戻る」

来た意味がなくなってしまう魔人のいるように言われた部屋に戻ろうとしたが

（バツ!!）

アリス「え？もぐう!？」

倉庫裏から出ようとしたが何者らかに口を押えられ手足を拘束されてしまった

「へへへ・・・いいエルフの女がいるじゃねえか・・・」

「おおー！いい体してんじゃねえか!!」

「しかもあの主人魔人のお気に入りに入りじゃないか!!」

そこには四人の獣人の奴隷がアリスに群がっていた

アリス「むぐう!!むぐうー!!」

叫ぼうとするが口を手でふさがれて叫べなかった

「にしてもよくこんな良い女エルフを見つけたなあ!!中二病!!」

するとひよこりと顔を出したのはさつきの中二病エルフだった

中二病「よ、よくやったでしょう?・・・だ、だから僕も君たちの仲間に・・・」

「あく・・・そういやそんな約束してた・・・後で考えとくは・・・

でも先にこつちだな!!」

素晴らしい獣人の男たちは鼻息を荒くしてアリスに襲う

アリス「いや!放して!!」

「ここ最近、発情期やらなんやらが来て全く発散できなかったからな!!それにこいつ噂で聞いた無能だしな!!」

どうやら絶賛発情期らしい獣人の男たちはその手でアリスの体中をさわる

手が胸や腰、太ももまでべつとりと触っていった

アリス「ツ!!無能じゃないもん!!」

オーク事件の時みたいに自身は無能だからひどい目を合っているアリスなので抵抗をする

アリス「天よ!その怒りを我が手に!」 「サンダーストライク」

アリスはいつか見た雷魔法を使い離れよるとする

「ああ?お前、無能のくせに何が(バチツ!!)あぎやあ!」

アリスの体質上、攻撃魔法は弱くなってしまっているので普通に撃つても効果がないので無理やり手を獣人の男の目にかぶせ発動させる

すると獣人は痛みのあまり手を離れた

その瞬間を逃さまいとアリスは空いた右手で思いつき隣にいる獣人を殴った

「いつてえ!」

そして全力で暴れ手足が自由になったのを確認し全力でその場から逃げた

「あ!待てこら!!」

獣人たちも追いかけようとするが

「貴様ら!!何をしている!!」

見回りの兵士に見つかり追いかけられなかった

「はあはあはあ……な、なんなのよ……なんで私はこんなにひどい目に合うのよ……」

どうにか魔人の部屋まで戻ったアリス

初めて他人を殴った手を抑えながら廊下を進む

今までこのような辱めを受けたのはオーク事件と教室のクラスメイトからのいじめ以降だ

あまりにも久し振りすぎて無警戒すぎた自分が悪いと反省する

アリス「こんな屈辱的なことなんてアークが来る前を思い出すわ……あれ？なんで自分使い魔のことなんか……」

よくよく思い出したらクラスからのいじめがなくなつたことや貴族の間で自分の評判が少し上がったのも彼を召喚して数か月一緒に生活したからだ

アークが驚きの物品や驚異的な戦闘を見てそれからみんなからの目が変わっていった

しかし、自分はどうか？

結局のところそれは全部使い魔がやったことで自分は何もしていない

自分は運よく変わった使い魔を召喚しただけでこの間の決闘場事件やオーク事件でも自分は後ろの方で見ているだけで戦っているのは彼だ

アリス「別に何ともないもん……今回だって自分で逃げれたし」
だがそれは撃退ではなく逃げるためにといった方が妥当だがと自虐をしながら最初に待っていた部屋に入ると

「……………」

魔人が机の上にあるカップを覗いていた

アリス「あ、魔人……じゃなくてご主人様申し訳ございません、勝手に外に出て（ドガアン!!）……ぐふ!?!」

突如、アリスは魔人に殴られ床に倒れてしまった

そんな中魔人はアリスの髪をつかみ上げる

「ねえ？なんで私の許可なく出ていったの？なんで机の上にあるお茶を飲んでないの？絶対飲んでねって言ったよね？ねえ？なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで？」

つかみ上げた魔人の目は光がなく瞳孔も広がっているようだった
アリス「も、申し訳・・・ごさいま・・・せん・・・」

腹を殴られ息がままならない中どうにか謝罪の言葉を言うアリス
「はあ・・・はあ・・・はあ・・・おつといけないな・・・私の癖がつい・・・ゴメンね？」

アリス「いえ・・・大丈夫・・・です」

「ごめんね・・・私、ちよつと情緒が安定しなくてね・・・あとこのお茶、飲んでくれないか？それで今日は終わりだから」

アリス「は、はい・・・ありがとうございます」

さつさとこの魔人から一刻も早く離れたいのと早く一人になりたいのとので机の上にあったお茶を皇族らしく気品正しく飲んだ

アリス（・・・うわ、ナニコレ？なんか無理やりおいしくしたような味・・・コレ本当にお茶？）

疑問に思いつつも飲み干したアリス

しかしここで気になることが

アリス「ところでご主人様・・・ご主人のお気に入りってなんのことでですか？」

「ああ、それならもうすぐでわかるよ？」

アリス「え？どういう・・・ごほ!？」

・・・なぜか喉の奥が痛み、咳が止まらなくなった

そしてそのままアリスの意識は暗い海に沈んでいった

・・・ここはとある邸宅の近くにある森

そこでは魔族領らしく様々な危険な魔獣やモンスターたちがはびこっているが・・・

「ぐ、グルルルルルルルルルルルルルルル!!」

大人の身長ほどある巨大な狼が威嚇しながらソレをにらんでいた
この狼は森の主で森の平和を守っていた

この森には他の森ほど強いモンスターがいないがそれでも平和に暮らしていた

しかしその怪物の周りには

血の海のように広がる森の仲間たちであった

狼は仲間の仇討ちをと持ち前の牙で噛みつこうとしたが

ズドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!

護衛にいたカエルの足をした怪物にハチの巣にされてしまった

その最も大きな怪物は仲間を率いて森を進みとある邸宅が見える丘につき己の瞳で観察した

しばらく見ていると・・・

窓から魔人が女エルフを担いでどこかに運んでいるのが見えた

・・・イタ

アリス「う、気持ち悪い・・・あれ?ここどこ?」

アリスが目覚めたのは先ほどの書籍の部屋ではなく

真っ赤な液体で染まった部屋だった

アリス「な、なによここ・・・」

どうやら自分は椅子に座っているらしいが手足を金属の輪で動けなくなっていた

「おや?起きたのかね?私のお気に入り?」

部屋の奥から謎の液体の入った瓶と注射を待った魔人がやってきた

アリス「あんた!!ここどこよ!!」

「はあ・・・もう敬語を使えなくなったのかい?ま、その方が元気が出

て実験しやすいか」

アリス「実験？」

「見せてあげるよ」

「素晴らしい奥からやってきたのは

中二病「ふー!!ふー!!」

口には猿ぐわをされアリスと同じように拘束された中二病エルフ
だった

「・・・彼はね、今日やってはいけないことをしたからお仕置きをしよ
うと思つてね」

「素晴らしいながら慣れた手つきで注射に不気味な色をする液体を入
れていく

すると

「ご主人様、コレはどうしますか？」

「この執事であろう男魔人がゴロゴロと荷台を押しすぎてきその中に
は

アリス「ヒツ!!」

先ほどアリスを襲った獣人だった

しかし、姿はあまりにも先ほどとはかけ離れ腹から口ができてい
るもの足が異様に巨大化しているものといろいろだった

「彼らは今日の仕事をサボった罰を与えたんだけど・・・途中でプツリ
と動かなくなっちゃってね？」

そして禍々しい液体いっぱいに入った注射を中二病エルフに向け
る

中二病エルフ「むううううううう!!むううううううう!!
!!」

「おっと・・・汚いなあ・・・猿ぐわを外すから待つて」

中二病エルフ「つぶは?!いやだああああ!!マママアアアア!!助
けてええええええ!!」

まるで赤ん坊のようにもうこの世にはいない母親に助けを求める
男エルフ

「・・・はあ、うるさいなあ・・・ま、そんなのどうでもいいか」

そして魔人は手にある注射を中二病エルフの腕・・・

ドス!!

中二病エルフ「え?・・・い、いきやあああああああああああ
!?!」

注射の針は腕にはいかず中二病エルフの瞳に深く刺さった

「ああ!なんていい声なんだ!!もつとこの部屋中に響き渡らせてくれ
!!」

魔人は顔を赤く染めながら注射を上下左右に動かし注射の針を目
玉の中で暴れさせ少しずつ液体を注入していった

中二病エルフ「ああ!?!あ、g t y すいあんヴい b r くお b ヴ あしん
v?????」

中二病エルフも少しずつ体内に入っていく液体に反応してなのか
狂々!たように暴れる

「ああ、安心して・・・もうすぐで終わるから♪」

そしてズプリつと注射の針を抜く魔人

中二病エルフ「あ・・・が・・・ま、ま・・・ままいwんしb
3いうwんしおうくえv?」

注射が引き抜かれた後中二病エルフの頭は肥大化し爆発した

「あくあ・・・失敗かあ・・・やっぱアラクネたちの使った毒は説明書
を読んでから使わないとね・・・さてと」

魔人は破裂したエルフの頭を眺めながらつぶやきアリスを見る

アリス「うぐ!?!・・・げほげほ!?!」

あまりのも過激なシーンにアリスは吐き気を催す

アリス「はあはあ・・・や、やめて・・・来ないで・・・」

「ああ♡ほんといい買い物をしたなあ・・・美しい女性があまりの恐怖
に泣く顔は」

アリスの顔を優しく添えこぼれた涙を舐め取り笑う

「ああ!もつと私のために泣いてくれ!!」

ぺろぺろと犬みたいに舐める狂った魔人

「ああ、おいしかった・・・待っててね君にはさつき見たいな毒じやなくて剥製の液体を持つてくるから」

アリス「ま、まさかお気に入りって・・・」

「そう、私が剥製にしたい奴が私のお気に入りってことだよ」

アリス「い、いやだあ!!死にたくないよお・・・アーク・・・」

「あれ?まさか自分の使い魔に助けを求めているのかい?」

平然とした顔で準備する魔人

「無駄に決まっているじゃいか?彼にとつてはようやく手に入れた自由だよ?今まで皇族というトップにこき使われて自由が無くなった生活なんて最悪以外の言葉が出ないさ」

アリス「・・・く、くるもん!!私の使い魔だもん!!」

幼い少女のように泣きじゃくるが魔人は断言する

「はあ・・・君はまだわからないのかね?彼は絶対に来ないよ場所的にも関係的にも」

アリス「アークならそんな関係ないわ!!」

「・・・じゃあ聞くけど彼が一度でも君に忠誠を誓ったことはあるのか?」

アリス「ツ!?!」

「・・・その様子だと無いようだね?・・・さてと早く剥製にして紅茶でも飲みながら眺めるとしようかね」

素晴らしい注射を準備するが

「おっといけない液体を忘れてしまった」

「どうやら魔人は剥製の液体を忘れてしまったようで奥に消えていく」

アリス「ツ!!」

そこからはというところアリスの行動は早く拘束している椅子を思いつき暴れた

すると運命の女神は味方してくれたのか今までの尋問に等しい魔人の実験で出た被験者の血が手錠の金属に錆を作っていたようで

バキ!!!

アリス「やった!!」

両腕が自由になり足かせは魔法で破壊しこの狂気の満ちた屋敷から脱出するために走り出した

しかし・・・

「おや?逃げましたか・・・これが終わったら買い替えようと思っていたのですが失敗でしたね・・・」

アリス「嘘!？」

戻ってきた魔人がアリスの逃げだした瞬間を見て落胆した

「まあ、最近遊んでいませんでしたから久しぶりに遊んであげましょう・・・さあ!!10数えるので早くお逃げ!!」

そして最悪な鬼ごっこが始まる

アリス（別にアークがいなくても!!アリス・フォン・アーハムを舐めないで!!）

・・・アリスは部屋の扉を乱暴に開け駆け出した

十八発目 見つけた

・・・ここはとある魔族領の屋敷

そこでは

アリス「はあはあはあ！」

アーハム帝国の第二皇女アリス・フォン・アーハムが逃げていた彼女は数週間前に元リーダーに攫われ奴隷オークションで売られてしまいこの家を買われたがその家の主人が狂って剥製になりかけ全力で狂った鬼ごっこ中だ

しかし背後から

「どこまで行くこうというのかね？」

魔人が三日月のように曲がった微笑みを浮かべながら追いかけてくる

逃げようにもこの邸宅は今日初めて来た場所なのでここがどこなのかもわからなかった

アリス「いや!!」

後ろにはあの魔人が歩いて追ってき振り返っただけでも怖かった本来の魔法使いなら魔法を使って倒すがアリスにはそれができない

い
なので逃げるしかない

「ああ！本当に懐かしいな!!昔飼っていたペットと追いかけてこしたのを思い出す!!まあ、その子も実験体に使っちゃったけどね・・・」

後ろから迫ってくる狂乱から逃げる

本当は今すぐにでも自分の使い魔^{アイ}を呼びたい

しかし、先ほどの魔人の言葉が心に刺さる

本当にその使い魔は忠誠を誓ったか？

思い返せば彼がしたいということは何もしてあげずと連れまわしている

アリス（・・・彼の自由・・・私、本当に彼の主人としていられてるの？）

広く長い廊下を走りながら自身に問おう

しかし後ろの魔人に捕まりたくないので考えるのをやめ走る
しかし・・・

アリス「行き止まり!？」

アリスには地の利が無く行き止まりに当たってしまった
「・・・ハンティン^狩グの時に大切なものを知っているかい？」

コツコツと歩きながら迫ってくる魔人

「獲物を捕らえるときに時間をかけて倒してしまうと時間がかかって
肉の質が落ちてしまう・・・だが逃げ道をふさいで一気に殺してしま
えば質のいい肉が手に入るのでね」

アリス「誘いこんだの!？」

「そうさ・・・いやあ、貴族なのに久しぶりにはしゃいでしまった・・・」
頭を掻きながら歩を速めアリスに迫ってくる

アリスも反抗したいが魔法は使えないので却下、今見える限りある
ものは飾られた花瓶と絵と鎧

アリス「ツ!!コレ!!」

アリスは廊下に飾られていた鎧が持っていた剣を抜き取りへつぴ
り腰だが構えた

「・・・ほう、魔法使いが魔法を捨てて剣で挑むか」

アリス「・・・」

キツと魔人を睨み剣先を向けるアリス

「しかし・・・温室育ちの皇族や王族どもは誰かを殺すという経験を得
たことがない・・・」

パチン

魔人が指を鳴らすと後ろからゾロゾロと他の奴隷が出てきた

「捕まえろ」

「ひい!?!は、はい!!」

魔人は奴隷の一人である子供奴隷に命令する

子供は奴隷化されたときにつけられた首の紋章の呪いによって反
抗ができず命令通りにアリスに向かって突撃する

アリス(大丈夫よアリス!!ただ剣を振ればいいだけ!!そうすれば相
手はもう立ち上がれない!!)

初めて剣を握った

今まで魔法使いとして接近戦は想定されておらず筋肉的なことはしたことがなく今握っている剣がとても重く感じる

重さに任せて振りかぶり上段から左斜めに振り下ろす

ザシユ!!

剣先は子供奴隷の肩を通り腹を通って骨盤から出ていった

剣先が通っていったところからポタリと血が出ていき少し遅れて血の噴水が子供から出てきた

「痛い・・・痛いよお・・・」

できた血の池に倒れこむ子供奴隷

「何寝ている!!」 さっさと起きて捕まえろ!!」

しかし魔人はそれを許さず再び命令をする

「む、無理だよお・・・痛いよお・・・おかあさん・・・おとおさん・・・」

泣きながらあまりの痛さに無理だというが

ジジ!!

「あ、熱い!？」

首の紋章が熱を帯び痛みを与え命令を強制的に遂行させる

「二度は言わんぞ?」 さっさと起きて捕まえてこい!!」

「う、うわああああああああああ!!」

子供奴隷は涙を流しながら血を流し再びアリスに突撃する

アリス(くる!!)

アリスも子供奴隷の突撃に対して剣を握って振りかぶろうとするが

アリス「あれ?」

なぜか剣が地面と張り付いたかのように持ち上がらなかった

そしてようやく気付いたのだ

アリス「あれ?・・・呼吸ってこんなにきつかったけ?」

自分の手は水につけた後のように濡れ、呼吸もまるで喉に何か詰まったかのようにしずらく、足も震えていた

アリス「な、なんで・・・きや!？」

なぜか剣が上がらず、結局子供奴隷に拘束されてしまった

アリス「はあはあはあ・・・なんで・・・手が震えるの?」

「はあ・・・ようやくかい・・・」

アリス「何を・・・盛ったの?」

「おや?どうやら私の毒だと思っっているようだね?残念だけどそれは君の中から出てきたものだよ?」

アリス「・・・え?」

「戦場で初めて実戦する若者はこの戦いで活躍して出世しようと思うが実際は戦った後は後悔で戦場に立とうとは思わなくなる・・・それはなぜか知っているかい?」

抑えられているアリスに近寄り

そしてきつぱりという

「それは初めて生き物を殺すからだよ。今ここで自分は相手の命を奪おうとしている、相手を殺した時の感触が手から離れない、相手の今までの思い出をすべて消そうとしている。それが今君の中で初めて渦巻いて混乱しているんだよ」

そういわれ思い出す

自分の振った剣先は子供の肉を切り裂き、骨を砕き内臓を引き裂き血を噴出させた

アリス「うぐ!!」

そしてようやく自分が犯したことを思いだした

今、自分はこの子供の物語を終わらせようとした

そして、どこかにいるであろう帰るべき場所を行かせなくさせようとした

さらに親も悲しませようとした

「・・・もしかして初めて体験するって思っているのかい?」

アリス「え?」

「・・・彼はこんな苦しみに耐えながら戦ったんだよ?・・・だから

さつきも言っただろう？彼が君の迎えには来ない理由」

アリス（アークってこんな苦しみを味わっていたの？）

まだ子供奴隷は生きていて血を流しているが速く治療すればならないが一人も殺していない

だが自分とは逆に使い魔のアークはたくさんのおークと60体ものエルフや使い魔を殺した

もう、見てわかるほど味わう苦しみが違う

「彼は苦しかったじゃない？たった君みたいな少女一人のために名誉もなくただ大切な家族が待っているのにそれを壊す。それがどれだけ苦しんだろうな？」

アリス「やめて・・・もうやめて・・・」

「君がいなくなったことで彼は自由になった、ようやく行きたい所も行ける、君に許可なくやりたいこともできる・・・ああ、彼は君がどんだけ恨んでいたんだろうね？」

アリス「・・・お願い・・・もうやめて・・・」

なら今までの彼はずっと自分を憎んでいたのか？

学生生活は確かに楽ではない、しかし彼との会話はとても楽しかった

彼との会話は自然と笑顔になれるほど面白かった

・・・だがそんなときでも彼は自分を絞め殺したかったのか？

アリス「ごめん・・・ごめんね・・・アーク・・・」

「もうさう？死んで楽になったら？そうすれば彼も許してくれるかもよ？」

・・・そうか

その方法が一番いいかもしれない

今まで自分は何もせずただ眺めていただけ

ずっと彼だけ汚れ仕事をやって自分だけ楽をしていた

アリス「・・・」

生気のともっていない虚ろな瞳から自然と涙が出てくる

・・・自分はあの時なんで彼のことをわかってやれなかったんだ？何が仕方ないだ・・・そんな言葉で終わらせるようなことではない

アリス「……………もういいや……………もうどうでも
そつと吐露し力が入らない右手を魔人に捧げる

「ん〜やつと私のお気に入りにできるね!…さて痛いのは一瞬だ、
そのあとは気持ちよく死ぬるよ」

魔人はアリスの召喚魔法には興味がなくただその顔に恋をし自分
のコレク剥製シリウスションにするために買ったのだ

魔人の注射針がその華奢なアリスの腕に入り込み……

?? 「キキ? キツキー!!」

「な!? なんだ!」

突然、天井から何かが降ってきて魔人の妨害を始めた

アリス「……………だれ?」

その体は黒く丸い球体に三本の腕が生えたいかにも魔物らしい見
た目のメタルギア

仔月光「きゅいきゅい!!」

仔月光はアリスの手を握り立たせるよう促す

アリス「……………ついていけばいいの?」

もはや何もかもどうでもよく考えていたアリスは何の警戒もなく
初めて見た見た魔物についていく

「くそ!! 待ちたまえ!!」

魔人も追跡しようとするが

「坊ちゃん!! 大変です!!」

「なんだ!? 私は今忙しい……………」

「門をご覧ください!!」

廊下の窓から外を覗いてみると

ズドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!

「ぐあああああああ!!」

「な、なんだこの魔物は!」

いつも綺麗に可憐に育ててあるバラの上で、カエルの足をしているがそれを支える胴体は生物とはかけ離れた鋼鉄の塊、そしてその上に搭載されている黒い棒が火を噴き轟音を奏で続けている魔物

製品名称はIRVING（アーヴィング）

またの名を・・・月光

月光は持ち前の跳躍力で縦横無尽に飛び回り警備兵を減らしている

「総員!!後退して陣を組め!!」

警備長らしき魔人が叫ぶと警備兵は綺麗に盾を構え陣形を作った

月光「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それを見て月光は跳躍をやめ観察をし即判断する

月光の体に取り付けられたミサイルポッドから・・・

ドシユウ、ドシユウ、ドシユウ、ドシユウ、ドシユウ!!

ヒユウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ・・・

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!

二体の月光から放たれた対戦車ミサイルは整列し盾を構えた警備兵の中に見事命中し殲滅した

爆風で腕が飛んでいったもの、直撃し見るも無残な姿になったものなど千差万別だった

「くそー・・・母なる大地に帰りたまえ!!”ロックブロック”!!」

運良く生きていた兵士の一人が土魔法で対戦車ミサイルを放った月光二体に攻撃するが

月光（ピ・・・ピピピ・・・）

後ろで待機していたもう一体の月光が

パシユ

魔人は最終的に4 mほどの巨人となりアリスに迫ってきた

・・・が

しかし十分に時間は稼げた

仔月光「((o * ▽ *) o)」キタア!!」

仔月光の一体が何かに反応し天井に向かって手を振り始めた

そして魔人の妨害をやめアリスの即席の屋根になるよう仔月光た

ちが組み立てはじめできた

すると・・・

「・・・跳躍態勢」

ガシヤアアアアアアアアアアアアアアアアア!!

天井を突き破り降り立ったのは

丸太のように太い腕、岩のように巨大な体、そして黒い筒

それがアリスの目の前で降り立った

アリス「な……ん……で……?」

??「はあ……ようやく見つけたぞ……このポンコツ主人^{アリス}」

それはあの時喧嘩をしよう二度と合えないと思った大切な……そして最も信頼できる使い魔^{パートナー}

「なにもんだあ?」

魔人は先ほどのような紳士的なこれではなく豚のような声でそのメタルギアに問う

アーク「……………まあ、歌う死神^{デス}って言えはわかるかな?」

十九発目 別れ

・・・さてとようやく見つけたぞアリス
目の前にはいつしか喧嘩し決別した主人と出入口には醜い巨人
がいた

・・・恐らくアレがアリスを買い取った魔人か

「歌う死神?・・・なるほど、お前がアークか」

アーク「・・・名前を知っていて光栄だよ」

でも少しダイナミックすぎたな・・・

多分、元は綺麗な広間だったかもしれないけど俺が跳躍したせいで
ボロボロになってしまったもんな!

リン「ケホケホ・・・助手・・・ちよつとヤンチャすぎ・・・」

アーク「そういうお前もよく落ちなかつたな」

ピューパの肩からリンが顔を出して文句を言う

アーク「リン、アリスを先に外へ」

そう言われたリンは降りてアリスの手を握り駆け足で出ていった

「しかしどうやってここが特定できた?・・・あのエルフも追跡できな
いよう証拠は残していないと・・・」

アーク「確かにアリスのiDROIDも残されていて追う手段がな
くなった・・・だけど何も追えないっていうわけじゃない」

数週間前

リン「・・・殲滅しに行く?でも、場所に特定はどうするの?」

アーク「そんなのごり押しに決まってる」

リン「・・・ちよつと待って助手・・・今なんて?」

アーク「いやだから俺はいつあんたの助手に・・・まあいいか、仕
方ないじゃん・・・痕跡もないし目撃されてないし」

リン「でも人手はどうするの?」

アーク「それなら大丈夫!!・・・えつと、開発つと」

前に何か人手が必要な時に使えるなって思った奴らを召喚する

俺とリンの目の前に高さおよそ3mほどの巨体が出現した

足はカエルのようだが鳴き声は牛で体は全く生物的ではない機体
だけどもタルギアの世界では戦車より機動数が多かった奴

月光「もくくくくくくくく」

リン「!?・・・なんか出た!?!」

アーク「こいつは月光、俺の（ゲームの）世界では割と歩兵の敵に
なった機体だ」

リン「へくくくくくく・・・ねえ?この子、解体「ダメに決まっ
ていんだろバカ野郎」・・・ケチ」

何がケチじゃ

月光本人も「何言ってるんだこいつ」って二度見したぞ

月光（・・・）

アーク「え?この魔法使い大丈夫かって?・・・まあ、性格あれ
だけどいい奴・・・かな?」

リン「・・・もしかしてこの子の言葉がわかるの?私、何も聞こえ
ないけど?」

アーク「・・・なんつうか・・・言葉じゃなくて感情はなんとなく
わかるって感じか?」

リン「なるほど・・・」

リンが隣でメモをしながら月光を触りまくっているのはほつとい
て

今回は月光に任務は俺たちが搜索に専念している間護衛で召喚し
た

以前のポイント 2551

開発「月光」 通常型2体、アクティブ保護システム搭載型1体

合計消費ポイント 700×3=2100

現在のポイント 451

・・・こんな感じでいいかな?

戦闘になったら通常型が戦って後ろでアクティブ保護システム搭
載型が援護って感じにした

すると・・・
きつきー!!

月光の中から黒い丸に腕が三本生えた奴が現れた
リン「あら、可愛い」

出てきたのは製品名称はTRIPOD（トライポッド）・・・またの名をフンコロガシ・・・ではなく仔月光

アーク「君たちはアリスの搜索係でいいか？」

仔月光「（。・ω・）ゞリョウカイ」

あと、追加で仔月光を召喚する

以前のポイント 451

開発「仔月光」

合計消費ポイント 90×5＝450

現在のポイント 1

・・・さてと開発ポイントがすつからかんになった
でも搜索用仔月光は月光に乗っていたのと合わせて39体になった

アーク「よし・・・全仔月光に命令!!搜索目標はアリス・フォン・アーム!!追跡装置は使用不可能!!他手掛かりなし!!つてなわけ
人海戦術で探せ!!」

リン「・・・それで私たちはどうするの?」

アーク「え?ひたすら仔月光たちが手に入れた情報をもとにリンの
索敵魔法で風潰しに探す」

リン「・・・私までこき使われるの?」

アーク「まあ・・・うん・・・すみませんね?」

アーク「てな感じだ」

「狂ってるな・・・まさかアーム帝国付近すべてをか？」

アーク「・・・まあね、仔月光様様だよ」

大広間の中魔人と答え合わせをしながらにらみ合う

仔月光を1km感覚で配置してそこから海戦術で探しまくった

・・・まあ、おかげで開発ポイントがすごいことになった

(捕まっていた奴隷は全員救助しました)

以前のポイント 1

一回目のオークション会場襲撃

獲得ポイント 3300

量産 仔月光10セット 900

二回目のオークション会場襲撃

獲得ポイント 2900

量産 仔月光10セット 900

三回目のオークション会場襲撃

開発ポイント 3400

量産 仔月光10セット 900

さつきの森

獲得ポイント 1039

合計 7440

た
おかげで仔月光の数が最初にいた39+180で219体になっ

た
・・・本当は今すぐにでも人型に回したいけど今は目の前の脅威の
排除が先だ

「しかしなぜだ？お前はあの女がアリスいなくなつて自由になれたはずだ？

なぜそこまで助けようとする?」

アーク「別に?ただ彼女をこのままにしておくのはなんか後味が悪いのでね?」

「・・・ふん、そうか・・・しかしアレはもう奴隷で守る価値はないぞ?」

アーク「・・・でも助けるってことには変わりないさ?身分も関係なしに・・・それに俺は一度守るって決めたら変えない主義でね?」
「そう言いながらも魔人と俺は間合いをじりじりと詰めながらにらみ合う」

魔人は巨大化した体の腕に力を込めながら・・・

俺はピューパのブースターの回転数を増やしながら・・・

そして・・・天井からガラスのかけらが二人の間に落ち・・・

ガシャン

それが合図になった

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

ズシヤアアアアアアアアアアアアアアアア!!

「せやああああああああああ!!」

アーク「はああああああああ!!」

魔人の拳とピューパのアームがぶつかりあり地面が割れ両者反動で下がる

アーク（嘘だろ・・・ピューパって数tくらいあんだぞ?それを形保ったまま威力が相殺できるって・・・）

「・・・すごい・・・すごい!!私の拳を耐えられるとは!!」

殴りあつた拳にはじんわりと赤い雫が垂れる中興奮する魔人

「いやなに悪いね?一人で興奮してしまって・・・さて続きをしようか?」

そつと構える魔人

ズドン!!

自分の装甲が凹んでいくのを感じる

アーク「……………ツチ!!うらあ!!」

俺も仕返しに右アームで魔人の腹部に打ち込む

勢いが強すぎて壁を破り外に出ってしまった

アーク「いつてえ……………つかなんで攻撃魔法を使わないんだよ?」

「なぜって……………お前は拳で来るなら私も拳で答えるだけだ!!」

素晴らしいながら腕を巨大化させて殴ってくる

こちらも答えるようにブースターを最大限に使い勢いに乗って右

アームをぶつけ合う

ズアアアアアアアアアアアアアアア!!

ミシミシとアームに悲鳴が鳴る

アーク(すまん!耐えてくれよ!!俺の体!!)^{ピューパ}

ピューパの部品と魔人の血があたりにまき散らせれる

「ああ!知りたい!!もつとこの感情について知りたい!!」

魔人は痛みも感じない様子で拳を振り続ける

アーク「ああ!死ぬまで踊ろうぜ!!」

そして再び質量と質量がぶつかり合う

魔人の右腕が、左腕がピューパの体に衝突し凹ませ破壊し回路を露出させる

ピューパのアームが魔人の皮膚に当たり血を噴かせ肉を出させる

アーク「……………く、はあはあ……………いい加減倒れてくれね?」

「……………そうだなって言いたいのがそうにはいかない」

すると魔人はどこからか取り出した赤色の液体の入った瓶を口で
かみ砕いた

アーク「……………いや、それはないだろお」

みるみると魔人の傷口は治っていき戦う前まで戻っていった

「……………ふう、言っておくがさっきのは活性化剤だ。まさかここまで細
胞がボコボコにされるとは頭が下がるな」

アーク「……………」

「さて、第二ラウンドといこうかい?」

素晴らしいボクシングポーズみたいに構える魔人は隕石のごとく

迫ってきた

・・・やばいな

これ以上、長期戦にされると戦闘中に修理ができないこっちが負けるな

奴は恐らく魔法的なものではなくて細胞みたいに生命的なもので治療したんだろう

細胞で自然治癒と見た

しかし、どう攻略するか：：ただのアーム攻撃じゃ再生される：：だったら再生できないほどの破壊する力：：俺だったらロケランとかの爆発物だが生憎ピューパのはそれが無い

月光の対戦車ミサイルでもいいが今、仔月光と共に奴隷の開放に動いてもらっている

・・・待てよ、ここつて見た感じだが貴族の屋敷だろ？

なら、あれがあるはず!!

魔人がジリジリと間合いを狭くしてくる中、手の空いている仔月光にあるものを持ってくるよう連絡する

アーク「・・・了解、そっちにあるのか」

場所が分かったのでそっちに誘導を開始する

チャキ!!

ズドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!

「ふん！またその黒い棒からの魔法かい？」

機銃で再び攻撃を開始するが魔人は皮膚を硬化し弾く

だがこれはあくまで陽動だ

アーク「さあな!!持っている手は全部使ってやらあ!!」

少しずつ後ろに後退しながらその場所に向かう

「はっはっは!!もう手品は終わったのかい!!」

まるでシャワーでも浴びるかのようにな平気な顔で迫ってくる魔人

そして・・・

アーク「ツ!!ここ!!」

二十発目 決意

リン「・・・ここまでくれば大丈夫かな」

リンはアークに言われた通りにアリスと捕まっていた奴隷たちを連れて侵入する前に来た門の前についた

先ほど魔人の屋敷の方から天を衝くほどの大爆発が起きたが彼が無事なのを祈ろう

リン「しかし・・・この人数を一人で率いるのは少し荷が重い・・・」

開放した奴隷は全部で50人ほどで種族もばらばらだ

アリスは精神的に期待はしないほうがいい

アリス「アーク・・・なんで」

隣でアリスが驚愕の顔をして驚いている

なぜ、あの日決別したのに助けに来たのかなんでこんな愚かな自分を助けてくれるのかわからなかった

リン「アリス様・・・助手の心配より自分の心配を・・・」

リンはアリスの手を引いて外に出そうとする

だが・・・

リン「そんな・・・」

外に待っていたのは現状最も合いたくない者たちであった

アーク「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

もはや屋敷の面影もなくなるほど崩壊した建物の中俺と魔人はいた

「ごっつ・・・まさか・・・ここまでとはな・・・」

さつき粉塵爆発をして倒せたと思っただが油断大敵だったな

・・・まあ、ピューパの装甲のおかげだが

魔人が油断した時にピューパのアームを最大限に上げ魔人の顔に向かって振り下ろし俺は勝負に勝った

その証拠に魔人の体は少しずつ溶けていく

アーク「・・・なあ、死ぬ前に一つだけ聞かせてくれ・・・なんで最後まで魔法を使わなかった」

「なぜか・・・さてな・・・まあ、お前が初めて私に正々堂々と向き合
つてくれたつとだけは言っておこう」

足から溶けていった体のほとんどがなくなっていく中、魔人も聞い
てくる

「私からも一つ・・・なぜエルフ殺しや歌う死神つと罵倒されているの
に立ち直れたんだ？」

アーク「・・・ある人から怒られたのも一つだが・・・行動に移せ
たのも他にあるな」

確かに俺はエルフを殺してしまった

あの時通知さんに説教(?)されていなかったらそのまま旅にでも
行ってただろう

でもそのままにして例え何かの拍子で死んでも地獄行きは確定
だ・・・だからせめて彼女^{アリス}だけでも助けるけどやっぱ・・・

アーク「こんな殺人鬼でもたった一人の少女の幸せな未来を願うのは
ダメなことか？」

「・・・そうか・・・良き答えを最後に聞けたものだ」

ふつと笑いながら消えていく魔人

「・・・お前・・・いや、アークでいいか・・・アークとは良き友にな
れたかもな」

アーク「つへ・・・狂人とは友達になりたくないな・・・」

なんか・・・異世界に来て久しぶりに崩れた会話をしたな・・・

アーク「じゃあな・・・魔人」

そしてサラサラと消えていった魔人のご冥福をお祈りつつ主人の
もとに帰っていった

「いい拳だったぞ?我が友よ」

屋敷から出た後、事前にリンと打ち合わせしておいた集合場所に向かう

アーク（いってえ．．．やっぱはしやぎすぎたな）

キヤタピラ部分がすり減り走行が難しくなっていた

突入の際に月光が踏み荒らしたバラ畑を超え門の外に出ると．．．

「「「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
!!「「「「」

アーク「な、なんだ!？」

森中に野太い発声が聞こえてきた

急いで向かうとそこには

アーク「アリス!?!リン!？」

そこには

リン「はあはあはあ．．．」

色とりどりの防具を着た騎士に囲まれている主人たちであった

時は少し戻る

リン「ようやく助けが来たと思ったらこれね．．．」

門を出たリンたちであったが森から出てきたのは

「おい、その女エルフ．．．その方をこちらに渡しなさい」

出てきたのはアーハム帝国の騎士ではなくバサビイ共和国の騎士だった

リン「・・・へえ、自分から助けに行くほどの力がないへっぴり腰だけど情報だけは一人前なんだあ」

「二度は言わんぞ？この耳長娼婦が・・・さっさとそれは渡せそうすれば命は取らん」

ジリジリと迫ってくる中

「ちよつと待った!!」

森を掻き分け出てきたのはアーハム帝国の騎士ではなく別の国の騎士だった

そこから今にまでのことをぎっくり説明すると

バサビイ共和国の軍隊と他の国の軍隊が出会った瞬間、さらに他の国に軍隊までやってきて今にいたる

バサビイ共和国と他の諸国はアリスが誘拐されてつという情報を手に入れた後、我先に自国がアリスを誘拐犯より奪取し自国の戦力にしようとしていた

だが他の国に漁夫の利されても嫌だし、手に入れた情報では魔族領にいるので軍隊を出す必要があつた

そして今は何をしているのかというところ

「我が国が保護するべきだ!!」

「いや、わが国でやるべきだ!!我が国は騎兵隊が充実していていつでも対応ができる!!」

「黙れ!!貴様の国は弱小国のくせにしゃしゃり出るな!!我が国のほうがいい!!」

もしアリスが暴走してアークみたいな兵器が出てても自分の国だったらずくに鎮圧ができるという醜い争いをしていた

もちろんそれは建前で本音はアリスを手に入れてアーハム帝国より強くなることだった

(ちなみにアーハム帝国は最後まで来ませんでした)

リン(きて・・・早く助手来てくれないかなあ・・・そろそろ限界・・・)

たった一人の少女のために軍隊を派遣したのが仇と出て今にもアリスを巡って戦争が起きそうだった

すると・・・

バキ!!

ボキ!!

バキヤア!!

新しい軍かっと思っただがどうやら違うようだった

アーク「・・・どういふ状況よりんさん？」

魔人との戦闘でボロボロの状態となったピューパ^{アー}クが出てきた

リン「あ、助手・・・えつと・・・」

「おお！歌う死神だ!!」

「こいつが・・・」

突然現れたアークに警戒する各国の騎士たち

するとバサビイ共和国の騎士の中でも煌びやかな格好をした男性が前に出た

「おお！使い魔アークよ!!このような醜い争いを見せてしまい申し訳ない!!我々はただ君たちを地獄のようなアーハム帝国から救いに来たんだ!!さあ、速く我が国に来てくれ!!」

「黙れ!!使い魔アークよ!この大ウソつきに騙されるな!!君は一人で大丈夫なのか!?我が国に来たら君だけじゃなくて我々もそのエルフを守る手伝いができる!!だから来てくれ!!」

「貴様が大ウソつきではないか!!アークよ!!こっちに来たら身分も富も授けよう!!だから騙されず来てくれ!!」

・・・あく・・・なるほど？

アーク「つまりは俺とアリスを手に入れたいと？」

リン「ん・・・その通り」

何とも醜いねえ・・・

でも別にいいさ

やいのやいのつと騒いでいる各国^豚の騎士^もに向かって
ズドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!

「ひびく!!」

「な、なんだ?!!」

機銃を上に向けてうち黙らせる

．．．ここは魔人の屋敷の近くにある洞窟

?? 「うへえ．．．あの皇女．．．結構バツサリ行くじゃん．．．
割と痛かったなあ．．．」

そこにいたのはアリスが逃げてた時に切った子供奴隷だった
だが様子がおかしかった

．．．アリスに切られていたはずの傷が治っていた
すると．．．背後から

?? 「ここにいましたか」

その子供の後ろに身長が2 mほどあり口には不気味な牙、蛇のよう
な鱗に翼

魔王軍第三幹部の「旋風の騎士」カサンドラ

?? 「あれ？カッチちゃん？どうしたの？」

カサンドラ「．．．それはあなたが執務中にどこかに消えるからで
しょう？」

?? 「え．．．だって執務めんどくさいし．．．私、戦いた
い．．．」

カサンドラ「だめです．．．はあ．．．おや？アレは噂で例の女を
手に入れた魔人の邸宅ですね．．．ま、大方使い魔がお迎えに
来たんでしよう」

森の中で黒い煙がモクモクと立ちこもっているのが見える

?? 「でもすごかったなあ!!私、一回でもいいからああいう使い魔に乗ってみたい!!」

カサンドラ 「・・・まさか間近で見たのですか?例の使い魔を?」

?? 「うん!!・・・でもあれをあいづらが欲しがる理由が少しわかるかも」

カサンドラ 「はい・・・何とも醜いですね・・・我々魔族以上に」

?? 「さて帰ろうか!!おなかすいた!!」

カサンドラ 「・・・そうですね・・・溜まった書類もやっってもらなければ」

?? 「・・・やっぱ奴隷でいたいかも」

カサンドラ 「・・・逃がしません」

その子供は龍の魔族に引きずられながら自身の住処に連れていかれた

カサンドラ 「あといつまでそのお姿にいるんですか?我々が魔王?」

?? 「えく・・・これ結構お気に入りだったのに・・・」

すると引きずられている子供の姿が本来の者に代わっていった

悪魔のような尻尾が生え、ドラゴンのような翼、髪は紫と銀が混ざったような不思議な色になったいき、顔はまるで小悪魔のように笑って行った

第299代目魔王 エヴェリン・ヘル・カースド 別名「破壊の魔王」

エヴェリン 「いつか遊びましょ?アーク?」

二十一発目 もう一度

以前のポイント 7740
獲得ポイント 1000
合計 8740

魔人の屋敷からアリスをぶんどった後俺たち（奴隷含む）は、アム帝国に戻ってきていた。

ちなみに奴隷たちのほとんどが誘拐されたものたちらしいので自力で自国に帰るそうだ（ちなみに丸裸だったら心配なので開発ポイントをゴールドに変えて資金にさせた）

・・・お前は大丈夫なのかって？

まあ、さすがに修理したな・・・めっちゃ凹んでた

ついでに今回の戦闘で損傷したメタルギアたちも修理しとくか

消費ポイント

修理

ピューパー 1000

月光二体 700

仔月光六体 45

換金（元奴隷たちの資金用） 310ポイント＝31000ゴールド

ド

生産

食料（移動中） 5

現在のポイント 6315

体は新品同然になったが心が疲れたな・・・今、リンとアリスは俺の背中に乗っているが・・・

アリスもいつも明るいのになさつきから黙ったままだし

アーク「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アリス「・・・・・・・・・・・・・・・・」

うん、めつちや気まずい

アリスが誘拐される前日に喧嘩してしまったもんなあ・・・
どうにか主人と話そうか悩んでいると・・・

リン「あ、見えた」

森を抜け山を越えようやくアーハム帝国が見えてきた

アーク（・・・結局話せなかったなあ・・・てか魔人の屋敷からアーハム帝国まで結構あったのにそれで会話をしないって・・・大丈夫か俺？）

なかなか言い出せない自分に失望しつつもアーハム帝国方面に向かって移動すると

ドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!

アーク「ん？なんの音だ？」

前方から馬の大群の走る音が土煙と共に聞こえてきた

リン「あ、あれって・・・」

土煙が晴れ走ってきたのは

印象に残るほど赤いマントをはためかせながら馬に乗るアーハム帝国の貴族だった

「あれは!?アリス様!?アリス様じゃないですか!?!」

先頭に乗っていた腹が横にデカい貴族が驚いた顔をしながらこちらにやってくる

アーク「あゝ・・・申し訳ないんだが・・・お宅らは？」

「ひい!?歌う死神!?!・・・わ、我々はアリス様の救助のため編成された部隊だ!!」

アーク「え？救助部隊？」

・・・遅すぎませんか？

俺らがアリスを助けて他国のいざこぎを沈めている間って結構あつたぞ？

アーク「・・・貴族さんや・・・さすがに遅すぎじゃないか？」

若干声を黒くさせながら問う

「わ、我々は!!アリス様をいかに安全に助け迅速に避難させるかで協議してたんだ!!」

アーク「・・・なあ、リン・・・こいつらが協議ってことは帝国議会のことだよな？二週間とかならわかるがもうほぼ一か月かかってんぞ？」

少し気になったので背中に乗っているリンに耳打ちする

リン「・・・さすがにここまでではかからないと思う」

アーク「・・・そうか・・・ところで少し気になったんだが・・・さすがに数が少ないか？」

「そ、それは!!バサビイ共和国の動きを監視するために少数精鋭部隊で行くことになった!!」

・・・うん

アーク・リン（嘘だなこれ）

動きを監視って監視する前にもう動かれてますが？

あと鎧もよく見たら実戦用に動きやすい設計ではなく動きにくそうに金ぴかの鎧に赤いマントを付けたものだった

数も全体で魔法使いが30人騎士がその倍しかいなかった

アーク（・・・これ仮に助けられたとしてもあそこでは他の軍勢がいて数も数万ほどいたぞ？）

マジで精鋭部隊でもあの数じゃ勝てんと思う

「そ、それより先にアリス様の保護を!!」

アーク「そうだな・・・先にそっちか」

貴族のおっさんがなぜか慌てた雰囲気の話を変えられたが先にアリスが先だ

「アリス様!!」無事で!」

アリス「・・・うん・・・ありがと」

騎士たちがピューパの背中からアリスを優しく降ろすが当の本人は意気消沈しており活気がなかった

そしてアリスは貴族たちの馬に乗せられアーハム帝国に飛んでいく勢いで向かって行った

リン「ところで助手？私たちあの国から出ていくつもりだったけど・・・どうするの？」

アーク「・・・あ」

そうやん・・・

俺ら、国を出て旅に出るってことにしてたんだった

リン「アリス様助けれたし・・・このまま旅に出るっていう選択肢もあるけど?」

アーク「いや、このまま彼女の様子を見るか」

リン「見るのはいいけど・・・どうやって見るの?」

アーク「・・・仔月光とかに潜入してもらったらいいかなあ?」

どうにかアリスの様子を見るか考えながらアーハム帝国に向かった

アーハム帝国内

「おい!帰ってきたぞ!!」

「おお!アリス様だ!!」

先ほど送り出したばかりの貴族の部隊がもう帰ってきどうしたとうしたと騒めいたがアリスが貴族の馬に乗っており無事だとわかった瞬間國中歓喜に満ちた

シーベルト「アリス様!ご無事でしたか!」

担任のシーベルト先生も突然いなくなつた生徒が帰ってきて涙を流しながらアリスを迎える

アリス「先生・・・」

シーベルト「お怪我は!?大丈夫ですか!」

アリス「ええ・・・大丈夫だわ・・・」

シーベルト「そうですか・・・」

いつも明るい笑顔で自信満々に答えるがこの時はまるで魂を失つたかのような顔をする第二皇女に不安になる先生

クロエ「アリス!!」

アリス「・・・クロエ姉さま」

クロエ「あんたねえ!!一体どこに行つてたのよ!!」

いつもは冷静でプライドが高いクロエがこの時だけは珍しく声を荒げ妹に怒っていた

結構この家も留守にしてたけどシーベルト先生曰く掃除はしておいたらしい

数週間だけいなかったただけなのに懐かしく感じてしまい家の中も確認すると

アレクサンダー「む？遅かったのではないか」

アーク「!？」

ありのままのことを言おう

アーク「アーム帝国現皇帝のアレクサンダー・フォン・アームが俺の家で優雅に紅茶を飲んで俺の帰りを待っていた

な、なにを言っただと思っただかもしれないが俺もわ(以下略)

アーク「なんでここに皇帝陛下が？」

アレクサンダー「いやなに・・・少しお前に用があつてな」

素晴らしいアレクサンダーは椅子から立ち上がり俺の目の前まで来た

アレクサンダー「使い魔アークよ、今回の事件にてアリスの救助・・・よくやったぞ」

アーク「誠にありがたいのは山々なのですが・・・しかし、いいのでしょうか？私はこの国を出て行こうとしたのに？」

アレクサンダー「確かにお主は出て行こうとしたがそれはお前が出ていくのをあの時には決めていて私は捜査のために邪魔なので促しただけだ」

アーク「あ、確かに・・・愚問でしたね・・・ところでアリスは？」

アレクサンダー「・・・怪我はなかったが・・・心に深い傷を負ったのであろう・・・部屋から全く出ようとしないので・・・」

大体の理由が使い魔アークに会いたくないそうだ」

アーク「そうですね……」

アレクサンダー「……ところで聞くがアークよ……汝はこれからどうするのか？再び旅に出るのか？」

アーク「……いえ、今回のことで他国がアリスを狙う意味と必死さがよくわかりました……なので………はしませんからね？」

アレクサンダー「ツ!!……そうか」

アーク「……それに俺はこの家が気に入ったので」

アレクサンダー「……これはアリスが手配したのか……あの子も変わったものだ」

アーク「……ところで話は変わりますが……さすがに遅すぎませんか？救助部隊の出击」

アレクサンダー「……確かにそうだな……帝国議会の貴族の一人が我が家で十分だと喚くものでな他は軍隊級で行くべきだと言ってたがな……最終的にバサビイ共和国の監視に回されてしまった」

アーク「……その……皇帝陛下……すぐく言いづらいんですが……」

今回の事件で監視してもすでにバサビイ共和国の軍隊が魔人の屋敷にいたつと伝えた

アレクサンダー「……なに？それはほんとか？」

アーク「まあ……これは私の勝手な推測ですがその貴族明らかに手柄を独り占めしたかったでしょ」

アレクサンダー「はあ……なぜこうも横暴な輩がいるものか……わかった情報に感謝する……あ、そうだ……お主の……あの通魔機であつたか？あれは共にいたウイテカー家の娘に渡しておいた」

アーク「あ、ありがとうございます」

アレクサンダー「では、失礼する」

突然来た皇帝陛下との会話が終わるころにはあたりは真つ暗な夜になって良い子は寝る時間になっていた

アーク（はあ・・・災難な日だったな・・・）

主人は誘拐されるわ、数の暴力で探す羽目になるわ、魔族領に突撃するわ、魔人とは戦って友達になるわで大変だったなあ

このしばらくの間にあった出来事を思い返してると

ゴロゴロゴロ・・・

ポタポタポタ・・・

アーク「ん？雨か」

まあ、今の俺の体は鋼鉄ビュの蛹バなので極限に暑かったり寒くなければ
どういうことはない

でも、これ結構降りそうだな
なんてことを考えていると

ザアアアアアアアアアア・・・

アーク「やっぱ降ってきたか」

まるで水の入ったバケツをひっくり返すほど強烈な雨が降ってき
た

この疲れた心を癒すシャワー・・・ってほどじゃないけど落ち着く
な

そう言えばアリスのiDROIDはリンが持ってたっけ？

流石にリンでもアリスの所有物を分解は・・・いや、するか
も

アーク（・・・一応かけるか）

プルプルプル・・・

ピッ

リン「え？なにこれ？なんか勝手についたんだけど？」

アーク「あ、リン？聞こえるか？」

リン「え!?助手!?すごいすごい!!コレ、本当に助手の世界の通魔機

なのね!!」

i D R O I D 越しから興奮しているのがわかる

アーク「要件は二つ……まずはありがとな俺と一緒に来てくれて」
リン「どういたしまして……だってまだ学園の本まだ完全には読み蹴れてないもん」

アーク「え？まさか俺を止めた理由って？」

リン「嘘よ……あのまま二人の関係が平行線だったらやばいなって思ったから」

アーク「お、おうそうか……あともう一つ……アリスの i D R O I D を分解してないよな？」

リン「……シテナイヨ」

おいまでなんだ今の間は

アーク「……本当にか？」

リン「うん、カバーを外しただけよ？」

アーク「もうそれ分解してんじゃ……」

リン「キニシナイキニシナイ（コンコン）……ん？ごめん助手誰か来たみたい」

アーク「おう、そうか」

雨がAIポッドのカメラに当たる中、そういえばアリスの様子を見てきてくれたっていうのを忘れてたなあーっと思っていると

リン「助手!? 助手!! 聞こえる!？」

通信機の向こうからリンが慌てた様子で話してきた

アーク「お、おう!? どうした!？」

リン「アリス様が部屋にいないの!!」

アーク「はあ!？」

リン「ど、ど、どうしよう!？」

アーク「部屋の中は!？」

リン「荒らされてなくて、窓も閉まっていた!!」

アーク「時間帯的に・・・リン!!そっちはまだ城にいるだろ!?城内のほう頼む!!俺は月光たちを率いて城外を「・・・アーク」探すからそっちも「ねえ・・・アークつてば」・・・だあ!うるさいな!!アリス!!ちよつと俺は・・・忙し・・・え?」

急いで月光たちを招集しようとした瞬間、木々の後ろからアリスが現れた

アーク「アリス!?なんでここに!？」

リン「助手!?そっちにアリス様がいるの!？」

アーク「あ、ああ・・・今、目の前にいる・・・アリス?どうしたんだ?こんな雨の中?」

アリス「・・・」

雨に打たれながらアリスは歩いてきピューパのボディの下でチョコンと座ってしまった

格好も俺とアリスが初めて会ったときに来ていた制服ではなく白いレースの寝巻だけというシンプルだったが今じゃ雨に濡れて汚れていた

アリス「・・・ちよつとだけあんたと話がしたくなった」

アーク「・・・そうか」

アーク「リン、城の執事さんたちには俺と少し重要な話があるからまだ来ないでほしいって言ってくれないか?」

リン「わかった」

アーク「・・・それで話して?」

アリス「なんで・・・助けに来たの?」

アーク「いや、なんでつて・・・そりゃ、あんたが誘拐されたから?」

アリス「・・・別に頼んだり助けを呼んだ覚えのないのに」

アーク「それでもだ・・・それにお前がいなくなったら家族の

皆が悲しむぞ？」

アリス「……助けなければよかったのに……こんな分ならず屋なんて」

アーク「……どうしたんだ？アリス？帰ってからずっとそんなに暗くなって？」

アリス「……私、あの屋敷にいたとき始めて誰かを殺そうとしていた……最初は止めるだけ、自分が助かるためだって思っていたけど現実違った」

ぽつりぽつりと話すアリス

アリス「あの時あなたに殺してしまっても仕方ないって言ってたけど実際に殺そうとすると全く違った……自分はその人を殺そうとしている、物語を自分勝手に終わらせようとしている……でも初めて感じた」

震える声で口を開く

アリス「怖かった……肉が絶つ感触、浴びる暖かい血が少しずつ冷たくなっていくのも……あの時仕方ないって言った自分を叩きたいよ……でも」

徐々に小声になっていくがいう

アリス「君はこんなつらい思いをもっとした!!私は一人でこんな挫けて泣いているのに……君は何十人も!!それに慰めてくれる家族もいない!!……それなのに私は……」

アーク「……アリス」

アリス「ねえ、償わせてよ……こんなあなたの辛い気持ちがちつともわからなかった愚か者自分自身にさ」

アーク「……別に今のままでも」

アリス「お願い……もし私があなただを都合よく使われていたと思っ
ているのなら使い魔契約を破棄して自由にするし殺したいなら殺したも
もいいよ？」

アーク「そうか……なら今の使い魔契約を破棄してくれ」

アリス「うん、わかった……」
“囚われし獣よ今ここに自由を”
“リーフ”……はい、これであなただは自由よ”

アーク「そうか・・・ありがとう」

アリス「君・・・いや、確かコウミヤトオルだっけ？・・・トオルはすごいよね・・・一人で魔人を倒しちゃうんだもん・・・もう立派な騎士だわ・・・私みたいな無能とは大違いよ」

アーク「・・・」

アリス「でも、トオルがいなくなっても私・・・頑張つてさ・・・トオルから見直すくらい努力するよ」

アーク「・・・」

ス・・・もう一つだけ君に償いを与えていいか？」

アリス「うん、いいよ・・・トオルのためなら」

アーク「そんじや・・・」

この私ともう一度使い魔契約をしてくれませんか？ご主人様？」

アリス「・・・え？」

アリスは耳を疑ってしまふほど驚いた

アリス「どういう・・・こと？」

アーク「・・・今回の事件で世界中が君に必死になる理由がよくわ

かりました・・・もし私がこのまま出て行けばご主人様は・・・私みたいになつてしまうかもしれません・・・だったら貴女の生涯一生監視護衛して貴方から障害を感じたら私がすべて破壊しあなたの思う未来の手助けをしましょう」

アリス「・・・でも私はトオルの心のこと考えずに!!」

アーク「・・・確かに私は二度と戻れない道に進んでしまいました・・・私が死んでも天国に行くことは叶わないでしょう・・・でも、せめてあなた方様だけでも・・・幸せに生きてほしいのです・・・だから!!私を信じてください、私を使ってください、私を利用し使い捨てても構いません・・・だから・・・あなたを地獄行きこちら側には来てほしくないんです」

アリス「でも・・・でも!!」

アーク「それに私は償い事はサボられて忘れられるのが許せない者なので・・・あなたの近くにいないと安心できないのでね」

ゆつくりと後ろに後退しアリスと目が合うほどにA Iポッド頭を下げる

アリス「でも!!トオルは自由になれるんだよ!!行きたい所にもやりたいことも・・・私の許可なしに・・・自由に」

泣きじやくる顔で言うが

アーク「・・・ならいいんですか?ここにあなたにとって初めて忠誠を誓う使い魔がいるんですよ?」

アリス「・・・いいの?・・・本当にいいの?」

アーク「ええ・・・しかしですが・・・もし、私との約束を破棄するものなら・・・あなたも道連れ殺しますからね?」

アリス「で、でも・・・あなたの期待に答えられるかって」

アーク「簡単ですよ・・・あんたがこの国の次期女王になればいいのですから」

アリス「わ、私が?」

アーク「はい!・・・あなたがこの国の女王になったら許しましょう・・・だからできますよね?」

使い魔の問いにアリスは決心した目で答える

アリス「……ええ!! なってやるわ!! アーハム家のモットーは約束を守るだもん!!」

アーク「ふふ♪その意気ですよ? ご主人様?」

アリス「……いろいろと合ったけどこれからもまたよろしくね?

アーク!!」

アーク「はい!!」

未だ雨が降る中、改めて契約を結んだ主人の笑顔はお日様かのように眩しくそして暖かった

クロエ「……ふう、よかったわねアリス」

暗い林の中、クロエは傘を差しながらそれを見ていた

クロエ「……ほんとロマンチックじゃない? ……そう思うよね

? シン・カーニバル?」

クロエが闇の中、頭を踏みつけていたのは

シン「がはあ!!」

雨が降っているのに全身火傷だったり皮膚が爛れている元貴族エルフだった

クロエ「内通者つと言ったらこの国に詳しい人物かつ私の妹アリスに何かしら恨みを持っている輩だけど……あたりのようね」

シン「ごはあ!! ……ふ、ふぎけるな!! き、貴様もあの時やるのを許可したろう!!」

クロエ「許可? ……ああ、あれね?」

うーん？つと首を傾げた後思い出したクロエ

クロエ「お馬鹿でおありで？・・・私、「勝手にやって」って言ったわよね？第一何よアーク追放計画って・・・まず成功するわけないじゃない？あんな強大な使い魔相手になんか？私のレオでさえまだ勝てないって思うほどよ？」

あ、あとつと続けていう

クロエ「あなたの家が帝国議会的に邪魔だったので失脚させたかったのよ・・・だからそろそろお別れね？じゃあね？シン・カーニバルお馬鹿さん」

クロエは相手に悲鳴を上げさずに雨に負けない勢いで燃やし尽くした

クロエ「・・・こんなところでくじけないですよ？アリス？」

二十二発目 戻った日常

アリスと再契約した数日後

アーク「ご主人ー！朝だぞー！」

あれからアリスとは仲は戻っていつも道理の日常に戻り俺はアリスの寮の前にいた

アリスに改めて忠誠を誓い再びアリスの使い魔になったので主人を起こしに来た

この世界に転生して半年が過ぎアリスが起こしに来る時間を逆算して使い魔らしく毎朝起こしに来た

ガチャ

アリス「……………」

アーク「おはようございます!!ご主人様！今日もいい天気ですね

!!」

アリス「……………」

／／

窓からいつもは眠たそうに出てくるが最近顔は赤くさせながら出てくる

アーク「ご主人？」

アリス「…………トオル…………そのご主人様つての…………結構恥ずか

しい／／／／／／／／

アーク「…………なんでですか？」

アリス「そのお…………やっぱいつも道理がいい…………みんなにニヤニヤされてる…………それに」

アーク「それに？」

アリス「トオルとのお話つて大好きだから固くつてほしくないのよ!!」

アーク「…………すみませんちよつと聞こえなかったのですが？」

アリス「な、何でもないわ!!それより早くいつもの口調に戻って!!」

アーク「……………」
わかつたよアリス…………これでもいいか？」

う〜ん？

割と気に入ってたんだがな？

アリス「うん！やっぱりそっちが落ち着く！……ちよつと待って
てね!!身支度するから!!」

アーク「あいよ」

結局いつも道理の口調に戻っちまったか

外でアリスの身支度を待っている

アリス「お待たせ!!トオル!!行こ!!」

アーク「そうだなって言いたいんだが……よく覚えていた
な俺の名前」

アリス「え?……あ!べ、別に私の大切な使い魔なんだから
覚えておくのが当然でしょう!!」

アーク「そうか……ありがとな」

なんか久しぶりに自分の名前聞いたな

それからアリスと朝食（はやく人間に戻りたい）を済ませて教室に
送り出す

アリス「それじゃ、トオル!行ってくるね!!」

アーク「おう、行ってらっしゃい」

アリスが教室のある棟に入るのを見送っていると

リン「関係は良好ね」

アーク「あ、リン……てかどこに乗ってんだよ」

リンがピューパのAIポッドの上で姿を現した

アーク「お前も早く教室行けよ……」

リン「え、もう少しで助手の頭にある扉が開けそうなのに……」

アーク「おま!?!閉じろ!!（AI記憶版が入っているから）今すぐに
閉じろそれ!?!」

リン「え?なに?助手?なにかいやらしいものでも隠しているの
?」

アーク「違うけどお!!とにかく開けんな!!」

AIポッド頭を振り回しリンをおろそうとする

リン「やだ!!助手の秘密知りたい!!」

アーク「降りて!!マジで!!昼、甘いものあげるから!!」
リン「・・・助手今なんて?」

すると先ほどまで子供のように嫌々言っていたリンが急に大人しくなり聞いてくる

アーク「え・・・降りての部分?」

リン「違う、その後」

アーク「甘いもの?」

リン「そうそれ!!本当!」

アーク「お、おう」

リン「やった!!」

本人は冷静を保っているかもしれないけど

エルフ特有の長い耳を羽のように動いているように見える

リン「それじゃ助手!!授業久しぶりにに受けてくるから準備しててよ!!」

アーク「おう、さっさと行ってこい」

今なんか久しぶりについて聞こえた気がするけどあいつどんだけ引ききもってたんだよ?

駆け足で校舎に入っていく魔法使いを見送ったんだが・・・

アーク「うーん・・・暇」

相変わらずこの体ビュウバのままだし動こうにもいつかの林道破壊するしな・・・

こういう時こそなんか遊び相手が欲しいな・・・

ぴーい!ぴーい!

小鳥たちもいととこに止まり木を見つけたと次々に止まっていき合唱が始まっていった

アーク「・・・なんで俺がすこしの間止まってたら来るんだ?」

でも本当に暇だな

アーク「あ、そういえば・・・月光たちどこ行ったんだろう?」

あの日の夜、アリスを探そうと招集をかけたただけですぐに見つかったから待機命令を出したただけど・・・どこにいたんだ?

あんな異世界の人から見たらバケモノにしか見えない月光たちだ

けどここ最近見たとか聞いてないしな・・・

現在の戦力

月光

通常型 二体

アクティブ保護システム搭載型 一体

仔月光

219体

・・・この数どこにいらんだよ？特に仔月光たち
鳥のさえずりを聞きながらどこ行つたのか考えていると

ピロン♪

お？通知さんか？

通知：現在、月光三体、仔月光約二百体、マザーベースに待機して
います・・・招集しますか？

おい、待て・・・マザーベース？

え？俺の中に？

通知：はい（肯定）

マジかよ・・・

・・・でも招集つてどうやって来るの？
すると・・・

月光「もく！」

某英霊召喚みたいな感じで月光が元気よく出てきた

アーク「わお、こんな感じで出るんか……ところで月光よ？俺マザルベースの中つてどんな感じ？」

月光「？（∩∪、？）オツパプルンプルン!!」

月光曰く（なんでわかつたんだ俺）ファントムペインのダイヤモン
ドドツクズくらいあるらしい

アーク「いいなあ……DDと戯れたい………あ、そ
うだ月光君、君に一つ任務をやろう」

月光「（。ω。）!!」

アーク「えつとな……」

キーンコーンカーンコーン

昼になり生徒のほとんどが昼食をとる時間帯に……

ダダダダダダダダダダダダダダダダダ!!

リン「助手!!お待たせ!!」

アーク「おう、来たか」

食堂の裏口から出てすぐのところまで待っているとリンが珍しく笑
顔でやってきた

アーク「そんなに楽しみだったのか？」

リン「わかつてないね!!助手は!!この世界の甘いものは精々果物で
スイーツとか王族でも高級なのよ!!」

ドドン!!つて音が聞こえそうなくらい顔を近づけてくるリン

アーク「あー……じゃ、もうちょっと待っててくれ」

さっきの月光に指示を伝達していると……

コトコトコト……

「あれ?なにか甘い匂いが……」

「甘いもの!!甘い物があるぞ!!」

「誰が作っているんだ!?!」

食堂に來た生徒たちも甘い匂いに気付き始め騒ぎ始める

「あの！料理長！この甘い匂いは?！」

「ん?ああ、あのチョコレートゴーレムが厨房の一角を貸してくれて言われたんだが・・・何をしているんだ?！」

月光「(*、▽、*) オヤカタア!!デケタデ!!」

窓からスルスルと月光の舌が伸びてきソレを回収し外に持ち出してきた

・・・なんか月光がアーム伸ばして皿を持ってくるって俺がD—wakerのダッシュモード（正座）並みにシユールだな

アーク「はい、お待ち（俺が作ったわけじゃないけど）」

リン「おおお!!こ、これが助手の世界の!!」

外に置いてあったテラスの机と椅子に座っているリンの目の前に置かれたのは

リン「な、名前はなんていうの!？」

眼を輝かせながら聞く魔法使い

アーク「ゴ○ダ珈琲店のシロ○ワールだ」

いやあ・・・前世ではすぐお世話になったな・・・○メダ珈琲店のシ○ノワール・・・俺、すっげえ好きなんだよなあ・・・

え?作り方知ってたのかって?G o o g l e先生のC O O K P A Dで調べたら出た!!

やっば、G o o g l e先生は天才だあ!!

そんな心の中で先生をほめていると

ドドドドドドドドドドドドドドドド

アリス「ここから甘い匂いが!!」

アーク「うお!?!アリス!？」

アリスが（皇族で魔法使いなので運動は苦手なはずなのに）土煙を上げる勢いで現れた

アリス「あ！トオル!!あんたね!この甘い匂いは!食堂の皆も発作が起きているわ!!」

アーク「おい、待て!?!発作って何!?!え!?!倒れてんの!？」

アリス「そうよ!!・・・それで件のスイーツは!？」

アーク「・・・まさかコレ？」

アリス「あ！図書館の幽霊！あんた何してんのよ!!」

リン「あ、これはアリス様ごきげんよう？」

アリス「あ、ごきげんよう・・・じゃないわ!!トオル！なんで主人の私を差し置いて先に他の女に出すのよ!?!」

アーク「わーた！わーた！今から（月光が）作るから!!」

そう言い準備する（みんなも作ってみよう!!）

材料

デニイシユパン 1個

ホイップクリーム 30g

チョコソース 10g

アーモンドダイス 5g

1, パンを六等分に分けます

2, 電子レンジで30秒温め、その後トースターで1分焼いていく（え？異世界だから電子レンジ無いだろうって？魔法のかまどで代用した!!）

3, 1分経ったら、アルミホイルを表面にかぶせ1分焼く

4, 皿に3のデニイニツシユをのせ、ホイップクリームを中央に巻きながら盛り付ける

5, チョコソースなどをかけて出来上がり!!

うし！できた!!え？この小説は異世界バトルなのになんで料理の作り方を出しているのかって？んな細かいこといいんだよ!!

・・・しかし読者諸君ここで思ったかもしれないが材料とか大丈夫なのか？つと思ってるだろう・・・

うん！しゅごいコストがかかる!!

以前のポイント 6315

生産（一週間分）

デニイシユパン 1

ホイップクリーム 1

チョコソース 1

アーモンドダイス 1
アルミホイール 1
合計 6310

目の前に甘い匂いのするスイーツがおかれた瞬間
アリス「おおおおお!!」

・・・うわぁ(引)

この主人、皇族らしからぬ涎垂らして目を輝かせながら見てるよ
アリス「と、トオル!!食べていい!?!」

アーク「・・・いいがここで一つお願いをいいか?」

アリス「・・・えー!早く食べたいー!」

アーク「・・・おれからの“ご主人様”が嫌なら俺もその“トオル”
”つてのはやめていつも通りアークって呼んでくれ”

リン「え、助手・・・そういう名前だったの?(´・`・´)モグモグ」

アーク「リン、食べながら喋るな・・・」

アリス「むー・・・わかったわアーク・・・これでいい?」

アーク「ほい、どうぞ」

アリス「わーい!いただきます!!」

・・・なんかうちの主人が犬みたいに見えてきた

目の前でおいしそうに食べるアリスを見ていたらちよつと微笑ま
しくなってくる

・・・そういえば前世でも一人暮らししてたからこうおいしいって
言ってくれると嬉しいものだな

幸せに食べている主人を見ると・・・

ガサツ

アーク「ん?何の音・・・何してんの?」

草むらから顔を出していたのは

クロエ「ひえ!?!な、何でもありませんわ!!」

クロエが覗いていたが緑色の草むらに赤い髪は目立つので見つ

かった

アーク「・・・本当？」

クロエ「ほ、本当ですわ!!第一皇女でそれにレディですわ!!そんな甘いものでその成れの果て自分の妹みたいには・・・」

アーク「ではその滝のように出ている涎に関して一言」

クロエ「は! (ジュル)・・・ほ、ほら!!何ともありませんわ!!」

アーク「・・・まだ材料があつて作れるんだが・・・食べるか？」

クロエ「食べます (即答)」

皇族つてなんだけ？

クロエ「勘違いしないでください!!これはあくまで毒味 (試しに食べることに)!もし、この悪魔シロノワールが毒でアリスが倒れてしまったらどうするんですか!?!・・・それではまず一口」

・・・普通、毒味つて自分の部下とかにやらせるものでは?とツツコもうとしたが手にしたフォークは (アリスの○ロノワールのだが)クロエの口に運ばれていた

クロエ (もぐもぐ・・・)

アーク「・・・どうだ？」

クロエ (もぐもぐ・・・)

・・・ずつと咀嚼を続けているけど美味しくなかったのかな?つて思つてた時代が私にもありました

クロエ「んんんんんんんん♡美味ですわあ!!」

アーク「わあお (引)」

クロエ「何ですかこれは♡サクサクでもっちりしていて!!」

アリス「でしょ!でしょ!クロエ姉さま!!これ、すごくおいしい!!」
すごいな・・・あのプライドが高いクロエを一発で沈めたぞ

姉妹で意気投合したのか二人とも笑顔になっている

・・・果たしてこれがあの無能つて言つていた姉と落ち込んでいた妹だろうか?

クロエ「うううううん!!おいしい!!ねえ!えつと・・・アーク!!
あなた私の専属シェフにならない!」

アーク「え・・・いや、俺アリスの使い魔だし・・・ってか作り方も教えてあげるから城の料理人にでも作ってもらったら?」

クロエ「嫌だ!!誰かに作ってももらった方がおいしい!!」

そう言いながら俺の頭AIBOTにしがみつくと第一皇女

アリス「だめです!!クロエ姉さま!アークは私の使い魔です!!」

おお・・・アリス・・・めっちゃ成長しとんやん・・・

あの雨の日みたいな陰気な状態じゃない!!

アリス「アークは私の将来の専属シェフです!!」

前言撤回、やっぱうちの主人だわ

アーク「・・・作り方教えるから自分たちで」

アリス「あら?アーク?まさか私は目玉焼きすらできないのを知らないの?」ドヤア

クロエ「わ、私は肉を焼くまでならできるわ!!」ドヤア

二人ともドヤ顔するが

アリス・・・そこはドヤ顔するところ違う・・・

リンに助けを呼ぼうとするが

アーク「リン・・・いねえ!」

リンが先ほど座っていた椅子は何もなく机には

『ご馳走様助手♪なんかヤバそうな雰囲気を感じたから退散させてもらうわ!!無事をどこかで祈るわ♡』

あのエルフう!?

アリス「アーク!あなた未来永劫私と一緒にいるって言ったよね!」

クロエ「ふふふ!!成長したわねアリス!まだあなたが小さい頃はオドオドしてたのに今じゃ言えるようになったのね!!でも、このシェフは私がもらうわ!!」

アーク「だあ!落ち着け二人とも!!」

このいざごぎは後に毎日昼に準備するからつと条件を言ったら引き下がってくれました

二十三発目 収穫祭準備!!

アーク「収穫祭?」

リン「そう! 収穫祭よ!! 助手! あと数日後に収穫祭よ!!」

季節は少しずつ寒くなってくるころいつも道理に小鳥の合唱を聞いていると授業の終わったリンが遊びに来て収穫祭なるものと言ってきた

アーク「ナニソレ? (ゴロリボイス)」

リン「えつとね・・・」

リン曰く一年に一回あるアーハム帝国の祭りで来年の無病息災と豊作を祝う祭りらしく毎年魔法学園の生徒は仮装して各家の国民に訪問しお菓子とか上げて来年も幸福でいる祈りを捧げる班と学園で出し物をする班に分かれて祭りを手伝うそうだ

まあ、簡単に言ったらハロウィンと文化祭を混ぜた感じか

アーク「へく・・・面白そう」

文化祭なく・・・前世じゃ友達が他の人と回ってて一人で回ってたな・・・回ってた時間も少なくてクラスの出し物の手伝いに時間割いてていたな・・・

アリス「アーク! テンション低いよ!!」

アーク「逆にアリスはなんでそんなに興奮するんだよ?」

アリス「だって私皇族で今まで城の窓からとか遠くから見ているん!」

あ、そうやったな・・・

あんな甘いもん食っただけでキャラ崩壊するようなエルフだけど皇族だもんな・・・

アーク「そうかあ・・・そんじやみんな楽しんで・・・」

リン「何言ってるの? 助手もやるよ?」

アーク「うお?」

アリス「何言ってるのよ? ウイテカー? アークってこの体じゃ私たちと回れない・・・」

リン「助手って最近、私たちのスイーツでお金なくなってきた

でしょ？」

アリス「いやいや!!確かだけどアークの1ポイントって100ゴールドほどの価値があるでしょ?さすがにクロエ姉さまと私で減らせるわけ・・・」

アーク「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アリス「え、うそでしょアーク?・・・・・・・・私たちそんなに食べてた?」

アーク「・・・・・・・・うん」

ここ最近シロノール作ってたけどクロエが違うのを食べたいと文句を言いだして仕方なく他のスイーツを作り出したらさ・・・そこからは地獄だったよ

あの人たち・・・糖尿病にならないの?

以前のポイント 6310

生産 いろいろ (主に砂糖などの調味料) 60

現在のポイント 6250

言っておくが生活用品で消費する費用は1ポイントでほとんどがスイーツの費用(一週間分)になった

つまりあの姉妹、60ポイントもかかるほど食った

・・・まさか、大食い選手権並みに食えるとは思わなかった(後悔)

アーク「あ、つまり・・・学園で俺の作るスイーツ売店出せばお金稼げてついでに俺の料理力としての知名も上がって一石二鳥と?」

リン「そう!そうすれば助手が人間に戻れるかもしれないよ!!」

アーク「そうか・・・料理はうちのシェフ月光たちにやらせるとして・・・配膳の手伝いいいか?」

アリス「・・・あー、ごめんアーク・・・私たち・・・」

リン「私たち仮装担当で夜の踊り子担当なんだ・・・」

アーク「え、それ・・・ま?・・・ってかアリス踊れるん?」

アリス「ちよつと!私、これでも踊れますけど!!」

アーク「・・・へ・・・どんな衣装を着るんだ?」

アリス「ふふん♪それは当日のお楽しみよ!!」

・・・まあ、当日を楽しみにしとくか

アリスたちを寮に送り届けた後いつもの住処に戻って休むことにした（まあ、入れないけど）

あ、そうや・通知さん？通知さん？少しいいか？

通知：はい？

え？マジで出た!?

・・・月光たち開発したけど前にやったVR訓練とかしなくていいのになって思ったんだけど・・・確か、訓練しても少量ほど開発ポイントもらえたはずだよな？

通知：いや、いつになったらやるんだろうなってこちらは思ってたんですが？（怒）

あ、スンマセン

あと・・・前々から思ってたんだけど・・・通知さんさ・・・

あ・ん・た・誰？

通知：・・・誰とは？

そのお・・・カーニバルとの決闘のとき、体が勝手に動いたんだけ
どき？一瞬でけど銀髪の女性が見えたんだけど知らん？

通知：・・・・・・・・・・・・・・・・

俺さ？あの女性どつかでみたことがあるような気がするけど検索
でどうにかならん？

通知：検索中・・・・・・・・・・・・・・・・検索結果・・・
該当する人物が検索上出ていません

・・・やっぱか

なら、通知さんつてだれなんだ？俺がこの世界に転生してからずつ
といるけどアリスを救う時に怒った様子から通知さんさただのAI
じゃないでしょ？

通知：・・・・・・・・・・・・・・・・回答不可能・・・
答えられません

アーク「んく・・・やっぱわからんか・・・この世界に生まれたと
きに見た研究所っぽい所といい・・・何だったんだ？」

家の外で夜風に当たりつつ悩む

あの研究所、明らかに転生者が作ったものだろ

広さ的に何かの工場っぽかったけど・・・こちらではスイーツとい

い地球の技術で無双した後が見当たらんしな・・・

・・・ま、いいか(フラグ)

アーク「はあ・・・とりまいい加減VR行くか」

次の日

アーク「(☒☒)クソネミ」

例によつて月光と仔月光になるのが楽しすぎて寝たのが朝の4時

仕方ないもんね月光のジャンプがマ○オ並みに飛ぶから楽しいもん仕方ないよね

アーク「ふあく・・・眠いけどアリスを起こしに行かなければ・・・」

毎朝恒例の主人を起こすという作業をし収穫祭をどうするかを考える

・・・どうしようかな

収穫祭・・・まあ、○ロノワールは出すとして・・・パフエとかで

いいかなあ？・・・でも作るの月光たちなんだよなあ

そう思いつつ開発一覧を見る

アーク「・・・あ、雑魚サイボーグ」

開発一覧で現状最も安くて人間に近い雑魚サイボーグを見る

でもなあ・・・戦闘中で変身する際のコストも考えたらなあ・・・
だが流石にピューパの姿は目立ちすぎるしそろそろ仮でも人型になろうかな

アーク「えつと・・・アリスにつと・・・」

アリスに開発許可を取るために連絡する(あの夜の後、リンからi
DROIDを取り返しました)

アーク「うし、許可げつつ」
アリスに連絡して開発を開始した
・・・そういや後で見せたいものがあるってテンション高めで言っ
てたけど何だろう？

現在のポイント 6250

開発

人型サイボーグ 300

合計ポイント 5950

アーク「ふう・・・これでこの体から解放される・・・」

この半年いろいろとあったなあ：D—w a k e rでいたりピュー
パでいたりと・・・なんかまだ二体しか変身してないが気にせんどこ
日がちようど一番高いところに来た時間

周りでは魔法学園の生徒が収穫祭の準備を忙しくやっている

ピロン♪

お！通知さん

通知：人型サイボーグの開発する際必ずVR訓練をしてください
(訓練する際は最低でも一週間は続きます)

え？

一週間？必ず？

通知：はい(怒)

あ、はい

流石に今回はまじめにしないといけないのか・・・

プルプルプル

アリス「はくい！アークどうしたの？」

アーク「あ、アリスか？収穫祭ってあとどれくらいで始まるんだ？」

アリス「えつとね・・・お父様から詳細は聞いたけど大体一か月後だつて!!」

アーク「一か月・・・そうか」

アリス「ねえ！どうしたのよ！せつかくアークに見せたい服があるのに・・・」

アーク「・・・その・・・なんだ・・・アリスすまん・・・ちよつと用ができた」

アリスに人型になれるけど少し時間がかかるのを伝えた

アーク「ごめんな・・・」

アリス「・・・帰ってくるでしょうね」

アーク「まあ、なんだ・・・別に一年つてなわけじゃあるまいし・・・一週間で帰ってくるよ」

アリス「一週間で帰ってこなかったら承知しないわよ」

アーク「約束は守るよご主人様・・・あとしばらくの間俺の体を見てほしいのとシーベルト先生に伝えてほしいんだ」

アリス「わかったわ・・・でも！その代わり帰ってきたらスイーツ作りなさいよ!!」

アーク「あいよ・・・んじゃ頼むな」

あの後、アリスを迎えたりスイーツを作ったりしてその一日の仕事を終えて家に帰って準備はできた

アーク「んじゃ、月光ズ！アリスの護衛頼むな!!」

月光「(?・▽?) ムラジャ」

しばらく俺が帰ってこない間、月光たちはアリスの護衛を頼んでお

く

アーク「あ、あと分解者が来たら全力で追いついて……最悪、月光キックは許可するから」

月光「(。Д。(。(。ウーン」

アーク「では行つてきます!!」

月光「(@^_^) / ~ ~ ~」

VR空間

アーク「ふう……お、久々の人の形だあ!!」

大分、お世話になったVR空間に意識が転送されるとまず目に映つたのはデスペラード社のサイボーグ兵士の手だった

人間の形をした手だが中身は白い血液人工血液、その上から軍人が使っている手袋

キ
体を見ると黒いポケットの付いた灰色の戦闘服に黒い防弾ジョツ

そして顔を触ると

アーク「やっぱりだよねえ……」

正直、MGRのDLC第一弾の序盤で殺されたダンディな髭の生えたサイボーグ兵かなって思ったけど一般的な仮面をかぶったサイボーグだった

でも、久しぶりに二足歩行ができてうれしい

前まで似非二足Diwakerかスフィンクスビューバだったもんな……腰が楽だわ

アーク「うーうーうーん!!」

あまりにも久しぶりすぎて足が少し震えるがその震えでも今はうれいものだ

背伸びし床に倒れ空を見上げるとそこにはVR空間特有の電子的な空が……

アーク「あれ?」

電子的な空が見えるって言ったよな?

あれは嘘だ!!

そこに見えたのは

アーク「な、なんで!？」

コンクリートジャングルにコンクリートの地面・・・そして後方には高さ634mもある世界一高い電波塔スカイツリー

アーク「なんで・・・東京に!？」

そうそれは前世の生まれ故郷の日本の首都・・・東京だった

しかし妙なことに気が付いた

アーク「なんで誰もいないんだ？」

空を見上げば青い空でまだ正午ぐらいであろう普段の東京なら人々がたくさんいるはずだがだれ一人も見当たらずゴーストタウンのようだった

??「よう・・・お前がアークか？」

アーク「ツ!？」

突如背後からすぐく2BROの弟者さんに似た声だったので振り向くと

アーク「な・・・ん・・・で・・・あなたが・・・」

そこにいたのは片方の目に眼帯をし手にはバンダナを握っている人物

アーク「ビツク・ボス……」

スネーク? 「……よう? 歌う死神」

そこにはかつての伝説の傭兵「ビツク・ボス」がいた……

アーク「いや……じゃないか……」

スネーク? 「……さすがにわかるか」

まあ、フアントムペインやっているんでね?

そのスネークには頭部に鬼の角が生え左手は義手、眼帯が二点止めではなく三点止め

アーク「ヴェノム……いや、メデイックか」

ヴェノム「いや、ここではヴェノムでいい」

そう言い近づいてくる影武者

アーク「……なんでここに」

ヴェノム「……言っておくが正確には本人そっくりに作られたA
Iだ、間違えるなよ」

アーク「影武者の影武者ってか……それでなんで?」

ヴェノム「……お前は実銃を使ったことのない子供だろ?」

アーク「う……そうですが」

ヴェノム「だからだ……」
すると

ヴェノム（スツ）

突然、ヴェノムが構えだした

ヴェノム「こい」

アーク「え、どういう……」

ヴェノム「……確かに銃を持てば誰でも強くなれるが……なくなつた瞬間弱くなつては自分が困る……だからだ」

……なるほどCQCか

アーク「でも俺、サイボーグですよ? 大丈夫ですか?」

ヴェノム「なに……似たような奴なら相手したことがある」

あ、そうかこの人スカルズと戦ったことあったんだっけ……

アーク「それじゃ・・・行きます!!」
そう宣言し俺は拳を上げ影武者に挑んでいった

二十四発目 収穫祭前日

ここはVR空間

コンクリートでできたビルに道路があり後方には東京スカイツリー

・・・そこで

アーク「く・・・がはあ・・・」

ヴェノム「・・・そんなもんか？死神？」

アーク「くそ!!」

右手にデスペラード社製のマチェーテを構え攻めるが

ヴェノム「ふん!!」

左手で握られた刃が迫ってくるが手元をつかまれカウンターに昇拳を食らう

アーク「ごふ!?!」

カシヤン!!

顎のストレートに入り脳に振動が入って脳震盪を起こし武器を落としてしまった

ヴェノム「武器を落とすな!!」

アーク「うわ!?!」

武器を落としてしまいどうするか考えていたらヴェノムに足を払われ頭の後頭部から地面にぶつけられた

アーク「いつつつつ・・・」

ヴェノム「ん？もう三時間か・・・一旦休憩だ」

先ほどまで何をしてたのかというと三時間連続で接近戦の訓練だ

俺は武器ありでヴェノムは素手で挑むっていうのだがさっきの転倒で80回目だと思う

まあ、俺は元一般人なので戦闘のいろはを知っていない

ヴェノム「・・・戦場で武器を落とすのは死に等しいぞ？絶対に手から放さないようにしろ」

アーク「は、はい」

ヴェノム「よし、続きを始めるぞ」

アーク「え、まだ一分くらいしかたってない・・・」

ヴェノム「なんだ？戦場じゃ敵はまったりと待って休憩をくれるのか？」

アーク「ツ!!・・・よろしくお願いします!!」

精神的にはなく物理的に重いマチェーテを構える

大きく足を踏み込み振り上げる

アーク「はあ!!」

前世では剣道もやっていたので右手で握ると違和感があるので左手で握りふる

ヴェノム「・・・さすが前世では“ケンドウ”をやっていたせいかな才能はあるな」

・・・この人!?

余裕に見切りながら全部見切ったり弾いたりしてる!?

ヴェノム「言っておくが確か・・・“ライデン”？とか“サムライ”はもつと上にいるぞ」

アーク「・・・いや、あれは人間やめてサイボーグですから」

ヴェノム「ほう？ならサイボーグのお前は俺に傷一つもつけられないのか？」

アーク「で・・・も!!負けられないんですよ!!」

一旦間合いを取ろうと引き下がるが

ヴェノム「俺はナイフを使ってないのに接近戦が有利な刃物を持っているのに間合いを取るとはな!!」

アーク「ツ!？」

ヴェノムは何の躊躇いもなく間合いを狭め手刀で俺の左手にある武器を落とそうとしてくる

だけど!!

パ!!

ヴェノム「ツ!？」

アーク「せやあ!!」

あえてビビって武器を振ると思わせて武器を離しヴェノムのスーツをつかみ地面に叩きつけようとするが

アーク「・・・あ、あれ?」

ヴェノムを叩きつけようとしたがなぜか自分の視界は地面に迫っていた

ズシャアアアアアアアアアアアアアア!!

アーク「う・・・は・・・」

ヴェノム「・・・敵にチャンスだと思いき誘い込み油断させカウンターをするか」

アーク「いつつ・・・で、でもいいセンスですか?」

ヴェノム「いや、まったく」

アーク「そ、そんなはつきり言わなくても・・・」

ヴェノム「俺をつかんで投げるところまではいいが足などを払つてないから熟練の敵だったら反撃を許してたぞ・・・あとそのセリフは俺からじゃなくて本人から言えるよう努力しろ」

アーク「で、でもBIGBOSSは平然とやっていますよ?」

ヴェノム「あの方は敵の関節とかを熟知して利用しているから速攻でCQCが可能だ」

アーク「す、すごいや」

ヴェノム「だがアイディアはいいが次に生かせてない・・・腕立て200だ」

ま、まじかよ・・・

ヴェノム「さてと・・・そろそろ次の科目だな」

アーク「科目?」

現在の時刻を調べると深夜の二時

ぶつちやけ寝たい欲求が強い

アーク「ふ・・・ふあ・・・」

ふつとあくびをすると

ごっ!!

アーク「ぐへ!?!」

何者かによつて後ろから捕まれ床にぶつけられ首に何か尖っているものを押しつけられた

??「よう、ボス……このガキが例のか?」

ヴェノム「ああ、よろしく頼むぞ? 山猫」

アーク「……え?」

??「最近の若者は無警戒すぎる……」

ようやく解放してくれて後ろを向くとどこか西部劇のような服には愛用のリボルバー

アーク「リボルバー・オセロツト!?!」

オセロツト「初めましてだな」

スツ

倒れている俺にオセロツトは手を差し出してくれる

アーク（あ、意外と優しい……）

起き上がろうとオセロツトの手をつかみ

ゴシヤアアアアアア!!

アーク「ぐへえ!?!」

オセロツト「まったく……戦場で敵が起こしてくれることなんかあるわけないだろ?」

手に取った瞬間、体を引き上げられそのままビルの壁に顔面キスした

オセロツト「ま、俺が教えるのはボスのCQCじゃなくて違うのだ
がな……こんな伝説級の人からCQCなんて現実でもお前く
らいだから感謝しろよ?」

アーク「(⊠ ⊠ ⊠) きゆう・・・(スタン)」
オセロツト「おっと・・・ルーキーには少し衝撃が強かったか？ボ
ス！こいつもらって行くぞ!!」
ヴェノム「おう、しつかり絞ってやれ」

とんとん・・・

アーク「う、うくん・・・ここ、ここは？」

オセロツトによって巨大なコンクリートの壁にキスを決めて気絶
し顔に誰からは叩かれる感触に起きたら先ほどの東京ではなく暗く
どこかの部屋のようだった

それでその暗い部屋の中俺は座っている

オセロツト「起きたか？」

アーク「あ、はい・・・ここって・・・もしかして・・・」

オセロツト「お？察しがいいな」

なーんか見たことあるなって思ったら

アーク「なんでヒューイとクワイエットのいた尋問室なんですか
？」

嫌な予感しかしない(フラグ)

オセロツト「まあまあ・・・少し休憩をしようと思ってな」

あ、休憩かよかった(フラグ：チツ)

アーク「そういえばオセロツトの大将さんもAIなんですか？」

オセロツト「ま、そのとおりだが正確に言ったらほぼその本人の人格を模した偽物だと思つたらいい・・・それじゃ始めるか」

アーク「始めるって何を（ガシヤン×2）・・・え？」

ありのまま今起きたことを言おう一回目のガシヤンは俺が椅子から立ち上がろうとしたら椅子に鎖が巻かれていて俺が拘束されていた音

二回目は俺の額にオセロツトが俺の愛銃^{P90}を突きつけられている

オセロツト「ほう・・・お前の相棒はこいつか・・・いい銃だ・・・さて、俺がお前に教えるのは座学だ」

アーク「座学？」

オセロツト「ボスはあるに体術を学ばせたなら後は頭を鍛えさせるだけだ・・・あ、言っておくがこの後は銃に関してカズヒラ・ミラーの授業にも出てもらうからな」

アーク「おうふ・・・え、スケジュールってどうなんですか？」

オセロツト「・・・徐々に慣れさせていく予定だが・・・お前あつちの主人に一週間で帰ってくる約束をしたらどう？」

・・・待つてめっちゃ嫌な予感が

オセロツト「察したと思うが普通の一般人の訓練だったらおよそ三年はかかる・・・っというところでその三年を一週間で叩き込む」

アーク「＼（＾o＾）／オワタ」

うん・・・どしよ

生きてこの世界から帰れる自信がない

オセロツト「おーつと!!言っておくが人間無茶は厳禁なものだここで「無理です」って言つて今すぐに元の世界に戻つてもいいんだが・・・主人^{アリス}がもし危険になつて死んでしまつても泣くなよ・・・泣いていいのは死ぬほど練習した奴だけだ」

この人・・・本当に心理戦得意だなあ

アーク「・・・わかりました（理解）!!わかりましたよ（後悔）!!やってやりますよ（ヤケクソ）!!」

オセロツト「ふ・・・やっぱり主人の危機に面した仔犬^{ルーキー}は違うな」
アーク「仔犬じゃねえ!!」

オセロット「しかし仔犬でも首輪は必要だ」
すると

ガシヤン

アーク「ナンスカコレ？」

オセロットはどこからか出した装置を俺の首にセットした

デザインは・・・なんかTHE・SAWに出てくる逆トラバサミに似た感じでなんかの液体もセットで着いてる

オセロット「ああ、それは私からの冷やかなプレゼントだ」

アーク「・・・プレゼントは嬉しいですけど・・・この液体は何ですか？」

オセロット「そんなのこれしかないだろう？」

するとオセロットは懐から同じ色の入った注射を取り出し一滴床に落とすと

じゆうううう

床に煙が上がり少し凹み溶けて行った

アーク「・・・あのお・・・これってヒューイ（の眼鏡）にかけた薬品では？」

オセロット「お？さすがに覚えてるか？ま、お前の体は今サイボーグだからより効くぞ？」

アーク「えつと・・・どういう意図で？」

オセロット「確か・・・二ホンでは「24時間働けますか？」って言葉があるだろ？あれだ・・・ついでに言っておくが少しでも寝ようならこのスイッチで即あの世だ」

え？俺に（過労）死ねと？

オセロット「さあ!!時は金なりだ!!早速座学を始めるぞ!!」

アーク「は、はい・・・」

オセロット「声が小さいぞ!!腹筋300!!」

アーク「はい!!」

ここからは超ダイナミックに訓練を御送りします

2日目

朝

CQC訓練

アーク「おらあ!!」

ヴェノム「甘い!!」

アーク「ぬへえ!?!」

ヴェノム「武器を落とすな!!腕立て200!!」

アーク「はい!!」

3日目

昼

薬物学

アーク(や、やばい・・・眠い)

オセロツト「それで青酸カリはアーモンド臭をするから暗殺には向いて・・・む?」

アーク「むにやむにや・・・」

オセロツト「・・・おっとスイッチに指が」

アーク「ふあ!?!」

4日目

昼

射撃訓練(という名の障害物訓練)

ミラー「いいか!どんな状況下でも射撃できるよう備えろ!!」

アーク「はあはあはあ・・・」

ミラー「おらあ!新入り!!遅れてるぞ!!サイボーグはその程度かあ!!次遅れたらスクワット400!!」

アーク「は、はい!!」

5日目

俺はマザーベースのプラットホームにいた

アーク「…….…….…….」

ヴェノム「……やはりなこの一週間で面構えがひよっこから変わってるな…….…….…….こい」

朝日がプラットホームを照らす中俺は試験に臨む

内容はナイフを持ったヴェノムを無力化すること

この試験に不合格になってこの一週間が無駄になってアリスとの約束も破ってしまう

アーク「……行きます」

だから……俺は全力で挑む

ヴェノムは右手で逆手に持ったナイフを振ってくるが俺は半歩引いて目の前でナイフを通過させる……が油断は大敵だ

一般兵は振った後は引き戻して二回目に来るがヴェノムは超が付くほど熟練…….…….なので

アーク「やっぱり!」

右から左に向けていったナイフが剣先をこちらに向け帰ってくるんだけど!!

アーク「せい!!」

前世でヴェノムがスカルズと戦った際に見たカウンターを真似た迫ってくる右手をつかみそのまま勢いよく回転し

カシャ!!

アーク「や、やった!!」

ヴェノムの右手を本人の背中ん回しナイフをそのまま首筋に当た

た
ヴェノム「……合格だ」

アーク「ありがとうございます!!」

やっばい…….…….すぐくうれしい…….…….

ヴェノム「……ようやくスタートラインに立ったか」

アーク「……え?」

前言撤回、すつげえ落ち込んだわ

ヴェノム「……言っておくがこれでも結構手加減したんだぞ?…….

だがスタートラインって言ってもお前は度胸ある奴だ・・・普通の間なら最短3年のものを弱音吐くことなくやってのけた」

アーク「そう・・・で・・・す・・・か・・・」

あ、やばい・・・これ倒れるわ

今まで薬剤の危険で四六時中寝れなくて起きたままだったから安心感に負けて寝るわ・・・これ

ふらふらと体が揺れまたヴェノムと訓練した時みたいに地面とデープキスかなーっと眠くなっていく頭の中で考えていると

ヴェノム「おっと」

ぎりぎりのところでヴェノムのキャッチされた

ヴェノム「・・・さすがに寝るか・・・ま、あつちの世界のお前は大丈夫だろう・・・大切な人を絶対守れよ？」

暗転していく意識の中、そうヴェノムの声だけが聞こえた

また、いつでもここに来い

アリス「アーク？起きてる？」

朝日が昇る中、アリスは約束の一週間なので自分の使い魔の様子を見に来たのだが・・・

アーク「・・・やっぱり」

アリス「・・・やっぱり」

彼は最悪一か月かかると言っていたのでその通りだろう

倉庫の隣で鎮座している彼の体は今じゃ小鳥たちの停まり木になっっていた

アリス「いいもくん!!アークがいなくても寂しく・・・」

っていつもいたら大体「うっせえわ」っと言り返してくるがそれが
ない

アリス「・・・」

ぺちぺちつと可愛らしい音を立てながら叩くが反応がない
アリス（・・・ぷー）
たった一週間だがそれでも寂しいものだ
アリス「・・・・・・・・・・・・・・・・」

大好きわよバーカ・・・

ツピ

アーク「う、眠い・・・」
アリス「うえ!? あ、アーク!」
アーク「あ、アリス・・・おはよう」
アリス「お、おはよう!!・・・えつと・・・今の聞いてた?」
アーク「ごめん眠すぎて何も聞こえなかった」
VR空間に入る前は何ともなかったが現実に戻ると脱力感がどつ
ときて眠気が襲ってくる

ピロン♪

通知：人型サイボーグの開発開始・・・・・・・・完了
了

あと、10秒で変身します・・・・・・・・5, 4, 3, 2, 1
カッ!!

アリス「きゃ!?!」
突如、アークが光り出し・・・光が収まり少しずつ人の形を作り自
分の胸の中に降りてき光が収まるとそこには
アーク「すー・・・すー・・・すー・・・」
寝息を立てて寝ているアークがいた

アリス「あ、ようやく人間に進化・・・ってか戻ったのね・・・」
でもようやく見上げることなく人間として触れ合える
アリス「お帰りアーク」
そっと抱きしめながら自分の使い魔を寝かせた

二十五発目 収穫祭本番直前!!

アーク「う、うううん？」

暖かい日日差しの中俺はふつと意識が覚醒した

えつと・・・確か俺は収穫祭で料理を作るために人型を開発しようとして・・・それで開発の条件でマザーベースでヴェノム達と楽しい死にそうな訓練をして・・・んでクリアして現実世界に戻って・・・アリスが何か言ってたけど眠すぎて聞こえなかったな？

そんじやここはアーハム帝国の魔法学園か？

そう思いふつと目を開けると・・・

アーク「・・・あれ？俺、まだVR空間にいるんかいな？」

眼を開けるとそこには海が広がっていた

アーク（なんで海が？魔法学園にはなかった・・・あ、やばいまた寝そう）

流石に一週間連続で訓練したのですごく眠い

アーク（あれ？よくよく見れば俺、誰かに膝枕されてんな？）

なぜか再び眠くなっていく意識の中ここはどこなのかと目を動かすと

アーク（形的に・・・日本の屋敷だ・・・な・・・）

どうにか最後膝枕をしている奴の顔を見ようとしたが・・・

アーク「すう・・・すう・・・すう・・・すう・・・」

深い眠りについてしまった

でも・・・

赤い眼鏡に茶髪のツイントールが見えた

??「ふふ♪まだあんたはこっちには来てはいかんぞ？アーク？・・・

いや……

Old 旧 type 式 Mk. 号 Iさん？」

アーク「う……はあく……良く寝たわ」

流石に過労死するかと思つたわ

アーク「……しかしなんか夢を見た気がするけど……
ま、いつか!!」

それより起きたんだから早くアリスのところに行かないとな
とりあえずここは……俺の倉庫兼家のベッドか

久しぶりにベッドになれたな……背中にベッドの柔らかさを感じ
る

アーク「さて行かないとn(むにゆ)……ん？」

起き上がろうと左腕を動かそうとしたら

リン「スヤスヤ……」

左手を大切そうに抱え可愛らしく寝ているリンがいた

しかも手には解剖で使うような道具が握られていた

アーク「……やっぱりか……とにかく離さないとな」

どうにか左腕の自由を確保するために動かそうとしたが

リン「む……じよしゆう……」

むにゆ

アーク「おっば!？」

俺の腕を引きはがそうと引つ張ったらリンがどういいうわけか抵抗
して俺の腕がリンのおっぱ……胸に包まれてしまった

アーク(やばい!?!この状況をアリスが見たらあの日の約束を破って

しまう!?)

流星に危険を感じ残っている右腕でどうかしようとしたが

もみゆ

クロエ「すいーつう・・・」

アーク「なんでや!？」

右腕にはクロエが眠たそうにしながら俺の腕を絡めてくる

・・・これはもつとやばいことになった

アーク「おい！クロエにリン!!頼む起きてくれ!!」

どうにか起こそうと揺さぶったりするが

クロエ「またなさい・・・シエフ・・・むにやむにや」

リン「助手・・・分解・・・させて・・・」

もうだめだあ・・・おしまいだあ・・・(泣)

全く起きない二人にサンドされた状態

これ完全にアリスに見られたら殺されるな

どうしようかと考えていると

アリス「にゅへへへ・・・あーくう・・・」

アーク「あ、オワツタ・・・」

どこからか聞こえてきた主人の声に絶望した

こんな浮気現場みたいなところを見られたらアリスは見損なうだ

ろうな・・・

ゴソゴソ

アーク「ん？」

アリス「すやすや・・・」

どこ来るんだろうなって思ってた俺にかかっていた布団の中に
いた

アーク「・・・おいアリス・・・起きろー」

アリス「にがしやないよお・・・」

むにゅ

アーク「んぶ!？」

寝ぼけているアリスは俺の胸板に胸を押し付け再び眠ってしまった

アーク「……………すうー……（深呼吸）」

右にも左からもさらには胸板からも柔らかいものを無理でも感じ
てくる

アーク「……………うん、無理だわコレ」

そしてそつと意識を再びVR空間に転送した

精神的に二時間後

アーク「……………うっし、そろそろ起きるだろう」

先ほどVR世界のマザーベースでミラーと金髪美女について雑談
していたら二時間ぐらいたつていた

アーク「アリスー!起きろー!」

アリス「ふにゃ?あ、アーク……………おはよう」

あ、よかつた今度は起きてくれた

眠たそうに眼を擦りながら俺の体の上で起き上がり馬乗りになる
アリス

アーク「おう、おはよう早速だが助けてくれないか?」

アリス「ふえ?……………あ、クロエねーさま……………リンも早く起
きてー」

アーク「つつかどうしたんだ?みんな仲良く寝るって?」

アリス「うーん……………昨日収穫祭の準備があと少しでできて完成し
たのが真夜中で寝不足……………」

お、完成したんだ

アーク「まあ……………すまん?でも約束は守ったぞ?」

アリス「……………やくそくう?」

アーク「ほら、俺が今の体の開発で少しの間いなくなるって言ったときの」

アリス「んえ?.....あ!思い出した!!」

先ほどの眠気はどこかに飛んでいったらしく俺の上で騒がしく暴れる

アリス「アーク!アーク!あなたに見せたいものがあるの!!」

アーク「わーた!わーた!わかったからとにかく左右にいるこの二人を早く」

アリス「ふえ!?!.....あ、アーク.....まさか.....あなた!?!」

アーク「お、おう?どうしたんだ?」

なぜか急に馬乗りになっているアリスがわなわなとなつて顔を赤くなくていく

アリス「こ.....こ.....」

この浮気者おとおお!!」

アーク「いや、なんd(ドゴオオオオオオオオオオ!!)ぐほ!?!」

なぜかアリスは手をグーにして俺の腹にぶちかまし俺は気絶した

20分後!!

アーク「なんか俺ひどい目にあいすぎじゃね?(泣)」

リン「それは気のせいだよ助手」

あれからなぜか暴走したアリスを落ち着かせた後見せたいものがあるといい待っておくよう言われた

アーク「それで俺の店ってどうなるの?」

リン「えつとね.....」

リン曰く俺の担当である学園の出し物はカフェらしく建物は俺の

家を使うらしくすでに内装はカフェらしくデコレーションされていた

リン「でも助手?この体・・・本当に人間の体なの?」
アーク「ん?なんでだ?」

リン「だって・・・分解しようにも適当に切ったら白い血が出たも
ん・・・」

アーク「おい待て人が寝ているときに何してんじゃ!」

リン「ふくん・・・痛覚とかどうなの?」

アーク「はあ・・・言っておくがこの体はあくまで入れ物で本当の
体は別にある」

リン「ほくん・・・つまり魂は別に?」

アーク「まあ・・・そんな感じか?」
すると

コンコン

アリス「アーク!お待たせ!!」

アーク「お、アリス!どうぞー!」

アリス「じゃじゃじゃじゃーん!!」

アーク・リン「おおおー!!」

扉を開け目にしたのは緑色の妖精だった

背中に薄い桃色の羽を模したマントを付け緑色のスカートをつけ

お腹は丸出しで肩は露出している

アリス「ふふーん!!どうよアーク!!」

アーク「・・・」

アリス「な、なによ?」

アーク「いや、・・・その・・・スカート・・・短くないか?」

アリス「え?そうかしら?」

アリスは不思議そうな顔をしてその場で一回転する

森のように深い翡翠色のドレスが舞う

アーク「ああ、まずスカートをもっと下げろ膝から上にあげんな。

あと、肩を露出すんな風邪ひいたらどうする。それに腹を見せんな恥ずかしい・・・それにアリスは世界中に狙われている身だから派手なのを控えろ」

アリス「なんでよお!!せっかく初めて収穫祭に参加するんだから可愛くしたつていいじゃない!!」

ぶーぶーつと文句いうアリスだが

アーク「ああ?だめに決まってるんだろ?」

アリス「なんで!!」

アーク「アリスはただでさえ美人でスタイルいいんだ・・・余計な奴らに(面倒ごとを増やさないでほしい)狙われてほしくないし(収穫祭で料理作って金儲けしたいから)目障りだ」

アリス「ふ、ふえ!!?//////」

リン「おお、助手意外と大胆」

アーク「大胆って何がだ?・・・俺はあくまでアリスは俺にとって(主人として)大切な人で傷ついてほしくないんだ」

アリス「//////」

リン「・・・ねえ、助手・・・助手って前の世界で朴稔二って呼ばれなかった?」

アーク「はあ?俺は朴稔二じゃない」

リン「そう?・・・なんか将来が心配ね」

アーク「・・・・・・・・?」

すると・・・

クロエ「ちよつと!!なに私を差し置いて話しているのよ!!」

クロエが扉を蹴破り中に入ってきた

アーク「あ、クロエ・・・ゴメン割と忘れてた」

クロエ「無能な妹は覚えておいて褒める癖に美しい私は忘れるって!!」

アーク「だあ!めんどくせえな!!・・・んで俺になにしろと?」

クロエ「ふふん♪どうよ!アリスより美しいでしょ!!」

そう言いドヤ顔をしながらその場で一回転する・・・が

なんか・・・うん・・・

アーク「……一応聞くけどクロエ?……それを選んだのは誰?」
クロエ「何って……自分に決まっているじゃない!!」

髪色に合わせたのか赤い色だが……

肩紐の無いハイレグタイプのリオタード状の衣装と兎の耳を模したヘアバンド、カフス、襟型のチョーカー、蝶ネクタイの組み合わせ。

お尻部分には兎の尻尾を模した飾り（ポンポン）が付いている

……まあ、読者の諸君は気付いたかもしれないが

アーク「……なんだバニースーツ?」

クロエ「ばにーすーつ?……ナニソレ?」

あ、これ全く分かって無い奴だわ

アーク「……そのお……なんだ……クロエ?……なんでそれを選んだの?」

クロエ「ふふん!!よく聞いてくれたわ!!これは私たち（アリス・クロエ・リン）は国民にお菓子あげる係なんだけど一人でも顔を合わせるために機動性に通気性を考えた末にこれに至ったわ!!」

アーク「……どこで手に入れたんだ?」

クロエ「え?城の侍女の一人の部屋に忍び込んで勝手に借りてきたわ!!」

アーク「おK、今すぐ返してこい。ついでにその侍女にこの服を捨てろって言ってとけ」

クロエ「ちよつと!!アリスの使い魔のくせに生意気よ!!いいじゃない!最近ドレスとか制服ばつかでひらひらが鬱陶しい感じてきてt「ダメなもんはダメだ」なんでなn「いいからダメだ」なんで!!」

アーク「言っておくがその恰好の意味……知っているのか?」

クロエ「……意味とかあるの?これ?」

アーク「この収穫祭が終わったら調べろ……あと忠告だが絶対にその恰好で夜の街に出るなよ?」

クロエ「え……服、これしかないんだけど?」

アーク「んなの知ったことかさっさと変えてこい」

クロエ「は……い……」

そう言うとかロエは渋々マントを羽織って出て行った

リン「・・・すごいね助手は・・・第一皇女も手玉に取るなんて」

アーク「手玉に取るってなんだよ・・・リンは何を着ていくんだ？」

リン「あ、私は普通に魔女っ娘でいく予定」

アーク「さて・・・あと俺だよなあ・・・」

現在の装備は戦場で戦うような防弾ジョッキ

収穫祭に似合わん

アーク「あ・・・確かあれがあつたな」

そう言い開発一覧を開いた

現在のポイント 5950

開発

ジェントルマンなスーツ 1

合計ポイント 5949

開発が終了し手の中に光が集まりだし立派なスーツができた

アーク「・・・どうよ!!」

リン「・・・顔が減点」

アーク「それは言うな」

仕方ないジャン・・・デフォルトでフェイスマスクついているし

アリス「でも・・・アーク・・・とっても頑張ったのね・・・」

するとどこことなく現れたアリスが俺に生暖かい目で見つめてくる

リン「うん・・・助手・・・苦労しているのね」

アーク「は？何が？」

アリス「だって・・・頭・・・」

頭？

頭に何があるんだ？

そう思い自分の頭を触ってみるが何も無い

アーク「何ともないぞ？」

アリス「だって……頭ハゲてるもん……」

あ、なに？

もしかしてあまりの過労に頭剥げてしまったって思われてる？

アーク「いや、アリス……これは元からだ……」

アリス「え!?つまりアーク……前の世界で家畜のごとくこき使われてその哀れな姿に!?……安心して!私はそんな扱いしないわ!!」
アーク「いや、違うからな?これはボディが元からハゲているだけであって……」

リン「大丈夫?助手?毛根生やす魔法をかけようか?」

アーク「ナニ勝手に進んでいるの!?違うからな!?やめて!?そんな同情するような目で見ないで!」

そんなことがあったが収穫祭が間もなく始まるのでみんな解散して準備に入った

……ここはアーハム帝国内のどこか

「よし、潜入に成功したな」

「まったく!なぜ人間の我々が薄汚いエルフの真似をして潜入せんならんのだ!!」

「仕方ないだろ?今回はとある人物の確保なんでから」

「はあ……政治家の腰抜けども……攫えぬなら奪ってしまえばいいのに」

「しかし確か収穫祭か?考えたな!!」

「だろ?まったく……あの魔族領に向かった騎士……なにが「歌う死神には手を出すな国が滅亡する」だ」

「笑えたよな!!あの怯えるウサギみたいな顔!!」

「おっとうやら始まるようだな全員任務開始だ」
そのものたちのつけていた鎧には

バ・サ・ビ・イ・共・和・国・の・印・が・書・か・れ・て・い・た

二十六発目 収穫祭本番!!

あれから俺の担当であるカフェの準備をしていたらあたりは真っ暗になって収穫祭が始まった

アリス「それじゃ、アーク！行ってくるね!!」

アーク「おう、行ってら」

クロエ「アーク！帰ってきたらスイーツお願いね!!」

アーク「わかったからはよいつて来い」

アリスたちが元気よく送り出した後、開店をする

アーク「月光、仔月光招集」

ザツ!!

月光「(´・ω・｀)?」

アーク「えっと・・・月は調理の手伝いを仔月はテーブルセツティングと接待頼む!!」

月光「(´・ω・｀)」

アーク「んじゃ作るか」

てなわけで準備をする（みんなも作ってみよう!!：再来）

材料（14人分）

ホットケーキミックス 200g

無塩バター 20g

卵 1個

牛乳 大匙1

砂糖 20g

バニラエッセンス

強力粉 適量

揚げ油 適量

作り方（例によって異世界なので魔法のかまどさんにお世話になりました）

1、耐熱ボウルに無塩バターを入れラップをし、600Wの電子レ

ンジで40秒、バターが溶けるまで加熱します

2, 卵、牛乳を加え、泡立て器で混ぜ合わせます

3, グラニュー糖、バニラエッセンスを加えてよく混ぜ、ホットケーキミックスを振るい入れ、ゴムベラでサククリと混ぜ合わせます

4, ひとまとめにしたらラップに包み、冷蔵庫で30分程寝かせます(冷蔵庫が無かったのでシーベルト先生の氷魔法で代用しました)

5, 台に打ち粉をし、4を麺棒で5mmほどの厚さになるように伸ばします。コップの縁でくり抜き、中央をペットボトルのキャップでくり抜きます

6, 鍋の底から5cmほどの高さまで揚げ油を注ぎ、170℃に熱し、5を入れます。こんがりと色づくまで両面を2分ずつ揚げ、油を切ります

7, あとは適当に砂糖を振って完成!!

(一応作者もこの方法で成功しているので大丈夫です!!)

アーク「できた!!」

じゅわわあ・・・とおいしそうな音を立ててできたのは

アーク「ドーナツ!!」

前世ではミスタ○ドーナツのエンジェルクリ○ムに世話になったあ!!

シーベルト「お、おお!!これはおいしそうです!!」

アーク「先生?味見してくれね?」

シーベルト「よ、よろしいんですか!?私が一番にいただいて!」

アーク「おう、俺まだ口が無いし味覚が感じれないから食べてくれね?」

シーベルト「で、では一つ!!(サクツ・・・もぐもぐ)」

アーク「どうだ?」

シーベルト(ぷるぷる・・・)

アーク「せ、先生?どうs」おいしすぎますぞおおおお!!・・・あ、はい」

シーベルト「いやあ!美味でした!!もしアーク君がアリス様の使い魔じゃなかったらスイーツ屋で有名になってましたよ!!」

アーク「お、ありがとさん」

以前のポイント 5949
生産（ドーナッツ数百人分）
ホットケーキミックス 10
無塩バター 10
卵 10
牛乳 10
砂糖 10
バニラエッセンス 10
強力粉 10
揚げ油 10
現在のポイント 5869

シーベルト先生から感想を聞いていると

「おい！ここから甘い匂いがするぞ!!」

「おお！スイーツか!!」

アーク「外が騒がしいな？」

きい

アーク「わお」

外がうるさいので様子を見ると恐らく魔法学園の生徒の保護者であろう家族が俺の家の前で長蛇の列ができていた

「おお！君はこここの店主か!?!ここは何のお店だね!?!」

アーク「え、えつと・・・一応スイーツ店です」

「それは本当か!!」

アーク「は、はい」

いや、ちけえちけえ

この男性めっちゃズイズイ来るんだが

「この匂い・・・さぞかし一流の料理人であろう!!て、店名はあれだがきつと素晴らしいのであろう!!」

・・・いや、俺がすごいのではなく先人の人たちの努力とGoooo

ていません!!」

アーク「あく……あ、言われてみればそうやん……なら、しばらくは大丈夫かな?」

シーベルト「まあ……ド派手なことをして目立たなければバレないと思います!!」

なら……いいかな?

ガチャ

アーク「お客様!申しわけございませ!!少し店内の最終確認をしてみました!!それでは開店です!!」

大丈夫だと確認した後、扉を開け客を招いた

え?その後?……まあ、全員「うんめえ♡うんめえ♡」って言うてただけ言うておく

その夜……

アリス「はあ……疲れた……」

リン「そうですね……」

クロエ「私は楽しかったわ!!」

学園内にある暗い道をトボトボと帰っている三人組

アリス「楽しかったって……なんで男の大体はクロエ姉さまに集まるのよ……」

アークに怒られた後クロエはアリスと同じような赤い妖精のドレスになった

クロエ「そりや、私が絶世の美女に決まっているからじゃない!!アリスの使い魔でさえ惚れるほど!!」

アリス「な、なにをいっているんですか!?!アークは私のものです!!」
クロエ「あくら♪可愛らしいアリスこと♪」

リン(……なに争ってんだこの二人は……言うておくけど助手は私の助手だから)

争っている二人の後方でそう思っているリン

アリス「(くんくん……)……っは!!これはスイーツのにおい!!」

クロエ「何ですって!?!これはいけない!早くいかないと!!アリス行くわよ!!」

アリス「はい!クロエ姉さま!!」

リン「……普段は仲が悪いけど同じ趣味の時はすごく仲が良くなる……か」

アリス「アーク!!」

アーク「あ、おかえりアリス」

アリスが手を振りながら走ってきた

リン「……助手……大繁盛だね」

アーク「まあな」

すごいもんだのドーナッツでみんな洗脳されたみたいな顔して帰っていくもん

「て、店主!!き、君!どこの厨房所属だ!?!」

アリスと話していると急に後ろからさっきのエルフがやってきた

アーク「え?俺は……一応無所属ですが?」

「な、なら私の家の料理長をしないか!?!か、金は出す!!」

いやだからあ……俺がすごいんじゃないかって前世の前人の努力と知識のおかげだって

てかこの世界の住民はどんだけ甘いものに飢えているんだよ?糖分とか補給できてるの?」

アーク「あー……申し訳ないんですが……えつとお……この国の皇族のとある方に仕えているので……」

「そ、そうか……」

すると聞いてきたエルフは悲しい顔をして帰っていった

アーク「……こんな感じ」

クロエ「……へえ……」

それで私たちの分は？」

アーク「あ、俺の心配はなしですか？」

アリス「いいからスイーツ頂戴」

アーク「え、頼み方とか考えないやつ？」

クロエ「ふむ・・・ならこうしないとですね♡」

むにゅ

アーク「おppppppppppp!?!」

なぜかクロエにすっごい密着させられている件について

アリス「ちよ!?!姉さま!?!何をするんですか!?!」

あまりにも予想外なことに自分の使い魔を急いでひっぺはがす

クロエ「なについて・・・そのシェフが大人しく出さないからよ？」

アリス「だからってなんでアークに胸を押し付けるんですかあ!?!」

クロエ「だって男って女の象徴が大きいのが好きなんでしょ？」

アリス「しよ、象徴って!?!わ、私のアークはそんな卑しいことを考

えているわけではないですもん!!た、確かに私はクロエ姉さまより小さい

(しかし巨乳)ですが!!それでもまだ成長します!!」

クロエ「ふふ♡大きいこそいいのよ!!これこそ女王の包容力!!」

アリス「何ですか女王の包容力って!?!」

アーク「・・・は!?!俺は一体何を!?!」

アリス「アーク!よかつた起きたのね!!」

アーク「えつと俺は何か柔らかいものに包まれてから・・・それか

ら・・・」

アリス「そ、それは思い出さなくていいわ!!」

アーク「はい、おまち」

アリス・クロエ「お、おおおおおおおおおおお!!」
なんかいざいざがあつた後みんなドーナッツを食べることに
なつた

アーク「つたく・・・マジでこの世界スイーツ不足だろ」

アリス「あ、アーク!!食べていい!?!」

クロエ「我慢できませんわ!!」

アーク「待て」をされているかのようにうずうずしていた

アーク「お、おう・・・いいぞ(ズドオ!!)・・・わお(引)」

「いいぞ」つと出た瞬間二人はすごい勢いで食べ始めた

・・・糖中毒者にならなきやいいんだが

リン「もぐもぐ・・・あ、助手これってチョコかかってる
?」

アーク「ん、正解・・・ちよつと物足りんなって思ったからトッピ
ング用のチョコを作つてかけた」

以前のポイント 5869

生産 チョコ 1

合計ポイント 5868

アリス「よくやったわ!!アーク!これなら何個でも行けるわ!!」

クロエ「やはり甘いものは正義!!」

・・・本当に心配になってきたなこの二人の将来

アーク「・・・よく飽きないな・・・言っておくが甘い
物食べすぎは健康に悪いぞ」

アリス・クロエ(ピタッ)

アーク「まあ・・・ものによるが太るものもあるぞ?」

アリス「ちよ、ちよつと今日は控えておくわ」

クロエ「そ、そうね・・・お楽しみは後に取っておく派なのよ私は!!」

アーク「ん?なんでもないのか?まだあるが?」

アリス「う、うん!!残ったのは先生にでも分けておいて!!」

アーク「そうか?」

皆で談笑するのは何とも楽しい・・・時間はたつのが早くあたりは暗くなってき夜になっていた

クロエ「さてと・・・私は少し勉強を」

アーク「ん?勉強?」

クロエ「ええ、どっかの無能妹とは違って努力するのです?」

アリス「無能じゃありません!!」

どうやらクロエは寝る前に勉強をしてから寝るらしい

クロエ「ふふん!!ほらアーク?特別に主人ではない私を褒めるのを許可しますわよ?」

アーク「どういうことかわからないけど?」

クロエ「あらあら♪悔しいでしょう?アーク?主人に無能無能って言っているエルフを褒めるのh(ナデナデ)・・・ふえ!!」

アーク「えらいなあクロエは誰よりも努力して」

アリス「はあ!?!アーク!?!なんでクロエ姉さまの頭をなでてるのよ!?!」

アーク「いや・・・誰でもすごいことをしたら褒めるだろ?」

アリス「私、まだなでもらってない!!」

アーク「前(第六話「カロリーメイトⅡ神?」を参照)に頭なでたけどアリスが怒ったじゃないか?」

アリス「あの時はあ!!・・・あの時だけとお・・・」

クロエ「・・・と、とにかく行ってまいりますわ!!」

アーク「おう、頑張ってください」

カチャ

ボタン

リン「……………助手さあ……………乙女心っていうの全く分かってないね」

アーク「(。D。)ハア?」

アークの家から出たクロエは校舎から離れにある大講堂にいた

普段は講習とかに使われるが特にならないときはクロエにとって都合のいい自習場所であった

クロエ(ま、まさかナデナデをさせてもらえるとは／／／／／)

まだ頭に彼の堅い手の感触が残っている

クロエ(悔しがるって思ったのに……………ちよつとう
れしいかも……………)

彼の手は人間みたいに見えるわけではないのに初めて自分の
父親以外にナデナデしてもらった

クロエ「こ、コレ……………勉強に集中できるんでしょうか……………」

少し自身の垂れ耳を赤くしながら心配になるクロエ

だが……………

「どーもお嬢さん？」

クロエ「へ？だ、誰!？」

「へへへへ……」

背後から何者かに襲われてしまい捕まってしまった

一方アークたち

アリス「あ、アーク!! 太らないスイーツとかないの!？」

アーク「なくもないんだが……今度食うか？」

アリス「食べる!!」

リン「助手? 体を弄るのは?」

アーク「それはダメだ」

クロエが勉強しに行った後、俺とアリスたちは暇だったので談笑していた……が

「ご、ごめんくださいーい!!」

アーク「ん? なんだまだ客がいたのか?」

アリス「もう収穫祭は終わりがけなのに?」

リン「私が行こうか?」

アーク「あ、いいよ俺が行く」

キィ

アーク「ん? 嬢ちゃんどうした?」

扉を開けるとそこにはフードを深くかぶっているが出てきている髪が紫と銀色の不思議な髪色をした少女がいた

??「えつと……まだこの店にありますか?」

アーク「何って……ああ、ドーナツ?」

??「うん! お使いできたの!! ソレ二つくださいいな!!」

アーク「あいよちよつと待っててな」

二分後・・・

アーク「はいどうぞ」

??「ありがとう!!・・・あれ?四個多いよ!!」

アーク「ああ、嬢ちゃん・・・お使いなんですよ?頑張ったご褒美だ」

??「わあ!ありがとう!!おじちゃん!!」

アーク「おじちゃんじゃねえ・・・お兄さんだ」

??「えへへ♪あ!自己紹介まだだった!!私、エヴェリンっていうの!!」

アーク「おおそうか・・・んじゃエヴェリンちゃん気を付けて家族のもとに帰るんだよ?」

エヴェリン「はい!バイバイ!!アーク!!」

アーク「おうじゃあな!!」

・・・変わった女の子だったなあ

でも元気いっぱいの子供を見るのはいいものだ

・・・それよりどこで俺の名前を知ったんだ?

・・・ここはとある廃城

カサンドラ「・・・また勝手に行きましたね」

廃城の玉座の間でカサンドラは暇そうに待っていた

「くそ……が……」

周りに山賊の死体が広がっている中、立っていた

カサンドラ「あ、申し訳先ございません……我が王の仮眠室の確保しなかったんですが元々住先み着いていた山賊がいたもので少し掃除させてもらいました」

暇そうな顔で待っていると

エヴェリン「たっだいまー!!カツちゃん!!」

カサンドラ「む?我が魔王どこに行かれたんですか?」

エヴェリン「えへく……実は!歌アう死神クのところ!!」

カサンドラ「はあ!?なんていうところに行っているんですか!」

エヴェリン「まあまあこれ食べて落ち着こ!!」

カサンドラ「……何ですかその輪つか?」

エヴェリン「えっとねえ……どーなっつって言うんだって!!」

カサンドラ「何ですかそれこんな輪つかガおいしいわけ(サクツ)……あ、おいしい」

エヴェリン「あ!ナニコレえ!!すごく甘い!!」

カサンドラ「……甘いですね」

エヴェリン「ねえねえ!!残りは城にいる皆にあげていいかな!!」

カサンドラ「いいですね!みんな喜びますよ!!」

エヴェリン「ああ、ほんと♡ほしいな……彼アク♡」

いたずらっぽい顔で笑う現魔王にカサンドラは少し歌う死神がかわいそうに思ったのであった

アーク「うくん?」

アリス「どうしたのよ?そんな唸って?」

アーク「いや、さっきの子さ……どこで俺の名前を知ったんだろつて」

リン「どっかで聞いたんじゃない?助手?子供の情報網って侮れないから」

……まあ、子供って俺らの知らないことをどこからか仕入れてく

るからな
すると・・・

コンコン

アーク「ん？次は誰だ？」

カチャ

シーベルト「あ、アーク君？少しいいかい？」

アーク「あれ？先生どうしたんだ？」

扉が出てきたのはアリスたちの担任のシーベルト先生だった

シーベルト「ちよつと君に用が」

アーク「わかった？・・・ごめん二人とも少し出るな」

アリス「行つてらっしゃい」

リン「いってらー」

アーク「んで用つて？」

先生に呼ばれて着いたのは・・・確かここって大講堂だっけ？

でもなんでこんなにも騎士たちが集まっているんだ？

アレクサンダー「私から言おう」

するとどこからか颯爽と現れた皇帝

・・・このエルフ・・・本当に皇帝か？

アーク「あのお・・・俺何か遣らかしましたか？」

アレクサンダー「いや何もしてない・・・今回は少し問題が起きているのでお主に頼みがある」

アーク「頼み？問題とは？」

アレクサンダー「我が娘のクロエが大講堂で人質にされて捕まっておる」

・・・おう？

アーク「え？なんなん？え？アーハム家って誘拐とか人質になる呪いでもかかっているんですか？」

あ、だからこの大講堂に騎士がたくさんいるんだな？

アーク「つかなんでまた俺なんですか？」

アレクサンダー「それはお主の顔がまだバレていないからだ」

アーク「え、それってどういう・・・・・・あ、なるほど」

要は・・・

アーク「今回のことを静かに終わらせたってことか」

アレクサンダー「理解が速くて助かる」

だから俺だけに用があるって言ってアリスたちを残したのか

アーク「でも別に俺いらなくないですか？俺の世界の人質を取った立てこもり犯って大体は眠くなった隙をつかれて捕まっているので」

アレクサンダー「・・・犯人の要求は「第二皇女アリス・フォン・

アーハムの引き渡し」・・・だ」

アーク「・・・ほーん（怒）」

あれえ？おっかしいぞお？俺はアリスに何かするならば一族もろとも殺すって言ったはずなんだがな？

アーク「・・・わかった行ってきました」

アレクサンダー「もう一回言っておくができる限り静かに終わらせてくれ・・・騒ぎがバレて国民に迷惑をかけたくないんだ」

それはそっちでどうにかしてろ

いい
・・・まさか初めてのステルスミッションがこれとはな
アーク「start our mission」

二十七発目 闇夜に走る段ボール箱（しかし肝心の段ボールは出ない）

「ここは大講堂の廊下

「おい！異常はないか!!」

「ああ、大丈夫だ!!」

暗い廊下に二人の騎士がいた

「しかしいい人質がいたものだな!!」

「まさか目標にしていた魔法学園に潜入は成功したけど第一皇女がいるとは予想外だったな」

「でも美人だったな!!」

「はあ？なんだお前あの耳長娼婦に恋したのか？」

「馬鹿言えあれが人間だったらの話だ……はあ、スタイルは抜群なのにエルフってさあ……」

「なんだよそんなことかよ……いいから警戒するぞ……いつアーハム帝国の刺客が来るかわからんからな」

「あれ？例の死神はいいのか？」

「お前は馬鹿か？サイズを考えるサイズを……あの巨体がこんなところに来るわけないだろ？それにここは5階だ」

「ま！それもそうだな!!あとはあつちが大人しく引き渡すだけだな!!」

月夜の光が暗い廊下を照らす

「さてそろそろ交代の時間か……はあ……眠いものだな」

「ああ、だが警戒を怠る（パシユ）……な？」

突然巡回の相棒が魂を失ったかのように倒れていった

「お、おい!?!どうしたん（ドツ）ぐあ!?!」

それを見た相方は大丈夫かと近寄ったが何者かによって後方から拘束された

?? 「ciao♪少し話をしようぜ？」

「な、何者だ!?!」

?? 「あ、失敬……」

ただの歌う死神です」

30分前

アーク「それでは行ってきます」

シーベルト「あ、アーク君!! 怪我がないようにね!!」

さて人生初めてのステルスミツシヨンだ

装備は

・Mk, 22 ハツシュパピー 6マガジン入り

・ナイフ

・ナイトビジョン

・マチューテ

の四つだ(Mk, 22はこのストーリーの序盤でD—w a k e rの姿で開発した麻醉銃です)

現実で機動部隊の人が見たら何の縛りプレイですか? つて言いそうな装備だけど今回はなるべく静かにクリアしないとイケない案件だ

本当はP90とか使いたいけど、まだサプレッサーを開発してないので今回はもっていかない

アークサンダー「しかしどこから入るんだ? 入り口は一か所しかないし当然そこは警戒されている?」

アーク「下がだめなら上からです!!」

シーベルト「え? アークくん(ドゴオオオオオオオオオオ!!)うわあ!?!」

アークは足を曲げ空に飛ぶ勢いで大講堂の上階に跳躍していった
アークサンダー「ほっほっほ……最近の若者はヤンチャだのお……」

シーベルト「あわわわわ・・・大丈夫でしょうか・・・」

大講堂 屋根上

・・・あ

あぶねえ・・・

すごいなサイボーグ・・・というよりデスペラード社のサイボーグ・・・

本当は三階くらいにつけば上々だったのだが力加減を間違えて屋上についてしまった

アーク「・・・まあ、敵の意表をつけるしいいか」

・・・そして冒頭に戻る

アーク「まあまあ・・・私はお話をしたいだけであって・・・」

「だ、誰がお前と話す（グギギギギギ）首ガア!? 締まる締まる!？」

アーク「えく? 喋ってくれなかつたらこのナイフで首にブスるよ?」

「わ、我々は誇り高きバサビイ共和国の騎士たちだ!! 貴様らみたいな死神など・・・」

アーク「あ、バサビイ共和国の騎士たちなんだ・・・なるほど?」

「し、しまった!? 貴様! 何魔法をかけたあ!？」

アーク「いや、お宅が勝手に喋ったじゃん・・・んじやさ? 俺の大切なアリスを狙う理由は?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あ？黙認か？

仕方ない・・・・・・・・オセロツトに教わった方法を試してみるか

アーク「なあなあ？ 君たちがさ、捕まえた垂れ耳クエルフエいるじゃん？ 可愛くね？」

「な、なにを!？」

アーク「だーからさ？俺はただお話をしたいだけさ・・・・・・・・な？な？めっちゃ美人じゃね？」

「・・・・・・・・確かに美人だ・・・・・・・・だが！それだけだ!!」

アーク「へ〜？俺はあの爆乳が好きだなあ・・・・・・・・あの谷間に顔をうずめたいよな？・・・・・・・・男だったら一度はあるよな？」

「あ、あるわけなからう!!エルフは耳長娼婦だ!!」

アーク「え、でも娼婦ならそういうイケないほうのこと考えてんだろ？」

「え、いや・・・・・・・・そんなやましいことは!？」

アーク「お前も男の子だろお？一度はあるでしょお？俺はあるけど!!いいからいいから!!誰にも言わないから!!」

「・・・・・・・・ああ！そうさ！あのメイン講堂に今はいるがあの月夜に輝く赤めの金髪！そして宝石のような瞳！あれが美しすぎてエルフなのが残念過ぎる!!」

・・・・・・・・なるほどクロエはメインの方にいると

アーク「わっかるわあ!!俺もあのエルフがエロすぎてマジでほしいよなあ!!・・・・・・・・あ、確かさ？バサビイ共和国ってエルフを奴隷にしているよな？・・・・・・・・旦那さあ？さぞかし夜の街で可愛いエルフの子と夜を楽しんでますよねえ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・し、してないわ／／／／／／」

アーク「え〜？顔真つ赤だぜ？あ、でもなあ・・・・・・・・俺、第二皇女が好きなんだわあ・・・・・・・・」

「ぬ!?!?!?!、しかしわからないこともないな・・・・・・・・あの養ってあげたい性格に幼いところもある顔!!だが体が大人すぎる!!」

アーク「わっかるう!!でも今じゃ別の意味で世界中から狙われてい

るもんな・・・」

「そうだよなあ・・・我々は本国の議員に無断で今回の作戦を実行して彼女を手に入れて戦力化したいからな・・・」

アーク「いいなあ・・・」

んじやありがとさん」

「えっ？どういう（ゴキ!!）」

さてとこいつらの狙いたい理由とかいろいろと知れた

オセロットに教わったのは「敵がやられたプライドが高そうだったら同情して仲間感を出せばポロリと出る」というものだ

やっぱり異世界人って前世の世界みたいに謙虚な人があまりいないから結構かかるな

え？さつき騎士に言っていたことは本当なのかって？・・・まあ、半分は本当かな？

あ、大切であることは本当だぞ？でも胸とかは顔をうずめたいのは全男子が望みたいことかもしれないが俺はしない（だってうちの主人がすでにデカいから顔をうずめたいなどの卑しいことは考えん。俺の理性が耐えれない）

え？なに？アリスのことは好きなのかって？好きだけどLOVEではなくてLIKEのほうだ

HHHHA!!愛さないのかって？ナニツテンダ？なんで守るべき主人に使い魔が恋せないかん？

アーク「さて・・・行くか」

場所もわかった

あとは助けるだけだ

アーク「・・・二人か」

前方から巡回兵士の廊下からうつすら見えてきた

ナイトビジョンのおかげで暗闇でもくつきり見える

ピロン♪

あれ？どうしたんだ？通知さん？

通知：敵を双眼鏡でスキャンすると敵の詳細が分かります

え？まじ？

試しに双眼鏡を取り出してみると

ピーーーー（スキャン中）

Scan completed（スキャン完了）

アーク「わお、すげ」

機能はまんまメタルギア5の双眼鏡である

アーク「写されているのも全く同じか」

双眼鏡に映っているのも筋力Dとかだ・・・んだが・・・

アーク「何だこれ？」

そこに映っていたのは

神様特典：なし

アーク「神様特典？」

なんだそれ？

俺みたいなのが他にいるのか？そこんどこどうよ？通知さん？

通知：いました

いるんかい!?

あ、でも俺が出てきたあの研究所があるからいるに決まってる
か・・・

アーク「おつといかな・・・集中せねば」

そんなことを考えているうちに敵二人は接近してくる
俺は壁に張り付いて隠れて奇襲を仕掛ける準備をする
アーク（やっべ・・・なんか松明と猿の仮面かワニキャップが欲しくなった）

なぜか一体が右手に松明を持ち、壁にもたれてしゃがみながら松明を左右に振り回す動き《儀式》をしたくなる（儀式の人って調べればわかるよ!!）

微かに体を左右に動かして待っていると・・・よし来た

「ん？誰かいるのk（ズシヤアアアアアアアアアアア!!）」

敵がすぐ近くまで着た瞬間飛び出し敵の襟元をつかみ壁に衝突させた

これはいつかオセロットに食らった壁バーン!!だ

「し、侵入者d「あんぱー〇ち!!」・・・ふへ!!」

壁にめり込む勢いで壁に打ち付けた後もう片方の敵の顎に向けてアッパーをかける

すると敵は泡を吹いて倒れていった

アーク「うわすげ・・・オセロットの言うとおりでな・・・どんな屈強な男性でも顎に思いつきリストレットを打ち込めば倒れるって」
オセロット曰く威力はそこら辺の電柱に頭から思いつきりツツコんで破壊するほどらしい

アーク「さてお楽しみ尋問タイムだ」

ゲシ!!

「あう!?き、貴様n「黙れ俺の質問にだけ答えろ」・・・ひ!？」

先ほど思いつきり壁にめり込ませた騎士の顔面を蹴り起こす

アーク「メイン講堂にいる敵は何人だ？」

「た、助けてくる（ガ!!カチャ）はガア!？」

アーク「いいから答えろ」

助けを呼ぼうとしたので拳を握りしめ騎士の口の中にぶち込み喋れなくさせ首にナイフを少し切り込ませた

アーク「回答はうなずくだけにしろ・・・1, 2, 3, 4, 5, 6, (コクリコクリ!!)なるほど6人か・・・じゃあな」

「ひゅう!?!・・・な、なんd」

ズシャアアアアアアアアアアアアアアア!!

あ、いかな

アリスのあの笑顔がこいつらに汚されることを思い浮かべたらつい殺してしまった

ま、いつか

ナイフに赤く滴る液体を拭き払い鞘に戻す

アーク「敵は6か・・・面倒だな・・・」

事前に教えてもらった大講堂の構造を頭の中で思い浮かべながら廊下を移動する

アーク「着いた」

あれからしばらく移動していると目の前にひときはデカイ扉を見つけた

アーク「この扉の向こうにか」

そつと扉に耳を当てると

「おい！交代の時間だ!!」

「えく?もうかよ?さつさとエルフども引き渡せよ!!」

「仕方ないだろ?引き渡さないとこのエルフを本国に移送して人質にできるから」

クロエ「いや!放してくださいまし!!」

・・・いるなこれ

さつきの尋問で中に6人いるはずよな?

アーク「・・・こういう時こそバディが欲しいな」

クワイエットとか偵察に役立つ仕事仲間が欲しいな

アーク「仕方ないリスクあるがこれにするか」

クロエ「あなたたちの目的は何ですか?!」

クロエはいつも通りに少し勉強してから寮にて帰るつもりだったが突如背後からバサビイ共和国の騎士に捕まってしまい人質にされてしまった

「耳長娼婦が喋らないでいただきたい」

クロエ「な、なるほど?やはり耳丸種族人間どもには難しい質問でしたか?」

「・・・今なんて言ったあ?!」

ゴキイ!!

クロエ「つち?!」

「それ以上口を開くようならその顔をもう二度と見れなくするぞ」

・・・やはりだめか

自身が人質なのにも関わらず、少しでも情報を手に入れるために煽ってみたが聞き出せなかった・・・つまり、そこら辺の馬鹿よりは頭の切れはいい。

それにこの襲撃を起こして、しかも鎧から見ても国外の騎士であることから欲しいものは……。

クロエ（私の妹アリスでしょうね・・・）

妹が誘拐されたとき、各国がとんでもない理由でアリスを血涙が出るほど手に入れた理由を知ってしまった。

・・・本音は悔しいがアレは才能とかではない

クロエ（おそらくお父様は今回は収穫祭であり目立ってほしくないのでから刺客を送るはず・・・だがどうせ少人数、私が確認できただけでもかなりいた・・・これは私からも何か行動をした方がいいですね）
というわけで行動をする

クロエ「ねえ♡その騎士さん♡」

「お、俺?!」

クロエ「少しこの部屋が暑くて♡私の服を脱がしてくれませんか?この服、一人じゃ外せなくて♡」

わざとらしく胸元をパタパタしスカートを上げた

「ま、惑わされんぞ!!私には心高きバサビイ共和国の騎士・・・」

クロエ「いいじゃありませんか♡」

むにゅ

「おうふ!?!」

わざと人質にした騎士に胸を押し付ける

自分のスタイルは妹に負けなくらい抜群なのは自覚している

本当は敵に媚を売るようなことしかも全エルフがよく思っていない

いバサビイ共和国には結婚してもしたくなし死んでもやりたくない

・・・まあ、彼は例外とする

クロエ「うふふふ♡いいではありませんか♡」

だがクロエはバサビイ共和国はエルフを格下に見ているのは承知

であちらが自分に手を出すわけがない

・・・つと思っていたが

「ふっぎけるんじゃねえぞ!!」

クロエ「へ?」

なぜか騎士に押し倒されてしまった

「痴女なエルフにはわからせが必要だなあ!?!」

クロエ「え?ちよつと!?!」

本当は密着して武器を取り上げ騎士を人質にし魔法で薙ぎ払うつもりだったが予想外の行動に頭の処理が追い付かない

騎士の目が獣のようになって手がクロエの服の下に這いずつてくる

クロエ「え?え?え?」

クロエ自身はてつきりキスなどをされるかと思っただがなぜか違う

なんで服を脱がされているのか全く分からないが本能が警鐘を鳴

らしている

クロエ「や、やめ!?!」

すると・・・扉から

コンコン

「ん？誰だ？」

誰かが扉にノックしてたので見張りの騎士が開けてみるが

「あれ？誰もいないぞ？」

扉の向こうには誰もいなかったらしいが・・・

カシヤアアアアアアアアアアアアアアアア・・・

「・・・なんの音だ？」

廊下から何かが落ちた音が響き渡った

「お前から見てこい」

「了解!!」

隊長であろう騎士が部下二人を確認のため行かせた

「アーハムの刺客でしょうか？」

「そうかもしれない・・・警戒を怠るな!!」

助けが来たのか？

しかし騎士が二人行ってしまった・・・潜入したものが無事だとい

いんだが・・・

すると・・・

「いぎやああああああああああ!!」

「ツ!?なんだ!？」

突如大講堂全体に悲鳴が鳴り響いた

「お前ら!!確認してこい!!」

「!!」「了解!!」

「こちら隊長!!全騎士に告ぐ!!総員集合し悲鳴の現場に急行せよ!!」

この部屋に残っていた隊長とタツグを組んでいる騎士以外は悲鳴の聞こえた場所に向かって行った

「さすがに死ぬだろ!!刺客でも潜入特化!!真正面から騎士に囲まれたらひとたまりもない!!」

しかし・・・

「・・・なんだ遅いな？」

クロエ（廊下から聞こえてきた足音からして数十人は行ったはずなのに・・・）

そう・・・十分たつても部下が帰ってこなかった

「確認し来ましようか？」

「いや・・・待て・・・」

すると・・・

コツン・・・コツン・・・コツン・・・コツン

未だ静かな廊下から足音が聞こえてきた

「警戒しろ!!」

カチャ

「すみませーん・・・侵入者の制圧に手こずりました・・・」

クロエ「ヒッ!？」

扉から出てきたのは

血だらけになった騎士だった

二十八発目 再び

「ぬ？そうか・・・他の奴らは？」

「あー・・・今、侵入してきたやつをいたぶってます」

「ふん・・・そうか・・・よし、持ち場に戻れ」

「了解」

出てきた騎士は所々叩きられたような凹みがあり兜を深くかぶつていて顔が見えなかった

「あ、おい・・・鎧の血落としとけよ落ちなくなるから」

「あ、すまん・・・」

同僚の騎士が懐から布を出して近づいていくが

「あれ？それなんだ？」

「何がだ？」

「その腰にある奴」

騎士が指を指したところにあつたのは一際変わった刃物だった

「・・・ああ、これ侵入者が持ってた武器」

「へく・・・変わった形だな」

そう言いながら血塗れの騎士の腰からそれを抜くと変わった形であつた

「アーハムってこんな形の剣が流行っているのか？」

それはこの国の騎士が使う両側が刃の剣ではなく山賊が使うような片刃の剣であつた

クロエ（いえ・・・そんな剣・・・城でも見たことが・・・・・・いや待てよ?）

何か違和感を感じたクロエ

「ま、侵入者を排除できただけでもいいか」

「はっはっは!!そうだな!!」

「まったくだ・・・・・・ん?なあ、待ってくれ」
「ん?なんだ?」

変わった刃物を返してもらった血濡れの騎士は立ち上がりクロエの方に向かおうとしたが途中で呼び止められる

「お前の声……聞いたことが無いんだが……誰だ？」

さつきこの部屋にいた騎士たちから聞いたことがない声に疑問に思った騎士は問いかける

「……………ああ、俺か？おれは……………」

聞かれた騎士は振り向き

ザシユウウウウウウウウウウウウウウウウウウ!!

ぐふ腰に戻した変わった武器マを抜き悲鳴チユウを上げさずテに切り捨てた

「な、何者だ!？」

?? 「俺の名は……………」

クロエ「……………あ!!」

アーク「単なる死神だ」

これは先ほどの騎士たちが異常を検知しに行くところまで戻る

数十分前…………

コンコン

「ん？誰もいないぞ？」

よし…………出てきたな

現在、俺はメイン講堂の出入り口扉の真上の壁に張り付いている

俺はメイン講堂の入り口が一つしかないのは知っていたので真正面からの突入は不可能と結論したのでわざと扉をノックし外に誘い出した

「お前から見てこい」

「了解!!」

…………なるほど二人一組で見てるか

まあ、その方が処理に時間がかからない……………って言っても俺に

は時間がない

制圧中に巡回兵に見つかって増援を送られたら厄介だ

それにここで制圧するのは物音が聞こえる可能性があるからしない・・・なので懐からマガジンを取り出し

アーク「よつと」

カシャアアアアアアアアアアアアアアア・・・

マガジンをなるべく遠くに投げわざと音を立て騎士たちに向かわせるようさせた

「行くぞ!!」

「おう!!」

・・・行つたか

シュタ

静かに二人の騎士の後ろに降り立ち後を追った

すごいなサイボーグの体・・・こんな高い所から降りても痛くないし機動性もあるしな・・・さすがメタルギア

しばらく騎士二人の後方についていきメイン講堂の扉から離れたのを確認する

「ここら辺から聞こえたよな?」

「ああ・・・ん?なんだこの黒い棒?」

ん?見つけたか

んじゃ、やるか

Mk, 22を構え騎士の鎧が露出している部分を狙う

中世の騎士は全身を覆っているが関節部は覆ってなかったり装甲が薄い

パシユパシユパシユ

「あり?」

「どうした?」

「今なんか音が聞こえた気が・・・」

悪いな

それあなたの敗北の音だ

ダツ!!

「わが!?!」

後方から麻酔を打ち込んでいない騎士の首を閉めつける

「く、首が!?!」

「お、おい!! 敵襲・・・(ドサ)」

「ど・・・う・・・し・・・」

良かったタイミングが合った・・・

いつかのオーク・ロードと戦った際に拳に麻酔を打ち込みまくったけどやっぱ数撃てば効くな

首を閉めつけ気絶した騎士を静かにおろす

オーク「・・・よし・・・気付かれてないな」

このままさっきの方法で二人ずつ誘い出して無力化していくか頭の中でどうするか考える

・・・だが戦場で最も大切なことをしていなかった

「だ、誰だ!?!」

オーク「え?」

・・・周りの安全を確認していなかった

「て、敵襲!!」

オーク「やべ!!」

増援を呼ばれそうになったので腰につけていたマターチエを抜き取り切りかかるが・・・

「いぎやあああああああああ!?!」

オーク「チツ!!」

急いで抜き切り捨てたので敵は痛みあまり叫ばれてしまった

そしたら案の定

ガシャガシャガシャガシャ!!

大量の鎧の音が聞こえてきた

アーク「あく・・・遣らかした・・・」

オセロツトが言ったたな・・・必ず殺した後は周囲を確認しろつて・・・

そんなことを反省していると

「貴様!!何者だ!!」

隙間がなくなるほどぎゅうぎゅうに騎士に囲まれてしまった

アーク「あー・・・こんばんは?」

さて・・・どうするか・・・

別に真正面からP90召喚して戦ってもいいが銃声が外に聞こえて騒動になりうるな

腰のマテーチエで戦ってもいいが時間がかかるし絶対メイン講堂にバレるだろ

「ぶ、武器を床におとせ!!」

アーク「あ、その前にさ?クロエっていうエルフさ・・・ここにいる?」

「武器をおろせ!!」

ジリジリと騎士たちはアークに近づいていく

アーク「まあまあ?落ち着こうぜ?」

・・・ああ、本当にうざいな

アリスを手に入れるためにクロエまで手を出して・・・しかもアリスがこのことを知れば悲しむ

ああ、ほんと

消えればいいのにな

バチツ!!

アーク「イツ!?!」

「お、おい!?!どうした!?!」

突如頭が痛みだしその場で崩れてしまう

「とにかく捕まえろ!!」

・・・だがこの痛み

前に体験したことがあった

アーク(これって!?!)

それはシン・カーニバルとの決闘での悲劇の前兆

アーク「・・・ま・・・まじ・・・か」

そして意識が暗闇に落ちていく中

銀髪の誰かが見えた

アーク「・・・また・・・か」

??「・・・」

?? 「Leave it to me? brother?」

「おとなしくしろ!!」

縄を持った騎士がなぜか意識を失ったアークを巻こうと近づくが

ザシユ

「え?」

騎士の体に血しぶきが出てアークの手には血塗れのマテーチエがあつた

サイボーグ兵士（アーク）「AI戦闘モード・・・起動します」

「な、なんdザシユウウウウ!!」

暗い廊下に赤い花が咲き乱れた

「おおおおお!!」

仲間が切られたのを見た騎士は目の前の死神を敵とみなし切りか

かろうとしたが

サイボーグ兵士（アーク）「・・・排除」

サイボーグ兵士は騎士に刺さったままのマターチエを刺さった騎士ごと振りかぶり切りかかってきた騎士をぶった切った

「こ、この!!」

サイボーグ兵士（アーク）「・・・・・・・・・・・・・・・・（ズドオ!!）」

「な!?死体をうわあああ!?」

死体に刺さったマターチエを抜くのは間に合わないと判断したA
Iは騎士二人が刺さった武器を騎士の集団に向けて人工筋肉を最大限に使い投げた

投げられた死体は体重と防具の重量が合わさってちよつとした砲弾みたいになり最初に当たった騎士からドミノ倒しのように倒れていった

サイボーグ兵士（アーク）「・・・・・・・・（スツ）」

サイボーグ兵士はなぜか前かがみになりマターチエを構えた

「お、起きろ!!なにかしくりゅ・・・・・・・・じょ?」

一番後方にいた騎士が起き上がるよう呼びかけたが次の瞬間には自分の下半身と上半身がさよならをしていた

サイボーグ兵士は大講堂の侵入の際に使ったサイボーグ兵士の足の筋力を使い地面をえぐり騎士たちを切り伏せたのであった（すごく簡単に言ったら鬼滅の霹靂一閃が初めて出たシーン）

サイボーグ兵士（アーク）「・・・目標の全滅を確認・・・解除します」

・・・う、うくん

あれ?俺、なにしていたんだ?

少しずつ意識が覚醒していく中、目にしたのは

アーク「・・・やっぱりか」

そこには赤いお花畑が広がっていた
まあ、よく見たらすごくむごいが

アーク「誰もいないよな？」

月の光が廊下を照らし赤い花畑の中一人つぶやくが誰もいない
しかし・・・どう中に侵入するか・・・

アーク「あ、いいこと思いついた」

そう思い騎士の鎧を脱がし自分につけた

アーク（まったく・・・死人の鎧を引きはがして自分につけてもな
にも思わないとはな・・・）

だけどクロエを助けるためなんだ許せよ

そして今の戻る

「歌う死神!？」

アーク「さて・・・と・・・それじゃ

死ね」

「ッ!？」

マテーチエの血を振り払い接近する

隊長騎士も危機を察知しクロエをつかもうとしたがそのあいだに
アークが入り込みつかもうとした手を

ズシヤアアアアアアアアアアアアアアア!!

切り捨てた

「手がああああ!？」

アーク「大丈夫か？」

クロエ「は、はい／＼／＼／＼／＼／」

切りつけた際に飛び散った血がクロエにかからないように庇う

「な、なぜ人間のお前がエルフどもの味方をする!!」

切られた傷口を布で縛り出血を抑えている騎士

アーク「いや、なぜって……言っておくけど俺（今は）人間じゃないからな？あと、お前らにとっては前の姿ビューバかもしれないけど違うかな？」

「だ、だから報告書と違うのか!？」

アーク「だから顔バレしたくないから死んでくれ!!」

「くそ!!」

騎士は腰から剣を抜き取りアークのマテーチエと鏢釣り合いなるが勝負は最初から決まっていた

アークは両腕あるの対して騎士は隻腕だ
なので

ザシユウウウウウウウウウウ!!

「バサビイ共和国に栄光あれ……」

騎士の剣ごと叩き切り殺した

アーク「ふいー……クロエ？大丈夫か？怪我無いか？」

クロエ「……」

アーク「クロエ？」

クロエ「……は!!だ、大丈夫ですわ!!」

い、言えるわけがない……血まみれのアークが怖いが綺麗に見えるてしまったなど

アーク「とりあえず外で騎士たちが待つてるぞ」

クロエ「べ、別に私一人でも倒せましたが……アリスの使い魔が迎えに来るのは最初から知っていたのでわざと待つただけですし

!!感謝はしませんわ!!」

アーク「いやそこは感謝だろ……」

クロエ「……でも」

ありがとう♡

アーク「ん？なにか言ったか？」

クロエ「いいえ♪なにも♪」

だが無事に事件は解決し騒動も起きなかった

ここに国がらみでとんでもないことがあつて一方・・・

ここはマール工業国家

異世界では珍しく工業が進んでいる国・・・それが

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!

国全てが轟々と燃え上がっていた

マール中心部

「しゅ、首相!!大変です!!革命軍がすぐそこまで!!」

「くそー・・・こうなったらミール聖教国に亡命を(ズドオン!!)ひぎや!!」

隠し道から逃げ出そうとした現首相・・・いや元つといた方がい
いだろう・・・その首相が逃げ出そうとしたが背中を銃弾で撃ち抜か
れてしまい絶命した

?? 「誰が逃げ出そうとしているんだ？」

「ひ、ひい!!なぜ革命主導者がここに!？」

?? 「なぜって力あるものは前線で立つってというのが私の信条でね
!!」

「や、やめろ・・・金ならd(ズドオン!!)」

?? 「はあ・・・お前らみたいなのがいるから国が腐るんだよ」

元首相の側近の額に風穴を作り侮る主導者

「あ、同志(ここ)にいましたか」

?? 「あ、マイク？そっちは？」

「はい、マーレの首都の制圧は成功です」

?? 「そうか・・・ようやく自由が約束された国ができる!!」

その日・・・マーレ工業国家はクーデターによる陥落

そしてその夜にマーレ工業国家は

マーレ軍事国家に名前は変わった

そしてその新たななる国のトップ・・・そして初代総理大臣

庶民から「自由と勝利の女神」とも言われた少女

本名・・・

クリス・リリス

クリス「待ってて！アークさん、アリスさん!!私、この世界でだれも差別のさえない国を作ります!!」

二十九発目 Now, enjoy a taste
of hell!! (地獄を楽しめ!!)

クロエを無事？助けだし外に出るころにはアーラム帝国の騎士たちが突入してきて首謀者らを捕縛していった

アーク「んじゃ俺らは戻るか」

クロエ「んふふ♡そうですね♡」

大講堂に入って時間から約二時間：：思いのほか立ってないが：：
アーク「お前何してんだよ？」

クロエ「あら？なんのことでしょう？」

なぜかクロエは俺に抱き着いていた

アーク「だから・・・なぜ第一皇女が抱き着いてんだ？」

クロエ「あら？今回の功労者に褒美はいらないのですか？」

アーク「・・・いや欲しいは欲しいけどコレジャナイ」

わざとらしく腕を胸に押し付けいたずらっぽく笑うクロエ

クロエ「アリスでさえこんなことしませんよ♪」

アーク「・・・そこでなぜアリスが出てくる？あと俺とアリスはそんな関係じゃない」

クロエ「あら、面白くない」

アーク「・・・なにを期待していた？」

以前のポイント 5868

獲得ポイント 800

合計ポイント 6668

そこからはというと流石アーラム帝国の騎士、スムーズにかつ静かに連行し国民にばれないようにした

クロエは安全のためと城で一夜を過ごすことになり、俺は先に家に帰ってアリスたちに帰らせるよう促した

アーク「ただいまー」

アリス「あら？遅かったじゃない？何かあったの？」

アーク「んまあ・・・別にこれっていつた事はないが先生の手伝いに行ってきた」

アリス「・・・ふうん（マジマジ）」

アーク「な、なんだよ？」

なぜかアリスは不機嫌な顔をし俺の顔をマジマジと見つめてくる

アリス「べつつにー!!ただ帰りが遅いな思っただけですー!!」

アーク「なんだ？アリスの奴？」

リン「助手・・・少しは察する力を身に着けたほうがいいよ？」

アーク「（。 ㇿ。）ハア？」

それからアリスとリンを寮に送った後俺は家兼倉庫に戻る・・・

・・・ことはなかった

アーク「さてもう一仕事」

俺は現在、アーハム城の皇帝の部屋にいた

なんでかという今回クロエ人質事件に関することと呼ばれた

アレクサンダー「よく来たなアークよ」

アーク「いえ、お呼びいただきありがとうございます。」

アレクサンダー「さて……まず娘を助けてくれてありがとう……
またお主に借りができてしまった」

アーク「いえ……それより今回のですが……」

アレクサンダー「ああ、そうだな……まあ、座って話そう」

そして皇帝は今回の事件で分かったことを言った

1、今回事件を執行した騎士はバサビイ共和国所属である

2、この騎士たちは先の「シン・カーニバル決闘場事件」の際、負けたシン・カーニバルがアークに復讐するためにバサビイ共和国から不法入国させたものである

3、今までは息を潜めて諜報などをしていたが「アリス誘拐事件」の時バサビイ共和国軍が強奪しようとしたがアークに阻まれしかも一族もろとも殺すと宣言され恐ろしくなって撤退を命令したが過激派の者たちが起こした事件だ

4、不法入国をさせたシン・カーニバルは今朝に焼死体で発見された

5、次の朝にアーハム帝国全体を上げて一斉捜査と警戒強化をするアレクサンダー「……という感じだ」

アーク「……まさかあいつとはな……つてか焼死体って何があった？」

アレクサンダー「数日前に魔法学園の林内で焼死体で発見された……恐らくバサビイ共和国の騎士が用済みだと判断され燃やされ殺されただろう」

……何とも皮肉なもんだ

焼死ってクロエを一瞬思い浮かべたがあいつがそんな残酷な殺し方をするわけないしな……

アーク「それで？俺になにしろと？」

アレクサンダー「なんだ？今回は積極的だな？」

アーク「……前に俺が宣言したのにも関わらず手を出されたのでアレクサンダー「ふん……なるほど……それで今回やってもらいたいことだが……明日の朝にバサビイ共和国のスパイ疑惑がある屋敷を一斉に家宅捜索をするその時に国外に逃げ出そうとするもの

を排除してくれ」

アーク「・・・了解・・・しかしバサビー共和国自体はなんて答えているんですか？」

アレクサンダー「・・・我が国とは全く関係のない彼らの独断だ・・・っと」

アーク「なるほど・・・トカゲのしっぽ切りですか」

アレクサンダー「・・・だが仮にアリスを手に入れたら英雄扱いをすると約束されたのであろう」

まったく・・・なんとも人間らしい回答だ

しかし事態は急転した

コンコン

「失礼します」

アレクサンダー「入れ」

扉から出てきたのは執事であろう老人エルフが部屋に入ってきて皇帝に耳打ちをした

アレクサンダー「ふむ・・・なに？・・・わかった下がれ」

「失礼します」

カチャ

バタン

アレクサンダー「アークよ予定を変更だ」

アーク「何かあったのですか？」

アレクサンダー「バサビー共和国のスパイ容疑にかけられた者たちが夜なのに馬車を出したという報告が入った」

アーク「・・・国外逃亡ですかね」

アレクサンダー「そのようだな・・・今から騎士たちが向かうにしても少し国境までには間に合わんな・・・ということ
でアークよ頼むぞ？」

アーク「・・・結局俺なんですわね」

アレクサンダー「安心せい報酬は出す・・・だがアーラム帝
国の仕業だとバレるにはいかんから魔獣にでも襲われたと思わせる

ようにしろ」

アーク「了解です・・・では失礼します」

カチャ

ボタン

アレクサンダーの部屋から出た後どうするかと考えた

アーク（・・・現在、容疑をかけられた・・・もうこの際スパイでいいか・・・はもう逃がっている・・・時間帯的に都市からはもう逃げた・・・なら機動力にある奴で行くべきだな・・・一応アリスも狙われる可能性があるからサイボーグ兵士を量産しておくか）

以前のポイント 6468

開発

フェンリル（戦闘型） 600

雑魚サイボーグ兵 300×10 10体

SMG（P90） 20×10 10丁

合計ポイント 868

なぜフェンリルを選んだのかという機動力といえばバイクなどを使えばいいのだがアレはエンジンの音で今は夜中だ国民が起きてなんだなんだと騒ぎ始める

なので機動力もあるフェンリルにした

フェンリルなら見つかったても歌う死神だとわからないし精々新種の魔獣を見た程度で終わる

アーク「さてと・・・楽殺にしてあげるか・・・」

城を出た後魔法学園につき量産したサイボーグ兵士をアリスの護衛をさせる

アーク「アリスに何かあつたら殺す」

サイボーグ兵士「（；・ω・）ok」

アーク「さてと・・・向かうか」

だが・・・いざ向かうとしたが

サイボーグ兵士「（； 皿、）ノ”チヨットチヨット・・・」

アーク「ん？どうしふあ!？」

思わず奇声を上げてしまった

なんでもかかって言うど……

アリス「……………」

アーク「あ、アリス!!どうしたんだ？こんな真夜中に？」

アリス「……………行くんでしょ？」

アーク「行くってどこに？」

アリス「とぼけないで！……私、あなたの主人なのよ？使い魔の
考えていることなんて魔法を使わずとも様子ですぐわかるわ」

アーク「……………ああ、少し用事だな」

アリス「帰ってくるでしようね？」

アーク「ああ、夜更けには帰ってくる……………そのあいだは俺の部下
が護衛をさせる」

アリス「……………」

アーク「安心しろ俺はそんなすぐに死ぬような「そんなんじゃない
もん!!」……………お、おう？どうしたアリス？」

アリス「……………アーク！行くのはいいけど一つだけ約束して!!」

アーク「え、なに急に「いいから!!」あ、はい」

アリス「少し屈んで!!」

アーク（どうしたんだ急に？）

とりあえず言われた通りに少し背を低くすると……

ふわ

俺の頭がアリスの柔らかい胸に包まれた

いつもなら振り払ったりするが今回は優しさだけ感じた

アリス「苦しくなったり……………辛くなったらいつでも慰めてあげる
よ……………私、戦うことはできないけど……………これくらいならできるよ
?……………だから……………いつでも帰ってきていいよ」

アーク「ああ……………行つてきます」

アリス「うん……………行つてらっしゃい……………」

アーハム帝国 郊外

「急げ!! 帝国騎士が来るぞ!!」

「ままああ・・・僕たちどうなるのお?」

「大丈夫よ!! きつとバサビイ共和国様が助けてくれるよ!!」

森の中を集団が移動していた

このエルフの集団は家族全員バサビイ共和国に心を売った売国奴でバサビイ共和国に情報を流していたが先ほどクロエ人質事件が解決され次の朝に一斉捜査が開始され自分たちがスパイだとバレてしまうので国外逃亡を開始していた

集団の中にはバサビイ共和国の生き残り騎士だったり事情が全く理解できていない子供まで千差万別だった

「おい! もうすぐ国境だ!!」

「ああ、助かった・・・」

「ねえ? もうすぐ寝れる?」

「ああ、もう少しで安心して寝れるぞ坊や」

足の弱い老人や妊婦、家財は馬車に乗せたが子供や若者は走って逃げていた

あとすこしで国から出れて安全を保障された生活ができると誰もが思った

・・・がその夢はすぐ踏みつぶされてしまった

ズシヤアアアアアアアアアアアアアアアア!!

「ぎやああああああああああ!!」

「て、敵襲ううううううう!!」

頭上から大人サイズの何かが馬車に降り立ち馬車を破壊してし

まった

?? 「・・・いたか」

粉々になった馬車の上でそのものが喋った

「ば、バケモノ・・・」

その姿は犬のような形をしているが顔は赤い仮面のようなものにおおわれており背中に刃物を乗せたバケモノであった

?? 「割と機動性はいいな・・・さてと・・・君たち?こんな真夜中にどこに移動しているんだい?しかもこんな大人数で国境近くまで?旅行なら早くても朝に移動するのでは?」

「な、何者だ!」

先頭にいた騎士が叫ぶ

?? 「はあ・・・ま、いいか・・・この名前が君たちの最後に聞く名前だ」

その狼は月を背に叫ぶ

アーク「・・・歌う死神だ」

さあ、

アーク「Dance until you die!!」

逃走するエルフの集団につく十分前

アーク「よし、出してくれ」

「ああ!!」

俺はサイボーグ兵士の姿のまま馬車に乗っていた

計画は俺はフェンリルの練習して開発を完了してる間にアーハム帝国の騎士の馬車に乗って少しでも差を縮めるため移動し完了したらフェンリルで追いかけるつというものだ

アーク「いくか」

ガタガタと馬車が揺れる中俺はVR空間に意識を転送した

数十分後

アーク「ふう・・・完了した」

体も慣れいつでもフェンリルになる準備はできた

ピロン♪

・・・来たか

通知：フェンリルの開発完了まで：・・・6, 5, 4, 3, 2, 1・・・
開発終了・・・変身します

すると徐々に視点が低くなっていき四つ足になっていく感じがする

アーク「これが・・・フェンリル・・・」

やっぱ犬だよな・・・これ

「うお!?アークが変わった!?!」

馬車を運転していた騎士も驚いてみている

アーク「騎士さんたち先に戻ってていいですよ・・・後は私がやります」

「あ、ちよつと待つて!!」

騎士は止めようとしたが

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!

馬車から飛び降り飛んでいった

「ちよつとお!!私たちは確認のために一緒に行かないといけないんですからあ!!」

そして今に至る

「に、に、にげろお!!」

「歌う死神だあ!!」

あまりの恐怖の塊が目の前に現れ逃げ惑うエルフたち

若者は馬車に押しつぶされた老人が助けを求めるとも目もくれず逃げ出し母親は我が子を置き去りにして逃げ出す

「うわああああん!! ままあ!!」

「どきなさいよ!! 逃げられないじゃない!!」

「うるせえ!! 俺はバサビイ共和国の者なんだぞ!! お前らが後に逃げろ!!」

「ちよつと!! 男なんだから戦いなさいよ!!」

「無理に決まっている!! 相手は歌う死神だぞ!？」

アーク「・・・はあ」

まったく醜いねえ・・・

自分の命を優先して自分の子を置き去りとは・・・

アーク「安心しろ・・・すぐに楽殺にしてあげる」

そして狼は跳躍し殺戮を開始した

尻尾のアームを背中にある高周波チェンソーをつかみ抜刀する

ブウウウウウウウウウウウウウウウウウ!!

背中から解放され起動した高周波チェンソーは夜の中威嚇するよ
うに爆音を立てる

アーク「ツ!!」

そしてフェンリルの足の機動性を使い逃げようとしている集団の
先頭に降り立ちチェンソーを先頭にいた騎士に振り上げる

「くそ!! バケモノめ!!」

騎士も対抗するように剣を抜き防ごうとするが
ガシャン!!

ギイイイイイイイイイイイズシャアアアアアアアアアアアアア!!

剣とチェンソーをぶつかり合った瞬間火花が散ったがチェンソー
はまるでバターを切るかのように滑らかに剣を切断し騎士の鎧を綺

麗な断面図を残して殺した

「くそー魔法！魔法だ!!」

仲間が殺されたのを見てすぐさま反撃にと魔法を演唱するが

アーク「遅い」

フェンリルの機動性で不規則に動き狙いを外させる

そして敵の動きの惑わされた時を狙って脚部にあるナイフを取り出し

ヒュッ!!

「(ドス!!) がふ!」

「(ドシュ!!) ごふ!」

魔法演唱をしようとしている敵を中心に刺していった

・・・まあ、集団で逃げているから集団に向かって適当に投げても誰かしらに当たるが

チェンソーで抱き合っている母子をもろとも切り裂き、ナイフで命乞いをしている老人の脳天を貫いたりした

・・・例によって全く罪悪感などは感じなかった

しかし不思議なことが起きた・・・それは先頭の騎士を殺してしばらくした時であった

アーク「おや?」

「フーツー!フーツー!フーツー!フーツー!フーツー!フーツー!」

「はあはあはあはあはあはあはあはあ・・・」

なぜか逃げようとしたエルフたちは逃走をやめ皆それぞれ木の棒や調理用の包丁などを持ちこちらを睨んできた

アーク「なんだ?逃げないのか?」

ドスドスドスドスドスドス

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

近寄ってみるが全員持っているものを武器のように構え睨んでいるが近づくと後に後ろに下がっている

アーク「なるほど・・・諦めたか」

彼らの目を見てすぐ理解した

彼らはもうこのバケモノから逃げられないし、かき立てて仲間の仇は討とうっと思っているのがヒシヒシと伝わってくる

アーク「・・・俺は本当は君たちを殺したくない・・・だけど君たちは俺の命より大切な物を壊し奪おうとしたそれだけで重罪だから」

Now, enjoy a taste of hell!!

そしてそつと心の中で言う

アーク（・・・やれ・・・AI）

意識が再び闇に沈んでいく中

アーク「よう・・・また会ったな」

??「・・・」

アーク「お前が誰だとかは今はどうでもいい・・・アリスのために
も・・・

ここにいる奴らを全員殺せ」

??「・・・(にやり)」

そして暗く寒い夜の下で

フェンリル（アーク）「AI戦闘モード・・・起動します」
真つ赤に輝く瞳を持つ化け物が逃げ惑うエルフたちを殺していった

ブウウウウウウウウウウウウ!!

「ぎやあああああああああ!!」

「や、やめてくれええええええ!!」

チェンソーが森の中に煌めくたびに赤い花が咲いていった
骨を断ち肉を切り裂き殺していった

「あ、足が・・・た、頼む!!もう二度とこんなことをせずに国に忠誠を誓うから!!いのち（ズシヤアアアアアア!!）」

殺していったエルフの中には性懲りもなく再び許しを請うものもいたがフェンリルの心は感情無きAI・・・頭を前足でつぶされ効率よく殺すために殺していった

「だ、だめだ!!このままでは!!」

「おい!お前!・・・するんだが行けるか!?!」

「わかった!!」

現在進行中でまだ生きているエルフの男性たちがたち何かを画策し始めた

フェンリル（アーク）「？」

しかしAIはどうでもいっと判断し残りのエルフを殺そうとしたが

「おい!このいぬっころ!!」

体に何かが描かれたエルフがフェンリルの体当たりをしようとして突進してきたが

ズシヤアアアアアアアアアアアア!!

案の定チェンソーに切られその場で倒れた・・・が

「かかったな!!」

フェンリル（アーク）「!?!」

するとエルフの体に描かれた模様が光り出し

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!

フェンリル（アーク）「キャイン!？」

「よし！効いたぞ!!」

フェンリル（アーク）「……………」

先ほどのエルフがしたのは自爆

まさかAIもこんなバカげていることはしないだろうと思っていたが違つてようだ

「これなら!!」

「おい！女どもはやめろ!!俺ら男がいく!!」

「何言つてんのよ!!こいつを倒さないと私たち生きれないから私たちもやるわよ!!」

「すまん……………みんな……………」

爆風で吹き飛ばされ態勢を整えたフェンリルが見たのは体に幾何学的な模様を描かれたエルフたちであった

すぐにフェンリルのAIは理解した

自爆攻撃

つと

ジリジリとエルフの集団が近づき

「う……………」

うおおおおおおおおおおおおお!!」

ヤケクソでへっぴり腰に叫びエルフの集団はフェンリルの体当たりをしようとする

フェンリルは迎え撃とうとするがすぐに今から切つても抑えきれないと判断し

フェンリル（アーク）「……………斬撃モード発動」

するとフェンリルから見える世界がゆっくりとなった
そしてチェンソーをゆっくりと動かしエルフの集団をなぞる

そして・・・

ぶしやあ・・・

フェンリル（アーク）「敵の殲滅を確認・・・AI戦闘モード解除します・・・see you next time」

エルフの集団を赤い森林に変えたのを確認したフェンリルはアークに戻った

アーク「・・・やっぱ・・・皆殺しですよね・・・」

赤い森林の中をゆっくり歩き誰も生きていないのを確認する

歩きたびにフェンリルのチェンソーで切ったのであろう肉片と血が足の裏に張り付き落ちていく

ぴしゃんぴしゃんぴしゃんぴしゃん

切った際にかかった返り血がフェンリルの頭部にかかって汚していく

アーク「まあ・・・いいか・・・帰ろ」

以前のポイント 868

獲得ポイント 1500

合計ポイント 2368

アーハム帝国に帰りを待っているアリスのもとに帰ろうとすると

「おかーさん・・・おかーさん・・・」

母親であったであろう肉塊にすぎる子供のエルフがいた

「おきてよお・・・おかあさん・・・」

アーク（こいつの母親は傷口から見て俺か）

「おかあさん・・・ヒッ!？」

泣きついていたエルフの子供は俺の存在に気が付くと泣くのをやめ逃げようとしたが腰が抜けたのか立ち上がれずにいた

アーク「……………」

殺そうかとチェンソーを掴み殺そうと

…………いや、やっぱりやめよう

俺は感じないだけで心が無いわけではない

アーク「おい、ガキ……死にたくないならさっさと失せろ……あ、バサビイ共和国には行くなよ?」

子供エルフは置いていきさっさと戻ろうかとしたが

かつん……

アーク「ん?」

「はあはあはあ……………」

頭に何かがぶつかり目の前に小石が転がってきた

そして振り返るとさっさきの子供エルフが泣きそうな顔でこちらを見ている

恐らく彼女が投げたのであろう

「おかあさんを……おかあさんを返せ!!このバケモノ!!」

右手に小石を持ちこちらに投げってくるが金属でできているフェンリルには全く効いていない

アーク「はあ……めんどくさいし……うざいな……」

そして俺は子供エルフに接近した

三十卷目 仕事終わり

「あ、アークさん!!」

アーク「来たか」

ひと仕事が終わったのでたばこ…つていうわけじゃないけどフェンリルの姿で木にもたれお座りしていた

「もー…私たちは死んだのを確認するためついていくつて言ったじゃないですか!!」

アーク「あー…そうだっけか? すまんな」

ここに来る前に来た方向からアーハム帝国の騎士がやってきた

彼らはアークが殲滅した後に生き残りがいないのかと検査する騎士だ

アーク「ま、こんな感じでいいか?」

「こんな感じとは……………う、うわあ」

「これ、全部アークが……………」

そこに広がっていたのは無残にも捨てられた肉塊だった

アーク「はっはっは!! 結構楽しかったですよ?」

「そ、そうかい…さすがにこの惨劇じゃ生きているものはいないだろう」

「そ、そうですね…一応聞きますが殺し損ねて逃がしたりとかは?」

アーク「いや、今見えている視界内には生きている奴はいない」

「そ、そうですね!!」

「じゃ、戻りますか!!」

アーク「…あ、すまんが先に行つててくれないか? 俺は魔獣どもに食われるところを確認してから帰る」

「そ、そうですね!! ではお先に!!」

そう言いそそくさと馬車に乗り国に帰っていった

「なあなあ? 歌う死神ってあんななのか?」

「…いや、多分アリス様が絡んだからだろう」

「うつへ…………有言実行だな」

アーク「うっせ聞こえてんぞ」

遠くなつていく馬車を見ながらつぶやくアーク

気の毒にもフェンリルのセンサーが良いせいで会話が丸聞こえだった

アーク「まったく……嘘までついたんだからな責任は取らんな
そつと移動し寄りかかっていた木の裏を見ると

「くう……くう……くう……くう……」

アーク「……はあ」

あのエルフ集団を殺戮したさいに最後まで石を投げてきた子供だ
実はあの夜

回想シーン

アーク「……はあ……めんどくさいし……うるさいな……」

アークはフェンリルの機動性を活かし小石を尻尾で弾き接近する

「はあはあ……よ、よくもおかあさんを!!」

子供も殺されていく親たちを見たのであろう真正面から戦ったら
勝ち目がないのを覚えていたので木々を立てにし逃げながら小石を
投げてきた

アーク「待てやこら!!」

なんかこの絵面、俺が悪者みたいやん!?

これ以上続いたら面倒なことになりそうなので子供の逃げる進路
を予測して先に追い越し逃げ道を閉ざす

アーク「許せよ」

バシユ!!

「あ!?!……首が……」

尻尾のアームで子供の首を掴み閉め上げ木に叩きつける

ジタバタ暴れる子供の力が少しずつ失っていくのが嫌でも感じてくる

「嫌だ・・・死にたくない・・・おかあ・・・さん・・・」

せめての抵抗と子供は幼い手でぺちぺちとフェンリルの装甲を叩くがダメージは皆無だ

そして最終的に子供の手はピクリと動かなく・・・

ガン!!

アーク「痛!?!」

「まだ・・・死にたく・・・ない!!」

しかし子供は諦めていなかった

最後の力で足を動かしアークの脚部を蹴りつけた

アーク「・・・やるじゃねか」

カメラアイで蹴られた部分を見ると凹んでいた

恐らくこの子供はまだ十分に魔法は使えないほどの魔力であるはずなのに、無理矢理脚力を上げる魔法を自身に掛け、蹴りつけたのであろう。

これはすごいことだ

アリスみたいな皇族の特徴である膨大な魔力を生まれつき持っているわけではなくただの平民がこんな早期に魔法が使えることはアーム帝国では異例すぎることだ

アーク（・・・この子もこのエルフたちと一緒にではなかったら学校で天才と呼ばれるだったろうに・・・でもこれが俺の役目なんだ）
せめて楽に逝かせようと首を閉めているアームの力を強くしていく

別に罪悪感とかは感じなかったが

めんどくさい

そう思い殺すのをやめてしまった

別にこのままにしておけば魔獣に食われるであろう・・・先ほどの付与魔法を全力で使ったせいで魔力はまともに残ってないであろう・・・そのうち死ぬ

だが別に残しておくのもめんどくさい・・・そう自分に言い聞かせた

・・・そしてアーハム帝国の騎士が帰ったところに戻る

アーク「どうしたのか・・・」

なぜか殺すのを躊躇ってしまいタイミングを逃してしまった

「むうう・・・おかあさん・・・」

アーク「はあ・・・アーハム帝国の教会に預けたほうがいいかな？」
しかしと考える

アーク「俺って多分（収穫祭のスイーツのせいで）顔が通っているよな？」

アーハム帝国内に入るならサイボーグの状態で入るがその状態で教会とかに行ったらめんどくさいことになりそう

天使のように優しいサイボーグ、歌う死神と呼ばれるほど残酷なサイボーグとか

まあ、教会に預けに行つた後サイボーグの方もバレてしまったら歌う死神なのに殺した親の子供を助けたっていうことが何かしらバレて各国からいちやもんを付けられる可能性がある

アーク「・・・はあ・・・俺はまだ弱いな」

本当はめんどくさいなどではなく子供の可能性を感じて殺さなかつただけだ

だってあの決意に満ちた目・・・なんか将来すごいことをやりそうな気がする（フラグ）

・・・とにかく誰かに見つけたもらうか
そう思い行動を開始した

「ふうく・・・今日も平和だつぺえ・・・」

バサビイ共和国の国境付近から商人が相棒の馬に乗って行商で
アーハム帝国に向かって行った

ここ最近各国は一人のエルフ少女を巡ってバチバチとなっており
気まづいが自分にとつてはどうでもいい

「ん？なんか変なおいがするな・・・」
すると

ブウウウウウウウウウウウ!!

「な、なんの音だあ!？」

森中に謎の爆音が鳴り馬も驚いてしまった

「ん？おい！何かいるぞ!!」

アーハム帝国の国境に入ったばかり商人が何かを見つけた

「なん・・・ひ、ひい!?!バケモノ!？」

そこには狼のような化け物が倒れている子供を殺そうとしていた

チラッ

狼のような化け物は商人に見つかったのを確認するとその場を離
れていった

「な、なんだあのバケモノ・・・な、なんだこの死体の山は・・・」

アーク「よし、保護してもらったか」

何をしていたのかという商人にあえて見つかれば子供を保護させた

少々無理やり感があるがあの商人は奴隷商人とかじゃないし大丈夫だろ

チェンソーの起動音で誘い出したけどうまく乗ってくれてありがたい

気絶している子供が保護されたのを確認し俺はアーム帝国に戻った

後日アーム帝国内の新聞で

「アーム帝国国境付近で謎の大量エルフの死体が!? 犯人は魔獣の可能性!? 生存者は子供一人!!」

と大きく見出しを出し

助かった子供エルフは「奇跡の子」と呼ばれ商人に育てられるのであった

後にこの子がアークにとって天敵になるのを、まだこの時のアークは知らない……!

アーク「ただいまー」

いつもどおりに家兼倉庫に到着し、フェンリルの姿のままベッド目掛けてダイブした。(尚、フェンリルは修理済)

以前のポイント 2368

修理

フェンリル 300

合計ポイント 2068

いろいろと疲れたな・・・

あの子供も幸せに生きているといいが

アーク「はぁ・・・ま、いいか寝るk「ねえ、アーク」はい、なに

アリス・・・ふお？」

フェンリルル???の首を動かして見ると

アリス「お帰りアーク」

アーク「ル???」

アリス「ル???何よなにか言いなさいよ」

アーク「ル???なんでアリスが俺のベッドに？」

アリス「ル???主人の私が大人しく自分の部屋で待っておくでも？それに

この家で待っておけば万の一アークが進化してもすぐわかるでしょ!!」

アーク「お前なあ・・・」

ぎゅつと抱きしめるアリス

アリス「それにしても・・・アークが犬になるなんてねえ・・・」

アーク「犬じゃない狼だ」

アリス「うふふ・・・別に・・・アークだったら・・・何でも・・・

いいわよ」

うつらうつらと眠たそうに漕ぐアリス

確かにもう夜中だから眠いのも納得だ

アーク「はぁ・・・とつとと寝ろ」

アリス「にゆう・・・お休み・・・アーク・・・」

アリスを寝かし俺も寝た

そーいやこの世界に来てからいろんなことを体験したな・・・

アリスとオーク退治したり冤罪に巻き込まれたり魔人領に突撃し

たり・・・いろいろとあったなあ

アリスにスイーツ食わせたりくだらないけど楽しい雑談をした

り・・・あ、そういやまだアーラム帝国の街を探索してないな・・・
今度アリスを誘って一緒に行ってみようかな？

俺はサイボーグになってアリスの部下ですって言えば何とかなる
だろ

二人で遊んで二人で駄弁って愚痴を言いあつたり俺の世界のこ
を楽しく聞いてくれたり・・・まるで・・・そう!!

まるで恋人・・・

アーク「ん？恋人？」

はて？つと思考を一旦停止し考えてみる

現在、こうやって添い寝しているがこれって異性同士としてセーフ
なのか？

俺、前世では彼女も作ったことがないが女性と添い寝って母親と一
緒の時くらいだった気がする

アーク「・・・」

そつと隣で寝ているアリスの顔を見る

アリス「むにやむにや・・・」

皇族らしからぬ涎を垂らしているが新手待て見ると美人だな・・・
小麦畑のような金髪、前世の女子が見たら嫉妬するほど綺麗で白い
肌、長いまつ毛にぷつくら可愛らしい唇

アーク（あれ？うちの主人さ・・・美人じゃね？）

いつもスイーツを食べたら情けない顔つきになるが何もしなければ
美人だな

アーク（つて！何主人に見惚れているんだ俺!!あくまでもアリスと
は主従関係だ!!恋なんかするわけないだろ!!）

そう自分に言いきかせ寝た

アークによるエルフ集団が虐殺事件があったころ・・・

↳バサビイ共和国↳

「何!?!作戦が失敗した!?!」

城では首相がアーハム帝国に侵入した部隊に命じた作戦が失敗に終わったのを聞いて憤慨していた

「仕方ない・・・おい!例の魔法を起動するぞ!!」

「な!?!ご乱心ですか!?!あの魔方陣は禁術ですぞ!!」

「知ったことかあ!!エルフどもが我々バサビイ共和国より上にいるのが悪いのだ!!」

「し、しかし!!それはミール聖教国が予言しない限り!!」

大臣の一人が首相を止めようとするが

「ええい!邪魔だ!!」

ずしやあああ!!

「そ、そんな・・・」

首相に剣を抜けれ切られてしまった

「おい!始めるぞ!!・・・あいつを召喚できれば我々はこの世界で最強になれる!!」

そう言い城内にある大広間に行く

「準備は?」

「ハイ・・・できております・・・」

大広間には巨大な魔方陣と・・・

「いやだ！たすけてくれええええええええええ!!」

「死にたくないよおオオオオオオオオオオオ!!」

「な、なぜなんだ!!なぜ私なのだああああ!!」

魔方陣の中には鎖に拘束されたり十字架に貼り付けにされている様々な種族がいた

「よし、やれ」

「は!」

100人も命令を受けた魔法使いは魔方陣を囲い始めた

「あまたの世界のいずこかにいる救世主よ、今ここに覇道を極め世界のため魔族を今殲滅せん!!」
「クアロウ!!」

すると魔方陣は青白く光り出し・・・

「いぎやああああああああああ!!」

「ま、魔力がああああああ!!」

「か、体ガアアアアアアアアアアアアアア!!」

魔方陣内にいた生贄は魔方陣に魔力を吸い取られ体もとあるものの召喚のため分解され魔力にされていった

そして・・・

「お、おお!!成功したぞ!!」

青白い光が収まるとそこには一人の人間が立っていた

「あ、よかった・・・逃げきれた・・・」

「成功だ・・・成功したぞおおおお!!」

「二二万歳!!バサビイ共和国万歳!!」

「召喚ができたぞ!!・・・くつくつく・・・これでアーハム帝国は我々バサビイ共和国のものだ!!」

この勇者を使つてなあああ!!」

第二章 国家争乱編

三十一 発目 生まれた火種

無事、収穫祭が終わり平凡な日常が戻ってきた（あれからサイボーグに戻りました）

以前のポイント 2368

変身

サイボーグ 300

合計ポイント 2068

収穫祭が終わってから数日後俺たちはいつもどおりの日常を送った・・・

アーク「・・・・・・・・・・・・・・・・」

しかし現在俺はとある戦闘を行っていた

リン「じよ、助手・・・大丈夫？」

アーク「し！静かに・・・」

いつもどおりにアリスを起こして送って昼まで適当に過ごしていた

授業は午前中にすべて終わりアリスは何か用があるといい一人で出て行ってしまった

リンは放課後に俺の家に来てスイーツを食べに来たのだが突如として敵が侵入してきた

俺は現在、その敵と戦っているんだが

アーク「くそ！速すぎる!?!」

そいつは黒く輝く体で表面は油でギトギト、しかも素早いというおまけつき

・・・そう

G (Hello!!)

アーク「なんでこの世界に這ユいよる黒キき混沌リがいるんだよ!」
右手に木の棒を持ちあたりを警戒する

そう俺が相手しているのは“G”

前世の世界だったら、たつた一匹でも家庭内に出現したらどんな幸せを送っている家庭でもすぐ悲鳴を上げ阿鼻叫喚の地獄に変えてしまふ恐ろしい生き物・・・いや、モンスターだ!!

この世界でもやはり“G”は皆から怖がれているらしく魔法使いのリンでさえ顔を青ざめて戦っている俺を心配している

カサカサカサ・・・

アーク「いたあ!!」

木の棒を思いつき振りかぶり倒そうとするが

G（ふん！遅い！遅すぎるう!!）

アーク「だあ!! Y O ☆ K E ☆ R U ☆ N A !!」

え？バル○ン使わないのかって？

いや、もつたいなくね？ たつた一匹のために100ゴールドはきついな

アーク「ええい!! どこや!」

しかもあいつ小さいからどこにでも入っていく

G（ほう？ 向かってくるのか？ 逃げずにこのD○^G○に近づくのかわ？）

なんだあの黒い奴？

めつちや堂々と戦場台所の真ん中で余裕そうに構えているんだが？

なんか「近づかなきゃ殴れねえ!!」的なことを言いたくなるんだが？

すると

クロエ「アーク♪ スイーツ食べに来ましたよー!!」

アーク「クロエ!! いいところ!!」

最近、おいしいスイーツを食べたことによつてご機嫌がよくなり

アリスのクラスの俺への陰口を減らしてくれているクロエがやってきた

クロエ「あれ?どうかしましたの?アーク?

クロエが不思議そうな顔で台所を覗いてくる

アーク「クロエ!頼む!!助けてくれ!!お前の魔法で何とかしてくれ!!」

クロエ「おや?歌う死神ともいわれているアークが恐れる物もいるんですね?」

アーク「いいから助けて!!ギャー!!クンナー!!」

クロエ「嫌ですわ?面倒くさいですしアークなら家ごと破壊すれば問題ないのでは?」

アーク「馬鹿やろお!?できないからこうして助けを求めているんだろ!!」

クロエ「・・・はあ、早くその・・・戦っている・・・奴(クロエは生徒だと思っている)を外に追い出してくださいまし!!」

アーク「いやマジで助けて!!第一皇女!!お前が必要なんだ!!」

ピクツ

クロエ「ふっふっふ!!仕方ありませんねえ!!この第一皇女クロエ・フォン・アーハムが退治してあげますわ!!」

アーク「おお!ありがとうございます!んじゃぶっ潰して!!」

クロエ「ええ!とこで倒す奴ってどr(G::ciao!!).....ひゅ(絶句)」

意気揚々と台所に入ったクロエだがGを見た瞬間、呼吸が乱れて木のように固まってしまった

クロエ「・・・アークまさかあれですか?」

アーク「おう!速く魔法でやってくれ!!」

クロエ「.....すみません.....パスで」

アーク「ふあ!?!」

え?あの豪華の魔法使いが?

アーク「どうしたんだ？らしくないぞ？」

クロエ「いえ、らしくもなくそもそもありません」

いや、真顔で言われても

クロエ「アークに言っておきますが私の魔法は決して蟲を焼くため
ものではありません」

アーク「・・・もしかしてさ・・・クロエって虫嫌い？」

クロエ「はっはっは!!この皇族である私が高々蟲で？笑えますね!!
高貴で次期女王と言われている私が虫が嫌いだけで怖がる私では（カ
サツ）・・・え？」

クロエが何か言っているが足元に何か当たったので見てみると

G（失礼！お嬢さん!!）

クロエ「ひ・・・ひ・・・」

ひぎやああああああああああああああああああ!!」

俺の家が悲鳴に包まれた

クロエ「む・・・むし・・・い・・・や・・・」

アーク「クロエえ!」

クロエ「(⊗ ⊗) スヤア」

クロエ

死因：虫怖い

こ、こいつ・・・よくもクロエを!!

リン「いや、助手!?さすがにもう木の棒で倒すのは無理だつて!?!
く!?!

仕方ない・・・愛銃を使うか

ピロン♪

通知：いやそこはバルオンでは？

アーク「G類は・・・滅亡せよ・・・」

通知：いや、本音はただ単にP90を使いたいただけですよ？

んな細かいことはいいんだよ通知さん

まあ、使いたいけど

通知：だめだこりや（諦め）

そしてGとの第二次戦争？が始まった

50分後!!

アーク「・・・くそ・・・やるじゃねえか」

（精神的） 激戦を数回繰り返したが結局決着はつかず膠着していた

家の中はぐちゃぐちゃになって（精神的） 激戦の凄さを物語っていた

いやだつてねえ？

だつて読者諸君もGを倒すのさ・・・見るのも嫌だし倒すのも嫌じゃん？

G（僕が何をしたつて言うんですか!?!）

知るかあ!!

言われてみればなんで前世の皆は“G”を見た瞬間叩きたくなくなるんだろうなあ!!

しかしこの膠着状態の戦場に救世主が降り立った

猫「にやあくん♪」

アーク「猫ちゃん!？」

それは最近、この家にやってくるようになった猫だった

最初はピューパの時、鳥たちが俺の体を止まり木にしていたがサイボーグになって止まることはなくなったがその代わり俺の家に来るようになった

最初は鳥たちにつられてきたのかな? って思ったけどそのうち一匹で来るようになった

猫「にやあくん?」

アーク「ああ!猫氏!!そっちに行つては!？」

やはり猫・・・興味が出るとその方に向かってしまう

猫「にやあく!!」

アーク「おお!猫氏!戦つてくれr・・・o h」

今の間起きたことを言おう

猫ちゃんGに襲い掛かる↓口で見事キャッチ↓口にくわえたまま俺に近づいてくる

アーク「OK・・・猫・・・そのまま外に吐き出して来t・・・」

おいちよつと待て来るな!？」

猫「にやあく!!」

アーク「い h ヴベ p んうえう b v p h b v うえお p l んヴお!？」

ピロン♪

通知：猫はGを食べるんですよ？

通知さん遅え!!

こうして戦争で言う俺は撤退戦を開始した

歌う死神が猫と混沌と戦っている一方

アーハム帝国の近くにある国がとんでもないことを発信した

アーハム城

皇帝が執務する部屋に書く部門のトップが集まっていた
アレクサンダー「・・・これは本当か？」

「・・・しかし本当なら従わないとなりません」
皇帝と外務担当が話している

アレクサンダー「・・・バサビイ共和国め・・・とんでもないものを
召喚しおって」

それは

「我がバサビイ共和国に勇者様が降臨なされた・・・したがって勇者法
を再開する」

アレクサンダー「・・・ミール聖教国は予言をしておらんぞ？」

「はい・・・おかしいですね」

「まさか・・・予言の報告忘れ？」

アレクサンダー「・・・」

しかし困った状況にこそとんでもないことが報告される

コンコンコン!!

「申し訳ございません!!大至急のことです!!」

アレクサンダー「入れ」

「失礼します!!報告します!!」

アレクサンダー「許可をする」

「バサビイ共和国に降臨なされた勇者様がアーラム帝国に急遽ご訪問
されるそうです!!

「なに!？」

「よりによってここかよ!!」

「昨日降臨された報告があつたんだぞ!!」

アレクサンダー「・・・いつ来るのか？」

「・・・三日後だそうですね」

アレクサンダー「・・・歌う死神を呼べ」

「皇帝陛下!?!何を!?!」

アレクサンダー「今からより禁口令を出す・・・歌う死神を呼べ」

その日の夕方

アーク「死ぬかと思った・・・」

あの猫様から逃げていたが最終的に貢物を捧げたらお帰りになされた

以前のポイント 2068

生産

サーモン 1

マグロ(大トロ) 1

黒毛和牛 1

合計ポイント 2065

・・・その後は厨房にあった残りもので作った

クロエ「・・・」

アーク「ごめんってクロエ・・・今度、何か一つ願いを叶えるから」

クロエ「では私専属のシェフ・・・」

アーク「それはダメだ」

そんなくだらないことをして過ごしていると

コンコン

アーク「はい」

カチャ

アーク「あれ?先生どうしたの?」

シーベルト「あ、アーク君・・・また城から招集がかかったよ」
アーク「また？」

シーベルト「うん・・・さっき手紙で緊急の事案だった」

アーク「はあ・・・了解・・・」

なんか最近城に呼ばれるのが多いな・・・まあ、十中八九皇帝だろ
うけど

アーク「リン、ちよつと俺、城に行ってくる!!アリスが来たら城に
いるって言つといて!!」

クロエ「あら？アークが城にですか？」

アーク「何だよ？悪いのか？」

クロエ「・・・あ、いえ・・・私の部屋とか見に行つてなにか盗む
のかと」

アーク「え？なに？俺つてそんな目で見られていたの？」

リン「助手・・・まさかそんな趣味があったとは」

アーク「おK？とにかく勝手に設定を加えんな・・・とにかく行つ
てくる」

軽く身支度して俺は城に向かって行つた

アーク「相変わらず豪華だな」

城門についたのはいいが・・・

流石皇族、広い広すぎる

アーク「よくよく考えたら俺つて城に来たこはあるけど道までは覚
えきれてないぞ・・・どうやって入ればいいんだ？」

城門の前でウロウロしていると

アリス「あれ？アーク？どうしたの？」

アーク「おう!?!アリス!?!どうし・・・て・・・ここに・・・」

そこにはいつものドレスではなく薄桃色のワンピースに麦わら帽子をかぶったアリスがいた

アリス「な、なによ？私の格好が変？」

アーク「・・・あ、いや・・・綺麗だなんて思った」

アリス「そ、そう／＼／＼／＼／＼」

アーク「・・・ところでアリスは何でここに？」

アリス「え？・・・あ、いや・・・そのお・・・ひ、秘密よ!!アークこそなんでここに？」

アーク「俺は皇帝に呼ばれたんだがどうやってこの城に入ればいいのかわからん」

アリス「お父様が？・・・あ、そういえばアークって来たことないんだっけ？」

アーク「おう、なんならこの城下町すら行ってことがない」

アリス「あ、なら今度二人で一緒に街を散策しない？私、これでもこの国の穴場スポットいっぱい知っているんだから!!」

アーク「・・・なあ、アリス」

アリス「何よ？まさか主人と一緒に散策が嫌なの？」

アーク「いやいやいや!!そんなはずないだろ!!・・・えっと・・・何でもないや」

アリス「ふくくくくくくくん」

今一瞬、デートかってツッコもうとしたが

アーク（それは自分の思い込みか・・・まさかアリスからデートに誘うわけないしな）

アリス「あ、いけない・・・アークってお父様に呼ばれていたんだっけ？なら私が城の中を案内するわ!!」

アーク「あ、すまんな助かる」

その後はアリスが楽しそうに案内した

やっぱ、今まで友達がおらずクラスで陰口を叩かれていて城に誘うことはなかったせいかな若干興奮気味に案内してくれて皇帝が待っている部屋についた

アリス「着いたわ!ここがお父様が待っている部屋よ!!」

アーク「ありがとうアリス・・・それじゃ学園で」
アリス「うん！あとでね!!」

たたたとアリスは小走りで帰っていった

アーク「さてと・・・気合い入れないとな」

気合いを入れ皇帝が待っている部屋をノックした

コンコンコン

アレクサンダー「入れ」

アーク「失礼します!!」

カチャ

中に入ると

アレクサンダー「おお、来たかね」

アーク「はい、アークです」

アレクサンダー「まあまあ・・・座ってくれたまえ」

中は意外と質素な物だった

城の舞踏会とかで使う大広間みたいな豪華ではなく木だけを使った部屋だった

アレクサンダー「まず要件は二つだ・・・まずはコレ」

すると皇帝はどこからか出した大きな袋を俺の前に置いた

アーク「これは？」

アレクサンダー「・・・前の裏切り者の討伐の報酬だ・・・上出来だ」

アーク「いえ、もったいない言葉です」

袋の中を見るとそこには大量の銀貨があり、ありがたくもらった

以前のポイント 2065

入手

銀貨 2000枚 || 2000000ゴールド || 20000ポイント

アレクサンダー「……では二個目の案件だ……アークよ、そなたに新しい任務をやる」

アーク「任務……ですか？」

アレクサンダー「ああ、お前には監視してほしい人物がいる」

アーク「監視？」

アレクサンダー「……勇者……という者を知っているか？」

アーク「……はい、一応ですが」

勇者か……前に学園の図書館で読んだくらいだな

確か……この世界にとって勇者は希望とも言われるくらい大切な存在で何なら勇者法っていうやばい奴まである

アーク「まさか……監視対象って勇者ですか？」

アレクサンダー「ああ、先日バサビイ共和国に降臨したと報告があった」

勇者は一度神様のところに行って能力をもらうので一人一人が凄まじい力を持っているらしい

アーク「勇者ですか……まさかあのバサビイ共和国なので軍事転用する可能性があるのでは監視をしてほしいと？」

アレクサンダー「その通りだ……勇者は大人しく政治には口出しはせずに魔王だけを倒せばいいんだが……先の人質事件で信用がでकिनしバサビイ共和国のことだ何かしらいちやもんを付けてくるだろう」

アーク「……わかりました……しかしこの城に来るとき街では急いで飾りつけなどがありましたか……あ……まさか」

アレクサンダー「察しがよくて助かる……今回の依頼も今回の訪問に合わせて頼んだ」

アーク「召喚されて早々にこの国に来るんですか？」

アレクサンダー「まったく困ったものだ……そういうことだ頼むぞ」

アーク「了解しました」

リン「え？勇者がやってくるの？」

家に戻った後、俺はアリスやリンに勇者が来るのを伝えた
ちなみに監視任務については皆には話していない

アーク「ああ、そうだ」

クロエ「おかしいわね？ミール聖教国は予言で降臨するって言っ
てないのに？」

アーク「なんか帝国議会は珍しく外れたんだらうっていう結論に
なったらしい」

アリス「へー・・・勇者様かあ・・・どんな人だらう？」

クロエ「異世界の人間ってどんな性格でしょうね？」

訪問してくる勇者はどんな奴なのかとわいわい話して今日は解散
した

三十二発目 勇者ご訪問

皇帝から監視依頼がきて三日後・・・

国では盛大な歓迎式が行われていた

誰のかつて？それは・・・

アーク「あれが勇者か」

「わああああああああああああああああ!!」

現在、俺は町の屋根の上に潜伏していた

凄いな勇者っていうポジション

どこもかしこも「勇者様だああああ!!」とか「英雄様だああああ!!」とか叫んでるし

アーク「・・・でもよく受け入れたよなこの国も」

勇者が降臨してきたのはアーラム帝国とあまり仲良しではないバサビイ共和国だ

確か・・・バサビイ共和国ってエルフの奴隷がいたり他の国のエルフを拉致してきたりとエルフ的には嫌っている

アーク「あ、よく見たらみんな無理やり笑顔になって感じだな」
皆強張った表情でいる

やっぱ嫌いだよな・・・バサビイ共和国のこと
屋根の上から双眼鏡で監視しているが

アーク「・・・見えん」
勇者が乗っているであろう馬車はカーテンがかけられていて中までは見えなかった

一応双眼鏡はメタルギアV：TPPの双眼鏡で姿までは見えないが
少しだけ隙間があるとところからスキャンした

ピーーーーーー（スキャン中）

Scan completed（スキャン完了）

アーク「・・・よし」

大体身長は150cmか・・・

低いな・・・女性か？

しかしスキヤンした後のシルエットを見ると肩幅は広い

アーク「まあ、いい・・・勇者はアーハム城で謁見されるから先回りするか」

街の屋上で誰にも気づかれないうちに城に向かって跳躍していった

くアーハム城く

街からサイボーグの機動性を活かし先回りをして皇帝の間の謁見室の天井にある窓の外に面している方に隠れた

アーク「んく・・・やっぱ空気が重いな・・・まあ、やっぱ勇者だからなあ・・・」

窓から覗き中を見てみるとまるで中世のヨーロッパの即位式のよくな貴族や大臣たちが横に並んでいて皇帝が一番奥で座っている

あ、アリス見つけ

・・・めつちや緊張してる顔やん

皇帝の横に皇帝の妻（皇妃）やアリスとクロエの二人が玉座に座っていた

うちの主人はすぐくガタガタと顔を青ざめて震えているけど隣で座っているクロエは余裕の表情で待っている

流石第一皇女、甘い物食ったらだらしない顔になるけどやるときはやるんだな

すると

「勇者様のおなーーーーりーーーーー!!」

・・・来たか

ゴゴゴ・・・と扉が開くと共に数人の人間が入ってきた

先頭に勇者が歩いておりその後ろをバサビイ共和国の官僚たちが威張って入ってくる

アーク「あれが勇者……」

勇者の姿は……

アーク「言っちゃあれだけど……あれって本当に勇者？」
今は兜をかぶっていて顔全体は分からないけど肌は荒れて、そばかすがあり出歯で目が小さくてしかも身長が低い

……おい、前世では洗顔したのか？

めっちゃ肌が汚い……汚すぎる……

遠くから双眼鏡で見ているけど遠くから双眼鏡無しでもわかる……

油でギトギトだもん……前に戦ったGかよ

メ○ズビオレ使えよ……

そう思いながらもスキャンをする

ピーーーー（スキャン中）

Scan completed（スキャン完了）

アーク「さーて……どんな……ふあ!？」

「む？　なんだ今変な声が聞こえた気がするが？」

あ、やつべ

アリス「き、キノセイデハ？」

あ、アリス……ナイスフオロー

そこに書かれていたことがあまりにも驚愕すぎて変な声が出てしまったが主人が誤魔化してくれた

アーク「ふいー……助かったぜアリス………ったくなんだよこれ」

そこに書かれていたのは

神様特典・絶対回避、百発百中、魔力無限大、質量生産、危険察知、無限○剣製、超回復、超成長

アーク「なんじゃこりや……」

え、ナニコレ？

マジでチートじゃん

つか無限○剣製って「体は剣でできている」じゃん……どこの金

びか王と戦ったマスターですか？

アーク「俺でもメタルギアと検索機能の二つで転生するときロリ神の部下のミスで特別に手に入れたなのに・・・勇者召喚だったら話は別なのか？」

そんなことを考えていると勇者は兜を取り名前を言う

アレクサンダー「・・・ようこそいらした・・・勇者よ・・・私の名はアレクサンダー・フォン・アーハム・・・この国の現皇帝だ」

皇帝が自己紹介すると続けてアーハムファミリーは言う

エリザベス「私はエリザベス・フォン・アーハム・・・現皇帝の妻です」

あ、初めて見たな皇后

皇后の姿は城に近い金髪に控えめな服を着ている淑女だでも顔はアリスに似てるな

クロエ「第一皇女のクロエ・フォン・アーハムです」

クロエは赤いドレスを着て髪留めにバラを模した髪留めを付けていて・・・まるで豪華の魔法使いって呼ばれるのにはふさわしく可憐だった

アリス「第二皇女のアリス・フォン・アーハムです、クロエ姉さまの妹です」

そして我らが主人アリスは白いドレスに白薔薇つというクロエとは真逆だが清楚に感じれてこれはこれで綺麗だ

アレクサンダー「問おう・・・そなたが勇者か？」

??「ああ！俺がこの世界の救世主の勇者だ!!」

兜を取った露わになった顔は黒髪に黒目で男性

アーク（まさかの日本人？）

??「ふっふっふ!!聞いて跪け!!我の名は・・・」

勇者ペガサスだ!!」

アレクサンダー「は？」

は？

嫌ゴメン・・・マジでは？だわ

周りの大臣や貴族も敬ってほしいつもりで自信満々に宣言した勇者に向かつて

(。D。) ハア？

の顔で統一されていた

何なら皇帝の横で座っているクロエは笑いそうになるが堪えていてアリスは呆れている

普通、本名を言うのが正しいと思うけど

マジでペガサスっていう名前だったら痛々しいだろ・・・

「おい！何をしているせつかく勇者様が名乗ったんだ!!拍手をしろ!!」

ペガサスとかいう勇者に同行していたバサビイ共和国の者が叫ぶと皇帝の間に乾いた拍手が響いた

パチパチパチ・・・

「ゆ、勇者様・・・か、かつこいいですー(棒)」

「いけめんですー(棒)」

ペガサス「かつかつか!!敬え敬え!!」

・・・なんだあの勇者？

俺が前世でドラ○エとかしすぎのせいかもしれないけど・・・さすがに人間として終わってるだろ・・・

皇帝が目の前にいるのに敬語を使わないし、あっちから訪問してきたのに敬意すら払ってないぞ？

それに周りの貴族たちの言葉もすぐくわかりやすい(まあ、ワザとの可能性もあるが)棒読みなのに全く気付かず威張り散らしている

・・・あの勇者のメンタルが鋼を超えて合金なのか、もしくは馬鹿なのか

「申し訳ございませんねえ・・・勇者様・・・このエルフどもの反応が遅くて」

同行していたバサビイ共和国の者が勇者に謝る

ペガサス「はははは!!別にいいさ・・・俺は勇者だ!!これくらいのことです怒る馬鹿じゃない」

いや、馬鹿なのはお前だよ

「本当に申し訳ございません・・・なにせエルフはド田舎の蟲どもが本を取って人間の真似ごとをしているほどの知能なにて」

ペガサス「あははははは!!ここのエルフってバカなんだなあ!!」

いや、どんだけ格下に見てんだよバサビイ共和国・・・

ピロン♪

通知：どうする？ 処す？ 処す？ 処す？

通知さん・・・なんかキャラ変わってるよ・・・

「え〜・・・我々、バサビイ共和国は・・・あーつと？アーハム帝国の国家の安全をバサビイ共和国の勇者ペガサス様がお守りしご命令がある限り従い魔族の殲滅を手助け勝利に導かん・・・」

こいつ・・・うまく丸くしてるけどつまり

『魔族から守ってあげる代わりに勇者の言うことを聞けよ？ ついでにバサビイ共和国のことも聞けよ？』

つてことだ

何なら勇者法があるからそれを利用しているんだろう

オセロットに教わったことだけど話の内容も大切だが声のトーンもよく聞けって言われていたがよくわかるな

「して・・・えーつと？・・・ここに協定を結び勇者法を適用せん・・・つと」

バサビイ共和国の馬鹿の仕方・・・あからさますぎだろ・・・
そう言い持っていた紙を大臣を通して皇帝に渡った

アレクサンダー「チツ・・・確かに受け取った」

聞こえはしなかったが双眼鏡で見ている皇帝が舌打ちするのが見えたので書かれていたものがどんな内容だったか察しできる

アレクサンダー「・・・ではこれにて謁見と交渉締結は終了だ・・・勇者様、今夜は我が城の部屋に「おや？まだ一名紹介が終わってませんよねえ？」・・・失礼、もう一名とは？」

「誰って・・・歌う死神じゃないですかあ!!」

アリス「ツ!!」

うわあ・・・めんどくさいの来たなあ・・・

実を言うと皇帝から俺の存在はあまり話さないってことは事前には言われていたがまさかあつちからふってくるとは

ペガサス「・・・大臣？歌う死神ってなんだ？」

「おお、勇者様・・・歌う死神とは半年前にあった愚かなエルフがとある使い魔に冤罪をかけ返り討ちにしたバケモノなのですぞ!!」

バケモノって・・・

まあ、この世界の人たちから見たら俺は立派なバケモノか

「して？歌う死神はどこにいるんでしよう？」

アレクサンダー「・・・知って何になる？」

「いえいえ・・・」応知っておこうかなつと・・・もしその化け物が我々を襲ってきたらあまりの怖さに魔物と勘違いして攻撃しそうですね」

アレクサンダー「・・・現在、とある場所に幽閉しており脱走することはない」

「む、そうですか」

あ、皇帝陛下

いい感じに誤魔化せたな

ペガサス「あく・・・大臣？その歌う・・・なんだ？貧乏神？なんて結局のところわついの敵ではないだろ？」

貧乏神じゃねえ!!

死神だ!!

「ゆ、勇者様!!」

ペガサス「なんとたつて俺は勇者だから敵なんていないんだよ!!」

そう言い、神様特典で剣をまるで天使の翼のように召喚する勇者。

「おおー勇者様がいれば何も怖くない!!」

「勇者様ばんざーい!!」

・・・さてそんな茶番は無視しておくとうやら後はアーラム帝国内を明日散策して夜に帰るらしい

アーク「さてと・・・今日はアリスのところに帰るか・・・」

だが俺の悪運はこんなところでは帰してくれなかった

ピロン♪

ん? どうした? 通知さん?

通知: メールが届きました。中身を確認しますか?

アーク「・・・メール?」

どういうことだ?

俺にはメールをやり取りする仲間は今いない

アリスもiDROIDでできなくもないが今は公衆の前なのでやる暇がない

アーク「いったい誰が・・・」

そう思い開くと

メール: ここに來い

宛先人も書かれておらずメールのはそれだけ書かれており後は地図みたいなのに赤い丸が書かれていた

アーク「ここに來いって・・・アーラム帝国の外じゃん!?!」

異世界版Googleマップで調べるとまさかのアーラム帝国の

領地外

アーク「コレ移動だけでもめっちゃ時間がかかるぞ?」

どうしたものか・・・

あ、でもこれってメールなんだろう?

なら逆なら・・・

アーク「えーつと：『無理、今用事があつて行けません』つと」

まさか異世界でメールのやり取りがあるとはな・・・

とりあえず送信してみる

ピロン♪

通知：メールが届きました

早!?

まだ30秒くらいしかたつてないぞ!?

ま、まあいいか・・・それより内容は?

メール：え?なに?まさかデート中?

アーク「・・・『違います』つと」

ピロン♪

メール：もー♪別に恥ずかしくならなくてもいいのに!!お姉さんに相談しなさい!なに?彼女が好きすぎて死にそうです?!

アーク「・・・『ちげえわ!?!』つと」

ピロン♪

メール：・・・なあーんだ・・・でもさ?気になる子くらいはいるよね?ねえねえ!!好きなタイプはどんな!!

アーク「・・・『もう返事しませんよ』つと」

ピロン♪

メール：待つて!?!わかつたわかつたから!!・・・えく・・・じゃあここね

するとメールと共に新しい集合場所が出た

「次はアーハム帝国内で郊外だった

アーク「・・・いや、なんなん？これ？なにこの友達感覚の通信」
ともかく行くか

今、勇者はアーハム帝国についていろいろと聞かされてるし、夜は晩餐会に招待されていて多分アリスとかに絡んでくるからその前に帰ってくればいいのか

一応、毘だったことに考えてP90とかの“備え”は持って行つてくか……。

そして最後にアリスの様子を見て、俺は指定された場所に向かつて行つた……。

アーク「さて・・・ここか」

指定された場所についたが目の前には洞窟があった

アーク「用心するか」

P90を出しセーフティーを外しいつでも撃てるように構える

ジャリジャリジャリ・・・

洞窟の中は砂利が多く逆に魔獣がいなかった

アーク「・・・でもないってことは逆に奥にヤバいものがあるんだよなあ」

オセロツトも言っていたが洞窟で野生生物がいなかったら安心するのではなく緊張して警戒しろって言ってたな

奥に進むにつれ洞窟の入り口から来た光がなくなっていき洞窟内は真っ暗になっていた

ナイトビジョンを起動し少しずつ奥に進んでいくと

アーク「・・・ん？」

しかし妙だ・・・問題なく奥に進んでいるが一本道で分かれ道など

がない

本当に何もなく、川もなく鍾乳石すらない

アーク「……アサルトライフルほしいな」

P90ってサブマシンガンだから威力が申し訳ないし……

今からじゃ遅いし……

暗闇の中少し後悔しながら進んでいくと

アーク「ん？光？」

ようやく洞窟に曲がり角がありその奥から光が見えた

スツ

曲がり角に背中を付け覗いてみると

アーク「は？」

本日二回目の（。D。）ハア？が出た

そこには

アーク「……なんで襖？」

そこにあつたのは壁に前世で生活していた日本家屋の襖があつた

その洞窟なのに似つかない襖の隙間から光が漏れている

アーク（まさか他の国から勇者が降臨したけど脱走して俺に要請を

？しかしそれだと呼ぶメリットがわからん……）

考えても答えが出ないので襖の取っ手に手をかけ突入の準備をする

すう……

はあ……

行くか

決意が固まり手に力を入れる

そして

パアアアアン!!

アーク「Fre^動eze! Rai^手se^を your^上 hand!^{ろ!}」

あ、やべ

間違えて英語で言っちゃった

しかし返ってきたのは予想外の者だった

??

「待っwait!て!wait!て!I私haveにenemyはno意hostility!な」

え?

なんで英語で返ってくるんだ?

中に入るとそこは日本風の和室に中央には机があつて少女がジジ臭くお茶を飲んでいた

?? 「はあ・・・なんで命の恩人に銃を向けてるのよ」

アーク 「え?なんであなたが・・・」

そこにいたのは・・・

ロリ神 「久しぶりだね? 鋼宮徹君?」

前世の俺を転生してくれたロリ神だった

三十三発目 勇者の正体

アーク「……なんで神様がここに？」

ロリ神「まあまあ……とにかく座って茶でも飲もう？」
そう言うのと目の前にお茶が出てきた。

いや、注がれたとかではなくて……”ポんツ”って感じに、手品の如くその空間に生成された……。

アーク「お、おう……」

こりや、ご丁寧……と言いたいけど、俺の今の体は口がないから飲めないんだがな!!

ロリ神「あれ？ そうなの？ えつと……それでどう？ 異世界生活？」

アーク「まあ、楽しいさ……あ、てかこのロリ神！ お前俺を転生させるとき人間じゃなくてメタルギアにしたろツ！」

ロリ神「いや、あれは衰弱死する程ゲームをするのが悪いって!？」
アーク「んなわk……いや、よくよく考えたらそうか……よく生きていられたな俺……」

ロリ神「でしょ？」

アーク「まあそれはそれとして……何で、こんな郊外に俺を呼んだんだ？」

ロリ神「あくそれね？ 神である私の神聖な力が駄々洩れるとかで、この世界の住民にばれたく無かったの」

アーク「……じゃあ、この空間も神様の力か？」
ロリ神「うん！ すごいでしょ神様の力って！」

小さい癖に、ドヤ顔をするロリ神。
アーク「で？ 呼んだのはただお話しするためじゃないだろ？」

ロリ神「あ、そうだった！ ……えつと……実はね……徹君……いや、アークにお願い事があるの」

アーク「……ほう？」

人間の頃の名前ではなく、「歌う死神」としての名前で呼んだっていう事は……余程のことか。

ロリ神「実はね……一か月前に私……神が普段生活している神界でね？ 一件の事件があったの」

アーク「事件？」

ロリ神「うん……」

そこから彼女は浮かない表情の中、ぽつりぽつりと話していく……。

ロリ神「地球でね？ ある人間が罪を犯してね、死んでしまったの……。そりゃあ罪が多過ぎる罪人だったから、速攻地獄行きになったの……」

あ、ちゃんと地獄とかはあるんだな。

アーク「一応聞くがその……魂か？ そいつの罪ってなんだ？」

ロリ神「端的に言えば、痴漢野郎。もつと詳しく言っちゃうと……東京の電車内で痴漢行為した後、何食わぬ顔で降車しては別の駅でエスカレーターで女子高生のいる段の一段下において盗撮したの。そして、そのままついて行って痴漢しようとしたんだけど……覆面警察に見つかって逃げようとしたけど、階段から踏み外して転げ落ちてそのまま死んだ、おマヌケさん」

アーク「……ギルティ過ぎるだろ。後、死に方が下らなッ!」

ロリ神「でね、その地獄に落ちた魂なんだけど……前に地獄から脱獄して行方不明になったの」

……ん？

ロリ神「でね？ 地獄はそりゃ大慌てで急いで調べただけど……部下の鬼がその魂に騙された挙句、独断で地獄から出してしまったって……」

アーク「……何やってんだよ、その鬼……」

ロリ神「……それで一応その魂は見つかって、私たち神が天変地異を使って追いかけたけど……なんとその魂……転生者用の特典を上げる力の一部を盗んで何処かの世界に逃げちゃったの……」

……ダサい死に方してるクセして、死後は“大怪盗”みたいな事してるって……何だ、その魂ッ!?

ロリ神「それで神々は急いでその行った世界を探したけど……転生

する世界って無数にあるからね……。それで時間を割いて探した結果、この世界にいるって分かったけど……。ねえ、アーク？」

アーク「なんだ？」

ロリ神「ここ最近でさ？ やたらと威張り散らかす、虎の後ろに隠れている狐みたいな奴見てない？」

威張っている奴？

転生者って……。俺以外にいるわけ……。

俺の名前は、勇者ペガサスだあッ！

アーク「……いるわ一名」

めっちゃ心当たりがあるわ。

いるわ、なんなら今日主人の国に来たわッ！

ロリ神「え!!? いるの!!? また気のせいかなって思って、アークも拉致って探そうかなって思ってたッ！」

てめえ、ザツケンナッ!?

アーク「あ、でも間違いだったらいけないから……。その逃げた魂の名前とか分かる？」

ロリ神「えつとね……」

……すると、ロリ神はどこからか出したファイルをペラペラとめくり調べていると……?

ロリ神「あ、わかった！ えつとね……」

つていう名前ッ!」
あ、ペガサスじゃないのか……。
なんだ……。勘違いか……。

ん? 翔馬?

翔馬……翔ぶ馬……ペガサス……。

アーク「……確定だわ」

ロリ神「え!? いるの!」

アーク「おう、何なら今日来たわ」

ロリ神「え!? やった!! これでやることが減る!!」

……言ったら殴られそうだけど……無邪気な子供を連想させる
ーションで、部屋の中をピョンピョン跳ねるロリ神。

ロリ神「よし! アーク! 君にお願いして良いかなッ!」

アーク「ああ? なんだ?」

ロリ神「その転生者を殺して欲しいのッ!」

アーク「わあお」

すごく無邪気な笑顔で物騒な事を言うなこのロリ神……。神じゃあなかつたら、フツフにサイコパスだぞ……。？

アーク「聞いた方が良いだろうから聞くが……。何でだ？」

ロリ神「何でって簡単よツ！ まず、神様ルールとして転生者がいる世界には干渉してはいけないのツ！ 鉄則として、その魂を回収して輪廻転生の輪から永久追放するツ！」

アーク「怖ツ!? ……でもそいつは一応、転生者だろ？ いいのか？」

ロリ神「安心して！ 厳密に言うくと、神様の許可なく転生してはイキッテいるから、弁論の余地なく侵略者扱いになるって感じだからツ！ 後、報酬も期待して良いからツ！」

アーク「安心してって……。一応聞くが、最終的に殺せばいいんだろ？」

ロリ神「うん！ 死んだら即、地獄にシユウウーツ！ するからツ！ ……あつ、永遠ネバーにね？ 永遠」

アーク「納豆みたいに茶化すなよ……。！） ……じゃあさ？ まだ……殺さないでいいか？」

ロリ神「なんで？」

アーク「えつとな……。？ 俺らがいる世界って魔族がいるファンタジー系なんだ……。んで、全国の絶賛魔族の対策で大忙し……。だけど、勇者は皆にとって希望的存在なんだ……。そして、一番面倒なことにその“痴漢魂”はこの世界では勇者として活動中……。ってとこ」

ロリ神「なるほど……。分かったツ！ 殺すタイミングはアークに任せるからねツ！ こっちは、いつでもお迎えする準備をしておくツ！」

アーク「ああ……。それだけか？」

ロリ神「うん！ それじゃ私帰るからツ！ そろそろこの世界の住民にバレちゃいそうツ！」

アーク「そうか。じゃあな」

神様が作った和室の壁に掛かっていた時計を見ると午後6時……
もうすぐ勇者も参加する晩餐会がある。

ロリ神「あ、せっかくだから送ってあげるよ」

アーク「えっ、いいのか？」

ロリ神「うん！ 久しぶりに崩れた会話をしたお礼よ！ さきつ、
入ってッ！」

すると、どこかで見たことがある緑色の土管ワー・ドカンが出てきた……!?

ロリ神「この中に入れば、アーハム帝国にすぐ着いちやうんだからッ！」

アーク「……好きなのか？ マ●オ？」お、それはありがたい……
じゃあ、お願いするぜ」

アリス「……アーク……何処に行ったのよ……？」

その日の夜、アリスは一人で城内にある巨大な庭園にいた。

アリス「もう……何処か一人で行くなら事前に言っつて、言ったの……」

黄昏時が迫る中、もう間もなく勇者を招いた晩餐会が始まるのだが

……未だ帰ってこない使い魔をアリスは心配する。

アリス「せっかくこのドレスを見せようかなって、思ってたのに……」

アリスが着ているドレスは夜空をイメージしたドレスで、藍色の生地地ににスパンコールの如き、キラキラと光る粒が散りばめられていた。

アリス「このドレス……結構、お気に入りなの……」

クロエ「あら？ アリス？ あとちよつとで、始まるわよ？」
アリス「あ、クロエ姉さま」

後ろから声を掛けられ、振り向くと自分の姉がいた。

クロエが着るドレスは、アリスとは真逆な朝日をイメージして作られた純白のドレスだ。

クロエ「……やっぱりアークですか？」

アリス「はい……少し、心配になってきたので……」

クロエ「全く……あの使い魔がそれほど心配なのですか？」

アリス「そりやそうですよッ！ 私の大切な使い魔なので……」

クロエ「……もしかして……アークはアリスより私の方が美しすぎて、早くアリスが何処かに行かないかなって、思っているのでは？」

アリス「あ、アークはそんな事は思いませんッ！」

クロエ「うふふふ♪ 嘘よ。……でも、そのドレスは彼に絶対に見せたいでしょ？」

アリス「はい！ もちろんッ！」

アークの話題になると、意気揚々に耳をパタパタさせるアリス。

そんな妹の話を聞いてあげようと、近くのベンチに姉妹は揃って座る。

アリス「アークって、前にアークの生まれた世界の事を話してくれましたですよッ！ ワイバーンより早く飛ぶ道具に、世界中の誰とでも繋がる通魔機ッ！ 空の向こう側に行ける飛行体まで出来てるってッ！ それから、それから……！」

クロエ「……ねえ、アリス……？」

彼の事……好き？

アリス「え？」

クロエ「最近のアリスの顔を見ていると、彼の話題になった瞬間……笑顔になってる……」

アリス「……え？ ええ！？ えええッ!？」

クロエ「それにアリスって……私より魔法の才能がないから、友達さえできなかったでしょ？ 昔はいつも死んだ目をしていたアリスが、アークに出会ってから気付いてないかもしれないけど……色々と変わっているのよ？」

アリス「変わってる？ 私が？」

そう言えば……前に、クラスメイトと女子会をしていた時に……。
「アークの事、どう思っているの？」

……なんて聞かれたが、別にどうも思ったことはない。

あくまでも、自分は主人でアークは使い魔だ……それ以上でも、それ以下でもない。

毎日大体一緒だが……特に思っていない。

精々、今度街に一緒に出て回ろうとしか……。

ん？ 街に一緒に回って？

一旦、冷静になって考えてみる。

本当を言うと、アリスは街の事は知っているが……行った事はない。

だが、重要なのはそこではない……自分の使い魔の事だ。

彼曰く、男性（らしい）が……もう一度言おう。……アークは男性で、自分は女性だ。

男性と女性……それが一緒に街を練り歩くって……

……それってデートじゃ……ッ!?

アリス「いやいやいや!!絶対ない!!ぜつつつつつつつつたいない!!いい!アリス!私は確かにアークとは永遠に破られることはない主従関係を結んでいるけど、べ、別に好きじゃ////////」

よくよく思い返してみたら……自分の使い魔のスペックが高い気がする。

クラスメイトの女子が言っていたが……。

「結婚するなら……身長が高くて、筋肉があつて、ちゃんと相手のために怒ってくれて、でも優しくして……あ! 後、料理が上手なところですわッ!」

……あれ?

アークって……ある意味じゃ、ほぼ全部当て嵌まってないか？

(顔と頭はアレだが……)身長も高く、(サイボーグの所為でもあるが……)筋肉もある……しかも、主従関係はあるのに怒ってくれてる(そのほとんどがアリスのスイーツの食べ過ぎ)……しかも、悪魔的に料理が上手い(知らぬが花だが……ほとんどが先人の知恵のおかげ)……。

……ウチの使い魔……優秀物件では？

アリス「……なんかここまできるとアークの顔……見てみたいな

……ああ、もう！ 早く帰ってきてよアークッ！」

三十四卷目 経緯

ペガサス「……すげえな!!この世界!!」

アーハム城の大広間で勇者ペガサスこと金剛翔馬がいた
にしても運がよかった……

前世では女子高生のスカートの中を盗撮したり、痴漢するのが俺にとつての生きがい……イヤ、天から与えられた使命と言っても良い程だった……ツ！（痴漢ダメ絶対）

だけだよ!!

いつもどおりにさあ!? 盗撮しようとかさあ!? してたらさあツ!? 覆面ポリ公に腕捕まれてさあ!? 逃げようとしたらさあ!? 階段から滑り落ちて頭打って死んじまっだよツ!? 人間としての本能に従っただけなのにだぞツ!?（……それは人間じゃあなく、野獣の本能では?）

あのポリ野郎……マジ許さんしツ!?（盗撮は犯罪です。そして、ポリ公さんはキチンと仕事をしていただけです）

そっから大変だったわあ……なんかさあ? 目が覚めたらさあ? 目の前にロリがいてさあ……?

「……弁明は聞かん。テメエは、地獄行きじゃあッ!」

……って言われた瞬間さあ、灼熱地獄に叩き落されたんだよツ!?
なあなあ? これって人権侵害じゃない? 酷くない? 俺、人間様だよ?（……痴漢をした豚が、人間様を名乗るのは……）

くっそおッ! 別にロリは好みじゃないんだが……なんだっけ?
ネットで言う……えつと「ワカラセ」だっけ? そうッ! 「オシオキ」をする必要があるな!!（……人間様なら、1秒前の事も忘れない筈です）

え? 地獄はどうだったのかって? そりゃ……さあ? 名前のとおり地獄だったよ。（豚の分際でどうやって……?）

ああ……イラつく……! 思い出すだけでトラウマ級だけどさあ!?! それ以上にムカツクのなんなんのさあツ!? 針山に入山させられるわ! 舌抜かれそうになるわ! そのツ他モロツモロの地獄な

フルコースだったしさあ……ッ！ 人権も糞もないッ！ 人権侵害だ！ 裁判しろッ！（……当然です。豚には“人権”も“裁判”もありません。痴漢する豚は、「タダの豚以下のクズ」です）

そして、地獄に入ってからしばらく経ったんだが……。

血の池にブチ込まれたりさあ!! 火炙りでコンガリ焼かれたりさあ!! 針山を登らせたりさあ!! もうっ、ホンツトツさあ!! 命が何個あってもさあ!! 足りないくらい苦痛をさあ!! 感じたのよッ!? 分かるッ!? 分かるよねエッ!? (……恐縮ですが、豚と意思疎通出来る“超能力者”が居たとしても……分かりたくないと思います)

……で、当然こう思うワケッ！ もう限界ッ！ もう我慢できんッ！ もう出てってやるからなッ！ あばよオオ！ 地獄ウウウッ！
……って感じ？

……あつ、でも……ここ“地獄”だよな？ 地球だったら……“刑務所”みたいなモンだよなあ……？ ツ!? じゃあ、裁判終わってんじゃんッ!? イヤ、裁判すらしてねエッ!? クソツタレエッ！ 誰だよッ!? あのロリ女神を裁判に掛けず、人権侵害だの騒いでいた馬鹿はッ!? 出て来いよッ!? (現状把握、お疲れ様。……けど、お前だよ)

……ああ……クソッ！ 地獄じゃあ、生命的には死なないけど……精神的に何千万回も死にそうになってるからなッ！（……当然の報いです）

だからこそよお……女子高生のパンツ撮影時のアングルを考える以上に考え抜いたワケッ！ んで！ 天才的な閃きをしたワケよ俺はッ！ 脱獄……！ その野望のために、ハリウッドスター気分獄卒で鬼さんを探して接触したワケよッ！（……その前に、地獄の刑期を全うして下さい）

なあ、はっはっはッ！ 意外と大した事もないなッ！ 地獄ッ！
えっ？ 笑ってる理由う？ 結果だよ！ 脱走の結果ッ！ 「プ
リズン・オープン」(?)の主人公気分であろうやく鬼を見つけて話した
ら、簡ツ単ツに騙されてやんのッ！ だつてさあ？ プツ、俺、角も
生えてないのにさあ？ プツプツ、肌も赤でも青でも緑でもないのに
さあ？ プツハハッ、「あゝ私は現場主任だ。君達の監視のために
コツソリこんな」人間」の形(なり)をしていてなあ？ ちよつと用
事が出来たから、その「地獄の非常口」を開けてくれんかねエ？」
……つて言ったらさあッ!? プツハアゝハッハッハッハッ！ すん
なり開けちやつたのよッ!? 全く疑いもしないでッ！ クソバカだ
なあゝと思つたよッ！ まつ、それ以前に？ 俺のハリウッドスター
並みの名演があつたからなッ！ (……成程、それじゃあ捕縛後、亡者
達用の「見せ物小屋」を用意しましょう)

まあ、出たら出たで地獄だつたがなッ！ (当然です……逃げんな
豚)

したらさあ？ あのロリ神がさあ？ カンツカンツにさあ？ 怒
りながらさあ？ 俺を追いかけてきやがったのよ……ッ!? けど、途
中でさあ？ 変な光の玉神様特典の源を拾つてさあ？ 逃げてきたんだけどよお
……？ あの神々供、容赦なさ過ぎだろおお……。 (特にロリ神イッ
！ マジ、ふぎけんなッ！)

流石に、某」野菜ベの星の戦闘ト民族の王子」みたいな、幻(フアント
ム)見ていたね……「もうダメだ……おしまいだあ……」……つて。
(痴漢野郎 さつさと地獄に 帰ろうや)

……つて、諦めてさあ？ いたんだけどよお？ なんとラツキー！
……逃げている先で変な穴を見つけちやつて、そこに入れたんだよ
俺エツ！

そしてさあ？ 目が覚めたらさあ？ 変な広場に居たのよ！
流石に驚いたなあ……。 神々から逃げきれたさあ？ 気が付いた

らさあ？ 一面血の海だったのよ！ ……けどさあ？ そこにいた
惨劇には似合わない程にさあ？ 豪華な服を着たおっさんが来ては、
喜び出したんだよなあ……まあ、オレよりブサイクだったけどツ！
(豚が言うな、豚がツ！)

……なんでもさあ？ 「勇者様が降臨なされたぞおっツ！」……と
かさあ？ よく分からない事を言ってたけどさあ……まあ、いつかつ
！ (そんな理解力だからこそ、豚と言われるんです)

……んでさあ？ 俺はさあ？ 《世界を救う勇者》ってさあ？ 役
割、貰っちゃったのよツ！ (……天地がひっくり返っても足りない
程の、不相応……)

そっからは、まあ……天国、天国ツ！

威張ってもさあ？ どの人間でもすぐ頭を下げるしィ？ 何か
壊しても許されるしィ？ その時おっさんからさあ？ 「貴方は勇
者様ですから、何をしても許されるのですよ！」……って、お墨付き
も貰っちゃたからさあ！？ もうやりたい放題なワケよツ！

ィィもんだなあツ！ 権力があるってのはツ！ (豚の●太のくせに生
意気だぞ！)

んでさあ？ この世界に召喚されてさあ？ しばらくたつた後
？ おっさんがさあ？ 「勇者様の力を見たい」……って言われたん
だけどさあ……？ 知らんぞお？ 俺エ？

知らんって言ったらさあ？ 神様特典の事らしいから関係ねエ！
……って、言いそうだったんだけどさあ？ そういえば貰ってはな
いが拾った(盗んだんだろ？ ボケエツ！)物ならいくつかあったか
らさあ？ 適当に使ったワケだけどお……何だコレエ？

よくよく考えたらさあ？ この力(チカラ)あ……何の力なのか
さあ？ 分からんぞお？ (なら、なんで拾った!?)

……つつか、このおっさん相ツ！ うるツさいなああツ！

何だよ!？ さつきから、早く見せろだの勇者だのってツ!？ ……
たつく、急かしゃがってよおツ!？ ……まあ、でもおっ？ この後「う
るツせエぞツ! 俺は勇者何だろツ!？ だったら、静かにさせろよツ

！ このブサイクツッ！」……って言ったたらさあ？ 悔しそうに黙ってやんの！ なっ、はっはっはッ！ ざまアくみろおおッ！

……けどブサイク首相の所為か、力の内容は分からないままだった……。

何度試してみても、無理無理なカタツムリよ……。乳遅女としても進まず、全ツ然ッ！ 分かんなかったわア……。

すると、何処からか……。「あいつ本当に勇者なのか？」、「使えなくね？」……と、まあく生意気、NIKEな声が聞こえてきやがったのツ！ あのポリ野郎以前だったけど、怒りが込み上げてきたモンだから決心したんだッ！ 護衛からもらった剣を抜き、その声が聞こえてきた集団をそりやあもう勇者の如く、バツタバツタとコロ助……じゃなかった、殺して回ったワケよッ！ (……得意げに言うな、クソ豚)

「おやめなされッ！ 勇者様ッ！」とかあ〜？ 「お許しをッ！」とかあ〜？ 聞こえてきた“気”はしたんだけどお……？

知るる〜か〜つて〜のツ！

勇者の陰口叩く“悪党”なお前らをブツ殺して、何が悪いんだよッ！? 勇者は俺だぞッ!? 俺エッ！ (……ダメだコイツ……) “目”と“脳ミソ”が腐ってやがる……ッ！)

影口を叩いた(……と、腐った脳ミソで試行した末に、選び抜いた)
“悪党”クソ騎士達をブツ殺し、「フツ……また、つまらぬものを斬ってしまったでござる……！」……と、某有名な“石川土左衛門(イシカワドザエモン)” (注:五エ門です。“土左衛門”は「水死体」になります)のように、俺は“ビシッ!”と決めていた。その間……周りの奴らが親に怒られた子供みたいにビビってた顔が……ブハッ！ 実に傑作だったぜッ！

後お〜？ 能力について、判明した事お〜ご紹介ああいッ！

どうやら〜？ 俺の能力はあ〜？ (……下らない) “ダカダカダカダカ”とか、効果音出してるだろうなあ……)

「見た事がある武器を、無限にコピーする能力」のようくでエエすツ！

すつげえもんな!! (……お手並み拝見といこうか…… (苦笑))

(勝手な腐った脳ミソがエスカレートしたのか……) という訳で、

チュートリアル

実 験 ツ！ そこら辺に居た”ザコ騎士”相手に練習！ 練習ツ！

んでちよつとしたら、なぐんと何とツ！ 剣が雨のように出てき

ては……次々と逃げ回るチキンなザコ騎士達があつという間に”

ローストチキン”へと、上手に出来ましたくツ！ ってなあツ！

……あ？ 殺してさあ？ 何ともさあ？ 思わなかつたの

かつてえ？

……何言つてんの？ どくせ、こいつらはあ……。

ゲームで言う、モブキャラだろ？

何体殺しても問題なしツ！ 俺は俺で経験値が上がるからヨシツ

！ (……”現●ネコ”かよ……ツ!?) そして、俺はこの世界の人間

じゃないから関係なああしツ！

それにい！ 前世で読んだ異世界系の漫画でさあ？ エルフとか

人間を殺してもお？ 登場人物の人間はあ？ いつもの(サイコ

パス)顔でえ？ 仲間と合流してたしいくツ!?! (……テメエの血

は何色だ?)

ほんで、その後お？ 部屋に案内されたんだけどさあ？

俺エ、初めてメイドを見・た・の・よツ！ (……キシヨい。説明する

のがメンドクサイ程に、テメエの言動全てがキツシヨいツ！)

部屋に入った後お？ 胸が？ こう……”ボインでバインで

ムツチリンにドデカイン”としたメイドをさつさと呼んでこいツ！

……つてご指名したのよ？ そつたら、もう歩く度にい？ もくう

”ボインツボインツ”に揺・れ・ま・く・るツ！ 鼻血、大・噴・火ツ

！ ……なメイドちゃんが来た訳よツ！ だからもうこれは我慢出

来んツ！ と思つてさあ？ 近くに呼んだのよ？ 「ヨシツ！ 有無

を言わさず裸になつて。ハ・ダ・カッ！ 今すぐ！ hurry up(?) ハリポタアツ

！」……つて、命令したらさあ？ 最初は断られたちやつたのよ？
……勿論、悲しかったよ？ けどねえ……？ 勇者命令だつて、部屋中に剣を出しつづ言つたら、(引きつり倒した笑顔で)ニッコリ裸になつてくれたんだぜツ!? やつたねツ！ (……ドン引きする程のクズだな、お前エ……!?!)

ムフフ……！ どれどれエ？ 早速、あんなT O K I Oやこんなントニオな場所を？ この40歳、ナイスミドル(……絶対”ナイスピツグ”の間違い)なおじさんが確認しよう……としてたのに……！ ブ……もういつか。ブサイク改め、”首相のおっさん”が唐突に來た。で？ 何イ？ ……えっ？ 「アーハム帝国」つて言うところに向かう？ おいッ！ もおゝ邪魔すんなよツ!?(……ナイス、首相！ (- ∇ -) bグツ！)

……フーン、エルフが？ 統治している国ねエ……？
……エルフつてあれだろ？

よく”ゴ布林”とか”オーク”とかあ？ 俺とは程遠いブサくてキモい相手に”アンアン”犯されちまう種族だろお？ (……テメエの親戚じゃあないの?)

俺さあ？ 前世じゃあさあ？ ネットで調べた程度だけお？
おっさん曰くう？ 「我々、人間より格下だ」……つて、言つちやつてから、弱いんだらうなあ。(……典型的、”井の中の蛙”ですな?)

……タラララララララッタララつと、そして次の日……ツ！
……になつたんだが……。

あくあ！ クソオツ！ 俺、男だからなあ？ あっちの欲求……溜まつちやつてんだよなあ……？

最後に一人でやったのいつだろ？ ……あのデカイメイドちゃん……抱いときや良かったなあ

なんて、馬車の中で”グススカ”寝むりこけている内に、どうやらアーハム帝国の城に着いちやつてたようだ。

護衛していたザコ騎士曰く……帝国に入った時に歓迎があつたら

しく、それはそれは華やかな催しだったそうなの。

……おいおいおいッ!? 起こせよッ!? てか、エルフ供の姿あ!勇者である俺が見れてなくてどうすんだよッ!? (……良かったですね。視姦の判決が山積みにならなくて)

全く……それからイラつきつつも、眼を擦りながら事前に渡されたセリフの書かれた紙をサラツと見ては、サツサと渡された鎧に袖を通していた。

鎧は重かつたけどおっ? カッコイイぞッ!

何でもお? 全て金で作られたらしいッ!“ 人類最強”な勇者の俺に、ピツタリじゃないかッ! (……)” 人類最低”のクズ豚が、自慢しないで下さい)

……えッ? 「金より鋼の方が頑丈ですぞ……」……だつて? 黙れよクソジジイッ! ザコ騎士よりも歳喰った”クソザコナメクジ”なジジイ騎士の癖して、勇者の俺に口出ししてんじゃあねエよッ! ……という思いを”拳”に込めて黙らせた(因みに金は鉄より脆い……)つて何人ものザコ騎士が言ってたから、ホントらしい……)

そんなこんなで、ありがた迷惑な話を聞いてる内に……アーハム帝国の皇帝が待っている”謁見の間”に入ってた……。

勿論ッ! 勇者である俺は、堂々と入っていったんだが……。

兜を脱いだ勇者の目は……玉座に座っている皇帝ではなく、その隣の姉妹エルフに向いていた……!

アレクサンダー「問おう……其方が勇者か?」

あ、皇帝の話……全く、聞いてなかったわあ……。

……まあ、下等なエルフだし……? 話の内容なんてどうでもいかッ!

ペガサス「ああ! 俺が、この世界の救世主の勇者だッ!」

てかてか!?! 皇帝の横にいるエルフ……めっちゃエロいなッ!

エロフやなアッ!

特に白いドレスアリス・フォン・アーハムを着たエルフが、一番のお・好・み……だなッ! 正に、ドッ・タイプッ!

……後、その隣にいる赤いドレスを着たエルフもおく？ 胸がデカくて好みだけんども……白い方がオドオドしていてドツ・ストライイイイクツ！ ホントもう、こんな下らない式典を今すぐにほっぽってでもつ、ももももおお……ツ！ おつ、おそつ、襲いちやいたいなあああああツ！
……よおおおおおしツ！

彼女を、俺のハーレム花嫁第一号にしようツ！

何故かは知らないが、彼女は俺の事をチラチラ見ていたので、気にはなっているんだろうツ！

俺の未来予想（と言う名の妄想）では、俺は勇者だから魔族を倒すのが使命だツ！ つまああありいッ！

1, 魔族を倒したぞおツ！

← 2, わあ！ 流石、勇者様ツ！

← 3, ムフフノ、フンツ！ そうだろう……？ そうであろうツ！

← 4, アリス「ゆ、勇者様……わ、私と……け、けっ……結婚してくださいッ！」

5, ああ！ 勿論だともツ！ この勇者ペガサスツ！ 君の申し出を今すぐにも受け入れ、結婚しようツ!!

……つて、感じ、感じ、感じイイイイイイイッ！

もう勇者な俺には100%叶う、天国リ〜ンゴ〜ンな未来じゃないかッ！（……これほど「取らぬ狸の皮算用」と言う“ことわざ”が似合う人間はいるであろうか？ ……この豚であるツ！）

勿論、胸がデカイ方のエルフも俺のハーレム、花嫁第二号にするツ！

待ってるよッ！ その……何だっけ？ 第二皇女だっけか？

（代わりに、お前が首を刎ねられるか？）

ああ、クソ！ 妄想していて聞いてなかったな……とにかくその第二皇女ツ！ 俺が迎えに行くから待ってろよツ！

あ、その前にい？ スンゴイ名乗りして、良い印象（ポイント）を付けないとかないと……！

ペガサス「ふっふっふッ！ 聞いて跪けッ！ 我の名は勇者ペガサスだッ！」

因みに、“ペガサス”なのは俺の名前である“翔馬”をモジって名乗ったぜッ！

どうだ？ かつこいいだろッ？

そして、「勇者（笑）」が下劣な妄想に浸っている間……着々と進んだ謁見は終わりを迎え、冒頭の大広間へと場面は戻って行く……。

アリス「……」

クロエが去った後……アリスは一人、ベンチの上でブラブラと足を動かしながら使い魔の帰りを待っていた……。

ペガサス（お！ いたいた！ 俺の花嫁くちやあああん♪）

勇者は、勇者とは程遠いストーカーの如く……大広間内にあった、観葉植物であろう樹木の後ろからアリスを見て（視姦して）いた。

ペガサス（さっすがあく俺の花嫁一号ッ！ こくんな暗い夜なのに、月の光で輝く髪が美しい過ぎるん……！ そ・れ・に……ッ！

あの、前世の世界じゃ女性顔負けのいかがわしい体ッ！ 流石……流ッ石ッ！ 俺の嫁エツ！）

そして、ストーカーや不審者としては100点満点な動きで、そつと背後から近づいて行く……ッ!?

ペガサス「やあ？ 第二皇女？ いつ、良い夜だねえッ！」

アリス「アークッ！ ……あ、なんだ勇者かあ……。……どうかなされましたか？」

ペガサス「（な、何だ？ 今、一瞬……残念そうな顔で見られたが……まっ、まままま……気のせいだよなッ！）……えっと、アリス

様ア……でしたよね？」

アリス「あ、はい……第二皇女のアリスです」

ペガサス「どうしてこちらに？」

アリス「えつと……私の大切な部下の帰りを待っているんです」

ペガサス（へえく……部下が居るんだ）

辿々しい会話が続く中、何を思ったのか「勇者（笑）」は、そつときりげなくアリスの隣に座る。

ペガサス「あのう……一つ良いですか？」

アリス「……何でしょう？」

生暖かい鼻息に、形容し難い口臭がアリスの鼻を嫌悪感で満たすと同時に、徐々に勇者の顔が迫って来る……！ ……正直、この勇者と一対一で話すのはあまり好きではないので早々に要件を済ませて欲しいと、彼女は切に願っていた……。

しかし、彼女の切なる願いも虚しく……この勇者、とんでもない事を言やがったのである……ッ！

ペガサス「君、俺に惚れてるんだろ？」

アリス「……はい？」

ペガサス「あー！ いやいやいやいやあく別は無理して言わなくて良いよッ！ 俺ってば勇者だからあ？ 女性に好きだと言わせるのはあ？ 男としてえ？ 優秀じゃあないからねッ！」

アリス「え、いや……何で私が好きだつ……て……？」

ペガサス「だって君イ！ 謁見の時、俺にチラチラと熱い視線を送っていたじゃないか!？」

……勘違いも甚だしいが、アリスは勇者の“G”の如き汚れ切った肌を視界に捉えてしまったあまり、汚すぎて、直視しなくなかっただ

けなのだが……？（それでもチラチラ見ていたのは、第二皇女と言う地位故……役目を果たさなくてはならなかったからである。勇者の言う“LOVE”^愛どころか、“Like”^{好き}すらも、ミジンコどころか、微塵にもないッ！）

アリスの世界の住民は、スイーツ文化の発展があまり進歩してない代わりに、自然豊かな環境で育った果物を食べてきたため、美男美女の大前提の如く……全員肌が綺麗だったのである。逆に荒れているのは珍しいのである。……流石に、勇者（笑）の肌は酷過ぎたようだが……。

ペガサス「なあ！ 約束してくれ！ この戦争が終わったら俺と……」

何やら勝手にフラグを立てているが……そのまま立てて、サツサと戦場で無様に野垂れ死んでくれ！ ……なんて、読者の願いは届かなかった……。それどころか、最後までは言えず……いや、この男が言わせなかった……ッ！

アーク「……へえ？ 俺と……何だつて？」

ペガサス「けっ、けっこん……うお!! 誰だよお！ お前エツ!!」
話そうとした瞬間、目の前にスーツを着た“人型の何か”がいた……。

アーク「単なる通りすがりの使いm……じゃなくて、アリス様の部下だ」

たつく……あのロリ神野郎、アーハム帝国に降ろすって言ったのに……何で牧場に降ろす？

焦ったぞ俺？ まさか異世界に来て、牛に追いかけられる日が来るとはな……。

しかし危なあ……危うく自白しちまう所だったけど、何とか誤魔化したなあ……。それに、牧場からココに戻っても多分ギリギリ間に合

わないだろうから、家に飛んでいく勢いで戻り、洗っておいたスーツを着ておいた。……言っちゃ悪いだろうが、勇者。お前の“G肌”よりは、このスーツの方がマシだ。

アリス「あ！ アーク！ 遅かったじゃないッ！ どこに行つてたむう!？」

ちよっ、アリスッ!? 使い魔である俺に彼女が問い詰めようとしたが、言う前に口に人差し指を押し当てられ、耳に囁くように彼女に注意した。

アーク「アリス……アークは幽閉しているって事になつてるだろ？ ここではアリスの護衛兼執事って事にしてくれ……!」

耳に息が掛かる程の近かさで、耳打ちをしてはアリスから俺は離れた。

ペガサス「部下？ 名前はなんてあるんだ？」

アーク「自己紹介がまだでしたね。私のことは……まあ、ステイブとお呼びください」

これは俺の本名の「鋼宮」の鋼を英語にして、軽くモジっただけだ。ペガサス「へえ……ステイブねえ……変な名前だね」

うっせ、お前のペガサスよりかはマシだろ!？」

ペガサス「でも今、俺は俺のアリス様と会話しているから、何処かに行つててくれないか？」

アーク「いえ、私はアリス様の護衛……離れる訳にはいかないので……!」

ペガサス「へえ、大変なものだねえ？ このエルフ皇女は、無能……って呼ばれてるしい？」

アーク（こいつ……さては、バサビイ共和国の奴らから聞いたな……!）

ペガサス「それに、エルフってえ？ オークとか、ゴブリンのお？ 肉便器になるために生まれた種族みたいなものじゃん！ それに、人間でもお？ 簡ッ単ッに、股を開く種族ってえ？ 聞いた……た……け……ど……?」

アリス「……」

座っているアリスも、冷静な顔でいたが……流石に勇者に対する怒りを抑え切れないのだろう……。その証拠にドレスを掴んでいる手は、プルプルと血管が浮立つ程に握られていた……！

ペガサス「確かあ……？ 俺の世界じゃあ？ そくゆるのって、「エ・ロ・フ」って呼ばれてたよなあ……。グフフフ……！ あっ、思わずヨダレが……！ えっと？ 何だっけ……ああそうそう！ “エロフ”なんて、守る価値って皆無じゃない？ 実質ウ……エルフって娼婦みたいなものだしねえ？ えっと……ストーブ君だっけ？」

アーク「ステイブです」

こいつ……さつき自己紹介したのに、もう忘れてるって……。

鶏か何かか？ エエツ？ そもそも……幽閉されず、お前が敵で俺を“ストーブ”なんてフザけて呼ぶなら……今すぐ“ピースウオーカー”とかに搭載されてる「火炎放射器」でこんがりと、「ローストチキン」にでもしてやろうかツ！ クソ勇者ツ！

ペガサス「ああ！ そうだったね、君もおく？ 疲れてんじやない？ 見たところおく？ 人間らしいけどお……？ そくだ！ 君イツ！ 俺の召使いにならないかツ！」

アーク「……お言葉ですが、私はアリス様に忠誠を誓った身なのでお断らせていただきます」

ペガサス「ちえ……なあなあ？ アリス！ こんつな、人間は置いといてさあく？ 俺の部屋に来てさあく？ 熱く話しを、お互い朝まで……語り合わないかい……？」

アリス「……え？ え、いやちよつと!」

勇者がアリスの上から下までを丹念に視姦しつつ、吐き気を催す程に臭い口説き文句を彼女に言い放つ。勿論、彼女は勇者が伸ばした右手は握る事なく……悪寒がしたのか、固まってしまっていた……。戸惑う彼女を前にイラついたのか……勇者ペガサス（笑）は、彼女の手を無理やり掴み連れて行こうとしたが、

アーク「ツチ」

アリス「え!?! むにゆう!?!」

アークはそれを見て、勇者が掴んでいるアリスの腕を振り払っては奪い、アリスを自分の胸へと押し付けるのであった……！

勇者がつかんでいるアリスの腕を振り払って奪いアリスを自分の胸の押し付けた

ペガサス「ちよ、ちよつとツッ！ 何をするんだ!?!」

アーク「……いえ、高貴な勇者様には人間勇者の真似事がをしてるエルフの汚い手が触れてしまったため、僭越ながら私めが振り解かせて頂きました……。……ってか、そのゾンビみたいな”爪に汚れが溜まりまくった”汚い手で触んな、ゴミクソハゲ野郎がツッ!」

ペガサス「さ、流石にいく? そこまでえくの事はあ……!」

アーク「恐縮ですが、”エルフは娼婦”……だと、勇者様は先程おっしゃってましたよね? でしたら、再び恐縮ですが……こんな何処とも知らない馬の骨な男に抱かれたであろうエルフなど、清廉潔白で高貴なハズの勇者様には、不相応かつ不潔だと愚考します……。 (本音: ……娼婦? ……エルフが? 頭腐らせてんじゃねエぞ? このツ、ゴミカス勇者がツ! アリスをそんな腐ったような言い方……いや、それどころか”話”……いやいや、もう”息”ですら吐きかけねえでくれるかなあ……? クソカス勇者がツ!)」

アリス「ちよつと! あーk……ステイブ! 絶対それ建前むぎゅ!?!」

アーク「すこし黙ってるアリス)……それに、アリス様が無能だと仰ってましたが……彼女は確かに魔法の才能は御座いません。しかし恐縮ながら、これだけはハッキリと申し上げさせて頂きます……ツ! 最初から才能に恵まれており、優越感に浸っている愚勇者か者よりも……血が滲む程の努力をし、どんな種族であろうと心優しく接してくれるお方がアリス様なのです。それに……アリス様は、種族だけで才能を差別するような”愚か者”の主人では御座いませんので……」

ペガサス「しっ……しかしッ! 彼女は皇族だし、俺は勇者だツ! そつ、それに……さっきの娼婦云々はさあ? 皇族以外の話だからさあ? だからあ……だからさあ! アリスちゃ……様とはあ? 部屋で話すだけだし……? 護衛は大丈夫だから……!」

アーク「……はあ……。誠に大変恐縮ながら、申し上げさせて頂きますけど……。」

アリス様の護衛は私一人で十分です。勇者様の御力など、最初から当てにしていますので……（本音……さつきも思ったが、もう二度と俺のアリスに触ったり話しかけんな、クソ野郎。あとさつきと死んで、力を返して地獄に帰りやがれ偽勇者がッ!?）」

ペガサス「そ、そくかそくか！ 君はあ……俺を恐れているのかッ！ ブルツブルなのかッ！」

アーク「はい、私にとつては恐れ多き事です……。 （本音……んなわけないだろ？ 俺の想像以上に頭が腐り切ってやがんの？

ええッ!? カビ生えてハエも集らない程に腐り切ったカボチャ並みとかかッ!? お前の脳ミソッ!?）」

ペガサス「そうかそうか！ 俺を尊敬してるのかッ！」

アーク「ええ、正直もう二度とない経験でしょう……。 （本音・正直、全身が汚物過ぎる酷さなんで、二度と見たくありません。サツサと早く消えてくださいクソツタレッ!）」

何と言う醜悪な冷戦であろう……。！ 一方のアークは、今にも目から“核ミサイル”が発射されるか、心に“核爆弾”が投下されてしまふのを防ごうと、必死に冷静さを保つために奮闘していた……。一方の勇者は、そんな“核ミサイル”や“核爆弾”の存在なんて露知らず……。全く危機を察知せずに、まるで“ハンバーガー”と“コーラ”を両手に、自身を賞賛都合の良い事しか言わないしまくる駄作映画など貪るように視聴し続ける、愚民のようであった……。！ このような静かなる冷戦が水面下で

勃発しているとは、〃今〃のエルフ達には知る由もないだろう……。
そんな中、急ぎ足な大臣の声が彼らの元に振る掛かる……！

「勇者様！ アリス様！ もう間もなく始まりますぞッ！」

ペガサス「おつとおく？ もう始まるのかあ……んじやあ？ アリス様あ？ ま・た・後・程ッ！（んくまッ♡）」

……ウゲエエエエツ！（引）

マジかよ……ッ!? あの勇者……！ わざとらしく投げキッスしやがるって……!? 地平線の果て以上に、自分はモテるッ！ ……と
かって、勘違いしてそお……。 ……アレ？ 俺……サイボーグだよな？
何で……吐き気が……ッ!?

アリス「……ぷっはあ!? アーク！ あなた急に何よッ！」

アーク「……あつ、やっぱ気の所為か……。あ、すまんアリス……
なんかあの勇者見てたらイラッて来て……」

アリス「……まあ正直、私もあの勇者は好きじゃないけど……助
かったわ」

アーク「どういたしまして……んじや、行くか」

こうして俺とアリスは、手を繋いでパーティーが始まっているホール
に向かって行った……。 ……不安だったのか、いつも以上に……そ
のお互いの両手を握り締めて……！

三十五発目 任務

アリスとパーティー会場に向かって会場内で別れた。

え？なんで別れたのかって？いや、さすがに主人にずっと付き添いでいたら他の貴族に婚約者やらなんやら勘違いを生みそうだったからな

何回も言うが俺とアリスはそういう関係ではない

そつと人込みを抜け人があまりいない壁際に移動する。

別に俺の体が人間だったらみんなと楽しめれるが生憎サイボーグなのでやるのがないため勇者の監視をしているが……

アーク「うわあ……食べ方汚いな」

一応フォークをもって食べているがあちらこちらにソースとか飛ばしているしこういうパーティー会場だったら控えるのが常識だろ

アーク「……だが油断をしやすいつかあるな」

あいつももう少し勇者としての自覚あった方がいいだろ

ま、このパーティーで知れそうなのは今のくらいだし他の奴らの様子でも見るか

ここからじゃ全体が見渡せないのだったん外に出る。

アーク（にしても本当にアーハムのエルフはバサビイ共和国の人間嫌いなんだな）

外に出ると意外とエルフの貴族たちが楽しく談笑していた

室内と比べてみると勇者は除てバサビイ共和国の人の周りにはあまりエルフはいなかった。

アーク（よし、このあたりでいいか）

周りに見られていないのを確認すると、思いっきりジャンプし屋上に上って天窓から会場を見下ろした。

アーク（うんうん…… あ、あの勇者……やっぱ女好きだったのか。は！断られてやんの!! m9（＾皿＾）プギャー）

勇者が貴族の女性エルフに声をかけていくが全員断られている

皆、勇者だからきっぱり断るんじゃなくて丁寧断っている

アーク（うわ……あの勇者、断られたのにめげずに声かけまくって

る。いや、諦めろよ)

精神は糞なものに変なところだけ固いな
なんかアイツ見てたら目が腐りそうだから他のやつ見ておくか
窓から見える限りのわかる情報を探す。

アーク(あ、やっぱクロエは……うん、男に好かれてるなあ……
林間合宿で見た逆ハーレムになってる)

クロエの周りには男性エルフがたくさんいた
これ、バサビイ共和国の周りにいる人数より多くないか？

アーク(アリスはつと……何してんだよ主人)
アリス「……………(ガチガチガチ)」

アリスはなんかホールの隅っこで一人でいた。

あれ、絶対に緊張して固まってるだろ

多分、他の貴族が気付かないのはクロエの存在感が強過ぎてきアリスに気が付いてないなコレ

あの勇者でさえ気が付かないで目の前スルーしてんぞ
ま、まあ……このまま無事に勇者に目をつかれずパーティーが無事に終わればいいか……

しかしそれで終わらないのが運命

「それではただいまより二人一組のダンスを始めます!!」

え？マジかよ

いや、さつきアリスの目の前をスルーしたしわかるわけ
ペガサス「アリス様!!」

なんでだよ!?

あ、もしかして神様特典のどれかを使いやがったな!?

勇者が突然大声を出し他の女性エルフには目もくれず掻き分けアリスに迫っていく

アーク「つたく!!」

天窓から壁に捕まりながらアリスの近くに降りる

アーク「アリス!こっち!!」

アリス「あ、アーク!?!」

アリスの右手を掴み外に誘導する

ペガサス「あ！待て！護衛！！」

勇者も俺の存在に気が付いたのか追いかけてくる・・・が

ガシツ！！

ペガサス「んべ!？」

仔月光「m9（^D^）ザマアwwwwww」

一応で招集していた仔月光一体が勇者の足を掴み転ばせた

アーク（ナイス！仔月光）

仔月光に感謝しつつ俺は外に向かった

アーク「ふいー：：あの勇者しっこ過ぎるだろ：：」

アリス「あ、ありがとうアーク：：」

外に出ると昼より寒い風が吹く夜だった

アーク「なんだよアリス：：お前ってこんなに人気者だっけか？」

アリス「そんな覚えはないわよ!!私じゃなくてあの勇者がついてくるのよ!!」

アーク「はあ・・・これじゃアリスの将来が心配だぞ」

そんな会話をしていると

~~~~~♪~~~~~♪

アーク「ん？この音は：：」

アリス「あら？ダンスが始まったわね？」

どうやらダンスが始まったらしく音が少しだけ外に漏れて聞こえてくる。



アーク「いかなな……皇女が一人外にいるのはダメだな……ほら戻るぞ」

アリス「え？一緒に踊らないの？」

アーク「はい？」

アリス「だから！一緒に踊らないのかって聞いてんの!!」  
何言ってるんだこの主人？

アリス「い、言っておくけど中に戻ってもあの勇者に絡まれるから今回は特別に私と踊るのを許可するわ!!」

確かに戻ってもあの勇者がいるもんな……

アーク「え、でも俺が踊ってもいいのか？」

アリス「あら？そんなかつこいいスーツを着てるのに？」

あ、そうやん

俺、今スーツだったわ

アリス「ほらほら♪この世界では舞踏会では男から女性を誘うんだよ♪死神さん♪」

アーク「あ、拒否権は無しですか……はあ……  
一緒に踊ってくれませんかshall we dance？」

アリス「え？ちよつと!!今の意味何よ!!私、あんたの世界の言葉わからないのよ！」

アーク「そんな細かいこといいだろ？ご主人？」

こうして成り行きでアリスと踊ることになった

え？アークって踊れたのかって？youtubeで勉強したが？

ナニカ？

にしてもアリス綺麗だったなあ……

いい感じに月の光でアリスの黄金の髪が輝いて綺麗ですごく嬉しいのか今までの使い魔人生で一番幸せそうな笑顔だった

パーティーが無事に終わり勇者はバサビイ共和国に戻ることに  
なった

「勇者様ー！もう二度と来るなまたお越しになつてー！！」  
「役目終わったら静かにしておいてくれ我々は一生応援してますぞー！！」

アーハム帝国の国民が馬車に乗って門から出ていく勇者を笑顔で見送っている

まあ、例によつて目が笑つてないが

アーク「さてと・・・行くか」

だが俺には皇帝直々にお問い合わせされたことがある

それは今日の早朝・・・まだ日が山に隠れている時間帯だった

回想シーン

アレクサンダー「来たかアーク」

アーク「いや、どんだけ早起きなんですか陛下」

いや、ねみい

昨日（4時間前）、一緒に踊ったアリスとは寮で別れる

ことなく俺の家に寝転んできた・・・それでいいのか第二皇女

あなた17歳でしょ？少しは異性的なことも考えようぜ？

アーク「それでご用は？」

アレクサンダー「今日一日勇者を監視して何かわかったことは？」

アーク「・・・まあ、勇者にしては警戒心が皆無ですね・・・まあ、一

昨日降臨したからつて言うのもありますが」

アレクサンダー「実力については？」

アーク「実力は分かりませんが能力は分かりました」

アレクサンダー「なに？・・・では申せ」

アーク「はい・・・えつと・・・」

勇者の神様特典をすべて伝えた

アレクサンダー「そうか、ではアーク・・・一つ頼みをいいか？」

アーク「何でしょう？」

アレクサンダー「バサビイ共和国に侵入して引き続き勇者の監視を頼んでいいだろうか」

え？

まじすか？

アーク「でも俺はアリスがいます……別に監視しなくても勇者であることは自覚しているようなのでそのままにしておけば……」

アレクサンダー「だがほっておけば……あの愚か者がこの国に何かしらやってくるかもしれない……何しろあのエルフを見下している国に降臨されたんだ」

愚か者って

皇帝も勇者は良く思っていないようだな

アレクサンダー「報酬は三倍で払う……了承してくれるか？」

アーク（……確かにほっておけば俺の主人を奪いかねん……今回のパーティーでさりげなく部屋に無理やり連れて行こうとしていたからな）

そして決断する

アーク「わかりました……では今日の勇者が出発した時に追跡します」

アレクサンダー「すまんな」

アーク「いえいえ……これもアリスのためです」

そして家に戻り申し訳ないがアリスを起こしこのことを伝えた

アーク「ごめんな……しばらく会えないや」

アリス「……………」

アーク「護衛は月光とサイボーグたちにさせる」

アリス「……………（ぷー）」

アーク「……だあ!!ごめんって!そんなしよげないでくれ!!」

アリス「別に悲しくないもんツ!!」

そう言いながらもパタリとベッドに倒れて枕に顔をうずめる

アーク「でもiDROIDで会話はできるから別に顔を見れなくなるだけで会えないわけじゃ」

アリス「アークの顔を見て会話をしたいもん」

アーク「ん？なんか言ったか？」

アリス「別にー！」

うーん？

枕に遮られてよく聞こえなかった

アーク「……あ！じゃあさアリス！一つ約束をしよう!!」

アリス「約束？」

アーク「ああ、アリスが前に言っただろ城下町一緒に行くって」

アリス「あ、そうだったわね」

アーク「なるべく早く帰ってくるから、もし帰ってきたときはその次の日に行こう!!」

アリス「……約束よ？」

アーク「おう、約束だ」

アークは小指を出す

アリス「ナニソレ？」

アーク「ああ、これは俺の世界での約束の時に結ぶ御呪いで『指切りげんまん』ってやつさ……ほれ小指出せ」

アリスはそつと出した小指と自分の小指を絡める

アーク「指きりげんまん嘘ついたらはりせんぼんのーます指切つた!!」

アリス「何よこれ……意外と楽しいわね。あ、でも針千本じゃなくて毒針一万本で」

わお、絶対死ぬ奴やん

ま、まあ破らなきやいいし(震)

アーク「んじや、行ってきます」

アリス「行ってらっしゃい、アーク」

回想終了

よし!!(現場猫)

アーク「それじゃみんな……アリスの護衛頼む」

月光たち「(◇)ゞ」

アーク「行くか」

ちなみに今回は勇者がバサビイ共和国に戻る途中でも監視はするのでサイボーグではないので行く

アーク「ほい、ワンワンっと」

現在の俺は四足歩行の足に黒い体そして脚部にブレードのある狼アーク（行くぜブレードウルフ）

実は昨日、出発準備するときサイボーグのままじゃバレルし移動中にサイボーグだと魔獣に見つかって襲われる可能性がある……なら他の偵察型に変更する必要がある

なので索敵もできるし機動性もあるブレードウルフにした。

以前のポイント 4215

開発

ブレードウルフ 600

合計ポイント 3615

そして次の日には開発は完了していた

あとVR訓練はフェンリルと同じ形なのかわからないけどなかったな？

まあいい、さつさと仕事を終わらせて帰るか

勇者の乗っている馬車からなるべく離れた距離から監視をしながら跳躍していった。

一方勇者

「勇者様！アーム帝国を抜けましたよ!!」

ペガサス「ぬあ？あ、やべ寝てて住民に手を振るの忘れてた……ま、エルフだからいいか」

寝ているときに出た涎を拭きながら起きる

馬車の中で勇者はアーハム帝国を出る際に手も振らずに馬車の中で熟睡していた

ペガサス（あーああ……昨日の夜、身の回りの世話をしてくれたメイドさん抱いとけばよかったな………は！いかんいかん！俺にはあの花嫁アリスに俺の童貞を捧げるんだった！！危ない危ない。しかしなあ、あの護衛グが邪魔なんだよなあ）

あの夜にアリスを部屋に誘って攻めれば簡単に堕ちるっと思ったが途中で乱入してきた護衛が邪魔だった

ペガサス（それにしてもあいつって人間なのか？なんか第二皇女の手を握っていた時、振りほどかれたんだけどなんかあいつの手、鉄みたいに硬かったなあ？……ま、気のせいかな！！）

しかし一つ心残りがあある

ペガサス（あの第二皇女の目……あれは勇者である俺に助けを求めていた可哀そうな瞳！あいつが言っていた部下というのは嘘！あれはあの護衛が脅して毎日、夜の相手をさせられているに違いない！！待ってるよ俺の未来の花嫁！俺が絶対に助けて幸せにしてやる！！俺は勇者でこの世界の主人公だ！精々残りの人生を楽しんでおけよえつと……スキップウウウウウウ！！勇者が姫を助けるのは定番だからな！！）

ちなみにスキップではなくステイプである

何やら勝手に勘違いをしている勇者が乗った馬車はバサビイ共和国に戻っていった

# 三十六発目 Welcome to バサビイ共和国!!

さてブレードウルフの姿で追跡したのはいいけど……マジで何もなかった件について

勇者を乗せた馬車からなるべく離れたところから見ていたが平和だったな……なんなら勇者が馬車の中で熟睡してたし

そしてしばらく監視をする旅の末……とうとう到着した。

アーク「ここがバサビイ共和国か」

ちよつとした丘の上からバサビイ共和国を見下ろす

ちよつと勇者を乗せた馬車が門を通って中に入るところだ。

バサビイ共和国はアーハム帝国みたいな中世の街並みではあるがアーハム帝国は緑が多いに対してバサビイ共和国は水が多いな

街のあちらこちらに水路だったり噴水がある。

アーク「さてと……さすがに街中でブレードウルフは問題だから返るか」

というわけでサイボーグになる(ちなみにあまり目立ちたくないの  
で黒いフード付きレインコートも買う)

あとついでに他に開発したいものを買っておく。

開発ポイント 3615

変身

サイボーグ 150

開発

TORNADO―6 (殺傷系ハンドガン) 5

ギリースーツ 1

レインコート 1

スモークグレネード (投擲物) 3

フラッググレネード (投擲物) 3

スタングレネード (投擲物) 3

|                                            |      |
|--------------------------------------------|------|
| FN SCAR—H Mk. 17 (殺傷系アサルトライフル)             | 5    |
| 0                                          |      |
| DSR—1 (殺傷系スナイパーライフル)                       | 60   |
| ブロウトン モデル2000シリーズ「M2000—NL」(非殺傷系スナイパーライフル) | 30   |
| カールグスタフM2 100                              |      |
| 開発 (アタッチメント)                               |      |
| フォアハンドグリップ (SCAR—H用)                       | 1    |
| ACOG (SCAR—H用)                             | 1    |
| フラッシュハイダー (SCAR—H用)                        | 1    |
| マズルブレーキ (DSR—1用)                           | 1    |
| サプレッサー (M2000—NL用)                         | 1    |
| スナイパー스코ープ                                  |      |
| 3—9倍と6—24倍の二つ (DSR—1とM2000—NL両用)           | 2    |
| ドッドサイト (P90用)                              | 1    |
| サプレッサー (P90用)                              | 1    |
| 合計ポイント                                     | 3200 |

ではバサビイ共和国に入るまでなぜこれらを開発したのかを説明しよう (ちよつと読みずらいかもしれませんが許してね)

(ギリースーツ)

まずギリースーツだが現在の俺であるサイボーグの迷彩は街中だったら役に立つが森など自然の中じゃ役に立たないので開発した

レインコートは上から着て目立たない用で今着ている

(TORNADO—6)

次にTORNADO—6だがこれは高威力のリバルバーでMGS:TPPでオセロットが持っていた架空銃(だったはず)でモデルはマテバ2006Mって言う銃が元になった武器だ

この銃は元から持っている非殺傷のMk, 22があるがこれは護身用で持っておく予定だ (現在レインコートの下に隠して持っている)



(FN SCAR—H Mk. 17)

次にFN SCAR—H Mk. 17は戦闘用でアタッチメント  
見てもらったらわかるかもしれないがP90は潜入用にした

FN SCAR—H Mk. 17は7,62mm弾を使うので威力  
も良し前世の世界ではアメリカ軍が採用したほどである(うろ覚え)  
そしてスナイパーライフルだが二つ作った

(DSR—1)

DSR—1は300ウィン・マグナム弾を使う狙撃中でドイツ製だ  
(ドイツの技術は世界一イイイイ!!)

戦闘ではFN SCAR—H Mk. 17を使うが遠距離戦は  
こつちを使う予定だ

(M2000—NL)

一応作った銃で形はM700に似ている。前世ではお世話になっ  
た。

(カールグスタフM2)

最後にカールグスタフM2は俗に言う陸上自衛隊の84mm無反  
動砲だ

こつちは……まあ、人間に対しては多分使わないと思うけど万が一  
億が一でメインのFN SCAR—H Mk. 17が効かなかつた  
り巨大な敵だつたら使う……と思う

開発した物を説明しているともうバサビイ共和国に入る城門につ  
いた

アーク「……にしても多いな」

入り口についたのはいいが行列ができていた。

とりあえず情報が欲しいので近くにいた商人に聞く。

アーク「もし、その商人さん」

「ん?なんだ?」

アーク「えつと・・・私、旅の者なのですがこの行列は何でしょう  
か?」

「ああ、なんでかってそりゃバサビイ共和国に勇者様が降臨したから  
に決まってるんだろ!!」

アーク「え？勇者様が降臨なされたのですか？しかし勇者様とこの行列に何の関係が？」

「おうよー！全世界の人たちが勇者様を一目見ようとやってくる！そして人が一か所に集まるなら商売にもってこいだ!!」

チラツと商人が乗っている馬車を見てみると…

アーク（・・・奴隷か）

そこには木製の檻に鎖が繋がれている奴隷たちがいた。

最も新しい記憶としては魔人の屋敷で働いていた奴隷を思い出す。

アーク（まあ、あの時はアリスが捕まっていたからついでに感覚で助けただけなのでこいつらを助けたいとは思わないが。）

「お？なんだ旅人さんや？やっぱ俺の商品が気になるか？」

アーク「あ！すみません…少し気になってしまったので……」

「がははは!!安心せい!この奴隷はそこら辺のガキを捕まえたのではなく囚人や罪人を奴隷にして貸し借りで商売にしているんだ!!」

アーク「……なるほど……勉強になりました。」

「そうだ！あんちゃん！せっつかくの出会いだ！何か買っていくか？」

アーク「えー…俺、旅人ですよ？」

しかも現在進行形でアリスと主従関係を結んでいるんだが

「まあまあ!!気にせずどんな奴隷がいいか？」

なんか勝手に奴隷を買う空気になったんだが

アーク「……ちなみにいくらですか？」

「そうだなあ……200ゴールドでどうだ？」

アーク「200う……」

別に買えないこともないんだが……

買うとしたら仕事に使えるの仕事仲間が欲しいな

アーク「えつと……すぐく目がいい奴だったり、姿を消せる奴っていますか？」

「うーん……いないなあ……うちは人間を主にしているんだ……すまんなあ」

アーク「……いえ、こちらは無理難題を言ってしまいすみません。」  
「……ま、今度会ったときは何かいいものを取り寄せておくよ」

アーク「ええ、よろしくお願いします。あ、自己紹介がまだでしたね……トオルと呼んでください」

「トオルか……俺の名前はトムだ……また会おう！旅人さん！」

アーク「はい！」

こうして俺は商人用の入り口と入国者用の入り口でトムさんと別れた

「はい！次のかた!!」

お、俺の番か

「身分証明書を」

アーク「はい」

身分証明書だが出発前に皇帝が俺のために作ってくれたそうだ

「トオル・カコ様ですね……ようこそ！バサビイ共和国へ!!」

え？なんだその名前はって？

仕方ないだろ、皇帝に任せたらこうなったんだから

アーク「ふーん……これがバサビイ共和国かあ……」

丘の上から見た感じでは噴水や水路が多かったので水気が多いの  
かなって思ったが

アーク「すげえマイナスイオンを感じるな……さて情報収取だ」

とりあえず歩くか。

城門から入ってすぐにある市場を歩いていく

アーク（見た感じ構造はアーラム帝国と変わらんな）

だけど入ってすぐ違いはあった

「勇者様万歳!!」

「バサビイ共和国万歳!!ペガサス様万歳!!」

……まあ、そりゃ自国に勇者が降臨したらどんちゃん騒ぎになるな  
市場は人であふれていて活気があった

まあ、この中に勇者の情報を手に入れようと俺みたいな奴がいるん  
だろうが……

市場を抜け大通りに出てもどこもかしこもお祭り騒ぎであった

アーク（久しぶりに人の活気に触れられるのはいいんだが……はあ  
……早く人間に戻りたいな）

市場では焼き肉やおいしそうな果物が売ってあって今のサイボーグには口がないので早く食べたいものだ

そうトボトボ歩いていると

アーク「……武器屋か」

歩いていると道脇に剣が交差している看板を見つけた。

この世界に転生してからこちらの武器は大体見てきたが少し見てみたいと思ってしまう

アーク「……前世でゲームのしすぎかもしれないけど大体のRPGで街に訪れたら武器屋に寄ってしまっただよなあ」

今度、アリスと街を見に行くけど武器屋に寄るのって駄目かなそんなことを考えながらも武器屋の中に入ってみる

カチャ

「んっ？らっしやい」

アーク「おー……」

武器屋の中は意外と広くたくさんの武器があった。

普通の直剣や大剣にレイピア、魔法の杖や鎧まであった。

「らっしやい、要件はなんだ？早めに言ってくれ」

アーク「……」

いろいろみどりの武器を見ていると店主に声をかけられた……んだが

「なんだ？ドワーフを初めて見たのか？」

アーク「あ！いえ……すみません……私旅の者なのですがエルフは見てもドワーフは初めてで……」

「お前さん……人間か？」

アーク「はいそうですか？」

「はあ……初めてだぞ……あのエルフを見てもドワーフは見たことがないとは」

アーク「す、すみません……ですけどいい武器ですね……」  
「話を変えるな……媚売っても何も出さなぞ」

いや、本当に初めてドワーフを見るもん

ドワーフは人間に比べて背が低くずんぶりむっくりしているけど、  
だが筋肉はすごかった。

アーク「あれ？でもバサビイ共和国ってドワーフの国ではないですよね？」

「馬鹿野郎、俺はただ出稼ぎで来ているだけだ」

アーク「あ、すんません……」

そつと謝り室内を見ていく

でも本当にすごいな……剣が輝いてるもん

前にクロエを誘拐してアリスを要求してきたバサビイ共和国の騎士を×ツ殺した時に騎士たちが持っていた剣を見たことあるけどあの時より輝いている。

アーク（へく……ミスリル製に鉄鋼製の武器まで……うわ、ワイバーンまであるやん）

そうみていると

アーク「ん？」

アークは一つの武器に目が留まった

アーク「店主さん……この武器どこで手に入れたのですか？」

「……ああ、それは俺が東の果てで手に入れた曲刀だ」

そこにあつたのは

「なんでもカタナっていうらしい」

アーク（でたよ……俺の世界の要素……絶対何かあるだろうって思ってたけどいたよここに）

壁に掛けられていたのは紺色の鞘に納められ先端から徐々に曲がっている剣……刀だった

アーク「……その手に入れた国の名前って何ですか？」

「ああ、俺はちつと文化の違いでなじめなかったがそこに住んでいる奴全員誠意はあつたな……確かヤマトって呼ばれている国だ」

ヤマト……刀……

もう完全に日本やん、異世界版日本やん……

「なんだ？お前、この武器に興味があるのか？」

アーク「あ、いえ……ただ……自分の故郷にもあれと似たようなものがあって、懐かしく感じたので……」

「つへそうかよ……あと何も買わないのは冷やかしか？」

あ、そうやん

このままだと俺、この店に冷やかしに来たみたいな感じになるな

……

どうしようかと考えていると

アーク「あ、じゃあ……このナイフの修理頼んでいいですか？」

そう言つて腰から取り出したのはサバイバルナイフだった

実はこのサバイバルナイフ……あのオーク事件でオークたちを解体した後、血を拭いただけで手入れは全くしていないのだ。

あの時はD—wakerでオーク・ロードに壊されかけたから結構乱暴に使ったので少し切れ味に心配ができた

「見せてみる………ほう………わかった研磨しておこう……5ゴールドでいいか？」

アーク「はい、お願いします」

「それじゃ、15分でできるからその間にどっか行つてろ」

アーク「あ、はい……では失礼しまーす」

以前のポイント 3200

支払い 5

合計ポイント 3195

こうして武器屋を出たんだが

アーク「暇だなあ……」

うん、マジで暇

え？勇者の監視はつて？



クリーンヒットし、そのまま地面とディープキスさせた。

「だ、だれじやてめえ!!」

アーク「通りすがりの旅人だ……覚えなくてほしい……」

「っはーヒーローっここか? なら家でママとやっておきな!!」

アーク「いや、ヒーローっここに来たんじゃないんだが……」

「じゃ、帰んな! おれらはその嬢ちゃんと遊ぶんだからな!!」

遊ぶ……か

一応確認のつもりで女性の方を見ると

?? (ブンブンブン!!)

あ、違うっばいな

女性の首が横に振っているのを確認して目の前の男たちと向き合う。

アーク「でも大人数で少女一人を狙うのはカッコ悪いよ?」

「ああ!?! うるせえぞ!! 野郎どもかかれ!!」

多分、この集団のリーダーであろう男が叫ぶと大量の人間が迫ってきた

うくん、この人数をCCCするのはビツクボスじゃないと無理な気がするな……よし

アーク「じゃあな!」

カランカラン

そう言い投げたのは缶状の投擲物、ピンが抜かれ地面を転がりしばらくすると

プシュウウウウウウウウウウウウウウウウ……

「な、なんだ!?!」

「おい! 何も見えんぞ!!」

まさか、さつき開発したてのスモークグレネードが役に立つとはな  
(ちなみにM18だ)

路地裏いっばいに煙が巻かれ視界がいい感じに遮れた

アーク「こっちこい」



?? 「は、はい!!」

ナイトビジョンをこっそり使って女性の手を掴み逃げ出した

アーク 「ふう……ここまでくれば大丈夫だろ」

?? 「あ、ありがとうございます……」

どうにか大通りを抜け噴水のある広場に逃げてきた。

?? 「助けてくださりありがとうございます。私、バサビイ共和国の教会に所属しているノエル・スカルツォです」

助けた少女はノエルというらしくこの国にある教会のシスターらしい

水色の瞳にブロンド色の髪をしていて俺より身長は低いな

アーク 「えっと、トオルです……旅人です」

ノエル 「トオル様ですね。本当に助けていただきありがとうございます」

アーク 「いえいえ……あ、いけね! 武器屋の時間だ……すみませんノエルさん、俺ちよつと用事が……」

ノエル 「まあ! そうでしたか! 申し訳ございません時間を取ってしまい……」

アーク 「大丈夫ですよ、今からダツシユで行けば間に合うと思うので! では!」

別れの挨拶をするとアークは土煙が上がる勢いで(周りの人には影響がない程度で) 走っていった。

ノエル 「……この運命の出会いに神に感謝しないと……どうかトオル様に神の御加護がありますように」

### 三十七発目 どうしようか？

アーク「すみません！遅れました!!」

ノエルさんと別れた後ダツシユで武器屋に行ったが

「おせえぞ!!……つたく頼んだ方が遅れてどうするんだよ」

アーク「まじすみません」

「は、いいさ……ほれ」

アーク「おお！ピカピカ!!」

渡されたナイフは新品同然になっていた。

このドワーフ……かなりの腕前だな

「ところで聞くが……そのナイフどこで手に入れた？」

アーク「え?……あ、いえ……これは貰い物なのでどこでとかは分からないのです」

「そうか、なかなかの業物だなそのナイフは……刃に使われている金属は恐らく熱した金属を冷やしてもう一度熱して作ったんだろう切れ味はいい……それに持ち手の部分は滑り落ちないように手に張り付くような素材で作られている、この素材は何だ？」

あ、もしかしてゴムとかまだわからない系か？

「だがお前は幸運だな……このナイフ大事にしろよ」

何だろう言えないな……このナイフでオークとか人間の首を掻っ捌いて殺したとか

アーク「ありがとうございます……では」

「おう、また来てくれ」

武器屋を出たあと再び大通りに出た

アーク（一旦勇者の様子でも見に行こうかな）

テチテチと勇者が普段いるといわれている城に向かう

アーク「……やっぱりか」

だがさすがに警備が固く中は見れなかった

一応屋根の上から見てみたが城の壁の上に警備兵がいてじっくりと見れなかった

アーク「どうしたものか……」

能力は分かっているが実力を知りたい

アーク「……城の中に入るしかないかなあ」

屋根から降りてどうするかを考える。

アーク（別にサイボーグで侵入してもいいんだが、今の俺の顔は勇者にわかってるだろうねえ……それにバレたらバレたでアーハム帝国を弄る材料を提供するだけだしな……）

なにかいい案はない物か……

わき道にあつた樽の上で唸っていると

ノエル「あれ？トオル様じゃないですか？」

アーク「ん？あれ？ノエルさんじゃん？さっきぶりでしたね」

なぜかこんな暗いわき道なのにさつきチンピラから助けたシスターがいた

珍しいな？シスターってこんな城の近くにあるわき道を使うんだな？

アーク「ノエルさんは何でここに？教会ってここから反対側でしたよね？」

ノエル「え？反対側なんですか？」

アーク「はい？いやいや、ご冗談を……所属している教会の場所がわからないシスターなんているわけ……」

ノエル「助かったあ……実は迷子になつてのですう……」

アーク「へえ、迷子……迷子お!？」

大丈夫かこのシスター？

アーク「……俺が道案内しましょうか？」

ノエル「あ、ありがとうございます!!もう二度と教会には戻れないと思いました……」

なんで今日初めて来た俺の方が道に詳しいんだよ……

アーク「とにかく行きますよ……こつちです」

ノエル「ありがとうございます……私、お城に呼ばれたんですけど入るまでは帰り道は覚えているんですけど出てきたら忘れちゃうので……」

それはそれで心配なんだが？

しかし・・・城かあ・・・聞いてみるか

アーク「お城？つまりノエルさんって城に何か用があつていったのですか？」

ノエル「はい！神の御使い様のご降臨なされたのはご存じですよね？」

アーク「神の御使い・・・まさか勇者のことですか？」

ノエル「はい！私たち教会の者は勇者様を神の御使い様って呼んでいるんですよ！！」

・・・神の御使い様って

まあ、この人たちが実はあの勇者が偽勇者だとわかつた瞬間泣きそうだな

アーク「へえく・・・俺の一回は見てみたいものですね・・・」

ノエル「ええ!?神の御使い様を見たことがないんですか!？」

アーク「あく・・・はい、俺これでも旅人なので」

ノエル「そうでしたね・・・でも街では勇者様の肖像画とか飾られているので見れますよ!!」

アーク「そうですかあ・・・」

肖像画って・・・よほど本当に勇者に仕立てるようだな

アーク「話は戻るんですがノエルさんはシスターでしたよね？城で何やっているんですか？」

ノエル「私は神父様の手伝いで行っているんです!!私たち教会の者は勇者が召喚されたらその国の城に向かい祝福を捧げているんですよ!!」

まあ、神の御使い様って呼ぶほどだしな

彼女らにとって勇者は神様の力をもらった天使みたいなもんだしな

ノエル「私も質問いいですか？」

アーク「ええ、どうぞ」

ノエル「トオルさんってなんの旅をしているんですか？」

あ、それを聞いてくるのか

アーク「あく・・・」

ノエル「あ、すみません……聞いてはいけないことでしたか？」  
やば!?

このままだと聞きたいことが聞けん!?

アーク「あー！いえいえ!!別に!!……私はとある呪いを解くために旅  
をしているんです」

ノエル「呪い？」

アーク「はい……これなんですけど……」

そつとフードを脱ぎ露わにする

ノエル「そ、それは!？」

アーク「はい……実は私……（ロリ神が勝手にやった）呪いのせいで  
人間ではなくゴーレムに近い存在にされたのです……」

ノエル「あ、そつち？てつきり頭の毛のことかと……」

アーク「あ、そつちの方ではないです……それで教会で呪いを解く  
ことはできないかと思ったのですが」

ノエル「そうですね、誤解をしましてすみません……うん？教  
会にいるマザーは解呪が得意ですが……解呪できるかな？」

アーク「そうなんですか!？ありがとうございます!!」

いやあ……あのロリ神マジで許さん

俺は人間のままで行きたかったのになんでメタルギアにしたん  
じゃ

アーク「……それで勇者のことなんですけど」

ノエル「はい、何でしょう？」

チンピラから助けたおかげなのかあちらは打ち解けてくれていろ  
いと教えてくれた

そして数分後

教会の前についたので中に入ることになった

やっぱ教会って神聖な場所だな……果たして死神としての俺が来  
ていいところかわからないけど

アーク「へえ……勇者様は男なんですか」

ノエル「はい！あと、ここだけの話なんですけど……神の御使い様  
のお肌って……綺麗じゃないんですね」

アーク「それって汚いってことですよね？」

ノエル「はい、神の御使い様は私たちとは別の世界から来たそうですが……どんな世界なんでしょうか？」

まあ、前世では果物を食って肌を保つのじゃなくてクリームとかだからなあ

アーク「へえ……別の世界ですか。勇者様はすごいです……」

ノエル「はい……なんでも魔族やエルフがいない世界だとか」

アーク「……羨ましいですね」

ノエル「そうですね……あ、マザー！解呪の依頼です!!」

教会の中に入っていくとちょうど一人の女性いて、神に祈りを捧げた後のようだ

「おや？ノエル？そちらの方は？」

アーク「あ、申し訳ございません急に訪問してきて……私の名前はトオル、旅人です」

「まあまあ、ご親切に……この教会のマザーです。それで何の呪いを？」

アーク「えつとこれなんです」

そつと被っていたフードを脱ぎ、そきほどノエルに説明したのと言った

「……申し訳ございません……この呪いですがとてつもなく強力に掛けられて解くことができません」

アーク「そうですね……」

どうかなって思ったんだが……やはりあのロリ神……覚えとけよ

ノエル「……マザーでも解けない呪いって……トオル様、過去に何か罪でも？」

やった………やったな、うん

まあ、どれも心当たりがありすぎてわからんが

アーク「……ありがとうございます……ご時間をいただき」

「申し訳ございません……私も長いこと教会を務めていますですがこれほど高度な呪いを見たことがなく」

アーク「まあ、死ぬ呪いとかではありませんので気長に旅をして見

つけますよ」

「はい……あ、トオル様？今日の宿はもうお決まりで？」

宿？

あ、そういえば取ってないな

アーク「いえ、まだです」

「なら、もう間もなく夕暮れなので今夜はこちらで泊っていきませんか？」

アーク「え？いやいやいや！そんな神様の隣で寝るなんて！」

ノエル「安心してください！私たちは教会で寝泊まりしているので！」

いやでもなあ？

俺、今夜にでも城に侵入して勇者の情報を手に入れたいんだが

「それに今頃、どの宿も客で満室ですよ？」

アーク「え？本当ですか？」

ノエル「はい！この国にいる神の御使い様の姿を一目見ようと世界中からやつてくるので！」

あゝ（納得）

そういえば門の前で会ったトムさんも商人で人が集まるから商売をしているんだっけ？

はあ、これなら来た時に宿を取っておけばよかったな

アーク「なら、お言葉に甘えて」

こうして俺は教会に泊まることになった

教会の中はオルガンがあつたりろうそくがあつたりと神聖な感じだつたが

「こちらです」

教会の隅っこにある扉を抜けると

アーク「おおお……」

そこは生活感のある部屋でキッチンだったり修道服を入れる棚があつたりした

ノエル「トオル様の部屋はここになるので……」

ちなみに俺が泊る部屋は二階にあつてノエルの部屋の隣らしい

そのあとはという夕食にもてなしてくれただが俺には口がないと伝えたら落胆してしまい暗い空気になったが代わりに俺の知っている話をすると言ったらノエルは喜んでくれてマザーはノエルが喜んでくれたのでそれでいいそうさだ

アーク「……それでその男性と女性だが」

ノエル（ウキウキ♪）

アーク「……なあ？そんなに俺の話って面白いか？」

ノエル「はい！私、町とか安全なところでしたしか行ったことがないので楽しいです!!」

アーク「……そうか」

今、俺が話している話の内容のほとんどが前世のおとぎ話とかだった

え？なんでおとぎ話かって？これが一番知っている内容だったもん

「かぐや姫」とか「人魚姫」だったり中には「ごんぎつね」などを話した（諸君、私はごんぎつねが大好きだ）

アーク「んで二人は永遠に愛したのですか……おしまい」

ノエル「他は何かないんですか!？」

ノエルが子供みたいに興奮しながら聞いてくる

なんか……ノエルを見てたらアリスを思い出すな……

アーク「いや、そろそろ寝ようぜ？おわりだおわり」

ノエル「あと一つだけ！一つだけでいいですから!!」

「まったく……ノエル？明日も早いですよっ」

アーク「ほれ、子供は寝る時間だ」

ノエル「子供じゃないです！これでも16歳です！」

アーク「16でもまだ子供たい」

ノエル「むうー……」



よほど俺の話が楽しかったんであろうな

アークはノエルとマザーにお休みを言い貸してくれた部屋のベッドの上に寝転んだ

アーク（うーん……多分、城の警備は夜のほうが厳しいし……こういう時こそ光学迷彩のが欲しいな）

別に今回も俺自身がこっそり教会を抜けて侵入してもいいが見つかったら即国際問題になる

なら、開発しか方法ないんだよなあ

そう思い開発一覧を開いて考える

アーク（仔月光でもいいんだが別にあいつら透明化するわけなし、スカルズの覆いつくすもので行ってもいいが……城の警備が気になるな……通知さん？この世界でさ前世でいう熱感知器みたいなものってある？）

ピロン♪

通知：熱感知機はありませんが魔法の索敵魔法で魔力を持っている生命体が接近したら感知をする魔法が存在するので体が金属でできている機体で行くのを勧めます

アーク（了解……ならこいつで行くか）

そしてアークはとある核を搭載しないオタクン製メタルギアの開発を開始した

### 三十八発目 潜入！

ここはバサビイ共和国の首都のとある場所

夜になり人々のほとんどが自分の家に帰り寝ていたりするが、この国には勇者が降臨しているせいか夜になってもお祭り騒ぎをしていた

…そしてそんな真夜中の町の一角で

アーク「ぜえぜえ……」

俺は城に向かって侵入しようとして進んでいたんだが

アーク「遠いつす」

やらかしたな……

え？今、サイボーグの体じゃないのかって？

残念ながら諸事情により違うんだよねえ。

城まで繋がっている道を

コロコロコロ

人間の足ではなく小さなタイヤで移動していた

そう、みんなのアイドル！

アーク「信頼と安心のオタクン製メタルギアMk, IIだあ!!」

一人暗い町の中、叫ぶが誰も気づかない（少し寂しい）

なぜこの機体にしたのかは出発前まで戻る

アーク「通知さん通知さん？確かさまタルギア4でさスネークってメタルギアMk, IIを（PS3コントローラーで）遠隔操作してたよね？それってできる？」

ピロン♪

通知：可能です

よし。

え？なんでメタルギアMk, IIを開発したのかって？

メタルギアMk, IIってスネークをサポートするために送られた

じゃん？

ステルス化して後ろからついて行ったりしたし小型だけどカメラ機能もあるから潜入に向いているからな！

というわけでメタルギアMk, IIを開発する

以前のポイント 3195

開発

メタルギアMk, II 50

合計ポイント 3145

さて、なぜメタルギアMk, IIにしたのかという点と別にスカルズでもよかったのだが（確か）スカルズはあれでも元は人間だった

前に学園の図書館で読んだがこの世界の魔力を持っているのはほとんどが命を持っているのがほとんどで一説では魂が魔力を生み出している動力源で肉体はそれを受け止める器ではないかとあるが今はその説明は省かせてもらう。

それで魔力を持っているってことは索敵魔法に掛かってしまうそう  
うだ

なので潜入するのは（魔力をためる）肉体を持っていない金属系のではないといけないのでこれになった

アーク「うし…開発つと」

すると目の前に青白い光が集まりだし……

メタルギアMk, II「\*、▽、\*）ワイ!!」

元氣よくメタルギアMk, IIが飛び出してきた

ピロン♪

通知：チュートリアルを受けますか？

アーク「あ、そうやん忘れてた……はいつと」

こうして俺は久しぶりにVR空間に精神を転送した

目が覚めるとそこは……

アーク「……どこ何ここ？」

それはどこかの基地のようだった

キツチンもあるしベッドまである……いや、待てよ？なんか見たことがあるな？

すると……

??「やあ、君がアークかい？」

アーク「はい、俺がアークです……え？博士？」

そこにいたのは眼鏡をかけ茶髪に一般人らしい姿をしているが実際は祖父のころから核に関わっている人生でも恋愛でもアンラツキーな博士

ハル「やあ、アーク？」

アーク「オタコン!？」

ハル・エメリツヒ改めオタコンであった

アーク「え、でもメタルギアMk, IIの……あ、これ作ったのオタコンだっけ？」

ハル「そうそう！……まさか僕がAIになって教える時が来るとはねえ……」

椅子に座りながらしみじみと懐かしい顔で言う博士

ハル「でも……君も大変だねえ……死神って呼ばれたり主人が狙われたりして」

アーク「まあな……俺の主人は別の意味で人気者だ」

ハル「ははは！……それじゃ教えるとするか！って言っても操作説明と実際にアークが変身して異常がないかの調整だけだね」

あ、思いのほか少なくて速かった  
でもそっちのほうが助かる。早めに仕事を終わらせておきたいからな

ハル「それじゃ……はいこれMk, IIのコントローラー」  
そう言って渡されたのは

アーク「……………あ、やっぱり」

黒いカラーに左側に十字のキーに右側は○×△□のキー、人差し指のところにLとRのトリガー

アーク（PS3のコントローラーよねえ）

……ちなみにここでいらん豆知識だが、メタルギア4で実際にメタルギアMkⅡを操縦している時にスネークを見るとマジでPS3コントローラーを持っています

ハル「それじゃ、説明するね?……ここがこうで……このキーを押せば」

そこから大体10分でオタコンが説明してくれて5分で変身した時の操縦の調整をした

アーク「……流石オタコン、説明もうまいし調整も速い……伊達にシャドーモセスでスネークと脱出する時、壊れかけのREXを修理しながら運転した腕はあるな」

ちなみにシャドーモセス島でREXで脱出した時、

再起動には成功したものの、実際には秒単位で自己診断プログラムが喚き立てている有様で、回路を閉鎖するか別系統に回すなどして、REXのサポートをオタコンがリアルタイムで行なっており、「まるでバラバラに分解していく飛行機を、修理しながらどうにか飛ばしているようなもの」（ピクシブ百科事典から抜粋）

すごくね?オタコンすごくね?

ハル「どういたしまして……最後にもう一人会ってもらおう奴がいるよ」

アーク「あと一人?それって誰だ「俺だ」ぐへえ!」

突然、背後から衝撃を受け何かに踏みつけられていた顔を動かして襲った犯人を見てみると……

アーク「あ、ども。」

それは牙のある口を持つとがった形状の狼に似たものに脚部はブレード、そして黒い機体……

ブレードウルフ「……………」

アーク「え、えつとどうしたんすか?ブレードウルフさん?」

ブレードウルフが俺の背中に乗っかっていた

アーク「あれ？でもブレードウルフがいるならオタクンは老人じゃない  
n「そこは気にしてはいけない」……あ、はい」

ハル「こちら、やめときなブレードウルフ」

オタクンが俺の上に乗っているブレードウルフを咎めると、大人しく降りてくれた

アーク「重え……でもこれってメタルギアMkⅡのチュートリアルだろ？なんでブレードウルフまで来るんだ？」

ブレードウルフ「……貴様、機体のほうのブレードウルフの開発した時チュートリアル受けたか？」

アーク「え、いや……なんか強制じゃないっぽいからやってないです」

ブレードウルフ「……………」

え、なんなん？

なんかさつきから黙っているけど

ハル「チュートリアル……来ていない……あ、もしかして嫉妬？」

アーク「あ、そういう……」

ブレードウルフ「ちがう、俺はこいつに潜入の際の基礎を教えたのに追跡をしたから次回は俺のをやってからにしろって言おうとした」

アーク「あ、すみません」

ブレードウルフ「……まあ、いい。だが戦場でド素人が武器を持って敵をすべて殲滅する並みに危険なことだ自分の力を過剰に信じ込まないように」

アーク「ういっす」

こうしてブレードウルフに今度、来るよう言われた後VR空間から  
出た



アーク「操作性に癖があるな……」

ちなみに余談だが現在はいくまでも変身ではなく操作である

操作状態だと魂だけ移行行動して仮に破壊されても元の操縦者のもとに戻る……がデメリットとして操作する際にPS3コントローラーを使うので癖がすごい

変身だとまるで自分の体のように動かせるが破壊されたら俺も死ぬ

って感じだ

馬車に上るだけで左スティックや右スティックをカチャカチャ動かしている（気がする）

そして登り切ったところで馬車は出発した

「にしても勇者はいいよなあ……城でうまいもん食えて」

「そうだよなあ……勇者法っていう理不尽の塊を乱用しているからなあ」

「ああ、この荷物も勇者の命令で各村から連れてこい……だしな」

アーク（荷物？ 一体何を運んでいるんだ？）

この馬車……勇者の命令で動いているようだ

ひよこりとカメラで荷台を見てみると

アーク「おうふ……」

そこには十人以上の若い女性が首輪をつけられ城に運ばれていた

アーク（あいつ……懲りんなあ、なるほど各村から若い女性を連れてこい……つか）

女性みんな顔が暗く目に生氣はなかった

アーク（……悪いけど大体のマンガじゃこつそり助けるが俺は忙しい）

そして城に着いた瞬間、ステルス化して城内に侵入した



思いのほか嚴重だな

城の中は警備をする兵士が多かったがステルス化しているので目の前を堂々と通過することができた

前にアーハム城に行った時より警備する兵士が多く魔法使いらしい人間までいた

城内を隈なくマッピングしたり情報を集めたりした

アーク（よくまあ、あの糞野郎のためにここまでできるな）

現在、俺は廊下を走行していたが途中で何かを配膳しているメイドにあつた

配膳されている料理を見てみたがどれも肉料理だった

それも異常なほど肉料理が運ばれる

まあ、心当たりがあるが……勇者だろうな

アーハム帝国に来た時、勇者だけやたらと肉料理を食ってたもんなアーク「ふむ、勇者は肉料理が狂氣的なまで好んでいるのか……勇者じゃなきや毒殺してたな」

言っておくが俺は勇者の人間性は皆無だが、そんな奴でも勇者なので最後まで魔族殲滅をしてもらわないと困るので殺したりはしない（と思う）

アーク「んで、ここが勇者の部屋か」

配膳されていく肉料理を追っていくと一つの部屋に送られていった

扉の大きさからして成人男性が住むには十分くらいだがダンス会場などのホールにしては小さい扉なので勇者の部屋だと推測した

にしても配膳するのメイドがやたらと多くないか？

アーク「ま、勇者だからって言ったら納得してしまうな」

大体の勇者の情報が知れたので俺は城を出ることにした

え？短くないかって？今回は暗殺とかではなく情報収集だ。情報が知れたらさっさと帰るのが一番だ

あと、作者のネタが尽きてきた

外に出ると雨が降っていた

アーク「はあ……帰るまでが潜入だが帰りが雨だとなあ……気が滅入るぜ」

こうして俺は体がある教会のほうに向かって帰ろうとしたが

アーク「ん？」

雨の中、城の壁に人間が数人いた

……この雨の中、大人数で何しているんだ？

気になって近づき聞き耳（耳はないが）をしていると

「はあ……あの勇者、本当に人間か？」

「本当だよな……今朝、勇者が

近隣の村から若娘を全員連れてこい

だってさ」

「本当にひどいよな……最初は何人かの大臣たちも反対していたが首相と他の大臣に黙らせられて、結局強制的に連れてこられたよな」

「あれは勇者ではなくただの暴君では？」

「まったくもってその通りだな」

「はあ……いつまであいつを勇者として祭り上げるんだろうな」

「偽物なのにな」

「確か、数日後にダンジョンに入るってあったよな？」

「ああ……はあ、その時にしっぽ巻いて帰ってこないかなあ」

「……アーハム帝国にお願いでもするか？」

「馬鹿言え……バサビイ共和国はエルフ嫌いだってアーハム帝国に思われているから無理だろ？」

「俺たちは本当はアーハム帝国とは対等に交流したいんだがなあ……あの首相がいなかったらなあ」

……ふむ、数日後に勇者様がダンジョンに入るか

あと、バサビイ共和国には勇者をよく思っていない奴らもいてアーハム帝国とは対等に交流したいと……

なんだよ……バサビイ共和国は外道の国かと思ったけど良い奴ら

もいるんだな

良い情報を手に入れたな。ダンジョンに入った時に実力を見るか

こうして俺は勇者の今後の予定をどう監視するかと考えながら教会に帰っていった

### 三十九巻目 少し休憩

城を出たが教会に着いた頃には山から太陽が出ていた

アーク「つ、着いた……」

流星に眠い

さっさと部屋に戻って寝るか……と教会の裏口から入ろうとした

瞬間

カチャ

ノエル「んー！今日もいい天気です!!」

アーク（やべ!!）

ノエル「ん？何かいたような？」

ノエルが裏口の扉から元気よく出てきた

あと少しで「いっけなあく☆遅刻遅刻♪」な展開になるところ

だった……

俺は急いで近くにあつた樽の陰に隠れたが一瞬見られた気がする

ノエル「猫ちゃんでしょうか？おukiにやあくん？」

ノエルが迷い猫かと思ひ先ほど見えた影を追う

アーク（いやいやいや!?ねこじゃねえって!!）

やはり見られていたのかと衝撃を受け、どうにか見つけなideくれ

と願うが……

ノエル「あ！いた！」

あ、おわった

ノエル「まったく……こんな所で何やっているんですか？子猫ちゃ

……ん……え？」

樽の奥に手を伸ばして行き何かをつかんだ瞬間、思いつきり引っこ

抜くと

アーク（は、はい）

大体30cmくらいの大さきで左手は何もないが右手には何かの

板、そしてつぶらな瞳を持つメタルギア Mk, IIだった

アーク（……終わったわこれ、この後「きやあああ!?魔物!」つ

て叫ばれて街中に広まり騎士に追われる鬼ごっこが始まるんだらう

なあ……あ、でも勇者の情報については手に入れたから別にいいかな？)

普通、焦るがこういう時こそ冷静に考え打開策を考えるが何も浮かばない

うん、逃げる準備するか……

だが、結果は違った

ノエル「な、な、な……

なんですすかこの可愛らしい生き物はああああああああああ!!」

……え？

あ、もしかしてお嬢ちゃんそういう系？

ノエル「猫ほどの大きさなのに全く怖くなく逆に愛らしい瞳！（カメラです）瞳から伝わってくる愛情！可愛い!!」

両腕で抱えながらまるで欲しかった人形のように大事に抱えるシ

スター

アーク（助かって……ねえな、どうしよう）

高い高いされてどうしようかと考える死神

ノエル「あく♡君の名前は何ですかあ？」

あ、死神アークです

あと、高い高いはやめてください酔いそうです

ノエル「えへへへ♪ねえ！君、私の使い魔にならないか？！」

え？いや、その「僕と契約して魔法少女にならないか？」っていうテンションで聞かれても困るんだが？

あと、俺はアリスの使い魔だから無理だわ  
メタルギアMk, IIを高々しく上げ喜ぶノエルだが  
ノエル「そうだ！君の名前はメル！」  
……おいおいおい!?待て勝手に進めるな!?  
え、なんか勝手に名前を決められたんだが?  
勝手に名前を付けられブンブンと振り回される  
ノエル「よろしく！メル！」

むにゅ

アーク（んぶ!?）

あまりにもうれしいせいなのかメタルギアMk, IIを自身の胸に押し付けているが当の本人は感触が嫌でもわかる  
アリスほどデカくて柔らかいわけではないが服越しからでもわかる温かさ……まるで母親に包まれているような  
って違う違う!?

……あ、よくよく考えたら俺、今変身じゃないから

アーク（解除っと）

勝手に一人芝居をしていたがどうにか解決方法が見つかった  
すると先ほどの外の光景から部屋の天井に変わった

スッ

急いで起き上がり階段を駆け下りる  
速くメタルギアMk, IIを回収しないと永遠に帰ってこない奴になっちゃおう!?

アーク「あ！ノエルさん!!」

ノエル「おはようございますトオル様♪」

回収しようと降りたのは良いが丁度ノエルも中に戻って来たところだった

アーク「あ、えっと……ノエルさん……その手に抱えているの……」

ノエル「あ、さつき可哀そうだったので拾ったのです!!メルっていいんです!!」

メタルギアMk, II「(・ω・)?」

あ、操作権が元に戻ったからメタルギアMk, IIが現状を理解できない

アーク「……すまんがそいつは俺の使い魔なんだ」

ノエル「えく!? トオル様って意外と可愛らしい使い魔を使役しているんですね!!」

意外とは何だ意外とは

メタルギアMk, IIを自分の使い魔だと誤魔化し回収に成功した

そのあとはというところとした

朝のミサをしたり(俺、死神って呼ばれているけど大丈夫かな?)、

朝ごはん食べたり、掃除を手伝いました。

ノエル「……………」

アーク「いや、そんな目で見てもあげんからな?」

だがこのシスター……まだメタルギアMk, IIを狙ってやがる……

「ノエル!早く行きますよ!」

扉にはマザーがいる

どうやら城に何か用があるらしい

ノエル「むうく……欲しいなあ」

メタルギアMk, II「(\*,▽,)」

ノエルが口惜しいようにメタルギアMk, IIを撫でている

よほど気に入ったぽいな

アーク「ってか教会の留守で俺が居ていいんですか?」

ノエル「大丈夫ですよ!トオル様ってそんな悪い人じゃ見えないし!」

「ノエル……はあ、申し訳ございませんトオル様、夕方には帰ってくるのでこの教会のお留守番をしてもらってくれませんか？」

アーク「あ、いいですよ！」

「ではお願いします」

ノエル「行ってきます!!」

……もしかしてノエルってポンコツか？

ま、まあいいや……さてどうしようかな

アーハム帝国だったらアリスたちが居て暇ではなかったがバサ  
ビ共和国じゃ暇だな

アーク「あ、そうだ連絡しないとな」

懐からiDROIDを取り出し主人に連絡する

ピリリリリリリリ

ピッ

アーク「あ、アリスか？アークd「助けて助手う!!」……おう？」

通信機から聞こえてきたのは元気な主人の声ではなくリンだった

アーク「え、どうしたん？」

リン「アリス様が……アリス様があ!？」

アリスに何かあったのか!？」

そう問い詰めようとしたが……

リン「アリス様がさつきからアークうってばつか言ってるの!!」

ツ!?どうしたんだアリス!？」

まさか、誰かに毒を盛られたのか!？」

リン「なんかアリス様が酔ったおっさんみたいに絡んできて面倒く  
さい!!」

そういつてアリスのiDROIDを動かすと



アリス「アークう……会いたいたいよお」

アリスの声が聞こえてきた

アーク「……それほつといてよくね？」

アリスの声に活気はないが無事ならよしだ

リン「でも……上の人が絡んでくるって結構嫌じゃない？」

アーク「はあ……ちよつとリン、アリスの変わってくれ」

リン「はいはい……アリス様？助手ですよ？」

アリス「つは!?アーク!あんた連絡するって言ったのに何で昨日も連絡しなかったのよお!」

アーク「んな、毎回連絡するほど暇じゃねえわ!?あと、アリス?どうしたんだ?会いたいよとか言つて?」

アリス「え?まさか聞こえてた?」

アーク「おう、iDROID結構高性能だから聞こえ「忘れてえ!!今すぐう!!」……はあ?なんでだ?」いいから!いい?今すぐ忘れて!!」……はいはい」

アリス「言つておくけどね!けつつつつつつつつつつして!寂しいなんて思つてないからね!ただ私の大切なアークの帰りを待っているのが気が遠くなるほど嫌になつてきたから早くアークが帰つて来て町に一緒に行きたいなつて思っているだけだからね!!」

……それつてつまり寂しいのでは?

つて言おうとしたが墓穴を掘りそうなので黙っていた

アーク「……そうか……あ、あとアリス?皇帝陛下に伝言ついでに情報を伝えてもらつてもいいか?」

アリス「あら?流石私の使い魔ね!もう情報を手に入れたのね!」

アーク「んでまず勇者についてだが……」

アリスに今回のことで分かったことを言った

アリス「えく……何その勇者……ただの女たらしで最低じゃない」

アーク「そうだよなあ……早く任務を終わらせたら帰るから待つてな?」

こうしてアリスとの通信を終わらせどうしようかと考える

アーク(せっかくお世話になってるしなあ……あ、ご飯作るか)てなわけで作ります(第三弾!みんなも作ってみよう!!)

材料(二人前)

牛肉切り落とし 100g

じゃがいも 2コ

洋にんじん 1/3本

たまねぎ 1/2コ

糸こんにやく(カット) 1/2袋

三度豆 6本

油 大さじ1/2

だし 1カップ

砂糖 大さじ1

しょうゆ 大さじ1

酒 大さじ1

1, 牛肉・じゃがいもはひと口大に切る。にんじんは乱切り、たまねぎはくし形に切る。三度豆は4cmに切る

2, 鍋に油を熱し、牛肉を炒める。色が変わったら、じゃがいも・たまねぎ・にんじん・糸こんにやくの順に炒める

3, だし・調味料を加え、沸騰したらアークをとる。ふたをして、野菜が柔らかくなるまで中火で約10分煮る

4, 三度豆を加え、煮汁が少なくなるまで煮る

5, 皿に盛って完成!!

以前のポイント 3145

生産

牛肉 1

ジャガイモ 1

洋にんじん 1

玉ねぎ 1

糸こんにやく 1

三度豆 1

出汁 1  
佐藤砂糖 1  
醤油 1  
酒 1  
合計ポイント 3135

アーク「完成！」

できたのはオカンな味、肉じゃがだ

アーク「肉じゃなあ……ジャガイモが出汁を染み込んでくれないだ  
がなあ……置いとけば染み込んでくれるかな？」

しかし、肉じゃが出来てもまだ昼間だった

アーク「ん……あ、ブレードウルフと戯れてくるか」

前に来いと言われてたのでVR空間に転送する

アーク「疲れた」

5時間くらいして現実世界に戻ってきたが疲れた……

何をしたかって？鬼ごっこだ……だけどブレードウルフがガチ勢  
すぎて捕まらなかった

こっちはサイボーグだけどあっちはビルの壁走ったりしたんだよ  
？おかしくね？

アーク「はあ、ま、いいか」

外はオレンジ色になっていて夕方のようだ

そんなことを思っているよ

カチャ

「今、帰りましたよトオル様」

ノエル「ただいまです!!」

ノエルたちが扉から元気よく帰ってきた

アーク「あ、お帰りなさい」

「申し訳ございませんねトオル様……留守番を頼んでしまい」

アーク「いえいえ……ところで城に何しに行ったのですか?」

「はあ……それなのですが……」

マザーが城でのことを言おうとしたが

ノエル「マザー! 台所からいい匂いがします!!」

先に台所に行ったノエルが叫んで中断してしまった

ノエル「わー! おいしそう!!」

「あら? 本当だわ?」

アーク「あ、すみません勝手にご飯を使っただけです……そのお迷惑でしたか?」

「あらあら!? まったく! 実は先ほどから夜は何にしようか考えていたところなんです!!」

アーク「そうですか……いや、お世話になってるので何か恩返しをできたらなと思ったのですが……」

「うふふ♪ トオル様はお優しい方なのですね」

ノエル「マザー! これすごくおいしそうですよ!!」

アーク「これ、俺の故郷の料理なんです……お口に合うでしょうか?」

「いえいえ! ではせっかく作ってくれたので食べましょう!!」

というわけで少し早めだが夕飯を食べることになった

ノエル「ん〜♪ これすごくおいしいです!!」

「ジャガイモがこれほどおいしくなるとは!!」

にくじやがは意外と好評だった

まあ、肉じやがが嫌いな人ってあまりいないだろうし

アーク「……それで城で何があつたのですか？」

「実は数日後に神の御使い様がダンジョンに挑むそうなのです」

アーク「ダンジョン！へ〜！」

ここは侵入した時に手に入れた情報とあっているな

ちなみにだがダンジョンと魔物の巣の違いだが

ダンジョン：魔法のトラップや人工的な建造物があつて主に地下にあり最深部にはボスがいて宝もある

魔物の巣：魔物しかなくダンジョンに比べたら比較的安全

って感じた

アーク「勇者がダンジョンにですか……それで？」

「それにうちのノエルが参加することになったんです」

ノエル「マザー！心配しすぎだつて！確かにダンジョンは危険だけど私は回復担当で後方だし一応攻撃魔法もできるから!!」

アーク「へ〜……ノエルさんって回復魔法ができるんですね？」

ノエル「えっへん!!」

「でも……やはり私は心配で……」

ノエル「安心してくださいよマザー！私、外の世界にはあまり出たことがないし……今回のことでいろいろと学びたいんです!!」

「……まあ、私もあまり若いころから修道士は外の世界に出る機会がありませんし……いいでしょう、この機会を大切にしないさい」

ノエル「はい！」

……どうやらノエルは今回の勇者のダンジョン攻略を楽しみだそうだ

だが、これはチャンスだな

アーク「あのお……これは自分勝手なことかもしれませんが……私も参加してよろしいでしょうか？」

ノエル「え？トオル様がですか？」

アーク「はい、俺それでも旅人なので少女一人を守るくらいの実力はありますよ」

「……トオル様がいるなら私も安心してノエルを送れますね」

ノエル「トオル様も来るんですか！なら、メルも……」

アーク「残念ながら、あいつは愛着動物だから連れて行かん」

ノエル「むうく……トオル様？あのメルの種族って何ですか？」

アーク「……まあ、また今度詳しく言うよ」

「ではトオル様、ノエルをよろしくお願いします」

よし、これで勇者の実力が見れるな

しかし、何で行こうかな？

まるで明日ある遠足を楽しむに子供のようにウキウキしながら今日はお開きにした

## 四十発目 だんどん!! 入口!!

アークがバサビイ共和国に来て数日……

バサビイ共和国から少し離れた山岳地帯の一角

アーク（おー、集まってる）

俺は黒いレインコートを上から羽織り集場所にいた

ノエル「おお！これが冒険者たちなんですわね!!」

ノエルが隣でいつもの修道服の格好で興奮している

本当に多いな

甲冑を騎士からぼろいフードを被った山賊（つぽいやつ）に魔法使  
いまでいる

アーク（なんで皆、格好がバラバラなんだ?）

皆、バサビイ共和国のマークが入っていない奴だし何なら柄が悪い  
し怖い

目つきが人を殺したことがあるソレだもん……怖いわあ（お前が言  
えることか）

ノエル「トオル様！トオル様！あの人たちなんで怖い目でこちらを  
見てくるんですか?」

ノエルさん……そうストレートで言うことじゃないと思うんだが  
確かにさつきから冒険者たちが俺たちをチラチラ見ってくる

ノエル「トオル様！トオル様！あっちもすごいですよ!!熊の使い魔  
ですよ!!」

アーク（あ！こら！ウロチヨロするな!!）

ノエルは初めて戦いの場に來たせいなのか遊園地に來た子供みた  
いにあっちこっち行っている

前世の大人も子供の世話はこんな気持ちなんだろうなあ

ノエル「すごい！すごい！トオル様！この盾すごく大きいですよ  
！」

アーク（だあ！人のものを勝手に触んな!!）

「こらあ?!ガキが勝手に俺の得物に触んじゃねえ!!」

アーク「すみません！すみません！）ペコペコ!!」

ノエル「トオル様もさつきから黙ってないで何かしゃべりましょうよ！」

反省しろいこのシスター!?

勝手に触っては怒られ俺が頭を下げている……そしてその間にもノエルはほかの冒険者のところに行つて問題を起こしている

……あと俺が喋らないのは、正確には喋れないのだ  
それは……

「おい、兄ちゃん？少しいいか？」

だが説明をしようとしたがアークは声をかけられた

アーク（ん？誰だ？）

声が出たほうを振り向くとそこには筋骨隆々な体にキラキラ輝く鎧を着て片手で巨大な棍棒を担いでいる男性がいた

「あのシスター……お前の連れか？」

アーク（コクリ）

「がっはっは!!やっぱりか！おい！あのシスターこいつの連れだつてよ!!」

「お！やっぱりか！」

するとゾロゾロと冒険者たちが集まってきた

あと、さりげなく壁際まで移動されて囲まれた

ノエル「ん？トオル様？どうかされましたか？」

「お！お嬢ちゃん！君にも用があるんだ!!」

ノエル「？……はい！」

すると男たちは俺とノエルを連れてダンジョン攻略の参加集団から離れたところに誘導される

「なあ？嬢ちゃん？俺らと組まないか？」

ノエル「ふえ？どういうことですか？」

「だつてさ？さつきからこいつのことを様つてばつか言つててさ？疲れないかい？」

ノエル「いえ？まったく？」

「無理しなくていいって！俺らのところに来れば気楽に行けるよ!!」

……まさかと思うけど、ノエルが俺のことを「トオル様」って言つ



てくるからイラついてんのか……まあ、ぶつちやけ言々と俺もトオル様って呼ばれるのキツイ

ノエル「で、でも……お誘いはうれしいのですが私は今回初めてだし……トオル様もいるから……」

「大丈夫だつて！女性是非力なものだしさ！男一人より大人数に守られたほうが安心だつて!!」

ずいずいと俺のことは無視されノエルに執着していく冒険者たち

「それに君、すぐくかわいいじゃん！ね？ね？彼氏とかいるの？」

ノエル「い、いえ！私、シスターなので恋愛とかは……」

「へー！シスターなんだ！」

「いいよなあー！こんな可愛くて世間知らずなシスターといっしょに行ける相方君は！」

言っておくが俺は随伴で来ているだけだ

ノエル「トオル様は初めて参加する私のために来てくださったので……申し訳ございませんがお断りします」

普通ならここで引き下がるがそれでも引き下がらなかった

アーク（……そろそろいいだろ）

アークがノエルとの間に入って終わらせようとしたが

「おつとあんちゃん、あんたにもいいか？」

なんだ？

「あんちゃんさあ……調子乗らないほうがいいよ？」

「そうだよお？こんな所で様、様って呼ばれてさ？そろそろうざいなあ？つて！」

あ、こいつらめんどくさい奴だ

さっさとこいつらから離れようとしてノエルのほうを見たが

もうほぼ冒険者とノエルの距離は密着していて冒険者の手がノエルの肩や腕や腰に掛かっていた

アーク（はあ……仕方ない）

勇者の監視なのに邪魔をされたら困るので即席でできた設定を行う  
自分に掛かっていたフードを脱ぎ、その顔を露わにする

「っひい!？」

「ど、髑髏?！」

その露わになった顔はいつもみたいなサイボーグのフェイズマスクがかかっておらず

ガスマスクをつけた顔に白く死体のような肌色に例によってハゲ

以前のポイント 3135

開発

スカルズ 1000

合計ポイント 2135

アーク(昨日の夜に開発してVR空間に行っただけ……まさかあいつとはな)

昨日の夜にスカルズを開発したんだが誰が来るんだろうと待っていた

アーク(にしても霧が多いな)

出てきた場所は……どこかのジャングルだった

??「貴様がアークか？」

アーク「はい、それで……ふあ!？」

そこにいたのは

スカルフエイズ「私の部隊<sup>スカルズ</sup>のトップのスカル「お帰りください」……

え(・ω・)」

まさかのMSFを壊滅させた野郎でした

アーク「いや、開発者とかならわかるけど何でお前だ？」

スカルフエイズ「なんだ？不満か？」

アーク「逆に不満じゃないわ」

スカルフエイズ「ふん、だが人間との会話も悪くないな。私は声帯虫を作り声で殺していったが……別の言語を使う人間との会話は良いな」

アーク「もういいか？」

スカルフエイズ「……もう少し会話をしないのか？」

っていうことで前日にスカルズを開発した（後日、スカルフエイズとお茶会をすることになった）

開発した理由は

・一番メタルギアの中で魔法っぽい攻撃をするからだ

これはほぼ全身にあるメタリックアークアと覆いつくすもののお陰なのだが見た目が魔法みたいだ

地面から爆破性の岩を召喚したり高速移動ができるし透明化もできる（本来は別々の能力でARMORとCAMOと別れているそうですがこの小説では分けるのが面倒くさいので一緒の能力とします）

だがそんな高性能に見えるスカルズでも弱点がある

・日光、炎……大嫌い

・湿度にめっぽう弱い

・喋れない

の三つだ

なので先ほどから黙ったままなのだ

一応、喋れないこともないんだが「あく」とか「だあく」ぐらいしか言えない

湿度に関してはこれは俺が我慢すれば何とかなる

「な、なんでここに魔物が!？」

おっと忘れてたな

アークは懐からマザーからもらったメモ帳を取り出し紙に書いてき冒険者に見せる

【不快に見せてしまい申し訳ない、彼女は俺の幼馴染なんだが上下関係もあって様付けになっている。あとで注意しておく。あと、俺が付き添いで来ている理由だが彼女だけじゃ心配だと保護者が言っているから付き添いで来ているだけだ】

その時、冒険者たちは察した

上下関係があるならこいつは貴族だ。貴族なら常人より多少は魔力を持って魔法もできる。

「そ、そうか……なら、安心だな。すまん、いちゃもんをつけてしまつて」

あ、よかつた理解が早い奴で

すると先ほどメモ帳を見せた冒険者はノエルを囲っていた冒険者に耳打ちをすると大人しく引き下がってくれた

ノエル「と、トオル様！ご無事ですか？」

アーク（コクコク）

ノエル「よかつたですう……私、初めて勧誘を受けたんですけどあんな感じなのですわね!!」

違うノエル……あれは勧誘じゃねえ

ノエルにみられる前にフードを被り直し一緒に元の場所に戻る

ノエル「すごかつたですね！さっきの冒険者さんたち！」

アーク（俺は迷惑しかかけてられてないんだが）

あ、そうだ忘れないうちにいておかないと

アーク（ちよいちよい）

ノエル「ん？どうしたんですか？トオル様？」

【すまないがそのトオル様って呼ぶのをやめてくれないか？】

ノエル「え、えええ!?そ、そんなに不快に思われていたんでしょうか？」

しゅん……と落ち込むノエル

【ち、違う違う!!えっと、冒険者って様付けで呼び合うんじゃないって呼んで掛け合いをして行くんだ!】

つと慌てて新しくメモ帳を取り出し訂正する

ノエル「そ、そうなんですか？で、ではよろしくお願いします!トオル!」

【おう、よろしく……あと、俺が喋れない理由だが少し風邪をひいて声が痛いんだ】

ノエル「そ、それは大変!回復魔法で治しましょうか？」

【大丈夫!ノエルは優しいんだな!】

ノエル「や、優しい!……あ、ありがとうございます」

「勇者様のおなーりー!!」

ペガサス「ぬはははは!!ひざまずけえ!ひざまずけえ!」

来たか

相変わらず威張ってるな

豪華な馬車に乗ってやってきたのは監視対象の勇者だった

「へく、あれが勇者か」

「あれ本当に勇者か?」

周りにいた冒険者は動物園お動物を見るかのように見物する

ペガサス「おっほん!この企画を計画した勇者ペガサス様だ!今日

は来てくれて評価しよう!!」

評価すんな、感謝しろ

「では今回の攻略の説明をする!」

こうして説明が始まった

「我々の目標はこのダンジョンの最深部まで進攻しボスを倒し攻略す

る!そして……

最も活躍したものは勇者様のパーティーに入って資金と地位を授けよう!!」

「「「「「おおおおおおおおおおおおおおお!!」「」」」」」

あ、この冒険者たちコレが目的で集まったんかよ

まあ、この世界の住民にとつては一番欲しいもんな

ノエル「トオル! 私も神の御使い様のお役に立てるかな!」

ノエル……お前は行かないほうがいい

あの糞と一緒に行くには年齢的にも悪い

「では出発をするーその雄姿を勇者様に見せろ!!」

「「「「「おおおおおおおおお!!」「」」」」」

さて出発することになった

ちなみにだが今回は重火器は使わない

俺の存在を目立ちたくないし、勇者に転生者だと気づかれたくない  
な

ゾロゾロとダンジョンのある入り口に冒険者たちが入っていく

ちなみに今回入っていくダンジョンだが最近発見されて、まだ誰も

入ったことがないらしい

ノエル「とうとう冒険が始まりますよね! トオル!」

アーク(かきかき)

【そうだな】

俺とノエルは一緒に並んで入っていくが

ペガサス「ねえ! その可憐なお嬢さん!」

うわ、勇者

後ろから声をかけられたので振り向くと勇者が(正直見たくない)

笑顔でやってきた

ノエル「あ! 神の御使い様! ごきげんよう!」

ペガサス「ぬ? ……あ! 君はいつも城にきているシスターちゃん

んかい!」

ノエル「はい! ノエルです!」

ペガサス「そうそう! ノエルちゅあん! ……おや? 君は誰だい?」

ノエル「あ! 今日、私の付きそうであってくれたトオルです!」

アーク(ぺこ)

ペガサス「ふくん……君、本当に戦えるのかね?」

うっせ、お前よりかは戦える

あと、俺の正体に気づいてないようだ

ペガサス「まさか、ノエルちゃんも参加しているなんて……おれっ  
ち頑張っちゃおうかなあ!!」

ノエル「そうですか！頑張ってくださいー！」

ペガサス「でもさ？ノエルちゃんの近くで見たいから一緒に  
パーティーでm」では！私はトオルと一緒に行くので！」…え、ちょ」

勇者が何か言おうとしたがノエルはそんなの気にせずアークのと  
ころに帰っていった

ペガサス（おいノエルたん!?俺、勇者だよ!?この世界ではオリ主な  
のに物語的一緒に行くやつじゃないの!?)

勇者は何やら勝手に驚愕しているがアークたちはそんなのを無視  
しダンジョン内に入っていった

## 四十一発目 だんどん!! 上層!!

「ゴブリンが来たぞお!!」

来たか

ダンジョンに入っただけでしばらくすると前方からギイギイと緑色の小鬼がやってきた

アーク（やっぱ異世界って言ったらゴブリンだよねえ）

ピロン♪

通知：説明をします

（ゴブリン）

肌が緑色の小型魔獣、オーク並みに弱いけど頭は賢いほうなので油断大敵。オークみたいにオスしかいないので女性を捕まえて妊娠袋にする

うん、ありがとう通知さん……ついでに知りたくもない情報も知っちゃったよ（主に女性のところ）

ダンジョン内は前に行ったオークの巣とは違い人工的なコンクリートのブロックが敷き詰められ壁には照明用の松明などがあつた  
そんなゴブリンがダンジョンの奥から30体ほどやってくる

「殺すぞおお!!」

「「「「「おおおおおおおおおおおおおおおおお!!」「「「「「」

うわ、この冒険者たち……無能すぎでは？

ファンタジーゲームでは重装備をしたタンクを前方にして間にアタッカーとか入れて後方に魔法使いとか入れるが……

「死ねえ!!」

「その業に裁かれ、浄化せよ」 「ファイアウォール!!」

まさかの全員、前に出ている

マジでなんで魔法使いが前線に出て肉弾戦をするのかわからん

アーク（普通、重装備を前にして魔法使いは後方だろ……どんだけ勇者のパーティーになりたいんだ？）



なんとも醜い

それに対してノエルは……

ノエル「大丈夫ですか!？」

「いてえよ?!」

ノエル「安心してください!今、回復させますからね!!」

うん、ヒーラーとしてのポジションを大切にしている

俺はって？

俺は遠くのほうから勇者を見ている。いや、こんなところでメタルギアの能力を使って無双したらかえって目立って勇者に目を付けられるからな……あ、でもたまに逃げようとしているゴブリンを足止め程度で邪魔をしている

そして勇者はと……

ペガサス「おうおう!かかってきなあ!!」

ゴブリン「ぎいぎい!!」

ペガサス「はあ!!」

あ、流石に高みの見物つてわけでもないか

へっぴり腰だが剣を構えゴブリン一体と対峙している

勇者の装備だが金ぴかの鎧に片手剣と盾という基本的な装備だ

剣を上段に構え振り下ろすが

ゴブリン「きつきき!!」

ごん!!

ペガサス「いてえ!？」

あ、振り下ろしが遅いからすんなりとゴブリンは避けてカウンターに持っていた棍棒を頭にぶつけた

勇者の被っていた兜が少し凹んだくらいで済んだが勇者は涙目である……情けないな

「ゆ、勇者様……無事で!？」

ペガサス「痛いよお!?!あいつ、魔王か何かか!？」  
んなわけあるかい

こんな野生の魔王が現れた！みたいなことあるか！

「くそ！くらえ！」 天よ！その怒りを我が手に！「サンダーストライク」！！」

バリバリバリ！！

ゴブリン「ぎいいいい！！」

勇者の護衛であろう魔王使いが雷魔法を唱え手から雷を出し見事ゴブリンに命中した

「勇者様！止めを！」

ペガサス「ああ！くらえ！ペガサススペシャル！！」

剣をぎこちなく振り上げゴブリンの胸に突き刺した

ペガサス「やった！どうだ！魔物風情が！」

「すごい！流石です！勇者様！」

いや、ゴブリン一体やん

こんなのマザーベースのスタッフでも体術で勝てるぞ？

ペガサス「痛いわ……ノエルちゃあああん！治療おねがい！！」

……たんこぶ一個で前線離脱

この勇者使えんくね？（今更）

ぶつちやけ護衛のほうか勇者っぽいぞ？

ノエル「神の御使い様！？どうかさされましたか？」

ペガサス「うえーん！俺、重傷を受けたんだ！治療してくれ！」

素晴らしい金ぴかの兜を脱ぎ、たんこぶをウザいくらい見せる

ノエル「え、たんこぶで？……は、はい！今、治療しますね！」

はあ、ノエルも優しい子だな

あんなたんこぶ一個で前線離脱するような奴でも治療するなんて

ペガサス「ありがとうとお！それじゃ、はい！」

それほど元気なら戦って来いよ

勇者はお辞儀するように頭を下げ、ノエルは右手を勇者の頭に乗せ回復魔法を唱える

ノエル「〴〵神よ、戦士に安らぎを〴〵「ヒール」！」

するとノエルのかざした右手は緑色に光が灯しだし勇者の頭を撫でた……そしてみるみると頭にできたコブは小さくなっていった

ペガサス(ぐへへへ♡良い距離で頭を下げれたな♪目の前にノエルちゃんのシスター服越しにわかるナイスバディがくつきりわかる！肩から腰にかけてボンキュッボンな体にあの第二皇女ほどじやないが巨大な胸についた果実！ああ、重そうだから直接手で持ってあげたい！)

ノエル「はい！神の御使い様！終わりましたよ！」

ペガサス「うへ♪うへへへ……」

ノエル「？どうかされましたか？」

ペガサス「あ！いや、ごめん！……あ、あのさ！ノエルちゃん！今度さ城に来た時さ……俺の部屋に来てくれないか？」

ノエル「ほえ？よくわかりませんが……わかりました！次来た時ですね！」

ペガサス「(いよっしや！)わかった！……よおし！俺、頑張っちゃうぞ！」

すると勇者は何かスイッチが入ったのか前線にトンボ返しし一人突撃していった

「うお!?邪魔だろ!?!あの勇者!?!」

「当てんなよ！当てたらせつかくのチャンスが水の泡になる!!」

アーク(うわ、前世のオンラインプレイだったら害悪プレイだろ)勇者は魔法使いがゴブリンの群れに魔法で攻撃している。もちろんこういう時は魔法使いの誰かが攻撃すると合図を送った後に前線組は下がって魔法をお見舞いするんだがそれを勇者は無視し一人無謀に突撃していった

ペガサス「どけどけ！俺は勇者様だぞ！」

勇者が勝手に突撃したせいで魔法での攻撃の弾幕の密が少なくなりゴブリンの減るスピードが遅くなった

ペガサス「うおおお！食らうがいい！正義の一撃を！」

あいつ……本当に魔族殲滅に行くならそのパーティ音速で壊滅するだろ

勇者はなぜか盾を捨て両手で片手剣を掴みゴブリンの群れに突撃するが

ゴブリン「ぎい!ぎい!」

ペガサス「うわあああああ!」

ゴブリンからしたら「なんか一人来たんだけど?」みたいな顔をして勇者を速攻で囲み集団リンチする

ノエル「勇者様!?!離れて!」全ての敵意と悪意を排除せよ!神の子らに絶対の守りを!「フラーシユ」!!」

ゴブリン「ぎ、ぎい!」

ノエルは勇者のピンチを見て急いで前線に上がりこの世界では割と希少な光魔法を使用した

使用すると右手から光の塊が出現しゴブリンたちは嫌がっているのか後ろに下がった

アーク(度胸あるなああのシスター)

ヒーラーなのに前線に出るほどの勇氣と実力……ノエルって割と強いんじゃない?

ノエル「よし!」荒れ狂う疾風よ!その怒りで大地を穿て!「サイクロンホール」!!」

次の魔法を発動させるとノエルの両手にバスケットボールほどの大きな球体ができノエルは思いつきゴブリンの集団に投げ込むと

ごおおおおおおおおおおおおおおおおお!!

ゴブリン「ぎぎ!」

ダンジョン内に巨大な竜巻が発生した

アーク(うお!?)

すごいな!

周りの冒険者たちも一番離れているが体が持つてかられそうだった

ノエル「ふう……大丈夫ですか?勇者様?」

ペガサス「う、うええええええええええん!怖かったよお!」

ノエル「もう安心して下さいね？ゴブリンは私はやっつけたので！」

よしよしと勇者の頭を撫でるシスター

母性高いな……なんかノエル、将来の旦那さんをダメ夫にしそう

ちなみに当の勇者は

ノエルが頭を撫でているのをいいことに自分の頭をノエルの胸に押し付けていた

ペガサス（うっほ♪ノエルちゃん、いい胸をして………あれ？デカくないか!?これってもしかしてだけどアリス・フォン・アーハム帝国の第二皇女と同じくらいあるのでは!?……な、なるほど！これが着やせタイプ！くう〜！攻略ポイントがわかってくるねえ！このままだとノエルちゃんが俺の花嫁候補三号に仲間入りか!?!）

ノエル「あ、あの！そろそろいいでしょうか？……そ、そのお……当たっているので」

ペガサス「（くう〜！恥ずかしがる顔も可愛い！）……あーご、ごめん！」

アーク（何やってんだ、あの勇者？）

遠くのほうから見ているが、もうあれ勇者じゃなくて患者だろ

アーク（しっかしなあ……俺も暴れたいや）

さつきから逃げようとしているゴブリンを見つけてはスカルズの高速移動で接近してアキレス腱を切断させて放置し他の冒険者に止めを刺させるといふ仕事を続けているんだが、瀕死にさせるのが面倒くさいしゲーマーとして体がウズウズする

ちよつとずつ戦いたい欲求が溜まっていきどうしようかと考えていると

アーク（あ、せや！）

そつと冒険者たちには気づかれないうようにステルス化し勇者たちの背後に回った

アーク（いやいやいや、そろそろ離れろや）

ちなみに勇者はというと未だにノエルにナデナデしてもらって

ノエル本人にとっては早く支援に戻り怪我人の治療をしてあげたいが勇者が邪魔で行かしてくれなかった

アーク（……少しくらい派手なことをしていいだろ）

そして気づかれないようノエルの後ろに回り

トントン

ノエル「はい！どうしましk……あれ？今、誰かに肩を叩かれたよ  
うな？」

ペガサス「いいじゃあんノエルちゃあん？気にせず俺をおpp、  
じゃなくてナデナデしてほしいなあ？」

ノエル「で、でも私は戻らないと……」

ペガサス「あと、5分だけえ〜」

勇者……貴様に罰を与えよう

未だに後方をきよろきよろして叩いた人を探しているノエルと未  
だべったりしている勇者の後ろに回りこみ

カキカキカキ

ステルス化を解除して右手を鋼鉄化させ思いつき振りかぶり

……

アーク（鉄拳制裁!!）

ぐしやあああああああ!!

思いつき振りかぶった鋼鉄のこぶしは綺麗な曲線を描き吸い込  
まれるように勇者の脳天に命中した

ペガサス「ほ!?!ご………にえ………」

ノエル「きやあ?!今何か音が………勇者様!?!勇者様しっかり!?!」

勇者の兜はプレス機をかけられたみたいに拉げて勇者本人はパタ  
リと気絶してしまった

アーク（うつし、うるさい奴がいなくなったおかげで冒険者のみんなもご満悦のようだ）

え？勇者の実力は良いのかって？

まあ、あんなへっぴり腰で剣を構えるし、たんこぶ一つで前線離脱するような奴だぜ？見る価値もない

そのあととはという順調に進んでいった

やっぱ、勇者が足を引っぱたせいかスムーズに進んでいった

アーク（でも、俺にとっては現状のMVPはノエルだな。回復もできて前線に出られるほどの魔法の実力もある……あれ？俺いる？）

教会のマザーが過保護すぎな気がする

ノエルがもし冒険者になっても頑張れば一流になれるだろ

俺の鉄拳制裁で気絶した勇者は護衛の者たちが担ぎ俺たちは奥に進んでいった

## 四十二発目 だんどん!! 中層!!

そのあと勇者は起きて大人しく戦うことにした  
始終周りを見渡していた所を見るに、よほど俺のげんこつが痛かつたようだ(ざまあない)

アーク(だが冒険者のほうは少しずつだが連携は取れてきたな)  
最初は勇者に活躍しているところを見てもらおうと自分勝手に動いていたが、今じゃ一つのチームみたいに動いていた  
だがダンジョンは甘くない

最初はゴブリンなどだったが奥に進んでいくうちに

「エレメンタルゴーレムダア!!」

アーク(でけえな)

奥からやってきたのは全身が炎に包まれた巨人だった

ピロン♪

通知：恒例の魔族紹介です

「エレメンタルゴーレム(炎)」

全身炎に包まれた巨人みたいな何か

だが実際は自然の中にいる精霊が暴走して成り果てた姿だという  
説が近年、学界で主力になっている

物理攻撃は一応ぐらいで効果はあるが隙を出さずに攻撃を続けなければならぬ。魔法での攻撃が一番効果がある

説明あざっす通知さん

「魔法いくぞ!!」

「わかった！前衛組！タゲをとりまくれ！」

「「「「「おおおおおおおおおおおおお!!」」」」」」」

士気も最初よりは随分と高くなった

前衛の盾持ちは持っている武器で盾を叩き挑発する

カンカンカン!!

「ッ!!来たぞお!!」



「こつちだ！炭野郎!!」

挑発に乗ったエレメンタルゴーレムは騎士たちを追いかけ始め騎士たちは命がけの鬼ごっこを始める

そしてその間に魔法使いなどの火力担当は準備する

「!!!」 氷天の槍よ！今こそこの地へ降り注げ！「アイスニードル」  
“!!!”

後方にいた魔法使いたちが頭上に巨大な氷槍を出現しエレメンタルゴーレムに向かって飛んでいく

エレメンタルゴーレム「きしやああああああ!!」

氷の槍はエレメンタルゴーレムの体を次々に貫き弱らせていく

このまま攻撃し続け油断さえしなければ勝てる……が

ペガサス「うおおおお!!止めは任せろ!!」

そう安定の勇者である

前衛のタゲ担当をしている騎士たちはエレメンタルゴーレムから距離をとって行動をしているのにも関わらず、勇者は“馬鹿の一つ覚え”さえも知らないのか……ゼロ距離で接近戦を挑もうとしていく  
言っておくが誰も止めは任せていない

ペガサス「くらえ！我が聖剣たちよ!!ペガサス流星剣!!」

おい!?

それは聖闘○星矢だ!?

なんともアウトな必殺技名を言うた勇者の周りに剣が10本出現した

アーク（あ、これ……無限○剣製のアレやん）

ペガサス「いけえええええ!!」

ちなみにだが勇者が召喚した剣は聖剣でもなくただの鉄剣である

弓矢のように少しの後退後……エレメンタルゴーレム目掛けて飛翔して行く、流星剣（笑）達であったが……?

ボスボスボス

エレメンタルゴーレム「ぐるう?」

剣はエレメンタルゴーレムの体に刺さることなく、『アレ？ なんかに刺された？』と言わんばかりに、頭を搔くような仕草までしつつ、ピンピンとしていた……………！

ペガサス「な!? 無傷だと!？」

あいつ……………もしかしてダンジョンに入る前に魔物の情報とか調べていなかったのかよ!? バカにも程があるだろ!? 精々、付与魔法で剣が溶けないようにするとか! 対策してから撃てよ!?(魔族については授業として勇者は参加していたが始まってすぐに寝たので全く覚えていない)

だが流石勇者、やっぱり勇者とも言うべきか運用方法がA U Oの戦い方であった

自分の周りの空間から剣やら槍を召喚して射出する戦い方だが

アーク(ふむ……………勇者はクソA I Mつと)

A I Mとは射撃精度のことだが10本中7本くらいしか命中していなかった

しかも一点集中ならわからんこともないが、それぞれバラバラな所に当たっている

ペガサス「ええい! 怒ったぞ! ペガサススペシャル!」

勝手に怒った勇者は剣を抜きエレメンタルゴーレムに白兵戦を挑むが

ペガサス「くらえ! くらえ! 苦しいか!？」

スカスカスカ

エレメンタルゴーレム「(。D。)?」

こいつ何やってんだ?

といわんばかりにほおけるエレメンタルゴーレム

アーク(あいつ……………魔族を呆れさせる天才か?)

もしくは馬鹿か……………いや、馬鹿だったわ

勇者の持っている剣はエレメンタルゴーレムの体を深々と斬り裂く……………ことはなく空を斬っていた

まあ、簡単に言ったら炎を斬っているだ

後方にいた魔法使いたちも攻撃したいが勇者が勝手な行動をして

エレメンタルゴーレムに接近しているので流れ弾に当たる可能性があった

アーク（別に当てても良い気がするが……当てたら当てたで国から面倒くさいことをしてくるんだろうな）

勇者の謎行動に困惑していたエレメンタルゴーレムだが気にしないことにし、右手を剣状に変えて勇者を叩きつけた

豪!!

ペガサス「熱い!? 熱いよお!」

アーク（わーお、無様）

咄嗟に剣で防御した勇者だが相手は炎を操れる敵

なので……火だるまになり、辺りを転がり始めた

「……あー！ チャンスー!」

火ダルマが転がりまくるだけ

勇者の 炎 舞 という珍百景を前に惚けていた冒険者達は勇者

が、囷になっている内に攻撃し……

エレメンタルゴーレム「ぐああああああ……」

「よしー倒したぞ!!」

お、倒したか

一時はどうなるのかと焦ったが問題ないようだ

ノエル「皆さん！ 怪我人は私のところに来てください!!」

「おーいー！ こっちに怪我人だ!!」

「おい！ 大丈夫か!? 傷は浅いぞー!」

ノエルのほうも頑張っているな

ノエルは回復魔法で運ばれた怪我人たちを治療していった

しかも……

ノエル「どこが痛みますか?」

「いや、ありがとうございます……ノエルさんの回復魔法で楽になったよ」

ノエル「そうですか!……私は回復とかそういうことしかできませんが、苦しくなったら何時でも来てくださいね? あと、最後までみんなのために戦うのかっこよかったですよ!」

「そ、そうかい？ありがとさん！」

ノエル「無理しないようにしてくださいね！」

「おう！ありがとう！」

回復ついでに褒めるといふ天使

俺の周りじゃ「聖女だ」とか「結婚してくれ」とかそういう言葉が聞こえてくる

アーク（まあ、前世でもそういうプレイヤーが居たら可愛がってたなあ）

勇者に関しては護衛に消火された

皮膚は少し焦げ、髪も痛んだ程度の傷だった（あの火だるまの中でよく生きてたな）

案の定、ノエルのところに行って治療（という名のセクハラ）をしようとしたが

ペガサス「ノエルちゃん？……治療いいかい？」

ノエル「あ！申し訳ございません！勇者様！……でも、勇者様は勇者様なのでそれくらいの怪我ぐらい……我慢できますよね？」

ペガサス「え、あ、うん」

ノエル「それじゃ、しばらく我慢をしておいてください！後で治療するので！……ほかの重傷者はいませんか!？」

………流石、ノエル

容赦ない

ペガサス（くそくそくそ!!なんだよ！せつかくノエルさんにバブバブしようと思ったのによお!?!……つたく、この冒険者ども使えんな!!）

言っておくが現在の勇者の討伐数は最初にエンカウントしたゴブリン一体だけである

アーク（ノエルも頑張ってるなあ……俺も人間だったら手伝ってあげたいけどなあ）

「おい………確かトオルか？」

アーク（ん？誰だ？）

遠くのほうからノエルを見ていると声をかけられ振り向くとそこ

には

「よお」

カキカキ

【あ、入り口で会ったおっさん】

そこには筋肉隆々の男性がいた

「おっさんって言うな……それよりお前んとこのノエルちゃん……頑張ってるなあ」

カキカキ

【そうすね】

俺はメモ紙に書いて会話する

「ノエルが居てくれたおかげで事前を買っておいたポジションを温存することができてうれしいもんだ!!……んで話は変わるが」

カキカキ

【ん？なんすか？】

「お前……いつになったら本気を出すんだ？」

カキカキ

【……なんのことスカ？】

「おっと、惚けるのは程々にしとけよ？俺はこれでも長い間、冒険者をやって身だ。目線で分かる」

……どうやら脅しではなく、マジのようだ

カキカキ

【……言わないといけない奴ですか？】

「あ、安心しろ。誰にも言わねえ」

……はあ、どうやら俺もまだまだ鍛錬が足りんようだな

カキカキ

【……ぶっちゃけ言うと、悪目立ち……いや、勇者よりも目立ちたくな

いからです」

「あ、やっぱりか？」

カキカキ

【やはり……とは？】

「俺も勇者様がダンジョン攻略に参加するって聞いて意気揚々と来たのは良いが肝心の勇者様が全く合わせないし魔法自体も弱いと来たからな？……逆にあいつ、本当に勇者なのか気になるぜ」

……ふむ、どうやら冒険者の中にも勇者のことを不満に思う奴もいるらしい

「……まさかと思うが、お前どこかの国のスパイだったり？」

カキカキ

【……んなわけですよ】

「だはは！そうだよな！悪かったな！……だがそろそろ前に出て戦ってもらわないと困るぜ？さつきからゴブリンの足止めばっかりじゃあ、目立ちもしないしな！」

こいつ……視野が広いな

つてか……えく？出なきやダメ？

どうにかやり過ぎす方法を考えていたら

ノエル「わあ！広いです！」

しばらく歩いていると先ほどの人工物から天然洞窟みたいなところに出た

「よーしー！今日はここで野宿だ!!」

ようやく休憩か

ダンジョン内では外の時間がわからないのでいつ休憩するか大事だ

ノエル「ふうー……たくさん動きましたあ」

トントン

カキカキ

【お疲れさんノエル】

ノエル「あ！トオル！もお！どこに行ってたのですか!!」  
カキカキ

【俺は周囲の安全の確認してた。だけどノエル、すごいな。みんなの怪我を治してあげたし】

ノエル「えへへへ♪そうですかね?」

ノエルと雑談しているとアツと今に時間は過ぎていき、休憩場所を選んだ場所にはテントがたくさん立っていた

【にしてもいいよな勇者は】

「ああ、俺らは地面で寝て薄い布だけ羽織って寝るのに……勇者は持ってきたフカフカのベッドで寝るらしいぜ」

「それに勇者だけテント、デカイし」

うん、確かに勇者のだけデカイ

それに対して冒険者のテントは小さい

ノエル「トオル! ご飯食べましょ!」

カキカキ

【そうだな、俺も疲れたから早く寝たい】

「お〜い! 飯の配給だ!」

ノエルと一緒に配給の列に並び受け取って一緒に座り食べることになった

ノエル「いただき……あ、そういえばトオルって食事が取れないんだっけ……あのお、もし嫌だったら私、離れて食べようか?」

カキカキ

【え? いやいや!……でも、おいしいか? それ?】

ノエル「う〜……正直固いしおいしくないです……」

ノエルたちに配られた食料は干し肉と黒パンというなんとも冒険者らしい食事だった

これって勇者が何か文句言うぞお?

だがその予想はある意味で裏切られた

ペガサス「ん〜!! うまいなあ!」

勇者の手には冒険者たちが食べている黒パンではなくおいしそうなおサンドイッチがあった

「そうですか!? 勇者様! 城のシェフに作らせたサンドイッチは!」

ペガサス「うんうん! 苦しゅうない!」

勇者は機嫌が良い程、大声で叫ぶように感想を言う

こいつ……大して活躍してなくせに、他の奴らより豪華な食いモンを食ってやがって

おそらく全参加した冒険者たちがそう思ったであろう

すると勇者は周りの視線に気が付いたのかサンドイッチ8個入った籠を持ってこちらにやってきた

ペガサス「ノエルちゃん！ノエルちゃん！少しいいかい？」

ノエル「あ！勇者様！はい！どうかなされましたか？」

ペガサス「このサンドイッチ……全部、ノエルちゃんに挙げる!!」

ノエル「え……いえいえ！そんなの困ります！」

ペガサス「いいからいいから!!」

ノエル「しかし……私は大して活躍してませんし……」

ペガサス「……じゃあ、勇者命令で！受けとつて！勇者様の命令は絶対なんですよ？」

ノエル「……ではお受け取りします」

ペガサス「そう！それじゃあね！（んくちゅ♡）」

帰り際に投げキッスをして颯爽と立ち去った勇者（おかしいな？スカルズに吐き気つて実装されてたっけ？）

ペガサス（くうく！おれつてば優しい！周りにいる冒険者どもも「素晴らしい！」とか「一生ついていきます！」って思つて褒め称えているに違いない!!）

勝手に勘違いは結構だが後悔しても知らんぞ？

ノエル「あく……どうしましょうコレ……あ！そうだ！」

するとノエルは立ち上がり今回参加した冒険者一人一人のところに行つて

ノエル「あのお、すみません」

「ん？あ！ノエルさん！どうしたんですか？」

ノエル「えつと、これ勇者様からもらつてんですけど皆さんで食べてくれませんか？」

「え、ええ!?!いいのかい!?!」

ノエル「はい！皆様は誇らしい勇気を持ち、本当は怖いのに果敢に



も前に出て戦っている騎士様たちです！……私みたいな後ろで回復しかしてない私と比べてみれば……素晴らしきことですよ!!……私は皆様には死んでほしくないのです。コレを食べて元気になってほしいのです!!」

「う、うううううう……ノエルさん良い人だなあ……わかった、ありがたくいただくよ!!」

ノエル「はい!どういたしまして!!」

ノエルはサンドイッチを冒険者たちに配った後、帰ってきたカキカキ

【ノエル……お前は優しいな】

ノエル「え、ええ?そ、そうですかね?」

カキカキ

【マジで。みんなから圣女って呼ばれる理由が納得がいく】

ノエル「せ、圣女って!?!私には畏れ多いことですよ!?!」

カキカキ

【それほど皆から感謝されているんだよ。少しは自信を持って】

ノエル「そ、そうですかあ……えへへへ♪」

天使か?こやつ?

そのあとは明日に備えて寝ることになった

## 四十三発目 だんどん!! 下層!!

「ふあ、眠……」

アークたちがダンジョンに入ってから一日が立ち時刻は大体朝の5時くらいであろう

そんな時間帯に一人の魔法使いがテントから出てきた。

「う〜……寒いな……このダンジョン、雪国の下にでもあるんか？」

はあ…吐息を吐くと白く曇った。

「はあ、もう一回寝ようにもこの寒さじゃなあ……なんか暖かい物でも飲んでみんなが起きるのを待っとくか」

まだ焚き木に火はあるかなあっと思いつながら向かっていると……

コトコト……

「ん？ なんだこの匂い……すげえいい」

仄かに食欲が湧きそうな匂いに気づき匂いの源を嗅いでいくと

「ん？ だれだ？」

コトコトと鍋で何かを似ている人影があった

その姿は死人のような白い肌にガスマスクとゴーグル……

「ッ!? スケルトン!?」

ガタツ!!

まさかキャンプ内に魔物が侵入してたとは!?

急いで魔法を演唱し撃退しよとしたが

パタパタ!!

カキカキ

【やめろ！ 俺は味方だ!!】

「はあ？ そんなわけ……あ、お前ダンジョンに入るときにノエルと一緒にいた髑髏か」

カキカキ

【髑髏ではない、トオルという名を持っている】

アーク（あぶねえ……あと少しメモ帳を出すのが遅れてたら天国に

行ってたわ)

もはや慣れてしまったたメモ帳による会話をする。

「あ、そうだったな……すまんな攻撃しようとしてしまった」

カキカキ

【いいさいいさ】

「……ところで何を作ってた？」

カキカキ

【このダンジョン、意外と寒くてな？朝は温かい物が良いだろうって  
思ってた全員分の朝ご飯を作ってた】

「おお！ それはありがたい！！ ちょうど暖かい物が恋しかったんだ  
！！ ……でも材料とかどこに持ってたんだ？」

カキカキ

【それは秘密だ】

てなわけで料理の時間です (第四弾!! みんなも作ろう!!)

材料 (二人前)

クレアおばさん○ビーフシチュー 1箱

牛スジ肉 500g

オニオン 角切り 200g

人参 角切り 200g

サラダオイル 50cc

冷凍フライドポテト 200g

ブロッコリー 適量

水 1200cc

シメジ 1パック

ヨーグルト 50g

赤ワイン 40cc

バター 30g

ブラックペッパー 少々

- 1, 圧力鍋に水と牛すじを入れて沸かし脂とあくを取ります
- 2, 圧力をかけて20分ほど火を入れて柔らかくします
- 3, 野菜をカットしてフライパンで強火でソテーします

4, 別フライパンで少しの油でポテトとシメジを揚げるように  
テーします

5, ブロッコリーにも火を入れます

6, スジが炊き上がったらオニオン、キャロット、シメジを入れて  
あと3分だけ圧力をかけて火を入れます

7, 赤ワインを加えてルーを溶かして入れます

8, 上がりにバターとブラックペッパーを入れて仕上げます

9, シチューをお皿に盛ってブロッコリーなどを入れます

10, 完成!!

以前のポイント 2135

生産

ク○アおばさんのビーフシチュー 1

牛スジ肉 1

オニオン 1

人参 角切り 1

サラダオイル 1

冷凍フライドポテト 1

ブロッコリー 1

シメジ 1

ヨーグルト 1

赤ワイン 1

バター 1

ブラックペッパー 1

圧力なべ (異世界にはなかったの) 1

合計ポイント 2122

「おおー おいしそう!!」

だろ?

コトコトとおいしそうな匂いを出しながら煮込んでいた

「なあなあ! 一口食べていいか!」

カキカキ

【……そうだな、味見ついでに食べてくれ】

「やったぜ！ ……んじやいただきまーす!!」

お玉に少し掬い小皿に入れ魔法使いに味見させる

「……………え、うま!! お前!! 何か呪いか付与魔法でもかけたのか!?!」

カキカキ

【んなわけあるかい!?!】

「え!?! じゃあ、お前って料理の才能があるんだな!!」

カキカキ

【いや、俺がすごいんじゃないかって……この味にたどり着いた先人たちがすごいだけだ】

すると匂いにつられたのかゾロゾロとテントから冒険者たちが出てきた。

「お？ 朝飯か？」

「すげえいい匂いがするぞ!!」

「トオルじゃねえか!?! これってお前が用意したんか!?!」

カキカキ

【せやで】

「束の間に聞くがまだ朝だろ？ お前、いつから起きてたんだ？」

……実を言うと全く眠れなかった。

何でかというと

回想シーン

アーク(……………)

俺はテントの中で横になって、現在進行形で瞼が重く、眠いんだが全く寝つけれなかった。

なぜなら横で寝ている人が関係する。

ノエル「トオルしゃん……むにやむにや……」

アーク(なんでノエルさんが来るんだよ!?!)

テントは一人一つなんだがノエルが俺のテントに転がり込んでき

た。

アーク（えつと、なんでこうなったけ？）

確か俺は明日に備えて、早く寝ようと思って寝てたはずだ。

地面に直接寝て布一枚で寝るといふ地獄だったが睡魔が勝ったので眠りにつこうとしたが

ノシツ

アーク（ん？誰ふあ!?)

左腕に生暖かい重みを感じ、横を見ると……

ノエル「しゅびい…しゅびい…」

ノエルの顔がドアップで映り心臓が跳ね上がった。

しかも、ノエルと俺の顔の距離は鼻息がかかるほど近い。

アーク（なんでここにいんだよ!?)

いつものシスター服ではなく、白い寝巻という格好でいた。

と、とりあえず起こすか

アーク（おい！起きろー！）

ユサユサ

ノエル「むにゆう…トオル様あ…もう食べられ…にゆう……」

アーク（はあ……）

ダメだわ、全く起きん

アーク（まあ、今日は人一倍頑張ったし仕方ないことか）

とりあえず、ここで一夜を過ごしたら朝に目撃されて裁判になりかけないので、そつと左腕を動かしノエルを抱えた

アーク（寝巻で、しかも男性が女性を抱えてテントに一緒に入っていくって……このシーン見られたら即刻で死刑案件だな）

寝ている冒険者や警備をしている勇者の護衛に気づかれないよう静かに移動し俺のテントの隣にあるノエルのテントに到着した

アーク（よっこいショットガンつと……）

（なんとも面白くないダジャレを言いながら）ノエルを優しく降ろし、風邪をひかぬよう布をかけ自分のテントに帰っていった。

アーク（ふい〜……ちよつと焦ったけど問題解決だ）  
テント内で再び横になり目を閉じる

アーク（にしてもノエルの体……柔らかかったなあ。まるで雲のように柔らかく、握りしめたら消えてしまいたいそうだった……ノエル、さては運動苦手か？）

本人が居ないので言えることだが……少し……いや、見た目の割には脂肪があった

あれが俗にいう「着やせ」かつと思っていると

ふにゆ

アーク（え？なんで暖かいんだ……だはあ!?)

再び生暖かく柔らかい感触を感じたので目を開けると

ノエル「すやあ……」

アーク（え？ なんで!?) さつきテントまで運んで布をかけたよね!?)

再びノエルの輸送を開始した

アーク（まったく……なんでこっちん来たんだ?）

だが確かに運んだし大丈夫であろうと思ひ再度横になったが

アーク（流石にもう来ないだろ）

だが運命の女神は微笑まなかった

ノエル「トオルシヤン……」

モニユ

アーク（おpp!?)

現在、「運んだはずのノエルが気が付いたら隣にいて驚いたこと」と「驚きのあまり振り向きとしたらノエルの胸に自分の左腕が収納された」ことが同時に発生し頭の中でフリーズした。

アーク（おK、一旦おいちゆ……じゃなくて落ち着こう。えつと？ 確かに今さつき俺はノエルを彼女のテントに運んだ。だがしぼら

くしたら隣にいた……うん、わからん)

もしかして、ノエルって絶望的に寝相が悪いのか？

アーク(だとしたら結構問題だぞ)

試しに少し横にズレると

ノエル「あく待ってえ……メルう……」

ゴキイ!!

アーク(おうふ!?)

横にズレた瞬間、ノエルは売れの腕を掴んだまま俺が移動した方向に寝返りを打った

ちなみに腕を掴んだまま寝返りを打たれたので鳴ってはいけない音が聞こえた気がするが……キノセイダロ

ノエル「トオルさあん……空にスパゲッティが飛んでますよお」

アーク(心の中でどう意味だよ!?)

っと突っ込みつつ、これ以上一緒にいたら命の危機なので左腕を無理やり外し外に脱出した。

……そして今にいたる。

回想終了

カキカキ

【まあ、うん……少し心臓に悪いのを体験して早く起きたんです】

「なんだ？ 悪夢でも見たのか？」

カキカキ

【そうじゃないけど……でも、心臓に悪いもんです】

……そんな中、冒険者と会話していると

ノエル「ふあく……おはようございます……」

「お！ ノエルさん！ おはようございます！」

「おはようさん！ よく眠れたか？」

ノエル「はい！ よく眠れました!!」

言っておくがノエルが寝たのは本人のテントではなく俺のである

ノエル「ちなみに勇者様は？」

「ああ？ あい……勇者様はまだお眠りだ。護衛曰く、勇者様が起



きて一時間後に出発するから準備をしておけだつてさ」

ノエル「そうですか……あれ？ いい匂い……あ！ トオル！ 朝ご飯ですか！」

ノエルが弁当に好きなものを入れてくれて喜んだ子供みたいに、ほいでいる。

「おう！ ノエルさんの相方さん、すごく料理がうまいな!!」

「ああー！ この……なんだっけ？ 【ビーフシチューだ】……そう！ ビーフシチュー！ すごく美味しい体が温まるな!!」

ノエル「そうですね！ トオルって料理がとても上手なんですよ!!」

「ああー！ ノエルちゃんは今度良い婿さんを手に入れたな！」

ノエル「はい！ そうでs……ちよつと！ 一瞬違和感を感じましたけど揶揄わないでください!!」

「だはは！ バレたか!!」

何やってんだあいつら？

注ぎ終わった鍋を洗いながら遠くのほうから見ていたんだが……何が婿じゃ。

生憎だが俺はアリスの使い魔だから婿になる気は皆無だ。

生涯一生、アリスの側から離れる気はない

そのあと勇者がようやく起きて出発することになった。

ペガサス（どうしたんだ？ 冒険者どもの様子がおかしいぞ？）

朝、勇者命令で特別に作らせたベッドで一夜を過ごしたが目覚めは最高によく元気よく出発したが、なぜか冒険者たちがみんな仲良く話している。

しかも自分の護衛たちも護衛の任務はほつといて会話している（なぜか「おいしそうだった」とか「自分もあつちに行けばよかった」など聞こえるが勇者は気にしてはない）

なので現在、勇者は冒険者と護衛のはるか後方で一人ボツチで歩いていた。

ペガサス（くそ！くそ！くそ！なんで皆、俺をほつたらかしにする

んだ!?……あ!もしかして、ノエルちゃんと二人つきりで会話してあげるチャンスを作ってあげてるのか!!なら、感謝するぞ!冒険者ども!

……  
そう(勝手に)判断した勇者はストーカーのような目つきで探し

ペガサス(いた♡俺の大好きなノエルちゃん♡)

先頭にいる集団の中に自分の中では三番目に好きな女性、ノエルを見つけた。

ペガサス「おーい!ノエルちゃあん!………え?」

(泥水の中を泳ぐ魚みたいに)邪魔な冒険者を掻き分け、あと少しで届きそうだったが勇者は固まってしまった。

固まったせいかな頑張って先頭まで来たのに再び一番後方に戻っていく……

なぜなら、

ノエル「え〜!トオルって彼女いないんですか!」

カキカキ

【いないとはなんだ!? いないとは!?】

なんと、ノエルが自分以外の男性と仲良く話していたのだ。

ペガサス(あれって!?!確か………トロールか!?)

正解はトオルである。

ペガサス(なんだよ!!俺がせっかく話そうとしている女の前に邪魔が入るんだよ!!)

毎回、かつこよく話しかけたいが毎度空振りである。

最も一番新しい記憶で会ったのはアリス・フォン・アーハム帝国の第二皇女に話しかけようとした時だ。

最初は決まったが途中で護衛に邪魔をされてしまった。(まあ、その護衛もアークだが)

ペガサス(あいつが居なかったらあ!!今頃、あのエルフを花嫁にしてたのにい!!)

しかも、手に入れた情報ではあの黒いフードを被った男はノエルの幼馴染だったはず。

ペガサス（ふん！いいだろう！まだ花嫁<sup>アリ</sup>一号と花嫁<sup>ク</sup>二号は手に入  
れてないが、すでに俺の計画は進んでいる!!……彼女を

ノエル・スカルトツオを俺のハーレムの花嫁<sup>ス</sup>三号にする!!）

決めた理由は彼女が着やせで優しいからだ!!

俺は彼女と初夜をやるときは必ず赤ちゃんプレイでやると決めた  
!!

くつくつく!! 精々、残りの幼馴染ライフを過ごしておくんだなあ  
!………名前は確か、スメイル!!

………諄いかもしれないが正解はトオルである（なんか前に間違えた  
時より悪化してないか?）

しかも、トオルとステイブは「歌う死神 アーク」であることを  
未だに勇者は気が付いていない。

ペガサス（しかし……俺の花嫁一号と二号はどうやって手に入れよ  
うかな?）

直接会おうにも必ずあの護衛がやってくるし、口説くのは勇者であ  
る自分の（糞みたいな）プライドが許さない。

結婚するならちゃんと正式にだ。  
しかし、仮にもダンジョン内で笑って会話をしている冒険者でも警

戒を緩めていないのに……

この勇者は呑気にも、そして最も哀れな方法を思いついてしまっ  
た。

ペガサス（………待てよ? 俺って勇者だよな? ……ひら  
めいた!はっはっは!! 我ながら頭良いー!! ……この方法なら  
……花嫁一号と二号を手に入れられる!!）

さあ、俺のハーレムライフは近い!!

……だが後にこの方法がアークを転生人生で最初に憤怒になる  
出来事になった。

## 四十四発目 だんどん!! 最奥!!

ダンジョンに入って一日が立ったが順調に進んでいった。

「そつちにオークが行ったぞ!」

「死ねや! 変態が!!」

……うん、どっちが魔族なんだろう。

オークがヤベエこいつら!?! って顔をしながら逃げているけど逃走先を魔法使いが氷魔法で閉ざして騎士たちが盾を構えて少しずつ切って倒していく。

オークA「ギヤアアアアアアア!?!」

オークB「ワ、ワルカッタ!! モウオンナハネラワナイカラ!?!」

「てめえ!?! 女狙いか!?! ノエルさん狙いか!?!」

オークA「ソ、ソウダダガ? ナニガワルインd「死刑!!」ゴハア!?!」

ちなみに何故ここまで勇者たちが血の気が多いのかというところ……

原因は後方にいた

ノエル「皆さん! 頑張れ♡ 頑張れ♡」

「「「「「うおおおおおおおおおおおおおお!! ノエルさんの声に答えるぜえええええええええ!!」「「「「「」

後方でノエルが応援している。

完全にノエルが悪女でヤバイように見えるが実際は結構綺麗で、ノエルはみんなに頑張ってほしいのと生きて帰ってきてほしいから応援して、冒険者たちはその声に答えるために強化ならぬ狂化して蹂躪している。

人間、応援されたらすごいことになるって聞いたが……うん、すごいな。

俺は一応敵が突破してきてノエルに怪我をさせないよう護衛でいたが……いるか俺?

「ふい〜! 暴れてきたぜ!!」

ノエル「お疲れ様です! 怪我人はいませんか?」

「おう! 全員怪我はないぜ!!」

ノエル「よかったあ!! 皆さん無事ですね! 安心しました!!」  
するとそれを聞いた冒険者たちはほっこりとした顔でほほ笑んでいた

(天使や)

(このダンジョンに穢れなき聖女が舞い降りたぞ)

(永遠に守りたい。この笑顔)

まあ、士気がさらに上がっていいことかな?

そしてしばらく前に進んでいくと

「ん? なんだこれ?」

ダンジョン内は迷路のように枝分かれしており地道に道をつぶしていくが運がよかったのか今回のダンジョンは小さく思いのほか早く階層を攻略していったが最後に残った道を進もうとしたが変なくぼみを見つけた。

「なんか押せるぞ?」

「あ! おい! トラップだったらどうすんだよ!」

ペガサス「おい! 勇者を置いていくな!」

ダンジョン内にはご丁寧にもトラップが仕掛けられていたが、今回のダンジョンが狭く小さいせいかわトラップはなかった。

「へへへ♪ それは俺に任せな!」

するとダンジョン入り口で見た山賊の格好がした男性が前に出て窪みを観察し始めた

「んで、これをこれつと(カチャ)開いたぜ!!」

すると……

ゴゴゴゴゴゴ……

窪みがあつた壁が動き一つの部屋が出てきた

「おお……開いた……」

ノエル「やっぱり、ダンジョンってすごいんですね!!」

カキカキ

【そうだな】

どういう仕組みか気になるが先に出てきた空間を見てみると

ノエル「ん？ 中央に何かありますよ!!」

部屋の中は大変広く、大体学校の教室6個分の広さの円形の部屋だった

そして、部屋の中央には大きな箱が一つポツンとあった

うん……これは……

アーク（罨だな）

オセロツトも言ってたが何もないのに箱だけが一個だけあったら罨だと思え

って言ってたしな

ノエル「トオル！ あれ、きつと宝箱ですよ!!」

ノエルが興奮して開けに行こうとしたが

ガシッ

ノエルの腕を掴んで引き戻した

ノエルの頭が俺の胸にぶつかりなるとかになった

カキカキ

【ノエル、あれは恐らく罨だ】

ノエル「えええ!! あれってトラップなんですか!？」

カキカキ

【おう、だって不自然に思わないか？ こんなダンスホール並みに広いのに宝箱一個だけ？ 明らかにおかしいだろ?】

ノエル「でも、あれが本当に宝物だったらどうするんですか?」

【そんな時でも俺の出番だ!!】

ノエルと会話していると先ほど解除してくれた山賊が出てきた

「んじゃ、ちよいつと時間がかかるから周囲の確認よろしく!!」

ノエル「ねえ、トオル？ なんでまたさつき解除してくれた山賊さんが出てくるのですか?」

カキカキ

【……多分だがあの山賊、元解除士だな。解除士はトラップの解除を主にしていて、トラップが作動してパーティーに怪我をさせないためにも冒険者パーティーには大切な役割だ。】

ノエル「へえ〜！ 解除士ってすごい方なんですね!!」

「……おーい！ みんな分かったぞ!!」

ノエルと話をしてしていると山賊が戻ってきた

「どうだった?」

「入ってすぐは問題ねえ……おそらくトラップの発動条件は中央の宝箱だな」

カキカキ

【では、これは無視して先に行くのか?】

「ちつちつち！ だがそんなわけにはいかん！ もし、宝箱の中身が古代兵器だったらどうするんだよ!!」

古代兵器?なんだそれは?

ピロン♪

通知：古代兵器について説明します

あ、あざっす通知さん

【古代兵器】（エンテンシャルウエポンス）

世界中で発掘される太古の昔に採掘された兵器のことで、そのどれもが強力な兵器であるため大変高価な武器でもある。ちなみに古代兵器と名前を付けたのは現代の住民たちで実際発掘されたものの正体はわかっていない

説明ありがとうございます。

ノエル「古代兵器!?! それって一個で戦場を制覇できるっていわれているあの!?!」

「そうそう! 俺も若いころ別のダンジョンで一つ見つけたんだが……そいつがボロボロのくせにすぐくてさ!!その兵器すぐく重くてよ! スイッチを押すとバリバリバリ!?! って兵器がなつて放すとドガアアアアン!?! って鳴って全部破壊したんだぜ!?!」

バリバリでドガアアアアアン!!……そして重く威力が高い……なんだろ?

「だけどき……すごかったからもう一回使おうとスイッチを押したら



爆発して粉々になってしまったんだ……部品を売ろうにもボロボロすぎたから売れないしさ!!」

爆発って……レールガンかよ?

でも、異世界でレールガンを作るって……んなわけないか

技術的に絶対に無理だろ

カキカキ

【だが図書館などでは古代兵器についての本はなかったぞ?】

「そりゃそうだ、なんたってミール聖教国のお偉いさんたちが古代兵器の存在を認めていないからな!!」

なるほど、だから俺も知らなかったわけだ

冒険者たちが古代兵器を話題に楽しく会話をし宝箱を取りに行くかと愉快に話し合っていた

……が、一部それをおもしろく思っていない輩がいた

ペガサス「……………」

そう、すでに冒険者たちが本来の目的を忘れられて置いて置いてけぼりの勇者であった。

もう、完全に空気になっている。

ペガサス（お前ら!?このパーティーのリーダーはこの俺、勇者なのに勝手に進むな!?)

本当は叫んで駄々をこねたいが………実を言うと冒険者の一人が「トラップだったらどうする!」の時に叫んでいたが無視された（マジで書いているので見つけてね）

ペガサス（クソ！使えん人間どもめ!!……だが古代兵器か………聞いたところによると一個で無双ができるそうだな?……そうだ!）

やはり勇者、相変わらず勇者、お約束の勇者（芸人でもなったら?）

また、勝手なことを思いついた。

ペガサス（強力な武器とは……必ず勇者が持つ武器だろ！つまり………

妄想

1, 勇者「古代兵器を手に入れたぞお!!」

←

2, 勇者「くははは！雑魚はどいてろ！無双じゃああ!!」

←  
3, 敵「ひいひい!!?お助けえええ!!」

←  
4, 勇者「ふん！正義は必ず勝つ!!」

←  
5, (自分より弱いと思っている)雑魚な冒険者「勇者様最強！勇者様万歳!!」

←  
6, 勇者「だろう！だろう！」

←  
7, ノエル「勇者様！私を……永遠の側近にしてください!!」

←  
8, 勇者「い、いいのかい!?でも、君には一緒にいた幼馴染がいただろう？」

←  
9, ノエル「あの男は……弱すぎるので、お強い勇者様の子供をお産みにしたいのです!!」

←  
10, 勇者「仕方ないなあ!!んじゃ、結婚しよう!!」

……素晴らしい！我ながら素晴らしい確定の未来予知(という名の妄想)じゃないか!!)

そして勇者は行動する。

後方にいたのに冒険者を退かして……一人で宝箱のある部屋に入っ  
ていった

「ん？ あ、おい！ 勇者！ 入っちゃだめだ!!」

ノエル「勇者様!! 危険なので戻ってください!!」

入り口にいた冒険者たちが叫ぶが勇者は無視する

ペガサス(うるさい！ お前たちが手に入れたら勇者としての俺の地位が危ういし、ノエルちゃんを手に入れる気だろ!!)

また勝手な解釈をし宝箱に到着する

ペガサス（それにこの企画の本当の目的が果たせないじゃないか！！）

実を言うところの勇者……ダンジョンに入るときに言っていた「最も活躍した冒険者を勇者のパーティーにする」と言ったが

あれは真つ赤な嘘である

本当の目的はノエルでこのダンジョン攻略も彼女と二人つきりになって口説いて攻略したら告白しようとしたのだ。

勇者パーティーも大金を払って有名な騎士や魔法使いを雇うので今回、参加している冒険者たちの活躍など最初から見えていなかったのだ。

ペガサス（なんだよ！ 畏とかないじゃん！ ビビりだなあ！ アイツラは！！）

ノエル「勇者様！お戻りになってください！！」

ペガサス「大丈夫だよ！ ノエルちゃん！ ほら、な n（カチャ）  
そう言い宝箱を開けた瞬間だった

モゾ……

ペガサス「ん？ なん d（ザシュツ！！）……え？」

宝箱を開けた瞬間、箱の中から緑色のナニカが動き…勇者を上下半分  
分に切断した

ノエル「きやあああああああ!? 勇者様!？」

「くそーミミックだ!!」

ミミック!?

なんだそれ!?

ピロン♪

通知：説明Timeです

【ミミック】

主にダンジョン内に生息し壺などの容器の中に寄生し少しずつ成長する

基本、食べるのは自分より小さいものだが……たまに人間などを食べのために襲い掛かる

不完全変態（カマキリなど）なのでその姿のまま巨大化していき宝箱などの大きな容器に住み着き始める……油断大敵

ありがとう！通知さん！

でも、すでに一名油断して体がさようならした奴がいるけどね!!

ペガサス「い、痛えよおおおおおおおおおおお!!」

勇者の体は上下に分かれており勇者の体は上半身しかなかった。

ミミック「きしやああああああ……」

勇者が鼻水を垂れ流している間にもミミックは勇者の下半身を触手で絡めとり自身の口に運んでいき咀嚼していった。

ボリ、ボリ、ボリ!!

ペガサス「ひ、ひいいい!？」

それを見た勇者には十分インパクトが伝わったのであろう勇者は這い蹲って逃げようとした。

冒険者たちも救助しようと勇者のもとに向かおうとしたが

ゴブリン「ぎぎつき!!」

エレメンタルゴレム「……………」

「くそー、ゴブリンとエレメンタルゴレムが来たぞ!!」

まさかのタイピングで冒険者パーティーの背後から魔物たちがやってきた。

アーク（いや、今から助けに行っても出血死で死ぬだろ）

じゃあな勇者、お前のことは……多分忘れてはいるけど、あの世で口り神たちに土下座人生を送りな。

だが、その予想は勇者の神様特典の一つによって覆された。

ペガサス「い、いやだ……死にたくない……」

勇者の体は上半身つと言っても、心臓より上しかなく本来は死んでもいいはずだが

ぼこぼこ……

アーク（……うえ、気持ち悪）

突如、勇者の体は生物的に体を再生していった。

……簡単に言ったら、バイオハザードのボスが再生するとき肉体を膨らして再生するような感じだ

アーク（……恐らく、あれが「超再生」か）

だが、超再生があるなら別にノエルに回復させる必要性がない気がするんだが？

……まあ、あの勇者だからといえば終わってしまう話だが。

しかし、もし暗殺するならどう殺すか？

哀れに逃げようとする勇者を横目で見ながら背後から攻めてきた魔物を対処していく冒険者たちであったが

ミミック「グルるるるるる……」

丁度、勇者の下半身を食べ終えたミミックが残りの半分を食べようと触手を伸ばしてきた

ノエル「勇者様!?……申し訳ございません！ 皆さん！ 勇者様の回収をします!!」

「おう！ わかった！ 野郎ども！ 絶対に後ろに流すんじゃないぞ!!」

「「「「「おう!!」「」「」」」」

そう渴を入れ冒険者たちは目線を後ろに移し魔物たちを邀撃した。

ノエル「勇者様!!」

ノエルはミミックの入った宝箱の部屋に入り勇者様を運ぼうと走る。

ペガサス「嫌だあ！死にたくない！死にたくない！シニタクナイ！！シニタクナイ！！」

勇者も逃げようと残った腕で這いずって逃げるが……

ガシャ、ガシャ

勇者が入るときに来ていた金の鎧が邪魔をしていた。

金で作られているので鉄より脆いのでミミックの触手で簡単に切断され、さらに金は大変重いので腕が全く上がらなかった。

脱ごうにも死への恐怖に完全に混乱してできなかつた。

ノエル「勇者様！！」

ノエルも触手が迫っているが勇気を持ち、足が少し再生して「よちよち歩き」になっている勇者に近づいた。

あと少しで勇者の手に届きそうになり、手を掴み入り口に運ぼうとした………が

ノエル「勇者様！手をつかんだ嫌だあ！シニタクナイイイ！！」：きやあ!？」

勇者はノエルの手を掴むことなく……ノエルの足を掴み後方に投げ飛ばした。

その時、混乱の中閃いたせいなのか魔法で腕力を上げた

そのおかげで前に進むスピードは上がったが、ノエルを後方に投げ飛ばした。

ノエル「いてて……え、いや……来ないで……」

ミミック「きしやああああああ……」

勇者がノエルを後ろに投げたせいでミミックのターゲットは勇者からノエルに移り……

ばしゅう!!

ノエル「いや！放して!!」

ミミックは触手を伸ばしノエルの足を掴み上げ宙ぶらりんさせた

そして、ノエルの下にはミミックの巨大な口が開いていた

アーク（ノエル!?）

それを見た俺は部屋の中に入り走った。

勇者はどうするのかって!? 知るか! 先にノエルだ!!

部屋に入りミミックのいる場所まで走り腰にあるスカルズのマ  
ティーチェを抜き取りノエルが捕まったミミックを倒そうとするが

ノエル「と、トオル!!」

わ、私を見ないで助けてください!!」

……はあ?

アーク（いや、一体どういう………ッ!?）

その理由はすぐに分かった。

ノエルは現在、ミミックの触手で空中で逆さになっている。

その状態のせいで重力が働いているので……

ノエル「い、いやあ………トオルちゃん……見ないでくだしやいい………」

ノエルの両手はスカートを掴んでいた

抵抗しようにも手をスカートから放してしまうので太ももより上  
が露わになってしまうのだ。

アーク（でも、結構無理だぞ!?）

左手を鋼鉄化して即席の盾代わりにし右手にマティーチェを掴みミ  
ミックの触手を切っていく。

できる限りノエルを見ないで触手たちを切っていくが

アーク（おら！）

ザシュ

うのようによ

うのようによ

だあ！ウザい！

一本の触手を切ったらその断面から二本出てくるのだ。

切っても切ってもキリがない!?

しかも問題がもう一つあるのだ。

ノエル「え？え、待って！服の中に触手を入れないで!？」

捕まっているノエルからの声である

ノエル「あ、ちよつと！そこは触らないでください!？」

ノエルの着ているシスター服にミミックの触手が触り始めた。

太ももだったり裾から服の中に入っていったりとノエル自身に

とっては一大事だがアークは見えていないし、触手の対応で忙しいので

気が付いていない。

そして……

しゆるしゆる……

ミミックの触手はノエルのスカート握っている両手を掴み

ノエル「い、いやあああ!!そ、それだけは!？」

とノエルの声が聞こえてきて

ビリッ……

アーク（……あ）

アークも男なので分かってしまった

ノエル「う、うえええええん……トオルう……見ないでくださいや

いい……」

ノエルの泣いている声で確定した。

そしてミミックはノエルを自身の口に運んでいく。

アーク（ちくしょう!……あ、これなら!!）



どうかノエルを脱出させる方法を思いつき一旦ミミックから離れてそれを取り出す。

アーク（まさか、ここで使うとはな）

掌に生成されたのはボールくらいのサイズの物体だった。

アーク（あらよつと!!）

その物体についてあったピンを抜きノエルを食べようと開けたミミックの口に投げ込む

右手から投げられた物体は綺麗な弧を描きミミックの口に入った  
……そして

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!

ミミックは内側から膨れ上がり爆発四散した

アーク（まさか、バサビイ共和国に来た時に作ったフラググレネードが役に立つとはな）

主を失った触手たちは少しずつ形状を崩していき消えて、ノエルの体に絡まっていた触手も消え、ノエルは解放された。

だが、空中で解放されたので

ノエル「きやあああああああ!!」

真つ逆さまに落ちていくが

バシュツ!!

アークが滑り込みでキャッチし無事だった。

カキカキ

【怪我はないか？ノエル？】

ノエル「……………」

カキカキ

【ん？どうした？】

ダンジョンに入ってから慣れたメモ帳で会話するがノエルは静かに言った。

ノエル「……………見ましたか？」

アーク（……………）

カキカキ

【イヤマツタク】

ノエル「……………本当ですか？」

カキカキ

【マジで、神に誓って】

ノエル「……………そうですか」

ノエルのシスター服のスカートが少し破けてしまいミニスカートになってしまったが気にせず冒険者のみんなと合流し先に進んだ。

勇者はつて？護衛に運ばれてますが何か？

しかし、ノエルと俺は少し気まずい空気になってしまった。

アーク（言えねえ……………黒の紐パンで意外と大人な下着を着るんだなつて言えねえ）

ノエル「今、何か最低なことを考えませんでしたか？」

カキカキ

【いいえ、全く】

ノエル「そう…ですか、だけど……………そのお……………誰にも言わないでくださいね？」

隣で歩いているノエルが俺の顔を見て恥ずかしそうに言う。

あ、これバレテラ

こうして俺は一生、神に懺悔して生きることを誓い、ノエルはアークに自分が前に買った下着を誰にも言わないでほしいと願った。

## 四十五発目 だんどん!! ボス部屋!!

ノエルをミミックから救助した後、俺たちは問題なく進んでいった。

まあ、ノエルとの会話は気まずかったのでなかったが

以前のポイント 2135

獲得（ミミック討伐） 300

合計ポイント 2435

ペガサス「うゝ…痛いよお」

「だ、大丈夫ですよ！ 勇者様！ 傷は治ったじゃないですか!!」

「そ、そうですねよ！ 新しい神様特典が見つかったといいじゃないですか!!」

ペガサス「そうだけど…怖かったよお……」

アーク（まあ、俺にとつては面倒くさいことが増えたんだがな）

これは完全に俺の推理に過ぎないんだが恐らく、「超回復」は「どんな怪我でも治せるが魔力消費が激しい」か「普通の回復魔法と同じ回復力だが勇者の特典の一つの魔力量無限のせいで強化されている」の二つでどちらも「超回復」と「魔力量無限」の二つがあることによつてできる技だ

……あれはもはやほぼ不死身に近いな

アーク（首を掻き切つて…いや、それだと死ぬまで時間があるからその間にも超回復が発動して回復してしまう…はあ、どうしたものか）

やっぱ、対物ライフルで頭を吹き飛ばしたほうがいいのかな？

だが、もう一つの心配は

アーク（勇者の回復できる範囲なんだよなあ）

先ほどのミミック戦で半分以上切断されたくせに超再生ですっかり元どおりになってしまい今は自力で歩いている  
トカゲか何かか？

アーク（あと、使えるとしたら……毒殺かなあ？）

しかし、毒までもが超回復で消されてしまったら打つ手がない。  
うくん？と悩んでいると

ノエル「……………」

ぺちぺち

アーク（う、うん？なんだ？）

急に隣にいたノエルを俺の背中を可愛らし音でたたき始めた。  
カキカキ

【ど、どうしたんだよ？！】

ノエル「……なんかトオルが変なことを考えて気がしたんで叩きました」

変なことってなんだよ？

俺は精々勇者をどう殺すかを考えてただけだぞ？（それだよ）

ノエル「一応聞きますが……誰にも言ってませんよね？」

カキカキ

【言っていない】

ノエル「言ったら承知しませんからね？」

ジト目で見られるがこれはマジだ。

ノエルがミミックに捕まって「あんなことやこんなこと」をされた時、冒険者たちは背後から攻めてきた魔物の対応で気が付いていないので誰も見ていない。

勇者はって？知らん！見てたら何かしらしてくるはずなので勝手に見てないと判断した！！

そして順調に進んでいき……

「ん？……全員止まれ」

先頭を先行していた騎士が止まれの合図が出たので止まった。

「どうした？」

「……………この部屋見てみるよ」

地道に道を潰していった最後に残った道の奥には部屋が一個あり

中を見てみると……

アーク（広いな）

大体、広さは甲子園球場の観客席を含めた広さだった。

「なあ、これってまさか……」

「ああ……」

ボス部屋だ」

アーク（とうとうか）

まさかと思っていたんだがここに来るのか。

少し中を覗いてみるとキラキラと結晶が光っており幻想的だったが……

モゾモゾ

中央に巨大な何かがあった

「……あれがボスか」

「デカいな……」

冒険者たちは恐る恐る覗き観察する。

よく見たらボスの体はプルプルと蠢いている。

「あれ……スライムか？」

「じゃあ、ボス・スライムだな」

カキカキ

【それで、どう攻めます？】

「あく……そうだな……一応防御系の付与魔法をかけた盾持ち騎士を前衛に出して魔法使いで後ろからチクチクやる……かなあ？」

「了解、それじゃ作戦開始で」

ノエルはいつでも回復させる準備をし他の騎士たちも準備するが

……  
ペガサス「おい、待て貴様ら!! この勇者ペガサスを置いて勝手に  
作戦を立てるな!!」

お約束の勇者である（もうお前黙れよ）

ペガサス「そんな作戦、すぐに壊滅するに決まっている!! 俺だけ  
だったらすぐに終わらせるのに!!」

冒険者たち（（（（こいつ……大して何もやってないくせに何を  
言っているんだ?））））

ダンジョンに入る前は勇者のことを素晴らしい人だと思っていて  
冒険者ですら完全に失望しており忠誠の糞もなかった。

「しかし……勇者様、大変お言葉かもしれません……勇者様だった  
らどうする気なのですか?」

ペガサス「……え?」

「あ、いえ……それほど言うなら素晴らしいお考えをお持ちなのかと  
……私も長い間、冒険者をしていましたが勇者様がここにいる皆を安  
全に戦える作戦をお考えなら私も今後習おうかなと思ったのです  
が……」

ペガサス「え、いや……そのお……」

「え、まさか適当に言ったとかはありませんよね?」

うわあ……

あの筋肉隆々の冒険者……よほど勇者が嫌いになったのか言葉に  
棘を感じる

「おい! 貴様! 勇者様にその言葉は何だ!!」

「訂正しろ!!」

「いえ、私は気になって聞いただけなので……それに勇者様がこの作  
戦より素晴らしい作戦があるなら、それを実行すればみんな無事に帰  
れますが?」

護衛の魔法使いたちが問い詰めるが平気な顔で答える

……が、ここで勇者のほうも我慢の限界が来たんだろう

ペガサス「わかった! わかったわ!! 行けばいいんだろう! 行  
けば!!」

「おお！ 勇者様！ どうするんですか!!」

ペガサス「俺、一人で十分だ！ あんなスライム…屁ですらないわ!!」

ノエル「だ、ダメですよ！ 勇者様！ 怪我をしちゃう!!」

こんな糞でも心配してあげるノエルさん、マジ天使

ペガサス「大丈夫だよノエルちゃん!! 絶対に勝ってくるから!!」

そう豪語すると勇者は一人でボスの部屋に入っていった

ペガサス（この戦いが終わったら、俺はノエルちゃんに告白するんだ!!）

フラグ「お？呼んだ？」

ちなみに勇者の金ぴか鎧は先ほどのミミック戦で完全にお釈迦になっちゃったので下半身が裸だった（その時ノエルに助けを求めようとノエルに近づいたら余りにも気持ち悪かったのかノエルの綺麗なお尻が勇者の腹に決まった）

今は護衛の鎧を拝借（という名の強奪）している。

ペガサス「うおおおおお！名誉挽回だ!!」

勇者は剣を抜き取り攻撃を開始する。

キング「ッ!!」

キング・スライムも気配に気が付いたのか自身の体をぶよぶよ動かしている。

カキカキ

【ねえ、護衛さん】

【ああ？ なんだ？】

カキカキ

【護衛なら勇者に断られてもついていくって思ったけど行かないの？】

【はあ？ んなわけないだろ？ なんであの糞勇者を守らないといけん？】

カキカキ

【糞勇者って…まさか護衛さんって勇者嫌いなんですか？】

【…本人がいないこそ言えるが…ここにいる全員は勇者のことを

失望している奴らだ」

カキカキ

「え、でも勇者のことめっちゃ褒めてましたよね？」

「あんなの社交辞令で嘘に決まってる」

「どうやら護衛の中でも勇者のことを嫌っている奴がいるらしい。」

「……実は俺には妻がいたんだ。毎朝おはようって言って城に警備しに行く俺にいつてらっしやいって言うってくれる俺にとって運命の人なんだ……だけど勇者が現れてすべて変わった。勇者は国中の最も若く美人な女性を連れて来いって命令を出した……しかも既婚者でも……だ」

あゝ……そういえば城に侵入した時に馬車で運ばれていく女性を見たな。

「つてか既婚者でさえ奪うのかよアイツ？ 最低じゃん……」

「招集命令が来た時に見た妻は泣いていたが最初は拒否したが勇者から勇者法で絶対命令が出されてしまったんだ……そして後日、城に行ったら俺の妻がほぼ裸みたいな服を着せられて勇者の召使をされていたんだ！……そんなときの俺は無力な自分が許せなかったよ」

カキカキ

「え、なら……首相に訴えればいいじゃないですか？」

「……なあ、勇者はどうやって降臨なされたのか知っているか？」

カキカキ

「え、知りません……でも確か勇者が降臨されるときってミール聖教国が予言を発表するはずですよね？」

「ああ……本来はそのはずなんだが実際は違うんだ」

カキカキ

【違うつて？】

「そういえば、前に城に入った時も勇者の降臨について詳しく書かれていなかったもんな？」

「……本来はミール聖教国が予言して降臨するが……俺たちは禁呪をしたんだ」

カキカキ



【禁呪!? 確かそれって世界中で使用が禁止されている魔法ですか!?】  
禁呪とは生命を糧に発動する魔法で、そのあまりの残忍さに世界中から禁止されている。

おいおい……なんでそれについては書かれていなかったんだよ。

「ああ、あの勇者を召喚した時に生贄で奴隷を1000人ほど捧げようと今の首相が言ったんだ……幹部だけで秘密裏の計画で下っ端には何も言っていないんだ。そして、禁呪を実行してあの勇者が誕生したんだ……まあ、簡単に言ったらあの勇者は偽物だ」

……もしかして前にロリ神が言っていた変な穴ってコレのことか？

カキカキ

【な、なら世界中に告発すれば……】

「……それができていたなら、もうしている……いいか？ 世界中は勇者が降臨して喜んでいいる。そんな中、勇者を偽物だという奴が居たら信じると思うか？ 精々信じるのはミール聖教国だが今回、予言を外したから信用性がない」

カキカキ

【でもなんで俺に?】

「別に誰でもよかったからだ。どうせ言ったって頭がおかしいって言われるからな……ははは……はあ、妻に会いたい」

そう護衛からの真実を聞いていた瞬間

ボス「バオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

ペガサス「は、はなせええええええ!!」

偽勇者の声が聞こえてきたので、ふと見てみると

バコオ!!

ドガア!!

アーク（わーお、痛そう）



ボス「っ!？」

ペガサス「はっはっは! どうだ心ところてん 太野郎!!」

神様特典の力で威力が上がり、前にクロエが使った「インフェルノ」より大きな爆発が起こった

ペガサス「ほら! モウいっちょ!!」

ドガアアアアアアアアアアアアアアアアア!!

ペガサス「弱い! 俺にとっては弱すぎる!!」

このままいけば勝てると思ったのか調子に乗り始める勇者（フラグ：また仕事か?）

だが、現実はそんなに甘くない

ボス（ぬちゃぬちゃ……）

突如、ボス・スライムがうごうご……と動き始めた

ペガサス「はっはっは!! 苦しいだろう! 苦しいだろう!!」

炎魔法で燃やされていくボス・スライムは自身の体を凝縮され

どばあ!!

体の一部を移動させ固くして大楯にした

ペガサス「っは! そんなの破壊してくれるわ!!」

それを見た勇者は先ほどと同じ炎魔法「ファイヤーボール」を連発していった

アーク（まさか……あの勇者、魔法が下手糞なのか?）

さつきから同じ魔法しか使っていない。

多分だが、今までずっと神様特典に依存していたからうまく使えないようだ。

しかし、離れてみているから一つわかったことがあった。

アーク（ん? なんだあの赤い球体?）

勇者がキングの盾に魔法をぶつけていくたびに盾のある反対側から少しずつ赤い球体が出てきた

「ッ!! 勇者様! コアです!! ボスの背中にコアができました!!」

冒険者の一人も気が付いたのか勇者に教える。  
なるほど……セリフ的にもあれが弱点か？

しかし、当の勇者は

ペガサス「くははははは!!どうしたどうした!!反撃がないぞお!!ちびったのかあ!!」

先ほどのミミックの時は「シニタクナイ!」と言った勇者はどこに行っただのやら？

一方的に叩く《ワンサイドゲーム》のが楽しいのか全く聞いていなかった

「なあ、あの体の一部で作った……盾なんだが……なんか本体の体の色より輝いてないか？」

「……本当だ……しかもあんなにも大爆発を受けているのに全く傷がない」

そして……

ボス「ぼおおおおおおお………」

ボス・スライムの体は少しずつ小さくなっていき……

ボシユウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ!!

「うわ!?なんだ!」

突如、ボス・スライムは体から大量の霧を発生させた。

その量はとてつもなく俺たちが居る入り口まで来たほど……

「ツ!?!(っ)っ(っ)っ(っ)っ(っ)っ!?! みんな!吸うな!毒霧だ!!」

一番前にいた筋肉隆々の冒険者が吸ってしまったそうで咳をしはじめた。

それを聞いた冒険者たちは慌てて口と鼻を抑えて吸わないようにした

「マジかよ!?! あいつ、酸だけじゃなくて毒も出せるのかよ!?!」

ノエル「こほこほ!?! ど、毒状態になった人はいますか!?!」



勇者を助けるために救助役を出そうとするが誰もいない

まあ、あの勇者だしなあ

ノエル「なら、私が行きます!!」

すると、ノエルが手を上げる。

「え？ノエルさん、行くの？」

ノエル「はい！今そこに苦しんでいる人がいるのに見捨てることはできません!!」

「ノエルさん……」

……やっぱ、教会のシスターだなあ：ノエルは

「だ、だけど……毒は良いかもしれないけどボスはどうするんだい？」

ノエル「……気合で何とかします!!」

あ、ダメだわコレ

このシスター……手を挙げたのは良いけどどうやって助けるのかを考えていなかったな？

……はあ、仕方ない

癪だがこのままだとマジでノエルが行きそうだ。

スツ

カキカキ

【俺が行こう】

ノエル「え？ トオル？」

カキカキ

【そろそろ、運動がしたくなってな】

「い、いいのか？ トオル？」

カキカキ

【別に誰も上げないし、このままこのシスターを行かせるのも嫌なのでね】

そしてボス部屋の入り口に立つ

「ボスはどうする気なんだ!？」

カキカキ

【別に倒してしまっても構わないだろう？】

ついでにノエルに聞いてみる

カキカキ

【ノエル？毒を無効するの魔法つてあつたよな？】

ノエル「は、はい!! でも、中央は毒が濃すぎて10分が限界です

!!」

ふむ、10分か

いけるな

こうして俺はソロでのボス戦に挑むことになった

四十六発目 だんどん!! ボス戦じゃあごらあ!!

さてと……行くか

ボス部屋の前で覚悟を決める。

勇者を救助するかボスを倒すかという選択肢があるが俺はボスを倒すことにした。

カキカキ

【それじゃ、ノエル……お願い】

ノエル「はい！」 数多の神よ、今こそ力を合わせすべての呪いを打ち破らん「エボル」“!!”

ノエルが魔法を唱えると心なしか息がしやすくなった。

ノエル「……でも、一応無効はしますが中心部では約10分が限界です!!」

カキカキ

【了解した】

「……そんじや、見せてもらおうかね？ トオルの実力を？」

あ、そういえば俺ずつと後方でチマチマしてたから見せてないか。

ノエル「トオル……絶対に帰ってきてくださいよ」

ノエルが心配そうに見てくる。

アーク（……悪いね……俺はまだアリスと街に一緒に出る約束があるから死ねないわ）

カキカキ

最悪、最後になるかもしれない言葉をメモ用紙に書いて……

スツ

「え？なんだこの紙？」

近くにいた冒険者の一人に渡してボス部屋に突入した

「つたく、伝言なら少しは喋ったら……え？」





斬!!

ボス「ツ!?!」

自身の背後を何かが切り裂いた。

そこにいたのは

アーク(……やっぱ、無理か)

先ほどの人間だった。

手に持っている刃物を見つめ、振り払いこちらを睨む

アーク(……この酸……任意で出しているのかっと思っただけで攻撃してみたが全く意味がなかったな)

手に持っているマチェエーテにボスの体液が付いたので振って落とす。

確か、冒険者曰くスライムの弱点はコアだったはず……恐らくコアは体内の中心……だがこのマテーチェエは奴のコアを切り裂くのは困難だな。

どうするか考えるが

ボス「ブモオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

アーク(おっと)(パシユツ)

ボス・スライムが再び斧で攻撃するが

ボス「ツ!?!」

アーク(いやいや……やっぱ便利だなこの能力)

ボスが周りを見渡すとまた背後にアークがいた

アーク(うくん?……マテーチェエでも無理なら……これしかないか)

ちらりと勇者のほうを見るが今はピタリとも動いておらず静かにしていた

アーク(……使うか)

そしてマテーチェエを腰の鞘に戻し、手を合わせると……

ヒュオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……

手の中からアサルトライフルが出てきた

アーク(うん……やっぱどういう仕組みだよこれ？ 質量保存の法則を無視してない？)

手の中にできたFN SCAR—H Mk. 17を見ながら疑問に思う

アーク(……今度オタクコンに聞いてみよ)

カチツ

セーフティを外し構える………が

(パシユツ)

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!

アーク(おいおい!! せっかく人生初めての实銃を握るんだからも少し待っててくれよ!?)

魔物の習性のせいかな俺を集中的に狙ってくるボス・スライム。

アーク(さてと………物は試しだ、頼むぜSCAR!!)

そして頼もしい相棒を構え……

ズドドドドドドドドドドド!!

SCARから放たれた7, 62×51mmの弾がボス・スライムの体に入っていく………

ボス「ぶ、ブモオオオオオ!?」

7, 62弾は5, 56より威力があるためスライムの中を泳ぐように貫いていき肉(スライム部分)を引き裂いていった

初めてのダメージに喜びたいがダメージを受けたボス・スライムは怒り暴れだした

俺に向けて体を触手に変えて叩きつけてくるが

パシユツ

一つも当たらなかつた

アーク(やっぱ、スカルズの高速移動ってすごいな)

先ほどから一回も攻撃を受けてないのは高速移動で避けているからだ。

アーク（一応ダメージは与えたが……コアまではダメージ入ってないなアレ）

SCARでコアを目標に撃ったが当たっている気がしなかった。

アーク（あれは途中で酸で溶かされたのか？）

ガシヨ

カチャ

慣れた手つきでリロードを済ませて再度構え……

ズドドドドドドドドドドドド!!

再び攻撃する……が今度のボスの反応は違い。

カカカカカカカン!!

アーク（まあ、防ぐわな）

勇者の時に使った硬化した盾で防がれた。

盾に銃弾がぶつかった瞬間、銃弾はつぶれてしまい地面に落ちて行った。

アーク（もしかしてミスリルより硬いのか？）

前にD－w a k e rで鎧を撃ちぬいた時があっただがあれより硬い感じがする。

まだ弾があるマガジンを外し新しいマガジンを薬室に叩きこむ。

アーク（だが、ボスに俺の脅威であることを示せたはず……なら、こつからはスピード勝負だな）

足に力を入れる。

パシユツ!!

ボス「ブモオオオオオ!!」

ボス・スライムも一方的に攻撃されるのに苛立ったのか攻撃をする触手を増やし攻撃をするがスカルズの高速移動で難なく避けられて



小さく……人の赤子よりさらに小さくなっていった。

アーク（やべえ!?!）

アークもオセロットやヴェノムと訓練したせいか勘が当たるようになり、咄嗟にトリガーを引くのをやめた。

……そして

ズバアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!

スライムの体から大量の棘が出てきた。

棘は壁や天井、地面に粉々になるくらい勢いよく刺さり粉碎していった。

棘はボス部屋全体に広がり、アークも巻き込まれてしまった………  
が

ガキガキ……

壁に刺さった一本の棘が震えだし

バキヤン!!

アーク「はあ……はあ……はあ……」

棘を粉碎しめり込んだ壁から出てきたのはアークだった。

アーク（あぶねえ……咄嗟に「覆いつくすもの」で硬化していなかったら今頃ハチの巣になってた……）

スカルズの硬化能力を解きながら地面に降り立つアーク。

アーク（SCARは……あく……ぶっ壊れちまってらあ）

持っていたSCARを見ると銃身が大きく曲がり薬室部分も丸見えになっていた。

さて、どうするか

メイン武器が壊れちなつたがサブに変えたいが  
ボス「ブモオオオオオオオオオオオ!!」

まあ、暇をくれませんよね!!

急いでその場から高速移動で離れる。

体をボロボロにされたボス・スライムは決してアークを生かしては  
返さんと言わんばかりに攻撃を続ける。

触手が斧や剣状に変わりアークに雨のように振り下ろしていく。

アーク(クソ! 攻撃は当たらないけど此方からの攻撃手段がないか  
ら決着がつけられない!!)

このボス……体は酸でできていて溶かさるし、触手を固くして盾も  
できて攻撃にも使える

あれ? このボス……めっちゃ強くね?

半ば絶望しかけているがあきらめるわけにはいかない。

だがどうやって………ん?

ふと、気になったことがあった

アイツの体は酸でできてるよな?

じゃあ、これってなんだ?

そう思い見たのは……

コロン

ボス・スライムの棘に一部だった

アーク(奴の体は酸で鉄を瞬時に溶かされてしまう……だが、この  
棘は破壊できた)

硬化して脱出するために無意識で壊したがヒントになったな。

雨のように降り注ぐ触手を高速移動で避けていくが

ザシユツ!!

アーク(痛!?)

ボスの触手の一本が頬の皮を削がした。

一応、硬化はしておいたが固くなったスカルズの肌にダメージを与えるほどの威力だった。

アーク（しかも狙いがよくなってきてる!?!）

少しずつだが当たる触手の数は増え、当たる場所も心臓などの急所を狙ってきている

アーク（時間がないな!）

通知さん!ボスの棘の成分の解析とかできる!?

ピロン♪

通知:マザーベースにいる研究開発班ができると思いますが時間は少々かかります

アーク(おK!詳しくはいいから、現状を打破できる情報をくれ!)  
さて、ここからは避けゲーだな。

そう思い足に力を溜めt(ピロン♪)…………え?

通知:解析完了しました

早!?

今さつき頼んだばかりよね!?

通知…………「あなたに死なれたら困るので!!」とスタッフが意気込んでいました

あ、はい

それで?

通知:ボス・スライムの体は50%が未知の物質、30%が水分、20%は超高濃度のミスリルです



ミスリル!?

ミスリルってあの軽くて硬いあれ!?

でも、ボスの体は酸でできているから溶けるはずじゃ？

通知：はい、研究開発班によると「50%の未知の物質の中に絶対に酸化するのを防ぐ物質があるらしく、それを使って盾や攻撃に使っておりミスリルがあるおかげであの巨体の重量でもつぶれない」そうです

何それ欲しい!?

あ、でも確かに怪獣とかあの巨体を支えるには下半身がデカくないや無理って聞いたことがあつたな？

通知：つまりどうにかしてミスリルを破壊すればボスの行動パターンが抑制されコアがむき出しになると思います……ちなみに未知の物質はすぐに消えてしまいました

了解!!

だったら!!

ずっとボスの周りをグルグル回って回避していたが急停止した

ボス「ツ!!」

ボスも今までしなかった急にアークが止まったという行動パターンを見た瞬間、チャンスと思い触手を全部集め中に自身の体の一部であるミスリルを大量に集め巨大なハンマーに姿を変えさせた。

アーク（来た!!）

巨大なハンマーが振り降ろされる瞬間、俺は避けるのではなくあえてボスに突撃するため前に飛んだ。

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!





## 四十七発目 だんどん!! 出口!!

アーク（ふう……やったか）

ボス部屋の中央で俺は立っていた。

アーク（派手にやったなあ）

入ったときはなんともなかったが戦闘後じゃ、地面は削れ壁は抉られ戦闘の激しさを物語っていた。

アーク（このボス……めっちゃ頭がよくて強かったな……）

するとボスを倒したおかげか毒霧も徐々に薄くなっていた。

以前のポイント 2435

獲得（ボス・スライム討伐） 800

合計ポイント 3235

アーク（ふい……前に戦った魔人並みに強かったな……すまんな、罪は特にないが倒してしまって……成仏してくれよ）

パキパキ……と、硬化を解き、ボス・スライムの亡骸を見ていたが

モゾモゾ

アーク（ん？なんか今動いた………ツ!?)

ボス・スライムの体が少し動いた瞬間、反射的に目の前に岩を出現させた……すると

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

ボス・スライムは最後に一太刀をと自爆をした。

アーク（あつぶね……岩出さなかったら爆発に巻き込まれてた）

ボス・スライムが自爆する時、体の一部も辺りに飛び散らせているのでじゅうううう……と音を立てて溶けて行っている。

咄嗟に出せたから助かったが、もう一度やれと言われても無理だ。

ノエル「トオル!! 大丈夫ですか!?!」  
アーク(お、ノエル)

まだ少し毒霧が残っているにも関わらずノエルが今では部屋の主のいないボス部屋に入ってきた。

あと、ノエルにスカルズの姿は見せたくないなのでレインコートを被りなおす。

ノエル「大丈夫ですか!?! どこか怪我は!?!」  
カキカキ

【ないない、無傷だ】

ノエル「本当ですか!?! やっぱりどこか痛んできるとか!?!」  
カキカキ

【いや、だからないって!?!】

遠足に行くとき忘れ物がないか確認する母親か!?!

大丈夫だとメモに書いて伝えているのにノエルはそんなの気にせずアークの体をぺたぺた触る。

「おーい! 大丈夫かあ!」

すると他の冒険者もゾロゾロとやってきた

「すげえな!! お前さん……一人でボスを倒したのか!?!……しかも本当に7分で倒した!?!」

「おいおい!?! トオル……お前……何もんだ!?!」

ボスと戦った後の戦場を見て驚愕する

カキカキ

【誰って……ただの人間だ】

「んなボスをソロで倒して無傷な上に平然としている人間がいるかよ!?!」

「それに俺らは毒霧で見えなかったが爆発音がたくさん聞こえたぞ!!

あれってトオルのか!?!」

カキカキ

【んまあ……そうだ】

「すげえ! トオルって魔法使いなのか!?!」

カキカキ

【……………まあ、そんな感じだ】

それから冒険者たちに質問攻めにあつた。  
まさか、俺の世界の武器を使ったと言えないので誤魔化し続けた。

「そんじゃ、お楽しみのお宝だ!!」

あ、そうだったな。

ボスを倒したら宝が手に入るんだっけ？

カキカキ

【探すのは良いんだが……………その宝ってどこにあるんだ?】

「確か聞いたところによると倒したら扉が開いて宝が出てくるって聞いたことがあるぞ!!」

カキカキ

【……………なあ、一つ良いか?】

その扉ってどこにあんの?」

「いや、どこって……………どこだ?」

「言われてみればどこにもないな?」

ボス・スライムと戦った後だから思ったけどこの部屋、ほぼ円形状しどこもかしこも岩や結晶で囲まれていた。

「え、まさかあのスライム……………ボスじゃない説?」

え、待って

あれより強い敵とかいるの? (絶望)

「おいおい!?」 だったらもう無理だぜ!」

「ま、待った!! もしかして隠し扉があるかも!!」  
慌てだした冒険者たちは索敵魔法で探したりして扉を探し始めた。  
すると

ノエル「トオル! この結晶って何ですか?」

ノエルが不思議そうに見ていたのはボス部屋にあった結晶だった。  
カキカキ

【さあ? でも鏡みたいにきれいだな?】

ノエル「はい! まるでミスリルみたいですね!!」

カキカキ

【いやいや、岩みたいにデカいんだぞ? これほど大きなミスリルがあつたらいくらになるんだ?】

俺とノエルの目の前には見上げるほどの大きな結晶があり鏡みたいに輝いていた。

「ん? トオル? ノエルさん? どうしたんですか?」

ノエル「あ! さっきの魔法使いさん!! 実はこれなんですけど!!」

「お? ……え、待てこれ……」

オリハルコンじゃね?」

え? オリハルコン?

ピロン♪

通知: 説明じゃおらあ!!

オリハルコン

ミスリルと同じくらい希少で高価な鉱石  
主に武器の飾りつけに使われる

ノエル「え、ええええ!? オリハルコンってすごく高価な石じゃないですか!?!」

ノエル、石って……

「あ、ああ!! この岩…全部オリハルコンじゃねえか!?!」  
すると…

「おい! こっちはダイヤモンドだぞ!!」

「こっちはプラチナだ!!」

はあ!?

え、俺が戦った場所って宝石だらけだったの!?

どうやらボス部屋にあった結晶はすべて宝石らしい。(ちなみに戦ってたときに少しボス・スライムの酸で消えたのは言わなかった)

魔法使い曰く

「どうやら、あのボス・スライムが長い年月をかけてそこら辺の鉱石をこしらえて体内で貯めて、この部屋に植え付けてたらしい」

カキカキ

「え、じゃあこの宝石たちが宝ですか?」

「そういうことになるな!! よっしゃ!! 掘るぜ!!」

そこからはとうとうとまるで前世で見た近所のおばちゃんたちが格安セールで戦うような感じで冒険者たちがその辺を掘り始めた。

アーク(なんか……この光景をボス・スライムが見たら泣きそう)

数分後……

「しゃおらあ!! めっちゃ稼いだぜ!!」

採掘を終えた冒険者の手には大量の金や希少金属が握られていた。



アーク（まあ、こいつらも生活するためにしているんだから仕方ないことか……）

「うっし！ トオル！ お前の分だ!!」

素晴らしい腕いっっぱいに抱えた鉱石を俺に渡してきた。

カキカキ

「いやいやいや!? 多すぎますって!? てかなんで俺だけこんなに多いんですか!?!」

「なんでって……今回のボス戦で一番確約したのはトオルじゃないか!!」

「そうだそうだ!! 俺たちなんて戦ってすらないんだぞ!!」

「一番の功績者が報酬をもらわなくてどうする!!」

……どうやら断つても意味がなさそうだ。

カキカキ

【……ではありがたくいただきます】

あ、ついでにSCARの修理もしておくか

以前のポイント 3235

獲得 3000

消費

修理 SCAR 25

弾薬補給 SCAR 1

合計ポイント 6209

「ほれ！ ノエルさんも!!」

ノエル「え？ いえいえいえいえ!! 私は後ろのほうで皆様の治療くらいしかしていませんし……」

「いいからいいから!! これは治療代として受け取ってくれ!!」

ノエル「え、えっと……私はこれでも聖職者なので……直接お金の受け取りは控えるよう言われているので……」

「ぬうそうかい……」

それからはとうとうと入る前のボス部屋は結晶がたくさんあって幻

想的であつたが今じやただの洞窟になつてしまった。

「さてと！ 帰るか!!」

「」「」おおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おお!!」「」「」

「酒ジャア!!」

「宴会じゃあ!!」

よほど楽しみだつたのか冒険者たちは喜んでいる。

ノエル「あはは……皆さんうれしそうですね」

カキカキ

【せやな……しかし……】

ノエル「どうしたんですか？」

皆、喜んでいるかもしれないが……誰か忘れているんだよなあ？

なんだっけなあ？ 俺って確かボスを倒すついでに何かやること  
があつたはずなんだがなあ？

「んじや帰るぞ!!」

ま、気のせいか!!

背中に大量の鉱石を背負い俺たちはダンジョンを出ることになつ  
た……

「マテ、キサマラアアアアアアアアアアアアアアア!!」

アーク（っ!?!生き残りか!?!）



トな能力だな

どんな怪我でも治せるしなくなった部位まで生えるし状態異常も完治してしまう

逆に残酷なスキルでもあつて……先ほどのスライムでもわかったが毒に漬からせておくと毒になるが完治してまた毒になるという無限ループになる。

ペガサス「げほげほ……く、くそ!!あのスライムめえ!!この俺が叩き潰してやる!!どこだ!!」

「ゆ、勇者様そのお……」

「もうすでにボスは倒されました……」

ペガサス「はあ!?ふざけるな!!俺の武勇伝を帰ったら国中に自慢してやろうって思ったのによ!!」

(いや、しらんがな)

(てか、そんな遊び感覚で来るなよ……こちとら命がけで戦ってたぞ)

ペガサス「まあ、いい……誰が倒した?」

「あ、えつと……ノエルさんの付き添いのトオルです」

ペガサス「ほう?まさか貴様が倒したとはな?感心したぞ?」

アーク(あんたに感心されても嬉しくない件について)

ペガサス「んで?他に誰が? ……あ!わかったぞ!ノエルちゃんだな!!」

「あ、えつと……申し訳にくいのですが……」

「トオルが単独で倒しました」

ペガサス「へえ……はあ!」

あまりにも信頼性のない言葉を聞いたせいかわ愕した顔でこちらを見てくる勇者

何度もノエルと俺を交互に見ながら護衛に聞くが本当のことだ。

ペガサス「そ、そうか! よくやったな! ロール!! 「勇者様、トオルです」……トオル!! 大儀であった!!」

いや、いつからお前は王様になった。

ペガサス「あと……少しいいか?」

なんだ？

ペガサス「諸君！君たちは先に帰ってくれ!! 私はいと少し話がある!!」

すると、勇者は俺を連れて冒険者の集団から少し離れたところに連れていかれた。

「なんだろうな？ 勇者の奴？」

「もしかして……今回の手柄を全部俺にくれ!!……とか？」

「いやまさかな……」

勇者に言われた冒険者は言われたとおりに出口に向かって歩き出しました。

ペガサス「なあ、お前！ お前が一人で倒したのか!？」

カキカキ

【ああ、そうだが?】

ペガサス「……お前を俺のパーティーに加えてやる。その代わりに……今回の手柄を俺にくれ!!」

え、なんそれ？

俺にメリツトが皆無やん。

カキカキ

【なんで俺なんですか?】

ペガサス「お、お前が一緒だと心強いしノエルちゃんが一緒……じゃなくて、お前も一緒なら俺の夢を実現できそうだからな!!」

カキカキ

【断るといふ選択肢は?】

ペガサス「はあ!?! お、お前……嫌なのか!?! 俺と一緒に来れば女も富も名誉も手に入るんだぞ!?!」

いや、お前と一緒に名誉はいらん

それに俺はアリスの隣がいい  
あいつの隣のほうが毎日が楽しい  
ペガサス「いいのか!？」  
はあ、これ以上一緒にいたら面倒だ  
あと、こいつの息って臭い  
っていうことでおねんねの時間だ。

カシヤ

ペガサス「……え？銃？」

レインコートの裾からMk. 22を取り出し…

アーク（寝とけ）

パシュ!!

ペガサス「な……なんで……眠く………ぐう………」

アーク（うっし、寝たか）

冒険者たちに気づかれないように勇者を抱きかかえズルズルと岩の後ろに隠れる。

アーク（あ、ついでにオセロットに教わった暗示をしてみるか）

前に人型を手に入れるときに教わった暗示をしてみる……まあ、まだうまくいかず一時的なものなんだが

あと暗示と催眠の違いだが暗示が他者から誘導されることで催眠は暗示にかかりやすい状態のことらしい

10分後

アーク（よし、完了）

オセロットに言われたとおりの方法でやったがうまくいつている

のを願うばかりだ

まだ俺は簡単な奴しかできないけど……ヴェノムに暗示をかけたオセロットってすげえな

ペガサス「あれ？俺はいつたい？」

カキカキ

【あ、起きましたか？勇者様？】

ペガサス「あ、トオルだっけか？俺は一体？」

カキカキ

【勇者様は俺に用があつて話したんですけど……覚えてます？】

ペガサス「あ、ああ!!確か、俺はお前に友情を結ぼうと……」

カキカキ

【はいそうです!!……ほら、みんなが待つてますよ!!】

ペガサス「ああ！ そうだな！ 早くノエルちゃんに会いたい

……あれ？なあ？……ボスってどうなった？……あと、お前……

なんか……俺を（ゴキヤア!!）」

あぶねえ!?

あと少しで思い出させるところだった……うくん、暗示って難し

いな……あと勇者を気絶させるために後頭部を鋼鉄化させた腕で

殴った時、鳴ってはいけない音が聞こえたが勇者だし大丈夫だろう

さて、暗示再開だ

勇者に暗示中

しばらくお待ちください

アーク（はいはい……勇者さん？「俺はみんなと力を合わせてボスを倒した……が誰が最後に止めを刺したのかわからなかったので

パーティーに入れるのは諦めた」……復唱して?)

メモ帳に言葉を書いて暗示をかける。

ペガサス「俺はみんなと力を合わせてボスを倒した…が誰が最後に止めを刺したのかわからなかったのでパーティーに入れるのは諦めた……」

アーク(おK? んじや、帰ったら護衛のみんなには「こいつとは友達関係を結んできた」……はい、復唱?)

ペガサス「こいつとは友達関係を結んできた……」

アーク(んじや、戻りますか)

勇者と帰ったところには冒険者はおらず勇者の護衛とノエルがいた。  
カキカキ

【なんだ? ノエル? 戻らなかったのか?】

ノエル「はい! トオルさんと一緒に帰りかつたので!!」

カキカキ

【そうか……ありがとうな】

ノエル「はい!」

勇者は何事もなかった顔で護衛と一緒に帰り、俺もノエルと一緒に帰ることになった。

本当は暗示で勇者の記憶とか性格を変えたかったが俺にはまだ無理だった。

アーク(ん? なんでこれ?)

勇者が護衛たちに何かあったのかと聞かれている間にアークは何かを見つけた。

そこにあつたのはソフトバレーボールくらいのサイズのスライムの塊だった。

アーク(スライム? まさかまだ悪あがきを?)

どうやら護衛たちは気が付いていないようだ。

これを勇者が見て暗示が解かれても困るので処分しようとしたが



……

ぽしやあ……

アーク（おう？）

スライムが消えて出てきたのは

アーク（宝石？）

出てきたのは宝石みたいだが不思議な色をした石だった。

アーク（うーん？……通知さん？ これなんかわかる？ 見た目的

にミスリルでもないオリハルコンでもないし？）

ピロン♪

通知：解析中……解析完了、この鉱石には大きく分けて四つの成分が含まれています

え？何が入ったの？

通知：超々高濃度オリハルコン、超々高濃度ミスリル、超々高濃度魔法石、超々高濃度ヒヒイロカネです」

わあおすげ

これ売ったらめっちゃ金になるんやね？

ピロン♪

通知：しかし武器にするのも悪くないですよ？

え、マジ？

通知：はい、資金が掛からない武器を持つのもいいと思いますよ？





ノエル「…………でも見たんですね？」  
カキカキ

【いや、見ていない】

ノエル「…………でも、私に服を着させたので見ましたよね？」  
カキカキ

【いや、本当n「見ましたよね？」】

アーク（…………）

え？そのあと？

ノエル…………いや、ノエルさんに雷魔法で制裁を受けた後、地面に頭を擦りつけ土下座を続けながら帰りました。

## 四十八発目 出国!!

ダンジョンから出た後、勇者はダンジョンの出入り口で待っていた民衆に盛大なお迎えを受けて俺らは蚊帳の外になったので自然と解散になった。

ノエル「……………」

アーク（……………」

カキカキ

【あ、あのう……ノエルさん？】

ノエル「……なんですか？」

カキカキ

【俺はいつまで土下座を？】

実を言うとダンジョンの途中で顔を上げようとしたらノエルに睨まれてすぐ頭を下にした。

……うんまあ、つまりボス部屋から出口までずっと土下座のまま移動した。

ノエル「……………」別にもう上げてもいいんですよ？」

あ、許してくれた

やっぱり聖職者は心が広いんだな……

ノエル「その代わり……………」

あなたがその贖罪から目を背け続けそのうち忘れる大罪人として認識を改めて接します」

カキカキ!!

【全力で地面の中に頭を入れさせていただきます!!】

うん、怖いわ

普通にまだ怒ってるわ!!

笑顔でこちらを見てるけど全く目が笑ってない!?

ノエル「……………ぷはははは!! 嘘ですよ!! そんなに真剣に受け止めないでください!!」

カキカキ

【え? 怒ってないの?】

ノエル「……………確かに、トオル様は私の……………そのお……………見てしまいましたが、あの行動がなければ私は羞恥のあまり自殺していたかもしれませんね」

いや、自殺って…………

ノエル「あ、でも……………責任は取ってくださいいね?」

あ、まだ怒ってらあ!! / ( ^ o ^ ) \

それからはという土下座は許してくれたが絶対に誰にも言わないという約束を結んで許してくれた。

ノエル「ただいまです!! マザー!!」

「は! ノエル! お帰りなさい! 怪我は!？」

ノエル「大丈夫です!! トオル様を守ってくれましたから!!」

「まあ、そうですね! トオル様、ノエルを守ってくださいありがとうございます!」

カキカキ

【いえいえ、俺はただノエルを守っただけですから】

「そうですね!……………ところでなんでメモ帳に?」

ノエル「あ! そういえばトオル様って風邪でのどを痛めたんだっけ!？」

「そうですね!?! なら、早く薬を…………」

カキカキ

【あ、いえ大丈夫です。部屋に自分の薬があるので】

「遠慮はいいです! もし、無くなったりしたらどうするんですか!?!」

いや、お母さんかよ  
こうして俺はマザーに風邪薬を押し付けられ罪悪感を感じながら  
部屋に戻った。

ガチャ  
ボタン

アーク（ふい〜……疲れた）  
スカルズの姿からサイボーグの姿に戻りべ度に倒れこむ

以前のポイント 6209

開発

オリブドラブ（迷彩服） 1

フルトン回収装置 2

変身

サイボーグ 150

合計ポイント 6056

迷彩服はダンジョン内でノエルに着させた迷彩服だ（作者が入れる  
のを忘れていた）

ちなみにだがオリブドラブとはMGS3の序盤でザ・ボスが着て  
いた迷彩服だ

あれ、結構カッコよくて前世のサバゲーではそっくりな奴作って遊  
んだほどだ

は？ ネイキット（上半身裸）にしなかったのかって？ 殺す気か  
お前ら？

（でも見てみたい）

アーク「ふう……んじや、戻るか」

あ、ちなみにだがボス・スライムが死んだときに出た宝石？ 鉱石

？ はさつき開発したフルトン回収装置でマザーベースに預けてお  
いた。

(フルトン回収装置は諸事情により全てワームホールタイプです)  
久しぶりに声がのどに響くのを感じながらノエルたちが居る聖堂に戻る。

アーク「お待たせしました」

あ、どうやらノエルがマザーとお話し中のようだ。

ノエル「でねでね！ トオルがおっきいスライムに一人で戦ったんです!!」

「まあ……そうですか (引)」

え、なんかマザーに引かれたんだけど

そんなにソロでボス討伐っておかしい……いや、おかしいか

ノエル「それでねそれでね!! 霧で見えませんでしたけどトオル様が

スライムとドドド!! でドカーン!! だったのです!!」

アーク「……ノエル……多分それマザーに伝わってない」

ノエル「あ！ トオル様！ 治ったのですか!!」

アーク「ああ、心配かけたな」

そのあととはというとき刻的にもう夕方なので夕飯を作ることになった

みんなも一緒に作ってみよう!! (正確には第六回だったわ)

材料 (二人前)

豚挽き肉 270g

鶏むね挽き肉 230g

玉ねぎ 1個

パン粉 大きじ8

炭酸水 パン粉がヒタヒタになる量

卵 1個

塩胡椒 適量

ニンニク チューブ2cmくらい

だし醤油 大きじ1

塩麴 大きじ1

作り方

1, 玉ねぎをみじん切りにして、塩胡椒で炒めて冷ます



- 2, 豚、鶏の挽き肉を混ぜ合わせて、塩麴を入れてよく練る。
- 3, ニンニク、だし醤油も入れて更によく混ぜ合わせる
- 4, ①と②と溶き卵を入れて、愛情を入れて混ぜる(愛情は嘘です)
- 5, パン粉の入った器に炭酸水をヒタヒタといれる
- 6, ③を④に入れて混ぜて、フライパンで焼きます
- 7, 少し水を入れて中火で焼く
- 8, 最後にさらに出す瞬間にスライスチーズを上に乗せて完成!!

以前のポイント 6056

生産

豚挽き肉 1

鶏むね挽き肉 1

玉ねぎ 1

パン粉 1

炭酸水 1

卵 1

塩胡椒 1

ニンニク 1

だし醤油 1

塩麴 1

スライスチーズ 1

合計ポイント 6045

てなわけが出来上がったのは

アーク「(パァーン!!)ハンバァアアグ!!」

じゅじゅ…とおいしそうな音を立てながら焼きたてのハンバーグを見る。

あと、これは完全なる料理ネタだが材料に炭酸水が出たのは肉を柔らかくするためであってこれだけで市販の肉が高級肉並みに柔らかくなるのだ!!

あと、肉に小電力の電気を流しても柔らかくなるぞ!!

ノエル「わあ!! おいしそうですね!!」

アーク「うお!? ノエル!」

皿に盛りつけようとしたら隣からノエルが覗き込んできた。

アーク「つたく、危ないだろ? お前のお嬢ちゃん可愛い顔に肉汁が掛かって火傷したらどうする?」

ノエル「お嬢ちゃんじゃありません!! これでも大人です!!」

アーク「はあ……………いいから先に席に着いとけ」

ノエル「はあくい!!」

はあ……………なんかノエル見てたらアリスを思い出すな

アリス……………元気にしてるかなあ?

遠くの国にいる主人のことを心配しながら俺はできたての料理を運んだ。

アーク「ほい、どうぞ」

え、ノエルたちは聖職者だから肉とか大丈夫なのかって?

大丈夫だろ、前世の仏教でも隠れて肉を食べてたらしいし

「ほほう……………これはこれは……………なんともおいしそうですね」

ノエル「おいしそうですねです!!」

アーク「それはよかった」

マザーとノエルはおいしそうに食べる。

アーク(……………そろそろかな)

実は俺は料理を作っている中でとあることに決心した。

言うタイミングを探していたが今だな

アーク「マザー……………ノエル……………少しいいか?」

「はい?…どうかされましたか?」

ノエル「なんですかとオル様? トオル様が改まって、そんなにかつこよくないですよ?」

アーク「ちよ、ノエルおま……………ご、ごほん……………実は俺、明日ここを出ようと思います」

カラン……………

すると先ほどまで楽しかった空間は氷点下に突き落とされた  
ノエル「え……トオル様……それは……本当ですか？」

アーク「はい……俺の旅の目的は……勇者……じゃなくて……  
この頭ハダゲの呪いを解くための旅なので」

言っておくが俺の本当の目的は勇者の戦力を見るためである。

今回のダンジョン攻略で勇者の腰抜け度や能力の応用の下手度も  
知れた……あまり敵地には長居はしたくないので明日、アーハム帝国  
に戻るつもりだ。

ノエル「……あの……トオル……別に止めるつもりではないんですが  
……もう少しここにいてもいいのでは？」

アーク「あー……別にまだここにいてもいいんだが……俺は旅人だ  
しな。教会で居候なんて少し罰当たりだしな」

ノエル「ぬう……そうですか……」

アーク「はあ、安心しろ別に永遠に会えないってわけじゃないから  
落ち込んでいるノエルに言うがそれでも落ち込んでいる。

「………いつ出発ですか？」

アーク「あ、えつと……もしよろしければ今夜中にでも」

「そうですね………なら、準備しなければ」

するとマザーは立ち上がり奥に何かを取りに行った。

「あった……トオル様………これを」

アーク「これは？」

マザーが持ってきたのは手のひらサイズに金色に光る十字架だっ  
た。

「これは私からのささやかなプレゼントです」

アーク「え、でも……」

「あ、安心してください。別に宗教勧誘で渡した物ではないので……  
これはトオル様のこれからも無事に、そして幸福が降り立つよう神の  
御祈りを捧げた物です」

アーク「あ、それはありがとうございます」

でも俺、死神って呼ばれているけどいいんかいな？

アーク「それでは、お世話になりました」

ノエル「ううう……トオル……絶対に帰ってきてくださいよ？」

アーク「わかったわかった……ってかなんだよその言葉……俺は戦場に行く兵士か」

「しかし……最近では例のバケモノがアーハム帝国に囚われているが脱走の機会を伺っている……と聞いたので」

バケモノ？

ってかアーハム帝国にいたっけ？

アーク「バケモノって？」

「歌う死神ですよ」

アーク「あ……聞いたことがありますね」

「今年の初めにアーリス・フォン・アーハム<sup>アリス・フォン・アーハム</sup>の第二皇女が召喚して、その半年くらいたった後に冤罪をかけられてエルフを虐殺した悪魔らしいので……とても怖いです……おかげでノエルを一人で外に出すのが怖くなってしまいました……」

アーク「アハハハ……ソレハサイナンデスネ……」

うん、目の前にいるのが歌う死神本人だて知ったらどうという反応をするんかいな？

……つか俺のせいでノエルを一人で出せないって……過保護やなあ

……

ノエル「もう！ マザー！ 私はもう大人ですから！」

「前にどこかの旅人さんに出会わなかったら一生迷子になりかけてた

のに？」

ノエル「あれは違います！ あれは道が勝手に変わるのが悪いんです!!」

ノエル「……お前にとっては道は生き物か？」

「はあ、まったく……祖国では歌う死神のせいで周辺国に伝染病が流行っているとして「意志ある災禍」とか言われてますし……」

おい待て……殺しならわかるが、なんで伝染病まで俺のせいにする？

アーク「そ、そうですか……まあ、この呪いを解く方法がなかったらこの国に帰ってきますよ」

「そうですか！ 帰って来るのですか！」

ノエル「トオル様！ 絶対に帰ってきてくださいよ！ そしてメルをください!!」

ノエル「……メタルギアMkⅡは俺の一部みたいなものなんだから……」

アーク「わかってるよ……あ、じゃあ……ノエル！ あと一つだけ!!」

ノエル「……はい？」

ノエルの前に立ち、小指を出した

ノエル「これは？」

アーク「これは俺の故郷のおまじないで『指きりげんまん』だ!!」  
ノエル「え、えっと……こうですか？」

ノエルは恐る恐る小指を出し、絡ませた

ノエル「あ、でもコレ……結構楽しいですね」

アーク「だろ？」

こうして俺はノエルと約束をして教会を後にした。

## 四十九発目 帰国

バサビイ共和国から一山ぐらい超えたところ……

キイイイイイ……

一匹の鳥が飛んでいた。

しかし、その鳥は普通ではなかった。

黒い機体に鳥の形をしているが二基のジェットエンジンを載せて翼にミサイルを載せていた。

メタルギアの世界では偵察や爆撃を主にしていたUACV（戦闘無人兵器）……スライダー。

アーク「ふうくん♪ 意外と空も悪くないなあ♪」

そう、正体は我らが主人公 アークだった。

アーク（実は昨日、早く帰りたいから開発したんだが……結構いいな!!）

以前のポイント 6045

開発 スライダー 500

合計ポイント 5545

ちなみに開発した時にチュートリアルがあったが今回はメタルギアキャラは来なかった

バサビイ共和国から出た後、すぐにスライダーに変身し空に飛んだ。

そして、アーラム帝国が見えてきた。

え、飛んでいる途中になんかなかったのかって？　ねえわ、めっちゃ平和だったわ。

アーク「久々に帰ってきたなアーラム帝国」

大して変わってないがそれでも故郷のように懐かしく感じてしま  
う

下ではエルフたちが笑顔に生活している。

そして……

アーク「魔法学園だ!!」

懐かしき魔法学園、俺がこの世界に降り立つてからいろいろと交流があつた魔法学園……

そして、その学園内の一角にある自分の主人が作ってくれたポツンと一軒家な自分の家

アーク「ただいまー!!」

懐かしき我が家兼倉庫の窓から突入し中に入る……が

アーク「おお、全く変わらないn（ドゴオ!!）ごふう!？」

中に入つて雀みたいにピョンピョン飛んで移動していたら、横からタツクルされてしまい倒れこんでしまった。

アーク「痛え……誰だ？　……あ」

アリス「……」

アーク「や、やあ……アリス？」

アリス「……遅かったじゃない」

犯人は主人のアリスで、その手は俺の機体を優しく包んでいた。

アーク「あく……まあ、ごめん」

だいぶご機嫌が斜めなようだ

アリス「アークがいない間、一回しか連絡してないし」

アーク「え、いや……俺、その間……勇者の監視で忙しかったし」

アリス「……でも寝るときとか……少しくらい話してもいいじゃない」

アーク「いや、そんな時は俺はとある教会に居候をしてもらってたからできなかったんだよ」

アリス「ふうくん……教会……シスターとかいた？」

アーク「え、聞く必要あるぞr「いいから言いなさい」……あ、はい」

え、どうしたんだアリス？

目が怖いんだが？

床で俺に抱き着いたままこちらを見てくるアリス  
つてかスライダーって装甲が脆いから結構痛いのである。

アーク「えつと……いたけど？」

アリス「ふうくん……その子……どんな子だった？」

アーク「え？普通の女の子だった」

アリス「詳しく」

アーク「水色の瞳にブロンド色の髪をして、ノエル・スカルツオつて言う女の子」

アリス「あら？ 詳しいじゃない？」

アーク「まあ、勇者の監視の一環で一緒にダンジョン攻略に行くことになったからな」

アリス「へえ……楽しかった？」

アーク「楽しい……まあ、あっちでは比較的楽しかったぞ？」

アリス「……」

アーク「なあ？ どうしたんだ？アリス？ さつきから俺を見て？」

アリス「べつつにー!! ただ、私の大切な使い魔が帰って来るのが遅くて私との約束を忘れたのかなって思っただけですー!!」

アーク「そ、そうか？」

え、待って





以前のポイント 5545  
変身 サイボーグ 150  
生産  
ホットケーキミックス 1  
無塩バター 1  
卵 1  
牛乳 1  
砂糖 1  
バニラエッセンス 1  
強力粉 1  
揚げ油 1  
合計ポイント 5388

アリス「うくん♪ おいしい♪」

クロエ「ああ♡ 体中に糖分が染みていく感じ……最高ですわ♡」  
クロエ、その表現は重症だ。

リン「助手……ずつと思つてたけどお店とか出さないの？ 資金源にもなるからいいと思うけど？」

アーク「うくん……一時期、そう考えていたんだけど……この料理を考えたのは俺じゃないから、有名になる気はないかなあ？」

別に俺は見つけたわけじゃないから料理で無双する気はない

……あと、俺は自分が作つた料理を食べておいしいって言ってくれる人さえいればそれでいいからな

アリス「はあ♪ おいしいかった!!」

クロエ「久しぶりのスイーツ……やはりコレは中毒性がありますね」

いや、俺からしたら何でこの世界はスイーツ文化が発展してないんだよ

そのあとは俺のバサビイ共和国での思い出を語った。

アリス「へえ……デカイスライムを一人で？ スライムだし弱かったじゃない？」

アーク「結構大変だったぞ？ 斬ろうにも酸で溶けて防御もいいし、体内には鉱石があつて固くなるし、あとノエルって子の服が……あ、なんでもない」

リン「ん？ 助手？ 今、何か言いかけた？」

アーク「……いや、気のせいだ」

危ない、危ない……あと少しでもやめてなかったらアリスに殺されるどころだった。

アリス「……」

でも、さつきから見てくるけど……聞こえてない……よな？  
すると……

コンコン

アーク「お？ 誰だ？」

家の扉……は破壊されたので壁からノック音が聞こえたので出てみると

「……クロエ様はいらっしゃいますか？」

アーク「え、はい」

出てみるとそこには鎧を被った男性エルフがいた。

アーク「クロエ？ なんかお前に用があるっぽいぞ？」

クロエ「あら？ 私に？」

クロエは立ち上がり、外に出た行った。

アーク「なんだろうな？」

アリス「アーク……もしかして、何か罪を犯した？」

アーク「してねえわ」

しばらくすると

クロエ「ただいま」

アリス「クロエお姉さま？ どうだったのですか？」

クロエ「えつと……良い件と悪い件の一つずつあるけど、どっちを先に聞きたい？」

アーク「え、じゃあ……悪いほうから」

クロエ「……めんどくさいから良いほうからね」

おいこら、だったらさっきの質問はなんだ

クロエ「まず……はい、アーク」

素晴らしい、目の前にガチャリと置かれた袋の中には

リン「おお……お金」

クロエ「お父様が報酬でだって」

アーク「おう、ありがとう」

以前のポイント 5388

獲得

銀貨2000枚 200000ゴールド 2000ポイント

合計ポイント 7388

アーク「それで？ 悪いほうって？」

クロエ「アーク……悪いけど……悪いけどまたバサビイ共和国に行  
つてくれない？」

ぼくぼくぼく……

ちーん!!

アーク「はあ!」

え、今日帰ってきたんですよ？

クロエ「お父様によると、たった今さっきバサビイ共和国から急遽、  
手紙が来て

アーハム帝国とバサビイ共和国の今後についての会議をしたい

……だそうよ」

ぎっけな!?

今さつき帰ってきてきて正直寝たいのに……勇者あ!! バサビイ共和国うう!! 恨むぞてめえら!!

アリス「え、でも会議ならお父様たちが行くんじゃない?」

クロエ「……バサビイ共和国が狙ったのかわからないけど……その会議の日ね……お父様はミール聖教国に行つて私も補助で行くことになつてるの」

え、それつてつまり……

クロエ「アリス……あなたが会議に出てほしいのよ」

アリス「わ、私!? でも、私……会議とか受けたことないし!?」

クロエ「あ、安心して……話すのは大臣たちに任せるから」

アーク「あ、つまり……アリスは飾り?」

クロエ「……まあ、そうなるわね」

アリス「よ、よかった……私、大人数に見られるのつてあまり好きじゃないもん」

そういや、勇者が来た時……面白いくらい震えてたな

クロエ「それで……アーク……」

アーク「察せたわ……アリスの護衛だろ?」

クロエ「その通りだわ」

はあ……ゆつくりしたいのに

アーク「わかった……いつ、出発?」

クロエ「明日」

アーク「わかった明日n……明日あ!」

労災とか降りないかな?

アリス「でも! 今度は私もアークと一緒にに行けるからいいもん!!」

アーク「いいもんつてアリス……会議だぞ? 国がらみのことだぞ?」

アリス「座つておけばいいんでしょ!! へっちゃらよ!!」ドヤア

ドヤ顔をするが心配しか出ない。

アーク「はあ……わかった準備をしておくよ」

こうして俺は明日に備えて準備を開始した

アーク（あ、そういえばノエルに迷彩服貸したままだったな）

一方、バサビイ共和国のとある場所

「ここか」

「はい、もう間もなく扉が開くそうです」

なぜか郊外にある山にバサビイ共和国の現首相と幹部、大人数の兵士や雇われた人間がいた

「しかし、良いんですか？勇者には秘密にして？」

「はあ、お前はあいつを勇者だと崇めるのか？」

「まさか！あんな豚を勇者だなんて死んでもごめんですね!!」

実を言うと召喚させた首相でさえ勇者には失望していた

本当は軍に入れてエルは魔族とつながっているとかアーラム帝国を手に入れたら好きにしていると言おうとしたが

「飯を汚く食べ、女と遊び、政治にも文句を言ってくる……はあ、これだったんなら使役魔法で奴隷にしておけばよかったな」

「能力もパツとしないものですしね」

「まったくだ……だが、ここさえ手に入れてしまえば勇者にはもう

用済みだ」

そんな会話をしてしている首相と幹部の目の前には……

「それにしても……巨大な扉ですね」

「ああ、材質もただの鉄ではない……」

巨大な鉄の扉があった

「それにしても本当なんですかね？」

「なにがだ？」

「ここが

古代兵器の倉庫だって？」

ことの発端は勇者が召喚される一週間前のことだった

農業を営んでいた農民がある日、大雨が降り山の農場が心配で近くの山で異常はないか山を歩いていると地面に何かの一部が地面から出ていたそうだった

不思議に思って引っこ抜いてみると変な形をした鉄の棒だった

報告では「剣にしては刃がなく、棍棒にしては打撃部が少ない。持っところもイマイチわからなく小さい持ち手のほうには小さなフックがあった」そうだった

農民は不思議に思い村の役所に向かったがそれでもわからなかったので城の役員に見てもらおうと古代兵器だと分かった

古代兵器だと分かった瞬間、農民は浮かれ「売れば金持ちになれる」、「まだまだあるかもしれない」と山に向かい掘り起こしてに行ったら先日のお大豆のおかげか大量に見つかった

小躍りしながら掘っていったらこの巨大な鉄の扉を見つけた

それを知ったバサビイ共和国はすぐさま農民を抹殺して口封じ（可哀そう）をし、秘密裏に採掘しているそうだった

採掘も城には報告せず知っているのは今ここにいる自分と隣にい





「一体なん……………お、おおおおおおおおおおおお  
その先にあつたのは  
!!!!!!」

新品の大量の古代兵器が入ったケースだった

「こ、これって……………すべて古代兵器!?!」

幹部が驚くのも無理はない

数が異常に多く現実の軍隊なら一個大隊分の量があつた

自分が今まで見てきた古代兵器はボロボロで一回使えば壊れる品物だつたがそれが新品で大量にあつた

「これほどの古代兵器があるならアーハムなど世界など……………くははははは!! おい! ここにある古代兵器をすべて持っていけ!!」

青白いケースの中には大量の古代兵器があり、兵士たちは文字がわからなく書かれていた名前を見てないが……………その兵器は

かつての<sup>アメリカ合衆国</sup>大国が開発したアサルトライフル

「XM8」

と書かれていた

「そうですね!! アーハムのエルフどもなど……………ぬ?」

すると幹部の一人が古代兵器のある部屋の中央に何かを見つけた。

「……人間？」

緑色の液体の入った透明の筒の中に

どこかの歌う死神が最後に見た銀髪の女性がいた。

## 五十発目 「また」である

アークがアーハム帝国に戻ったがすぐにバサビイ共和国に行くことになった次の日の朝……

アリス「アーク！ 起きなさいよ!!」

アーク「いや、アリス……俺、昨日帰ってきたばかりなんだが？」

眠い

マジで眠い

アーク「アリスは眠くないのか？」

アリス「私？ 私はへっちゃらよ!! あれ？ もしかして、アーク

……早寝早起きしてないの？」ニヤニヤ

うぜえ

この主人、うぜえ

ここぞとばかりにドヤ顔をして馬鹿にしてくるアリス。

アーク「ふあ……確か、俺って荷物運び用の馬車だったよな？」

そつちで寝るか」

アリス「あら？ 何言ってるのよ？ アークも私の馬車に乗るの

よ」

アーク「はあ!!」

なんでだつてばよ!?! (某忍者風)

今回、バサビイ共和国に行くのはアリスと交渉担当の大臣たちと護衛騎士数十人とアリス専用や大臣専用の馬車くらいで俺が一番後方にある荷物運び用の馬車だ。

しかし、この主人……一緒に馬車に乗れと言う。

アーク「なんでさ……」

アリス「だつてアークって私に忠誠誓ったのでしょ？ なら、私のナイト護衛が主人の近くにいたら何時でも守れるじゃない？」

アーク「確かに効率的だけどさあ……」

それから成り行きで俺もアリスの馬車に乗ることになったのだが

……

アーク「なんで俺の横なんだよ……」

皇族用馬車の中は豪華で雲のように柔らかい椅子に鏡のように磨かれた窓など大臣用の馬車とは全く違ったのだ。

だが、なぜかアークの隣にアリスが座っていた。

アーク「向かい合っている設計だからあつちに椅子は空いているだろ？」

アリス「ふふん♪ これは私の作戦よ!! こうやって引っ付いて温めたら眠くなる作戦!!」

アーク「作戦って……まさか、今から何か勝負する気なのか？」

アリス「あら、ようやく主人の考えを充てるようになってきたわね

!! 流石、私の使い魔！ 感心するわ！」

アーク「感心は良いから俺は眠いんだが」

アリス「いい！ 今から先に寝たほうが負けね!!」

アーク「……俺に衰弱死をしろと？」

アリス「いい？ スタート!!」

話を聞けと言おうとしたが勝手に進められた。

アーク（まあ、10分くらい経ってから寝ればいいのか）

しかし3分後

アリス「くう……くう……くう……くう……」

アーク（なんでや!?)

勝手に勝負が始まり適当に負けてアリスを喜ばせようかなっと思っていたがまさかの勝負を持ち掛けた方が自滅してしまった。

そんなアリスはアークの肩に寄りかかり可愛い寝息を立てながら寝ていた。

アリス「あーくう……もう……一人に……しにやい……むにやむにや」

アーク「はあ……」

一体何の夢を見ているのやら？

しかし、問題はこれではなかった。

アリス「あーくう……」

そう、アリスとの距離だ

彼女の髪が俺の顔に掛かっている……肌触りは絹のように滑らかで……そして、どこか落ち着く匂い……

アーク「いやいやいや……なに感じてんだ!? 彼女はあくまでも主人で護衛対象なんだぞ!」

しかし、心はダメだと言っているが体は反応する。

アリスの体の体温がサイボーグの固い皮膚越してもわかってしまうぐらい熱い

そして、近い! 近すぎる!?

アーク(これ、マジで敵が来たら動けないぞ?)

アリスの腕は俺をまるでぬいぐるみを抱えて寝る子供のように抱きしめていた。

しかも……

ふにゆ

当たっているのである……主に胸が。

アーク「……」

そして、アークは現実から逃れるためにVR空間に転移した

VR空間

アーク「はあ……心臓が悪い」

俺が目覚めるとそこはどこかの基地のようだった

アーク「……1時間ぐらいたら戻るか」

起き上がり辺りを見渡してみると誰もいなかった……が

アーク「うわあ……」

起き上がった場所は空港部分の滑走路でその中心にいたのは

スカルフエイズ「ようやく来たのかね？　アーク？」

アーク「……お前かよ」

スカルフエイズ「なんだね？　嫌なのかね？」

アーク「嫌だわ（キツパリ）」

スカルフエイズ「……そんなことより、丁度今から私のティータイムなんだが付き合っけてくれるかね？」

え、お前……ティータイムとかする奴つけ？

ぶっちゃけ今すぐ帰りたいものなんだが、帰ったら帰ったでアリスのアレが襲ってくるから帰るのも危険だ。

アーク「はあ……1時間だけな」

スカルフエイズ「くつくつく……まあまあ……座り給え」

すると目の前の空間から「最初からそこにあった」かのようにテーブルとイスとお茶セットが生成させた。

とりあえず、大人しく椅子に座った。

スカルフエイズ「私は生前に故郷を失い家族も失った……そして果てには「英語」を憎み声帯虫を改造し民族解放を謳ったが……最後はBIGBOSSの影武者に殺されてしまった……私は大いに後悔した」

こぼこぼ……とティーポットをカップに傾けながら言う

アーク「あ………そういや、サヘラントロプスで死んだんだっけ？」

スカルフエイズ「まったくだ……あれは子供のころに工場で遊んでいたら空爆で焼かれた皮膚ぐらい痛かったものだ」

アーク「んで、最後はエメリツヒ博士に殺されたんだっけ？」

スカルフエイズ「ああ、第三の子供が裏切るのは予想外だった……そして死んだあとあの世から世界を見ていたんだが……悪くない世界を作ったものだな……あいつは」

お？

このスカルフエイズ……結構丸いぞ？

スカルフエイズ「だが、この……AIか？　……慣れないものだな」

コトリと目の前にいい匂いを出しながら入っているカップが置かれた。

アーク「……俺、口ないんですけど?」

スカルフェイス「……この世界はVRだ。問題はない」というわけで飲んだが……

アーク「え、うま!?!」

久しぶりに感じた旨味に驚く。

スカルフェイス「ああ、暇だったから世界中の茶葉を研究したんだ……」

本当はおいしくないと言いたいんだが……マジでうまい。

一時間後……

アーク「あ、そうだ……最後に一つ良いか?」

スカルフェイス「ほう? お前から話題を振るとはな……なんだ?」

アーク「……もし、お前が不死身並みに回復力を持つ敵とあつたらどうする?」

スカルフェイス「……条件にもよるが……実験体にさせるな……だがもし毒物などが効かないのであれば精神的に殺す」

アーク「はは……あんたらしい」

そろそろ、一時間か……うくん……勇者を殺すヒントを得られるかと思っただが……いや、別にありかも?

スカルフェイス「あ、私からは一つ忠告だ……お前の主人に関してだ」

アーク「アリスがどうした?」

スカルフェイス「貴様は……彼女をどう思っている?」

アーク「別に? ただ全力で守るだけだ」

スカルフエイス「そうか……なら、彼女を守ってやれよ」  
アーク「言われなくてもな」  
こうして俺はVR空間を後にした

アーク「う……ううん？」

目が覚めるとそこは馬車の中だった。

アーク（まだ着いてはいない……いや、そんなこともないか）  
窓の外を見ると城の壁が見えてきた。

アーク「アリスー？ 起きろー？」

アリス「う、ううん？ アーク？」

アーク「おはようさん、もうすぐで着くぞ」

アリス「にゆう……」

目を擦りながらアークの肩から離れ目を擦り今いる場所を把握する。

アリス「今……どこ？」

アーク「もうすぐでバサビイ共和国に着くぞ、準備しろ」

アリス「うん……あ、勝負……」

アーク「勝負？ 何のことだ？」

アリス「あれ？ なに結んだつけ？……まあ、いいか」

よし、何とか流せた

これで思い出させたら騒ぎ始めるからなかったことにした。  
そして、バサビイ共和国に入ると……

わああああああああああああああああ！！

「ようこそ!!」

「お待ちしてました!!」

アーク「すげえな」

馬車の窓から見るとバサビイ共和国の国民が歓迎していた。

流星に第二皇女が来たからかもしれないが、かなり豪華だな

アリス「すごいわね……うちの国に勇者が来た時とは大違いだわ」

アーク「いや、あれと比べたらダメだろ」



こうしてバサビイ共和国の中央にある城に向かった。

「アリス・フォン・アーハム様のおなーりー!!」

アーク（ここまで問題はなし……か）

アリスの護衛として城内に入るのは許可されたので一緒に行くことになった

アリスを先頭に後ろに交渉担当の大臣などで俺は中心におり、なるべく目立たないようにレインコートを着た

「おおー アリス様！ ようこそお越しになりました!!」

謁見の間はアーハム帝国ほど広くはないがそれでも豪華だった。

巨大なステンドガラスの下にはバサビイ共和国の首相と例のゴミ（勇者）がいた。

アリス「ごきげんよう。本日はよろしくお願いします」

着ていたドレスの両端をそつと掴みお辞儀をする

それはまるで御伽話に出てくる妖精のように可憐だった。

着ているドレスも外国訪問用のドレスらしく、赤と白というおめでたい色合いで白い手袋もして入った時も謁見の間にいた騎士や大臣などが見惚れていた。

ペガサス「アリス!! 俺のアリス!!」

アリス「勇者様！ ごきげんよう」

うわ、来た

先日、別れたはずの勇者をまた見てしまった（帰ったら目をア○ボ  
ンで洗淨しないとな）

ペガサス「お、おお……今日も岩山に咲く一凜の花のように綺麗だな!!」

アリス「うふふ♪ ありがとうございます」

ペガサス「……ところで今日は例の護衛は？」

アリス「例……とは？」

ペガサス「ほら！ えっと……あの……す、す……スコール!!」

スツ

アーク「ステイブです」

もう“ス”しか合っていないぞ？

来るたんびに悪化してないか？

にゅつとアリスの隣に出現し訂正させる。

ペガサス「うお!? あ、そうだったな！ ステイブだったな!!」

はあ……なんで女性の名前は覚えるけど男性のは覚ええないんだこ  
いつ……

あとアリスを呼び捨てすんな、精々“様”ぐらいつけろや。

「ゆ、勇者様……次に進ませぬぞ」

ペガサス「……つち、うるせえんだよ糞ジジイ!!アリス！ 後でまた話そう!!」

勇者が勝手にしゃしゃり出る事態が起きたがすぐに終わり日程が話された。

どうやら今日はもう遅いので会議は明日ある。

「では、第二皇女殿……ゆるりと休めてください」

あ、ちゃんと敬意は払ってるわ

こいつらがアーハム帝国に来た時とは大違いだな……でもなんか嫌な感じがするな

今までエルフを虫だとか人間の真似事だとか言ってきた奴らが急に態度を改めて接してくるのはなんとも気味の悪いものだが……何の問題もなしに進んでほしものだ。

しかし……

大臣たちの人だかりの間から

ひよこり

可愛らしく顔を覗き、アリスとアークを見ていたシスターがいた

ノエル「……トオル？」

その後、無事に謁見は終了し各部屋に案内された  
広い廊下を歩き案内された部屋は

アリス「……まあまあね」

アリスに用意された部屋は広く白いベッドとソファと普通な感じ  
だった

コンコン

アリス「あら？ 誰かしら？ どうぞ？」

アーク「失礼します」

アリス「あら？ アークじゃない？」

アーク「よう……とりあえず部屋の周りには異変はなかった」

謁見が終了した後、俺は先にアリスの部屋に向かい隣の部屋や廊下  
に異変はないかと検査をしていたが異常はなかった

なんか……安全を確認できたのはいいが不安は出たままだった。

アリス「そう、ありがとう……ところでなんでノックなんかするの  
よ？ 来客でも来たのかなって思ったじゃない？」

アーク「……誰だっけなあ？ 前に召喚されて主人の部屋について

いっただけなのに怒って「礼儀が平民以下ね」って言った主人は？」  
アリス「ふん！ そんなのいないわけ……ってそれ私じゃない？  
なんで覚えてるのよ!？」

アーク「懐かしいなあ……あんときのアリスは感謝の言葉を俺に言うことなんか天変地異に近い程なかったし、そのあとに俺が情報が欲しいって言ったなら「あんたが人間じゃなかったらいい心がけて褒めたいけど」って言ってたなあ……」（「現状確認」の序盤を参照）

アリス「い、い、いやああああああ!? 忘れて!? 今すぐに忘れて!？」

……やばい、ちよつと楽しくなってきた

わざとアリスの声真似して言ってみたけど効果はバツグンのようだな。

目の前でサクランボみたいに顔を赤くしポカポカと俺を叩くが全く痛くない。

アーク「しかも、俺の部屋も当初はなく倉庫ぐらしだったなあ……あ、でも頭撫でて照れるアリスも可愛かったな?」

アリス「か、かわ!? い、言っておくけどね!! あれは照れているんじゃないかって恥ずかしかっただけよ!!」

まあ、世間ではそれを照れているというものなんだが……言わないでおくか

アーク（はあ……これだからアリスと一緒にいるのは悪くないものだ）

敬語で話さず友達みたいに話せて結構楽しいのだ。  
すると……

コンコン

アリス「誰かしら?」

アーク「……お世話になるメイドじゃないか?」

アリス「そうかもね……はい、どうぞ」

俺はあくまでもアリスの護衛なので壁際に移動し後ろで手を掴み

下を向いて護衛っぽく立つ。

カチャ

?? 「し、失礼します」

入ってきたのは若いシスターだった。

世界中にもシスターは何人もいるが……

アリス「あなたは？」

ノエル「あ、えつと……バサビイ共和国の教会に所属しています。

ノエル・スカルツオです！」

……え？

ノエル？

なんでここに？

そこにいたのは先日別れたノエルだった。

アーク「あ、そういえば……」

ふと、前にノエルが言っていたのを思い出す。

ノエル『私は神父様の手伝いで行っているんです!! 私たち教会の者は勇者が召喚されたらその国の城に向かい祝福を捧げているんです!!』

アーク（そうやったああああああああ!!?)

ノエル「……あ! トオル様! やっぱリトオル様だ!!」

アーク「あ、ああ……えつとお……また、会ったねノエル」

ノエル「どうしたんですか? 一昨日に旅に出たのにな? あ! もう呪いは解呪できたのですか!?!」

アーク「あ、いや……えつとお……」

やばい、今更俺が考えた設定が牙をむき出した。

俺に近寄りまるで久しぶりに飼い主にあった愛犬のように興奮するが、とうの俺はこれこそ自業自得というものなのかと思っているとアリス「ちよつと待って……あなたがアーク……ステイブが言っていたノエルね？」

横からアリスが割って入り一旦話す。

ノエル「ステイブ？ あ、はい！ 私がノエルです!!」

元気のいい声で返事をするが

アリス「ふうくん……」

ノエル「な、なんででしょうか？」

アリスはノエルのつま先から顔までじっくりと観察した。

アーク「やめい、アリス……ノエルが怖がってるぞ」

アリス「あ、ごめんなさい？ ちよつと興味が湧いてしまっただけよ？」

アーク（にしちやあ……目が怖かったがな）

ノエル「え、えつと……アリス・フォン・アーハム様とトオル様ってどういう御関係で？」

アーク「あ……俺が説明をs「私がしてあげるわ!!」あ、ちよつとアリス!？」

アリス「あなたが言うトオルは私に永遠の忠誠を誓った部下なのよ!!」

まるでドドドン!! って効果音が聞こえそうなくらい胸を張って宣言するアリス

トオル「部下……トオル様？ ステイブという名は？」

アーク「悪い、トオルっていうのは偽名なんだ……あ、でも今まで通りトオルって呼んでもいいz「あ、なら私もトオルって呼ぶ!!」……はあ!？」

急に会話に入り込んで、急に宣言をする主人

アリス「何よ？」

アーク「いや、なによじゃないわ!? なんで急に!？」

アリス「だってトオルってあなたの（元の）名前から作り変えてできたじゃない？ 主人である私が言っただけでいいはず、他の女性には言っていないっておかしくない？」

ノエル「え、トオル様の本当の名前？」

アーク「おK、ちよつとアリス静かにしてて。その名前言っただけから静かにしてて」

めんどくさいことになりそうだったので一旦話を整理する。

アーク「あー……ノエル、見てわかると思うけど俺はアリス様の部下なんだ」

ノエル「な、なるほど……で、でも旅人っていうのは？ 呪いとかは？」

アーク「実は俺はアリス様に頼まれ事があってこの国に来たんだ」  
ノエル「頼まれ事？」

アーク「ああ、数日前にアーハム帝国に勇者が訪問したよな？ そんな時に勇者を歓迎したんだけど勇者の好みとかわからなくてな？」

ノエル「……あ！ つまりトオル様は神の御使い様の好きなものを探そうとする秘密の記者さんってことなんですわね!!」

アーク「そう……そうそう!! そういうこと!!」  
よかった……ノエルがポンコツで

アリス「秘密の記者って……それって諜報員ってことじゃないか」  
ス、細かいことは気にしてはいけない」

アーク「だからすまん……嘘なんかついて」

ノエル「じゃあ……あの指きりげんまんも？」

アーク「……すまんそれも」

ノエル「そんな……ひどいです……」

ポタ……ポタ……

するとポロポロとノエルの水色の瞳から涙が出てきた。

アーク「わー!! ごめん!! 本当にごめんって!!」

アリス「トオル……あんた最低……」

アーク「違うって!! ごめんって!! 今更許されることじゃないけど何か償うから!!」

ノエル「えぐ……本当……ですか？」

アーク「本当本当!! なんなら毎朝、神に懺悔して寝るときも神に拜んでから寝るから!」

ノエル「……無理です」

アリス「……」

痛い!?

さつきからアリスの目線が痛い!?

ノエル「……あ! なら今度こそ私と約束をしてください!!」

アーク「おう! 何なら俺が生まれたころの武勇伝やら何やら言うてあげるから!!」

ノエル「あ、それは別で聞きたいです」

アーク「お、ちよい!」

すると、ノエルは勢いよく俺の手を掴み小指を捕獲した後に自分の小指と絡ませた。

ノエル「指きりげんまん! 嘘ついたら……」

あなたの主人にダンジョンでのことを全て、私のイケない所を見たのを伝えますからね?」

アーク「ういっす」

ノエルと小指を絡ませて指きりげんまんをしていると、ノエルが俺の耳元に近寄り小声で脅しをかけられて即刻従うことにした。

ノエル「うふふ♪ それではアリス様、トオル様……失礼します」

ノエルはいたずらっぽくウインクした後にお辞儀し、部屋を後にした。

アーク「ふう……どうにか誤魔化せたな……ごめんなアリス?」

アリス「……ええ、そうね」

アーク「それじゃ、俺は警備に戻るか」「ちよつと待ちなさい」……



どしたの？」

アリス「……ちよつとそこに座りなさい」

アーク「え、なんだ「いいから!!」……あ、はい」

なぜか目から怒りを感じ大人しく従った。

アーク「え、ええつと？ アリスさん？ どうしたんですか？」

アリス「……アーク？ 私は猛烈に怒っているわ」

アーク「え、なんかしたっけ？」

アリス「あなたという愚か者にヒントを上げるわ……エルフってね、この耳はお飾りじゃないの」

アーク「は、はあ……」

アリス「エルフってね？ 人間より音が聞こえやすいの」

アーク「……あ（察）」

この時、俺は初めて主人であるアリスが起こっているのを感じた。

アリス「楽しいお話説教しましょう？ アーク？ ……そうねえ、まずは

『ダンジョン内での彼女の出来事と全て』と『見てはいけないもの』についてかしら？」

## 五十一発目 ぶち切れ案件・・・発動

アーク「え、言わないといけませんか？」

アリス「ええ？ 私に忠誠を誓ったのなら隠し事なんかないんでしょ？」

アーク「え……でも言えないこと」誓ったでしょ？」  
……その通りでございます」

アリスは優雅にそして笑顔で椅子に座り、俺は地面で正座している。

アリス「それじゃ、まずはダンジョンのことを言って？」

アーク「え、えつと……前にクロエたちに言ったとおりです」

アリス「……本当に？」

アーク「……えつと……すみません、付け加えます」

現在、絶賛説教お話中である。

別にここで言わないという選択肢はあるが、どういうわけか今のアリスの前だとどんなに隠し事しても心を見透かされてわかれてしまいそうである。言わなければならなかった。

さらに目の力が強すぎて怖かった。

アーク「えつと……ダンジョン内でキャンプすることになりました」

アリス「そこは聞いたわ」

アーク「そのあと明日に備えて寝たのですが……ノエルが寝相が悪いせいか俺のテントに入ってきました」

アリス「……」

アーク「それで……彼女が俺に密着してきて俺は眠れなかったので早起きして朝ご飯の用意をしました」

アリス「ふ~~~~~~~~ん？」

すごく長い納得した返事をしているが

トントントントントントントントントントントントントントントント

アリスの人差し指が椅子の肘を置くところを叩いて怒っているのが丸わかりだった。

アリス「はい、次」

アーク「……そのあと朝ごはん食べたら出発して宝箱を見つけましたがトラップで勇者がミミックに体を真つ二つに切断されました」

アリス「え、あの勇者……真つ二つに切られたのに笑顔で私を迎えたの？」

アーク「だよな!? あの勇者の精神おかしいですよね!」

アリス「それはわかる。でも話を変えさせようと思わないでね？」

アーク「すみませんでした!!」

アリス「……それで? 私はミミックはアークが倒したって言うんですけど具体的には聞かされてないわよ?」

アーク「……え、えつと……すみません、これは言えません」

アリス「あら? なんでかしら?」

アーク「言ったら……確実に俺の首が飛んでいくからです」

まるで親に怒られる子供みたいに縮こまる歌う死神……そして、怒る主人。

アリス「わかったわ……首は飛ばさないから話さない」

アーク「あ、許さないんですね……これはノエルが言ってた『見てはいけない』ことに関することです……やっぱり言わないといけませんか?」

アリス「言いなさい」

アーク「ミミックが勇者を捕まえようとしたんですがとある出来頃があつてノエルが宙づりになって捕まってしまったのですが……その時に宙づりになったノエルのスカートが落ちそうになって最初は抵抗をしていましたが……最終的に負けて黒い下着を見てしまいました」

ヤバいどうしよう死にたい。

精神的に公開処刑された気分だ。

雷が落ちてくるんだろうなと思いき身構えたが……

アーク（あれ? 来ないぞ?）

いくら待っても来なかったのでそつとアリスを見よう……とした瞬間

バキヤアアア!!

アーク「ひい!?!」

折れた。

骨ではなくアリスの座っていた椅子の肘を置くところが粉碎された。

アーク（やばいって!? これ完全に怒ってるって!）

アリス「黒い下着……ねえ?」

まるで非力な村人が魔王に見下ろされているような感じがした。

足が震え冷や汗を掻いているのがわかるほど。

そしてアリスはアークを笑顔で見下ろし

アリス「……ド変態アーク」

と言われた。

いつもなら笑って返せるが今はその言葉が重く心に押し掛かる。

アリス「それで?」

アーク「あ、はい……で、えつと……無事に倒せましたがノエルとは少し重い空気になりました」

そして色々と白状し続けた。

アーク「……それで最後にボス・スライムを倒しました」

アリス「……そう、あなたがまだ隠し玉を持っているって思ってたけど……そんな攻撃方法とはね」

アーク「は、はい……えつと……大変申し訳ございませんでした」

アリス「あら? 何勝手に終わらせてるのよ?」

アーク「え?」

アリス「帰りはどうだったのよ?」

アーク「……」

この時のアークは「あ、使い魔人生おわったわ」っと死を覚悟した。  
アーク「絶対に言わないと……いけませんよねえ」

アリス「物分かりが早くてうれしいわ? さ、早く言いなさい」

アーク「……遺書を書いてもいいですか?」

アリス「却下よ」

アーク「……倒したボス・スライムの一部がノエルの頭上に降りかかって……そのお、ボス・スライムの性質で酸がノエルの服を溶かして……彼女の裸を見ました」

アリス「……そう……アーク……あなたとは使い魔契約を」

アーク「ちよつと待つてちよつと待つて!? 確かに見たけど俺は勇者たちの目を潰してノエルに新しい服を着させたし、ギリギリノエルのほうも手で隠していたから見えてないって!」

なんとも醜い言い訳だがこれくらいしか伝えられなかった。

アリス「そうですね……でも結局見たことには変わりありません。発情期スケベ使い魔アーク……あなたに罰を与えます。立ち上がってください」

ああ、俺……死ぬのか

来世は絶対にスケベとか変態とか言われぬ人生を歩もう……あ、でも人殺しとかしているから地獄行きかな。

でも、最後に主人から罵倒された名前を呼ばれて……よかったかな……

ずつつ正座をして足が痺れているが我慢をし立ち上がった。

アリス「……では腕を大きく広げて目を閉じてください」

俺……目じゃなくてセンサーとかで見ているんだがな。

だが言われたとおりに目を閉じて腕を大きく広げる。

果たして付与魔法で強化された拳で撲殺されるのか剣で刺殺か斬殺されるかと待つていた。

アリス「それじゃ行くよ?」

速くこの自分を裁いてほしいと待つていたが……全く違う答えが来た。

ふにゆ

アーク「……え？」

痛みではなく柔らかいものに押し付けられているのを感じ、目を開けてみると

アーク「何しているの？」

アリス「……」

アリスがアークに抱き着いていた。

自身の胸をアークの胸に押し付け、腕はアークの背中に回っていた。

アリス「……アーク」

アーク「あ、え、な、なに？」

アークも何故主人がこの行動を出るのか全く分からず固まっていたがアリスの声で元に戻った。

アリス「……そのまま私を腕で包んで」

言われた通りに広げた腕をアリスの背中に回す。

アリス「何だよ……」

アーク「な、なんでって……何が？」

アリス「なに、私より可愛い子の前でデレデレしてるのよ？」

アーク「……はい？」

アリス「……私の前では全く動じないのに……あの人間のシスターの前ではデレついちゃって……」

そして、アリスは俺に抱き着いたまま上目遣いで

アリス「私……そんなに魅力がない？」

アーク「ツ!!? (ドクン!!)」

どういうわけか急に体が熱くなってきた……まるで体からマグマが出てくるように徐々に熱くなっていった。

そして、アリスは俺の耳元により小声で……しかしハッキリと凜とした美しい声で

アリス「……次、私以外の女性にデレデレしてたら……嫉妬するからね？」

アーク「ひゃ、ひゃい……」

アリス「ふう……さあ！ もう罰は終わったから部屋に戻りなさい！ この罰を受けたくないならば今後気を付けるように!! それに下着を見たいなら私を見せるし!!」

そう言いながらアリスはアークを部屋から追い出した。

アリス「ふうくくく……」

アークを追い出した後、アリスは寝巻に着替えて寝た……ベッドの上で一人赤面になってジタバタしながら……

翌朝、会議の日

アーク「全く眠れなかった……」

自分用に用意された部屋でアークは起きた……が本当は先日も寝ていないので瞼が重はずだが意識ははつきりとしていた。

何故なら

ドクン、ドクン、ドクン、ドクン、ドクン、ドクン、ドクン

自分の心臓の音だった。

果たしてこの心臓の音はサイボーグのか……はたはどこかにある自分の心臓なのかは全く分からない

目を閉じようにも体の中で祭りでもあっているかのように五月蠅く寝つけれなかった。

アーク「はあ……」

そして目を閉じた瞬間に出てくるのが……

アリス『私……そんなに魅力がない?』

昨日のアリスだった。

必死に寝ている時に忘れようと思うがそれが逆に鮮明に思い出させてしまった。

そして、思い出すたびに心臓の高鳴りは収まらない……そうまるでそれは……

永遠に解くことのできない魅惑の魔法のようだった。

アーク「あいつ……いつたいてどこで魅惑魔法みたいなこんな危険な魔法を覚えたんだ？」

今日、会ったら言っておこうと決めた。

アーク「あ、朝か……」

ベッドから起き上がり習慣となてしまったアリスを起こしに行こうと廊下に出た。(ちなみにアークの部屋はアリスの隣である)

廊下に出てアリスの部屋に向かっていると

アーク「あ、アリス……」

ちょうどアリスの部屋からアリスが出てきたが

アリス「あ、アーク……おはよう」

アーク「あ、ああ……おはよう……それじゃ、またあとで」

アリス「うん」

特に会話することなく離れていった。

アーク(いやいやいや!? 今さつき会ったら使うなって注意しようとしたのに何が「またあとで」だあ!? や、やばい……なんでかはわからないけどアリスの顔を見たら心臓が破壊されそう)

アリス(ど、どうしよう……昨日の罰で謝ろうって思ってたのに……主人があ、あんな恋人みたいに抱き着くなんて使い魔の主人失格よ!!)

二人とも本心を言えないまま会議の時間が始まった。



そしてアリスの部屋に忍び込んで裸で隣で寝ようとし向かった勇者ペガサスはそのような二人を見ていた。

ペガサス(どうしたんだ?) はー! もしかしてとうとうあの護衛が俺のアリスを慰め者として酷い扱いをしたんだな!! 許さん! 実に罪が深いぞ!! 仕方ない今日決行だ!!)

しかし、その決行が後にアークを憤慨するのはこの時の勇者はまだ知らない……

アーク「アリス……真面目にやってるかなあ?」

アリスとあったあと、何回も言うタイミングがあったが言えなかった。

そして、結局言えないまま会議室まで護衛し会議は開始した。

護衛は外で待つように言われ俺は外で日向ぼっこしている……あの会議室に勇者がいたのが気に入らなかつたがな

アーク「はあ……」

ため息を吐きながら空を見上げる

……早くアリス帰ってこないかなあ

すると

ノエル「あれ? トオル様じゃないですか?」

アーク「ん? あ、ノエル」

ノエル「どうしたんですか? こんなところで?」

アーク「……アリスの会議が終わるまで待っている」

ノエル「ああ、そうでしたね!!」

アーク「はあ……ノエル……お前のせいだぞ」

ノエル「え、ええ!? なんで私なんですか!?!」

アーク「ヒント……昨日、約束、エルフ、耳が良い」

ノエル「……あ(察)」

なんなのか分かった瞬間、ノエルの顔はミルミル赤くなった。

ノエル「す、すみませんでしたあああ!! す、少し楽しかったもので……聖職者である私がはしたないことを……」

アーク「いや、いいよ……あれは俺が悪かったから」

ノエル「お、お詫びとしては何ですが……だ、ダンジョンで裸になつてしまったことを国民に全体に言つても」

アーク「それは流石にダメだ」

ノエルが困るんじやなくて俺が困る

アーク「はあ……話は変わるが……ダンジョン攻略は楽しかったか？」

ノエル「はい!! あの後には冒険者の皆様から宝石を売って手に入れたお金を寄付してくれたのです!!」

アーク「そうかあ……よかったなあ……」

ノエル「はい! 私、あんなに暖かいところがあるなんて初めて知りました!!」

アーク「そうか……あのさ、ノエル?」

ノエル「はい! なんででしょう?」

アーク「暇だしさ、お互い昔のこと話さないか? 昨日の嘘をついたお詫びとして」

ノエル「ええ! いいですよ!!」

こうしてアリスを待っている間、俺たちは会話をして待っていた。流石に俺の正体が「歌う死神」だとバレてしまったら怖がられてしまうから正体については話さない

アーク「まず俺からだな……まず俺は確かに人間だがこの世界の人間ではない」

ノエル「え、もしかして……トオル様って神の御使い様と同じなのですか?」

アーク「うくん……まあ、そうっちゃそうだが違うと言えば違うかな」

ノエル「ええ!? なら、空を飛ぶ鋼鉄の鳥やどこへでも繋がる通魔機があるのは本当なんですか!」

アーク「ああ、飛行機と電話のことか?」

ノエル「わあ!! 本当にあつたのですね! トオル様の世界も!!」  
アーク「おう、あつたぞ……ん? ちよつと待ってくれノエル……」

もってなんだ?」

ノエル「あ、実はですね……あのダンジョンを攻略してトオル様が帰った後に祖国から手紙が来て「マーレ工業国家がマーレ軍事国家に変わった」らしく……その時、兵器の展覧会でトオル様の世界のと似たようなものがあつたのです!!」

アーク「マーレ工業国家じゃなくて?」

ノエル「はい……だいたい前に革命が起きて新しい政府が誕生したらしいです」

アーク「ほーん……それで兵器ってどんな感じなんだ?」

ノエル「なんか……祖国曰く全く説明された意味は分からないけどすごかったそうです!!」

ダメだわ、全く使えん

ノエル「それじゃ、次に私から!! ボス・スライムと戦った時に聞こえた爆発音は?」

アーク「ああ、これか?」

レインコートの中からSCARを取り出す。

ノエル「それは?」

アーク「俺の世界の世界での武器だ」

ノエル「これが神の御使い様の世界の武器なんですね!! あれ?」

剣の部分はどこなんですか?」

アーク「いや、これは……なんていうんだ? 矢じりを飛ばして使うんだ」

ノエル「へえく!! あれ? だったらダンジョン攻略の時に使えば活躍できたのでは?」

アーク「……実を言うと俺が勇者と同じ世界から来たっていうのをバレたくないんだ」

ノエル「でも……魔族を倒すというとても重要な役割をもらえる名誉なことだと思いますよ?」

アーク「……俺はアリスを守るためにこの力を使うことを決めただ……っへ、呆れたか?」

ノエル「いえいえ……大切な主人を守るために力を使うことは素晴

らしいことだと思えます!!」

アーク「そうか……あ、これについては勇者には内緒でいてくれよ？」

ノエル「はい！ 新しい約束です!!」

……だが時がたつのは速い

知らないうちに日が傾き、あたりは暗くなってきた。

アーク（……アリス……遅いな?）

ノエル「トオル様！ 私、そろそろ帰らないと!!」

アーク「あ、ああそうか……すまん」

ノエル「ありがとうございます!! 私、マザー以外でこんなに楽しい会話は初めてです!!」

アーク「初めて……ノエル、家族は？」

ノエル「……実は私は親がいないんです」

アーク「ツ!? すまん……変なことを聞いてしまった」

ノエル「あ、やめてください！ 謝るなんて!! ……まあ、私が見ただ赤ん坊の時に捨てられたらしいのですが」

アーク「……そうか」

ノエル「雨の中、路地裏に住んでいたんですけど偶々通りかかったマザーが拾ってくれて助かったんです」

あ、あのマザーが助けたのか

ノエル「それからマザーは私を我が子のように育ててくれたのです……私は初めて知ったときはショックでしたがそれでも毎日が楽しくてうれしかったです!!」

アーク「そうか……」

ノエル「……できれば私の本当の親に会いたいです」

アーク「……ごめんな、嘘なんかついて」

ノエル「いえ……でも今度はちゃんと約束を守ってくださいね」

アーク「ああ、絶対に」

そのあと、ノエルとは別れアリスを待った。

確か、日程的には今日の夕方に帰るはずなんだが……遅いな？

あ、ちなみに本来は日が出てるころに出発して魔族の遭遇を減らす

はずだが皇帝曰く歌う死神がいるから大丈夫っていうことで夕方に  
出発することになる。

アーク（遅いなあ……アリス……）

恐らくまだ会議室にいるんだろう

だが、妙にムカムカする

まあ、大体は主人が大丈夫かと心配する心のせいなんだが……

アーク（あの勇者なんだよなあ）

潜入してわかったがあいつは女には目がない

……もしかしたらあの勇者だから会議室であるのを良いことに何  
かしているのでは？と思ってしまうが……流石にそんなことはしな  
いだろ

あと、心配なのは今回の会議の内容を一切伝えられてないことだ  
現地で説明すると聞いたが……護衛の俺でさえ聞けなかった

……やはり安心ができないな

そう、木の上でブラブラ待っていると

アリス「アークウ!!」

アーク「ツ!! 来た!!」

遠くから主人の声が聞こえたので急いで現場に急行する。

アーク「アリス!! 終わったのか!!」

アリス「……う、うん!! 今さっき終わった!!」

なんだ？

なぜか朝会った時みたいな顔ではなくどこか顔が暗かった

アーク「……どうした？」

アリス「あ、いや！ 何でもない!!」

アーク「……そうか」

だが俺はすぐに見抜いた

これは会議で何かあったのだと……

アリスと合流した後、バサビイ共和国側がお詫びと夕食に誘って  
く  
れた。

……最初は警戒したが何もなかった  
何を企んでるんだ？

あと、妙に思ったのがもう一つあった。

ペガサス「それでな！ 俺の世界には空の向こう側に行ったり、南の果てに行ったりできたんだ!!」

アリス「そ、そうなんですかあ……」

なぜか勇者がアリスに積極的に話しかけていた

俺は護衛としてアリスの後ろに立っていたが俺のことは無視し勇者はアリスに話しかけ続けた。

アーク（なんだ？ まるで良い事でもあったかのような顔を  
するな？）

しかも、勇者は満面の笑みでマシンガントークを続ける。

そのせいか、アリスは若干引いている

そして夕食が終わり、俺たちはアーハム帝国に戻るようになった。

アリス「それでは……失礼します」

「ええ、また来てください」

大臣はゾロゾロと帰りの馬車に乗り込む中……

ペガサス「アリス！」

アリス「勇者様？ どうかされましたか？」

ペガサス「えつとな……」

アーク「何やっているんだ？ あいつら？」

バサビイ共和国からのお土産をもらい馬車に載せてあとはアリスが乗るだけだがアリスは勇者と何か話していた。

ペガサス「……で……返事を……約束な!!」

アリス「……はい、わかりました」

アーク（ツ!? 何を約束をした!?)

普段、誰かと話しているアリスは笑顔でいるが、今勇者と話しているアリスはまるで泣いてしまう寸前みたいな顔をしていた。

そして、アリスが帰ってきた。

アリス「……ごめんねアーク……お待たせ」

アーク「……ああ」

こうして俺たちはバサビイ共和国を後にした……最後まで勇者がニコニコしていたのが気持ち悪かったが

ガタガタガタ……

馬車が揺れる中、俺とアリスは向かい合って座っていた。

だが、アリスの顔は終始暗い顔で明るくなかった

アーク「……アリス……何かあったのか？」

アリス「あ！ いや……なんでもないわ」

アーク「アリス……昨日の夜、言っただろう？ 隠し事はなしだった」

アリス「……言っても怒らない？」

アーク「いや、怒らんだろ」

アリス「もし聞いても……あまりの怒りに殺そうって思わない？」

アーク「……アリス、俺をなんだって思っている？ 確かに死神つ

て呼ばれているけどそこまで残虐ではないぞ……殺したりはしないのを誓うよ」

だが、のちにこの言葉が速攻で嘘になった。

アリス「えつとね……私……」

勇·者·様·と·結·婚·す·る·こ·と·に·な·つ·た·…·…·」

ア·ク「…·…はあ？」



五十二発目 本気で怒った(マジでキレた)「歌う死神  
(アーク)」

……暗い夜の中、アーハム帝国の馬車が走っていた  
本来は昼間に移動して襲われるリスクを下げるためだがアークが  
乗っているから安心して移動できるはずだったが……

アーク「……アリス……今、なんて？」

アリス「だ、だから……私、勇者様に婚約を申し込まれて結婚する  
ことになったn「よし、少し行ってくる」ああ！ ちよつと待ちなさ  
いよ!!」

話の内容が分かった瞬間、アークは立ち上がり馬車のドアを開けて  
外に出ようとしたがアリスに手を掴まれてしまった。

アリス「ちよつと!? 殺さないって約束したでしょ!」

アーク「ああ、殺しはしない……だが地獄に逝ってもらっただけだ」

アリス「それも殺すって意味よ!」

アークは今すぐにも外に出て勇者のところへ強襲したいがアリ  
スがそれを許さない。

とりあえず、アークを落ち着かせ説明することになった。

アリス「いい？ 落ち着いて聞いてね？」

アーク「……やつぱ、コ☆ロ☆ス」

アリス「ああもう!! いいから聞きなさいって!!」

そしてアリスは落ち着いた表情と静かな声で話した。

ことの発端は会議のことであった。

回想シーン

「~~~~~で~~~~~なりました」

アリス(どうしよう……暇だし、大臣たちが言っている意味が分か  
らない)

会議室内でアリスと交渉担当大臣のアーハム帝国側と勇者や首相  
たちバサビイ共和国側がいた。

大臣たちがわけのわからない話題を言い合っている。

アリス（はあ……こうなるんだったら帝王学や経済学を学んでおくべきだったわ）

そう、暇なのだ

自分はアーハム帝国側の中央に座っているのだが、まるで店に並ばれている商品みたいな感じだった。

アリス（今度、クロエ姉さまに聞いてみようかな）

正直、早くここから立ち去ってアークに会いたい

主に理由は二つあるが、一つ目はアークに謝りたいのだ。

昨日に使い魔が罪を犯したので罰を与えたが……やはり不快であつただろうか

急に立ち上がらせて抱き着いたが……はたしてあれでよかつたのか？（前に恋愛系小説でこうすれば男性は黙るとか何とか書いてあつた気がする）

だが、いざ会おうとしたら顔から火が噴くほど恥ずかしくなつた。それに抱き着いたときに言った言葉だが……あれもとてつもなく恥ずかしかつた。

そして、二つ目だが……

アリス（……なんでさつきから見ってくるのよ!?!）

ペガサス（ニヤニヤ）

そう先ほどから勇者がこちらを見てくるのだ

もはや“凝視”って言つていい程見てくる

アリス（正直、あまち好きじゃないの!! こっち見ないでよ!!）

心の中で訴えるがそんなことは露知らずの勇者はアリスの体を嘗め回すかのように気持ち悪い目で視姦する。

どうにか勇者から意識を外そうと頭の中で別のことを考えるが

アリス（……だ、だめだわ……どうしても昨日のことを思い出してしまう）

少しでも思い出すと顔が火照つてしまう

仕方ないので早く会議が終わるのを待っていた。

ペガサス（ああ♡ 今日もアリスは可愛いなあ♡ 流石俺の花嫁一

号、美意識を忘れず、俺を魅了しようと誘ってくるな♡……安心して、すぐ俺のものになるから♡)

ちなみに勇者のほうはというと

アリスの懇願を込めた目線には全く気付かず逆に見ていてくれていると思っただ。

「……ではお願いします」

「はい……では会議を終了します」

……アリスが我慢している間に会議は終わったようだが大臣たちも違和感があった

(……なんか違和感がないか?)

(事前まで会議の内容を教えられてないし……さぞかし超重要案件かと思っただが蓋を開けば貿易のことや今後のことなどであった)

(これってアリス様が来る必要があったか?)

そう、会議の内容はとも国のトップが来るほどの内容ではなかったため違和感があった。

アリス「……ではアーハム帝国側はこれで失礼します」

会議が終わったのでアリスは椅子から立ち上がりさっさと出ようとしたが……

ペガサス「アリス！ 少しいいか!?!」

アリス「……なんででしょうか？ 勇者様？」

扉から出ようとした瞬間、勇者に呼び止められた。

本当は無視して帰ってアークに会いたいのが流石に無礼すぎるので振り返る。

ペガサス「え、えつと……えつとな？」

勇者がアリスの目の前に立ち急に改まる

アリス(はあ……どうせ、「俺の部屋に来て話さないか」っていうんだろな……正直、この勇者様は自慢話しかしないから面白くないのよ……)

アークがいらないこの時……果たしてどうやって断ろうかと悩んでいたが……まったく違うのが来た

ペガサス「アリス……いや、アリス・フォン・アーハム様……」

俺、勇者ペガサスと婚約を結んでいただけませんか？」

アリス「……はい？」

今、この勇者はなんて言った？

婚約？ それって将来結婚してほしいと言っているようなものは？

「ぎ、貴様!? アリス様に急に何を言い出す!？」

「こ、婚約なぞ結べるか!？」

ペガサス「はい！ それは承知のことです……しかし私はそれでも諦めません!! 確かに私は異世界から来た高々平民でした……しかし、私はあなた様にあつたとき初めて心の底から惚れました……まるで猛吹雪の中で咲く一凜の百合のようでした……だけど、アリス様も私のことを知らないかもしれません……でも!! 俺は魔族を滅ぼすという大切な役目があります、だけど私は!!あなたと一緒に世界を救いたいのです!! 俺はあなたを絶対に幸せにします!! なので……結婚を前提に付き合ってください!!」

「し、しかし!? それはまるでアリス様が欲しいだけでは!？」

「ええ、しかし……勇者様はこの世界を救う救世主であります……別に今ここで断つても構いません……しかし、勇者様が正式に頼み込んでいるのにエルフはそんな簡単に神の使いのお願いを断るんです

ねえ?」

「だ、だが!? それは「待つて」……アリス様!?!」

アリス「……わかりました……しかし猶予をください……その間に決めますので」

回想終了

アリス「……ってあったのよ」

アーク「へ〜(納得)……あの勇者がねえ(絶許)……よし!!」

勇者殺す(絶殺)」

アリス「ああ、もう!! いい加減にしなさいよ!! 今、勇者を殺してしまつたら私が困るのよ!!」

アーク「……っち」

アリスを攫いに来たり、暗殺してくるなら俺が手を出せるが……正式にだ

これが一番面倒だ

恐らくセリフ的に勇者法の中にあつた「魔族殲滅の際には勇者が必要とした人材、資源、資金を提供する」という内容があつたのでソレを言っているであろう。

それに正式に申し込んだつてことは逆に断れば「勇者様が頭を下げてまで頼み込んだのに断つた」つていうラベルをアーハム帝国に張り付けて余計面倒なお願ひ(命令)をしてくるのであろう。

俺も本で読んでわかつたがこの世界は勇者に酔狂している。

勇者がいないアーハム帝国と勇者がいるバサビイ共和国だと周りの国は間違いないバサビイ共和国のほうを信じるであろう。

アーク「……俺もその場にいたらな」

アリス「……もしかしてコレが狙いで私たちだけ会議室に入れたのかも」

アーク「はあ……それで受け入れるのか？」

アリス「……仕方ないでしょ、相手は勇者なんだから……従わないとアーハム帝国とお父様が世界中から猛批判されてアーハム帝国の威厳が総崩れになるからね」

アーク（アリスが……あの糞勇者のものになってしまうのか？）

受け入れるという答えを聞いた瞬間、少しずつ体が冷たくなってきた。

アーク「アリス……本当にいいのか？」

アリス「……いいのよ……私、あなたが来るまで“無能”って言われてた皇族で家族のみんなのために全く恩返ししてないもん……だから、少しでも恩を返されたなって思っ

アーク「……」

なんでだろう？

何故、俺の主人はここまで嫌なのを受けいるのか？

いや、まず……なぜ、俺はここまで彼女から離れたくないって思っ

てしまうのか  
別に結婚に関しては気にしてない、なんならめでたいことだ。アリスが幸せに生きるのなら俺は安心できる……しかし、相手はあの勇者だ

本当にあいつがアリスを幸せにするのか？ いや、答えは見ないで

もわかる……

なら、殺すべきなのか？

だが、それだとアーハム帝国が勇者の願いを断って殺したって世界中に思われるであろう

どうすれば……どうすればいいんだ……俺はただ……

アーク「君と一緒に生きて一緒に傍で死にたいだけなのに……」

アリス「……何か言った？」

アーク「いや何にも……」

アリス「そう……今回のことはお父様に伝えるわ。先に言っておくけど殺そうなんてしないでね？」

アーク「わかってるよ……」

数日後

あのあと無事にアーハム帝国に戻ってきたが問題も起きた

アリス曰く、皇帝はとても怒ったらしい

まあ、そりゃそうだな……あんな無礼な勇者に自分の娘をあげるわけがないよな。

それで皇帝はすぐさまバサビイ共和国に国家間で繋げた通魔機で猛反論するが

「では、結婚はしませんがアリス・フォン・アーハム様をこちらに在住させるという選択肢がありますが……こちらも断れば世界中にアーハム帝国に対して制裁をくわえますが？」

アレクサンダー「な!? ふざけるな!! 第一、アリスは魔法の才能がないのになぜ勇者様のパーティーに入れないといけんのだ!」

「ほう? 我々としては良いことだと思いますよ? 勇者様と一緒に魔族殲滅の旅に出れるのは大変光栄ですし……何より勇者様のお願いを自分勝手な事情で断ったアーハム帝国の地位が揺るぎますぞ?」

アレクサンダー「くううう……!!」

……って言ってたらしい。

勇者を核みたいな扱いをされているな

勇者という危険な爆弾をチラチラ見せられたら従うしかあるまい。

あと、あちらが上から目線すぎる。

コツコツコツ

現在、俺はアーハム城の廊下にいる。

まあ、やっぱり皇帝が俺を呼んだってことだろう……

アーク（アリスが……いなくなる……か）

現在、夜で暗くあまり人通りが少なかった……が

誰もいない廊下だが空気が重い

アーク（もう……あの笑顔も見れないのか）

本当は心の底から公開をしている

俺が出たいがそれだと逆にアリスの敵が増えて俺が潰しまた増えるというイタチ合戦が始まってしまう。

アリス『私は無能だったからみんなの役によくやく立てるから嬉しいもん!!』

アーク（……俺が嫌なんだよ）

ただ、彼女の笑顔が恋しいだけだ

なんで世界はアリスを狙いたがる？

ただ彼女の力は可能性にすぎず本当にまた俺みたいなのが出てくるとは限らないのに……

アーク「……あ、もう着いたのか」

いつの間にか前に来た皇帝の部屋に着いていた。

コンコン

アーク「失礼します」

アレクサンダー「入れ」

カチャ

中に入ると皇帝がいた。

皇帝は皇族らしく優雅に紅茶を飲んでいた……どうやら一旦は怒りは静まったらしい

アレクサンダー「アークよ……よくぞ来てくれた」

アーク「いえ……それより要件は？」



アレクサンダー「……バサビイ共和国の勇者の婚約……聞いたか？」

アーク「はい、本人から直接」

アレクサンダー「……まったく……バサビイ共和国は勇者を利用して好きなことをしおって」

アーク「……逆に勇者のほうも気が付いていませんよね」

アレクサンダー「ああ、報告によれば勇者であることをいいことに女や富を独占していると聞いたが？」

アーク「はい……先日、潜入してところによると勇者は勇者法をいいことに使い、近隣の町や村から若娘を城に強制的に連れて行き娯楽を楽しんでいるようです」

アレクサンダー「……もはや勇者ではなく愚者じやのう……して、反勇者勢とは？」

アーク「はい、主に勇者をよく思っていない組の塊だそうですが……大体は親エルフ勢がほとんどです」

アレクサンダー「そうか……バサビイ共和国の人間はエルフを格下に見ているっと思っていたが……」

アーク「そんなこともない……っって感じですね」  
アークと皇帝が現状を確認していると

コンコンコン

「失礼します」

アレクサンダー「入れ」

カチャ

扉を開けたらそこには前に見た白髪の老人エルフの執事がいた。

「皇帝陛下……通魔機から連絡です」

アレクサンダー「……一応、聞くが誰からだ？」

皇帝は暗い顔で聞くが、もう相手は誰なのかは予想はついているら

しい……

「……バサビー共和国の首相からです」

アレクサンダー「……はあくくくくくく」

ため息を吐き、決心したような顔で言う。

アレクサンダー「……わかった、変わろう」

「っは」

すると執事はどこかに行き、しばらくすると手に大事そうに包みながら空色のクリスタルを持ってきた

なるほど……あれが通魔機か。初めて見たな

「こちらです」

アレクサンダー「……ああ、ありがとう……私だ、アレクサンダー！

フォン・アーハムだ」

皇帝が執事からクリスタルを受け取り、クリスタルに向かって話しかけるとすぐに返事が返ってきた。

そして、この会話が戦火に進むとは思ってもいなかった。

## 五十三発目 めっちや煽るアーク

皇帝は手に通魔機である空色のクリスタルを持ち会話を始めた。

「おおー、これはこれは皇帝陛下……こんな夜分遅くに連絡してしまい申し訳ございません」

アレクサンダー「全くだ……事前に予約もせずに連絡するとは……もう少しこちらのことも考えてほしいものだな」

「申し訳ございませんねえ……それで？ 例の勇者のお願いはどのようなされるつもりですか？」

アレクサンダー「……こちらの答えは断固反対だ……なぜ、数日前に召喚されたばかりの勇者を二回しか会っていない我が第二皇女を結婚させなならん？」

「おや？ 勇者様の意思を拒否するのですか……仕方ありませんねえ……我が周辺国家からの制裁をさせてもらいます」

アレクサンダー「ふん、やれるんものならやってみろん？」

なんかバサビイ共和国にしては諦めがいいな？

アリスを手に入れるためならどんな手段でも使ってくる奴らだったのに。

「では……その代わり第一皇女クロエ・フォン・アーハムを勇者の新しい妻としてこちらに引き渡すのを要請します」

アレクサンダー「はあ!？」

うわ、そう来るか

アレクサンダー「ふざけるのは大概にしてほしい!! 確かにクロエは魔法の才能はあるが新しい妻!? ふざけるな!! 例えそれが勇者のご厚意でも私の大切な娘たちは渡さん!!」

「……ほう? 今の聞きましたか勇者様?」

ペガサス「ああ、聞いたぞ! しかと聞き取ったぞ!!」

しかも近くに勇者もいたのかよ

「それに今の聞きましたか!? 各首脳の方々!!」

はい!?

今、ほかの国の首脳と一緒にいるのかよ!?

「ただ準備は良いんだよ!?

「ああ!・聞こえたぞ!!」

「アーハム帝国は神の御使い様の言うことも聞けない子供だったのか!?!」

「いつ、貴様らが神より偉くなった!?!」

「今こそ、罰を与えるべきだ!!」

「っていうことだ皇帝君? アリスを引き渡せば平和に解決ができる、逆にクロエを引き渡すのも良しとしよう……しかし、どちらとも拒否するというなら……我々、勇者連合が相手しよう」

ペガサス「くはははは!! 賢明な判断をするべきだと思うぞ?」

アレクサンダー「……くそ!!」

……ふむ、宣戦布告っていう奴か

前に世界の軍事バランスを調べたがアーハム帝国はやっぱり一番だった……しかし、それはアーハム帝国単体でだ

他の国が対一で戦えばアーハム帝国が勝つが集団対一だとやはりアーハムでも荷が重いらしい

それに相手には勇者がいる世界は間違いなく勇者を正義とみてアーハム帝国を悪とみるだろうな

アーク(……言うのもなんだがこいつらがアリスを誘拐したらなあ……思う存分、暴れられるのだが)

どうしようか……と考えているうちに一つ閃いた

アーク(……いや待った、一か国だけ今回の勇者のことを気に食わない国がいたな)

そういうえばバサビイ共和国に潜入していた時にノエルたちから言ってたな

……ちよつと恩を売ってやる

アーク「皇帝陛下……すみません」

アークは皇帝に近寄り通魔機を奪った。

アレクサンダー「アーク!?! 何を!?!」

アーク「えく……各国の首脳の皆さん? 聞こえますか?」

「ん？ 誰だ貴様は？」

アーク「あゝ……別に誰だとか気にしてませんが……あなたたち恥ずかしくないんですか？」

「恥ずかしい？ あははははは!! 何を急に言っているんですか？」

アーク「……なんで大の大人がたった一人の非力な少女を狙うのがわからなくてね？ え？ なに？ おっさんたちロリコン？ 変態？」

「はははは……おい、貴様……私は今いい気分なんだ？ 今ここで謝罪すれば許そう」

アーク「あ、悪いね？ お宅で言うエルフは人間の物真似をする虫だつて言つてたから俺も学んで君たちがふざけたことを言っているから謝罪はしないわ」

「ほ、ほう？ き、君？ わかつてるのかい？ 今、こちらには世界中の国のトップが集まつて君の言葉が丸聞こえなんだよ？」

アーク「知つたことか。つてか勇者聞こえるか？ この場だから言つておくけど……そろそろ権力に縋りつくのは人として終わつてるよ？ 君、前世じゃ女性に好かれなかつただろ？……だから東京の駅で毎日痴漢やら盗撮やら勤しんでいたんでしょ？ んで、最後は階段から落ちて死んだろ？」

ペガサス「おい、貴様!! なぜ、知っている!？」

アーク「それに……死んであの世に行つて神様の力を盗んでこの世界に来たんでしょ？ この偽勇者君？」

顔が見えないのをいいことに真実を言う

「……ゆ、勇者様？ そ、それは一体どういう？」

ペガサス「ま、待つて！ おい！ 貴様！ なに戯言を言っているんだ!？ 俺は勇者なんだぞ!？」

アーク「え？ だからですよ？ それに……楽しいですか？ ハーレムライフは？ 近隣の町や村から若い女性を無理やり連れてきて自分のハーレムに入れるのは？ どうせ、アリス様もその中に入れて慰め者にする気だつたんでしょ？」

ペガサス「いい加減にしろ!? 俺はそんなことはしてない!! それに今からアリスに婚約を結ぼうとしているのにそんな慰め者にするわけがないだろ!」

しかし、勇者は反論するが……

「大変申し訳ございませんが……勇者様……それは一体どういう?」

「……そういえばこの国に入国した時、女性を全く見なかったな?」

「ああ、でも城の中では女性が多すぎるし……」

「どうやら、詳しくは調べないで勇者のことだけを信じていた狂信的な国のトップもいたようだ。」

だが……

「諸君!? なぜ、誰かもわからぬ奴のことを信じる!? おい! 貴様

! 証拠は!? 証拠はどこにある!」

勇者に疑いが出たがバサビイ共和国に止められた。

アーク「どこも何も……お宅らの勇者が命じたことでしょ? なに何故いつまで勇者という玉座に座って甘い蜜を吸うのか、なぜ早く魔族殲滅の旅に出ないのか? と思ひましてね?」

「き、貴様アアアアア!! まだ間に合うぞ!? 今からでも泣いて詫びれば許してやるぞ!」

アーク「あ、すみませんね? エルフって人間の真似事で生きている生物らしいので謝罪の仕方がわかりませんので? それに、首相さんも1000人も奴隷をやってますよね? ダメですよ? ママに教えられなかったのですか? 弱い者いじめはダメだって? あ、もしかしてバサビイ共和国の人間はエルフより偉くて頭がいいから勉強はしなくていいっていう理論で無知という天才なんですかあ?」

「な!?! 貴様アアアアア!? もう許さん! 民族浄化を行う!! いか? 貴様のせいだからな!」

よし、まんまと乗っかてくれた

ちなみにだが「民族浄化」とは簡単に言ったら相手の種族区・国民を女子供関係なく全員殺すという意味だ。

アーク「ええ、いいですよ? やれるものならですが? っていう

かなんですか？ 勇者連合って？ もしかして、一人じゃ倒せないからみんな集まれば怖くない!! って思ってるんですか？ ええ……人間って案外泣き虫なんですネえ？ あ、悪気はないんですよ？ ただ、エルフ側からの認識を変えるだけなので」

「ふ、ふははははは!! ここまで来ると一周回って清々しいわ!! ……いいだろう、戦争だ！ 貴様らエルフをこの世界から一匹残らず絶滅させてやる!!」

アーク「ええ、いいですよ？ あ、ならせつかくの戦争ですし楽しくしませんか？ あなたたちが勝てばアリス様とクロエ様を引き渡しアーハム帝国全体の国土、資金全てをバサビイ共和国に献上します。逆にこちらが勝てば勇者を偽物だと確定させます」

「ん？ なんだ？ お前らアーハム帝国側の勝利報酬が少ないのではないか？」

アーク「ええ、だからですよ？ だってどうせ勇者のこの戦争に参加させる気でしょうですし……」

そして俺は満面の笑みで、大きな声で言った。

アーク「勇者もいて各国の支援もあるのに負けることなんかありませんよね？ 偉大なバサビイ共和国の人間様（笑）？」

ペガサス「ぐははははは!! いいのか？ この俺、勇者まで参加しているのか？」

アーク「ええ、そうですが？ それにあなたたち超弱小国の群れどもは大国アーハム帝国と戦うのは可愛そうなのでハンデを上げましょうか？」

「は、ハンデとは……あははははは!! 我々も舐められたものですね!! いいでしょう、ならそちら側の戦力は歌う死神一体だけにしましょう!!」

アーク「あ、了解しました。では、いつ戦争しますか？」

「ほう？ 随分余裕なんだな？」

アーク「まあね？ ……では疑似国家の皆さんは準備が必要でしょ

うから準備期間を上げましょ？　いつ、戦争をしますか？」

「ガハハハハハ!!　面白い！　実に面白い!!　いいだろう！　なんなら今からでもいいぞ!!」

アーク「……そうですか……では」

するとクリスタルは光を失い静かになった。

アレクサンダー「……はあ、アーク……お主……何勝手にやってくれたんだ？」

アーク「……申し訳ございません……勝手なことをしてしまい」

アレクサンダー「よい、そなたの罵倒が案外面白かったから今回は特別に許す」

アーク「……はい」

アレクサンダー「しかし……よほど勝てる算段はあるようだな？

娘二人も出すとは？」

アーク「あれ？　怒らないんですか？」

アレクサンダー「本当は今すぐにでもお主の殺して晒し首にしたいが……通話している時の雰囲気から見て……よほどの自身があるようだな」

アーク「ええ、この私が負ける要因はどこにあるんですか？」

アレクサンダー「ほっほっほ……最近の若者は元気がいいのう」

アーク「……では今から行ってきます」

アレクサンダー「おや？　もうかね？」

アーク「ええ、私の世界の常識は通用しないのはもうわかっているので先に先手を打つのと下準備をしてきます……ですが」

アレクサンダー「なんだね？」

アーク「……私は必ずこの戦争に勝ちましょう……その代わり……私の主人……アリスには秘密でいてほしいのです」

アレクサンダー「……理由を聞こう」

アーク「……言えば必ずアリスは止めに来て最悪ついてくるでしょう……だけど、私は彼女の笑顔が血で汚れてほしくないのです……だから、アリスには秘密でいてほしいのです」

アレクサンダー「……わかった、こちらからは勇者の嫁に行くため



の座学を勉強させて外とは繋がりを絶たせよう」

アーク「ありがとうございます!!」

アレクサンダー「……しかし、負けたら……未来永劫、お前を恨むからな?」

アーク「わかっています……では行ってまいります」

こうして俺は大切な人を守るために国に喧嘩を売った。

一方そのころのバサビイ共和国では

「ふん、どうやらアーム帝国は自己過剰でいるようだ」

「ああ、しかしなぜ要求を歌う死神一体にしたんだ?」

「ああ? そんなの決まっている。奴を倒せば世界中から死神と自称しているバケモノを倒した我々が称賛され威厳を上げることが出来る。ただ広く力があるアーム帝国とは頭が違うのを示されるからな」

「だが勝てるのか?」

「安心しろ。我々には勇者がいる」

ペガサス「ああ! 諸君! ついに我々の時代が来た!! 今ここで我々の正しさを世界に証明するぞ!!」

「!!」「!!」「!!」「!!」「!!」

勇者が激励を上げると格好のトップたちも声を上げる。

しかし、バサビイ共和国の幹部は

「……計画通りですね」

「ああ、こいつらは我々が掌で転がしているのわかってないからな」

「……しかし、戦争するなら……例の古代兵器を使いますか?」

「いや、首相曰くまだ使い方がわからないから使用はしないそうだ」

「了解……あと、研究部からの報告です……緑色の液体に浸されていた白い女ですが……人間ではないそうです」

「……なに?」

「正確にはゴーレムの仲間らしいです」

「……ゴーレムなら使役魔法で乗っ取れるな……研究部に使役魔法を使うよう言っておけ」

「わかりました……しかし、あの偽勇者は本当に馬鹿ですね」

「ああ、奴は女さえ手にいれば用はない……まさか、我々が奴に敬っていると思っっているのか？」

「……ま、私たちは最初から勇者に敬意などありませんからね……奴はエルフの姫ですが我々は歌う死神が欲しいので」

「ああ、アーハムからまさか言ってくるとはな」

実はバサビイ共和国の本当の目的はアーク自身であった。

理由は最近になってできたが……マール工業国家がクーデターで墜ちマール軍事国家になったのを聞いた。

軍事国家になってからは軍拡に力を入れているらしく、噂では魔法使いを一回で殺せる兵器も開発できたらしい

バサビイ共和国はもしマール軍事国家が世界を侵略し始めたら我々では勝ち目がない……なら、我々もマールみたいな技術を開発して対抗しよう!!

つとしたがまず、我々の国にはマールみたいな工業技術がなかった。

一度、マールから技術顧問を雇おうとしたがマールの国の方針で全て断られてしまった。

なら、我々だけで開発するしかないと思ったが……

まず、そもそも技術がない。

技術がなければマールみたいな工業技術も開発できない

バサビイ共和国の幹部は絶望し仕方ないと思っていたが……マールに行かせたスパイから朗報を聞いた。

マール軍事国家の兵器を一瞬だけ見れたが、歌う死神ととても似ていた。

この情報を手に入れた幹部は喜び、しかも勇者はアーハム帝国の

第二皇女アリス・フォン・アーハムが欲しいと聞いた。

なら、こちらから喧嘩を売って戦争をしようというものだった。

勝てば勇者はエルフの姫を手に入れて、バサビイ共和国の幹部はアークの死体を手に入れられるからだ。

アークを手に入れたら軍に入れるのではなく解体し解析してマーレに備えるためだ。

逆に負けても勇者は元々から偽物なので全部の責任を勇者に投げれば問題ない。

ペガサス（しかし……あの通魔機から聞こえた声……どこかで聞いたことがあるような？）

「勇者様？　どうかされましたか？」

ペガサス「あ、いや！　何でもない……それでは諸君、明後日に出陣をしよう!!　その間まで英気を養いたまえ!!」

しかし、その間にも死神は急速接近しているのは気が付いていない。

ペガサス「……では、諸君。私は少し用があるから先に失礼をする」  
こうして勇者が滅亡する運命が動き始めた。

ペガサス（やっぱり……俺のアリスはあいつらに脅されてるのか!?!  
おそらく、あの護衛か!!　許さん！　待っててくれアリス！　この

勇者が絶対に助けてやるからな!!……あ、でもその前にやることがあったな）

そして同時刻、バサビイ共和国の城の中

もうすでに暗くなった廊下を一人のシスターがいた。

ノエル「どうしたんでしょうか？　神の御使い様がこんな時間に呼ぶなんて?」

暗い廊下をノエルが歩いていた。

なぜか、ここ最近で城に呼ばれることが急に多くなりしかも自分一人が呼ばれることが多くなり教会を空けることがあった。

ノエル「あ、そういえば……前にダンジョンに入ったときに部屋に

来るよう言われましたね」

多分、それであろう

でも、呼ばれる理由がわからなかった。

ノエル「でも、ダンジョン攻略は楽しかったのです……トオル様は元気にしてますでしょうか？」

前に第二皇女アリス・フォン・アーハムの部屋で再開して約束をしたがそれが丸聞こえですごく怒られたつと聞いて申し訳ないと思っ  
た。

だけど、普通に許してくれたり談笑にも付き合ってくれるでとてもいい人であった。

ノエル（トオル様の頭つて……生まれつき何も<sup>ハ</sup>ない<sup>ゲ</sup>だったのでしょうか？）

トオルが勇者と同じ世界から来たというのを聞いてすごく驚いた。

最初はトオルは勇者かと思ったが本人曰く違うようだ。

まあ、本当に勇者なら祖国がすでに予言で出している。

ノエル（……でも、神の御使い様が降臨なされた時は予言はなかった……なんでしょうか？）

だが、それでも彼はバサビィ共和国が認める公式の勇者だ。

偶然であろう。

ノエル（あ、着いちやつた……早くマザーのもとに帰りたいです）  
知らないうちに勇者がいる部屋に着いてしまった。

正直、自分は勇者よりトオルのほうが勇者らしくて好きだ

勇者は威張ってばかりいるが、トオルはちゃんと目と目を合わせて話してくれて楽しい……おまけに料理もうまい

ノエル（……もつとトオルと一緒にいたいなあ）

どこかトオルと一緒にいたい心を黙らせてノックする。

コンコン

ノエル「失礼します、ノエルです」

ペガサス「ああ♡ 入ってくれノエルちゅあああん♡」

ノエル「失礼します」

カチャ

勇者のいる部屋に入ると勇者がこちらを見て待っていた。

ノエル（な、なんでしょう？　なぜか神の御使い様を見ていると吐き気がするんですが……私、体調でも崩したのかな？）

ペガサス「の、ノエル・スカルトオさん!!」

ノエル「は、はい!!　なんでしょう？」

ペガサス「お、俺と!!」

俺の妻として結婚してください!!」

ノエル「……はい？」

……一応言っておくがこの勇者

現在、アリスと仮にだがクロエに婚約を申し込んでいる。なのにノエルに婚約を申し込んでいるのである。

ペガサス「俺は君に初めて会った瞬間、天使かと思った。俺はこれまでの戦いで厳しさもつらさも知れた。だが!!　君と一緒にならん

な苦難にも立ち向かえる!! だから頼む!! 結婚してくれ!!  
頭を下げ申し込む勇者に対してノエルが一言……

ノエル「えつと……すみません……無理です」

## 五十四発目 下準備

アーク「……もう何回来たんだよここ？」

昨日の夜にアーハム帝国を後にしてスライダーに変身して音速でバサビイ共和国に向かった。

一回も寝てないがアリスのことが関わっているので脳が興奮状態で全く眠気が来なかった。

現在、バサビイ共和国に不法入国している

以前のポイント 7388

変身

スライダー 250

サイボーグ 150

合計ポイント 6988

なぜ不法入国しているのかというと今回の下準備に関するからだ。

アーク「……全く……少しはアリスと一緒にゆっくりしたいのにな」

アリスと街で一緒に回る約束をしているのに勇者のせいで毎度延期になってしまった。

まったく……責任を取ってほしいぜ

アーク「だが……前に来た時と違いはあるな」

バサビイ共和国の町は現在は静かで人に行き来も少なかった。

前に来た時は祭りみたいにかかったが今じゃその逆だ。

アーク（うーん……あ、あの人ならいいかな）

情報が欲しいが人がいないので前にお世話になったところに行く。

アーク「おーい、おやつさん？ いる？」

「ん？ おお、お前か？ また来るとはな」

着いたのはバサビイ共和国に来た初日に言った武器屋だった。

「お前、まだこの国にいたのかよ？」

アーク「あ、いや……一旦は出たが用があつて戻ってきたんだが……なんかあつたのか？」

「ああ、実はこの国がアーハム帝国に戦争をするらしい」

アーク「わー……物騒だなあ（棒）」

「……最初は無謀だつて思ったが勇者が一緒に行くらしくてな？ そつからは国民は総盛り上げだ。勝てるだとかなんだとか言っているぜ？」

アーク「えつと……噂じゃアーハム帝国は例のバケモノ歌う死神を出すつて聞きましたか？」

「おう、まあ俺には関係のない話だがな!!」

豪快に笑うドワーフの店主

アーク「ははは……でもなんでこんなにも人がいないんですか？」

そんなに余裕でいられるなら少しは人手がいるでしょうに？」

「ああ、簡単だ。若者は自国の役に立ちたいと軍に志願しているのさ……おかげで軍のほうは人員が多すぎて困ってるそうだな」

アーク「戦争ですか……なんでこうなつたんでしょうね？」

「なんか……首相は「アーハム帝国の第二皇女アリス・フォン・アーハムが我が国に救助要請が来た！ どうやらアーハム帝国全体から兵器として使われているから助けてほしいらしい!!」……だつてさ」

アーク（……扇動か……笑えるな）

「だがよお？ 俺は何か怪しくてなあ？」

アーク「怪しい？」

「第一、この国はエルフを格下に見ている国だぜ？ なんでエルフの皇女さんがこの国に助けを求める？ アーハム帝国もバサビイ共和



国の人間とは仲が良くないって聞いたからな？ ミール聖教国とかあつただろうに？」

アーク「……言われてみれば確かに」

「まあ、俺には別に関係ないがな!! 金儲けのためならどこだって行つてやらあ!!」

アーク「え？ おやつさんも戦争に行くのか？」

「おう！ 俺は後方で剣の修理屋として城から誘いが来てるんだ！ しかも報酬も高え!! これを逃すわけにはいかん!!」

アーク「大丈夫……なのか？」

「心配すんなよ!! 俺は後方だからよほどのことがない限り死なないって!!」

アーク「……」

それを聞いたアークは何かを決めたかのような心を持つと腰に手を入れた。

アーク「おやつさん……ちよつと商売しないか？」

「おう！ 明日、行くつもりだったからあんたで最後にしよう!! なんだ？」

アーク「……これなんだが」

ゴトリ

店主の目の前に置いたのは……

「ああ？ これつて前に研磨したナイフじゃねえか？ まだ研ぐ必要はないぞ？」

アーク「……いや、修理じゃなくてコイツを売る」

「お？ なんだ？ こいつはお前さんのもらい物だろ？」

アーク「いや、タダで売つてやる」

「タダ!? お前これどんだけ傑作かわかつてるのか!？」

アーク「わかつてるさ……こいつをくれてやる、その代わり今回の戦争には参加するな」

「はあ？ 何言つてるんだ？ こんなチャンス二度とないぞ？」

アーク「頼む、行かないでくれ」

「……なんだ？ 俺に惚れてる……わけないか。なぜ、そこまで行かせないんだ？」

アーク「あー……この戦争は歌う死神が参加するんだが妙に嫌な予感がしてな」

「へっへっへ？ なんだ？ あんちゃん占い師か？」

アーク「……単なる歌う奴だ」

「……ッ!! なるほどねえ……あんちゃんが例の奴ねえ……っへ、気が変わった……明日、商売拠点を移すか。もしこの戦争で負けたら商売どころじゃないからな!!」

アーク「……ありがとな……それじゃ……今度会ったらまた商売の相談をさせてくれ」

「おう、死ぬなよ」

こうして俺は武器屋を後にした。

アーク（……流星に関係のない種族までは殺すほどの冷酷さは持っていないからな）

あとは勇者連合なる武装組織の戦力さえ分かればいいんだが

アーク（あ、そういえば……ノエルは大丈夫かな）

彼女たちはミール聖教国が故郷である。

確か、派遣で来たはずなので帰国命令が来るはずだ。

アーク（ちよつと覗きに行くか）

まあ、帰国準備をしていたら手伝うか

まるでゴーストタウンみたいになったバサビイ共和国の道歩いていく。

アーク（さてと……そろそろ見えてくるはず……ッ!?)

ノエルが迷子になったときに一緒に行った道を再び辿っていくとそこにはいつか見た教会があった……が

アーク「おいおい、なんじゃこりゃ」

なんと教会がボロボロに破壊されていた。

ノエル「あ！ トオル！ 来たんですね!!」

アーク「ノエル！ 何があったんだ!？」

ボロボロになった教会からノエルが出てきた。

アーク「マザーは!? 無事なのか!?!」

「私はここに!」

あ、良かった無事か

アーク「何があっただんですか?」

ノエル「じ、実は私……」

勇者様の結婚の申し出を断ってしまったんです」

……はあ!?

アーク「え、勇者って……確か、今アーラム帝国の第二皇女アリス・フォン・アーラムに婚約を申し込んでませんでしたっけ?」

ノエル「え!?! そうなんですか!?!」

いや、知らんのかい!?

アーク「え、でもなんで?」

「それは私からお答えしましょう」

マザーによると

ここ最近、ノエルが城に呼ばれる頻度が多くなり最初は不審に思ってたのですが勇者様からの命令で呼ばれていたので仕方なくノエルを行かせましたが帰りが遅かったのそうだ。

そして、昨日帰ってきて最初に発したのは勇者に婚約を申し込まれたそうさ。

しかし、ミール聖教国のきまりで聖職者は基本結婚はできないらしい（一応、ちゃんと申し込めばできる）

だが、勇者はいきなり申し込まれて指輪も渡してきたがきまりで断った（偉い）

何度も勇者は迫ってきたが断り続け、最後に

「でも勇者様は大してすごいことをしていないのに何でそこまで言えるんですか？」

つと言った瞬間、勇者は固まってしまいノエルも「もういいもかな？」っと思いきや勝手に帰ったそうさ。

「まったく……例えば勇者様でも私のノエルを嫁に欲しいなど100年早いです!!」

ほんと、ノエルは言葉に容赦がないな。

「しかし……帰ってきた夜に何者かが教会に侵入し教会を破壊したんです」

アーク「いや、もう勇者が犯人じゃん」

「……ですがそれを今朝城に訴えたんですが聞いてもくれなかったんです」

アーク「……本当ですか」

「ええ、まあ、もうすぐでアーハム帝国と戦争するらしいので」

アーク「あ、そうでしたね……マザーたちは参加するんですか？」

「いえ、しません……祖国から帰国命令が出たので近いうちに出る予定です」

あ、よかった

ノエルたちも参加していたら困るもんな。

「長期戦になるらしく若者が参加を呼び掛けていますが……大丈夫でしようか……それに相手は歌う死神らしいので」

アーク「そうなんですか!?! まあ、でも敵は一体なので勝てますよ!!」

「……まあ、こちらは連合で行くらしいのですが……なにか胸騒ぎが

します」

まあ、目の前にいるのが歌う死神本人なんだがな

「私たちは早く出国したいのですが……観光客などを優先していて我々は後なんですよね……」

アーク「へえ……いつ、軍は出撃するんですか？」

「確か、明日の朝に出撃式があつて演説の後に出撃だったはずです」

アーク「わあ……出撃式見れるじゃないですか!! いいなあ……」

「嬉しくなんかありません……戦争なんて……私は嫌いなので」

嫌そうな顔を見るに本当に嫌そうだな

ノエル「……マザー、申し訳ございませんが少しトオル様と話してきていいですか?」

「……いいですよノエル。でも国中が今緊張しているから早く戻ってくるように」

ノエル「ありがとうございます!! トオル様! 少しいいですか?」

アーク「……おう」

何やらノエルは俺に用があるらしく路地裏に連れてこられた。

アーク「……なんだ?」

ノエル「……トオル様は今回の戦争のために来たのですか?」

アーク「……まあ、違うと言えば嘘になるし……そうだってことになるなあ」

ノエル「トオル様は戦争に参加するんですか?」

アーク「いやいやいや……アーハム帝国は歌う死神アークを出すんだろ? トオルは出ないよ」

ノエル「そうなんですか!! よかったあ……もし、トオル様が人を殺すようなことをする羽目になったらと思ひまして……」

アーク「あははは!! ノエルはやっぱり優しいな!!」

ノエル「私たちは後日、ミール聖教国に戻ります」

アーク「ああ、つまりまた会いたいってことだろ?」

ノエル「はい! えっと、戦争の勝敗関係なく今度はミール聖教国

に来てください!!」

アーク「おう！ その時はノエルが俺を案内してくれよ!!」

ノエル「はい!! ではまた今度!!」

アーク「じゃあな!! あ、あとノエル!!」

ノエル「はい！ なんですか!?!」

アーク「結婚はそんな簡単に結ぶものじゃなくて今後の人生もかかっている大切な契りだから勇者でも簡単には結ぶなよ!!」

ノエル「はい！ ありがとうございます!!」

こうして俺はノエルとは別れた。

アーク（……だがすまんノエル……トオルとしての俺は人殺しはしないがアークとしては殺すよ）

先ほどのノエルと話していた時の暖かい心から一気に冷たくなりそつと心の中で謝った。

これは俺の大切な主人が掛かっている戦争だからな

教会を後にしてマザーから聞いた出撃式が行われる会場に向かった。

アーク（つて言っても城の目の前なんだがな）

城の前には広場があり、そこでは大人数の大人たちがいて式の準備をしていた。

花を飾ったり舞台を用意してたりしていた。

アーク（今ここで勇者の正体を叫んだら……まあ、間違いなく非難轟々で牢屋にシューーツ!! されるな）

建物裏から広場を観察する。

アーク（さてと……確か、明日出撃式があるんだったよな？ なら、実行するならその時だな）

計画を立て、別のところに行こうとしたら

「お願いだ!! 妻に合わせてくれ!!」

アーク（ん？ なんだ?）

何やら騒ぎ声が聞こえたので行ってみると

アーク（あ、ダンジョンであった勇者の護衛だ）

大人数の騎士に拘束され城から出されたようだ。

「頼む!! 妻を返してくれ!!」

「黙れ!! 貴様は勇者様の所持品を盗もうとした大罪人だ!!」

前にあつた護衛の青年が騎士に連れられて馬車に乗せられていた。  
アーク（つけてみるか）

「入っとけ!!」

「うわ!?!」

青年が連れてこられたのはバサビイ共和国の一角ある監獄だった。

「く……………う……………なんでだ……………なんでなんだ」

ぶち込まれた冷たい牢獄で青年は呻く……………

この監獄は地上5階建てで高い塀で囲まれており、その壁の前には魔法使いの使い魔である熊や狼などが徘徊していた。

「……………早く妻を助けなさいといけないのに」

しかも自分が入れられた牢屋も最上階の牢屋に入れられたので脱獄も絶望的だ。

「なんで……………なんで俺なんだ……………」

ことの発端は昨日のことだった。

昨日は普通に勇者の警護をしていた。

なぜか各国の首脳がこの国に来た……………最初は「親善を深めるためのパーティーでもあるかな?」…っと思っていた。

だが、後で上司に言われたのはアーム帝国と戦争をするそうだった。

別に国のためなら戦うが自分の役目でもある勇者の警護をする兵士は勇者とともに戦場に出撃するそうだ。

だが、自分は戦場に行くのは嫌だった。

何故なら自分は妻がいる、勇者に奪われてしまった妻がいる。

戦場で死ぬのはもちろん怖いが妻を残して死ぬのはもつと嫌だった。

最初は断ったが勇者護衛の際に持ってた魔法の成績が一番良かったのが仇となり出撃するよう命令された。

しかも、戦う相手は「歌う死神」だ。

上司たちは余裕をこいているが……確かに勝てるだろう

だが誰かが死ぬのは確実だ……ダンジョンで分かったがあの勇者は前に行きたがる

そのせいで魔法使いの支援攻撃もできないのだ。

「あいつと一緒に行くななんて……死んでもごめんなのに!!」

どうせ戦場でも勇者は前に出る

そして、俺はその時に囮に使われて死ぬのが見えている。

死ぬなら妻を見てから死にたい……妻が勇者のところに行つてからは全くつて言つていい程、話してもないし会つてすらない

だからせめて!! せめて妻だけでも助けたい!!

その命令を下された次の日に出撃があるらしいがその日の夜に兵舎を抜け出し、勇者が住んでいる城に忍び込んだ。

暗い廊下を駆け抜け、メイドが住んでいる部屋にたどり着いた。

そこで泣いている妻を見つけた。

妻も自分だと分かった瞬間、こちらに走り出し抱きしめあった。

そして……言つた

「この国から逃げよう」

そして自分は妻を抱えて逃げ出した。

だが、城の庭まで出れたところで見つかつてしまった。

最初はなぜ見つかったのかはわからなかった……自分でも言うのはあれだが潜入は得意な方であった。

理由はすぐにわかった



妻の首に禍々しい模様が あった

自分は魔法の才があるのですぐわかった

「使役魔法!？」

そのあとわかったことだが勇者が使役魔法で妻を奴隷にしていたのだ。

契約書には心身は汚さないつと書かれていたのに!？」

そのあと私は死ぬほど苦しい拷問を受けた。

妻は勇者によって再び連れていかれた。

アーハム帝国のスパイとか言われたが私は妻と一緒に幸せに暮らしたいだけだ

そして、護衛という役割は解任され国家反逆罪とかよくわからない罪を着せられて現在にいたる

「……殺したい……妻との幸せを壊したあいつに!!」  
勇者

アーク「よ、護衛さん？」

「え……あ、お前って!？」

アーク「なーんか、困っている気配を感じたから来ちゃったぜ!」  
牢屋の窓の鉄格子から覗いていたのはダンジョンで活躍した……

「トオル……だったか?」

アーク「おう! 正解だ!!」

「で、でもここは最上階……」

アーク「細かいことは良いんだよ!!……なんで? なんでここに入れ

「られているんだ？」  
「じ、実は……」

アーク「うわ、最低やん」

護衛……いや、“元”か

元護衛からすべてを話してくれた

「なあ!! 頼む!! お前、ボス・スライムを一人で倒しただろ!? ここから出してくれ!!」

アーク「……出してやりたいのは山々なんだが……すぐばれて奥さんを助けられないぞ?」

「でも……俺は……俺は……」

はあ……マジで助けたいが面倒ごとを増やしてくないし、まず俺はアリスのことを優先する

アーク「つてか、別に勇者だったらお前でも倒せるんじゃないやね?」

「魔法だったら倒せるんだが……いいか? 俺は魔法使いだ……勇者は近づいて戦ってくる……わかるか?」

アーク「あ、もしかして接近戦は苦手?」

「ああ……まあ、これは全魔法使いに共通することなんだが……敵が近すぎると自分に誤爆してしまうんだ……まあ、一部例外はいるが」

アーク「まさか……あなた運動は苦手系?」

「そうだが? つてか魔法使いは頭を使って戦うから騎士みたいに筋肉モリモリにはならん」

アーク「ふうくん?……あ、待ったコイツ使えるかも」

「な、何が使えるんだ?」

アーク「なあ? この監獄さ……確か、バサビイ共和国の中では一番デカイはずだろ?」

「ああ? なんだって最も警備が厳しい所だからな?」

アーク「……ここにいる囚人さ……もしかしてお前みたいに妻取られて勇者に怒ったけど連れてこられた人っているか?」

「そうだ……まあ、なんで死刑囚級の牢獄に入れる理由はわからないが」

アーク「そうか?……なあ? お前は奥さんを助けたいか?」

「ツ!! ああ!! 悪魔に魂を売ろうが構わない!!」

アーク「死ぬほど助ける覚悟はあるか?」

「ああ!!」

アーク「よろしい……すまないが俺からは直接やることはできない……だけど、これくらいはできる」

「な、なんだこれ?」

俺は懐からとあるメニューが書かれた紙を渡した。

アーク「これに書かれているのを毎日死ぬ気でやれば新たな力を手に入る」

「ほ、本当か!」

アーク「……あとはお前が諦めなければ!! それじゃ! そろそろバレそうだからさようならだ!!」

頭の中で計画を立てつつ決戦の時はどうするかを考えながら俺は静かな町の中に消えていった。

そして後日、看守が監獄を見回るとなぜか妻を取られて入れられた囚人たちが……

「筋肉は裏切らない!! 筋肉教万歳!!」

つと叫んでいたそうだ

## 五十五発目 狙撃

アークがバサビイ共和国に急遽来た次の日

バサビイ共和国ではアーハム帝国との戦争に向けての出撃式が始まるところだった。

予定では今日の早朝に式をやって出撃をし、アーハム帝国に向けて進軍してきて途中で陣を張る予定だ。

「それではこれより式を始めます!! まず首相お願いします!!」

事前に準備しておいたステージの上に首相が昇り演説を開始する。

ステージ下では各国の大臣や将軍に加え、勇者までいた。

「……我々はこれまでアーハム帝国とはいい関係を結んできました……しかし、その仲もたった今切れられました!! 我々はこれよりアーハム帝国に進軍しアーハム帝国を解放しより良い世界を作り帝国に征服されている地域を解放させああああああ」

首相が演説をし市民がそれを聞いている。

大体は嬉々として聞いているが……一部だけ恨んでいる者がいた。

「……そんなの勇者がいるからだろ」

「勇者がいらないと何もできなかつたくせに……」

そう、”反勇者勢”だった。

彼らは勇者の正体が”本当”の勇者でもないことは承知している

……

なら、なぜ国民に告発しないのかという……まず、反勇者勢が本当に少人数で8人に1人ぐらいしかおらず例え言っても他の勇者勢に潰されてしまう

それに国民も勇者に酔狂しているので聞いてくれる耳もない。

「こちらは証拠をつかんでいるのに!!」

「動けないのがなんともな……」

証拠は掴んでいる

って言っても「勇者が近隣の女性を連れてきて好き勝手にしている」や「召喚の際に禁呪を使用され1000人も奴隷が死んだ」とか物的証拠ではなく実際に見た証拠だ。

あと、欲しいって言ったら実際の被害者が欲しい。

最初は自分たちも勇者を崇拜していたがちつとも魔族を倒しにはいかず女性を連れて娯楽ばかりしているのが反勇者勢に入った。

「……しかし、本当なのでしょうか？」

「何がだ？」

「……いえ、早朝に出発したときに玄関にあった手紙なのですが」

「ああ、あの宛先人がわからない手紙か？」

しかし、不思議なこともあった。

それは反勇者勢の家に一通の手紙が届いた。

内容は

(手紙に書かれていたこと)

『おはようございます。誰からの宛先なのかは事情により書けませんがお宅が反勇者勢であることが既に知っております。ですがご安心を城に密告などはしません……あなたがた様にやってほしいことがあります。本日、出撃式がありますがその時に私は少し騒ぎを起こしますので』

「魔族とは戦わずにエルフと戦争をする勇者に対する神の怒りだ」

とか

「正義ではなく悪に進もうとしている神々の裁き」

などの勇者のせいであんなったという噂を流してください。そのあとにミール聖教国に証拠を出してください。あの国も勇者については不審に思っているので世界中に告発してくれるでしょう。最後にバサビイ共和国にある最も大きい監獄ですがその中には勇者に妻を取られた夫たちが捕まっています。どうかそこに所属している看守を変えて何時でも出せるようにしてください……面白いことが起きますよ？

後は好きにしてください

ー同志よりー

「同志とは一体誰でしょうか？」

「誰だとかは今関係ない従うだけだ」  
「しかし……もしこれが嘘で我々を嵌める罠だったら?」  
「だが、このまま一生黙ったままだったら勇者勢の思い通りだ」  
「……成功してくれたらいいですが」  
「こういう時こそ『歌う死神』いてくれたらなあ……」  
「馬鹿言え……そいつは今回の戦争相手なんだぞ? 多分、今はアー  
ハム帝国のどこかにある封印場所から出されているところだろう」  
「反勇者勢の人間がひそひそとステージ裏で話していたが……すでに  
にこの国に死神が来ているのを気が付かなかった。」

そのころ同時刻

首相が演説しているステージのある広場が見えるとある見張り塔

……

その見張り塔は高さはかなりあり、しかも広場まで直接見えるほどの大通りがあるところの塔であった。

「なあ、ここを見張る必要性いるか?」

「……あ、お前も思う? 俺も必要性がないと思った」

「はあ……どうせ俺らは落ちこぼれ組ですよー」

塔の中では見張り役の兵士が三人が愚痴を言いながら警備をしている。

だが、鎧を脱ぎ剣を立てかけ完全に警備をサボっていた。

「つてかこんな所から殺しに来る奴なんているか?」

「いるわけないだろ? ここから広場までどれくらいあると思ってるだ? 弓矢でも無理な距離だぞ?」

普通は無理であろう……普通だったら

コンコン

「ん? なんだ?」

「もしかして上司がサボってないか見回りに来たんじゃないか?」

「え、やだな……おい、出る奴は装備しとけよ」

面倒くさそうに鎧を着て扉に向かう兵士。

「だれだ？」

?? 「おう、お前ら暇だろ？ 酒を持ってきたんだがどうだ？」

「おおー、いいなそれ!!」

?? 「……だけどすまんが、酒の入った樽が結構あるから一緒に運んでくれないか？」

「おお!!、いっぱいあるのか!! わかった一緒に運ぶぞ!!」

酒があるのを聞いた騎士は喜びながら外に出て行った。

無理もない平和すぎて暇だったので暇つぶしに何か欲しかったのだ。

「酒じゃ♪ 酒じゃ♪ ……あら？ どこに行った？」

扉を開けたがノックをした主はおらず、いつも通りの景色が広がっていたが……

アーク「с по койной ночью」

突如、視界外から何者かに口顔に布をかぶせられ眠ってしまった。

アーク「さてつと……聞こえたのは3人だったよな？」

正体は我らが主人公アークであった

ちなみに先ほどの言葉はロシア語である。

塔の中は階段で上がっていくらしく、途中で他の騎士がいる部屋にたどり着いた。

アーク「……二人か」

一番下にある地上に出る扉から階段で上り続けると屋上に出る構造でその中間に騎士の駐在所があった。

部屋の中は休憩のできる最低限の設備しかなく騎士が酒に飛びつくのも納得ができる。

アーク「行くか」

俺がなぜこの塔に来ているのかというところ少し用事があるからだ。

下準備も万全で早朝に反勇者勢の家を突き止めて手紙を置いた……読んだところも見たからあとは実行してくれるのを願うだけだ。



装備も最近お世話になっているレインコートに懐にはMk. 22と手にはハンカチと背中にとある銃を担いでいる。これほど軽装な理由は終わったらさっさと帰るだ。

ギシギシ……

木でできた階段を上り、騎士の視界に入らないように覗くと一人は窓の外を見て一人は本を読んでいる。

……行くか

警戒してないのか兜まで取っている。

アーク（……当たりますように）

懐からMk. 22を取り出し窓の方を向いている騎士の頭に標準を向け引き金を引く

パシユツ

「ぬあ？　なんで眠く……」

見事ヘッドショットを決め騎士は倒れるかのように崩れていった。「おいおい？　今から酒が来るんだぞ？　何寝てんだ？」

相方の騎士は不審に思わず眠った騎士を起こそうと立ち上がった瞬間

アーク「はい、御休みー」

「むが!?　だ、誰……（ω）スヤア」

背後から忍び寄り手に持ったハンカチを騎士の顔にかぶせた。すると、騎士は死んだように眠った。

アーク「睡眠ハンカチはお世話になるな」

手に持ったハンカチを見ながら任務のために屋上に上がる。

このハンカチは普通のハンカチではなく「睡眠ハンカチ」だ

そう、MGS3で出たハンカチでスパーツアのである（スパーツア↓である）

以前のポイント 6988

開発

睡眠ハンカチ 2

合計ポイント 6986

周りを見て敵がないのを確認し、騎士たちを全員部屋に運び最初から何もなかったようにする。

運び終わったら屋上に上がり広場を見下ろす。

アーク「下準備していた時、ここがいいなつて思ったが正解だったな」

そして、肩からこの任務で一番大切な銃を下す

アーク「んじや、頼むぜDSR―1ちゃん」

肩から降ろしたのは「ブルパップ方式のボルトアクション狙撃銃

DSR―1」である。

DSR―1にはサプレッサー（DSR―1用に新しく開発した）と二脚（こちらにも新しく開発した）と6―24倍スコープを装備している。

アーク「ん〜♪ この姿……流石ドイツ……いい物を開発したな」  
ライフルの二脚を展開し隣にこちらも新しく作った測定器を置く。  
え？ 測定器いるのか？ って？

いやいや、これがなきや風向きとかわからんし。逆になかったらそうやって狙撃をするんだよ？（クワイエット？ ボス？ あいつらは違う）

以前のポイント 6986

開発

二脚（DSR―1、M―2000NL両用とアサルトライフル、L  
MG両用の二つ） 2

測定器 2

合計ポイント 6982

アーク「えつと……風向きは……東に少し強いな……調整つと……距離は……」

測定器と狙撃中の間を行ったり来たりする。

……マジでこういう時こそ観測手スポッターが欲しいな。

アーク「よし、調整完了つと」

カチカチつとスコープの調整を完了しスコープを覗く。

アーク「えつと……距離は450mか……なんか1km以上を狙える奴は一流だつて聞いたな……DSR-1の300ウインチェスターマグナム弾の有効射程距離は1,100m……余裕だな」

そんなことを言いながらもスコープを覗きながらターゲットが上がってくるのを待つ……そして

アーク「……来た!!」

頬をストツクにあて、構える。

遠くから見ているので音は聞こえないがスコープから見える景色からはわかる。

「続きましては今回、軍を導く將軍です!!」

「わああああああああ!!」

今回のターゲットは軍を率いる司令官とその側近だ。

狙う理由は……のちにわかる。

「今こそ!! 我らに刃向かうエルフを一匹とも殲滅し世界に平和を」

アーク「……まったく……戦争つて言うのは戦う前から始まっているのに……呑気なものだね」

怖そうな顔で演説しているが……まさか、もうすぐで死ぬなんて思ってもないだろう

え? 勇者は良いのかって? アイツよりアリスが先だ。

それに今、勇者を殺すのは問題だ……死んで裁かれるより生きて裁かれてもらう。

アーク「ふうふうくん♪ ふふうふん♪」(某第五人格のリーパーの鼻歌です)

どうしよう……思わず鼻歌が出る。

別にクワイエットになり切ったつもりじゃないが……メタルギア

やっつけたせいで出てしまう。

そしてスコープから見える景色が將軍の顔から額に合わせていく……そして運命の時が来た

アーク「すうくくく……はあくくく……」

深呼吸をし、息を止める

すると、徐々に周りの音が遠くなっていき心臓の音も聞こえなくなってきた。

標準もターゲットの額を捉えた、弾のチェックもした、観客もそろっている……さあ、舞台は整った。

アーク「Verabschiedung」

ゆっくりと引き金に入れる力を増やしていき……

パシユツ

薬室に収められていた、300ウインチエスターマグナム弾は銃身を通って銃口から放たれた

放たれた音の無い凶弾は空を裂き、空間を貫き、市民の歓声を破壊していき……

トシユ……

「……あれ？」

スコープ内で赤い花が咲いた。(ちなみに先ほどの言葉はフランス語である)

將軍の額からトクトクと赤い液体が出てき、將軍は何が起きたのかわからないの手を額にやって血が出ているのがわかった瞬間……バタンと倒れた

アーク(まず一人)

カシヨ

慣れた手つきでコツキングをし排狭をして次のターゲットを狙う  
市民も兵士も何が起きたのかわかってないようでぎわついている。  
側近の副官が貧血でもしたのかと思ってるのか既に死んでいる将  
軍を起こしに近寄るが

パシユ

ドツ

アーク「Hit」

二人いる副官のうち一人の頭に見事ヘッドショットし即死させた。

カシヨ

コシヨ

排狭し次弾を薬室に入れ引き金を引く

その間でも市民や各国の将軍は何が起きたのかわかってないよう  
でいる

アーク「……次」

しかし、最後の副官は攻撃されているのが気が付いたのか急いで立  
ち上がりステージから降りようとしたが

パシユ

ドツ

「あ、足がああああああ!!」

うわ、ここまで悲鳴が聞こえてきたな

あ、てかごめん……頭狙ったつもりだけど太ももに当たったわ。

騎士なんか目指さずオペラ歌手のほうに性が会いそうだな。

カシヨ

コツキングをして再度狙う

だが副官はこの短時間で狙ってきた場所を特定できたのかスコ  
ープ越しに視線がぶつかる。

アーク(すごいな……狙撃場所まで特定とは……アーハム帝国には  
しい人材だが……一番の間違えは俺のアリスに手を出したことだ)  
慈悲もなければ情けもかけない……だがせめて苦しみからは解放  
してやろう。

引き金に掛かっている人差し指に力を入れ引き金を引く。

弾丸は再び空を飛び……

「い、いやだ死にたくn」

額からヒガンバナを咲かせ、痛みに苦しむ人間を解放した。

勇者は……あ、我先に建物中に逃げてる

アーク「ミツシヨン完了……帰還する」

## 五十六発目 リーザーと!!

アーク「うまくいったかな？」

軍を指揮する指揮官を狙撃（世間では「怪死事件」って扱われている）から二日たったころバサビー共和国では混乱が起きていた。

どうやら、指示通りに反勇者勢が噂を流しているようだ。

今はレインコートを着てベンチに座っているが耳を立てれば

「ねえ……これって本当に神様が罰を与えたのかな？」

「そんなわけないでしょ!! 神が怒っているならなんで勇者様が降臨されたのよ!?!」

「おいー 聞いたか!? 実は勇者様は本当の勇者じゃないって!?!」

よしよし……いい感じに混乱してるな

憶測は憶測を呼び、噂は誇大化していく……なんなら勇者は悪魔とか流れている。

アーク「ふう……いい気味だ」

ついでに軍の出撃も遅れている

理由は簡単、トップがいなくなったからだ。

実は先ほど城に侵入して傍受してきたのだ。

まあ、実に滑稽で面白かった……なぜなら

「俺が次の指揮官だ!!」

「いやいや、私のほうが優れている」

「いやいやい、私の方だ」

つて感じで簡単に言ったら新しい指揮官が決めれないのだ。

なぜ、指揮官だけではなく副官まで狙ったのかというところを習ったからだ。

この世界の人間は協調性が皆無でプライドが高い。

というか血の気が多すぎてリーダーになりたがる。

アーク「前世の人間が見たら笑うだろうなあ……ま、勇者も同じ転生者だけだ」

すると、本来の目的はいずこやら……なんと指揮権を別々にした。式を統一しなかったらチームワークが崩れやすいのに……

まあ、戦う相手からしたら楽なんだが

アーク「だけどなあ……これで戦争を中止してくれたらなあ……」

別に殺すのは構わないが殺した後の騒動が面倒くさい

前の闘技場事件で泣かれた老人みたいなのが增えるのは嫌だ

アーク「はあ……勇者も勇者で諦めろよ……」

バサビイ共和国の公園にあるベンチで寝転んでいると

「号外!! 号外だよ!!」

アーク「お? 早速か?」

大通りから新聞売りの子供の声が聞こえてき、もらうために行ってみる。

アーク「えーつと? なになに? ……は?」

新聞に書かれていた内容は……

『謎の怪奇事件には軍は屈さず!! 軍の最高責任者を勇者ペガサスに決定!!』

アーク「え、草を超えて森生えそうなんだが」

内容によると

勇者連合として組んでいた各国だが先の司令官が死んで次の指揮官が決めれないことよって次の指揮官が勇者になったようだ。

まあ、勇者は飾りで実際の指揮はそれぞれの国の将軍がするのであろう。

しかも、数か国のみだが勇者連合からは脱退するらしい

反勇者勢の流した噂のせいかな新聞でも「神が怒ったのか?」と書かれている。

アーク「どちらにしてもアリスの敵だ」

結局、戦うことになり失望するが同時にようやく戦えるという矛盾を抱えるが気にせず俺は立ち上がりバサビイ共和国を後にした。



狙撃……怪死事件から数日後

結局、早朝に進撃することになった勇者連合

「結局、進撃することになりましたね」

「ああ、だが少し問題ができたがな」

「問題とは？」

「勇者だよ」

「ああ……」

現在、全軍アーハム帝国に向かっているのだが兵士たちは少々不満であった。

なぜなら……

ペガサス「ぬははははは!! 進め!! 進め!!」

そう勇者である。

新しい指揮官として選ばれたせいなのか調子に乗っているのである。

「別にほつといってもよくないですか？ 指揮官つてのは名ばかりで実

際は何の実権もないので」

「まあそうなんだが……あの金属音みたいなうるさい声をどうにかしたいんだ」

実を言うと指揮官に選ばれた勇者には何の権利もない。

勇者には「兵士の鼓舞をお願いします」つと言ったがつまり応援で指揮権はないのだ。

「それにしても……先行部隊の帰りが遅いな？」

「敵にでもあったのでしょうか？」

「だが接敵したのなら通魔機で連絡などが来るはずだ」

「……ですよね」

勇者連合軍は大きく陣形を広げており、先行する偵察部隊もだいぶ前に出していた……が

だが先行部隊の方はつと……

「はあはあはあ!?!」

アーハム帝国に続く森の中を一人の騎士が走っていた。

早朝の太陽の光が森の中を照らしなんとも幻想的な景色だが……

「はあはあ……」

手足は血まみれになり、腕は折れボロボロになっていた。

仲間も最初は笑顔で笑いあつて偵察をしていたがそれに出会った瞬間、平和だったすべてがガラリと変わった雷に似た爆音が鳴れば死体が飛び、槍が飛んでこれば大地が抉られ吹き飛ばされる。

「こ、ここまで来れば」

木の洞に隠れてそいつが通り過ぎるのを待つ……が  
だが運命の女神は笑わなかった。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……

「き、来た!?!」

それは大地を踏みしめるのではなく、踏みつぶすような思い音だった。  
だがその音が聞こえてきたのなら……

らららららら♪ らららららら♪ らららららら♪

この世界では聞くはずのない機械的な声だがなんとも美しい美声だった。

だがこの声を発している主のせいで部隊は壊滅した。

「た、頼む……気づかないでくれ!!」

穴の中、震えながら隠れる。

もし、もう一度奴の姿を見てしまえば今度こそ殺されてしまう。

だがその願いは叶ったのか

らくらくらく♪ららくらく♪

歌声は遠のいていき、五月蠅い円盤の取り巻きもいなくなった。

「な、なんで報告と姿が違うんだ……」

それにもう一つ、問題ができた。

それは事前に聞いていた情報と全く違うのであった。

情報では「丸太のように太い腕に岩のように巨大な体に黒い筒で素早く雷魔法を使ってくる」のであったが違ったのであった。

「と、とにかく行ったのなら本部に報告を……」

だがそれで終わらなかった。

ビイイイイイイイイイイイイ

「し、しまった!?! 奴のこととも忘れ」

空を飛んでいる奴に気にしすぎたせいなのかやつらの方も忘れていた。

今更気が付き洞から出ようとしたがその円盤から放たれた弾丸に穴だらけになって誰にも気が付かれずに死んだ。

アーク（ん？ 今何かいたか？）

だが当の本人は全く気がつかなかった。

アーク（まあ、いつか……さてこの先だな）

朝霧に隠れながら進んでいったが……まさか偵察部隊に鉢合わせとはな

まあ、空を飛んでいる相方が全部殺したんだがな

アーク（さてと……虐殺の時間だ）

こうして俺はピューパ並みに巨大なキヤタピラを動かした。

ペガサス「將軍!! 現在の状況はどうかね？」

「っは!! 現在、順調に進んでおります!!」

ペガサス「くつくつく!! 將軍!! 歌う死人の特徴はどんなのかね!!」

「死人ではなく死神です。事前の報告によると丸太のように太い腕に岩のように巨大な体に黒い筒で素早く雷魔法を使ってくるそうです!!」

ペガサス「ふむ……なら、遠くから高火力の魔法で倒してしまえ!!  
そして、止めは俺がさす!!」

「そ、そうですか!!（いや、それができるならもうとつくにやってるわ）」

馬の上から勇者は隣にいた將軍（急遽入れられた）から報告を受ける……が事態はいつきに動いた。

ガシャガシャ!!

勇者のもとに一人の騎士が走ってくる。

「報告!! 前方に巨大な霧が接近!!」

ペガサス「ええい!! そんなの風でどうにかしろ!!」

「お、おっほん!! 霧の中はどうなっている?」

「っは!! 一応ですが見えますが……前方に巨大な山が見えます!!」



ペガサス「な、なんの音d（べちよ）……ん？　なんだ？」

勇者が乗っていた馬も暴れ出し将軍が抑えていると勇者の頭に何か落ちてきた。

頭に落ちてきたものを掴むと、それは柔らかく湿っており若干温かく……そして血生臭かった。

ペガサス「なんだ……う、うわああああああ!!」

それは……人の顔の一部だった。

将軍も異変に気が付き空を見上げるとそこには……

バラバラに落ちてくるワイバーンと人間の肉の雨だった

勇者は初めて見る死体に嘔吐をした。

そして……すぐに犯人もわかった。

「ぜ、前方に敵影!!」

「ぬ!!　来たか!!　勇者様!!　準備を!!」

ペガサス「お、おええええ……ま、待て貴様ら……まだ準備が」

「そんなこと言っても敵は待つてくれませんぞ!!　ほら、今でも敵は接近して……え？」

ペガサス「ど、どうした？　急に止まって……え？」

兵士たちは立ち止った。

将軍も勇者も立ち止まり……見上げた

そこには

まるで動く城のようなバケモノで例えるなら陸の戦艦だった

「ば、馬鹿な!?　報告との姿が違う!」

そして、将軍たちはそれが最後の景色となった。

わああ、めっちゃ俺を見上げてくるやん。

ちなみになぜ兵士たちが俺を見上げているのかは今回選んだ機体によるものだ……

片方は通称「AI搭載超級戦機」とも言われ巨大なキヤタピラで動きそれはまるで「まるで陸を往く戦艦」とも言われた型式番号「TR—coco on7000」、通称コクーン

アーク（まさか……こいつが使う機会が来るとはな）

以前のポイント 6968

獲得（前回の狙撃で） 32

消費

コクーン 3000

キッドナツパー 50×8＝400

合計ポイント 3600

さてと……だいぶ減ったな。

ま、今から殺して稼げばいいんだがな!!

ちなみにだが、キッドナツパーの操縦は本家同様AIらしく設定した命令内で動けるらしい……だけど急な対応には少し時間がかかるらしい

そんなことを思いながら、AIポッドのカメラから兵士たちを見下ろす。

アーク（……ごめんな、君たちには家族がいる。だけど……恨むなら勇者を恨みな？）

ちなみにキッドナツパーたちを召喚した理由だがコクーンは下のほうに入られると攻撃手段があまりないので護衛でキッドナツパーを召喚した。

こうして俺は「一対数万」という某ジパングな戦いに身を投じた。

さあ……

アーク「Are you ready?」

あの世に逆く準備はできたか?





キッドナツパー「(^^)」

返事をするキッドナツパーたちは飛んで命令通りに実行した。  
ちなみにキッドナツパーの方には「戦場から逃げようとしている敵を殺せ」という命令をしている。

アーク「さて、俺も仕事をするか……全速前進D A ☆」

重いキヤタピラを動かし敵に突っ込んでいく。

「く、来るぞおおおお!!」

「総員!! 防御態勢用意」

兵士たちもあまりの巨体が迫ってきた、盾を構えたり付与魔法で筋力を上げて迎え撃つ。

なんとも洗礼された動きに見惚れてしまうが……

アーク「機銃掃射、開始」

ズドドドドドドドドドドドドドドドドド!!

バリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリ!!

ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

コクーンのカンポートが37門、野晒しの機銃が14門、8連装ガトリングカノン6門が火を噴いた。

前方で盾を構えていた兵士たちは構えている盾ごと貫かれ肉は裂き骨は粉状になるくらい破壊されていった。

アーク「……うわ、少し耕しすぎだな」

だが、そんな状況でも死神はなんとも思わないで作業虚殺を開始した。  
前に進みながら、機銃を射撃し耕していく。

アーク「……見ろ!! まるで人間がゴミのようだあ!! (某ムスカボイス)」

戦場の端から端までお掃除ロボットが掃除するみたいに掃除殺していく。

アークがロボットで人間の兵士たちがゴミの役だった。

兵士たちはその理不尽の塊から逃れようと走るが……逃げられなかった。

背を向けて走ろうとしても勇敢に立ち向かおうとしても、そんなお構いなしに鉛玉の雨が降り注ぐ。

アーク「……この感触……まさかの人間の死体がつぶれる感じだな」

だが運よく鉛の雨から逃れられてもアークはゴミ兵士をかたずけるために戦場を隈なく走破していくのでコクーンの巨体に潰されてしまう。

まるでプチプチマットを足で潰していく感じだ。

アーク「まあ、なんとも思わないがな!!」

潰していくたびに兵士たちの悲鳴や呪言を吐いて死んでいくがコクーンは背が高いので聞こえていない。

ただ、兵士にとっては絶望的だが死神は作業にしか思っていないかった。

「はあはあ……くらえ!!」「ファイヤーボール!!」

しかも、タイミングよく攻撃をしてもコクーンの厚い装甲で防がれてしまう。

アーク（ん？ あ、敵見つけ、殺さないと）

そして、この戦場で兵士の中では唯一攻撃できた魔法使いは鉛に撃たれて死んだ。

だが一人が死んでもまだまだ敵はいる。

アーク「多弾散布!! fire!!」

いち早く敵を殲滅するためにヘッジホッグ（対潜迫撃砲）を改造した多弾散布兵器4門を起動し発射する。

ヒュウウウウウ

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

綺麗な弧を描き敵軍の上空で爆発し滅亡させていった。

アーク「おー、これは楽だわ」

ハリネズミのように機銃が付いているので先ほどの先制攻撃の際に撃った主砲で撃ち落とされたワイバーンの軍勢の生き残りがかぶりつこうが機銃で撃ち落とされて行き、赤い雨を降らせていった。

「て、撤退だ!! 撤退しろ!!」

アーク「お? なんだ?」

すると、突然兵士たちが俺に背を向けてバサビイ共和国のほうに走り出した。

まあ、格好の的なので機銃八千の巢にしていくがな

え? AIモードにはしないのかって?

別にしてもいいけど……ほら、誰かに殺してもらうんじゃないかって自分で勇者を殺したいからね!!

「な、なんだあれは!？」

臨時で選ばれた將軍は状況を呑み込めなかった。

目の前の戦場では兵士が四肢を千切れながら死んでいき、その上をバケモノが踏みつぶし大地に戻していく。

「ほ、報告とは違うのではないか!？」

驚愕する將軍に新しい報告が入る。

「報告! 襲撃した敵は「歌う死神」と断定!!」

「なんだと! 報告とは違うのではないか! ……まさか、さらに進化させたというのか!？」

あながち間違つてはない推測をし、すぐに命令を出す。

「すぐさま応戦しろ!! あんな巨体なんだ!! 集中攻撃すればかたがつく!!」

「ダメです!! 前衛部隊の9割が壊滅!! まっすぐこちらに向かってきます!!」

「な……さつき見つけて会敵したんだぞ?」

あまりに速いスピードで死神にとってが雑魚に等しい兵士は全員殺されていった。

そのスピードに絶望する……その間の勇者はというと

ペガサス「ろ、ロボット?」

どうやらこちらも目の前の現実を受け入れてないようだ。

ペガサス（な、なんで異世界にロボットがいるんだ!? ま、まさか……あのガキ神が刺客を寄こしてきたのか!?)

馬にまたがりながら、顔を青ざめ方を震わせていたが

「勇者様!! 勇者様!! なにを惚けているんですか!?!」

ペガサス「っは!! すまん!! ど、どうする!?!」

「どうするも何も……あなたが司令官だからあなたが命令してください!!」

ペガサス「め、命令……き、貴様らがやればいいだろ!!」

「何を戯言を言っているんですか!?! あなたはこの世界で英雄とされる方なのであなたに従っていくんですよ!!」

將軍も初めて知った戦場に想定外すぎる強敵の混乱している。

指揮するものとしては混乱してはならないのだが、完全に混乱していた。

ペガサス「できるわけないだろ!?! 俺はずっと遊んでばかりいたから指揮なんてできないんだよ!!」

ここでようやく勇者は自分がどんだけ愚かなことをしたのかのを知った。

だが自分の糞みたいなプライドが認めなかった。

「出来る出来ないではありません!! それよりどういうことなんですか!?! 遊んでばかりいたって!?! 私は勇者様は勤勉な方で才能はあると聞きましたか!?!」

ペガサス「知るか!?! まず、俺は前世では一般人で戦闘なんかできるわけないだろ!?!」

人間、極限状態になると責任転換などせずに互いに助け合う「呉越同舟」が起きるそうだが……

將軍は全責任を勇者に擦り付けたいし、勇者は自分ではなく実際に指揮をしていた將軍たちが悪いと責任転嫁合戦が起きていた。

そんな人類最底辺な喧嘩をしていると、前方から自軍の兵士が走ってきた。

「おお!! ほら、勇者様来ましたよ!! 指揮して我々を導いてください!!」

ペガサス「いい加減その口を閉ざさないと世界中にお前の悪口を言うぞ!!」

將軍と勇者は相手の方の命令が欲しくて来てのか思い譲り合うが

……

自国の兵士が迫ってきて……そして

「い、嫌だ!! シニタクナイ!!」

「き、聞いていた話と違うぞ!!」

「逃げろオオオオ!! 全力で走れ!!」

止まって命令を聞くのかと思っていたが通り過ぎていき

ペガサス「え? 違うの!?!」

「な、な、な……勇者様!! あなたのせいですよ!!……ほ、ほら!! まだまだ来て……え?」

將軍が指をさした方から他の兵士が来ることはなくただの荒野が広がっていた。

人はいないが死体は一面中に広がっており、地面は赤く、空にはカラスの群れが飛び回り死体をついついている。その中央でたった一体の巨塔が立っておりキャタピラも血で赤くなり機銃には羽を休めているカラスでいっぱいになるほどだった

まあ、無理もない

攻撃も効かないし、逆に攻撃力があっちの方が高かったら誰だって逃げたいはずだ。

「ま、まさか……もう全員殺したのか?」

アーク（はあ……もう終わったか）

荒野の中で俺はただ一人ポツンと立っていた。

コクーンは人間の体で例えたら正座で進んでいるような感じだった。

アーク「うくん? もうちよつと抵抗してくれないかな?」

なんとも極悪人な言葉が出るがアリスを狙ったこいつらが悪い。

アーク「さてと……さっさと勇者を殺しに行く……ん?」

数多に人間の死体を踏みつぶしすぎたせいで真っ赤になったキャタピラを動かそうとしたらAIポッドのカメラに人が映った。

姿から見るに戦場からの逃亡兵であろう。

アーク「はあ……まったく……仕事を増やさないでほしいや」  
そう思いながら

体の一部に意識をして逃げている手段を狙う。

アーク「はい！ 狙って~~~~PON☆」

バ シュ、バ シュ、バ シュ、バ シュ、バ シュ、バ  
シュウウウウウウウウウウウウ!!

コクーンに装備されている垂直発射方式のミサイルランチャーが  
10基からミサイルが飛んでいき……見事、逃走している集団に着弾  
した。

アーク「あ、おまけに主砲もプレゼント」

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

主砲の砲弾は空を飛びながらミサイルが着弾した場所に吸い込ま  
れて行き噴火を起こした。

「(っ)ほ(っ)ほ!? お前ら!! 無事か!？」

「は、はい………どうにか!!」

アークのミサイルが着弾した場所では將軍たちが被弾していた。

「な、何が起きた?」

確か、先ほど敵前逃亡をしている兵士たちを捕まえて一緒に逃げよ  
うとしたが空から何か振ってきて兵士たちを消した。

そして、気が付いたら地面に倒れていた。

「状況は!？」

「わ、我々以外………全滅です」

「な、なんと………」

最後に残った兵士曰く

空から数本の槍が飛んできて兵士に当たった瞬間、爆発し消し飛ば  
したそう。

しかも、一応何人かは足が吹き飛ばされていたり腕の骨が折れてたりとしていたが生きている者もいた……しかし

今度は空から岩が振ってきて残りの生存者を殲滅した……らしい。

「ま、魔法……魔法なのか？」

「しかし……これが本当に魔法なら……いったい何人……いや、何千人分の威力なんだ!？」

「っは!! 撤退だ!! 総員、撤退準備!!」

將軍は急いで立ち上がり部下に指示を出す……が

「將軍!! 敵が……歌う死神が接近中です!!」

「くそ!! 見つかったのか!？」

いぎ、逃げようとしたがアークがこちらに気が付いたのか重低音を響かせながら迫ってくる。

今更、逃げようが先ほどの攻撃で死んでしまう。

逃げるならそれなりの力を持った戦力で囷にして逃げるしかない。

この生きている中で一番力がある者と言えば!!

「勇者様!! 勇者様どこですか!!」

そう、勇者だ

勇者は神から授けられた（今回は盗んだ）力は一騎当千の力を持つ

!!

急いで勇者を探したが

「いた!! 勇者様!! 〴〵無事ですか!？」

ペガサス「はあはあはあ……」

だが当の勇者はとうとうとひどい状態になっていた。

膝を抱え、子供みたいに震えている。

無理もない、何故なら今日初めて人の死体を見たのだから。

「勇者様!! お力をくださいませ!!」

ペガサス「お、俺？」

「はい!! 今こそ勇者様の力を見せるときです!! さあ、神の力で死神を!!」

ペガサス「む、無理に決まっている!! 勝てるわけがない!!」  
そりゃそうだ

果たして「勇者が剣を召喚してコクーンの装甲を破壊する」「勇者がAIポッドを破壊する」時間と「アークが機銃、主砲で勇者を殺すまでの時間」ではどちらが早いか一目瞭然だ。

「しかし!! このままでは全滅してしまいます!!」

こうしている間にもアークが迫ってきて殺しに来る。

ペガサス「くそ!! なんで全部思い通りにならないんだよ!! なんて!! なんて!! 俺はアリスを手に入れただけなのに!!……っは!! そうだ!!」

だがここで勇者は考えた。

糞野郎だからこそ最悪なことを思いついてしまった。

自分さえ良かったいいのではっつと

ペガサス「総員!! 剣を持って!! 奴に一泡吹かせるぞ!!」

「おお!! 勇者様行くのですか!!」

ペガサス「ああ!! 俺は勇者だからな!! 行くぞ!!」

「「「「「おおおおおおおおおおおおおおおおお!!」」」」」

ペガサス「突撃いいいい!!」

勇者は立ち上がり馬にまたがって剣を抜き、騎士たちを鼓舞し立ち上がらせる。

兵士や騎士からしたら勇者は偽物でもなんでもなく本当の勇者に見える、將軍ですら神にすら見えた。

兵士たちは立ち上がり剣を抜き雄たけびを上げながら突撃をする。

ペガサス「陣形は俺が一番後ろでお前らが先頭だ!! お前らが時間を稼いでいる間に俺が上位魔法で仕留める!!」

珍しく勇者がまともな指揮をし、兵士たちも陣形を組み突撃をする……が

ペガサス「……よし」

兵士たちが勇敢にもコクーンというバケモノに突撃するが……

クルツ

勇者は反対方向に向き兵士たちに背を向け逃げ始めた



ペガサス（勝てるわけないだろ!? 馬鹿かあいつらは!? なんだよあのロボット!? あんなのいるなんて聞いてないぞ!? ってか歌う死神ってあんなのかよ!?）

馬に乗りながら自分の国に逃げていく勇者だが兵士たちは気が付いていない。

コクーンも下が急に騒がしい声が聞こえてきたのかカメラをそちらに向ける。

「おおおおおおおおおおおおおおお!!」

「いけええええええええええええええええ!!」

アーク（な、なんだあいつら?）

なぜか雄たけびを上げながら突撃をしてくる残党兵士。

まあ、それほど死にたいなら殺すけど。

コクーンに装備されているガンポーツが37門、野晒しの機銃が14門、8連装ガトリングカノン6門が再び火を噴いた。

ズドドドドドドドドドドドドドドドドド!!

バリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリ!!

ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

「進め!! 進め!! 止まるn（ズシヤ）」

「勇者様が倒してくれ（バキ）」

嵐のように降り注ぐ鉄の雨に怖気ず前進し、後ろで魔法を唱えている勇者に託そうとするが既にいないというのに気づかない。

「ゆ、勇者様万歳いいいいいいいいいい!!!」

結局、最後に残ったのは將軍で無謀にも最後に帆地理に残っても突撃する。

だが、運がよかったのか兵士たちが盾になってくれたせいなのか機銃が撃てない射角まで入り込めた。

「うおおおおおおおおお!!」

將軍はせめて一太刀とコクーンの装甲を斬ろうとしたが……

ういいいいいいいい

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!

頭上からクレーンの装備の一つのクレーンに潰されてしまった。

な、なんだったんだ？

クレーンを引き上げ潰された死体を見ながらアークは思った。

アーク（なんか……急に叫びながら突撃してきたから機銃攻撃で殺して一人下に入られたからクレーンで潰したけど……残党兵か？）

まあ、別にいいか

さて、勇者はつと……

割と高性能なAIポッドのカメラであたりを見渡す……と

アーク（……いた）

森の中を泣きべそをかきながら馬に乗って逃げている。

何、主役が逃げているんだよ？

っていうことでそのまま追いかける

え？ もう殲滅して勝利しているから別にいいだろって？

甘いね、それに勇者たちは一つしていないことがある。

白旗を上げていないのだ

つまり、まだ降伏していない。

だから、俺は地獄の果てまで追いかける。

アーク「誰が許しを得て無様に逃げているんだい？」

## 五十八巻目 戦争後

ペガサス「は、速く!! 走れよコラ!!」

うつそうと茂る森の中を勇者を乗せた馬が走っていた。

馬はただ走る。別に今乗せている主人の命令ではなく自分の意思で走っている。(勇者はまともに馬術などをしてないので走れているだけで割と奇跡である)

大地の上に蹄の跡を残し駆け抜ける……が

ヒュウウウウウウウウウウウ

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

ペガサス「ぎやあああああああああああああ?!?!?!?!」

近くに砲弾が落ち、爆風で馬ごと吹き飛ばされてしまった。

土が口や目に入り痛む、体を大地にぶつけたので骨が折れたような痛みもする。

ペガサス「に、に、に、逃げ……逃げな……逃げなきや」

生まれたての子馬みたいに立ち上がり、再び馬に乗ろうとする。

コクーンのアップドから見えるあの何の感情も感じない瞳を見ると発狂しそうで……だが逃げようとするが

ペガサス「な!?! おい!! 起きろよ!! なに、寝ているんだよ!!」

馬が地面に倒れてピクピク……と痙攣して起き上がらなかつたのだ。

まあ、そりやそうだ……「勇者の糞重い体重+金の防具+全力疾走」でもう走れることもできないのだ。

……確か、痙攣して動けなくなった馬は介錯すると聞いたが今の勇者にはそんなすまないと思う心も知識もない……なので使えない馬だと思い自分の足で走った。

ガチャガチャ!!

ペガサス「ぜえ……ぜえ……ぜえ……」

森の中で鎧の音が響き渡る。

今回も勇者は金の鎧を着ているので重いし動きにくいので思うようにスピードが出なかった。

ペガサス「ぜえ……ぜえ……ちよ、ちよつと休憩」

だが、現実には待つてくれない

ら〜♪らら〜♪らら〜♪ららら〜♪

ペガサス「ツヒ!? なんで来るんだよ!? お前の勝ちだろ!」

死の歌声が聞こえてきた勇者は急いで走る。

何で追いかけるのかつて? そりゃ、白旗上げて降伏してないからだ!!

アークも追撃戦ということで追いかけている。

アーク「わ〜い♪ 待て待て♪」

ヒュウウウウウウウウウウ

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!

ズドドドドドドドドドドドドドドドドド!!

バリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリ!!

ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

ペガサス「ひ、ひいいいいいい!! お、お助けええええええ!!」  
勇者には当てないように主砲や機銃の雨を降らせる。

え? なんで殺さないのかつて?

アーク「強者を偽っていた者をいじめるのは楽しいZOY!!」

あと、ついでにポッドのカメラで勇者の様子を撮影中だ。

もし、誰かしら勇者のことでいちやもんをつけられてもこれを見せれば黙らせることができる。

ギリギリ当てない(しかしたまに至近弾を与える)ところを狙いながら追いかける。

ペガサス「悪かった!! 俺が悪かった! もうお前の主人は狙わな  
いから!」

だがアークの耳までは声が小さいしアークも聞く気がない。

勇者は歌う死神から逃れるために全力で国に向かって走っていつた。

そのころバサビイ共和国

「……なあ、今ぐらいかな? 軍と死神が戦っている時間帯は?」

「そうだろうなあ……まあ、流石にあの大軍だったから勝っているんじゃないか?」

城壁の上で警備兵が立っていた。

早朝に勇者が率いた勇者連合がアーラム帝国に向かって行ったが時間帯的に「歌う死神」が接敵して戦ったいるぐらいであろう。

「いやいや……わからんぞ? もしかしたら死神がまた進化して変わったとか……」

「え、なんだよそれ……もしそうだったら勝てる見込みがないぞ?」

「はははは!! 冗談だぞそんなわけ……ん? なんだ?」

いつも通りに壁の上から侵入者がいないか見ていると遠くの方から山が接近してきた。

霧で少し見えづらいがそこには巨大な何かがあった。

「なあ? あそこに山なんてあったか?」

「はあ? 何言って……本当だ? あったつけ?」

二人の兵士はマジマジと山を見つめていると……

「……ん? おい!! 誰か走って来るぞ!!」

兵士が指を指すとそこには

ペガサス「ひいひいひいひいひい!!」

勇者が泣きべそをかきながら走った来た。

(さすがに学習した) 鎧を脱ぎ、裸足で走っていた……もはや、それは勇者の面影もなかった。

ペガサス「お、おい!! 頼む!! 開けてくれ!!」

「おい!! 誰だ貴様は!! ここはバサビイ共和国だと分からないのか





アークは迫撃砲のように主砲を撃っている。  
アーク（……なんかこういう時こそ迫撃砲が欲しいな）  
迫撃砲代わりの主砲を撃ちながらできる限り市民には当てないようにする。

殺してもいいけど今回は兵士だけだ。

次々と砲弾が城門や城壁に命中していき、破壊されていく。

「ゆ、勇者様!! 戦はどうなったのですか!?!」

ペガサス「あ、あいつが全員殺した!! お、俺は逃げてきたんだ!!」

「その時に白旗はあげましたか!?!」

ペガサス「え、白旗? いや……そんなものは持ってすらないんだが?」

「それですよ!! 上げてないから死神はまだ戦争は続いていると思って追いかけてきたんですよ!!」

「おい!! 旗を上げろ!! このままじゃ国民もろとも全滅だ!!」

急いで兵士は白旗を上げ、敗北を認めた。

数日後

アーク（はあ……ワンサイドゲームだったなあ……）

あの戦争……って言ってもあまりにも早く決着がつきすぎたけどな。

俺は、現在敗戦国のバサビイ共和国に来ていた。

以前のポイント 3600

変身

サイボーグ 150

獲得

(戦争勝利) 8000

合計ポイント 11450

アーク（いやあ!! 稼いだ稼いだ!!）  
初めてだぜ?





アーク「滑稽なものだ」

もちろん城の人間も黙ってはおらず鎮圧部隊を出したり弁明したが国民は聞く耳はもはやなかった。

アーク「ま、アリスが無事ならそれでいい」

恐らく、アーハム帝国もこのことは知っているはず

あ、でもエルフは耳がよかったよな？

アーク「……ちよつとアリスに連絡しよ」

人に見られない路地裏まで移動しiDROIDで主人に連絡する。

iDROIDを持ってしばらくすると

アリス「……アーク？」

アーク「お！ アリス!! 気分はどうだ？」

iDROIDから元気……ではないがアリスの声が聞こえてきた。

アリス「気分どうこうじゃないわよお……なんで急に帝王学や経済学をしないといけないのよお……」

アーク「いいじゃないか？ アリスは次期皇帝の座を狙っているんだろ？」

アリス「狙ってるけどお!! もう、手が痛いわよ!! ペンが握れないわ!!」

アーク「え？ 片方がダメになってももう片方があるじゃん？」

アリス「あなた、主人を殺す気!!」

アーク「はははは!! 嘘だよ!! 無理のない程度で頑張れよ」

アリス「……話変わるけどアーク……あなた今、どこにいるのよ？」

アーク「……ちよつとお使いで外にいる」

アリス「……私の勉強が終わったら絶対に来てよね？」

アーク「はいはい……そっちも頑張れよ？」

ブン

iDROIDを切り大通りに戻る。

さて……あとはうまくいくかな？



幻聴が聞こえてきて肌に誰かが捕まれる痛みも感じた。某名もなき英雄で「血は鉄で心は硝子」とあったがこの勇者はマジで心が硝子のような……勇者はトラウマになっていた。

自分の願望のために兵士を使ったが現実は甘くなかった。

そして、そんな哀れな勇者を見ている者がいた。

「つち……使えん異世界人め」

扉を少し開け覗いていたのはバサビイ共和国の現首相だった。

最初は禁呪で勇者を召喚し利用してアーラム帝国の実権を握る予定だったが召喚した人間が余りにも使えなく失望していた……

が、今は勇者はもういない

「勇者様？ 少しよろしいでしょうか？」

ペガサス「つひ!? な、なんだ……首相のおっさんか」

「どうされましたか？ 勇者様らしくありませんぞ？」

首相は勇者に近寄り話しかける。

ペガサス「も、もう駄目だ……勇者なんかになりたくない……殺される……奴らに殺される」

(……もうこいつは使えんな)

首相は勇者を仕立てていた人間を捨てることにした。

しかし、ただ捨ててしまえば批判の矛先はこちらにも向いてしまう。

(……自滅してもらおうか)

そして、勇者に言う。

「勇者様？ 何をそう焦っているのですか？」

ペガサス「あ、焦るだろ!? く、国の人間どもは俺を殺そうとしてる!!」

「はあ……」

ペガサス「な、何をため息をつくのだ!!」

首相は勇者の肩を掴み、叫ぶ

「おいー 勇者!! お前は良いのか!? お前は勇者なんだぞ!! この世界の救世主なんだろ!? なぜ、そんなにも怖がっている!?!」

肩を掴んだまま、立ち上がらせる。

「勇者様はこの世界の救世主だ!! あなたは世界の平和のために戦ったのです!! 間違えているのは他の人間たちだ!!」

ペガサス「だ、だけど……」

「邪魔なら排除してしまえばいいんです!! あなたが進む道が正義で他は悪なのです!! あなたの行いが正しいと証明すれば国民も世界中の生き物もあなたに賛同します!!」

ペガサス「し、しかしどうすれば……」

「なに、簡単ですよ……」

あなたがこの国の王になればいいのですよ!!!」

ペガサス「お、王?」

「はい!! 勇者様はこの世界というの名の物語の主人公です!! 王になれば手っ取り早くしたいことができ……あのエルフの皇女も貴方に求婚しますぞ?」

ペガサス「そ、そうか!! そうすればアリスは俺のもの!!」

(馬鹿だなこいつは)

ペガサス「おっさん!! 俺は今からこの国の王だ!!」

「はい! 行政権や外交権を今!! 与えます!!」

人間、絶望に陥った場合

誰かしら希望を与えられるとそいつのことを酔狂してしまうらしいが今の勇者がそうであった。

ペガサス「王! 俺はこの国の王だあああああ!! あひやひやひやひやひやひや!! 首相!! 俺はどうすればいい!!」

「そうですね……まず、この騒動になった犯人を裁きましょう!! ミール聖教国を壊滅させましょう!!」

ペガサス「なんでなんだ？」

「ミール聖教国は本当は貴方様を讃えている国（嘘）なんです……  
アーラム帝国に脅されてしまい、あのような行動をしているのです  
……だから早く解放してやれねば!!」

ペガサス「そうか!! わかった!!」

「あ、しかし……真正面から戦えばまた死神と戦う羽目になります  
……なので人質を取って脅しましょう!!」

ペガサス「そ、そうか!!……あ!! 俺ってば王様だから天才だなあ  
!! 一人いたよ!!」

（よしよし、計画通り）

ペガサス「バサビイ共和国の教会の奴らはまだいるか!？」

「はい、確か手続きが済んだので明日出国するはずです!!」

ペガサス「よし!!」

ノエル・スカルツオたちを「アーラム帝国に情報を流した罪」で捕まえてこい!!」

こうして勇者は破滅に向かって走り出した。

## 五十九巻目 狂王ペガサス

虐殺戦争から一週間後

バサビイ共和国が完全に見える丘の上でアークは座りながら新聞を読んでいた。

なぜ、こんな場所にいるのかというと

アーク「念のためねえ……」

バサビイ共和国を出た後、皇帝陛下に連絡し命令を受けた。

まず、もしまた軍をそろえてアーハム帝国に攻めてきた場合はすぐさま変身し殲滅しろというのであった。

ここからなら軍をそろえて出撃しても見えるので何時でも殺せるわけだ。

アーク「あとは……陛下に任せるしかないか」

俺は殺すことならできるが政治についてはさっぱりだ

皇帝は賠償金とか土地をもらおうとしている。

……が

アーク「通話を拒否された……か」

だが、異変は起きた。

それは四日前のことだが通魔機で呼び出しても変身が来ないのだ。

まあ、別に黙秘するならば圧力をかけたり、ほかの国と組んで侵略やらすればいい

アーク「あゝ……早く帰りたい」

野原に寝転ぶ。

すると心地のいい風が肌を感じる。

アーク「……平和だなあ……ノエルたちも今頃ミール聖教国に戻ってるかなあ？」

だが、その平和のひとはすぐに終わった。

バアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!

アーク「な、なんだ!？」

突如、バサビイ共和国の上空に巨大な魔法陣ができた。

大きさもバサビイ共和国の城下町を収まるくらいの大きさだった。

アーク「……とにかく連絡だ!!」

懐からiDORIDを取り出し電話をかける。

カチャ

アリス「アーク? どうしたの? あ、もしかしてお父様の御使い  
終わったの!!」

アーク「あー……ごめんけどアリス? ちょっと皇帝陛下に変わっ  
てくれないか? 急用だ」

アリス「急用? わかったわ!」  
しばらくすると

アレクサンダー「変わったぞ」

アーク「皇帝陛下!! 聞こえますか!? 緊急報告で突然、バサビイ  
共和国上空で巨大な魔法陣が発生しました!!」

アレクサンダー「なに!? それは一体……待った……わかった……  
アークよ、こちらもんでもないことが起きた」

アーク「とんでもないこと?」

アレクサンダー「たった今、バサビイ共和国から手紙で来たのだが  
……

勇者がバサビイ共和国の王になり、各国の大使館や外国との関りがあ  
る人間を人質に取ったそうだ」

アーク「へく……えええええ!」

え、ちよつと待って

草とか森を超えてアマゾン生えそう。

アーク「それってどういう……」



アレクサンダー「わからん……だが他の国でも同様の手紙が来たらしい」

何それ

もつとわからん

するとバサビイ共和国の方から嫌な声が聞こえてきた。

ペガサス「あー、あー……聞こえるか人間ども!! 俺はこの国の新しい王、ペガサス様だ!! 貴様ら愚民どもには勝手ながら奴隷にする魔法をかけさせてもらった!! だが、誇れ国民よ!! この首の模様は私への忠誠の証でもありバサビイ共和国……ペガサス王国としての証だ!! これがあれば世界中、どこに行こうが見せれば威張れる……」

アーク「わあお……愚王」

何を言い出すと思つたら、まさかの王様宣言と国民全員奴隷にした宣言。

まあ、確かにそうすれば反感は出ない（まず、できない）し、自分の思い通りにできる（つまり独裁政治）

アーク「つてか、使役魔法を学ぶくらいなら攻撃魔法を覚えるよ」とりあえず、皇帝に報告する。

アーク「……聞こえましたか？ 皇帝陛下？」

アレクサンダー「ああ、しかと聞こえた」

アーク「……これ、どうします？」

アレクサンダー「……無視でいいだろう。あんな愚者が政治なんぞできるわけがない」

アーク「……捕まっている人質はどうしますか？」

アレクサンダー「その国から要請がこれば助けに行く（アークが）」

アーク「あ、我々の国は？」

アレクサンダー「勝手に起きた戦争のおかげですでに撤退させている」

あ、それなら別にほつといいいいか

その代わりに国外から制裁祭りが起きそうだけど。

アーク「それで……私はもうしばらく待機ですか？」

アレクサンダー「そうだな……恐らく各国が人質奪取のために動く  
がアークは基本無視で頼む」

アーク「了解」

ブン

iDROIDを切って懐にしまいバサビイ共和国を見る……と

ペガサス「誇り高き壁よ!!我が同族を守りたまえ!!」アースウォー  
ル「“!!”」

ドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!

アーク「うお」

バサビイ共和国の周りに巨大な土壁が生成された。

土壁はミルミルと上がっていきすっぽりと国を囲ってしまった。

アーク「城壁か? でも……」

防壁のために召喚したなら少し大きすぎる気がするが……出入口  
がないのだ

え、貿易とか大丈夫なん?

食料大丈夫?

アーク「まさかと思うけど……後先考えずに作ったのか?」

自滅じゃん

なんか……勇者らしい

アーク「さて……もし、攻めることを考えてあれを作っておくか」

一方バサビイ共和国内

街では国民たちが城に集まっていた。

だが、誰も言葉を発さずただ城を見ている。

そして、それを城の窓から見ている者がいた。

ペガサス「くつくつく!! いいぞ……これで世界は俺のものに……」

そう勇者ことペガサスだった

鎧は脱ぎ、王冠を被り、豪華な服を着て王様になったつもりでいた。最早勇者らしいところはなくなりただの愚王であった。

ペガサス「俺はいい考えをしたと思わないかい？ ねえ？ ノエルちゃん？」

勇者……もう面倒くさいからここからは「勇者」ではなく「王」と書く。

王が振り返るとそこには……

ノエル「……なんでなんですか」

ノエルがいた。

いつも通りに清楚な黒いシスター服であったがその可愛らしい手には痛々しく鎖がまかれていた。

なぜ、ここにいいのかというところと今朝ようやく出国してミール聖教国に戻れると思ったらバサビイ共和国の騎士に「アーハム帝国に情報を流した罪」で連行されてしまった。

最初はやってないと無罪を主張したが強制的に連れていかれた。

ノエル「なんで……なんでこんなことをしたのですか!?!」

泣き叫ぶ勢いで叫び、勇者に問うと

ペガサス「理由？ そんなの簡単だよノエルちゃん？ 俺はこの世界を統一するんだ!!」

ノエル「な、なにを!?!」

ペガサス「この世界は魔族と戦っているのはよくわかる……なら、戦わずに支配してしまえばいいと思ってるね!! だから、こうなんだ!! この世界全員を俺の奴隷にしてしまえば俺の支持一つで戦争を起こせなくなる! そうすれば世界が平和になる!! 平和になればしたいことがみんなできる!!」

特別に作らせた玉座の前でくるくる回りながら言う王

ノエル「……確かに世界が平和になるのは良い事です……しかし!!」

その方法だと絶対に平和になどなりません!!」

ペガサス「どうしてだい？」

ノエル「平和というのはどんな種族や身分でも笑いあつて抱き合つて愛し合える世界です!! そんな強制的に従わせても平和などなれません!!」

ペガサス「でも平和になればなんでもできるんだよ? まず、人間を全員奴隷にしてそのあとにエルフっていう感じにs怪獣を奴隷だらけにする!! そして、あのロリ神も奴隷に……」

ノエル「でも!! たとえ従わせても幸福ではられません!! 私も戦いは嫌いですが……それでも好きな人と会つて好きなことを努力して手に入れるこそ人間らしいことです!!」

ノエルがやめるよう訴えるが

ペガサス「はあく……ま、いいか。はい!! 茶番は終わり!! ここから本題に入ろう!!」

無理やり話を水に流し話題を変える。

ペガサス「ノエル? 俺は君とこの世界が支配されていくのを一緒に見たいんだ……どうだい? 俺の妃にならないか?」

ノエル「……御断ります」

ノエルの顔に力が入る。

ノエルは普段見せない怒った顔で王を睨む。

ノエル「私はそんな世界を支配しようとする大馬鹿者の側など居たくありません!!」

初めて自分からキツパリと答えた。

今まではマザーとぐらいいしか話したことがなく頼まれても断りずらかったがトオルとあつてから感情を表に出せるようになった。

ノエル（そういえば怒るのもこの人で二人目ですね）

始めはトオルが自分の裸を見た時だがあの時はトオルが大人しく土下座をしてダンジョンの出入り口までしていたので許した。

少し予想外のことが起きたが彼とは友人となれた（ちなみにアークとは初めての外国の友達でもある）

今ここに彼がいたらただ心強いことだろうか……

ペガサス「そ、そうかい……仕方ない……手荒いことはしたくなかったんだけどな」

パチン!!

王が指を鳴らすと

「は、放しなさい!!」

ノエル「マザー!?!」

扉が開かれそこから体中に鎖を巻かれたマザーがいた。

ノエルとは違い白い修道服を着ているが尋問のせいかとところどころ殴られた跡があつて汚れたり傷ついていた。

ノエル「貴様!?! マザーに何を!?!」

ここで初めてノエルは他者を「様呼び」ではなく勇者を「貴様」と呼んだ

家族を傷つけられて怒る人などいないのだから。

ペガサス「これはノエルちゃんが悪いんだよお? ノエルちゃんが

俺のお願命いを断るからよお?」

ノエル「早くマザーを解放して!!」

ペガサス「おっと!! それは無理だなあ?」

ノエル「……どうすれば解放しますか」

ペガサス「確かあ? 聖書の中に『聖職者が罪を犯してしまったらすぐさま神に懺悔して善い行いをする』ってあったよねえ? 俺って

? 勇者で? 神の使いだからあ? 俺の言うことを聞かないとねえ?」

今更、自分が勇者であることを盛り返し迫ってくる。

ズカズカとノエルに近寄り汚い手でノエルの頬を触る。

ノエル(……プルプル)

人に接して初めて気持ち悪いと感じた。

ペガサス「俺と結婚しろ、ノエル・スカルツォ」

ノエル「……結婚？」

ペガサス「そうだ!! 聖職者ならこれくらいできるだろお?」

ノエルの体を嘗め回すように視姦し、手をノエルの体に回し結婚を迫る。

「黙りなさい!! この悪魔が!! 私の大切な子になんていうことをいしてくれてるの!?!」

マザーも黙ってはおれず叫びやめるよう言うが

ペガサス「つち五月蠅いなあ……」

ノエル「……お断りします!! 私はもうあなたを讃えるシスターではありません!!」

ペガサス「……あ! そうだ!! いいことを思いついた!!」

すると王は最悪なことを思いついた。

腰の剣を抜き、鎖で動けなくなっているマザーに近寄り髪を無理やり掴み剣を首に近づける。

ペガサス「これのほうが早いなあ? さあ、どうする?」

ノエル「あなた!? マザーは傷つけないで!」

ペガサス「なら、俺の結婚を了承するんだなあ!!」

「だめ!! ノエル!! 了承したらd (ゴキヤ!!) ぐふ!」

ペガサス「ババアは黙ってる!!」

ノエル「やめて!! マザーを殴らないで!!」

「こ、このクズ野郎……」

ポタポタと鼻から血を流しながら勇者を睨むマザー

だが、勇者は罪悪感など露知らず

剣をマザーの首に入れこませていった。

少しずつ切り口から血が出てくる。

ペガサス「さあ!! どうする!? このままだとマザーが死ぬぞ!」

「ダメ!! ノエル!! 受け取らないで!!」

ペガサス「首を縦に振れば済むことなんだぞお!!」

このままだとマザーは出血で死んでしまう……だからノエルの判断は早かった。

ポタポタ……

ノエル「受け取ります」

ペガサス「え？ なんだって？」

ノエル「私、ノエル・スカルツオはペガサス様の妃になるのを誓います……」

ペガサス「はは……あははははは!! そうか!! 誓うか!! なら、明日には結婚式をあげないとなあ!! お？ なんだ？ うれしすぎて泣いているのか？ なんだあ!! 俺はうれしいぞ!!」

勝手に一人で喜びノエルに抱き着くが

ノエルは顔は真顔のまま涙を流して……そして、たった一言それは今この場にいない大好きな友人に向けた物だった。

ノエル「トオル……助けて……」

アーク「ん？」

今一瞬誰か俺を呼んだ気が……

まあ、いい……

アーク「にしても……集まったねえ」

空はとつぷりと暗くなり、あたりは夜になっていた。

あれから少しずつだが各国の軍隊がバサビイ共和国の周りを囲み始めた。

アーク「……てか俺が殺した奴らの国の軍隊の奴らまでいるやん……気マズ」

まあ、勇者が勝手な行動をするからな

こうして俺は新しい命令が来るまで森の中から軍隊、そしてバサビイ共和国の様子を見ていると……

ガ、ピイイイー!!

アレクサンダー「アークよ聞こえるか？」

アーク「うお!? 陛下!? どうやってかけたのですか!？」

アレクサンダー「なんか適当に押していたら繋がったわい……それより新しい命令だ」

アーク「……ようやくですか……それで? 私は何を?」

こうして俺は命令を受け、準備に入った。



## 六十発目 作戦開始

バサビイ共和国の城壁の外

そこでは色とりどりの国を示す旗がひらめいていた。

本来ならあり得ない光景だが今回の件で特別に集まったのだ。

「……ペガサス王国って……ダサイ名前ですね」

「言うなよソレ……まあ、確かにダサイけど」

騎士二人が遠くに見える土壁を見て話す。

自分たちも最初は勇者を讃えていたが、ミール聖教国が出した勇者は偽物である証拠と証人が現れたことで事態は急展開した。

それは勇者がやった蛮行と勇者らしかぬ生活などいろいろとあり、世界中バサビイ共和国の勇者は偽物だと断定した。

まあ、今ここにいない国のほとんどが未だに勇者は本物である国や先の虐殺戦争で参加した国であった。

「それにも厄介ですね……勇者……いえ、バサビイ共和国の王は」

共和国なので王がいるのはおかしいのだが勇者が自称しているの  
で気にしない。

王が世界中に発した要求は以下の通りだった。

- ・今すぐに国の行政権、資金などを全て提供すること
- ・すべての国民を王の奴隷化にさせること
- ・女性を全て王に捧げること
- ・アーハム帝国は第二皇女アリス・フォン・アーハムと第一皇女クロエ・フォン・アーハムを奴隷化させスラム街で一日中慰め者にする  
こと

・この要求は一日以内に了承すること

・上記を守らなければ人質を殺す

というものだが

「無茶苦茶な要求だな」

「無理とかではなく私欲丸出しな要求ですね」

もちろんだが世界中の国は要求を飲まず、自力で救出することになった……のだが

「地味に面倒ですね……あの壁」

「出したのが例の勇者であるからなあ」

そう土壁だった。

勇者の神様特典の一つの「魔力量無限」の効果によりただの土壁ではなく巨大な防壁となっていた。

バサビイ共和国の土はそこまで固くなく柔らかいので畑などに向いている土なのだが、勇者がそれを魔力で無理やり固くしてるのだ。

先ほど偵察で土壁に接近し、魔法で穴を空ける試みをしてみたがヒビが入ったがすぐに修復されてしまった。

「だけど、破壊ができて救出がなあ」

もう一つの問題がバサビイ共和国の国民だ。

報告では全員奴隷にされてしまったらしく王の命令一つで行動してしまう。

別に他国の国民なので殺してもいいのだが殺したら殺したで世界中から批判を受ける可能性がある。

「メンドクサイですねえ」

「ああ、なんであんな奴を召喚したんだよバサビイ共和国」

だが考えるのは別にいいが自分たちは騎士で作戦を考えるのが將軍たちなので自分たちはその時が来るまで待つしかなかった……が

その將軍たちはという……

「」「困ったなあ……」「」

將軍たちも困っていた。

將軍たちが集まって作戦会議をするテントの中では各国の軍事トップが集まって会議していたのだが全員頭を悩ませていた。

もちろん、騎士たちと同じく土壁なのである。

「あの土壁、高すぎますよ……」

「超えようにも、縄を使って登っても時間はかかりますよ……」

「ワイバーンを使って空から攻めるか？」

「でもワイバーン自体兵士を二人くらい乗せるのが限界でワイバーンも数が少ないので無理では？」

「なら、どうやって内部に侵入する？」

勇者の無限な魔力のせいで土壁は高くなりついでに開けることもできない

しかも、開けたら開けたで王が国民に自分たちを殺す命令をだすのは性格的にわかる。

だが敵意の無い国民を殺すのはやはり避けたい。

「地面を掘って中に入るのは？」

「時間はかからないが事前にバレてしまったら対策されるぞ？」

「なら、すぐに中に入る方法がある上にすぐ攻撃ができて王に隙を与えない方法ですか……」

「いるか？ そんなことができる軍隊など？」

「……ですよねえ」

だが、ここでとある国の將軍はとんでもない提案をする。

「……「歌う死神」に提案してみては？」

「「「……は？」」」」

「歌う死神って……アークにですか？」

「そうだ、奴ならできるかもしれない」

「しかし、先の戦争では山のように大きな体で勇者連合軍を殲滅していましたが……でも結構鈍足でしたよ？」

なぜ、虐殺戦争に参加していない国がアークがコクーンで戦ったのかというと偵察員を出して観察していたのだ。

偵察によつて新しいアークの姿などの情報を知ったそうさ

「そうです、偵察員からの報告では勇者の走る速さより少し速いくらいで今回には向きませぬぞ？」

「いや、アークに頼もう」

「なぜです？」

「簡単な理由だ……今回もどうせ何かを持っているのであろう」

「……それって勘ですよね？」

「ま、そうなるが……今の我々では何もできないことだ」

結局結論はアークに任せることになった。

アレクサンダー「……つとということでアークに任せるそうだ」

アーク「了解しました」

俺は森の中で皇帝からiDROIDを通して命令を受けた

命令の内容は

- ・バサビイ共和国の中に入り国民を全員外に出して救出すること
- ・可能なら偽勇者を殺す

アレクサンダー「それにアークよ……お主にもう一つ依頼が来た」

アーク「え、誰ですか？」

アレクサンダー「ミール聖教国からだ」

ミール聖教国？

なんでそんな俺を流行り病の原因にする国が？

アーク「どんな依頼なのですか？」

アレクサンダー「先ほど、手紙で世界中に王が要求を出したのを覚えてるか？」

アーク「はい、どれも酷い内容だと」

アレクサンダー「そんな中、ミール聖教国だけもう一つの要求が来た」

(ミール聖教国のみの要求)

・貴国の蛮行により我々の国評判が落ちてしまった……本来なら滅ぶべき使命だが所属するノエル・スカルツオと結婚することになったので特別に属国にすることにした

アレクサンダー「……だそうだ」

アーク「ノエルが!？」

アレクサンダー「なんだ？ 知り合いか？」

アーク「あ、いえ……監視の時にお世話になったシスターなので……」

アレクサンダー「そうか……それでこの手紙を読んだミール聖教国はどうとう怒りに落ち本来なら戦争をするのだが……そのシスターと責任者のマザーが人質に取られているので手が出せない……なのでアークに依頼をしたそうだ」

アーク「そう……ですか……」

なんだろうな王の野郎？

まるで自滅をするようだな？

アーク「それで？ 彼女も助ければいいのですか？」

アレクサンダー「そうだ……よろしく頼むぞ」

アーク「了解しました」

ピッ

アーク「はあ……What a terrible day」  
こうして俺は皇帝と通信を切り、三枚の円盤を広げた

夜

バサビイ共和国の外側に集まった軍は焚き木をしてとあるものを作っていた。

「……なんですかこれ？」

そこにあつたのは巨大なかごだった。

「さあな？ 何でも歌う死神が依頼してきたものらしい」

「ええ!? 歌う死神が!？」

「ああ、將軍たちは今回は歌う死神に頼むらしい」

「無茶苦茶な!?! 仮に奴でも中に入った瞬間殺戮を始めますよ!?!」

「それに関しては本人が「殺戮しない、でも王は殺す」って言ってたから大丈夫だ」

「そ、そうですか……でもなんでこんな籠を作るんですか？」

「さあ？ 死神なりの考えがあるんだろうよ」

アークは皇帝を通して今ここにいる軍にとあるものを作らせた。

大体、一軒家がすっぽりと入る大きさで一面だけ穴が開いているのであった。

天井も吹き抜けで上に何かを引っかけるフックがある。

「……強度も「ゴレム100体いても大丈夫!! な強度」だし……  
時間がかかってしまった」



「いない?」

いつまで待っても歌う死神は来なかった……と思われていたが

「おい!! 上!!」

兵士の一人が上空に指を指し何かがいるのを訴えた。

「上? 上に何が……おい、嘘だろ」

上空にいたのは

三つの円盤で飛行し、通称「AI搭載垂直離着陸戦機」と言われ、ハチドリのように飛行するため某アマンダたちに「コリブリ」と言われた機体。型式番号は「T J - c h r y s a l i s 6 0 0 0」、通称クリサリス。

「マジかよ……飛んでいやがる」

兵士たちは茫然と見ていた。

バサビイ共和国の奴らはこんな奴と戦ったのかと。

アーク「やっべ、めっちゃ恥ずかしい」

バサビイ共和国には巨大な土壁があるから侵入するならクリサリスがいいかなって思ったけどデカいせいでめっちゃ注目される。

……とにかくさっさと向かうか。

上空から少しずつ高度を下げていき、頼んでおいた籠に近づく

アーク「さてと……」要請”つと”

準備は整った。

籠に到着し開発一覧から「要請」をすると……

ミラー「MSF、ダイヤモンドドックス!! 全員出動!!」

ズババババババババババババ!!

「うお!? な、なんだ!?!」

「バケモノだ!!」

どこからかカズヒラな声が聞こえると何も無い空間から「カエルのような足と鳴き声のバケモノ」と「謎の仮面をつけた人間」や「黒の球体に腕が三本生えたバケモノ」などが召喚されゾロゾロ籠に入ってしまった。

以前のポイント 11450

要請

全員出動 1000

開発

クリサリス 3000

マステイフ 500×10≡5000

MAZ―535 (車両：トラック) 250×4≡1000  
量産

キッドナツパー 12体 50×12≡150

月光 (アクティブ保護システム型) 一体 700

合計ポイント 150

ああ、一万ポイントが……

まあ、ロリ神に請求するか

ロリ神「ええ!?!」

アーク「よし、お前ら乗ったか?」

「○○○○(○)\*。▽。\*)○( )デキタゼ、オヤカタ!!」「」「」「」

要請で俺が現在開発、量産した兵器たちが元気よく籠の中で返事をする。

(要請した数)

・雑魚サイボーグ 十一体

・月光 四体 (通常型二体、アクティブ保護システム搭載型二体)

・仔月光 二百十九体

・フェンリル 一体

・ブレードウルフ 一体

・マステイフ 十体



・キッドナツパー 二十体

この「全員出動」……たつた1000ポイントで召喚するのは良い点だが一体でも同じコストがかかるので使いどころが限られる。

アーク「あ、兵士さん？ フックを俺の腹にかけてくれませんか？」

「……っは!! あ、ああ!! わかった!!」

え？

この数、運べるのかつて？

おいおい……本家ではピースウオーカーを空中で運んでたんだぜ？

「よ、よし!! かかったぞ!!」

アーク「ありがとうございまーす……んじゃ、出発!!」

どういう原理で飛んでいるのかわからないクリサリスを浮かび上げがらせ宙に浮く。

籠の中では月光たちがわちゃわちゃしている。

アーク「おー……頼むから暴れて籠を壊さないでくれよー……」

マステイフ（ウホウホ!!）

とりあえずマステイフ、お前が一番暴れるな。

ドラミングするな、ゴリラかお前

バサビイ共和国に少しずつ近づくとたびに高度を上げ壁を乗り越えようとする。

さて、今回は殲滅ではなく救助だ。

なので月光たちにはバサビイ共和国の国民を（無理やり）救助して外に出るって命令している。

まあ、最悪戦闘になるかもしれないので火器の使用は許可している。

アーク「ほーい、あと少しで壁を越えるぞー」

さて、救助作戦を始めるか

トントン

月光「（…ω…）」

アーク「ん？ どした？ 月光？」

月光「（／・ω・）／？」

アーク「え？ どうやって下に降りるのだった？」  
突然、アームでポツドを叩かれ月光が聞いていたが……そんなの簡  
単じゃん？

アーク「鳥になってこい」

月光「( ^ 0 ^ ) !?」

## 六十一 兇目　バサビイ共和国国民救出作戦

バサビイ共和国の監視塔

「……異常はないか？」

「ないぞ」

監視塔内では騎士たちが街の中を監視していた。

「はあ……なんだよあの勇者？　なんでこんな喧嘩を振るのかなあ？」

「仕方ないだろ？　あいつ、馬鹿だし世間知らずだし」

「首相は何してんだ？」

「さあな……でも、噂じゃ国外に逃げようとしてるらしいぜ？」

「え、マジで？　だったら俺も外に逃げたいな……」

「無駄無駄……この首の奴がなくなる限りな」

騎士たちの首には不気味に光る模様があった。

これは先日、なぜか急に王になると宣言した勇者が使役魔法を国中に広げてしまい自分たちは奴隷になってしまった。

ちなみに勇者が召喚された時から神のように崇めていた騎士たちは奴隷にはならず普通の騎士として活動していた。

「……なあ、俺たちでさ国民を外に避難させることなんてできないのか？」

「出来てたらもうやってるだろ……あの王から国民が少しでも不穏なことをしたのを確認したら殺せっていう命令があるからな」

実際、騎士は王の命令など最初から従う気は皆無でどうか国民の安全を確保するために動きたいが首の奴隷化の紋章のせいで動けず、もし無理やり動くこうなら首が吹き飛んでしまう。

そのせいで我慢ができなかった同僚が一人散ってしまった。

「国外に出ようにも……壁が邪魔で出られない」

勇者が土壁を出したのには狙いがあった。

昔、日本の侍がいた時代では「鎖国」をしていた時があった。

イギリスやアメリカ  
自国より脅威がある国から自国を植民地にさせないために鎖国をしていたそうだ。

なので勇者……王もその政策をとることにした。

それに、身内にまだ敵がいるならこうして壁で囲ってしまった今のうちに敵を排除し味方を増やせばいいって考えた……が

王は一つ考えていなかった。

「外の情報とかどうするんだよ……」

そう、海外交流だった。

もし、人質に取られた国が取り返そうと「歌う死神」と手を組んでいたらどうするのか？

外国を属国にするならその国のことも事前にしておかないといけない。

まあ……簡単に言ったら王は「自ら井の中の蛙大海を知らずとなった」のだ。

「いや……流石に死神とは手を……マジで組むかも」

「で、でも大丈夫だろ……この土壁があるから……」

だが、メリットも一応あった

何回か魔法の攻撃音が聞こえてきたが壁が破られることはなかった。

酸実、王が逃げてきたときに見た歌う死神は山のように大きかったがこの壁を越えることは無理があるであろう。

「まあ、空でも飛んでこない限り大丈夫だろ」

「……感謝する点はあったな」

だがその希望的観測はすぐに打ち砕かれた。

らく♪ららく♪ららく♪ららく♪

ガタツ!!

騎士たちは長年魔族が来ないかなどの警備をしていたのですがすぐに立ち上がり準備したが……歌声で誰なのかわかってしまった。

「……なあ、これって」

「まさか手を組んだのか？」

「勇者……王は今どこに？」

「確か、教会に行くって……」

「まさか、国民を殲滅しに来たのか？」

「おいおい……なら、速く守りに行かないと!!」

騎士は立ち上がり慣れた手つきで鎧を着て外に向かう……王の命令ではなく自分たちの意思で。

「急げ急げ!! 奴が来るぞ!!」

ガチャガチャと鎧を着て外に出る……が

ガシヤアア!! ガシヤアア!!

窓を突き破り襲撃してきたのは黒い仮面をつけたハゲの人間だった。

「な、何者（ドゴオ!!）ぐふ!?!」

「なんで壁の中に敵が（ドガア!!）がは……」

突然の襲撃に対応しようとしたがその前に腹部を殴られ気絶してしまった。

サイボーグA「?（?）?ヤツタゼ」

サイボーグB「\*、ω、\*）v.:.。oo（ヤツタゼ）」

サイボーグA「。D。）ノセロ!!ノセロ!!」

するとサイボーグたちは騎士を軽々と持ち上げ外に向かった。

別の場所では……

ドンドンドン!!

サイボーグC「。D。）FBI, Open!!」

家の扉を強くノックし中にいる住民を外に出そうとしていた。

「うえええええん!! パパアア!!」

「あなた!! 早く逃げましょう!!」

「だけど奴隷化の奴が!?!」

家の中には子供一人とその両親二人がいた。

先ほど歌声が聞こえた瞬間、正体がわかり背筋が凍ってしまった。

逃げようにも王がかけた使役魔法のせいで逃げれず手には勝手に握られた包丁たちがあつた。

「…………ごめんみんな…………こんな父親で」

「…………いいのよあなた…………悪いのはあの糞勇者のせいだから」

子供は泣き、親は覚悟を決めた目で包丁を構えると…………

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!

扉ではなく天井が開いた

「え!? 天井!？」

するとそこから円盤がやってきた。

キッドナツパー「ハツケン!! ハツケン!!」

「な、なんだ!？」

空から無数のキッドナツパーたちがその家族も周りに集まりだした。

すると円盤の下にあつた装置が動き出し…………

キッドナツパー「ワイヤー、射出」

パシユ

ガツ!!

「え、うわああ!? パパ!? ママ!？」

「きやああああああ!？」

「くそ!? 放せ!？」

家族三人がキッドナツパーのワイヤーに捕まってしまい空中にあげられてしまった。

どういう原理で飛んでいるのかはわからないが大人を持ち上げ天井から外に連れて行った。

家族全員、外に連れ出された。

「放せ!! バケモン!! なんだよこの手は!？」

そして外で見た光景は…………

「な、なんじやこりや……」

そこには

サイボーグA「汗（・ω・；）ハコベ!!ハコベ!!」

せつせと餌を運ぶアリののようなサイボーグだった。

そして肩には大事に抱えられた「バサビイ共和国の国民」だった。

「え、どうい……」

自分が連れていかれている状況にもかかわらず父親は状況を呑み込めなかつた。

ハゲた人間やカエルの足が生えた怪物、ゴリラに似た人間はバサビイ共和国の国民を無理やり文字通り奴隷のように連れて行くのではなく怪我人を介護するかのよう<sup>ト</sup>に荷台<sup>ラッ</sup>のような何かに運んでいた。

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

するとすぐ近くを先ほどのカエルの足が生えたバケモノが空から落ちてきた。

なぜ、空から？ つと思いを向いてみるとそこには……

「ははは……そりゃ、中に入れるわな」

空に「歌う死神」が飛んで、バケモノを落としていた。

よしよし……うまくいってるな。

マステイフ「（。D。）イチバンタイ……イクゾ!!

仔月光たち「（\*、艸、）オウ!!」

マステイフ「（／・ω・）／イクゾ!!」

月光たち「（；・ω・）オウ!!」

月光「ツ!? ツ!？」

アーク「ああ、そうだ？ 鳥になつてこい」

月光「ツ!! ツ!!」

アーク「はあ？ 無理？ その人工筋肉はお飾りか？」

現在、俺はクリサリスの姿で飛びバサビイ共和国の上空で月光たちを落としているのだ。

まあ、疑似HALO降下（高高度降下低高度開傘のパラシュート無い版）だ。

作戦はこうだ。

1，俺がクリサリスで月光たちをかごに入れバサビイ共和国上空に侵入する。

2，バサビイ共和国上空に侵入が成功したら籠を開き、乗せていたものを全て地面に落とす（月光たちは人工筋肉があるから大丈夫である。トラックは即席パラシュートで何とかした）

3，降下完了した奴から各建物内に侵入、目標を発見したら「気絶」させる。（キッドナツパーは付近を警戒、暇があればワイヤーで目標を回収）

4，回収した目標（バサビイ共和国国民）をトラックに乗せて外に運びだす。

5，外に運び出した瞬間、他国の騎士たちに国民を保護させてるって感じた。

だが問題もある。

「歌う死神だ!!」

「墜とせ墜とせ!!」

そう、勇者側の兵士だ。

一応、カメラを最大限拡大し首の様で判断しているがコレが時間がかかる。

ジーっと見ていると下から魔法が飛んでくるので結構大変なのだ。

月光たちには首に模様がなければ殺せと命令している。

マステイフ（ゴリラ）を開発し召喚したのもできる限り運ぶ人手が欲しいので開発した。

アーク「んじゃ、俺の方もやりますか」

キッドナツパーたちから国民の回収が完了の報告を受けた瞬間、クリサリスのレールガンを動かす。

狙いは勇者が作った土壁の一部だ。

これは最初から月光たちに連絡しておいたことだ。

アーク「……レールガンチャージ」



レールガンに電力を流していくイメージをして行く。  
そして、下では……

サイボーグ「（。口。）イクゾテメエラ!!」

サイボーグたちが運転する国民を乗せたトラックが土壁に向かって走行している。

このままだと壁にぶつかってしまう……が

アーク「……shot」

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!

電磁加速によって発射された弾丸は空を裂き土壁にめり込み……

ドガアアアアアアアアアアアアアアアアアン!!

大穴が開いた。

すると、そこに流れ込むかのようにトラックが入っていく。

よし、これで国民の回収はできたろ。

あと、俺が罪のない一般人を助けたことで株価が上がる。

アーク「……あとはノエルだな」

作戦の第一段階は終了

次に第二段階だ。

アーク「キッドナツパー……城の内部を全力で偵察し、人質を保護、

反抗する兵士は抹殺せよ」

キッドナツパー「(ハ、◇、ハ、)ゞ」

アーク「……俺はノエルのところに行く」

そのころ教会

「……そしてここに勇者ペガサスとノエル・スカルツオの結婚を結び……」

教会内ではスーツを着た王とウエディングドレスを着たノエルがいた。

王は現代の結婚式で着るようなスーツを着て、ノエルは真っ白なウエディングドレスを着ているが顔は暗いままだった。

式もマザーが仕切っていた（王に命令された）

来賓もノエルの親せきなどおらず、ほとんどが勇者側についた貴族や騎士であった。

結婚式らしくオルガンの演奏まであった（だがすごく五月蠅い）

ペガサス（くつくつく!! ようやく!! ようやく主人公補正が働いた!! ここから俺の伝説が始まるんだ!!）

未だ、自分がこの世界の主人公が自分だと思い込んでおりノエルを幸せにするなど欠片もなかった。

ノエル（……）

ノエルのほうはというと暗い顔のまま立ち尽くしていた。

目の前が暗くなり何も考えれなかった。

「そ、そして……今ここに誓いのキスを……」

仕切っているマザーもこめかみに青い筋が立っていた。

今すぐにも聖職者という肩書を捨てて王を殴り飛ばしたいがノエルが人質にされてしまう。

ペガサス「さあくノエルちゃん♡ 誓いのキスを♡」

ノエル「……はい」

王は唇をタコのように突き出し、手をノエルの顔を掴み（添えてではない）キスしようとした。

ノエル（ああ、私の初めてはコイツに取られるのですね……）

マザーが言っていたが私には親がいなかったので「初めて」は大好きな人に捧げなさいと言っていた。

目の前にいる汚物は決して好きではない……第一、話も自慢話かしないし女性絡みも酷い（城に行つたときメイドを性的な虐めていたのをよく見ていた）

前にも留めたが次の日には何もなかったかのように虐めていた。

ノエル（ああ、どうか我らが神よ……もう一度……もう一度だけでもいいから……彼に会いたいなあ）

心の中で神に願う

彼とは……それはトオルことアークである。

彼との会話はすごく楽しかった。

彼の世界の失敗や成功、奇跡や神話などいろいろと教えてくれた。最初あったときは警戒はしたが……どこか子供っぽくてが頼ってしまうのだ……

マザーの優しさとは違う、彼の優しさにまた包まれたかった。

彼と再びあったときはとても嬉しかったが……正体はアーハム帝国の第二皇女アリス・フォン・アーハムの部下であった。

彼は謝り自分もそれを受け入れたが……どういうわけか心の中がモヤモヤするのだ。

ノエル（なんででしょう……この感じ……なんか嫌です）

別に病などを発しているわけではないが……なぜかトオルがアリス様と一緒にいるのがモヤモヤするのだ

ノエル（……だけど、そんな感情も今日でお別れです）

だって……今日から自分は王の物になるんだから。

勇者の唇がノエルの唇に衝突しようとした瞬間

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!

ペガサス「な、なんだ!？」

突如、天井が崩壊し現れたのは

アーク「あ、みつけ勇者」

ノエル「……天使……様?」

そこには赤い瞳（カメラアイ）でこちらを見つめるバケモノだった。教会の天井から機体の半分を突っ込み生気を感じさせない瞳でこちらを観察していた

だが……ノエルにとっては

ノエル「なんて……綺麗な……瞳なのでしよう……」

アーク（……なんか思ってたのと違うので入っちゃったけど……  
まあ、いいか）

現在、俺は教会の中に突っ込んでいた。

……いや、本当はクリサリスの体ごと突入して崩壊してノエルたちを回収つもりだったけどまさかの教会に刺さった。

本当は悪役っぽく天井を破壊してゆっくり降りてくるはずだったんだが……別にいいか

「な、なんでここに死神が!？」

「王の壁はどうしたんだ!？」

「おい!! 奴隷どもが一人もいないぞ!？」

ようやくかよ?

ってかこの教会、オルガンの演奏が外まで響いてたしな

ペガサス「ひ、ひいひいひいひいひい!? なんで!？」

王もトラウマを作った犯人が目の前に現れて、腰を抜き後ろに下がる。

「ご、護衛ども!! 早く死神を撃ち落とせ!!」

すると、教会の扉から護衛の魔法使いがゾロゾロ入ってくるが

アーク「あくちよつとごめんね?」

キュイイイ……

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

「ぐは?!？」

「あぎや!？」

扉から敵が来たのを確認した瞬間、クリサリスのチェインガンを掃射すると

敵は紙くずのように飛んでいき死んでいった。

頭に当たれば卵を潰したかのように破壊され、体に当たればその部分だけ吹き飛んでいった。

さらにアークは護衛だけではなく来賓の貴族も殺していった。

アーク（まったく……最初から勇者につかなきゃよかったもの……）

殺していく声のなかに「死にたくない」だの「許してほしい」とか聞こえてくるが……んなこと知るか。

勇者につきき、国民のことも全く考えない君たちが悪い、それだけだ

ペガサス「た、助け!？」

あ、あいつ

窓から逃げやがった

まあ、いいか……今はノエルたちだ。

カメラを動かしノエルを見ると……

「ノエル!!」

ノエル「マザー!!」

ようやく解放された二人は駆け寄り抱き合った。

「大丈夫ですか!?! けがは?！」

ノエル「えつぐ……大丈夫……です……」

二人は泣きあっていた……が

アーク「あく……すまんがお二人さん……いいか?」

「歌う死神よ……ノエルを救ってくれたのには感謝します……しかし

!! 私の命を捧げるのでノエルは殺さないでください!!」

アーク「いや、殺さないし?! 俺はお前たちを出しに来たんだよ!？」

「嘘を言いなさい!! そうやって何にももの人間やエルフを殺したので

しょう!!」

アーク「そうかもしれないけど俺は君たちを出すために来たんだよ

!？」

「バサビイ共和国の国民は?! 殺したのですか!？」

アーク「殺してない! 全員、国外に脱出させた!!」

「……本当でしょうね?」

だめだわ

完全にアークとしての俺を信じてくれねえ……泣きそう

アーク「本当だから……とにかく早く外に……」

「いえ、ここで待ちます」

え、マジ？

……いや、これが普通の反応か

確かに人殺しのバケモノに助かろうなんて思わんな。

だが時は待つてくれない

「おい!! ここにまだ花嫁がいるぞ!!」

「だが、先に死神を殺すべきだ!!」

あ、やつべ

もう増援が来たのか!!

アーク「ええい!! ……ノエル!! 帰ったら君に言うことがあるか

ら助けさせてくれ!!」

ノエル「なんで私の名前を!？」

アーク「今は詳しく言えないけど……約束だ!!」

ノエル「え……まさか……トオル?」

バシユ!!

ノエル「ひゃ!!」

「な、なんですか!？」

突然、天井からワイヤーが飛び出しノエルとマザーを掴み外へ運ばれて行った。

アーク「よし……少し乱暴にやってしまったがこれで全国民は避難完了だ」

ノエルを回収したキッドナツパーたちは俺が空けた穴から脱出していく

アーク「さてと……ようやくこの力クリサリスが使えるな」

誤射などあったら嫌なんだな。

教会から機体を抜き出し、天高く飛び国民のいないバサビイ共和国を見る。

国民がいない王など……玉座でただ一人踊っている獣にすぎん。

そして、そっと言おう

アーク「やれ、AI」

## 六十二発目 鋼鉄の蛹（クリサリス）

バサビイ共和国上空

その空に……一体のバケモノが飛んでいた。

クリサリス（アーク）「AIモード……起動します」

クリサリスはポッドのカメラで国を一瞥する

そして、人間がいないか探す。

クリサリス（アーク）「ピ……ピ……ピ……ピ……ピ……ピ……ピ……ピ……ピ……ハツケン」

見つけた……というより見つかってしまった。

「いたぞ!! 死神だ!!」

「魔法準備!!」

「騎士は撃ち落としたりとこころを殴りこめ!!」

街の一角から騎士や魔法使いが現れ、アークを倒そうとするが

クリサリス（アーク）「通常モード移行、チェインガン掃射」

キユイイイイイ……

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

空から鉛の雨が降り注ぎ騎士たちは死んだ意識がないまま挽肉とされていった。

クリサリスも死んだのを確認もせず他の生存者を探しに行った。

クリサリス（アーク）「ら〜♪らら〜♪ららら〜♪」

高速で空を飛びまわり生存者を徹底的に排除していく。

誰一人ともこの国から“生”という存在を消すために。

「いたぞ!!」

「魔法演唱 ♪（ドシユ!!）」

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!  
ヒュオオオオオオ……

クリサリス「東側エリア、制圧完了」



サーモカメラで人がいないのを確認し、次の場所に飛ぶ。

クリサリス（アーク）「敵反応確認、攻撃モード移行」

敵を発見し、ハチドリのように滞空し敵を探す。

すると、建物影から魔法使いが飛び出し魔法を使おうとするが……

バシユウウ…バシユウウ……

ドガアアン!!ドガアアン!!ドガアアン!!

クリサリスから発射されたミサイルが隠れていた建物ごと破壊し、血の海にさせた。

爆風でできた煙が晴れると死体が山のようにできていた。

中にはまだ生きている者もいたがクリサリスは止めを刺すこともなく次の場所に移動した。

クリサリス（アーク）「制圧完了、通常モード移行」

ペガサス「ひいひいひいひいひい!!」

そんな空からの一方的な虐殺が行われている中、王は騎士たちを置いて城に逃げていた。

大通りを走り城の門にある勝手口に転がり込んだ。

ペガサス（聞いていない聞いていないぞ?!）なんでここに死神が来ているんだ!? 壁は!? 奴隷どもはどこに行った!?!

なぜ、ここにトラウマ歌を植うえ付死けた犯人神にいるのかわけがわからず混乱していた。

ペガサス（そうだ！俺は王なんだ!!）こんな騎士どもが何とかしてくれる!!）

結局、自分で解決しようとは考えず他力本願な考えをする。

急いで立ち上がり城の中に入る……が

クリサリス（アーク）「レールガンチャージ」

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

ペガサス「ひい!？」

すぐ頭上を雷が走っていった。

先ほどの弾丸はクリサリスが西側区域を清掃の際に放ったレールガンだったが流れ弾がここまで来たようだ。

ペガサス「は、はやく入らないと!？」

王はまるで雨が降ってきて早く家の中に帰る子供のように城に入った。

城の中は自分が招集（連行）してきた自分好みのメイドたちが慌てたようにあたりを走っていた。

……が帰ってきた自分に気づくメイドはおろか騎士も執事もいなかった。

ペガサス「お、おい……王が帰ってきた！早く!! 負傷者は地下に逃げ込むわよ!!」

メイドに声をかけようとしたが無視をされ

ペガサス「おい!! 帰ってきたと言って死神が来るぞ!! 無理に抵抗せず通り過ぎるまで隠れるぞ!!」

今まで世話をしてくれた執事も自分のことは露知らずで走り去っていき怪我をした人間を抱えて地下に逃げようとしていた。

ペガサス（なんで……なんで……俺は勇者だぞ……王なんだぞ……この世界の主人公なんだぞ……）

城に入ってすぐの大広間の中央で立ち尽くして絶望するが……

ドン!!

「いってええええ……おい!! こんなどころで棒立ちするなよ!? 邪魔……って王様ではありませぬか!? 結婚式は!？」

通りかかった騎士にぶつかり、ようやく気づいてくれた（そのままボッチでいればよかったのに）

ペガサス「……おお!! お前!! ……実は花嫁は死神に……多分だ  
が殺されたと思う」

「ええ!? そんな!？」

ペガサス「ノエル……ごめんな……俺のノエル!!」  
言っておくがノエルは無事で現在、キッドナツパーに回収されている。

なのでアークに殺されておらず生きている。

「そんな……あー、それなら人質はどうですか!!」

ペガサス「そうか!! アイツらを利用すれば!!」

忘れていた各国の人質の存在を思い出し、急いで廊下をはしる。

ペガサス（人質どもを5人くらい殺せばあいつらも大人しくなるだろう!!）

自分が徴収したメイドが慌てずに行動していく中、王は人質を入れている部屋に向かい……そして開けるが

バン!!

ペガサス「おい!! 人質ども!! 貴様らの国が言うこと聞かなかつたから殺す……な!?!」

扉を開けるとそこには鎖で拘束され怯えている人質……ではなく

月光（あ、どうも）

マステイフ（あ、失礼）

ゴリラ<sup>マ</sup>みたい<sup>ス</sup>なバケモノ<sup>テイ</sup>とカエルの<sup>月</sup>バケモノ<sup>光</sup>がいた。

ペガサス「ば、バケモノ!?!」

人質を入れていた部屋の中は普通の部屋と変わらないが何分二人部屋のところに各国の人質を入れ窓も鉄格子をしていたので袋詰め状態の中、監視役を四人もいたはずのだが……

月光（にーげるんだよ!!）

マステイフ（じゃあな!! とつつあん!!）

「あ、待て!!」

20体ほどのマステイフの両腕と月光のアームに人質たちが抱えられており、人質はバケモノを前に怯えているが助けに来たのだとど

こが安心したような顔をしていた。

人質を抱えたマステイフと月光は自慢のゴリラみたいな腕と力エルのような足で壁ごと破壊し外に出て行った。

ちなみにだがなぜ、ここに人質がいるのかということ

数十分前

アークがノエルたちをキッドナツパーで回収した時であった。

ビイイイイイイイイイイイイ

キッドナツパー（出荷よー!!）

「は、放しなさい!!」

ノエルとマザーはワイヤーで拘束され宙高く上げられ運ばれていた。

ノエル「ま、待つてください!! 今のってトオル様なのですか!？」  
ノエルが運ばれていく中、キッドナツパーに聞くが無視され運ばれていくが

ノエル「ま、待つて!! 城の中に人質がいるの!!」  
キッドナツパー「（。D。）ダニイ!？」

つていうことでノエルが教えてくれた（ノエル、偉い）

一応、教えてくれた後はノエルたちは国外に退避させた。

ペガサス「そ、そんな……人質が……」

人質を全員救助され国民も全員脱出させられ、もう脅し材料が全て無くなってしまった。

ペガサス「どうすればどうすればどうすればどうすればどうすればどうすればどうすればどうすればどうすればどうすればどうすれば」

王の頭の中は完全に混乱していた。

騎士たちを脅しに使うか？

ダメだ、こいつらは自分に自ら従った騎士たちだ。外国からすれば

どうでもいいって思われる。

自分が脅迫材料？

そんなの嫌だ、自分は主人公だから人質なんてありえない（なんじゃそりゃ）

ペガサス「どうすれば……どうすれば……」

「お、王様……早くご決断を……」

ペガサス「そ、そんなこと言われたって……ツハ!!」

必死に考えた末に思い出した。

そうだ、わからないなら自分みたいなやつに聞けばいいのではない  
か

ペガサス「首相!! 首相はどこにいる!?!」

そうだ、首相に聞けばいいじゃないか

アイツは自分を王にしてくれたし何か聞けば解決法を思い浮かべるかもしれない……が

返ってきた返答で絶望した。

「しゅ、首相なら今朝から姿を見せていません!!」

ペガサス「う、嘘だろ……」

頼みの綱が消えていった。

まさか、死神にやられたのか？

ペガサス「ど、どうすれば……どうすればいいのだ……」

王は人質のいない部屋の中で膝を崩し絶望していた。

バサビイ共和国領土 国境付近

バサビイ共和国の国境付近に一つの集団がいた。

その集団は本来は壁の中に閉じ込められているはずのバサビイ共和国の集団だった

「……本当に自滅しましたね」



この銀髪の女性はまだで「怨霊そのもの」みたいな魔力であった。  
しかも、常人の魔力ではない

(これは……最悪、魔王クラスだぞ……だがその力を自分のものにするのだから……関係はないか)

首相は不気味に笑いながら銀髪の女性の頭を撫で、馬車は森の中に消えていった。

だが……

ポロリ……

寝ているはずの銀髪の女性は泣いていた

?? (……助けて……旧型壱号)  
お兄ちゃん

## 六十三発目 お掃除

そのころのバサビイ共和国の空では

キュイイイイ……

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

クリサリスが兵士たちを掃除していた。

クリサリス（アーク）「北エリア、殲滅完了」

カメラで人間がいなか探し、いないのを確認する

次のエリアに移動とした瞬間、

ズシャアアアアアアアアアアアアアアアア!!

クリサリス（アーク）「ッ!?!」

建物から雷が迫ってきた。

AIは何故建物から雷ができてきたのか、自然現象か？と考えるがその前に避けることにした。

黄色の雷がクリサリスに命中……

バシユウ!!

……することはなかった

「嘘だろ!?!」

建物の中から魔法を撃った魔法使いが驚愕の顔で見えている。

死神に当たると思った瞬間、まるで空間ごとその場から移動したかのような回避行動をしたのだ。

まあ、あんな巨体で避けられるなんて思わなかったであろう。

クリサリス（アーク）「敵発見、チェインガン掃射」

キュイイイイ……



ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

敵を発見したクリサリスはチェインガンで建物ごと敵を排除した……が

ズシヤアアアアアアアアアアアアアアアアア!!

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

バリバリバリバリバリバリ!!

他の建物から極色の魔法が空に向かって放たれる  
もちろん、クリサリスに向かって。

クリサリス（アーク）「……」

だが、クリサリスも黙ってはいない  
最低限の動きで躲していき、結論を導く

クリサリス（アーク）「結論……ゲリラ戦と確認……招集を出しま  
す」

騎士たちも王みたいな馬鹿ではない  
生きるためなら騎士の誇りすら捨てる。

クリサリス（アーク）「ロケットランチャー、発射」

クリサリスも数を減らそうと辺り一面にロケットら弾丸を打ち込  
んでいくが

ジュツ!!

パリーン!!

数はあちらが上なので当たりだした。

クリサリスの機体を傷つけていく……が

クリサリス（アーク）「キッドナツパー、射出」

クリサリスは建物内にいる敵を排除するためキッドナツパーを出  
した。

ビイイイイイイイイイイイイ

キッドナツパーは魔法の雨の中飛び回り建物内に侵入する。  
キッドナツパー「ハツケン!! ハツケン!! 攻撃開始!!」

ズドドドドドドドド!!

建物内で閃光が走った後、キッドナツパーは他の建物に侵入して敵を排除していった。

魔法使いは先に邪魔なキッドナツパーを倒そうとしたが

ズシャアアアアアアアアアアアアア!!

建物内から何かが出てきた。

それは……仲間の死体だった

だが、ハチの巣にされたような死体ではなく何か殴られたような死体であった。

すると……

マステイフ（待たせたな!!）

屋根の上に10体にマステイフが現れた。

先ほどクリサリスが招集をかけた奴らだ。

マステイフ「(。 㐁。) シネゴミカス!!」

マステイフはゴリラみたいなき動をとりゲリラ戦をする魔法使いがいる建物内に侵入していった。

魔法使いは突然の乱入者に対処するが対処する前にマステイフの機銃で殺されたりパンチされ外に飛び出され人間釘になった。

そして、少しずつ静かになってきマステイフたちが建物内から出てきた。

マステイフ「(\*´ω´\*) オツカーレ( 㐁。) || 3 フウ(

「……フウ……」

「どうやら、殲滅が完了したらしい。」

クリサリス（アーク）「殲滅完了、南エリアに移動します」

排除完了を確認するとクリサリスはバサビー共和国の南側に移動したが

クリサリス（アーク）「？」

クリサリスはどういうわけか困惑していた。

何故なら今まで入った瞬間攻撃をされたのにそれが全くないのだ。

だが、その問題はすぐに解決した。

クリサリス（アーク）「……発見」

カメラで探していると城に続く大通りに大量の鎧が脱ぎ捨てられているのを発見した。

そして、そのまま大通りを見て行くと

「逃げろ!!」

「城まで撤退だ!!」

騎士たちが鎧を脱ぎ捨て城に雪崩れ込んでいるのが見えた。

さすがにこの距離からミサイルやチェインガンは心もとないので準備する

クリサリス（アーク）「レールガンチャージ」

バリバリ……つと機内で何かがはじける感じがする。

すると、そのはじける感触も強くなっていき増えて行つた。

クリサリス（アーク）「目標、逃亡中の敵」

攻撃モードになり、狙いを定める……そして

クリサリス（アーク）「レールガン、発射」

ズシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!

クリサリスのレールガンから放たれた弾丸は逃げている騎士たちの背中をとらえ……ることなく

ドガアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!

城ごと貫通した。

クリサリス（アーク）「敵の殲滅、完了……主導権を戻します」

アーク「う、ううううん……」

頭いてえな……さてと……どうなったかなあ？

AIモードからもとに戻り目を開けるとそこは

アーク「……随分、やってるねえ」

地獄絵図だった

ってか例えじゃなくて本当に誰もいない

アーク「さてと……月光たちにつぐ……城を囲め、誰一人たりとも

外には出させるな」

ついでに月光たちに命令を出す。

なんでクリサリスで勇者を殺しに行かないのかって？

まあ、「超回復」があるから殺せないってのが一番かなあ？

あと、まだ徴収されたメイドたちが居るからね。

アーク「んじや、一旦戻るか」

こうして俺は一度壁の外に向かった。

アーク「お、みんな無事のような」

空を飛び壁を越えると他の国のテントたちが立ち並んでおり助けた国民の介護をしてくれた。

首を見ると奴隷化の際につけられた模様も消えていた。

アーク「……うまく行ったみたいだな」

実は行く前に他国のトップたちに「救出した国民の奴隷化を解呪してくれ」つと頼んでおいたのだが……よかった。

「ん？ おい!! 歌う死神だ!!」

「帰ってきたぞ!!」

地面に近づくとつれ、自分の存在に気付く人間が増えてきて近寄ってきた……が全員微妙な顔をしていた。

アーク（まあ、バケモノに助けられるなんて変な感じだもんな）

「おい!! 歌う死神!!」

すると、將軍の一人がやってきて話しかけてきた。

アーク「あ、アークでいいですよ……それで何ですか？」

「まず、今回の件……見事であった!! 私はお前をただ虐殺を楽しむバケモノかと思っていたが……それは間違いのようだな」

え、俺って国際的にどういう目で視られてたの？

「あと……お前が助けた者の中に伝言が来ている!!」

伝言？

なんだ？

「とあるシスターからであった!! えつと……内容は……」

ノエル『助けてくれてありがとう、アーク様』

だそうだ!!」

シスター……ノエルか

彼女には悪いことをしたな……終わったら全力で謝るか。

つかアーク様って……なんか嫌だな

すると……

「おーい!! 死神!!」

アーク「え、誰……わぁお」

テントの中や草むらからバサビイ共和国の国民が出てきて

「助けてくれてありがとう!!」

「ごめんな!! バケモノなんて言ってしまった!!」

「今度から死神じゃなくてアークって呼ぶぜ!!」

「あおの王から助けてくれて感謝するよ!!」

「あんたは命の恩人だ!!」

アーク「え、なに? ドツキリか何か?」

「奴らはお前に助けてくれて感謝をしたくて待っていたのだ」

感謝……か

アークに助けられた国民は大声で感謝の意を表し……笑顔で言っていた。

アーク(……もう二度と感謝されない人生を歩むと思っていたが……まあ、悪くないな)

少し微笑んでしまいそうだがまだ解決はしていない。

アーク「ところで勇者……王は?」

「……それがまだ降伏していないのだ」

まだ、抗う気かよ?

人質は……メイドくらいか?

「だが、その間にも我々の結論は決まった」

そして、俺はその内容を聞いて……喜んだのであった。

バサビイ共和国 城内

すっかり日は暮れ夕方になろうとしていたが

ガシャン!!

ペガサス「なぜこれしかないのだ!」

城内の王の間では王が食事をしてきたが出てきた食事がパン一個だった。

余りにも少ないのと今までの出来事で自分の思い通りにならなくそれでストレスが溜まって他の人に八つ当たりをしていたのだ。

「お、王よ……今食べれる食料はこれだけです……」

配膳してきたメイドが怖がりながら言う。

先ほどのアークのレールガンによって食糧庫は半壊、食べれるものがほとんどなくなったのだ。

ペガサス「ふざけるな!! お前たち、どうせ隠しているであろう!! 出せ!!」

「か、隠してなんかいません!! 私たちは怪我人の移送で暇なんてありませんでした!!」

実は今、勇者に怒鳴られているメイドは何時かの牢獄に入れられた元護衛の妻であった。

彼女は医者であり、先ほどの戦闘で怪我をした人を重傷者を優先的に治療していった人物だ。

ペガサス「嘘つけ!! なら、証明して見せろ!!」

「証明も何も……あなたは何もしてないのによく我がままを言えますね!!」

先ほどから泣いては怒って歌う死神には恐れてまともな指揮もしていないのに何を言っているんだと反論する……が

ペガサス「うるさい……うるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさい!! ええい!! 貴様ら!! 服を脱いで裸になれ!!」

「な、なんで探すだけで私たちが裸にならないといけないのですか!? もうすでにこのメイド服が裸みたいなものでしょう!」

城に招集で着て渡されたメイド服は布面積が少なかった。

そのせいで官僚からセクハラを受けたりしていた(“勇者の物”なので罪に問われないギリギリのところをされた)

ペガサス「黙れ!! 実行しろ!!」  
「ぞ、そんな無理(ビリ!!) いつつ!」

首にある奴隷化の魔法が起動し主人の命令に刃向かったので痛みが走る。

このままで従わなければ首が飛んでいく。  
周りにいたメイドたちもあまりの痛みに膝をつく。

ペガサス「やれ!! 命令だ!!」

「わ、わかりました……」

シユルシユル……

まさか、夫以外で裸を見せるといふ恥辱に耐えながらメイド服を脱ぎ、メイド全員裸になった。

ちなみにだが執事たちはここにはいない。

執事たちは適当に鎧を身に着け警備に当たっている。

この執事たちは自ら勇者側についた人間たちである。

ペガサス「ぐふふふ……絶景だなあ……」

(ごめんなさい……あなた……こんな惨めな妻を許して……)

心の中で牢獄に入れられている夫に謝る。

だが、王はそんなことを気にしない

ペガサス「よし、ここにいるメイド全員……今夜の俺の慰め者になれ!!」

「え、そんなの嫌です!」

ペガサス「うるさい!! 今ここでするぞ!!」

王の目の焦点は合わなくなり完全に狂ってしまった。

メイドの手を掴み、自分のズボンを降ろしその上に乗せようとする。

「いや!? 放して!? 助けてあなた!」

ペガサス「あひゃひゃひゃひゃひゃ!! そうなんだ!! ここは樂園なんだ!! 世界は悪でおおわれており、ここが唯一の樂園なんだ!!」

頭も完全におかしくなり、変な発想に至る。

元護衛の妻は抵抗するが奴隷化のせいで動きが完全に止められ勇者に捕まれ、とうとう勇者の下半身の上まで動かされた。

他のメイドたちも我慢できずに止めに行こうとしたが同様に奴隷化のせいで動けなかった。

「お、お願い……やめて……」

掴まれ犯されようとなっているメイドは涙目になって言うが王は自分の欲求を鎮めるためにしか考えていなかった。

ペガサス「ふう! ふう! ふう!! 入れるぞ!? 挿入するぞ!」



「お願い……やめて……あなた……助けて……」  
その時であった

ガシャアアアアアン!!

夕焼けの光が王がいる部屋を照らす中、一本の矢が飛んでき

カアアアアアン!!

ペガサス「ひい!?!」

王の頬をかすり玉座に深々と刺さった。

余りにも急で王は驚き手を離れた。メイドは隙をつき王から離れた。

ペガサス「な、なんだ!?!」

その矢には紙が括り付けられていた。

ペガサス「おい! 誰が俺から離れていいと聞いた!! 後で俺の部屋に来い!!」

そんな王の品格の欠片もない蛮族みたいなことを言いつつ括られた紙を広げると

ペガサス「何々? 拝啓……ひ、ひい!?!」

突然、王は手紙の内容を理解した瞬間、手紙を投げ捨て深淵を覗いてしまった顔になり机の下に隠れてしまった。

捨てられた手紙はメイドが回収し読んでみると……そこに書かれていたのは

『拝啓 勇者ペガサス、ペガサス王、金剛翔馬 様

お元気いかがですか? 先の戦争で死んでいった勇士たちのご冥福をお祈りいたします。さて、この戦争で自らの欲望のことしか考えず勇者のために命を捧げたが本当のことを教えてくれず無念にも死んでいった者たちの思いを考えているでしょうか? まさか、そんなことも考えずにメイドを犯そうなんて思ってませんよね? 彼女た

ちは夫たちと幸せに普通に暮らしていきたいのにあなたがふざけた命令を出してせいで家庭は壊され妻は自分のお気に入りのおメイドにして娯楽を楽しみ返してほしいと迫ってきた夫たちを監獄に入れられました。まあ、さぞかし恨まれるでしょう。

それに一国の皇女に手を出そうとしさらにその姉まで手を出そうとする。

ハーレムは夢の中だけにしてください。

女性をなんだと思っているんですか？ 幸せをなんだと思っているんですか？ 大切な恋人を取られた男の悲しみはわかりますか？

まあ、わかりませんよね？

だってわかってたならもうしてませんよね？

……さて、あなたは王様なんですから国債のことも考えないといけませんよね？

まさか、国民には負担させて自分だけ甘い蜜を吸うなんてこと……ありませんよね？ だったらあなたのために死んでいった戦士たちのことを忘れたのですか？

なので世界は貴方の罪状を決めました。

この手紙が届いているところは夕方でしょう……あ、そういえば今日は綺麗な満月が見られるそうですね？

あなたの罪状は『明日の朝日を見させない、お迎えは満月です』です

……え？ 自分は頭が悪いから意味が分からないですって？

仕方ありませんね……つまり

今宵、あなたの魂を滅亡させに参ります

ー歌う死神 アークよりー

六十四発目    S h o u l d    b e    b u r n i n  
g   i n   h e l l    (地獄の業火に焼かれろ)

バサビイ共和国国民救出作戦からしばらくたった。

辺りは夜となったが満月のおかげで明るかった……が

バサビイ共和国の町並みは荒れ果てていた。

街は瓦礫の山になり、城も門が破壊されていた。

だが、そんな中……

「……」

執事がいた。

だが、いつもの黒い服ではなく包丁を持ったりして武装していた。

「……なあ、本当に来るのか？」

「来るに決まってるだろ!!」

彼らは先ほど手紙で歌う死神が来るのを知り武装していた。

本当は逃げたいが外は月光たちで監視されており出ようにも出れないのだ。

「なあ……俺たちだけでも降伏して逃げようぜ？」

「馬鹿言え、俺たちは勇者がいないと生きていけないんだ……勝たないと生きていけない」

皆、暗い顔であった。

勇者が召喚された時は喜んでいたが今じゃ狂王となってしまった。

「神様は俺たちの味方じゃないのかよ……」

だがそんな中……死はゆつくりと来ていた。

アーク 「♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪」

「ッ!! 来た!!」

歌が聞こえた瞬間、執事たちは包丁を構え待った……が来たのは

「……霧？」

赤い霧だった。

満月のおかげで今夜は明るい新月でも見えるほど濃い霧だった。  
「おーい！ 魔法使い！ 風でこの霧を飛ばしてくれ!!」  
霧が邪魔なので風で飛ばそうとした瞬間

トン……

「ん？ なんだあれ？」

「どうかしたか？」

「いや、今月に誰か（ザシユツ!!）い……る……」

隣で話していた仲間の首がゴロリと落ちた。

そして、広場の真ん中には

カキカキ

【こんばんは？】

「し、死神!？」

音もなく広場の中央には青い目をした髑髏が佇んで、黒い棒を持っていた。

そして手にはメモ帳がありそこに言葉を書いていく。

「敵襲!! 敵襲!!」

「来たな死神!! 今ここで……な!？」

一番やりをしてきた騎士が剣を抜いたが

パキ……パキ……

刀身が錆びていた。

先ほどまで鏡のように煌めいていたはずが……

以前のポイント 150

獲得（バサビイ共和国清掃） 1500

変身

スカルズ 500

開発

M870 CUSTOM 30  
合計ポイント 1120

アーク（よし、今回はかっこよく決まったぞ）  
さて、今回行く装備はM870 CUSTOM一丁とTORNADO一丁である。

M870はポンプショットガンで長年愛用されている世界で一番売れているショットガンの一個だ。

城の中は入り組んでいつ接近戦になるかわからないからな、TORNADOは念のために持ってきた。

アーク（敵は……15か）

敵の数を確認した後、話しかける。

……が確認している間に囲まれていた。

カキカキ

【えっと……王様はどこに？】

とりあえずこいつ等には興味がないのでさっさと場所を吐いて欲しかったが

「「「……」」」

カキカキ

【なるほど……黙秘ですか……仕方ありません、強引に行きますか】

ガシヨ

M870のフォアエンドを引き構える。

カキカキ

【最終勧告だ……王の居場所さえ教えれば殺したりはしん】「うおおお  
おおおお!!」

……ツチ

最終警告を言おうとした瞬間、奥に隠れていた魔法使いがアークに向かって魔法を放ってきたが



魔法使いは遠距離戦では脅威になるが近接戦になった瞬間、弱くなる。

高速移動で近づいた瞬間、魔法使いは反撃しいようと拳を振り上げるが

グキヤア!!

寸のところで避けM870を軸として絡め、相手の腕を背中に無理やり回し力を入れ脱臼され怯んだところを胸に一発頭に一発ぶち込んでいった。

アーク（次!!）

他の魔法使いを探そうとしたが

「はああああ!!」

ガキイイイイイン!!

騎士の一人に切りかかれ腰からマチェーテを引き抜き鏢づりになる。

騎士との顔が触れ合うくらいになるが

アーク（……バーカ）

すると、アークの顔から緑色のナニカが出る。

「う!? あぐ!?!」

緑色の息をかけられた騎士は急に顔色が悪くなり……そして

「ア……アウウウウ……」

髑髏兵になってしまった。

味方がゾンビにされたのを見て怖がる執事たちだが

アーク（……うわ、こんな感じであるのかよ……）

かけた犯人のほうが驚いていた。

髑髏兵はまるでゾンビのような動きをしかつての味方に襲い掛かる。

アーク（ま、まあいい……しばらくは囷になってもらうか）

髑髏兵が暴れている間に高速移動で飛び回りショットガンをぶつ放していく。

アーク（ラスト!!）

最後の魔法使いを発見し接近しトリガーを引く。

ズダアン!!

「ぐは!? う、腕がああ!?!」

アーク（あ、狙いが悪かったな）

放たれた散弾は敵の右半身に命中し右腕を飛ばしたが命までは奪えなかった。

すぐに楽にできなかつたことを反省し再度引き金を引こうとしたが

カチ!!

アーク（あら?）

え、なんで弾が出ない……あ、単なる弾切れか  
少し焦ったが冷静になりリロードをしようとするが

「」「」「おとおおおとおおおお!!」「」「」

敵の集団が迫ってきた。

さつき出した髑髏兵は……地面に倒れてピクリとも動かなかつた。  
まあ、あの数で一体は無理か。  
だけど邪魔だな

ズシュ

「あ、あぎゃ、あぐ!?!」

目の前にいる魔法使いより後方から迫ってくる敵を優先すること





又シヤアアア!!

「あぎや!? う、腕がアアア!?」

引き抜かれそうになったが傷口に銃身に体重をかけ押し込んだ。

カキカキ

【あ、王の居場所を教えてくださいたら助けるよ?】

「あ、あいつは玉座の間にいる!! メイドを肉盾にしてお前を迎え撃とうとしてる!!」

アーク（お、そうか……）

「ほ、ほら!! 言ったらろ! 見逃してくれ!!」

アーク（あ、そうだったな……んじゃ）

カシヨ

アーク（さようなら）

「え?」

フォアエンドを引き排狭口に12ゲージ弾を入れフォアエンドを押し、銃身を引き抜き銃口を喋ってくれた奴の顔面に向けて……引き金を引き痛みから解放させた。

顔面が吹き飛ばされた魔法使い……だったものは地面に崩れ落ち動かなくなった。

アーク（さて……王はこの先か）

正面玄関の扉を蹴破り中に入ると

アーク（はい、お邪魔します（ガシヤアアアアアン!!）……あつぶないですねえ……硬化していなかった死んでましたよ）

入った瞬間、頭上からシャンデリアが降ってきたアークに直撃したが硬化していたので効いていなかった。

カキカキ

【ド派手な歓迎ですね? 金剛翔馬さん? 今からお迎えに行くので

待っててくださいね】

カシユ

カシユ  
カシユ  
カシユ  
カシユ  
カシユ

一発ずつシヨットガンシエルを入れこみながら広場を歩いていくと

「う、うおおおおおおお!!」

「はああああああああああ!!」

アーク（おっと）

ダアアン!!

カシユ

ダアアン!!

カシユ

敵が二名突っ込んできたが腰撃ちで屠った。

広場に敵がいなかったのを確認すると俺は玉座のある王の間に向かった。

暗い廊下を一人で歩いていき、たまに敵と遭遇するので引き金を引いていった。

今日は綺麗な満月のおかげでナイトビジョンはいらんのがありがたい。

アーク（おーい、まだ敵が残っているなら早く王を差し出した方が身のためだぞー）

まだいるかもしれない敵に向かってメモ帳に書いて何枚も書いて投げて呼び掛けるが返事はない。

ため息を吐きながら暗い廊下を歩いていくと

アーク（……お？）

廊下の奥に一筋の光が漏れていた。

覗いてみると……

アーク（あ！ いたいた!! ここにいたのかよ!!）

ペガサス「く、来るな!! この女たちがどうなってもいいのか!？」

中はどうやら食堂らしく机がたくさんあった。

だが、木製の机は即席のバリケードになって椅子は散乱していた。

王は部屋の奥でメイドたちを肉壁にしメイドの一人の髪を掴み首に剣を向けていた。

王の後ろには巨大なステンドグラスがあった。

カキカキ

【まあまあ……君の命さえ消さば、あと用はないからさ】

M870を構えながらジリジリと近づくと近づくと。

ペガサス「そ、それ以上近づくな!!」

「う、ううううう……」

一歩踏み込むたびに王は剣をメイドの首に刃を抑えていき、血がすごしずつ流れていく。

アーク（わーたわーた……今止まるから）

ペガサス「そ、その銃も地面に捨てろ!!」

王はアークが持っていたM870を捨てるよう命令する

危険だと判断しその場で止まってM870を捨てたが

アーク（ほい、捨てたぞ）

アークは言う通りM870を自分の足元に置いた……が

「」「死ねええええ!!」「」

アーク「うお!?!」

突然、肉壁にされていたメイドの何人かがナイフを取り出し襲ってきた。

だが、ヴェノムとの訓練で奇襲に備える訓練もしておいたので対応は余裕でできた。

ナイフが俺の顔に迫ってくるが少し右にズレて避け迫ってきた勢いを利用して腕を掴み背負い投げをして思いつきり地面に叩きつける。

「やああああ!!」

メイドの一人を地面に叩きつけ振り返ると次のメイドがナイフを片手に切りつけようとするが

パキイイイン!!

「…………え?」

オセロツトが言っていたが人を殺すなら片手ではなく両手でナイフを構えて刺すのがいいと言っていた。

腕を振り上げナイフが来るタイミシングに合わせて刀身に向かつて振り払えばナイフの進路はズレて簡単に避けることができる。

しかも、この世界のナイフは現代みたいに頑丈じゃないから簡単に折れる。

アーク(have a good time!!)

ズダアアアン!!

ナイフを折られ放心状態になったメイドの懐に入り込みTORN ADO―6を撃った。

撃たれたメイドは力を失い俺に倒れこんでくるがその場で避ける。

アーク(……やつぱりか)

死んだメイドの首を見ると奴隷化の呪いがなかった

どうやら俺を襲ってきた奴らは王側についた敵のようだ。

アーク(いやあ、やられたわ……まさか変装していたとは)

ジリジリと間合いを詰めてくる他の偽メイド。

しかも知らないうちに他のところにもいた敵もこの場所に来て囲んでいる。

だが、こちらは早く任務を終わらせたいので殺していく。

アーク(よつと)

地面に置いたM870を蹴りあげ回収し

ドン!!

ガシヨ

ドン!!

ガシヨ

まず前から接近してくる敵二人を売って殺す。

次に後方からナイフを投げってくる敵がいたが  
パキパキ……

カン!! カン!!

硬化して防ぎ構え撃ち殺した。

カキカキ

「ん〜？ なんだその程度か？」

ここで煽るような口調で煽る。

すると、これに乗ってくれたのか大声を出しながら襲い掛かってきたが

ザシユウウウウ!!

ドン!! ガシヨ!! ドン!! ガシヨ!!

パン!! パン!! パン!! パン!!

アークにとっては雑魚以下だった。

M870で頭を吹き飛ばし、マチェーテで切り裂き、TORNAD

O-6で命乞いをする愚か者を殺していった。

たまに生き残りの騎士も来るがアークにとっては今襲い掛かっている敵と大差なかった。

こうしてアークのワンサイドゲームが終わっているころには

アーク（はい、おしまい）

食堂は血の海になっていた。

ペガサス「う、う、う、うおえええええええ……」

王はあまりにも過激なシーンにその場で吐く。

若干、人質に掛かっているが王にとってはどうでもいい事なのであろう。

アーク（さてと……王様？ どうするか？）

ペガサス「く、来るなって言っているであらう!!」

王はあの時のトラウマが蘇ったのか震える。

平気を装っているかもしれないが明らかに怖がっているのが明白だった。

ペガサス「い、いいのかあ!? 次に誰かを殺せば俺がこの場所ごと自爆するぞおおお!!」

うわ、メンド

自爆されたら俺は助かるけどメイドは助からんな。

「……死神様!! 私のことは良いです!! こいつを殺してください!! 私ごと殺してください!!」

勇者に捕まっているメイドはこれ以上の犠牲はダメだと考え、自分ごと殺すよう頼み込んだ。

自己犠牲か……聞こえはいいが残酷なものだ。

ペガサス「な、何を言っている!?! お前は俺の花嫁になる女なんだぞ!?!」

「私がいつあなたの妻になったのですか! 私の夫はいつも一人です!!」

カキカキ

「え? でも君は助からないよ?」

「……いいんです……せめて牢獄に入れられた夫に詫びればいいかになって思っています……それにこれ以上、私たちみたいな女性を増やさないためにもここでこの王を殺してほしいのです!!」

カキカキ

「……そうか……でもそいつの能力でほぼ不死身みたいになってるんだぞ?」

「だったら私が怨霊となって地獄に堕とします!!」

やっべえって

この人の覚悟ヤバいって

女性は男より肝が座っているって聞いたことがある気がするけど……マジだわ

アーク(そ、そうか(引)……ってことらしいぜ? 元勇者様?)  
ペガサス「い、いいのか? もうお前の夫には会えないんだぞ!?!」

「いいです……彼には幸せで会ってほしいので」

王の腕を掴み、絶対に道ずれにしてやると覚悟を決めた目で言う。  
カキカキ

「……あゝ束の間に聞くが夫にもう一度会えるとしたら?」  
「会いたい……ですわね」

カキカキ

【また前みたいな生活ができるとしたら?】

「……したいです……また……彼を……愛したいです」

カキカキ

【そうか……なら……】

それ本人に言ったら?」

「え?」

その時であった

「うおおおおおおおおお!! 勇者ああああああ!!」

どこからか男の叫び声が聞こえてきた。

ペガサス「な、何の声だ?」  
「どこだ?」  
「勇者ああああああ!!」……  
ぐぎやああああああ!!」

すると背後のステンドグラスから屈強な男が飛び蹴りの要領で突入してきて見事、王の顔面を捉えた。

王はあまりの勢いに弾丸みたいに飛んでいき壁に当たりゴムゴールみたいバウンドして止まった。

ペガサス「だ、誰だ貴様は!」

超回復で回復しながら王は問うとそのものが答える。

「誰って? 俺ですよ」

そうその正体は

「え、あなた?」

正体はあの時監獄に入れられた元護衛だった。

だがあったときの姿と今の姿はかけ離れていた。

木の枝のように細かった腕は筋肉でおおわれており、第二上腕筋ま



でメロンが収まっているくらい大きく、足もスジがたくさん通っており、背中もボディービルダーも顔負けなくらい鍛えた元護衛さんがいた。

実はあの時私渡した紙は筋トレメニューが書かれていたのだ。

まあ、俺が初めて人型を取って時に行ったメニューだけど。

え？ それだけでここまで筋肉モリモリマッチョマンになれるのかって？

「奥さんとの夫婦愛」があるからできる技なんだよ。

「大丈夫か？」

「え、ええ……大丈夫わよ」

「……勇者……いや、ペガサスと呼ばさせてもらおう……貴様は俺たちが逃げて捕まえた時に弱者がわめくなど言っていたよな？ 俺はお前と違って学習した。悔しかったよ妻が取られたのに何もできない自分がな!!」

手をバキバキ鳴らしながら勇者に近づいていく。

(ま、待って!! 夫がかっこよすぎるんだけど!?)

妻も王から解放されて他の奴隷にされたメイドたちと離れてみていたが今の夫の姿を見て惚れてしまった。

結婚した時は性格もよく相談にも乗って話も好みも会うので好きであつたが体がガリガリでそこだけ残念だったが……ぶっちゃけ、今の夫の姿がめちやくちや自分のタイプで会った。

ペガサス「く、糞がアア!!」

王も足で蹴られたのに怒ったのか剣を召喚し飛ばしてくるが……

「ぬあああああ!!」

元護衛は手を地面に打ち込み地面ごと引き上げ盾にした。

本来の魔法使いの戦い方ではないが彼だからできる技だ。

ペガサス「な、なに!?!」

「勇者あ……お前はもつと誠実に生きるべきだった……だがお前の人生もここまでだ」

ペガサス「く、くそ!!」

殺されると直感で理解した王は逃げようとしたが

「ぬううん!!」

ペガサス「ぬぎゅ!?」

逃げる前に元護衛に首を掴まれ上げられ身動きが取れなくなってしまう。

「貴様には地獄がお似合いだ」

少しずつだが元護衛のこぶしに魔力が貯められていくのがわかる。

ペガサス「ま、待ってくれ!! お、俺が悪かった!? 悪かったからその拳を……」

王は許しを請うが声は届かなかった。

そして、元護衛のこぶしに魔力が溜まりすぎたせいかな炎をまとい始めた。

ペガサス「た、たしゆ……たしゆけ」

勇者は助けが願うが誰も動かずただ見ているだけだった。

だが……先ほどの護衛の妻がやってきた。

ペガサス「ツ!! 頼む!! 許してくれ!! もう二度とお前たちには手を出さない!!」

だが返ってきた返答は決まっていた

妻は夫の体を抱きしめ言った。

「申し訳ございません♡ 勇者様♡ 勇者様より強い男夫に私は惚れて

しました♡ 勇者様よりかっこよく体も素晴らしく性格もいいので♡ さようなら勇者様♡ 私は幸せな家庭を築くので♡」

完全にセリフが寝取られ漫画のソレだが、言っておくがただの妻が大嫌いな勇者から大好きな夫のところに戻るだけである。

「つてことなんだわ? じゃあな? 勇者殿?」

ペガサス「ま、待って!!」

そして、元護衛は魔力を込めた拳を限界まで力を入れ唱える

「罪を重ねた罪人よ!! 今こそ神々の地まで昇天し罪を告白したまえ!! 「ヘルバスターストライク」!!」

魔力を込めた拳はどうとう金色に輝きだし

ズガアアアン!!

ペガサス「ごひゅ!?」

勇者の腹に命中し……魔力を解放する。

「飛んでいけええええええええええええええええ!!」

ペガサス「ぎやあああああああああ!!」

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

勇者は“逆”流れ星となり空のかなたに飛んでいった。

アーク（わーお、すげ）

まあ、約束通り殺さないといけないのだが……まあ、いいか追いか  
けよう。

カキカキ

【それじゃ、護衛殿？ 後は頼むぞ?】

「はい!! アークさん!!」

あと今更だが元護衛には俺の正体を救出作戦の時に教えた。

その知った代わりに今回のを参加させた。

アーク「待つてろよ勇者? 俺が直々に殺してやるよ」

俺は個人的なことのために大気圏突入した流れ星勇者の着地点を計  
算しながら俺は高速移動で向かった。

## 六十五発目 遊びに来た「旋風の騎士」

アーク（あく……どこ行った？ あいつ？）

元護衛氏がガチアツパーで王を空のあなたに飛ばされた後、俺は大地を駆けていた。

空を見上げれば暗い空に宝石を零したような星が輝いていた。  
そんな空を

キイイイ……

アーク（いた）

流れ星が大地に向かって落ちてきた。

正体は銀翼の……ではなく勇者である。

アーク（……死んでくれたらありがたいんだが……確認はしないな）

絶対「超回復」で生きてるだろ。

わかるもん……どうせ生きてんだろ

なんて思っていると

ズドオオオオオ……

アーク（お？ 落ちたか？）

遠くのほうでなに何かが落ちた爆音が聞こえてきた。

確か、隕石でも落ちた大きさが小さくても威力がでかくて被害が大きいつて聞いたことがあるが……落下地点に誰もいないのを祈るか。

アーク「だが、瀕死なのは間違いないだろ……あと、じっくりと虐めるだけだ」

え？

勇者は「超回復」があるから殺せないだろって？

安心しろ、その点に関しては解決できた。

って言っても前に聞いたスカルフェイスの言葉がヒントになった

んだがな。

スカルズ的能力で高速移動で追っている。

手にはM870があり、もし反撃されても対処ができる……まあ、無くても素手で勝てるが

少しずつ王が落ちてできた煙に近づいていった……

その時であった。

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!

アーク(な、なんだ!?)

王が落ちたと思われる場所から別の巨大な爆炎が立ち上った。

それは10分ほど前まで戻る。

ペガサス「はあはあはあはあ!?!」

満月が照らす中、王は森の中を走っていた。

ペガサス(なんでなんだ!?! なんでなんだ!?! なんで勇者である俺があんなモブキャラに負ける!?!)

元護衛にアツパーをかけられ宇宙空間まで飛ばされ少し滞空したあと流れ星となって地上に戻ってきた。

戻ってくる際、燃えながら落ちてきたが「超回復」のせいであげているが体は元に戻った。

ペガサス(首相のおっさんはいなくなるし!?! ノエルちゃんと結婚できたのに歌う死神が来て台無しになるし!?! 俺のハーレムも消されるって!?! どうなってんだよこの世界!?!)

自分のせいであろうなった因果応報なのに他人のせいにする責任転換野郎な王……もうめんどくさいからペガサスでいいか

ペガサスは一人森の中を走る。

ペガサス「はあはあはあはあ……」

だが、一度大気圏ほどまで飛ばされて戻ってくるとき燃えたので傷は治ったが痛みはまだ治まっておらず走るのは少々無理があった。

入っては止まって休憩してまた走ってと続けていった。

ペガサス「はあはあ……だ、だけど……どこに逃げればいいのだ？」  
だが、逃げても逃げ場所がないので無意味だった。

自分が王だった時、世界中の国を脅したが結局アークに救出させてしまい失敗に終わってしまった。

なのでどこに逃げても自分を匿ってくれる国など存在しない。

金など持つてすらないし、力も全くなく、商売しようにも自分は城の中で生活していたので全くと言っていいほど世間のことを無知であった。

ペガサス「そ、そうだ!! 今すぐにアリスのところに行つてアリスを犯してしまえば実質彼女は俺のものになってアークは俺のものになれる!!」

しかも、今からアリスのいるアーク帝国に侵入してアリスの処女を奪つて自分のものにしてしようと計画までたち始めた。

まあ、その前にアークが発狂して核を発射して世界を滅亡してしまふのだが

ペガサス「そ、そうと決まればアーク帝国に向かおう!!」

だがそんな我々日本人でさえ、同じ日本人なのか疑いたくなるようなクズ野郎の前に

?? 「御機嫌よう? 勇者さん?」

一つの赤い旋風が現れた。

ペガサス「だ、誰だ!?!」

休憩にと木に寄りかかって座っていたペガサスの前に一人の魔族が現れた。

現れた魔族の姿は赤い鱗にトカゲのような顔つきに赤い甲冑を着て青い瞳をした魔族だった。

?? 「あ、申し訳ございません……私は魔王軍のものです」

ペガサス「ま、魔王!?!」

カサンドラ「ええ？ 私の名前はカサンドラ。魔王軍第三幹部に属しており「旋風の騎士」と呼ばれています」

ペガサス「な、なんでここに魔王の幹部がいるんだよ!？」

ペガサスは訳が分からない顔をして急いで立ち上がりカサンドラから離れる。

カサンドラ「……聞いたところによると勇者さん？ あなたは国の王になったが愚王で狂王になったあげく歌う死神に負けてここにいるんですよね？」

ペガサス「う、うるさいうるさい!! 俺は悪いんじゃない!! あいつらが……騎士たちが悪いんだ!!」

カサンドラ「……ふむ、噂通りクズで最低ですね」

ペガサス「だ、黙れええええ!! 俺はこの世界の主人公なんだああ!!」

激昂したペガサスは神様特典の能力を使って剣を召喚しカサンドラに向けて射出させるが……

カサンドラ「……見たことがない手品ですね?」

バシユウウウウウウ!!

ペガサス「……え?」

ペガサスは目を疑った。

突然現れた魔王の幹部と名乗る魔族に向かって剣を飛ばしたはずだが当たると思った瞬間に剣は空中で破壊されていた。

空中で剣の欠片が雪のように散っていく中……カサンドラは右手にレイピアを持ち余裕そうに立っていた。

カサンドラ「……勇者つってこの程度なのですか?」

しかも当のカサンドラはあまりにも剣が飛んでくるスピードが遅く手品かっと思ってしまうほどであった。

ペガサス「な、なんで……」

カサンドラ「……なんでつてあなたの攻撃が鈍間すぎて欠伸びながら破壊できましたよ?」

思いのほか勇者が弱く……つてか弱すぎてどうしようか考えていた。

カサンドラ（我が魔王<sup>エヴェリン</sup>からから勇者の実力を調べてこいと命令されましたが……これなんて言いましようか？）

ぶっちゃけそこら辺のオークより弱い。

まあ、オークは女性を攫つて肉便器にする生き物なのでペガサスとはどこか似ているのである。

カサンドラ「ん……あ、そうだ。確か、今逃亡中なのですよね？  
だったらこうしませんか？ あなたが私に勝てば私を好きなようにして構いませんよ？ ほらほら？ ここにあなたを馬鹿にしているトカゲがいますよー？ 勇者さんはオークどもみたいな性欲の塊なので動けますよねー？ あ、ハンデで私はここから一步も動きません」

馬鹿にされたあげくハンデまでつけられた勇者は……いや、まさかこんな簡単な挑発を受けるわk

ペガサス「な、舐めるなあああああああ!!」

乗ったよこの人!?

ペガサスはカサンドラを囲むように剣を召喚し包围した。

ペガサス「は、は、は、はっはっは!! いいのか降伏しないで!」  
流星に勝ったと思ひ込んだペガサスは高笑いするが

カサンドラ「……はあ……シヨボい」

ため息を吐き、レイピアを構え……

カサンドラ「風の神よ、今こそその嘆きの声で大地を消せ「トルネードフォール」」

ペガサス「……あれ?」

ペガサスは気が付くと視界は上を向いており隣では自分の下半身が転がっており……そのあと爆音が聞こえてきた。

ズドオオオオオオオオオオオオ!!



カサンドラが演唱すると巨大な竜巻がカサンドラのレイピアに絡まりレイピアが突き刺された瞬間、横方向でペガサスに向かって放たれた。(F.G.Oのアルトリアのランサーオルタの宝具みたいな感じ)超強力な風圧とともに鎌鼬が発生しペガサスを細切れに切り裂いた。

ペガサス「な……………だ……………と……………」

カサンドラ「あ、少しやりすぎましたね。まあ、カスだし別に……………ん？」

カサンドラが切り裂かれたペガサスに近寄ると

ボコ……………ボコ……………

カサンドラ「うわ(引) これがもう一つの能力ですか……………瀕死になるほどの負傷なのに高い再生力ですね？ トカゲか何かですか？」

カサンドラは嫌そうな顔をする。

カサンドラ「……………これは持ち帰ってサウンドバックにするのも良いですが……………お客がそろそろくるので退散しますか」

遠くのほうからとてつもない殺気を持った生物が迫ってきているのを気配で感じ取った。

おそらく歌う死神だろうと予想したカサンドラは顔バレしたくないので魔族領に帰ることにした。

カサンドラ「……………本当は今の彼の實力も見ておきたいのですが……………アーハム帝国の学園に行けばわかりますから別にいいですよね」

ついでにアークの實力でも見ようかと思っただが面倒くさいので今度にすることにした。

カサンドラ「あ、ついでに置手紙もおきますか」

ペガサス「げほげほ……………」

カサンドラ「あ、何逃げようとしているんですか？」

下半身がなくなってもトカゲみたいに這いずって逃げようとしたがカサンドラに捕まってしまい

カサンドラ「ここでしばらく待っててください」

アーク（わーお）

爆音が聞こえてかなり時間がかかってしまったが現場に急行する  
と……

ペガサス「はぐ……ひやぐ……」

アーク（何があったんだ？）

ペガサスが木に打ち付けられていた

手や足に剣が刺さっており宙づりにされていた。

口には猿ぐわがされており叫ぶことが出来ず、顔も涙でびしょび  
しよにぬれていた。

アーク（ん？ 紙？）

そんな可哀そう……とは思わないがペガサスの胸に一個の紙が張  
り付いていた。

内容は……

『歌う死神へ』

恐らく、主人が狙われて報復ついでに殺そうとしたのでこれを読ん  
でいるのは歌う死神本人でしょう。私の名前は教えることが出来ま  
せんが「魔王軍第三幹部」とだけは教えておきます。なぜ、そんな魔  
王のお偉いさんがいるんだと思います？ 私は我が魔王の命令  
により勇者の実力を見に来たのですが思いのほか弱く当初はそれな  
りに実力があつたら魔王軍に入れようかと思いましたが却下するこ  
とにしました。我々はもうこの変態オーク擬き（ペガサスのこと）に  
は興味がないので好きにしてください』

アーク（……ドンマイ、ペガサス）

まさか魔王軍も勇者を狙つてたとは……まあ、すぐに興味が薄れ  
たっぽいが

アーク（てか、なんでこんなところに魔王軍の幹部がいるんだよ？

……だが、先ほどの爆発音が奴なのでこのペガサスの現状の犯人だと  
したら納得がいくな）

周りを見ると木々が吹き飛ばされた跡や何かが高速で斬つた跡が



ス・テ・ィ・ブとしてはな？」

ペガサス「……え？」

そろそろこいつとは直接話したいので会話ができるのに変身する。  
ついでに面白いものも生産しておく。

さあ、地獄の時間だ。

## 六十六発目 勇者、最後の夜（残虐行為が連発します）

満月の光が差し込む中、俺は勇者に地獄に落とす準備をしていた。

以前のポイント 1120  
獲得（城侵入時） 1700  
変身  
サイボーグ 150  
補給  
Mk. 22用弾薬 1  
DSR—1用弾薬 1  
M870用弾薬 1  
生産  
注射器 1  
硫酸 1  
興奮剤 1  
ガソリン 1  
タイヤ 1  
ナノマシン 1  
ヘロイン 1  
合計ポイント 2660

アーク「ふー……ようやく戻れた」

ペガサス「な!! お前は!？」

アーク「よく? 翔馬さん? ステイープことアークですよ?」

ペガサス「ステイープ!? お、お前は!?! お、俺と同じ異世界人なのか!?!」

アーク「ええ、そうですが? 俺の本名は「鋼宮 徹」ですし」

ペガサス「と、トオルだと!?! トオルってノエルちゃんの幼馴染の!?!」

アーク「あ、はい。幼馴染のは嘘ですがそれも俺です」

ペガサス「お、お前は俺と同じ日本人だろ!? 情けとかないのか!?!」  
アーク「情け? 情けねえ……」

ペガサス(よし!! あと少しで剣が抜ける!! さっさと抜いてこいつを殺すか人質にすればアリスは俺のものに!!)

「超回復」で傷は大体癒え手足に刺さっている剣もあと少しで抜けそうだった

アーク「情け……ですかあ……」

そんなのお前が俺のアリスに手を出した時点でねえよ」

最初から決まっていた結論を言い、準備は整った。

結論を聞いたペガサスは絶望した顔で見るが

アーク「さあ、断罪の時間だ」

ガッ!!

バキバキバキ!!

ペガサス「あ、あぎやあああああ!?!」

ペガサス……翔馬の首を掴みサイボーグの握力を使って首の骨を氣道ごと握りつぶす。

首の骨が折られて失神しそうになっているので腰からマテーチエを抜き取り

アーク「おい、起きろ。だれが寝ていいといたった?」

ズシヤアアアアアアアアアアアア!!

ペガサス「ごほおおおおおお!!」

マテーチエで翔馬の腹部を縦に斬り裂き血の噴水が出来上がった。

切り口から血が滝のように出てくるが  
ドス!!

ペガサス「ぐふ!?!」

右手を思いつき切り口に突っ込み内臓を掻き混ぜた。

右手に生ぬるい感触と温度を感じる。

アーク「どうだい？ 麻酔もなしに内臓を触られる感触は?」

ペガサス「……………」

アーク「……………何か言えよ!!」

ぐにゅ

ペガサス「おえええ!!」

死んだかと思ったが「超回復」の作用がまだ働いていたので気絶し  
たらしいので胃を握りつぶし起こさせた。

起きたのを確認すると内臓を掴み、そのまま磔から解放させるが

ブチブチブチ!!

ペガサス「手があ!?! 千切れるううう!!」

内臓を掴んで引つ張って解放しようとしているので内臓が体内か  
ら出ていき肉が裂ける痛みと手足から剣が抜けるが手足からかん貫  
通して抜くので柄にひかつかかかかかかかかかかかかかかかかかかか  
ぶ偽勇者

解放されたがアークはそのまま翔馬を地面に叩きつけ頭を地面に  
擦り付けさせた。

ペガサス「畜生……………畜生がああああああ!! お前が!! お前さえ  
いなければ俺は幸せになれたはずがああああ!!」

アーク「逆上もいいところですね? ……さて、そろそろかな?」  
何かを待ってたらしいアークはペガサスの頭から足を退かした。

ペガサス「糞が!! おい、待て!! 貴様を殺してアリスを俺のもの  
に……………あれ?」

翔馬が立ち上がろうとしたが……できなかつた。  
なぜか、体が大地に張り付いているようだった。

アーク「……私はあなたを殺すといいました……ひとつ問題があつてですね……」

アークはジタバタと暴れるペガサスの隣で何かを準備していた。

アーク「あなたの超回復がじつに厄介でどう殺すか考えたのですが……一つ結論が出たんです!!」

神様特典は任意で発動するのがほとんどらしく学園の図書館で知った。

……つまり、こいつは生きたいと思つているから能力が発動しているの

アーク「精神的に殺す」

手に注射器を生産し中に空気を入れていく。

アーク「あ、ところでなんで動けないんだつと思つているかもしれませんが……理由は簡単です。あなたの能力のせいです」

「超回復」は肉体系の再生能力で元に戻ろうと肉体が結び合つて回復するというのが前のダンジョンでわかつた。

アーク「細胞と細胞が元に戻ろうとするのを逆に利用して地面と縫い合わせたのです」

ペガサス「なんだよこれ!? 聞いてないぞ!」

アーク「そりゃあ、神様から盗んだ能力ですからね」

そして、中に空気を入れた注射器を勇者の腕に射し込む。

アーク「はい、ちよつとチクツとしますよー」

ペガサス「な、なに空気を入れてるんだい? まさか、それで俺が殺せるとでも?」

アーク「いや、普通だったら死ぬやつだがどうせお前は生きてしま  
う……まあ、苦しめ」

ペガサス「空気はどう苦しむ……げほ……ごほごほ!」 な、なん  
ごほごほ!」

突如、勇者は胸を押さえて苦しみだした。

アーク「……突然だが問題だ。血管内に大量の空気が入ったらどう



なるか知っているか？」

ペガサス「し、知るkげほげほ!？」

アーク「ははあ……正解はへ心臓の鼓動を弱くするだ」

注射で血管内に空気を入れると空気は静脈を通って心臓に溜まっていく

すると、心臓は正常な動きができなくなり最終的に心臓が止まるというものだ。

アーク「苦しいか？ なら、今度は気持ちよくしてやろう」

勇者が苦しんでいる間にアークは注射器に今度は液体を入れ、勇者の腕に注入した。

ペガサス「なな、なにを入れ……あれ？」

アーク「どうだい？ 痛みが引いていくだろう？」

ペガサス「なんで……怖く感じなく……」

え？

何を打ったって？

「ヘロイン」っていう違法薬物ですが？

ここでヘロインの効果を説明すると強い快感があり、不安、心配が解消されたような気分になる。反面、薬の効果が切れると、落ち着きが失くなり、全身が激しく痛むといった禁断症状がでる。

なんで打ったのかって？

勇者があまりの痛みで気絶しなようにすると、精神的に殺すためだ。

あと、「薬物、ダメ、絶対」

アーク「あと、これも」

ぷしゅ

アーク「んで、これをつと」

ペガサスの首筋に別の注射を打ちこんだ後、懐からiDROIDを取り出し

アーク「えつと……感度3000倍つと」

カチカチと操作すると  
ペガサス「あ、ぐう!? な、にを……あ……

あひやあああああ!! 気持ちいいねええええ  
?!?!?!?!? こんにち  
はああああああ

アーク「ウワ、キモ」

注入したのはナノマシンで脳を少し弄らせてもらった。  
ヘロインの快楽作用とナノマシンで感度を通常の3000倍にし  
て快楽の海に沈めさせた。

これで仮に元に戻っても違法薬物の作用で再び求めようと廃人  
なる。

あ、あと感度3000倍と聞いて「どこぞのくノ一たち」を思った  
読者は同志だ。作者は「きらら先輩」が大好きだ

ちなみにナノマシンには痛みも快楽に変えるよう作用させている  
ので腹部に重傷を負っても痛みが快楽になるので

ペガサス「あははは?!?!? あはははh!!!」

アーク「……ちよつと投与しすぎたかな?」

大地に傷口をこすりつけて快楽を手に入れようとしていた。  
ヘロインも高濃度のをいれたので効果も凄まじいであろう。

アーク「んじゃ、次はこれ」

するとアークはiDROIDを操作し始めた  
すると

ドサツ

何もない空間から一つのタイヤが現れ、隣にはガソリンがあった。アーク「ほれ、一応王様だったろ？ ネットレスをやるよ」

そういうと、アークは快楽で絶叫しているペガサスの首にタイヤをかけガソリンをブチまかし火をつける

ペガサス「あひやあああああ?!?!? 熱い!? 苦しい!? 痛い!!!? 気持ちいいいいいいいい!!!」

アーク「おうおう……やっぱ書かれていたとおりだな」

ガソリンは一気に燃え上がりペガサスの肌や髪を焼いていった。人間は可燃物らしく燃えるので焼けた異臭を感じる。

激しく燃え上がり同時にタイヤも一緒に燃えるので溶けたゴムが声帯に絡みつき、声を失う。

ペガサス「あ……が……こひえ……が……」

アーク「ごめんな？ 糞語はまったく勉強してないから理解できないわ」

ペガサス「許し……て……くだ……ひやい……」

ふむ、どうやら「超回復」が薬物の効果も薄める効果があるようだ。だが、違法薬物の快楽から逃れてもナノマシンの強制快楽からは逃れきれないようだ。

意識も少しずつ戻ってきて、アークに許しを請うが

ガシヤ

アーク「赦すかよ」

ズドオン!!

ペガサス「へぶ!?!」

カシヨ

手に持っていたM870の銃口を翔馬の顔面に向けて、引き金を引いた

零距离で撃ったので散弾はすべて顔面に命中し腹が立つ顔面を整形させた。

だが、神様特典の能力で再生していく。

アーク「ははは……赦して……かあ……こんなことで赦してしまつたら戦場で命を散らした兵士たちはどう赦してもらうのかい？」

ボコボコ……と気味の悪い音をたてながら再生していく勇者の顔だが

ズドオン!!

カシヨ

ズドオン!!

カシヨ

再生しては引き金を引き再び再生すれば引き金を引いた。

あたりは肉片で散らばり彼岸花の花畑のようになっていった。

ペガサス「ゆるひ……ゆるひいて……ゆるひえてくだしやい……」

首に溶けたタイヤが絡まり声が出せないはずだが勇者は必死に声を出して許しを請うた。

アーク「おいおい？ これくらいでへばらないでほしいな？」

するとアークは注射器に新しい別の液体を入れ……

ドスツ!!

注射器を勇者の網膜に向かって思いつきり刺した。

そして、親指で液体を入れていく……すると

ペガサス「あああああああああああ!?!?!?!あああああああああ!?!?!?!」

!?!?!  
「勇者は声のない叫びをした。」

それもそうだ体内に「硫酸」を入れられて痛がらない人間などいないのだから。

瞳から注入された硫酸は視覚神経を破壊していき脳に到達しあらゆる神経や脳細胞を破壊していき感覚、記憶を消していく。

勇者も痛みにも抗おうと暴れるが盗んだ神様特典の能力の「超回復」が仇となり大地に張り付けられて動けなかった。

しかも、「超回復」のせいで再生してはさん硫酸で溶かされ、また再生して溶かされ痛みから逃れられない。

ペガサス「あぐう……あぐう……あぐう……」

脳を破壊されていき、言語もおかしくなつていき失神しかけたが  
アーク「起きろや、てめえ!!」

バキやああああああ!!

ペガサス「へぐ!!」

アークはペガサスを起こすために勇者の「男の象徴」翠丸・キ〇玉を踏み潰した。  
踏み潰されて普通だったら気絶してしまうが勇者にとってはいい  
モウニングコールだったそうだ。

アーク「おや? まだ、眠気が収まらないのかい? なら、これは  
おまけだ」

すると、アークはそこらへんの倒木を探りあるものを見つけた。

アーク「みつけ」

その手には大量の巨大な蛇が掴まれていた。

アークは蛇に新たな液体の入った注射を打ち込むと

「しゃあああ?!?!?! しゃあああー?!?!」

打ち込んだのは「興奮剤」で打ち込まれた蛇は大暴れをし始める。

アーク「さて、勇者も人間だから選択し位はあげるよ」

ペガサス「ひゆう……ひゆう……」

アーク「口か鼻か耳のどれかに蛇をいれるんだけど何処がいい?」

ペガサス「赦してください……ごめんなさい……申し訳ございませ  
ん……」

アーク「ええ!? 全部かい!? 仕方ないなあ!!」

なんとも鬼畜なな返答をしたアークは暴れる蛇を勇者の鼻、口、耳  
の穴に無理やりいれこんでいった。

ペガサス「おごっおお?!?! や、やめえーんだ!!」

アーク「いや、愉快愉快!!」

口に入れられた大蛇は暴れ食道を噛みちぎり、鼻に入った蛇は鼻腔

内で暴れ鼻血を出させ、耳に入った蛇は鼓膜を破る。

アーク「さて、そろそろかな」

すると

ペガサス「い、いぎやあああー?!?!?! 痛い痛い痛い?!?!?!」

投与した「ヘロイン」の快樂効果が切れて、激痛が走るようになった。

ペガサス「お願い……殺してくれ……俺が悪かったから……」

アーク「悪いが俺には赦す優しさも殺す優しさもないから何もしないわ」

そういいながらiDROIDを取り出し操作する。

アーク「……だが、お前が神様や死んでいった人間たちに懺悔することはできる」

すると勇者の体内に入れ込んだナノマシンが反応し

アーク「お休み、哀れな金剛翔馬さん？」

勇者の意識をとある空間に転移させた。

え？ どこに転移させたのかって？

食欲も性欲も睡眠欲すべでない痛みだけ感じる空間で365日ずっといて、仮に365日たつても0に戻ってまた365日(残り364回)いるっていう空間

アーク「さて……5時間待つか」

現在の時刻は深夜の1:00で朝日が出るのは6:00である。

ちなみにだが勇者の精神を閉じ込めた世界では「5分||1年」となっているの

年・24(1日にかかる回数)・365(日)・365(回)||3139800

(計算方法あつてるよね?)

つまりあいつは何もない世界で313万9800年間、痛みだけを感ずる世界で生活するということだ。

アーク「お、効果も早いな」

ナノマシンの作用で精神が閉じ込められたが肉体は生きているので徐々に老化していった。

髪は白く、肌は弱弱しくなっていていき、肌色も死人のようになっていった。

おそらく、勇者はあちらの世界で悲鳴を上げ続けているのである。

アーク「……殺す優しさはないが火葬はしてやるよ」

アークは残ったガソリンをもはや老人となってしまうた勇者だった人物にかけ、火をつけ火葬した。

アーク「あばよ、勇者。あの世でロリ神に謝ってこい」

まあ、再び現世に戻ることはないがな。

燃えていく勇者の「超回復」は本来なら発動するはずだが勇者があの空間で「死にたい」と願ったのか発動せずに焼かれていった。

最終的には白い灰と骨が残った。

アーク「一応、墓は作っておくか」

糞みたいな魂がこの世に残ってもらうのは困るので適当に穴を掘り、即席の墓を作りそこら辺の木の板を使って名前を刻み墓標を作った。

アーク「南無阿弥陀仏、南無妙法蓮華経と……」

俺はキリシタンでも仏教徒でもないので申し訳程度に念仏を唱えた。

アーク「さて……アリスのところに帰るか」

眠い……多分だがここ最近、まともに寝た記憶がないぞ。

さっさと帰って寝るか……あ、その前にノエルに会わないとな

アーク「ノエル……怖がるだろうなあ……」

なんたって死神だからな

怖がらないほうが無理がある。

アーク「はあ……What a terrible day」  
こうして俺は勇者の墓に背を向け、帰った。

アークが勇者の墓から去った日から一週間後

ザク、ザク、ザク、ザク

何者かが勇者に墓を掘り返していた

普通なら人間でもエルフでも罰当たりなことだが「そんなのは関係ない」

なぜなら、彼女はゴーレムみたいなものだから

??「……」

だれもいない墓で一人の女性が墓を掘り返していた。  
黙々と墓を掘っていく。

??「……発見」

そして、勇者だったものを発見し回収した。

??「マスターのところに帰還します」



目標を手に入れ人間ではありえない跳躍力でその場を後にした。  
その女性は「生気を感じさせない、まるで操られているような瞳」を  
して、首には使役魔法の証でもある模様がついていた。

そしてその「銀髪の人型古代兵器」の女性の背中には  
<sup>アメリカ</sup>大国の銃器メーカーレミントン・アームズ社によつて製造されている  
ボルトアクション式狙撃銃 「M700」  
が担がれていた。

……そして、銀髪の長髪で見えにくい首に

試作型式号

と書かれていた。

## 六十七発目 戦争後

勇者を殺した後、朝日が昇り俺は勇者が籠っていた城に一度戻り元護衛とその妻と合流した。

「もう絶対に放さない」

「ええ♡ あなた♡」

アーク「……」

城に戻ると元護衛の夫と奥さんがいちやついていた。

アーク「。ム。）、ペツ（未永く核爆発しとけ糞が）」

「あ、アークさん!! 本当にありがとうございます!!」

アーク「おう、お前もよかったな奥さん帰ってきて」

「はい!! 本当に……本当にありがとうございます!!」

「感謝しか言えません!!」

アーク「……おう、とりあえず外に出るか（とりま、俺の目の前でいちやつくな）」

「はい!! それじゃ帰ろうかハニー♡」

「ええ♡ あなた♡」

アーク「……」

何でだろう……妙にイラって来る

やっぱ監獄にぶち込んでた方がよかったかも。

少し悪意が出てきたが心の中で我慢し、国外に脱出し他国の軍と合流した

アークは姿を見られたくないので元護衛氏とはここで別れ、遠くの方から様子を見た。

アーク「……任務完了……帰還……する前に行くところがあるな」

国民の救出、諸外国の要人の保護、勇者の殺害という依頼は完了したがあと一つ残っている。

アーク「会いに行くか……彼女に」  
ノエル

遠くの方で他国の騎士たちが救出されたバサビイ共和国国民を介護している間にアークはサイボーグの跳躍力で移動した。

アーク「到着つと」

ミール聖教国が担当する陣に到着した。

やはり、宗教の国のせいなのか他国みたいに豪華ではなく純白の鎧をまとっており、清楚な感じであった。

アーク「どつか狂王みたいな豪華ではなく質素だが美しいデザイン……カッコいいな」

シンプルイズベストな鎧に見惚れるが俺はノエルに用があるんだ。もう慣れた陣内に潜入する。

どこもかしこも「つらかったねえ」や「無事でよかった」とか聞こえてくるが……中には「死神つて案外いい奴なのか?」「虐殺の権化ではなかったのか?」?とか聞こえてくる

いや、マジで世界から見た俺の評判つてなんだよ

アーク「殺しはわかるが疫病とか災害を俺のせいにしてほしくないんだよなあ」

風評被害はおやめにいただきたい。

ミール聖教国の陣に潜入し騎士に見つからないよう影から影に移動し進んでいくと

アーク「これか?」

進んでいくと一つの小さめのテントを見つけた。

護衛をしている騎士も多かった。

アーク「あんなに小さいのに護衛の数が多い……軍のトップならもう少し大きいテントだがあのテントは成人男性一人くらいの大きさだ」

するとテントの中から二人の女性が出てきた。

金髪にいつものシスターの服を着て、助ける際に約束を結んだ少女

……ノエルだ

アーク「……いた」

クリサリスで助けた際に正体を話したが……謝らないとな

出てきたノエルとマザーは騎士たちに護衛されながら一際大きなテントに向かって行く。

気づかれないよう後ろからついていった。

テントにつき耳を立てると

アーク「……なるほどね」

どうやら、今回のことで本国に帰るらしい

しかも、出発がこの後すぐらしい

アーク「……また今度……っていうわけにはいかないか」

「……では二時間後、出発するので準備をお願いします」

ノエル「……はい、わかりました」

「……申し訳ございません……本当は休みたいはずですが本国からの命令でして」

ノエル「いえ、大丈夫です……では、失礼します」

軍のトップからいろいろ聞いた後、ノエルとマザーはテントから出た。

先ほど軍のトップと会って様態は大丈夫かと聞かれたりした。

ノエル「ねえ……マザー……」

「なんででしょうか？ ノエル？」

ノエル「……アーク……トオル様のことなのですが……」

「……やはりあの声はトオル様ですよね？」

だが、一つだけ心残りがあり

アークのことだった。

アーク『ノエル!! 帰ったら君に言うことがあるから助けさせてくれ!!』

アーク『今は言えないけど……約束だ!!』

あの声は明らかにトオルの声だった

最初は単に声が似ているのであろうと思っていたが自分の名前を言った瞬間、トオルだと確信した。

ノエル「なんで……トオル……」

テントから出た後、トボトボと二人で並んで自分のテントに戻り中で話し合う二人

「ノエル……もし、ですが……また彼と会う機会があっても話そうとせずに速やかに立ち去りなさい」

ノエル「え、ええ!? なんでですか!?!」

「彼は世界中でバケモノと呼ばれている怪物です。私たちは彼の正体も知ってしまったので彼が私たちを口封じで殺しに来るかもしれない」

ノエル「こ、殺しに来るって……トオル様はそんなことしません!!」

ノエルはアークはそんなことはしないというが

「では、しないという根拠は何ですか？ 彼と一緒に一時ですが過ごしたから？ だけどそれは勇者……あの大馬鹿野郎を殺すための演技だとしたら？ 本性を現していないだけで本当は私たちまで殺そうとしているのでは?」

ノエル「トオルはそんなことをしません!! 彼はダンジョンの時に褒めてくれる優しいさもあるしみんなが言っていた残酷なバケモノなんてことはありません!!」

ノエルは生まれて初めて育て親のマザーに反論した。

別に暴力で言えなかったとかではなくマザーは普段から自分のことも考えて行動してくれているので言う必要がなかったが

声が枯れるくらい叫んだ。

「でも彼はノエルを利用しようとしたのですよ!?!」

ノエル「そ、それでも彼はそんなことをするような人ではありません!!」

「そう言える根拠は何ですか!?!」

ノエルはアークは優しい人だと反論するがマザーは戦争で一方的に虐殺した人物が優しいとは思えないから会うなど口論になる。

ノエル（確かにトオル様がアークではないという確証はありません……だけどせめてあと一回でもいいから確かめたいので会いたいです!!）

そんな口論になっている二人がいるテントの中に

アーク「あゝ……お取込み中か？」

一人の死神がやってきた。

ノエル「トオル様!？」

「ッ!? アーク!？」

音もなく入り口にアークが立っていた。

アーク「よお? ノエル? 約束通り来たぜ？」

ふいー……警備が割と厳しくて入るのに時間がかかったな

なんか中から大声やら聞こえてきて少しビビったが問題はないよ  
うだ。

ノエル「トオル様……」

「アーク……何をしに来たのですか？」

アーク「ん? 何って助けに行ったとき会うって約束したし？」

「口封じに殺しに来たのですか？」

アーク「いや、だったらあの時見捨ててるし」

マザーに警戒されている……まあ、それが正しい対応だが

アーク「んで? お二人さんは怪我はないか？」

「馴れ馴れしく話しかけないでくれますか？」

アーク「ん、その様子だと何も無いようだな」

ノエル「トオル……」

アーク「あ、もうトオルじゃなくてアークでいいよ」

ノエル「……あなたは本当にアークなのですか？」

アーク「……そうだ、俺は歌う死神のことアークだ」

ノエル「……騙したのですか？」

アーク「騙した……騙してはいないさ……君と一緒にいた時のあれ

がりのままの俺だし」

ノエル「でも!! あなたはそんな殺すように生まれた人間には思えません!!」

アーク「それは人間としてはだろ? 俺はもう戻れない道に入ってしまったから人間じゃなくて化け物さ」

ノエル「化け物って……トオルはいいのですか!! あなたは異世界の人で争いなんてなく平和な世界で生まれた人間なのですよ!」

アーク「別に? 確かに俺は戦争や争いの……まあ、少ない世界から来たが俺は受け入れてるぜ? 受け入れてるから先の戦争も俺が勝ったんだから」

ノエル「ツ!? 罪悪感とかもないのですか……」

ノエルは顔を伏せ俺に問う

アーク「……俺は決意を固めて死神になるのを決めただ……決めていなかったら今頃、怖がって出てきやしてないさ」

ノエル「なんで……なんで……」

するとノエルは目から涙を流しながら言った……否、叫んだ

ノエル「なんで戦争をしたのですか!!」

アーク「……なんで戦争をしたのかって? そりゃ、相手に自分の力を示して二度と戦わせないためだが?」

ノエル「戦争しなくても話し合えばよかったのに!! それじゃ、ますますトオル……いえ、アークが悪い人になっちゃいます!! 戦わずとも手と手を取り合って話せば戦わなくてもいいはずですよ!!」

アーク「手と手を取り合うかあ……ノエル……一つ教えてやるよ」  
本当はなるべくオブラートに行きたかったが……現実を見せてやるか

アーク「平和ボケもいい加減にしろよ餓鬼が」

ノエル「つひ!?!」

「な、なんですかこれは」

少し殺気と怒りを込めた言葉をノエルにぶつける。

アーク「手と手を取り合う？ 妄想も大概にしてほしいな。そんなことができているなら今頃、この世界には戦争なんてないんだよ。」

ただ言葉を投げつける

アーク「俺の世界でもいたよそんな平和ボケしている奴が確かに平和はいい……だけど、もし他国から侵略されれば大人しく従う気か？

家族が目の前で殺されてもただ見ておくだけなのか？ それが嫌だから人間もエルフもみんな武力を持つんだよ……大切な家族を守るために」

ノエル「で、でも!! 大切な家族を守るためならどの道、武力なんて持たなければ!」

ノエルも負けじと反論するが足が震えており説得力がない。

アーク「……俺が<sup>日</sup>生まれた<sup>本</sup>国も平和主義という他国には侵略しない、戦争をしない、武力を持たないっていう国だがそんな国でも武力を持つてるんだぜ？ 笑えるよな？ 平和を掲げているのに平和を守るために武力を持つなんて？ 寝言は寝て言えだ。羨ましいよなあ？ お嬢ちゃんみたいな温室育ちは戦争や殺害の辛さなんて知らないんだから」

ノエル「ツ!! いいえ!! わかります!!」

アーク「わかるなら、もう二度と言うな」

テントの中から叫び声が聞こえてしまったのか、外から鎧の動く音が聞こえてくる。

アーク「潮時か……最後にノエルに一つだけ言っておくよ。戦争で勝利し英雄って呼ばれた人間はそりゃ名誉なことだろう……だけど戦争が終わればそいつは殺してきた奴らの悪夢を見だしたり戦争を忘れた奴から怪物呼ばりされる。それに……この世界の住民にはわからないと思うが結局兵士の安息の地なんて戦場しかないんだよ」

ノエル「……もう……いいです……ええ、わかりましたよ!! 私があなたに会うのが間違いでした!!」

するとノエルは泣きながら俺に向かった暴言を吐く。



アーク「ああ……こんな俺と会うなんて運が悪かったな？ ……さて、出ていくか。あ、あとと言っておくが別に俺の正体を暴露しても構わんが、だからつと言って俺の主人に危害を加えるなよ」

ノエル「……最後に一つだけいいですか」

アーク「なんだ？」

ノエル「なんで……歌う死神になるのを受け入れたんですか？」

アーク「なんでか……さあな？ でも、俺は大切な主人アリウスを守るためならどんな罪でも犯すきだよ。それに……もう二度と俺みたいなやつを生ませないためにな」

ノエル「アークみたいなのか？」

アーク「もしこの世界に悪を知らない奴らだけになってしまったら、悪の甘い蜜に溺れてしまったら出るのが難しくなる……だから俺みたいに「反面教師」を作り出し、あいつみたいにはなりたくないって思ってくればそれだけで少しは平和になれる……それだけさ」

ノエル「……それって」

アーク「まあ、簡単に言ったら哀れな必要悪さ……さて、それでは失礼するよ」

アークは言うこと言うのを終えた瞬間、テントから出ていきミール聖教国の陣地から脱出した。

「マザー！ シスター・ノエル！ どうかさされましたか!？」

アークがテントを出た数秒後に騎士がノエルのいるテントに入ってきた。

「大変です!! アークが来ました!!」

「死神が!？」

マザーが騎士にアークが来たと話し、騎士は大慌てで付近の搜索に出ようとする。

だが、アークはサイボーグの機動力の前ではすでに脱出している。

ノエル「……必要悪」

そんな慌ただしい空間の中、ノエルは一人立っていた。

ノエル「アークって……そんなつらいことが……」

そして、ノエルは一つのことを決めた。

## 六十八発目 報告

ノエルのテントを出た後、おそらく顔バレをしたはずなのでスライダーでアーハム帝国に戻っていた。

以前のポイント 2660

獲得

勇者殺害 800

変身

スライダー 250

現在のポイント 3210

さて、帰る途中で皇帝に連絡したついでにいろいろと分かったことがあった。

まず、今後のバサビイ共和国は占領などはせずに新しい国を作るそう  
うだ。

そのあとのことはしばらくは国際会議で決めてるそうだ。

だが、問題もできた。

アーク「……元首相が行方不明……か」

そう、首相のことだ

言われたときに思い出したが俺が勇者を殺しに行くときも首相が見当たらなかった。

アーク「……まさか、抜け道があったとはな」

場内を調べると隠し扉らしき場所があり掘っていくとバサビイ共和国の外につながっていたそうだ。

これにより首相率いる残党兵がまだいると分かり国際指名手配になることになった

一応だが目撃情報も手に入れており「何か大量の馬車で運んでいた」らしい

アーク「大量の何か……か」

そこでアレクサンダー皇帝陛下は見つけ次第捕縛、または殺害を許

可をとった。

じきに見つかると思うから放っておいても問題はないが

……もう一つ問題ができた。

アーク「通知さん？ 聞こえるか？」

それは出発したときのことだった。

ノエルにあんなこと言ってしまったが良かったのかと思ひ久しぶりに通知さんに聞いてみたんだが……返ってきた返答が

『○○○○の返答がありません』

って出てくるだけで答えが来なかった。

おかしいな？ 最近、会話してないからとうとう家出でもしたのか？

逆に家出がマジだったら俺が困るんだが

アーク「……今度から積極的に会話するか」

スライダーでアーハム帝国に向かって飛んでいる間にいろいろと考えたり思っていたりしていると

アーク「ふいっ……ようやく帰ってきた」

下を見ればもはや故郷に思えてきたアーハム帝国の街並みが広がっていた。

アーク「とりま、先に城に行くか」

翼を広げ、城に向かって飛んでいく。

アーク「到着つと」

城門の前にある広場の建物の陰に降り立ち、いつものサイボーグに変身する。

以前のポイント 3210  
変身  
サイボーグ 150  
合計ポイント 3060

変身した後、城門に近づき城門の門番に話しかける。

アーク「えつと……『歌はいまだ止まぬ』」

「ツ!! こちらです」

ちなみに先ほど言葉は事前に皇帝に決められた合言葉で、周囲にばれないよう決めてくれたものだ。

ちよつと中二病臭いが、それだつたらこの世界の魔法演唱はどうなるんだとなりそうなので突っ込んでほだめだ。

門番に案内され裏門から場内に入り、皇帝のいる部屋に向かっていく。

アーク（……さすがにまた『次は〇〇っていう国に向かってくれ』ってことはないよな）

マジでまた頼まれたら核を見せて脅して寝よ。

もう見慣れた廊下を歩いていくと皇帝のいる部屋についた。

「こちらです」

アーク「ありがとうございます」

案内してくれた執事に感謝しつつ扉をたたく

コンコン

アーク「失礼します、アークです」

アレクサンダー「入れ」

カチャ

中に入るとテーブルと椅子一つとソファがあり、ソファのほうに皇帝とその妃がいた。

アレクサンダー「来たか、アークよ」

アーク「申し訳ございません、事前予約も取らずに来てしまい。報告と今後について参上しました」

アレクサンダー「まあ、良い。座れ」

アーク「失礼します」

自宅にあるような固い椅子ではなくふかふかな椅子に座り一息入れる。

ようやくゆっくりできる……

アーク「あと、こうして面と面で向かい合うのは初めてですねエリザベル様」

目の前に皇帝陛下とその皇妃であるエリザベス・フォン・アーハムがいた。

エリザベス「ええ？ そうね……あなたがアークね？」

アーク「はい、アリス様の護衛兼使い魔をしていますアークです」

エリザベス「アリスが変わった使い魔を召喚したって聞いたけど……本当に変わってるね」

皇妃はアークの体をじつくりと見物する

……なぜかやたらと頭を見てくるが気にせんどこ。

エリザベス「……話の前かもしれないけど……アーク？ 一つ聞いていいかしら？」

アーク「？ なんででしょうか？」

エリザベス「あなた、アリスのこと好き？」

アレクサンダー「ぶふう!？」

アーク「す、好き!？」

突如、皇妃からトングデモナイことを聞かれ呆けるアークとそれを聞いて口に含んだ紅茶を噴射する皇帝。

アレクサンダー「え、エリー!？ 急に何を言っているんだい!？」

ちなみにどうでもいいことだがアレクサンダーはエリザベスを愛称で「エリー」と呼んでいる。

エリザベス「まあまあ、それで？ どうなの?？」

アーク「好き……まあ、好きですかねえ……」

アレクサンダー「お? (怒)」

なぜか、心臓がバクバクと暴走し顔が熱くなる

しかも、皇帝からは殺意を向けられている。

アーク「あ、いえ……好きって言っても恋愛とかではなく彼女の誠実さが好きということですよ」

エリザベス「あら？ そうなの？」

アーク「それに主人に恋に落ちるなど使い魔としてはあってはならないことだと思わない？」

アレクサンダー「そ、そうか……ふう、焦った」

アーク「失礼ながら質問しますがなぜ私にそのようなことを？」

エリザベス「アリスのことが嫌いならどうやってこのバケモノ君をあの世に送ろうか考えてたのよ」

いや、物騒だな

アーク「あ、あと最近のアリス様のことなのですが……」

アレクサンダー「ああ……言ってた通り座学に没頭させたよ。最初は嫌々していたが……」

エリザベス「アークが帰って来るよって言ったらあの子、急に頑張りだしてね♪」

……なんでや

アレクサンダー「……おかげで前にテストをしてみたがクロエの成績にはまだ届かぬが素晴らしい成績になったわい」

アーク「そ、そうですか……」

エリザベス「うふふ♪ほんと、どこかの父親と似て単純なんだから」

アレクサンダー「た、単純って僕のどこが単純なんだよ」

この皇妃、夫を単純っていったぞ

てか、皇帝……僕ってなんだよ

エリザベス「あら？ 誰かしらねー？ 私との結婚申し込みの時にやらかした皇帝陛下さんは？」

アレクサンダー「だ、ダレダツケナー？」

何故か皇帝は今まで見せた威勢はどこへやら

完全に皇妃の尻に敷かれている夫になった。

アーク「え、エリザベス様……お言葉かもしれませんが皇帝陛下は素晴らしいお方だと思いますが？」

エリザベス「あら？　言っておくけどこの皇帝……案外、ポンコツなのよ？」

ぽ、ポンコツって

エリザベス「私たちが若かったころの結婚の申し込みで私の家……あ、一応、私は元公爵の子だから……それで来た時なんか」

アレクサンダー「ちよ!?　お願いエリー!?　それは言わないでくださいお願いします!!」

な、なんだ!?

急に皇帝が取り乱したんだが!?

だが、皇妃は聞こえてないふりをして話し始めた。

回想シーン

大体30年前

エリザベス「ちよつと!!　いつまで緊張してるのよ!」

アレクサンダー「い、い、いやあ!?　き、きんりようなんかさてなさー!!」

エリザベス「顔色も悪いし言葉もおかしいわよ!」

エリザベスが生まれ育った公爵の屋敷に次期皇帝とその将来の妻がやってきた。

「まあまあ、アレクサンダー様？　緊張せずともいいのですから」

屋敷の中にある接客の部屋にエリザベスの父親と母親が笑顔で並んで座っていた。

言っておくがコレは皇帝の権力を狙った政略結婚ではなくこの世界では珍しい恋愛結婚でしかも娘が嫁ぐのは皇族の、しかも次期皇帝なので家柄的にもよかったので結婚することを許したんだが……

エリザベス「ちよつと！　将来、家族の一人になる妻の前なんだからビシツとしなさいよ!!」

アレクサンダー「そ、そうだね!!　すうー…ひっひふー……」

エリザベス「それは出産のときの呼吸よ!」

若いころのアレクサンダーは実は今みたいな勇ましい姿の欠片もなかった。

「はははは!! 次期皇帝陛下様? そんなんじや国を導けれないですよ!!」

アレクサンダー「す、すまない……で、では改めて」

この時の公爵は「エリザベスを僕にください」つと云えば即座に了承するつもりだ

初めて彼氏ができた時はいちやもんでもつけて別れさせようと思っていたが相手が次期皇帝だと分かった瞬間、驚いた。

まあ、娘が幸せならそれでよし……だったのだが

アレクサンダー「む、む、む……」

奥さんを僕にください!!」

「ああ、わかつt……はい? (怒)」

「あら♡ プロポーズされちゃった♡」

エリザベス「<○><○>」

回想終了

エリザベス「つてなことがあったわあ」

いや、何してんねん皇帝

アレクサンダー「い、いや……あれは言い間違いだって……」

エリザベス「……あの時お父様が憤怒に墜ちて戦争になりかけたわよ」

アレクサンダー「あ、えつと……すみません……」

アーク「は、ははは……で、でも人生は失敗はつきものですから……」

エリザベス「まったくよ……あなたつたら子供たちとも関わるのが下手糞で私を通してじゃないと話せないくせに」



アレクサンダー「だ、だって嫌われたくないもん」

アーク「え？ 確かアリス様は皇帝陛下はクロエ様にしか興味がないって」

アレクサンダー「え、そう思われてたの？」

アーク「いや、アリス様はてつきり嫌われているのかと」

アレクサンダー「あ、いや……そのお……」

娘とはどう話せばいいのかわからないんだ」

え、そういう？

アーク「で、でもクロエ様とは？」

アレクサンダー「クロエとは話すけど座学での参考で教えているだけ……プライベートのことは話してない……」

なんなん……この皇帝

アーク「じゃあ、普通に話せば……」

すると皇妃が横から割り込んできた。

エリザベス「つていうにもいかないのよ？ この皇帝ね？ 昔は今より娘と話したり遊んでくれたりしてたのよ」

あ、結構いい父親やん

エリザベス「でも……昔、まだ幼かったころのアリスとクロエが作った小さなお城を間違えて破壊してしまったの。その時、アリスたちが「お父様大っ嫌い!!」つて怒つてね？ それを聞いた皇帝は吐血して一週間寝込んだわ」

ダメーじ受けすぎやろ

アレクサンダー「アリスに「大っ嫌い」つて言われクロエに「ろくでなしのじじい」つて言われてね……その時は本当に死のうかと思っただぐらいだよ」

アーク「……ちなみにそれっていつ頃のころですか？」

アレクサンダー「13年前」

アーク「昔すぎですよ!？」

アレクサンダー「だつてえ……まだ、アリスたちに大っ嫌いって言われたくないじゃん……父親的に」

なんだ……ただのマダオか

アーク「なら、今度お茶会でも誘ってはとうですか？」

アレクサンダー「いや、近年の若者の流行に全くついていけないから無理」

エリザベス「そうよねえ……それにアリスは最近お友達が増えてきたそうだからそつちに合わせた方がいいのかなって思ってしまうし」

アーク「は、はあ……」

難しい物なんだな親っていうものは

エリザベス「でも一つ心配なのは……異性からのアプローチなのよねえ」

アーク「と言いますと?」

エリザベス「最近、ちゃんと話してないから恋愛告白でもされてないか聞けないのよお」

まあ、平民の俺じゃ関係のないことだが貴族の世界じゃ厳しい世界だもんな

エリザベス「私も学園にいた時、一日に7人も告白された時があったわあ」

アーク「そ、そうですか? でも、確かにアリス様は美人なので告白もあり得そうですね」

アレクサンダー「でしょお!! 可愛いよねえ、僕らの娘」

エリザベス「クロエもアリスも目元は私に似ていて、鼻は貴方に似ているなんて……やっぱ私たちに子ねえ」

なんだこの親バカは?

エリザベス「産んで苦労したけど良かったわあ……ほんと、うちの三姉妹は可愛い子しかいないわねえ!!」

アーク「へー……そうなんで……」

え、三姉妹？ クロエ様とアリス様は知っていますがもう一人いるんですか？」

アレクサンダー「あ、そうかアークがまだ召喚されていないときだもんな。うちの三姉妹の末っ子の『レイチエル・フォン・アーハム』で第三皇女だ」

え、初耳なんだが

アーク「そのお……レイチエル様ですか？ 今はどちらに？」

アレクサンダー「レイチエルは今は「魔剣士」になるために外国で剣術を学んでいるんだ」

魔剣士……それは魔法使いみたいに魔法が使える、剣士みたいに剣も使えるというバランスのいい戦士だ

エリザベス「レイチエルはねえ……優しい子なのは間違いないけど頑固でツンツンしてるのよお。えっと剣術を学んだあとは魔法を学ぶそうよ？ アリスたちより一年年下だから新生で入ってくるわね」

これはメンドクサイ予感がしてくるな。(フラグ(。▽。))キタコレ!!」

アレクサンダー「でも、幸せなのは変わりなさ!! 僕はこうして世界で一番愛している奥さんと会えたし♡」

エリザベス「もう、あなたったら♡」

目の前でいちやつきだした熟年夫婦

アーク(俺、なに見せられているんだろう)

本来は報告して終わるはずなのだが……俺は熟年夫婦の惚気を見るために来たのではないんだが……

こうして俺は熟年夫婦のイチャラブを見せられたのであった。

## 六十九発目 (ようやく) 主人の所へ

そこから1時間ごようやく解放してくれた。

きついよ……なんで熟年夫婦のバカツプルを見なきやいかん

アーク「では、失礼します」

アレクサンダー「ああ、すまん」

カチャ

バタン

アーク「はあ……口から砂糖とか超えて塩分が出そう」

皇帝の部屋を出て廊下を渡り、事前に聞いておいたアリスの部屋に向かう。

アーク「つてか男の俺が少女の部屋に入って大丈夫なのか？」

俺は妹や姉がいないが男が少女の部屋に入るのは控える行動なのはわかってる。

まあ、俺も逆に気が引けるが

アーク「外に呼び出すか」

男のプライド的に入つてはいけないと結論を出し、外に呼び出すことにした……が

アーク「さて……なんてアリスに言おう……ん？」

廊下を歩いていると金髪で翡翠色の瞳をしたエルフ

アリス「……」

アーク「あ、アリス！ 帰ってきたぞ「ちよつとアーク、用があるから来て!!」おう!？」

ようやく主人に出会えたと思いきやアリスに手を強引に掴まれ連行されて行く。

アーク「え、ちよ!? どうしたんだよアリス!？」

アリス「いいから来て!!」

華奢な手がアークの手を包み込む。

健康が良い印に血の気もよく、温かい体温が伝わってくるが……握

りしめる力はとても強かった。

引き攣られるままについていくと一室の部屋に入ってしまった。

中は広く、白を基調とした色合いに椅子と机が一つずつありダブルベッドサイズのベッドまであった。

直感で把握したが

アーク（これ、アリスの部屋やね？）

思いもなかった方法で念願の主人の部屋に入ったが……それより聞きたいことがある。

アーク「なあ、アリスどうしたんだ？」

アリス「……」

部屋の中に連れていかれ茫然と立ち尽くすアークにアリスは顔を伏せていた。

どうして連れてきたのか聞いた瞬間、アリスは顔を上げこちらを振り向き……

パアアアアン!!

アリスの顔は泣いており、大粒の涙が頬から流れて行った。

そして、気が付いた頃にはアークの頬をアリスの手が叩かれていた。

アリス「なんで……なんで……黙っていったのよ!!」

アリスの瞳から大粒の涙を流しながら言う。

アーク「……すまん」

アリス「なんで急にお父様が私を座学にのめり込ませるか不思議に思ったけど……おかしいなって思っただけならアークが国相手に戦争するって知ったし!!」

アーク「でも、別に勝てたんだからいいじゃないか？」

アリス「ええ、勝てたからいいけど……アークが死んだらどうするつもりだったの!？」

アーク「別に俺が死んでも勇者を道連れにできたらそれでいいんだが」

アリス「そういう問題じゃないの!! 主人には黙って戦場に行くなんて……残された主人の気持ちを考えなさいよ!!」

アーク「それに言ったら言ったでアリスがついてくるかもしれないじゃないか」

アリス「黙って消えてしまおうのがもつと嫌なの!!」

アーク「いや……俺はアリスをあゝの糞野郎のところに行るのが嫌だから戦っただけだし」

アリス「私もあいつと結婚なんて死んでも嫌だけど!! アークが死んじやうのが一番嫌なのよ」

アーク「……ごめん」

アリス「次、勝手にどこかに行ったら許さないんだから!! もし、したらアークが帰ってくるまで教会でお祈りしてずっと死ぬまで待っておくんだから!! ご飯も食べないからね!!」

アーク「わかったよ」

てか、死ぬまで教会で祈り続けるって

マジで速く帰らないといけない奴やん

アリス「はあ……罰として後でスイーツ作りなさい!! 私、あなたが頑張っているんだから勉強頑張ったのよ!!」

アーク「あ、そういや成績上がったんだって? すごいじゃん」

アリス「ふふん!! まだ、クロエ姉様には届かなかったけど学年で7位になれるほどになったわ!!」

胸を張ってどや顔をするアリス

……やっぱアリスと一緒に過ごすのが落ちつくな。

アリス「あと、魔法が……成長してくれたらなあ……はあ……」

アーク「そう、急がなくてもいいじゃないか?」

アリス「でもアークに守られっぱなしなんて皇族としてどうかと思うし……ちなみにアークって私がどれくらい強くなったら私が一人

で行動してもいいのかな？」

アーク「基本的には生涯ずっと守るつもりだが……そうだなあ……俺がいなくなっても戦えるくらい強くなつたぐらいかな？」

アリス「……なんか、一生来ない気がする」

アーク「まあまあ……急がずにゆつくりと行けばいいのさ……ふおあ……眠い」

アリスに注意され、約束をし、帰ってスイーツの用意でもしようかと思つたが急に睡魔が襲つてきた。

あ、そういやここ最近全く寝てないわ（五徹）

アーク「う……すまん、アリス……」

アリス「アーク!? どうしたの!？」

アーク「少し……寝てから……スイーツを作r（ドサツ）」

アリス「アーク!? どうしたのアーク!？」

急にふらつきだし、そして死ぬように倒れた使い魔に心配になり近寄る主人

だが、近づいて聞こえてきたのは

アーク「（ $\boxtimes$  $\omega$  $\boxtimes$ ）スヤア」

アリス「……はあ……心配して損した」

一瞬、頬を叩いたときの力が強すぎて気絶したのかと思つたが深い寝息が聞こえてきたので安心はした。

アリス「まつたく……アーク? ここで寝たらさすがに人間じゃないあなただも風を引くわよ?」

アークが倒れた場所はアリスの部屋の中だった。

アリス「……ま、アークも頑張つたんだから大目に見よ」

だが、さすがにこのまま放置するのも気が引ける。

アリス「アークの家までは……遠いから無理……だったら」

どこかにアークを寝かせる場所がないかと場所を考えているがアリス「……ないわね」

が一か所だけあった。

チラツと横目で見たそこには……自分のベッドがあった。

確かにここからならアークを運ぶ（だが重いので引きずる）のがで

きる距離だった。

だが……

アリス「なんか……変な感じがする」

どういうわけかアークを自分のベッドで寝かせるのが……どうい  
うわけか顔が赤くなる。

アリス「……臭くないわよね?」

男性つて匂いを気にするだろうか?

一応、ベッドの匂いを嗅いでみたが……いつもの花のような匂いし  
かない

アリス「大丈夫よね?」

大丈夫だと結論を出し、ベッドの上にアークを乗せる。

アーク「ぐく……ぐく……」

引きずられられても起きないところを見るによほど疲れて熟睡し  
ているらしい。

ベッドの上で幸せそうに寝ているアークを見てみると

アリス「はあ……ふおあ……私まで眠くなってきたわね……あ」

目をこすりながら少し寝ようかと思ったが……現在、アークがベッ  
ドを占拠している。

アリス(ど、どうしよう!? わ、私今まで一人で寝てきたから寂し  
くなんかはないけど自分のベッドに寝かせた男の隣で寝るなんて初  
めてよ!?)

床で寝ようかと思ったが寝心地が悪いので却下した。

アリス「ま、まあアークより先に起きればいいし!!」

そつとベッドの上に乗る、アークの隣……ではないが少し離れたと  
ころで横たわった。

アリス「……お休みアーク」

そして、目をそつと閉じたのであった。

アーク「う、うううん?」

目が覚めるとそこは

ぴいぴい……



さわさわさわ……

夕焼けの空に一面の野原が広がっていた。

アーク「あれ？」

俺っていつの間に外に出たっけ？

夢ならリアルな夢だな？

アーク「にしても何も無いな」

広がっている形式は野原だけでそれ以外は全くなかった。

アーク「にしてもなんか……妙に懐かしく感じるな」

どういうわけか懐かしく感じる……一度もここには来たことがないはずなのに

アーク「まあ、いいか？　はあ……マジでいろいろとあったな……」

思い返せば、急に勇者がやってきて調子に乗るわ、調査のために潜入しダンジョンにも行ったけどへっぴょこすぎるわ。急にアリスと結婚しようとしたりしていろいろとあったなあ

野原の上でしみじみと懐かしく感じていると。

カサツ

アーク「ん？」

後ろから誰かが歩いてくる音が聞こえてきたので振り向くとそこには

アーク「誰？」

??「……」

そこには夕焼けの光で綺麗に銀色に輝く髪をした女性がいた。

だが、顔はモザイクがかかっており見えなかった

アーク「な、なあ？　本当に誰なんだ君h……ッ!？」

いったい誰なのか近寄ってみようとしたが体が全く動かなかった。

カサツカサツ

だが、あちらは動けるらしく一歩ずつ近づいてくる

そして、夕焼けのせいで見えなかったが右手に

カチャ

カシヤ

一丁の拳銃が握られていた。

ジョン・ブローニングの設計に基づき、アメリカ合衆国のコルト・ファイヤーアームズ（コルト）社が開発した軍用自動拳銃で1911年の制式採用から1985年までの間、アメリカ軍の制式拳銃として第一次世界大戦、第二次世界大戦、朝鮮戦争、そして、ベトナム戦争にも使われ、今でも世界中でつ買われている名銃の中の名銃

「M1911A1」

が握られていた。

しかも、マガジンを挿入しスライドを引く動作を見るに手際よく行っているので初めてではないだろう。

アーク「つくソ!!」

それが分かった瞬間、額から大量の汗が流れてきた

「殺される」と右手に持っている拳銃で丸わかりだった。

アーク（くそ!! 動けよ!!）

しかし、動こうにもまるで空間ごと固められたかのように身動きが  
できず、ただ虚しく息を吐くだけだった。

アーク（夢にしてはリアルすぎだろ!?!）

どうやら現実らしい

そして、銀髪の女性は目の前まで近づきアークの額に銃口を突き付けた。

この距離になっても顔はモザイクがかかっており見えなかった。

アーク（っへ……俺が殺した兵士の怨念が殺しに来たのかもな）

これが夢で逢ってほしいな思いつつ目を瞑り引き金が引くその時

を待っていた。

?? 「……………」

カチツ

トリガーに指がかかり力が入られ銃弾が放たれようとした瞬間

ポスツ

アーク 「……………え?」

いつまで待ても銃弾が来ず、逆に胴体に柔らかい感触を感じたので目を開けると

アーク 「え、どういう?」

銀髪の女性は俺に抱き着いていた。

身長もアリスと同じくらいだが彼女からの匂いは人間やエルフ特有ではなく……………「どこか機械臭かった」

そして、右手で握られていた拳銃は地面に落としており握っていた右手も震えていてアークの背中に回っていた。

アーク 「き、君は一体……………」

だが、こちらが聞こうとしたが

女性は耳元でこう言った。

?? 「早く……………見つけて……………助けて……………」



周りを見るとどこか既視感を感じた。

アーク「あ、ここアリスの部屋か」

で、体から感じる柔らかい感触は……ベッドか

あれ？ つてことは俺、アリスのベッドで寝てたのか？

アーク「……くつそ恥ずかしい」

だけど……アリスのベッド……いいにおいがするな

まるでお日様と花畑のなかなかに包み込まれたような匂い  
だな……落ち着く。

……でもベッドにしては柔らかすぎるし目を開けているのに暗い

アーク「にしても変な夢……あれ？ どんなんだっけ？」

夢の内容を思い出そうとしたが……どういいうわけか思い出せな  
かった。

だが「早く助けに行かないといけない」とい欲求だけは出てくる。

アーク「まあ、そのうち思い出すだろ」

それより今はアリスのベッドから出ないと

アーク「こんな汗臭いおっさん……いや、俺まだ18歳か……そんな奴が寝たベッドなんか嫌だろう……さて、起きるか」

だが起き上がった瞬間

もにゅ♡

アリス「んん♡」

アーク（ん？）

とりあえず自由になっている左手を動かそうと力を入れた瞬間、柔  
らかく弾力のある感触が伝わってきた。

布団にしては弾力が肉体みたいに柔らかい……それに今更気が付  
いたが自分の顔もすごく柔らかいものに挟まれている。

アーク「な、なんだこれ？」

柔らかいが別に息苦しいとかではなくどういいうわけか居心地がい  
い。

ずっとここに居たいが……少し魔性的な魅惑を感じ虜になっ

まいそうなので脱出を決断する。

右手を柔らかい物から離し、体を起こそうとしたが

むにゅ♡

アリス「あん♡」

アーク（おう？）

離れた右手が再び柔らかい感触が伝わってきた。

しかも最初に触った感触より柔らかい。

アーク「なんなんだ？」

正体を明かすため、少々右手に掴んでいるナニカを強く掴む。

足を動かして起きようにも足に何かが絡まっついて起きられなかった。

感覚的に……細いな？ 女性の足みたいに細い。

アーク「……ぷっは!? ようやく出れ……」

どうにか顔を動かし上に向くによつて顔を出せたが……一つ問題ができた。

それは柔らかい物の正体だった。

アリス「ん、ん♡」

上を向くと自分の主人であるアリスの顔がドアップに見えた。

そこから視線を右に向けると

むにゅむにゅ♡

アリスの早熟した大きな胸を自分の手で鷲掴みにしていた。

……逆に左手はアリスの下半身に向かっておりアリスの背後に回っていた。

下半身で背中側にあり、弾力がいい物って……

アーク「……ひゅっ」

正体が分かった瞬間、自分ほとんどもないことをしているのに気がつき急いで離れることにした。

幸い、アリスも見たとこころ寝ているようでこっそり離れれば二次被害は起きないだろう。

アーク「は、離れないと……」  
だが

アリス「んく……待ってアークう……」

アーク「んぶ!?!」

離れようとした瞬間、アリスの腕がアークの頭を包みこみ自身の巨大な胸に押し付けた。

アーク（やばいつてこれ!?! いろんな意味でやばいことになるつて!?!」

アリス「ん……やあ……もうやめてよアークう♡」

アリスは寢言を言つて寝ているがアークは結構危機的状況だった。どういいうわけか体がムズムズしてくる。

アーク（つてか、なんでこんな状況でも寝れてんだよ!?!）

アリスの声が色っぽしアリスからいい匂いがする。

アーク（ええい!! ままよ!!）

これ以上は危険だとは判断したアークは意を決して左手を放してアリスの肩を叩く。

アーク（アリスさん!?! 起きてください!!）

ポンポン!!

アリス「うう……ん……ふおあく……あーくう……おはよ……う……え?」

肩を叩いたらアリスはまだ眠たそうに起きた。

そして、何かに抱き着いているのとそれが動いているのに気が付いて下を向くと……

アーク「あ、アリス……放して……」

自分の胸に使い魔を押し付けていて、しかも自分の胸を使い案の手が驚掴みにしていた。

それを見て返ってきた答えは

「アリス「きや、きや……」

きやあああああああああああああああああ!!」

そして、右手を振り上げ

アリス「こ、この変態使い魔があ!!」

ずばこおおおおおおおん!!

アーク「んぶへ!」

華奢な右手がアークの顔面にめり込んだ。



### 第三章 家族？編

#### 七十発目 久々の料理

アーク「……」

アリス「……」

窓から差し込む光が少しずつ夕焼け色になっていく中、アークとアリスはお互い向かい合って正座していた。

理由は簡単、アークがアリスの体にボディタッチでラッキースケベしたのとアリスはアークを主人として皇族としては淫乱なことをしてしまいお互い謝っていた。

さっさとどちらかが謝れば終わることなのだがやったことがアレなのでできなかった。

アーク「あく……アリス……腹搔っ捌いて詫びるから許してくれないか？」

アリス「ちよつと!? それって死ぬってことじゃない!? やっても許さないわよ主人として!」

アーク「でもまだ結婚すらしていない女性の大切な所を触るなんて……ごめん! やっぱ切腹するから許してくれ!!」

アリス「ああ、もう!! そんなことだったら私だってアークの意思関係なく密着してしまっただが悪いんだから!!」

ってな感じでお互い一步も引かなかった。

アリス「アークに非なんてないわよ!! 戦争もして勇者も殺したりして忙しかったんだから!!」

アーク「そんなことでも使い魔として一線を踏み越えてしまったから責任は取らせてくれ!!」

アリス「な、なら……そのお……どうだった？」

アーク「どうだったって……何が？」

アリス「……触り心地」

アーク「あ、えつと……すごく……柔らかかったです」

アリス「そ、そう……」

やっべ、すつげえ恥ずかしい

アリス「こ、こほん!! いい! もう二度としないのと今回のことは私たちが墓に入るまでの秘密よ!!」

アーク「秘密にしなかつたら俺、死刑案件なんだしな」

アリス「いいから!! いい?」

アーク「わかったよ……あ、あとスイーツだな……もう夕方……だよな? だし、もう遅いから明日でいいか?」

アリス「やだ、今すぐ食べたい」

アーク「夕飯入らんぞ?」

アリス「……じゃあ、食べ終わった後に食べたい!!」

アーク「はいはい……あ、じゃあ……なあ、アリス? 氷魔法って使えるか?」

アリス「使えないこともないけど……木の枝みたいに細いし脆いよ?」

アーク「いや、攻撃に使うんじゃないかって料理で使いたいんだ」

アリス「え! 私も手伝っていいの!？」

すると、アリスの耳がピコピコ動き出した

よほど嬉しいんだらうな。

アーク「ああ……今から時間はあるか?」

アリス「うん? 学園の課題も終わらせてるし夕食まで時間があ  
るからいいよ!!」

アーク「あ、んじやここの厨房使っていいか?」

アリス「城の? いいじゃないかな? ちよつと確認してくる!!」

アリスは立ち上がりパタパタと廊下に出て行った。

アーク「……さてと、今のうちに「アイツ」にも連絡しておくか」

そういうとアークはメールを開き今回の依頼主に連絡した。

数分後

アリス「アーク! 料理長がいつて!!」

アーク「お、そうか」

てなわけで俺は調理場に向かって行った。

〈厨房〉

アーク「すみません、ありがとうございます」

「……まさか、死神さんは料理までできるとはなあ」

俺はアリスと厨房の責任者でもある料理長の許可を得て厨房に入った。

デカいなやつぱ城のは

調理器具も鏡ように磨かれており、職人魂を感じ取れる。

アリス「お待たせ!! アーク!!」

アーク「お、来たか」

アリスも簡単な作業着にエプロンも着てやってきた。

アーク「それじゃ、作りますか」

だが、いざ作り出そうとした瞬間

アーク「……なんか近くありませんか?」

料理長とその部下のシェフが俺にべったりと引っ付くように見えてきた。

「キノセイデハ?」

「そうですよ!! 別にアークの料理はおいしいっていう噂を聞いて嫉妬とかしてませんかからね!!」

「料理を見て、参考にしようなんてちっとも思ってますからね!!」

……そ、そうか

アリス「ねえく!! アーク!! 早く作ろ!!」

アーク「はいはい、んじや作りますかね」  
皆も一緒に作ってみよう!! (第八回、多分)

材料 (六人分)

薄力粉 100g

牛乳 300cc (300ml・1と1/2カップ)

卵 Mサイズ2個

バター 大きじ1 (約15g)

砂糖 大きじ1 (18g)

塩 小さじ1/5 (1g)

生クリーム 200cc (200ml・1カップ)

(クリーム用) 砂糖 大きじ3と小さじ1 (約40g)

- 1, バターは湯せんかレンジで溶かしておく
- 2, 卵をよく溶いておく
- 3, 砂糖と薄力粉をあわせ、ふるいながらボールに入れる
- 4, 卵と塩、バターを加えてよく混ぜ合わせた後、牛乳を「少しずつ」入れて混ぜる(作者は一気に入れたので一回目はこれで失敗した)
- 5, 30分ほどそのまま置いて生地を休ませる
- 6, キッチンペーパーなどに油を含ませてフライパンに塗り、中火で温める
- 7, 生地をお玉に1杯分ほど入れ、一点に向かって「注ぎ足しはせず」に注ぎ、20cm薄く広げる(二回目はこれで失敗した)
- 8, ふちが乾いてきたら裏返して10秒ほど焼き、金網などに乗せて蒸気を飛ばして冷ます
- 9, 同様にすべての生地を焼く
- 10, 別のボウルに生クリームと砂糖を入れ、底を氷水に当てながら8分立てにし泡立て器を持ち上げてみて、やわらかい角が立つ状態になるまでやる
- 11, クレープとクレープの間にクリームをまんべんなく塗り、層になるように重ねる
- 12, 冷蔵庫で1時間ほど置いて、味をなじませて出来上がり

以前のポイント 3060

開発

iDROID (皇帝用) 2

生産

薄力粉 1

牛乳 1

卵 1

バター 1

砂糖 1

塩 1

生クリーム 1

合計ポイント 3051

てなわけで完成したのは

アーク「ミルクレープ!!」

地層のように何層も重ねられその間にクリームを入れたケーキであるミルクレープが完成した。

我ながら初めて作ったが……できてよかった。

「おおおお……」

「まさか……これほどとは……」

周りから賞賛の声が出てくる中

アリス「……(ぽたぽた)」

アリスが目を輝かせ耳をパタパタ動かし涎を垂らしている。

アリス「……アーク」

アーク「あ、まだ食べちゃダメだからな」

アリス「……ッ!?(絶句)」

ダメに決まってるんだろ。

六人分作ったけど四個は皇族一家の分で一つは「とある人物」に渡す用だ。

「あ、アーク殿!?! 最後の一つは……」

アーク「ん? ああ、それはみんなで食べていいよ」

「え、でも一個だけ……」

アーク「ミルクレープは何層も重ねて作るもんだから一層ずつ分けて食べてな（鬼畜）」

「「「「え？」「」」」」

何やら料理人たちが絶望しているがほつといて配膳するか。

アーク「お待たせしました、スイーツです」

アレクサンダー「おお……これがアークの世界のスイーツ」

エリザベス「もう、見てわかるわ……これ絶対においしい」

クロエ「アーク!! 帰ってきたのなら私のところに来てくださいまし!!」

アーク「あ、申し訳ございませんクロエ様」

クロエ「私を差し置いてアリスと一緒にいるなんて……」

アリス「ふふん♪ いいでしょクロエ姉さま♪」

アーク「アリス様もなに張り合っているんですか」

アリス「私、アークと一緒に料理手伝ったもん!!」

ちなみにアリスには冷やすのを頼んでおいた。

クロエ「な、なんで私を呼んでくれないんですか!？」

アーク「いや……クロエの魔法って威力高いからアリスが丁度良かったんだ」

ぶつちやけクロエに会い行くのを完全に忘れていた

ごめん、クロエ

アリス「アーク!! 早く食べたい!!」

アーク「……少しは皇族である自覚を持ってほしいのだが……はあ、いいぞ」

アレクサンダー「では、さっそく……（パクツ）……おお、これは!!」

エリザベス「んん♪ これは子供たちが夢中になるのが納得するわね」

お、どうやら皇帝夫婦は好評のようだな

あと、食べている時に幸せそうに食べている顔……アリスたちに似ているな。

んで、アリスたちは

アリス・クロエ「アーク、おかわり」

アーク「いや、速え!」

もう食べ終わったぞこの姉妹。

アーク「え、もうないんだが」

アリス「え、そんな……」

クロエ「待ってアリス!! 確か、料理人に渡した一個があつたはずよ!!」

アリス「あ、確かに!!」

狙われるミルクレープ、そして上司に奪われる料理人たち  
まことに理不尽である

アーク「……今度、また作るから我慢しろ」

アレクサンダー「あ、じゃその時ワシらの分も作っておくれ」

エリザベス「なんならこの城に住ませましょう」

アレクサンダー「おお!! エリー!! いい案ではないか!!」

アーク「え、俺に拒否権ってないんですか?」

エリザベス「断るなら皇族の頭を下げるわ」

アーク「それは俺的にもダメです」

アレクサンダー「仕方ない……今度、学園に行くときに作っておくれ」

アーク「……まさかと思いますが毎日……ってことは流石に」

エリザベス「当たり前じゃない」

おい、皇族

執務はいいのか

結局、また来た時に作るということになった。

アーク「さてと……後片付けはシェフたちに任せるとして……アリス? 少しいいか?」

アリス「ん? なあに?」

アーク「俺、少し用事があるんだがいいか?」

アリス「……私もついていく」

アーク「いや、用が済んだらすぐに帰るぞ?」

アリス「どつかの誰かさんが戦いに行くかもしれないじゃない!!」  
アーク「あの時はあ……あの時だけど……」

アリス「ダメ!! 私もいく!!」

……これは断って無理やり付いてきそうだな

でも、流石にアリスをアイツに会わせるのはまずいしな

アーク「……帰ったらスイーツを追加で作るから」

アリス「やだ!!」

くそ、物でもダメか

……仕方ない

アーク「申し訳ございませんが皇帝陛下……明日中には帰って来るのでアリス様と一緒に外出してよろしいでしょうか? 場所はここから離れた場所ですがアーハム帝国領内です」

アレクサンダー「普通なら断るが……私が断ってもアリスが駄々こねそうだから今回は特別に許可する。それに付添人がアークだから大丈夫であろう」

アリス「駄々こねるってお父様!! 私はそんな子供ではありません!!」

アーク「……はあ、それじゃアリス? 30分後に門の前で集合な」

アリス「わかった!!」

アレクサンダー「あ、あとアークよ。お主に一つ伝えることがある」

アーク「はい、なんでしょう?」

アレクサンダー「明日の夜は国際会議とパーティーがあるから間に合うように」

アーク「え、まさかの戦勝で勝ったからお祝いのですか?」

アレクサンダー「いや、表むきにはアークのバサビイ共和国国民救

出での感謝パーティーだ」

アーク「あ、そうですか」

アリス「アーク!! 早く行こう!!」

アーク「ああ、では皇帝陛下……行ってまいります」

アレクサンダー「あと、アリスに何かあったら……首を洗って待つて居れよ?」



アーク「あ、はい」

アリスは遠足に行くかのようにウキウキとしながら部屋を出て準備に行った。

アーク「んじや、連絡するか」

そして、今から会いに行くやつに連絡するためメールを開く

アーク「えつと……『おい、ロリ神起きてるか』つと」

すると数分後に

ロリ神『はいはい!! 起きてるよー!!』

アーク『今から会いに行ってもいいか?』

ロリ神『え、なあに? もしかしてお姉さんにあいたくなっちゃった?』

アーク『お前、お姉さんって言えるほどの年じゃないだろ。勇者を殺した報酬を受け取りに行っているかい』

ロリ神『あ、そうだったね。んじや、前にあったところで』

アーク『あ、その前に面倒ごとが一件。うちの主人も同行になった』

ロリ神『え、それま?』

アーク『ま、だ。すまん』

ロリ神『もお……仕方ないねこっちも話しに合わせるわ』

アーク『おK、それじゃ今から行くから』

ロリ神『おっけー!! 準備しとくからね!!』

よし、予約もできた。

あとはアリスと一緒に行くだけだな。

そう、今から会いに行くのは若干存在を忘れかけていた俺を転生してくれたロリ神だ。

アーク「あ、あとこれも開発しておくか」

こうして俺はアリスが準備できるまで外で待機しておくことにした。

30分後

アーク「……まだかな」

日が沈み夜になり月が昇っている中、俺はアーハム帝国の首都に入る門の前にいた。

アリス「アーク!! お待たせ!!」

アーク「お、アリス」

アーハム帝国はやはり大国なのかわからないが夜になっても活気があった。

そんな中、アリスがトコトコと走ってきた。

アリス「ごめんね、待たせて」

アーク「おう、つてかその恰好はなんだ？」

アリス「ああ、これ？ 流石に夜の外を第二皇女が出歩くのはまずいからコレを着てきたの!!」

目の前まで来たアリスはその場で一周クルリと回る。

いつもの明るい色のドレスではなく、黒っぽいフードとマントというシンプルで目立たない色だった。

アーク「まあ、その方が目立たないからいいか」

アリス「でしょ!! それよりアークが今から会うのつて誰なの？」

アーク「まあ……俺の恩人かな」

アリス「へえ……その恩人つてどこに住んでるの？」

アーク「え、アーハム帝国の郊外」

アリス「……遠くない？ 馬を借りてきた方がよかった？」

アーク「安心しろ、別に借りる問題は解決したから……さてとそろそろかな？」

懐からiDROIDを取り出し確認すると

『開発完了しました』

アーク「うっし、アリス？ アリスつて速い物に乗っても大丈夫なタイプ？」

アリス「まあ、よほど速くなければ大丈夫よ」

アーク「それじゃ、召喚っとする」と

ツカ!!

アリス「きやあ!?!」

突如、アークの目の前で魔法陣が出現し輝き出した。

そして光が収まって現れたのは

アリス「……何これ? 馬……にしては背が低いわね」

アーク「これは【バイク】っていう俺の世界での乗り物だ」

召喚されたのはバイクだ。

別に俺がスライダーに変身してアリスを乗せて飛ばばいいが……

まあ、無理だろうだからコレにした。

アーク（相変わらず、カツコいいなあ）

……実は俺、バイクが好きで選ぶのも拘った。

召喚したのはトライアンフ社製の「ボンネビルT100」で『メタ

ルギア4』でビッグママこと【EVA】が乗っていたバイクだ。

本当はライジングのサムとライデンが乗っていたバイクを出した

かったけどアレ、フィクションだったわ

カツコよすぎだろ、あのバイク

以前のポイント 3051

開発

ボンネビルT100 250

生産

バイクヘルメット 1

合計ポイント 2800

いつもなら通知さんが開発完了を教えてくださいが……本当にどうしたんだろ

アーク「んじや、アリスこれ」

アリス「何これ?」

アーク「なんってヘルメットだが？」

アリス「なんでこんな兜みたいなのを被らないといけないのよ」

アーク「いいから、安全のためにつける」

アリス「でも、アークがつけてないじゃない」

アーク「俺はサイボーグだからいいんだよ」

言っておくが現実でヘルメットつけていなかったら犯罪なのでつけるように。

アーク「さて、行くか。アリス、後ろに乗りな」

ボンネビルT100にまたがり、アリスに乗るよう促す。

アリス「う、うん!! えい!!」

アリスの飛び乗る感じでまたがる。

アーク「それじゃ、結構飛ばすから掴まってな」

アリス「うん!! こうでいいかしら？」

後ろに乗ったアリスはアークに掴まろうと体を密着させた……が

ふにゆ

アーク「んぶ!？」

アリス「え、どうしたの!？」

アーク「い、いや何でもない」

密着したせいでアリスの……そのお……なんだ、デカイアレ胸が直に当たっている。

アーク（……俺の精神と目的地……どっちが先に終わるか）  
とりま、心を無にした。

アーク「出発するぞ」

アリス「うん!!」

そして、俺はエンジンを吹かしスピードを上げた。

ちなみにバイクの運転だが前世は免許を持ってなかったのでVR世界でミラーとオセロットに教えてくれた。

ドドドドドドドドドドドド!!

アリス「きゃー!! 何これ!! すごく速いじゃない!!」

アーク「……初めて、後ろに乗せたがアリスが案外乗り物酔いとかないエルフでよかったよ」

アリス「ねえ!! もっと上げて!!」

アーク「あいよ!!」

この世界に法定速度とかなないので思う存分スピードを上げられる。

後ろで主人が笑顔になっているのを感じながら、月明かりが照らす中……爆音を鳴らしながら進んでいった。

## 七十一 兇目 報酬受け取り

アーク「ほい、着いたぞ」

あれからバイクを1時間ぐらい最高スピードで飛ばした後、到着した。

アリス「……お尻が痛い」

アーク「ごめんな悪路をしかなくて」

洞窟の前でバイクを止める。

アリス「眠気は痛みでどこか行っちゃうし……」

アーク「ごめんって……さっさと行って終わらせるか」

こうして前に来た洞窟の中に入っていったが

アーク「……あのお、アリスさん？」

アリス「な、何かしらあ？」

アーク「……なんか近くありませんか？」

洞窟の中に入った瞬間、アリスが俺にべったりとし始めたのだ。

べったりしてわかったが小刻みに震えているし若干汗で湿っている。

アーク「あく……もしかして……」

アリス「ち、違うわ!! 別にお化けが怖いとかじゃないわ!! アー

クがどっかに行かないよう密着しているだけよ!!」

アーク「いや、俺はまだ何も言っていないんだが」

アリス「違うからね!! 皇族である私が幽霊ゴーストごときで怖がるものですか!!」

……なぜか顔を青ざめ、足が震えているアリスが勝手に否定する。  
すると……

カツン……

どこかで小石が転げ落ちた音が響いてきた……しかし

バツ!!

アーク「……おーい、アリス? 小石が落ちた音だって」

アリス「無理、歩けない」

アリスは俺の体に木にとまったセミのようにしがみついていた。完全に密着している。

別にこんな状態でも歩けるが邪魔だ……あと、アリスからいい匂いがするので……少し、精神を乱れる。

アーク「……なら、入り口で待つておくか？ 護衛は月光に頼んでおくから」

アリス「やだ!! アークと一緒にいい!!」

なんか子供っぽい感じで一緒に行くと言うアリス……言つてはあれだけど面倒だな。

アーク「じゃあ、降りてくれ」

アリス「それもヤダ!!」

アーク「……はあ」

あと、アリスさん……無意識……だろうけどいろいろと当たつてるんですよね……主に胸。

結局、おんぶするみたいに背負つて進んでいった……ちなみにアリスは俺の背中に顔をうずめている。

アーク「もしかして、アリスって幽霊が苦手?」

アリス「そうよ!! なにか悪い!」

アーク「いや、別に……でも、意外と可愛らしいところもあるんだつて思っただけさ? ほら、前に部屋行った時だつてぬいぐるみとか可愛い奴がいっぱいあったし」

アリス「か、かわい!? そ、そう……ありがと」

なんか照れているアリスを放置して先に進んでいくと

アーク「やっぱ、あった」

アリス「何これ?」

いつの日か見た襖がそこにあつた。

アリス「アーク? これ何? 私、こんな扉見たことないんだけど?」

アーク「これは襖つていう扉だ……まあ、ぶっちゃけ言うとな俺の世界にある扉」

アリス「変わった扉ね？ でも、なんでこんな洞窟にコレがあるの？」

アーク「……それは俺も思う」

慣れた手つきで襖を開けると

アーク「よお、ロリ神」

ロリ神「やつほー!! アーク!!」

日本家屋みたいな部屋の真ん中に俺を転生してくれた。

アーク「約束通り来たぞ、糞が」

ロリ神「え、第一声がソレ？」

アーク「……だつてなんで転生者の俺がああ糞野郎を殺さんといけんのじゃ？ お前らのミスでああなったんだから」

ロリ神「ま、まあ……それは報酬で詫びるってことで……」

アリス「ね、ねえアーク？ この子誰？」

ロリ神「あ、君……じゃなくて貴方様がアリス様ですね!!」

アリス「え、ええ……私がアリス・フォン・アーハムでアークの主人よ」

ロリ神「私は不甲斐ない洞窟の住民兼旅人さ!!私のごとはデヴオチカって呼んでね!!」

ちなみにデヴオチカとはロシア語で女の子という意味だ。

アリス「えっと……デヴオチカちゃんはアークとどういう関係？」

ロリ神「子供じゃないもん!! 私とアークは……まあ、腐れ縁な関係でよく情報共有してるんだ」

アリス「アークと……ふうくん……」

え、なんかアリスから冷たい目で視られるんだが。

アーク「こ、こほん……それで……デヴオチカ？ 例のなんだが……」

ロリ神「あ、そうだったね……あ、その前に……アリス様？ 少し

よろしいでしょうか？」

アリス「……なに？」



なぜかアリスがロリ神を睨みながら返事をする。

一応、こいつ神様なんだが……

ロリ神「え、えつと……私とアークはここで少し難しいお話をするから……この子のお世話を頼んでいいかな？」  
すると

??「バウバウ!!」

アリス「え、きやあ!?!」

アーク「アリス!?!」

突然、襖の奥から犬のような生き物が飛びついてきた。

ロリ神「あ、こら!! ケル!! お客様なんだから!!」

だが、そいつの頭は三個あった。

アーク「……なあ、ロリ神……あれって?」

ロリ神「え? ああ、私の友人の一人である冥府担当の神様が今回のヘマで報告書と戦っているから私のところにあずかることになったの」

アリス「ちよ、ちよつとコイツって「幻獣ケルベロス」じゃないの!?!」

そう、アリスに飛びついたのは地獄の番犬ことケルベロスだった。だが、サイズが柴犬くらいしかなかった。

つてかこのロリ神って冥府の神と友達なんかい。

ロリ神「いやいや、アリス様? こんな旅人が幻獣なんて飼えるわけないじゃないですか。それにもし本当にケルベロスならもつとデカくて凶暴ですつて」

アリス「……そ、そうよね。(ペろペろ!!)つて、もう!! くすぐたいってばあ!!」

ロリ神「あ、そういえば最近遊んでなかったな……」

アーク「いや、友人から預かったんだから少しは遊んでやれよ」

アリス「もう、そんなに遊んでほしいの?」

ケルベロス「「バウバウ!!」」

ロリ神「……すごいね、君の主人。私でさえ懐いてもらうのに時間がかかったのに」

アーク「まあ、だからこそ魅力的な主人さ……それで報酬は？」  
ロリ神「あ、そうだったね……それじゃ、はいこれ」  
そういうと目の前の何も無い空間からスーツケースが出てきた。  
ロリ神「中に報酬の金貨が入ってるから」  
アーク「どうも」  
スーツケースを受け取った後、俺の能力を使って全て開発ポイントに変えた。

以前のポイント 2600  
獲得（今回の事件と謝礼） 30000  
合計ポイント 32600

アーク「おい、ちよつと待て。多すぎないか？」

ロリ神「え、いらぬなら返してよ。ソレ、私たちの給料から引いているんだから」

アーク「断るわ」

ロリ神「ま、ソレ全部「ありがとう代」として受け取ってよ私たち神々の尻拭いをしてくれて」

アーク「ぎっけんな」

ロリ神「あ、あと一つ」

アーク「まだなんかあるのか？」

ロリ神「ふっふっふ……聞いて驚け!! アーク!!」

アーク「いいから早く要件を言え」

ロリ神「君に新しい神様特典を加えることになりました!!」

……え、マジ？

ロリ神「いや、本当に異例中の異例だよ？ 神が新しい神様特典を付与するなんて」

アーク「……まあ、使えるものはありがたくもらうか……それで？  
新しい神様特典ってなんだ？」

ロリ神「その前に……はいこれ!!」

そう言つて渡されたのは……一つのカプセルで中を見てみると

アーク「え、ナンスカコレ」

まあ、簡単に言ったら

悪意、恐怖、憤怒、憎悪、絶望、闘争、殺意、破滅、絶滅、滅亡

黒い金平糖でどう見ても人類滅亡を謳う衛星でした。

はい、どう見ても本家アークでした。ありがとうございます

ロリ神「何つて、新しい神様特典だけど？」

アーク「え、何？ マジでゼロとかワンになって蠍<sup>滅</sup>パパと戦うの？」

ロリ神「そのうち天国<sup>エ</sup>作るマンと裏切<sup>ル</sup>るマンにでもなるのwwww

」

アーク「絶対、嫌だ」

嫌な予感しかない

ロリ神「まあまあ、遠慮しないで」

アーク「遠慮する前に拒否しているんだが」

ロリ神「あ、安心して某アークにはならないから」

もう、隠す気ないだろ

アーク「んで、どういう能力なんだ？」

ロリ神「まあ……言うより感じた方が速いからね……つてなわけ  
!!」

するとどこからかビールジョッキを出した。

そして、その中に先ほどのどう見ても某アークのソレを注いでい  
た。

注ぎ終わったソレを俺の目の前に置き

ロリ神「はい、イツキイツキ!!」

アーク「え、飲むのコレ？」

ロリ神「決まってるじゃない!!」

いや、そんな「当たり前だろjk」みたいな顔で言われても

ロリ神「あ、ちなみにこのまま飲まなかつたら君の主人に飲ませる

から」

アーク「はあ……ままよ!!」

このまま断ったらアリスがヤバいことになりそうなので飲むことにした。

ゴクゴクゴク……

……おうふ、なんだこの味

イチゴが最初に来て次にキムチの辛みが襲ってきて帰り際にゴーヤの味がした。

アーク「……つぶは、飲んだぞ」

ロリ神「おお……マジで飲みおった」

アーク「……胃と腸がムカムカするんだが」

ロリ神「まあ、慣れで頑張ってる」

はあ……ようやく終わったよ。

あ、その前に一つやることがあったな

アーク「おい、ロリ神。お前に渡すものがある」

ロリ神「え、何々!!」

アーク「これ」

コトンと机に置かれたのは

ロリ神「お!! ミルクレープだ!! くれるの!?!」

出したのは俺が作ったミルクレープである。

ロリ神「わーい!! それじゃ、いただきm」……んでその前にだがむぎゅ!?!」

ロリ神がフォークを出して食べようとした瞬間、ミルクレープを乗せた皿を持ち上げロリ神が届かないくらい上げて没収した。

ロリ神「ちよつとお!! 私、これでも神様なんだから優しくしなさいよ!!」

アーク「その前に俺の質問に答えろ」

ロリ神「えく? なあに?」

アーク「俺の元の姿に戻る方法を教えろ」

ロリ神「……ああ、それ？」

アーク「ああ、さつさと教えろ又はもとに戻せや」

ロリ神「んく……いいけど……ねえ……」

アーク「なんだ？ まさか、無理ですとかじゃないだろうな？」

ロリ神「……いや、そういうのじゃないよ……ま、私たち神々が転生者の手助けをするのは違反だから教えるのだけはいいよ」

アーク「教えるだけって……身勝手な神々だな」

ロリ神「戻る方法は簡単!!」

君の主人がヒントだよ」

アーク「……アリスが？」

ロリ神「っそ!! ほら、言ったでしょ!! 早く食べさせてよ!!」

アーク「……半分だけな」

ロリ神「ケチ!! 鬼!! 悪魔!!」

アーク「うっせ、もう半分はケルベロスにでもあげてろ」

うくん……アリスがヒントか

エルフを殺す……んなわけないしな

アーク「まあ、いいか……気長に探すか」

さて、用事は済ませたから帰るか。

アーク「アリスー？ 帰るぞー？」

アリス「はい!! それじゃ、またね!!」

ケルベロス「「バウバウ!!」」

洞窟の出口までロリ神たちが見送ってくれた。

そして、アリスと一緒に止めておいたバイクにまたがる。

アーク「それじゃ、またな」

アリス「じゃあね!! ワンちゃん!!」

ケルベロス「「バウバウ!!」」

あ、結局最後まで気づかなかったのか。

ロリ神「あ、最後に一ついい?」

アーク「はあ? まだあんのかよ」

するとロリ神は俺に耳打ちした。

ロリ神「アーク……いや、トオル君? いい?」

アーク「ツ!? なんですか?」

アークではなく俺の本名としてか……

ロリ神「もし……もし、戻った時だけど……驚かないでね?」

アーク「は? どういうことだよ」

ロリ神「……私、君を転生した後に君の体のことを調べたの」

アーク「……おう?」

俺の体って……別に何ともないぞ?

剣道をしていきたいたって普通の体だが?

ロリ神「……多分、これからトンデモナイことになると思うから

……頼んだわよ」

アーク「お、おう?」

どうしたんだロリ神の奴?

会った時はあんな厳しい目なんかしてなかったのに……

アリス「ふおあく……アーク……眠い」

アーク「あ、悪い……行くか」

こうして俺はアーハム帝国に向けて出発した。

アークたちがバイクで去っていた後、ロリ神は一人で立っていた。

ロリ神「……行ってしまったか」

ケルベロス「「バウ？」」

ロリ神「あ、大丈夫だよ番犬君。……それよりも……まさかアークの体がアレだとはね」

月明かりが照らす中、神は一人でつぶやいていた。

ロリ神「別にあの時止めて真実を言えばよかったけど……それだと彼が混乱してしまう……だから時期を見て言おうと思うの」

ケルベロス「「バウ……」」

ロリ神「……やつぱり君もおかしいと思った？ アークの外側の肉体」

転生する時ランダムで姿が決められるが……この時だけ運命を憎みたい。

ロリ神「まさか……アークの肉体は彼女と彼の遺伝子で作られているとはね」

ロリ神は目を細めながらつぶやく。

事前にこの世界について調べて分かったことがあり……それが気になってしまうのだ。

ロリ神「……アーク……いや、鋼宮徹よ。汝はこの世界から隠された真実を知り試練を言い渡されるでしょう。でも、どんなつらいことがあっても負けずに立ち向かうのですよ……さもないと」

「この世界の命運をかけた世界戦争が起きてしまう!!」

地域と地域の？

違う

国と国の？

違う、もつとスケールが大きい

種族と種族の？

まったく違う

魔族と全種族の？

違う、そんなでも生ぬるい

では、なんなのか？

そんなのこれほど答えてもないのなら世界は一つだ。

種族や貧困や正義も悪も関係ない……世界が崩壊してしまう、戦えば  
その時点でバッドエンド確定の戦争だ



## 七十二発目 お試し使用

ブロロロ……

ロリ神に会った後、俺とアリスはもうすぐで夜明けになる大地をバイクで駆けていた。

アリス「ふおお……眠い……」

アーク「あ、お子さんにはもうお寝んねの時間か？」

アリス「お子さんじゃ……ないもん……」

後ろに乗っているアリスは眠たそうな声で喋っている。

俺は任務とかで慣れているから大丈夫だがアリスは皇族で慣れてないもんな。

アーク「どうする？ なるべく早めに城に戻ろうかなって思ったんだが？」

アリス「にゆう……でも、眠い」

アーク「うーん……このあたりって村とかあったけなあ？ なかつたら野宿になるけど」

こういう時こそ通知さんが恋しい。

あの人に聞けばたいいていのはわかるんだが……あ、そういう俺って異世界版Googleマップ使えるんだっけ

アーク「えーつと？ 近くに村は……うわ、無いやん」

流星にそんな希望的観測は当たらないか。

アーク「どうするアリス？ 野宿するか？」

アリス「えく……ベッドで寝たい……」

アーク「なら、我慢しとけ」

アリス「アーク？ なんか面白い話ない？ できれば私が興味持ちそうな話」

アーク「いや、急な要望だな。……怖い話とかは？」

アリス「やだ。あ、でもあの……デヴォチカ……だっけ？ あの子とは何の話をしてたの？」

アーク「え、普通に世間話だが」

アリス「……ふくん？」

いや、言えないだろ勇者殺して報酬受け取ったのと俺に新しい力が宿ったとか。

あと、アリスさん。そんな怖い目で見ないでくれませんか？

アリス「ま、いいわ今度聞いてやる。……そういえばアークって前の世界ではモテてたの？」

アーク「……知って何になるんだ？」

アリス「別に？　ただ気になったただけだし」

アーク「モテてはなかったな……まあ、俺には恋愛なんて程遠いものだってわかったし」

アリス「何かあったの？」

アーク「……俺がいた学校にね、めっちゃ美人の女子生徒が転校してきてな？　そりゃ、美人だったよ？　アリスほどではないが綺麗で清楚な感じだった」

アリス「……へえ〜？」

どういうわけか少し苛ついてきたアリス。

だが、遠回しにアリスが美人であるという誉め言葉には気が付いていない。

アーク「俺は彼女を見たとき恋に落ちたんだよなあ……ま、これが恋ってやつだな。その日から彼女はクラスの注目の的でさ男子みんな告白しに行ったさ」

アリス「……まさか、アークも行つたの？」

アーク「まあ、俺も恋に堕ちたからな？　俺も告りn（ぐぎぎぎ

……）いてててて!?　痛いつてアリス!?　なにすんだよ!?!」

バイクを運転中に後ろに乗っているアリスから脇腹に爪を食い込ませてきた。

アリス「……なんかムカムカしたから」

アーク「な、なんじゃそりゃ……それで、俺も告つたんだが……」

アリス「…付き合ったの？」

アーク「いや、フラれた」

アリス「ふーん？　まさか、私の使い魔は殺すのは得意でも恋に落とすのは下手くそなのね!!」

なぜかそれを聞いたアリスは嬉しそうに話す。

……この主人、まさか他人の不幸を見たら喜ぶタイプか？（違います）

アーク「でもさあ？ 断られた理由がおかしかったんだよなあ」

アリス「どんな理由だったの？ 顔が気持ち悪かったとか？」

アーク「さすがにひどくね？ それで理由なんだが……俺、前の世界では剣道部……こっちでいう剣を学ぶ組合かな？ にいてな、返ってきた答えが

「え、剣道って汗臭いし汚くて嫌だ。サッカーとかバスケみたいな爽やかじゃない」

って言われた」

アリス「え、えっとつまり？」

アーク「つまり、同じ汗をかいているのに俺がやっているのがかっこよくないから断られた……だ」

マジでなんでバスケとかサッカーの奴らはモテて、剣道はモテないんだよ。

先輩も言ってたけど「剣道部に入ったには恋愛とかは諦めろ」って言われてたしな。

アリス「えく？ 私は騎士はかっこいいと思うよ？」

アーク「はあ……そういつてくれるとありがたいよ」

アリス「ね、今度さアークの世界のケンドウ？ ってのを見せてよ!!」

アーク「いや、俺の世界って剣で戦う世界じゃないからなあ……まあ、今度見せてあげるよ」

そんなことを言っている間に

アーク「お、見えてきた」

太陽が少しずつ上ってきて空が明るくなっている時間帯にアーハム帝国が見えてきた。

アリス「ふぉあ……ようやく帰ってきたのね……私、帰ってたすぐ寝るからね」

アーク「おう、寝とけ。明日……いや、今日の夜か。夜はパーティーだから今のうちに寝とけ」

アリス「はぁーい」

さて、無事にアーハム帝国にたどり着いた俺はアリスを部屋まで送って寝かせた後、学園にある我が家に帰っていた。寝ようと思えば寝れるがその前にやることがある。

アーク「新しい神様特典ってどんなんだろ」

そう、ロリ神からもらった神様特典なんだが……本人曰く万能系らしい。

使い方は簡単で念じればその能力の名前が出るのでそれを言えば発動するらしい。

アーク「えつと……こうかな？」

そして言う

アー

「I そ have の predicted 結論 the 予測 conclusion みだ」ク

(CV:速水奨)

すると、世界は

ヴォン……

ゆっくりとなった。

アーク（おお、これが新しい神様特典……なんで能力を発動するときに速水ボイスが出るのかはわからないがすごいなこれ）

窓の外を見ると小鳥たちが空中で静止して音も聞こえなかった。

まあ、簡単に言ったら「Detroit: Become Human」に出てくるスキャンモードみたいな感じだった。

あのゲームは神作です

アーク（……便利だが……弱点もあるのか）

この状態になれば「どうすれば最善の結果になるのか」などがすぐわかるが……もちろん弱点がある。

まず、この状態になっても時間が遅くなっているだけで進んではいる。

それに音も遠くなっているので味方の声が聞こえない。

アーク（……ま、弱点がなきゃ美しくないってオタクコンも言ってたしな別にいいか）

それにしてもだが……

アーク「ロリ神が言っていたトンデモナイことって何なんだ？」

何だろう？

俺が人間に戻って起こることって……リンが俺を分解しに来る？

それはないか。ってかマジで来たら逃げよ。

アーク「服も……スーツでいいか」

装備を粗方外してスーツを着て、懐に護身用のTORNADO―6を忍ばせておく。

アーク「格好も……まあ、顔以外はできたな」

マジで速く人間に戻りたい

せめて口だけでも戻ってきてほしい。

アーク「時間までは……まだあるな……銃の手入れでもしておくか」

一方、とある廃城

そこにいたのは

「計画は順調かね？」

「はい、順調です」

アークが勇者を殺しに行っている間に逃げたバサビー共和国の生き残りだった

「それにしても……貴様が回収してきたものがここまで役に立つとはな」

日の光が差し込まず、暗い部屋に首相と幹部……そして、首相の後ろに銀髪の女性が立っていた。

??「……私はマスター首相が戦力を上げろという命令を受けたので実行しただけです」

「しかし……これは規格外すぎだろ」

そこにあつたのは

「ぼぼ……」

「まさか、勇者の死体から利用するとはな」

緑色の液体に浸されている勇者のそっくりさんがいた

しかも、それが数百……数万とあつた

「くくく……これで世界は今度こそ私のものに……」

「……ところで首相殿……そいつってこのままにしておくんですか？」

「ん？ ああ、そうだ。使い魔契約をさせて洗脳もさせているから自分が誰なのかもわからまい」

「そいつって……本当に何者なのですかね？ 魔力も異常なほど多い……」

「別にいいのではないか……最初は警戒したが使い魔にさせれば大人しく命令に従うし反抗もしない。それに我々に古代兵器の使い方で教えてくれた。これほど都合の都合のいい道具などどこにいる?」  
「……それにこいつの魔力は驚くほど純粋で膨大……これを魔力兵器につなげばちよつとした殲滅兵器にもなれますよ」

「なんだ? こいつの体がそんなにも気に入ったのか?」  
すると首相は後ろで待機していた銀髪の女性に近寄り

ぐわあし!!

?? 「……ん」

胸を無理やり掴んだ。

普通、女性でさえ無理やり力加減も考えずに掴まれたら痛むが……この銀髪女は抵抗しない。

「こいつ……本当にやらしい体をしているよな。胸はデカいが普通の女みたいな肉じゃなくて固いし」

「なんだ? こいつをお前の慰め者にしたいのか?」

「嫌ですよ。こんな美貌な顔でも中身はゴーレムみたいなものですか」

?? 「マスター? 私は……何者なのですか?」

先ほどのからの会話を聞いた女性は聞いてみるが

「ああ? なに言ってるんだよ? お前は俺が作った大切な家族なんだから気にしないでいいんだよ。だから……」

バキィ!!

「こうして殴られることに感謝しろよ?」

首相は女性を押し倒し顔面を殴り続けた。

だが、それでも女性は反抗しない。

なぜなら、感情を出すのを禁じられているからだ。

首に浮かび上がっている「使役魔法」の模様と「使い魔契約」の呪

いのせいで虚ろな目をしていた。

「えつと……おい、ニゴウ？ お前は俺の役に立ちたいか？」

ここで言うニゴウとはこの女性が起きた時に「シサクガタニゴウ、起動します」といったのでそれが名前だろうと思った首相がニゴウと名前を決めたのだ。

ニゴウ「はい……私はマスターのために作られた道具なので……」  
「そうか、なら……貴様に命令を出そう」

ニゴウ「はい……私は世界を守るために作られた存在なので……」  
こうしてニゴウは命令を受け、首相に殴られた部分が腫れあがり口から血が出ているが辛い表情を出さずに命令の実行のためその場を後にした。

一方、アーハム帝国に

アーク「……時間か」

懐からiDROIDを取り出し時間を見てみると夕方5時

アーク「ここ、最近も寒くなってきたなあ」

季節は冬になっていき、少しずつ寒くなってきた。

アーク「アリスと会ってから、もう一年か」

速いものだな……一年間って

アーク「速いと言ったら」元「バサビイ共和国の処遇も解決したしな」

先ほど会議があったが決まったの以下の通りだ

- 1, 賠償金は支払わずに国家復興のための資金にさせる
- 2, しばらくはアーハム帝国の領土とし数か月後に独立させる（この時アーハム帝国は軍を残留させるのは禁止する）
- 3, 国名を「バサビイ民主主義国」にする

とまあ、結構優しいものだった。

これを聞いた臨時のバサビイ民主主義国代表は最初は死んだような眼をしてたけど生き返って泣きながら感謝していた。

まあ、今回は完全に勇者と上層部が悪いからな。

でも、領土にするってことは交流が増えるだろう……その時にアー



ハム帝国エルフはバサビイの人とたちは良い奴だと思ってくれと嬉しいものだが

あと、悲しいことに俺の顔バレが広まった。

多分……ノエルたちが言ったんだろうな。

アークがそんなことを考えていると

アリス「アーク!!」

アーク「あ、アリス来た……か……」

遠くから主人の声が聞こえてきたので顔を上げるとそこには

アーク「……」

アリス「ちよ、ちよつと何よ?」

アーク「……っあ!! いや!! 何でもない!!」

ヤバい、見惚れてた

目の前にいる赤と白のドレスつというめでたい色だがアリスの黄金の髪が夕日に照らされてなんとも幻想的な光景だった。

どんなに頭の中でおとぎ話のプリンセスを思い浮かんでも目の前の主人の前では霞んでしまうほどであった。

アリス「もう……使い魔でもあるのに油断なんかしないでよ?」

アーク「悪い……んじゃ、そろそろ 会場にいくか」

パーティーはすでに始まっているが本格的に始まるのはアリスなどの皇族が入ってからだ。

アーク「それじゃ、こほんつと……エスコートしますよ、ご主人様?」

国際的な場所なのでスイッチを入れる。

アリス「……やつぱりアーク……あなたから敬語を言われるのって……なんかムズムズする」

アーク「仕方ないではありませんか。私とご主人様がなれなれしく話し合っているなんて他国が見れば誤解を生みかねないので」

アリス「むう……そうわよね」

アーク「では、参りますか」

多分、アリスが主人なんだからアリスのほうに他国のお偉いさんが来そうだな

ま、俺は実行しただけだしな。  
光を浴びるのはアリスが一番いい。

だが、30分後

がやがや

「死神殿!! ぜひ、私の国に!!」

「いえいえ、私の国に」

「どのような戦いでしたか!!」

「勇者の最後はどんな感じだったのですか!?!」

「異世界から来たとは本当なのですか!?!」

アーク「あ、いや……えつと……いつぺんに話しかけられても困るんですが……」

会場に入った瞬間、俺の周りに人だかりができた。

ほとんどが「ぜひ、うちの国(の軍)に来てくれ」とか「ぜひ、うちの娘とあつてほしい」というものだった。

もちろん全部断つたのだが……断つても断つても次が来る。あと、女性と会話する時やたら近いんだが……服も少し過激だし……うつとおしいよ!?

困ったのでアリスの皇族権力を利用して離れようとしたが

「いやはや、アリス様は今日も美しいですね」

「まるで夜に咲き誇る白百合のようだ」

「ぜひ、後で私とお話でも……」

アリス「え、えつと……」

あ、ダメだわ

アリスも他の国の人に絡まれているわ。

なんか男性がやたらと多くてアリスに近い気がするが……まあ、流石に問題はおこさんだろ。

でも……あの男……アリスの肩に手を置いているのを見ると……  
なんかイラつく。

アーク「申し訳ないのですが……私はアリス様の護衛をしないとなりませぬので……」

「いいではないですか。アリス様はほかの男性とお話しているので」

困ったな

行きたいんだが行かせてくれない

すると

クロエ「あら？ 皆様、楽しんでいらつしやいますか？」

「おや、これはクロエ様……ごきげんよう。今、我々は死神殿とお話を」

クロエ「だったら……彼のお話……私がしましょうか？」

「おお、ぜひ!!」

クロエが割り込んできて話がしたいようだ。

アーク（ありがとう、クロエ）

皆がクロエに注目している間にそつと気づかれないように抜け出しアリスの元に向かって行った。

アーク「アリス様!!」

「うお!! 死神殿!!」

何か男とやっているアリスに向かった……が

アリス「ぬうえ？ あーくう？ どうしたのお？」

「そうだぞ、死神殿？ どうしたんだね？」

アーク「いえ、少しご主人様の周りに人が多すぎたので心配となり来たのですが……皆様？ 少々、アリサ様に近づきすぎです。この方は皇族なのでもし方が一何かあったらどうするのですか？」

「ぬう……それはすまなかつた……だが、会話だけだからいいじゃないか？」

アリス「そうだよお？ あーくう？」

アーク「ダメに決まってるだろ？ あと、アリス様？ さっきからどうしたんですか？ 口調おかしいですよ」

アリス「えつとねえ？ この人たちから「うちのワインは世界一だ

からぜび」って言われちゃったから飲んでいったんだけどお!! 飲んでいくうちにホワホワしていつてねえ? 知らないうちにこうなっちゃったあ!!」

アリスはテーブルに指を指し、そこにあつたのは

アーク「いや、何本飲んだんだよ」

アリス「ごほん!!」

アーク「さてはアリス様? 酔ってますね?」

アリス「酔ってなあいもん!! 皇族の私がワインだけで酔うわけないじゃない!! ちよつとだけ飲みすぎちゃっただけもおん!!」

アーク「それを酔っているっていうんだよ。はあ……皆様、お楽しみ中に申し訳ございませんが主人を少し外で涼ませに行くので」

「い、いえ……それより私が運んでいきましようか? 死神殿は主役なので出ていくのは……」

アーク「いえ、私が称賛されて喜ぶよりアリス様が褒められて笑っているのが私の幸せなので……人間は幸せになろうとする生き物なので私はそうするだけです……では」

なぜか目の前の男は俺を睨むが無視をしてアリスを起こす。

アーク「アリス様? 皇族であるあなたが酔っては困るので一旦外に出ますよ?」

だが

アリス「にゆう……むにやむにや……」

アーク（寝てやがる）

酔って末なのか寝てしまった。

アーク「はあ……本当、困った主人だ」

こっちの身にもなってくれよ。こちとらちゃんと寝てないんだぞ?

寝てしまったので外で涼ませるのは良いとして、アリスの部屋で寝かせることにした。

アリスをそつと起こさないように「お姫様だっこ」し運んでいった。

……なぜか周りからはザワザワと声が聞こえるがアリスを起こさないでくれるかな?

こうしてアリスを持ち上げたまま、会場を後にした。

## 七十三発目 パーティーと事故…そして？

パーティーを出た後、俺はアリスを部屋まで運んでいた。

「よ ってかアルコールくせえ…あの人間、いったい何杯飲ませたんだよ」

アーク「はあ…アリス？ お前ってそんなにお酒飲める方だっけ？」

確か…アリスって俺より一つ年下だったよな？

俺は…まだ飲んだことがないからわからないけど、アリスってまだお子ちゃまだから無理のようだったな。

すると

アリス「あーくう？」

アーク「お、起きたかアリス？ 起きたのなら降りて自分で歩い（むんず）いってえ!？」

なぜか腕の中にいるアリスから頬をつねられた。

アリス「なんでえ〜？ 私以外の女性と話してるのよお？」

アーク「いやいや…ここ、社交な場所だから話すのは当たり前だろ」

アリス「私以外の女とはデレついて…少しは主人である私のこともかんがえてよお〜!!」

酒に酔って上司はメンドクサイと聞いたが…マジで面倒だな。

アリスの可愛らしい口からアルコールの匂いを感じるし、腕の中でジタバタと暴れる

逆に使い魔のことも考えてほしいな。

アリス「あの…デヴォチカとかいう女の子と会った時だって二人で楽しそうに話しているし…バサビイ共和国で会ったノエルとかいうシスターとも仲良しになるし…それにクロエ姉さまとかウイテカーとも仲良しになるし…なんで召喚したのは私なのに私以外の女と仲良しになってるのよお!! もう少し私に構ってよお!!」

アーク「知らんがな…ほら、アリスの部屋に着いたぞ」

アリス「アークが頑張ってるのにさあ…前に言った辛くなったら

何時でも来ていいよって言ってたのに全く来ないし……そんなにご主人様のことが嫌いですかあ？」

アーク「んなわけよ……ほら、飲酒さんはさっさと着替えて寝ろ」  
……確かによくよく考えたら俺の周りって女性が異常なほど多くね？

なにかアリスから愚痴を言われるが聞き流しながら寝る用意をさせる。

アーク「アリス？ パジャマってどこだ？」

アリス「えつとお……そのタンスう……」

アーク「えつとここk……」

パジャマを取り出して、引き出しをもとに戻そうとしたが……パジャマと一緒にブラジャーもあつたが……

アーク「(っす)」

何も見なかったと心の中で念じて元に戻した。

……でも、デカかったな……サイズが

アーク「ほら、アリス……早くきがえ……ちよ!!? 何してんだよ!？」

アリス「何って熱いから脱いでるんだけどお？」

アーク「誰が下着まで脱げって言ったあ!？」

アリス「……あーくう？」

アーク「んなこと言わんわ!!? 俺は裸を見るような変態じゃねえ!？」

ドレスを脱ぎ下着一枚になったアリスだったがブラのホックまで手を伸ばし脱ごうとしたがギリギリで止めて寝巻を着させることができた。

アーク「はあ……疲れた……」

なんでこれだけでこんなにも疲れんだよ

アーク「それじゃ、アリスお休み」あ、ちよつと待ってアーク……なんだよ？」

部屋を出て行くこうとした瞬間、アリスに呼び止められた。

アリス「あと一個……君にやるものがあつたわ」

アーク「やるって……なにを？」

アリス「私い……最近、罰しか与えてないからアークにたまにはご褒美を上げようと思ったのお!!」

アーク「別にいららないんだが」

アリス「ここに座って!」

拒否権はないんかい

ベッドのふちにアリスが座り、隣をポンポンと叩く。

アーク（はあ……さっさと褒美とやらを受け取って帰って爆睡しよう）

先ほどアリスを運ぶと皇帝陛下に報告した時に知ったことだが明日は自由にしていいらしい。

なので明日は全力で寝る。

……それにしても皇帝陛下は酔ったアリスを部屋に運ぶって言うたらなぜかエリザベス様が間に割り込んできて許可してくれた。

その間、皇帝は何か言っていたが皇妃によって黙らされた……しかも、いざ運ぼうとした瞬間皇妃から耳元で

エリザベス『頑張ってね♡』

って言われた。

いや、何がなんだよ?

とりあえず、隣に座った。

アーク「ほら、座ったぞ」

だが、座った瞬間……喋れなくなった

何でかって?

そりゃ……

ちゅっ♡

アリスの唇が俺の口があるであろう場所にふさがれていたからなアーク「ツ!」

余りの突然な出来事に呑み込めない死神

ちゅ♡むちゅ♡ぬちゅ♡



アリス「つぶは!! えへへ♡ アークの初めてもらっちゃった♡」  
アーク「え、ちょ……アリスさん? やって事わかってますか?」  
男が女とキ……キスって……」

アリス「いいじゃないのお? アークって今回の功績者なんだからこれくらいのことをしてあげないとアーハム帝国の皇族失格だからね!! それにゴーレムみたいなものだから別にいいじゃない!!」

そういう問題ではないのだが!?

アーク(そ、そうだ……キスされた部分も俺の仮面を越してのだから……キスではない!! (混乱))

自分にキスではないと言いついて聞かせる。

アリス「あーくう?」

アーク「ひゃ、ひゃい!」

頭が困惑する中、アリスに名前を呼ばれて声が裏返ったが返事をすると

アリス「大好きよ♡ アーク♡」

アーク「……ほえ?」

アリス「アークの料理が大好きよ♡」

アーク「あ、なんだそっちか」

料理のほうが好きだと言われ嬉しいが……なぜかどこか残念がついていた。

アーク「ははは……ありがとな」

アリス「うん!! だから今度……山みたいに大きなスイーツ……を……食べたい……」

するとアリスはコクリコクリとこぎ始めた。

アーク「はあ……アリス……寝るならもう寝ろ」

アリス「……うん」

アリスがベッドの上で横になったのを確認して立ち上がろうとしたが

アーク「俺は帰る」「アークも一緒に横で寝よう?」「え、ちよ、おま!」「立ち上がった瞬間、アリスに腕を掴まれベッドに倒された。

しかも、アリスの隣でアリスとの差はなく完全に密着していた。

アリス「おやしゆみ……あーくう……」

すやすやと可愛い寝息を立てて寝たアリスだが……された本人  
はというと

アーク(……やばいつて!? え、ちよつと待てよ!? 俺はアリスに  
キスされてしかも添い寝することになって!? え、えつとえつと……  
それから!?)

頭の中が暴走していた。

しかも、脱出しようにもアリスの足が腰に腕が肩に回っておりガツ  
チリホールドされていた。

アーク(そ、そうだ!! こんな時こそVR空間だ!!)

こういうなぜか本能が警告を発している時に脱出するために使わ  
せてもらっているVR空間に逃げる方法を使用しようとしたが

『ERROR:VR空間に転送されませんでした』

アーク「What、s t h a f o c k!?!」

そして

ピロン♪

どこか聞いたことがある音とともに視界のはじに変なメッセージ  
が届いた。

内容は

ミラー【未永く核爆発しとけ。爆ぜろd(・▽・)bリア充!!by  
MSF,DD一同】

アーク「ぎっけんな!?!」

どうやらミラーが妨害したらしく転送されなかった。

アーク「そ、そうだ!! 深呼吸しよう!! いったん落ち着かないと」  
すう〜……

アリスの目の前で一人勝手に慌ていたため深呼吸したが……

ふうわあ〜♡

アーク（あ、ダメだわ。これ!?)

寝ているアリスの目の前で深呼吸したため直でアリスの甘い匂いを感じた。

匂いは不快ではなく……逆にもっと嗅ぎたいという欲求が芽生えてくる。

アーク（いやいやいや……何がもつと嗅ぎたいじゃワレエ!?)

しかも、離れようにも前述どおりアリスの足が自分に絡まって動けない。

何なら体が完全に密着しているので今、自分の胸にアリスの顔が押し付けられている。

なので

《少しくらい触ってもバレないからいいんじゃないやね?》

と下心が出てくる。

アーク「……」

無意識なのか定かではないが手がアリスの背中に回っていく。

そして、ちよんとつついてみると

アーク（あ、柔らかい）

戦場で兵士の肉を切り裂き踏みつぶしたりしたが……今、目の前にいる少女はとて暖かくて柔らかく……握り潰せば消えてしまいそうな感触だった。

そして触っていくうちに

《優しく触るくらいならどこ触っても大丈夫でしょ》

つと下心が進化していく。

アーク「(チラッ)」

視界を下に向けると

アリス「すう……すう……」

ぽよん

アリスの呼吸に合わせて上下に動く巨大な胸の脂肪。

そして、今アークの右手が触れ……

バコオオオオオオオオオオオオン!!

アーク「ツ……ぶねえ……あと少しで犯罪するところだった」

アリスの胸に伸びて行った右腕を思いっきり握りしめ顔面パンチした。

アーク「ふう……こんな戦いも知らずに殺すという怖さも知らない  
純粋な女の子を汚すなんて……修業が足りないな」

自分の懐からMk. 22を取り出し

アーク「お休み、俺」

パシユ

自分に銃口を向け引き金を引くと死ぬようにアークは眠っていった。

アリス「アーク……」

その夜、アリスは不思議な夢を見た

アリス「どこよ……ここ」  
アリスは未だ炎が燃え上がっている焼け野原にいた  
だが、それにただの焼け野原ではない  
アリス「……クロエ姉さま？ お父様？ お母様？」  
空は暗く月すら見えないほどの黒煙と火の粉  
そして

アリス「……つひ!？」  
無数の死体でできた大地だった。

自分の足元を見れば誰かの腕や足、髪で埋め尽くされていた。  
アリス「なんで……こんなことに……」  
するとどこからか

ザク……ザク……

何かを掘っている音が聞こえてきた。

恐らくこの住民であろうか？

音が聞こえてくるほうに歩いていくと

アリス「アーク？」

そこには穴を掘っている青年がいた。

赤々しく燃え上がる焼け野原の中で輝く雪のような髪をしている。

だが、なぜかはわからないがその青年が自分の使い魔であると直感  
で判明した。

アリス「どうしたのアーク……」

そんなアークと思わしき青年だが泣いていた。

しかも穴を掘っては死体を埋め、また掘つてを繰り返している。

そう、彼は墓を作っていた……それも無数に

アリス「これって……夢？」

できれば夢で逢ってほしい

だがそんな時だった

ザシユウウウウ!!

アーク? 『ごふ!?!』

アリス「なに!?!」

突如としてアークと思わしき青年の体から大量の棘が出現した。

青年は体に無数の棘を出され血を吐きながらゆっくりと倒れて行った。

アリス「アーク!?! アーク!?!」

血を出しながら倒れていく自分の使い魔に走っていかうとした瞬間

ごぼお!!

アリス「足が!?!」

アリスのいた地面だけ沈み始めた。

足から太ももまで沈んでいき、とうとう肩まで浸かった。

アリス「アーク!?! アーク!?!」

血が滝のように流していく使い魔の手を握ろうするが手は虚しく空を切る。

だが、最後まで見えたのは

串刺しになった使い魔に近づきアークの首を絞めつける子供がいた

『返してもらおうよ? 僕の 』

そこで夢は終わった。

翌朝

ちゅんちゅん

アーク「んあ？ 朝か？」

どうやら眠れたようだ

……最初から使っておけばよかったな「麻醉銃睡眠法」

アーク「……また、アリスの部屋で寝てしまったか」

そういえば昨夜は……やめよう顔が熱くなってくる。

アーク「ま、いいか。確か、今日は学園のある日だったな」

日課となつているアリスを起こす。

アーク「おい、アリス？ 今日は学園のある日だろ？」

アリス「ん……ん……アーク？」

アーク「おう、おはようアリス（むぎゆ）……おん？」

アリスを起こしたが……急に抱きしめられた。

アーク「ど、どうしたんだ？ アリス？」

アリス「……よかった生きてる」

アーク「お、おう？」

なんだ急に？

アーク「寝ぼけてんのか？」

アリス「……へんな夢を見たのよ」

アーク「……どんな？」

アリス「アークが死んじゃう夢」

アーク「不吉すぎるだろ!」

てか、俺が死ぬって……逆に俺を殺した奴ってどんだけの実力者だ

よ。

アーク「はあ……とにかく起きろ今日は学園があるんだろ？ 早く

着替えていくぞ」

アリス「……」

アーク「……アリス？」

早く主人に着替えるよう促そうとしたが

アーク「なんだ？ 俺の顔に何かついてるのか？」

アリスが俺に抱き着いたままじっと俺の顔を見てくる。

アリス「……綺麗」

アーク「綺麗？何がだ？」

俺の顔つて雑魚サイボーグのフェイスシールドとハゲた頭しかないぞ？

アリス「あ、いや!! な、何でもないわ!! それ、それより早く……ってそれよりアーク？なんで私のベッドにいるのよ？」

アーク「え、なんでってアリスが昨日の夜に俺にキス……ってか覚えてないのか？」

アリス「全く？私、昨日のパーティーにさんかさんかしたのは覚えてるけどワインを飲んでからは覚えてないわ？」

アーク「あ、何にも覚えてないんですね」

アリス「何かあったの？」

アーク「……いや、何にもなかったよ……うん、本当に」

今ここでキスしたとか言ったら何をしでかすのかわからんから言わない。

アーク「とにかく、俺は先に出て準備しておくぞ」

今更だけど、俺つてスーツのまま寝てたわ。

一旦帰って着替ええないとな。

アリスのベッドから出て立ち上がろうとした……が

ガクツ!!

アーク「おわ!!」

立ち上がった瞬間、足から崩れ落ちてしまった。

アリス「ちよつと!? アーク!? 大丈夫!!」

アーク「いつてえ……なんで、足から？」

どういうわけかいつもより体が重い

いや、別に太つたとかではなく……いつもはサイボーグの力もあり雲のように軽いはずなのだ。

アーク「いてて……怠けたのか？ん？なんだこれ？」

起き上がろうとしたが視界に白い糸が垂れてきた。

だが、その糸は市販で見る白糸ではなく……色素がない糸だった。



何だろうと思って引っ張ってみると

ピリッ

アーク「痛!?!」

頭皮に痛みが走った

どういうわけだ? これって髪の毛か?

だが、なんで俺の頭から痛みが?

アーク「どういう……」

しかも、引っ張った際に見えた右手だが健康的に見える人間のような手だった。

そして、近くにあった鏡を見ると

アーク「俺……人間に……戻ってる?」

鏡には人間が写っており、自分の手らしき一部を自分の顔に上から触れるとまず暖かく生きている証拠らしい体温を感じ、次に尖った顔の一部の鼻に触れ、そして生暖かい湿った感触をしたもの……口を感じた。

だが、首に

旧式壺号

と書かれていた。

一方、神様がいる世界では

ロリ神「あくあ……呪いが解けちゃった……おかしいな？ 確か、先日ぐらいにヒントをあげたはずなんだけどな？」

ロリ神が望遠鏡片手に下界を覗いていた。

望遠鏡の先にいるのは驚愕している歌う死神<sup>デー</sup>

ロリ神「これは失敗だったなあ……確実に解けるけど地味に時間がかかる奴にしたはずなんだけど……彼ってラツキースケベの呪いでもかかってるの？」

ちなみにアークが人間？に戻るようになる条件はつというと

「両想い（両片思いでも可）の二人がキスしてその後一緒に寝れば呪いが解ける」

というものだった。

ロリ神「つま、いつか……さてと……それじゃ、抗いなさいよ死神さん？ あ、あと……彼の監視は……あの変態でいいか」

## 七十四発目 どゆこと？

アーク「どういことだ？」

今、目の前にある鏡には人間が写っていた。

雪のように白い銀髪……いや、もう白色で白髪に白い肌、夕焼けのより赤い血のような瞳をした人間がそこにいた。

メタルギアのキャラでこんなのをいたっけ？ と思い頭の中で検索してみるが覚えがない。

アーク「……なんか開発したっけ？」

一応、iDROIDで開発ポイントで確認してみるが……開発した痕跡がない

つまり……

アーク「本当に……人間に戻ったのか？」

だが

アーク「……俺の体じゃないんだが？」

そう、俺の前世の体は黒髪黒眼という日本人な姿なのだが……鏡に映っている人間は全くの逆だった。

まず、瞳だが充血でもしてるのかつと言うほど赤く大きく……そして睫毛が長い。

顔も整っており、肌も滑らかだった。

極めつけは髪の毛でシルクのように滑らかで柔らかく、長さも腰までかかっていた……

おまけに腕の毛や足の毛もなく……完全に女子みtainな姿だった。まあ、簡単に言ったら人違いならぬ体違いであった。

アーク「え、なん？ 俺、男の娘になったの？ 嫌なんですけど？」  
だが、なんで急に？

うーんと考えていると

アリス「えつと……アーク……なの？」

アーク「え、ああ？ そうだが？」

アリス「……ちよつと触つてもいい？」

アーク「いいぞ？」

アリス「わあ……アークって前の世界ではこんな姿だったの？」  
アーク「いや、こんな美少女みたいな姿じゃない……言つてはなんだけどもっとブスかった」

アリスが俺の体をぺたぺた触っている間に状況を整理する。

アーク（えっと……確か、昨日寝るときはサイボーグだったはず……なら、変わったのは夜中にうちだ……だけどここの姿になる条件ってなんだ？）

昨日はキス……いや、まさかキスしただけでこの姿になるって……そんなガバガバ？セキユリテイなわけないだろ。

そして、再び鏡を見る。

アーク（自分で言うのは……なんかナルシストっぽいけど……可愛いな俺の顔）

ちよっと見惚れていると

アーク（ん？ 待った……）

鏡を見て少し気になるものを見つけた。

アーク（旧式壺号？）

首にあざのように何かが書かれていた。

アーク（……やっぱ、メタルギアで出たキャラなのか？ だが、こんな姿のキャラなんて……モブキャラ？ でも、いたっけ？）

この【旧式壺号】という謎の文字に悩んでいると

アリス「あ、アーク!! そうだった!! 私、学園に行かない!!」

アーク「そうだったな。準備しないとな」

考察は後にしてアリスの身支度を手伝った。

アーク「さてと……この自由時間を使っているいろいろと調べるか」  
アリスを送った後、自分の体について調べることにした。  
ちなみに護衛は城の騎士が担当するらしい。

アーク「まず、基礎体力だな」  
適当な椅子を見つけて持ち上げてみる。

アーク「……重いな」

サイボーグの時は軽々しく持ち上げるが、若干時間がかかったが持ち上げられた。

そのあと、少し走ってみたりしたが

アーク「やっぱ、体が重い」

まあ、ずっとサイボーグの体で生活していたから慣れていないのでいろいろと支障が出たが問題はなかった。

アーク「だが……やっぱ人間の体は良いものだな」

肌をつねれば痛みが走る、太陽に当たれば暖かく感じる、水に触れば冷たさと上げた後の湿った感触……人間の体も捨てた物じゃないな。

しかもこれ、開発ポイントを消費せずに変身できる（サイボーグに戻る際は最後になった姿で無料で変身できる）

そして、嬉しいものがもう一つ

ぐううう……

アーク「あ、そういやずっとサイボーグで口がなかったから食事もしてないんだっけ」

口ができたおかげか内臓もでき、胃が「おなかすいた」つと訴えてくる。

アーク「……この空腹にも感謝だな」

まだ、時間的にも朝なので軽めの朝食を作ることにした。

皆も一緒に作ってみよう!! (今夏は二種類出ます)

「豆腐とチーズの奴」(正式名称がわからん)

材料 (一人分)

- ・ 豆乳 (大匙五杯分)
- ・ 豆腐 (ソフトがいい)
- ・ スライスチーズ (二枚)
- ・ 白だし (大匙二杯分)

1, まず、レンジでチンしてもいい皿に豆腐を入れ豆乳と白だしを入れます

2, その上にスライスチーズを乗せます

3, レンジで600Wで4分チンします

4, 出来たら完成!! (作者的にさらにその上に黒コシヨウを乗せるのがおすすめ)

「納豆サラダ」

材料 (1〜4人分)

・ 納豆 一パック (ひきわりではないほう)

・ 千切りキャベツ (スーパーで売ってある袋に入っているのを  
うのが作者的にはちょうどいい)

・ マヨネーズ (お好きだけ)

1, ボウルに千切りキャベツと納豆と付属の汁を入れます

2 マヨネーズを好きなだけ入れます

3, 混ぜます

4, 全体的に混ぜたら完成です

以前のポイント 2800

生産

豆乳 1

豆腐 1

スライスチーズ 1

白だし 1

納豆 1

千切りキャベツ 1

マヨネーズ 1

合計ポイント 2792

アーク「ほい、完成つと」

出来上がったのは俺が学生時代にお世話になった二つの料理だ。

(作者も作って食べてみましたが、本当においしいのでぜひ読者諸君も作って食べてみてほしい)

アーク「それじゃ、いただきます」

パクツ

アーク「……うまい!!」

豆腐のを食べれば舌の上で味が染み込んだ豆腐と濃厚なチーズが混ざり合った。

本当においしいなこれ(作者；いや、マジでうまい)

アーク「やっぱ……人間って偉大だわ」

さて、食事も終わったし……終わったし……終わったし……あれ？

アーク「俺ってちゃんとした休みなくね？」

何すればいいんだ？

実を言うとアーク

この世界に転生してから順調に生活していたが……何しろスタートがD-walkerで次にピューパでサイボーグになつや。

しかも、その間もアリスを魔人から助けたり勇者を監視、殺害して戦争に勝利と多忙すぎる生活だったので……

休日はどう過ごせばいいのかわからなかった

使い魔業はまさしくブラックである。

アーク「えつと……銃の点検も終わったよな？ 食器を洗う……終わってるわ。洗濯物もさつき干したし……やることなくね？」

寝ようにもアリスと一緒に寝たら眠気がよかったので今のところは大丈夫だ。

アーク「……特に用事もないけどVR空間にでも行こうかな？」

……あ、そういえばマザーベースのスタッフとミラーをぶっ飛ばさないと」

てなわけで久しぶりにVR空間に転移した。

アーク「さて、到着……だ？」

行き先をマザーベースに選び、あとは待つだけだったのだが……なぜか海の上にあるプラットフォームではなく森の中にいた。

アーク「ココドコナン？」

だが、これは見たことがある

確かここはMGS3にあったスネークがザ・ボスの馬（アンダルシアンのこと）に会って……そして、スニーキングスーツを着たザ・ボスと会って……

アーク「え、ザ・ボス？」

ちよいまち……つまりここにザ・ボスがいるってこと？

その予感は当たったようだ





こうとしたが、撃つ前に接近されMk. 22を掴まれ手首ごとまげて  
転ばされた。

?? 「ふむ……まだまだ若造には負けんな」

アーク「な、なんであなたがここに居るんですか……」

C.I.A.長官?」

長官「ふむ、ようやくわかったのかね」

アーク「いや、本当に何でここに居るんですか」

多分、読者兼プレイヤーは覚えているのは少ないと思うが目の前に  
いるのはMGS3のラストでジャックに握手を拒否されたがPWの  
ラストで理由を聞いて納得して報復攻撃を反対した人物だ。

長官「いや、なに……カズヒグラサンをかけた副官が

ミラー『(なんかアークに殺されそうな予感がしたから)ちよつと手  
合わせしてきたくれませんか!! (その間逃げるので)』

つと言ってたのでな」

あんの、金髪野郎……今度会ったら覚えてろよ。

アーク「でも、いきなり投げ飛ばさないでくれませんか? 奇襲に  
何時でも対処とかではなく身分的に投げ飛ばせないの。あと、おっ  
さんの割には動けるんですね」

いててつと起き上がりながら言う。

長官「そうだろう? 私も若いころのビックボスを倒したことが

あつたからな!!」

アーク「いや、それシークレットシアターででしょう?」

長官「ま、それよりここで話すのは何だから別の場所で話そうではないか」

そういわれ、ついていった。

草むらを掻き分け、たまに崖から降りたりしてたどり着いたのは

……

カチャ

長官「ついたぞ」

アーク「……突っ込みどころしかないんですが」

まず、謎か森の中に木製のドアがあつて中に入るとMGS3のラストで出たアメリカ大統領の部屋があつて……その中に

ゼロ少佐「お、来たのかね」

アーク「なんでゼロ少佐もいるんですか」

部屋の真ん中で紅茶を入れているゼロ少佐がいた。

ゼロ少佐「なんでって……悪いのかね?」

アーク「いえ、別に悪くないんですが……はあ、まあいいか……」

ゼロ少佐「せっかくだから紅茶を一杯飲んでいかないかね?」

アーク「……イタダキマス」

思考するのをやめて大人しく紅茶をいただくことにした。

最近、忙しかったからいいよね……

コポコポ……

ゼロ少佐「どうぞ」

アーク「いただきます」

目の前に花のような香りを放つ紅茶が置かれ、コクリと飲む

口の中で花畑が広がり、喉を通して食道に流れていく。

アーク「あ、おいしい」

ゼロ少佐「そりゃあ、午後〇紅茶だからな」

アーク「え、これ午〇の紅茶なんですか!？」

ゼロ少佐「……ちよつと淹れる時間がなかったんでな」

何やつとんねん英国人。

アーク「ま、おいしいからいいか……はあ、落ち着く」

ゼロ少佐「ところで話は変わるが……私が事前に聞いていた姿とは違うのだな」

アーク「急ですね……って、うわ、この世界でもこの姿が反映されるのかよ」

飲んでいた紅茶に映っていた顔を見ると現実世界で見た俺（体は違うが）が写っていた。

長官「……どう見ても女性だよな」

アーク「ですよ？　はあ、なんでこの姿なんだよ……あ、ところでこの姿なのですが……皆さんって見たことがありますか？　この姿って俺の本当の姿じゃないんですよ」

ゼロ少佐「見たことないなあ？」

長官「私もだ」

ダメか……

うくん？　この人たちでさえわからないなら誰なんだ？

アーク「この首に書かれている”旧式壺号”もわかりませんし」

ゼロ少佐「私経由でマザーベースのスタッフに頼んでおこうか？」

アーク「あ、ありがとうございます。ついでにミラーに今度会ったらKO☆RO☆SUって言つといてください」

ゼロ少佐「はっはっは!!　最近の若者は元気でいいものだ!!」

長官「ああ、ビックボスとその子供<sup>ソリッド</sup>たちはあの後いい世界を作ったものだな」

ゼロ少佐「そうですね……彼（スネークのこと）は親友でしたがスネークイーター作戦の後はザ・ボスの意思の解釈違いで仲は引き裂かれて、彼とは親しく話す機会なんてなかったんでね……」

アーク「あ、そうか……そのあとスカルフェイスに毒盛られて、最後はビックボスに延命装置を切られて……」

ゼロ少佐「そうだったなあ……最後くらいは一回くらいはともに酒を飲み分かち合いたかったなあ……」

アーク「なら、声をかけに行けば……」

ゼロ少佐「いや、声をかけずらいのでな……」

さて、そのあととはというゼロ少佐に詳しい紅茶の入れ方とか長官にCIAエージェント時代に学んだ世界格好の郷土料理の作り方を教えてくれた。

## 七十五発目 皆の反応

アーク「それでは、また」

ゼロ少佐「ああ、君の話は結構面白かったぞ」

ゼロ少佐とCAI長官に例を言った後、俺は現実世界に戻った。結局わからずじまいだったなあ……この体についての。

アーク「ま、人間に戻れないよりかはマシだしな……さてと今の時間はない？」

iDROIDを取り出し時刻を確認すると……大体夕方か結構話したな。

そろそろアリスのお迎えに行かないとな。

ここ最近、行ってないからな（任務やなんやらで行ける機会が減ったから）

アーク「……あ、ついでに学園の図書館なら何かわかるかな？」  
頭の中で計画を立てつつスーツに着替える

今更だけど、なんで俺、高校のジャージを着てんだ？

アーク「ま、いいか（いいのかい）……一応、THIRD―6を持つていっとくか」

掌に最早愛銃となったTHIRD―6を召喚するが

アーク「……重」

サイボーグではなく人間になったのでずっしりと重みがくる。

アーク「これは後で訓練が必要だな」

今まで慣れていた体から脆い人間に戻ったので任務に支障が出る可能性があるので燻煙することを決め、アリスの迎えに行った。

アーク「……なんでなんだ」  
久しぶりに見た学園の廊下を通過して図書館に向かっていった。  
普段は少しづつオレンジ色になっていく廊下には授業を終えせた生徒たちが放課後どうするかを話している。  
……はずなんだが

ヒソヒソ

めっちゃ俺を見てくる。

「ねえ、あの子誰かな？」

「すごい美人だね!!」

「バサビイから来た人間かな？」

「転校生かな!？」

周りから美人やらなんやと言われてるが……ぶっちゃけ実感が  
ない。

第一、顔も一般人が急に美少女みたいな姿に変わってもそんなに需  
要がないし前世ではそんなに注目される経験なんてないから変な気  
分である。

あと、

「おい、話しかけてこいって！」

「あんな、美少女……めったに見かけないぞ!!」

いや、聞こえてるって

後、俺は男だ。

アーク「困ったもんだな」

そんなことを思いつつも図書館に歩を進めていき到着した。

カチャ

アーク「おい、リン？ いるか？」

久しぶりに図書館に来たが……変わらん。

埃臭いし、かび臭い……てか換気してんのかこれ？

アーク「リン？ いないのか？」

すると

リン「うう……誰よ読んだのは」

受付カウンターから眠たそうにリンが出てきた。

アーク「よ、リン。悪いけど歴史の本ってないか？ できればめっ

ちや詳しく書いている奴」

リン「……あんた誰？」

アーク「……え」

なんか怪訝そうな顔で見てるリン

あ、そうか。

そういえばこの姿を見せるのは初めてだからか

アーク「俺だ、アークだ」

リン「へー、うちの助手と同じ名前なんだね？ 君、どこの国の人

間？」

アーク「いや、その助手なんだが」

リン「……え？」

何言ってるんだコイツ？ みたいな目で見てくるが

リン「え、なら助手の出すカエル目のような奴光を解体調査してもい

い？ もし、本当に助手なら……」

アーク「ぎっけんな、ダメに決まってるだろ」

リン「え、本当に助手？」

アーク「マジだ。俺は人間（？）に戻れたんだ」

リン「う、うそでしょ？ じよ、



助手に……髪が生えてる……」

アーク「そうだ……違うそれじゃない」

人間にっと思つたらハゲのことを言われて否定した。

あれはボディが悪いんだって。

リン「でも……これが助手の人間の姿……」

ペタペタと体中を触りまくるが本題に入らせてもらおう。

アーク「なあ、リン？ 一ついいか？」

リン「なに？」

アーク「本当のことを言うと……この体、俺の本当の体じゃないんだ……んで、この首に書かれている奴なんだが……」

リン「あざ？」

アーク「これ、俺の世界では「旧式壺号」って書かれているんだ……なんかさ、人間に似た魔物とか過去にこんな事例があったりしないか？」

リン「……ごめん、私はこの図書館の本は大体知っているけど……そんな美少女なんて知らないね」

アーク「……そうかあ……あと、俺は男だ」

リン「第一、その体って本当に人間のなの？」

アーク「まあ、そうじゃないかなあ？ 感覚も人間っぽいし」

リン「私知っている知識の中では……ホムンクルス出が来一番怪しい撮ってないけど」

アーク「あくホムンクルスねえ」

ちなみにホムンクルスとは人工的に作られた生命体で人っぽい形をしているが鼻が変なところにあつたりと形は人間で姿は化け物の魔物だ。

主に魔族の魔法使いが作っているが知性もないので指示が出せず適当に捨てている（一般の魔法使いも作れないことはないが人間にする事態が難しく人生で20体できるかぐらいの確率である）

あと、どういうわけかすごく力強いらしい。

リン「でも、体に違和感はないんでしょ？」

アーク「おう」

リン「どうやって戻ったの？」

アーク「さ、さあ？」

リン「……これはお手上げね」

アーク「そうか……悪いな時間をとってしまったて」

リン「……あ、ちよつと待って助手。一つだけ確認したいことがあるの」

アーク「ん？ なんだ？」

リン「ちよつとそこに立って」

なぜかリンの目の前で立たされる。

すると、リンはしゃがみ込み俺のズボンを下す……

アーク「おい、ちよとマテ……なにしてんねん」

リン「何って助手の下半身を確認しよう」と

アーク「なぜ確認をする」

リン「ホムンクルスって人工的に作られたから生殖器がないらしいから助手の下半身を見て人間か確認する。ついでに助手の大きさも確認したい」

アーク「見せんわ馬鹿野郎!?!」

リンが下方向に力を加えるがアークは上方向に力を加えてズボンが落ちないように抗っている。

はたから見れば

「図書館で下半身を露出させようとする男性とそれを止める女性」

みたいに見えるだろう。

リン「一瞬でいいから!!」

アーク「ダメに決まってるだろう!?!」

そのあとというところから全力で抗いその場から逃げ出した。

アーク「やばいってそのエルフ……」  
リンから逃げられた後、俺はアリスのいる教室に到着した。  
アーク「アリスー？ お迎えに来たぞー？」  
ガラガラつと扉を開けた瞬間

ドンツ

クロエ「きゃー！」  
アーク「危ない!？」

開けた瞬間に向こう側にいた生徒にぶつかってしまった。  
俺はヴェノムのおかげで下半身ががっちりしているがぶつかった生徒は吹き飛ばされ倒れそうになったがギリギリのところまで背中に手が回りキヤツチに成功した。

アーク「大丈夫か？」

クロエ「え、ええ。私も前を……ひやう!？」

クロエとアークの顔との距離は近く目線と目線がぶつかった瞬間、クロエの顔は赤くなった。

アーク「ど、どうした!？」

クロエ「い、いえ!! あ、ありがとうございます!! わ、私の名前はクロエ・フォン・アーハムと言います!! い、以後お見知りおきを!!」

アーク「お、おう?」

なんか急に自己紹介されたんだが？

クロエ「あ、貴方様はこの国のお方でしょうか？ 学園長の部屋

なら私がご案内しますわ!!」

アーク「……ごめん、クロエ。なんか盛り上がってるところ悪いがアークだ」

クロエ「アークさんって言うんですね!! 奇遇ですね!! 私の妹の使い魔も同じ名前」

アーク「いや、その使い魔で主人のアリスを迎えに来たアークなんだが」

クロエ「え? アリスの? え? え?」

「どういうことだ目を点にして俺の体を上から下に往復する。」

クロエ「え? アーク……なのですか?」

アーク「そうだが? 歌う死神ことアークだ」

クロエ「……ちよつと待っててくださいいな」

するとクロエはパタパタとアリスの元に向かって行った。

クロエ「ちよつとアリス、来なさい」

アリス「な、なんでするかクロエお姉さま!」

クロエ「ちよつと裁判よ」

アーク「……なにやってんだあいつら?」

何やらクロエがアリスを捕まえその周りに女子生徒が囲んでいる。

別にいじめではないようなので放っておく。

アーク「こういう時こそ通知さんがいてくれたらなあ」

なぜか反応がない相棒的存在に疑問に思いつつも待っていると

アリス「お、お待たせアーク」

アーク「おう、何してたんだ?」

アリス「なんか「アークがなぜ美人になっているのか」とか「昨日の夜、何をしたのか」とか言われたんだけど……ねえ、アーク? 私、昨日の夜って……何かした?」

アーク「……ナニモシテナイヨ」

アリス「そう? ま、それより早く帰りましょ? あと、スイーツ!!」

アーク「はいはい……手洗いはしろよ?」

アリス「はい!!」

クロエ「ちよ、アリスにアーク!! 私も行きますから残しておいてくださいね!!」

アーク「なら、早く来い。今度は俺も口ができたから早く来ないと俺が食っちまうぞ?」

クロエが慌てて用意をして向かってくる中、俺たちは家に向かって行った。

一方そのころ

アーハム帝国から地理的に割と離れたとある国

ここはシュレイド王国(モンハンではない)、アーハム帝国とミール聖教国の間にある国。

国の周りは山岳地帯で囲まれており自然の砦のおかげでアーハム帝国ほどではないが栄華を誇っていた……が

「げほ……な、なんていう強さだ……」

国の象徴とも言われている城が……阿鼻叫喚の地獄絵図になっていた。

綺麗な窓ガラスは破壊され、床は赤い液体で描かれていた絵も潰されていた。

発端はあまりにも突然だった。

自分は今は亡国のバサビイ共和国から新しく生まれたバサビイ民主主義国との貿易や条約をどうするか会議して逃亡したバサビイ共和国残党の捜索や監視と警備を今後決めることになり会議室から出て家に帰ろうと廊下を歩いてた時だった

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!

突然、王室から天を突くような大爆発が聞こえ急いで向かった。  
扉を開けると

王の首を挽ぎ取り、それを眺めている銀髪の女性  
だった。

それを見た近衛兵はすぐさま剣を抜き取り王の仇を取ろうと謎の女に襲い掛かるが

ニゴウ「……処分」

だあ、襲い掛かれているのに女性は避けようともせずただ立ち尽くし何かを呟いた……その瞬間  
女の周りに黒い棒が出現し、先端をこちらに向け……

ズドドドドドドドドド!!

黒い棒の先端から光が見えた瞬間、周りにいた兵士は命を散らされ死んでいった。

一体何が起きたのかと考えているうちにそれを考えていた兵士も死んでいった。

そこからはと言うと作業みたいな感じだった。

近づこうにも「数千も黒い棒」から放たれる謎の光によって気づかないうちに殺されて行った。

次々と増援で兵士たちが来るが全員殺されたいき、さらには使い魔のドラゴンまで投入した。

さが幸運にもドラゴンの皮膚は黒い棒から出る光に耐えられるらし

く、はじめてこちらの勝算が生まれた……が

ニゴウ「……M-47、召喚」

それを見た女は何かを呟くと女の周りに音もなく先ほどの黒い棒より大きな某が出現し

ニゴウ「ロツクオン……fire」

バシユウウウウウウウウウウウウ!!

大きいほうの黒い棒から放たれた樽みたいな物体がドラゴンに向かって飛んでいき

ドガアアアアアアアアアア!!

「ドラゴンは爆発四散した。」

その時にドラゴンの肉やあたる骨があたりに飛んでいき、私も腹部に牙が刺さり血を流し……今に至る。

ニゴウ「ミツシヨンコンプリート、マスターの元に帰還します」

「(ほ……)ほ……マテ……き、貴様は……誰……なんだ？」

ニゴウ「……私の名前は

歌う死神 アークです」

この日、国中……そして世界の国のトップが大騒ぎした。

まずは「城にいた者がほとんどが殺された虐殺事件」であった。

奇跡的に一名助かったが王は死んでしまった……そしてもう一つ

は

「歌う死神が再び虐殺を始めた」 「死・神・は・も・う・一・体・い・る」



## 七十六発目 実験

アークが人間(?)に戻った日から二日が経過した。

昨日は一旦城に向かって皇帝に謁見して事情を説明して何か知らないかと聞いたが……成果はなかった。

アレクサンダー「……アークよ、一応聞いてみるが……お前は男か？」

アーク「男です」

エリザベス「え……せつかくドレスをこしらえようとしたのに」

アーク「いや、着ませんからね!」

なんか皇帝たちに女性と間違えられたが否定した。

そして、今日……

アーク「すぐく久しぶりに教室に行くな」

アリス「あら、確かにそうね」

本当に久しぶり(○)に教室に行く(本来、使い魔は主人と一緒に教室にいるのだがアークは任務やらで行けてないので)

アーク「だが……なんか視線を感じるな」

アリスと一緒に廊下歩いているんだが……チラチラと視線を感じる。

アーク「なあ、アリス？ 俺の顔に何かついてる？」

アリス「いえ、特に何も……むう」

ぶにゆう

アーク「痛!? ほっぺ引っ張るな!」

アリスはアークの顔を見るが

シルクのように滑らかな髪に女性も羨ましがりそうな白い肌

そして、初めて見た時に「綺麗」っと言ってしまったルビーのような瞳。

思わず見惚れて嫉妬してしまいアークの頬を引っ張った。

アリス「べつつにー? あと、アーク? あなた、今日から私以外

の女子と話すのは禁止ね」

アーク「なんでさ!？」

そんな会話しつつも教室につきアリスは自分の席へアークはその後ろに立った。

アーク「でも、やっぱりみんな見るなあ……」

周りからは

「ねえねえ! 誰だろうなああの女性?」

「アリス様の新しい護衛じゃないか?」

「あれ? なら、アークはどうした?」

「さあ? まだどこかにいるんじゃない?」

つと聞こえてくる。

俺ってそんなに女に見えるかな?

アーク「つてかこの長い髪……邪魔だな」

そんなに女に見えるのかと自分の顔を触っていると自分の髪が触れた。

髪の長さも前世みたいな短めではなく腰まで長く……そして邪魔だった。

アーク「……髪、切ろうかな」

アリス「それはダメ(即答)」

アーク「なんでや」

アリス「だって、もったいないわよ。こんな綺麗な髪を切っちゃうなんて? 伸ばしなさいよ」

アーク「でも、蒸れるんだが」

アリス「我慢して(強制)、邪魔だったら私の髪留め貸すわよ?」

アーク「え……なんかヤダなんだが」

アリス「いいから……ほら、来なさい」

なぜかアリスに切るのはダメだと言われ結局、アリスに髪を止めてもらうことになった……が

ガラガラ

クロエ「皆さん、ごきげんよう」

「おはようございます！ クロエ様!!」

「おはようございます!!」

クロエ「ええ、おはよう♪ ところで今日はアークはいるかしら？」  
「いえ、見てませんね？」

「あ、でもアリス様と一緒に女性が来ましたよ」

ちなみにアークを知った生徒は二日前の放課後にいた生徒だけで早く帰ってしまった生徒は知らないのである。

クロエ「……何してるのよアリス」

生徒に謎の女性が来ていると言われたクロエは視線を向けるとそこには

アーク「……なあ、アリス……まだ？」

アリス「……おかしいわね……なんで結べないのかしら」

アークの後ろにいるアリスが髪を結ぼうとしているが……そういうわけか綺麗に結べず苦戦していた。

クロエ「はあ……何してるのよアリス」

アリス「あ、クロ姉さま。おはようございます。実はアークの髪を結ぼうとしているんですが……」

クロエ「はあ……貸してみなさい」

アーク「あ、クロエ。おはよう」

クロエ「おはようアーク♪ って……アーク、あなたもしかして昨日の夜寝るとき髪を手入れせず寝たわね」

アーク「……いや、俺男だし……知らんし」

クロエ「ブラシかけてあげるから座って」

アーク「えー……」

クロエ「何よ？ 不満？」

アーク「男なのにブラシって……」

クロエ「我慢しなさい……それにしても……ほんと……女の敵わねえ……」

アーク「何がだ？」

クロエ「さあね……最後にこうしてっ……はい、完成」

アーク「おお……」

後頭部を触ると先ほどまでぼさぼさになってストレートに伸びていた髪が綺麗になって枝毛もなく一本のポニーテールになっていた。

アーク「これは楽だわ……ありがとうクロエ」

クロエ「うふふ♪ その代わり今度のおやつは私だけ多めにしてくださいまし?」

アーク「あいよ」

髪が邪魔せず楽になったのでアリスのところに帰るが

アリス「……むうー」

アーク「どうしたんだアリス?」

アリス「……(ぺちぺち)」

帰るとそこには頬を膨らませた主人がいて、問いただしてみたが回答がなくその代わりにぺちぺちと俺を叩いてきた。

アリス「……羨ましい」

アーク「え、何が?」

そりやアリスも嫉妬はする。

周りの生徒も羨ましそうに見てくる。

まあ、「美女が美人の髪を解いて結んでいる」ので周り皆、「…美しい」やら「……百合に挟まりたい」とかいう罪な男もいれば「……てえてえ」とかいうこの世界には存在しないはずの言葉を言う生徒がいたほどだ。

ガラガラ

シーベルト「皆さん、おはようございます」

「『おはようございます!!』」

シーベルト「遅刻は……いませんね。ではホームルームを始めますが……その前に皆さんはアリス様の後方にいる人物について行っておきましょう。では自己紹介をお願いします」

アーク「え、また? えつと……アークだ。あ、そっくりさんではなくマジの使い魔の方のアークだ」

ザワザワ……

正体を暴露した瞬間、ざわつき始めた。

シーベルト「……皆さんは困惑しますよね……まあ、先生もびっくりしましたよ。朝、急にアーク君が職員室に来て人間になったって告白するしどう見ても女性だしで」

アーク「だから俺は男……はあ……先生から時間をくれたので質問があつたら言っつていいぞ」

「はい!! アークって前の世界での性別って何ですか!!」

アーク「だから男だって言っつてんだろ(怒)」

「……前の世界ではモテてたか?」

アーク「いや、まったく……なんならこの体は俺の本当の体じゃないし」

「肉体的性別は!!」

アーク「よし、そろそろブチ止めすぞてめえら」

「バストサイズ!!」

アーク「一般女性よりないわ」

なぜかみんなから性別についての質問が多い……てかなんでバストサイズを教えなきゃいかんのだ。

Aカップに決まっつてんだろ畜生。

……前世の世界で学校でF○t eのアストルフオミたいな男の娘になりたいとかいう輩がいたが実際なつてみると不便すぎる

さつきもそうだけどみんなから女子扱いされるし視線が痛いのだ。

やっぱ自分の本来の体のほうが安心するわ。

アーク「次でラストにすんぞー」

色々と質問を受けたが時間が押しているので次で終わりにすることにした。

「何聞くる?」

「バストつと言っつたら次はヒップじゃね!!」

「やめときなよ……それ言っつたら今度こそ殺されるぞ。ここは経験人

数で……」

おい、誰じゃヒップ教えろ言った奴。

男の娘のケツなんか見て喜ぶ奴がいるわけないだろ。作者「私は喜びます」

経験人数つって俺は彼女いないって言つたら糞が。

最後に何を聞かみんなで相談している中……ある、一人の生徒が急に聞いてきた。

「質問です!! 前の世界に彼女つていましたか!!」

「……え?」

アーク「……か、彼女?」

突然、女子生徒の一人が爆弾を投下した瞬間、水を打ったように静かになった。

なんで急に?

ここで暴露しても何のメリットもないぞ。

せいぜい、俺と付き合えるかどうかくらいしかないぞ。

「いや、さすがに失礼でしょ」

「そうよ、たとえば料理が上手で家事全般ができる万能嫁みみたいな人に彼女は……」

アーク「いないぞ」

「え、なんて?」

アーク「だからいないって」

うん、本当にだって

前世で告つたらフラれたし……これで少しは静かになれる……

ザワザワ……

いや、なんでざわつく

「え、あんな素晴らしい人材に彼女が……いない……だど」

「まじで? 勿体無くね?」

「これは……始まるね……」

「……ええ……〇〇〇争奪戦が」

なんかこそそこそと話しているが……今はサイボーグではないので聞こえなかった。

アーク「……はい、質問時間は終了だ」

シーベルト「ありがとう、アーク君。それじゃ、皆さん、一時間目は魔法の実技があるのでグラウンドに集合してください!!」

あ、一時間目は実技か……アリスがすごく嫌そうな顔をしている。こうして俺らは朝のホームルームが終わった後、グラウンドに集合した。

くグラウンドく

ここに来るのも懐かしいな。

グラウンドに集合した俺たちは入学したときにやった的に向かって攻撃魔法を打ち込むつというものだった。

「炎の聖霊よ今こそ力を見せたまえ」 「ファイヤーボール」 “!!”

アーク「おく……みんな、最初のころより成長しているな」

後ろのほうで見ているがみんな的のほぼ真ん中に命中し破壊していた。

一方皇族シスターズはとというと

アリス「炎の聖霊よ今こそ力を見せたまえ」 「ファイヤーボール」 “!!”

パチ……

アリス「……なんで火の粉しかででなないのよお」  
やっぱりうちの主人だわ。

本来、ファイヤーボールは某配管工の火球を複数だして攻撃する魔法なのだがアリスが使うと火打石で出た火種サイズのしか出ない。

昔はここで罵倒するものがいたが今じやいない

まあ、

大体の理由が俺がいるからなんだろうと思うがが。

逆にクロエはというと

クロエ「では、私の全力行きますわよ!!」 “地獄の炎、辺獄の虚無  
よ、今こそ一つになりて無に還さん「ヘル・ノヴァ」”!!」

ゴゴゴゴオオオオオオオオオオ!!

アーク「熱!?!」

クロエが唱えたのは炎魔法の最上位魔法で唱えた瞬間、的は火柱に  
包まれ燃え盛った。

そして……消えるころには灰になっていた。

アーク「クロエは成長しているな……しかも、コントロールもでき  
ている」

炎が燃え移るほどの熱さだがクロエは完全にコントロールして  
るので的だけ燃えて付近は燃やさなかった。

シーベルト「おお! クロエ様!! 前回より操作が上手になってま  
すぞ!!」

クロエ「ふふふふ♪ 皇族として当然ですわ」

ドヤ顔をするクロエ

アーク「すごいなクロエ」

クロエ「うふふ♪ アークも頑張っているんだから努力したのです  
よ?」

アーク「そうか……よくがんばったな」

クロエ「そのかわりい♪ 頭などでなんでしてほしい……なんちゃつ  
て……」



アーク「おう、いいぞ」  
クロエ「え？」

なでなで

クロエ「ふえ!!？」

アーク「ん？ どした？」

クロエ「い、いえ!! 何でもありませんわ!!」

誉めようとクロエの頭に近づき撫でたがクロエは顔を赤くしてそそくさと離れていった。

……誉めようと撫でたが……やっぱ違うか

アリス「……………」

アーク「なんだアリス？」

アリス「……私には？」

アーク「え、してほしいの？」

アリス「……………あ、ち、違うからね!! クロエ姉さまだけ撫でてもらって私だけ撫でてもらってないから不公平に感じただけよ!!」

アーク「まあ、減るもんじゃないし……………」

なぜかアリスに不公平だと言われ結局頭をなでることになった。

なでなで

アリス「えへへ♡」

……見た感じまんざらでもないようだ。

アーク「……………もういいか」

アリス「んく♡ ふう、いいわよ」

まるで猫みたいにすりすりする。

きゅん

アーク（ん？ キュン？）

あと、どういうわけかアリスの顔を見てみると心臓らへんが苦しい別に頭撫でるのが嫌なわけではないが……彼女の笑顔がもつと見たいと思ってしまう。

アーク「……そういえば思っただが」

アリス「どうしたの？」

アーク「俺って魔法使えるのかな？」

アリス「あ、それは気になるわね」

そう、俺は人間(?)に戻ったのだから魔法が使える可能性がある。てか使えたい。マジで本家アークみたいな指からビームみたいなのをしてみたい。

アーク「なあ、先生？俺も魔法が使えるかやってみていいか？」

シーベルト「いいですよ!!でもアーク君って魔法のやり方ってわかるんですか？」

アーク「え、ただ魔法演唱すれば出てくるもんじゃないの？」

シーベルト「違いますよ!!魔法というのは体内に流れている魔力をコントロールして完全に操作ができたうえにイメージしてその中に(以下略)……なんですよ!!」

アーク「うん、まったくわからん」

シーベルト「でも、物真似程度なら魔法は発動するかもしれないのやってみては？」

アーク「え、でもどうやって魔力とやらを出すんだ？」

シーベルト「なんかあ……言いづらいのですが……こう、魔力を表に出すって感じですかね？アーク君はまだ始めたてなのでまずは魔力を出すところからやってみましょう!!」

アーク「そうか……ちよつとやってみよ」

生徒は先に終わり友達とどうだったのか話している中、アークだけみんなから外れる的に向き合った。

「え、もしかしてアーク……魔法を使う気なの!？」

「おいおい、歌う死神ともいわれている奴が使うなんて……皇族級な  
んじゃ!？」

「おい!・ 衝撃に備えろ!!」

アーク（いやいや……んなやばいもん出さないって……とりあえ  
ず、軽く出してみるか）

目をつむって集中する。

すると、体に何かが流れているを感じる。

アーク（これが……魔力か？ えつと、これを表に出すか……）  
それを外に出すイメージを作りながら右手を出し

アーク「……ブウン!!」ガツチャーン

なんか変な掛け声になってしまったが……うまくいったかな？  
だが……

バサバサバサバサ!!

「な、なんだ!？」

「おい!・ 鳥たちが逃げていくぞ!!」

「ど、どうしたの!？ 私の使い魔がおびえているんだけど!？」

魔力を出した瞬間、木々にいた小鳥たちは一斉に逃げだし、他の  
生徒の使い魔も怖がり出した。

アーク「え、なに?」

なんかか俺が悪いっていう空気になっているんだけど?

シーベルト「どうしたのですか!？ みなさn……っ!？ な、なんで  
体が動かないのですか!?!」

「な、なんで体が動かないの?」

「お、おい……なんか急に寒くなってきたくないか?」



シーベルト「は、はい……まるで死神か魔王が目の前にいるよう……」

え、やば

てかこれってどうやって元に戻るの？

その後、どうやって戻るか聞こうにもみんなが怖がってしまい悪戦苦闘した。

## 七十七発目 そのころ

グラウンドでアークの魔法実験をした後、に生徒は全員教室に戻って授業を受け休み時間になり生徒のほとんどが外に出ているのだが

アリス「くくく」

アーク「……ご機嫌だね」

アリス「そりやそうよ!! だって私と同じだもん!!」

なぜ、アリスがこのように上機嫌なのかというと……グラウンドでアークが禍々しい魔力を放出したが無事に元に戻りさっそく魔法を使おうとしたが……結論から言うと

何も出なかった

これにはその場にいた全員が困惑した。

魔法を使ったのなら何かしら出るはずだ精々アリスみたいに小さいのが出るはずなのだが……何も出ないのだ。

つまり言うところアリスはオブラートに言えば同じ仲間、悪く言っ自分より格下の存在が現れたのだ。

そのおかげで今、機嫌がいい。

アーク「そんなにうれしいのか？」

アリス「もちろんよ!! 私、今まで下っ端で見られてたけど上につくのも悪くないわね!!」

アーク「へえへえそうですか」

それにしても……さっき先生から聞いたけどドス黒い魔力かあ……

調べてみると魔力は（血縁者は除く）個体にとって違うらしくほとんどが澄んだように綺麗らしい

……逆になんで俺は黒いんだ。

アーク「でも魔法は使いたいなあ……」  
すると

リン「あ、いた助手」

アーク「ん？ あ、リンやつほ」

アリス「御機嫌ようウィテカー」

リン「こんにちはアリス様……申し訳ございませんが助手を借りていいですか」

アリス「やだ（即答）」

いや断るなよ

リン「……朝のさ、でつかくて黒い魔力……あれ、助手でしょ」

アーク「あ、バレテラ」

リン「……それでどうだったの？」

アーク「あ、リンなら何かわかるかもしれないけど……不発だったんだ」

リン「失敗？」

アーク「いや、何も出なかったんだ。普通なら何かしら出るらしいけど何もなかったんだ」

リン「……ごめん、わからない」

アーク「やつぱりか……」

リン「だからこそ分解を……」

アーク「させないわ」

異世界版Googleでも「年のせい」とか年齢に関するのが多かった。

俺はまだ10代の若者だぞ。

アリス「あ、でもアークが……あのハゲた姿の状態にはなれるよね？」

アーク「ああ、なれるぞ……でも、やつぱり魔法が使いたい。特に約束された勝利の剣ビームが出る剣とか乖離剣とか作りたい」

リン「諦めよ、助手？」

アーク「はあ……なんで使い魔も主人に似たようなものになったのかなあ」

アリス「何よ嫌味？」

アーク「……別に？ はあ、せつかく異世界に来たんだから魔法とか一つ……ん？ 待てよ……なあ、アリス？ 確かアリスって付与魔

法が得意だよな？」

アリス「唯一ね」

アーク「なら、さつきは攻撃魔法だったから失敗しただけでアリスが得意な付与魔法なら!!」 “ 神よその剛腕を我に分け与えよ!!” 「アームドパワー」 “ !!”

希望的観測で付与魔法にすべてをかけることにした。

ちなみにこの魔法は俺がピューパになって決闘場で虐殺したときに会った付与魔法である。

ぼう……

アーク「つしや！（。▽。）キタコレ!!」

成功した印に光が腕に集まった。

アリスの使い魔だから付与魔法は成功するだろ!!（フラグ）

試しにアリスたちが使っている机を持ち上げることにした。

大きさに大きな会議で使われる長い机で脚にはタイヤがついてなく三人で運ぶものだが今は付与魔法で力を上げているので片手で余裕に持ち上がる……

ズシッ

アーク「重っ!？」

ことはなかった。

アリス「ぷつくくくく……あ、アーク。どうしたの（笑）」

リン「くつくくく……じよ、助手……いい感じにオチが出たね」

アーク「ふ“さ”け“る”な” ああああ!!」

泣きたい

超泣きたい。

リン「あ、でも助手……武器のほうの付与とかならいいけるじゃないの？」

アーク「（スクツ）え、武器？」



リン「うん、付与魔法には二つ種類があつて身体にかけるのと武器にかける二つがあるの。身体のほうの付与魔法は対象の体があればいいけど……武器のほうがねえ、助手にとつては問題かも」

アリス「あれ？ 確か、武器の付与魔法つて……身体の付与魔法の成功率とほぼ同じ……」

アーク「え、ならやつても意味なくね？や」

リン「いや、一つだけ方法があるの」

アーク「それは？」

リン「超希少鉱石による付与魔法の底上げ」

アーク「なんそれ？」

リン「希少鉱石……ミスリルとかの鉱石を素材にして武器にしてそこに付与魔法をかけると効果も飛躍的に上がるし確定で効果も発動するの!! ……でも」

アーク「でも？」

リン「希少鉱石を一つの武器にするなんて費用が掛かりすぎるからできること自体難しいの」

アリス「確か、一つの希少鉱石でできた武器を売れば豪邸に住めるつて言うほどつて聞いたわ」

アーク「え、無いぞそんな金」

一応、今は30000ほどポイントがあるからそれを費用にするつて手もあるけど……開発に使いたいしなあ

それに希少なんだからそんな都合よく手に入るわけ……

ん？ 待てよ……

何かあつたな……確か……ノエルと一緒に行ったダンジョンでボスからバレーボールほどの鉱石で……

『通知：超々高濃度オリハルコン、超々高濃度ミスリル、超々高濃度魔法石、超々高濃度ヒイロカネです』

アーク「あつたわ」  
アリス・リン「「あるの!?!」」  
あつたわ、通知さんに教えてくれて驚いて武器にするのも悪くないって言われたんだっけ。  
確か、今はマザーベースのスタッフに預けているんだっけ？  
アーク「えつと……あつた!! これこれ」  
iDROIDからボス・スライムのドロップ品を見つけ配達をお願いします。

数分後

アーク「リン、これなんだが」  
リン「え、これって……まさか、ミスリルとかオリハルコンが混ざった鉱石!?!」  
あ、ちなみにマザーベースからは段ボール気球で配達されました。  
アーク「おう、これで武器ってできる?」  
リン「出来るけど……え、もしかして私がするの?」  
アーク「いやだって……リンって魔工学を知っているのはこの中でお前だけだから……」  
リン「でもいいの? 私、加工はうまいけど……」  
アーク「……完成したら何か分解してあげる」  
リン「乗った(即答)」  
ちよろいな  
さて、ついでにコレもあげておくか  
アーク「ついでに前払いで俺のTHIRD-6を貸しておくから形はこれで頼む」  
リン「も、もしかして……分解して……」  
アーク「いいぞ」  
リン「やったあ〜!!」

するとリンは例の鉱石の入った段ボールと俺のTHIRD―6を奪って飛んでいった。

アーク「……どんだけ俺を解体したいんだよ」

アリス「……ねえねえアーク」

アーク「どうした？」

アリス「アークが持っている武器って……私にも使える？」

アーク「え、やめた方がいいぞ」

アリス「なんでよ」

アーク「アリスが絶対に壊すのが目に見えてるもん」

アリス「しないわよ!!」

とまあ、アークが平和に過ごしている中……

どこかの廃城

「な、なんだこの光景は……」

旅をしていたとある旅人が休息をとるために廃城で休むついでに探検でもしようかと入り込んだが

「なぜバサビイ共和国残党がいるんだ!？」

そこにいたのは今、世界中で指名手配されているバサビイ共和国残党がいた。

だが、格好が自分の知っているのではなかった。

謎の棒<sup>M8</sup>を持ち、格好も騎士の鎧ではなく骨組みされた鎧を着ていた。

現在、自分は壁に身を隠し覗いているが……残党も気になるがもつとおかしいのは

「なんで勇者がこんなにも?！」

そこには「謎の容器に入れられ液体につけられている勇者たち」であつた。

その数も異常で数千もいた。  
すると

ビー！　ビー！　ビー！

「な、なんだ!？」

突然、鳥の声をうるさくしたような音が流れ出した。  
急いで隠れたが……聞こえてきたのは

《666番カプセル、解放します》

するとどこからか女性の……だが生気のない声が響き轟々しい音を出しながら勇者に似た何かの入った球体が開き、中から勇者が出てきた。

勇者? 「う……あうううう?」

よろよろと小鹿のように立ち上がり辺りを見渡す。

「どうだ、こいつは?」

「ああ前の奴が出てすぐに肉体が保てなくて溶けちゃったが……今は大丈夫だ」

出てきた勇者の様子を見るバサビイ共和国残党

(こいつら……もしかして何か禁断の力を入れたのか!?)

旅人は物陰から観察していた。

だが、勇者は突然

勇者? 「のえるううううう? ありすううううう? ど

こおおおお?」

「うわ、こいつ死んでこうなってもまだ欲しかった女の名前を叫んでるぞ」

「ここまで執着が強いと逆に笑えるな……あら?」

勇者? 「うへへへへへへ?!! ありすう? のえるう? いっぱいいるううううにwづcぼいう!えvb?!」

ドガアアアアアアアアアアアン!!

勇者の頭が肥大化し爆発した後、パタリと倒れ溶けていった。

「あくあ……失敗しちゃった」

「首相にはなんて言う?」

「別によくね？ こいつ糞だし」

「……そうだな、んじゃ次の奴を出すか」

そういうと兵士は隣にあるカプセルに移動し続けていった。

(こ、これはとんでもない場所に来てしまったぞ)

物陰に隠れていた旅人は出て、急いで外に向かうことにした。

これは緊急事態だ、速くその国でも胃からこのことを報告しないと

「あつた！ 出口!!」

ここに入るときに入った穴から外に出ようとあと一歩だったが

ニゴウ「侵入者、発見」

「な!?!」

音もなく、後方から声が聞こえ振り返るとそこには銀髪の髪をし瞳に生氣を感じない女性が佇んでいた。

「くそー！ 見つかった!!」

見つかったと確信し急いで逃げようとするが

ニゴウ「ターゲットの逃走を確認、排除します」

そして「何もないか空間」を掴み

ニゴウ「PTRS1941、召喚」

そこから出てきたのはかつてソ連が開発した対戦車ライフルであるPTRS1941。

それを逃げている旅人の背中に標準を当て

ニゴウ「排除」

ドオオオオオオオオン!!

「……え?」

旅人は一体何が起きたのかわからなかった。

気づいたときには下半身が目の前に転がって地面に伏せていたのだ。

ニゴウ「排除を確認、マスターに報告を」

一方、殺した犯人……ニゴウは殺した人間の上半身を掴み自分のマスターだと思っっている首相のところに向かった。

「どうしたのかね？ ニゴウ？ 何やら爆発音が聞こえたのだが？」

首相の部屋は元は執務室で会ったであろう場所について、暖炉で暖を取っていた。

ニゴウ「マスター、侵入者を捕捉し排除しました」

そういい、旅人だった物の上の部分を見せる。

「ほお、そうかい……なら」

普通なら褒める……だが」

ゴキツ!!

「ふざけるな!! 俺は言ったよなあ？ 俺はこの場所から城が見える場所まで哨戒し誰一人たりとも入れるなっっていったよなあ!？」

ニゴウ「申し訳……ございません……」

「申し訳ございませんで済ませるか!!」

そう言いながら首相はニゴウの髪を掴み拳を振り上げ彼女の腹を殴る。

理不尽すぎる命令に普通なら反論するがニゴウはしない。

ニゴウ「今後は……このようなこと無いように肝に銘じます……」

胃から何かが逆流しそうだが何とか耐え謝罪をする

「……なら、私が刻み込んでやる」

すると、首相は暖炉に近寄り何かを拾い上げた。

それは暖炉に突っ込んでおいた火かき棒であった。

長時間、高熱の中にいれていたので棒全体が赤々しく熱しられており、それを……

ジュウウウウウウウウ!!

ニゴウの肌を高熱の棒を押し付けた

ニゴウ「あぐ!？」

「おい、誰が痛がつていいいっと言った!!」

ニゴウ「もうし……わけ……ございません……」

ニゴウの雪のような白い肌に次々と重度の火傷を負わせていく。

以前から首相の気分で暴力を振るわらせることがあり、古い傷の上に新しい傷ができていきボロボロだった。

しかも、首相からの命令で格好のリーダーを殺す任務で殺しに行つた際に戦うがその時にほとんどが近づく前に死ぬが偶に近づかれ負傷するが帰ってきたときに主人からは回復もしてくれず渡してくれるのは「包帯一個だけ」で満足に治療もできなかつた。

「はあ……まあいい……おい、ニゴウさつさと起きろ」

ニゴウ「は……い……」

「俺がお前に出した命令を言ってみろ」

ニゴウ「はい……《私が各国のトップを殺害に行く》ことと《その時に歌う死神と名乗り疑いをアークにかぶせる》こと、そして《歌う死神になりきる》ことです」

「よろしい。だが、言うのが遅い!!」

バキツ

自分勝手な判断で再びニゴウの顔面を殴る。

しかし、「反撃もしない……だつて、「感情を出すのは禁止」すると命令されているから。

「ふう……少し、熱が入りすぎたな……おいニゴウ、飯食つてさつさと寝ろ。明日、新しい命令を出す」

ニゴウ「はい、了解しました」

一応、食事と寝る時間はもらえる

つて言つても「兵士たちが食べたいた残飯」と「部屋は屋外で寝るときも麻布一枚」つという地獄だが

ニゴウ（《歌う死神になりきる》……死神ってどんな人間なのでしょうか……）

ちなみにニゴウは《歌う死神になりきる》つという命令を受けているが実際の歌う死神を知らないのだ。

だが、どういうわけかわからないが

ニゴウ「早く……会いたい……」

そつと目から何かが流れる中、横になり目を閉じた。

そして翌日

ガラガラガラ

アーハム帝国に一台の馬車が到着した。

「お嬢様、つきましたぞ」

??「ありがとう、爺や」

馬車の中から一人の少女が飛び出す勢いで降りた。

??「うーん！ 長時間の馬車移動ってお尻痛いわ……ま、でも……

久しぶりに帰ってきたなあ……私アーハム城の実家」

少女は背伸びしながら目の前に映る城を見上げる。

??「さてと……確か、アリスお姉様にアイツがいるんだよね」

少女は周囲から「魔剣士」という剣も使える魔法使いだといわれていた。

少女も魔法は長女のクロエ・ルメールには及ばないが剣には才能があったのでアーハム帝国から出て外国で剣を学んでいたが……自分の一つ上の姉……アリスが勇者に婚約を申し込まれたりと問題が起きて自分も急いで国に帰ろうとしたが蹴ろうとした瞬間にあのバケモノが問題を解決してしまったのだ。

そのバケモノと言うのはとある戦争で一夜で数万という数の敵をたった一人で殺し勇者までも殺した虐殺の権化……なおかつ姉の使い魔でもある「歌う死神アーク」だった。

??「……待ってなさいよ……歌う死神アーク!! 今、この私……



第三皇女レイチェル・フォン・アーハムが直々に首を取りに行つてやるのだわ!!」

## 七十八発目 レイチエル・フォン・アーハム、襲来

アークの魔力がドス黒いことが判明しリンに製作を依頼した日の翌日

アーク「ふあく……よく寝たぜ」

ベッドの中からモゾモゾとアークが出てくる。

髪がボサボサとなつてくせ毛もすごいことになっていた。

アーク「……櫛をいれんとな」

最早、習慣になつてしまつた神の手入れをしクロエからもらった髪留めをつける。

もう、男だからというのは捨てた。

アーク「さて、アリスを起こしに行くか」

よいしよつと体を起こし、着替え外に出てアリスのいる寮の部屋に向かう。

外は朝日が差し込み暖かく小鳥たちも元気よく鳴いていた。

だが、アークが近づいてきた瞬間

バサバサバサ!!

アーク「……やつぱりか」

昨日の授業で俺が試しに魔力を解放して驚かせた（二重の意味で）事件の後、一応元には戻つたが若干漏れているらしく、こうして近づく動物は逃げてしまうそうさ。

解せぬ。

まあ、それほど俺の魔力に恐れているってことだな。

アーク「……これはリンにかけるしかないな」

勝手に助手といつてくるあのエルフの腕にかけてお願いしたが……成功するのを祈るしかない。

一応、構造が一番簡単なリボルバーにしたが……

アーク「ま、リンならできるだろ」

とりあえず、日課の主人の起床を手伝わなければ。

アリスは朝、弱いので叩き起こす勢いでしないと自動的に二度寝に入ってしまう

アーク「ついた……おーい、アリス？ 起きてるかあ？」

アリスの部屋の前に到着し扉をたたく

アリス「はーい、起きてるわよー。ちよつと身支度しているから待っててー！」

……どうやら起きているようだ。

ま、手間が省けていいことだが

流石に身支度中のレディの部屋に入るのはご法度なので部屋の外で待つておく。

アーク（……どんな姿で来るんだろ……なんか見たいな）

数分後

アリス「ごめーん!! 遅れた!!」

アーク「いや、遅くは……なかった……ぞ」

アリス「なによ？」

アーク「あ、い、いや!! そ、そのお……その髪型は？」

扉から出てきたのは……アリスだったが……いつもとは雰囲気が違う。違った。

いつもは髪はストレートに伸ばしているが……居は後ろに一つに束ねていた。

アリス「えへへ♪ どうかかな？ アークとおそろい!!」

そういいながら自分で結んであろうポニーテールを見せてくる。

アリスは子供っぽいところもあるがポニーテールにすることで清楚な感じになり少し大人びいて見える。

アーク「あーうん……かわいいよ」

アリス「えへ♡ ありがとう♡ それじゃ、行こう？」

アーク「ああ、行こうか」

アリスの身支度ができたので外に出て食堂に向かう。

あ、あと知らない情報かもしれないが俺が人間に戻ったので食べ物を食べれるようになったのでアリスの許可のもと一緒に食べることにした。

結構おいしかったな食堂のごはん。

アーク「意外とおいしいな……異世界の料理も」

アリス「でも、私はアークのほうが好きかなあ？ こっちの料理って味が濃いから」

アーク「まあ、確かに濃いな……参考にさせてもらうか」

朝食が終わり後は教室に移動するだけであった

アーク（……毎日、これくらい平和で逢ってほしいな……）  
だが、そんな時だった

ザワザワザワ……

アーク「ん？ なんだ？」

外に出たとたん、広場に人だかりができていた。

アリス「なんの人だかりかしら？」

アーク「さあ？ 有名人でも来てんじゃね？」

だが、よく目を凝らすと集団の真ん中に一人の少女を見つけた。すると、あちらも俺たちに気づいたらしく生徒をかき分け近づいてくる。

そして、ずんずんと歩み寄り

ズドオン!!

アーク（いや、飛ぶんかい!?!）

レイチェル「アリスお姉さま!! アリスお姉さまだー!!」

アリス「え、きやあ!?!」

近づいてきた少女はジャンプしアリスに飛びついた。

そして、そのまま倒れ込んでしまった。

アリス「いてて……つてレイじゃない!? いつ帰ったのよ!」

レイチエル「今日の早朝、帰ってきました!!」

アリス「そ、そう……おかえりなさい」

レイと呼ばれた少女はアリスに抱き着きすりすり顔と顔を擦り付ける。

アーク「あー……なあ、アリス? その子は?」

アリス「あ、会うのは初めてわね。この子は私の妹のレイ、第三皇女のレイチエル・フォン・アーハムよ」

レイチエル「あ! これは失礼なところを見せましたわ……御機嫌よう、レイチエル・フォン・アーハムだわ」

アーク「あ、どうも」

……なるほど、このエルフが皇帝から聞いたアリスの妹か見た目は……アリスを幼くさせたならこうなりそうだな。

目はキリツとして瞳の色は海のような青で髪色は白金色で輝いて髪は金髪でツインテールだった。

身長はアリスより背が低いな……俺と比べたらアリスの額が俺の口に当たるくらいだがレイチエルだったらちようど俺の胸に顔が来るくらいかな?

あと、腰には彼女の得物であろうレイピアほどではないが直剣がある。

クロエ「なに? この人だけ……あら! レイじゃない!! おかえりなさい!!」

そこへ偶々集団を見つけ気になってやってきたクロエもいた。

レイ「クロエお姉さま!! ただいまです!!」

アリス「あ、クロエ姉さま! おはようございます!!」

クロエ「まったく……帰ってくるくらい連絡をしなさいよ。レイに会わせたい人がいるんだから」

レイ「えへへ、ごめんなさい……」

アリス「それより、どうだった? 剣の腕は上がった?」

レイ「はい! 私一人でも家族みんなを守るくらいです!!」  
ドヤ顔をするレイチエル

……ドヤ顔は姉妹揃って似ているな。

クロエ「あら、それなら安心できるわね」

アリス「レイも立派に成長したわね」

素晴らしい、レイチエルの頭をなでるクロエとアリス。  
だが、

レイ「アハハ……ソウデスネ……」

レイの目は急に虚ろになった

レイの視線は目の前にいるアリスとクロエの胸に注目した。そこには巨大な肉でできた巨大な山……そして、自分の胸を見て

レイ「なんで……」

アリス「ん？　どうかしたの？」

レイ「あ、いえ……大丈夫です」

……ちなみになぜレイチエルがこんなに落ち込んでいるのかという  
うと

クロエ↓ボンキュッボンな爆乳

アリス↓ばいんぼいんな巨乳

それに対して自分は

レイチエル↓ペタン、ストンな貧乳

……だ。

なぜ、上二人の姉は早熟してデカいのに自分の胸はまな板なのであ  
ろうか……

レイチエル「羨ましい……」

クロエ「……あ、そんなことより……レイ？　あなたってまだ騎士  
学校に在学中だったわよね？　確か……今年で主席卒業だったはず  
だけ」

レイチエル「あ、それなら校長が早期卒業ってことで先日卒業しま  
した!!」

アリス「え、ええ!!　大丈夫なの!?　お父様にはいったの!」

レイチエル「はい!　今、爺やが言ってくれています!!」

アリス「そ、そう……ならいいけど……でも、どうしてこんなに早  
く帰ってきたの？」

レイチエル「……アリスお姉さま……本来ならもうしばらく喜びに  
つかりたいのですが……アリスお姉さまの使い魔である歌う死神は  
今どこにいるんですか？」

アリス「アークに何か用なの？」

レイチエル「私は奴に会うために早く帰ってきたんですから!!」

アリス「アークならそこにいるわよ」

レイチエル「なに!? どこですか!？」

そういいアークの目の前でいきよろきよろするレイチエル

だが、周りを見渡しすぎて前を見ていなかった……

ドンツ

アーク「おっと」

レイチエル「あ、すみません!! 大丈夫ですか!？」

アーク「お、おう大丈夫だが……俺に何の用だ？」

レイチエル「え、俺？」

アーク「ああ、俺がアークだが？」

レイチエル「え、でも、え？」

レイチエルは困惑していた。

事前にアークについてはある程度爺やから聞いていが

「丸太のように太い腕と岩のような体に黒い筒がある怪物（ピューパ  
のこと）」か「人間だが仮面をかぶってハゲている姿（サイボーグのこ  
と）」のどちらかだと聞いたが……

レイチエル「え、でも……仮面とか……え？」

目の前にいるのはただの美人だった。

アーク「あ、俺数日前に人間（？）に戻ってこの姿になったんだ」

レイチエル「そう……あなたがアークですか……よかったです、探  
す手間が省けました」

アーク「それで何の」

用だつと最後まで言おうとした瞬間

ザンツ!!

アーク「のあ!?!」

気候とした瞬間、目の前を剣先が通過し皮一枚切られてしまった。余りにも突然の攻撃に尻もちを搦く。

アリス「ちよ、ちよっと!?! レイ!?!」

クロエ「何をしているの!?!」

レイチエル「……ようやく見つけましたわよ! 死神!! お前みたいなやつなんかお縄についてしまいなさい!?!」

アーク「なんで急に!?!」

剣を振りかぶり切りかかるのに対して体を後ろに転がし避け反動で立ち上がる。

だが、彼女のほうが一步早く

レイチエル「……終わりです」

アークの首筋にピタリと剣を突きつけた。

アーク「おい待て、突っ込みどころがありすぎるんだが!?!」

レイチエル「白を切っても無駄ですよ!?! あなたがしたことはバレーいr(ゴチン!!) あいた!?!」

レイチエルは勝ち誇っていたが後頭部を姉に叩かれた。

アリス「ちよっとレイ!?! 何、勝手に剣を他人に向けてるのよ!?!」

クロエ「そうですね!! アークはどうせ大丈夫だと思えますがいきなり切りかかるなんてひどいですわ!!」

アーク「え、ひどくね?」

レイチエル「な、何ですか!?! 私はコイツをアリスお姉様から剥がそうと……」

アリス「まず、なんでアークを捕まえようとしてるのよ!?!」

レイチエル「二つあります!! まず、アリスお姉様の護衛にこいつは悪名が高すぎます!! なんで先の戦争で単独で数万を相手にして勝ってしまう使い魔なんて……皇族でもあるアリスお姉様には悪すぎます!!」

アリス「だからっていきなり剣を抜くことないでしょう!?!」



レイチエル「それに今朝の新聞を見ましたか!? 私はこれを見てこいつを捕まえようと思ったのです!!」

「素晴らしいバツと見せた紙には

「王家一家を皆殺し!? 死神、シュレイド王国皆殺し!! 残党との関りは全くなし!! まさかのミスか? そして、壁には謎の穴が!」  
「生存者の証言曰く、銀髪の女性」

アーク「……はあ?」

あれ、なんだろうデジャブ（シンの事件を参照）

アリス「え……なによこれ……」

レイチエル「調べたところ被害があつた城内では死体からも細い鉄の矢じりが摘出させたと聞きました!! 特徴も証言と全く同じです!! こいつはシュレイド王国の王家を皆殺しした犯人です!!」

別に某ミラボレアスの一夜で滅ぼしたほどひどいもんじゃないだろ  
アリス「これがアークを捕まえるのと何が関係あるのよ!! アークは今までずっと私のところにいたわ!!」

レイチエル「だって細い鉄の矢じりで殺すなんて……この世界誰がいるんですか!! しかも、一人で王家を崩壊させるほどの実力!! こいつ以外いるわけじゃないじゃないですか!!」

アリス「まあ、それは……そうだけど……」

レイチエル「なので!! 私がこいつを捕まえて犯人として差し出します!!」

アリス「で、でもアークは確かに殺しはするけどちゃんと証拠を掴んでから殺すわ!!」

アリス、ソレはフォローになってない希ガス

レイチエル「いいえ! 今日から私が護衛もしますのでコイツは手放してください!!」

……なぜ、ここまでしてレイチエルがアークをアリスから取り上げたいのかと言うとちゃんとした理由がある。

レイチエル（ただでさえ、アリスお姉様は魔法が使えない……だか

ら私が守らないと!!)」

この世界は攻撃魔法の才能があるほど偉い的な風潮がありアリスが攻撃魔法が使えないのでアークが来る前はよく虐められていた。

だが、レイチエルは正義感が強く許せなかった。

レイチエルは昔から騎士に憧れていて魔法も使えたので将来、魔剣士になろうと夢見ていたので姉のアリスが虐められて最初は止めようとしたが大人はそれを聞いてもくれず悔しかった……だから騎士になってアリスを守ろうと誓い騎士になるため外国に出たのである。

血がにじみ出るほど努力し晴れて後三年で主席卒業になるはずだったのだが……

「アリスが勇者と結婚する」

この知らせが来た瞬間、頭に血が上り無断で帰国しようとした……がバレてしまい騎士学校の校長に嚴重注意を受けたがそれでも帰国して姉を守りたいと土下座する勢いで懇願した末……許可が出て、いざ馬を走らせようとした瞬間……

「アークのおかげで戦争は勝利した」

つと情報が参り下りた。

たった半日で決着がついたので出オチで終わってしまった。

そこからはと言うと意気消沈し大人しく騎士になるための授業や訓練を受けていたが……今回の新聞を見てはつきりした

「アークはやばい奴だ」

「あいつを姉から引きはがさねば」

「アークは『強すぎて』世界中から嫌われる、だから自分が姉を守ってアーナム家が悪評にされないようにしないと」

つという決して「あいつを軍に売って力を利用しよう」とか「アイツさえいなければ戦争なんて起きなかったのに」とかそういう邪な考えではなく、ただ単にアリスが心配でアークを捕まえて吹き剥がす「だけ」なのである。

別に被害を受けたシュレイド王国に差し出してもいいが「どうせ皆殺しにして逃げだすだろう」つと思っているので引きはがすだけなのである。

アーク「……おい、少しいいか？ レイチエル？」

レイチエル「いきなり呼び捨てとは何ですか!! 精々、様ぐらいつけなさいよ!!」

アーク「なんか……昔のアリスと似てるな」

アリス「アーク、次掘り返したら使い魔契約切るわよ」

アーク「……そんなことより……レイチエルは本当に俺のせいだと思ってるのか？ 俺、最近外国に行っていないぞ」

レイチエル「……本当にですか？」

アリス「これは本当よ。最近、アークは私と一緒に外国に行くほどの余裕なんてなかったんだから」

レイチエル「……む、そうですか」

あら？

なんか随分大人しく引き下がるな？

レイチエル「しかし！ アリスお姉様の護衛は今日から私がします」

アーク「え、いやいいよ……レイチエルは皇族だから使い魔で平民でもある俺がしなと」

レイチエル「できません!! アリスお姉様は私が守ります!!」

アーク「……ええ」

困ったな

俺が使い魔である以上、アリスの護衛は使命的なものだしな

アーク「いいって……失礼かもしれないけど俺のほうが強いし」

レイチエル「……ほう、ならその疑われている身を潔白してほしいものですね」

すると第三皇女は俺の目の前に立ち

レイチエル「おい、歌う死神!! お前に決闘を申し込むわ!! 騎士の名に懸けて!!」

## 七十九発目 決闘と言うの名のデジヤブ

アーク「……はあ、メンドクサイ」

アリス「我慢しなさいよ、あの子ああいつてるけど根っこは良い子なのよ？」

あの後、レイチエルから決闘を申し込まれその場ですぐ試合開始!!  
ってことはなかった。

さすがにアリスたちが授業があるので昼休みに戦うことになった。

しかも、決闘には条件を突きつけられて

「なんか鉄の矢じりが出る奴(銃のこと)を使用してはいけない」

つというものだった。

まあ、あつちは剣士で剣で戦ってくるのにこちらが銃で戦うなんて  
流石に可哀そうだなって思ったのでコレは承諾した。

んで、そのあとどうせ見た感じプライド高い奴かなって思って妨害  
に警戒したんだが……来なかった。

アーク「シン・カーニバルみたいにズルするやつかなって備えてい  
たんだが……本当に騎士の名に懸けて戦うんだな」

アリス「でしょ!でしょ! 私の自慢の妹だから!!」

アーク「……今から使い魔が戦いに行くのに心配しないんですか  
?」

アリス「大丈夫でしょ!! だって、私の自慢の使い魔なんだから!!」

アーク「えええ……」

ちよつとくらい心配してくれよ。

まあ、負ける気などさらさらないんだがな。

そして時間は過ぎ昼休み

……のグランド

アーク「いや、多いな!？」

グランドの周りにはなぜか生徒が集まっていた。

皆、視線はグランドの中心に注がれており……しかも、祭りみたい  
に賑やかだ。

え、まさかあの第三皇女が呼んだのか!？」

賑やかな空間の中、グランドの中心には例の第三皇女が佇んでおり  
アークを待っていた。

とりあえず約束を守るため彼女の元に向かうが

「あ！ 来たぞ!!」

「どつちが勝つかな？」

「やっぱ、死神だろ!!」

「いやいや、確か条件があったからレイチエル様にも勝機はあるぞ!!」

アーク「……なんかの祭りかよ」

とりま、今回の決闘の申し込みをしてきた奴の元に向かう。

アーク「おい、これってお前か？」

レイチエル「はあ!? そんなわけありません!! あなたがやったん  
でしょう!! 私が負けたら醜態をさらすように仕向けたんでしょ!!」

アーク「しねえわ!! 俺はそんな最低な奴じゃねえわ!!」

レイチエル「私だって騎士なんですからそんなことしませんよ!!」  
はあ……結局なんで集まったんだよ？

観戦か？

レイチエル「まあ、良いでしょう……こんなしょうもない小細工に  
反応するのは騎士として恥です。私は正々堂々と正面から挑むので  
!! 今のうちだったら降伏は受け取りますよ?。」

アーク「やなこった。俺は主人に危険がせまったら身を挺して防いで滅ぼすだけだ」

レイチエル「そう……なら、この剣であなたを倒して降伏させるだけです!!」

「そういい、腰から直剣を抜き取り構える。」

どつかの自業自得野郎シン・カーニバルみたいな芝居かかっているのとは違い、洗練された動きに見惚れてしまう。

レイチエル「我の名はレイチエル・フォン・アーハム!! 魔劍士としてアーハム家の名に懸けて貴様を倒す!!」

アーク「おう、んじや試合開始と行くか?」

レイチエル「……あなたも名乗りなさいよ」

アーク「は? なんでだよ?」

レイチエル「だつて不公平じゃない。こちらは名乗つてあんたは名乗らずに戦うなんて? まさか名乗れないほどの戦闘狂かしら?」

アーク「……それは失礼なことをしたな。俺の名前はアーク」

レイチエル「では……参ります!!」

アーク「え、ちよつと待って?」

レイチエル「何ですか? 今ごろ泣きつく気ですか?」

アーク「俺、素手?」

レイチエル「そりやあ……ねえ?」

レイチエルは剣を持っているが俺は素手なのである。

レイチエル「男なら素手でも大丈夫……でしょ!!」

するとレイチエルは身を屈んで足に力を入れ……

レイチエル「はああ!!」

アーク「嘘だろ!?!」

レイチエルが剣を振りかぶり迫った来るが一步引いて間合いから遠ざかる。

だが、流石剣術を学んだ騎士……避けられたのを確認するとさらに  
一步踏み込んで追撃してくる。

右から迫ってくる剣先を首をひねり頬を掠めていく。

ザアン!!

アーク「つぶねえ……っへ、確かエルフって運動が苦手らしいから  
そんな大したことはないだろうって思っていたが……なんだよお、結  
構動けんじゃねえか」

レイチエル「あなたも見た目の割には動けるんですね。どう見ても  
女性なのに」

アーク「うっせ!! 俺は男じゃ!!」

一步踏み込み、右足を軸にして回し蹴りを打ち込みが

レイチエル（……ツス）

アーク「どわ!?!」

気絶目的でレイチエルの脇腹目掛けて蹴ろうとするが剣を下に下  
げられ刀身で蹴りを受け止めようとする。

何とかギリギリで止められた。

今の俺の体は人間と全く同じなので足が刀身に触れた瞬間、グツバ  
イとなる。

……くそ、分が悪いな。

こうなるんだったら足に装甲でも纏えば良かった。

アーク「ナイフは……あ、でも使うなって言われているんだっけ」  
何やってんだ俺

これって自分で自分を苦しめた結果やん

レイチエル「はあ!!」

アーク「おっと!!」

だが、そんなことを考える暇はあちらには与えないらしく次々と斬  
撃を与えてくる。

アーク（次は……下か!!）

次々と斬撃が来るが落ち着いて呼吸し一歩ずつ後ろに下がりなが

ら避ける。

レイチエル「はあはあ……なんでさつきから避けてばっかりいるんですか!! 男なら攻めて来なさい!!」

アーク「はあはあ……む、無理があるね!? そっちは剣でこっちは素手だぞ!」

呼吸を整えながら次の攻撃に備える。

ヤバいな……これジリ貧だぞ。

こっちは決め手……って言うか近づいて体の一部でもつかめればCQCできるんだが……まあ、それが無いに対してあつちはある。

レイチエル「……仕方ありません、こんな例の攻撃（銃のこと）がないと何もできない奴程度に使うのは癪ですが……早く降伏してほしいので」

アーク「お? なんだ? まさか、奥の手とかあるのか?」

レイチエル「歌う死神……これがあなたが最後に見る景色です。」

煉獄の刃よ、天を裂き地を割れ「フレイムスラッシュ」“!!”  
すると、

ボウウ……

レイチエルの持っていた剣の刀身が燃え出した。

アーク「……付与魔法?」

レイチエル「あら? あんたみたいな人間でも少しは魔法について勉強しているみたいね?」

ここで普通の攻撃魔法と武器の付与魔法の違いを説明しよう。

攻撃魔法は遠距離戦に特化していて遠くにいる敵には強いが近距離にいる敵にはめっぽう弱い。

逆に武器の付与魔法はその逆で接近戦の敵なら強いが遠くにいる敵には弱い。

だが、他にも攻撃魔法にはない能力がある。

それは「継続戦闘ができる」というものだ。

攻撃魔法は一度唱えた魔法は魔力を流し続けることで発動するが



一度でも魔力を切ると再使用する際にはまた魔法を演唱しないといけない。

だが、この付与魔法だと《一々演唱しなくてもいい》のだ

これはこの世界特有の現象で「付与している得物に魔力をストックすることができる」のである。

なので、一度付与してしまえば破壊または上書きさえされなければ魔力を流すだけで剣に炎を纏わらせることだってできる。

しかし、もちろん弱点があり「射程が刀身まで」と「遠距離戦が不向き」であることだ。

前者は当たり前だが後者は不向きであってできないというわけではない（一応、刀身に魔力を集め思いつきり振れば斬圧みたいに波動が出せるが燃費が悪い）

アーク（あれが武器の方の付与魔法……さて、どんな感じで来るんだ（ズドオオオオオオオオオン!!）

警戒しようとしたが気が付いたときには地面に転がっていた。

アーク「がは!？」

レイチエル「あ、やりすぎた」

何が起きた!?

確か、一瞬灼熱の風と痛みが……

地面に腕を立て起き上がる。

所々、スーツが爆風で燃え穴が開いて血が出ていた。

アーク「なんだよこれ……ゼロ距離でロケランでも撃つたのかよ」

レイチエル「……殺したっと思ったのにまさか生きているなんて

……普通なら体がバラバラになっててもいいのに」

アーク「けほけほ……容赦ないなあ……」

たかが付与魔法って思っていたが……そういえばコイツ、アリスの妹で皇族か

なら、膨大な魔力で威力を底上げしているのか。

レイチエル「あなたに慈悲など無いんで……アリスお姉様は私で十分です。あなたはもうお役御免です」

アーク「つへ、ガキが何言ってるんだよ。お前でもいいなら俺でもいいだろ」

レイチエル「そう……なら、今ここであなたを消すわ」

剣を掲げ魔力を高めていく

その証拠に刀身が赤く燃え上がっていく。

アーク「……つち、休憩はなしか」

レイチエル「……ま、その前に最後のチャンスを上げるわ……とつとと降伏しなさい」

アーク「……」

レイチエル「あら？　もしかして、もう考えるほどの知性も失ったのですか？」

アーク「あゝ……なあ、一つ質問いいか？」

レイチエル「いいわよ？」

アーク「なんでそこまで俺に降伏を促すんだ？」

レイチエル「……はい？」

アーク「あ、いや……少し不思議に思ってたな。アリスから俺を引きはがすなら俺を殺せば済む話なんだが……なんで降伏を促し続けるんだ？」

レイチエル「……こんな公共の場で血をぶちまけるようなことはしたくないので」

……と言っではいるが

まあ、実際は違うのである。

レイチエル（おかしいわね……なんか、思った展開と違うわ……）  
読者諸君も「なんでコイツ、アークを降伏ばかりさせるんだ？」っ  
と思っっているであろう。

率直に言おう……「彼女はただの脳筋<sup>おバカ</sup>」なのである。

本来なら

1, 「決闘じゃおめえ!!」「やってやろうじゃねえか!!」

←

2, 「死ねええええ!!」「はあああああ!!」

←

3, 「ふ、やんじゃねえか」「お前もな」

←

4, 「なあ、今度から兄弟って呼んでいいか?」「おう、いいぜブラザ―?」

←

5, 「っへ、前からちゃんと言おうと正直に言おうっと思ってたんだがな……」「やめろ、待ってくれ兄貴イイイイ!!」「ありがとな……弟よ」

ってな感じの展開を予想してアークに挑んだのだが全く違う展開になっていった。

まあ、アークは戦いのほとんどを銃に頼っていてCQCもできるがリーチ的な問題でできないのだ。

結論から言うと「レイチエルは別に殺しなど求めておらずぶっちやけアークと友達になりたいだけ」なのだ。

アリスから引きはがそうとするのは本当だが、殺すわけではなく逆に「姉のアリスのために戦ってくれてありがとうと感謝したい」のだ。

あと、糞ヤバい奴でもあるアークがいるおかげで他国からのいちやもんが少なくなっている。

だが、やり方が不味かった。

程よく(?)お互いを傷つけあってから降伏させそこから友情を結ぼうと上記のようになるはずなのだがアークは防戦一方でレイチエルがワンサイドゲームになってしまっているのにレイチエルは気が

付いていない。

レイチエルは正義感とプライドが高く……そして、不器用なのだ。魔剣士になろうと外国の騎士学校に入ったが……ほとんどの騎士はプライドが高く、脳筋なので考えて動くより体が勝手に先に出してしまうのだ。

騎士学校にいた見習騎士たちも上記の方法で友達（という名の舎弟）を組んだ。

もちろん、プリンセス（？）のレイチエルも揉まれてしまい同じやり方で数年間過ごした。

……なので今回も同じやり方でやろうとしたが失敗しているのである（当たり前だろ）

レイチエル「……本当に降伏しないんですか？」

アーク「しないね!! 俺はアリスの隣にいたいんでな!!」

レイチエル「そうですか……なら、”光の聖霊よ、その光で闇を追いかけたまえ「シャイニングウエーブ」”!!」

アーク「ツ!!」

（流石に殺すのは問題なので）別の付与魔法を唱える。

すると、刀身に光が集まりだし……鞭のようになった。

レイチエル「ツハ!!」

ブオオオン!!

すごく宇宙の騎士たちが使うライトなセーバーな音を立てながらレイチエルは鞭となった得物を振るう。

アーク（鞭になったのなら!!）

剣とは違い変則的に動いて読みづらいが超至近距離なら少しは安全なのでCCCができる  
だが

ザアアアン!!

アーク「くそ!!」

レイチエルもそのことは知っているんだろうかまるで体操選手みたいに体を曲げたりして避け、そして攻撃してくる。

その攻撃のせいでギリギリで直撃は逃れられたが胸部を切れられてしまったが服だけ切られてしまった。

アーク（攻守どちらもできしかも魔法も使える……なるほど、これが魔剣士か）

レイチエル「しぶといですね……そのオーク並みに生き残る能力は一周回って褒めますよ」

アーク「全く嬉しくないけどな!!」

レイチエルが嵐のように剣を振って来るがギリギリのところまで避け続ける。

だが、手数が異常なほど多い……なので

ザシュ!!

アーク「う!？」

徐々に処理しきれなくなり腕や足に切り傷ができていく。

さらに痛みが走ったせいで集中が切れてしまい倍に切られてその場に崩れてしまい荒い呼吸になってしまう。

アーク「か……はあ……はあ……」

レイチエル「詰みです!!」  
チェックメイト

優雅に剣をアークに向け、ドヤ顔をする。

アーク（なんかウザいな……ドヤ顔）

レイチエル「私をここまで力を使わせるなんて……私の騎士学校の同級生でもあまり居ませんでしたよ。しかも、素手で」

アーク「つへ……そうかよ」

レイチエル「なので、降伏しなさい」

アーク「やなことだ。俺はアリスとずっと一緒にいるっていう約束をしたんでな」

レイチエル「え、いいなあ（羨）……しかし、貴方の負けですので

早く降伏を」

アーク「おいおい？ 誰が負けを認めた？」

レイチエル「……まさか、まだやるんですか？」

アーク「おう、第二ラウンドつと行こうじゃないか」

レイチエル「……何度やつても同じことです」

アーク「ああ、安心しろ。もう昼休みの時間がないからどちらかが一回でも傷を与えたら勝ちつてのは？」

レイチエル「それは私のほうが有利ですよ？」

アーク「いや、何なら宣言しよう……君はこの後すぐに負ける」

レイチエル「……どこからそんな根拠が出たんですか？」

アーク「ようやくあんたの動きを学習する<sup>トレーニング</sup>ことができた」

レイチエル「へえ……ならやつてみなさいよ!!」

アーク（……きた!!）

蛇のような動きをしながら迫ってくる光の刃がアークの胴体を傷つく……ことはなかった。

「I <sup>そ</sup>have <sup>結</sup>predicted <sup>は</sup>the <sup>予</sup>conclusion <sup>測</sup>だク

すると世界は暗くなり動きが遅くなった。

使ったのは前にもらった新しい神様特典のやつだ。

アーク（……横に30cm……次は縦に25cmジャンプ）

今、アークが見えている世界には赤い線がレイチエルの剣から自分に向かっていった。

これは「未来予測線」であり、そこから離れることで攻撃が避けられるというものだ。

アーク（こいつは……使えるな）

レイチエル「な!？」

レイチエルは驚愕した

先ほどまでのように当たっていた姉の使い魔が突然、自分の斬撃に避けられるようになった。



殴られる未来が見えたので咄嗟に目をつむったが……

ペチツ

レイチエル「あいた!?!」

やってきた痛みは拳ではなく額にデコピンさえた痛みだった。

アーク「はい、俺の勝ち」

レイチエル「え? え? え?」

アーク「言つたる? どちらかが一回でも傷ついたら勝ちだつて。

え? まさか拳でも来るのかと思つてたのか? 残念だが俺にはお嬢ちゃんを殴るような非道なことできないんでね」

ふうく……よかつた勝つて

先ほど、最初にやってきた爆発の付与魔法をしてきたがわかつたので急ブレーキをかけて止まり土煙に紛れて後方に回り自分の魔力を少しレイチエルに当て硬直したところをCQCするつというものだった。

レイチエル「私が……負けた?」

アーク「おう、負けだ。つてなわけで俺はアリスと一緒にいるぞ」

レイチエル「……なんで手加減したんですか。あの状況だったら自分の身の危険を感じて本性を出すはず」

アーク「え、いやだつて……本気出したら俺が瞬殺で勝つし女性だから酷いことなんて出来ないから?」

レイチエル「……はあ!?!」



キーンコーンカーンコーン

アーク「あ、やべチャイム鳴ってしまったな。んじや、俺はアリスのところに戻るから!!」

レイチエル「あ、こら待ちなさい!!」

どうということだと聞こうとしたがアークは駆け足でアリスのところに戻っていった。

レイチエル「……屈辱ですわ」

レイチエルは怒った。

まず、女性だからという理由で手加減さえたのと本気を出したら弱いからつという理由だった。

レイチエル「しかし……潔白もちゃんと証明した」

最初に約束した「銃を使わない」というのも守ったうえで勝ったのだ。

レイチエル「……見てなさいアーク!! 今度こそ勝ちますからね!!」

あ、そうそうついでに備考したおこう

彼女……超がつくほど負けず嫌いなのである

## 八十発目 わからせ（スイーツ）

アーク「……」

レイチエル（ジーーーーー）

アリス「ねえアーク？ レイに何かやった？」

アーク「いや、さっきの勝負で勝つときデコピンで終わらせたぐらいだぞ？」

レイチエルとの決闘も無事に勝利し教室の戻った（傷はシーベルト先生に治してもらった）後、アリスに合流し結果を報告したのだが「当たり前でしょ!! 私のアークなんだから!!」っと言ってドヤ顔で満足した。

その後、クラスのみんなに褒めたたえられた。

言っておくがレイチエルが糞野郎でとかではなく決闘がすごくハラハラして興奮したらしくあのよう魔法使いになりたいとかあった。

……だけど、銃がないだけでここまで苦戦するとはな

今度、剣士相手を想定したCQCでも訓練するか。

だが、問題もできた。

レイチエル（ジーーーーー）

アーク（めっちゃ見てくるんだが……）

そう、先ほど決闘で負けた本人が教室の外から顔を出してじっと見てくるのだ。

現在、授業中なのだが邪魔していないので問題はない。

だが、ずっと俺を見てくるのは困る。

アーク「あいつ暇なんかよ」

アリス「……レイは私より一つ下で来年魔法学園に入学するから

……だから……暇なんだと思うわ」

アーク「……勉強でもしとけよ」

アリス「レイって頭で考えるより動くほうが好きだから……無いんじゃないかしら？」

マジの脳筋じゃん

早くどこかに行ってくれないかとチラリと横目でレイチエルを見ると

レイチエル「ツ!! (ササツ)」

アーク (あ、逃げて……ないか)

こちらからの視線に気が付いたのか急いで隠れた……つもりなんだろうが、ツインテールが出ているのでバレバレなのである。

アーク (……あいつ、絶対偵察任務とかできない奴だろ)

キーンコーンカーンコーン

「はい、では授業はここまで」

「……」  
「……」  
「……」  
「……」

第三皇女から視線を向けられ続けたが無事に今日の授業が終わりクラスメイトは放課後をどうするかと話し合っていた。

「アリス様？ この後お時間はありますか？」

「なかつたらお茶会を開くんですが……アリス様もどうでしょうか？」

「クロエ様も来るんで、せっかくだからお城の話を聞きたいです!!」

アリス「いいわよ！ あ、アーク！ 私、これからガールズトークして来るから来ないでよ!!」

アーク (……変わったなあ、アリスの環境も)

昔は誘うことはあったが誘われることはなかった。友達も増え前の環境とは真逆になった。

なんか……微笑ましい空間だな。

だけど、ガールズトークするから来ないでというのは少し心が痛むな。

さて、今回の決闘の反省会をVR空間でやって訓練するかと思いき移動を開始しようとしたが

アーク「……お前、いつまでいるんだよ？」

レイチエル「……別に！ 気にしないでください!!」

廊下を渡って家に帰って訓練しようかと思ったが後ろからカルガ

モの子供みたいにとコトコついてくる第三皇女。

アーク「騎士なのにストーカーかよ？」

レイチエル「な!? ストーカーではありません!! 騎士学校で学びましたが負けた相手は勝った相手から学べるものは学び、真似れるところは真似て自身を強くせよと教えられました。なので!! 負けて悔しいので四六時中、ついていつて観察をしているだけです!!」

アーク「……いや、それをストーカーと言うんだよなあ」

なんか、解釈違いな気がするが放っておいて家に向かう。

アーク（テクテク……）

レイチエル（テチテチ）

アーク「……おい、まさか家まで来る気か？」

レイチエル「当たり前です!! あなたの部屋を見てどんな生活をしているのか見てみたいので!!」

アーク「それって女的に大丈夫なのか？」

レイチエル「……どういうことですか？」

アーク（あ、わかってないわ）

普通、他人の女性が他人の青年の家など誘われないうり入るのは躊躇うはずだがレイチエルのいた騎士学校は圧倒的男性率でレイチエルの感覚は麻痺していて何の躊躇いもない。

心の中でどっか行ってくれないかと願うが……

レイチエル「へえ〜! ここがあんたの家なのね!!」

アーク（マジでついてきやがった）

そんな希望的観測は当たることではなくレイチエルはアークの家の玄関までついてきた。

アーク「……そろそろアリスにチクるぞ」

レイチエル「あ、別に言ってもいいですが……案外、器小さいんですね？」

アーク「はあ……別にいてもいいが暴れるなよ。俺は訓練しに行く

から」

レイチエル「む!? 訓練ですか!! 私も見に行つていいですか!!」  
アーク「言つておくが俺はVR空間……夢の中で訓練するから来れんぞ。てか、断つてもどうせ来る気だろ」

レイチエル「夢の中……つまり私も寝れば見に行けますね!!」

アーク（馬鹿やん）

レイチエル「……でも眠くないです……あ、そうだ！ おい、アーク!! 私が眠気が来るまでこっちで戦え!!」

アーク「嫌に決まつてんだろ。どうせ俺は勝つぞ」

レイチエル「あ、あれは私が油断してただけだ!! もう一回だ!!  
もう一回勝負しろ!!」

アーク「はあく……面倒くさい」

レイチエル「あれ? もしかして私に勝つたのに、もう怖氣ついたんですかあ? 無様ですねぇ死神つてのは♪」

ウザいなこのメス餓鬼

どうにか黙らせる方法はないんだろうか。

アーク「んなことはいいから、俺は訓練しに行く」

レイチエル「そんなこと言つてそのままお眠になつてしまふんですよねえ?」

……ダメだわウザい

こいつ、どんだけ俺ともう一回戦いたいんだよ

アーク「……そんなに俺と戦いのか?」

レイチエル「はい!! そりや、手加減した相手にデコピンで倒されるのは騎士の風上にも置けません!!」

いや、結構重いな

さて、本当にどうしようか……多分、このまま行つたら叩き起こされて集中できないし、つて言つても現実でこいつと戦う気なんて出ないし……月光……いや、こいつだったら「まさか他人の力を自分の力だ言い張るんですかあ?」とか言つてきそう……いや、言うわ

アーク「どうしたもの……あ、待てよ……こいつ、アリスとクロエの妹なら……」

遺伝子は裏切らないという言葉にかけるか

アーク「……おい、レイチエル。勝負だ」

レイチエル「お！ わかりました!! なにで勝負しますか!!」

アーク「俺が今から」とある料理」を出す。それを目の前に出されて一時間耐えれたらお前の勝ちで食べたら負け……というのだが」

レイチエル「ほほう……剣での勝負ではないのが気になりますか……いいでしょう!! 先ほどの勝負は私が条件を出したので今回は飲みましょう!!」

よし、計画通り（勝ち確）

アーク「んじゃ、そこに座ってて待っててくれ」

レイチエルを椅子に座らせアークは台所に向かっていった。

みんなも一緒に作ってみよう!!（第九回）

材料（15cm級）

卵 3個

グラニュー糖 60g

薄力粉 60g

溶かしバター 20g

生クリーム＋砂糖 200cc＋15g

フルーツ缶のシロップ 大きじ 3

苺のリキュール（あれば） 大きじ 1

いちご 1パック

作り方

1、型にクッキングシートをしいておく。

2、バターはレンジでチンして溶かす。

3、薄力粉はふるう

4、卵黄と卵白にわけて、卵白は大きいボウルにする。

5、砂糖を3回に分けて加え、しっかりしたメレンゲにする。

6、卵黄を加えて混ぜ、薄力粉も加えたらゴムべらでさつくり粉がなくなるまで混ぜる

7、溶かしバターをゴムべらでうけながら加えてむらなく混ぜる

8、用意した型にいれ、170℃で32分焼く。

9、型からはずしてさましておく  
10、フルーツ缶のシロップとイチゴのリキュールを混ぜてシロップを作る

11、ホイップクリームを作る。7分立てにしたら2/3をわけて8分立てにする

12、5を半分にスライスして6を断面に塗る。8分のクリームを塗って4スライスにした苺を並べ、更にクリームを広げる。

13、サンドしたら8分のクリームで全体を塗るが別に綺麗ではなくてもOK

14、7分クリームを上に乗せ塗っていく

15、イチゴは好きなだけ載せれば完成!! (作者はめっちゃ載せました)

以前のポイント 32600

生産

卵 1

グラニュー糖 1

薄力粉 1

溶かしバター 1

生クリーム 1

砂糖 1

フルーツ缶のシロップ 1

苺のリキュール 1

いちご 1

キッキングシート 1

合計ポイント 32590

アーク「うし、できた」

できたのはごく普通のショートケーキだ

アーク「ほれ、できたぞ」

レイチェル「ふふん♪ さて、どんなゲテモノ…か…え？」

レイチエルはこの勝負を受けるとき、勝利を確信した。なぜなら……つらい忍耐力ならだれにも負けない自信があるからだ。

山岳での登山訓練、そこで野宿したときの寒さ、極限状態でのサバイバル、教官の厳しい指摘、兵舎の中になれば漂う男性の加齢臭……など泣きたいことがたくさんあつて同級生もあまりの辛さに次々とやめていった。

だが、自分は諦めなかった。

大切に大好きなアリスと家族を守るために頑張ってきたんだ……

どうせ、この使い魔は自分のプライドを利用してゲテモノを食わせて自分が食うのを断ったら騎士のことを馬鹿にして反則だと喚けば勝負をなかつたことにされて結局自分の負けになる。

だつたら食べるしかない!!

だが……これは一体どういうことだ……

自分は今まで教官が極限サバイバルの時に作ったスープを飲んだ時は気絶しかけたが完食するほどの耐性はあるはずなのに……

今日の前に魅せられているものは……それとはかけ離れていた。

『白いクリームと雲のように柔らかそうなスポンジ、そして真っ赤になつているイチゴが乗っている料理』ではないか。

一応、当初からアークについてはいろいろと聞いていて「料理がうまくアリス様も称賛している」とは聞いていて、それは誇張表現だろうと思つていて、逆においしいのなら姉は催眠でもかけられているのではないかと疑つた。

なのに……なのに……つらいのは慣れている……だがこつちが来るとは聞いていない!!

レイチエル「な、なんですかそれは？」

アーク「何つて……ケーキだが？」

レイチエル「あら♪ 皇族の私にくれるんですね！ それで食べたら負けというの？」

アーク「これだが？」

レイチエル「……冗談ですよね？」



アーク「んなわけないだろ？　これが食べちゃダメな奴だ」  
レイチエル「……うそでしょ？」

コトリ……とレイチエルが座っている椅子の前にある机の上に置かれるケーキ

目の前に置かれた瞬間、鼻の奥に来るあま〜い誘惑

アーク「んじや、一時間な」

レイチエル「ま、待つてください!!　や、やっぱりほかの勝負にしませんか？」

見た瞬間、わかってしまった……『あ、これ絶対おいしいやつだ』と

アーク「え、もしかし魔剣士様でも甘いものには弱いんですか？」

レイチエル「よ、弱いはずなんてないわ!!」

アーク「ならいけますよね？　それじゃスタート!!」

レイチエル「ええい、ヤケクソですわ!!」

よし、レイチエルが一人苦戦している間にVR空間に行くか。

およそ1時間後（ネタがないからVR空間のことが書けなかったとかじゃないよ）

アーク（……やっぱり開発しないといけないな）

結論を言おうと「侍<sup>サム</sup>を開発して彼に指導を受けるしかない」って感じだ。

まあ、無理あるか

現代戦で刀とか近接攻撃をメインにする戦闘なんかアニメの中だけだし。

アーク（……30,000も開発ポイントがあるしジェットストリーム・サムを開発するしかないか）

雷電っていう選択肢もあるが彼のほうが剣については詳しくそうだからそっち開発しようかな？

アーク「さて、レイチエルは……わお」  
起きてケーキと戦っているレイチエルはどうなっているのか見てみると

レイチエル「フーツ！ フーツ！ フーツ！」

めっちゃ我慢していた。

皇族らしからぬ涎を垂らして顔を真っ赤にし必死で我慢しているのがわかる。

……てかこいつもよく耐えられてるな。

アリスの妹だから甘い物には目がないと思って俺が言っている間につまみ食いでもしてるのかなって思ったんだが……ケーキは少しも欠けていない……本当に騎士の心を持った奴だな

レイチエル「あ、アーク……まだ一時間たたないんですか？」

アーク「えっと待ってな」

そつとばれないように時間を見てるとすでに一時間過ぎていた。

……だがここでアークの黒い心が芽生える。

アーク「あ……まだ10分しかたつてないですよ」

レイチエル「ええ!?! わ、私は一時間たったのかと思っただけですが!?!」

まあ、実際一時間立っているんだがな

だが、こいつに煽られた分をここで返す。

アーク「あれえ？ まるで早くケーキが食べたいから時間を誤魔化そうと思つてませんかあ？」

レイチエル「そ、そんなわけないわ!! ちょ、ちよつと確認しただけよ!! まだまだへツチャラだわ!!」

アーク「ふーん……なら」

するとアークはレイチエルの目の前に座った。

……そして右手にはフォークが

アーク「レイチエル様？ 騎士ならどんな苦行でも耐えられますよね？」

レイチエル「あ、当たり前だわ!! アーハム家の一人前の騎士としてこんなちつぽけなことなんか空気を吸ってるようなものですわ!!」  
アーク「あ、ならいいですよね?」

そういうフォークを振りかぶる……レイチエルの目のまえに置かれているケーキに向かって

レイチエル「ツ!! 待って!! まだ話せるわ!! 話し合いで決めましょう!! 話せばわかる!!」

レイチエルは理解した……いや、理解してしまった

コイツが今から何をしようとしているのかを

だが……アークから返ってきた答えは……満面の笑みだった

アーク「問答無用♪」

ドスツ!!

レイチエル「……あ」

アークの握りしめられていたフォークはケーキに深深地刺さり持ち上げられて……

アーク「それじゃ、いただきますーす」

レイチエル「待って!?!」

レイチエルが必死に止めようとするがアークの耳には届かず

パクツ♪

アーク「うーん! 自分で言うのは何だがうまいなあ!」

レイチエル「あ……ああ……ああ……」

目の前でおいしそうに食べられるケーキを見て顔面蒼白になるレイチエル

アーク「白いクリームに程よく甘いスポンジ……そして糖分の塊のように甘いイチゴ……これはぜひレイチエル様にも食べて……あ、そうか今勝負（笑）で食べられないんだね!!（鬼畜）」

レイチエル「く……く……く……く……く……く……!!」

レイチエルは悔しそうに睨む

レイチエル「この鬼畜!! 悪魔!! 心を殺す死神!!」

アーク「あ、流石にアーハム家の騎士（爆笑）耐えられませんか」

レイチエル「……」

煽りに煽るアーク「……そして

レイチエル「……ぐす……負けです」

アーク「え、なんて？」

レイチエル「レイチエル・フォン・アーハムはあ!! こんなおいしそうなケーキに負けましたあ!! だから食べさせてくださいいいいい!!」

アーク「そうかあ……なら、この勝負俺の勝ちだな」

レイチエル「な、なら食べても……」

アーク「ああ、いいぞ」

この敗北宣言をした瞬間、アークはにこやかに笑った。

……そして、また一人アークの料理で墜ちたエルフが増えるのであった。

## 八十一発目 動きだす運命の歯車

レイチェルにわからずゲフンゲフン……少し調教した。  
だが一つ予想外の出来事が起きた

アーク「お前どんだけ食う気だよ!？」

レイチェル「うーん！ おいひい!!」

今、目の前でアリスの妹である第三皇女が幸せそうに食べていた  
……ケーキ9ホール分

アーク「食べすぎだぞ!？」

以前のポイント 32590

生産

卵 10

グラニュー糖 10

薄力粉 10

溶かしバター 10

生クリーム 10

砂糖 10

フルーツ缶のシロップ 10

苺のリキュール 10

いちご 10

合計ポイント 32500

レイチェル「ふう……天国はここにあった……人生に悔いはなし  
……」

アーク「ま、まあ満足してもらってよかったよ」

レイチェル「……アリスお姉様たちは毎日このようなものを食べて  
いるんですか？」

アーク「毎日って程じゃないけどよく食べているぞ……太るから控  
えろって言ってるのに食べる」

まあ、それで作ってあげる俺も悪いが（どういうわけかどうしても

こういうところは甘くしてしまう)

レイチエル「なに!? それはいけません!!」

アーク「だろ? だから第三皇女からも何か言ってくれ」

レイチエル「そうですね……つまり私が先に全部食べてしまえばいいんですね!!」

アーク「うーん、違うそうじゃない」

食べれりやいいって言う問題じゃないんだレイチエル

レイチエル「ふう……ごちそうさまでした!!」

アーク「おう、お粗末さん」

レイチエル「……これってここに来れば食べれますか?」

アーク「食べれるが……まさか、また食う気か?」

レイチエル「当たり前ですわ!!」

アーク「勝負には負けたくせに?」

レイチエル「あ、あれはこのケーキを出すからですわ!! ゲテモノを出すと思ったのにこんなおいしいようなものを出すなんて……悪魔ですわ!!」

よくもまああんなに幸せそうに食つてた癖にいうわ

ため息を吐きながらふと窓の外を見てみる。

先ほどまで晴れていたのに今じゃ曇り空だ……なんか嫌な予感がするな(フラグ)  
すると

コンコン

クロエ「アーク? いらっしやいますか?」

アーク「ん? クロエか。どうぞ」

カチャ

アーク「あれ? アリスもいるじゃん? 女子会はどうしたんだ?」

アリス「ちよつとアークに伝えないといけないことがあるから抜け出してきたわ」

アーク「伝えないといけないこと?」

クロエ「……城でお父様が呼んでるですわ」

アーク「皇帝が?　なんで?」

クロエ「レイから知ったでしょうけどシユレイド王国についてよ」

アーク「あー……もしかして俺、また捕まる感じ?」

クロエ「いえ、前みたいなのシン・カーニバルみたいなことじゃなくて「重要参考人」として招集がかかっているわ。今回は別に捕まえるわけじゃないからアークだけ呼んだらしいわ」

アーク「あ、よかった……それで、今すぐ?」

クロエ「ええ、できれば今すぐについて使いから聞いたわ」

アーク「ラジャー、それじゃ行きますか」

クロエ「お願いって言いたいところだけど……なんでレイがここに居るのよ?」

アークの隣にいたレイチエルをクロエが睨む。

レイチエル「あ、いえ……ちよ、ちよつとこの死神からお菓子をもらって……」

クロエ「ええ!?　アークからお菓子もらったの!?!」

アリス「ちよつと!!　私たちの分は!?!」

レイチエル「え、お菓子だけでそこまで嘔みつきますか!?!」

アリス「当り前だわ!!　アークの作る料理は大体おいしいって決まってるわ!!」

クロエ「それで?　何を食べたの!?!」

レイチエル「け、ケーキですg(ドンツ!!)　ふにゃあ!?!」

ケーキだと知った瞬間、レイチエルはアリスとクロエに壁に押し付けられた。

アリス「……ふーん、ケーキねえ?」

クロエ「さぞかしおいしかったんでしょうねえ?」

アリス「なあって私たちを呼んでくれなかったのかねえ?」

レイチエル「え、だってお姉様たちいなかった」

アリス・クロエ「なんで呼んでくれなかったのかな？ 第三皇女のレイチエルちゃん？」

レイチエル「ひや、ひやい……」

アーク「……何してんだあいつら」

離れたところから見ているが……アリスとクロエの背中から黒いオーラが駄々洩れであるのがわかってしまう。

まあ、ソレを至近距離でしかも顔を見せられているレイチエルはさぞかし恐怖だろうなあ

アーク「そ、それじゃ行ってくるからなあ」

アリス「ちよつと待ってアーク」

アーク「な、ナンスカ？」

アリス「帰ったら私たちにも作って」

アーク「あ、はい」

謎の圧を感じ断つたらムッコロされそうな気がしたので承諾した。少し悪寒を感じながら俺は城に向かった。

アリス「さてと……少しお話をしようかしら？ レイチエル？」

クロエ「ええ、そうね。まず、なんでアークの家にあなたがいるってところからかしら？」

レイチエル「お、お姉様？ 目が怖いのですが？」

クロエ「ささ、ずずいーつと部屋の奥で久しぶりに三姉妹で話しましょ？ レイチエル♪」

レイチエル「え、ちよ……あ、アーク!! た、助けてくださ」

アーク（すまん、レイチエル……お前のことは忘れん）

後方で悲鳴が聞こえるが俺は背を向け城に向かって歩いた。



アーク「さて、次は何の面倒ごとかな？」  
そのあと無事に城に到着した。

もう、実家のような安心感が出るんだが

アーク「でも……今回はマジで嫌な予感がするんだよなあ」  
なぜか胸騒ぎが収まらない

後、前に見た夢が……なぜか頭の中で思い出す（内容は覚えてないけど）

アーク「通知さーん……こういう時こそアリスを助けに行つた時の  
励ましが欲しいよー」

『○○○○からの応答がありません』

アーク「……やっぱダメかあ」

何度呼び掛けても通知さんからの応答がない

……なんでなんだ？

アーク「……これは本当に問題になったな」

帰ったらアリスに話して原因究明でもしようかな

……でもロリ神が設定したチュートリアルの奴かもしれないが  
アーク「ま、でもいてももらわないと困る」

開発完了通知とかしてもらえるから助かるんだよなあ

アーク「……はあ、速く「彼女」に会いた……ん？ 彼女？」  
え、なんで俺、通知さんのこと彼女って……

なぜ通知さんを女性だと決めつけたのか訳がわからず考えていると

アレクサンダー「お、アークよ来たか」

アーク「あ、皇帝陛下……先ほど到着しました」

アレクサンダー「そうか、では私の部屋にきたまえ」

皇帝の前なので考えるのを一旦やめてついていった。

流星に上の人の前ではちゃんとしないとな。

コンコン

アレクサンダー「待たせたな諸君」

皇帝についていき部屋に到着して中に入るとそこには8人ほどの怖そうな顔をした人たちがいた。

エルフから人間……ドワーフまでいた。

「いえいえアレクサンダー殿、我々は訪問した側なので」

アーク「皇帝陛下……この方らは？」

アレクサンダー「彼らは今回のことで集まった各国の代表たちだ」  
なるほど彼らが……

「……えっと、その後ろにいる女性は？」

アレクサンダー「あ、そうだったな……彼がアークだ」

ザワザワ……

「はあ!? え、でも……ええ？」

「でも確か男性だって……」

「おい、髪も生えてるぞ……」

あ、そういえば知らないんだっけ……この姿はプライベート用であり知られたくないって決めていたけど

ま、いっか

てか、誰だ俺をハゲだと思ってたやつは

アーク「えっと……アークです。歌う死神のほうです」

「えつと……本当に歌う方の？」

アーク「そうですね……数日前、呪い？が解けて人間になりました」  
「失礼かもしれないが……女性か？」

アーク「男です」

ザワザワ……

いや、なんでそこでざわつく

アレクサンダー「ご、ごほん……それより諸君、今日はそんなことで集まったのではないのであろう？」

「む、そうでした……それではアークよ単刀直入に何うが」

するとバサツと大きめの紙を取り出し見せられる。

その紙に書かれていたのは「シュレイド王国の事件」であった。

「これはそなたがやったのか？」

「唯一生き残った生存者の証言と現場の状況を考え見ると……アークの攻撃方法と全く同じなんだ……」

あー、やっぱりか

アーク「キツパリ言いまうが私ではありません」

「……本当かね？」

アーク「はい、なんなら私はこの数日間アリス様の護衛をしていたので外に出る余裕などありません。それに出る際はアリス様の許可を得てやっています」

「信じていいのかな？」

アーク「はい、それに私は残酷で血も涙もないバケモノって思われているかもしれませんが私が殺すのはアリス様に危害を加えようとする輩どもでシュレイド王国には悪いですが眼中にもありません」

「」「」「ふうくくくくくく」「」「」

「そうか、よかった……」

アーク「え、なんですかこのデカいため息は？」

「……今回のことを後日ある世界会議でこのことを報告しないといけないのだが……もし私がやったと言ったら世界中から批判を受けてしまうんだ」

アーク「それとコレがどういう関係に？」

「実は……我々はアーハム家に恩がある国で……いろいろと積極的に輸出や輸入をしあっているんだ」

「簡単に言ったら年に一度ここに集まって謁見をする国って言った方が速いか？」

……つまり、悪く行ってしまうえば「属国」ってことか

まあ、アーハムって帝国だし属国の一つや二つあっても当然か。

「このままアーハム帝国の信頼が落ちてしまえば国外の交流と貿易は減ってしまう……そうなると流石にアーハム帝国でも景気が悪くなってしまう」

「アーハム帝国が悪くなれば我々も悪くなるってことだ」

アーク「なるほど……」

アレクサンダー「言っておくがアークよ。別に私は力の圧力で従わせているわけではないからな？ 彼らがいなかったらアーハム帝国が成り立たないって言っても過言ではないからな？」

アーク「わかってますよ」

「では……逆に歌う死神から意見が欲しいのだ」

アーク「私に？」

あ、そういえばレイチエルもなんか言ってたな

鉄の矢じりがどうかとか

アーク「まあ、参考になれば」

「そうかい!! ではこれなんだが……」

ゴトリ……

目の前の机に置かれたのはサッカーボールほどの大きさの石と鉄のナニカだった。

アーク「それは？」

「これは実際にシュレイド王国の殺害現場から入手した現場の一部だ。鉄の方は壁の中から取り出した奴だ」

アーク「これが……」

石の方には無数の穴が開いていた

開いていたって言っても人の手で空けたというより「何かすごい速さで刺さった」って言った方がいいだろう。

そして、極めつけは隣に置かれた鉄製の物だ

先端が細く後ろに行くつれに太くなっていく……うん

アーク「これ明らかに銃弾だよな」

しかも太さ的に見たら5・56mm弾か？

だが、なんでそんな現代ものが異世界にあるんだ？

「し、失礼だが……その『じゅうだん』とはなんだ？」

アーク「……簡単に言ったらこの世界にはないはずのもので犯人は明らかな殺意を持って殺したというのがわかりますね」

9mmならまだギリギリ自己防衛……は少し難しか。だが、5・56mmはアサルトライフルとか完全な殺傷武器だから殺さない程度ではないってことだな。

アレクサンダー「ふむ、そうか……ではアークよ、一つ質問をするがなぜこのようなお前が言う無いはずのものがあるんだ？」

アーク「それは私が聞きたいほどです……可能性としたら前の戦争で私の攻撃をまねて作った……か、それとも……」

「それとも？」

アーク「……私のような存在が生まれたかです」

可能性としたらまたバサビイ共和国で偽勇者を召喚した時みたいなやつが生まれたか……それともロリ神が新しい奴を生まれさせたか

だが、どちらにしても情報が欲しいな

「そ、そういえばなのですが……」

アレクサンダー「なんだね？ 言ってみろ？」

「か、風のうわさで聞いた程度なのですが……二日前に貿易で他国の代表と話し合ってたところ変な噂を聞いたのです……なんでも『歌う

死神は二人いる』つと」

あー、そういや犯人も俺の名前を使って殺したんだっけ？  
困るんだよなあ……俺をちゃんと知らない奴が勘違いを起こしそ  
うで。

アレクサンダー「それは今朝の新聞でも書いてあったぞ？」

「いえ、私が聞いたものは続きがありました」

「続きですか？」

「はい、曰く……『歌う死神ではない死神』だそうです」

アレクサンダー「どういうことだ？」

「実を言うとその代表はシュレイド王国の生き残りの弟なんですよ。  
それで兄から直接聞いた情報によると……」

『殺すとき無数の黒い棒を召喚して殺していった』

『歌を歌ってなかった』

『笑いながら殺してなかった』

『目が虚ろで意識がないように見えた』

『首に何か模様のようなものが見えた』

……そうです」

おい、待て

その兄は俺をどういう目で見てんじや。

……まあ、違うのなら結果オーライ

アレクサンダー「……そうか。確か数日後に国際会議でこのことを  
審議する内容だったよな？」

「はい、場所はミール聖教国であります」

ミール聖教国……ノエルがいる場所か

アレクサンダー「よろしい、ではアークよ数日後にミール聖教国に  
行くぞ」

アーク「了解しました。アリス様はどうされますか？」

アレクサンダー「……少々息苦しい場所化も知れないがアークの主  
人でもあるから来てもらうか」

こうして俺らは世界中から疑惑の目を向けられるのを晴らすため  
にミール聖教国に向かうのであった。

……でもノエルにあつたら何言おうかな。

一方、とある廃城

壁に壁が空き、もはや防衛機能がない建物だったが

「首相、実験成功です」

「ふむ、そうか……まさか、成功するとはな」

「首相は失敗すると思ってたんですか？」

「ああ、まさか勇者の死体から複製を作れるとはな」

「本当に何でしょうね？ あの装置は？」

「まあ、今は関係ない我々は優秀な人類で他の劣等民族はこの世界から排除すべきだ」

部屋の中では元バサビィ共和国首相とその幹部がいた。

「それで？ その勇者モドキどもは使えるのか？」

「使えるには使えるのですが例の『ジユウ』とやらは使えませんでした」

「剣を振り回すなど簡単な作業はできますが細かい作業はできないそ

うです」

「そうか……まあ、馬鹿ではあるが数があるのでそこは良いだろう」

「ええ、もう間もなく計画は折り返し地点です」

「それに計悪の第二段階である『混乱』ではチャンスの場が数日後に到来するそうです」

「よろしい……おい！ ニゴウ!! いるか!!」

……ツザ!!

ニゴウ「お呼びでしょうか？ マスター？」

何も無い所からニゴウが舞い降りた。

相変わらず所々に古い傷の上に新しい傷がついたボロボロの状態だが……さらに手枷と首輪がつけられていた。

「貴様に命令だ、我々の情報提供者から手に入れた情報だが数日後にミール聖教国で各国の人間が集まる。そこで首相たちを皆殺しにしてこい」

ニゴウ「了解しました。すべてはマスターのために」

命令を受けニゴウはミール聖教国に向かおうとしたが

「あ、そうそう。あともう一つだ」

ニゴウ「ツ!!」

首相は言い忘れてたことがありニゴウを呼び止めるためニゴウの首に繋がれた鎖を引いた。

思いつきり引かれたのでニゴウは頭から地面に落ちてしまった。

「おい、何勝手に地面に寝転んでいいって言った!!」

ゴキツ!!

ニゴウ「つぐ?!」

勝手に寝転んだと解釈された首相に顔面を蹴られ壁にブチ当たった。



壁に当たった瞬間、口から白いもの……自分の歯が飛んでいった。

「しゅ、首相殿!? 流石にそれ以上暴力を振るわれたら」

「なんだ？ 私が悪いのかね？」

「い、いえ……作戦に支障が出るかと」

「ああ、それなら問題ない……見てみる」

ニゴウ「か、はあはあはあ……」

壁に叩きつけられたニゴウを見ると普通は脳震盪やらですぐには立ち上がれないはずなのだがニゴウはすぐに立ち上がった。

「……な」

「面白いだろう？ こいつは少しの傷ならすぐ治ってしまうんだ」

「ほほう……つまり死なない程度の傷ならどんなに与えても大丈夫だ  
と？」

「ああ、こいつは本当に便利な道具だ」

ニゴウ「か……は……ま、マスター……命令を」

「あ、そうだったな忘れていた。おそらくその場にアーラム帝国のエルフどもが来るはずだ。あいつらが来るということは奴も来る。ニゴウ……木全はその場に向かい……」

本物の歌う死神アークを殺せ」

## 八十二 兇目 少年少女移動中

アーク「……てな感じだ」

アリス「なるほどねえ……」

皇帝陛下の招集が終わったのち、アリスのところに戻って事情を話した。

アリス「それで……私は質問に答えるだけでいいのよね？」

アーク「ああ、どーせ欲深いのが生き物なんだから俺についてなんか探ってくると思う。主にこの姿についてとか」

アリス「わかったわ!! つまりアークのことを自慢してしまえばいいのね!!」

アーク「おい、話聞いてたか？」

大丈夫かこの主人？

心配しかできないんだが

現在、アークとアリスは馬車に乗ってミール聖教国に向かっているところだ。

例によって早朝に出発し馬車に揺られながら今回のことを話し合っている。

……それにしても護衛の数が多いな。まあ、世界中から国のトップが集まる会議だ。魔族に襲撃とかを警戒しているので騎士や魔法使いの数も異常だ。まるでちよつとした軍の行軍みたいだ。

アリス「……それにしても暇だわ」

アーク「まあ、丸々三日も乗ってりやそうなるな」

馬車も複数台あり俺とアリスが乗っている馬車は中央にあり皇帝陛下は一つ前にある。

俺とアリスは向かい合って座っているがアリスは窓から見える景色をつまらなそうに見つめる。

だが、見える景色は森と草原と山だけである。

アリス「ねえ、アーク？　なんか面白い話ない？」

アーク「……あのなあ、アリス？　俺はあくまでも護衛っていう立場で同行しているんだから駄弁ることは控えろ」

アリス「えー、でも私の使い魔だから主人の世話もしないといけないでしょ？」

アーク「……こういう時に使い魔だからってのはやめようぜ」

アリス「いいじゃない？　ねえねえ、アークってどういう女性が好みなの？」

アーク「……なんで言わなきゃならん」

アリス「気になるだけよ！　ねえねえ!!　どんな女性!?　やっぱり男性って美人が好きなの!？」

まるで子供みたいに聞いてくる。

アーク「……俺は美人って言うよりもその人と一緒にいて楽しかったらそれでいいしな」

アリス「えー!?　面白くない!!」

アーク「注文多いな……あと、しいて言えば清楚な人かな？」

アリス「あら？　私だって清楚だわ!!」

アーク「何に張り合ってたんだ……あと、ちゃんと愛してくれる人」  
アリス「それだったら私に負けるわね!!　私が一番アークと一緒にいた時間は長いから!!」

アーク「はいはい……てかそういうならアリスはどういう男性が好きなんだ？」

アリス「……私……ねえ」

アーク「どうした？」

アリス「私たち貴族って恋愛的なお付き合いってないってお母さまが言ってたわ。お母さまたちの場合は本当に稀でお付き合いする時まで顔を見れないってことがほとんどよ」

あ、そうか……アリスは皇族だからそういうのが当たり前なのか

アーク「……だけでもしどつかの勇者みたいなやつが来たらどうするんだ？」

アリス「基本的には結婚するけど気に入らなかつたら断ることもできるわよ。……ま、でもその前にどこかの使い魔さんが殺しちゃいそうだけど？」

アーク「いや、俺はアリスを幸せにできる奴だったら許すけどダメ

だったら殺すだけだ」

愛のない結婚などこの世から消えてしまえ

アリス「うふふ♪……はあ、君みたいな男性と結婚したいなあ」  
しかし、そんな平和な時間に邪魔が入った。

ガタツ!!

アリス「きや!?!」

アーク「おっと」

急に馬車が止まりアークは鍛えているので耐えれたがプリンセスのアリスは浮かんでしまいアークにぶつかってしまった。

アーク「だ、大丈夫か?」

アリス「あ、ありがとう」

お互い抱き着くように受け止めたがアリスの顔がアークの顔の数cm前まで接近してしまった。

お互い少し見つめあったが気を取り戻し顔を赤らめた後、離れる。

アリス「何かあったのかしら?」

アーク「さあ? ちょっと見てくる」

馬車の扉を開け駆け足で前方のほうに向かう。

一応、手にはTHIRD-6を握っておく。

アーク「どうしたんですか?」

前方のほうに行くと他の騎士たちよりかは派手な鎧を着たエルフ……恐らく騎士長だろう……がいた。

「あ、アーク殿……実は」

「進路上にこれが」

アーク「わお」

そこにあっただのは人間サイズの巨大な岩が山のように積まれている。

だが、不自然であった。

アーク「……なんで山もねえのにここにこんなでかい岩があるんだ?」

辺りを見渡すがこんな巨大な岩が振って来るような山はないし、ミール聖教国に続く道も獣道ではなく人工的に作られた道なのでおかしいのだ。

アーク「……迂回は？」

「出来ませんが……この道がミール聖教国に行ける近道で迂回すれば時間がかかります」

アーク「陛下とアリス様をこれ以上外に出すのも危険だしな……魔法で退かすってできる？」

「やってはいるんですが……もう少し時間がかかります」

ふと横目で見ると何人かの魔法使いが魔法で破壊しようとしてたり騎士が力づくで退かそうとしている。

アーク「……一応、警戒はしといてください」

つと言つてため息をして空を見上げた瞬間

ヒュウウウウウウウ……

アーク「ん？ 今何か光って……ッ!! 全員、防御急げ!!」

ドスススス!!

突然、空が光ったと思ったら空から矢が降り注いだ。

アークは以外は気が付いておらず急いで防御をするよう伝えた……

「ふー……矢をたくさん買ったかいがあったわ」

すると岩の上から人間が出てきた。

旅人にしては格好は蛮族みたいだった……まあ、要するに山賊だ。

「おー？ これはこれはエルフの集団じゃねえか」

「なあ頭あー！ こいつらを奴隷で売ればもうかるかな!？」

「知るかよ。お？ てかこれってアーハム帝国の馬車じゃねえか!!」

矢の雨が降り注ぎ終わった瞬間、ノコノコと岩の上から山賊たちが出てきた。

岩の上から見下ろしてみると矢が大地を覆っていた。

「マジじゃん!? 確かミール聖教国で会議があつたはずだからそいつらかな!？」

「え、じゃあ第二皇女もいるってことだよな!! 俺、一度でいいからその女性の肌触ってみたかつたんだよなあ!!」

「おいおい、だったらそいつを捕まえて好き勝手に(ズドオン!!)ぐへ!？」

「な、何の音だ!？」

アーク「ふいー……あぶねえ……すまん騎士長、勝手に盾の中に入らせてもらって」

「い、いえ……我々もアーク殿の警告を聞いていなかったらハチの巣になってましたぞ」

モゾモゾと盾の陰から騎士たちが出てきた。

アーク「いやはや……盛大な挨拶ですね? どの阿保ですか?」

右手にTORNADO-6を構えながら問う。

アーク「騎士長? こいつ等って……」

「ああ、どう見ても不貞腐れ者どもだ」

「あれ? 理解が早くて助かりますねえ? てなわけで金目のものは全部おいていってくださいいな?」

アーク「嫌だつて言えば?」

「全員殺して女は俺たちの物にする」

アーク「……ふーん」

こいつら……俺が誰かわかってやってるのか?

「アーク殿……どうされますか? 陛下に報告をした方が?」

アーク「……そうだね、陛下にはしておいて。でもアリス様には秘密で」

こそこそと騎士長と相談していると

プルプルプル

アレクサンダー『アークよ? 何かあつたのか?』

アーク「あ、噂をすれば……皇帝陛下、少々問題ができました」

アレクサンダー『……山賊か?』

アーク「あれ? わかってたんですか?」

アレクサンダー『森の中で止まるつと言ったら魔族の襲撃か山賊の襲来であろう?』

ほぼ襲われている件について

アーク「まあ、そうなんですが……アリス様には秘匿しておきます」  
アレクサンダー『そうしておけ、どうせ殺すのであろう?』

アーク「まあ、そうなんですが……ではそのような（カチャ）  
……んで、アリスつと」

アリス『あ、アーク!! どうだった!?!』

アーク「あ……アリス? 少し窓のカーテンを閉めといてくれな  
いか? 俺の目の前に死体だらけの道があるから、お子さんは閉めて  
おくのをお勧めするぜ」

アリス『お子様じゃないもん!! ……でも見たくないから閉めとく  
ね』

アーク「賢明な判断だ。あ、ついでにiDROIDでイヤホンでも  
して【おいしいツーハン生活】(MGS4の最強の曲)でも聞いとけ」  
アリス『はい!!』

「おいおい? 何話し合ってるんだ? 言っておくが逃げ出そうとし  
ても無駄だぜ? (パチン)」

ガサガサガサ

アーク「……囲まれているか」

茂みから続々と山賊が出てくる。

数は……大体100人くらいか。

アーク「騎士長、少し頼み事があるんだが……でいいか?」

「む……了解しました。ご武運を」

騎士長に耳打ちした後、俺はみんなより一歩前に出た。

アーク「えつと……山賊の皆さん? 誰に向かってやってるかご存  
じで?」

「知るかよ。それより……お前、美人だな？ どうだ？ 俺らの仲間に来ないか？」

アーク「お断りします……それで？ 誰かの依頼とかでもなく？」  
「おい……そろそろ回答をいえよ」

アーク「ふむ……誰でもなくただ襲ったと……なら、大丈夫ですね」  
これ以上聞く情報はないと確認したアークは懐からiDROIDを取り出し……人間に戻った時に新しくつけ加えられたボタンを押す。

『Please!!』

アーク「……報復」

あ“あ“あ“あ“あ“あ“あ“あ“あ“あ“あ“!!

「な、なんだ!？」

突然、目の前に美女が出てきて変な板を構えたと思いきや黒色の液体に似た何かに包まれた。

そして、液体が完全に固まった時には……

アーク「ふむ……なかなか悪くない着心地だ」

「お、おい……い、今クソ美人な女がいたよな？」

「あ、ああ……」

固まっではがれた時にはハゲた兵士が立っていた。

アーク（……最後になった奴に無料でなれると聞いたが……少し癖があるな）

武装は手に前にボススライムに破壊されたFN SCAR—H Mk. 17と背中にカールグスタフM2が装備されていた。

アーク「では、騎士長……手筈通りに」

「ああ、総員!! 進め!!」

「な!?! 血迷ったのか!?!」

四方八方囲まれているのに急に岩に向かって突撃を始めた。



急いで山賊は矢で足止めしようと構えるが……一步遅かった。

アーク「あーらよつと」

アークは肩からカールグスタフM2をか構え

ずひゅううううううう……

ズドオオオオオオオオオン!!

「ぐぐわあああつあああ!?!」

カールグスタフM2から放たれた対戦車砲弾は岩に命中し大爆発を起こした。

……土煙が晴れるとそこには山賊だったものと粉々に砕けた岩で道ができた。

「よし、行け行け行け!! アーク殿が殿を担当している間に行け!!」

ぞろぞろと排水溝から水が流れていく感じに皇帝の乗った馬車と護衛の騎士たちが出ていく。

あとはアリスの乗った馬車だけだが

「くそ!! こいつだけでも!!」

山賊の一人がアリスの乗っている馬車の扉に手をかけ開けようとしたが

アーク「触んじやねえ!!」

腰からマチェーテを抜き取り新しくもらった神様特典のサポートを受けながら投擲した。

綺麗な弧を描きながら飛んでいき

ドスツ!!

アリスの馬車につかまっていた山賊に見事命中した。

アーク「よし」

サイボーグの跳躍で一気にアリスの馬車に近づく。

少々、血がついているが……拭けばなんとかなるかな。

アリス「ねえ、アーク? 今何か強い振動が来たけどなに?」

窓からアリスが出てきて先ほどの振動は何かと聞いてくるが  
アーク「ああ、少しでかかい鳥がいたから退かしたただけだ」  
アリス「あら、そう？　ところでアーク？　この【おいしいツーン生活】の意味が分からないんだけど？」

アーク「……まあ、いつか分かるよ（適当）」

適当にアリスからの不満を受け流し窓を閉じた。

アーク「追撃は……してくるか」

アリスの馬車の上に乗リ後方を見ると先ほどの山賊たちが馬や使役したのであろう使い魔で追いかけてくる。

アーク（……これ以上時間を食ったらミール聖教国の会議に合わない可能性が出てくるな……仕方ない……少し殺しておくか）

騎士たちも山賊の包囲網から脱出できているので後は逃げ切るだけなのだが……ミール聖教国まで来たら国の威厳に泥を塗りそうなのでFN SCAR-H Mk. 17を構えトリガーを引く。

ズドドドドドドドドドドドドドドドド!!

銃口から放たれた7.62mm弾は山賊の体を引き裂いていく。

新品同然の騎士の鎧でさえ貫く弾丸で山賊が来ているようなボロボロの鎧を容易く貫いていく。

アーク「……やっぱリコイルが強いな。7.62だから仕方ないけど……そろそろ5.56mmのアサルトライフルでも開発しようかな？」

目の前で人が死んでいってるのに平然とした雰囲気になったマガジンを抜き取り新しいマガジンをたたき込む。

そして、フルオートから単発に切り替えトリガーを引く。

ズドン!!　ズドン!!　ズドン!!

アーク「ん、やっぱこの距離になると単発撃ちが当たるな」

即席のマークスマンライフルで一人ずつ呼吸を止めながらヘッド

シヨットをかましていく（もちろん神様特典の補佐で）

アーク「ふー……逃げ切れたか」

不利だと判断したのか山賊は引き返し消えていった。

こうして少々問題があったがアークとアリスたち一行はミール聖  
教国に向かっていった。

## 八十三発目 ようこそ、ミール聖教国へ

世界会議でアークが呼び出されアリスとともにミール聖教国に向かっている途中で妨害が入ったが無事にたどり着いたアークたち

アリス「はあ……ついたけど夕方……」

アーク「でもいいじゃないか。会議は明日らしいし」

追撃は振り切り会議前日にミール聖教国に到着した。

ミール聖教国はやはり宗教の国らしくあちらこちらに教会や寺院があつたりした。

アリス「……別に今からでもいいじゃない」

アーク「なら、ミール聖教国の観光がいいのか？ 終わったらすぐに帰るが？」

アリス「嫌だ!!」

アーク「なら、我慢しろ」

これは皇帝陛下から聞いた情報だが明日の早朝に俺への審議を開始するようだ。

それでその間、自由時間（という観光）をしてくれとミール聖教国側から来たようだ。

現在、俺とアリスも自由時間が割り当てられたのでアリスは黒いローブ、俺はスーツを着ていた。

アリス「なら、速くいこアーク!!」

アーク「悪いが俺は部屋で大人しくしておく」

アリス「何ですよ!! せっかく任務とか忘れて一緒に回りたいたいのに!!」

アーク「なんで俺なんだよ……ほかの騎士を誘って行けよ」

アリス「ヤダヤダ!! アークと一緒にいい!!」

駄々こねる子供みたいにアークの腕を引っ張るアリス

アーク「俺は長距離護衛で疲れたんだ。ほかの騎士に護衛してもらいながら行って来い」

つと言つてはいるが……実際は違う

アーク（ノエルに会ってしまったらどうするんだよ!!）

そう、一番心配なのは襲撃とかではなく「ノエルに偶々あってしま  
う」ということだ。

ノエルはバサビイ共和国にいた時は派遣で来ただけで本来は祖国  
のミール聖教国に住んでいるのだ。

……ノエルと別れるとき結構酷いことを言ってしまったのでまた  
会うのがすごく気まずい。

アーク「とにかく……俺は行かん」

アリス「むー！ 別に硬くならなくてもいいじゃない!!」

アーク「硬くても柔らかくても関係ない……俺は芋る」

アリス「騎士たちも私と一緒にだつたら畏まって落ち着かないもん!!  
ねえねえ!! アーク!! 一緒に行こうよ!!」

アーク「だあ!? 子供か!？」

……前世で子供を持っている親ってこんな気持ちだったのか

アーク「とにかく行かんぞ俺は……ノエルに会ってしまうだろ」

アリス「……今ノエルって言わなかった？」

アーク「気のせいじゃね?（汗）」

あぶねえ……そーいやエルフって地獄耳だったわ

アーク「あと異世界人の俺が行つても楽しいか? こういうのは同

じ世界の奴と一緒に行って話題が会う奴にすればいいだろ」

アリス「……どうしても行かないの?」

アーク「ああ、ほら、誰か誘って行ってこい……んじゃ後でな」

アリス「……あ」

だったら無理やり手をつないで一緒に行かせようと思ひ手を伸ば  
したが彼の手には届かず空を切った。

その間もアークは歩を早め離れていった。

アーク（……こんな血まみれに染まった奴と一緒に行くなんて嬉し  
いわけないだろ）

アリスと別れ大通りであろう道をズンズン早歩きで進んでいく。

だが、行き先は本来泊り場所でもあるミール聖教国の大聖堂の近く

にある屋敷に向かうはずなのだが足は別方向に向いていた。

アーク「ツはあゝゝゝ……」

大通りには恐らく宗教的なものだろうローブを着た女性や首に十字架をかけている男性やらたくさんいる中……アークは大きいため息を吐く。

アーク「……俺も殺しなどしてなかったら行けたのかもな」

少し後悔が出てくる。

もし、あの時意識を保って決闘を挑んでいたら殺しなどしておらず「歌う死神」など呼ばれることもなく異世界系ラノベみたいにアリスと一緒に普通に遊んでたりできたのかもしれない。

アーク「……ま、この運命も受け入れたのが今の自分だからな」

だが、流石に護衛対象のアリスを悲しませるのは使い魔失格だ

アーク「……ぬいぐるみとか上げたら喜ぶかな？」

前にアリスの部屋に行った時、熊とか猫のぬいぐるみをあげたら喜ぶかな？

なんならI K O Aの「ブローハイ」っていうサメのぬいぐるみあげようかな？

アーク「……まあ、アリスが喜べばそれでいいか」

……早く、好きな人と幸せになって俺を安心させてくれねえかな  
俺が守るよりアリスの好きな奴に守られたほうがアリスにとつて  
幸せだろ。

空が黒くなり夜になるのを知らせ、月が昇っていき夜になる。

アーク「はあ……帰るか」

結局何もやることなく帰ることにした……

トボトボと空を見上げながら大通りを歩き明日のことを考えていると

ドンツ

??「きゃ!？」

アーク「あ、すみません!!」

視線が上に向いていたので前方から来た女性に気づかなかった。お互い正面からぶつかってしまい尻もちをついてしまった。

アーク「すみません……少し考え事をしていて」

??「い、いえ!! 私も荷物を持ちすぎて前を見てなかったのだから、ヴェノムから油断はするなよってさんざん言われたのに……それにしても……どこかで聞いたことがあるような声だな？」

??「あ……教会に届ける荷物が……」

倒れたところを見てみると地面に本や紙が散乱していた。

アーク「あ！ す、すみません!! 俺も拾います!!」

??「い、いえいえ!! 私も手に持ちすぎて前の方の視界を遮ってしまったので!!」

地面に落ちた本やらをアークとぶつかってしまった女性二人で拾う。

一緒に拾っている途中でチラリと見たが……ぶつかった女性はここかの教会のシスターだった。

「黒い修道服に金髪」という一般的な姿をしていた

アーク（ノエルも同じ姿だったな……いや、まさか会わないようにしようって決めたのに決めた瞬間会うってどんだけフラグ回収が速いんだよ）

??「ふー……ありがとうございます手伝っていただき」

アーク「いえ、俺も不注意でした」

地面に散乱した本や紙を全部回収し終えた。

??「あれ？ その服……ま、まさかねあ、あの、このあたりでは見たことの無い服ですが……旅人さんか何かですか？」

アーク「え？ ま、まあそんな感じですよ」

??「……そうですか。あ！ すみません、気を悪くしてしまい……私の友人もそうでしたので」

アーク「へー、そうなんですか」

なんかあったなあ……ノエルに旅人って嘘ついて、しかも正体も隠してさ……やべ、胃が痛くなってきた

??「あ、自己紹介まだでしたね!!」

アーク「あ、そうですね……てかなんで俺ら初対面のはずなのにこんなに馴れ馴れしく話せたんだ？」

??「ははは……それじゃ、私からですね!! 私の名前は……」

ノエル・スカルツオつて言うんです!!! よろしくお願いします!!!

アーク「……んえ？」

ようやくお互いの顔が見えて……気が付いた。

そう、目の前にいるのは別れるときに酷いことを言ってしまった心の底から謝りたいと思っていたノエルだった。

ノエル「……どうかされましたか？」

アーク「あ、いえ、大丈夫です、本当に、はい」

……どうしよ、今一番会いたくない人に会っちゃったんだがさっさと戻ってりやよかったなこれ

冷や汗を掻きながらどうやってこの危機的状況を打破するか考える。

ノエル「どうしましたか？ 汗、すごく出てますが」

アーク「い、いや少し暑くなって」

ノエル「そうですか？ 今は夜なので寒い気はしますが……」

アーク「あ、あはは……」

ノエル「あ、えっと……お名前をお伺いしても？」

アーク「……」

嘘をつく……いや、これ以上ついたら俺の胃が耐えれないあと、バレたらさらに面倒なことが起きる……

アーク「すう……あー……俺の……名前は……」

ノエル「そ、その……恥ずかしいとかなら無理しなくていいのですよ？ 昔いた私の友人もちよつと事情があつて嘘ついて身分を隠し



ていたので」

ごめんノエル……多分それ俺だわ

……仕方ないこの方法でいくか

アーク「……行けるな」

視線を泳がすふりをして周りを見る

夜になつてもなお人は多い……振り切るには絶好の機会だ

アーク「歌う死神……アークです」

ノエル「え……アーク？」

答えを聞いた瞬間、時が止まったような感じがした。

ノエル（本当に……アーク？）

ノエルの目の前にいるのはハゲた兵士ではなく雪のように白い髪に夕焼けのように赤い瞳をした女性がいた。

アークのスーツを見た時、まさかと思つて疑つていたが正体を知つた瞬間確信した。

ノエル「あ、アーク……その……前のことなのですが……」

前に彼の心を真つ向から否定するようなことを言つてしまった

何時かまた会つて謝ろうと思いつつと待つていたが今がその時だと思ひ話そうとしたが

アーク「んじゃ、また今度なノエル」

ノエル「え、待つてアーク!？」

アークは急に走り出し人ごみの中に紛れ込んでしまった。

ノエルも必死に追いかけてかけようとするが鍛えているアークとは差は天と地の差がありあつたいうまに引き離されてしまった。

ノエル「待つて！ アーク!! 最後に会つた時の言葉であなたに謝ることが!!」

アーク「悪いなノエル!! 俺は用事があるんだ!!」

そういう人ごみの中にアークは消えていく

そして人ごみを抜けたころには

ノエル「……いない」

アークは消えていた

ノエル「……マザーになんて言おうかしら」

アーク「ふー……まけたわ」

ノエルにバレて人ごみに紛れて振り切り路地裏で隠れていた  
アーク「何でこんなにも悪運がいいんだよ」

ここまで来ると自分の悪運が気になってくる

アーク「はあ……帰って……銃の手入れでもしとくか」

泊まり場所に戻ることにようやく方向を決め歩き始める。

ついでにレインコートを被り顔を隠す。

アーク「……これヴェノムにバレたら殺されるな……ん？」

トボトボと帰っていると前方から一人のフードを深くかぶった人  
型のナニカがやってきた

だが……足取りが千鳥足だった。

アーク（……大丈夫かアイツ？ 今にも倒れそうだが）

路地裏なので暗いがフードから出ている銀色の髪が印象的だった

……だがなぜ

アーク（……なんでこんなにも彼女に会いたいって思うんだ？）  
すると

パタン

千鳥足だった銀髪の女性は風に押された枝みたくに倒れていった。

アーク「ッ!? おい、大丈夫か!」

倒れた女性に近寄り抱き上げ大丈夫か聞く

??「あ……マス……ターの命……令を」

アーク「あー……意識はあるか。えっとこの場合ってどうするんだっけ？」

頭の中で中学時代に学んだ救助のやつを必死に思い出す

……それにしてもどこかで聞いたことがある声だな？

アーク「……とにかく容体がわからないとな」

どういう症状なのかかわからないと意味がないので少々恥ずかしい  
が「彼女」の服の腕袖をめくる

アーク「……体温はまだ暖かいから低体温症とかでは……っはあ  
!？」

めくった瞬間見たのは

白・肌・に・痛・々・し・く・残・る・擦・り・傷・、・打・撲・痕・、・切・り・傷・、・う・つ・血・、・腫・れ・が・あ・り・古  
い・傷・の・上・に・新・し・い・傷・が・あ・る・と・い・う・酷・い・腕・だ・つ・た

アーク「まさか……奴隷？」

頭の中で勝手ながら推理をする。

奴隷だったら飼い主に暴力でこうなるのは予想できる……が  
ここミール聖教国は奴隷を禁じているのであり得ない。

アーク「……それか戦争孤児か？」

戦争孤児……それは戦争によって親を失い財産もない子供のこ  
だ

最近の戦争っていえば……俺のしかないな

人間って極限状態になると宗教とかにすがりつくらしいくミール  
聖教国に来たのかな？

アーク「ま、それより治療だ」

iDROIDを取り出し治療薬品を出す

以前のポイント 32500

獲得（山賊殲滅） 5000

生産

医療用キット一式 1

補給

FN SCAR—H Mk. 17の弾 1

カールグスタフM2の弾 1

合計ポイント 32997

アーク「……にわかだけど行けるかな？」

ヴェノムには体術をオセロットには拷問術をミラーには銃の使い

方を教えてくれたが治療までは教えてもらってない

……てかその時はサイボーグで開発ポイントを払えば治療できたから教えてもらってないのだ。

アーク「パラメディック……いや、あの黒医者に頼んで大丈夫か？」  
とりあえず腕に包帯を巻く

??「私……は……」

アーク「あ、起きたか？ てかどうしたんだこの傷？」

??「……関係のないことです」

アーク「そうか……」

夜でしかも路地裏のせいで女性の顔は見れないが……若い声だな。

??「なぜ？」

アーク「は？ 何が？」

??「なぜ治療をするのですか？ マスターからの許可は得ていません」

アーク「え、だって……そのマスター？ ってやつは知らんが怪我している人を治すのは悪いことか？」

??「……わかりません」

アーク「わからないのなら別にいいじゃないのかな？ 俺は俺の意思で君を治療するだけだから」

??「……意思」

アーク「さてつと……応急だが治療はできた。じきに治ると思うからその間は傷口を掻きむしったりするなよ？」

??「……戦闘では不要なことだと思えます」

アーク（……戦闘ってことはそのマスターとやらの私兵か？）

医療キット一式を直し女性に言う

アーク「あー……気を悪くして悪いかもしれないが、もし困ったことがあれば他人に相談しろよ？ 一人で抱え込むのは一番ダメだぞ？」

??「……自分で解決しないとマスターから怒られます」

アーク「解決できないほうがマスターに怒られるだろ……さて、一人で帰れるか？」

?? 「問題ありません」

アーク「そうか、んじや気を付けて帰ろよ」

?? 「はい、ありがとうございます」

アーク「おう……あ、あとそのマスターになんか聞かれたら……この名前を教えてやりな」

本来は自分の名前を教えるなど自爆行為だが……これくらいは良いだろう

アーク「歌う死神……アークに会ったてな」

?? 「……アーク？」

アーク「んじや、達者でな」

そう言い残してその場から立ち去る

別に殺す残虐性はあるが困ってる子を見捨てる優しさはある

アーク（……これでマスターとやらも変わってくれるといいんだがなあ）

だが、やっぱり気になるんだよなあ

アーク（あの声……どこかで聞いたことがあるんだよなあ？）

頭の中では何か引つかかっ

どういうわけか先ほどの女性とはどこかで会ったことがある気がした。

アーク（思い出せ……彼女とはどこかで……あれ？）

するとある一つの違和感を感じた。

アーク「……俺、なんでさっきの人を見た時に女性だってわかったんだ？」

銀髪も俺が抱えた時に気が付いただけで格好も頭からすっぽりフードを被っていたから普通は気づかないのに……なんで俺は見ただけで分かったんだ？

すると

バチツ!!

アーク「イツ!？」

突然、頭がスパークしたような痛みに襲われた  
すると頭の中でフラッシュバックが見え

??『……逃げて』

アーク「ツ!! 待って!! 君!! 名前……は……」  
心当たりを見つけ急いで来た道に戻って先ほどの女性に会おうと  
したが……いなかった。

アーク「やっぱりさっきの声って……」  
ようやく思い出した……あの前に見た俺が殺されそうになったが  
殺されなかった夢の中で聞いた女性の声だ。

アーク「君は……一体、誰なんだ？」  
ようやく会えたと思つたのに……  
そう思い悔しい顔で考えていると

アリス「あれ？ アークじゃない？ なんでここに居るのよ？」

アーク「え？ あ、アリス？ 君こそなんているんだよ？」

後ろから声をかけられたので振り返ると自分の主人がそこに立っ  
ていた。

アーク「宿つて確かここじゃないはずだよな？ なんているんだよ  
？」

アリス「……え、ここじゃないの？」

アーク「……まさか迷子？」

アリス「そ、そんなわけないじゃない!! こ、皇族の私が迷子にな  
るわけないわ!!」

アーク「それじゃ、ここから宿までの行き方は？」

アリス「……た、多分こっちだわ!!」

バツ!つと指を指しているが宿とは反対方向に向いていた

アーク「……迷子なんだな」

アリス「し、仕方ないじゃない!! 初めて来た土地なんだから!!」

アーク「はいはい、言い訳は良いから帰るぞ」

アリス「……どうしたのアーク？ 顔が怖いよ？」

アーク「え、俺そんな顔してる？」

アリス「うん……あ、せっかくだからこのまま観光行こうよ!!  
うすれば自然と怖い顔も消えるわ!!」

アーク「……それはただアリスが行きたいだけだろ？」

アリス「ち、ちがうわ!! ただ使い魔が一人可哀そうにいたから  
誘っただけわよ!! そ、それに前に『一緒に街を散策よう』って約束  
したじゃない!!」

アーク「はあ……ところでアリスはお金は持つてるのか？」

アリス「……ナイデス」

アーク「……どこ行きたい？」

アリス「え、いいの？」

アーク「ああ、せっかく外国に来たんだからな」

アリス「やった! それじゃね……」

アーク（……やっぱどう考えてもデート……いや、やめよう）

アリス「ん? どうしたのアーク? 今度は顔が赤いわよ？」

アーク「い、いや何でもないさ!! はら早く行くぞ!!」

アークの顔にアリスが見つめてきたので急いで隠しアリスと一緒に  
残り少ない自由時間を満喫しに行った。

……だがそんな二人を見つめている人影がいた。

?? 「……あれがアーク」

屋根の上に一人の「銀髪の女性」が立っていた。  
腕には先ほどアークが巻いた包帯があり、少しは痛々しい肌は隠せていた。

?? 「……自分の意思」

数分前に言ったアークの言葉が耳に残る……が

?? 「私はマスターの道具なので関係ありません」

そして生気を感じない瞳で下にいるアリスと一緒にいるアークを見る

ニゴウ 「殺害対象を発見しました。命令通り実行します」



## 八十四発目 舞い降りる偽の死神（ニゴウ）

「それではこれより歌う死神アークに対する審議会を開始する」

「アークは前に出てください」

アーク「はい」

ミール聖教国に到着し少ない時間だがアリスと観光した（その時やっぱりぬいぐるみを買ってほしいと迫ってきた）

以前のポイント 32997

換金（観光用資金）

1ポイント＝100ゴールド

合計ポイント 32996

現在、前世で見た国際連合の集まる場所みたいな会議室の真ん中にアークがいる（顔はあまり見せたくないのでレインコートのフードを深くしている）

時刻はちょうど朝の11時くらいで天窓から見える空には太陽が見える。

「歌う死神アークよ、なぜ呼ばれたのかわかっているか？」

アーク「まあ、大体は予想できてます」

「……これは其方がやったのか？」

アーク「やってません」

と答えたものの……

「こいつがやった!!」

「いやいや、やっていない」

「ではこの鉄の矢じりと壁の穴はなんだ!!」

「知るかそんなもん!？」

「この死神以外ありえないだろう!？」

「だがアークは国外に出てはないんだぞ!!」

とまあ、俺の処遇で口論が起きていた。

今は「アークが犯人で処罰すべきだ派」と「彼は無実で重要参考人

で意見を聞くべきだ派」で別れている（大体6：4くらいで意見を聞く派が優勢だ）

まあ、俺を殺さない派が多いから問題はないが……

アーク「これでマシな判決が出てくれたらありがたいんだよなあ」  
アリス「ふあゝ……アーク、まだ？」

アーク「欠伸するなアリス、あとまだかかる」

隣にいる主人もあまりにも長い口論で暇になっている

アリスも先ほど審問があったが最近のアークの様子とかそういうのだけだった。

アーク（それにしても……本当に犯人は何者だ？ 俺と同じ攻撃又は能力を持つてるって……転生者か？）

「すまん、待たせたな。結論が出た」

アーク「……ようやくか」

長いよ……たった一つの結論を出すのに時間かかりすぎだろ

「結論から言うと……君の予想通りかもしれないが「アークを重要参考人として扱う」だ」

でしようね

だってやってないもん

アーク「んで？ 俺の意見を聞きたいと？」

「そうだ……っというよりその方法しかない」

アーク「……まず聞きたいがこの中でどっかの今は亡き<sup>バサビィ共和国</sup>国みたいに禁呪を使った国っていますか？」

ザワザワ……

アーク「まあ、いるわけないですよねえ……」

会場をざわつかせただけで何も出なかった。

「な、なぜ禁呪が出てくるんだ？」

アーク「……いえ、もしかしたら私みたいのがもう一人現れたのかと」

「そ、そうであるなら……どうすればいいのだ？」

アーク「どうって言われても……どうしようもないですよ。犯人が分からない限り特定なんて無理なんですから」

「な、ならこのままいつも道理に過ごせというのか!？」

アーク「……そうなりますね」

「ふざけるな!! シュレイド王国の王家とその側近たちを一夜で滅ぼした実力の持ち主なんだぞ!!」

「やはり貴様がやったのではないのか!？」

全体の4割ほどのアークの反対派がわめくが

アーク「……逆に聞きますが俺がシュレイド王家を滅ぼす理由は何ですか？ 俺はアリス様に危害を加えた者だけを滅ぼすのであって今回の惨殺事件ではアーハム家には何の関係もありませんよ?」

「侵略でもしようとしているのではないのか!？」

アーク「……しませんよ。侵略したって仮にでも我々は魔族と戦争のようなものをしているから戦力が減ってデメリットにしかならぬいじゃないですか?」

「だ、だが……」

反対派は何とか反論しようと考えるが何も出てこず苦虫を噛み潰したような顔になる

……まあ、こんなバケモノ前だったら誰だって警戒はするか。

アーク「あと、気になったことがあるんですが……シュレイド王国の現状ってどんな感じなんですか?」

「指揮するものがいなくなりそれぞれの派閥が誰がトップになるかで国中混乱しているそうだ」

ここまで来ると犯人の目的がわからんな?

「ま、とにかくアークの処遇は「重要参考人」として我々に意見を言うってことになったわけだ」

アーク「……まさか、またここに来るのか?」

「すまないな……事件が解決できるまで来てくれ」

結局、何の進展もなかった

来た意味あったのかよ?

アリス「でもいいじゃない? 国際的な疑いも晴れたし」

アーク「……でも毎度ここに来るのまなあ」

毎度ここに来るのも嫌なんだよなあ

どうしよ、こいつら用にiDROIDでも作ろうかな？

アーク「ま、いいか……はあ……」

もう何回目なのかわからないため息を吐き会議室の上にある天窓から空を見る。

まだ、空は明るく時間もそんなに立っていないのがわかる。

アリス「今から帰ったら……夜くらいにつくかしら？」

アーク「……俺だけ先に帰りたいんだが」

愚痴りながらも帰る用意をする

どうやら流れ解散らしくそれぞれの国のトップが出口に向かう

……が

《運命はここから狂いだした》

ガチャガチャ

アーク「あれ？ どうしたんですか？」

「い、いや……なぜか扉が開かないんだ」

先に席を立って扉に向かっていた他国のトップが出ようとするが何回もドアノブを回しても開かないのだ。

アレクサンダー「どうしたのかね？」

アーク「あ、皇帝陛下……実は」

アレクサンダー「……壊してしまえばいいのでは？」

アーク「それはダメですよ!? 他人の物を壊すのは流石にダメですよ!?!」

「……ダメです開きません」

「鍵が壊れたのか？」

「壊すか？」

いや、なんでこの世界の住民は壊すのを優先するんだ!?

アーク「……少しは待ちましょうよ皆さ」

(ゾワア!!) ッ!?!」

アリス「ん? アーク?」

アーク「つか……はあ……はあ……はあ」

な、なんだ今のは?

アーク「あ、アリス……今、何か感じなかったか?」

アリス「え、何も?」

アーク「そ、そうか」

何だろう……今さつきドス黒い何かと殺気を感じたような  
その時であった

トン……

「ん? 誰だ貴様は?」

会議室の中央に音もなく現れたのは……一人の黒い仮面をかぶつ  
た人間だった

全身を黒いマントを被り顔には黒の仮面と明らかに怪しさ満点の  
人間……だが隙間から出ている銀色に輝く髪が印象的だった

「おい、誰だ貴様は? ここがどこなのかわかってるのか?」

??「ここは世界会議の会議場でしょうか?」

「ああ、だが貴様は不法侵入者で捕まるがな」

アリス「なにアイツ? どこから来たの?」

アーク(……なんだ、この胸騒ぎ?)

なぜかはわからない

自分の呼吸が早くなり冷や汗が出てくる

目の前が暗くなるがそこにいる黒いマントを着た「女性」からは  
目が離せなかった。

??「そうですか……なら……

カシヨ

マ・ス・タ・ーのた・め・に・死・ん・で・く・だ・さ・い」

アーク「ツ!? 全員伏せろ!!」

アリス「キヤア!?!」

アークは咄嗟にアリスを抱きかかえ地面に倒れた(ちなみに皇帝は蹴っ飛ばして倒した)

アークは中央に降り立った銀髪の女性を警戒して見ていたので気が付いたが女性の手には「二丁のドラムマガジンタイプのV.Z.61スコープイオン」が握られていた。

ズドドドドドドドドドドドド!!

「ぎゃあ!?!」

「いほ!?!」

アリス「な、なに!?!」

アーク「くそ! 敵襲だ!!」

連続として爆発音の後に硝煙の匂いと血の生臭さを感じた瞬間、敵襲だと断定した。

アーク「アリス!! 俺はあいつの相手をするからその間に他の国の代表を連れて避難しろ!!」

アリス「う、うん!! わかった!!」

アリスも現状を瞬時に理解し危険でここに居てもアークの邪魔になると判断しすぐ行動に移る

「敵襲!! 敵襲!!」

「囲え囲え!!」

会議室にいた警備兵もすぐさま対応するため兼を抜き盾を構えて数十人の警備兵が謎の襲撃者を囲う……が

?? 「敵数の増加を確認……FA—MAS、召喚」  
アーク（なんじやそりゃ!?）

何か呟いたと思った瞬間、銀髪の女性の手には現代でもフランス軍  
が使っているアサルトライフルFA—MASが握られていた

?? 「……排除」

そして……銀髪の女性はトリガーに指をかけ引く

ズドドドドドドドドドド!!

銃口から放たれた5.56mm弾は警備兵の体を鎧ごと貫く。

「はああああ!!」

だが、一人に対して数十人が襲っているので凶弾に免れた警備兵も  
いる

免れた残り数名が銀髪の女性からあと数mだったが

?? 「……消去、SAIGA—12召喚」

今度はFA—MASが消えロシアのセミオートマチックショット  
ガンであるSAIGA—12が出てきた

そして、

ズドン！　ズドン！　ズドン!!

何の慌てることもなく近づいた敵を殺していく。

さらにさば切れなかった敵は

ドスツ!!

慣れた手つきでナイフを取り出し迫ってきた敵の脇腹から心臓に  
目掛けて刺す。

アーク（近づかれても落ち着いて狙って行く……あれはよほどの手  
練れだな）

そして瞬く間に警備兵は全滅してしまった。

?? 「妨害を排除……命令を遂行します」

殲滅を確認した侵入者は当初の命令を続けるため

?? 「消去」

逃げる各国のトップに銃口を向けた

アーク（ツ!? やべえ!?!）

?? 「死んでください」

「ひ、ひ!? た、助け」

手にしたF A | M A Sで撃つ殺そうとしたが

ズドン！ ズドン！ ズドン!!

?? 「ッ!? 射撃!?!」

アーク「くそ！ 外した!!」

手にT O R N A D O - 6を構えたアークが銀髪の女性の持つているF A | M A Sを狙ったが外してしまった。

?? 「殺害対象を発見、処分します」

ズドドドドドドドドドド!!

アーク「あぶな!?!」

此方が危険だと判断されたのかこっちに向かってF A | M A Sを撃ってくる。

咄嗟に柱の陰に隠れる。

アーク「……やっぱアサルトライフル相手にハンドガンはきついな」

リロードしながら愚痴る

アーク「……武器変更する暇すらないな」  
柱からそつと覗く

どうやら先ほどの殺されかけた人は逃げ出せたようだ。

アーク「……なあ、ちよつといいか？ そのこの襲撃者さん？」

?? 「なんででしょうか？ 歌う死神アーク？」



……こつちの正体すらもうわかってるのかよ!?

アーク「なんだ? 誰かを人質に取って身代金でも要求するのか?」

??「いいえ……私は『アークを殺してこい』と『国際会議に出席しているトップを全員抹殺』という命令を実行するために来ました」

アーク「へく……それを命令したのは誰だ?」

アークは会話しつつ襲撃者にどうやって近づけるか考える

??「……それはマスターの命令で言えません」

アーク「マスター……ッ!? お前、昨日の夜の!?!」

??「はい、あの時あなたが正体を話したのでわかりました」

何やってんだ俺!?

何で自ら襲撃者に正体をバラしたんだ!?!

??「名前は言えません。マスターによると今から死んでいくやつに教える意味がないそうなので」

アーク「悪いが俺はさらさら死ぬ気はない……それに……どうやら命令の一つは失敗したそうだぞ?」

??「何を言って……ッ!?!」

襲撃者が周りを見るが殺す予定だった各国の代表がいなかった

??「どうして? 扉は開かないよう細工したはず」

アーク「ああ、それならさつきうちの皇帝が魔法で扉を破壊したぞ」

??「……命令の執行……失敗。マスターに怒られます」

アーク「……失敗したんだろ? だから帰って……くればしなないと  
思うがこつちから一つ聞かせる」

??「なんででしょう?」

アーク「その銃と能力、どこで手に入れた?」

??「……」

アーク「俺転生者と同じだったなら納得がいくが昨日の腕の怪我は気になる  
んだよなあ」

??「あなたには関係ないことです」

アーク「へえ、そうかい？」

??「私は……マスターのために生まれてきたのです。だから……死んでください」

アーク「だが断る!!」

同時に柱から出て接近する

それに対して襲撃者は慌てることなくF A | M A Sのトリガーを引く。

ズドドドドドドドドドド!!

銃口から放たれた弾丸はアークの体……ではなく死体を貫いた。

アークは接近する時襲撃者が殺した警備兵の死体を盾にしながら接近してきた。

アーク「ツシ!!」

??「S A I G A | 1 2 召喚」

アークと主激写の距離が3 mになった瞬間、アークは盾にしていた死体を投げ襲撃者はS A I G A | 1 2を出して引き金を引く

放たれた散弾は死体に次々と当たり部位を破壊していった。

死体を陰にして右に回り込んだアークはナイフを取り出し接近戦を試みる。

ショットガン相手に接近戦は自殺行為だが懐に入ればナイフのほうが強い。

ザン!!

ナイフを逆手に持ち刺そうとするが

ツガ!!

アーク「ツく!?!」

手を掴まれ剣先を外に逸らされる。

??「そこです」

アーク「うわ!?!」

逸らされると同時に足を払われ後頭部から地面にぶつけられる。

アーク「う……しまっ!?!」

後頭部をぶつけられ眩暈がするが目の前に反動でナイフの剣先をこちらに向かえらていた。

視界がぶれるが咄嗟に首を曲げる。

曲げた瞬間、顔の真横にナイフが深く刺さった。

?? 「……しぶといです」

アーク「うっせ!!」

再びナイフが抜かれ襲撃者はアークに馬乗りになって全体重をナイフにかけて刺そうとする。

だが、その前にアークのだが足は自由だったので横から蹴りを入れた。

ツガ!!

?? 「うぐ……げほげほ!」

アーク「はあはあ……女性かよ」

蹴った際にわかったが体に縊れがあるので女性で間違いないようだ。

蹴られ地面を転がりせき込む襲撃者とは一旦距離を置く。

?? 「はあはあ……ま、マスターの命令を違反……報告しないと」

アーク「はあはあ……束の間に聞くがシュレイド王国の王家を滅ぼしたのはお前か?」

荒い呼吸をしながら問う

?? 「……そうです」

アーク「やっぱ……か!!」

敵が弱ったのをいいことに休む暇を与えない。

THIRD―6を構え引き金を引く。

が、銀髪の女性は地面を転がり机に隠れる。

アーク「なんで俺の名前を使っているんだ!」

アークも物陰に隠れて問う

?? 「マスターから《全てアークがやったように仕向けろ》と命令されたので」

アーク「っへ! ならとんだ風評被害だわ!!」

物陰から体半分を出し襲撃者と銃撃戦をする

相手はF A | M A SでこっちはT O R N A D O | 6……だが問題  
ができた

アーク（弾がもう無い……）

今、ある弾をあわせると残り8発

それに加え、あちらはどういう原理かわからないが何も無い空間か  
ら次々とマガジンを取り出す

……これ以上、長期戦になればこちらが不利になる

アーク（……アリスたちは皇帝が壊した扉から全員出たから無事

……なら増援がそろそろ来るはず）

時間的に増援は来るだろう

流石に一对百とかなら不利と考えて撤退するだろう。

アーク（頼む……早く来てくれ!!）

だがやってきたのは増援ではなく

カン、カラカラ……

アーク「しまっ!？」

キイイイイイイイイイイイイイ……

アーク（くそ……フラッシュか）

アークがいるところにフラッシュグレネードを投げ込まれた。

視界は白に塗りつぶされ耳鳴りがひどい

少しずつ視界は回復していったが

ガシヤ

視界が完全に回復してるころには額に銃口を向けられていた。

アーク「……」

??「さようならです、アーク」

銀髪の女性はアークの上で馬乗りになり右手のはF A | M A S、左

手には俺が握っていたナイフがあった。

アーク「……なあ、最後に一つきかせてくれ。お前たちがやろうとしているのは何なんだ？」

??「マスターはこの世界の「種族浄化」を望まれています。戦争のない差別なき世界を作ろうといっているだけです」

アーク「種族浄化って……まさか、人間以外の種族を滅ぼすのか？」  
??「そうです、私はそのために生まれたのですから」

アーク「……そうか、あ、最後に一ついいか？」  
??「なんですか？ 降伏ならさせませんが？」

アーク「セーフティ、かかったままだぞ？」

??「え？」

突然言われチラリとアークから視線を外しF A | M A Sを見た

アーク「つせい!!」

??「ツ!!」

支援が外れた瞬間、馬乗りしていた銀髪の女性の持っているF A | M A Sを掴み押しつける。

銀髪の女性は突然、押しのけられ後方に下げられF A | M A Sを落としたがすぐにナイフを構え切りかかる。

対してアークは拳を振りかぶる。

アーク（まさか、引つかかるとは思わなかったが伝説的なM G S 4 ネタが通じるとはな!!）

心の中でM G S 4 ネタができたのを喜びたいが目の前の脅威を無力化するために拳を振りかぶる

アーク「はああああああ!!」

??「つはあ!!」

襲撃者の左手に持ったナイフとアークの力を込めた右手が空中で衝突……することはなかったが交差しナイフはアークのフードに刺さり破き、拳は襲撃者の被っていた仮面に直撃し破壊した。

お互い外したので体が密着してしまっただが追撃をするため次の攻

撃に移ろうとしたが

アーク「……え？」

??「……？」

丁度太会議室の天窓に太陽の光が入り込み部屋全体が明るくなり……初めてお互いの顔を見た

お互いの吐息と吐息が当たるほど近づき、時が止まったように見つめあった。

襲撃者の顔は……一言で言えば「月のように美しいが悲しい顔」だった。

アークの人間態に似た雪のような白い肌に黄色の瞳で月のような綺麗ではなく可憐な人……だったが顔のいたるところに打撲や火傷、切り傷に擦り傷と痛々しい怪我があった。

バチツ!!

アーク「ツア!？」

??「イツ!？」

お互いの顔を見た瞬間、頭の中でスパークが起き始めた。

しかも、普通の頭痛より遥かに痛く立つのだけでもやつとだ。

??「こ……これは!? げ、原因不明の損害発生……撤退します」

アーク「か……は……ま、待て」

襲撃者……「ニゴウ」もこれ以上の戦闘は不可能だと判断し撤退をすることにした。

よろよろと立ち上がり辺りにスモークグレネードをまき散らし入ってきたルートと同じ道から出ていった。

アークも何とか追いかけてしようとするが……あまりの痛みに転んでしまう

アーク「ま、待って……」

震える手は彼女を掴もうとするが力尽きてしまい地に落ちる。

そして、そのまま気を失ってしまうのであった。

アーク「待って……式号……」

## 八十五発目 出てきた欲望

??「……ク！ アーク!! アーク!!」

アーク「う、うん？ こ、ここは？ あれ？ アリス？」

目が覚めるとそこは……どこかの病室だった。

薬品の匂いが鼻を刺し意識を覚醒させるにはちょうど良かった。

ベッドから起き上がり主人の顔を見るとぐしゃぐしゃに泣いていた。

アリス「あ、あーくう……よかったあああ……」

アーク「わ、悪い……俺、気を失っていたのか？」

アリス「ぐす……うん、私が増援を読んで来たころには煙だらけで部屋の中でアークが倒れてた」

アーク「そうか……逃げたか」

アリス「わ、私いいい……アークが死んじゃったかと思っただあああ!!」

アーク「ご、ごめんって!! 泣くなよ!？」

自分が寝ていたベッドの横にアリスが座っていた

まあ、その主人は現在また滝のように涙を出しているのだが

アリス「ぐす……今度、またこんなことをしようものなら恨むからね」

アーク「わ、わかったよ」

抱き着きながら訴えてくるアリス

アークの胸の中に大量の涙を出していたが……アークは離そうとはせずしばらくそのままにしてあげた。

アーク「……それでそのあとどうなったんだ？」

アリス「はあ、すつきりした。えつと……まずね」

そこからアリスが淡々と説明してくれた

アーク「……なるほどねえ」

まず、謎の襲撃者の対策だ

襲撃者……いや、彼女はいつどこに現れて消えるかわからないので各国は厳戒態勢になるそうだ。



不幸中の幸いかターゲットにしているのは王族や首相などの国のトップだけらしく国民まで狙った無差別ではないそうだ。

そして、それぞれの国で行われる国際交流やパーティーは全て中止、城などにこもり事件が解決するまで謹慎するそうだ。

次に襲撃者に関してだが……これについては現状わかっているのは

・トップしか狙わない（推測）

・銀髪の女性

・アークと同じ能力が使える

っていうぐらいしかわからなかった。

アリス「それにしてもアークと同じ能力を使えるって……」

アーク「こりや、面倒ごとが増えてしまったな」

だが、これで世界からは俺の疑いは晴れたはず

後は襲撃者を捕まるだけだ。

アーク「あ、そういえば皇帝陛下は？」

アリス「お父様なら通魔機で帝国と今回のことを報告するのと今後の方針について話すそうよ」

アーク「そうか、なら俺も何か手伝わないとな」

アリス「アークはダメ!! けが人はここに居なさい!!」

アーク「なんでだよ? 別に怪我なんてしてないし元気だぞ?」

アリス「私が来た時に気絶していたのに?」

アーク「……別にいいじゃん」寝 な さ い「……あ、はい」

主人に怒られ大人しく寝ることにした。

ついでにTHIRD―6の弾を補給しておく

現在のポイント 32996

補給

THIRD―6用弾丸 1

合計ポイント 32995

さて、主人に怒られた後大人しく寝るんだが……どうしても襲撃者

のことが頭から離れない

アーク「あの顔……どこかで見たことがあるんだよなあ？」

何とか思い出そうとするが

アーク「……ダメだわ何も思い出せん」

彼女が去る時自分は何かを言ったのを覚えてはいるが何を言ったのかは覚えていない

……だが、彼女に襲われたはずなのにまた会いたいと思ってしま  
う。

コンコン

「失礼します。アーク様、お怪我は大丈夫でしょうか？」

寝ていると扉から白い服のシスターが何かいろいろと入ったかご  
を持って入ってきた

どうやらこの人が看護をしてくれたらしい

アーク「あ、はい。大丈夫です」

「それはよかったです。各国の代表たちが感謝していました」

アーク「……でも警備兵の人たちは助けられませんでした」

「……そんなに自分を責めないでください。あなたがあそこで食い止  
めてなかったら被害はさらに恐ろしいことに会っていたでしょう」

アーク「……もっと力があればな」

悔しいな

俺がもっと警告しとけば……

「……話は変わりますがもう立てるほどですか？」

アーク「ええ、おかげ様で」

「では、少し失礼します」  
すると

パシヤ

……なんか急に水を駆けられた

主人に寝てる言われて横になっている状態で頭に水を駆けられた  
アーク「……………いじめですか？」

「あ、これは『聖水』です」

アーク「聖水？」

聖水とは文字通り聖なる水のことである。

「聖水はとても貴重な水でそのあたりの井戸からではなく太古の昔からあるミール聖教国の大聖堂本部の地下にある洞窟の最奥にある泉から年に数滴しか湧かない水をさらに洗礼や祈り、加護を授けた水です」

アーク「え、じゃなんで俺にかけたんですか？」

「聖水には魔除けの効果があります。実際に魔族は聖水に大変弱く低級の魔族なら掛っただけで体が解けてしまい噂では魔王にも効果的だと学者は予想しているそうです。なので病人の病やけが人の今後の安全を祈るという意味で私たちの国であるミール聖教国は聖水をかける文化があるんです」

なるほど……………でも何も言わずにかけるのはやめてほしいぜ

いきなり聖水をかけられた後、丁寧に馴染ませられ自然乾燥で乾かされた。

「当たり前ですけど魔族じゃないんですね」

アーク「そりやそうですよ」

「……………では、あの時感じた黒い魔力は一体？」

アーク「黒い魔力？」

「ええ、アーク様と襲撃者が戦った時に付近に膨大でどす黒い魔力を感じ一時国民が混乱したのです」

アーク「黒い魔力？ ……いや、俺もだけど……………まさか、あいつが？」

「それにしても噂では聞いたのですが……………お綺麗な顔ですね」

アーク「まあ、自分からしてみれば全くうれしくないんですけどね」  
「では、私はこれで失礼します。お大事に」

アーク「はい、ありがとうございます」

ボタン

アーク「はあ……って言ってもここから出ても仕事があるからなあ」

アリス「襲ってきた襲撃犯の搜索？」

アーク「ああ……なーんで俺の悪運はこんなにも強いんだよ」  
ベッドの上でため息を吐き仮病でも使おうか悩む死神だった。

一方、どこかの廃城

コンコン

「入れ」

ニゴウ「失礼します」

「帰ったか。どうだったか？」

部屋の中には元バサビイ共和国で現在は残党のリーダーである首相がいた。

彼はとある計画のために幹部といろいろと話し合っていたが途中でニゴウが任務から帰ってきた。

ニゴウ「……申し訳ございません。マスターから命じられた『世界

会議に出席したトップの全員抹殺』は歌う死神アークの妨害により失敗。『アークの殺害』も原因不明の頭痛により継続不可能と判断し撤退したので失敗しました」

「……ほう？ 貴様はノコノコと何もせずに帰ってきたというのか？」

ニゴウ「はい、申し訳ございませんでした」

「はっはっは!! そうかそうか!!」

首相は任務失敗してきたニゴウの報告を聞いて高らかに笑いニゴウの肩を掴む

……だが目が笑っておらず笑い方もワザとらしい。

「……それで？ どう責任を取るんだ？」

ニゴウ「……私はマスターの道具です。全てマスターに委ねます」  
「そうか……なら」

バキッ!!

首相の足がニゴウの膝の皿を蹴り飛ばした。

ニゴウの片足は本来の方向とは向いてはいけけない方向に向いていた。

……簡単に言ったら『逆膝カックン』である。

「何をしてきているんだ!! 貴様のせいで私の計画を遅らせないといけないのではないか!!」

ニゴウ「申し訳……」

「申し訳ございませんってまた言うんだろ!! あと何回謝れば済むんだね!？」

バキッ!! ボキッ!!

ニゴウ「次こそ……は」

「次っていつなんだ!! 私はお前に命令した!! つまり、今すぐ命令通りにしないとイケないんだぞ!!」

アークという強敵がいて謎の頭痛に襲われて逆に殺される可能性があるのにこの首相は二ゴウより自分の計画を優先させる。理不尽な文句を言いながら足の骨を折られ地面に倒れている二ゴウに踏みつける。

しかも首相の足には騎士が履く鉄製の騎士の靴を履いているので余計に痛い。

毎回、鉄のハンマーで頭部を殴られているような痛みと足を折られた痛みに耐えながら二ゴウはそれでも立ち上がる。

「ふー… ふー！」

首相は二ゴウに髪を掴み地面に叩きつける。

二ゴウ「……」

何度も何度も叩きつけられ、とうとう二ゴウは気絶してしまった。

「おい、起きろ!! 誰が寝ていいと言った!?!」

「しゅ、首相殿!?! それ以上はやめたほうがいいのでは!?!」

「そ、そうですぞ!! こいつは我々の中で唯一顔バレしていない奴で今ここで殺してしまうと本当に作戦に支障が!?!」

「黙れ!! おい、起きろって言ってんだ!!」

気絶した二ゴウを叩き起こすため魔法で水を発生させ無理やり起こす。

ばしやああああ!!

二ゴウ「つぐ!?! ぐほごほ!?!」

気管に水が入りせき込む

「……はあ、私も少し熱くなりすぎたな」

二ゴウ「ごめんなさいマスター……ごめんなさい」

「いや、いいよ二ゴウ……」

そつと二ゴウを抱き寄せ頭をなでる。

「いいかい? これ以上、痛い思いをしたくなければアークを殺してこい。奴は我々の計画で一番脅威となる存在だ。奴を殺せば私の願いは叶う。君は私の役に立つために生まれたんだろ?」

二ゴウ「は……いい……」

「いい子だね。なら、アークを殺したらご褒美をやるう!!」

二ゴウ「ご褒美?」

「うん、だから今度こそ失敗するんじゃないよ?」

二ゴウ「はい……マスター」

「それじゃ、明日も命令を出すから今日はもう寝なさい」

二ゴウ「はい、おやすみなさいマスター」

こうして首相の許可が出たので寝ることにした。

ちなみに折られた足は回復魔法で治してもらったが如何せん魔法での治療を適当にされたため元には戻ったが痣や負傷は治してもらえなかった。

二ゴウ「今日もマスターに怒られたのです」

二ゴウの部屋……つといても屋外で家具はなにも無く寝る時も麻布一枚だけという素朴すぎる場所で二ゴウは一人いた。

寝ていいと言われたがどんなに早くてもマスターから月が一番上より少し後になった時（大体深夜1時）から朝焼けまで就寝時間は許可されている。

部屋の真ん中で一人寂しく独り言を言いながら残飯を食べる。

二ゴウ「……どうすればもっとマスターに褒められるでしょうか?」

一人反省会をしながら空を見上げる。

もう空は墨を零したように黒くそこに綺麗な星が散りばめている。

二ゴウ「あの国は……少し変な感じがしました」

ミール聖教国に潜入し世界会議が始まる時間まで起きて待機していたのだがその途中でいろんなものを知った。

食べ物や地形に歴史などここでは知れないことをたくさん知れた。

その中で最も気になるのが

二ゴウ「あの子供と二人の大人……一体どういう関係なのでしょう?」

潜入している最中で目の前で転んだ人間の子供がいて邪魔だったので起こしたら知らない大人が二人来た。

最初は侵入がバレたのかと警戒したのだが返ってきた答えが

『ありがとう』

であった。

困惑はしたがマスターから『考えることを禁じられている』ので気にしないことにしその場を立ち去ったが去る時に『お父さん、お母さん』つという単語を聞き取った

ニゴウ「あれが家族……というものなんですね」

だが気になるのが一つある。

ニゴウ「なんで怪我がないのでしょうか？」

自分が生まれた時、マスターから「我々はこれから家族だ」と言っていた。

自分は家族といのは知らなかったが毎日常人じや耐えがたい暴力を振るわれたが「お前は道具なんだから何も考えなくてもいい」「これを愛情だと思え」とマスターから教えてもらっていたので打たれることが愛情だと思っていたが……あのミール聖教国にいた家族の子供はどこにも怪我はなかった。

ニゴウ「すごい隠蔽術ですね」

あの子供も自分みたいな環境なんだと勘違いをする中、マスターが言っていたご褒美とやらを考える。

ニゴウ「楽しみですね。マスターの役に立てたらご褒美が貰えるそうですね！ 私が欲しいものは……あれ？」

ここでニゴウは不思議に思った。

ニゴウ「私は……何を望めば？」

マスターからの命令で「お前は道具だから何も考えるな」と言われた。

自分は道具だから何も考えてはいけない……ならご褒美を考えることなどできないのだ

ニゴウ「でも……いいです。マスターのためなら我慢……しない」と

残飯を食べ終え横になり薄い麻布に包まれ目を閉じた。

硬い地面から伝わる冷たい感触が伝わり全身の温度を奪っていく。



ニゴウ「……あ、でも」

意識を捨て寝ようとしたが……一つだけご褒美つというより願  
事があった。

ニゴウ「……また会えないかな」

会いたい……その人物とは

ニゴウ「……歌う死神」

彼に会いたい……そう思ってしまう

マスターから殺すよう言われているが自分はまた会えるなら会  
たいと思う。

ニゴウ「……もつと彼と一緒にいたい」

彼を例えるなら……そう、季節のような人だ。

戦うときは厳しい冬ののように冷酷で冷たい目でこちらを見てきて  
戦いを知らない者が睨まれば一瞬で腰を抜かすであろう。

自分もそう思っていたが……違う点も見つけた。

ニゴウ「……暖かかった」

そう、彼はとても暖かかった

それは自分がミール聖教団に潜入中に日ごろの暴力で出血して血  
を失い貧血で倒れて時のことだった。

自分の失態で倒れてしまいマスターの命令を守ろうと何とか立ち  
上がろうとするが度重なる暴力で立ち上がるだけでも全身に痛みが  
走る。

だが……そんな時に彼は来た。

あの時は知らなかったようだが自分を治療してくれた。

その時、彼の手が自分の肌に触ったが……とても居心地がよかつ  
た。

先ほどマスターに抱きしめられた時は何も感じなかったが彼は  
違った。

ニゴウ「火のように熱く火傷のような痛みでも氷のような冷たい痛  
みでもなかった……」

それは……春のような暖かくて優しく包み込んでくれるような気  
持ちよさだった。

少し触っただけではわかるわけないと思うかもしれないが自分はわかるのだ。

なぜか……ずっと共に冒険したり主人のような人を助けに行ったりしたような気がするからだ

ニゴウ「不思議ですね……彼の戦い方を見ていると懐かしい感じがします」

戦うときは厳しい冬、だが戦いがなければ春のように優しい人

ニゴウ「……羨ましいな」

また……会えるかな？

……私のお兄様

アーク「……ん？」

アリス「アーク？ どうしたの？ 早く行くわよ？」

アーク「あ、ああ……悪い」

今誰か俺を呼んだような？

あ、それより早くアリスと一緒にアーハム帝国に戻らないとな

アーク「帰ったらどうせ仕事が来るんだろうなあ……」

アリス「うふふ♪ 頑張りなさいな♪」

皇帝曰く俺は帰ったら今後の襲撃者に対するの対策などを俺に担当させるそうだ

俺、前世では一般人で戦闘なんて知らない人だったのよ？

そんな奴に任せていいの？

アーク「はあ……こうなったら月光たち総動員させて警備してやる」

アリス「大変ね。まあ、アークが守ってくれるなら私も安心だわ」

アーク「俺は安心できないんだがな」

でも……あの女性

どこかで見たことがあるんだよなあ？

馬車の中でうーんっと悩みつつアークとアリスはアーハム帝国に戻って行くのであった。

## 八十六発目 動き出す野望

ミール聖教国にて世界会議が行われている途中で襲撃に襲われるがアークが無事撃退し無事に終了しアーハム帝国に戻った後

アーク「……」

アークは自分の家の屋根の上に寝転がっていた。

帰って来てからはと言うと皇帝に帝国議会に出席するよう言われ出席したら貴族たちからの質問（時々罵倒）攻めにされたり襲撃者の対策を練ったりした。

最終的に見つけたら静かにその場から離れ上層部に報告、そしてアークが向かうで収まった。

アーク（はあ……結局俺が対処するのかよ……まあ、俺以外で戦える奴がないからって言われたらそうなんだけど）

空を見上げながらため息を吐く。

ちなみに先ほど再び襲撃者が襲ってくるのに備えてVR空間でヴェノムに稽古を頼んだのだがノエルに会った件についてはバレていたのでボコボコにされた。

アーク「油断する俺も悪いけどさあ……いきなりCCCしなくてもいいじゃん……」

屋根の上で愚痴る

するとそこへ

ビイイイイイイイイイイイ

アーク「ん？ お、キッドナツパーか。どうだった？」

アークのところの一体のキッドナツパーがやってきた。

彼らはアーハム帝国領内の哨戒を担当しており不審なものがあつたらアークに連絡するよう言っておいたが

キッドナツパー「イジヨウナシ!!（^^ゞ」

……どうやら異常はないようだ。

アーク「おう、ありがとさん。引き続き警戒に当たってくれ」

そう返事をするキッドナツパーは上下に動き領いた……ような動きをした後、どこかに飛んでいった。

さてつと……

アーク「暇だわ」

アリスたちは授業でいないしレイチエルも勝負を仕掛けに来るかと思っただが来なかった。(レイチエルの家臣がさすがに勉強させないと思っただが現在レイチエルは勉強中である)

アーク「だがこういう時間があるこそ襲撃者に対する対策を考えねるな」

目を閉じ今回襲ってきた襲撃者のことを思い出す

アーク「……あの襲撃者……どうやってF A—M A Sとか召喚したんだ？」

俺と同じポイント制だったら殺せば殺すほど出る種類も量も多くなるから不利になるな。

アーク「でもいつどこで現れるのかわからないからなあ……あの時発信機でも取り付けとけばよかったな」

悔いに思いつつもどうするか考える。

アーク「今までこの世界の生物相手に戦ってきたけど現代兵器相手なんてやったことないぞ……」

一応、V R空間でM S FとD Dスタッフ相手に銃撃戦の訓練をしたことはあるが彼らは一種類、多くても三種類の武器を使って戦ってきたが今回の相手はそれ以上だろう。

アーク「……遠距離がだめなら……近距離か？」

遠距離がだめなら近距離っていう考えもあるが……あいつ、S A I G A—1 2を召喚してたからなあ

アーク「銃撃戦の時も俺を正確に狙ってきた……腕もあるようだしな」

……だったらデカイやつになって戦うとか？

アーク「……でもアイツ一人のためにメタルギアになるのもなあ」  
結局決まらず屋根の上で寝転がりながらため息を吐くアークだった。

この日もアーハム帝国は平和だった  
もちろん付近の国も特に異常はなく平和だった。

……ある一つの国を除けば

そのころのシュレイド王国

王家が全員殺されてしまい指揮系統がめちゃくちゃになり派閥がぶつかり合ったりと、一時は混乱したが何とか収束ができた。

「ふう〜……何とかなつたわい……」

「そうですね……おつけれ様です。新しい王よ」

あれからと言うと急遽新しい王様を決めることになり本家の親せき、分家などから候補が続々と出たが最終的に故人となつている前王の弟がなることになり国は一応だが安定はした。

新しい王が決まってからは大忙しでまず国境の警備を固くし城と主要都市の警備を厳しくし外国から来た人は三重もなる検査を通過しないとシュレイド王国には入れないようにした。

「軍の奴らが軍部中心を叫ぶし貴族たちは娘を私の妃にさせようとしてくるし……王って贅沢そうだけど大変ではないか……」

「……まあ、仕方ないですよ国の代表なので」

「これだったら立候補しなければよかったわい……」

王の執務室の中では新しいシュレイド王国の王とその家臣が駄弁っていた。

窓から城下町を見てみると前までは暗い雰囲気を感じていた町だが今じゃ少しずつだが国民に笑顔が戻ってきている。

「……あの時、立候補しなきゃよかったな」

「でも誰かのために働くっていいことじゃないですか」

「それもそうだが……この大変さを他の立候補した奴らに叫びたいわ



窓から先ほど見た城下町を見てみると一変していた。

街のあちらこちらで火事が発生していた。

「まさか、軍のクーデターか!？」

「それはないと思います。軍部は我々には大人しいので」

「では……一体誰が……いや、そんなことより民のほうが優先だ!!」

「警備部に厳戒態勢を要請します」

「わかった。あと、軍にも協力要請しろ」

迅速な判断で王は火事の現場付近に住んでいる国民の避難を開始させ、軍と警備担当の騎士団に犯人の搜索を要請した……が

この時の王たちはわからなかった……脅威はすぐそこまで来ているのを

#### シユレイド王国 監視塔

「なあ……町が燃えてるぞ」

「俺たちも火を消すのを手伝った方がいいんじゃないか……」

「馬鹿野郎、もしこの時にどこかの国が攻めてきたらどうするんだ？」

「でも、宣戦布告なしで攻めてくるなんて国際的にも非難轟々だからないんじゃないか？」

「……それもあるが……でも用心に越したことはないだろう？」

「……そうだな、悔しいが警戒しないと……ん？」

警備兵の一人が悔しい顔をするがふと、遠くにある森に違和感を感じた。

「おい、どうした？何か見つけたのか？」

「あ、いや……なんか今日の森はえらい静かだなって思ったんだが」

「何を言ってる……本当だ、鳥一匹もいねえ」

普段は鳥が飛びまわったり熊の親子が散歩してたりと自然らしい環境だったが今日は一匹も見当たらないのだ。

不審に思い一応城に連絡しようとした時だった……

「おいー、ないかいるぞ!!」

森の中から重々しいエンジン音を響かせながら木をなぎ倒し出てきたのは

「な、なんだあれ?」

「魔族か?」

「お、おい上層部と城に緊急で報告」

しろつと言いたかったが……

ズドオオオオオオオオオオオン!!

塔に金属のナニカが飛んでき爆発した。

「はっはっは!! 命中だ!!」

「あ、お前!! 俺が先に撃たせろっていったじゃないか!!」

森の中から出てきた謎の物体から二人の男が出てきて口論を始めた。

「へっへっへ!! いいじゃないか別に!!」

「それにしてもこの古代兵器はとんでもない奴だな……」

そう言いながら乗っていた古代兵器を叩く

その古代兵器の正体は

「確かコイツ……「ていーななよん」っていう兵器だよな?」

「ああ、ニゴウ曰く東側の兵器だと言ってたが……東側ってなんだ



？」

男たちが乗っているのはソ連が1971年に開発した第二世代主力戦車だ。

車高が低く軽量な車体に高火力な125mm滑腔砲を搭載し今でも主力としている国があるほどだ。

……だが読者もわかっていると思うが「なぜこの異世界にソ連戦車があるんだ」っと思うかもしれないが

「まさか、ニゴウがいた倉庫にあるとはな」

そういうと森の中からゾロゾロとT-72が出てきた。

しかも、車体に書かれているマークもソ連のマークではなく

バサビイ共和国残党のマークが描かれていた

「おい、お前ら」

男二人が喧嘩していると横から別のT-72が着てハッチを空けるとそこから元バサビイ共和国の首相が出てきた。

「どうだね？ ニゴウが言っていた古代兵器は？」

「はい、素晴らしいものです!! これならどんな国でも勝てそうです!!」

残党軍は横一列にT-72を並べ燃え上がるシユレイド王国を見る。

「ニゴウは？」

「すでに動いています。高速機動部隊とともに周辺の監視と逃亡者の抹殺を始めています」

「そうか……では諸君、始めようではないか」

「了解しました。総員、前へ!!」

幹部の掛け声とともに200両ものT-72は前に進んでいった。

「では、これより……」種族浄化選別作戦 第一段階 シユレイド王国 占領作戦」を開始する」

「火を消せ!!」

「おい、速く避難しろ!!」

一方シュレイド王国の城下町では騎士や火消し担当の役人があつちこつち走り回っていった。

先の王家虐殺事件の反省から避難訓練や警備の訓練を日ごろからしていたので迅速に動けた。

「そつちの方で逃げ遅れた奴はいないな!？」

「おーい!! こつちに下敷きになっている奴がいるぞ!!」

騎士たちも協力して下敷きになった国民を助けたり消火するため水を桶にたっぽり入れ持って来や糸輝いていた。

……するとそこへ

「どうかなさいましたか?」

「誰だこんな時に!? ……あ、これはバサビイ民主主義国家の商人さん!？」

「まさか……火事ですか?」

「そうなんです!! 皆様も早く非難を!!」

騎士が避難を促すが

カシヤ

「どうしたんですか!! 早く非難を……あ、あの何ですかこれ?」  
騎士の額に変な棒を突きつけられた。

「……この火事って犯人は見つけられましたか?」

「い、いえ? それより何ですかこれ」

「ジユウって知ってますか?」

「な、なんですか? ジユウってというのは?」

「そうですね知らないのですか……まあ、劣等種ならわからないのは当たり前ですよ。あ、あ、あ、この火事の犯人は我々なんですよ」

「え、どういう(ズドオン!!)」

問おうとした騎士だが次の瞬間には額に風穴が開けられていた。

「……全く……銃を知らないのはわかりますが少しは警戒した方がよかったです……ま、どうでもいいですが」

すると後方に人が出てき手にはXM8が握られていた。

「隊長、全員揃いました」

「よし、では我々は暗闇を利用し中を混乱させるぞ」

彼らの正体はバサビイ民主主義国家の商人ではなく残党軍の潜入部隊で彼らの任務は「内部に侵入し敵を混乱させる」というものだった。

「T-72は?」

「いつでも動けます」

そういうと後ろからシュレイド王国に入る際に偽装していたT-72が出てきた。

「よし、ではお前ら行くぞ」

そういうと面影から出て家事を消している騎士たちに銃口を向けトリガーを引く。

ズドドドドドドドドドドド!!

「ぐはっ!」

「ぎゅあ!？」

「て、敵襲ぐふ!？」

「よし、殲滅完了。次に行くぞ」

なぜ、彼らがX M 8を使えるのかと言うと全てニゴウが教えてくれたからだ。

首相がニゴウを使い魔にし洗脳した際に教えさせた。

「前方に魔法使い二匹だ」

T-72を先頭にして進んでいく残党軍の一部隊は前方に魔法使いが来るのが見え、舞台全体に通信機で報告する。

「おい、なんだあの塊は!？」

「敵だ!!」

魔法使いもこちらの存在に気が付き魔法を演唱する

「炎の聖霊よ今こそ力を見せたまえ」 「ファイヤーボール」 “!!”

魔法を演唱し火の球を生み出し一番先頭にいた鉄の塊に打ち込むが

「効いていない!？」

「どんだけ硬いんだよ!？」

T-72に見事命中したが表面を少し焦がすで終わってしまった。

「すごいな……魔法使いは一人でもいたら脅威だがこいつの前じゃ赤子のような」

「ああ、おい!! お返しをやってやれ!!」

「射撃開始!!」

ズドドドドドドドドドドドド!!

唾然としている魔法使いに向かって部隊全員がX M 8を向けトリガーを引く。

するとあっという間に魔法使いは挽肉となってしまった。

そのころ城では

「……一体どういうことだ」

王は窓から見える景色に唾然した。

敵は謎の棒を自軍の兵士に向けられたと思つた瞬間、兵士は体中に穴が開き倒れていく。

魔法使いがドラゴンのとか今を前に出すが鉄の魔物の棒が光つたと思つた瞬間に爆音とともに爆散していった。

「お、王よ!! 敵は国籍不明部隊だそうです!!」

「くそ!! すぐに近隣国家に応援を呼べ!!」

王は慢心などせず危険だと判断しすぐに周辺国とアーラム帝国に救援を求めようと通魔機で連絡しようとするが

「……つな!? 通魔機が反応しないだ!!」

通魔機は魔力さえ流せば何時でも使えるのに、なぜか流してもうんともすんとも言わなかった。

「すぐに馬を出せ!!」

「わかりました!!」

王は馬を出し直接要請しに行くとするが

「おっと、それ以上は動かないでほしいかな?」

扉からX M 8を持った部下を引き連れた元バサビイ共和国残党のリーダーでもある首相がやってきた

「貴様、共和国の!?!」

「……下にいた兵たちはどうした」

「ん? あの劣等どもか? 剣を持って襲ってきた奴は正当防衛で殺したが女子供は殺してないぞ」

「何が望みだ」

「おっと!! 言っておくが俺たちは別に諸君らを殺すつもりではない

!! 我々の目的は人類の進化だ」

「し、進化?」

そしてこの日、シュレイド王国は世界中の誰にも気づかれずに陥落された。

## 八十七発目 平和の少女とザ・ボスに心酔した博士

アーク「……」

世界会議があつた日から数日後

アークはいつも通りにアリスを起こし食堂に行つて朝食し授業に出席し途中でレイチエルに勝負を申し込まれ(ちなみに長距離かけっこ)だがサイボーグに変身して圧勝して「ま、まだ本気を出したわけじゃないですからね!!」っとレイチエルに言われた日々を送つていた。

……が今日は違った。

アーク「……どういふことですか？」

現在VR空間におり、とある人物にどうすればいいのか聞こうとしたのだが

パス「なによ？ 不満かしら？」

ストレンジラブ「そうだぞ、アーク？ せっかく我々が来てやったと言うのに」

今、目の前に金髪の美少女でアークもとい鋼宮徹の推しであるパスとイケメンな女性だが実はこう見えて同性愛の疑いが掛けられているけどすごい博士であるストレンジラブ博士が目の前にいた。

……こうなつた理由は数時間前までに戻る

アーク「……どうしようかな？」

その日の授業が終わりアリスを寮に送つて、帰宅しあとは寝るだけなのだが……例の襲撃者が心配になってきた。

それは「もし自分と同じ能力ならZ E K Eなどのヤバい物を作るかもしれない」のだ。

自分はサイボーグになつて対戦車兵器でも担げば勝てるかもしれないがその場にアリスがいたら困るのだ。

アーク「だったらこっちもやばいもの作ろうって思ったんだがなあ……」

現在の開発ポイントはおよそ三万

今だったらどんなメタルギアでも開発できるが一応のため「核戦  
力」でも入れようと決定した。

あ、もちろん核を撃つ気はない。

メタルギアというMGSPWのMSFのメタルギアZEEKみた  
いな運用をする予定だ

アーク「さーてつと……開発できる奴は……こいつ等か」

iDROIDを取り出し開発画面を見ると……一番に「例の奴  
ら」が出てきた。

アーク「……んじや、開発つと」

開発中……

アーク「終わったかな？」

数時間後にiDROIDを見てみると開発完了通知が来た  
ちなみに完全に真夜中で眠い。

アーク「さーてと……誰なんだろうな」

開発と言ったらメタルギアキャラが出てくるという謎の設定があ  
る。

前回は……確かスカルズでスカルフフェイスが来たはず。

アーク「……でもアイツだったらなあ」

アイツ……というのはマダオこと「ヒューイ・エメリツヒ」である。  
アーク「時間は……うわ、もう次の日やん。会ったら少し話ら寝よ」

夜中にゲームをやり子供かよつと一人で突っ込みながらベッドに  
横たわり目を閉じてVR空間に転移した。

以前のポイント 32995

開発

ピースウォーカー 7000



メタルギアZ E K E 7000  
シャゴホツト 5000  
合計ポイント 13995

アーク「う、ううん……ん？　ここは……」

耳に波の音が聞こえてき肌に太陽の暖かさを感じ目を開けると……そこはマザーベースのプラットフォームの上だった。

アーク「……か……あ、そういえばミラーをまだ殴ってなかったな。会ったらぶん殴ろ」

アリスとパーティーに件で妨害されたので肅清をしていなかったと思出し憤りが出てくるがとりあえず担当に会おうと辺りを見回すと

??「こんにちは、歌う死神さん？」

アーク「あ、ようやく見つけ……え？」

振り返るとそこにはコンテナの上で足をブラブラさせこちらを見ている少女がいた。

学生らしく制服を着ており、金髪でしかも美少女

だが、本当の正体はロシアのKGB、アメリカのCIA、そしてCIPHERのスパイと言う三重スパイをしていたヤバイ16歳……否、20歳の女性の「パス・オルテガ・アンドラーデ」またの名を「パシフィカ・オーシャン」

アーク「パスさん!？」

パス「Hello♪ Ark♪」

アーク「え、なんでここに？」

パス「なんでって……Z E K Eを開発したでしょ？　あれだよ」

アーク「ああ、なるほど……だからパス……あ、いやパシフィカさんなんですわ」

パス「ちよつと、その名前じゃなくてパスでいいわよ。ここにはCIPHERはいないんだから」

アーク「……それじゃ、パスって呼ぶわ」

パス「その方がいいわ」

パスは確かMGSPWのラストでボスを務めたからその関連で出たんだろうな

アーク「え、でもパスはZEKEでなんだろう？　ピースウオーカーは誰なんだ？」

パス「それは……あ、ヒントは女性よ」  
女性？

だったらヒューイの可能性は消えたな

アーク「でもメタルギアで女性キャラは……地味にいるな。でも誰だ？」

うーんつと悩んでいると

パス「はい！　時間切れです!!」

アーク「え、これって時間制だったの!？」

突然、時間切れだと言われ唾然する

パス「答えられなかったアークには……電磁くすぐり棒の刑に処します!!」

アーク「え、電磁、え？」  
すると

トントン

アークの肩を誰かが叩いた。

アーク「どちらs……おうふ」

そこにいたのは金髪短髪の女性でグラサンをかけ町中で立てばナンパされそうな美人さんだが手にはかつてのビックボスを爆笑させた「電磁くすぐり棒」が握られている女性「ストレンジラブ」がいた。  
ストレンジラブ「くすぐりの時間だ」

ピリリリリリリリリリ!!

アーク「あ、ちよ、ま」

蛍光灯みたいに輝く「くすぐり棒」がアークの体に触れ……



アーク「はあ☆」

少年、くすぐられ中……

アーク「か→は←……し、死ぬ」

ストレンジラブ「ぬ？ あ、すまん。やりすぎた」

アークの腹筋が崩壊して数時間後にようやく終わった。

アーク「こ、殺す気ですか……」

ストレンジラブ「別にこの空間なら死んでも問題ないだろ？」

アーク「いや、そういう問題ではなくて」

ちなみに江戸時代に遊郭で実際にくすぐり責めというのは実際あつたらしくあまりに続けられ、睡眠不足と呼吸困難で、発狂してから死亡するか、一気に死亡するらしい。

パス「ぶくくくwwwwwwひ、久しぶりに思いつきり笑ったわ」

ストレンジラブ「そうか？ ほら、アーク。おかわりだ」

アーク「いや、無理ですって!？」

ストレンジラブ「なんだ？ お前の推しが笑っているんだ。彼女の笑顔のためなら死んでも本望だろう？」

アーク「笑顔のためなら頑張りますが死にたくはないですって!？」

ストレンジラブ「ふん、冗談だ」

アーク「あなたがやったら冗談に聞こえませんか!？」

いや、博士……あなたグラサンかけてクールに見えるから冗談を言う人には見えないんですよ。

アーク「ちなみに博士って……ピースウオーカーのですか？」

ストレンジラブ「そうだが？」

アーク「シャゴホットは誰なんですか？ ソコロフ？」

ストレンジラブ「ああ、うちの糞夫だ」

アーク「え、ヒューイ!？」

彼がいるのかとあたりを見渡すが……見えるのはマザーベースと働いているスタッフに青い空と青い海だけだ。

ちなみに原作プレイの読者なら知っていると思うがシャゴホットを開発したのはソコロフでヒューイはグラニンからメタルギアのデータと共にシャゴホットのデータを入手ぐらしか関わっていないので注意されたし。

あ、決してソコロフのキャラがシークレットシアターで出た薄い本ムフフ爺ぐらいしかわからないので作者がわからないから出さなかつたとかではないよ? 本当よ?

アーク「えつとヒューイはどこに?」

パス「彼ならそこよ」

パスがそつと指を指した方向は……海の上だった

アーク「え、どういう……ああ(納得)」

艦橋から下を向いてみるとそこにいたのは

ヒューイ「なんで僕だけここなんだ!？」

アーク「……過去形だったか」

アークはヒューイを見つけしだい『ボートを用意しろ』をしたかったのだが今見えるのは海の上でオレンジ色のボートの上で何か叫んでいるエメリツヒ博士がそこにいた。

……どうやら『用意しろ』ではなく『用意されていた』だった。

パス「さつきね、アークが開発している途中でエメリツヒ博士の周りにMSFとDDのスタッフが来てね? 彼を亀甲縛りした後宇宙吊りにして放置した後ボートに乗せられ今に至るの」

アーク「は、はあ……ちなみにこの空間で海に落ちたらどうなるんですか?」

ストレンジラブ「確か……一応現実みたいに泳げるが沈んで溺れてしまったら二度とこの空間には現れない」

アーク「え、じゃあ……今絶賛ヒューイってピンチじゃないですか

？」

ストレンジラブ「いや、一応救助隊がスタンバイしている(だが、助けるとは言っていない)」

アーク「あ、そうですか……」

ヒューイ「いつまで僕をここに居させるんだ!？」

さつきからヒューイが何か言っているが……申し訳ないが聞こえない

姿は見えるが声は波の音で消されている。

アーク「ちなみになんであんなに彼はボロボロなんですか？」

少々見えずらいが包帯らしきものが見える。

ストレンジラブ「ああ、あれはアイツが宙吊りになっている時に私がかくすぐり棒を最大電力で殴り続けた結果だ」

アーク「おうふ(引)」

ヒューイ「まともなのは僕だけなのか!？」

ストレンジラブ「ああ、まとも(と思っているの)は君だけだ」

いや、辛辣やな(てか聞こえるんかい)

まあ……AIポッドに閉じ込められて死んだら恨むわな

アーク「でも意外ですね。ピースウオーカーって言ったらザ・ボスが出るかと思っただんですが」

ストレンジラブ「不満か？」

アーク「あ、いえ……まあ、尊敬(?)していたザ・ボスの意思を入れた機体と一緒に出るのはどう気持ちなのかと」

ストレンジラブ「めっちゃ嬉しい(即答)」

アーク「あ、ハイ」

パス「それよりアーク? 貴方そろそろ寝なくていいの?」

アーク「え? ……うわ、もう5時じゃん!？」

パス「まったく……お子様は寝る時間よ」

アーク「お子様って……俺これでも19ですよ? 貴方とは一歳違いないんですが?」

パス「でも私より年下じゃない? それにあなたの大切な護衛対象アリスの護衛中に眠気が来てしまったら任務に支障が出るわよ」

アーク「……そうですがあ」

パス「それにあなた、まだ煙草とか吸えない年でしょ？」

アーク「煙草って……うちの祖国<sup>日本</sup>はお酒とかは二十歳からなんであ、そのうち飲める年になるので待つといてくださいね!!」

パス「うふ♪ なんかあの子に似てるわね」

はてあの子とは？

アーク「あ、もしかして……チョコ？」

パス「……ひ♡み♡つ」

人差し指で鼻の下を指しまるでCIPER時代の上唇と歯茎に挟んだ嗅ぎ煙草の小袋の位置を直すための仕草みたいに秘密にされた。

アーク「はあ……いいなあ、恋って」

ストレンジラブ「いや、お前だってまだ若いだろ」

アーク「……出来ると思います？ こんな死神って呼ばれている人が？」

ストレンジ「お前の主人がいるじゃないか」

アーク「……いや、アリスは」

ストレンジラブ「なんだ？ あんな絶世の美女が好きじゃないのか？」

アーク「い、いや!! 好き……って言っているんだらうか？」

自分はアリスは好きだ

って言っても「LOVE」ではなく「Like」の方だな

……でもなんでだろうな

アーク（なんでこうもモヤモヤするんだらうな）

ストレンジラブ「……なるほどな。そういう関係か」

アーク「何がです？」

ストレンジラブ「……なんでもない。ところでいい加減帰らなくていいのか？」

アーク「あ、やべ。それじゃ二人とも俺は帰るので」

パス「……もう帰らなくてもよくない？ 時間的にも寝ても意味な

さそうだし」

アーク「さつき寝ろ言ってた人が何言ってるんですか!？」

ストレンジラブ「……それもそうだな。ではアーク、一つ聞いてもいいか？」

アーク「ナンスカ？」

ストレンジラブ「……ハルは良い子だったか？」

アーク「オタコンすか？」

ストレンジラブ「ああ、あの子には母親らしいことをしてあげてないからな」

アーク「まあ……あなたの息子に恥じない良い奴でしたよ」

ストレンジラブ「ふん、当たり前だからな。ハルは私とザ・ボスの子供として生んだようなものだからな」

アーク「……ヒューイ」

少し、ヒューイが可哀そうに思ってきた。

そのあととは言うとは……ストレンジラブ博士に「今度来た時、メイド服を着ろ」と命令されたり、推しであるパスが目の前で「恋の抑止力」を謳ってくれて博士と二人でペンライトで応援したりと充実な夜更かしをしましたとき。

次の日の早朝

ガラガラガラ



一台の馬車がアーハム帝国に到着した。

「いやはや……まさか、まだお嬢ちゃんは若いのにもうマザーの役職をもらったのかね？」

馬車を操る老人が乗っているシスターに話しかける。

……だが彼女はもう「ただのシスター」ではなかった。

本来、シスターは黒い修道服という質素な格好だが今少女が着ているのは「教会の責任者の証である真つ白なマザー用の修道服」だった。「お嬢ちゃん、まだ17くらいだろうか？ よほど教会のために頑張ったんだらうねえ」

そう話しかける老人に少女は

?? 「い、いえ……私は今回は異例中の異例でなっただけです……それになつたのではなくマザー研修生っていう感じです」

「はっは！ でも努力が報われたんじやろ」

?? 「そうですかね……」

「ま、これからも頑張れじや!! ほれ、到着したぞ」

?? 「ありがとうございます!! お爺さん!!」

馬車に乗っていた少女……「ノエル・スカルツォ」はお礼を言いながら馬車を降りた。

ノエル「……とうとう来てしまいましたね」

馬車を降りた先を見上げたその先にあるのは「魔法学園」

アーハム帝国の所有する学園であり、「彼」が住んでいる場所。

ノエル「……ここがアークさんが住んでいる場所」

ここに来た理由はノエルにはたくさんあるが自分の中ではアークに会うのが一番だ。

ノエル「すう……行きます!!」

そう言うとき若いマザーの雛鳥は一步前に進んでいった。

## 八十八発目 仲直り？

深夜のうちに「シャゴホット」と「ピースウオーカー」と「メタルギアZ E K E」を開発して少しの時間（一時間）寝た。

……そして次の日

アーク「クソネム」

起きた後、いつも通りアリスを起こしに行って食堂で朝食を食べ終えて教室に到着した。

アリス「夜更かしでもしたの？」

アーク「……まあ、そんなところ」

アリス「珍しいわね、あなたが夜更かしをするなんて」

アーク「珍しいか？」

アリス「ええ、アークって趣味とかないように見えるもん」

アーク「……俺、そんな風に見られてるの？」

でも言われてみれば俺って趣味らしいことしてないな。

……だけど俺って趣味をする時間がないもんなあ。襲撃者の件もあるし、そのせいで俺がいつでも行けるようにしないとイケないし。

アーク「時間がよなあ……」

アリス「……まあ、仕方ないことね」

最近、ため息ばかり吐いている気がする。

ガラガラ

シーベルト「皆さん、おはようございます」

「「「おはようございます!!」」」」

そんな中、いつも通りに担任のシーベルト・アイスバーンが教室に入ってきて挨拶をする。

だが、今日は違った。

シーベルト「今日はこの学園に新しい先生が来ています」

「「「新しい先生!」」」」

へえ、新しい先生か

どんな人だろうな？

「ねえねえ、どんな先生かな？」

「美人だといいなあ」

「あ、でも今朝学園の前に馬車が止まってたって友達が言ってたぞ!!」

アーク「……あ、でもこの時期で……まさかな」

アリス「何か思い当たるの？」

アーク「いや、もう2月の後半で新しい教師っておかしくないか？

アリスはもう2年生だろ？ 普通、新しい教師が来るのは4月とか

前のほうだろ？」

アリス「あ、確かに」

アーク「多分だが……俺、世界会議で襲撃者に襲われた後だから

……」

アリス「もしかして刺客!？」

アーク「その可能性がある。気をつけろよ」

あの時の襲撃者かもしれないので警戒をしておく

シーベルト「それでは入ってください」

??「はい」

コンコンコン

アーク「……ッ!？」

アリス「つえ!？」

入ってきたのは白い布地の白い修道服を着たを女性だった。

だが、問題なのは修道服ではなく少女のほうであった。

ノエル「ノエル・スカルツォです！ 今日からよろしくお願いしま  
す!!」

「わあ！ 美人だ!!」

「しかも人間だ!!」

「えー、可愛い!!」

シーベルト「はい、静かに!! ノエルさんはミール聖教国からマザー研修生兼保健室の先生で来てもらったのですよ!! はい、皆さんご挨拶!!」

「「「「ノエル先生! これからよろしくお願いしまーす!!」」」」

ノエル「い、いえいえ!! 私のほうが皆様より年下なので敬語など使わなくても……」

シーベルト「いいんですよノエル先生、この子達は人間を嫌うとかそういうのしない子なので」

ノエル「じゃ、じゃあ……これからもよろしくお願いします皆さん!」

ペコリとクラスメイトの前で例をするノエル

アリス「ねえアーク? あの子つてバサビイ民主主義国家で会った子……」

アーク（ガタガタガタガタ）

アリス「ちよ、ちよつと!?! どうしたのすごい震えてるし冷や汗もすごいことになってるわよ!」

アーク「ナ、なんでもななないいいいよよよ……」

アリス「言っていることと体が噛み合っていないわよ!」

足をガタつかせ冷や汗を滝のように流し目が泳いでいるアーク

シーベルト「はい、それでは皆さんは今から授業なので準備をしておいてくださいね!! では、ノエル先生ありがとうございます」

ノエル「こちらこそありがとうございます。あ、私は普段は保健室か学園のすぐ隣にある教会にいたので質問等があるのならば来てくださいね!!」

「「「「はーい!!」」」」

ノエルの自己紹介が終わり皆、一限目の授業の準備に入るがアーク「……」

さて、どうしたものか

来るよね? 絶対ノエル俺のところに来るよね?

わかるもん、だってさつきからノエル……俺をガン見してたんだよ

?

アーク「あく……アリス、今から授業だけど俺抜けるわ」

アリス「え、まさか主人を置いてサボる気!？」

アーク「いや、違う少し用が「アーク様!!」……おうふ」

呼ばれたので振り替えてみるとそこには何かを決心したような顔つきをしたノエルがいた。

アーク「すう〜（深呼吸）はあく（精神統一）……や、やあノエル……先生」

ノエル「……」

アーク「きよ、今日はいい天気ですねえアハハ……」

ノエル「……」

なんて冗談を言うがズンズンとアークに近寄ってくるノエルだが……とうとう目の前までやってきた。

じっとアークの瞳を見るノエルだがアークは苦笑いをし目をそらす。

ノエル「……なんで目をそらすのですか？」

アーク「な、なんでだろうなあ？　そ、それよりクラスのみんなの注目が俺たちに向けられているからそろそろ離れた方がいいかと……」

教室の後方だが先ほど新任の教師と皇族の使い魔が至近距離で見つめあっているのでザワついている。

「え、待って何で急にノエル先生がアークのところ!？」

「まさか……さつき様って言うてたし……二人ってそういう関係!？」

「で、でも……アークの顔、なんか青くないか？」

ノエル「……私、アーク様に言いたいことがあるんです」

ノエルは覚悟を決めて言うに對しアークが取った行動は……

アーク「んじやな」

ノエル「ええ!？」

((((死神が逃げた!)))

逃げることにした

あ、決してノエルが怖くてとかそういうのじゃないからな？

あくまでも戦力的撤退だ。

男だから逃げるなって？ 男でも逃げないといけない時もあるんだよ!!

アリス「アーク!?」

ノエル「ま、待つてください!!」

急にアークが走り出して驚愕したが急いで追いかける……がシスターであるノエルと戦場とかで鍛えたアークとの差は愕然でミルミルと距離を離されて行く。

アーク（つか何でノエルがアーム帝国にいるんだよ!?!）

廊下を走りながらノエルがここに居る理由を考える

まさか、ノエルが襲撃者!? ……しかし、体格的には襲撃者はアリ

スと同じくらいでノエルは彼女たちより低い

なら、関係者か？ 被害にあつたのは彼女の祖国であるミール聖教国でノエルはシスターだから内部の構造とかも知っている。

だが、彼女が協力する理由はなんだ？

四階にあるアリスの教室を出て二階まで降り、窓から校舎外に出て校舎裏まで走る。

ここは普段、太陽の光があまり入り込まない場所ではじめついている場所なので生徒はあまり来ない場所だ。

アーク「ふい〜……ここまで来れば大丈夫だ「アーク様!!」……は？」

一息つこうとした瞬間、アニメみたいな登場の仕方でもノエルが目の前に登場した。

アークはノエルだと分かった瞬間、逃走を再開する。

ノエル「見つけましたよアーク様!!」

アーク「おま、ちよ!?! 何でここがわかったんだよ!?!」

ノエル「アリス様がアークが行きそうなところを教えてくださいたんです!!」

アリス「めえ!?!」

何で教えんだよ!?!

19と17の男女が校舎を走り回るといふ奇妙すぎる行動をして

いる二人

男性だったらCQCでぶん投げてその間に逃げるが相手はノエルなのでできない

……結局、また逃げることになった

アーク「振り切るぜ」

ノエル「あ、ちよっとお!!」

再び走り出す

目の前の一階の窓に足をかけ二階にある窓に飛び込む

入った瞬間、目の前にいた生徒に驚かれたが無視し廊下を移動する。

アーク「はあ……マジで俺の悪運に恨むわ」

あれからはと言うとなぜか逃げた先にノエルがスタンバってたり居なくても数秒後にやってきたりと数時間ぐらい逃走中が繰り広げられた。

んで、現在は自分の家にいる

アーク「……さて、どうしたものか」

時刻を見ると11時（どんだけ逃げたんだよ俺）

アリスの昼食の時間だから行かないといけないのだがノエルがなあ……

気まずいんだよなあ……

どうしようかと考えていると

コンコン

アーク「ツ!! 誰だ?」

レイチエル「アーク! 今日こそ勝ちに来ましたわ!!」  
どうやらレイチエルらしい

ここ最近、俺の家に来ては何かしら勝負を仕掛けに来るのが日常茶飯事になってしまっている。

アーク「な、なんだレイチエルか……また勝負か?」

レイチエル「うん! あ、でもなんか道案内頼まれたからこの人も連れてきちゃった!!」

アーク「ん? 誰なんだ」  
「ここがアーク様の家なんですか?」はあ!?!

ひよこりと扉から顔を出したのは先ほどから追いかけてくるノエルだった。

アーク「しまっ「逃がしません!!」ごふう!」

急いで逃げようとしたが逃げる寸前でノエルが腹部にタツクルを決めアークを地面に押し倒し腹部の上に可愛らしく乗つかる。お前、本当に聖職者かよ

ノエル「……次こそは逃がしませんよ?」

あ、ダメだわコレ

目が笑ってねえ、しかも黒いオーラが駄々洩れで殺意も感じるわ

アーク「え、えっと……ノエル……さん?」

ノエル「……お久しぶりですね。こうしてちゃんと面と向かって話すのは」

アーク「ソ、ソウデスネ」

ノエル「何で逃げるんですか?」

アーク「え、えっと……あの時にノエルに言った言葉が後ろめたさから……ごめん、本音言うと言いすぎたわ……」

ノエル「……そうですか、貴方も」

アーク「え、も?」

ノエル「……実は私も言うことがあるんです」  
そういうとそつと言う



ノエル「……あの時、私アーク様に自分勝手なことを言ってしまったのを謝罪します」

アーク「いや、いいよ……俺だって身勝手な事情を言ってしまったし」

ノエル「そんなことはありません!! 私だって……戦争のことなんて全くの無知だったのだから」

「どうやらノエルはあの時のことを苦に病んでいるらしい」

アーク「ところでノエルは何でこの国に来たんだ？」

ノエル「あ！ えっと……わ、私、ミール聖教国からマザー研修生として来たのです!!」

アーク「マザー……え、まさか昇進したの？」

ノエル「しよ、昇進して……私はただいつも通りにお手伝いとかしただけですよ!!」

「……なるほどねえ」

だが、アークは不審に思った

アーク「……ところで何で俺のいる学園に？」

ノエル「そ、それは……あ、あれなんです!! じ、実は魔法学園で保健室の担当教師が不在でミール聖教国の本部で私が推薦されたのです!!」

俺の上で目を泳がせながら何か言うノエル

アーク「そうかあ……でも、教師なら俺と会う必要ってそんなになくはないか？ 俺はあくまでもアリスの護衛で使い魔だから忙しいし……」

ノエル「あ、えっとえっと……」

アーク「それに……ノエルってシスターだよな？ 研修生なら本国やればいいのに何でここに来たんだ？」

ノエル「あ、あれなんですよ!! 本国からついでにアークとの連絡役兼観察をして来いって!!」

アーク「……つまり監視役？」

ノエル「……あ」

何かを言ってしまったという顔になったノエル

ノエル「あ、あの!! 今の話は忘れてください!!」

アーク「それって監視対象の俺にいいことか?」

まあ、つまり「アークを監視してこい」ってことか

……やっぱ作っておけばよかったなiDROID

アーク「まあ、これでイーブンだな」

ノエル「い、イーブン?」

アーク「俺も非があつたしノエルも非があつた。つまりどっちも悪いから水に流してしまおうってわけだ」

ノエル「そ、ソウデスネ!! え、えっと今回はなかったこと!!」

アーク「おう、んじや改めて……久しぶりだなノエル」

ノエル「はい! お久しぶりですアーク様!!」

アーク「……」

ノエル「あ、あれ? ど、どうかされましたか?」

アークはノエルの顔をじっと見て言う

アーク「ノエル……あつて早々に悪いが言うことが二つある……まず一つ、「様」はやめてくれ。普通に呼び捨てでいいから。友人……なんだろ?」

ノエル「は、はい!!」

アーク「んで二つ目……なんだが」

するとアークは目を逸らす

アーク「……いつまで俺に馬乗りするんだ?」

ノエル「……え?」

ここでようやくノエルは今の状態に気が付いた

アークの胴体の上に自分が馬乗りをし押し倒している状況を……

ノエル「ふ、ふえ!! わ、わしやし!! い、今アークをおしゆたおし!?!」

アーク（わーお、面白）

みるみると先ほどの青白い顔からイチゴみたくに赤くなり俺の上であたふたするノエル

……てか降りてくれないかな

ノエル「しゅ、しゅみません……お、重かったですか?」

アーク「重k……いや、まったく重くなかったぞ」

なんかいろいろとあったがとにかくノエルはこれから学校の保健室の先生になることになりいつでも遊びに来てほしいと言われた

あと、肉じやがをまた作ってほしいと約束された。

……よほどおいしかったんだろうなあ

こうしてアークはアークのハーレムゲフンゲフン……一緒にいて飽きない友人がやってきたのであった。

レイチエル「……私、何見せられてんだろ。あれ？ てか、私は？」  
ちなみにレイチエルは二人に忘れられている。

アークはアーク 郊外

アークはアークは森に囲まれており緑豊かな土地である

流石にアークはアークの中心部は森はないが木は大量にある。

……だが郊外になると太古から成長している木もある。

ガラガラガラ

だがそんな静かな森の中から四台の馬車が出てきた。

馬車に描かれているマークはバサビイ民主主義国家のマークだが

……



めるかのようにニゴウの体に手を伸ばす。

クローン勇者の手がニゴウの足や腕、胴体に顔と触れられていきとうとう尻や胸に掴まれたりイヤらしく触られたりするがニゴウは反応をしない。

ニゴウ「マスターの命令を実行します」

こうしてニゴウはアーハム帝国に向かって歩き出したのであった。

## 八十九発目 蘇ったくそつたれ野郎

アーク「へえ〜……マザーもか」

ノエル「はい、あの時は申し訳なかつたって言っていましたよ!!」

アーク「そうかあ……」

あの後、ノエルとは仲直りをしこれまでのことはなかった……てことは無いが一旦収めることにした。

ノエル「それにしてもここがアークの家なんですね!!」

あ、そういえばここ俺の家だったわ

アーク「まあ、俺の家って言っても生活用品以外なんもないけどな」

ノエル「でもアークにしては生活感がありますね!!」

にしてはつてなんじゃにしてはつて

レイチエル「あのアーク？ 私のこと忘れてませんかね？」

アーク「あ、レイチエルいたの？」

レイチエル「忘れてるんじゃないですか!!」

完全に忘れ去られていたレイチエルに気が付くアーク

ノエル「あ、アーク？ そのお方は？」

アーク「ああ、自称魔法騎士（笑）のレイチエルだ」

レイチエル「自称じゃないわ!! あ、私が第三皇女レイチエル・フォ

ン・アーハムよ!! 貴方が噂で聞いたノエルっていう保健室の先生ね!!」

ノエル「第三……っていうことはアリス様の妹さんですか？」

アーク「正解だ。……とところでレイチエル？ 今日は何の勝負をするのだ？」

レイチエル「ふっふっふ!! 今日こそアークに勝てる勝負にしてみましたわ!!」

アーク「いいからはよ言え」

レイチエル「アーク!! 『どちらがブラジャーを早くつけれるか』で勝負ですわ!!」

アーク「俺、圧倒的不利じゃねえか!？」

なんか日に日に勝負内容が性もなくなってきた気がする……

前なんて『どちらが多くのスイーツを食べれるか勝負』だったし(糖尿  
病になる可能性が出るので却下した)

アーク「はあ……あ、せっかくだし、なんかスイーツでも食う?  
勝負とか関係なしに」

レイチエル「食べるに決まっているでしょう」

……騎士ってなんだっけ

ノエル「あ、でもアリス様はいいのですか?」

アーク「あ、そうだな……呼びに行かないとな」

時刻を見れば丁度昼休みの時間帯

……俺、どんだけ逃げてたんだよ

呼びに行こうと扉に手をかけた瞬間

カチャ

アリス「アーク? いる?」

アーク「あ、アリス。丁度良かった」

丁度いいタイミングでアリスがアークの家に来てきたのである。

アリス「まったく……朝は急にどこかに行っちゃやし昼は死神と教  
師が追いかけてっこしている噂を聞かし」

アーク「あ……悪い迷惑かけた」

アリス「この分は甘いもので返してね!!」

アーク「はいはい。あ、ついでにリンも誘うか。あいつに礼をしな  
いとな」

俺専用の武器を作ってもらってるからな

アーク「俺、ちよつとリンを誘ってくるわ」

アリス「30秒以内に戻ってこないとスイーツ二倍を命令するわ」

アーク「無理すぎる!?!」

アリスから無理難題を言い渡されたがマジなようなのでさっさと  
家を出てリンを呼びに行く。

扉を出て校舎に続く道を歩んでいく。

今日は天気が良く心地がいい。

アーク（この景色をあいつに見せてやりたいな……）  
アイツ……というのは例の襲撃者のことだった

彼女の腕は傷だらけで見ただけでも痛々しいかった。

まあ、そのマスターとやらが暴力をふるっているんだろう。

アーク（……まるで彼女の瞳は生氣のない道具のようだったな）

また会えたらな……

アーク「……いやいや、何で俺を襲ってきた奴にもう一度会いた  
いって思うんだよ」

なぜかはわからないがここ最近変な感じがする

身に覚えのない言葉を発したり襲撃者に妙な感情が出てくる。

アーク「……オセロツトに暗示でもかけてもらおうかな」

暗示でどうにかしようかと考えているとリンの住処にしている図書室に到着した。

カチャ

アーク「おーい、リン？」

リン「ああああ……じよしゆう？」

アーク「おう……」

図書室の中に入ると受付のところにリンが頭を抱えて机と抱き着いていた。

薄暗い図書室に少女が一人、死んだ魚のような眼を髪はボサボサで生氣を感じないでしている。

リンには俺専用の武器の製作を依頼して設計図とセットで渡しておいたが……やっぱり異世界人には難しいか

リン「ねえ……何この『らいふりんぐ』とか『しりんだー』って？  
どう作ればいいのよ？」

アーク「うーん？ リボルバーって俺の世界では結構構造が簡単な  
ほうだぞ？」

リン「……もう逆に助手の世界の作っている人たちが欲しいわ」  
アーク「あ、それより俺の家に来ないか？」



リン「え、もしかして私とイケない事でも？」

アーク「んなわけあるか。甘いものだ」

リン「あ、欲しい」

アーク「なら、身だしなみを整えてこい。俺は外で待つておくから」  
リン「はい」

疲れ気味の返答を聞いたアークは図書室を出て外で待つておくことにした。

……数分後

リン「お待ちせ」

アーク「あ、意外と早かったな」

リンが出てくるとアークはiDROIDをいじっていた。

リン「あれ？ 助手？ 今、何かしていたの？」

アーク「ああ、ちよつと新しい武器をな」

リン「え、まさかそれも私に作らせようと？」

アーク「それは流石にしないな」

iDROIDをしまいながらため息を吐き否定するアーク。

ちなみに開発したのはサコー社製の軽機関銃。ベトナム戦争時に開発され、長らくアメリカ軍全体で制式採用されてきたアメリカを代表する機関銃でありベトナム戦争でも使われた名銃の『M60』だ。

アーク（と言つても一応で作つた程度だけだな）

開発たのはその軽量化小型化した改良型の『M60E4』だ。

これはアークとかの雑魚清掃用で作つた武器だ。

別にFN SCAR-H Mk. 17とサイボーグになつて高速戦闘でいいのだが一応だ。

アーク（これをアリスに……いや、やめよう。あいつに扱えん）

重さも一番重い長銃身タイプの10.5kgなので扱えないことはない……と思う。

今一瞬、アリスに装備させたら一緒に戦えると思つたが温室育ちの少女が扱えるとは思えないので却下した。

開発

M60E4 70

合計ポイント 13925

アーク「んじや、行くか」

リン「え、その作ったのを見せてよ助手」

アーク「……分解は？」

リン「するけど？」

アーク「……はあ」

当たり前の回答が来て、またため息が出てくる。

なんかここ最近ため息しか吐いていない気がするな。

リンと外に出た後、家の方向に続く道を歩いていく。

リン「あ、そういえば助手。噂で聞いたけどミール聖教国でなんか襲撃者も助手とされたみたいだね？」

アーク「……どこで聞いたんだその噂。まあ、そうなんだが」

リン「なんか前の世界で因縁の相手とかいたの？」

アーク「え〜？ 俺、前の世界じゃ兄弟のいない一人っ子だし……」

もしかして剣道の大会の相手か？ いや、マジそれだったらどんだけしつこいんだよ」

一体誰なのかは気になる

リン「……実は隠し子いました!! つとか？」

アーク「え、嫌なんだけど」

兄弟か……でも欲しいとは少し思うな。

だって、俺が中学の頃なんか親は共働きでいつも一人だから会話相手が欲しいんだよな。

リンと二人で家に続く道を歩いていき校門に差し掛かったところで……

異変は起きた

ゾワアアアア!!

アーク「ツ!?!」

リン「どうした助手?」

突然、ドス黒いナニカと殺気を感じた。

呼吸が早くなる、冷や汗が出てくる……これは……どこかで

『ニゲテ』

アーク「……声?」

どこからか『悲しくそして優しい声』が聞こえた。

……それも校門の向こう側から

アーク「……ニゴウ?」

リン「え、助手今なんて?」

その時であった

ドドドド……

リン「……何の音?」

どこからか馬が駆ける音が聞こえてきた

アーク「ツ!?! リン伏せろ!!」

最近、悪運ついでに勘も当たるようになったせいなのかは定かではないが校門の方から嫌な感じを察知しリンを抱き寄せ急いで校門から離れた。

ズドオオオオオオオオオオオン!!

離れた瞬間、校門が爆発したように破壊され煙の中か三台の馬車が暴走状態で突入してきた。

アークはリンを抱えてその場から離れたが馬の進路上にいた他の生徒とかは半分ほどは回避ができなかった。

この魔法学園は校門から校舎まで一直線に道が続いている構造なので馬車は猛スピードのまま校舎にぶつかり停止した。

アーク「けほけほ、リン!! 大丈夫か!?!」

リン「う、うん! 一体何があったの!?!」

アーク「さあな! とりあえず怪我人がいないか確認を「キヤアアアアア!!」 ッ!?! 悲鳴!?!」

土煙が立ちこもる中、どこからか悲鳴が聞こえてきた。

リン「助手!! アレ!!」

アーク「なんd……は?」

悲鳴が聞こえた方向を向き土煙の中、目を凝らしてみると……そこには

「あう?」

アーク「なんで……生きているんだ?」

俺が殺したはずの糞勇者がそこにいた

リン「あれ? 助手? あれって確か……」

アーク「リン!! お前はここに居ろ!!」

とりあえず、こいつが襲ってきたと結論し大破した馬車の元に向かう。

「だ、大丈夫か!?!」

「だ、だめ! 足に瓦礫が……」

「うわ!?! なんだお前ら!?!」

どうやら馬車の進路上にいた生徒たちは巻き込まれたが死者は出なかったらしい。

だが、瓦礫に挟まった者もいるらしい。

「大丈夫!?! 抜け出せる!?!」

「だ、だめ……足が……」

その一角にて崩れた瓦礫から友人を助け出そうとしている

……がその背後から

「あ、あゝ? おんなあ?」

「ひ!? だ、誰よあんた!!」

彼女たちの背後から死んだはずの勇者……もとい翔馬がやってきた

「と、止まりなさい!! それ以上近づいたら帝国騎士に連行させますよ!!」

女子生徒が警告するが近づいてくる人間は止まらない。  
しかも

「おんなあ! ありす!! おでの! もの!!」

とよくわからない言葉を発しながら近づいてくる。

まあ、よくわかんないことを言いながら近づいてくるおっさんなど女子生徒から見れば恐怖でしかない。

「こ、来ないでよ!!」

女子生徒も速く魔法を撃てばいいのだが撃つたことがあるのは入学した時の林間合宿でゴブリンを一体倒した程度で人間などは殺したことがないのだ。

女子生徒が殺すのを躊躇っている中でも勇者は迫ってきて……

「あう~~~~!!」

「いやあああ!?!」

死んだはずの勇者は女子生徒に覆い被さり手足を抑える。

そして、制服をいやらしく、そして無残に破いていく。

「は、離して!!」

「おんな! おんな! おんな!」

「やめて!! 彼女を離して!!」

瓦礫に生まれた友人も目の前で自分の友人が襲われているのに何もできなかつた。

出来るのは友人に向かって手を伸ばすだけ。

「お、お願い……やめて……」

襲われている女子生徒は涙目でやめてほしいと懇願するが勇者は聞く耳を持たない。

そして勇者の手が穢れなき乙女の肌に触れ……

アーク「おらあ!!」

ゴキイ!!

……ることはなく、勇者はアークに顔面を蹴られ飛んでいった。

アーク「ふいー……あぶねえ……おい、大丈夫か？」

「は、はい!!」

抑えられていた女子生徒は手を差し伸べたアークの手を握り起き上がる。

アーク「他には？」

「あ、わ、私の友人が!!」

アーク「わかった……って言っても俺はこいつに用があるから一人でいいか？」

「ま、魔法で助けられます!!」

アーク「ならよし、助けた後は先生と帝国騎士に報告して無暗に近づくなって言うっておけ」

「わかりました!!」

アーク「よし、助かったか……さてと、何でお前が生きているんだ？」

なぜ、ロリ神のもとに逝かせたゴミがここに居るのかはわからないが蘇ったのならまた殺すだけだ。

「あう？ おぼえ……だれ？」

アーク「いや、俺に殺されたのに忘れたのかよ」

「ありす……どこ？」

アーク「悪いがお前にアリスを会わせるなんて彼女が可哀そうだから……な!!」

そういうと同時に右足を軸にし左足をコンパスのように回し勇者の顔面に回し蹴りでクリーンヒットさせた。

顔面に当たったせいで二度と見たくないクソの顔面が整地された。

ゴキイ!!

「へんげ!」

勇者の顔が向いてはいけない方向を向き、そのまま倒れていった。  
アーク「ふく……全く、死んだはずだろおめえ」

顔が背中方向に向いている勇者の死体に近寄るアーク  
さて、解剖でもしてなんで生き返ったのか調べないとな。

アーク「……見た感じ、火傷の後も異物を混入させた後もない……  
まさか、あいつの子供? いや、マジだったら母親のほうが可哀そう  
だわ」

死体に触れ観察しようとした瞬間

「あ、あう?」

アーク「ツ!」

突然、死んだと思った死体が起き上がった。

アーク（あ、そうか……こいつ、不死身みたいな体だったわ）  
神様特典まで健在かよ

まあ、だったら「こいつが生きるのをあきらめるまで殺せばいい」  
アーク「あ、あとロリ神にもクレームを入れないとな」

「あええ? 前、見えない?」

起き上がった糞野郎は子供みたいにヨチヨチ歩きであたりを歩き  
回る。

「あ、くびいがまがつてうのひゃ!!」

すると、勇者は両手で自分の顔を掴み……

ゴキゴキゴキゴキゴキ!!

無理やり背中方向に向いていた顔を正面に戻した。

アーク「……どこのシグマだよ」

半ば呆れているアークだがその手にはM870ショットガンが握  
られている。

そして、標準はヨタヨタと歩いてくる勇者の顔面。

アーク「See you<sup>死</sup><sub>ね</sub>」

ズドン!!

放たれた12ゲージ弾は勇者の顔面に当たり……先ほど整地したが整形した。

バタン

整形された勇者は背中から地面に倒れる。

アークはフォアエンドを引き次弾を薬室に入れる。

アークの知っている勇者ならまだ生きて起き上がってくるはずだ

アーク「さて、さっさと起きて死んで……はい？」

アークは困惑した。

なぜなら

ゴポ……ボコオ……

アーク「……溶けた？」

なぜか再生……は一応しているが体が溶けていくスピードのほう  
が速いせいかゲル状の肉塊になり、最終的には蒸発して消えていっ  
た。

アーク「どうということだ？」

さらに訳が分からなくなった。

なんで殺したはずのコイツが生きているんだ？　なんで殺した瞬

間に溶けるんだ？

アーク「……マジわかめ」

M870をリロードしながら考えている

……がアークは気が付かなかった……自分の後ろにある瓦礫が不  
自然に動いたことに

「ああああ!!」

アーク「な!?　もう一体!？」

後方の瓦礫から別の勇者が出てきて、アークに体当たりした。



不意打ちをされたアークはM870を落としていしまい、取り押さえられてしまった。

アーク「なんでもう一人いるんだ!？」

地面に叩きつけられ反撃しようとして抵抗するが

「てきてき!! おで、ころす!!」

「ありす! おれの! もの!!」

「じやま!! さささえない!!」

アーク「どんだけいるんだよ!？」

校舎に衝突し大破した馬車から巣穴から出てくるアリの大群みにゾロゾロと勇者が出てきた

そして、アークに乗っかつる。

アーク「くそ!! 離せ!!」

アークも何とか脱出しようとするが勇者の大群はアークの手足を掴まれ無力化されてしまった。

しかも数十人のおっさんがアークに乗っているのも重い。

アーク「……く……そ!!」

i D O R I Dを取り出して変身しようにも重すぎて懐に手が届かない。

「おんあ?」

「こいつ、おんな!!」

アーク「おま!？」

するとここで乗っかっていた勇者たちがアークの姿を見てなぜか女性だと勘違いし始めた。

まあ、今のアークの姿は銀髪美少女のアレなので無理もない。

アーク「嘘だろお前!？」

察したアークは顔を青ざめ逃げようとするが手足を抑えられているので逃げられない。

そして、勇者の手がアークのスーツに……

リン「炎の聖霊よ今こそ力を見せたまえ」「ファイヤーボール」  
!!

ゴオオオオオオおお!!

「あぎやあああ?」

「あちいいい!」

突然、熱い熱波を感じた後には上からの重圧が消えていた。

リン「大丈夫助手!」

アーク「うへ……助かったわリン」

リン「ほんと、なんてことをしてくれるのよ……助手の裸を触るのは私だけなんだから!!」

アーク「……俺の感謝を返せや」

所々、リンの火魔法でスーツが焦げたが致し方なし

「いたい? いたいたいたいたいたい?」

「燃やす! 焦げる!!」

だが勇者たちはというど火だるまになり所々焦げ、あたりに肉が焦げる匂いを漂わせる。

リン「……こいつらって確か、死んだはずの勇者だよね?」

アーク「ああ、なんで生きてるとそっくりさんがこんなにも多いのかは気になるが先に一掃する必要があるな」

「殺す!! 邪魔!!」

「お前! おんな! いらない!!」

「豚! 性処理!! させる!!」

リン「うわ、死んでないし。あと、助手が殺したくなる理由もわかるね」

アーク「……憶測だが多分、あいつらは即死級の攻撃じゃないと死なない……とか?」

リン「……これは世話焼ける問題ね」

アーク「まったくくだな」

先ほど回収したM870を構えるアークと魔法演唱を準備するリン

アーク「……俺はこのままあいつ等の気をひかせるからその間にリンは他の生存者がいないか搜索していたら助けてあげてくれ」

リン「わかったわ。……ふふ、うれしいわ誰かに背中を預けるのって」

アーク「いいから行くぞ。怖いのはこいつらじゃなくて二次災害のほうだ」

そして……いざ、討伐に行こうとした

……が

アリス「アーク!? 今の音はなに!?!」

アーク「アリス!?!」

アリス「どうしたのアーク!? その傷は!?!」

先ほどの爆発音を聞いたアリスは使い魔が心配になり急いできたのだ。

だが、それが仇となった

「あります?」

「あります!!」

「おでらのあります!!」

アリス「な、なんであんたが……何よこの数!?!」

「一二三ありますありますありますありますありますありますありますありますありますありますありますありますありますありますありますあります」

勇者たちは自分たちが死んでも欲しかったエルフが目の前に現れた瞬間、アークたちをほつたらかしにしアリスのほうに向かって行進し始めた。

アリス「ちょ!?! 来ないでよ!?!」

「まったく! 俺のあります!」

「いっしょ! ずっといっしょ!!」

アリスは波のように迫ってくる勇者の大群から逃げようとする。

アーク「だあ! リン! リンは先生たちに報告と学園の外にこの汚物たちを出さないよう警戒をしといてくれ!!」

まさかの勇者たちがこちらではなくアリスをターゲットになってしまったので急いでアリスを救出すべくアリスを追いかけに行つた

勇者たちを全力疾走で追いかけ始めた。

## 九十発目 魔法学園襲撃事件

その日は久しぶりの快晴でいい天気だった。

鳥は歌い花は咲き誇る……はずだった。

アリス「はあはあはあ……」

アーハム帝国の魔法学園内にある道をアーハム家の二女であるアリスが息を切らしながら走っていた。

この日はミール聖教国から来たノエルという気に食わない少女が教師として来た後、アークと何かやってたらしいがアークの家でスイーツを食べようとした……が突然、爆発音が聞こえてきた。

しかも、校舎側だったので心配になって行ってみると校舎に巨大な3台の馬車が校舎に衝突していた。

アリス「な、なんであいつがいるのよ……」

そして、今現在自分は「あの見ているだけで吐き気がする奴」から逃がっている。

……まあ、奴ではなく「奴ら」だが。

ガサツ

「ありす？」

「どこ？ あそぼ？」

「ずっと、いつしよ？」

アリス「ツ!! しつこいわよ!!」

だいぶ走って一旦休憩しようと思った瞬間、どこからかアイツの声が聞こえてきたのでまた走り出す。

アリス「ああもう!! なんであんだ達が生きてるし増えるのよ!?!」

「ありす!」

「いた!」

「けっこん!」

すると後方からアリスを見つけた勇者……本来は死んでいるはず

の人間が津波のようにアリスを追いかけてきた。

ある勇者は目の前で走っている他の自分を蹴っ飛ばして抜いたり、またある者は蹴っ飛ばされても這いずってアリスを追いかける。(簡単に言ったらワールドウォーズのゾンビの大群みたいな感じ)

完全にR規制が入りそうな光景がアリスの後ろから呻き声と共に迫ってくる。

アリス「はあはあはあ……んくう！ 速く……逃げないと!!」

だが、勇者の大群とアリスの差はみるみると狭まってきた。

エルフは運動がそこまで得意な種族ではないせいなのか走るスピードが遅い。

「ありすくー!」

「つつかまえたあー!!」

アリス「いや!?」

差は狭まっていき、とうとう勇者どもの汚い手がアリスの綺麗な肌  
に……

ガシャアン!!

が、ここで校舎の窓を突き破ってきた乱入者に阻まれてしまった。

『peace!!』

アーク「報復!!」

全身から黒い何かが漏れ出し全身に纏わりついた後には、そこには  
ハゲた兵士がいた。

アーク「よつと!!」

アリス「きや!」

アークはアリスが追いかけてらるのを確認すると、素直に勇者  
たちを追いかけるのではなく神様特典で予測し校舎を通って近道を  
したのだ。

窓を突き破りサイボーグの跳躍力に物を言いわせアリスがギリギ

りのところで回収する。

アーク「あつぶなあ……アリス？ ケガはないか？」

アリス「え、ええ……それより!! なんてあいつがこんなにもいるのよ!!」

アーク「それは俺が聞きたいな!!」

アリスにケガは無いかと聞くが

「ありすう!!」

「かえせえ!!」

アーク「まつたく!! うちの主人はモテすぎて困ったもんだな!!」

アリス! 少し触れるぞ!!」

アリス「ひゃあ!」

勇者たちは細胞までにトラウマを刻まれたアークを見た瞬間、激高し襲い掛かってくる。

アークは少しアリスに謝罪した瞬間、アリスを抱きかかえる（ちなみにお姫様抱っこ）

アーク「アリス! クロエたちは!」

アリス「クロエ姉さまならまだアークの家にいる!!」

アーク「……だったらまだ、避難はできてないな……今すぐ行きたいんだが後ろの奴らがなあ」

アリスを抱きかかえながら疾走するアークの後ろには津波のように迫ってくる勇者……否、ゴミたち

例え、ここでアリスをクロエたちのところに行かせて自分が囷をしようにも大部分はアリスのほうに行ってしまうだろう。

今はサイボーグになってるのでいつでも突き放せるが見失ったゴミどもは新しい獲物を見つげるために辺りを彷徨って二次災害でも出してしまう。

だったらアークが全員殺せばいいかもしれないが……一つ問題ができた。

それは開発ポイントだ。

獲得 0

合計ポイント 13925

とまあ、見たらわかるかもしれないのだがあいつらを殺しても開発ポイントに入らないのだ。

とんだ赤字になるぞ畜生。

弾代とかどうするんだよ。

アーク「接近戦……いや、この大人数でアリスを守りながらはきついな」

殺しても損、殺さなくても損

……これだからこの勇者は嫌いなんだ（性格的にも財政的にも）

アーク「通知さん……はいないのか。仕方ない、これで一か八かで行くか」

頭の中にコピーしておいた開発一覧から一つの要請にかけてみる。

アーク「アリス、俺の懐からiDROIDを取り出してくれないか？」

アリス「えつと……はいこれ!!」

アーク「そこから「要請」を……そうそう……あ、それがいいな」

担いでいるアリスにiDROIDを取り出してもらい操作してもらおう。

アリス「これでいいの!？」

アーク「ああ! あと4秒後……スイッチを押せ!!」

アリス「こ、これね!! えい!!」

アリスはアークからの指示に従いiDROIDのスイッチを押した。

すると……

ザザ……

ミラー『さつき要請を受けた支援砲撃を開始する!! 当たらないでくれよ!!』



ひゅううううう……

i D R O I D からどこか金髪好きのグラサン野郎の声が聞こえた瞬間、どこからか重々しい落下音が聞こえてき……

ズドオオオオオオオオオオオン！！！！

「「「「ぎやあああああああ！！」「」「」「」」

アーク「つしや!! ビンゴ!!」

アリス「え、え!? 何!? 噴火!?!」

アリスが驚愕しているが答えはM G S P Wであった砲撃要請だ。毎度思うがあれつてどこから撃つてるんだろうな?

アーク「さてと結果は……おお、やっぱか」

前世でメタルギアとR T A系B I G S A R Uの動画を見まくったせいかわりに砲撃が来るまでの時間を知っているので自分たちのいる位置と勇者の位置をアークの力で未来予測して要請した。

結果は上々。

ちようど、一発目の砲弾が勇者の集団の先頭に命中し鉄のシャワーのように浴びていった。

鉄の雨の中に思考を捨てた勇者たちは自ら浴びに行つた。

そして、砲撃が止んだころには血の海が広がっていた

足が取れたり腕が挽肉になってたり焼けていたり地獄絵図が広がっていた。

……が

「いたいたいた」

「あひ、とれちや?」

「おめめ、どこいつちやつた?」

アーク「……やっぱ全滅は希望的すぎたか」

あの一回の砲撃で全員あの世に戻ってくれたら嬉しかったのだが先ほどの三割がいまだ起き上がりこちらに近寄ってくる。

この数なら俺一人で何とかなるな。

あ、でもアリスを先に避難させるか。

アーク「アリス、今から俺の家に行って下すから外には出るなよ？  
あいつらはどうやらアリスが目当てらしいからな」

アリス「……え」

アーク「……いや、なんでそんなショックな顔をするんだよ」

アリス「あ、い、いや！　べ、別に何でもないわ!!　ほら！　さつ  
さとあの人間をやっちゃってよ!!」

否定するが……ほんの少しだけ誰かに抱き上げられるのも悪くな  
いなど思ったアリス

アーク「はいはい、んじゃ捕まっとけよ」

再度、アリスを担ぎ上げサイボーグの跳躍力で離脱するアークとそ  
れを追いかけようと蠢くが見失ってしまい立ち往生する勇者たちで  
あった。

アーク「到着つと」

アリス「クロエ姉さま！　いますか!？」

クロエ「アリス!?　ねえ、さっきの音って」

サイボーグの性能のおかげですぐに家の到着した。

アーク「その前にだ、クロエ、今から外には出ずにここにいろ。少  
し面倒なことが起きた」

クロエ「面倒ごととは!？」

アーク「えー……まあ、簡単に言ったら死んだはずの勇者が生き  
返った、しかも量産して」

クロエ「は、はい？　どういうことですか?」

アーク「わかんねえだろ？　俺にもわからん」

クロエ「と、とにかくアークの家に隠れていればいいのですね!？」

アーク「ああ！　ついでに言うにあいつら、アリスが目的らしいか  
ら気をつけろよ!!」

クロエ「……へえ？　あいつら私の妹が目的なのね？　燃やそうか

しら？」

アーク「怒りたいのはわかるが二次災害を出したくないから大人しくしてろ」

何やらクロエが鬼の形相になっているがああ、その層どもは女を見つけたら襲い掛かる生態らしいからクロエが出てしまおうと問題が起こりそうなので沈ませる。

リン「助手!!」

リンも息を切らしながら帰ってきた。

アーク「リン！ 怪我は!？」

リン「問題なし！ 教師たちからどうということだと質問攻めになっただけ校舎の状況を察して今生徒をグラウンドに避難させてる!!  
あと、例の勇者擬きたちなんだけど、まだちらほらいる!! 多分、あと80体はいる!!」

アーク「了解！ おい、お嬢!!」

レイチエル「お嬢って何ですか!? 普通にお嬢様とかにしなさいよ!!」

あ、適当に叫んだら反応したわ。

アーク「えつと……レイチエルはここにおいてアリスの警備をしておいてくれ!!」

レイチエル「わかってますわそんな命令されなくても!!」

アーク「なら、よし！（現場猫風）ノエルも外には出るなよ!!」

ノエル「は、はい！ お気をつけて!!」

さて、向かうとするか。

……てかアイツら、まだ80もいるのかよ

アーク「一応、月光たちを呼んでおくか。あ、でももし仕掛けた犯人がもう逃げていたら警備が薄くなるから逃げられるかもな……」

アリスたちに現代兵器を持たせるか？

いや、彼女たちは使ったこともない武器を使ったら逆に不安だ。

どんな武器でも使い手がド素人だったら宝の持ち腐れだからな。

だったら俺もここに待機して月光たちにざんとうをさせるか？

どうしたらアリス達を安全かつ勇者を殲滅できるか？と考えてい

ると

ゾワアアアア!!

アリス「ツヒ!?!」

クロエ「な、ナニコレ……」

ノエル「な、なんですか今のは」

リン「……寒い」

アーク「どうした!?!」

突然、アークを除くみんなの顔が蒼白し震えだした。

アリス「あ、アーク……怖いよお……」

アーク「おい!?! どうしたアリス!?!」

ノエル「何……このドス黒い魔力?」

リン「なにこれ……まるで助手と同じ感じ……」

クロエ「アーク……外に……外から何か迫ってきています……」

アーク「……外?」

クロエが外から何か来ると聞いたアークはそつと扉に手をかけ

……ようとした瞬間

ピロン♪

『ヨケテ!!』

アーク「ン? 通知さn………ツ!?! みんな扉から離れて伏せろ

!!」

アークが叫んだ次の瞬間

ズドドドドドドドド!!

アークがドアノブに触れようとした瞬間、扉から次々と風穴が空いていった。

アーク「これって……銃声!？」

なぜ、ここで銃声がっと思うがすぐ答えは出てきた。

アーク「奴か!!」

もう完全にボロボロになった扉を蹴破り外に出ると……

ニゴウ「ごきげんよう、アーク」

アーク「やっぱ、お前か」

天気の良い青空だが馬車が外に出るとそこにはF A — M A Sを構成しているあの時の襲撃者がいた。

アーク「まさかっと思ってたが……まさかお前だったとはな」

ニゴウ「……あなたは何ともないのですね」

アーク「はあ？ 何がだ？」

ニゴウ「私がここに来た瞬間、みんな怯えだしたのにあなただけは何ともないのですね」

アークは何ともなく、なぜアリス達だけ震えているのかというところアリス達は魔法が使えアークは使えないのである。

アリスたちは普段から魔法などを使っているので魔力を索敵魔法なしでも少しは感じることできる。

だが少ししか感じられないはずなのにアリスたちはすぐそこにいる存在から放たれる魔力に怯えているのだ。

アーク「んなもん知るか。それより、これはお前か？」

ニゴウ「はい……と言えば？」

アーク「あの糞野郎をどうやって生き返らせたのかを聞いた後、殺す」

ニゴウ「そうですか……では戦いますかっと言いたいところですが私は今回はあなたと戦いに来たのではなく彼らの実証実験をしに来ただけなので」

アーク「んな、ここでしないでくれ」

ニゴウ「正式一号はまだ改善の余地がありますね……まあ、こいつらには最初から期待はしていませんが」

どうやら襲撃者は最初から期待などしておらず勇者たちを道具として扱っているらしい

ニゴウ「それにしても……それが例の姿なのですね」

アーク「姿……ああ、このサイボーグか」

ニゴウ「なんでハゲているんですか？」

アーク「知るか……よ!!」

会話をしている最中だがアークは手からFN SCAR—HM

k. 17を召喚し腰撃ちだが襲撃者に向けて引き金を引く。

ズドドドド!!

放たれた7. 62mmが襲撃者に向かって飛んでいく

……が襲撃者は横に転がり木に隠れた。

アーク「つち!!」

銃口を襲撃者に向けて追いかけるが追いつく前に弾切れを起こし急いでマガジンを外し新しいマガジンを交換するが

ニゴウ「申し訳ございませんが私には用事があるので、これで失礼します」

アーク「はあ!? おま、ちよ!?!」

銃撃戦になると思いきや襲撃者は用事があるからと言い、F A—M A Sを直した後、その場にスモークグレネードを捨てた。

地面にぶつかった瞬間、あたりに煙をまき散らし視界を遮られてしまった。

アーク「逃げるんかてめえ!?!」

ニゴウ『いえ、今回は戦えとマスターから命令を受けてないので。

あ、あとプレゼントです』

少しずつ聞こえなくなっていく  
すると

ニゴウ『おーい! ここにアリスがいますよおー!!』



アーク「……まさか!？」

襲撃者は四台と言っていたが実際は三台しか来なかった。

それにあいつ等の性格から考えると……

アーク「本命は皇帝陛下かよ!？」

くそ!

今すぐに行きたいけど勇者どもが邪魔だ!!

それに行ったのが勇者だったら皇帝陛下は自力で何とかなるかもしれないけど相手が襲撃者だったら分が悪いぞ!?

スモークグレネードから煙が出てき、勇者が迫ってくる中どうするか考えているアークに……

アリス「行きなさい! アーク!!」

アーク「アリス!？」

アリス「私たちのことよりお父様とお母様のほうを優先して!!」

クロエ「ええ! それに別にこいつらはもう死んでいるんだから燃やしてもいいんですよね!？」

リン「……助手、それに仮にクロエ様が本気を出しても生徒は全員グラウンドに集まっているから誤射はないと思うよ」

アーク「で、でも……」

クロエ「あら? これでも『豪華の魔法使い』って言われている第一皇女わよ? こんなゴミなんか目を瞑つても一掃できるわ」

アーク「……じゃあ、俺は城に向かうから頼んだぞ」

レイチエル「ふふん! 安心して行きなさいなアーク!! この私、魔剣士もいるんだから!!」

ノエル「アーク! どうかご無事で!!」

アーク「ああ! あ、あとリン! これ!!」

行くことを許可されたアークは行く前にリンにとある武器を渡しておく。

リン「こ、これって!？」

アーク「M60E4だ!! どうせ、使い方もわかるんだろ!!」

リンは現代の銃など使ったことがなく、マガジンチェンジもできないが軽機関銃のM60E4なら弾数も多くてそんなに重くないから



扱えるはずだ!!

リン「おお……これが助手の世界の武器……」

M60を渡されて見惚れているリンは放っておき城に向かうとする。

アリス「あとアーク!!」

アーク「なんだ?」

アリス「……死んだら主人として承知しないわよ」

アーク「……ああ、また死ぬなんて御免だからな」

俺がこの世界に来ていろいろと変わっちまったな……

アーク「さてと……向かいますか」

FN SCAR—H Mk. 17を背中に背負い、アークは城に向かった。

## 九十一発目　そして、戦場は城へ

アークがニゴウに襲われる10分前……

アーム城ではいつも通りの平凡な日々を送っていた。だがそんな日々も一つの報告で壊されてしまった。

バタバタバタ!!

「逃げ逃げ!!」

「おい! そんなところで油売ってないで準備しろ!!」

「は、はい!!」

城内では帝国騎士や魔法使いが慌ただしく行ったり来たりしていた。

いつもは騎士は宿舎で訓練をし魔法使いは研究などをし慌ただしく動くのは執事などの工程の補佐をする者だけ名のはずだが……今日の昼頃、魔法学園から一報の連絡がきた。

『現在、学園にて正体不明の敵に襲われている。救助求む』

この一報を受け、帝国騎士は急いで騎士団を出すことになった。

国が管理している学園でしかも自分の娘たちが通っている学園なので警備している騎士もいるのだが報告では抑えきれないほどの数らしい。

「帝国騎士、準備完了しました!!」

「全員完了しなくてもいい!! 準備ができたやつから急いで迎え!!」

「了解しました!!」

アークの冤罪事件で前の騎士団の代表が捕まり、新しく就任したエルフの騎士が叫び急いで向かわせる。

「開錠!!」

ゴゴゴゴゴゴ……

先にワイバーンを使い魔にしている魔法使いが相棒に乗り向かい、地上では騎士たちが門を潜って学園に向かう。

パレードや外国の訪問以外では滅多に開かない門が重々しい音を響かせながら開いていき国民もなんだなんだと窓を開けたり扉を開け見てくる。

……が、そんな国民のいる建物の上に一人の銀髪の女性が潜んでいた。

ニゴウ「……騎士団の出撃を確認。作戦を遂行」

黒いフードをかぶり屋根の上から覗くニゴウは手を「何も無い空間」に出し唱える。

ニゴウ「RGB6、召喚」

すると、まるで3Dプリンターで作られていくようにぐれねが生成された。

ちなみに余談だが「RGB6」とは南アフリカのアームスコア社が開発した6連発のグレネードランチャー「ダネルMGL」のクロアチア軍の採用名である。

ニゴウ「……」

RGB6を構え、狙う。

そして……騎士たちが出てきたところを狙って

ニゴウ「……fire」

ポン

ポン

ポン

ポン

ポン

ポン

RGB6の引き金を引いた。

銃を知らないエルフたちから見ればふぎけたような音だと思うだろう……だが、そんな彼らの上空から40x46mmグレネード弾が迫ってきた

ズドオオオオオオオン!!

集団の中に6発全て命中した。

突然の爆発に騎士たちは混乱状態になった。

ニゴウ「マスターの命令のうち一つを完了、次の命令を遂行します」  
首相から命令の一つを終わらせ、次の目標に向かうために城に背を向け移動を開始しようとしたニゴウの下にある大通りを一台の馬車が門に向かつて猛スピードで駆けていった

普通ならスピードを落とし止まるなどをしないとイケないのだが彼らは止まらず

ズドオオオオオオオオオオン!!!

混乱状態になっている騎士団の中に突撃していった。

突然の爆発に突然の馬車の突撃に騎士たちはさらに大混乱になった。

隊長などの指揮する者は混乱を鎮めようと命令をするが指揮系統が崩壊しているので意味がなく「急いで攻撃してきた奴の捕縛」か「そんなことより学園に向かう」かで別れてしまった。

とりあえず馬車を退かそうと馬車に向かうが

「殺せ!!」

馬車の中から黒い銃口が出てき……

ズドドドドドドドドドドドドドドド!!

「ぐは!?!」

「ぎゃあ!?!」

「な、なんだ!?!」

突然、爆発音が聞こえたと思ったら突っ込んできた馬車の周りに自分の部下が血を流し倒れていた。

「何者だ!?!」

すると馬車から「黒ずくめの格好をした人間」が下りてきた。

(恰好的には仮面ライダーでいうとビルドのガーディアンの格好をイメージしてくれたらありがたいです)

「貴様ら! 我々が誰なのかわかってるのか!?!」

すると黒ずくめのリーダーであろう他のとは違い腕に「バサビイ共和国」のマークの入ったワッペンをつけた人間が話す。

「ええ、わかってますよ?」

「なんだその態度は!?!」

騎士団の長が怒鳴りつける間にも部下が連行しようと近づくが

「はあ……あ、自己紹介がまだでしたね。我々はバサビイ共和国解放前線です」

「バサビイ……まさか!?!」

騎士長が気が付いき急いで取り押さえさせようと動いたころには「遺言はそれだけです。では、全員殺せさようなら」

リーダーが命令すると部下は手に持った「XM8」の引き金を引いた。

ズドドドドドドドドドドドドドドド!!

XM8から放たれた5.56mmはエルフの騎士や魔法使いの悲鳴を掻き消すかのように雷のような死の音を響かせ命を消していた。

「よし、総員突撃せよ」

「」「了解!」「」

「殺害目標は現アーハム帝国皇帝だ。速やかに行動しろ。死神が来る

までに撤退するぞ」

門付近にいた見張りや騎士など全員を殺したのを確認するとバサイ共和国の工作員たちはまるで日本のSAT(Special Assault Team)のように静かに移動していく。

恐らく、先ほどの銃声で皇帝にもバレたはずなので急いで行動しないと秘密の抜け穴などから逃げられる可能性がある。

「敵襲！ 敵襲！！ 急いで陛下に報k（ズドドドド!!）ぐは!？」

「見張り塔、クリア」

「よし、行くぞ」

馬車で城の中に突入し見張り等の騎士を倒した後、スモークグレネードをあたりにまき散らし騎士の目からいったん逃れた。

「全員、<sup>サブレッサー</sup>消音機をつけろ」

リーダーが命令するとXM8の銃口にサブレッサーを取り付け始めた

姿勢を低くし草むらに隠れながら皇帝のいる部屋に向かう。

「おい！ あいつらはどこに行った!？」

「探せ!! 騎士の名が汚れるぞ!!」

辺りが煙だらけになってしまい襲撃者を見失った騎士たち

まだ恐らくこのあたりにいるであろうと思ひ索敵魔法で探すが

「ふん、馬鹿め。人間擬きが……」

襲撃者はすでに広場にはおらず城にある裏口に集合して中に入っていた。

広場でほかの所で警備していた騎士たちが集まって他の警備場所の警戒が薄くなっている間に扉を破壊し中に侵入する。

「……廊下、クリア」

「了解、前進」

扉から入り壁にへばり付き覗きクリアリングをする。

廊下に誰もいないのを確認するとリーダーが指示を出し前に進む。

「四人ほど俺についてこい。他は退路の確保と城の制圧、証拠隠滅と冤罪を準備しておけ」

「」「了解」「」

静かに階段を上り時には巡回の兵士を殺したりしていき……

「……ッ!! 前方に2」

先頭を進んでいた部下が報告があった。

「了解、ふう……ようやく皇帝の部屋についたな」

一時間位かけてようやく皇帝の間に到着した。

部屋の前には二人の警備兵が立っており警備は万全のようだった。

「……なあ、さっきの爆発音は何だったんだ？」

「多分……魔法団の奴らの魔法だろ」

「そ、そうだよな」

「アーハム帝国に攻撃してくる奴なんて……いると思うか？ こつちには死神もいるんだぞ？」

「そうだよな！ そんなバカな国なんているわけ……」

先ほどの門の広場で聞こえた爆発について話しているようだ。

爆発音は皇帝の間まで聞こえてきて、そのあと連続として何かの音が聞こえてきた。

警備兵二人はまさかアーハム帝国にちよつかい駆けてくる奴なんているわけないだろうと慢心していた。

だが、今回の相手は国ではなくテロ組織のような部隊だが

カチャ

「俺は右をやる」

「わかった、俺は左だ」

壁から部下二人が皇帝の間の扉前にいる警備兵二人に向けて銃口を向ける。

そして……

パシユ

パシユ

「……クリア」

「よし、その死体は扉から離して隠しておけ」

ぞろぞろと皇帝がいる「部屋の前の扉に集まる突入部隊

その横をズルズルと引きずられていく全身血だらけになったエルフの警備兵。

「全員いるな?」

「はい、全員います」

「よし、C4をしかけろ」

リーダーが指示を出すと部下の一人が扉の前に行きプラスチック爆弾「C4」を仕掛ける。

「爆発と共に中に突入後、皇帝を発見次第射殺。死亡を確認次第撤退だ」

「死神はどうします?」

「そつちに関してはニゴウが何とかしてくれるらしい」

「全員、準備はできたか?」

(こくり)

扉の前で五人の突入部隊がスタンバイする。

先ほどの射撃で弾数の少なくなったマガジン抜き新しいマガジンをトリガー前の穴に差し込みチャージングハンドルを引き準備ができたのを示す。

「3……2……1……」

そして、手に持っているスイッチを入れる

カチツ

ズドオオオオオオオオオオオ!!

「突入!!」

扉が爆発し煙が立ちこもる中、中に突入していく部隊

アレクサンダー「……侵入者か」

「……お前がアレクサンダー皇帝か」

部屋の中ではアーハム帝国現皇帝のアレクサンダーと妃のエリザ



ベスがいた。

窓からは天気が良い太陽の光が差し込む中、突入した部隊は皇帝を囲むようにして包囲しXM8を構える。

アレクサンダー「いかにも私がアレクサンダーだが……お前たちは？ 目的はなんだ？」

「今から死んでいくやつに名前を教えても意味がないだろう？」

アレクサンダー「……どこかの貴族の差し金か？」

「生憎だが不正解だ。あと俺たちの目的はお前を殺すことだ」

アレクサンダー「……そうか」

エリザベス「……あなた」

アレクサンダー「エリー……私の後ろに」

ジリジリと近づいてくる兵士たち

近づくに合わせて一歩ずつ後方に下がっていく皇帝夫婦

アレクサンダー（あの武器……アークが持つておる武器に似てる。……いや、あやつはアリスに忠誠を誓っている身だ。だったら……一体だれが？）

「それじゃ、遺言はあるか？」

アレクサンダー「一つ提案をいいか？」

「了承する気はないが聞いてはやろう」

アレクサンダー「私の命を差し出すからエリー……私の妻は見逃してくれないか？」

エリザベス「皇帝陛下!？」

突然の発言に後ろにいた妃が驚愕する

「理由は？」

アレクサンダー「別に私を殺せば世界中に自慢やら何やらできろ……だが無意味な殺傷は貴様らもやりたくないだろ？」

「……」

アレクサンダー「だからだ……私を殺しても構わん、がエリーだけはどうか殺さないでほしい」

「随分と妻思いだな？」

アレクサンダー「はっはっは！ エリー以外で妃にする奴なんぞい

ないわ!!」

「では約束は守ろう」

エリザベス「いけなせん皇帝陛下!! 私も御一緒に!!」

アレクサンダー「いや、いいんだエリー……クロエたちを頼んだぞ」

エリザベス「……陛下」

皇妃は皇帝の服の裾をつかみ制止させようとするが皇帝に優しく笑われて止められる。

アレクサンダー「では……頼むぞ」

「ふん、その度胸だけは認めよう」

カチリつと皇帝に銃口を向け……

ツド

放たれた銃弾は皇帝の体を貫く……

エリザベス「うぐ!?!」

アレクサンダー「ツな!?!」

……ことはなく放たれた銃弾は後方にいたエリザベス皇妃の腹部に命中した。

皇妃の腹部に命中した5・56弾は肉を裂き血が滝のように出てきた。

「生かしてやんよ。お前皇帝が生きている間はな」

アレクサンダー「貴様らああ!!!」

妻が怪我をさせられて激高した皇帝は自身の得意な雷魔法で殺そうとした兵士を焼き払おうとしたが

アレクサンダー「ツ!?! 魔力が集まらないだど!?!」

「おいおい? ただできえ「雷神」って呼ばれていたエルフに何の対策もなく攻めてくるわけないだろ?」

素晴らしいリーダーの懐から出したのは小さな不気味な色を出すランタンのようなものだった

アレクサンダー「そ、それは？」

「これは「対魔法使い制圧用兵器」さ。範囲はちと狭いが範囲内にいる魔法使いの魔法を使用することができなくなるものさ」

勝ち誇ったような顔をしながら説明をするリーダー

これは以前アークがシン・カーニバルに冤罪をかけられ決闘を申し込まれた際にアークに繋がれていた鎖の応用版だ（「十四発目ピューパ戦」敵終了のお知らせ」を参照）

第一、あの鎖は本来対アーハム帝国用に作られたもので当時のバサビイ共和国は虎視眈々と力をつけアーハム帝国を滅ぼす機会をうかがっていた。

アーハム帝国はエルフの国でエルフのほとんどが魔法を得意としており、このリーダーが持っている道具は完全にエルフにとっては天敵になりうる代物だ。

「これがある限り貴様は雷神などではなくただの老人になる」

アレクサンダー「くそ……貴様らは血も涙もないのか……」

「ああ？ エルフなんぞ、そこら辺にいる虫と同じじゃないか？」

アレクサンダー「っは！ ほぎいてろ、たとえ殺しても……」

「<sup>ク</sup>第一<sup>ロ</sup>皇女<sup>エ</sup>や<sup>ア</sup>第二<sup>リス</sup>皇女が仇を取ってくれるっか？ ぷ……はっはっは!! エルフ風情が!! 人間に歯向かえる虚勢は褒めてやるよ!!」

アレクサンダー「ふん……貴様らの方が虚を張っているのでは？」

「黙れ虫が!!」

ツゴ!!

アレクサンダー「つぐ!?!」

XM8のストック部分で頭部を殴られよろめき血を流す。

「っち、興ざめだ。エルフごときが誇り高き人間に話しかけてもらっただけでもありがたく思えよ」

カチリつと皇帝の額に銃口を突き付ける

「さようならだ。この世界は人間が統一する」

アレクサンダー「……それが貴様らの目的か」

「ああ、この世界は種族が多すぎる。魔法が一番だと妄信するエルフに世界を滅ぼそうとする魔族がいる世界だ。種族がいるから戦争が終わらんのだ。俺たちはこの世界を平和にするために行動しているのだ」

アレクサンダー「……いや、そういう貴様らが今争っているのでは？」

皇帝が矛盾しているのではと指摘するが

「……死ね」

一瞬止まったがリーダーは気にしないことにしトリガーに指をか  
けようとしたが

アレクサンダー「……時間稼ぎはこれくらいでいいだろ？」

「？ 誰に言つて」

(ガシヤアアアアアアアン!!)

太陽の光が差し込む窓を突き破り現れてのは黒い戦闘服に手には

FN SCAR—H Mk. 17で頭は特徴的なハゲ

アーク「ciao!!」

さて、全力でサイボーグの跳躍力に無理を言わせやって来たんだが  
……もうここまで来ていたとは

警備は何してんだ!?

「バ」は「?」

「っ死神!？」

窓を突き破って表れたのは歌う死神ことアークだった。

突き破ってきた瞬間、運悪く進路上にいた部下の一人がアークの回

し飛び蹴りを顔面にもろに受けてしまい壁際まで吹き飛ばされてしまい気絶してしまった。

リーダーはアークだと分かった瞬間、XM8をアークに向けてトリガーを引こうとしたが

「I have predicted the conclusion」  
ク

アークが先に自身の能力の一つを使用し世界を遅く……正確にはゆっくりと見えるようにした感じだが……なり敵が放つ銃弾は「どこに飛んでいき」「何秒後に自分に当たるか」「どうすれば避けられるか」を計算した。

アーク（……俺が先に殺せるな）

ゆっくりとした世界の中、四人に銃口を向けられているがアークは慌てることなくまず目の前にいるリーダーと思わしき人間に標準を向け

ズドン！ズドン！ズドン！ズドン！

放たれた四発の7.62mmは見事兵士たちの脳天を射抜きその尊い命を刈り取った。

アーク「……ふいー、皇帝陛下、皇妃様、お怪我はありませんか？」

アレクサンダー「私は軽傷だがエリーが!!」

エリザベス「はあ……はあ……はあ……」

ふと皇帝から視線を外すと皇帝の後ろに腹部から血を流し手を抑え止血しようとしている。

アーク「ツ!? 皇妃様!?!」

アレクサンダー「アークと同じような武器でやられた!!」

アーク「俺と? 一体……ツ!? なんで!?!」

殺した際に敵が自然すぎて気が付いていなかったが……敵の死体の手にはXM8が握られていた。

アーク（なんでここに次期アサルトになれなかった銃が!?! ……まさか、あの襲撃者か!?! い、いやそれより先に皇妃様を!!）

なぜここに自分の世界の武器があるかの考察は後にして先に皇妃を治療するため医療キットを召喚する。

以前のポイント 13925  
生産

医療用キット 1

合計ポイント 13924

召喚したキットの中から鎮痛剤やハサミを取り出す。

アーク「皇帝陛下、回復魔法は心得てますか!？」

アレクサンダー「あ、ああ!！」

よし、回復魔法ができるなら安心してできるな

確かほとんどの銃弾は鉛でできていて体に悪いから早めに取り出した方がいいだろう。

アーク「エリザベス様、痛みを我慢はできますか?」

エリザベス「ええ……この痛みなんて愛している私の娘を生んだ痛みよりへっちゃらよ!!」

アーク「……では、我慢してくださいね!!」

ピンセットを取り出し先を皇妃の腹部の傷に入り込み弾丸を取り出そうとする。

エリザベス「あ、ぐうう!！」

アーク「あと少し……取れた!!」

にくにくしい音を立てながらピンセットの先に弾丸が挟まれており無事取り出せた。

急いで包帯を取り出し腹部に巻き付けていく。

アーク「ふう……あとは回復魔法で回復させて安静にしておけば大丈夫です」

エリザベス「え、えへへ……こんなの虫でも止まったかと思ったわ」

アレクサンダー「よ、よかった……っは! アリスは!！」

アーク「アリス様は現在学園においてアリス様の命令で救助に来ました」

アレクサンダー「娘たちにケガは!？」

アーク「無事です……それより、皇帝陛下。来た際にぱつと見で見

た程度なのですが敵はこいつら以外にもいますよね」

アレクサンダー「正確な数はわからんが門のある広場から爆発音が聞こえたからまだいるであろう」

アーク「……ふむ、そうですね」

現状を把握したアークはFN SCAR-H Mk. 17を担ぎなおすと恐らく爆発で壊されたのでであろう扉に向かう。

アーク「皇帝陛下……少し時間をもらいます」

アレクサンダー「どういう……ああ、そういうことか……どれくらいかかる？」

アーク「夕食までには」

アレクサンダー「……よろしい、では私はここにおろう」

アーク「ありがとうございます」

皇帝の許可を得た後、扉を出て廊下を渡る。

え？ 今から何するのかって？

皆殺し時間  
ゴミ掃除ですか？

## 九十二発目 銃撃戦

アーク「……吐け」

「い、言えるか!!」

やあ、みんな

突然変な奴らが攻めてきて対処に追われていてご機嫌斜めなアークだ。

多分……いや、確実にこいつら襲撃者ニゴウの仲間だろうな。

アーク「え？ 仲間は？」

「ひ、一思いに殺せ!!」

先ほど皇帝の部屋を出た後、とりあえず攻めてきた人数と戦力を知りたいので一旦広場側に移動し目の前を通りかかったテロリストを物陰から

アーク「やあ☆」

「はあ☆」

物陰から飛び出し背後から攻撃した。

敵は二人いたが腰からマチェーテを取り出し片方の敵の首を切り飛ばした。

もう片方の相方は突然の攻撃と仲間の死に硬直したがようやく正気に戻り叫ぼうとしたが

ツガ!!

アーク「あつぶね、あと少しで叫ばれるところだった」

「もぐう!?! もぐう!?!」

首に刃をあて捕まえた。

んで、尋問中なんだが……こいつ、中々口を割らないな。

アーク「しゃべってくれねえか？ こちとら時間がないんだわ」

「な、なににもない!!」

アーク「はあ……ならいいか。楽にしてやるよ」

そういうとまを首にあて首の頸動脈を切り裂き絶命された（ちなみ



に現実世界では喉笛を切られただけでは死にはしません)

尋問していた敵の首から血が噴水のように吹き出てピクピクト痙攣した後、冷たくなり死んでいった。

アーク「……あ、廊下……まあ、いいか」

廊下が血で汚れてしまったが妥協してもらおう。

アーク「さて、情報も聞き出せなかったし……見つけ次第殺すか」

こういう時にメタルギアのDDがいたらなあ……

かわいいし、壁の向こう側の敵を教えてくれるし、あともふりたい  
有力な情報も聞き出せず落胆し移動しようとしたが

ザ……ザザ……

『こちら撤退準備部隊、広場の騎士が城に集まりだしている。急いで  
撤退した方がいい。どうぞ』

アーク（お？ 今のは……）

どこからか声が聞こえてき探すと殺した敵の胸元に奴らの通信機  
があった。

こいつは使えそうだな。

アーク「あーらよつと、失礼しますよ」

胸元にあった通信機を取り上げると通信機に耳を当てる。  
すると声が聞こえてくる。

『……おい、リーダー？ 聞こえてるのか？』

アーク（悪いがそのリーダーはさつき死んだぞ）

『……別動隊聞こえるか？』

『こちら別動隊、どうした？』

『実行部隊との連絡が取れない。もしかしたら皇帝に返り討ちにあつ  
た可能性がある。至急、向かってくれ』

『了解した』

あと、せめて暗号とかで会話しろよ。なにバリバリ日常語で会話し  
てんだよ。

これ、よく見たらオープンチャンネルじゃねえか

アーク(こいつら……銃を持ってたり俺が突入した時の動きから見るとド素人ではなさそうだな)

でも、さっきの通信から見ると少し訓練仕立て感が否めないんだよな

なんか、聞きかじった程度の練度だな。

アーク(それにさっきのXM8も……いや、先にこいつらの制圧からだ。それに別動隊とやらがここに来るみたいだしな)

それに負傷した皇帝陛下夫婦がここにいるので去るわけにはいかない。

だが、数では負けているが地の利はこちらにある

どんな多勢に無勢でも地の利(城内構造)を利用すれば勝機はある、あとは気合と練度勝負だ。

アーク(さて、どうやってお迎えするか……お? これは……)

敵から奪った通信機の周波数を調べiDROIDに合わせたのち

アークはおそらくもう間もなく来るであろう別動隊に備えた。ついでに殺した敵からあるものを拝借して

「……クリア」

「……つたく、どこに行っただ？」

数分後、アークが去った後の廊下に十人の別動隊がやってきた。

全員、XM8を構え円陣で死角をなくすように組んでいる。

「実行部隊との連絡は？」

「まだつきません」

「そうか……」

「死神でしようか？」

「……いや、時間的にあり得るな。仮にだが連絡が付かない原因は死神のせいだったら戦闘は控えてニゴウを呼べ」

「ちなみにニゴウは今何してるんですか？」

「さあな？ 道具がどうこうしても俺らには関係ない」

周囲を警戒しながら実行部隊が行ったであろう皇帝の部屋に向かう。

水を打ったように静かな廊下を進んでいくと

「ッ!? 前方!!」

「……あれは」

部隊員の一人が廊下の前の方に指をさすとそこには

「……血？」

そこには生々しい血の海が広がっておりまだ新しい感じだった。

しかも、その血は奥の扉に何かを引きずられた跡を残していた。

「やられたようだな……」

「死神か？」

「……その可能性は捨てきれんな。おい、準備部隊に連絡しろ」

「了解……こちら別動隊。死神がいるかもしれない、誰かの血を確認した。注意されたし」

ザ、ザザ……

『了解した、こちらはまだエルフどもの騎士に魔法使いの相手をして  
いるが余裕はあるぞ』

「わかった。こちらまでできる限り速やかに終わらせる。オーバー」

仲間との通信を切り、どうするかを決める。

「あの部屋に血の跡があるから確認しに行くぞ」

すでに死んでいるであろう仲間の死体を確認するため部屋の中に入ることにする。

通信機を切ったのでしんと静まる返った廊下を移動し血の跡が続いている部屋に向かっていく

「ん？ 開いているだろ？」

跡を追っていくと一つの部屋にたどり着いたが扉は開いており……

「いたぞ!!」

部屋の中にはかつての仲間……死体の山が血の海の真ん中で倒れていた。

だが、ピクリとも動いていなかった。

「……死んでいるか」

流れている血の量から考えて失血死だろう。

「……回収しますか？」

「いや、時間がないし多い。だが、身元を判明されたら困るな……燃やすか」

このまま死体を放置してしまうと装備や死体から身元の判明などに利用される可能性があるので燃やして隠滅させようと部屋の中に入ろうとする。

ひよこ

「……クリア」

扉から中を覗き左右を確認する。

異常はないことを確認し報告する。

「よし、誰か燃えるものを……」

取ってこいと仲間に指示をし部屋の中に入ろうとしたが……

クン

「ん？ なんだこれ？」

足に何か引つかかっていた。

それは細いワイヤーみたいなもので足に引っ掛けて転ばせる罠にしては耐久性に問題があるような代物だった。

「つち、邪魔だな!!」

仲間が殺されて苛立っていたその人間は足に引つかかっているワイヤーを外そうと蹴り飛ばした瞬間

キン!!

カラカラカラ……

どこからかピンが外れる音と転がってくる音が聞こえてきた。

「何の音d……これは？」

ふと足元を見るとそこには野球ボールサイズの手りゅう弾があった。

「ッ!? グレネード」

ズドオオオオオオオオオオオン!!

足元に転がってきたグレネードは叫ぼうとした隊員の視界を白く塗りつぶしこの世から存在を消し飛ばした。

爆風は部屋を破壊し、金属片は周りにいた人間の肉を裂き骨を断ち運が悪いものは命を刈り取られてしまった。

「く、くそ!! 罨か!!」

「足が!? 足がああ!!」

「おい、お前ら落ち着け!!」

現場は混乱した瞬間

もっつ

アーク「……もらった」

ズドドドドドドドドドドドド!!

なんと、敵の死体の山の中からアークがFN SCAR―HM k. 17をこちらに構えながら出てき、引き金を引き混乱している敵

をあの世に行った仲間の所に逝かせた。

アーク「ふいっ……くっせえわこれ」

全身血だらけになりながらアークは死体の山から出てくる。

アーク「前のオーク・オードとの戦いを参考にしたんだが……臭いからもう二度とせんどこ」

扉に即席のグレネードトラップを仕掛けたんだが……本来は引っ掛けった瞬間に（さつき殺した兵士の）グレネードのピンが外れて足元に転がって爆発する予定だったがピンが思いのほか硬くて焦った。

俺は爆発の後、すぐに攻撃ができるよう死体の中に隠れていた。

アーク『真のハンターはまず足元からだ』っていう名言（虹6より）どおり、案外かかるもんだな。さーってと……さつきの爆音で来るだろな」

体についた血を払いながらどうするかを考える。

恐らく、さつきの爆発で撤退準備部隊とやらも異変を感じてくると思うが……おそらく来ないだろう。

実行部隊も別動隊も全滅したのに部隊の数を裂いてまでここに来るのは思えない。

アーク「ってなわけで広場に向かうか」

確か、広場で騎士たちを足止めしているみたいなのを言っていたはずだ。

アーハム帝国の警戒をすり抜けてこの城に攻撃するとしたら人数はそこまで多くないはずだ。

さつきの巡回の奴らを除けばだが残りの大部分は広場にいるだろう。別に狸の皮算用ではないがこいつらを叩いて城全体に降伏するよう叫べば残っていた伏兵も出てくるだろ。

アーク「はあ……俺のFN SCAR—H Mk. 17も血でこんなに汚れてしまったし……早く終わらせて洗浄するか」

もうほぼ無意識な感覚で持っている武器のリロードを済ませた後に移動を開始する。

サイボーグの性能のおかげで人間では人類最速並みの速さで廊下を走るを超えて駆けていく。

いつもは執事やメイドが行ったり来たりしてこのままいけばアリスの部屋が見えてくるのだが今じゃ戦場に変わっている。しばらく走っていると硝煙と血が混ざったような匂いがしてきた。

それも広場に近づいていくうちに濃くなってきた。

そして、目の前の扉をそつと開けると

アーク「……いた」

前に勇者がきたときに使った舞踏会のホールに到着したが……もはやあの時の煌びやかな会場の景色の欠片もなく

ズドドドドドドドドドド!!

「殺せ殺せ!! こっから一匹たりとも行かせるな!!」

「くそー 陛下を助けるんだ!!」

アーク「わーお、戦場」

そこはまるで戦場だった。

ステンドグラスは割れて壁には赤い絨毯のような誰かの血と死体と腐敗集、土煙に悲鳴と舞踏会の時とはかけ離れた光景が目の前に広がっていた。

そんな中でアークは帝国の騎士と敵が戦っていた。

アーク「戦っているというより一方的に殺されているがな」

この舞踏会で使ったホールは広く外にも出れる出入口と反対側にはホール全体を見まわされるテラス付きの二階建てなんだが、外側の方に盾を構えた騎士がおりジリジリと前に進もうとするが

ズドドドドドドドドドド!!

「ぐはー!」

「ぎゃあ!」

盾を貫き銃弾を浴びてしまい全身から血を流し倒れてしまった。

一步、敵側はというと

「リロード!!」

「了解、カバー!」

「二匹来たぞ!!」

「撃ちまくれ!!」

アーク（連携も取れているようだな）

机や椅子で作った即席バリケードの中から銃口を出し、騎士が近づいたら引き金を引き、弾がなくなったら仲間にカバーしてもらいながらリロードする。

リロードは少々ぎこちないができてはいる。

アーク（騎士たちはちかづこうにも撃たれるし敵はいい感じのバリケードを作っているから行けない……か）

ならエルフが得意の魔法を使えばいいかもしれないが

アーク（さつきから魔法が出てきてないところを見るに……なんか使えないのか?）

双眼鏡を出し敵の陣地を見てみると……

アーク（なんだあれ?）

敵の陣地はバリケードでよくは見えなかったが隙間から不気味な光を放つランタンみたいなのがあった。

周りは近代的な装備をしている中、それだけ場違いなものがあり一瞬で看破した。

アーク（あれが原因臭いな）

あれを壊さない限り騎士たちも前には出れまい。一応、ワイバーンを使い魔にしている魔法使い間もごく少数だがいるのだが王内で戦っておりドラゴンも出てきた瞬間にハチの巣にされるので出ていない（その証拠に一部の騎士はハチの巣にされて死んだドラゴンの死体を壁にして隠れている）

だが、幸運にも俺が出てきたのは敵の背後にある扉からだ。

アーク（さて、一暴れするか）

その前にとアークは双眼鏡を出して敵を凝視すると

ピーーーーー（スキャン中）



Scan completed (スキャン完了)

アーク (ほんと、どういう技術なんだ?)

アークがしたのはメタルギアTPPであった敵をスキャンする機能だ。

前にクロエが人質にされた事件の時に使ったが今回もお世話になりそうだ。

スキャンすると敵の体の構造に持っている神様特典とかがわかるのだが……やっぱり一番の肝は壁越しで何をしているのかがわかる機能だろう。

スキャンすれば壁越しでも撃っているのか李r—度しているのかがわかるのだ。

アーク (数は……10以上はいるな。FN SCAR—H Mk. 17も準備よし……さて、行くか)

すう……はあ……

深く深呼吸をし吐く

そして、

バアン!!

決意を固め扉を蹴り開ける。

「ッ!? 死g……」

アーク (おっせえよバーカ)

突然、後ろの扉が飛んできたと思ったたら中から死神が出てきて驚愕する敵の顔面に銃口を向けるアーク

ズドドドドドドドドド!!

アーク (まず一人)

顔を7・62mmで耕された敵が倒れていくがアークは見向きもせず次の敵に銃口を向ける。

先ほどの敵が叫んだせいで気が付いたのかすでにアークのXM8を向けるが

アーク「ふん!!」

斬!!

腰のマチエーテを取り出し特典の補佐を受けながら思いつきり投げる。

綺麗に回りながら飛んで行ったマチエーテは見事敵の顔を真つ二つにかち割った。

アーク「二人!!」

次のターゲットに移ろうとしたが

アーク「間に合わんな」

自分たちの銃声とは違う音と叫び声を聞こえてのであろう、二人の敵がこちらに銃口を向けており今まさに引き金を引くところだった。

今から隠れようにも間に合わないと判断したアークは横で膝から崩れようとしていた頭をかち割った死体の裾をつかみ自分の前に出して盾になるように構えた瞬間

ズドドドドドドドドドド!!

敵のXM8の5・56mmがアークに向かって飛んでいくが死体に阻まれてしまう。

「くそー・あの野郎!!」

仲間を盾にされ激高し引き金を引き続ける。  
が、

カチッ

「弾切れ!？」

ヤケクソで撃ち続けたせいで弾のことを忘れてしまい二人とも弾切れを起こした。

急いでリロードしようとするが

アーク「取っcheckた」

盾にしていた死体を投げ捨て構え引き金を引く。

引いた瞬間、敵は血しぶきをあげながら倒れていく。

アーク「四人つと」

だが

「死神だ!! 死神がきたぞ!!」

アーク「……バレルか」

残りの6人がアークの存在に気が付き銃口をこちらに向け発砲してくる。

流石にアークも先ほどの死体は使えないので物陰に隠れる。

アーク「はあ……つたく、面倒だな」

そつと物陰から敵を把握しようとするあ

キュンツ!!

アーク「アブな!？」

覗いた瞬間に目の前を弾丸が通り過ぎて行った。

アークが隠れている物陰に向かって敵が集中放火してきてのだ。

アーク「くそ、出ようにも出れないな」

FN SCAR—H Mk. 17のマガジンを遠心力で外し新しいマガジンを差し込む。

アーク「……位置さえわかればな」

撃とうにもどこから撃っているのかがわからない

物陰から出て狙って撃つより最初から場所がわかってから撃つの方が短い時間で済む。

一応、先ほどスキャンはしたので場所はわかるが数が数なんだよなあ……

アーク「一對六つて……現実では無理げーだろ」  
助けてドラ●もんって言いたいがあるわけがないので自分で何とかするかつと結論を出しどうするか考えていると

ドドドドドドド!!

「「うおおおおおおお!!」「」」

アーク「ん? なんの……おう」

外の方から何か走ってくる音が聞こえ物陰から見ると大勢のアーハム帝国の騎士が走って攻めてきた

なんか、万歳突撃のそれみたいに見えてしまいアークでさえ少し恐怖を感じた。

銃弾が騎士からアークに向けられたので突撃するチャンスが生まれ騎士たちが総勢で突入してきた。

「つちー・エルフだ!! 先のエルフを始末しろ!!」

「バカ言え!! 先に死神だ!!」

敵側も先にどつちを先に対処するかで別れてしまい三人ほどがアークから銃口を外しエルフたちに向けた。

アーク「チャンス!!」

この隙を逃さまいとアークも物陰から出てFN SCAR—H Mk. 17の銃口を向け

「I have predicted the conclusion」  
アーク

自身の神様特典を発動させた。

すると騎士たちの怒声は遠くなっていき世界もゆっくりとなくなって行く。

アーク（右肩に0.2秒、左わき腹に0.1秒か……思いのほか糞IMだな）

特典のおかげで敵のXM8の銃口から赤い線が伸びてきてアークの体を捉えた。

その赤い線に沿って弾丸が迫ってくる。

アーク（少しかがんで……脇腹のは右回転で避けるか）  
結論が出せたアークは行動に移る。

バツ!!

「嘘だろ!？」

敵もまさかこんな銃弾の雨の中を突入してくるとは思っていないな  
かったのか驚愕するが急いで銃口をアークに向ける……が

アーク「……すう」

アークに対しては無意味だった。

ザザツ!!

走った勢いをそのまま利用し膝たちでスライディングをし右肩に  
当たりそうだった銃弾を避け

ザザアア……

膝たちのまま体を思いつき回転させ銃弾を避けていく。

人間の体だったら不可能な動きだがサイボーグなので無理やりす  
れば行ける。

カチツ

「う……そ……だろ」

銃弾をすべて避けられしかも弾切れを起こすというミスを犯して  
しまった敵の絶望とした顔面にアークのFN SCAR—H Mk.  
17のサイトが捉える。

ドドドドドド!!

アークの弾丸は見事こちらを狙っていた三人の敵を殺した。  
あとのエルフを狙っていた三人もこちらに銃口を向けるが

「」「」「おおおおおおお!!」「」「」

「しまっ!? エルフが（ズシャア!!）ぐはあ!？」

「死ね!! 蛮族が!!」

突入してきたエルフの騎士の剣によって惨殺されていった。

「ふう……あ、アーク殿!! 助かりました!!」

アーク「ああ!! 怪我人は!？」

「数十名の怪我人がいます!!」

アーク「わかった!! 皇帝陛下は部屋に皇妃様と一緒にいる!! 怪我もしているから向かってくれ!!」

「わかりました!!」

アーク「ふいー……ようやく終わった」

こうして敵は全滅し城内の安全は確保できた

アーク「あ、そーいや……あの襲撃者<sup>ニゴウ</sup>はどこに行ったんだ?」

## 九十三発目 カオスすぎる現場

アーハム帝国の帝都の中心にあるアーハム城にて突如、攻撃を受けた。

死傷者は多数出たがアークの活躍により襲撃者は全員鎮圧し事件は終息した。

アーク「それじゃ、あとは頼んだぞ!!」

「はい! アーク殿もお気をつけて!!」

……が、アークの仕事は終わらない。

城の安全と皇帝陛下の生存は確定できたが自分の主人<sup>アリス</sup>が残っている。

城の広場では騎士たちが怪我人を運んだりしているがアークはその横を通り過ぎていき城の外に出て学園に向かう。

本当は自分も手伝ってあげたいが今、アリスのいる魔法学園では勇者のそっくりさんがアリスをターゲットに襲っているので全速力で向かう。

アーク「……頼む! 間に合ってくれよ!!」

城を出た後、最短距離で向かうため住民が住んでいる家の屋根に飛び乗りサイボーグの跳躍力を最大限に使用し屋根の上を駆けていく。

多少、足に力を入れすぎて屋根の瓦が数十枚破壊してしまったが後で皇帝陛下に請求させておこう。

アーク「……見えた!!」

しばらく走っていると自分の家でもある魔法学園が見えてきた。

白い煙を吐いているが火事は起きて無いようだ。

シーベルト「ツ!! アーク君!!」

アーク「先生! 現状は!？」

シーベルト「アーク君のおかげで全生徒、グラウンドに避難して怪我人も少数だよ!!」

アーク「わかりました!! では!!」

校門にいた担任の先生から現状をしり怪我人がいないと確認すると自分の家に向かって走る。

アリス達にはグラウンドに避難は間に合わないのでアークの家に避難し来るまで籠城しておけと支持をしておいた。

それにM60E4も渡しているから万が一糞勇者どもが襲われてもリンが何とかしているだろう。

ズダアン!!

魔法学園の敷地内に入っても走る速度を落とさずに家に向かう。

道中の道端では恐らく死んだ(すでに死んでいるが)勇者の死んだときに蒸発した後が残っており、それが無数にアークの家に向かって残っている。

アーク「……いた!!」

最後の跳躍で自分の家が見えた。

とりあえず家に損傷がないところを見るにアリス達は生きているんだろう。

だが、まだ数体ほどの勇者が家に向かっている。すると

バアアアン!!

ズドドドドドドドドドド!!

アーク「銃声!?!」

誰かが銃……おそらく渡したM60E4だろう……で戦っているんだろう。

アーク「早く行かないt……え?」

アークは家に到着をして……驚愕した。

まあ、結果的に言うともんな無事だった……んだが

ドドドドドドドドドドド!!

ノエル「あはははははははは!!」

アリス「ちよつとレイ!?! 放しなさいよ!?!」



レイチエル「……キヨニユウクロス」

アーク「……どういう状況？」

あ、ありのまま今起きている現状を話そう!!

M・6・0・E・4を持って笑顔で勇者たちを撃ち殺していたノエルとアリスに跨り胸を触ろうとして死んだ魚のような目をしているレイチエルがいた

な、なにを言っているのかわかねーと思うが俺も（以下略）

リン「あ、助手。お帰り」

アーク「あ、リン。とりあえず説明を」

そんな力オスな光景を呆然と見ていると横からリンがひよこりとして出てきた。

アーク「なんでこうなった？」

リン「えつと……なんて言っていないのかな……まあ、見ての通りだよ」

アーク「余計にわからん」

リン「えつとねえ……」

そして、リンはほつりほつりと話す。

回想シーン

それはアークがアリスの許可のもと皇帝陛下を救いに城に行った数分後であった。

レイチエル「たああああ!!」

「あぎやあ!?!」

レイチエルが付与魔法で炎をまとわせた剣で勇者の首を刈り取る。飛んで行った勇者の生首は切られてもなお体は起き上がり顔はうがうがつと叫んでいるが

レイチエル「ふん!!」

止めと言わんばかりに勇者の顔面に剣を突き刺した。すると、死んだ証拠に体が蒸発していった。

レイチエル「ふう……ほんと、いったい何体来るんですか!？」

さつきので25体目でいったん休みたいが次々とおかわりが来る。一呼吸置き、再度剣を抜いて果敢に切り伏せに行こうとした瞬間クロエ「レイ! 横によけなさい!!」

レイ「ツ!!(バツ!!)」

後方にいたクロエがレイチエルに命令すると

クロエ「ウイテカー!! あいつらの足を止めなさい!!」

リン「了解しました」

レイチエルが進路上からいなくなったのを確認すると二人は魔力をこめていく。

リン「〃零下の世界にいざ、誘おう!! 「アイスワールド」〃!!」

クロエ「〃地獄の炎、辺獄の虚無よ、今こそ一つになりて無に還さん「ヘル・ノヴァ」〃!!」

リンは氷魔法で迫りくる勇者の群れの足元を凍らせて動けなくさせた上にクロエの最上位の炎魔法が迫ってくる。

クロエの炎魔法が着弾した瞬間、気化爆弾が落ちたような爆発音と衝撃波で勇者たちは焼かれ身体を粉々にされていった。

常人なら死ぬような威力だが

「あついで? つめたい?」

「いたいね! いたくないね!」

「ありす! ころえ! のえる!!」

クロエ「つく! アークから即死級ではないといけないと聞き、かなり魔力をこめましたはまだ生きてるのがいるとは……」

爆炎が晴れると4割は爆破で蒸発か炎で上手に焼けたかの二つだけが残りの6割が肉体の再生しこちらに向かってきた。

リン「ここまでくると一周回って魔族ですよね」

隣にいるリンもげんなりとした顔で勇者たちをみる。

クロエ「私は情熱的な男性は好きだけど狂気レベルのは求めてないわ」

自分の名前を叫び名が迫ってくる勇者たちに再度魔法で攻撃しようとする。

クロエ「ああ、もう！ 早く帰ってきなさいよアーク!!」

愚痴りながらも迫りくる勇者に向かって魔法を打ち続けるクロエ。

「くおえ!!」

「いっしょ!! いっしょー!」

レイチエル「お姉さまの所にはいかせませんよ!! 行くなら私を倒してから行きなさいな!!」

クロエの魔法で4割は消えたがそれでも進んでくる勇者の進路上にれいは剣を構える。

アリス「レイ!! 付与いくわよ!!」

レイチエル「アリスお姉さま!!」

アリス「〃 神よその剛腕を我に分け与えよ!!」  
「アームドパワー」  
!!

レイチエル「ありがとうございます!! さあ、行きますよ!!」

近接はレイチエルが担当し遠距離をクロエとリンが対応し怪我したら一応いるノエルが回復させ戦っているレイチエルをアリスが付与魔法で援護する

(あれ? この女子たちでダンジョン攻略したら余裕で攻略できるんじゃないかね?)

再生しながらも迫ってくる勇者にアリスから付与魔法を受け剣を振り続けるレイチエルだが

「くろええくありすうく」

「おんなあ!!おんなあ!」

「おで、ゆうじや!!」

レイチエル「え、ちよつと!? どこに行くんですか!?!」

どういうわけかほとんどの勇者たちはレイチエルを無視しアリス達の方に向かっていった。

まるでレイチエルなんて眼中にないかのように無視してアリスの方に向かっていく。

レイチエル「魔剣士の私を無視とはいいい度胸ですな!!」

レイチエルは剣と武器の付与魔法しか使えないが近接戦では姉二人より長けており自分が壁になることで遠距離担当の姉たちが攻撃

できるので抜けられるのは非常にまずい。

レイチエル「光の聖霊よ、その光で闇を追いかけたまえ「シャイニングウエーブ」!!」

刀身に光が灯り鞭状になった。

レイチエル「はあ!!」

まるで蛇のようにうねりながら勇者に向かっていく。

ザシユウ!!

「ぎゃいん!」

「あひゃあ!」

レイチエル「まだまだ!! たあ!!」

自ら勇者の群れの中に飛び込み剣を嵐のようにふるい続ける。

鞭状になっているので変則的な動きをするので一回振るえば三体の勇者の首が飛んで行った。

レイチエル「すう……っは!!」

着地と同時に飛ぶ、組体操選手のリボンのように勇者を殺していく。

それはまるで妖精のように華やかで可憐だった。

レイチエル「よし、これで……はい!」

これでヘイトはこちらに向かって進行も止まり自分に向かうと思っただが

(無視)

(無視)

(無視)

レイチエル「なんでですの!」

またもや無視され勇者たちはアリスたちの方に向かっていく。

アリス「え、ちよつと!」 なんてあいつらはレイを無視するの!」

アリスたちもなんでレイチエルを無視してこちらに向かってくるのか分からなかった

レイチエル「無視するな!!」

鬼のような顔をしたレイチエルは追いかけていると

キキツ!!

「「「はあ……（糞デカため息）」」」

突然、勇者の群れが急ブレーキをしレイチエルをめんどくさそうな顔で睨んできた。

あまりの突然のことにレイチエルは困惑した。

レイチエル「な、なんですか?」

すると一人の勇者が前に出てレイチエルに指をさす。

レイチエル「な!? この第三皇女に向かって指をさすなんて無礼だ

「ない」はい?」

「お前、胸、ない。女、魅力、皆無」

まあ、つまるところ

「お前の胸、貧乳だし女性としての魅力がないから男かと思ったわ  
wwwwボーイツシユな女性の方がまだ魅力あるよwwwwwwえ、な  
に? 上二人の姉がぼいんぼいんで劣等感あるんすかwwwwww  
m9 (^ 皿 ^) プギャーwwwwww」  
ってな感じだ。

レイチエル「こひゅ……」

その攻撃はレイチエルにとって十分……てかオーバーキルな破壊力だった。

腕に力が入らなくなり剣を落とす。目の前が真っ暗になって行く。足が魂が抜けたように崩れていく。

そして……

レイチエル「……モウヤダ」

レイチエルは膝を抱えてその場に座り込んでしまった。

クロエ「れ、レイは死んだ!?!」

リン「この人でなし!!」

まさかの攻撃で唯一の前衛が戦線離脱してしまい勇者の群れが雪崩れ込んできた。

クロエ「ちょ!? レイ!! 早く起きなさい!!」

レイチエル「あははー……今日もいいてんきだなー」

クロエ「レイイイイイイイ!?」

再度呼びかけるがレイチエルの心はもうボロボロだった。

リン(やばいね!? このままじゃあのよくわからない生物たちがアリス様たちに……あ、そうだ!!)

もう目の前まで向かってきている勇者たちにリンはこのままだと全滅してしまうのであるものを使うことにした。

リン「あつた!!」

ガシヤリつと重々しい音を立てて持ち上げたのはアークから念のためと置いて行ってくれた銃であるM60E4があった。

一応、助手ことアークから使い方は一通り教えてくれているので問題なく銃口を勇者たちに向けようとしたが……

「おんああ!!」

リン「え、きやあ!？」

だが、銃口を向けるより前に勇者たちはとうとうアリスたちに到着してしまった。

まるで某ゾンビ映画のように勇者たちがアリスたちに襲いかかる。

リンにも勇者の魔の手が襲いかかりM60E4を落としてしま

う。  
クロエ「う、放しなさい!!」

「くろで!! ようちやくおでのもの!!」

アリス「いや!! アーク!! 助けて!!」

「ありすありす!! いっしょ、おれのもの!! もう、はなさない!!」  
絶対絶命だった。

手足を抑えられ地面にたたきつけられた少女たちに勇者が群がる。魔法を打とうにも近すぎて誤射をしてしまう。

アリス「いや……助けて……」

無数の勇者に抑えられ醜い獣のような目でアリスの体を嘗め回すように見る勇者たちはアリスの制服に手を伸ばし破こう……と思われていた。

ズドドドドドドドドドドド!!

「ぐぎ?!」

「いあた!!」

アリス達に群がっていた勇者たちが謎の銃声と共に肉片となって消えていった。

リン「え、誰?!」

リンも勇者に取り押さえられてM60E4を落としてしまったので射手はいないはずだ。

しかも、この場で銃声を発生できるものはM60E4以外ありえない。

だが、そこにいたのは

ノエル「はあはあ……」

アリス「あのシスター!?!」

まさかのノエルだった。

M60E4は短銃身タイプでも22.5ポンド(10.2kg)なので女性でも持てないこともない。

「のえる?」

「けっこん!!」

「うわき!!」

勇者たちも探していた目標の一人であるノエルに気が付くと全速力でノエルに近づいていくが

ノエル「……や、やあ!!」

貧弱で戦闘には向いていない肉体に無理を言わせM60E4を迫りくる勇者たちに向けなおす。

そして、トリガーに力を入れ

ズドドドドドドドドドド!!

M60E4の7.62mmの口径から放たれた高威力の7.62x51mm NATO弾は勇者たちの肉体を引き裂き穿てた。

ノエル「い、いたいですう……」

だが、ノエルのほうは初めて銃を撃つたので手や肩が悲鳴を挙げていた。

しかも、初めて撃つた銃が拳銃とかではなく機関銃なのでなおさらだ。

M60E4を地面に下ろそうとしたが

「のうる!!」

「ころすころす!!」

ノエル「つひ!? こ、来ないでください!!」

それでも勇者たちが襲ってくるので涙目になりながら引き金を引続ける。

奇跡的なのかはわからないがアリスたちに群がっていた勇者全員がアリスたちから離れノエル目掛けて走っていく。

アリス「た、助かった……」

クロエ「大丈夫アリス!」

アリス「は、はいお姉さま……」

クロエ「確か、あの子って今日赴任したノエル先生よね? まあ、助かりましわね」

服についた土を落としながら立ち上がるアリスたち

一方ノエルはというと

ノエル(な、なんでしようこの感覚……)

M60E4を打ち続けていくうちに変な感情が芽生えてきた  
担いで撃っている腕と肩に伝わる規則的な振動と音。

ノエル「……う、うふふ」

そして……とうとう禁じられた感情が出てくる。

ノエル「あははははははははは!!」



ノエルの顔が聖職者らしかぬ不気味に笑った。  
目は張り口は三日月みたいに吊り上がる。

前のノエルならトリガーを引くのをやめるが新しい快樂を見つけ  
てしまった今のノエルはトリガーを引くのをやめない。

アリス「く、クロエ姉さま……なんであの子、あんな状況なのに笑っ  
ているんですか？」

クロエ「わ、わからないけど……と、とにかくアリスはレイを起こ  
して!! 私は援護に行くから!!」

アリス「は、はい!!」

内心、頼っていたアリスたちも行動する。

クロエはなんか勇者たちを殺しているノエルを援護しに行きアリ  
スは心をめちやくちやにされたレイチエルを蘇生しに行く。

アリス「レイ!! 起きなさいってば!!」

レイチエル「あはは……アークは女たらし……」

よくわからないことをつぶやいているレイチエルの肩を揺さぶる  
アリス。

アリス「……レイ」

レイチエル「あは……どうせ、私は女の魅力もないですよー。胸も  
大きくないですしー」

アリス「レイ、私はそんなことはないと思うわよレイ!! あなた  
だって十分あるわよ!!」

レイチエル「……いいですよねアリスお姉さまは……アークってい  
うイケている男が四六時中いるんでー」

アリス「わ、私とアークはそんなやかましいことしてないわよ!!」

レイチエル「ははは……わたしだってえ……モテたいのに……」

またもや膝を抱えて泣き始めたレイチエル

それに対してアリスは

ギョツ

そつとレイチエルを優しく抱きしめた。

アリス「レイチエル、別に今すぐモテたいって思わなくていいのよ？ 私だって婚約の申し込みなんてほとんどがクロエ姉さま宛だったし。レイだってエルフでは珍しい魔剣士になったんだし元気で十分魅力的わよ」

レイチエル「アリスお姉さま……」

アリス「なんなら私の方がレイに嫉妬しちゃうくらい可愛いわよ」

レイチエル「う、う、うわああああ!!」

レイチエルはアリスの胸の中で号泣した。

まさかの死んだ奴から女性としての魅力はないといわれて精神的に死んでしまったが姉の慰めで少しは立ち直れた。

アリス「まったく……魔剣士たるものが言葉一つで倒れるなんてなにしてんのよ?」

レイチエル「ご、ごめんなさい……」

アリス「私たちは姉妹なんだから相談も乗るから話しなさいよ?」

レイチエル「はい!!」

だが、ここまではよかったのだ。ここまでは……

アリスの胸から離れ一呼吸を入れ戦っているクロエたちのもとに向かおうとしたが

レイチエル「……」

アリス「ど、どうしたのよレイ?」

レイチエルの視線は先ほど自分が包まれていたアリスの胸に注がれていた。

そこにはアリスの呼吸と同じように動く巨大な山が

レイチエル「……アリスお姉さま……なんかその胸」

アリス「あ、ああこれ? また、大きくなったのよ……はあ、前に下着を新しくしたのにな……」

アリスはいつも通りの妹に戻って安堵してしまい気が緩んでしまった。

レイチエル「……」

レイチエルの中で何かがちぎれる音がした。

そして、心の中から出てきたのは……殺意であった。  
アリス「ど、どういたのよレイ？ 目が怖いわよ？」

レイチエル「……ソノ、ムネ、ヨコセ」

アリス「れ、レイ!? ど、どうしたのよ!? レイ!? レイってば!」

リン「ってな感じ」

最低だな、おい

胸で女性かを判別するなんてこいつら人間じゃねえわ

いや、そもそも人間じゃねえわ

アーク「まあ……俺がもつと早く到着しておけばな……すまん、遅くなつて」

城のほうに時間をかけすぎたのは俺の落ち度だ。

素直に謝る。

アーク「さて、勇者はつと……」

ノエル「あははははははははは!!」

「いぎやあ!!」

「ちぬ? ちんじやう!!」

アーク「うーん、大丈夫そうだが」

とにかく問題はノエルだな。

顔が完全にイってるもん(性的ではない)

ノエル「ああ! 神よ!! どうかこの罪深い私を許してください!!」

アーク「ちよつとやばいな」

あいつ、本当に聖職者かよ?

勇者の数はすごい勢いで減った来ているから別にいいの……か?

まあ。とにかく止めるか

ガシヨ

カシヨ

ノエル「あははははははははははははは!! ああ、まだどこか

に迷子の子羊たちはいないんですか!!」

どこで覚えたのかM60E4のトツプカバーを外してマガジンボックスを取り外し新しいのを取り付けてトツプカバーを元に戻し引き金を引く。

中々、カオスな現場にアークはノエルのもとに向かう。

アーク「おい、ノエル!!」

ノエル「あはははははは!!」

「ほぎゃ?」

最後の勇者に向けて死体撃ちを続けていくうちに勇者は蒸発して死んだのだがノエルは引き金を引く続ける。

アーク「おい、ノエル!! 落ち着けて!!」

ノエル「あははh……あれ? アーク? 私は?」

アーク「あ、よかつたもとに戻ったか」

ノエル「わ、私はいったい? そ、それにこの惨状は!」

アーク「あ……言つてはなんだが……ノエルが全部やったぞ」

まさか、全部覚えてないのか?

ノエル「そ、そうですね……断片的ですがなんか楽しく……」

あ、覚えているんですね

ノエル「それよりアーク」

アーク「ん? どした?」

ノエル「メルちゃん(メタルギアMk. II)とこれください!!」

アーク「やらんわぼけえ!」

まさかの提案にアークは開いた口が閉じない。

まさかノエル……トリガーハッピーな奴なのか?

ノエル「だ、だめなんですか?」

アーク「そりやそうだわ」

上目遣いをしてくるがさすがにアークでもやばいと感じたのか拒否をする。

アーク「さて、問題は……」

そして、アークが向けた視線の先では

レイチエル「巨乳、殺す」

アーク「何してんだお前」

アリス「あ、アーク!! 助けて!!」

アーク「はあ……はいはい」

アリスに襲い掛かる勇者……じゃなくてレイチエルの手を抑える。

アーク「おい、落ち着けレイチエル!! 逆に考えるんだ!!」

レイチエル「逆ってなんですか!! なんですか? アリスお姉さま

の胸の大きさが逆ならちようどお前だな(笑)とでもいうんですか!」

アーク「……知っているかレイチエル?

女性の胸って脂肪の塊だって」

レイチエル「……え?」

アーク「女性にとつて太ることはタブーなことなんだろう? レイ

チエルは魔剣士で動いているんだから脂肪が極端に少ないんだ。だから逆に考えるんだ。自分が悪いんじゃない、『あいつらは太っているんだって』」

レイチエル「な、なるほど!!」

するとどういふことか先ほどの人殺しのような目からいつもの彼女の可愛らしい瞳に戻った。

レイチエル「そうなんだわ!! 私が魔剣士だから仕方ないことよ!!

ところでアーク?」

アーク「はあ……なんだ?」

ようやく終わったと思いつきやレイチエルから

レイチエル「アークはどっちが好きなんですか? 大きい巨乳のと小さい貧乳の?」

アーク「……はい?」

レイチエル「世の中の男性は大きいのが好きなんだと聞きましたが

……おそらく、彼らの頭の中にはウジでも沸いているんでしょう!!

そこで聞きますがアークはどちらが好きなんですか?」

アーク「……………」

え、なにこの答えがないような質問は？

レイチエル「さあどつちなんですか？ あ、ちなみに答え次第では殺すんで」

アーク「……すう（深呼吸）……はあ（精神統一）」

目にハイライトになったレイチエルからの質問に背筋に悪寒が走り殺される可能性が出てきたアークのとつた行動は

アーク「ちよつと攻めてきた敵の情報を整理しに城に行ってくるわ」

レイチエル「あ、ちよつと!？」

逃げることにした

サイボーグの性能を超える勢いで城に向かって走り逃げたのであつた。

いやだつてねえ？

男なんだし……ねえ？

答えれないよ（いろんな意味で）

## 九十四発目 新年は拷問から

「う、ううん？　ここは？」

とある部屋にて一人の兵士が椅子の上で起きた。

確か自分はアーハム帝国の皇帝を殺害を目的とした実行部隊だったはずだ。

「俺はいつたい？　それに仲間は何？」

目を覚ますとそこはどこかの部屋らしいが暗いので皇帝の部屋ではない。

「確か……俺は皇帝の部屋にいて……そしたら、死神が……」

とりあえず現状を確認しようと椅子から立ち上がろうとしたが

ガシヤ

「あれ？　なんd」

どういいうわけか立ち上がれないので暗い空間の中、目を凝らしてみると

「く、鎖？」

暗い部屋の中でよく見えないが自分の体に重々しく鈍い色を放つ鎖がまかれているのが見えた。

ガチャ

アーク「おーう、起きたか」

「し、死神!？」

一体どういうことか困惑していると扉から自分の顔面を蹴った張本人の死神が出てきた。

以前のポイント 13924

獲得ポイント

城内戦 2400

開発

強制笑わせ棒 2

合計ポイント 16322

アーク「はい、みんなのアイドル!! アークだよ!!」  
さて、どこかのドルオタが喜びそうな挨拶をしたのちさっさと扉を閉めて中に入る。

「き、貴様仲間はどこにやった!!」

アーク「ん? ああ、ほとんど殺したが?」

「う、うそだろ...あ、あんな大人数を?」

アーク「いや、だってなあ? アマチュアで聞きかじった程度をやるうとするからだろ」

聞きかじっただけではなく実際にやってから実践でいかせてオセロツトが言っただけでもないな。

「う、嘘だ!! 俺たちは何回もニゴウの指導の下で何回も!! 何回も訓練したんだぞ!! そ、そうだ!! ニゴウは!? ニゴウは何をしてんだ!?!」

アーク「あ、いや...あ、てかあの子ニゴウっていうんだな」

ニゴウか...にしてもどこかで聞いたことがあるような名前のような...ま、いいか

アーク「あ、ちなみにニゴウとは合わなかったぞ?」

「は、はあ!?!」

どういうことだと驚愕する敵兵士は放っておいてアークは椅子に縛り付けた敵に近づく。

いや、本当に会わなかったもん

アーク「そっちが質問してきたんだ。俺だって質問する資格あるよな?」

「な、なんだよ?」

アーク「まずこれ」

するとアークは背中担いでいた銃を目の前に突き出した。

アーク「この銃...XM8はどこで手に入れた?」



「……」

アーク「お、だんまりか？」

「言わん!!」

うーん、困ったな

こういう敵だったら怖がって暴露すると思ったが思いのほか話さんな

アーク「ま、しゃーなし……なあ、なんでこの部屋を準備したのかわかるか？」

「じ、尋問か？」

アーク「え、いや？ 拷問だ」

まったく……皇帝陛下に

アーク「めちやくちや汚してもいい部屋ってありますか？」  
って聞いたら

アレクサンダー「あ、だったらわしの部屋使ったら？ あそこ、アークが暴れて使い物にならないから改装することになった。……ところで何をやる気だ？」

アーク「あ、安心を別にあそこで殺したりはしないんで  
ってなことで楽しい楽しい拷問をすることになった。

アーク「んじやまずだが……ニゴウって何者なんだ？ この武器はどこで手に入れた？ あの勇者たちは？」

「し、知らん!!」

アーク「ふーん、言ったね？ 知らないって？」

先ほどの戦闘でサイボーグの姿のままはあつとため息をはくと準備を進めていった。

あ、ちなみに以前の勇者を殺す際の拷問はさすがにアイツだったからできたことで今回は一般人だから死なない程度で痛めつけ始めよう。

以前のポイント 16324

生産

バルビツール酸系睡眠薬 1

ワイヤー 1  
醤油(100Lほど) 1  
竹(空洞) 1  
ガムテープ 1  
開発  
S A A (Single Action Army) 2丁 5×2  
|| 10  
補給  
F N S C A R | H M k. 17の弾 1  
合計ポイント 16306

アーク「さてと、ちよつと今からうるさくなるから塞がせてもらおうねー」

「な、おい!? 何をすrむぐ!?!」

この部屋に入ってくる前にいろいろと開発しておいたものを出し、その中から開発したてのガムテープを兵士の口に張り付けた。

アーク「なあ? 『異端者のフォーク』っていう拷問知っているか?」

「もが?」

アーク「ヨーロッパっていう地域であつた拷問なんだけどな……」

「お、おい。なんだよそれ?もが?」

アークが取り出したものはまるで食事が出てくるフォークのようなものだったが……サイズがおかしく、人の腕ほどあつた。

アーク「ほーい、我慢しろよー」

そして、その巨大すぎるフォークを

ドスツ

「もがあ!?! もがあ!?!」

フォークを兵士の胸元と顎に差し込み食い込ませた。食い込ませると顎と胸元から赤い液体が滴ってきた。

アーク「あー、おいおい暴れんなよ余計に食い込むぞ」  
すると兵士はアークの言葉を聞いてぴたりとおとなしくなった。  
アーク「お、どこぞの勇者みたいに泣きわめくかと思ったが偉いな。  
んじゃ、まず一つ目だ……XM8はどこで手に入れた？」  
アークが兵士にXM8を出す……っていうか押し付けて問いただす  
が

兵士は震えるように首を横に振る。

アーク「はあ？ 知らないって？」

グシヤ

「ぐふ!!」

するとアークは兵士の頭をつかみ下に向けさせる。

下を向けさせるのでフォークがさらに深くそして痛々しく刺さり  
肉を抉っていく。

アーク「知らないことではないと思うんだよなあ？ だって君たちが  
ド素人だったらこいつの撃ち方ならわかるかもしれないけどリロー  
ドとかの動きがアマチュアのソレじゃないんだよなあ？」

「もぐもぐ!!」

知らないとアークに下を向けらされてもなお首を横に振る。

アーク「ふーん……まだしらばっくれる気？」

涙を流しながらやめてほしいと涙を流しながら目で訴えてくるが  
無視し力を入れる。

ぶしゅぶしゅつと音を立てながら兵士の中に入っていくフォーク。  
言う!! 言うからもうやめてくれえ!!  
「もぐう!! もぐうううう!!」

ここでどうとう観念したのか白状することにした兵士。

アーク「あ？ あ、すまんガムテープで聞こえなかつたわ」

口につけていたガムテープを無理やり剥がし口を自由にさせる。

「は……はあ……」

アーク「おい、さっさと見え。こちとら忙しんじや」

「ま、待ってくれ……」

アーク「……つち」

アークもアークでアリスたちの面倒とかがあるので時間がないので、腰から開発したての二丁のS A Aをとりだし一発の・45ロング・コルト弾だけ装填する。

カチッ

アーク「さつきと言え」

装填されたS A Aの銃口を兵士の額につける。

「わ、わかったから!! 言う!!」

こうしてようやく話してくれた。

「あ、あのえつくせむえいと? っていう古代兵器なんだがアーム帝国の……」

アーク「……」

グシヤ

「ほぐほぐ!」

アーク「わりいな……俺、嘘は好きじゃねえんだわ」

兵士の最初のひと言目と目が泳いでいたので嘘だと見抜きS A Aの銃口を兵士の口の中に突っ込む。

アーク「今すぐに本当のことを言わないと風穴があくぞ?」

「ほぐほぐ!」

S A Aを無理やり兵士の口の中に銃身を入れ込んでいく。

バレルが兵士の舌を触れていき、喉の奥に入ってくるので吐き気が出てくるが

アーク「あ、吐いたら即殺すからな」

するとアークはS A Aのシリンダーを適当に回す。

カリリリリリ……

カチッ

アーク「今から一発ずつ引き金を引いていくけど6発中1発だけ実弾が出る。んでいつ撃たれるかわからないから早めに暴露した方がいいよ」

なんか兵士から悲鳴っぽいのが聞こえてくるが構わずに引き金を引く。

カチツ

アーク「つち、空か……ほら、あと5だ」

「こひゅ!? こひゅ!?」

アーク「あく…悪いけどなんて言ってるのかわからんから大き目の声で言ってくれ」

「ばしゃびいきよおわこくないのおくdごひゅ!?」

叫ぼうと口を大きく開けるがそこにアークがS A Aのバレルをさらに挿入させ、とうとうシンダーが兵士の口に半分入ってしまった。

しかも、口を無理やり開けているのでフォークも先ほどよりさらに深く刺さる。

カチツ

カチツ

カチツ

アーク「ほれほれ、あと2発だぞ?」

「いいまひゅ! いいまひゅかりや!!」

ようやく本当のことを言ってくれるようなので銃口を口の中に入れたまましゃべらせる。

「ば、バサビィ共和国の中にとある倉庫を見つけたんです……」

アーク「……倉庫?」

「は、はい……以前に勇者がダンジョンに行ってた時に発見したんで

すが……その中にさっきの古代兵器が入ってたんです」

アーク「……まず、突っ込みたいんだが……え、なに？ 古代兵器って何？ え、XM8って？ は？」

え、確かXM8って2005年にアメリカの次期正式アサルトライフルに選ばれそうになったけど落選したんだっけ？

え、じゃあこの世界って前世の未来？

アーク「なあ、今って西暦何年だ？」

「せ、せいれき？ なんだソレ？」

あ、違うみたいだな

アーク「……ま、とりあえずこのXM8はその倉庫とやらから手に入れたと。んじゃ、ニゴウは？」

「知らん」

アーク「はい？」

「知らん」

アーク「……知らん？」

「ああ、俺にもわからん」

アーク「ふーん」

「お、おいなんだその紐は？」

アーク「……なあ、さっきの情報は本当か？」

「そうに決まってるだろ!!」

アーク「彼女の傷も？」

「知らん!!」

アーク「はあ……」

ため息を吐くとアークは手に持っているワイヤーを椅子の上で拘束されている兵士の腹部に巻き付けた。

そして

アーク「……締めるよ？」

「はっ？ どういう（ぐ）りゅ（お）ぐお!!」

ワイヤーの両端を思いっきり引っ張ると腹部が閉められ瓢箪みたいになった。

これはみんな大好き拷問ソムリエであった「瓢箪責め」だ。

あ、ちなみに実際は二人かかりか機械でやるのだがサイボーグの筋力で占めている。

「く、くるしい……」

ワイヤーが兵士の皮膚に食い込み血がにじみ出る。

アーク「ニゴウって何者なんだ!? 彼女はなんで従っているんだ!?」

「話すから……はやすから……」

口をパクパクし顔が青白くなって自白しようとしている。

アーク「はよ言え」

「がはあッ……に、ニゴウは首相が使い魔にしているんだ……そ、それ以外はわからない……」

アーク「え、首相って……まさかバサビイ共和国の!」

「あ、ああ……あの<sup>勇者</sup>糞が戦争で負けて自滅しそうなのを見た後にこっそり逃げたんだ」

アーク「……だから俺が勇者を殺しに行ったときにいなかったのか」

ようやくパズルのピースがはまっていくような音がした。

アーク「……てか使い魔って?」

「そ、それ以上は知らな (≪font:275t≫グシャ≪font≫) あ、あがあああつあああ!」

アーク「言えって言ってんだ糞が!!」

口に入れていたSAAを抜き取り致死量の「バルビツール酸系睡眠薬」の入った注射を首に荒々しく打ち込む。

ちなみに「バルビツール酸系睡眠薬」とは睡眠薬の一つで昔に普通に販売されていた睡眠薬の一つで最強の睡眠薬ともいわれるほど睡眠効果が高すぎる薬剤でもあり依存症がやばすぎる薬剤であり致死量で普通に死ぬ薬剤である。(現在では販売されていません)

「あ、あれ? なんで眠く……」

アーク「あ、寝たらアークが貫通して死ぬぞ」

あ、ちなみに眠りそうになっても覚せい剤で無理やり起こす(薬物、ダメ、ゼツタイ)





カチッ

「つひい!? そ、そういえばニゴウは人間じゃないんだ!!」  
空中に投げた後にキャッチし引き金を引く。

カチッ

カチッ

「あ、あいつはさっきの古代兵器を回収しに行つたときにいたんだ!!」

カチッ

カチッ

「し、調べたらあいつは人間の肉体に似ているけど魔力が人間のソレ  
じゃないんだ!!」

人間のソレって……

あ、そういえばニゴウが俺を襲つた時にアリスが何か感じたそうだ  
けど……あれか。

アークが心の中で考えつつも引き金を引き続ける。

カチッ

カチッ

カチッ

カチッ

「そ、それであいつを起こしたときになんか言つてたんだが、首相が使  
い魔契約と奴隷契約をして今になるんだ!!」

アーク「……つまり、ニゴウの言うマスターって首相のことか」

あのけがは全部アイツだったのか……

「て、てかなんでそんなにあいつのことが気になるんだよ!? あいつ  
は人間ですらないし別にどうでもいいんだろ!!」

カチツ

アーク「……そんなお前らの事情などどうでもいい。俺はニゴウのことを聞いているんだ」

だが言われてみればなんでこんなにもニゴウのことが気になるんだろうか？

俺を殺しに来たからか？

いや、でも怪我まで心配するなんて何か違うしな……

そして、いろんな情報を聞いていくうちに

カチツ

左手に持っていたS A Aが全弾撃ち切ってしまった。

右手にあるS A Aは空中にあり右手に落ちてくる。

……まあ、ここでオセロットならかつこよくキャッチしてヘッドショットするのだが

カシヤン!!

カラカラカラ……

アーク「……」

「……」

椅子に縛り上げられている兵士とかつこよくキャッチして構えようとしたが右手が滑って落としてしまったアークとの間に実弾が入ったS A Aが落ちてきた。

まあ、ようするにアークはキャッチ失敗したのである。



ニゴウ「発射」

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

アーク「な、なんだ!?!」

突然、部屋が爆発したと思つて気が付いたら部屋が大改装され風通しの良すぎる部屋になってしまった。

日差しは部屋に直接入り暗い部屋が明るくなり兵士の表情も見えるようになった。

だが、謎の爆発のせいで床が半壊してしまった。

アーク「くそ! 見えない!!」

しかも、爆発の煙のせいで視界が悪く唯一見えるのが爆発でできた穴から零れる光だった。

アーク「どこだ!!」

手に双眼鏡を召喚してきた穴から覗く。

椅子に縛られていた兵士が魔法を使った瞬間はなかった、なら外からの攻撃に違いない。

煙を退かし双眼鏡に目を当て犯人を捜す。

(今は破壊されているが) 外側の窓から見える景色はアーハム帝国の街並みが見え国民も点々と見えるが双眼鏡から見えるのは驚愕の顔をし城に指をさす国民だった。

アーク「…………どこに」

くまなく探していると

チカツ

アーク「…………今何か光つ!?!」

建物の上で何か光って見てみるとそこには

ニゴウ「すう……」  
レミントンM700を構えたニゴウが双眼鏡越しにこちらを狙っていた。

アークが見つけた時にはニゴウはトリガーに指をかけ引き金を引いていた。

レミントンM700から放たれた308win(308口径ウィンチエスターマグナム弾)が放たれた。

空を切り弾丸はアークの心臓に直撃……

バシユツ

「……え？ なん……で」

ではなく隣にいた捕虜の兵士の心臓を打ち抜いたのであった。

ニゴウ「……始末完了」

アーク「……野郎!!」

これ以上、情報を聞き出させないために殺すのかよ!?

仲間意識ないん!?

隣にいた兵士の胸から赤黒い液体が流れちて行く。

現実世界のみんなは頭を狙いがちだが実際は心臓などのほうがいらしく、額を狙っても大脳を傷つくだけで即死とかまではないらしい(頭を狙うとしても額より少し下の脳幹を狙った方がいいらしい)

ニゴウ「……任務完了、帰投します」

アーク「待て!!」

レミントンM700をしまい逃げようとしているニゴウだがアークは今度こそ逃がさないため部屋から外に飛び降りサイボーグの跳躍力で追いかける。

開いた穴から飛び降りエルフたちの住宅の屋根を走っていく。

全力疾走しているアークの約100m先にニゴウがいるのだが距離が縮まらない。

アーク(……確かにあの速さは人間じゃねえな!!)

このままだと国境先にある森まで逃げられ見逃してしまう可能性がある。

逃がさないために手にMk. 22を召喚する。

アーク（届くか!）

右手で構え狙うが走りながら狙っているので標準が安定しない。

アーク（な）

I have predicted the conclusion

アークの能力を発動すると自分のMk. 22から赤い線が伸びていった。

周りの景色がゆっくりとなり音も遠くなっていく。

アーク（焦るな……狙うはニゴウの無力化だ。どこかに当たればいい!!）

ドクンドクンっと自分の心臓の音が邪魔だが一呼吸をし落ち着かせ狙う。

そして、自分の赤い線がニゴウの背中を捉えた。

アーク（当たれ!!）

アークの人差し指がMk. 22のトリガーに力を入れようとしたが

バツ

射線を気にしたのかニゴウは建物の上から飛び降りた。

アーク「……逃がさん!!」

アークも同じように飛び降り追いかける。

石材でできた道に飛び降り薄暗い脇道に消えていこうとするニゴウを追いかける。

周りで突然、男女二人が飛び降りてきて奇声と罵声が聞こえてくるが無視し脇道に入り込む……が

周りにいた住民たちに気が散り油断してしまった。

ニゴウ「……掛かった」

ツピ

なぜなら、足元にクレイモアがあつたからだ。

ズドオオオオオオオオオオオン!!

アーク「げほげほ!? あ、あの野郎!!」

爆発でアークの体はクレイモアにあつた700個に鉄球で傷つき  
あたりに白い液体……サイボーグの人工血液で真白に染まった。

とつさに受け身を取つたので四肢は無事だが衝撃で壁にぶつかり  
ふらつく。

……だが

「痛い! 痛いよお!」

「お、おい!! 大丈夫か!」

「騎士を呼べ!! 早くしろ!!」

アーク「……くそ!!」

アークは無事でも周りにいた住民にも被害が及んでしまった。

それはもう地獄絵図になって、助けを呼ぶものの助けようとするも  
ので入り混じっていた。

ニゴウ「……事前に仕掛けておいたのですが……あれで無事とは」

そんな光景を屋根の上から見下ろすニゴウ。

アーク「待てや、糞たれ野郎!!」

なんとか追いかけようとするがふら付いてしまい地面に崩れ落ち  
てしまう。

ニゴウ「……マスターに報告することが増えましたね」

アーク「目的は……なんなんだよ!」

ニゴウ「私がマスターから受けた命令は『例の兵器偽の勇者者の実地試験』と  
『皇帝の暗殺の援護』、そして『逃げ遅れた味方の処分』です。……さ  
て、本当はここであなたを殺した方がマスターのためにもなりますが  
騎士たちが来ては少々面倒ごとになりマスターの報告が遅れてしま  
いますのでここで失礼します。see you♪」

アーク「っ!! ニゴウ!!」

踵を返し国の外に走り出したニゴウだがアークもただ何もしないわけではない。

せめて何か情報をえれないかと腰から双眼鏡を取り出しニゴウの背中をスキヤンをする。

ピーーーーー (スキヤン中)

Scan completed (スキヤン完了)

アーク「よし……取れた……か」

スキヤンに成功するとアークは崩れ落ち壁に背を預け深呼吸をした。

……そして、スキヤンした双眼鏡に映っていたのはアーク「な、なんだこれ？」

型式：試xhか? た式GO4期

追記：ERROR

状態：不明

神様特典：『Bullet Queen』《弾丸の女王》



## 九五発目 会議

アーク「前回のラブライブは!!」

アーハム帝国に侵入しクロエ、アリス、レイチエル三姉妹と皇帝夫婦を暗殺しようとしてテロリスト擬きが侵入してきたがアークの奮闘により犠牲は出たものの制圧に成功した。

そのあと、テロリストの一人を（非平和的な）O☆H A☆N A☆S Iをしていろいろと（死にかけさせたが）情報を聞き出せたがニゴウが襲来し捕虜が殺され追いかけたが、まさかのクレイモアに引つかかってしまい負傷をし逃げられてしまった。

アーク「くっそ……やられたな……」

あれから帝国の騎士が到着し怪我人の移送などを手伝った。

クレイモアでやられたときはふら付いていたが今は問題はない。

カツカツカツカ!!

壁に寄りかかり空を見てぼけえつとしているとどこからか靴の音が聞こえてきた。

アリス「アーク!!」

アーク「ん？ ああ、アリスか。けがは無いか？」

アリス「私は大丈夫って……なに？ この白い液体？」

自分の使い魔が無事だと安心したアリスだが地面や壁にかかっている白い液体に気が付いた。

アーク「あ、それ？ 俺の血」

アリス「ち、血？」

アーク「んまあ、正確にはこの体の体サイボーグの人工血液なんだg（どごおん!!）なはあ!？」

説明した瞬間、アリスのタツクルされ地面に倒れてしまった。

アリス「ちょ、ちよつと!! ほ、本当に大丈夫なの!? 怪我は!？」

え、えつと確かこういう時は回復魔法……あ、でも私できないんだつた。え、えつとえつと……」

アーク「お、落ち着けアリス。てか、仮に怪我人の俺をタツクルする方がやばいんだが」

アリス「つ、使い魔がケガして心配しない主人がどこにいるんですか!! そ、それより本当に大丈夫なの!! 血の量もひどいし!」

アリスが慌てる様子でアークの体をペタペタと触る。

しかも、俺にタツクルして地面に倒し上に乗っかっている状態だ。

アーク「ああ、この体は伊達に雑魚サイボーグじゃないからな。回復用ナノマシンで傷はふさがっている」

ここでいう回復用ナノマシンとは作中のサイボーグ(MGR)の体内にあるナノマシンの一つでお間に心臓にあるのだが傷ができても直してしまうナノマシンだ。さすがに欠損は無理だが。

ちなみにMGR内で雷電が敵を殺す際に敵に敵をハートキャッチ(物理)してつぶしている時に体力が回復するのだが、あれは心臓に回復用のナノマシンが集まっているのでつぶして浴びた時にナノマシンも浴びているので回復するらしい。

アリス「ほ、本当? 死なないよね?」

アーク「これだけで死んでたまるかってんだ。あ、あと皇帝陛下は?」

アリス「お父様なら無事でお母様も怪我はしてけど無事だった」

アーク「……そうか」

ノエル「アーク!!」

アーク「……ノエル」

するとどこからかパタパタとシスターが現れた。

ノエル「けがは無いですか!? こ、この白い液体って……」

アーク「あ、俺の血だから気にしなくてもいいよ(どきあ!!)ごはあ!?!」

ノエル「た、大変です!! あ、え、えっと回復魔法を!!」

アーク「だあ!! だからいいって!!」

どういうわけかノエルも俺の上にどすんつと(あ、決して重くないぞ?) 乗りかかり俺の容態を確認してきた。

あの……お二人さん、仮にさつきまで怪我して戦っていた人の上で何してるんですか？

アーク「いや、大丈夫だって二人とも……ほら、どこも怪我なんてしてないだろ？」

ノエル「し、しかし外は大丈夫でも体の中とかに何かしらの物質が入っていてかえって悪化するかもしれないし……アーク!! 一回私の保健室に来て精密検査しましょう!!」

アーク「あ、いやいってマジで。別に歩ければ大丈夫だし。仮に今はサイボーグだから変身を解除すれば元に戻れるし」

アリス「そうよ大丈夫わよ!!」

アーク「ほら、アリスだって大丈夫だって言ってるし……」

アリス「今までずっと彼の主人をしてきたんだからこんなので泣き言を言うなんてアークじゃないわ

でも、後遺症の可能性もあるから主人である私が看病ついでに私の部屋で寝かせる必要性が主人の責任としてあるわね!!」

アーク「おいちよつと待て、なんか違うぞ」

ノエル「な、な、なにを言っているんですか!? 皇女たるものが男性と屋根の下で一緒なんて……わ、私はこれでも研修ですがマザーなので怪我の容態とか詳しくですから……」

アーク「そ、そうだぞアリス? ノエルはシスターなんだから……」

ノエル「だから私がアークさんの看病します!!」

アーク「ちげえ!! 圧倒的にちげえ!!」

何を言っているんだこの二人(´・ω・｀)

アリス「あら? アークは私の使い魔で使い魔の責任は主人の責任でもあるわ? アークは今回の功績者なんだから主人の所で休ませないかね?」

ノエル「で、でもアークさんがもし容態が悪化しても私が近くにいればすぐに治療できます!! ど、どこかの第二皇女とは違うんですから!!」

あ、ノエル……それは言っては……

アリス「ふ、ふくん? い、言ってくれるじゃない? 私はアークとは永遠の忠誠で誓い合ったいわば永遠の友情を超えた存在なんだからアークが少しでも変化あってもすぐわかっちゃうわ。どこかのシスターさんとは違ってずっと四六時中アークと一緒に行動してただから彼が思っていることなんかあなたじゃわからないもんね?」  
どういうわけかアリスとノエルは微笑みながら見つめあって……  
否、にらみ合っている。

言っておくが俺の上でだ。

正直、下りてほしんだが……

アーク「ねえ!? ちょっとお嬢さん!? 俺は別にいいって」

アリス・ノエル「アークは少し黙ってて」

アーク「ア、ハイ」

あ、ダメですね

今、無理やり下ろそうものなら異世界生活にピリオドを打ちそうです  
すね。

アリス「アークの主人なんだから私が!!」

ノエル「私こそシスターなのですぐ容態を確認できます!!」

アリス・ノエル「むうううー……!!」

アーク「\c (^o^)/」

クロエ「アーク!! 無事ですk……何をやっているんですか?」

アーク「あ、クロエ。ヘルプ」

俺の体の上で少女二人が争っているとクロエが複数の騎士を連れてやってきた。

あ、なんか嫌な予感

クロエ「……怪我はありませんよね?」

アーク「うん、ないよ」

クロエ「そう、ならよかったです」

あ、よかった

上二人のせいでまさかクロエもって思ったけどそんなことはなかったわ。

クロエ「まったく……こら、アリス!! 今回の功績者の上で、しかも殿方の上で何してるのよ!! それにノエル先生も!!」

アリス・ノエル「だって、この（皇女様）シスターが!!」

クロエ「はあ……皇女たる者と聖職者が男性の上ではしゃぐなんて……」

はよ、下りてくれねえかな

今日一番、走って戦って尋問して追いかけて疲れたのに……

クロエ「ほら、ノエル先生は怪我人の手当てを。アリスは城に戻ってお父様たちに状況を説明してくれないかしら? 私はここに残って帝国騎士たちと避難誘導とかしておくから。あ、あとアーク」

アーク「はあ……どうせ、皇帝が呼び、だろ?」

クロエ「ご名答。お願いね」

アーク「はあ……はいはい」

クロエ「あなた、本当に疲れているわね。ま、女の子二人を相手してたら疲れるのも納得がいくわね」

アーク「全くだよ……少しは俺の意見も聞いてほしいものだ」

クロエ「……あ、せっかいですからあとで私の部屋に来て一息つきませんか? おいしいお茶と菓子が手に入ったんですよ」

アーク「お、そりやありがたい。あとでいくよ」

クロエ「うふふ♪ それじゃ、あとで」

さてつと、なんかクロエの言葉が怪しかったが気にせんどこ

はあ、また皇帝かよ。

アークはため息を吐きつつも変身を解除し城に向かっていった。

アレクサンダー「ご苦労だったなアークよ」

アーク「ええ、本当にですよ」

(新) 皇帝の部屋につくと皇帝が何やらいろいろと本や書類を整理する皇帝がいた。

新しい部屋の匂いは少々木の匂いが強いが床も壁も真新しかった。

アーク「それで？ 用とは？」

アレクサンダー「待つておれ」

すると皇帝は机に座り引き出しから前に見た魔力を流すと相方と連絡ができる結晶…通魔機を取り出した。

アーク「？ 誰と連絡を取るんですか？」

アレクサンダー「世界会議の出席者たちとだ。現状報告とついでにアークが尋問で聞いたことを報告させようと思ってな」

アーク「なるほど。あ、ちなみに尋問ではなく(非平和的な)

O☆H A☆N A☆S I問です」

アレクサンダー「…：…どうでもよからう其処らへんは。さて、時間じゃ」

すると皇帝は通魔機に魔力を流し始めた。

ポウ…：

アレクサンダー「…：…聞こえるかね代表者諸君」

『ええ、聞こえますよアレクサンダー殿？』

『まさか、大国が攻撃されるとは…：…』

どうやらつながったようだ。

通魔機いろんな声と安否の確認をしてくる。

アレクサンダー「今回、攻めてきた馬鹿どもはアークによるとバサビイ共和国時代の生き残りだもらしい」

ざわざわざわ…：

『あいつらが生きてるのか？』

『おかしい、あいつらはあの戦争のときに死神に殺されるか捕まって牢獄の中のはずだ』

通魔機ごしからざわついているのがわかる

『……どれくらいやられましたか?』

アレクサンダー「……城にいた警備の騎士はほとんどが負傷し少なからず死者もでた」

『そうですか……天国で幸せでいるのを願いましょう』

『さて、本題に入るか。どうせいるんでしよう? 死神殿?』

アーク「お。まさかそちらからご指名とはな」

『単刀直入に聞く。この敵はどれくらい危険か?』

あゝ、やつぱそこか

アーク「危険も何も……あいつら古代兵器持ってたからな」

『古代兵器!? なぜ!?』

アーク「XM8……あ、てかこの声が聞こえている代表さんたちに聞くけどアメリカっていう国知っている人いる?」

『あめりか?』

『なんだその国は?』

『そんな国、歴史上にあったか?』

アーク「……反応からして知らんぼいな」

アメリカほどの大国を知らないってことはこの世界は現実世界の未来とかなって思ったが……じゃあ、このXM8はどこの誰が作ったんだ?

この世界の住人がこの高性能(笑)なアサルトライフルを作るなんて考えにくいし、やつぱり俺以外の転生者が作ったのかな?

あの捕虜が言っていた倉庫で手に入れたってことは貯めていたってことだしな。

アーク「……これは後で調べる必要があるな」

『死神殿? 結局、どうなんですか?』

アーク「あ、すみません考え事をしてました……まあ、とにかくあいつらはなぜか古代兵器を手に入れているのですごく危険です」

『我々だけで対処はできるか?』

アーク「ん……自分も実際戦ってみたんですが練度はそんなに高くないんですが古代兵器の使い方は知っているようなので……使

魔でドラゴンとか強めの魔獣がいれば少しは変わると思いますが敵一人に対して百人でかかれれば勝てますね。まあ、数十人は絶対に死にますが」

『……犠牲は出るのか』

アーク「つて言っても私が思うにこいつらよりこつちの方が危険なんですけどね」

『……こつちとは?』

アーク「ほら、前回の会議の時に襲撃してきた私の偽物ですよ」

『ああ……まさか、あいつも仲間なのか!?!』

アーク「ええ……今回の事件で捕虜を一名確保したんですがそれによると古代兵器の使い方や格闘に潜入方法とかも教えたそうです」  
『捕虜だ?!? 今、その捕虜はどこにいる!?!』

アーク「生憎ですが此の世にはいません。私がきつめの尋問中にその襲撃者、名前はニゴウつと言うらしいのですが暗殺されました」

『……そうか、ではなぜその……ニゴウ?が他のより危険なんだ?』

アーク「まず、誰かに教授できるほどの実力です。前に戦いましたが銃の使い方もド素人ではなく達人級です。接近戦も慌てることな  
く対応していた……多分ですがこいつさえ倒せばあとは何とかな  
ると思いますね」

『……簡単に言う』

『だが、連合を組んで数で攻めればいいじゃないか?』

『しかし、敵の本拠地がわからない以上攻めれないぞ』

アーク「……つていうわけにもいかないんですよえ」

『……どういうことだ?』

アーク「さっきのニゴウのことなんです……実は神様特典があるんですよ」

ざわざわざわ……

『ま、まさか勇者か?』

『お、おい!! 聖教国は予言で出してないぞ!!』



アーク「あー……自分の憶測なんですが多分、ニゴウは勇者じゃないですよ」

『どういう根拠でそういう結論に至るんだ？』

『そうだぞ!! 仮に本当に勇者だったらどうするんだ？』

『いや、そこは別にいいのでは？ アークがいるし』

……信じられてるのかな？

それはそれでだめな気がする。

アーク「え、えつと根拠ですが……まず本当に勇者ならあいつらと一緒に行動する理由がありませんしね」

って言ったものの本当は別にあるんだがな。

アーク（なんか俺と似ている気がするって言ったら不信に思われるだろうなあ）

『……とにかくニゴウが勇者なのかは置いて。しかし、アーク殿？ アーク殿ならそのニゴウとは渡り合えるだろう？』

アーク「……残念だがそうでもないんだな」

『……と言うと？』

アーク「……あいつの能力だよ」

ニゴウの能力…… $\langle$ Bullet<sup>弾丸</sup>のQueen<sup>女王</sup> $\rangle$ の能力なんだが

$\langle$ Bullet<sup>弾丸</sup>のQueen<sup>女王</sup> $\rangle$ ……弾丸を放つものなら魔力がある限り無限に召喚することができる

つまり、あの時戦った時に手品みたいに出したのはこの能力のおかげであるということだ。

だが、めんどくさいのは俺みたいなポイント制ではなく魔力で償還するということだ。

魔力は放っておけば回復できるので継続して戦えるが俺はポイントが尽きてしまえばその時点で負けだ。

アーク「あえて言うが……多分、技量と共にあいつも同じくらいだから引き分けで終わると思う」

『ま、まさか死神と実力は同じ？』

アーク「おう、同じだ。てか、俺に頼らず各国でどうにかしろよ」  
『い、いやアーク殿と同じ実力なら暗殺とかお手の物でしょう?』  
『そうですよ!! 殺した死体を弄びながら次の獲物を捜し最終的に誰もいなくなるまで殺すのが死神でそれがもう一人いるんですよ!』  
アーク「お前ら、俺をどういう目で見ているんだよ」  
アレクサンダー「しかし、アーク。今回みたいな襲撃があったらひとたまりもないぞ? 今回はアークがいたから何とかなつたが他国はそんなのはいない」

アーク「そうですか……」

だったら尚更敵の拠点を破壊しないとな。

あ、あとニゴウと会わないとな。

アーク「だけど、場所がなあ……」

あの時、クレイモアに引つかからずに追いかけてたら追いつくか場所がわかったはずなんだがな……

アーク「えく……この中で敵のアジトを知っている人は……いないよねえ」

さてと、どうしたものか。

見つけようにもこんな広大な世界でひたすら探すなんて骨が折れるし、逆に拠点が魔族領だったらお手上げだぞ。

うーんつと考えていると

ビイイイイイ……

カンカンカン!!

アレクサンダー「ん? 何の音d…な、なんじゃ!？」

窓の外からハエの飛ぶような音と窓の叩く音が聞こえ振り向いてみるとそこには円盤のような形をした飛行物体。

アーク「あれ? キッドナツパーじゃん? どうしたの?」

あれ? 確か、帝国の周りを見張りとして配置してたよな?

キッドナツパー「(＃。＼) トニカク、アケロ!! コノ、ウスハゲアンポンタン!!」

アーク「あ、わりい」

アレクサンダー「あ、アーク？ そいつは……」

アーク「俺の使い魔みたいなのやつです。それでキッドナツパー？ どうしたの？」

キッドナツパー「(へ、う、) (\*、艸、)」

アーク「はあ……え、まじ？」

するとキッドナツパーは体を動かしていろいろと話してくれた。

はたから見ればなんて言っているのかわからないが俺はなぜかわかる。

アーク「………了解、ありがとう」

キッドナツパー「(〽ω〽) ヤメロヨ、ハズカシイ」

誉め言葉と共にキッドナツパーを撫でると体を左右に動かした(喜んでいいるのか?)

アーク「皇帝陛下、朗報です」

アレクサンダー「なんだ？ 言え」

アーク「敵の拠点と思わしき場所を仲間が発見したそうです」

アレクサンダー「なに!？」

『なんだって……』

報告すると皇帝は顎が外れるほど口を開け、通魔機からもざわめきが聞こえる。

アーク「実は私が一応で展開していた監視網の一角で逃走中のニゴウを発見したそうです」

先ほどのキッドナツパー曰く、首都の爆発音が自分たちの監視網まで聞こえてきたらしい。

自己判断で急いでアークの所へ向かおうとするが向かっている途中で犯人を逃がしてはいけないとなぜか脳内のA.I.が判断しその場に待機し監視を続けることにしたようだ。

すると数十分後、キッドナツパーの一機が森の中を疾走している何かを発見し追いかけてみると「迷彩色にカモフラージュした布」を羽

織って国境の外に向かおうとするニゴウを発見したそうだ。

んで、現在はその一機が追跡中で先ほど拠点を発見したそうだ。

いや、キッドナツパーさんマジ優秀

アーク「それで？ どうします？」

『どうするとは？』

アーク「いや、どうするって……今すぐにその拠点を攻めた方がいいのかって聞いているんですよ」

『……どうしたものか』

報告すると何やら皇帝陛下と代表たちはなんたらうんたらつと会議を始めた。

『ちなみにその拠点の場所はどこなんだ？』

アーク「えっと……シュレイド王国っていう場所ですね」

『シュレイドだと？』

『あそこって別に平和的な場所じゃなかったか？』

『特徴がないのが特徴っていうほど何もないぞ？』

アレクサンダー「そんな国になぜ残党どもが？」

『……わかった。皆さん、先ほど確認するとどうやらシュレイド王国で行き来す商人が最近見かけなくなったのと連絡しても誰も出ないそうです』

アーク「いや、もうそれ絶対黒やん」

『ふむ……本当は問いただせて会議に呼びたいんですが……潜入して確認する必要がありますね』

アレクサンダー「わかった、そうしよう……と……ということで頼んだぞアーク」

アーク「え、俺スカ？」

『いやだってねえ？ 死神殿みたいなやつがあちらにもう一人いるの  
でねえ……』

アーク「他力本願過ぎるだろ畜生」

『まあまあ……報酬は出すんで』

アーク「……はあ、わかったよ。今夜中にも出るか」  
『感謝します』

アレクサンダー「すまんなアーク」

アーク「別にいいですよ。というより任務自体は嫌いじゃないんですが……」

アレクサンダー「……ああ、アリスか」

問題がアリスなんだよなあ

彼女が俺を生かせるのを許してくれるんだろうか……

アーク「はあ……それでは行ってまいります」

皇帝の部屋を出た後、ため息を吐きながらアリスの部屋に向かっていったのであった。

九十六発目 段ボール is very good

皇帝の部屋でいろいろと報告したのち皇帝から調査というお願い（強制）を受け、その日のまだ月が沈まないころ、自分の家にて今回の潜入で使う道具を準備していた。

今回は潜入が主なのでこの装備でいく。

・P90

・Mk. 22

・ブロウトン モデル2000シリーズ「M2000-NL」

アーク「……えつと、これとこれと」

アリス「ねえ、アーク」

アーク「ん？ どした？」

自分の家のベッドの上で装備を点検をしているとアリスがベッドの腰掛けて話してきた。

アリス「……前に戦ったあいつってさ……強かった？」

アーク「前……あ、もしかして世界会議の？ まあ、強いつて言葉じゃ足りないな」

アリス「……絶対帰ってきてよ」

アーク「いやいやいや……今回はあくまでも潜入で情報収集だから戦闘は視野に入れてないよ」

できれば首相暗殺とニゴウの捕獲って思ってるけど……まあ、無理だろうな。

あいつ、首相をマスターって言って従ってるもん。四六時中いるんだろうな

アリス「……いい？ 今回は他の国にも被害が及ばないよう特別に許すけど……」

アーク「わかってるって。それに俺はニゴウに聞きたいことが山のようにあるからな」

アリス「もう……そうじゃなくて……」

すると背中に柔らかく居心地のいい感触が伝わってき、アークの体の前に華奢で白い腕が見えた。

アリス「もし死んだりしたら許さないんだから」

アーク「あく……それはどういう意味で？」

アリス「……まさか忘れたんじゃないわよね？　一緒に街に出るところ？」

アーク「あ、そうやったな……言われてみれば行けてないな」

約束したあの時から偵察しに行くわ戦争するわ勇者を殺しに行くわ、やつと休めると思ったら糞勇者が蘇ったりしていく暇もなかったな。

アーク「わかったよ……この事件が終わったら一緒に街に行くか」

アリス「……足りない」

アーク「おん？」

アリス「行けなかったお詫び」

アーク「お詫びって……じゃあ、願い事一つだけ叶えるで」

あと詫びてほしいなら今までの騒動を起こした奴らに言えよ。

アーク「んじゃ、改めて指切りげんまんするか」

アークが右手の小指を出す

アリス「……」

アーク「どうした？」

アリスはアークの右手をじっと見つめる。

アリス「……アーク」

アーク「いやだからなんだよありs（もふう）へあ？」

どういうわけからわからん

なぜかアリスに真正面からハグされた。

アーク「え、ちよ、アリスさん？」

アリス「ほんつとあなたつて頼られるね……でも、本当の主人は私だからね」

アーク「へいへい……あと、いい加減い離れてくれ」

アリス「やだ」

アーク「……はあ」

アークの胸の中で丸くなるエルフの皇女。

彼女からほんのり感じる優しい香りにどういうわけか心臓の音が早くなる。

アーク（ええい……なんでこんなにむずむずすんだよ）

アリス「……帰ってきてよ」

アーク「わかったよ……それじゃ、行ってきます」

アリス「……行ってらっしゃい」

だが、時間が時間なのでアリスから離れて窓へと向かう

なぜかもつと彼女の肌に触れたいと思ってしまったがそんな邪念を振り払う。

アーク「さて……あ、そういえば。アリス、行く前に一つ頼んでいか？」

アリス「頼み事？」

すると

猫「にゃあ〜」

アーク「あ、猫氏」

暗い部屋の隅から小さな黒猫がやってきてアークの足にすがり寄った。

この猫は以前にアークが黒い混沌（別名 G）と戦った時にGを食べてやつつけた猫である（三十一発目「生まれる火種」を参照）

アリス「あら、猫じゃない？ アークが飼ってるの？」

アーク「飼ってていうか……住み着いたって感じだな」

俺が人間に戻ってから俺は学園の生徒から野生の動物までもが避けられるようになった。

理由はリンによると「助手の魔力が魔王みたいに黒すぎる」らしい（解せぬ）

アーク「俺が任務でいつている間、こいつの世話を頼んでいいか？」

猫「にゃ〜？」

アリス「いいわよ!! 私、猫好きだし!!」

アーク「あ、俺も猫が好きなんだよなあ……」

猫「にゃあ!!」



でも、この猫……なぜか俺が人間の時でも逃げないんだよなあ  
まあ、その代わりよくクロマグロの大トロを請求してくるんだが  
アーク「はあ……んじや、行ってくるぜ猫氏」  
猫を抱きかかえて頭をなでなでする。

猫は居心地がよさそうな顔をした。

そのあと満足したのか地面に降りた後、どこかに行ってしまった。

アーク「さてと……いい加減向かう……何してんだアリス？」

いざ向かわんって思ったが……アリスが頭を下げてこちらに向け  
ている。

アリス「撫でてよ」

アーク「は？ おま、なに言ってるんだ？」

アリス「……アークが前に私の頭を撫でたことあったよね？」

アーク「ああ……俺がD-Wakerの時か」

アリス「あの時みたいに撫でてほしい」

アーク「いや、なんでさ」

アリス「……撫でてくれたら猫の世話……やってあげてもいいわよ  
？」

アーク「はあ……ほら、これでいいか？」

アリス「もう♪ 仕方ないわねえ♪ ん〜♪ もう少しだけ♪」

アークの男みたいに大きな手ではないんだがアリスの頭を優しく  
なでる。

まるで先ほどの猫みたいにアークの手にすりすりするアリス。

口では仕方ないとか言っているがエルフ特有の長い耳がパタつい  
ている。

アーク（これじゃ、デカイ猫だな……はあ、ほんと）

アーク「可愛い奴め」

アリス「ん！ ありがとう♪」

アーク「……減るもんじやないし、今度してあげようか？」

アリス「ええ！ いいの!! えへへ♪ あ!! 言っておくけどクロ

エ姉さまとかにはしないでよ!! これはあなたの主人だけよ♪」

アーク（なーにしてんだ俺）

嬉しそうに太陽のように元気に笑いながら勝手に約束するアリス  
……に対してそっと微笑むアーク。  
アーク「……待つてろよニゴウ。この借りは絶対に助けて払わせて  
やる」

## 報復

アークが決意の言葉をつぶやくと体は縮んでいき手は鳥のように  
翼になり体にジェットエンジンが生成されていく。

そして、窓から羽ばたきエンジンを起動し流れ星のようにシュレイ  
ド王国に向かっていった。

以前のポイント 16036

変身 スライダー 250

開発

段ボール 2

薄い本 2

スペツナズナイフ 2

ファントムシガー 2

合計ポイント 15780

アーク「……ここか」  
スライダーに変身し一晩と一日中飛び続けた結果、ようやく到着し  
た。

日が昇り少し一番高いところから過ぎた時間に近くの岩山から双  
眼鏡でシュレイド王国を偵察している。

キッドナツパー「(\*,▽,)」

アーク「あ、キッドナツパー」

しばらく観察しているとキッドナツパーがやってきた。

このキッドナツパーはニゴウを追いかけていた機体だ。

キッドナツパー「(ーωー)」

アーク「あく……やっぱりか」

ニゴウを追いかけてこの場所を見つけた後、国の様子と地形の把握目的で飛ばしたんだが……一つ問題ができた。

アーク「……国民が一人もいないっか」

そう、こちらも先ほどから双眼鏡で見ているんだが国民はおろか壁の上にいる兵士すら一人もいない。

アーク「前のバサビイ共和国の時とは違って静かすぎるな」

キッドナツパーにはそのまま偵察に出るよう指示し岩山から降り先ほど見つけたちよつとした洞穴に入る。

アーク「さーてつと、行くなら夜だな」

流星に真昼間に潜入は危険なので夜に行くことにする。

アーク「えーつと、あった!!」

そして取り出しのはMGS:TPPのアイテム「ファントムシガー」だ。

あ、言っておくがたばこは20歳からだだが煙はフェイクらしいので未成年の俺もセーフだ。

アーク「んじや、夜まで待機しますか」

ファントムシガーを口にくわえiDROIDで火をつけ待機することにした。

少年待機中(ファントムシガーのBGM:「Sine of fat her」)

うおお〜おおお〜♪

……夜

アーク「うし、夜になった」

先ほどの天気の良い昼が早送りのように進んでいき気が付いたら夜になっていた。

アーク「あ、こういう時にラファイニング・オクトパスを開発しておけばな……」

後悔するが時間もないのでさっさと向かう。

暗い中、警戒して壁に近寄る。

アーク「……報復」

以前のポイント 15780

変身

サイボーグ 250

合計ポイント 15530

さて、壁に無事に近づけたのはいいのだが

アーク「マジで誰もいないな」

先ほどの双眼鏡の時から思ったのだがマジで誰もいない。

いないおかげで楽々と壁の上に登れたのだが壁の中を見ても誰もいない。

アーク「だが、なぜか明かりだけはついてるな」

人はいないがなぜか建物内の明かりは灯っている。

アーハム帝国でも他の国でもそうなんだが夜は大抵、酒場とかでどんちゃん騒ぎを起こしているんだが……この国はデイスタンスでもしてんのか？

アーク「ま、とりま城に向かうか」

壁から飛び降り建物の陰に隠れながら城に向かっていく。

途中、家の中を覗いてみたがやはり誰もいなかった。

アーク「……家の中にもいないとは……どういうことだ？」  
ますますわからん

どこに行っただ国民は？

人の活気はなく明かりだけが灯る街の中、歌う死神一人だけの足音

だけが響く。

一応、ナイトビジョンをつけMk, 22を引き抜いていつでも撃てるようにしている。

アーク「いや、誰も来んのかーい」

警戒はしたんだが……誰も会わなかった件について

結局、問題なく城に到着した。

目の前には巨大な城に続く門がそびえたっている。

アーク「なんか俺が潜入してるのって城ばっかな気がするが……まあいいか」

さーて、どこかに開いている窓とかないかなあ

ぱつと見、どこも開いてなく閉鎖としている。

アーク「……強引突破……いやまあ、見張りもいないみたいだし普通に行くか」

ある程度助走をつけてサイボーグジャンプで城にこんにちはしようかなっと思った瞬間

アーク「……ん？」

ガラガラガラ

遠くの方から何かが駆ける音が聞こえてきた。

音的に馬車か？

その証拠に暗い街に一筋の揺れる光が迫ってきた。

アーク「……巡回か？」

とりあえずその辺の物陰に隠れる。

しばらくすると門の間に一台の馬車が止まった。

「ふう……長旅に疲れたわい」

「だな……さて、開けさせてもらうか」

馬車には声からして男二人が乗っており馬車も大き目だった。

男の一人が腰から何かを取り出しつぶやき始めた。

「……了解。おい、今から来るから3分待ってくれだとき」

「はいはい……はあ夜はさみいから早く中に入りたいたいぜ」

アーク（……あの馬車、まさか）  
どこかで見たことがある馬車だと思い物陰から音もなく出て馬車の後ろに回る。

アーク（……やっぱりか）

馬車の荷台の中を覗いてみるとそこには……たくさんの奴隷がいた。

アーク（見たことあんなあつて思ったがコレ前に勇者の覗きをしに行くときに乗った馬車じゃん。こいつらあの時のをそのまま使ってるのかよ）

荷台に乗せられている奴隷たちは全員、どこかしらの体の一部がなく生気も感じられなかった。

しかも乗り心地も最悪らしく何かが入った段ボールも積まれていた。

「おーい！ 待たせたな!!」

「おせえわバカやろう!!」

「はっはっは！ 少し酒を飲んでてな!! 護衛たちは？」

「今、城内外の巡回に回っている!! あと、そろそろお前たちと交代だろ?」

「おっと、いけね。そうだったな」

……ふむ、どうやら巡回組がもう間もなく帰ってくるようだ。

警備がいたのは予想外……っていうかやはりいてどう入るか悩んでいたが大丈夫そうだ。

作戦を考えたアークは馬車から離れ先ほどの物陰に再度隠れた。

「よし！ 入っていいぞ!!」

離れて数秒後、門は重々しい音を立てながら馬車が入れるほどの幅で開き馬車はその中に入っていた。

アーク「さて、さっそく使うか」

数分後キングクリムゾン!!

「ふー、なんで俺らが毎回帰って来た時に巡回なんかしないといけないんだよ」

「仕方ねえだろ? ニゴウは今、首相さんにお仕置きされてんだから」  
「別にあんな道具、捨ててしまっても構わないだろうに」

暗い夜道に中、明かり代わりにランタンを持ち馬に乗っている男たち数名が門の前にやってきた。

「……ニゴウって本当に何者なんだろうな?」

「別に何者でもいいだろ? はあ……あいつ、めっちゃ美人なのに人間じゃないのが惜しいんだよなあ」

「あ、わかる。あいつのキリつてな感じの目が好きなんだよなあ」

「あ、あと胸デカイ」

「ははは……ん? なんだこれ?」

他愛もない雑談をしながら城に向かっていている途中だったが先頭にいた兵士の一人が何かに気が付いた。

「なあ、これって」

「ああ? これって段ボールじゃねえか?」

道の端にポツンと人間が丸々一人入りそうな段ボールが一個転がっていた。

「輸送班が落としたのか?」

「つたく、あとでクレーム入れておるか」

素晴らしい馬から降り段ボール抱えようとするが

ズシッ

「うお!? なんだこれ!? めっちゃ重い!」

「……本当だな」

なぜかとてつもなく重かったので二人がかりでわざわざ持ち上げ

ながら城に運んで行った。

く城内 倉庫く

「よっこいせつと」

あれから落ちていた段ボールを城の中まで運び倉庫まで運んできた。

倉庫は少々埃臭く暗いが中はたくさんの段ボールが保管されていた。

「あー、腰痛かった」

「そうだな、速く中に入って酒でも飲もうぜ」

そういうと運んだ兵士二人は扉を閉め城の中に向かっていった。

ガタガタ

だが、その運んだ段ボールが突然揺れ始めた。

バン!!

アーク「ぷはあ……あー、気持ちわりい」

段ボールの中から出てきたのはハゲ……失礼、アークだった。

サイボーグの姿になって段ボールの中に入って門の前にスタンバイし色づくくれるのを待っていたのだ。

アーク「……段ボールも悪くないな」

段ボールの中に入って運ばれていたんだが……どういわけか段ボールの中はすごく居心地がよかった。

あの安心感に眠りそうだったが運んでもらった相手が悪かった。アーク「さーて、ここは倉庫か。てか、なんでこんなに段ボールが



あんだよ」

段ボールから出てあたりを見るが周りにはたくさん段ボールが転がっていた。

なんなん？

こいつらもスネークみたいな段ボールラブになったんか？

スパツナズナイフで段ボールを切って中を見てみると

アーク「……AK!？」

中にはソ連が開発したアサルトライフルAK―47が大量に入っていた。

てか、なんで段ボールにこんな物騒なものが入っているんだよ。

アーク「……AKって言ったら構造が簡単で作りやすい、安い、高威力なんだが……あいつ等ってXM8あるよな？　なんで？」

ちなみにAK―47って言ったらテロリストに使われるイメージが強いんだがあれは先ほどのそろってはいけない三拍子のせいで使われているだけで製作者のカラシニコフ氏は(うる覚え)「使われて悲しい」っと言っていた気がする。

アーク「……仮にここにAK工場があるとして……XM8の予備か？」

とりあえず写真を撮っておく。

アーク「さて、さっそうく城の中を物色させてもらいますか」

何だっけ？

皇帝曰くあいつ等って世界統一うんねんかんぬん言ってたよな？

マジであいつ等って何がしたいんだろうな？

アーク「できればニゴウを見つけて……連れ去りたいんだがな」

そういうとアークは扉をそっと開け城に向かっていった。

九十七発目 show timeだ!! (大塚明夫ボイス)

ここはシュレイド王国

アーハム帝国からもミール聖教国からも遠い辺鄙な国でリングが名産だ。

アーク「……って言っても今じゃテロリストの国になっちまってんだがな」

だが、そんな中歌う死神ことアークは潜入していた。

アーク「ほんと、さっきのAKと言いたいXM8と言いたい……いろいろとやってんなあ糞が」

ゴトゴトと周りを警戒し歩きながら愚痴る。

現在、段ボールをかぶりながら中腰で移動している。

アーク「……腰がいてえ」

絶賛、メタルギアらしいことをしているんだがスネークたちって潜入の際、ずっとこの態勢なのか……

あと、90話以上たつてようやく段ボールで潜入って遅くね？

アーク「……あとこの見取り図とかほしい」

潜入したのはいいがこの城の構造が全く分からないので適当に移動して部屋があつたら入って調べるを続けている。

迷子？ それは言うな。

アーク「さーてと、速く調べて証拠掴んでついでにニゴウを助けないな」

移動しては休憩を繰り返して部屋を回る。

暗い廊下をナイトビジョンをつけ段ボールで中腰になりながら移動するという何とも地獄な移動をしていく

アーク「……ここは……何もなしつと」

扉を少し開け中を確認し何もなければ次に移動をしていく。

……てか、人全然いないな。

執事とかメイドはおろか騎士までいない。

アーク「ホームワーク……てなわけないよなあ」  
部屋を出て次の部屋に向かっていく。  
廊下は誰もいないの割にはきれいだ。  
アーク「……埃が積もってないってことは誰かいるのか」  
廊下には扉が複数もありどれも硬く閉められていた。  
……こりや、骨が折れそうだ。

アーク「んで、結局何もなかったと」  
結論から言おう

この国の人間は全員お引越したんですか？

アーク「……でも本とか家具はそのまま……うーん、わからん」  
部屋の中は本棚や机の上の書類、何ならカップやポットまであつた。

……カップの中に紅茶が入ったまま。

アーク「次いくか」

さて、どうしたものか

手がかりが全くない。

アーク「……こうなったら（コツコツコツ）ん？」

「ん？　なんでこの扉が開いているんだ？」

「本当だ、全部閉めているはずなんだが」

アーク「やばっ」

カチャ

完全に巡回のことを忘れていたのか扉の近くまで来たことに気づ

かなかった。

急いで机に隠れ段ボールをかぶった。

「今何か音が？」

「そんなわけないだろ、こんな無人の部屋で」

扉を開け入って聞いた兵士の数は二人だったが、どうやら片方は耳がいいらしい。

アーク（頼む……どっか行ってくれ）

「一応、部屋に異常がないか探すか」

「……そうだな、面倒くさいが首相に怒られるのも嫌だしな」

アーク（……いかな）

速く帰ってほしいと願ったが叶わず二人の兵士は部屋に異常はないか探し始めた。

アーク（移動をした方が……いや、ダメだな。相方が出口を抑えている）

部屋から出ようにも入ってきた兵士の相方が部屋の出入り口の前で仁王立ちしてもう方は部屋の散策をしていた。

アーク（バレるなこれ……だって、ここに段ボールって不自然だもんな）

すると

「あ？　なんでここに段ボールがあるんだよ？」

アークの予想通り兵士が机の陰に置かれている段ボールを見つけた。

「どうした……なんで段ボール？」

「補給班が落とした……わけないもんな」

「じゃ、どうしてこんなところにあるんだよ」

「……開けてみるか？」

「……そうだな、別に何もなければそれでいいしな」

不自然におかれた段ボールに兵士二人が集まって一人がナイフを取り出し開けようとする。

「あ、おいこれってその方が開いてないか？」

「やば、無駄に開けるところだったな。それじゃ、このまま箱を上にあ

げるか」

兵士は箱のふちを持って段ボールを上にあげる。

「さて、なにが………は？」

猫でも入っているのかと思っていたが……入っていたのは身長約180cmほどで体格はそこそこよく、何よりハゲた頭がとても目立っていた。

「敵しゅ」

アーク「させん!!」

「な、(グシヤア!!) ぐは!？」

段ボールを持ち上げられたと同時にアークはすでに動いていた。立ち上がるにと同時にアークは敵の胸元に左手、脇を右手でつかみ、そのまま体を左に回転し持ち上げ相手を頭から地面にたたきつけた。

アーク(次!!)

一人を地面にたたきつけた後、そのまま勢いのまま振り向きもう一人の兵士と対面する。

相方は装備についていた通信機に手をやり連絡しようとしていた。いい判断だと思うがその前にアークが間に合う。

アーク(ふん!!)

ドッ!!

ガッ!!

グッ!!

トン:

グシヤア!!

まず、左手でたたき敵の脇腹を晒させ右手で敵の脇腹を殴り左足で敵の右ひざを蹴り、左手の甲で顔を叩き右手でラスト敵の顔面にストリートをぶちかます。

少しサイボーグの能力で筋力が拳がってしまい殴った瞬間、敵は空中でトリプルアクセルをした後、壁に激突しそのまま気絶していった。

……大丈夫だよな？

あ、ちなみにどちらもれっきとしたMGS：TPPのCCQで前者が前投げCCQで後者が前連打CCQである。

わからなかったら実際にプレイして見てみるのをお勧めする。

アーク「ふう……呼ばれては……ないな」

敵のつけていた通信機から連絡が来るか警戒したが何も鳴ってないところを見るに連絡はされてないらしい。

アーク「はあ、少し段ボールを過信しすぎたな」

居心地がいいとはいえ段ボールがあればなんとかなると思いつむのは危険だな。

アーク「さっさと移動を……あ、いや、こいつらから聞くか」

部屋から出ようとしたが貴重な情報源を手に入れたので早速

O☆HA☆NA☆SI母をしてみる。

P90を召喚し左足で前投げをした兵士の脇腹を蹴り上げる。

ゴキツ

「ごは!?…だ、誰だ「動くな」っひ!」

脇腹に衝撃を受け起きた兵士だが起きてすぐに額に銃口を向けられドスが効いた声を聴き硬直してしまった。

アーク「手を頭に回せ。……よし」

「お、お前は誰だ!」

アーク「誰だっいいいだろ? 俺は今忙しんだ。さて、お前、仲間  
は?」

「い、言うわけないだろ!!」

アーク「……本部の場所は?」

「し、知らんn「ほよ、言えや糞が」ひ、ひい!」

アーク「言わんかったら言うまで腕とか足に一発ずつ銃弾をぶち込む」

「ほ、本部の場所は前で言う王の部屋だ。この廊下を出たらいったん外に出て一番高い塔に向かえば行ける!!」

アーク「……嘘じゃないんだな?」

「ほ、本当だ!!」

アーク「……嘘ついてたらすぐここに戻って殺す」

「わ、わかった!! だ、だから命までは……」

アーク「わかったから少し寝てろ」

ツゴ!!

ようやく情報を手に入れたアークは用済みとなった兵士の顔面を踏みつけ気絶させた(顔面を踏みつぶしてはないよ)

そのあとは気絶させた二人の兵士をワイヤーでぐるぐる巻きにし猿ぐわをさせてその場から立ち去った。

アーク「……中央のつていったよな?」

適当に選んだ窓を開け言われた通りいったん外に出る。

夜風が少々寒いが我慢しつつ地面に降り立ち中央をめざす。

アーク「……ここか」

暗い闇の中どしんと不気味にそびえたちまるで魔王の城みたいな塔に到着した。

アーク「見張りは……三人か」

塔に入るには扉を入れて行かないといけないのだが門の前に見張りがランタンを持ち見張っていた。

しかも、距離も近いが連続CQCをするには少し遠い。

アークは門の近くまで接近し物陰から見つめる。

アーク「……分断するか」

すると、背負っていたP90のマガジンを取り外し自分の隠れている物陰で落とした。

カラン……

「何の音だ?」

「どうした?」

「いや、何か音が」

アーク「よし、食いついた」

真夜中に何かが落ち音が聞こえた兵士たちは不信に警戒する。

「すまん、少し見てくる」

「おい、一緒に行った方が……」

「大丈夫だろ、こんなに近いんだし」

音の正体を確認するため兵士一人が仲間に伝えXM8を構えながらこちらに迫って来た。

アーク（釣れたのは一人か）

物陰に屈んで隠れて来るのを待つ。

「……異常はないよな？」

アークの隠れている物陰に兵士が覗いてきた瞬間

アーク「つよ」

「し、死g」

アークは右手で兵士の軽く引つ張りすかさず脇を持ち左手を首にかけこちら側に引つ張りそのまま地面にキスさせる。

ズシャア!!

「な、何の音だ!?!」

謎の音を聞いた兵士二人は音の方に向かう。

向かうとそこには地面に倒れている仲間。

だが、ズズツツと物陰の中に引き込まれた。

「お、おい誰なんだ（パシユツ）」

物陰の裏に誰がいるのかを確認しようと顔を出し見えたのはこちらにMk. 22の銃口を向けているアークだった。

見事ヘッドショットをかまされた兵士は死ぬように眠っていき倒れた。

アーク「ツシ!!」

倒れたと同時に物陰から出てもう一人に向かって突撃する。

アーク（Mk. 22をコツキングし……いや、距離が近いな）

出たのはいいが思いのほかもう一人の兵士の距離が近かったため



Mk. 22で無力化するより自分でCCCして無力化することにした。

兵士は驚いた顔でこちらに銃口を向けるがこちらの方が早い。

ツス……

右手を順手、左手を逆手で銃の先端を掴む。

すると敵の手からXM8がきれいに抜けアークの手に中に納まった。

アーク「動くな」

そしてその走った勢いのまま敵に体当たりし壁に押し付けた後、奪ったXM8の銃口を向けた。

「ひ!? や、やめてくれ……」

アーク「地面に伏せて手を後ろにしろ」

一瞬で自分の武器を奪われ丸腰になってしまったので戦意を失ってしまいアークの命令に従い地面に伏せる。

アーク「……よし、塔の中には何がある？」

「いい、言うわけないだろ!!」

アーク「よし、なら自分で確認するか」

なんか一々尋問をするのも面倒なので自分で確認することにした。伏せた兵士にMk. 22を向け眠らせる。

アーク「さて、確認させてもらうよ」

人一人入れそうな扉を開け中に入る。

中は暗い。

アーク「……そして、血生臭い」

中から腐った肉の匂いがしてきた。

頬にハエが通りかかっっていく。

アーク「やな予感がするなあ」

とりあえず中に入り扉を閉める。

入ってすぐ気が付いたがすぐに階段があり上に行くか下に行くかで別れている。

アーク「匂いは下か……」

ナイトビジョンをつけ下に向かう。

アーク「……てか、この地下への道……変だなんて思ったら舗装も何もされてないな」

カツンカツンつと響いた音を鳴らしながら下へと向かう。

アーク「……う、段々濃ゆくなってくるな」

てか、なんか地下にしては深すぎじゃね？

アーク「しかも、だんだん階段じゃなくて洞窟になってきたな  
下っていくうちに徐々に自然に近い洞穴となってきた。

って言っても自然というより無理やり掘り下げた感じだな。

アーク「……ここまで深く掘る必要って……ん？」

大体、100mくらいだろうか？

それぐらい下がっていくうちに奥の方に光が見えてきた。

アーク「はあ……ようやく出口……は？」

ようやく出口でいったん休憩しようと思った瞬間、アークは呆けてしまった。

なぜなら今日の前に広がっている光景だ。

アーク「……どういこうこつちや」

そこには

謎の容器に入り謎の液体で浸されている勇者の大群であった。

それも100とかでは無い10000以上もいる

アーク「……おいおい、冗談じゃないぞ」

あんなアリスを狙う輩が数千もいるのかよ!?

……だが、これらも前に捕まえた捕虜が言っていた「倉庫」とやらから手に入れたんだろう

アーク「……第一、誰だよ倉庫にあんなもん置いておいた奴」

あんなものおいておいた奴に愚痴りながらもカメラを起動して写真を撮る。

カシヤ

アーク「よし、これで見せる分は手に入ったな」  
後はニゴウの捜索だが……ついでにあのよくわからん装置クローン生成機も破壊  
……はさすがに多すぎて無理だな。

だが、消えた国民とは関係ありそうだ。

アークはある程度写真を撮った後、その勇者製造工場から去った。  
因みに入り口にいた見張りは上の方の階に運ぶ。

アーク「ふう……こいつら重すぎだろ」

塔……多分、本来は展望テラス的な運用だったんだろう場所に兵士  
三人を担いで運んできた。

部屋に入ると中には見張りがガラス越しに二人外を見ていた。

アーク（外を見るのはいいが中もたまには見ないといけないぞ）

静かに兵士二人を下ろし一人を担いだまま中に音もなく入る。

そして、タイミングを見計らい見張り二人が別の方向で立つ位置が  
変わった瞬間

アーク「ふん!!」

担いだ兵士を思いつきり投げた

投げられた兵士（麻酔済み）は弧を描きながら飛んでいき……

ドガアアア!!

見張りの一人に見事命中し見張りは壁とデーパーキスして地面に  
倒れた。

音に気が付いたもう一人は振り向くが目の前にはすでにアークが  
迫ってきている。

「くそ!!」

この距離では銃では間に合わないと判断したのかストック部分で  
殴ろうとする。

アーク「が、それも予測済みだ」

アークは先に未来予知を発動しておりそうなるのを予測しており  
先に行動ができた。

右手で相手の顎を掴み力いっぱい壁に投げつけた。

壁に小さなクレーターができ相手は気絶した。

アーク「うし、ここに隠すか」

部屋の制圧に成功した後、アークは無力化させた兵士たちをここに運び込んだ。

アーク「よし、さてニゴウを捜しに行くか」

兵士も運び込めたしこれでしばらくは見つからんやろ。

アーク「えーっと、柵とかあればいいんだが……ないか……おや？」  
タンスや柵などを隠せそうなものは無いかと探していると窓にふとメカメカしい音と何かが見えた。

アーク「……うへ、マジかよ」

何なんだと思い覗いてみるとそこには1971年に開発され運用されたソビエト連邦の主力戦車「T-72」、それがおよそ10台編隊を組み移動していた。

アーク「おいおい、戦車いるとか聞いてないぞ……あの捕虜、これを言ってくれよ」

観察を続けるとT-72は来た時に見た馬舎が合った方に向かっていき消えていった。

アーク「これはこの世界の住民が相手するには少し厳しいかもな」  
観察をし終え塔を出た後、アークは再び他の建物の探索を再開した。

今度は最初より大きな建物内に侵入してみる。

アーク「当たり前だけど城を一人ですべて探索なんて骨が折れすぎる行為だな」

ああ、こういう時こそ仕事仲間が欲しい……

我儘言つていいならニゴウみたいなやつが仕事仲間に欲しい

だってさあ？ 銃も撃てるし潜入のいろは知ってそうだし？ (少し違うが) 命令も忠実だしな。

アーク「……あ、そういえばニゴウは首相に奴隷化されてんだっけ？  
だったら首相を殺す必要があるな」

ああ、もどかしいな

こういう時こそ俺が魔法使えたらな……

アーク「いや、てか、今はこの問題だ。死んでもなおアリスに求婚しようとしてくる奴の根源なんだ」

再度、段ボールをかぶり移動を開始する。

九十八発目 Who is her? (ニゴウって誰なんだ?)

アークが潜入したシュレイド城では嚴重に監視巡回が行われていた。

そんな中、アークは段ボールで移動したいく。

途中、巡回の兵士にあったがじっとしておけば「なんだ段ボールか」って言っただけでどこかに行ってしまう。

アーク(よしよし、ようやくメタルギアらしくなってきたな)

ここ最近、兵士虐殺したり勇者虐殺したり……あれ? なんか殺してばっかだな俺……

アーク「い、いや時と場合が悪いんだよ俺。うん」

自分に言い聞かせながら廊下を駆け、時には巡回の兵士に(物理的)眠りを授けたりと潜入ミッションみたいなことをしていた。

途中、愚痴を吐きながら移動していると

「貴様のせいだぞ!!」

アーク「……声!!」

本来の目的部屋の大体を調査し証拠になりそうなものを写真で納めてあとはついでに首相かニゴウを捜しつつ帰ろうかとした時だった。

尋問した時に聞いた王室に向かっていて途中で段ボールで移動していると王室があるであろう場所から何やら叫び声が聞こえてきた。

急いでその場で停止し待機していると

バンツ!!

「何が「皇帝一家の暗殺に失敗した」だ!! お前はそんなこともできないのか!!」

ニゴウ「……申し訳ございませんマスター」

王室に入る扉から出てきた……出てきたというより飛び出してきたのは正体がまだ謎のニゴウと首相だった。

だが、様子がおかしい。  
単なる上司と部下の戯れあいとかではなさそうだ。

「これほどの戦力を投入して、なぜ皇族の一匹も殺せないんだよ!!」  
アーク（うわ、ひでえ）

物陰から段ボールの穴から見ているが……ひどすぎるだろ。  
雪のような髪を強引に引っ張り掴み上げ引きずりまわし壁にたたきつける。

途中でニゴウの綺麗な髪が悲鳴をあげ千切れる音が聞こえる。

ニゴウ「で、でも捕虜を殺して口封じしました……」

「ああ!? そんなのお前の兵士への教鞭が下手なだけだろ!!」

アーク（んなわけあるか!?)

言っておくが敵の俺からしたらなかなかの熟練度（聞きかじりとはいえ）だったぞ。

お互いをカバーしあって連絡も適度に行う。

……あれ、すべてニゴウが教えたのなら素晴らしいことだ。

まあ、相手が悪かっただけだ。

「つたく、お前は道具なんだから命令だけに従えばいいんだよ!!」

ニゴウ「申し訳ございません申し訳ございません申し訳ございません」  
ん」

「もうその言葉も聞き飽きたんだよ!!」

ニゴウは誠意を見せようと頭を地面にこすりつけるが首相はニゴウの頭を何度も踏みつける。

アーク「つ!!」

アークは我慢ができずP90を取り出し出しようとするが寸の所で立ち止まった。

今ここを出たら仮にあの首相は殺せるかもしれないが今までの努力が水の泡になる。

アーク「つち……歯がゆい」

ニゴウ「もう二度と同じ過ちはしません」

「我々の考えた作戦に従えばいいものの……それを全部お前が無駄にしました!!」

いやいやいや……それ言う？

ま、まあ全体的に見れば異世界人にしてはいいと思うよ？

でも、それって全部ニゴウ任せじゃん

何とも理不尽。

ゴキツ

アーク（うわ……）

何度も踏みつけているうちにニゴウの反応がなくなったのを見てイラついたのか何なのはわからないがニゴウの顔面をサッカーボールのように蹴り付け起こさせた。

蹴られたニゴウはふらふらと置き上げる。

鼻から血がボロボロと流れ目は腫れ上がり……もとは華のように可憐な顔は台無しになっていた。

「次、失敗したらお前を捨てるからな」

ニゴウ「ツ!?! やめて!! 捨てないで!!」

「……はあ、お前には次の命令がある。それまで待機しろ」

ニゴウ「了解……しました」

首相は最後にニゴウに唾を吐きゴミのような目でその場を去った。

それはまるで親から暴力を受ける子供のようだった。

アーク「嫌なもの見てしまったな」

……目の前で暴力を受けている子がいるのに何もできない人の気持ちってこうなんだな

だが、彼女は敵だ。

アリスを殺そうとした敵だ。

敵に同情する気はない。

本来は中に入って今後の計画を知ろうとしたがアークは気づかれないようその場から立ち去った。

アーク「……はあ」

あの場所から離れたのはいいが気持ちが浮かない。  
てか、今すぐに帰りたい。



アーク「……あいつも苦労してるな」

苦労っていうレベルではないが嫌な思いはしているんだな。

アーク「さて、どこから出るか」

あらかた調べ終わったのであとは帰るだけだ。

帰るまでが侵入だからな。

できればどこか屋外に出てスライダーに変身して逃げたいんだが

まあ、上を目指せばいいか。

アーク「……どうすればな……あ？」

時刻的にはもう間もなく日の出の時間だ。

急いで出ないといけないのだが……ふと、とある部屋の前でアーク

が立ち止まった。

別に何かがあったとかではなく無意識に止まっただけだ。

アーク「……」

部屋の中を見ると冷たい風が頬を撫でた。

どうやら屋外に出たらしい。

アーク「外か……ここから出ればいいな」

はあ、ようやく帰れる。

首相の殺害ができなかったのは残念だが……今度にしよう。

入った部屋は本当に何もなくて部屋の中央に汚れて薄い麻布一枚と

部屋の隅に使う古した包帯の山があった。

アーク「いや、汚え」

部屋の中はそれ以外にも汚れた服や血まみれの何かが転がって

た。

さて、とiDROIDOを取り出してスライダーになろうとした瞬間

間

カツカツカツカ

アーク「っち」

足音が聞こえ来た時みたいに慌てることなく落ち着いて段ボールに入り部屋の隅に隠れた。

しばらくすると

ニゴウ「……」

アーク（……なんであいつがここに来るんだよ）  
入ってきたのはまさかのニゴウだった。

この部屋の主はこいつかよ。

アーク（さて、どう部屋から出るか）

ニゴウ「……またマスターに怒られたのです」

するとニゴウは部屋の中央に敷かれた麻布の上にちよこんと座った。

ニゴウ「……どうすればマスターに褒められるんでしょうか」

アーク（いや、褒められるも何もあいつが褒めるわけないだろ）

ニゴウ「褒められることをしていないって言われましたが……私がもつと頑張ればいいのでしょうか」

アーク（お前は十分頑張っているんだがな……）

体中のあちらこちらから血が流れ痛々しさを物語っているニゴウの華奢な体。

あんな華奢な体なのに俺と同等なのか。

ぐううう……

ニゴウ「おなかすきました」

部屋中におなかの虫が鳴り響いた。

どうやらニゴウらしい。

ニゴウ「……今日は少なめですね」

アーク（いや、なんそれ!?)

入ってきたとき何かを抱えていたがニゴウはそれを取り出すとそれを食べ始めた。

よく見るとパンのようだが……カビが生えていて誰かの歯跡があった。

アーク（おいおい、ここの兵士は馬鹿か？ 「腹が減っては戦はできぬ」っていうほど食料って士気にかかわるほど大切なのに……）

もさもさと黙喰で食べ終えたニゴウは床にひいていた麻布を取ってくるまった。

アーク（いや、それ寝具だったんかい!?)

ニゴウ「……今日は自分が失敗したせいでマスターの機嫌をそこなつてしまいました。明日こそきつといい日になります……さあ、もう寝ますか」

アーク（いや、ここで寝るの!? 屋外だよここ!?)

ニゴウ「……ところで」

床に横になって寝るかと思いきや

ニゴウ「何でしょう? この段ボール?」

アーク（やば!?)

こちらに近寄ってきた。

額から滝のように汗が出る。

流石にこんな距離で戦闘開始したら帰還が難しくなる!!

ニゴウ「兵士の皆さんがいらぬものをよくこの部屋に置いていく行きますが……こんな真新しい段ボールを捨てるはずがありません」

アーク（……戦闘準備するか）

アークが隠れている段ボールの目の前まで来たニゴウと段ボールの中でP90を構えるアーク。

そしてニゴウの手がアークの段ボールを掴み

ニゴウ「いえ、やめておきましょう。マスターからそんな命令は来ていません」

アーク（あ、よかったあ）

ニゴウ「……それにしても何でしょう」

サワサワ

アーク（あれ? もしかして今、ニゴウ……段ボールを触ってるのか?）

段ボールを見つけ異常はないと判断したニゴウは元の場所に戻ろうとせずにアークが隠れている段ボールを触る。

ニゴウ（なぜか……なんでしょう……）

ずつとここにいたいです）

段ボールを触っているうちに初めてニゴウに欲望が出た。

今まで首相に「道具として従え」「何も考えるな」と言われ欲望も何もなかったのだがこの時初めて生まれた。

そして、段ボールの前で座り込みもたれかかる。

すると、なぜかはわからないが春のような温かさを感じる。

ニゴウ「試作型式号機としてあるまじき行為ですね……マスターの道具なのに」

アーク「……試作型式号機？」

……はて、どこかで聞いたことが？

ん？ なんか聞いたことが……

どこかで聞いたことがあるような気がしたアークは思い出そうとするが

ズキツ!!

アーク「う、あ、あああああ!?!」

その瞬間、アークの頭の中で痛みが走った。

だが、痛いという言葉では足りないほど頭の中で何かは暴れた。

アーク「う、あ、あがああああアア!?!」

段ボールの中でアークは頭を押さえて暴れる。

吐き気がする。

サイボーグのはずなのに肉体的に障害が開始する。

そして、謎のフラッシュバックが始まる

殺せ!!

やめて!!

助けてください……■様

そんな!! ●様が!!

燃える街並み、逃げる人と異形の生き物、そして罵声を挙げあいながら殺しあう人間と異形生き物。

そして、

??「ごめんね……」

自分を大切にそうに抱える眼鏡をかけた女性が涙を流しながら抱えていた。

アーク「く、はあはあはあ……」

な、なんだ今の……

見たことがないぞあんな光景……

てか誰だよあの女性……

アーク「ツ!! しまった!!」

呼吸を荒げながら落ち着くが段ボールの中で暴れたせいで完全に不審に思ったはずだ。

急いでP90を構えるが

ニゴウ「すう……すう……」

アーク「……寝てるのか?」

音を立てないよう段ボールの足の方から穴をあけて出る。

外に出てみるとそこには殺しには似合わないほど可愛らしく寝ているニゴウがいた。

ちなみに空の段ボールだったら普通は壊れるかもしれないがメタ

ルギア世界の段ボールは違うらしくとても頑丈だ（MGSPWで空の段ボールの上にスネークが立てるので）

アーク「はあ……よかったあ」

潜入任務なのに敵の目の前で安堵の声が出る。

アーク「てか、よく起きなかつたな……」

まあ、それほど疲れているんだろう

あんな奴の下で働いているんだ。

アーク「……だがどうということだ？」

先ほどの頭痛……まるでスレッズハンマーが暴れているような感じだった。

今は収まっているがまた思い出そうとすると痛み出す。

アーク「これ以上思い出そうとするのはやめよう。だが、一つ分かった」

試作型式号機……何か引つかかるなと思ったならこれか。

素晴らしい自分の首をさすった。

そこに書かれていたのは

旧式壺号

アーク「さっきのニゴウの言葉通りなら」

アークはニゴウが起きないよう静かに雪のような髪を分け彼女の首を見てみると

アーク「……やっぱり」

奴隷化魔法と使い魔法の呪いの印のせいで見えにくいがあるそこには「試作型式号機」と書かれていた。

アーク「俺と……こいつは何の関係が？」

くうくう……と寝ているニゴウとそれを見つめるアーク。

アーク「……憶測は今はいい。とにかく今は脱出だ」

ここで脱出しようかと思つたがニゴウがいるなら別だ。

起きて逃げている途中で撃たれたらひとたまりもない。

アークはおとなしく部屋から出ることにしたが……

アーク「……」

出ようとしたところである考えが浮かび立ち止まった。  
右手を見るとそこには9m弾が装填されたP90

アーク（今ここでニゴウを殺せば後々が楽になるんじゃない？）

そう、気づいてしまったのだ

目の前には暴れても起きなかった少女。

だが、この少女には自分と対抗ができ最悪主人のアリスに危害を及ぼす可能性がある獣だ。

なら、今ここで殺せばいいのでは？

ここにいる奴らは彼女に戦力を依存している。

ここで殺せば戦力と士気が下がり被害が少なめで制圧ができるだろう。

それに、寝ているので反撃される可能性もゼロだ。

カシャ

寝ているニゴウの額にP90を突き付けるアーク。

アーク（そう、引き金を引けばいいんだ俺）

たった目の前にいる少女を殺せばアリスが心配なく過ごしやすいくなる。

殺せば他に殺される日値も減る。

殺せば……殺せばいいのだ……

アーク「せめて……来世では幸せに過ごしてくれ」

そしてアークはP90のトリガーを引こうとした瞬間

ニゴウ「待って……おいていかないで……  
お兄様  
番号」

アーク「ツ!!」

……なぜか手が動かなくなった。

最初は魔法かと警戒したがそうではなかった  
まるで体が訴えているかのように止めに来るのだ。

アーク「……しらけたわ」

なぜか殺す気がなくなりつつと帰ることにした。

アーク「……はあ」

だがその前にとアークはiDORIDOを取り出しいろいろと召喚した。

以前のポイント 15780

生産

医療キット一式 1

カロリーメイト×100 100

防寒具（布団系） 1

合計ポイント 15578

召喚したものをニゴウに気づかれぬように彼女の隣に置いておく。

そして、最後に彼女を包み込むように布団をかける。

アーク「……勘違いするなよニゴウ……これは俺がお前の事情を見てしまった件のお詫びだ。殺すときは戦場で殺して地獄に送ってやるよ」

……だけど

アーク「……今は殺させないでくれ」

そういうとアークは変身を解除し敵地のど真ん中にも関わらず人間体の状態で彼女の美しい髪を撫で始めた。

サラサラと指から抜けていく感じは俺となぜか似ている。

撫でていくとニゴウの顔は能面のような顔から徐々に口角が挙がった顔になって行った。

アーク「何だよ……結構可愛いじゃん」

そして、時間はあつという間だ



流石に脱出しないと見つかってしまう。  
アーク「はあ……じゃあな。せめて今だけでも幸せにいてくれ」

## 九十九発目 脱走者

ニゴウの部屋から出たアークはこの敵地帯からの撤退のため走り回っていた。

キュツ♪

アーク「少しニゴウの部屋で時間かけすぎたな……」

先ほどまで暗かった廊下が少しずつ明るくなっていく。

そんな廊下の目の前でアークは

「く、苦し……」

兵士の首を絞めていた。

先ほど外に出るため走り回っていると曲がり角で運悪く出くわし見つかってしまったが敵が一人だったので逆に捕まえて首を絞めている。

アーク「あ、そうだ……なあなあ？ この国の国民ってどこに行っただんだ？」

「し、知るか」

アーク「そ、んじやな」

グキツ

欲しかった情報を手に入らなかったので口を手で押さえ首の骨を折った。

アーク「んく……いつそ、壁に穴開けて逃げようかな」

さつきからあちらこちら走り回っているんだが……うん、やっぱこの建物の地図を手に入れとけばよかったわ。

今更、後悔しつつどうするかを考えていると

ビイイイイ!! ビイイイイ!!

アーク「ッ!？」

突如、城全体に耳をつんぎくような五月蠅い警報が鳴り響いた。

アーク「何かミスを……いや、俺に心当たりがありすぎるな」

流石に巡回の兵士が帰ってこないってなったら不信に思うか。

多分、どこかに隠しておいた兵士の縛られている姿を発見して鳴らしたんだろうな。

アーク「なら、遠慮なく出ていいよな!!」

もはや潜入のことは完全に忘れ屋外から出るのを諦め壁を壊してド派手に出ることにした。

え？ ニゴウが起きて追ってきたらどうするんだって？

起きるわけないだろ！ だってきつき段ボールで暴れても起きなかつたから大丈夫!! (フラグ)

アーク「んじゃ、遠慮なく!!」

サイボーグの右足に力と恨みをこめ壁を蹴りつけた。

ズドオオオオオオン!!

蹴りつけた壁は丁度人一人出れそうな穴が出来上がった。

そして、開けたと同時に

ガチャガチャ

アーク「……来たか」

遠くの廊下から複数の足音が聞こえてきた。

十中八九、敵だな。

アーク「変身する前に会敵するな」

少々、面倒だが少しだけでもいざれ戦うであろう敵の数を減らしておくか。

腰からサプレッサー付きのP90を取り出し足音が聞こえてくる方向に銃口を向ける……が

「急げ!! 脱走者が出たぞ!!」

「追跡隊はBTR―60で捜索!! 一応BTR―152も出る!!」  
「首相に急いで報告しろ!!」

ガチャガチャガチャガチャガチャガチャ

アーク「……あり?」

音は近づいてきたが何かの報告と共に多数の足音は遠くなり聞こえなくなった。

アーク「来ないんかい……てか、脱走者って?」  
腰にP90をなおす。

てつきり自分の存在に気が付いてこちらに来ると思ったが……なんか、脱走者が出たらしくここの兵士は全員そちらに意識を持っているらしい。

てか、BTR―60と152あるんかい(ちなみに152も60も装甲兵員輸送車で60はウォータージェット搭載型である)

アーク「まあ、いいか。その脱走者さんのおかげで俺は安全に出れる」

穴に体を向けスライダーに変身し空に向かって飛ぶ。

以前のポイント 15578

変身

スライダー 250

合計ポイント 15328

バサッ

アーク「あーらよっと」

ジェットエンジンを吹かし空へ羽ばたく。

空のかなたに目をやるとそこには綺麗な朝日が顔を出していた。

アーク「ふう……ギリギリだったな」

このままアーハム帝国まで戻れば任務完了だ。

あとは皇帝たちに今回のことを報告するだけだな。

アーク「それにしても……ニゴウがなあ」

少々心残りなのがニゴウだ

……なんで殺す気が失せたんだろうか？

アーク「……てか、なんで俺はこんなに彼女のことを気にするだろうか？ 別に敵なのに……」

空を飛びながら悩む。

アーク「まあ、今は検索はいいか。とにかくだ、速く戻らないとアリスがご機嫌斜めになって面倒なことになる」

帰ったらどうせアリスは喚くんだろうなあ

嫌だつてわかるもん、絶対「遅い!!」とか「怪我はない!?!」とか言ってくるもん

別に怪我してもサイボーグだから大丈夫なんだがなあ……あいつ、少しの怪我でも騒ぎ出すもん。

アーク「……なんか、お母さん臭いなあアリスは……はあ、家族が欲しい」

前世では一人っ子だったので兄弟がいなかったのでアリスたち三姉妹が少しうらやましい

はあ……俺も妹が欲しいな。

アーク「つて言っても、もう遅いんだがな」

そういえば、この体……人間状態の俺の体の本来の持ち主はどんな人だったんだろうな？

まあ、なんかドス黒い魔力がある時点でやばい気がするが

アーク「……この体を生んだ母親と父親はどんな人種だよ」

なんなん……本当

魔王かなにかかよ……

アーク「まあ、マジでこの体の主の親が魔王だったら笑えんがな」  
上空で一人笑う死神

すると

ズドオオオオオ

アーク「おや？」

現在、アーハム帝国の方角に飛んでいるが方角から少し離れたところの森の中に一つの煙が上がりだした。

付近に村もなければ人工物もない。

……ようは、あそこに脱走者とやらがいるようだな。

アーク「行ってみるか」

機首を煙が上がっている方向に向け飛行する。

?? 「はあはあはあ……つく、は、速く!!」

朝日が木々から入り込む森の中に一人の少女が走っていた。

白色の実験体用の服に裸足という場違いな格好で森の中を駆けていく。

シエラ（申し訳ございません……父上、母上）

彼女はシエラ・フォン・ギャレット

元シュレイド王国の王女様だ。

まあ、その祖国も今はないが

シエラ（本当に何ですかあいつ等!!）

その日はいつも通りに自分の父親の執務を手伝っていたが突然、謎の轟音と共に城全体が揺れだした。

何事かと窓から外を見るとそこには城に向かって鉄の鼻から何かを打ち出す化け物<sup>T17.2</sup>。

その光景を見た瞬間、襲撃を受けていると判断し部下や騎士に指示を出そうとした瞬間に部屋に変な装備をした兵士が突入してきてそのまま捕まってしまった。

そのあとは地獄だった。

シエラ「この植え付けられた物も……（ズキツ）っう!？」  
シエラは右目を抑えながらもその場に座り込む。

随分、走ったがそれでも早く遠くへ逃げないといけない。

「おい、本当にこっちだったのか？」

シエラ「ツ!？」

普段走り慣れて無く過呼吸になって休憩しようとするが追いかけてきた奴なの声が聞こえた瞬間、急いで立ち上がり木の陰に隠れる。

ズキツ

シエラ「痛ツ!!」

だが、隠れるが右目が痛む。

シエラ「あいつら……何を打ち込んだのですか……」

捕まった後にいろんなことをされた。

別に女として恥ずかしいことはされてはないんだが今着ている服を着せられ全員牢屋に入れられた。

最初は小さな牢屋にぎゅうぎゅうと入れられ居心地が悪かったが自分は王女なのでそこらへんは我慢した。

襲撃されてから一週間くらい入れられ食料も少ししか与えられなかったが我慢し他国が救助に来るのを待ち続けた。

だが、三日後に変なことが起きた。

いつもどおり狭い牢獄で過ごしていたのですが襲撃してきた敵が牢屋にやってきて中にいた人間を数人出してそのままどこかに連行していった。

最初は別に牢獄に移動させられたのかなと思ったが次の日も数名連れていかれた。

数人抜いたら終わると思っていたその連行だがどういうわけか数日間続き、とうとう牢屋の中は自分一人となった。

流星に不審に思い牢屋の外の兵士に詰め寄ったが返ってきた答えは

「ああ、丁度次は思えの番だから見せてやるよ」

そういわれると兵士は自分を連れ出し城の中央にある塔の地下へと連れていかれた。

確か、ここは地下などなかったはずなのだが……最下層に到着するとそこには無数の水槽？と液体に浸されている死んだはずの勇者。

この光景を見た瞬間、すぐに質問攻めをした。

だが、いくら聞いてもつれてきた兵士は無視し自分をどこかに連行していく。

しばらく連れていかれると白い部屋に到着し中央にある椅子に座らせられ拘束された。

そうしたら黄色い変な服対化学用防護服を来た人間が先ほど死んだはずの勇者が使っていた液体と同じ色の液体の入った針のついた筒を持ってきて自分の腕に差し込み何かを流し込み始めた。

謎の液体を流し込まれると強烈な痛みを感じた。

筒の中をよく見ると小さな肉片が入っておりこれは何なのかと聞いてみると

「ん？ ああ、さっきの勇者の体の一部だ」

それを来た瞬間、自分でもわかるほど血の気が引いていった。

先ほどの勇者は生前はとんでもないほど悪評が出るほど勇者ではなく愚者であった。

そんな奴の体の一部を自分の中に入れると分かった瞬間、体を暴れさせ抵抗した。

途中、兵士数名に取り押さえられ結局すべての液体が中に入ってしまった。

数分後、先ほどの牢獄より数十倍大きな部屋に移されそこで自由の身とされた。

中は自分が牢獄にいた時にいた仲間や自分の父親や母親がいたが……恐ろしいことになっていた。



どうやらここにいる仲間は自分と同じようにさっきの液体を入れられたらしい。

最初は魔法を使って逃げようとしたがなぜか使えなかった。

シエラ（まさか……あいつらはバサビイ共和国の残党であんな物まで作ってたなんて）

父から聞いた情報によると敵は「対魔法使い兵器：夢殺し」なるものを開発したらしく、それは周囲の魔力を完全に消す道具らしくあれがあるせいで魔法が使えなくなるそうだ（本来はアーハム帝国に使う予定だったらしい）

部屋に入れられてしばらくすると少しずつ異変がでし始めた。

「う、腕がああああ!!」

冷たい床で寝ていると仲間の一人が急に叫びだしなんだと思い近寄ると、なんと腕が肥大化し勇者の顔が無数に浮いて出ていたのだ。

肥大化した仲間はよほど痛いらしく大きくなった腕を掻きむしるが皮は剥がれ血が流れるだけだった。

「あ、あ、あああああつあああああ!?!」

そして、最終的に肥大化した腕は仲間ごと膨れ上がり爆発した。

子供にはあまりにも刺激的過ぎたのか泣いている。

数分後、部屋の中に液体を入れた時にいた変な服を着た兵士が入ってきた。

急いで自分は「私たちに何をしたのだ」と問いたただすが

「1098番、失敗。次の実験体は肉片を2g増やすか」

つと、わけのわからないことを言った後、自分の抗議を無視し部屋を出ていった。

それから数日後、異変は広がっていった。

子供から老人まで体のどこかに勇者の顔が出てきたのち、爆発し肉片となった。

どうにか解決しようとするが兵士は話も聞いてくれないので手段がなく、とうとう父親も出てきてしまった。

そのうち自分もこうなるのであろうと悟り脱出することになった。自分もどうせこうなるのならせめてこうなった原因を排除しなければ。

そして、早朝に寝起きの兵士の間をついて脱走した。

シエラ（一番あいつらに対抗できる存在……死神にあうしか!!）だが、逃げたのはいいのだがすぐにあいつらの追手がきた。

馬より速いスピードで追ってきて、「ジユウ」なるものを撃ってきこちらを殺しに来た。

あちらは悪路でも走破する乗り物に対してこちらは裸足だ。足の裏は長時間走ったせいで血まみれだ。

シエラ（はあはあ……お願い……どこか行つて……）

口に手を当て気配を消すが

「サーモグラフィに反応は？」

「この辺りは……ッ!! いたぞ!! 木の後ろだ!!」

ズドドドドドドドドドドド!!

シエラ「つう!!」

見つかつてしまい急いで逃げようとするが敵のXM8の銃弾が足に当たってしまった顔面から地面に転倒した。

泥だらけでも急いで立ち上がろうとするが  
「動くな」

カチャ

シエラ「……」

倒れた体の上にXM8の銃口を突き付けられた。

「全く……監視は何やってんだよ」

「てか、こいつもよくここまで来れたな。周囲に一応で地雷を設置していたんだが走って突破したし」

「いや、それは起爆までの時間が長いからだと思うんだが」

シエラ「放しなさい!! 一国の王女に礼儀はないんですか!!」

「それよりこいつはどうする?」

「実験体だが……まあ、一人ぐらい減っても構わないだろう」

「でも、一応本部に連絡するか」

シエラの抗議もむなしく、この女の処遇をどうするかにしか兵士は興味を示していない。

そして、会議の結果……

「……了解、殺処分しておきます」

シエラ「っ!?!」

「出なかつたらよかつたのに……」

カシャッと心臓に銃口を当てられた。

コツキングしトリガーに指をかける。

シエラ（ここまでのようですね……）

心の中で命を懸けて逃がしてくれた両親に謝罪しつつ目を閉じようとした瞬間

キイイイイ

シエラ（……あれは?）

空に一筋の雲が伸びていた。

変な音を立てながらソレは雲を一筋作りながら……こちらに向かってくる。

シエラ（あれ? なんか……近づいて……）

「おい、なんだあれ?」

「ほんとだ……流れ星か?」

「あれ? なんか近づいて来てn（ツバ）んあ!?!」

何か来ているので目を細めて確認していると仲間の一人がその流れ星に連れていかれた。

気が付いた時には仲間は流れ星に引っ張られ大木に突き刺さっていた。

「くそ、敵だ!!」

撃ち落とそうとXM8のマガジンが空になるまで撃ち続けるが高速で変則的に動く敵に当たらない。

カチツ

「リロード!!」

弾切れとなり急いでマガジンを交換しようとするが

パシユツ

飛んでいた物体は減速した。

正体は鳥だった。

だが、あんなに速く飛べる鳥なんて見たことがない。

鳥は翼から何かを撃ちだした。

「…………え」

撃ちだしたものは目の前に来て正体がわかった。

それは最近ニゴウから撃ち方を教えてくれた「ミサイル」に似ていたのだ。

ズドオオオオオン!!

地面に当たった瞬間、視界は白に塗りつぶされた。

視界が晴れているころには仲間が地面に倒れていてピクリとも動いてなかった。

自分も倒れていたらしく起き上がって急いで本部に連絡しようとした瞬間

アーク「とおおお…………」

「な、何の声だ」「コンニチハニンジャデス!!」ぬはあ!」

シエラ「…………え?」

こちらに向かってきた鳥は何かに変化したと思った瞬間、兵士の顔を拳がぶち抜いた。

アーク「てか、銃弾怖かったわあ……気分エースコンバットだよ畜生」  
シエラ「え、えつと……どちら様でしょうか？」  
アーク「んえ？ ああ、俺はアーク。ただの通りすがりの侵入した  
潜入員だよ」

ああー、怖かった……

飛び交う銃弾を縫って飛んだもん……

シエラ「アーク……もしかして、歌う!？」

アーク「あ、それ」

シエラ「あのハゲで仮面をつけていて実は女たらしの!？」

アーク「おいてめえ、喧嘩売ってんのか」

会って早々喧嘩を売られる死神

なんだ？ お前もハゲにすんぞ。

アーク「てか、お前も誰だよ。あいつら脱走者とか言っていたが？」

シエラ「あ、失礼、私はシエラ・フォン・ギャレット。この国……

今はもうないですが元王女です」

アーク「……これは失礼しました。無礼でしたね」

シエラ「いえ、いいことです。危ないところを助けてもらいありが

とうございます」

アーク「他の人間は？」

シエラ「……」

あく……この反応から見ていないっぽいな

アーク「ま、それよりシエラ様はあの場所……シユレイド王国から  
ですか？」

シエラ「……はい」

よし、なら彼女もついでだが助け出すか。

潜入した時にいろいろと書類を手に入れて証拠はあるが証言も  
あつた方が会議にいる奴らも信じるだろう。

アーク「なら、一緒に来い。君をアーラム帝国か近くにある国まで  
護衛する」

シエラ「で、でもあなたぐらいの実力なら今すぐにでも助けに……」

アーク「馬鹿言え。今、あっちでは警戒状態になってんだぞ？」  
シエラ「……そうですか」

さて、だったら早く移動しないと。追跡部隊をやったとはいえ、ゆっくりとはできないしな。

アーク「自分で動けるか？」

シエラ「はい、何とk（ズキツ）っう!？」

アーク「ツ!?! おい、大丈夫か!？」

移動を開始しようとしたがシエラは右目を抑えて膝をついてしまった。

シエラ「い、いえ大丈夫です。ちよつと足が……」

アーク「ンなわけないだろ。足が痛いなら目を抑える意味なんてないだろ」

シエラ「……私を見捨てないなら」

アーク「いいぞ」

少女、説明……

アーク「うわ、糞やん」

シエラという元王女様を背中に担ぎながら移動している中に何があつたのか説明を受けた。

勇者の一部を体の中に入れるって……殺した俺でもいやだわ。

この王女さんの右目には痛々しく、そして見て吐き気を催す邪悪な勇者に似た腫瘍ができていた。

シエラ「私の命はそう長くはないでしょう……だけどせめて仇でも!!」

アーク「あいつら……本当に何がしたいんだ?」

シエラ「それだけは私もわかりません……」

まあ、今は彼女の護送が先だな。

ここはまだ敵の基地から近いからな。

アーク「まあ、なんだ……災難だったな」

シエラ「いいえ、慰めの言葉をおかけいただきありがとうございます」

ます」

アーク「とにかく今は安全なところに行くぞ」

シエラ「はい、ありがとうございます」

さてと全速力で離脱しますか。

あ、こういう時こそMGS：TPPのピークウオドみたいな回収へりを開発しとけばよかったな。

またもや後悔しつつ全速力で走ろうとした時だった。

ゾワアアアア!!

シエラ「ツヒ!?!」

アーク「どうした?」

シエラ「な、なんですか……今の魔力は……」

背中に抱えていたシエラが急に震えだし怯えた。

顔は青くなり冷汗が噴水のように出て……まるで鷹に狙われているウサギのようだった。

シエラ「あ、アーク……さんでいいですか?」

アーク「おう、いいぞ」

シエラ「あ、アークさんは感じないのですか?」

アーク「……何にも?」

シエラ「……後方からものすごい勢いでドス黒い魔力の何かが来るんですが……」

アーク「……まさか!?!」

シエラ「ど、どうしたんできやあ!?!」

何なのか察したアークは少々手荒だがシエラを木陰に隠し後方に振り向いたと同時に腰からマチエーテを引き抜いた。

ガキイイイイイイン!!

??「ふむ、これを防ぎますか」

アーク「よう……ぶつちやけ一番会いたくなかったぜ……ニゴウ

？」

ニゴウ「ごきげんよう、アーク。死んでください」

アーク「やなことだ!!」

アークのマチェエーテとニゴウのM4が衝突し火花が散る。

ニゴウ「マスターから緊急通信で来ましたが……まさか、いたとは」

アーク「できればこのまま逃がしてほしいんですが……ね!!」

鏢釣り合い状態から離れるため力押しし距離を取る。

距離を取った瞬間、FN SCAR-H Mk. 17を召喚しトリ

ガーを引く。

が、寸の所でニゴウは地面に転がり物陰に隠れた。

そして、答えるかのように召喚したFA-MASを撃ってくる。

アーク（くそ、ここでニゴウが来るとは予測はしていたが来るの速すぎだろ。ヘリでも乗ってきたのかよ？）

マガジンを交換しながら考える。

それにこの拮抗状態が長引けば増援が来てこちらが不利になる。

……が、どうやらニゴウも急いでアークを倒さないといけないわけがあるようだ。

ザザッ

『おい、ニゴウなにをぐだぐだしている?』

ニゴウ「……マスター」

ニゴウが持っている通信機から主人である首相の声が聞こえてくる。

『我々の主戦力であるお前が何、一人の人間と死神に手間取っている?』

ニゴウ「……申し訳ございません」

時間かかりすぎだとクレームが入るがさつきアークと会敵したばかりなので理不尽である。

『あと10分以内に奴を殺さなかったらお仕置きを前よりひどくするぞ』



ニゴウ「ツ!? 了解しました……」

ニゴウは震える手で通信機を切るニゴウ。

もう二度とあんなお仕置きを受けたくないと思いながら物陰から出る。

アーク「……ん?」

何だアイツ?

急に物陰から出てきたんだが?

ニゴウ「……」

アーク「おい、何の真似だ? 降伏だったらありがたいんだが」

ニゴウ「いいえ」

今、いつでもFN SCAR—H Mk. 17のトリガーを引ける用意はできてはいる。

ニゴウ「アーク……これは私からの提案ですが……私たちの仲間になりませんか?」

アーク「は?」

ニゴウ「あなたの射撃スキルに潜入スキル……あなたが仲間になれば兵士の練度も上がり戦力上昇にもなると判断したので」

アーク「……はい?」

ニゴウ「あなたの主人ごとこちら側に入れば戦う必要性もありませんですし……それに……家族」

アーク「……家族?」

ニゴウ「いえ、何でもありません。それで返答は?」

アーク「嫌に決まってんだろ。てか、そっち行くなら戦う方を選ぶわ」

ニゴウ「そうですか……一応で聞いただけです。なら、

これで思う存分に戦えますね」

アーク（ツ!? なんだ!?)

ニゴウ「つはあ……」

魔法が使えないアークでさえ何かヤバい気配を感じた。

そして、深呼吸したニゴウはそっとつぶやいた。

ニゴウ『B<sup>弾</sup>u<sup>丸</sup>l<sup>の</sup>l<sup>の</sup>e<sup>t</sup> Q<sup>女</sup>u<sup>王</sup>e<sup>n</sup>』第一艦装限定解放、消去開始』

## 第四章 Bullet Queen編

祝☆百発目 Bullet Queen (弾丸の女王) VS 歌う死神 (アーク)

BGM: Sudden Changes Sans Song

「OverSave Tale」 phase1

or

Archangel Ace comb

at7より」

以前のポイント 15578  
変身

サイボーグ 150

合計ポイント 15428

アーク「……ようやく出したか」  
朝日が森に差し込み何とも幻想的な世界にニゴウの能力が発動する。

前にスキャンした時に判明したんだが見るのは初めてだな……

アーク「さあ……どうくる」

FN SCAR-H Mk. 17を構えながら警戒する。

何かをつぶやいたニゴウからすごい殺気を感じる。

シエラ(な、なんですかあの女は……な、なんていう魔力なんですか……)

ニゴウ「すう……」

アーク(くる!!)

さあ、鬼が出るか蛇が出るか!!

ニゴウ「Gun, follow me」

### 《蜜蜂、顕現》

アーク「……あ？」

突然だが読者諸君はMGS:TPPの「キラービー地対空ミサイル」を知ってるだろうか？

「蜜蜂はどこに」で出たソ連のアフガニスタン侵攻に対抗してアメリカがムジャヒディンに提供したミサイルだ。

ロックオンすれば高い命中率のミサイル群が飛んでいく対空ミサイル……なぜか人間もロックオンするミサイルだ。

FOBでは作者が重宝した。

まあ、そんな生身の人間だったら確殺な武器なんだが……

それが空一面中に召喚されて全部こちらを見てたらどう思う？

アーク「すうー (深呼吸) ……」

I have predicted the conclusion  
アークの能力で弾道を予測するが……あ、ダメだわこれ  
全部こっちみてらあ!!

アーク「ははは………ツ!!」

自然と引きつった笑みが出るが息を吸い足に力を入れる。

ニゴウ「穿て」

バシユウウウウウウ

!!

空から降り注ぐ流星群がアークに向かっていく。

アーク（多いな……回避するか）

流星に腰のマチエーテでさばきれる数ではないので

アーク「おい!!」

シエラ「は、はい何ですか!？」

アーク「舌嚙むなよ!!」

シエラ「へ!？」

先ほど隠れたばかりの王女を掴みだし肩にからい、全速力で逃げ始めた。

シエラ「えちよつと!?　なんで逃げるんですか!?　歌う死神なら負けないのでは!？」

アーク「おま!?　俺を何だ思っているんだよ!？」

シエラ「死という概念がない殺人鬼!!」

アーク「んなわけあるk……あぶな!？」

二人して冗談を言い合っているように見えるがすぐ真横をミスイルが着弾する。

一歩横に飛び回避するが次々とミスイルのおかわりがくる。

アーク「おい、王女!!　魔法でどうにかできないのか!？」

シエラ「いやいやいや!?!　無理がありますよ!?!」

一応で聞いたがやつぱりダメか

アーク「んじゃ、デカイ岩の柱を作れるか!？」

シエラ「そんなのエルフじゃないと無理よ!?!」

あ、そうか

エルフって魔法が得意な種族で人間基準が感覚麻痺してたわ。

シエラ「そ、それよりどうにかしてくださいよ!?!　さっきの槍が目の前まで来てますよ!?!」

アーク「だあ!?!　うるさい!!」

担がれながら文句を言ってくるがこっちだって忙しんだよ!!

山道で足が取られるんだよ!!

てかハニービーって対空ミサイルなのに人間にもロックオンできるんだよ（怒）

ヒユウウウウウ

アーク「つく!!」

後方から次々迫ってくるミサイル群を寸の所で避けていく。  
流星に担ぎながら避けるのは骨が折れる。

アーク「ツ!!」

シエラ「うそでしょ!?!」

後方から迫ってくるミサイルから逃げるために走っていたが……  
遠くに移動しすぎたせいか目の前には崖になって下には

ドドドドドド!!

激流になっていた。

落ちてしまえばひとたまりもないだろう。

後ろにも行けない……なら!!

アーク「舌噛むなよ!!」

シエラ「え、ちよちよ嘘で……」

もう目の前まで広がっている断崖絶壁にアークはスピードを緩め  
ずに

ピョン

飛び降りた。

だが、後方から迫ってきたミサイルは目標を追いかけようと機首を  
下に向けた。

しかし、下に向けたせいでミサイル群は地面に衝突し

ドオオオオオン!!

無数のクレーターが生成された。

土煙があたりに舞い上がり立ちこもった。

ニゴウ「……やりましたか？」

土煙が立ちしぼらくするとニゴウが静かに歩いてきクレーターの前で立ち止まった。

辺りを見回し殺すべき相手がいないか確認する。

少しずつ晴れていく煙と焔を作ろうにもできないであろう大地が広がっていた。

……この荒れ果てた大地から見るに死体も残らず吹き飛ばしたんだろう。

ニゴウ「消去完了、帰還します」

速く帰ってマスターに報告しよう……お仕置きを受ける前に  
そう思い、踵を返し帰ろうとしたが

ツガツガツガ

ニゴウ「……音？」

どこからか何か巨大な力で上っている音が聞こえてきた。  
死神かっと思ひ再度見渡すがその姿は見えない。

ツガツガツガ

時間がたつにつれ音は大きくなっていく。

だが、音が大きくなったのでどこから聞こえているのか分かった。  
ニゴウ「……断崖のほう!!」

F A | M A S を召喚し崖下を見下ろした瞬間

ツタン

アーク「よお!!」

目の前に王女を担いだアークが飛んで現れた。

ニゴウ「ツ!! 攻撃を(メキツ)っふ」

ズシャアアアアアアアア!!

急いでFA―MASを撃とうとしたがアークの右足がニゴウの顔面に容赦なくめり込み漫画のように体が回転しながら森に突っ込んでいき木々をなぎ倒していった。

アーク「はあ……この土がそこまで硬くなくて助かった」

先ほど飛び降りたが下まで行ったわけではなく途中で壁にマチェーテを突き刺し直角の壁をサイボーグの足に鞭打って上つてきた。

足にめつちや乳酸がたまりそう(小並感)

シエラ「や、やりましたよね!! い、嫌な音が聞こえましたが!!」

アーク「いや、ギリギリのところを防がれた」

シエラ「嘘お!？」

パラパラ……

ニゴウ「やりますね、アーク」

そういつていると森の中からポツキリ折れたFA―MASを片手にニゴウが帰ってきた。

感触的にあれか……芸達者な奴だな。

撃つのが間に合わないのをあの一瞬で判断して防御に移ったとわな。

ニゴウ「ほんと……馬鹿なことを考えますね」

アーク「お、誉め言葉か？」

ニゴウ「……なら、あなたから誉め言葉が出てしまうほどすごいことをしましょうか」

するとニゴウはそっとつぶやく。



ニゴウ「Gun<sup>銃</sup>, follow<sup>女 王 に従</sup> me<sup>え</sup>」

《M<sup>M</sup>k. 4<sup>2</sup>6 M<sup>4</sup>odl<sup>9</sup>、顕現》

アーク「ツ!!? 伏せろ!!」

シエラ「はい!!? どういう……むぎや!!?」

肩に担いでいたシエラを少々手荒だが地面に落とし頭を地面にこすりつけるほど低くさせ伏せる。

そして、伏せた瞬間

ニゴウ「穿て」

バリバリバリバリバリ!!

頭の上を無数の5・56弾丸が通り過ぎていった。

後ろの方では木々に弾丸がめり込んで大木が倒れ森のすんでいた動物たちの悲鳴が聞こえてくる。

後少しでも伏せるのが遅ければハチの巣になっていただろう。

アーク（てか、なんだよこの弾幕は!?!）

だが、これを一人の女がアサルトライフル……ましてやマシンガンで森をなぎ倒すには無理がある。

アーク「……なんじゃそりや」

弾幕の嵐が通り過ぎ顔を上げるとそこには珍百景が広がっていた。

アーク「なるほど……それがお前の能力か」

ニゴウ「すごいでしょう?」

そこにはガンダムファンネルのように飛び回るMK. 46 Mod1の群れが

なるほど、これがニゴウの「Bullet<sup>弾丸</sup> Queen<sup>女王</sup>」か

まあ、当たり前だが人間の腕は二本しかない……が

ニゴウ「集合、結束、標準」

ガチガチガチ

彼女にとっては使える腕とかは関係ないらしい(てか、なんか見たことがあるなって思ったら「まどマギ」のマミさんの銃のアレじゃん) 彼女を守るように回るをMk. 46 Mod1がさながら女王<sup>ニゴウ</sup>を守る騎士のように飛び回る。

ニゴウが命令するとMk. 46 Mod1が合体し始め一つのガトリングのようになった。

「弾丸を放つものなら魔力がある限り無限に召喚することができるのが彼女の能力だが個数に制限がないのは予想外だった。

てか、あんなファンネルみたいな運用なんか予想できるかよ。

アーク「げほ……容赦ない…なあ!!」

伏せた状態からFN SCAR—H Mk. 17の引き金を引く。  
……が

ニゴウ「防御」

アーク「……ウソン」

銃口から出た7. 62mmは……FA—MASの盾に防がれたえ、なに? 言っている意味が分からんって?

つまりニゴウは大量のFA—MASを召喚して盾にして7. 62mmを防いだ、文字のままだよ畜生。

アーク「いやいや……どうゆこつちやねん」  
開いた口が塞がらない

そんなアークにニゴウは

カシヤ

ニゴウ「……消えて」

アーク「くそ!! どいてろ!!」

シエラ「ふえあ!」

ガトリング状になったマシンガンが回転し始めこちらに銃口を向けた瞬間、アークはシエラの首根っこを掴み射線から切るよう適当に投げ捨てる。

「I<sup>そ</sup> have<sup>の</sup> predicted<sup>結論</sup> the<sup>は</sup> conclusion<sup>予測</sup>だク  
!!」

ならばとこちらも能力<sup>アーク</sup>を発動させる。

コマ送りのように少しずつ遅くなっていく世界、そしてマシンガンから放たれた弾丸から伸びる赤い弾道予測戦。

アーク（……顔面に5発で0.6秒後……だけど、避けた先に別の弾丸。右肩全体を覆うほどの弾幕が0.75……狙いは全部俺かよ!!）

狙いは悪くない……てか、良すぎる。

だが……だからと言って引くわけにはいかない!!

アーク「すう……」

足に力を入れ回避を開始する。

首を横に傾け最初の弾丸を避ける。

次に右足を軸に回転され次の弾丸を避ける。

ニゴウ「ツ!? なんで!？」

この弾幕前ではどんな奴でも走馬灯が見え挽肉になるはずなのに、  
がアークが次々と回避しこちらに迫ってきた。

狂気の沙汰だ。こんな弾丸の豪雨でなぜ避けられるのかわからな  
い。

アーク「……ッ」

カチッ

ズドンズドンズドン!!

ニゴウ「(チュン) ツ!!」

豪雨の中でもアークは隙を見てはトリガーを引く。

三発しか出ていないがニゴウの頬をかすめる。

白い頬からタラリと赤い雫が流れ落ちる。

だが……

ザシユザシユザシユ

アーク「つぐ」

ニゴウに傷はつけたがアークはその倍だった。

弾丸の雨の中どうにかFN SCAR—H Mk. 17のトリガーを少し引けたくらいだ。

直撃弾はないが体中のあちらこちらに傷ができる。

アーク（ニゴウをやる前にあの取り巻きみたいなマシンガンどもを何とかしないと）

一旦、距離を取るため木に隠れるが

ド

ド

ド

ド

バキヤアアアア!!

アーク「ぬあ!?!」

まさかの隠れた木ごと弾幕に物を言わせ破壊された。

完全に破壊される前にその場から離れ、お返しにガトリングに標準を向ける。

アーク（落ち着け……集中しろ……）

「I <sup>そ</sup>have <sup>結</sup>predicted <sup>論</sup>the <sup>予</sup>conclusion <sup>測</sup>の  
が発動中だが精神を落ち着かせさらに集中し高める。  
すると静かだった世界がさらに静寂になり 音のない世界になる。」

無数の銃弾が迫ってくるが自然と驚異では感じなくなり……いつも通り相棒のストックを肩にあてサイトを覗きトリガーを引く。

ズドドドドドドドドドド!!

ニゴウがマシンガンを六丁をガトリングのように束ねた兵器が放つ弾丸より圧倒的に弾幕は薄い。

だが、嵐のような銃弾に逆らうように自分が放った銃弾はニゴウに向かつて飛んでいく。

アーク(だけど狙いは!!)

狙ったのはガトリングになったMk. 47 Mod1の……銃本体の中心部を狙ったのだ。

本体の下部にボックスマガジンから伸びる弾薬に俺の銃弾が命中した。

Mk. 47 Mod1の銃弾に7. 62が命中した瞬間命中した弾丸が爆発し、さらに連鎖して他の弾薬も誘爆し……

ドガアアアアアアアア!!

ニゴウ「つく!!」

アーク(つしや!!)

心の中でガッツポーズをする。

これであいつの攻撃手段を減らせると思ったのだが……

ニゴウ「Gun, follow me」

アーク「はあ!?!」

ニゴウはすぐに破壊された即席ガトリングを捨てると大量のMk.

47 Mod1を召喚し大量のガトリングにしていた。

あいつ、限界の天井がないのかよ!?!

ニゴウ「殺せ」

カシヤ

ズドドドドドドドドドド!!

「I have predicted the conclusion」

!!」

先ほど一つしかなかったガトリングだったが今は一個大隊並みの個数。

数が増えたのでもちろん弾幕もさらに激しくなる。

アーク（左上0，01秒!! 下半身全体0，5!! ……くそ!! 間に合わない!!）

あまりの密度に避けられないと悟った瞬間、逃げるではなく前に出ることにした。

前に少しでも近づけば射線と射線の間が増え攻撃できる隙ができる。

だが、もちろん負傷するリスクも増える。

ドクツ!!

アーク（つぐ）

自分の能力を酷使し前に進む。

初めて極限状態になったから気が付いたが……俺の能力のも弱点があることに気が付いた。

どうやらこの能力は使用時間が長くなると熱暴走が起きるらしく、頭の中が沸騰した石が入ったかのように熱く痛い。

一歩踏み出すたびに脳から神経を通って体を動かそうと筋肉が動くが能力のせいでオーバーヒートした脳でふらつきそうになるが彼女を助けるために足を人間の限界以上に動かす。

アーク（右に一歩行った0．015秒後に再度右……回避した後、すぐにジャンプ!!）

脳から各部位に弾丸のように命令を出して動かしていく。

だが……能力を限界にしても

ドシュツ

アーク「ツ!？」

ニゴウの弾丸の一発がサイボーグの右足の太ももに命中する。サイボーグの白い人工血液があたりを白く塗りつぶしていく。痛覚機能は切っているので痛みは感じないが体内に硬い何かが入り込んでくる不快感を感じる。足に命中したせいでスピードが少し緩んだ……その隙に次々とニゴウの弾丸が命中しそうになるが

ズドオン!!

ニゴウ「飛んだ!？」

ニゴウまで残り7mになった瞬間、上に飛んだ。射線は一時外れることができたがニゴウのガトリングはアークを追いかけようと上に向ける。

軽機関銃を六丁束ねたせいで重いはずなのだが物ともせず機敏な動きをしてアークに機首を向ける。

アーク「つそこ!!」

カシヨ

ズドドドドドドドドドド!!

丁度、ニゴウの真上に来た瞬間トリガーを引く。

急いでニゴウも銃を召喚し盾にするが若干に合わず肩や太ももの布を切り裂き血が流れる。

アーク（くそ、当たらんか!!）

先ほどとは反対側に着地した瞬間、姿勢を低くしトリガーを引きながら突撃する。

ニゴウも対応しようとガトリングをこちらに向けMk. 47 Model 1たちの引き金を引こうとするがアークのほうが先に動いており二人との間は残り2mほど。

ニゴウもこれ以上近づかれては困ると発砲するがアーク「今!!」

I <sup>そ</sup> have <sup>結</sup> predicted <sup>論</sup> the <sup>予</sup> conclusion <sup>測</sup>

一旦切っておいた能力を再度フル回転で使用する。

Mk. 47 Mod 1から放たれた恐らく5.56mmの弾が赤い弾道予測線を描きながらアークの体に当たる。

……がほぼ目の前の距離でアークを殺そうと全弾アークの急所に当たるよう狙ったので

ズサアア!!

アークはまるで野球の試合で選手がするスライディングをする。

ハゲた頭ギリギリを弾丸が通っていく。

目の前でスライディングしたアークに驚いたニゴウは急いで銃口を下に向けてるが

ニゴウ（間に合わない!!）

間に合わないと判断し防御に移行する。

重々しい音を立てながら巨大な盾になる。

カシヨ

ズドドドドドドドドドド!!

カカカカカカカン!!

至近距離でトリガーを引いたが表面の何丁かだけ破壊しただけになった。

アーク「弾くか……なら!!」

スライディングしながら右ひじで地面を殴り反動で立ち上がった瞬間、右腕を振り上げ

アーク「おら!!」

ガンツ!!



銃で出来た盾を思いつきり殴った。

生身の人間だったら痛いはずだがサイボーグの体に物を言わせ殴り続ける。

アーク「おらおらおらおらおらおらおらおらあ!!」

ガンガンガンガンガンガンガンガンガン!!

ニゴウ「しよ、正気ですか!? 銃を殴って破壊するなんて!?!」

アーク「お前が言うなそ……れ!! ぬおおおおお!!」

内心で「逆に銃を盾にするくせに」とツツコミながら殴り続けできた小さな隙間に両手を入れこじ開ける（ゴリライズ）

ギ……ギ……

ガシャアアアアアン!!

盾を縦に裂き、腰からマチェエーテを引き抜き切りかかる……が  
ニゴウ「Gun, follow me」

《Saiga-12、顕現》

アーク「しまっ!?!」

盾を破壊した先には同じくガトリング状に合体されたSaiga-12があつた。

そして、至近距離で被弾するのはあまりにも危険すぎるそれがゆっくりと回転し始め

ドンツドンツドンツドンツ!!

銃口から12ゲージ弾が大量に発射されていく。

アークもそれに気が付き後方に大きくバックステップするが

ドシヤアツ

アーク「あつぐ!?!」

突然、左足に鈍い音と感覚がなくなる感覚が全身を襲った。

目線をやるとそこには膝から下が無い左足だった。

どうやらニゴウの Saiga-12 の弾幕で飛んで行ったらしく

……白い人工血液をまき散らしながら飛んでいく自分の足が見えた。

後ろ向きにしかも片足で回避しようとするが

ニゴウ「もらった」

《PTRD1941、顕現》

ニゴウから見れば絶好のチャンスであり新しい武器を召喚した。

それはかつてのソ連が開発した対戦車ライフルであり……かのナチス時代のドイツが開発したⅢ号戦車・Ⅳ号戦車の装甲を貫通させたほどの威力を持ったライフルだ。え、Ⅵ号戦車<sup>ティイガー</sup>? 知らん!!

ニゴウの頭の中には手加減とかの文字がないらしく、目の前に隙を見せている死神を殺すには十分すぎる兵器だ。

どうやらニゴウの能力のおかげか対戦車ライフルを片手で構えるニゴウ。

そして……そつと引き金を引いた。

ズドオオオオオオオオオオオン!!

耳をつんぎくような爆音を鳴らしながら銃口から対物ライフルの12.7mmを超える14.5mmの死の弾丸が放たれアークの心臓部に吸い込まれるように飛んでいく。

アークも回避しようと片足しかない右足に力を入れ上に跳躍する……が

ニゴウ「やつぱり、そうしますよね」

《M72A3、顕現》

ニゴウが何かをつぶやくと……アークの背後に召喚された  
アーク「遠隔召喚できるのかよ!？」

ニゴウ「チエツクメイトらっ」

ドガアアアアアアアアン!!

背後に召喚されたM72A3から放たれた66mm HEAT(対  
戦車榴弾)がアークの背中に直撃し森の方に飛んで行った。

ニゴウ(やりましたね)

もはやこのニゴウ……アークを戦車かなんかと思っ  
ているらしく  
対戦車兵器で殺してきた。

まあ、生の人間でも死ぬほどの威力のものだが

ニゴウ「早く、マスターの所に帰らないと」

流石に死んだ手応えがあったので帰ることにしたニゴウ。

ザ……ザザ……

『おい、ニゴウ何をしている』

ニゴウ「マスター……申し訳ごいませぬ。先ほど死神を始末  
しました」

『……ほう、それはよく頑張ったな。だが、時間がかかりすぎだ……と  
いうことでお仕置きだ』

ニゴウ「ツ!? 待つてください!! アークを倒せば我々の障害は減  
り世界統一も容易になります!!」

『……だからなんだ?』

ニゴウ「……え?」

『なんだ? たった一人を殺しただけで褒めてほしいのか?』

ニゴウ「……いいえ、何でもありません」

『早く帰ってこい、さもなきやお仕置きの時間を長くするぞ』

ニゴウ「(ブルっ)……はい、了解しました」

通信機を切ったニゴウは自分の来ている服を掴む。

今、自分が来ている服は首相の残党軍の来ている真っ黒な戦闘服。その服の下にはガトリングを動かし死神を殺したとは思えないほど華奢な体。

首相の部下からは華奢な体と健康そうに育った双丘をジロジロと見られるが慣れた。

だが……そんな体が震えている。

ニゴウ「お仕置き……嫌だ……」

首相が言っている『お仕置き』とは《大量のムカデと毒虫の入った風呂に沈められる》というものだった。

しかも、裸で全身沈められるので足の先から頭の上まで虫でおおわれるのだ。

毒が至るところから差し込まれ体中を蝕んでいく。

息をしようにも虫どもは穴という穴から入り込んでいく。

口の中に何匹……いや、何百匹の虫を飲み込んだもわからないほど入り込まれた。

……そして、二日前に女性としては大切な女性の象徴の中、耳の中、鼻の中、肛門……精神がぐちゃぐちゃになるほど入り込まれた。

ニゴウ「死にかければ……引き上げられて……また沈められて……繰り返して……」

逆に毒が致死量に達しあの世に逝こうにも引き上げられて部下の魔法使いに解毒と精神回復魔法をかけられ元の状態に戻され、また虫の海の中に沈められる。

ニゴウ「早く帰りましょう……」

踵を返し駆け足で帰ろうとした瞬間

マテ、この糞野郎がああああ!!

ニゴウ「殺気!?!」

背後からドス黒い殺意を感じた瞬間、ニゴウはその場から真横に飛んだ。

すると、その数秒後ニゴウがいた場所に

ズダアアアアアアアアアア!!

ニゴウ「岩!?!」

巨大な黒い岩が生成された。

周囲に魔法使いがいるのか!?

だが、この付近で演唱は聞こえなかった……一体?

ニゴウ「それにこの岩……何か違和感が……ん?」

地面から出てきた岩にF A—M A Sを装備しながら近づくと付近に赤い霧が立ちこもった。

やはり、この付近に魔法使いがいるらしい。

もしかして、さつき逃げていた脱走者か?

ニゴウ「どこにいるんですか? あまり私に手間を取らないでほしいのですが」

今まで国相手に単独でトップを殺してきたので魔法使いの特徴はわかる。

速く帰らないといけないこの状況になっても抵抗してくる敵にいら立ちを覚えながら探していると。

ガサツ

ニゴウ「いた……ツ!?!」

音が鳴った方向に振り向きF A—M A Sを構えたがサイト越しに見えたのは飛んでくる巨大な岩の塊だった。

高速で飛んでくるそれを横に飛んで避け先ほど生成された黒い岩の陰に隠れた。

ガサツ

ニゴウ「……なんですか……アレ」

森の中から出てきたのは……骸骨だった。

ニゴウ「何者ですか？」

ニゴウが何者かと問いかけるがそのだが遺骨は黙ったままだった。

ニゴウ「まあ、この場所にいる時点どちらにしても殺しますが。恨むなら運のない自分を恨んでくださいね」

素晴らしいF A | M A Sを持ち上げ狙おうとしたが

ニゴウ「……え？」

自分の獲物を持ち上げた瞬間、ニゴウは目を見張る。

自分の銃が錆びていたのだ

先ほどまで新品同様だったのに今、持ち上げてみれば長年放置し風化したような有様だったのだ。

ニゴウ「なんで……つく!!」

錆びたF A | M A Sを捨て岩に隠れて新しい武器を召喚しようとするが

キイイイイ……

ニゴウ「え、音（ズドオオオオオオオオオオオン!!）」

隠れていた岩から金属音に似た音が聞こえた瞬間、岩が爆発した。岩に完全に張り付いていたので岩の破片が体に刺さる。

ニゴウ「うつく……ま、まさかアークですか？」

アーク（こくり）

ニゴウ「ははは……対戦車兵器を使用したのに死なないとは……あなた、何者なんですか？」

アーク（うつせ!! てか、対戦車兵器を人に向けんな!!）」

ニゴウ「……だんまりですか……失礼なものですね。人が質問しているのに答えないとは。まあ、答えなくても殺しますが」

アーク（答えないじゃなくて答えられないんだよなあ……）

素晴らしいながらもスカルズの腰からマチェーテとP90を引き抜

く。

いやあ、危なかった。

背中からロケットが飛んで来た時、とつさにiDROIDを操作してスカルズに変身して鋼鉄化して何とか防げた。

だが、スカルズでもロケットの衝撃には少々荷が重かったらしく、背中がジンジンと痛いし火傷のように熱い。

以前のポイント 15428

変身

スカルズ 500

合計ポイント 14928

あ、ちなみになんでP90を引き抜いているのかというと、さっきのM72A3のロケットの衝撃のせいでFN SCAR Mk. 17がお釈迦になってしまった(てか、よく壊れんな俺のSCAR)あと、P90は片手でも比較的持てるのでこれにした。

ニゴウ「穿て!!」

またしてもMk. 47 Mod1のガトリングをこちらに向け一斉に射撃してくる。

……がアークもさっきのようにはいかない。

射撃音と共に足に力を籠め

バシユツ

ニゴウ「消えた!?!」

アークが射線上に消え辺りを見渡す。

残像も残さないほどの速さで縦横無尽に駆け回る。

ニゴウ「速い!?!」

ニゴウも追いかけてようとガトリングで乱れ撃ちしまくるが当たらない。

しかも……

パキツパキツパキツ……

ニゴウ「また!!」

ニゴウは攻撃しようにもこの赤い霧のせいで新しく召喚した銃が次々と錆びていき使い物にならなくなってしまっているので霧の外に出たいのだが丁度アークを狙える場所に霧が来るのだ。

ニゴウ「どこかに魔法使いが……どこに……」

とにかくこの赤い霧が邪魔だと判断し探したいが

アーク（ぬあらあ!!）

ヒュオン……

ズドオオオオオオオオオオオオン!!

ニゴウ「またか!!」

攻撃をやめた瞬間、アークがどこからか岩を召喚し投げつけてくる。

ニゴウ「アークは魔法使いなのか……」

ひらりと避け後方で粉碎音が聞こえる中、ニゴウはスカルズ骸骨となったアークをにらむ。

速くこの霧から脱出したいが

斬!!

近づいたと思ったらマチェーテで切られ遠距離だとP90と岩の投擲で動けなかった。

アーク（……よしよし、スカルズ骸骨の能力がいい感じに刺さっているな）

一方アークは内心少しずつ冷静になってきた。

アーク（てか、いい加減勝負をつけないと他の増援が来て面倒なことになる……）



クラウチングスタートのように姿勢を低くし、地面と平行になるほどまっすぐニゴウに突撃する。

ニゴウは再度ガトリングで攻撃しようとするがスカルズのメタリックアーキアの含んだ赤い霧のせいで錆びていく。

アーク（ここ!!）

P90を片手構え発砲する。

ライフル弾並みの貫通力を持った5.7mm弾がニゴウに向かっていくに対してニゴウは現在使えるだけの銃をかき集め盾にしたが厚さが薄い。

キンキンキンキン!!

ニゴウ「う、ぐう!!」

生成した盾で何とか防ぐがもうアークとニゴウの間は1mもない。

アークもマガジン内の弾が無くなるほど走りながら撃ち続けマチェーテを握りしめ振りかぶる。

アーク（動くなよ!! 動いたら痛いぞ!!）

上段で振りかぶりニゴウの盾が目の前に来た瞬間、振り下ろす。

盾が薄かったおかげかバターを切るかのように滑らかな断面を残しニゴウの驚愕している顔を拝めた……が同時にご丁寧に先ほどより多くなったSaiga-12の群れがお出迎えになった。

……が下がることなく第二撃に持っていくため前世で習った剣道の「脇構え」の状態にもちこみ、さらにもう三步前に進み

アーク（硬化!!）

スカルズの『覆いつくすもの』が発動しアークの体がみるみると岩石のごとく金属装甲に覆われていく。

カカカカカカン!!

ニゴウ「弾いた!?!」

これにはニゴウも予測外だったらしくバク転でアークの第二撃を

避けようとする。

アークは手に持っているまを振りかぶる……ことはなかった。  
アークの手にはマチェエテなどなかったのだ。

ニゴウ「ッ!?!」

いきなりだが剣道の「脇構え」とは一つの戦術でもある。

脇構えとは刀などの獲物を自分の体に隠すように敵に接近し切りかかるというものだがこれをする事によって敵は獲物は何なのかわからないし獲物が一体どれくらい届くのかかわからないのだ。

まあ、一番わかりやすい例えが鬼滅の刃第一話の炭次郎が義勇さんに斧で立ち向かう場面のアレだ。

アーク「すう……」

マチェエテは構えていると思わせて腰に収めておいた。

出すと思わせて油断をさせ右手を出し五本の指を固め力を入れる。

そして、ニゴウに

アーク（すまん、痛いが許してくれ）

と、申し訳ないと心の中で謝りながら最速で最短の距離から

ゴキッ

ニゴウ「お……ぐ……」

硬化した右腕に力を籠めニゴウの腹部に向かって真つすぐ突き出した。

鉄の塊が腹部に直撃し内臓に突き刺さりニゴウは嘔吐する。

ふわりと浮いたニゴウの体はその勢いのまま木に衝突する。

ニゴウ「げほげほ!!」

アーク（ここだ!!）

アークはこの瞬間を逃さなまいとMk. 22を取り出しニゴウの急所を狙う。

彼女は敵のはずだが無力化し持ち帰ることにした。

アーク（盾があつたせいで狙えなかつたがこれなら!!）

そして、トリガーに指をかけようとした。

そう、ニゴウがそれを言うまでは

ニゴウ『B<sup>弾丸</sup>ullet<sup>の</sup> Q<sup>女王</sup>ueen<sup>王</sup>』第二艤装 制限解除

アーク「なッ!？」

あと少しで引き金を引けそうだった瞬間、謎の衝撃に吹き飛ばされた。

地面をゴロゴロと転がり何とか体制を整えれ見えた景色は……なんと幻想的な光景だった。

ニゴウの体は光り輝き収まったころには黒い服は夜空を描きたような漆黒のドレスに変わり、さながら女王だった。

ニゴウ「……初めてですよ、私のこの形態に持ち込めた敵は」

アーク（……まだ、本気を出してなかったのかよ）

ニゴウ「今までの敵は私の第一形態で殺されていききましたが……ここは大人しく褒めましょう。素晴らしい技量と度胸ですアーク」

パチパチと拍手をするニゴウ。

ニゴウ「でも……」

あなたの負けです」

アーク（……来る!!）

P90を構えるアーク

そして、ニゴウは本当の力の一部を発動する。

ドレスのはじとはじをすつと上げ貴族みたいに挨拶をする。

ニゴウ「さあ、戦争を始めましょう？ アーク？」

《鋼鉄の城、顕現》

アーク（……………おいおい、冗談だろ）

アークは上空にニゴウが新しく召喚したものを見てあまりのスケールの大きさに一歩下がってしまう。

ニゴウの『Bullet Queen』は「弾丸を放つものなら魔力がある限り無限に召喚することができる」だ。

先ほどのFA—MASやMk. 47 Mod1, Saiga—12にPTRD1941という対戦車ライフルまで多種多様な武器を召喚した。

サイズや弾の種類も関係なく召喚する。

だが、ここで再度読者に聞こうではないか。

この世界で最も巨大な銃はなんだと思う？

実際に世界で最も大きいライフル銃で「Big Ernie」という約10mのライフル銃がある。

だが少し待ってほしい。

そもそも「銃」って人が手の中に持ってこそ銃だろうか？

銃とは「筒状の銃身から弾を発射する道具であり、砲より小型の物を指す」という道具だ。

ここまできると読者は「何言ってだこの作者？」「てかさっさと進めろよ」って思っているであろう。

だが、先ほど紹介した「Big Ernie」より数十倍巨大な銃があるのだ。

そんなのあるのか？って思うかもしれないが読み返してほしい銃とは何なのか。

某国が開発中の兵器？

答えはいいえだ。だって、それはおそらく数百年前からあるものだから。

だってほら……海上の船の上に搭載された兵器だもん。

人類史上最強で最大の投射兵器……そして、世界で最も巨大な銃

## 戦艦の主砲

それが今、アークの頭上の上空で顕現された。

周囲は薄暗くなる、体の震えが止まらなくなる。

武者震いではない本能的に震えている。

アーク（何だよそれ……）

P90を強く握りしめる。

今、手にある武器は人を殺すには十分すぎる武器だが目の前にある兵器じゃとても対抗できない。

しかも、その主砲が6門……すべての砲門がこちらを見ている。

ニゴウ「この兵器……アイオワ級戦艦ミズーリっという兵器に乗っていた50口径40.6cm砲という名前だそうです……一人一人を殺すにはオーバーすぎる兵器ですがあなた相手なら十分でしょう」

とうとうニゴウはアークを戦車ではなく軍艦としてカウントする気らしい。

ニゴウ「アーク、これはあなたに対する最後の言葉です」

そして、アークには聞こえないほどの声で囁く

ねえ、死神さん。もし、もし私からのお願いを聞いてくれるなら

ニゴウ「私を殺すために死んで、アーク様」

BGM:「Sudden Changes Sans Song  
「OverSave—Tale」 phase2」

そして、一人ぼっちの女王は命令する。

ニゴウ「殺せ」

ゴゴゴゴゴ……

ガチン

アーク（ヤバツ!?　くら（ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!）

回避しようとしていたところには視界が真っ白になり空を飛んでいく感覚を感じた。

視界が元に戻っているころには全身に痛みを感じた。

どうやらあまりの威力に「覆われるもの」が破壊されたらしい。

アーク（驚いたな……今まで突破した奴はいなかったが……まあ、戦艦の主砲相手なら当たり前か）

ふらふらと立ち上がるが

ブチツ

アーク（痛ツ!?……うわ、右腕が）

立ち上がった反動で右の肩から腕に痛みが走った。

眼をやると右腕に力が入らなく振り子のようになっていた。

アーク（くそ、骨が折れたか脱臼したか……っち、いってえ）

右腕の痛み到我慢しながらニゴウを見上げる。

どういうわけかアイツ……第二形態なった瞬間、空に浮かんでるぞ。

マジの女王じゃん

ニゴウ「No One Escapes Death」

《38口径12.7cm砲、フアランスCIWS、M134、顕現》

アーク（召喚する量もえぐいことになってるな!!）

ニゴウは新たに艦載兵器を召喚してきた。

本来、戦闘機やミサイルに対する兵器を目の前の死神一人に向ける。

50口径40.6cm砲9門、38口径12.7cm砲12門、

フアランス・M134無数……

アーク（もはや、陸上の戦艦だな）

さてっと右腕には少し我慢してもらうか。

ニゴウ「轟け!!」

(I have predicted the conclusion)  
再度足に力を入れた瞬間、ニゴウの一斉砲撃が開始する。

バシユツ

ズドドドドドドドドド!!

ズドオオオオオオオオオオン!!

高速移動を開始すると自分いたところが吹き飛び巨大なクレールターが完成された。

銃弾の台風の爆風があたりの木々を破壊していく。

だが、アークが変わればニゴウも変わるらしく

アーク（上、次は下で1. 2秒後にバク転……やばいな、多すぎる!?）

先ほどのアークの一撃でニゴウも学んだのかアークに一点集中ではなく周りに乱れ撃ちをし始めた。

しかも、さつきより銃弾の数は圧倒的に多く避けた先に別の銃弾がありそれを避けてもまた避ける。

さつきのでほぼギリギリだったのにそれ以上にもなるとアークでさえも無事ではいられない。

ドシユツ

アーク（あぐっ!?!）

次々とスカルズの体に銃弾が刺さっていく。

スカルズの体は常人の体より丈夫ではあるがアークの

「I have predicted the conclusion」

のおかげで被害は最小限に抑えれこめれている。

ただでさえ右腕が使えない状況では地獄に等しい。

アーク（当たれ!!）

どうにか一太刀だけでもP90を構え引き金を引く。

バラバラバラバララララ!!

ニゴウ「ツ!!」

カカカカカカカン!!



アーク（やっぱり防ぐか!!）

5. 7 m mの銃弾はニゴウを襲うがニゴウは先ほどの50口径4

0. 6 c m砲を前に突き出し防ぐ。

戦艦の装甲の前ではP90は豆鉄砲である。

どうにか戦う手数を減らそうとメタリックアークアの霧を放出するが

ガコン

ニゴウ「轟け」

ズドオオオオオオオオオオオオン!!

アーク（ぬあ!?!）

まさかのその場所ごと主砲で砲撃し爆炎と爆風で霧を消し飛ばした。

アークも巻き込まれて燃え滾るように熱い爆風に耐える。

アーク（う……あちい……）

足から力が抜けそうになる。

あ、そういえばスカルズの「覆われるもの」って『乾燥や熱に非常に弱く、火炎や日光に晒されると活動を停止してしまう』とかいう弱点があるんだっけ。

盲点だったな……弱点のことを忘れてた。

アーク（耐えろよ、スカルズ……おら!!）

岩を生成し投擲する。

ニゴウも主砲で防ぐが少し凹んで終わった。

アーク（どうにか決め手が欲しい!!）

どうしようかっと思っていると

アーク（あ!! 目には目を歯には歯を……デカいものならデカいものだ!!）

そうして懐からiDORIDを取り出し回避しながら操作する。

召喚するのはメタルギアZ E K Eだ。

どんなにデカくて硬いやつでもレールガンの前じゃ無理があるからな!!

アーク（えつと……あつた!!）

スクロールし核搭載メタルギアの枠を捜し決定を押し。

アーク（こい、Z E K E!!）

ニゴウ「あれは!? 防いで!!」

《トマホーク、ハーブーン、顕現》

アーク「おま、それ使用用途違うだろ!」

今までアークと対峙してあの端末から召喚されていると判断したニゴウはなぜか対空ミサイルも召喚し……

ニゴウ「死んで!!」

バシユウウウウウウウ!!

ズドオオオオオオオオオオオン!!

ブオオオオオオオオオオ!!

まさかの戦艦ミズーリに搭載されていた兵器全てが火を噴いた。アークを狙うのではなくその周りに打ち込み逃げ道をなくすように撃ち続けた。

アーク（逃げ道は……ないか!!）

が……見当が外れた。

ガコツ

アーク（ん？ なんか揺れたような？）

ニゴウの射撃した瞬間大地が揺れたような感じがした。

なぜかニゴウによる直撃弾はなく至近弾で終わったのだが……まさか!?

アークの予想が当たる前に事態は動いた。

ゴシャアアアアアアア!!

アーク（うわあ!?!）

断崖絶壁の上で戦っていたのが仇とでた。

まさかのニゴウはこの場所ごと破壊し下の激流に落とすという暴挙に出た。

崖がそのまま崩壊していく。

地面に足をつけていたアークも巻き込まれるが空を飛べるニゴウは悠々と浮かんでいる。

アーク（あいつ……容赦ないだろ!?! あ、シエラは!?!）

落ちていく中、護衛対象のシエラを捜すと

シエラ「ひぎやあああああああ!?!」

アーク（いた!!）

崖が崩れていく音に負けないほどの悲鳴を挙げながら落ちていく王女を見つけた。

落ちていく中、上にいるニゴウを見上げる。

なぜかこちらに手を差し伸べているように見えるが最終的に引っ込めてしまった。

アーク（それより今はシエラだ!!）

壁に足をつけ下に向かって飛ぶ。

きりもみ回転しながら落ちていくシエラの右腕を……

アーク（掴んだ!!）

シエラの腕をつかみ引き寄せる。

落ちていく中、下には激流が見えてくる。

なんか高所から水に落ちるとコンクリート並みの硬さになるらしいのでお勧めしないと本で読んだことがある気がする。

アーク（なら、硬化!!）

なんとか回復した「覆われるもの」を展開し金属装甲を体ジュに展開し自分が下になるように移動する。

シエラ「あ、アーク!! し、下に川がありますよおおお!?」

アーク（大丈夫だ!!）ツグ!!

目の前で大泣きしながらしがみついてくるシエラ。

ふにゆ

アーク（あ、この王女……デカイ）

こんな状況下なのに肌を感じる柔らかい感触。

何がと言わんがデカイなこの王女。

そんなことを思いつつも下から迫ってくる激流。

ザバアアアアアアン!!

シエラを抱えたアークは川の中に巨大な水しぶきを出しながら落ちた。

アーク（よし、どうにか衝撃は解決したな）

水の中で硬化能力を解除し水の上に浮かぶ。

アーク（さーって、ニゴウからは逃げれたからさっさと瞬間移動で

（ドグッ） つうぐ!?!）

水の中に落ちた瞬間、体に異常を起こした。

体……つとというよりスカルズに異常が起きた。

アーク（あ、そういえば）

スカルズは日光などの高温に弱いのに加えてもう一つ弱点があるのだ。

それは

『雨のように多量の水分に当てられると今度は『覆い尽くすもの』たちが水分吸収に夢中になってしまい、能力の行使ができなくなってしまう』

アーク（しまったああああああ!? すっかり忘れ  
たああああああ!!）

水の上に顔を出しながらどうしようかと慌てる。

アーク（や、やばい!! 俺は別にいいがシエラだけでも先に出さな  
いと!!）

洗濯機の中のような激流の中、シエラを背中に担ぎどうにか岸に泳  
いでいく。

……がニゴウの砲撃の衝撃がここまで来たらしく。

ズド

!!

アーク「ごぼ!?!」

アークの頭上に巨大な岩が降ってきてアークの頭に直撃した。

頭から水の下に沈められ呼吸がままならず、川の底に沈んでいく  
アーク。

アーク（しまっ……た……な……あ……り……す）

そして、歌う死神は気を失った。

百一発目 マザハ ノ クオキ(きおく)の はざ  
ま)

ちゅんちゅん……

??「うふふ……全くもう……ヤンチャねえ……別にあの子は操られて  
いるっていうのに兄妹で戦うなんてねえ……」

日本式の屋敷の中で一人の女性が微笑んでいた。

神社の巫女のような赤い袴に白い小袖という清爽な服装で茶髪の  
ツインテールに赤い眼鏡をかけた女性が縁側でちよこんと座つてい  
た。

屋敷の中はしんと静かで聞こえるのはその女性の呼吸音と縁側  
に引つ掛けている風鈴と……

アーク「すう……すう……」

ニゴウ「……」

その女性の膝で膝枕をして寝ているアークとニゴウの寝息だけだっ  
た。

本来、目と目があえば殺しあう敵同士のはずだが今は子供のように  
可愛らしい寝息を立てながらぐっすり寝ている。

??「……はあ、本当に可愛いわ」

女性は化け物のような鋭い爪とかではなく日本人の一般的で綺麗  
な手で寝ている二人の頭を撫でる。

まるで我が子を可愛がるように

??「でも……これ、本当に邪魔ね」

素晴らしい目の先にあつたのはニゴウの首元。

アークは普通に寝ているがニゴウはまるで死んだように寝ている。

一応、耳をすませば寝息は聞こえるが風鈴の音で消えてしまうほど  
だった。

原因ははっきりしている。

??「奴隷化魔法に使い魔契約ねえ……相変わらずあの世界の生物つ  
て屑よね」

そういい、ニゴウの首をそつと撫でる。

そこには忌々しく光る首相がかけた奴隷化魔法や洗脳魔法などの従順にさせる魔法たち。

??「私だつて、あつちの世界にいれば今すぐにも解いてあげたいのに……」

悔しそうな顔から一粒の涙が流れる。

その涙はニゴウの頬に落ちる。

??「……てか、あの倉庫。だいぶ自然な山のようにして偽装設計したはずなのに、まさかあれを掘つたの？ だったら一周回って褒めたいわね」

呆れた。

相変わらず、あの世界の住民はあの時から変わってないのか。

??「ほんと、運命を呪いたいわ……あの時、前もって対魔法使い化させといた方がよかつたかなあ？」

アーク「う……ううん……」

女性は何やらぶつくさつぶやいていると膝の上で寝ていたアークが目を擦りながら起きた。

アーク（あれ？ ……ここはどこだ？）

??「あら？ なんで起きて……あ、そうか、そういうことか……」  
ここはどこなんだ？

なんで、俺……こんな屋敷で寝ているんだ？

アーク「……俺は確か、逃げて……あれ？ 何から逃げていたんだっけ？」

なんか、頭の中がボーつとする。

えっと、確か今日は家に帰ってメタルギアをして……どうするんだっけ？

あと、本当にこの屋敷は何なんだ？

俺の祖父母は既に死んでいるからこんな古臭い家なんてないはずだ。

??「うふふ♪ おはよう………番号？ いや、アーク？」

アーク？ あ、そういえば俺ってアークっていう名前だったな。

?? 「それにしてもアークで『歌う死神』って……まあ、ある意味『エンジェル』でもあるしね。てか、アークってダサくない？」

ダサいとはなんだ、ダサいとは

この名前は俺の主人が……主人……主人……ありす……そう、アリスがつけたんだ!!

?? 「ふーん、ま、私には関係のないことだけどね」

それより、ここは本当にどこなんだ？ あなたは一体？

?? 「ああやっぱりね……この空間はちよつと特殊な条件下で来れるけど基本的は眠くなるのよね」

あ、あの何を言っているんですか？

?? 「あ、いいのいいの気にしないで。さて、そろそろ帰る時間だよ」

え、帰るって……あ、あとその子……なんか、見たことが……

?? 「ああ、この子かい？ この子がどうしたんだい？」

い、いや……なんか、すっごい申し訳ない感じが……

?? 「……もしかして……あ、そうか。その体、本当は君のじゃないからか」

え、どういう

?? 「いいのいいの……さて、君には役目があるでしょ？」

そういうと女性は起きたアークの頭を撫で始めた。

アーク（なんか眠い……な）

頭の中が少しずつ霧がかかるように思考が停止していき、覚醒しかけた脳が再び深い睡魔に襲われていく。

アーク（なんで……こんな……落ち着くんだ……）

まるで催眠がかかったように目が閉じていき、再び女性の膝に寝そべって寝息を立てる。

?? (『鋼宮 徹』ねえ……なるほど、転生者か。あ、でも勇者じゃないみたいわね。ならよかった)

アークの頭を撫でながら本人の記憶を読み込んでいく。

?? (彼も災難ねえ……まさか、その体に憑依するなんてねえ)

アーク「綺麗な……夜空……だ……なあ……」

?? (ふーん、君はこの見える景色はそう見えるんだねえ)





あの川ではどんなに硬い装甲でも生きられるのはあり得ない。  
ニゴウ「しかし、なぜ私は座って？」

勝利を確信したのはいいが、なぜ自分が今気にもたれ掛って座っているのかわからなかった。

マスターから基本目が届かない場所でも座るのは許可があつてからである。

疲れたから座つたのか？ いや、それはない。

ニゴウ「……いえ、まず私が勝つてから今の間何が？」

思い返してみるがアークに勝つたのは覚えている。

だが、その間の記憶がない。

ニゴウ「ツ!! それより早くマスターの所に帰らないと!!」

上を見れば太陽は最後の記憶の位置からだいぶ過ぎている。

急いで帰らないとお仕置きが長くなってしまふ。

立ち上がり基地の方角に向かって全力で走るニゴウだった。

同時刻、アーハム帝国

アリス「……」

カチツ

アークの家にアリスが椅子に座りぐてーつとなっていた。

手にはアークからもらったiDROID。

スイッチを入れたり切ったりして窓の外を眺めていた。

カチャ

クロエ「あら？ アリスじゃない？」

アリス「あ、クロエ姉さま……」

クロエ「こんなところにいたのね」

アリス「……」

クロエ「どうしたのよ？ そんなに暗い顔をして？ ……あ、もし

かしてアーク？」

アリス（こくり）

クロエ「大丈夫よアークなら。彼が簡単に死ぬわけないでしょ？」

アリス「そうですが……なんか、胸騒ぎが……」

そつと自分の心臓がある場所を抑える。

今朝から心臓の音がうるさく感じる。

おかげで今日に授業は集中できなかった。

アリス「……はあ、速く帰ってこないかな」

クロエ「なんか、アリス……」

恋する乙女みたいな顔をするわね」

アリス「ふえ、ふええ!？」

突然、姉からトンデモ発言をくらい若干ボケていた頭が暴走し、椅子から飛び上がる。

アリス「ななななな、なにを言っているんですか姉さま!？」

クロエ「あら？ 私は思ったことを言っただけよ？」

アリス「べ、べ、べ、別に私とアークは!!」

クロエ「……なんでそこでアークが出てくるのよ」

アリス「い、いいいええ!! な、何でもありません!!」

クロエ「あ、まさかアリス……」

アリス「ないないないないないなー!ーい!! い、いいですか姉さま!! 私とアークはあくまで主従関係です!! 恋愛など絶対ありません!!」

椅子から立ち上がりクロエに花と花がくつつくほど迫るアリス。

クロエ「そ、そう? でも……本当に遅いわねアーク。まあ、国がらみの任務だし遅くなるのは当たり前よ」

アリス「……でも、アークからもらった遠距離通話する魔道具に聞いても全く反応がないんですよ」

クロエ「アリス? 彼つて一応でも任務中だから連絡するのはまず

いんじや?あと、その道具、私も欲しい」

アリス「……まずかったですかね?」

クロエ「まあ、仕事中に邪魔するのは悪いと思うわよ」  
目の前で冷や汗をかく妹。

アリス「……あー!! もう!! 早く帰ってきてよアーク!!」

前みたいに彼の家にいれば一番早く会えるので待機しているが一向に現れない使い魔に対して文句を言う第二皇女であった。

クロエ(あ、そういえば……いや、さっきアリスは「絶対にならない」って言ったし……)

アリスの後姿を見てふと思い出す。

アリス『私とアークはあくまで主従関係です!! 恋愛など絶対ありません!!』

あくまでとはいったい?

その日の夕方

ガキイイイツ!!

ニゴウ「……ッ」

暗い部屋の真ん中に椅子に縛り上げられているニゴウと

「まったく……私との約束はそんなに価値がないものかね?」

手にハンマーを持った首相だった。

ハンマーには血がびつとりと染みついており……ニゴウの雪のように白い頭に赤い花が咲いていた。

ニゴウが急いで帰ってきたが首相に報告をした瞬間、了解の印に顔を殴られ鼻血が出た。

そして、そのまま髪を引っ張られ椅子の上に鎖で縛られた後、今に

至る。

「言ってみろ？ ん？」

ニゴウ「……私は」

「言えって言ってるんだよこのゴミが!!」

「素晴らしい、首相は椅子に座っているニゴウの腹部を蹴りつけ頭から転倒させた。」

受け身も通らずに勢いのまま後頭部が鈍い音と共に打ち付けられる。

脳内が振動し脳震盪を起こす。

「ニゴウ…貴様に問おう。お前は何者だ？」

ニゴウ「私は……マスターの道具です」

「ふむ、ならなぜ私との約束を破るのかね？」

ニゴウ「いいえ……」

「そうか……なら、私はひどく失望するねえ」

首相がハンマーを握りなおすとハンマーに武器系の付与魔法をかける。

すると、ハンマー部分が赤くメラメラと燃え上がった。

「いやはや……私もしたくはないんだけどねえ」

そして、床に縛り付けられているニゴウに馬乗りし振り上げたハンマーを振り下ろす。

ガキイイイツ!!

火属性の付与魔法がかかったハンマーはニゴウの頬を直撃する。

頬の骨にヒビが入ったような痛みが走る。

火をまとったハンマーだったため当たった瞬間、ジュウウつと痛々しい音を立てながらニゴウの白い頬に火傷を負わせる。

ニゴウ「申し訳ございません……私の……失態です」

「まただよ!! 帰っては申し訳ございません申し訳ございませんって……お前は謝ることしかできないのか!？」

ニゴウ「……ごめんなさい」

「ああ!? 誰が敬語を使わなくていいって言ったあ!?」

ニゴウ「全責任は私にあります……大変申し訳ございませんでした」

「つち……来い!!」

首相はニゴウの座っている椅子の足を掴み例の部屋に連れていく。

石畳の床に顔面をつけたまま引きずらるニゴウ。

そして、少しずつ見覚えのある部屋が見えてきた。

ニゴウ「ま、待ってください!! ここ、今度こそ命令通りに!!」

どこに連れていくか気が付いたニゴウは顔面を痛めながらも首相にチャンスを請うが

「……おい、ニゴウ。舌を出せ」

ニゴウ「は、はい」

首相に命令され大人しく舌の先を出す。

「もつとだ」

ニゴウ「はい」

今度は半分くらいを出す

「もつと出せって言っただよ!!」

まだ足りないらしく最終的に根元まで出した瞬間。

ザシユツ

ニゴウ「がふ!?!」

出した瞬間、ニゴウの顎を首相の蹴りが命中した。

当たった瞬間、舌にニゴウの歯があたり血が口から大量に出た。

幸い、切れてはない

「よし、これで静かになれるだろ。それじゃ、しばらく頭を冷やしてこい」

そういうと目の前にあった扉を開く。

中は巨大な穴があり下は暗い……

「うお、やっぱり何度見てもなれんな」

そこには大量の蟲がいた。

しかも、前回のではなく魔族の蟲までいた。

ここは実験ついでに貯めておいた即席の蟲魔族の巢だ。

常人では一体でも猛毒で危険のだが……首相はその数百匹もいるであろう穴に何も持っていないニゴウを放り込もうとしているのだ。

「ああ、前もって命令しておくが攻撃するのは禁ずる。した場合は……お前を捨てる」

ニゴウ「…は……い」

ニゴウは反論しようとしたが首相が命令すると首に描かれていた奴隷化魔法が反応し強制的に催眠状態にさせられ黙ってしまう。

「それじゃ、行ってこい」

そして、首相は椅子に縛られていたニゴウを穴の中に蹴落とした。

「1時間後に迎えに来るからな」

穴の中から痛みのみあまりに悲鳴を出すニゴウを無視し次の作戦を立てるため作戦室に向かう。

「おい、死なないように20分ごとに回復と解毒させとけ。あとは好きにしろ」

「了解しました」

帰る途中でついでにきた魔法使いの護衛に命令しておく。

だが、魔法使いの口元は厭らしく三日月になっていた。

首相から「好きにしろ」と言われた……つまり、ニゴウに魔法で攻撃してもよいということだ。

……そして、結局蟲だらけの部屋からニゴウが出されたのは1週間後だった。

……そして、さらに同時刻

バシヤ……バシヤ……

土砂降りの雨の中、ニゴウの砲撃のせいで普段は穏やかな川が激流となった川……水の中は岩や倒木などが流れておりふつうは助からないであろう。

だが……そんな中から一人の男が出てきた。

肩にはシュレイド王国の王女のシエラがいた。

幸い、アークが全身を覆うように庇ったので目立った外傷はない。川から岸に上がり、ここでようやく自分の能力で引き上げた男性を放り投げる。

?? 「だあく!! 重い!!」

岸に這いあがった男はシエラとアークをそつと地面に下ろす。

?? 「全く……僕の能力はこういうのに使うためじゃないんですがねえ」

愚痴を言いながらも周囲に敵はいないか確認する。



?? 「うん、いないつと……はあ、なんで負けているんですかね？  
死神さん？」

一応、今自分の下で気絶しているアークの容態を確認する。  
アークはシエラに比べて彼女に傷を負わせないよう彼女を守って  
いたので体のあちらこちらに傷ができていた。

?? 「あく……僕は回復とかできないし……お？」

シエラ 「う、う……」

?? 「あ、起きたわこん畜生。せつかく無様に寝ているアークの顔を  
某マツキのペンで落書きしようかなって思ってたのに」

隣で寝ていたシエラが起きたそうなので、とりあえず近くにあった  
小枝二つをアークの鼻と耳に突っ込んでおく。

シエラ 「う……ここ、ここは？」

?? 「それじゃ、あとは頼んだよ王女さん？ 《I, I I leave  
the rest to you》」

シエラが目を覚ますとそこはどこかの岸だった。  
どうやらどこかに流れ着いたらしい。

襲撃者の城から命からがら逃げて途中で捕まりかけたがアークが  
助けてくれたことよって一時は助かったが襲撃者の一人であるニ  
ゴウに襲われた。

シエラ 「……あれ、本当にこの世界の生き物の戦闘ですかね」  
何度、思い出してもあれは夢ではないようだ。

高速で移動するアークに大量の黒い筒を召喚するニゴウ。  
もし、自分の国の兵士全員を集めてもあの二人の戦いを止めれるこ  
となくそこら辺の石のように破壊されるだろう。

シエラ 「それより、さつき誰かいたような……っは!! それより、  
アークさんは!？」

急いで起きて辺りを見回すと

シエラ「あ、アークさん!!」

自分の隣に寝ていた。

よかった……流されたと思ったが運は味方をしてくれた。

だが、彼の状態はひどかった。

体のあちらこちらに傷ができており右腕はおかしな方向に向いている……骨折だろう。

しかも、顔も鼻と耳に小枝が刺さっていた。

日常なら笑ってしまいそうだが今は非常事態なので笑わずアークに回復魔法をかける。

シエラ「つ、冷たい……いい、急いでどこかの雨宿りができそうなところ……」

体を触ってみたが氷のように冷たく今にも死にそうな状態だが胸に耳を当てると心臓の音は聞こえているので生きてはいる。

だが、この雨の中では体がさらに冷え危険な状態だ。

シエラ「と、とりあえずどこかに運ばないと!!」

アークを背負うことはできないので近くにあった……おそらく一緒に流れ着いたのであろう布があったのでアークの下に敷いて引張って運ぶ。

シエラ「でも……どこに行けば?」

運べるようになったのはいいがどこに行けばいいのかわからないのかからなかった。

そもそも、ここはどこなのかもわからないので行動ができない。

??「こつちだぞ、体重57kgのデブ」

シエラ「え、今……」

一瞬、森の方から声が聞こえた気がする。

……なぜか少しイラつと来たような気がするが気のせいだろう。とりあえず、音が聞こえた方向に向かって移動する。

シエラ「んしょ、んしょ……」

土砂降りの雨の中、アークを引きずる。

今まで一応、剣の使い方など運動はしていたので動けるがこのまま

だと彼の命が危ない。

だが、運命の女神は微笑んだ。

シエラ「あ、あつた!!」

しばらく進んでいると無理の中にポツンと一軒家があった。

シエラ「よかつた……とにかく、あそこに運ばないと」

カチャ

シエラ「お邪魔します……誰かいませんか？」

中に入ると中は何もなく成果kした痕跡もなかった。

だが、妙に建物自体が新しい気がするが気のせいだろう。

こうして、シエラはアークの回復を始めた。

ベッドの上に寝かせる。

シエラ「あ、でも……今のアークさんって……」

しかしだ

ふとアークを見てみると今の姿は骸骨だ。スカルズ

初めて見た時は魔族の仲間かと疑ったが……本当は今も疑っている。

魔族だったら敵だが今は彼の治療に専念することにした。

シエラ「……まさか、魔族とかじゃないですよね？」

……ところで仮に魔族だとしても自分たち同じ人間の治療法で治していいんだろうか？

そんなことを考えていると

ツカ!!

シエラ「ツキヤ!?!」

突然、アークが光りだした。

自爆かと驚いたが光が収まるとそこには……

シエラ「……え、女の子？」

ベッドの上に女性が寝ていた。

いや、アークの声からして男性であろう……だが

シエラ「女性の私が言うのはあれですが美人ですね」

長いまつげ、すつとした顔の形、髪質感、白い肌……何とも女顔  
負けみたいな美人が寝ていたのだ。

そのせいでうつとりと見惚れてしまった。

シエラ「あ!! いけない!! 治療しないと!!」

??「あぶねえ……肝心なところを忘れるところだったわ」

シエラが入った家が見える草むらの中に先ほどの男がいた。

??「即席で能力で建築と誘導はしたが……」

実はさつきからこの男はシエラの避難場所の設置と誘導をしていたのだ。

建物が真新しいのはそれが理由である。

??「それにしても……こいつはこんな機能まであるとは」

その男の手に持っていたのは……アークのiDROID  
さつき、くすねておいたのだ。

早速、使ってみようとしたが間違えて変なスイッチを押してしまっ  
た。

そしたら、アークが人間に戻っていた。

??「姿が変わった……この世界の住民があんなに変わるのはいり得  
ないから……まさか、転生者か？」

だが、疑問は残る。

??「旧式壺号……てか、僕たちにはそんな機能は載っていないはず」

そういい、自分の左腕を触る。

??「まあ、いいでしょう。しばらく観察を続けますか。……あ、そ  
の前に」

手に持っているアークのiDROIDを握り直しつつぶやく

??「hacking開始」

ほお……メタルギアっていうんですか。

うわ、なんで核兵器があるんだよこの死神。

??「……名前のダサさと言い……よくわからんな」  
まあ、その分だけ面白いんだが。

??「さてつと……解析が完了したら返しますか」  
全く……呆れますよ

??「速く起きてくれませんかねアークもとい壱号？」  
女王武号を助けな  
いと約束の時に間に合いませんよ」

## 百二 爨目 治療

ニゴウと戦ったアークだが最終的に川に突き落とされ敗北してしまった。

だが、奇跡的に「誰か」が川からアークとシエラを救い出した…その次の日

シエラ「……っん」

やたら真新しい小屋の隅の方で今は亡き祖国のシュレイド王国の王女シエラが眠たそうな顔をしながら顔を挙げた。

コキコキと体を鳴らしながら立ち上がる。

シエラ「初めてベッド以外の場所で寝たせいで体中が痛いですね」  
座って寝たので体中が痛い。

だが、今は我慢だ。

シエラ「アークさん？ 朝ですよ？」

ベッドに目をやるとそこにはいまだ眠っている少年が眠っていた。  
彼こそ、世界中で有名になってしまった少年……アークだ。

知った時はさぞかし不気味で狂人なんだろうと思ったがいざ見てみれば美しい少女だった。

いや、少女ではなく少年なのだが。

シエラ「……言わない方がいいですよね」

自分も最初は疑った。

いや、どう見ても女性だもん。

だけど……とある理由で知ってしまったんだ。

彼は全身にケガをしている。

上半身は普通に魔法で治せたが……そう、問題は下半身だ。

別に見なくても魔法で治せるがどこにどれくらいひどいのか見ないどれくらいの回復魔法をかければいいのかわからないのだ。

だから……脱がした。

そして、別に見たくはなかったが……彼の象徴をうつすら見えてしまった。

シエラ（そう、仕方なかったのよ。うん、不可抗力）

心の中で自分にごまかす。

彼が起きた時に謝るのが一番だろうがそれはそれでアーハム帝国と彼の主人の問題になりそうなので墓の下で眠るまで言わないことにした。

窓の外を見れば若干曇ってはいるが昨日の土砂降りに比べれば晴れている。

シエラ（この建物を作ってくれたお方にも感謝しないですね……あれ？）

だが、ここでふと思う。

シエラ（この小屋を作った主人はどこにいるんでしょうか？）  
部屋から見ると建つてからまだ月日は跨いではないであろう。

家具もベッド一つという質素すぎる内装。

昨日の雨でどこかに避難しているのかと考えていると

くうく

シエラ「……あ」

どこからか可愛い音が聞こえてきた。

自分の腹部を触ってみると胃が空腹を訴えていた。

逃げる前で捕まっていた牢獄でも食事は最低限しか提供をくれなかったので空腹なのも当たり前だ。

シエラ「……このあたりで食べれるものって何かないのですかね？」

立ち上がりベッドから離れ外に出ようとする。

この建物の中に食料もあったら嬉しかったがさすがになかったの  
で外で食料を確保することにした。

シエラ「すぐ帰ってきますね、アークさん」

最後に一目寝ている彼を見て扉に手をかけシエラは外に出たので  
あった。

?? 「……行きましたね」

シエラが外に出た瞬間、アークの横に「何者」かが現れた。  
全身を黒い布で覆われフードもかぶっている。

?? 「食料が無くてごめんなさいね？ 僕はこういう能力なので  
室内を見て誰もいないのを確認しフードを脱ぐ。

露わになったその素顔は……

?? 「ふいっ……あく、じめじめする」

雪のように白い髪に赤く細い目……心なしかアークと似ていない  
こともない顔つきだった。

?? 「全く……あなたの主人が今の状況を見たら泣きますよ……」  
彼がなぜかアーム帝国に召喚された時から見ていたが、全く全部意  
味が分からない。

最初は驚きと戸惑いが入れ混じったがなぜ「弐号と一揃に保管さ  
ていたはずなのに」召喚されたのかは置いといて観察を始めた。

?? 「魔人に主人が捕まった時といい、なんか運が悪いっすね弐号？」  
つと言ってもそもそも彼が本当に弐号なのかは定かではない。

?? 「まさか……僕たちの製作者母はなんか機能でも搭載していたのか  
？」

そして、そつとベッドの上で寝ているアークの首に手を添える。

?? 「……オールドタイプ母は初めてですが僕たちと同じはず」

準備はできた。



??「Hacking」

「何者」は己の能力を使う。

ほんと、この世界は謎だらけだ。

彼といい、機能停止中のニゴウが見つかった理由と云い……マジでわからん。

??「さて、結果はつと……は？」

出てきた結果に困惑した。

身体状況：深刻：緊急修理を開始すべき

両腕・右腕、負傷 左腕、健在

両足・右足、負傷 左足、負傷

胴体 内臓負傷

機能回路：57%機能中

記憶修復度100%（損失なし）

能力：異常なし

記憶回廊：ERROR

??「どういうことだ？」

頭の中には？マークで埋め尽くされている。

身体の方は問題はない……だが、能力と記憶回廊がおかしい。

いつも……自分たちを調べたら

能力：機密事項により公開できません

記憶回廊：健在

のはずだ。

??「……いや、こいつが一番最初だからか？」

本来、能力の所は自分たちだったら個々によつて変わる。

このベッドの上でくたばっている男……アークこと旧式壱号だが「こいつだけは特別製」らしい。

なぜ、らしいのかという自分たちを作った製作者<sup>母さん</sup>の残したメモにそう書かれていたのだ。

??「まあ、いい……引き続き観察し続けるか。あ、その前に」

ポケットの中からあるものを取り出しアークのベッドの横に置いた。

手にしていたのはアークのiDROIDだ。

??「あらかた中身見れましたし、返しますね」

中身はすべてこちらにデータは転送させてもらった。

??「……まあ、最も興味深いのはメタルギアなる兵器なんですが」  
自分は今まで姉弟たちの機体の点検などで嫌でも彼らの能力を把握してきたが核兵器は話が違いすぎる。

なんだこいつ？ この世界で核をばらまいて異世界版冷戦でもする気なのか？

??「やめてほしいなマジで。僕らの敵は魔族でもなく別にいるのに……」

まあ、この壱号なのかわからない奴は使わんだろ。余ほどのことがないか頭が狂ったやつじゃない限り。

??「別に僕なら兵器とかだったら即座に無力化することはできるけど……ま、いざとなったら破壊するか。あ、その前に」

何者かはアークに触れると

??「repair<sup>修復</sup>start<sup>開始</sup>」

手が光りだしアークを包み込んでいく。

??「動脈、静脈正常。心臓ショック耐性よし。ショックまで3、2、1」

ツド!!

アーク「……ひゅ」

??「うし、戻りましたね。仮死状態になっていたので元に戻して強制的に寝かせました」

アークの息を吹き返したのを確認する。

??「あとは……問題はニゴウなんですすよねえ」

アークは終わったがニゴウだけ心残りだ。

??「僕って呪いとか魔法に関しては戦力外なんですすよね」  
さて、どうしたものか

「他の同士たち」が起きるのはもう間もなくなのは知っている。

出来ればみんなが起きる前に集合しておきたいが

??「……ここは壺号に任せるしかなさそうですね」

自分がハッキングしてニゴウの中に入って正気に戻すことはできるが魔法による支配からは逃れられることはできない。

ここは壺号とニゴウを戦わせて解いてもらうように仕向けよう。

あ、あとついでにアーク壺号の戦闘データももらってしまおう。

シエラ「アークさーん!!」

??「あ、帰ってきたか」

外から元気のいい声が聞こえてきた。

??「時間帯的にあり得るか。さて、バレる前にとつととおさらばするか」

少しずつ聞こえてくるシエラの足音に慌てることなく能力を使う。

??「invisible」

ザ：ザザ……

発動させるとテレビの砂嵐のような靄がかかった瞬間、そいつは虚空の中に消えるように透明になった。

??「あ、ついでに起こさないとな」

いい加減、アークを起こさないと困るので起きてもらう。

??「どーやって起こす……あ、そうだ」

透明になった状態で寝ているアークの耳元に近づき

?? 「おい、アーク……」

お前の大切なアリス……あの糞勇者のこと催眠で好きにさせられたらしいぞ」

ガバツ

アーク 「ぎっけんな勇者ああ!!」

うわ、ちよろ

ちよろすぎんだろこの死神

シエラ 「ど、どうしたんですかアークさん!」

扉が破壊される勢いで開きベッドが吹っ飛ぶ勢いで起き上がる二人

中々chaosな光景である。

……いや、これはひとつ面白いことを知れた。

?? 「アークは主人がかかると冷静ではなくなる……つか」

キミの弱点、知れてよかったよ壱号?

そういい、そいつはシエラとすれ違う感じで扉から出ていった。

アーク 「あ、シエラ……ここは?」

目が覚めるとそこはどこかの小屋だった。

なんか、新品な感じがするが……とにかく現状確認したい。

シエラ「よ、よかった……全く起きなかったから死んじゃったかと」

アーク「あ、そうか俺ってニゴウに負けて（ズキツ）痛え!!」

シエラ「あ！　だめですよまだ動いたら!!」

アーク「痛ってえ……」

あまりの痛みに目から涙が出る。

あ、そういえば今までサイボーグで痛覚を切っているから当たり前か。

アーク「あく……なあ、シエラ？　あれから結局どうなった？」

シエラ「えつと……多分、あのニゴウですか？　彼女は我々が死ん

だと思っているはずですよ」

アーク「だといいんだが。さて、移動開始するぞ」

シエラ「あ、ダメです!!」

アーク「ぬはあ!？」

立ち上がろうとしたがシエラに首を掴まれベッドに倒されてしまった。

この人……一応、俺怪我人なんだが

シエラ「まだ、ようやく立てるようになったぐらいなんでまだ立たないでください!!　また、傷口が開いて倒れたらどうするんですか!？」

アーク「いや、別に……」

シエラ「その状態で仮にまたニゴウと出くわしても勝てる自信はあるんですか!？」

アーク「いやいや、ないでしょ流石に」

シエラ「……その油断が命取りになるんですよ?」

アーク「せんとときやいい話だろ」

シエラ「さもなきや私の祖国みたいになりますよ」

アーク「……わーたよ、大人しく寝る」

実際の被害者が目の前で訴えるので説得力が高い。

ここは大人しく寝ることにした。

アーク「つち、痛え……」

シエラ「それにしても何ですかあのニゴウと戦った時の姿とか攻撃とか？」

アーク「あく……まあ、企業秘密だ」

シエラ「む、そうですか。あ、何か食べますか？」

アーク「……あ、腹減っているのか？」

シエラ「まあ……恥ずかしながら牢獄にいたころからまともに食べれていないので」

あ、そうだったな

アーク「……あと右目は？」

シエラ「……今は痛みは治まっています」

シエラの右目には糞勇者の細胞の一つが撃ち込まれており左目は美しい色をしているが右目は醜いほど肥大化している。

アーク「治療してやりたいが、全くわからんしなあ」

うーん、ノエルに聞けばわかるかな？

アーク「……あ、そういえば」

ノエル「どうしたんですか？」

アーク「あ、いや……」

そういえばと思いつく。

アーク（アリスに連絡してないな）

前に連絡してないからと怒っていたのを思い出す。

いや、ぶつちやけ言うど任務中に連絡されるのは困るが……今から連絡した方がいいな。

アーク「すまんがシエラ。ちよつと俺の荷物からiDROID……」

手のひらサイズの箱みたいなやつを取ってくれないか？」

シエラ「箱……そんなものありませんでしたよ？」

アーク「え、うそ？」

え、まさか川に流されたのか？

おいちよつと待て、あれがなかったら連絡ができんぞ。

ベッドから起き上がり探そうとしたが

コツン

アーク「ん？ あ、あった」

起き上がった瞬間、手に何かあたり見てみるとそこには自分の iDROID があった。

あ、よかった流されてなかったのか。

シエラ（あれ？ こんなところにありましたっけ？）

アーク「あゝ、よかった……さてっと」

慣れた手つきで iDROID を起動させ主人に連絡する。

シエラ「何をしているんですか？」

アーク「ん？ ああ、連絡……こつちで言う遠距離通話魔法的な奴をしている」

シエラ「え、あれって結構難しい魔法ですよ!？」

あ、そうなの？

まあ、俺って魔法使えないから言えないんだが

アーク（ん？ なんか、この iDROID、反応が悪いな？ 後で

ミラーに点検してもらおうか）

カチカチつと動かしているがなんかロードが若干遅い気がする。

まあ、川に流されたんだからそのせいか。

iDROID を耳に当て待っていると

ブオン

アーク「あ、アリス？ 聞こえるk「いつになったら帰ってくるのよ!!」

開始早々聞こえたのはお疲れなどの労いの言葉ではなく文句だった

アリス『ねえ、アーク!! あなた、すぐ帰ってくるって言ったけどいつになったら帰ってくるのよ!!』

アーク「いやいやいや……あれって『それくらい早めに帰ってくるよう善処する』っていう意味で言ったんだから」

アリス『それでも帰ってきなさいよ!! あと、どれくらいで任務は終わるの!!』

アーク「あく、潜入と情報収集とか終わったから……帰れるぞ?」

アリス『本当!!』

アーク「おう」

アリス『やったー!! いつ帰ってくるの!!』

アーク「あく、多分3日後くらいにつくかなあ?」

アリスは本当にうれしいそうである……が

シエラ「……アークさん」

アーク「あ、どうしたシエラ?」

シエラ「……怪我」

アーク「……」

問題は自分の怪我だ。

今は寝ているので何ともないがさつき立った時、膝の骨が音を立てそうなくらいの痛みが走り……本音を言うのと立つのだけでも辛い。

シエラの魔法のおかげで痛みは和らいでいるが長距離の移動は今ほしくない方がいいだろう。

アリス『あれ? 誰かいるの?』

アーク「あ、いや……えっと、何でもないぞ?」

アリス『……そう? あ、あとアーク……怪我は?』

アーク「……ナントモナイゾ」

アリス『本当?』

アーク「オウ、本当だよ」

アリス『……あまり、怪我なんてしないでね? アークが死んじやうなんて嫌だから』

アーク「はは、俺が死ぬわけないだろ?」

まあ、実際ニゴウ相手に死にかけたんだがな（右腕粉碎、片足喪失  
etc）

シエラ「……」

あと、シエラさん。

俺の目の前で冷たい目で見るのをやめてくれませんか?



アリス『今日、なんかすごく嫌な予感がしてアークに何かあったんじゃないって思ったけど……よかったあ。あ!! 腕とか取れたりしてないよね!』』

アーク「お、おう。してないぞ?」

シエラ「あ、嘘ついた」

黙らっしやい。

今ここでアリスに本当のことを言えばめんどくさいことになるのは明白だ。

アリス『本当に大丈夫よね? あ、えっと、た、例えば片足が飛んで行ったり!!』

アリスさん、エスパーか何にかですか?

アーク「……それだと俺はもう歩けないぞ?」

アリス『あ、そ、そうわね……じゃあ、敵に負けて川に落ちたり!!』  
ねえ、アリスさん?

あなた、絶対ここにいるでしょ? なんで知ってるん?

アーク「あ、うん、せやな」

アリス『? どうしたの?』

アーク「なんでもないぞ」

アリス『そう、あ、あと帰ってくるのはいいけど絶対に!! 世界会議で襲ってきたあのへんな奴だけは戦わないでよ!!』

うっすらと冷汗を感じる。

どこまで俺の事情を的中させればいいんだこの主人。

シエラ「アークさん、本当のことを言わなくてもいいんですか?」

アーク「言えるかよ畜生」

逆に言う必要もない気がするわ。

アーク「んじゃ、切るぞ?」

アリス『あ、あとアーク!!』

アーク「はあ、なんだよ?」

アリス『……無事に帰ってきてよ?』

アーク「……当たり前だろ? じゃあな」

ブオン

シエラ「なんか、恋人同士のような会話ですね」

アーク「黙らっしゃい」

さてと、どうしたものか

アーク「……最短でも何日動いちやだめだ？」

シエラ「一週間です」

アーク「どういたしたものか……」

彼女にはすぐ帰ると嘘をついてしまった。

なんて言って誤魔化そうか……

アーク「ま、とにかく今は回復が先だな」

そして、記憶の中ではさつきやったニゴウとの戦いを思い出す。

アーク（戦艦の主砲が出るとか聞いてないぞ？ いや、アレどう

やって対処すればええんや）

しかも数的にも大量に召喚できると思う。

え、やばない？

アーク（俺のメタルギアで……いや、さすがに装甲が持たんな。現

状最も装甲が厚いコクーンでさえ主砲の一斉照射の前では負けるな）

しかも、S I W Sまで装備されている

どうにか勝てないかと考えていると

くう……

アーク「ん？」

シエラ「あ」

どこかしらから可愛らしい音が聞こえてきた。

ふとシエラの方を向くとおなかに手を当て顔を赤くしている。

アーク「……腹、減ったのか？」

シエラ「……恥ずかしながら」

アーク「あく、なんか食うか？」

シエラ「あ、いえ!! 先ほど森の中に行ってみたところこれがあつ

たので!!」

「素晴らしい、差し出したのは……」

アーク「キノコ?」

シエラ「はい!!」

そこには大量のキノコたちであった。

……が

アーク「なんか色が派手やね?」

シエラ「……気のせいですよ!!」

上の部分が赤いやつだったり青いやつだったり派手なのが多かった。

ヴェノムから聞いたんだが自然界で派手な色をしたものは食べない方がいいって言ってたので（BIGBOSSは除く）

アーク「あと、キノコだけで腹を満たせる気か?」

シエラ「今は緊急時なので仕方なく……」

アーク「待ってろ」

「素晴らしい、自分のiDROIDを操作した（ついでに他の修理もしておくか）」

以前のポイント 15438

生産

即席ラーメン 1×2 2

修理

雑魚サイボーグ 150

スカルズ 500

FN SCAR—H Mk. 17 250

弾薬補給

FN SCAR—H Mk. 17用7.62mm弾 1

P90用5.7mm弾 1

合計ポイント 14534

アーク（あく、とうとう15000切ったよ）

ロリ神からもらった報酬も徐々に消えていった。

……いかな、俺の収入が今じゃ『誰かを殺す』しかない。

アーク「……なんか副業でもしようかな？」

シエラ「あのお、アークさん？　なんですかこれ？」

アーク「ああ、これは俺の世界の…じゃなくて俺の故郷が作った保存食だ」

いかんいかん、アリスとかノエルには言ってはいるがこれ以上俺の正体をばらしてはいけない。

シエラ「……どうやって食べるんですか？」

アーク「ああ、すまんがお湯を出せるか？」

シエラ「は、はい!!」

アーク「んじゃ、作りますか」

シエラに水と火を起こしてもらい準備をする。

学生時代によくしていた鍋ごと器にする。

アーク（怪我人がラーメンを食うって健康的に大丈夫かって思うけど気にしない方向で）

あと、地味に即席ラーメンの種類も豊富だった（今回はチ●ンラーメンと福岡で売ってあるうまか●ちゃんにした）

本来はここでアークの即席ラーメンをさらにおいしく方法を載せたいがアークがケガしているので今回は延期します。

少年、調理中（あ、ところで読者諸君はカップ麺にお湯を注ぐのって料理ってカウントする人たちかい？）

アーク「ほい、できた」

ホカホカと熱い湯気とおいしそうな匂いが部屋中に立ちこもる。

シエラ「な、なんですかこのおいしそうな匂いは!!」

シエラは滝のような涎を流しながらこちらを見てくる。

この世界の保存食は干し肉が主流で干し肉事態そんなにおいしいかない。

アーク「ちゃんと噛んで食べるよ?」

シエラ「はい!! ではいただきます!!」

おまけでついてきたフォークを掴みズルズル…とは言わずに食べた。

シエラ「……なんですかこれ」

アーク「あ、おいしくなかった?」

シエラ「いえ、これって本当に保存食ですか?」

あ、どうやら好評のようだ。

一瞬、シエラは元でも王女さんだから口に合わないのかと

シエラ「アークさんの故郷ってどこなんですか?」

アーク「んー、めっちゃ遠い」

食べながら多少の会話はあったものの空腹という最高級の調味料の影響で5分ですべて食べ終わったのだった。

アーク「……さてと、チョイっと寝ますかね」

シエラ「あ、寝ますか?」

アーク「ああ。あ、あとシエラ?」

シエラ「はい、なんででしょう?」

アーク「あゝ、実は俺の性質上糞長時間寝ないといけないんだが……いいか?」

シエラ「はあ、いいですよ」

よし、許可は得た。

一旦、あの世界に行ってミラーたちにヒントでも得に行くか。こうして俺はベッドの上に寝転がり目を閉じたのであった。

百三発目 俺が何をしたっていうんですか!?

アーク「ん、ついたか」

ベッドの上で目を閉じ念じると浮遊感を感じしばらくして目を開けると海の匂いと波の音を感じた。

アーク「久しぶりに来たな」

久々に来たマザーベース。

見たところ変わりはないようだ。

「お、徹じゃないか!!」

アーク「よお、ボスはどこにいるんだ?」

近くを通りかかったスタッフから声をかけられヴェノムがどこにいるか聞く。

「ああ、ボスなら指令室にいるよ」

アーク「ああ、すまん」

てちてちと海上要塞の上を歩いていく。

途中で兵器を置く倉庫に寄ったが今まで開発したメタルギアたちが陳列していて中々の圧巻だった。

アーク「うん、やっぱりかっこいい」

ミラー「ん? お、アークじゃないか」

アーク「お、ミラー!!」

メタルギアたつを見ていると後方から声をかけられ振り向くとそこには俺を鍛えてくれた恩師の一人、カズヒラことミラーがいた。

アーク「久しぶりだな!! ミラー!!」

ミラー「おお! 元気にしていたか!!」

たたたと久しぶりの再会に喜ぶ兄弟のように万歳のように手を挙げ二人は走り出す。

二人とも満面の笑みで走り……そして、抱き着く

アーク「ザツケンナよ、糞グラサン野郎!!」

ミラー「ごふあ!」

……ことはなくアークがドロップキックして終了した。

アークのライダーキックがミラーの右頬に刺さり飛んで行き地面を転がって止まった。

ミラー「ひ、ひどくないか? 久々の再会なのに……」

アーク「おうおう、よくその口が言えたもんだな」

ミラー「お、俺が何をしたっていうんだ……」

アーク「思い出せないなら左も逝くか?」

俺は今、この目の前にいるグラサン野郎を猛烈にぶちぶちにしたい。

アーク「あく、だめだわ。やっぱミラー、いっぺん死んでくれ」

ミラー「いやいや!? 俺もさすがにこまrだはあ!」

アークは倒れているミラーに近寄ると前までは一般人だったのにMSFとDDスタッフの手ほどきに加えオセロットの指導で慣れた手つきで背後に回りミラーの首を絞める。

ミラー「あ、アーク、いや、トオルさん!? 首が締まってる!? 別に

死なないけど死ぬほど苦しい!」

アーク「ああ! 反省してるか!」

ミラー「ま、まず何をしてったいうんだ!」

ここまで来ると読者諸君もミラーが何をしたのかと思うかもしれないが……彼はとんでもないことをしたのである。

アーク「そう……では、言ってやろう」

そして、アークは口にする。

アーク「ミラー、お前、あの時俺wpこの世界に避難するの妨害したろ?」

ヒント： 七十三発目 「パーティーと事故……そして?」のラストらへんを参照

ミラー「……あ」

アーク「んまあ、よくもやってくれたな畜生」

アリスが酔ってしまったから部屋まで送ったのはいいんだ、うん。でも、まさか一緒に寝るのは予想外だった。

アーク「それにあの時、俺はアリスに………あ」

ミラー「ど、どうした？ 顔を赤くして」

アーク「い、い、いや！ な、な、何でもないぞ!!」

ミラー「？」

なぜか首を絞められているのに不思議そうな顔をするミラーと顔をトマトのように赤くするアーク。

アーク（よ、よかった。あの瞬間は見えないようだな……い、い、い、思い出すだけで顔が熱くなる）

自分でもわかってしまうほど体温が高くなっていくのがわかる。

心臓が張り裂けそうだ。

なぜか頭の中はアリスのことについてばいだ。

アーク「て、てかなんであの時妨害すんだよ」

ミラー「あ、いや、あの夜、MSFとDDのスタッフ同士で野球拳大会をしててな？ その時部下の一人が酒を持ってきたんだが

……そのお、酔った勢いでな？」

いや、平和だなおい

ミラー「……そのお、すまない」

アーク「全くだよ、畜生。俺だつて男だぞ？ 女性と一緒に寝るなんて死ぬほど緊張すんだぞ。」

ただでさえアリスにキスして」

ミラー「ん？ キス？」

アーク「……あ」

その時のミラーの顔は今でさえ覚えている。



あの顔は悪い大人の顔を見本的な表情だった。

ミラー「ほお~~~~~? トオルう? 今、なんていったあ?」にやあ

アーク「……気のせいだろ。幻聴さ」

ミラー「今、キスって言わなかったかあ?」にやにや

アーク「……」

ミラー「ちよつとこれはメデイックたちに報告を（ツガ!!）お?

なんだねアーク君?」

アーク「……話をしましょうかミラー副指令」

先ほどまで首を絞められていたはずなのにもう歩けるほど回復しているとはさすが元軍人って言っつていいんだろうか。

だが、先ほどの墓穴で形勢逆転してしまった。

アークの体中から冷や汗が出てくる。

アーク「取引をしましょう副指令」

アークはこれまでにないくらい真剣な顔でミラーを見つめる。

ミラー「ほう? 内容は?」

アーク「……あつちの世界にいるパリジエンヌみたいな女性の写真集」

ミラー「ほう……悪くない」

よし、なんとかあった。

すまん、あつちの世界にいる…金髪美女たち。

アーク（まあ、そもそもパリジエンヌの基準がわからんが）

ミラー「それにしても異世界版かあ……」

なにやらわくわくしている副指令は置いておいて早速問題を出す。

アーク「なあ、ミラー」

ミラー「金髪……おっと、失礼。なんだ?」

アーク「もし、ミラーはさ。アイオワ級戦艦を沈めるならどうする?」

ミラー「…… どういう状況だ?」

アーク「状況とかは関係なく、単に沈めるならだ」

ミラー「戦艦…第二次世界大戦だったら潜水艦からの魚雷か空爆で

やるが……なんだ？ そっちの世界にIowa級クラスみたいな化け物でも出たのか？」

アーク「いや、たぶんそれ以上にやばい物」

ミラー「日本風に例えるなら？」

アーク「……艦○れの艦娘が最新装備を装備して人類に牙をむいたVerかな？」

ミラー「あく、わからんこともないな」

アーク「んで、どう対処する？」

ミラー「……サイズは？」

アーク「人間大」

ミラー「装甲・装備とかは？」

アーク「なぜか戦艦の主砲と機銃を制限なしに召喚してぶっ放してくる。装甲は彼女自身はないけど主砲で防いでくるし……」

ミラー「ふむ……てか、彼女？ そいつって女性なのか？」

アーク「おう。あ、言っておくが金髪ではない」

ミラー「いや、それはどうでもいいんだが……わからんなあ」

アーク「え？」

ミラー「いやだつて、普通人間一人で戦艦級の敵とタイマンで戦うなんて無理があるぞ？」

アーク「え、でも……スネークは一人でヘリとか戦車」

ミラー「いや、ボスを基準にしてはだめだ」

あ、そうか

ボスって裸でボス戦するような人やったな。

ミラー「月光たちを召喚して戦うとかは？」

アーク「……無理があるんじゃないかね？ 手数では圧倒的に負けている自身はあるぞ」

ミラー「そこは誇ってはいけない気がするんだが」

あ、言っておくが核兵器もNGだ。

特定の地域一帯を破壊するのならもってこいだが、人サイズの敵を探して撃つなんて大変だぞ？

それに残党に銃の使い方を教えているほどの知識量なら核ぐらい

は知っているし……あと、何より

アーク（なんか殺したくないんだよなあ）

心のどこかであるの敵、ニゴウの顔を思い浮かべる。

もしかしたら自分と同じ転生者かもしれない。聞きたいことがたくさんあるんだが……本当はよくわからない。

ミラー「あ、あとトオル」

アーク「なんだ？」

ミラー「ここ最近のことなんだが……iDROIDを何かの端末につなげたりとかしたか？」

アーク「？ いいや？」

ミラー「……そうか」

アーク「何かあったのか？」

ミラー「……先日のことなんだが、このマザーベース内のデータがどこかに漏れたようだ」

アーク「はあ？」

ミラー「そこで聞いてみたんだが……知らないか？」

アーク「知らないなあ……まあ、大丈夫だろ」

第一、この言葉は前世の世界とは違うから大丈夫だろ。iDROIDに書かれているのはほとんどが英語だし。

第二に技術とかなから知っても豚に真珠だ。

アーク「それにミラー、だいたいこんなファンタジーな世界のどこにハッキングするものがあるんだ？」

ミラー「そうか……俺の気にしすぎか」

アーク「んじや、俺はヴェノムにヒントをもらってくるわ」

ミラー「ああ、じゃあな」

ミラーと別れマザーベースの指令室に向かおうとした瞬間。

トン

オセロツト「よお、アーク」

アーク「え、オセロツ（ツガ）とおおお!?」

背後から誰かに呼びかけられ振り返るとそこには自分の教官の一人でもあるオセロットがいた……が

ズシャアアアアアアン!!

アーク「ごへえ!」

あつて早々に肩をつかまれ思いつきり投げ飛ばされた。

あ、そういえば初めて会った時もこんな感じだったなあ……

アーク「い、いってえ……急になにすんすかオセロット教か(ガキツ)ああああa a a a a a a a!」

地面とキスした後、起き上がろうとしたがオセロットはすきを与えずそのままアークの腕をつかみ十字固めで抑えた。

アーク「痛い!? 痛いっすつて!! 腕が!! 腕がもげるって!!」

腕からなんか折れそうな音を鳴らしながら抑えられているのでたまらずアークも抵抗するが動くほど痛みが増すばかりだ。

アーク「なんすか!? 何か、俺やつちやつたんですか!」

オセロット「……」

アーク「まさかの無言!」

やめて無言つて、それ一番反応に困るやつ。

オセロット「さつき、ミラーとじやれ合っていたようだが……楽しかったか?」

アーク「え、入れてほしかったんすか?」

オセロット「違うそうじゃない(即答)」

こほんと咳払いをしてオセロットが話す。

オセロット「お前、ミラーに何をしたか覚えてるか?」

アーク「え、なんかまづかったですかね?」

オセロット「いや、仕方ではないんだが……まあ、いい。では、今の状態になった心当たりはあるか?」

アーク「……ないっすねえ」

オセロット「ほう?」



ここでようやく結論が出た。

あ、この人、俺がしたりボルバージャグリングのことで怒ってるわ。そして……最悪の瞬間が訪れた。

ミシミシ……

ゴキツ

アーク「……あ、あれ？ お、オセロットさん？ なんかに力が入らないのと激痛が走っているんですが？」

オセロツ「ああ、脱臼させた」

アーク「……」

え、脱臼?????てそんなコンビニ行ってきた感覚で言うものだけ？

オセロツ「あ、それにせつかくだ。戦場で脱臼した際の応急処置も今実践で行こうか」

アーク「え、今俺がしているんですよ？ 救護班呼んでくれませんか？」

オセロツ「そうか……ついだ」

するとオセロツは腰から二丁のSAAを取り出し二つとも銃口をこちらに向けてきた。

オセロツ「アーク、お前。あの時失敗したんだよな？ 喜べ、今

から目の前で本物を見せてやる」

アーク「え、いや、なんで銃口をこちらに向ける必要性が？」

オセロツ「いやあ、どっちだろうなあ？ 俺が引き金を引くスピードとお前が治療を完了するまでの速さは？」

アーク「え、でも……銃弾は一発ですよ？」

MGS3のリボルバージャグリングは一発だけ銃弾が入って運ゲーなんだが

オセロツ「ん？ 何を言っている？ 全弾込みだぞ？」

わああ、一回でも引き金を引いたら死ぬやつじゃんソレ。

オセロツ「やり方は教えてやる。早く飲み込め。一回でも失敗したら引き金を引く」

アーク「喜んでします!!」

そのあと、骨を動く痛みに耐えながら訓練を受け、無事に合格をくれた（実際に骨が脱臼したら病院に行きましょう）

あと、なぜカリボルバージャグリングの訓練を受けさせられた

あ、ちなみにニゴウの対策について聞いてみたら「ボスに聞け（完）」で終わった。

ヤマネコの大將おおお……

アーク「つたく、結局ボスに聞くしかないのか」

まあ、ああいう想定外にはボスに聞けばいいもんな。

今、思い返してみれば戦車とかメタルギア相手によく勝てたなボス（十息子たち+a）

アーク（さて……ニゴウ相手にどうしようかな）

マジでどんな原理だあれ。

まあ、魔法ですって言っ飛ばせば終わる話だが……

アーク「ん……魔法ねえ」

なんかで読んだことがあったなあ……確か、魔法って科学的には証明できない現象のことをいうとかだっけ？

アーク「俺にも使えたらなあ」

マジでなんで使えないんだらうな俺？

マザーベースの艦橋の上をとことこと歩いていてどうするか考えている。

アーク「ん……あ」

するとある一人に心当たりができた。

メタルギアの世界で一番魔法っぽい攻撃をしてくる奴が

アーク「……あってみるか」

懐からiDROIDを取り出し操作を始めた。

開発を選択ししばらく待っていると体が浮くような感覚に襲われ視界が真っ暗になった。

以前のポイント 14534

開発

サイコマンティス 1000  
合計ポイント 13534

アーク「……ん、ついたか」

目が覚めるとそこは豪華そうな椅子に机、椅などがあつた。

確か……ここはMGSの所長室だったけな？

だったらあの人もここにいるだろう。

アーク「おい、どうせいるんだろ？」

所長室で一人何もない空間に向かって話しかける。

すると

コオ コオ

どこからかガスマスクで呼吸する音が聞こえてきた。

だが、一方方向からではなく辺りから聞こえる。

アーク（相変わらず、気味が悪いな）

不気味さの余り身震いをする。

そして……呼吸音が自分の背後から聞こえるのを感じ振り返ると

……そこにいたのは

サイコマンティス「こうして会うのは初めてだな……外の人間『ブ  
レイヤー』」

アーク「よお、サイコマンティス」

元FOXHOUNDで超能力者であるサイコマンティスがそこに  
いた。



## 百四発目 意外と？

ニゴウにぶっ飛ばされて川に落とされついでに骨も骨折したか何とか無事に生還できたアークたち。

そのあと、ヒントがないかとVR世界に来てサイコマンティス様を開発したのであった。

アーク「んでなんか方法ないんすか？」

サイコマンティス「無いな、諦めろ」

鋼鉄の歯車の使い魔 終!!

アーク「ちょ、待て待て待て。無い!？」

サイコマンティス「ああ、ほぼ無い」

現在、アークとサイコマンティスはMGSの所長室の中にあつた高級そうなソファの上で対面していた。

アーク「え、ちょ、第三の少年さん？ あなたのPKで何とかならないんすか？」

サイコマンティス「……お前、私を神かと思っているのか？」

アーク「いやだつて、MGS：TPPのサヘラントロプスを動かしてたじゃないすか」

サイコマンティス「……あれでも割と大変だったんだぞ」

アーク「海の上をアレ担いで渡つたのに？」

サイコマンティス「あれは私がまだ少年で……つてお前、例の作品<sup>MGS：TPP</sup>のサヘラントロプス戦の時にお前がやったこと覚えてるぞ」

アーク「え、何が？」

サイコマンティス「……私がお前にサヘラントロプスを突撃させようとしたときにしたことだ」

アーク「あ、あれ？」

アレというのはさつきも言ったサヘラントロプス戦のことで戦争中にサヘラントロプスの目も前に待機しサヘラントロプスが体当たりしようとしたときに一瞬だけ第三の少年<sup>サイコマンティス</sup>が出てくるからその時に

射撃するとサヘラントロプスが怯むという設定があるのだ。

サイコマンティス「アレ、ギリギリのところまで弾道をずらしているんだが……よくもやってくれたなトオル」

アーク「あ、いや、だって、サヘラントロプス怖いし……あと、怨念ついでにPKで首絞めようとしなくてくれませんか？」

サイコマンティス「おっと、失礼」

キリキリと首が締めりかけたが寸のところまで解いてくれた。

アーク「え、で……それと無理な理由になんの関係が？」

サイコマンティス「要するにだ。あいつはほぼ無限に銃器を召喚して撃ってくるんだろ？」

アーク「おう」

サイコマンティス「おそらく、数の暴力で私が負ける」

アーク「……おうふ」

サイコマンティス曰く、あの数の銃器（と主砲）の中で一人だったら何とかできるが別の誰かがいてそいつも守りながら戦うとしても防戦一方になるそうだ。

一応、射撃された銃弾を止めるという荒業ができるが、あの銃弾の中では20秒ほどが限界らしい。

アーク「……普通にすごくね？」

でも、20秒かあ

サイボーグの全力ダッシュなら常人よりかは速いから届くかもしれないけど……あの二ゴウ、普通に移動とかできるもんなあ。

アーク「あ、じゃあさ洗脳とかできるの？」

目の前にいるガスマスク男の初登場したMGSの設定を思い出す。

MGSで出てきた敵兵はサイコマンティスの洗脳で従わされていた。

力で無理ならつとめて提案してみたが。

サイコマンティス「それも希望は薄いな」

マジかよ。

アーク「なんで？」

サイコマンティス「言っておくが「できない」ではなく「成功する

可能性が低い」程度だ」

アーク「えつと？ つまり？」

サイコマンティス「あいつ、そもそも最初から洗脳されている」

アーク「はあ!？」

驚愕の余り、ソファから立ち上がる。

サイコマンティス「貴様の記憶を少々見させてもらったがあの女の首に変な模様が見えた」

あ、そういえばあつたな

サイコマンティス「入れ墨にしては少々違和感があつてな……それに」

アーク「それに？」

サイコマンティス「……あいつ、本当に人間なのか？」

アーク「いや、銃を召喚してなんか形態変化して殺そうとしてくるのが人間と思うか？ (正論)」

サイコマンティス「あ、そういう意味ではない」

あ、すみません

サイコマンティス「なんといえはいだろうか……あの娘……なんか変だなと」

アーク「というと？」

サイコマンティス「あの娘の精神、そして体……人間ではないな」

アーク「だから、どういう意味だよ」

サイコマンティス「あの娘の体の半分は人間だが、もう半分が違う」

アーク「え、なに？ あいつ、ハーフ的な？」

サイコマンティス「そうなるな」

あ、だから人間ではないって言ったのね

アーク「ちなみに……そのもう半分ってなに？」

サイコマンティス「そうだな……ちようど」

するとサイコマンティスはソファから立ち上がりプカプカと浮かびながらこちらに近寄ってきた。

ツガ!!

アーク「んべ!？」

そのままアークの顔面をつかむ。

サイコマンティス「……やはりか」

アーク「にやがでしゆか!？」

サイコマンティス「……おい、アーク」

アーク「ひゃい？」

サイコマンティス「貴様の記憶を見たので念のために聞いておくが……その体はお前のではないんだよな？」

アーク「は、はい」

ガスマスクの奥からギリギリ見える彼の瞳がアークの眼をじつと見つめる。

余りの迫力にアークは固まってしまう。

嘘はついてないぞ、うん

この世界に転生した時、まず最初に目に入ったのがどこかの暖かそうな家庭とかではなくなんかの工場みたいな場所だった。

……今思い返してみれば、あそこって結局どこなんだ？

サイコマンティス「率直に言おう……お前、お前の体の構造があの娘と一緒になんだ」

アーク「へ？」

一緒？

アーク「なんすか、その……あいつと俺が家族ですよみたいな言い方」

サイコマンティス「……本当だといえば？」

アーク「いやいや、ご冗談を」

冗談だつてほしい

まさか、あいつが俺の家族とか親族なわけあるか。

前世では親が早く逝ってしまったから親しい親族なんてそんなになかったはずだ。

サイコマンティス「言っておくがお前でのではなくその体のだ」

あ、そっち

サイコマンティイス「あの娘と貴様の体の要素が酷似している部分のせいで私の催眠が効かない……アーク、お前その体、何なんだ？」

アーク「こつちが知りたいですよ」

サイコマンティイス「仕方ない、少しいいか？」

アーク「え、なにすんすk（グワシ）がはあ!？」

サイコマンティイスはアークの頭を鷲掴みすると手に力を籠めだした。

なんか、若干爪が刺さっている気がするのには気のせいだろう。

サイコマンティイス「すまんが、記憶を漁らせてもらうぞ」

アーク「だったらもう少し優しくできないんすk（バキツ）あはあ!？」

アークは講義するがサイコマンティイスは無視しさらに手に力を入れる。

サイコマンティイス「これは…違うな。これは……貴様の学生時代か」

アーク「人の記憶を漁るのやめてくれませんか!？」

なんか頭をワシヤワシヤされている。

サイコマンティイス「ときメモは……やってないのか」

アーク「あれって面白いんすか？」

サイコマンティイス「お、私としては是非やってほしい」

ちなみに作者はときメモをやったことがないです

サイコマンティイス「ほかには……うわ（引）」

アーク「え、どうしたんすか」

なぜか急にサイコマンティイスが俺から離れる。

サイコマンティイス「アーク、お前……いい趣味してんなあ」

アーク「ほい？」

サイコマンティイス「競泳水着ニーソに裸エプロン（ズドオン!!）」

アークはサイコマンティスのソレを聞いた瞬間、目の前にいるガスマスク男の両手をつかみソファに投げ飛ばし間髪入れずにナイフを取り出し首に添えて押さえつけた。

サイコマンティス「おやおや？ どうしたのかね死神殿？」

アーク「サイコマンティスさんや……世の中には言っていないことと言っではいけないことがあるんだ」

サイコマンティス「お、まさかのさつきのは本当なのか？」

アーク「んなわけあるかい!!」

サイコマンティス「しかし……さつき、高校時代の記憶を見ていたんだが」

アーク「はいこの話はやめましょう!! はい辞め辞め!!」

サイコマンティス「……否定はしないんだな」

アーク「んで!! 結局、どうだったんですか!!」

サイコマンティス「あ、もう少し待ってろ」

改めてサイコマンティスはアークの頭に手をそれてアークの中を見始めた（今度は優しくつかんだ）

アーク「これ以上、俺の中を見んなよ」

サイコマンティス「わかってる」

これ以上の性癖暴露はまずい

あ、言っておくがさつきのは……まあ、うん。知らん!!

まあ、とにかくもうバレないようにしよう。特にアリスにはバレたくない。

アークが勝手に一人心中の中で決意を固めているうちにサイコマンティスのほうはというと

サイコマンティス（ん？ なんだこれは？）

自身の能力でアークの中身を見ているうちに一つの記憶を見つけた。

アークの中身でもある鋼宮 徹はおよそ19年ほど生きて死んでこの世界に転生したが、その記憶はやたらと古いものだった。

サイコマンティス（私も昔、FBIでサイコメトラーの担当で様々な事件を見てきたが……なんか古いな）

十年やに二十年前のものではない、おそらく数千年前の記憶だ  
サイコマンティス（どれ、見てやろう）

お得意の超能力でその記憶を読み取ろうとした

ざあざあ……

サイコマンティス（これは……例の記憶か）

サイコマンティスは現在、アーク（の体）の記憶の中にいた。

さて、どれほど悲劇的なものと覚悟しておいたが

サイコマンティス（……どこだここは）

FBI時代では残虐な事件は多々にあった。

強姦、復讐、殺人、自殺……どれも言葉にできなかつたが今いる場

所はその真逆だった。

サイコマンティス（私のいたところとは正反対だな）

血だらけの床や壁の代わりに生々しく生える一面の野原、薄汚れた空  
の代わりにきれいな夕日のある空、悲鳴の聞こえず小鳥たちの囁りが  
響き渡っている。

サイコマンティス（アークは転生者で前はJAPAN育ちだったし  
こんな好き好んで少年が一人森の中に入るとは考えにくいな）

周囲を見渡していると

カサツ

サイコマンティス（ん？）

背後から何かが聞こえ振り向くと同時に身構えた

そこにいたのは

サイコマンティス（……女の子供？）

木陰からひよこりと子供の顔が出てきた。

身長は140くらいであろうか？ まだ、保育園の年長さんくらい  
の大きさの子供がそこにいた。

だが、ニゴウではない。

サイコマンティス（あくまでもこれは記憶の再生、あちらがこちら

側の存在を察知はできないはずだが……)

?? 「あ、パパー!!」

父親がいるのか

目の前にいるサイコマンティスを無視し少女はそのまま草原のほうに走っていった。

?? 「あ！ 零華!! どこ行ってた!!」

?? 「あっちにね!! どんぐりさんを見つけたの!!」

?? 「はあ、せめてどこかに行くって言ってからにしてくれ」

?? 「ねえ、パパ!!」

?? 「ん？ どうした？」

?? 「どんぐりって食べれるの!？」

?? 「……いやあ、パパってお城育ちだから知らないけど……ママのいた世界では食べれるって言ってたな」

?? 「えー！ ほんとー!!」

サイコマンティス（くそ、見えんな）

父親の顔を確認しようとしたが夕日のせいでよく見えなかった。

……だが

サイコマンティス（変な髪飾りをする父親だな）

長い銀髪を生やした父親だが頭に二本の角みみたいな突起が印象的だった。

?? 「あ、二人ともー!!」

?? 「あ、ママー!!」

どうやらこの少女の母親も来たらしい。

?? 「お、おい結菜!? す、すまんすぐ戻ればよかった」

?? 「いいのよ、私が見てないで勝手に私たちのお姫様が行っちゃったし♪」

?? 「でも……ほら、腹の子が……」

夕日のせいで母親の顔が見れないが腹部が丸く膨れていた。

?? 「大丈夫よ！ 今日はなんか調子いいし!!」

母親の姿は見えないが赤い眼鏡が見えた。

?? 「ママ？ だいじょうぶー？」



?? 「大丈夫よ。ほら、このお腹の中に零華の弟ちゃんがいるよー」  
?? 「おとうとー!!」  
サイコマンティス（四人家族か）  
はたから見れば平和で幸せそうな家族に見える光景だった。  
サイコマンティス（さすがに情報が少なすぎる。もう少し情報を集めなければ）  
……そんな時だった。

消えろ

サイコマンティス 「ぐあ!?!」  
アーク 「ツ!?! おい!?!」  
突然、サイコマンティスが頭を抱えて床に倒れこんでしまった。  
彼のガスマスク越しから過呼吸のような咳が聞こえてくる。  
アーク 「おい!! サイコマンティス!! おい!!」  
サイコマンティス 「だ、大丈夫だ……」  
倒れたサイコマンティスの肩を貸しソファに座らせた。  
アーク 「お、おい本当に大丈夫なのか？ 汗がすごいぞ？」  
サイコマンティス 「……安心しろ、もう大丈夫だ」  
アーク 「そうか……それで？ 何が見えたんだ？」  
サイコマンティス 「……一組の家族、一人の少女と腹の中だが弟が一人」  
アーク 「あゝ、俺じゃないな」

サイコマンティス「そうか……」

アーク「……え、終わり？」

サイコマンティス「そうだが？」

アーク「……え〜」

サイコマンティス「なんだ？　あとは変な髪留めをした父親と赤い

眼鏡の母親ぐらいしかないぞ？」

アーク「……赤い眼鏡？」

一瞬、眼鏡に引つかかったが気のせいだろう。

アーク「んで、結局俺の記憶も何もわからないと」

サイコマンティス「そうだ」

マジかよ

アーク「ますますわからなくなってきたなあ」

サイコマンティス「結局お前、ニゴウ対策とかどうするんだ？」

アーク「……あ」

あかん、すっかり忘れてた。

アーク「やつべ、どうしよう」

サイコマンティス「……仕方ない、これは一番やりたくない方法だったが」

するとサイコマンティスは懐からいくつかのカセットを取り出した。

アーク「そ、それは!!」

サイコマンティスの手にあったものは……

サイコマンティス「……なあ、アーク。君もときメモの沼につからないかい？」

『ときメモ』や『MGS1, 2, 3, 4, TPP』…主に小島監督が関連する作品のゲームカセットがそこにあった。

アーク「……お前、要は現実逃避だろ」

サイコマンティス「いや、正確には作者がそろそろ限界だからだ」

アーク「え、なんて？」

サイコマンティス「おつと何でもない」

そういいながらもどこからか持ってきたテレビとプレイステー

シヨンシリーズを準備し始めたサイコマンティス。

アーク「……まあ、いいか。今はゆつくりしたいしな」

若干現実逃避味があるが今ぐらいいいだろう。

そう思い、アークは準備を手伝い始めた。

## 百五発目 泣く狼

静かな城に廊下を月明かりが照らす中、一人の少女が足をふらつかせながら歩いていった。

……ツカツカツカ

ニゴウ「……」ふらふら

月の光で雪のように輝く髪とシルクのように滑らかで柔らかそうな肌がなんとも幻想的だが……今じゃその面影もなかった。

首相の「お仕置き」から一週間……いや、もしかしてそれ以上かもしれないが長い間あの虫だらけ部屋で放置させられた。

白い肌は醜いほど腫れあがり髪も乱雑にボサボサになっている。

蟲たちの毒が体中に回っており思考と体の感覚がうまくつかめない……そのせいで廊下をまっすぐ歩けずあっちこっちに千鳥足で歩いている。

ニゴウ「……眠たい」

体中が氷のように冷たい。

今、他人が自分の肌を触れば死んでいるのでは？と勘違いするほど冷たい。

今すぐにも床に倒れて寝たい。

ニゴウ「でも、ここで寝るとマスターに怒られますね」

自分はマスターの道具だ。

例えば彼の視界に入っても邪魔なら消えないといけない。

ニゴウ「それに……6時間後には別の任務があります」

出された瞬間、自分の主人から発せられたのは反省したかとかではなく次の任務内容だった。

だが、今回は珍しく猶予をくれた。

ニゴウ「早く……次の任務に備えないと……」

ふらつく足でようやく自分の部屋に到着した。

中は相変わらず物置のような感じだが。

ニゴウ「……」ぱたん

部屋に到着したと同時に床に倒れるニゴウ。

倒れた音も聞こえないほど体重が軽くなった気がする。

ニゴウ（……寒いなあ）

床は石でできており少しも温かみを感じない。

ニゴウ（そういえば……なんで私はあの時？）

床に転がりながらニゴウは自分の右手を見つめグーパーとする。

「あの時」というのは自分とアークが戦った時である。

まさか自分の第二形態まで出してようやく倒せたのは驚いた。

しかも、直接倒したのではなく地面を破壊し川に突き落とすことで。

ニゴウ（さすがに倒せた……はずです）

マスターから殺すよう命令され実行できたのはいいことだ。

だが……何だろうこの……心の中がぼっかり空くような感じは。

ニゴウ（それは今はどうでもいいです。問題はなんであの時……）

川に落ちていくアーク、あの時勝つたなど確信した。

だが、落ちていくアークに向けてなぜか手を伸ばしてしまった。

それはまるで助けようと……

ニゴウ（そんなことはない、ないはずですよ……）

気のせいだと自分に言い聞かせる。

ニゴウ（それより、早く……治療しない……と）

体に鞭を打って起こす。

さすがに自分は常人より頑丈らしいが体の毒は解毒しないと危険だ。

ニゴウ（なにか治療できるものは……）

とりあえず部屋に治療に使えそうなものはないかと探す……が

よくよく考えればこの部屋には使い古した包帯しかない。

包帯はせいぜい傷を治すくらいで毒は抜けない。

ニゴウ（でも……眠いです）

手足の痺れがさっきのよりもひどくなっている気がする。

ニゴウ（まあ、寝れば治るでしょう）

治すことは諦めそのまま寝ることにした。

ニゴウ（でも……死神、生きていてほしいですね）

別に死神がどうこうっていうわけではないが、妙に彼が気になる。

ニゴウ（まあ、いいや……おやすみ世界）

そつと目を閉じ眠りの中に精神を投げた。

少・し・ず・つ・心・臓・の・音・が・遠・く・な・り・弱・く・な・つ・て・い・く・中・、ニゴウは眠った。

?? 「いやいやいや、治療しろよ」

…つと思いきやニゴウのすぐ隣に一人の男が急に表れた。

ニゴウ「だ…れ…?」

眼を開けるが霞んで見え声もよく聞こえない。

おそらくあまりの眠気に感覚が鈍くなっているんだろうとニゴウは予想するが実際は毒のせいで見えただけだ。

?? 「え、なにこの兄妹？ あアの死ク神を助けた時アといいもう少し自分の命、大切に考えよ？」

ニゴウの隣に現れた男はアークを川から引つ張り上げた張本人だった。

相変わらず黒いフードをかぶっており姿はわからないがその声は呆れと心配が混ざったような声だった。

?? 「さてと…うわ、傷だらけやん」

ニゴウの隣にどかりつと座り彼女に触れ確認する。

?? 「えーつと、回復魔法……あ、俺、使えないんだっけ」

あちやーつと頭を抱えるフード男。

こういう時にこの世界の力が羨ましい。ま、仮に使えたら今すぐにもニゴウの呪いを解きたいものだが。

?? 「あ、そーいやあの死神、ここに侵入したときアレ置いていったよな」

あれから自分の能力でアークの位置や行動は逐一監視していたが……この部屋にはアレがあるはずだ。

?? 「てかこの部屋汚!？」

立ち上がり部屋中を探すが相変わらず使い古した包帯が出てくる。

ついでにと掃除をしつつ探していると

?? 「お、あつたあつた」

部屋の隅の目立たない場所にそれがあつた。

それは……アークが生成しておいた救急箱だった。

彼がニゴウの部屋に侵入したときに置いていったものだ。

?? 「いやー、何百年ぶりだろ。あなたの治療をするなんて」

箱を開け色々取り出す。

綺麗な包帯や薬を取り出しニゴウの体に巻き付いていく。

?? 「さてと……これであとはしばらく安静……つて言ってもどうせあ

の首相がそうはさせないんだろうな」

あとは床で横になっておけば完璧なんだがこの仕事現場を思い出して落胆する。

そーいやここ(ニゴウにだけ)ブラックな組織だったな。

?? 「んー、どしよ。もう自分で首相を殺そうかいな」

さてこれからどうしようかと考える。

こういう洗脳系の魔法は術者を殺せばもとに戻るはずだが……この洗脳魔法が重度なものでなければ決行したいが仮にそうだったら術者を殺しても意味がない。

だったら捕まえて解呪させたいが大人しく解いてくれるわけもない。

?? 「だったら拷問……でもなあ」

実をいうと自分はこの数百年人間とまともに話していない

あ、そこ。究極のコミュ障とか言うなよ。

拷問は別に痛めつけて離させるっていう手段もあるが……正直、面倒だ。

?? 「こういう時に『Knight』がいればなあ……あんの寝坊助が……あ」

あの『Knight』がいれば「何それ面白そうじゃんwwwwww」って快諾するんだがなあっと思っていたら一人適任がいたの思  
い出す。

?? 「あの死神にやらせばええやん我え!!」

よくよく思い返せばあの死神、よく尋問とか拷問するマンだったのを思い出す。

?? 「んじゃ、どうにかして壺号を首相と合わせて……って感じかな」

よし、今後の予定ができた

できたのなら行動するだけだ。

?? 「あ、でも流石にニゴウの休暇期間は伸ばしてもらおう」

さてと、どうやってあの屑野郎を騙してやろうもんか

うーんっと考えていると

カツン…カツン……

?? 「ん？ 誰か来たか」

廊下のほうから誰かがニゴウの部屋に来る足音が聞こえてきた。

?? 「はあ…invisible」

すぐさま透明化し部屋の隅で待機する。

カツン…カツン……

「うおーい、ニゴウ？ ご主人様が来たぞお？」

入ってきたのは首相の幹部の一人だった。



片手のは酒の入ったコップ：酔っぱらっているんだろう。

「うお〜い、ニゴウ？」

ドカドカと勝手に入ってきた五月蠅く叫ぶ。

これがアパートとかだったら秒速で苦情案件だが残念ながら近所さんはいない。

「うおい!! 起きろ!! 主人は帰ってきたのになんも反応はないんかあ!!」

幹部は叫ぶがニゴウは起きない（一応、さつき治療ついでに睡眠薬を投入させておいた）

「つち、おい起きろって言っているんだ!!」

業を煮やした幹部が腰からM1991を取り出し引き金を引こうとしたが

?? 「五月蠅い、黙れ」

「もが!？」

透明化していた男が背後から幹部に襲い掛かり口を手で塞ぎ首を絞める。

首を絞められたせいか幹部の酔いは冷めじたばたと抵抗するが

?? 「楽に死なせてやるよ」

ここで彼の能力の応用技が発動する。

パキ…パキ…

発動するところからか金属音が静かに鳴り響く。

そして、生成されたソレは幹部の口、鼻、皮膚から体内に吸収されていく。

「あ…あ…」

?? 「じゃあな、せめて最後は快樂の海に沈んでいけ」

鼻から入ったそれは体中に回っていき…最終的に脳まで広がった。

そして…

ザシユ

体中にある神経、脳幹を破壊した。

「あひゃ♡」

破壊する際、快樂の情報をキャパオーバーするほど流し込み痛みを消して殺した。

?? 「ここには人がいるから静かにしてくれ」

そつと音が鳴らないように死体を下す。

?? 「ニゴウは……起きてないね」

ふーつと、安心する。

?? 「あ、でも死体は……まあ、いいか」

流星にこの死体を外まで運んで隠すなんてリスクがあるのでこの部屋に隠すことにした。

?? 「ついでに首相にニゴウの部屋の交換を申すか」

死体を部屋の目立たないところに置き、ついでにそこら辺のものをかき集めカモフラージュする。

?? 「……さて、すまんが君の役は借りていくよ」

そういい、殺したてはやはやの死体の顔に触れ

?? 「P r e t e n d e r 《変装》」

すると男の体がテレビの砂嵐に包まれ、晴れているころには

?? 「うーん、やっぱり違和感があるなあ」

死んだはずの幹部の姿がそこにいた

だが、声は先ほどの男と変わらない。

?? 「あと声も……c o p y 《声帯変更》、アー、アー、アー、よし」

何度か声を出し、幹部そっくりの声に変わった。

?? 「んじゃ、行きますか」

頭を搔き、来た時に持っていたコップを拾い上げ顔も酔っぱらったように赤くするように設定した。

?? (首相葉野郎にあつて何とか言いくるめでニゴウに休暇を与えつつ他の兵士にバレないように情報を取集するか)

ため息を吐きつつも大切な仲間のために敵の元へ向かう。

?? 「あ、そうだこれ」

つと行く前にとアークが生成した救急箱の中に入っていた紙を寝ているニゴウの隣に置く。

そこに書かれていたのは

無理すんなよ

つらいならこつちに来てもいいぞ

?? 「いや、オカンかよ」

都会ではたいている息子を心配する母親かな？

まあ、別にあの二人が平和的に会うならこちらも好都合だ。

そつと隣に紙を置き廊下に出る。

?? (どうか無事でいてくれよ……式号姉さん)

一方アークは

EVA『かかってきなさい!! このデクノボウ!!』

サイコマンティス「ほれ、今2時間を過ぎたぞ」

アーク「うっそだろお前!?!」

MGS3のRTAしていた

何やってんだ死神って思うかもしれないが、これは今開発している奴の開発完了までの時間つぶしだ。

ちなみに、現在MGS3のラストに出てくるシャゴホット後半戦中(ホモ大佐ヴォルギン大佐が上に乗っているアレ)だ。

テレビの前でコントローラーを構えるアークと横でサイコマンティスが観戦と計測をしている。

アーク「ボニゾヴィエ倉庫のジ・エンド暗殺ルートで来たのにもう  
かよ!？」

サイコマンティス「いや、そのあとお前がマシン・ナガン縛りで行  
こうとするのが悪いだろ」

アーク「くそ!! さすがにかのBIG」SARUのようにはいかな  
いか!!」

ちなみに作者もガチで一回やってみたんですが普通に無理でした。

麻酔たばこを装備し後ろに移動しながら機銃を避けるという、現実  
離れた技を披露しながら戦っていると。

ピピッ

サイコマンティス「ん? おい、開発が完了したらしいぞ」

アーク「このタイミングでかよお……」

開発が完了した知らせの音がiDROIDから鳴っている。

あれからニゴウ対策はどうしようかと悩んだが……結局、この結論  
に至った。

目には目を歯には歯を!!

数の暴力には数の暴力を!!

え? 脳筋? 何のことやら!! (ヤケクソ)

ニゴウの『Bullet Queen』に対抗できそうなキャラな  
んて今のところいない。

ならばつとこちらの保持しているメタルギアすべてをあいつにぶ  
つけることにした。

損害覚悟で戦う。んで、今開発しているのは戦っている中でニゴウ  
に致命的な一発を放てるキャラにした。

アーク「んじゃ、行ってくる」

よっこいしよと立ち上がり扉の外に出る。

サイコマンティス「ああ、鳥死んで来い」

アーク「ゑ？」

冗談だつと言うサイコマンティスを最後に見えた。

……あいつが言うのと冗談に聞こえないんだが

サイコマンティスのいた部屋から出て再びマザーベースの艦橋に出る。

そして、そのまま開発が済んだ場所に向かう。

アーク「さて、初めてのMGS4のキャラだな」

海風にあたりながら進んでいると例の開発が完了した区画についてた。

外見はなんか某SCP財団の収容室に似ている。

アーク「んじや、お邪魔しまーす」

ウィーンつと扉が開き中に入る。

アーク「……寒」

中に入るとそこは一面の雪景色だった。

マザーベースは本家でもあったコスタリカ沖の気候に合わせているので割と熱いはずだがこの部屋は真逆だった。

ザク…ザク…ザク…

アーク「……この景色をアリスに見せたら喜ぶだろうなあ」

いい加減主人に連絡しないと

……怒っているのは確定だが。

一面雪の絨毯で包まれた大地をひたすら前に進んだ。

すると前方にうっすら光が見えてきた。

アーク「……そういやこのマザーベースの構造って……いや、気にせんどこ」

見えてきたのはシャドーモセス島の建物

なんでこんな海上基地の上にシャドーモセス島の建物があるかは気にしないことにする。

初めて生で見たシャドーモセス島の景色を眺めていると

ガサガサッ

アーク「っ!!」

森のほうから多数の足音が聞こえてきた。

範囲は……囲まれているな。

しかも音のスピード的に人間じゃない。

アーク「……あ、そういや最後にいたな」

腰からTORNADO-6を取り出そうとしたが正体が判明したので腰に収め……手を大きく広げた。

足音が近くなってくる。

アーク「すうー……来い!!」

腰を落とすどつしりと構える。

足音がさらに近づいてくる……そして獣のような鼻息でやってきたのは

「バウバウ!!」

数十匹もいる狼だった。

雪の上をスノーモービルが走ってくるかのように走ってきてアークに飛びかかってきた。

普通なら狼の牙などで噛まれて危険だが

ベロベロベロ

アーク「一匹ずつにしろお前ら!!」

べろべろと舌で舐められていた。

もう顔がべとべとになった。

??「……よく殺さなかったね」

アーク「お、こんにちはミエコ・ライさん」

??「それは私のモデルになったほうよ」

アーク「失礼、初めましてクライング・ウルフ」

??「ええ、ご機嫌用。死神」

一面雪景色の中、普通の狼より二回り大きな鉄の獣に乗ってきたのはレールガンを構えた一人の美女だった。

以前のポイント 13534

開発

クライング・ウルフ 2000

合計ポイント 11534

アーク「あ、ちなみにもしこの子たちを一匹でも殺したらどうなつてました？」

クライング・ウルフ「レールガンの消し炭にしていたわ」

わあお

アーク「あ、んで開発した経緯ですが……」

クライング・ウルフ「あ、もうそれは知っているわ」

アーク「ひよ？」

クライング・ウルフ「あのガスマスク男からテレパシーで聞かされた」

あ、あんにやる

クライング・ウルフ「今回の勝負は自分がキーパーソンってのも確認できたわ」

アーク「あ、あざます」

クライング・ウルフ「……それより勝てるの？」

アーク「え？」

クライング・ウルフ「だって戦艦の主砲とか出してくるのよ？」

アーク「まあ、そこらへんはレールガンで何とかかなりますよ。別に本当に戦艦を沈めるわけではないので」

相手は人外でも致命傷を負えば勝ちだ。

クライング・ウルフ「まあ、方法も……」

露骨な苦笑いをするウルフ氏

……いいんだよ、自分もヤバいなこれって思っているんだから。心にダメージを負ってもなお狼たちに顔を舐められるアーク。

クライング・ウルフ「なら、なおさら私の体に慣れてもらわないとね」

するとどこからか重々しい音を鳴らしながら迫ってくる気配を感じた。

アーク「あ、これって」

クライング・ウルフ「そ、私の予備機体」

雪煙を撒き散らし現れたのは彼女が乗っているパワードスーツ……の予備機体らしい。

改めてみるとデカいなこれ。

形がブレードウルフに似ているけどサイズは人間よりでかい。

……まあ、本家では装甲ドーザーを押し返したんだっけ。

アーク「よいしょっと」

プシューっと開いた背中側から中に乗り込む。

中は意外と快適で高性能嗅覚センサー、赤外線暗視装置などを搭載されている。

……だけど四つん這いになるのが難点だが。

アーク「……操作感覚はブレードウルフと変わらん」

カチャカチャと右足を動かしたりして確認する。

アーク「レールガンは……こうか」

本家でもあったパワードスーツから出た状態からのレールガン狙撃。

上半身だけ外界に晒し背中に搭載されているレールガンをつかむ。

アーク（初めて握ったが……標準はMGS4と同じか）

クライング・ウルフ「……君がいろんな兵器を開発しているからだと思うけど、君……一応、元一般人だよな？」

アーク「元って何ですか元って」

クライング・ウルフ「だつてそんな慣れた手つきでレールガンを操作するなんて……流石、蛇ウエノム・スネークの影武者に鍛えられた分はあるね」

アーク「なら、一緒に鍛えますか？」

クライング・ウルフ「あ、遠慮しておくわ」

動きはブレードウルフとかですでに学んでいるのであとは射撃だ



な。

足元に転がっていた木の枝を拾い上げ遠くのほうに投げる。  
弧を描きながら暗闇に消えていく木の枝に向けてレールガンを構えチャージする。

キュイイイイイン

ツピ

チャージが完了した音と同時に引き金を引く。

カチツ

ズドオオオオオオン!!

轟音とともに射出され加速していった弾丸は大地に落ちていく木の枝を完全に捉え消し炭にした。

クライング・ウルフ「狙撃の腕も悪くないわね……あの世界<sup>MGS4</sup>であな  
たがいたら間違いなくBBにスカウトしているわ」

アーク「……ええ、俺、男」

クライング・ウルフ「大丈夫でしょ、見た目女だし」

アーク「おう、いえあ」

クライング・ウルフ「でも男……ねえ」

ウルフは何かを思い出すと悲しい顔をし下に俯いた。

アーク「どうした？」

クライング・ウルフ「あ、いや、何でもないわ」

アーク「……」

本家で見ただけの悲しい顔をする彼女を見たアークはふと思いついた。

アーク（そういえば……弟がいたはずだよな）

クライング・ウルフは今の状態になる昔に民族浄化という紛争に巻き込まれ家族のほとんどが死んでしまった。

唯一生き残った弟とともに逃げていたがとある事態が起き、弟を死

なしてしまったという過去がある。

アーク「……すまん」

クライング・ウルフ「いいのよ、気にしないで」

ウルフも察したのか悲しい顔でほほ笑んでいた。

クライング・ウルフ「もう一回……今度は謝って……会いたいなあ」

アーク「……」

そのあとはいろんなレクチャーを受けて一応でだがトレーニングは終わった。

アーク「さてと、俺はそろそろ行くよ」

クライング・ウルフ「ええ、負けないでよ」

アーク「わーてる」

クライング・ウルフに別れを告げVR世界から出て現実に戻ることにした。

バイバイと手を振りながら部屋を出ろうと来た道を引き返している

アーク「おや?」

道の途中で一匹の狼の子供に出会った。

こんな一面吹雪の中、ポツンつとこちらを見ている。

だが、幻影のように子狼の背後にクライング・ウルフとそっくりな少年が立っているように見えた。

アーク「……ああ、そういうことか」

一目見ただけで正体が分かったアークはクライング・ウルフがいた場所に向けて指をさす。

アーク「ほら、行きな。みんなが待っているぞ」

クイクイツとさすが、狼はクヨクヨと迷っているようだ。

アーク「はあ……ほらほら、あんたのお姉ちゃんが待っているぞ」  
トントンつと背中を押すと狼は元気よく走り出した。

アーク「さて、俺も行くか」

今度こそニゴウとの決着をつけるためアークは現実世界に帰還した。

## 百六発目 帰還と問題発生

アークがVR世界から戻った。  
クライイング・ウルフを開発して本人に会ってそのあとちよいと男の子に会って現実に戻った。

パチリ

眼を開け周りを確認する。

窓から差し込む光から見るにまだ太陽が昇っているころだろう。

アーク（でも何日たったんだ？）

寄りかかっていた壁から離れ立ち上がる。

アーク「おっと」

少しふらついたが何とかなった。

……どうやら数日間は寝ていたらしい。

アーク「さてと、あの王女さんはどこに行った？」

カチャツ

シエラ「あ、アークさん！」

探そうとしたら本人が現れた。

探す手間が省けて結構だが……

アーク「……」

シエラ「どうしました？」

アーク「シエラ……右目……」

シエラ「あ、ああ、これですか？」

そつとシエラは自身の右目を触る。

そこには即席だが眼帯がされていた。

シエラ「……アークさんが寝てからコレがさらにひどくなって」

そういえばと思い出す

この子はどういうわけかあの奴らに勇者の細胞の一つを埋め込ま

れたそうだ。

寝る前はそんなに肥大化はしていなかったのだが今じゃ一目でわかるくらい大きくなっていた。

アーク「……大丈夫なのか？」

シエラ「は、はい。生活には支障は」

アーク「……そうか」

シエラ「あ、アークさんこそ!! けがは？」

アーク「ん？ ああ、大丈夫だ」

肩を回してみる。

痛みは感じない、どうやら完治したようだ。

アーク「俺、どれくらい寝てた？」

シエラ「多分、3、4日間くらいですかね？」

アーク「……わああ」

あんなに大怪我して数日で治るような状態ではない気が済んだが

……やっぱ、この体少し変だぞ？

アーク「体内にすでにナノマシンが……んなわけないか」

体に支障がないのを確認する。

アーク「さて、移動するか」

ブオンとiDROIDを起動しマップ機能でアーラム帝国までの距離を調べる。

アーク「遠いな」

俺一人だったら一日中全速力でサイボーグダッシュすれば着くけ

ど

アーク「君がいるからなあ」

横にいる元王女が問題だ。

流石に彼女は人間なので下手に扱ったら永遠にグッバイとなる。

アーク「……またバイクかなあ」

シエラ「なんですの？ ばいくとは？」

アーク「シエラって馬に乗っても酔わないタイプ？」

シエラ「ええ」

アーク「んじゃ、大丈夫だな」

確認が済むとカチカチって操作する。

以前のポイント 11534

召喚

ボンネビルT100 125

合計ポイント 11409

ガシャン!!

重々しい音を立てて現れたのは以前お世話になったバイクさんだ。

シエラ「な、なんですかこれ？」

アーク「これがバイクだ」

シエラ「……」

アーク「な、なんだ？ そんなに興味を持ったのか？」

ガシヤリつと乗り込んだがシエラがじつとバイクを見て動かない。

シエラ「アークさん、これって」

アーク「あく……詳細は言えんが俺の道具だが。それが？」

シエラ「いえ、子供のころに見た本にこれと似たようなものが」

アーク「ほくん。ま、とりあえず乗りながら聞かせてよ」

エンジンをかけ後ろにシエラを乗せて走り出す。

シエラ「乗り心地は最悪ですね」

アーク「我慢しろそれくらい」

シエラ「それより何とも思わないんですか？」

アーク「もい？」

シエラ「馬上でもそうですが男性が女性を後ろに乗せるって恋人ですかって思ったのですが」

アーク「おう」

シエラ「……え、まさか何ともないんですか？」

アーク「うん？」

シエラ「こう、ドキドキするとか」

アーク「い、いやまったく」

言われてみれば前に男で後ろに女

はたから見れば恋愛ドラマに見えないこと無いが……別にドキドキはしないな。

アーク「あ、別に女性的魅力がないわけではないからな？」

シエラ「わかってますよ、からかっただけです」

エンジン音を鳴り響かせながら大地を疾走していくバイク。

周りを見ても小動物たちが驚いて道を譲っていくぐらいで残党兵の影は見えない。

アーク「あ、そういうえばさつき言っていた本ってどんな内容なんだ？」

シエラ「昔、城にあった古い本でおとぎ話のような感じですよ？」

アーク「いーよいよ、どうせ移動中は暇なんだ」

シエラ「えっと、昔で詳細は覚えていないんですが……」

昔、昔、

一つの島にたくさん種族が住んでいました

獣のような見た目をした獣人族、森を愛しているエルフ族、力があるドワーフ族、手先器用な人族が協力し合い平和そうに住んでいました。

しかし、一種族だけ除け者にされていた種族がいました。

その姿はとても醜く爪は刃物のように尖っており大きな牙、蝙蝠のような翼をもった種族：魔族でした

魔族はみんなから差別されてました。

しかし、魔族も黙ってはいません

仕返ししようとする魔族もいましたがとある一人の少年がそれを止めていました

その少年の正体は魔族の王子だったので

彼は魔法の天才でこの世界の9割の魔法は彼が作ったといわれるほどです。

彼は必死にみんなをなだめました

なぜなら彼は争いを好まず人も魔族もすべてを愛していました

そして、世界が滅びました

アーク「おい待て、話が飛びすぎだろ!？」

最初は普通だなんて思ったらラストがデカすぎた  
てか大雑把すぎんだろ。

アーク「それ、実話ってなわけないよな？」

シエラ「言ったでしよ？　これはおとぎ話だって」

ま、まあそうか

滅んでたら俺が転生するわけないしな。

アーク「てかその王子……変な奴だな」

魔族ってヤバいイメージがあるんだが争いが嫌いってだいたい変  
わってんな

ふと頭の中に思い浮かべるのはアリスを誘拐した魔人

あいつ、いい趣味しているなって感じた。

アーク「ま、この世界じゃ当たりまえかもな」

でもあってみたいもんだなその王子さんに

心の中でそう思いながらアクセルをひねりスピードを上げる。

少年少女移動中

パチパチ

アーク「ん？　なんだこの匂い？」

シエラ「どうしました？」

アーク「いや、なんか匂うくね？」

ボンネビルT100の重々しいエンジンを響かせながら走っていると草木香る森の中から焦げ臭いにおいを感じた。

誰かがこのあたりで焚き木でもしているのだろうか？

シエラ「……本当ですね」

アーク「流石にコレを見られたら怖がられるからこのあたりで降りて離れたら乗りなおすか」

T100から降りていつものワープゲートを開いて愛車をマザーベースに送り、においがするほうに向かった……なんだが

シエラ「……臭すぎませんか？」

アーク「うん、なんか焚き木にしては焦げ臭すぎるし……」

匂いを感じる方向に近づくにつれ匂いが悪臭になってきた。あとなんか熱い気が？

アーク「山火事か？」

シエラ「だったらここを離れたほうがいいのでは!？」

アーク「……そうだな」

山火事だったら早めに引き返したほうがいいな。

あくあ、無駄足だったか。

匂いと肌を感じる熱さから山火事だと予想し引き返そうとした……瞬間

パァーーン!!

アーク「銃声!？」

山特有の木々の間に流れる風の音に混ざるようにして場違いな音が聞こえた。

常人なら空耳かと思うかもしれないが、これでも蛇ヴェの影武者ムの訓



練に嫌というほど聞いた音だ。

アーク「すまんシエル!! ちよつと見てくる!!」

シエラ「何が…ってアークさん!」

シエラの応答も聞かずに聞こえたほうに全力ダッシュしiDRO IDを取り出しスイッチを押す。

アーク「報復」

例の言葉をいうと体が変形していき足が軽くなる。

いつもお世話になってるサイボーグになると足に力を籠め天高く飛ぶ。

飛ぶたびに森に棲んでいた動物たちが何事だと慌てふためく。

アーク「……いた!!」

前日に雨が降ったせいなのかぬかるんだ地面を蹴っていると前方に集団が見えてきた。

集団といっても数人ほどの人間とその周りを包囲している異世界にしてはえらい現代的な武装をした人間だが。

「どうとう見つけたぞ!!」

「やめてくれ!! 俺達には関係のないことだろ!」

「うるせえ!! 早く言え!!」

「だ、だからそんな奴、俺らの村にはいなかっただろ!」

「黙れ!! さもなきやこいつを殺すぞ!!」

「うわあああん!! おかあーさん!!」

……状況から見るに武器を持ってないほうがピンチみたいだな

周囲にX M 8を持って囲まれて人質に子供一人が隊長らしき人間につかまれていると

まあ、見ただけでもどつちが敵かはわかる。

「頼む!! 私死んでもいいから子供は返してくれ!!」

「……そうか、なら先に逝かせてやるよ!!」

そういうと、腰からM 9を引き抜き開放してくれと懇願した人間に向け引き金を引こうとした……が

トン……

「誰d」

アーク「ふー、間に合った」

引き金を引くより前よりそいつの首がズレ落ち地面に落ち、その横には血の付いたマチエーテを持った死神<sup>アーク</sup>

トップスピードのまま抜刀し首をはねたのだ

アーク（残り数は……4か）

「し、死神!?!」

アーク（装備から見るに残党軍か）

銃口を向けられてもなお落ち着いて周りを見る。

アーク「おい、がきんちよ」

「は、はい!?!」

アーク「伏せとけよ」

助けた子供に忠告すると同時に一步前に右足を踏み出す。

出した右足が地面についた瞬間、人工筋肉が地面を抉り猛スピードで前に突進した。

「つな!?!」

兵士たちもあまりの速さにこちらに銃口を向けるが残念ながらこちらのほうが先に届く。

アーク（あ、でも隣にいるやつ……目の前のやつを仕留めてもギリギリ間に合わんな）

目の前にいる敵を無力化する前に隣にいた敵の攻撃を受けてしまう。

ならばつとアークは行動する。

(I have predicted the conclusion)<sup>アーク</sup>

能力が発動すると世界はゆっくりとなり音が遠くなる。

木々の擦れる音は聞こえなくなり周りの騒ぎも落ち着いているときの心臓みたいに聞こえなくなっていく。

アーク（まず隣にいるやつだな）

手に持ったマチエーテを振りかぶり思いつきり投げる。

直線で飛んで行った得物は持っていたXM8ごと切断し右腕を切り落とした。

アーク（そして、目の前）

もう目の前にいる敵は引き金を引く。

綺麗な爆発を起こしながら銃口から弾丸が飛んでくる。

距離的に3発しか避けられないが3発なら十分だ。

アーク「ツフ!!」

3発とも俺の体に命中するコースだ。

だが、ここは避けずに真つすぐ進む。

ズシュズシュズシュ

アーク「つち」

体を抉る不気味な感覚を感じるがそれでもサイボーグの痛覚抑制機能で痛みはこれでも和らげているほうだ。

だがこれで届く。

左手で銃のバレルをつかみ右手前に引つ張る。

敵は吊られるように右に体を開いた瞬間に右手でトリガー部分を敵の手ごとつかみ銃本体を構える。

そしたらそのまま敵が来るので左足軸に体を回しストックで後頭部を殴り勢いで飛んで行ったら心臓と頭に向かって一発ずつぶち込む。

血しぶきを撒き散らしながら倒れていく死体を仲間が驚愕している中、引き続き右腕を撃ち落とした敵の両足から上に胴体、頭を撃ち抜く。

アーク「さて、次は？」

一気に二人も無力化され怖気つく残りの敵。

アークの体から人工血液が流れ落ちていくがナノマシンのおかげで数時間後には完治しているだろう。

いやはや、時代の進歩はすごいもんだな。

アーク「おいおい、来ないのか？」

体中から白い液体が漏れ痛みを感じているとは思えない声で近づいてくる死神に敵はアークが一步前に出るたびに一步後ろに下がる。

「う、うわああああ!!」

銃が効かないと判断したのかアークに一番近い敵がナイフを取り出し片手で握り迫ってくる。

……片手はまずいぞ敵さん。

アーク「よっと」

迫ってくるナイフを右手で横から殴りつけて外させる。

そして、空いたところを左手でビンタする。

よろけついたところを右足を敵の足にかけひっかけて倒す。

倒れたところを回し蹴りの要領で首に足をかけ首を押さえつけて地面に伏せさせる。

「あ、があ……離せ!!」

アーク「片手でナイフはダメだろお」

プロではない限り片手でナイフだと軌道が外されやすいから両手で握る（ついでに腹部あたりで構える）と外されにくくなる。

つていうのを作者が中学の英語の時間で顧問から学んだ（なんで？）

「おらあ!!」

もう一人ナイフを逆手に構えて襲ってきた。

今、下敷きで抑えている奴がいるから動けないのでカウンターする。

アーク（ここを……こう!!）

左上方向から迫ってくるナイフを右手で絡めとり剣先を俺から敵自身に向けて……あとは押し込む。

ドスツ

剣先は運悪くも首に深く刺さり噴水のように血が噴き出した。

アーク「つち、汚ねえ」

シャワーのように血をかぶるアーク。

「あ、あ、ああああああ!!」

その姿にとうとう最後の敵は敵前逃亡を図ったが

アーク「お、お前さんの仲間は逃げる気みたいだぞ？」

「は、離せ!!」

アーク「いいよー」

まあ、生かして帰させないが

アーク「なあ、サッカーの起源って知ってるか？」

「さ、さっかー？」

アーク「あー、こっちでは無いんか。ま、いいや」

そういうと足を首の後ろに絡めさせ力を入れる。

「く、苦し……」

アーク「諸説ありだがヨーロッパの8世紀頃だといわれている」

メキメキメキ

「く、首が」

アーク「その当時は戦争で勝利すると敵国の將軍の首を切り取り、その首を蹴って勝利を祝ったことと言われているらしい」

「や、やめ」

アーク「せっかくだ、今回の俺の勝利を祝ってくれよ」

人間離れのサイボーグの筋力で嫌な音を立てながら力を入れていく……そして

バキツ

血に伏せられていた敵の首はちぎれ落ちた。

アーク「よつと」

ポーンと蹴り上げ本当にサッカーようにリフティングをする。

千切れたせいで血があたりに撒き散らす。

アーク「ほら、返す……よ!!」

少し上に打ち上げタイミングを合わせてキックをする。

すると綺麗に曲線を描きながら…逃げている敵の後頭部に直撃し転倒した。

アーク「それじゃ、あの世でな」

腰からTORNADO-6を引き抜き全弾撃つ。

全弾命中し逃げた敵はあの世に旅立った。

アーク「ふう、終わったか」

パツパツと体中についた血を落としながら振り返ると

アーク「……あ」

振り返るとそこには恐怖の余り怖い顔をする敵ではない人間たち。

アーク「……やっちゃまったなあ」

どうやら彼らの第一印象は最悪で始まったようだ。

……まあ、この光景を見たらなあ。

アーク「あー、大丈夫ですか？」

一応声をかけてみるが

「ひ、ひい……」

「だ、誰だお前はあ……」

アーク「だめだこりゃ」

コミュニケーションはダメっと

さて、どうしたものか（汗）

シエラ「アークさあああん!!」

アーク「ん？ あ、シエラ」

シエラ「あ、シエラじゃないですよ!! 勝手にいかないでください

よ!!」

アーク「あー、すまん」

そういえば置いて行ってたな

完全に存在忘れてたわ

シエラにこの現状をどうにかしてほしいと相談しようとする

「お、おお!! シエラ様!!」

アーク「え、シエラ、もしかして知り合い？」

シエラ「え、ええ…昔、訪問した村の住民ですわ」

アーク「あ、じゃ、ちよつと彼らの話し相手になってくれ」

シエラ「はい？ 何ですか？」

アーク「……彼らの第一印象を殺して始めてしまった」

シエラ「……わかりました」

シエラが村人たちのところに行き、俺の正体を説明してくれた。  
すると村人たちが俺のほうに来て崇め始めた。

「アーク様ああ!!」

「ありがとうございます!! ありがとうございます!!」

「救世主だあ」

アーク「ええ……」

音速の手のひら返しに少し引く。

てか、別に俺らは通りかかって偶々助けただけなんだが  
するとシエラの横に老人がやってきシエラに何かを話す。

シエラ「あと、アーク。これは村人からの願い事です」

アーク「なんだ？」

シエラ「彼らの村が謎の集団に襲われて自分たちはそこから逃げ  
きたが何人かは村で捕まってしまっているから助けてほしいらしい  
です」

アーク「……ちなみにその集団ってどんな特徴だ？」

シエラ「……手に変な鉄製の棒を持っていたそうです」

アーク「あゝ、はいはい」

特徴を言った瞬間、残党軍だと判明した。

アーク「てか、なんであいつらここを攻めたんだ？ 城からはそれ  
なりに離れていると思うし」

あ、あそこまで影響が来ているならもつと遠くに逃げんな。

シエラ「……村人たちも襲われる原因はわかってないそうです」

アーク「俺は早くアーハムに戻らないといけないんだが」

でも見捨てるわけにもなあ

どうしようかと考えていると子供たち数名がシエラに近づき何か  
を話した。

シエラ「ツ!! アークさん!! 襲ってくる前のことならこの子供た  
ちが見たそうです!!」

アーク「何があつたんだ？」

シエラ「……今朝あたりでこの子たちが森の向こう側にある草原で遊んでいたところ大量の何かが移動する音が聞こえてきたので気になっていつてみたらさっき倒した敵たちとそっくりな集団がある方向に向かつていたそうです」

アーク「……方向は？」

シエラ「……それはわかりませんが見ていたらさっきのやつらに見つかつて襲われたそうです」

アーク「なるほどね……」

どうやら残党軍は大群でどつかに向かつたそうらしい。

今なら城の警備が少ないからまた行こうかなつて思ったが流石に警備は少人数でも厳重にしているんだろう。

アーク「ん？ 待つた。まだ残りの村人は村で捕まっているんだよな？」

シエラ「は、はい」

アーク「ついでだ。村にいる敵を一人捕まえてついでに村人を助ける」

さて、今後の予定も決まつた。

はあ、まーたアリスに会うのが遅くなつちまう。

アーク「早く、アリスに会いたいなあ」

多分、城でアークの帰りを待っている主人のことを思いながらアークは被害にあつた村のほうに向かつた。



## 百七発目 薄い本に只は気持ちよすぎんだろ!!

その村は王国の辺境にある小さな集落だった。

その日はいつも通り農作業して家に帰って家族団らんにごそごそとしていた。

しかし、シュレイド王国で何か事件があったという不穏な噂が広まる中彼らは急に襲ってきた。

村にいた兵士や男たちは武器を持ち抵抗したがあいつらが持つていた黒い棒のせいで次々に倒れていった。

しかも、そいつらは質が悪く村人全員を殺そうとしてきた。

なんとか少数の村人は脱出することはできたが……

「おい、これで全員か？」

「ああ、逃げていったやつを除けばこれで全員だ」

轟々と燃えゆく炎の音は平和だった村を崩していった。

逃げ遅れた者や抵抗したが負傷して戦えなくなった村人たちが村の中央に集められていた。

カチツ

中央に集められた村人は恨めしい表情で残党軍をにらむが残党軍はつゆ知らず。

「気にせず本部と連絡する。」

「こちらD4部隊、目撃者のいた村の制圧が完了した」

『了解した』

「村人は全員殺したほうがいいか？」

『始末しろ。目撃者がいたら面倒だ』

「いいのか？ せっかくだから研究材料にしたらいじやないかと思っただが」

『いいから早くしろ。こっちは逃げた村人を追ったF12部隊と連絡が出来てないんだから』

「……了解、こっちで済ませておく」

「F12部隊が連絡が取れないって本当ですか？」

「ああ、あの状態でもが連絡しないとはなんかあつたんか？」

「あいつら、この兵器を持った瞬間すぐに舞い上がって暴れだすから……ちよつと、味方としても気味が悪いですね」

「ま、通信機の故障だろ」

「そうすよね」

「んじゃ、さっさとこいつらを殺して本隊と合流するか」

村人たちが銃口を向けられ今にも殺されそうなか

……草むらから覗く

ツガサ

アーク「いた」

死神がいた。

アーク「すっ飛んできたものの、ピンチなのは変わりないな  
数は5。

もしかして残党軍って5人1部隊っていう感じなのかな？

アーク「……配置もいやらしいな」

ブオン

双眼鏡を起動し付近をスキャンしていく。

えつと？

多分リーダーらしき人物と話していたやつが村人付近にいて、二人が村の周りにある柵を巡回していて、最後の一人が……

アーク「うわ、BTR-152にいんのかよ」

最後の一人はおそらくあいつらがここまで来るのに乗ってきたの  
であろうソ連のBTR-152の銃座にあるPKT 7.62mm  
機関銃のところをいた。

アーク「これは面倒だな」

しかも、全員内側を向いていてお互いをカバーできる場所に陣取っ

ている。

バレたら速攻で村人が殺されるな。  
ならバレずに一人ずつやるしかないな。  
速く帰りたいのでさっさと行動に移る。  
あ、せっかくだしアレも使ってみるか。  
懐からiDROIDを取り出し開発画面を出し操作する。

以前のポイント 13534

獲得

兵士殺害 200

開発

クレイモア 3

「EVAに怒られそうな素敵な本」 3

クライング・ウルフ 2000 (のせるの忘れてた)

合計ポイント 11728

アーク「さて、向かうか」

まずは外周のやつからだな。

さっさと終わらせて帝国に戻ろう。

予定が決まったのでアークは草むらから出て村に忍び込んだ。

……ガサ……ガサ

轟々と村が燃えていく中、警備のため巡回している兵士。

この村はほぼ制圧しているので早く本隊と合流しているほうがいいのでは？ っと思いつつながらブラブラと歩いている。

「あー、暇」

ここ最近、任務ばかりでまともに休めた記憶がない。

てか、あの首相部下に休みを与える考えはないんだろうか？

「ま、ニゴウのほうはやばいんだけどな」

なんか上層部曰くとある作戦で自分たちも駆り出されてとある国を攻めることになった。

しかし、下のほうである自分たちには作戦の詳細は教えてくれなく部隊のリーダーだけに教えられることになっている。

「シユレイドから目的地って割と遠いから長旅で疲れるのに……あゝ、めんどくせえ」

さつき通信で村人を殺すのは決定したから殺せば終わるが自分たちは暇だ。

「なんか時間がつぶせそうなもの無いかなあ」

相変わらず建物が燃え行く音以外は平和な森を見つめていると

ガサツ

「あ？ なんd……おおお」

森のほうで音が鳴り振り向くとそこには誰もいなかったが……地面に何かが落ちていた。

それは凶鑑にしては薄く、聖書にしては何か違うし妙に読んでみたい。

近くに寄って行くとその正体はわかった。

そこには現実世界の女性の水着姿が写し出されていた。

落ちていた本の正体は……MGS3のアイテムの一つ雑誌こと「グラビア雑誌」だ。

ゲーム内では兵士の足止めにも使える便利なアイテムだ。

……さて、「グラビア雑誌素敵な本」を見つけた兵士が放つ言葉決まっている。

「イイモノミツケタア!!」

雑誌を見つけた兵士は自分の巡回ルートから離れいそいそと駆け寄る。

そして、周りに誰もいないのを確認すると武器をその辺に投げ捨て熟読し始めた。



次に見つけたのはBTR―152の銃座についている奴だ。しかし運が悪いのか近くにもう一人いる。

アーク「うーん……お」

どうしようかと考えていると近くに手ごろな鋭い建材があった。

焼け落ちてできた角材……多分柵とかで使う棒だろう

ま、ちようどいい刃物だ。

キュツキュツと触り心地を確認し助走をつけ飛ぶ。

狙いはBTR―152にいるやつ。

……すう

トン

「おい、異常はないか?」

「ああ、こっちは問題nズシュ」

持っていた角材をBTR―152に乗っていたやつの首に目掛けて差し込む。

血しぶきをふきながらBTR―152からずり落ちていくが刺した角材を一周させ首を折る。

そして、鋭利な方をつかみそのまま引き抜く。

「敵しゅ(ザシュ)」

そして引き抜いた杭をラストの敵に首元に打ち込みとどめを刺した。

アーク「ふう……これであとはリーダーとおまけだけだな」

敵を殺してかぶった血を払いのけながらの中心部に向かう。

アーク「ラストはつと……」

燃え尽きた建物から覗くとそこには他の仲間は殺されているのに気が付かない二人がいた。

アーク「うーん……別にCCCしてもいいが……」

ま、せっかくだ

アレをやるか。

カチカチとiDORIDを操作しきつき作ったクレイモアを一つ

召喚させる。

え、何をするんだって？

そりゃ、素敵な本とクレイモアって言ったらアレだろ。

ツス

まず、適当な場所に雑誌を置き一步下がり

カチツ

クレイモアを仕掛ければ完成。

そうみんな大好き俺が神儀式の人ことと崇めている人物のエロイモアだ。

やはりコレは素晴らしい。コスト面も雑誌とクレイモアという低コストでしかも確定で一人は殺すからもう人類最終兵器といっても過言ではないだろう。

アーク「準備完了」

そこら辺の石を拾いその場から離れる。

配置についたら仕掛けたエロイモアのところにワザと大きな音が村の中央にいる残党に聞こえるように投げた。

サイボーグの筋力で荒々しく投げられた石は燃えてもはや炭となった建物にあたり建物はh足りが気付くには大きすぎる音を立て崩れ落ちた。

「なんだ!？」

リーダーとおまけは音が鳴ったほうに銃を構える。

「……どうやら建物が壊れたらしいですね」

「そのようだな」

「一応、異常はないか確認してきます」

「了解した、行って1分経っても帰ってこなかったら警戒態勢に移る」  
「了解です」

XM8を構え崩れた建物のほうに移動する。

「一応、各員に連絡しておくか」

持っていた通信機を手に持ち通信機に話しかける。

「こちら部隊長、建物の一部が倒壊。付近を警戒せよ」  
だが

「……おい、だれか応答せよ」

なんと呼びかけても帰ってくるのは無音ばかり  
だって他の人はアークが殺したばかりだから。

「っ!! おい! 戻ってこい!!」

そして何回も聞こえないことに気が付いた隊長は部下に戻って  
くよう呼びかけるが数秒遅かった。

「ん? なんだこれ?」

そこらじゅうが焼けた地面に一つの本が落ちていることに気が付  
いた兵士だったが気が付いた瞬間にはもう手遅れだ。

見た瞬間、頭の中から任務のことが消え去り頭の中が動かなくなり  
ただ目の前の本に夢中になる。

そしてお約束の

「イイモノミツケタア!!」

手に持っている銃を落とし駆け足で近寄っていく。

本のすぐ近くにクレイモアがあっけ見えているのにそれでも近づ  
いていく。

一歩また一歩と近づき……

ツピ

ズドオオオオオオオオオン!!

クレイモアが起動し本を読もうとした兵士は粉々に吹き飛んだ。

「つくそお!!」

爆発に気が付き自分たちは攻撃されていると理解した隊長はXM  
8を人質にしている村人に向けようとしたが



トン

アーク「よ♪」

顔面の真横からアークがサイボーグ筋力で弾丸のように飛んできた飛び蹴りには気付かなかった。

メキツ

アーク（あ、やべ）

今、聞こえちゃいけない気がする音が鳴った気がするが……気のせいっしょ。

アーク「せっかく殺さずに情報だけ聞き出そうとしたけど……死んでないよな？」

ちよんちよんとつついてみるが……あ、よかった息はしてるな。

……頭から血が出てるけど気絶か。

アーク「よし、これでこの村は無事保護で来たな」

あとはシエラたちを呼べばいいかな？

「あ、あの……」

アーク「ん？」

「あなたは一体？」

アーク「え、あ、えっと……通りすがりの……旅人です？」

思わず疑問形で帰ってしまったがそんな「あ、死神つす」みたいに言えないだろ。

これ以上、俺が誰なのかを知り渡られるのはまずいしな。

「そ、そうですか？」

アーク「おう、そうs「アークさああん!!」」

「え、アーク？」

アーク「……」

あーもうめちやくちやだよ

できる限り正体は隠そうと思った瞬間、まさかのタイミングでシエ

ラが残りの村人とともにやってきた。

「おい、アークって」

「あの死神じゃないのか？」

「でもなんでこんな辺境に？」

シエラ「はあはあ……いい加減勝手にいくのはやめてください!!」

アーク「……シエラあ」

シエラ「なんですか!? 行ってきますが悪いのはアークのほう」

アーク「ちよつとお前のこと嫌いになりそう」

シエラ「はい!？」

はあーつとため息を吐くが気を取り直してきつきおねんね（物理）  
させた隊長君を起こそう。

ジュシツ

「がは!？」

ツス

アーク「おー、おはようさん」

起きたらすぐに反撃されないようナイフを首にあてる。

アーク「んじゃ、まず……きつき村人から来ていたんだが『作戦』つてなんだ？」

「……」

当たり前だがしやべるわけないよなあ。

仕方ない、手荒に尋問でも……

「アーク殿」

アーク「ん？ あ、ジジイ」

「ジ……この度は私たちの村を救っていただきありがとうございます  
す」

アーク「お、おう。まあ、ここが危険なのは変わりないからしばらくアークハム帝国におつとけ」

「ははあ……ありがとうございます……」

アーク（ちよつとアリスには迷惑をかけちゃうなあ）

この土地は残党軍に居場所がバレているので一旦アリスの国に避難してもらおう。

「……待て、今アークと聞いたか？」

すると急に元隊長が話し始めた。

アーク「……だったらなんだ？」

「く……くはははははは!!」

目の前にいるやつがアークだと分かった瞬間、隊長は狂ったかのよううに笑い出した。

アーク（うわ、キモ）

「はあ……ハハハハ!!」

アーク「つち」

イラついたので顔を回し蹴りで蹴った。

アーク「おい、さっさと見え。どのみち俺の名前を知ったから殺すけど」

「……おい、アーク。さっきの作戦とやらだが言つてやろう」

アーク「おう、はよ見え。こちとら早く国に帰らんきゃ行けんのでね」

「だが残念ながら帰る国はそろそろなくなるぞ？」

アーク「……どういことだ？」

「今回の作戦だが上層部は今後の自分たちの安全を確保することにした。今現在で一番の脅威はお前だアーク」

アーク「……お前まさか!？」

「ああ!!」

アーク「狙いはアーラム帝国か!？」

「そうだともし! しかも肝心の死神さんはこんな辺境にいるときた!!  
こりゃ傑作だ!!」

アーク「てめえ!!」

アークは激高し隊長に掴みかかり地面に殴りつける。

アーク「いつだ!? いつ攻撃開始時刻だ!？」

「さあねえ？ あ、ちやうどもうすぐじやないかなあ？」

アーク「……糞が」

ナイフを取り出しワザと痛みを感じさせるように荒く首を切り命をつぶした。

アーク「シエラ!! 護衛を召喚しておくからお前たちはこいつらに守られながらアーハム帝国に来てくれ!!」

シエラ「え、ちよアーク!？」

急いでiDORIDを取り出しサイボーグたちを召喚し自分はラプターに変身する。

以前のポイント 11728

獲得

殺害 200

召喚

サイボーグ 1500

変身

ラプター 250

合計ポイント 10178

アーク「彼女たちを守れよ」

サイボーグたち「(?!▽?) ッラジャ」

召喚したサイボーグたちに命令した後、アークは翼を広げ空へと羽ばたきジェットエンジンをフルスロットルで回す。

アーク「無事でいてくれよ!! アリス!!」

## 百八発目 降り立つ鋼鉄の歯車（メタルギア）

アーク「間に合ってくれよ!!」

どんよりと曇った空を一筋の流星が飛んでいく。

スライダーに変身したアークがジェットエンジンを最大にし飛んでいる。

アーク（まさか狙いはアーハム帝国直接とはな!! くそ！ もう少し早く飛べないのか!?!）

鳥羽さを広げ背部にあるエンジンの回転数を上げるがこれ以上すると爆発してしまう。

一分一秒が大事なこの場面、よけいアークを急がせる。

アーク（帝国まであとどれくらいか!? 敵の規模は!?!）

高速で飛んでいるアークだが、本当は頭の中でただ一つしか考えていない。

アーク「……アリス!!」

自信の主人の無事だった。

あまりの速さに翼がミシミシと軋み痛みが走るがそれでも高速で飛び続ける。

……そして

アーク「見えた!!」

雲を貫きとうとう帝国が見えてきた。

アーク「っ!!」

だが久しぶりに見えた国はひどい有様だった。

アーハム帝国の外とつながる西門から戦車がゾロゾロと入り町のあちらこちら火の手が上がっている。

アーク（T-72もいんのかよ!?! さすがにアレ相手に騎士はきついぞ!!）

魔法使いだったら集団でボコれば一台は持っていけるだろうが周りには随伴の戦闘員もいるからその可能性はないだろう。

そして城のほうを見ると

ズドオオオオオ!!

城は煌びやかだった装飾はぼろぼろに落ちており廃城のようになっただ。

アーク「もうここまで進行してきているのか!」

だがこちら側もいくらか返しているらしく敵側の戦車が燃え上がっていた。

ザ、ザザ

アーク「ん!? カエルか!」

月光「月光ジャ!! (#.#。∩)」

AI兵器同士でつながっている無線から事前に警備させておいた月光たちから反応が来る。

元シュレイド城に向かう前のお留守番兼アリスの見張りで置いておいたが正解だったようだ。

おかげで戦車を数台ほど鉄くずに変えたがこちらでも被害を受けているらしく月光3台が行動不能になったらしい。

月光「アト、ハイ<sup>M</sup>イ<sup>i</sup>ンド<sup>2</sup>、シン<sup>4</sup>ンユウ、ユルシタ!!」

アーク「わかった!!」

翼をはためかせ城に向かう。

煙を吐いている場所に向かい窓に突撃する。

アーク「報復!!」

ガシャアアアアン!!

廊下に着地しまず目に入ったのは焼けた壁、抉れた床、そこに伏せたエルフの騎士や警備の魔法使いだった。

アーク（生きている奴は……いないか）

もっと早く着いておけばっと思ひ、彼らの人生を奪ったような感じが心に押し掛かるがそれでも立ち止まらずにアリスの部屋に向かっ

てサイボーグの足で向かう。

後方に流れていく景色を横目に走るが窓から見える景色は悲惨なものだった。

これでも事前にA I兵器があるからよかったがなかったらと思うと……

アーク「不幸中の幸い……だな」

アリスのもとへ走るが1mがとてつもなく長く感じてしまう。

サイボーグになって1mなんてすぐに走り終わってしまうのこの時だけは1kmを走っているようだった。

アーク（あと少し!!）

目の前にアリスの部屋が見えてきた。

……が扉は半壊している。

アーク「アリス!! ツ!!」

扉を蹴破り……否、破壊し中に入ると見えた光景は

複数の武装した兵士とクロエと陛下夫妻と家族の前に立ち剣を構えるが息を切らしているレイチエルと  
頭から血を流して倒れているアリスだった

アーク「あ……り……す……?」

アークの頭の中は真っ白になっていた。

一体どうなっている? 血を流しているのはアリスではのか?

やったのは誰か? 目の前にいるやつらか?

「おい! 誰だ!」

急に現れたアークに敵兵は戸惑いこちらに銃口を向け声を荒げることがアークに耳には届いてない。

まあ、届くわけもない……だって

すでにアークは獲物を抜きこちらに迫っていたからだ

戦場では常に冷静にとオセロツトから常時言われ訓練でも嫌とい

うほど教え込まれ神経の奥まで焼き付けられたというのに「目の前にいるアリスを襲ったやつを殺す」としか考えていなかった。

この状態になると周りが見えず奇襲を受けたらひとたまりもない。アークもそれはわかっている。

プツン

アークの中身の何かが完全に切れた。

考えるよりも先に体が動いて腰のマチエーテを引き抜いた。

「し、死g」

敵は五人だが全員殺す。

マチエーテを横に振りかぶり目の前にいる敵の腹に向けて振り下ろす。

ズシャア!!

振り下ろされた獲物は敵の防弾ベストごと切り裂き絶命させた。

切られた断面は刃物で切った綺麗なものではなく、まるで獣に髪切られたような跡になった。

アーク「はあはあ：ああああ!!」

「化け物が!!」

残りの敵はこちらに向けてXM8を連射してくるがアークはすぐに近くにいた敵の懐に入り他の射線を切った。

懐に入ると同時にXM8のマガジンを引き抜きコッキングレバーを引き完全に無力化した。

「っな!?!」

敵はあまりの予想外の動きに驚くがアークは止まらない。

敵との距離が零距离になった瞬間、ナイフを引き抜き左足を軸に回転し勢いのまま頸を切り裂き剣先を心臓に深々しく刺しこんだ。

アーク「はあああ!!」

心臓と首からあふれた血のシャワーがアークにかかり体を真っ赤



に染める。

そのまま死体を盾にし残り三人のもとへ突撃する。

三人はそのまま発砲を続けるが死体が壁になっていたのでアークには銃弾が届かず接近を許す。

銃弾が死体にあたるたびに血しぶきが舞う。

アーク 「はあ はあ!

I have predicted the conclusion  
!!!!」

アークの間合いに入り間髪入れずに能力を発動。

世界はゆつくりとなる。

敵兵は懐に入られたアークを撃とうとXM8を下に向けるがこの距離ならライフルよりナイフのほうが有利だ。

片方にはナイフをもう片方にはマチエーテを構え敵を切り伏せていく。

今のアークは完全に目の前にいる敵を殺すことしか考えていない。

アーク 「あああああああ!!」

「化け物ズシャ」

殺す理由などアリスを襲ったでいい。

別に誰が殺されようがそいつは運が悪かったなと思つて終わりだが狙う対象を敵は間違えた。

今じゃ死神というより鬼神が如く獲物を振り回した。

切りつけるたびに大切な人《アリス》の部屋を赤く染めていく。肉は飛び血は雨のように降り注ぐ。

アーク 「はあ：はあ!!」

三人目をやり次の獲物に向かおうとするが視界に無数の赤い線が伸びてきた。

敵からの弾道予測線が無数にこちらに伸びていた。

普通なら避けるがアークは避けずサイボーグの人工筋肉を動かしながら進む。

地面を滑り弾丸を可能な限り避け目の前に来た瞬間、上に飛ぶ。

その時も敵はこちらに銃口を向け射撃を続ける。

弾丸はアークの体に突き刺さりサイボーグ特有の白い人工血液を撒き散らす。

赤い海に次々と落ちる白い血。

白い血を出しながらもマチェーテを振りかぶり勢いのまま振り下ろす。

「くっそがああああ!!」

ツガ!!

大振りに振り上げたのでアークの獲物は振り下ろすがXM8を盾にされ首の直前で止まってしまった。

「今だ!! 撃て!!」

「お、おう!!」

ミシミシとXM8にひびが入りながらもアークのマチェーテを抑えているがいつ壊れてもおかしくない。

今のうちに目の前にいる鬼神を殺すよう仲間に促すが

メキツ

「っな!?!」

アークはマチェーテを引くのではなくさらに力を込めた。

サイボーグ体による異常なほどの筋力がマチェーテ一本に籠められる。

強化プラスチックで作られたXM8は少しずつ変形し始めた。

アーク「うああああああああ!!」

「こ、このくそつたれg(ズシヤアアアアア)」

メリメリと入ったマチェーテはXM8の中に入り込み、最終的には銃ごと人間を切り裂いた。

アーク「……はあはあ」

荒く呼吸アークだがすぐに最後の獲物に向かって走ろうとするが

グチュ

アーク「つち」

ヴェノムから一応刃物のいろはを教えてもらって真つすぐ切るなんて当たり前だがこの時のアークは完全に殺すことしか考えておらずマチエーテが敵の死体に刺さったまま抜けなくなってしまった。

「っ!! 死ね!!」

相手の獲物が抜けなくなったと悟った敵兵は再度引き金を引く。

アーク「……はあ」

溜息を吐くがそんな状況下でもアークは行動する。

マチエーテから手を放し刺さったまま死体を蹴り上げ最後の敵に打ち返すと同時に地面を疾走する。

銃弾は死体に刺さり防ぐが、やはり何発かはアークに向かってくる。

だが、アークは避けようとせず突き進む。

ただ、目の前にいるアリスに手を出したやつを殺す以外の行動はしないかのように。

一步また一步と常人ではありえないスピードでこちらに向かってくる死神を殺そうと撃ちづけるがまるで猫のように避け続けるアークに標準が狙えず追いかけるが

カチツ!!

「弾切れ!」

撃ち続けたせいでとうとう弾が切れてしまい急いでマガジンを交換しようとするが

《shake:1》ズバアアン!!

「ぐはっ!」

それよりも先にアークが敵の目の前に到着し首をつかみ地面にたたき落とした。

そのまま馬乗りになり頭をつかむ。

「は、離せえ!!」

アーク「……」

敵兵はアークの子路側を逃れようとジタバタ暴れるがアークは両手で敵の頭をつかみ力を入れていく。

「あ、頭が!?!」

ミシミシと言いながら力を入れ続ける。

何をしようとするのか分かった敵はさらに暴れだす。

「離せ!! 離せ!!」

敵は離すようアークの腕をつかむがサイボーグんびただの人間が勝てるわけもなく

「あ、あああああああああ!?!」

……そして

パキヤ

アークの手にはべっとりとした血と柔らかい……恐らく敵の脳であらう部分が付いていた。

アーク「……はあ……はあ」

部屋にいた敵は全員殺したせいで華やかなアリスの部屋は赤い血で染められてしまった。

ポタポタつとアークの手から垂れていく肉と血の混ざった物体が落ちてく。

アーク「つは!! アリス!!」

全員殺して正気に戻ったアークはアリスが無事か駆け寄る。

アーク「アリス!! アリス!!」

頭から血が流れ地面に倒れている自分の主人を優しく抱きかかえる。

アーク「……お願い起きてくれ」

優しく抱きかかえたまま体を揺らして起こそうとする。

アリス「……あ」

アーク「アリス!!」

アーク「……アーク？」

アーク「ああ! 俺だ!!」

アリス「……遅いわよバカあ!!」

目を覚ましたアリスにほっとし抱きしめる。

抱きしめられたアリスは大粒の涙を流しながら泣く。

アーク「ごめん、俺がもつと早く帰ってきてれば……」

自分がもつと早く帰っておけばこうな惨状にはならなかったと自分を責める。

アレクサンダー「ほっほっほ……遅かったではないかアーク」

アーク「陛下!! 申し訳ございません……俺がもつと早く帰ってい

れば」

クロエたちは埃はかぶっているが見える負傷はなさそうだ。

アレクサンダー「いや、今はいい……にしても」

周囲を一瞥する国王。

アレクサンダー「見事な暴れっぷりだなアーク? おかげで大事な

娘の部屋を新調しなければならなくなった」

アーク「あ、えっと」

レイチエル「もはや死神というより殺人鬼でしたよ」

アーク「うっせ、黙れや」

レイチエルから皮肉が飛んでくるが今は現状把握だ。

アーク「相手は残党ですかね?」

アレクサンダー「そのようだ。まったく、まさか昼間堂々と攻めてきてしかもわし達に直接刺客を送ってくるつとわな」

アーク「国民のほうは?」

アレクサンダー「そちらのほうは大丈夫だ。そなたの使い魔月光たちのおかげで被害は最小限にできて今は学園と城に全員避難させている」

アーク「……そうですか」

さて、どうしたものかっと考える。

この国の軍事力であいつらをどうこうできるわけないし、俺と月光+aでやるとしてもできないことはないが時間がかかって最悪何か

しらの被害が出る可能性もあるし……

アーク「んく……ああ」

そこでふと思い出す。

そういえば自分、あいつら開発してたわつと。

アーク「あー、陛下。少しいいですか？」

アレクサンダー「なんだ？」

アーク「俺なら、あいつらを殲滅できるんですが……町ぶっ壊してもいいですか？」

アレクサンダー「ま、街をか」

被害額はどうなるんだつとぶつぶつ呟く国王に耳打ちするアーク。

アーク「申し訳ございません。でも、国民の被害は出さずに殲滅するとしたらこれしかなくて」

レイチエル「でも町が被害を受けますよね」

アーク「外野は黙ってなさい」

アレクサンダー「確実だろうか？」

アーク「はい」

力強く頷くアーク。

アレクサンダー「はあ……わかった。だが、やるには迅速でやり給え」

アーク「ありがとうございます」

アリスの治療はクロエたちに任せ、窓に駆け寄り窓縁から飛び降りる。

町の瓦の上に着地した後、iDROIDを取り出す。

ツドドドドドドドドドドド

『いたぞ!! 死神だ!!』

だが、着地したのはいいが速攻でロシア製のヘリ「Mi-24ハインド」に見つかってしまった。

アーク「……はあ」

こいつら、こんなものまで持っていたのかよ。

まあ、使い方とかはニゴウに聞いたんだろな。

『こちらカプコン4!! 死神を発見!! 至急、増援を求む!!』  
さして、呼びますかね。

そして、iDROIDに向かって口をあける。

アーク「全員出動」

そう言うと空が暗くなってくる。

『な、なんだ急に暗く』

ヘリの操縦士は上を向くがそこに見えたのは

巨大な脚だった

『か、かいh』

急いで操縦かんを引こうとするが時すで遅く無様にも踏みつぶされてしまった。

ストレンジラブ『ん? 今何か踏んだか?』

ガシャンッと起き上がる四足の獣。

肩のような部分には二つの巨大な四角形の何か。

頭のような部分には一つの黒い目……そこには一つの蝶が。

パス『気のせいじゃない博士?』

もう片方は二足歩行だが肩には巨大なレールを装備している。

蝶のほうと比べて質素そうに見えるが正体は世界初の鋼鉄の歯車  
《最初のメタルギア》。

だが、二機ともいかにも怪物のような見た目だが聞こえてくるのは  
女性の声。

アーク「来ましたかお二人とも」

ストレンジラブ「来ましたではない。来させるなら事前に連絡し

ろ」

アーク「うっす、すんません」

パス『まあ、いいじゃないのお二人さん?』

アーク「マジでごめんね」

アークが行ったのは要請欄の中にある「全員出動」。

簡単に言ったら今持っている戦力全員を召喚するものだ。

その証拠に二機の後方にもピューパ、クリサリス、コクーンが降り立ち周囲を監視している。

以前のポイント 11728

獲得ポイント 120

消費

全員集合 1000

合計ポイント 10848

ストレンジラブ『はあ……早く済ませるか』

パス『そうね。アーク? 何人かは捕虜で生かしたほうがいいわよね?』

アーク「ん? 何を言っているんですか?」

パス『あら?』

そして、死神は冷酷に笑う。

アーク「全員殺してください」



## 百九発目 死神と世界初の鋼鉄の歯車（メタルギアZ EKE） 前編

もはや戦場となってしまうたアーハム帝国に無数の鋼鉄の歯車が立つ。

周りは森で囲まれているアーハム帝国だが木々は燃え町は灰と硝煙のにおいが漂う地獄と化していた。

アーク「国民は全員避難場所に移しました。あとここにいるのは自分たちと敵です」

パス「ええ……本当に全員やるの？」

アーク「？ 何か疑問でも？」

パス「あ、いいえ」

半壊しかけた城の近くでジーク（パスが入ってます）の上で戦場となった街を見下ろすアーク。

手に持ったFN SCAR-H Mk. 17のチャンバーを引き弾薬が入っているのを確認する。

淡々と準備しているその背後にはピューパ、クリサリス、コクーン、月光やフェンリル（量産型なのでブレードウルフ君は入ってません）など今まで開発してきた兵器たちが戦場のほうを向き、まだかまだかっつとそわそわしている。

アーク「……お前たちどんだけ殺したいんだよ」

アークに召喚されたAI兵器はまだかまだかとしているが兵器とアークはつながっている関係なのでアークの感情はダイレクトに兵器に伝わる。

カチャ

愛銃の状態は問題はないことを確認し再度戦場となる街を見る家は燃え自分が間に合わなかったせいで死んでしまった死体が転がりその上を敵が踏んで進んでくる。

アーク「……許せ」

もつと早く帰っておけばこうもならなかったのにと自分を責める。

だが彼らの無念をここで返す。

アーク「迎撃中のAI兵器群へ……：損傷した機体は撤退。いける機体はそのまま前進し殲滅以上」

必要なことだけ言いサイボーグになる。

アーク「では、パスとピューパにクリサリスとコクーンは東を俺とAIは西に。んで、そつから時計回りに殲滅していく感じで。博士はこの防衛を」

ストレンジラブ「了解した」

アーク「では解散!!」

サイボーグの人工筋肉に力を入れ西のほうに跳躍する。

それについていくかのようにスライダーが翼を広げ飛び、ラプターが恐竜のような体格で屋根を伝って走り、ゴリ r : マステイフも跳躍しアークについていった。

パス「じゃ、私も行きますか!!」

脚部のブースターを点火しジークも戦場に身をささげていった。

ズドドドドド!!

「くそたれ!! 盾が役に立たん!!」

「けが人を早く下がらせろ!! あの鉄野郎には剣は意味はない!!」

町から持ってきた荷台などの大きなものを盾にし魔法で敵側は銃で遠距離戦をしている。

最初見たときは変な装備を付けているかと思いつつも訓練通り騎士が前に出て盾を構え後ろから魔法で数を減らしていくというスタイルなのだが敵は謎の武器を使い盾を構えた騎士ごと何か貫き殺していった。

あまりの予想外の出来事に一旦引き影に隠れながら応戦している。

「増援は?」

「だめだ!! どこもかしこも敵を止めるだけで精いっぱいだ!!」

建物の陰に隠れてチマチマと魔法で牽制はしているが徐々に後ろ

に押されて行っている。

それに対して敵の残党軍は次々に降り注いでくる火の玉や雷で前には進めていないが

ガガガ……

残党軍主力の戦車T-72を壁にし前進を続けている。

下には先ほどの銃撃戦で盾ごと銃弾で貫かれ死んだエルフの死体がある。

「つち、思いのほか抵抗が激しいな」

「エルフのくせに意外と粘りますねー」

「エルフは人間より魔力が高くて魔法使いが多いとは聞いていたが厄介なものだな」

「おい射手、前のやつらをやってくれ」

『了解』

炎や雷に打たれるが砲塔を動かし

『撃て』

ズドオオオオオン!!

薬室部分の弾薬が煌めき長い管を通り発射された弾頭は隠れていた壁ごと吹き飛ばし数人のエルフは形を保ったまま死んだが他は肉片となった。

「よし、総員前進」

グシヤ

重々しいキヤタピラの音を立てながらできたばかりの死体を踏み潰す。

「敵の全滅を確認。こちらカイ小队、アーハム城に向けて進行を再開する」

『了解……報告、アーハム城に死神<sup>アーケ</sup>を確認したと報告を受けた注意されたし』

『了解』

X M 8のマガジンを抜き新しいものに変えながら通信機で本隊と連絡を取る。

「ま………つて!!」

「ん?」

その場から離れ城に向かおうとしたが弱々しい声が聞こえ振り返るとそこには右足を失ってもなお追っているエルフの魔法使いがいた。

「こ、ここからはごほお!?…行かせるわけにはいかん!!」

口から血を吐きながらも杖を足代わりにし立ち上がり小隊を行かせないようにする。

「すごいな、あの爆発で生き残っている奴がまだいたとは」

「なんとというかすごいのか生き残ってしまったって残念というか」

「ま、そんなことはどうでもいい。射手、もう一発だ」

『了解』

砲塔が旋回し再度生き残ったエルフに標準を合わせる。

人間と似ているエルフ一人に対して砲弾一つとはオーバーキルすぎる。

(自分の命もここまでか……)

初めてこいつらを見たときアークと似たような感じがし自分たちがこいつらを倒すなど到底思えずせいぜい時間稼ぎで終わってしまうと判断しアークなら倒せると思えば来るまで耐えようとしたがどうやら来てくれたようだ。

しかし、片足は失い魔力で結界を張ったので命は助かったが死にかけなのは変わらない。

(勝負では負けたが試合では勝ったようなものだな……)

目が重くなり足に力が入りなくなってきた。

自分の命などもうすぐで消えてしまおうだろう。

(あとは頼みましたよアーク殿)

そつと目を閉じあとは死ぬのを待つだけだ。  
T-72の砲塔がエルフに標準を合わせる。

砲塔の奥が光りだし砲弾が管を通り外に出て命を刈り取るだけだった。

……がどうやらそれはかなわぬようだ。

マステイフ「( ? ㄇ ? )」

空から降ってきたのはゴリラことマステイフ。

そのマステイフが

ゴオン!!

その巨大な腕を振り上げ落下の勢いをつけたままT-72の主砲にたたきつけた。

叩きつけられた主砲はくの字に曲がった。

発射した瞬間に管が曲がってしまったので砲弾は中で爆発しT-72は燃え上がった。

「敵襲!!」

突如現れたマステイフに驚きつつもすぐさま敵と判断し銃を構えるが

アーク「後ろ」

「つが」

小隊はマステイフにくぎ付けで背後は見えず、背後から忍び寄ったアークのマチェーテに背骨ごと貫かれてしまい一人持っていかれってしまった。

「っ死神!?!」

敵はすぐにマステイフからアークにターゲットを変更し銃口を向けるが逆にマステイフに背を向けてしまったのでその背中にマステイフの腕に装備されている機関銃が火を噴き次々と地に伏せさせ

ていった。

アーク「ナイスマステイフ」

マステイフ「（\*・艸、）」

轟々と燃え上がる戦車を背にマステイフとグータッチをする。

ガガガガガガ……

だが、敵は次々とやってくるらしく遠くの角から戦車の音が聞こえてくる。

アーク「どうやらお代わりはたんまりとあるらしいな」

マステイフ「（・ω・、）」

ドドドドドドドド

アーク「わーお、しかもオマケも来るらしいな」

帰ってくる前に戦った兵士たちより連携がいいのか連絡がすぐに回ったらしく上を見上げればMi<sup>ハ</sup>i<sup>ィ</sup>24<sup>ド</sup>が飛んでいた。

『こちらゾイヤー!! アークを視認した!!』

『こちらフォール隊、地上からも確認した。敵はアーク一人と人間? がもう一人いる』

『こたからも確認した。周囲を囲め。』  
『了解』

空と地上から交互に連絡しジリジリと建物の陰から陰へと移動しアークとマステイフを囲む。

事前にアークと戦闘は聞いていたが「真正面からは戦わず可能な限りの人数で周りを囲み逃げ場がないようにしてらから射撃するように」と言われた。

アーク（ふむ、やはりあの時の部隊よりかは練度は高いな。……  
やっぱニゴウに鍛えられたからだろうな）

囲まれつつもいつでも打てるようにトリガーに指をかける。  
隣にいるマステイフも右腕を前にやり警戒する。

動きも悪くないが、それでも俺に集中し過ぎだ。

アーク「行け」

アークが命令すると

バツ

『うわああああ!?!』

『な、なんだこいつら!?!』

空から大量の何かが降ってきた。

目玉仔から腕月が生えている化光け物、

足がカエル月だが鳴き声は牛光の化け物、単眼フェンリルの狼、鋼鉄スラの翼イをもった鷹ダー、  
テイララノサウルスプのような化ターけ物……とマスゴテイラフがそれぞれのカ  
メラアイから出る赤い瞳が地上の獲物に定める。

アーク「すべて殺せ」

アークの一言を聞いた瞬間、AIたちは殺戮を開始する。

『くそ怯むな!?!』

敵も魔物とは違う無機質な恐怖に感じるが負けじと銃を乱射する

……のだが。

カチッ

『っなんでだ!?!』

『引き金が!?!』

いくらトリガーを引いても弾は出ない。

弾詰ジャムまりかと思いい度もコツキングレバーを引いてみたりするが一  
向に弾は出ない。

メインの火器が使えなくなってしまいせめても拳銃を引き抜く  
が

サイコマンティス「やめてもらおうか」

『銃が!?!』

拳銃を構えるが突然手から離れ空中に浮かんでいく。

アーク「あ、どこにいたんすか」

サイコマンティス「ああ、少々散歩に行っていた」

アークの隣にサイコマンティスがぶかぶかと降りてくる。

サイコマンティス「あとアーク、貴様の感情が私たちにダイレクトに入り込んでくる。鬱陶しいから落ち着け」

アーク「……いやだといえば？」

サイコマンティス「ならさっさとこの辺りを静かにさせるか」  
パチッ

『うわ?!』

サイコマンティスが指パチチンをすると敵の兵士一人が宙に浮き、手をこちらにヒョイとすると一瞬で目の前に現れた。

サイコマンティス「え〜つと、お、あつた」

サイコマンティスは空中で拘束させた敵の腰からグレネードを見つけるとピンを抜きとりそのまま敵に向かって弾丸のごとく撃ちはなった。

高速で迫ってくる味方に避ける暇もなくボーリングのピンのように巻き込まれた。

「お、おい!! 早く離れる!!」

「だ、だめだ!!」

投げられた味方は腰にピンが抜かれたグレネードがあるので急いで離れないと巻き込まれる危険があるが身動きが取れない。

しかも、グレネード自体を外そうにもベスト自体が外れない。

サイコマンティス「吹き飛ばせ」

グレネード内の火薬がさく裂し巻き込んだ敵を肉片と化した。

あらかたいた敵が吹くとび血の雨が降る。

アーク「汚えな」

血の雨に打たれながらつぶやく。

アーク「さて、これで片付いたかな」

敵の大半はさっきのやつでまとめて吹き飛ばされ残りはAIたちがやってしまった。

でも、ここのやつらを全員やっても他にもいるだろう。



アーク「みんながここに寄って来てくれたらうれしいんだが……ん？」

さつきと敵を全員殺したいんだがどうしようかと考えていると、死んだ敵の無線機……壊れかけているが敵の声が聞こえる。

『まもなく増……が……到着するそれまで……の……時間を稼……』

ふむ、どうやらここに援軍が来るようだ。

なんか時間を稼げて聞こえた気がするがすでに全員殺しているので聞いているのは俺だけだ。

アーク「さて、どうしたものか」

ここに来るのは確かだがどう調理してやろうかっと考えていると

キイイイイイイ!!

アーク「はや」

さつき連絡が来たばかりなのに道の向こうにある曲がり角から敵のBTR―152二台とBTR―60一台の合計三台やってきた。

銃座から敵がPKT機関銃を撃ちながら迫ってきている。

しかもこのコース……ぶつかると気だな。

カチャ

FN SCAR―H Mk. 17を構える……が別によさそうだ。

月光「モッ(。D。)」

のしのしと月光が隣に来てどっしりと構えだした。

ツピツピ

月光「fire^^」

ブローニングM2とミサイルがBTR―152と60に迫る。

一台はミサイルの雨にやられ爆発したが残りの二台はうちもう片方の152一台がM2で半壊したがそれでも迫ってきたもう一台は無

傷だった。

月光「ツエ（・ω・）」

思いのほかやれなくショックを受ける月光。

ぼろぼろになってもなお迫ってくるBTR―60の運転席には血だらけになってもなお運転する兵士が見える。

その目は覚悟と狂気に染まっており、ここに来た時にはもう自分は助からないと察しているんだろう。

だからせめてアークはつと思っっているんだろう。

そのせいか走行が比較的厚いBTR―60を前にし後ろからBTR―152が迫ってくるどちらも装甲兵員輸送車だったので荷台には大量の兵が乗っているんだろう。

アクセル全開で迫ってくるがその思いは届かなかった。

・・・トン

ブレードウルフ「……フン」

BTR―60の上に一匹の狼が直地し手のような尻尾を太ももあたりに仕込んであるナイフを取り出す。

そしてそのままフロントに移動する。

運転手は謎の狼が目の前に現れ腰のピストルに手をかけようとするがブレードウルフのほうが早く、運転席めがけてナイフを突き出した。

ブレードウルフが持っているナイフはヒートナイフといい鉄でさえ溶かしてしまうほどの高熱を出すナイフで薄い装甲なら貫通でき、人体にさしても致命傷になる。

心臓を一突きされた運転手と隣にいた助手席の兵士は殺されコントロールを失ったBTR―60は横転しその勢いのまま建物にぶつかった。

アーク「お、ブレードウルフ」

ブレードウルフ「アーク、この周辺の偵察は完了した」

アーク「んで、どうだった？」

ブレードウルフ「周辺の敵はこちらに向かっているがそのほかは城に向かって進行している」

アーク「どちらにしても時間はないな」

つと呑気に会話しているがもう一台の半壊したBTR―152がアークたちの目前まで迫っている。

残り数mほど避けるには間に合わない。

クライング・ウルフ「何しているんだお前ら」

そんなアークとBTR―152との間にもう一匹の狼が現れた。

だが、サイズがブレードウルフより一回り大きい。

また別の狼が現れて驚く敵だがそのままスピードを上げて迫ってくる。

そして……

ギイイイイイイ!!

巨大な金属がぶつかる爆音が鳴り響いた。

衝突したBTR―152はそのままスピードを上げアークに迫っていく。

巨大な鉄の塊がぶつかったんだ、これはやったであろうつと運転手は思っていたが。

クライング・ウルフ「ふん、生ぬるい」

金属的で女性的な声がどこからか聞こえたつと同時に車両のスピードは落ち始めた。

アクセルは踏み続けているのに徐々に動きが止まっていく。

アーク「改めてリアルで見るとすごいな、そのパワードスーツ」

MGS4で武装化したドーザーをひっくり返すほどのパワーがあるクライング・ウルフ。

徐々に徐々にスピードが落ちていき、アークの目の前で止まってしまった。

クライング・ウルフ「よいしょつと!!」

そのままクライング・ウルフは数トンにもなるだろう車両を横に倒してしまった。

車両が横になっても運転手は口を開けたまま何が起きたかかのよ

うな顔をしているが急いでシートベルトを外し外に出ようとするが

月光「モ〜」

ドシンッと近くに月光が降り立ちワイヤー状のマニピュレーターを出し運転席に伸ばし敵を拾い上げる。

劇中でもあつた落ちているタバコを摘んで拾い上げる繊細さと、掴んだ人間を引き倒す程のパワーを兼ね備えているワイヤーは掴んだ敵を上を放り投げる。悲鳴を上げながら落ちてきた敵に月光が器用に片足だけ上げ

メキヤ

建物から建物に飛び回れるほどの脚力を持つ月光に回し蹴りされ、壁に打ち付けられた。

もちろん全身ミンチになってしまった。

月光「モ〜（\*☒▽☒）」

アーク「これで粗方やったか」

増援できた敵も全員殺しあたりは血の海となった。

兵員輸送車内の敵も月光が敵のXM―8を使い皆殺しにしたの  
でにおいもきつい。

アーク「さて、次の獲物を探すか」

あ、そういえばパスたちは大丈夫かな？

ま、さすがにZ E K Eだし大丈夫だろ。

空を見上げると青い空。

先ほどのMi―24もどっかに行ってしまったらしい。

アーク「……あ、そういえばブレードウルフ」

ブレードウルフ「なんだ？」

アーク「ニゴウ見てない？」

ブレードウルフ「……いや、見てないな」

アーク「……そうか」

あいつ、本当にどこにいるんだ？

アリスに手を出した糞どもは憎いがニゴウだけは……なんかできないな。

いや、結局あいつらの仲間だが……どうして殺そうって思えないん

だろうか。

心の中で謎のざわめきを感じながらもアークはもつと敵がいる場  
所に向かった。

## 閑話休題 現状報告

……どうも零城です

あけましておめでとうございます

そして、しばらく音沙汰がなくて申し訳ございません

ここ最近……って言ってますが一年近く投稿してなかったのは、ぶっちゃけ言うところ『ガチ病み』になってました

経緯を言うと

- 1, 最終投稿の後、リア友にあった
- 2, ガチ目の酷評……どうも零城です
- 3, 病んだ
- 4, 反省し書こうとし一応書いたが友人の酷評と他の投稿者の作品を見て自分の作品の出来の悪さに絶望する
- 5, さらに病む
- 6, 同時に大学の成績が不安定になってき親に家族会議された
- 7, 割と『書くのやめようかな』ってなって忘れていった
- 8, そして、新年明けのしばらくたった昨日……一人の読者様から

メッセージが来て久々に書こうかなくなってなっている

9, 書き直したのはいいが音沙汰もなかったくせに突然の投稿は読者様が起こるのではないか？↑今ここ

という感じです

……すごいよね、ほかの投稿者たちは  
文もわかりやすいし表現も上手い

作者、最近P i x i vの小説も読んでるけど、あっちも上手すぎて  
自分の作品が糞過ぎるやん(泣)

ってなわけです

あとネタ提供してくれたら本当にありがたいです(できればリアル志向で)

この際、ぶっちゃけますが作者自身ミリタリーに興味があるだけで

オタク並みの知識は持ち合わせておりません!!

つというわけなので、ネタ提供をお願いします

あと読者様に私から質問なんです

1, 台本形式だがやめてもいいか(誰が言ったか分かりやすくするためだったが友人に一番酷評された)

2, 前みたいない投稿じゃなくて亀みみたいな投稿速度になるがそれもよろしいか

3, あと直してほしい点があったらいつてほしい  
つていうのを感想にて書いてほしいです(これ大事)

病んでしまいましたでしたが立ち直そうなので少し自分を見直そうかなって思ってます

(これから小説書こうかなって思っている人も自分の作品に自信もつてね)

あと、今書いている作品たちですがリメイクしようかなって思っているところもあるのですがその点についても何かコメントしてくださいとありがたいです(本当に何でも書いてもいいですよ?)

作者自身、出す作品が多すぎて書くのが大変である程度の断捨離は覚悟の上で考えています。

どれが面白くないとかあったらそれも書いてくれるとありがたいです(本当に何でも書いてもいいですよ?..大切なことなので二回言いました)

最後に目標は他の作者みたいになりたいを一に頑張つていこうと思えます!!

大変ご迷惑をおかけしましたが、もう一度私の作品も読んでくださ  
い

もう逃げません!!(多分きつとだと思っ!!)